

疲れも知らず

おゆ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

銀河英雄伝説は広大な世界観と魅力的なキャラで大変人気があります。本作品は珍しくフェザーンに転生者が誕生する物語です。先に発表された「平和の使者」と「見つめる先には」の続編としてそれらの末尾を飾るものになっています。その構成上、ぜひ前作をご覧頂いてからお読み下さい。オリジナル主人公ですが他のオリキャラは極少です。銀英伝使用についてのらいとすたっフルール2015に準拠しています。

# 目次

プロローグ	私の世界	1
第一章	優しい日々	
第一話	帝国暦481年9月	ありふれた毎日
第二話	481年9月	邂逅
第三話	481年9月	狂気
第四話	481年10月	ピクニック
第五話	482年7月	卒業
第六話	482年10月	政変
61		
健在なり		130
第十二話	483年2月	義侠心は
118		
第十一章	483年1月	新しい国
106		
第二章	渦の中	
第十話	482年12月	陰に潜む者
96		
第九話	482年11月	政策綱領
85		
第八話	482年11月	誰がピエロ
70		
行		
第七話	482年10月	欺瞞の逃避

第十三話 483年 2月 帝国の手

207 第二十話 484年 1月 良将

第十四話 483年 3月 諦観の女

219 第二十一話 484年 1月 内患

第十五話 483年 4月 試作品

230 第二十二話 486年 2月 構想

163 第十六話 483年 10月 帝国軍

240 第三章 運命の交錯

技術部 174

第十七話 483年 12月 争奪戦

249 フェザンの危機

第十八話 484年 1月 思惑

260 とルパート

第十九話 484年 1月 遭遇戦

260 第二十五話 486年 3月 防御

	の真髓	272	第三十二話	487年	2月	アス					
	第二十六話	486年	4月	次幕	285	ターテ 〜総力戦〜					
	第二十七話	486年	4月	女と	294	第三十三話	487年	2月	アス		
男	第二十八話	486年	4月	アス	306	ターテ 〜覇気とペテン〜	365	第四章	翼よ、高く舞い上がれ		
ターテへの道	第二十九話	486年	12月	政治	316	な訪問者	377	第三十四話	487年	4月	危険
家	第三十話	487年	2月	アス	329	第三十五話	487年	4月	色褪		
ターテ 〜平行線〜	第三十一話	487年	2月	アス	339	せた世界	390	第三十六話	487年	4月	本当
ターテ 〜光芒の宇宙〜						の理由	402	第三十七話	487年	4月	盟友
							414				

	第三十八話	487年	4月	不安	425	自分だけの同盟艦隊		497	
	第三十九話	487年	4月	動乱		物静かな提督		510	
	死に場所			438		第四十六話	487年	7月	動乱
	第四十話	487年	5月	動乱		夢の中の歩み		522	
	逆撃			452		第四十七話	487年	7月	動乱
	第四十一話	487年	6月	動乱		脱出		535	
	ヒルダ、その恐るべき戦略			463		第四十八話	487年	7月	動乱
	第四十二話	487年	6月	動乱		思いを託して		551	
	上に立つ器			475		第四十九話	487年	7月	動乱
	第四十三話	487年	7月	動乱		終結		565	
	確信			487		第五章 帝国の崩壊			
	第四十四話	487年	7月	動乱		第五十話	487年	8月	波の

具申	第五十六話	487年10月	意見	652	第六章 氷の刃		715
領侵攻	第五十五話	487年9月	帝国	639	りだす歯車		705
室の戦い	第五十四話	487年9月	会議	626	第六十一話	487年10月	回 696
作戦	第五十三話	487年9月	奪還	615	第六十話	487年10月	約束 686
れ合う者	第五十二話	487年9月	魅か	599	扱一		686
地へ	第五十一話	487年9月	新天	589	第五十九話	487年10月	二者 673
					第五十八話	487年10月	歓迎 664
					の帝国		
					第五十七話	487年10月	空洞

第六十三話	487年11月	日は	攻略戦〜前代未聞〜	786	
陰りて		724	第七十話	487年12月	要塞
第六十四話	487年11月	仕掛	攻略戦〜意気を見よ〜	796	
け		734	第七十一話	487年12月	要塞
第六十五話	487年11月	墓標	攻略戦〜思わぬ結末〜	808	
		746	第七十二話	488年1月	失望
第六十六話	487年11月	友と	第七十三話	488年1月	癒さ
手を		756	れぬ傷		828
第六十七話	487年12月	秘策	第七十四話	488年1月	冷気
		767			840
第六十八話	487年12月	要塞	第七十五話	488年2月	利と
攻略戦〜ラインハルトの天才〜		775	理と情と		849
第六十九話	487年12月	要塞			



第七十六話	488年	3月	最後	第八十二話	488年	5月	フェ
の忠臣			860	ザーンへ			929
第七章 エカテリーナの両翼				第八十三話	488年	6月	見え
第七十七話	488年	4月	責務	ない炎			941
			877	第八十四話	488年	7月	霸王
第七十八話	488年	4月	幕開	の道			953
け			887	第八十五話	488年	7月	一周
第七十九話	488年	4月	キ	回って			965
フォイザーの戦い			899	第八十六話	488年	7月	シュ
第八十話	488年	4月	二人	ターデンのアルバム			975
の愛を受けて			909	第八十七話	488年	7月	宴の
第八十一話	488年	5月	共同	終わり			986
作戦			919	第八十八話	488年	7月	苦闘

と美姫	第九十四話	488年10月	勇士	1067	スブルクの広間	489年1月	ガイエ	1134
	第九十三話	488年9月	発端	1055	第八章 さらば父よ			1124
鳥	第九十二話	488年8月	籠の	1045	第九十九話	488年11月	運命の	
	第九十一話	488年8月	大そ	1034	1114 第九十八話	488年11月	両翼	
奮闘	第九十話	488年7月	孤軍	1022	のドジョウ			1104
の行方	第八十九話	488年7月	会議	1010	第九十七話	488年11月	二匹目	1094
	第九十五話	488年10月			エ・サンスーシーの死闘			1082
	第九十六話	488年10月			微笑み			
	第九十五話	488年10月			第九十五話	488年10月	ノイ	

第百七話	1198	第百六話	1188	第百五話	1177	第百四話	1167	第百三話	1155	第百二話	1145	第百一話	
489年12月		489年11月		489年4月		489年3月		489年3月		489年2月		489年1月	
戦略家		警鐘		運営		立て直		狐と狸		転回		供養	
英雄		グイト会戦		を突破せよ		意		遺志		間			
第百十三話		第百十二話		第百十一話		第百十話		第百九話		第百八話			
490年1月		490年1月		489年12月		489年12月		489年12月		489年12月			
常勝の		ポレ		縦深陣		父の決		建国の		恋の時			
1275		1262		1251		1240		1230		1221		1209	

第百十四話	490年	1月	フェ	ガンダルヴァ	く騙し合い	—	1340
ザーン艦隊の戦い	—	—	1286	第百二十話	490年	3月	決戦!
第百十五話	490年	2月	ヤン艦	ガンダルヴァ	く応酬	—	1352
隊出撃	—	—	1295	第百二十一話	490年	3月	決戦
第百十六話	490年	2月	二重の	! ガンダルヴァ	く盾と矛	—	1364
罨	—	—	1307	第百二十二話	490年	3月	決戦
最終章 波濤の果てに	—	—	—	! ガンダルヴァ	く混迷	—	1374
第百十七話	490年	3月	無防備	第百二十三話	490年	4月	決戦
都市	—	—	1319	! ガンダルヴァ	く決断	—	1385
第百十八話	490年	3月	決戦!	第百二十四話	490年	4月	決戦
ガンダルヴァ	くそして舞台は整う	く	1331	! ガンダルヴァ	く手に入れた勝利	く	1398
第百十九話	490年	3月	決戦!	第百二十五話	490年	4月	シ



	き戦略	—	1545
	第三百二十九話	490年11月	終結
	に向けて	—	1554
	第四百十話	490年11月	帝国
	の後継者	—	1564
	最終前話	花東	—
1584	最終話&エピローグ	トウキョウ	—

## プロローグ　　私の世界

今日も花を生ける。

白い壁ばかりの病室には色どりも必要だと思っただ。

この初夏の季節には花が多い。

早めの百日草やアスターも咲いていれば、アイリスやスイートピーもまだ少しは残っている。今日は明るめのピンクの花を多く選んで持ってきた。もう少しすれば青い花が合う季節になるだろうか。

窓辺から来る光が花のふちを輝かせ、色がいつそう美しい。部屋に薄く良い香りが漂う。

良い香りだわ。

この子らも香りが分かればいいのに。そうカロリーナは寂しく微笑む。

きれいに整った病室に三人の子供たちが眠っている。

その眠り顔はとても安らかで、あえて言えば幸せそうに見えるくらいだ。しかし目覚めることがない。

もう三年になってしまふ。子供たちがこんな状態になってから。

あれは事故だった。

とても珍しい事故に分類されるだろう。イゼルローン回廊を航行中に何かの欠片が旅客艇を貫いたのだ。

普通にはあり得ない。

イゼルローン回廊は小惑星などの他にも、これまで百年以上に渡って幾度も繰り返された戦いにより艦の残骸が多い。それはまさに負の遺産だ。戦いは若者の命を呑み込んだだけではなく、こうして厄介なものまで残している。

それでも普通なら旅客船が航行できないほどではない。

イゼルローン回廊はまさに回廊を成していて、それを取り巻く航行不能領域には超高速の星間ガス気流が流れ、それらの粒子は強い衝撃波面を形成している。

触れたら何でも無事には済まない。

イゼルローン回廊内の小惑星やそういった艦艇の残骸は時間をかけて衝撃波面まで漂い、やがてそこに触れて消滅させられる。だからイゼルローン回廊は残骸で満たされていることはなく、ある程度清明でいられる。



ところが、ごく稀に欠片がもう一度回廊内に弾き飛ばされる場合がある。その場合はむしろ高速のエネルギーを持ってしまい、回廊を飛びすぎる。

不運はいくつも重なってしまった。

カロリーナたちは普段ならイゼルローン回廊を軍用艦で通過しているものだ。それならどんな場合であつてもシールドは万全といつていいほど強力である。

しかし、ちょうどこの時は民間旅客船に乗っていた。

そのシールドはそれでも必要充分なはずである。普通であれば。

しかし、そんな高速の欠片があることかワープアウト用宙域という特別に清明であるべき宙域に飛び込んできた。そして旅客艇はワープアウト直後で探知装置がまだ再起動中だった。シールドも安定しきっていない。

滅多に無い不運のため旅客船は欠片に貫かれ、しかもエンジン部分に直撃された。

乗客はむろん直ちに脱出艇に移乗して出る。

だが旅客艇は制御を失い、思いの外早く爆散してしまった。それに脱出艇までも巻き込まれてしまったのだ。脱出艇は爆散こそしなかったがスクラップ同然になり、多数の死傷者を出してしまった。

カロリーナはうつすら目を開けて、自分が病室に寝かせられていたことを認識した。

そして事故の記憶がよみがえると直ぐに跳ね起きた。

「カロリーナ！ よく起きた。よく起きてくれた」

目の前には夫のアーダルベルト・フォン・ファーレンハイトがいた。

それしか言ってこなかった。

いつもの皮肉も軽口もない。

しかしカロリーナにとり、もつとも重要なのはそこではない。

「子供たちは！ 子供たちは無事？ どこなの！」

直ぐに聞いたです！ 三人の子供たちが無事か、それだけがカロリーナの心配だ。

今回の旅は旧同盟領にあるエル・ファシルからイゼルローン回廊を通り、ランズベルク領地惑星に帰るものだった。

カロリーナ一人ではない。

たまたま三人の子供たちも一緒だった。その子供たち、特に末娘がエル・ファシルでの観光や買い物をせがんでいたので連れて行ったのだ。

そして観光で日数を使ってしまったので、帰りは来る時に乗ってきた軍用艦に乗るタイミングを逃してしまい、民間旅客船に切り替えることにしたのだ。

「カロリーナ、それが子供たちに怪我はない。しかしどうしても……」

フアーレンハイトの返事はなぜか煮え切らない。どうして言い澀むのか。もう一秒も待つていられない！

カロリーナは起き上がり、無理をいって三人の子供たちがいる病室へ連れて行つてもらった。

そして見た。

病室の中、三人の子らは静かに眠っていた。

カロリーナがフアーレンハイトから聞いたことによると、事故当日から病院に收容され、自分は一週間も眠っていたそうさ。

そしてカロリーナは起きた。しかし子供たちは未だ目覚める気配もない。

その時から今日になっても、子供たちが目覚めることはなかった。

しかしながらカロリーナにはもう分かっている。

どうして子供たちが目覚めないのかを。

それはおそらく、体は治つても子供たちの魂がここに無いからだ。だから目覚めようがない。違う世界に行つてしまっている。

自分もかつて12歳の時に転生してきたカロリーナには分かる。

世界というのはいくつもの世界が重なり合つてできている。

それで、魂が別の世界に飛んでしまうことがあり得るのだ。

一番上の長男アンドレイと長女は同じ世界にいるようだ。

長女はとてもその兄が好きで、いつもべったりと一緒にいたがった。そのせいだろうか。

カロリーナは稀にその長女の魂とつながり合える時がある。長女が大変な危機にある時などに。

その時はうつすらと会話らしいものができるとさえあった。

しかしそれだけだ。

長女は事故の影響かカロリーナの記憶と能力を一部受け継いでいる。特に艦隊戦の能力を。

そして自分の世界でなんとか生き抜いている。

たぶんもうこちらの世界に戻ってくることはないのだろう……

カロリーナは寂しく思うが、仕方がない。向こうの世界でしっかりと自分の生涯を生きていくのだ。この二人は。

証拠がある。

カロリーナの妄想ではなく、長女の世界の変化にに応じて、長男の方も表情などが変化するのだ。これは、二人の魂が同じ世界にいる何よりの証しだ。

そして三人の子供の中でも末娘は違うところにいる。

この娘は上の二人とうって変わって自分正直でオテンバな娘だった。何より楽しいことが大好きで、活発に動き回る手のかかる子供だった。

この娘だけはやがて帰ってくる。

カロリーナにはそんな予感があった。だから今日も花を活けながら待っている。帰ってくるのを。

夕陽が陰るころになり、夢中になつて公園の砂場で遊んでいた子供が、ふと家を出しスコップを放り投げて家に駆け戻る。そんな感じで。

今日もまた充分なほど遊んできた。オーデインの郊外まで遠征してきたのだ。

「エカテリン、もう遠すぎるよ。行つて帰ってくるのに時間使うから何にもならなかつたよ?」

「何言つてるの。行くのに意味があるのよ! 秋のうちにもう一回行くわよ」

少々げんなりした顔のミユラーの言葉を否定してのけた。

いいじゃない。私はまだ疲れていないわ。

今日はオーデインの寄宿舎から出発した。

私は数年前に遠く故郷を離れ、今はオーディンの女学校にいる。

女学校といってもそんなじよそこらのものではない。貴族の中でも選りすぐりの由緒正しい令嬢だけが通うところだ。オーディンの有力貴族の令嬢が通う。

領地がオーディンにない貴族の令嬢であれば必然的に寄宿舎に住むことになる。それは豪華で従者も多い。何不自由がないのだ。

そんな大貴族の令嬢たちでさえ私には一目も二目も置かざるを得ない。

何しろ私はあの宇宙一の煌びやかさを誇り、絶大な繁栄を謳歌するフェザーンから来たのだから。それも次の自治領主になると目されているアドリアン・ルビンスキーの娘として。

しかし令嬢たちがやっかんできたり、逆に惧れを感じるなどはどうだっていい。私の方も、別に偉そうにすることもないが、だからといってかしこまって大人しく振舞うことなど考えもしない。

私が生まれながらに手にしているこの権勢も私を構成する一部なのだ。もちろんその権勢が私の全てではないが否定することもないではないか。

私は私なのである。

それでいいのだと思っている。

もはや制止するのを諦めきった従者たちを振り捨てて、寄宿舎から帝国士官学校に立

ち寄り、そこで遊び友達のナイトハルト・ミュラーを無理やり呼び出した。

「ちよつと試験が近いんだけど……」

渋るミュラーを連れ出して、馬車でしばらく行き、そこからは乗馬で郊外まで飛ばした。

森の入口に着くともう日差しは午後のものだ。

秋の季節、落ち葉や野ブドウがあるのを見て取る。

そしてゆつくり休む暇もなく引き返してきた。本当に秋の森を確認した、というだけのことだ。ミュラーにとつては何の意味があるのかと思うのは無理もない。

だがこれもいいではないか。

秋のうちにもう一度行くとして、他の日には何をしよう？

街中で評判の菓子を食べ歩くのもいい。

噴水に絵の具を入れていたずらするのもいい。

下町で似顔絵を描いてもらうのもいい。

私は今日も明日もオーディンの街を舞台に遊び倒すのだ！ 思いつきり楽しむためには疲れなど感じている暇はない。

後の世に「魔女帝」と呼ばれる者がいる。

人類社会をその剛腕でまとめ上げ、繁栄と安寧をもたらした。

大きな賞賛とわずかな惧れを込めてそう呼ばれる。

エカテリーナ・ルビンスキー、今はまだ一人の女学生に過ぎない。



## 第一章 優しい日々

## 第一話 帝国暦481年9月 ありふれた毎日

貴族令嬢のための女学校というものは、あまりに退屈だ！

習うことは歴史、マナー、服飾、音楽、ダンスなど。

どれもこれも退屈過ぎる。

しかもそれが好きな人にとっては大いに意味があるのだろうか、世の中にとって実用的なものは何一つない。

政治、経済、科学、まして軍事などという科目は女学校にはない。

当然だ。

貴族令嬢は世の中の動きなど知る必要は全くというほど存在しない。ひたすら美しく着飾り、家柄に合った立ち振る舞いをすればいいだけなのだ。

世の中のことを知りたがる令嬢は自分一人で独学をするしかなくなる。もちろんそんな貴族令嬢などほとんど存在しないが。

そもそも学校の意義が違う。

単に知識的なことなら家庭教師から習えばいい。

幼少期から貴族令嬢には躰役兼家庭教師と、ついでに言えば遊び相手兼従者が何人も付いているのが当たり前だ。

基本的なマナーや立ち振る舞いはしっかり叩き込まれる。

しかし、それでもなお女学校が存在するのは理由がある。

一つには人脈を作るためだ。

パーティーや趣味のクラブだけでは強固な人脈は作れない。

やはり長い時間女学校という場所で一緒に過ごし、そこで同じことを習ったりすれば絆は深まる。それではか得られないものがあるのだ。

もう一つの理由は伝統的なことだ。

主に母親というものは娘に自分と同じ学校へ行くことを期待するものだ。

自分の思い出を追体験したいということがあるのだろうか。

そういった理由で貴族令嬢のための女学校は連綿と続いてきた。

どんな大貴族の令嬢でさえ学校に一応は在籍している。

尤も、社交面での働きが主になってしまっているので、学校へ出てくることは少ないのだが

……

ちなみに大貴族の場合に入る学校選びがまた問題だ。

学校というのは本来からいえば、貴族の家同士の関係とはかわりなく生活できるはずなのだが、大貴族の場合はそうではない。

長年の因縁のため、絶対に宥和できない貴族の家というものがある。

その令嬢が同じ学校へ通うなどんでもない！

それぞれの取り巻きで形成された派閥の争いが勃発すれば、学校そのものが消し飛んでしまうかもしれない。

多かれ少なかれ貴族家はそういう因縁を抱えているものだが、誰もが知る有名な因縁は一つしかない。

ブラウンシユバイク家とリッテンハイム家だ。

ならばそれぞれの幼い令嬢が近い将来在籍するであろう学校は絶対に同じものになるはずがない。もちろん、それぞれの派閥の令嬢もそれに合わせて学校を選んで入る。

大貴族の派閥争いは学校を選ぶ時点でもはや始まっているのだ。

そして代を重ねるごとに拡大再生産されていく。学校の意義がなぜかしら歪められている。

このエカテリーナの場合、名門ではあるが比較的そういった派閥色の薄い女学校に通っている。どのみちフェザンは特定の派閥になど与しないし、その必要もない。その栄華と財力で皆に等しく畏れられている。

エカテリーナも傲然とそこへ存在しているのだ。

多くの貴族令嬢はそんな日々の退屈を噂話で紛らわして過ごす。

特に殿方の噂話が得意だ。そういった噂の情報を仕入れるために徒党を組む。

エカテリーナは噂話も嫌いではないが積極的にしようとは思わない。

しかし、話の中で仕入れたい情報もないことはない。例えばそれは、帝国軍士官学校との交流舞踏会や食事会の情報だ。これにエカテリーナは度々出席している。

もちろん、貴族令嬢であればあちこちから舞踏会や晩餐会の声がかかる。貴族の誕生会や、取ってつけたような名目の会ならば。

しかし、エカテリーナはそういう会には義務的に必要な程度以上には行く気がしない。面白くないからだ。

そういった会には気取った貴族しか見られやしない。たまには真摯な貴族もないこともないが、期待して行くべきほどの可能性はない。

だがしかし、士官学校との交流会では平民出身の面白い者に会えるチャンスがある！

交流会自体は平民と知り合うのを企図してのものであるはずはない。

帝国の原則として貴族と平民はきっちり区別され、それを乗り越えるようなことは許されない。

だから交流会といっても基本は貴族出身士官学校生が取り仕切っている。貴族子弟には士官学校に行く者が少なくない。ほとんどの場合、戦場に行きたいためではなく、武門の家柄を受け継ぐことを誇示するためだ。

なぜなら貴族家というものは太古のルドルフ帝の時代、共に戦った戦闘指揮官に爵位が与えられて始まった場合が多い。最初が武という実力で始まっている以上、何らかの形で武に携わるのは誉れである。

そんな貴族子弟の士官学校生が女学校と交流会を持つとうとする。

その交流会に平民出身の士官学校生が呼ばれないかというところでそうでもない。もちろん差別をしないという理由なんかのせいではない。

むしろ逆である！

普段、平民出身と競っている貴族出身士官学校生はここぞとばかりに自分の立場を見せつけるのだ。

士官学校のカリキュラムでは原則的に平民出身も貴族出身も区別はなく、そして多く

の場合貴族出身の方が劣等生になりやすい。必死さも覚悟も違えば必然的にそうなる。

もちろん卒業すれば帝国軍内では歴然とした差別が行われ、貴族出身の方が格段に出世するのは確かだが、学校のうちではそうもいかない。尤も、それは教官の考えにもよる。例えばシユターデン教官は自分の戦術理論を忠実に学ぶ学生を明らかに鼻屑していた。それが強すぎて、結果的には貴族だから優遇するということはないという。

ともあれ女学校との交流会は貴族出身学生にとつては平民出身との身分の違いを明らかに示し、日頃のうつぶんを晴らす場になるのだ。

そんな思惑なんかエカテリーナにはどうでもいい！ 交流会には平民出身の士官学校生が来る。

エカテリーナは楽しみだ。

貴族ではない者と知り合える。

その一方、平民出身の士官学校生は交流会ではたいそう萎縮しているものだ。そういった煌びやかな場にそもそも慣れていない。マナーもほとんど分からない。

それ以上に貴族令嬢に対しひどく気後れしてしまうのだ。貴族令嬢のオーラには敵わないものを感じてしまう。自分たちの母や妹と比べてあまりに違い過ぎるではないか！ 同じオーデインの地上に生きていることさえ信じられない。

それだけではなく、平民出身には特別な足枷がある。  
嚴重注意事項といつていい。

もしも下手な会話でもして貴族令嬢を激昂させるようなことがあれば、その士官学校生の未来は実力に関わらず限りなく暗いものになる。

帝国では貴族の意向がすなわち法であり、平民出身の士官学校生の未来などどうにもできてしまうのだ。

しかし、エカテリーナは必殺の武器を持っていた。

そういう臆した平民出身士官学校生の心を開かせ、気安くさせる武器を。

「あら、貴族の令嬢なのを期待させて御免なさい。実は私もフォンの称号を持っていますの」

エカテリーナがこの一言を言うことで急に士官学校生は親しみを増すのだ。

なんだ、この女学校生は帝国貴族ではないのか。帝国騎士の家柄ですらない。それならば同じ平民のかわいい女学生だ。

「ああ、そうなんだ。それでたまたまこの交流会に？　貴族との付き合いは疲れるだろ。

マナーだなんだってさ。お高くとまつてるから」

どうしてエカテリーナがここにいられるのか、深く考えず安心してしまふ。

女学校を士官学校と同じように考え、平民出身がいてもおかしくないと錯覚してしま  
うからだ。

そして、地を出して気安く話を始めてしまふ。

そういう若者とぎっくばらんに話をするのがエカテリーナの楽しみだ。そして、よほ  
ど気に入れば友達にしたい。女学校には実は友達が少ないエカテリーナにとっては。

だがエカテリーナは決して嘘は言っていない。

フォンの称号を持っていないのはれっきとした事実である！

ルビンスキーの家は商人から始まり、そして次第に頭角を現し、フェザンでも指折  
りの実力を持つほどになっている。特に今の代のアドリアン・ルビンスキーは権謀術策  
を駆使して更にのし上がり、自治領主の座にもう一步で届こうとしていた。

商人の国として始まったフェザン自治領は血統で統治するのではない。実力者が  
統治するのだ。それがフェザンの活力の源泉である。

次第に銀河帝国へ影響力を増すフェザン、帝国はそれを懐柔しようとする。

代表的なルビンスキー家に対し過去幾度も爵位を授け、恩を売り、より帝国に引き寄  
せようとしたのだ。

しかし全て鼻で笑い、断っている。

ルビンスキー家にとっては爵位のない自由な商人であり続けることこそが誇りなの



だ。断じて帝国の付属物ではない。

会話の中で、どうしても避けて通れない瞬間がある。

「それで君、名前はなんての？」

「エカテリンと呼んで。エカテリーナと言うんだけど」

ここでたいていの士官学校生は愕然とする!!

その名を知らぬ者はほとんどいない。

エカテリーナ・ルビンスキー、確かにフォンの称号はないが、並みの貴族など足元にも及ばない家の令嬢ではないか！

帝国貴族では、その権勢でブラウンシュバイク家、リッテンハイム家が突出している。家柄、財力、領地、派閥などあらゆる面で他とは隔絶している。

それに続くものとして政治権力ならばリヒテンラーデ侯だ。ついでに家格ならばクロプシュトゥック侯、領地の広さならカストロプロ公などがそれに次ぐ有力貴族とされている。

しかしルビンスキーの家ならばそれらに遜色ない実力があると目されているのだ。財力を背景にした影響力なら随一である。おまけにアドリアン・ルビンスキーが順当にフェザン自治領主になれば圧倒的なものになる。

フォンが無いことだけで士官学校生がそこまで想像もできなかつたのではない。

もう一つ理由がある。

エカテリーナは決して群れていない！

名門貴族令嬢の好む取り巻きを作らないのだ。

エカテリーナはおべっかを使うニセの友人など欲しくはない。孤独の方がいいと思っているわけでもなく、友人も欲しいが、そんな利害で結びついた取り巻きなどいっそのこといない方がいい。

恰好も華美ではなく、むしろ質素で目立たないものだった。普段から好んでそういう物を着ている。というより自分の感性に合ったものしか着ない。力を誇示する豪華なドレスには興味がない。

背丈はやや低く、更に顔は小振りでもとても可愛らしい。

幼く見られることすらある。

瞳は大きくしつかりとした輪郭を持っている。濃い茶色だ。髪はブロンドにわずか赤みが入っているが縮れてはいない。ストレートを肩の下のところまで切りそろえている。

前髪はほぼ切らず、右から左に持っていく。そこにリボンも髪飾りもない。

まとめて言えば派手ではないのだ。

その名を聞いた士官学校生は椅子から転げ落ちんばかりに驚いて、ペコペコ非礼を詫  
びて退散するのが常である。

そういう喜劇を見るのも意地が悪いことだがエカテリーナには面白い。

しかし、本当に求めているのはフランクに接してくれる人間だった。

エカテリーナの立場に関わらず本質を見てくれる人間を。

## 第二話 481年9月 邂逅

エカテリーナが欲しいのは立場を知っても態度を変えない友人だ。

エカテリーナの立場を知らなかったうちに話をして、自分を等身大に分かっている人間こそ知り合いたい。

そんな希少な人間がいるのか？

いや、いないこともなかったのだ！

ナイトハルト・ミュラーなどはその希少な一人だった。

ミュラーは帝国貴族でも帝国騎士の生まれでもない。一般的な平民の生まれだ。

本当ならエカテリーナの顔を仰ぎ見ることも難しいくらい身分は断絶している。ところが交流会で会話をしてから立場が判明しても、本質的に態度が変わらない。

もちろん言葉使いは最初から丁寧だったのだが、より一層丁寧になった。しかし、エカテリーナをきちんと一人の娘として扱っている。

逆にエカテリーナにとってそれは驚きだった。

ほとんどの場合、何かの災いを恐れて敬遠される。

一部の者はルビンスキー家の権勢を当て込んで媚びてくる。それをエカテリーナは嫌った。

もつと嫌いな場合がある。

中には「貴族でも平民でもたかが生きていている人間だろう」などと、という気負いを持ってしまい、かえって虚勢を張る者もいる。

反抗することで自分を何か恰好いものであるかのようになり、それに酔うタイプだ。

小物である。

エカテリーナが実際に威張っているわけでもないのにそんな態度を示すとは、エカテリーナ自身を見ていないという意味で唾棄すべきだ。

しかし、ミユラーはそれでもない！

気負いなくエカテリーナと話ができる。

それで今度はエカテリーナが悪乗りするようになった。

悪友のように連れまわしたり無茶を言ったりする。

ルビンスキー家に付く従者や侍女たちはエカテリーナの自由奔放な性格を知っている。もはや諫めたりするのを諦めている。ミユラーも無理のない範囲でなら付き

合つて動いていた。

ミユラーとしては貴族令嬢の子供時代のただの気まぐれに付き合っているだけだ。

ミユラーは翌年士官学校卒業を控えた二十歳だが、エカテリーナはまだ十五歳なのである。

まあエカテリーナはそれで喜んでいるのだし、下町などに行くときには護衛役として自分くらいは必要だろう。

もちろん恋愛感情などあるわけではない。身分を考えたらそんなこと考えるはずがない。たぶん令嬢も子供時代を卒業したら、全て忘れ去ってしまうのだろうが、それでいい。

砂色の髪と瞳を持つ士官学校生は優しい人間だった。

それと実のところミユラーには兄弟、ではなく姉妹が大変多い。士官学校入学前は世話を焼かせられていたものだった。

今日、エカテリーナはミユラーとオーデインの服飾店街に来ていた。

立派なショーウィンドウのある貴族用の店ではなく、わざわざ下町のぎつくばらんな店に。

貴族令嬢用のドレスを見に来たのではないからだ。

近頃平民娘の間で大流行のものを買いに来た。半分以上肩を出して、薄手の生地ですの短い服である。

「いつ着るんだい？ そんなの着られるわけないよ。令嬢が」

「いいの！ 欲しいんだから。そしてこんなところに来る時に着ればいいじゃない」

さすがに婦人服店には気恥ずかしくてミュラーは入らない。しかも今は士官学校の制服を着ているので余計目立つ。

服を買うのに少しは他人の意見も聞いてみたいエカテリーナは不満だったが、そこは試着の数でカバーし、比べて買う。

店員は、肩の薄いエカテリーナにはフリルのあまり付けられていないすっかりした物を勧めてきた。

下の方ほど水色が濃く、そして逆に肩口にリボンアクセントに付けられている。その方が目が行きやすく結果的に肩に見栄えがする。

それらも含めどっさり買い込んだ。

意気揚々とエカテリーナは買い物を済ませ、その荷物はミュラーが持ち、下町を抜けた。

小路を通って華やかな大通りに出ればそこからは上流階級の者もいる気取った街だ。

そこで事件になる！

エカテリーナにとっては会いたくない者に会った。

それはエリザベート・フォン・カストロプという大柄の女だ。

帝国の財務尚書さえ務めるほどの名門カストロプ家の令嬢である。年齢はエカテリーナよりだいぶ上で、同じ女学校に通っていたのだが一年間しか一緒ではなく、とつくに卒業している。

そのエリザベートは特に悪い気性というわけではないが、とにかく男勝りで荒っぽい。

大貴族令嬢としてはかなり珍しいタイプである。

同じように貴族令嬢としては破天荒なほど行動力のあるエカテリーナと仲良くなるかと思いきや、反発が先に立った。

カストロプ家は地位よりも財力で有名な家であり、そういう家にありがちなことでフェザンに強く影響されている。

そのこともルビンスキー家エカテリーナへの反発につながったのかもしれない。

そのエリザベートが柄の悪そうな貴族子弟を五人も引き連れているところに、ばったり出くわしてしまった。



「ふん、何だいその大げさな荷物は」

「何でもないわ」

エリザベートはしげしげと見て笑い出す。

「あは、こりやいい。平民娘の貧乏服ときた」

理由なんか何でもいいのだ。

これはエリザベートの挑発なのである。

「フェザーンでは仮装行列でもするのかい？ それにちょうどいいさね」

「流行を試すのも令嬢としての嗜みよ。もつとも、私の年くらいまでの娘でなければ似合わないものだけだ。行くわよ、ミュラー」

対するエカテリーナも口では負けていない。

エリザベートはもちろん年増というには遠いが、それを揶揄し、言葉でお返しをしながらとつと立ち去ろうとする。

ところがエリザベートの取り巻きである貴族子弟がミュラーを見とがめたのだ。

「お付きの者は平民か。何だ、挨拶もなく行くのか」

「とんでもございません。御意を得ます。士官学校生のナイトハルト・ミュラーと申します。今はエカテリーナ嬢の従者代わりに付き添っているところであります」

相手は軽薄な若者でも貴族だ。

やはり平民のミユラーとしては表面上だけでも非常に下手に出て、敬っておかねばならない。

「やっぱりただの平民か。平民の従者を連れているとは、ニセ貴族らしいぜ」

これにはエカテリーナの方が顔色が変わる。

エカテリーナはフォンの称号が無いことを誇りにしている。ルビンスキー家らしく。しかしそれをニセ貴族などと侮蔑として投げられる時には意味が違う。

立ち止まったエカテリーナを見て、ミユラーは急いで手を引つ張り、一緒にその場を離れようとした。

ここでエカテリーナが怒ってしまうのは何としてもまずい。

だが、これは貴族子弟の方が邪魔をしてきた！

さすがにエカテリーナには手を出しようもないが、ミユラーの腹にパンチを食い込ますという方法を取って。いきなりの粗暴な実行使、もちろんミユラーなら平民なので腹いせに痛めつけていいと思っている。

「貴族もどきと平民従者、本物の貴族様を心から敬ってほしいもんだぜ」

普段ならばミユラーは護衛としても有能だ。

そんなに体格が立派というわけではないが、士官学校生の中でも格闘術に優れてい

る。実際これまでチンピラ相手なら実力を発揮し、エカテリーナを守ったこともある。今も反撃しようと思えば難なくできるだろう。

しかしここは貴族が相手、反撃など決してしてはならない。

もう一発。パンチを食らう。

「ミュラー、何よ、負けるあんたじゃないでしょ！」

エカテリーナの声にも関わらずミュラーは防戦するが決して反撃をしない。

ミュラーという人間は我を忘れて掛かっていくような短慮ではなかった。

ところがそれがかえって貴族子弟には面白くない。

全員が嗜虐趣味を発揮しました。最初見ていただけの貴族子弟も加わり、全員がミュラーを痛めつけにかかる。

これにはエカテリーナも驚いて、どうしていいか分からない。

ミュラーを守るためにはどうすればいいのか。最初から逃げればよかったのだ。しかし、今となってはミュラーは囲まれていて逃げられない。

発端になったエリザベートというと、思わぬ成り行きに顔を歪めている。

決して暴力が好きではなく、むしろ逆だ。

おまけに大勢で一人にかかるのを是としない正義感を持っている。

「あんたら、その辺で勘弁してやりな！ その平民が悪いわけじゃないだろ！」

だが残念なことに声を掛けたくらいでは調子に乗った貴族子弟は収まらない。

まあ、それで終わればミユラーにとつては極めて不運なことではあったが、それだけの事件で済んだだろう。

しかしこの騒ぎを見て駆け寄ってきた三人の人物がいたために事態は急展開する。

初めに二人の人物がその場に着いた。

名乗りを上げることもなく、風のように入ってきたと思う瞬間、貴族子弟に仕掛ける。

それは見事なストレートを決めた！

「貴族だから平民を殴る。平民は殴り返せない。それが宇宙の法律か。少なくとも俺は認めん！」

いきなり入ってきた少年、それは輝くような金髪をしていた！

「キルヒアイス、五人で一人を殴るのが貴族の優雅な作法だと思うか」

「もちろん、そうではないでしょう。ラインハルト様」

「だったら少し教育してやった方がいいと思わないか」

「ラインハルト様、ほどほどあれば」

「ほどほどにしてやるさ。尤も、主観の相違という奴はあるだろう。キルヒアイス、手伝え」



## 第三話 481年9月 狂気

最初にストレートを食らって倒れた貴族が立ち上がってきた。

驚くと共に、乱入してきた来た二人の少年を見る。

「お前ら、その制服は幼年学校だな？ ヒョッコ共が何のつもりだー！」

確かに少年たちは帝国軍幼年学校の制服だった。士官学校のものより、灰色がわずかに薄い。

そして幼年学校ならまだ十七歳以下のはずだ。

よく見たらとてもそんな年ですらなく、金髪は豪華でも背丈はまだそんなに高くない。

一緒にいる赤毛をした少年の方はそこそこの背丈があるが、しかしたぶん同じ程度の年齢だ。

五人の貴族子弟は新手の二人を子供と見てすっかり侮り、戦いを続行しようとする。

どちらから、というわけでもなく戦闘が始まった。

少年二人はさほど力が強そうには見えないが、意外なことに明らかに優勢だ。

狙いも的確であり、素早い！

何より二人のコンビネーションが圧倒的に良い。

貴族子弟たちはここにきてようやく喧嘩の不利を悟った。

戦ってみれば相手の実力が分かってくるのだ。見かけとは違う。

悔って戦わなければよかった。五人の貴族子弟はそろって戦意を喪失し逃げにかか

る。下町につながる小路の入口まで行き、そこから逃げる算段をした。

そして本格的に走り去る前に二人へ振り返った。

それは負け惜しみの捨てゼリフを言うためだ。つまらないプライドだけはあった。

二人の少年はそんな軽薄な貴族子弟を長く相手にする気も無かった。

どうせ小物どもだ。尻尾を巻いて逃げるなら追いかけていくまでは考えていなかった。

その時までは。

「こいつら、知ってるぞ！ 聞いたことがある。幼年学校の暴れん坊ミューゼルとキルヒアイスだ。これで済むと思うな。覚悟しとけ！」

負け犬の遠吠えだ。正直どうでもいい。

「ありきたりのセリフだな。独創性すら持ち合わせていない連中らしい」

少年二人は苦笑するしかない。

しかし、貴族子弟は怒りに任せてあまりにも余計なことを付け足してしまった！

それがどんな結果をもたらすか考えもせずに。

「姉の威光で好き放題しやがって。ちよつとばかり顔のいい姉を持ったからって。陛下に取り入って後宮に入れば姉は贅沢三昧、弟は暴れん坊、ふざけるな！」

この後の惨劇はたったの一言によつてもたらされた。

その頃、エカテリーナは倒れて動けないミュラーの顔付近にひざまずいていた。

「ご免なさい、ご免なさい、ミュラー！ 私のために、こんなことになるなんて」

「泣くなよエカテリーン。平民に生まれた僕が悪いんだよ」

「私が、早く逃げていたらミュラーも逃げられたのに。私のせいだわ。本当に私が口ばつかりで」

せめて手当はしてあげよう。それが義務だ。

先ずはミュラーを運ぶ人を見つけないければならない。



その時、エカテリーナはもう一人の人物がすぐ横にいたのに気が付いた。

不思議なことにミュラーも顔を向けてそつちを見ているではないか。

「おいミュラー、平民に生まれたのが悪いんなら、俺も悪いってことか？」

しゃべる内容とは違つて優しく砕けた口調だ。

「あ、先輩。これはみつともないところを……」

「いやミュラー、お前は立派だと思う。俺なら相手が貴族でも殴り返していたらう」

この若者はミュラーと随分親しい知り合いのようだ。そして士官学校の服ではなく、既に帝国軍の制服を着ている。エカテリーナの知識ではその階級までは分からない。服に入った線やバッジの意味を知らないからだ。ともあれミュラーの士官学校で先輩か何かだろう。

それよりも一番印象に残つたのは蜂蜜色の髪をしていることだ。

けれどちようどいい。ミュラーを運ぶのに力を貸してもらおう。

「エカテリン、買った服を忘れないように。汚れてたらごめん」

エカテリーナはそれで気付いた。服がその付近に袋ごと散らばり、明らかに踏まれたものもある。

「そんなこと！」

ミユラーは今さらエカテリーナの服にまで気を遣う、それほど優しかったのだ。

「ミユラー、俺ももう一步早く来てればなあ。しかし、さっきの二人の幼年学校生が加勢してくれて助かったな。あいつらけっこう喧嘩が強そうで良かった」

蜂蜜色の髪の青年士官はそう言い、エカテリーナも思い出して二人の少年と貴族子弟が戦っていたあたりを見た。

争いはもう終結しているだろうか。

「あれ、おかしいわ。誰もいない」

さっきの場所から下町へつながらる小路に沿ってもっと遠くに視線を移していく。

やがて見えたものがある。

優しさとは真逆の光景だった。

先ずは慌てて走り去っていくエリザベートが見える。

その手前によくやく貴族子弟五人が見えたのだが、完全に戦意喪失しているのが分かる。それどころか這いつくばって逃げようと必死だ。

文字通り命からがら。

しかし早くは逃げられない。というのは周囲に小路にあつたと思われる屋台の残骸

が散らばっている。

明らかに投げられて壊された椅子も転がっている。

おそらく貴族子弟が逃げにくいように店を壊してぶちまけたのだろう。

これは滅茶苦茶だ。度を越している。

それだけではなく二人の幼年学校生は貴族子弟に追い打ちをかけて止まない。

「姉上が何に取り入っただど!! 顔がいいだけだど! 貴様などが何を知って言うのだ

!」

「あ、もう言いません…… 間違っていました、だから……」

「よくもよくもよくも! 言ってくれたな!」

幼年学校生は手に何か粉ひき棒のような物まで持って打ちすえている。

何度も何度も激しく。

戦闘用の物ではないが、力いっぱい使えば凶器にもなる道具を使い、欠片の容赦もな

く行使する。

抵抗を諦めた小動物のような悲鳴がその度に小路に響く。それは幼年学校生の耳に

入っていないようだ。

二人の幼年学校生の姿に、変わったこと好きエカテリーナも怖さを感じた。

いったいこれは何なのだろう。

あの少年には狂気が入っているのか！

さすがに蜂蜜色の青年士官がそれを止めるために向かったが、辿り着く前に事は終わった。

二人の幼年学校生はやつと興奮が収まり、棒を手にしたまま立ちすくんでいる。

青年士官はその二人に構わず、むしろ転がった五人の貴族子弟の状態を確認して回り、医者の手配に走った。ピクリとも動かず、明らかにミユラーよりも重傷のようだ。

幼年学校生たちはゆつくりとその小路から大通りに戻った。

エカテリーナは先ほどの苛烈な態度を見て怖くもあつたが、ミユラーを助けてくれた恩義がある。

前に立って感謝を述べた。

「先ほどは私の連れを助けて頂いて感謝します。本当に。あのままでは五人にひどい怪我をさせられてしまうところでした」

「あ、ああ、フロイライン、それはよかった」

少年たちは喧嘩の余韻で最初はぼやつとしたところがあつたが、しかしみるみるうちに瞳に生気が戻り、輝きを放つようになる。

「あのような輩、貴族に生まれただけで実力もない者が寄つてたかつて無体をする

とは、そちらには災難だったろう」

「ラインハルト様……」

ここでエカテリーナにいくつ分かかったことがある。

先ほどの行動の激しさとはうって変わってこの金髪の少年は理知的な表情も見せるのだ。

しかし、その言動には少しばかり不穏な響きがあるのも確かだ。

現在の帝国の貴族体制に批判的にも取れる言葉ではないのか。だからこそ、もう一人の赤毛の少年が遮るように声を出したのだろう。

そしてもう一つ、この少年の名はラインハルトというものらしいが、しつかり名前を確認したい。

「申し遅れました。私はエカテリーナ・ルビンスキーと申します。まだ女学生です」

思いの外、こちらの名を聞いても少年は表情を変えない。実際のところ二人はルビンスキーの家のことを知らなかったのだが。

「ラインハルト・フォン・ミューゼル、帝国軍幼年学校四年だ」

「同じくジークフリード・キルヒアイスと申します」

エカテリーナは素早く計算し、この二人がたった十四歳なのを知る。

何だ、見た目どおりやはり年下ではないか。

そうと分かると少しは余裕も出てくる。

「こちらに加勢して頂き本当に感謝いたします」

感謝だけではない。エカテリーナは率直に今後必要になってくることを言った。

「それと、このあとの始末なんですが、どういった方法をとりましたか」

そう、これを決めておかなくてはならない！

結果的に貴族子弟を五人も叩きのめしたのだ。中には半殺しといって差し支えない者までいる。

ただで済むはずはない。何らかの手で揉み消さなくてはならない。発端がどうかとかどちらに非があるかというのは問題ではなく、貴族子弟が怪我をさせられたことが問題なのである。

エカテリーナにすれば自分はともかく、ミユラーを巻き込んではならない。その輝かしいものであろう将来に影をさすことは絶対にできない。

エカテリーナはルビンスキー家の力を用いるつもりだった。

その財力と影響力でこんな事件はどうでもなる。

ただし、そうするにしても全員が口を合わせておかなくてはならない。

それは面倒なことでもあるが、エカテリーナはそれでもこの幼年学校生に対し、余計

なことをしてくれたとは思わなかった。その二人は貴族子弟が多数で平民一人をいたぶっているのを見過ごせなかったのだ。結果的にやり過ぎてしまったのだが尊いではないか。

「あとの始末か。ほっておけばいい。どうにかなる。フロイラインが心配することはない」

金髪の少年が意外なことを言った。それを赤毛の少年も肯定の表情で聞いている。

少年たちは決して捨て鉢になつて言ったふうには見えないのだが…… 大胆なことだ。

それに全く反省もしていない。むしろ後始末を誰かがするのを喜んでいるような感じだ。

エカテリーナは不思議に思った。

それと同時にこの少年たちに興味を持った。

何かが違う。この少年たちは一面においては分かりやすい直情を持つが、逆に何か奥底を見通せない深みがある。

## 第四話 481年10月 ピクニック

後日、この事件は少年たちの言う通り、なんとかなった。

何か問題になることもなく事件そのものがきれいに消し去られた。

驚くべきことである。

これは通常ではない何かの理由があるはず、エカテリーナは探りを入れてみた。

その方法としてオーディンにあるフェザン弁務官事務所の力を使った。エカテリーナの顔を使えば造作もない。

しかし意外な結果を知る。探ることさえ壁に突き当たり、できなかつたというのだ。

だがこれで逆に判明した。

優秀なフェザン弁務官事務所で見つからないとは、よほど高位からの力が及んだに違いない。

この頃にはエカテリーナはあの幼年学校生たちの情報をつかんでいる。

その一人、ラインハルトは没落貴族の生まれであること。

母親は亡く、父親は酒浸りなこと。姉アンネローゼ・フォン・ミューゼルが幼くして



銀河帝国皇帝フリードリヒ四世の後宮に召されたこと。今では大層気に入られ一番の寵姫になっていること。

ラインハルトはその後帝国軍幼年学校に入り、ひとかたならず暴力事件を起こしていること。

そして、ラインハルトらの隣家に住んでいたジークフリード・キルヒアイスという少年もまた時を同じくして幼年学校に入り、いつも一緒にいること、である。

であれば事件の後始末を誰がやったか容易に推測がつく。

皇帝につながる筋から圧力がかったのだ。これではどうにかなるのは当たり前だ。

エカテリーナはそのことも直接ラインハルトに聞いてみた。

あの事件以来、興味のままにしばしば幼年学校の休みを狙って呼び出していたのだ。ラインハルトの方では別に拒むわけでもなく率直に接してくれる。

「ラインハルト様、やっぱり姉の筋から事件を揉み消したんですのね」

「フロイライン、それは違う。俺が頼むわけじゃない。姉上が誰かに頼むわけでもない。どこかの誰かが勝手に揉み消す。いつもそうなる」

エカテリーナはラインハルトに様を付けて呼んでいる。

ミュラーは年上なのに呼び捨てで、こちらには年下なのに様を付けるのも妙なことな

のだが、しかしそれがとても自然なことに思われた。

それはともかく、やはりアンネローゼが皇帝の寵姫だから揉み消されたのだ。そしてラインハルトはそれを腹いせの一種として小気味いいものと思っている。

「皇帝の下っ端に少しばかり仕事を与えただけだ」

「ラインハルト様、アンネローゼ様が知れば心配するのは確かです」

会話の中で赤毛の少年キルヒアイスが遮ってきた。

エカテリーナに一層分かってきたのだが、こちらの少年はだいぶ穏やかな性格なのである。そしてラインハルトが何か言い過ぎたりしないように抑えに回っている。むしろ帝国では不敬な言動など誰彼に聞かせていいものではなく、時と場合によれば姉の筋からもみ消すことができずに大ごとになる可能性もなくてはならない。

「そうだな、キルヒアイス。姉上に心配をかけるのだけは嫌だな」

「まあそんな話は終わりにして、今日は天気もいいし、湖の方に行ってみませんか?」  
「湖か…… いいかもしれないな」

エカテリーナは幼年学校生にピクニックを提案する。

ラインハルトに異存はなく、その提案に乗った。

というのはラインハルトの方ではこの風変わりな子女は嫌いではない。嫌いな格式ばった言い方や迂遠な言い回しをしないからだ。

三人でオーデイン郊外の湖まで遊びに行く。

この日はミュラーは試験が近いので呼び出していない。そうでなくともミュラーは最終学年であり、成績が非常に重要な時期なのだ。その結果は卒業席次に関係し、その後の配属先にまで影響を及ぼす。だからしばしば呼び出すことはできない。

湖のほとりで景色を楽しむ。天気の良い一日、水も緑もきれいだ。

頃合いを見てエカテリーナは持ってきたバスケットを開ける。

「ランチにしましょう。フルーツサンドウィッチを作ってきましたわ」

岸辺にある小綺麗なテーブルにバスケットを置き、マットを敷いた上にサンドウィッチを丁寧に並べる。

少年二人がそれを食べ始めるのをエカテリーナは見ている。

「美味しいな。フロイライン。これをまさか自分で作ったのか」

そう、その反応を見たかったのだ。

こういったものを作るのが得意だから、令嬢であるにも関わらず自分で作る。味も一級だと自負するものだ。

「そうですよ。ちよつとした工夫をしていますの。普通、ホットサンドは最後に外側を焼きますでしょ。これは軽く焼いてから、焼いた側を内側にして挟んでますのよ。

逆に外側は最後まで焼かずに」

これが私の自慢のサンドウィッチなのだ！

なかなか普通には考えつかない工夫が施された自慢の一品である。

この工夫により香ばしさがいつそうクリームの甘さを引き立たせ、上品なものに変えるのだ。しかもフルーツサンドウィッチにはない歯応えが付き、それでいて表面は柔らかい。

「本当にフロイラインが作ったのか。確かに面白いな。姉上の作るものの半分くらいは美味しい」

「え!？」

それはないんじゃないの！

実際正直な反応なのだろう。さんざん聞かされたのだが、ラインハルトの姉アンネローゼは何でも上手に作ったそうなのだから。

だがしかしそう思われるのは癪だ。

おまけに口に出すのもどうかしている。それが誉め言葉になるとでも思ったのか。ラインハルトが正直に邪心なく言ったというのが分かるだけに余計イライラする。

ラインハルトが姉も姉の料理も大好きなのはとくに分かってはいるが、それと比べられることはない。

「ラインハルト様、とても美味しいではありませんか。料理の工夫には幅が広いものですね」

キルヒアイスがすかさず雰囲気を崩さないように気を遣う。

困った雰囲気になりそうなのを察知し、とりなすのはいつものことだ。

よし、ではこちらは年上の余裕の反撃を見せてやろう。

「ラインハルト様は褒め方の表現は向上の余地が。いえはつきり言えばまだまだでございますね。少なくとも女性相手には」

ふうん、というような顔をされた。

全然効いていない!!

もう一言、モテないわよ、と言おうかと考えたが、やめた。

よく考えたらラインハルトもキルヒアイスもあまりに綺麗過ぎる。

他に何の難があるうとも、この先モテないとは考えられないのだ！ 見かけだけで他は何でもいい、という女はいくらでもいる。

それにこの二人の少年の性向はそんなことに関心はないだろう。それは分かり切っている。

二人の話す話題は政治的な変動や惑星開発のニュースなんかが多い。

普通には学校内部のことやたわいもないうわさ話を話す人間が多いのに。少年期の純粹さということを割り引いてみても話題の偏りは異常だ。

何より二人の話題は軍事に関連したものが一番多い。

それも海賊討伐の戦闘や叛徒相手の会戦など、実際あったことの戦術的観点からの話なのである。またそれを話している時が最も輝いて見えるのだ。

それにエカテリーナは話を合わせる。

エカテリーナにとつてもそういう話は嫌いということはない。だがさすがに純粹な艦隊戦はコメントのしようもない。過去の会戦や戦術という基礎知識がなければ聞いてもイメージできないので断片的にしか分からない。

ともあれエカテリーナはこうして度々二人の少年と会うことになった。

秋のうちに同じ湖で釣りをすることもあった。

ラインハルトが意外に釣りを苦手としていたことが分かった。どうしても待つだけにいるのが嫌ならしい。エサや竿を動かし過ぎるのだ。

「魚は人間ではない。動きの予想などできなくて当然だ！ 魚相手の戦術など俺には無用のことだ」

などと悔し紛れを言っている。本当は悔しいくせに。

おまけに釣りに限らず多くの場面でラインハルトよりもキルヒアイスの方が器用で

上手い。そのこともラインハルトは悔しいらしく、隠そうともしない。

キルヒアイスはそんなラインハルトの性質をよく知り、いつも穏やかに接し、二人の仲は悪くなることはない。

冬には室内でゲームをした。

春に変わると郊外の野原まで早咲きのスイセンやスノードロップを摘みに出かけた。

その時はエカテリーナが採り過ぎないように二人に向かって注意をしなければならぬ。

「採り過ぎると来年咲かなくなりませよ。ほどほどで止めておくのが大事なんです。何でもほどほどの方がいいんですよ」

「ほどほどというのが分からん。けれどフロイラインの言う理屈は分かる」

まあどのみち何の作業をしても、結局会話の内容はいつも同じようなものだ。

何の会戦について語るかだけの違いである。

「半分も分かりませせんわ。まさか女学校でもそんなことを教えてると思ってるんですの？」

ただしエカテリーナも多少は興味が持てるようになった。

次第にラインハルトの語る銀河の情勢や軍事のバランスというものに面白みを感じるようになってきたのだ。感化されたといってもいい。

女学校で交わされるうわさ話などは虚像に過ぎない。

だがそういったことは実際の人間が動く実像、事実であるからには面白さがないはずがない。

エカテリーナは大きな人類社会のうねりにわくわくする。

だが相変わらず艦隊戦の戦術のことだけはよく分らない！

戦いにおいてどうして駆逐艦が護衛につくのか、戦艦だけでいけないのか、分からない。

最初からどうして全戦力をぶつけないのかも分からない。

それは料理を作る上で、同じ材料でも入れる順番でまるで違う味になってしまうことと同じだろうか。

同じ種類のスパイスでも、シードは最初から低温で炒める。

温度によって出てくる香りが違うのだ。

どういう香りにしたいのか、その狙いを持って微妙な火加減を調節し温度を上げていく。最後にフレッシュスパイスを入れて、飛んでしまった香りを改めて加え、きつちり角を立たせる。順番を間違えたら目も当てられない。

自分にそういう軍事の才能はないのだろう。

しかし、少なくともラインハルトにその才能が充分あることは分かるのだ。



いや、天才だ。

ラインハルトが戦いのことを説明するのも、コメントを付けるのも、エカテリーナには実能的確で理にかなったものに思える。

ただしいつも「俺なら違う戦術をとった」といつて語り出すのを「はいはい、それでラインハルト様が絶対勝つんですのね」といつていなすのがお約束になっている。

## 第五話 482年7月 卒業

エカテリーナは世の中の大局的な情勢に興味を持っていく上で、やはり自分の故郷フェザーンのことを思う。

フェザーンが繁栄しているのはもちろん肌で知っている。

オーデインには確かに人間は多い。文化も高い。しかしフェザーンの方が進歩が速くて賑やかだ。何より明るく楽しい。

そのフェザーンの富の源泉は銀河帝国と自由惑星同盟という国との中継貿易にあるのも知っている。

フェザーンは初めフェザーン回廊の貿易輸送艇の寄港地として、また税関としてその繁栄が始まったのだ。

航路も惑星フェザーンの位置もその自然条件も良かった。幸運の惑星なのだ。

人が集まり、やがてそこに目をつけた商売、娯楽で更に大きくなった。

繁栄が一定の規模を超えると市場としての価値が出てくる。

ついで商業取引の発展は金融の発達と情報の集中をもたらす。

それが最終的には資本の蓄積になるのだ。その資本はもちろん帝国や同盟のあちこちに再投資され、利潤というおまけをつけて戻ってくることになる。

ついでにフェザーンの看板そのものに価値が付く。それは信用だ。

帝国の産品がフェザーンにわざわざ運ばれ、フェザーン市場で値付けがされてから帝国に戻されるといふ一見馬鹿なことまで起きる。

今やフェザーンには富が集中し、溢れているのだ！

これがどこまでも続くように見える。

しかし、根本的に中継貿易に立脚していることもまた事実である。繁栄はこの細かい脚一本で支えられている。もしもこれが失われたら今までとは逆の循環になり、いずれは金融だけで繁栄を保てることはなく、やがて瓦解するに違いない。

今の銀河の政治体制が続くのがフェザーンにとって最も望ましい。

エカテリーナは繁栄の続くフェザーンを見ていたい。富を奪われて衰退するフェザーンなど考えたくはない。いつしかフェザーンを中心とした宇宙になるといふ未来絵図を夢想するようになった。

奇しくもそれは父アドリアン・ルビンスキーと同じ夢だったのだ。

やがて季節は初夏に変わる。人にとって一番過ごしやすく爽やかな季節だ。

しかし、悲しいことにこの季節は同時に別れの時でもある。

ミュラーは士官学校を卒業する。それはエカテリーナにとって寂しいことだ。

ミュラーの方でもまた寂しいものだ。

士官学校卒業と、同時に軍に入ることについては若干の不安はあれど臆するところはない。ミュラーは優しい人間だが臆病者ではないからだ。

しかしエカテリーナとのことでは寂しさを感じる。

今まで度々エカテリーナには困らされたこともあつたが、面白かつたことも多い。士官学校の思い出を構成する重要なピースの一つなのである。

この先、また会うことがあるのだろうか？

いや、一生ないかもしれない。そもそもその身分が違う。フェザーンの大令嬢と一介の軍人では。

それよりもエカテリーナが大人になり、ミュラーのことなど思い出すこともなくなつていくのだろう。

今だけの仲間なのだ。

そんなに遠くない将来、脱皮して貴族の社交界という煌びやかな場に出れば全て忘れ去られる。オーディンの下町や野山で一緒だった平民軍人のことなどどうして覚えて

いられる、覚えている理由がある。

だったら一方ばかりが思い出を大切にしているのは客観的に見て滑稽というものだろう。

「やつと卒業だ。いろいろあつたけど、楽しいこともあつたなあ」

口調は寂しく、決して楽しそうではない。

「今さら何言ってるの。卒業なんだからもっと楽しそうにしてよ。卒業するために学校入ったんでしょ」

それはそうだ。

士官学校というものはそのカリキュラムのきつさに音を上げて途中でドロップアウトする者も少なくない。席次はともかく卒業まで辿り着くことも大変なのだ。

あるいは軍の実態を知るにつれ次第に怖くなり士官学校を逃げ出す者もいる。ここ最近の戦いは激しく、前線将兵の生存率もまたそれに従って下がっているからである。

「それはそうなんだけど。何となく寂しいこともあるんだよ」

ミユラーは、卒業の寂しさの大半がエカテリーナに起因するとまでは話さなかった。気を遣わせないように別れの挨拶をしないというのもある。

それにエカテリーナの方では存外寂しそうではないのだ。

意外なことである。

気にしていないのか。これからもう離れてしまうのに。

普段あんなに率直なエカテリーナが寂しさを見せないようあえて明るく振る舞っているのか？

実はエカテリーナは本当に寂しくない。

ミュラーのことが気にならないわけではない。

理由がある。

もうとつづくに手を回していたのだ！ ミュラーは本人の希望通り最初は艦隊勤務につくが、いずれかの時点でフェザーンの駐在武官になるように手を打っていた。駐在武官の椅子は少ないためその一つが空きしだいミュラーがフェザーンに来る。

エカテリーナ本人は女学校卒業後はオーディンの社交界で活動をする気はない。

フェザーンに戻るつもりだ。つまりミュラーと必ずまた会えるではないか。

エカテリーナはルビンスキー家の力を使うのに遠慮はしない。

力は使うためにある。

手があるのにわざわざ手を使わずに文字を書こうとする人間などいないではないか。

それと同じだ。

もう一つ、これはミュラーにとって決して悪いことではない。

駐在武官はどちらかという出世に関して言えば栄達コースなのだ。戦場に出ない後方勤務としては珍しいことに。

なぜならフェザーンは帝国にとつて最前線という認識なのである。フェザーンは帝国の一部という形式を纏っているが内容は別の国であるからには、弾が飛び交うことはなくとも前線だ。そして駐在武官は決して外交の添え物ではない。

「行つてらっしゃい、ミュラー、死なない程度に頑張つて」

その言い方もどうか、エカテリーナとミュラーは思った。

その次はあの幼年学校の二人もまた卒業式を迎える。

もちろん、ミュラーと違ってこちらの少年たちには寂しさの一欠片もない。

もう未来への希望で一杯だ。他の感情が入る余地が全く無い。

「いよいよだ。ここからだなキルヒアイス。宇宙を手に入れる第一歩だ」

「やっと始められますね。ラインハルト様」

その希望に溢れた姿は、はたから見ても眩しいくらいだ。

エカテリーナはこの二人が才能において充分なことは分かっていたが、それでも世の中というものは才能だけで渡つていけるほど甘くないとも知っている。

「どうか二人がいつまでも無事であるように願うばかりだ。」

「今日はお二人の卒業のお祝いと思つて、サンドウィッチを作ってきましたわ」

「フロイライン、サンドウィッチが好きなのか。まあ、便利な食べ物だと思つが」

「今日のは特別ですよ。私が今まで作った中で、最高傑作のもんです。」

「そうか。それは楽しみだ」

「食べる段になるが、そのサンドウィッチはラインハルトもキルヒアイスも見かけあまり大したものには見えなかった。」

ただの白くて薄いパンのサンドウィッチだ。

具材として中にはスライスしたストロベリーが挟んである。ただそれだけだった。

他に何も入っていない。

ただし、食べてみるとこれが殊の外美味かった！

「エカテリーナ様、本当にストロベリーだけなのですわ。しかし確かに美味しいものです」

「フロイライン、なるほど傑作だ。そう言うだけあるな。思うに他に何も入っていないからこそ美味しいのだな」



「よくお分かりになりました。そうです。ストロベリーだけなのがいいんです。クリームも、ジャムも入れてはいけません。とたんに平凡な味になります」

二人は納得して食べ進む。

その通りなのだろう。ストロベリーの水分も、フレッシュな香味も絶妙だ。

「これが私の最高傑作です。素材の味だけでこれほどになります。この先いつまでも憶えておいて下さい」

サンドウィッチのことで令嬢は何を言っているのだろうか。

ずいぶん強い言い方をする。二人の少年はしばし食べるのを中断して聞いた。

「いろんなことを付け足すのが良いことではなくて、それは成長とは言えなくて、そのままでもいいということです。人もそうなんだと思います」

エカテリーナの言葉ではうまく説明できない！

言いたいことがあるのに伝えられない。

「エカテリーナ様、つまり、人も同じように本質をそのまま保てばいいと、そういうことです」

さすがにキルヒアイスは分かってくれた。言葉を変えて説明を付け足してくれる。

「ふん、言われなくとも俺は変質などしない。変わりようがない」

「ラインハルト様、まっすぐ生きるのは難しいことだと思います。しかし、ぜひそれをや

り切って下さい」

エカテリーナはこの純真な二人にそのまま置いて欲しかった。

変わらない心でいれば、困難なことがあっても乗り越え、それが二人にとっても周囲にとっても一番幸せな道だと思えるのだ。

## 第六話 482年10月 政変

さて、卒業を見送った後、ミユラーもこの二人も無事に艦隊勤務についたことを知った。

エカテリーナもやつと気が抜けた。

そしてさすがに寂しいものを感じる。遊び相手という以上に彼らは大きな影響力を持っていたのだ。

ところが運命はエカテリーナに暇を与えない。

本当ならあと一年間、エカテリーナは女学校にいるはずだったのに。

急遽フェザンに呼び戻されることになったのだ。女学校は繰り上げ卒業の形になるが、貴族の女学校のカリキュラムなどいかようにもなる程度でしかない。

急な卒業の原因はフェザンの政変にあった。

フェザン第四代自治領主ワレンコフが事故のため不慮の死を遂げた。

そのため第五代自治領主が立てられなければならない。

それにはアドリアン・ルビンスキーが最もふさわしいと衆目が一致している。本人の意志、能力とも充分だ。いやむしろ歴代自治領主と比較しても実力は高いと見積もられている。

しかし何事にも100%はあり得ない。政変があればここぞとばかりに野心を持つ輩もいるのだ。野望と邪心が頭をもたげると、平時には善良な人間さえ悪人に変える。

アドリアン・ルビンスキーは周囲のきな臭さを感じ、エカテリーナをフェザンに戻して保護しようと考えたのだ。

これはエカテリーナにとって否やはない。

別にオーデインにこだわる必要もないし、まして退屈な女学校を出られるのだから。

秋の晴れた日、女学校を含めた各種の挨拶回りと手続き、そして出迎えのためにわざわざフェザンからオーデインに兄がやって来た。

兄はルパート・ケツセルリンクという。

エカテリーナとは腹違いの兄である。父アドリアン・ルビンスキーはその兄のことを自分の低い女が生んだ子供としてルビンスキー家の者と認めず、籍も変えていない。

そのため兄と母親は貧乏暮らしを続けざるを得なかったそうだ。

あまり態度に出すことはしないけれどその兄は父のことをひどく憎んでいるらしい。

ある時、エカテリーナはたまたま聞いたことがある。兄ルパートがアドリアン・ルビンスキーの執務室から出て、廊下を曲がるまでの短い時間で呟いた言葉を。

「実力主義のフェザーンを自慢するアドリアン・ルビンスキーか、笑わせる。身分が低いからといって母を認めず、貧しきで病死させたのは一体誰だ！」

確かに兄の言うことも一理ある。

しかし、結局のところその兄が法律学の大学院まで行けるよう援助したのも父、それも事実だ。しかも卒業と同時に末席補佐官に登用という破格なこともしている。

おそらく、父は後悔しているのだ。

父アドリアン・ルビンスキーは子供を完全に忘れ去るほど冷たい人間ではない。ルパート兄さんのこともずっと気にかけている。それは兄の方でも分かっているはずだ。

要するに二人ともうまく感情を出せずに仲良くできないでいる。

そんなルパートはエカテリーナにとっても優しい。

いつも子供扱いして心配し、世話を焼き過ぎるほど焼くのが常である。

「引越しの用意はできたかい？ エカテリン。自分が見てなけりやだめだよ。何を捨てていいのか分からないだろ？」

そう言いながら思い出品の仕分け作業を手伝う。それは決して少なくはない。

「これはどうしたらいいだろう。女学校の席割りや時間表。一応取っておくかい？」

「捨てちゃっていいわ。もういらぬ物だし。今憶えていないような思い出なんていらぬもの」

「エカテリンは本当に後ろを振り返らない主義だなあ。感心するよ」

自分も決して暇ではないはずなのに、ルパートはエカテリーナのためならこうして駆けつけて来ては世話を焼く。

エカテリーナもまたそんな兄のことをとても好きである。

いつか兄と父とを和解させ、家族で力を合わせてフェザーンのために尽くしていきたいとまで思っている。

その姓もいざれルビンスキーにして。

そういえば、父アドリアンは言っていた。

「本当なら、お前と姓が違っていてもおかしくなかったな。昔の風習で言えばエカテリーナはルビンスカヤという姓になっていたはずだ。全てがルドルフ大帝の命によって今の帝国風に変えられる以前であればな。そしてついでに帝国からフォンなどという物を付けられたら、先祖は何と言うだろうか」

「その話は聞いたことがありますわ。昔の家系ではそうだったと。でも、姓と名を逆に

させられた家よりはマシかもしれませんが。姓が先に来る家系もあつたそうですから」  
その時は、どうせならルパート兄さんをルビンスキー姓に、とは言い出せなかつた。

女学校内では私と特に親しい者はいなかつた。

この繰り上げ卒業に際しても涙を流して別れを惜しむべき友達はいないのだ。

教師の中でも、せいぜい嫌いではないという程度であり、仲良くなつた教師もいない。  
ただし一人、マグダレーナ・フォン・ヴェストパーレ男爵夫人だけは別だ。

彼女は女学校の芸術科目の非常勤講師として来ていた。男爵夫人が直接絵や音楽をするわけではないが、各種芸術の見方と正しい批評についての講義をするのだ。

それがまた的確で楽しい。

男爵夫人は明らかに快活な人柄ということが分かる。まるで晴天の空のように屈託がない。いつも授業では毒舌で笑わせてくれた。

「絵画で、異常に目の大きい人物像が出てきたら、その絵描きの目はたいい小さいものですのよ」

エカテリーナは教師の中で一番気に入っている。

男爵夫人の方でもこの行動力のある生徒を気にかけて。そしてついでに、もう一人、

エカテリーナからすれば2学年下の令嬢と引き合わせたのだ。同じような性質を持つと思つて。

エカテリーナにとり、その年下の令嬢はある意味衝撃的だった。

まるで少年にしか見えない！

見かけも立ち振る舞いもそうだ。せつかくきれいなブロンドを持つのにぱつぱりと短髪にしている。単純に動きやすいからそうしたのでらう。髪が嫌いだからでも反抗しているからでもなく、本当に単純なことだ。

そして彼女は乗馬に長けている。乗馬は女学校で唯一スポーツに近いものだったが、本当に上手いものだ。優雅なレクリエーションが迫力のスポーツに見える。

それ以上に、語ることがまた驚きだった！

「世の中を知らずして何が楽しい。この時代に足跡を残さないでは生きた甲斐がない」

こんなことを言つてのける令嬢は他にいない。流されるままに生きるのは死んでもご免だと言うのだから。

これが名門マリンドルフ家の令嬢だというのだ！

マリンドルフ家は代々帝国の文官を務め、国務尚書を出したことすらある名家である。



聞くところによると、この令嬢は野山を駆け巡ることばかりしていて、とても淑女になりそうもないから女学校に押し込められたそうだ。

だからエカテリーナ以上に彼女は女学校を窮屈そうにしている。

「ああ、もつと広いところに出たい！ 生まれた時代が合っていたら」

ちなみにヴェストパーレ男爵夫人は彼女が将来殿方と出会い、うまくやっていけるか密かに心配していた。そして今ならうまい具合に、知り合いの弟に性格や趣味が合いそうな者を知っているのだが…… その者は幼年学校を卒業してしまい、未発に終わっている。

「エカテリーナ様、残念です。もう女学校を出ていかれるのですね…… 何だかもつと学校が退屈になりそうです」

「ヒルダ、一緒に遊べなくなつてごめんなさいね。私にも急なのよ」

その彼女、ヒルデガルト・フォン・マリィンドルフと別れの挨拶を交わす。

「フェザンは楽しいところと聞いていますわ。活気もあると。私も行きたいです」

「楽しいけど、世渡りも必要な場所よ」

「だからいいんじゃないやありませんか。頭脳で勝負、権謀術策何でも来い、です」

「ふふ、あなたが並の令嬢でないことを忘れていたわ。でも、オーデインでもその類はあ

と思うわ。あなたの活躍するところは必ずあるはずよ」

全て準備を済ませると、いよいよオーデインを出発だ。

ルビンスキー家所有の宇宙艇は数あれど、一番の高速旅客艇にルパートと一緒に乗って行く。

今、数々の思い出を残し、オーデインから星空に出る。

今度は帰省や旅行ではない。本当の意味で出立だ。

先に星空に出たミユラーやラインハルト様はどういう気持ちだったのだろうか……

エカテリーナにとって、オーデインは子供時代を良かれ悪しかれ育んでくれた星だ。

目をやると、小窓から見えるオーデインはまるで黒衣の上に無数のきらめきをまとって美しい。

さすがに全宇宙の中心だ。

だがしかし、次第に小さくなり、やがて見えなくなつた。

それでいい、エカテリーナは思った。

オーデインではなくフェザーンの繁栄が宇宙を覆いつくすようになればいい。

私もその一助になりたい。

若干の感傷を持ちながらエカテリーナが進む頃、陰謀もまた進んでいた。それはもう具体的な形になっている。

帝国軍の払い下げられた駆逐艦一隻が、出所がわからないように転売を繰り返された末、ついに目的を与えられ出航していく。

密かにエカテリーナの乗る高速旅客艇を追尾にかかった。

## 第七話 482年10月 欺瞞の逃避行

オーデインを出てから十五日経ち、あともう少してフェザーン自治領宙域に入るところだった。

この旅客艇が決められた清明宙域にワープアウトする。そこで規定されたワープのインターバルを置きながら、機器の点検を済ませるのだが、この時は通常航行に移っている。

いきなりだった。

「あつ！ 右舷後方に時空振予兆観測しました！ 至近に何かワープアウトしてくる模様！」

旅客艇の観測オペレーターが驚いて叫ぶ。普通にはあつてはならないことだからだ。

探知装置の点滅と自動アラームが響き渡り、艦橋に急を告げ知らせる。

「何だと！ 緊急加速！ 進路はこのままでいい、全エネルギーを推進に回して離脱だ！」

旅客艇とはいえ、これはルビンスキー家の座乗する艇なのだ。

乗組員は選りすぐりの優秀な者たちだ。

中でも艦橋にいるのは元帝国軍人だった者が多い。

その反応の速さと艦長の好判断が大事に至らせずに済んだ。

「何なんだ、無茶しやがって！　いきなり後続でワープアウトはルール違反だぞ。こちらを探知もしないなんて不注意にも程がある。こんなことで事故にでもなったらどう責任とるんだ」

ワープアウトの時空震に巻き込まれず、何とか退避はできた。

しかし、本当の驚きはここからが本番だった。

「それで、どんな艦が出てきたんだ」

「先ほどワープアウトしてきたのは……　小さいですが、時空震から推定すると質量は大」

「荒くれの輸送艇か？　大きさに比べて質量が大きいとは、ハイドロメタルでも積んでるのか」

「いえ、これは、艦型からすると、そんなものではありません！　そんなバカな！」

観測オペレーターはかなり驚いている。あまりに意外だからだ。

「だから何だ」

「これは、帝国の駆逐艦です！ 軍用艦がどうしてこんなところに」

「バカなことを言うな！ ここは民間艇専用航路だぞ。旅客艇も通るんだ。駆逐艦などいるはずがない！ それに軍用艦ならなおさらワープでニアミスなんてマネはしないはずだ」

艦長がそう言うのも当然、あり得ない。

これは例えていえば歩行者天国の大通りに戦車が走りこんだようなものだ。

通信を担当する別のオペレーターが機器の操作を既に始めていたが、奇妙なことを言ってくる。

「演習などの連絡もありません。いえ、おかしなことに通信自体がつながりません」

「…… 抗議もできないな。周波数を変えて試してみろ」

すると今度は観測オペレーターが緊急を伝えてくる！

「先ほどの艦ですが、ワープアウト後、こちらとの距離を縮めています！ 急速接近中！」

「なに！ 反応炉出力最大！ 本当の限界一杯だ！ 念のため後方に集中しシールドを展開！ いったいこれは……」

艦長は嫌な予感に冷や汗を流す。それでも最悪に備えて手を打つ。

艇内のライトが明滅し、エンジンがこれまでにないほど大きな振動を立て始める。

この尋常ではない事態をエカテリーナもルパートも察知し、ワープ用シートの頑丈なベルトを外して艦橋へ向かった。説明を求めためだ。

しかし二人が艦橋に入った時、まさに火事場の騒ぎだった。緊急事態に際して各人が最善を成そうと動き回っている。

だが次の一瞬、静寂に包まれる。

「駆逐艦に高エネルギー反応あり！ これは砲撃準備です！」

「回避プログラム発動！ 衝撃に備えろ！」

「砲撃確認！ レール弾急速接近!!」

「外れました！ 右舷方向、至近です。警告などではありません」

それでほっとする者はいない。

あろうことか駆逐艦が攻撃してきたのだ。旅客艇を攻撃など無茶苦茶だ。しかしその事実は認めなくていけない。今は理由など考えても無益なことであるし、他に考えることがある。

間違いでも脅かしでもなく、相手はこの艇を沈める気だ。その意志は判明した。

だがそうなると絶体絶命である。

いくら駆逐艦が軍用艦の中では小型で非力といえども、旅客艇なんかは蚊の一匹のよ  
うにひと捻りだろう。

旅客艇にはもちろん武装もなく、外壁も薄い。

特別製の旅客艇なので安全のため通常の艇よりも強力なシールドを持ってはいる。

しかしそれでも旅客艇としての範囲内であり、あくまで漂流物相手を想定したもの  
だ。

駆逐艦の砲撃を一度ならともかく二度、三度、凌げるはずがない。

そして逃げようにもそうはいかない。旅客艇としては速度もかなり出せるが、やはり  
駆逐艦には及ばず、逃げられるほどではないのだ。緊急ワープしようにもインターバル  
が終わり、再度ワープが可能になるまであと四時間もある。

逃げ切れない。これは詰みだ。

救援を頼めるような艇は近辺にいなかった。

いや、そのためにあの駆逐艦はここを襲撃場所に選んだのだろう。フェザーンに近付  
き、帝国としては辺境であるこの場所を。



駆逐艦は余裕を持ち、さっきの砲撃は有効射程からはるか遠くから撃ってきたものだ。だから外れてしまったただけだ。もはや遊び半分のカモ撃ちくらいな気持ちなのだろうか。

今立たされている状況の説明を聞いたエカテリーナもルパートもめまいがした。

相手の目的については考えるまでもない。おそらくルビンスキー家の二人を一気に抹殺するつもりで仕掛けてきたのだろう。他には考えられない。こんな実力行使をするなど、リスクより見返りの方が大きいと計算しているに違いない。

今、艦橋の者たちは何とか対策を捻り出そうと頑張る。このまま座してやられるのを甘受できない。

策を考えては実現不可能を感じて却下、何度もそれを繰り返す。

ついに万策尽きていることを改めて実感して無力感に襲われる。

エカテリーナは死の恐怖はさておき、自分がまだ何もなしていないのにこの世から退場など無念極まる。

いや、こんなところで襲撃によって消え果てる、そんなことは赦せない。

なんとかならないのか！

この場を少し逃げられればいいだけだ。相手は一隻、何とか騙せないものか。

相手の身になって考えろ。

そして、今まで蓄えた知識で何か役に立つ物はないのか。

オーデインであれだけラインハルトやキルヒアイスの語る戦術論を聞いていたではないか！ 彼らとの会話で何か得た物はないのか。

ぐつと噛みしめた口に力が入る。

一つの考えが結晶となった。

エカテリーナは直ちに艇の皆に申し渡した。他に良い案がない以上、ルビンスキー家の人間である権限によって強引にでも事を行うのだ。

ルパート兄さんもすぐに意図が分かって協力してくれた。

その考えを形にするには作業が要る。

それに取り掛かって間もなく、駆逐艦がまたしても撃つてきた。まだ有効射程には遠いのに。

ほとんどは外れていくが、不運なことに一発が直撃した。まぐれ当たりだ。

それをなんとかシールドが弾き、盛大な音響を残していくが実害は生じない。しかし過負荷によってシールド発生装置は半壊状態、もう一度攻撃を弾くのは無理になった。

後がない。刻々と状況は不利になる。

駆逐艦はいよいよ距離を詰めてくる。有効射程に入れば遊びは終わりだ。

その時、駆逐艦は確実に旅客艇を仕留め、ついでに無力な脱出艇が出ていないか捜索して潰し、きっちり終わりになるはずだ。

ところが駆逐艦は砲撃有効射程までほんのわずかというところで異変を察知した。

駆逐艦側の艦橋で会話が交わされる。

「攻撃目標に異常！ 探知では……二隻に別れました！ 別方向に微速で離れて行きま  
す」

「……何だそれは。二隻になったとは、大型の脱出艇でも出したのか？」

「いえ、それが探知では同じくらいの大ささかと」

「これはちよつと不可解だ。どう解釈すべきものだろう。」

「艦型はどうなっている？」

「妨害が掛けられていて不鮮明ですが、大まかにはどちらも不定形のようにです」

「何?! 艇を二つに切ったとでもいうのか」

大きさが同じで形が不定形? どういうことか。風船のようなものか? あるいは

金属蒸気に投影? いいや無理だ。軍用艦でもない旅客艇にそんな本格的な用意など

ありはしない。

これはしばし考えざるを得ない。

「分かった！ それはおそらく外壁材だ！ 奴らは苦し紛れに外壁材を外して、別に組み立てたのだ。罫を作るために。分かってみればつまらん。小癩なことを」

それは事実だった。

エカテリーナは乗員を総動員して旅客艇の外壁材を外させた。

軌道エレベータを持つフェザーンの艇は宇宙航行専用のもので大部分である。

しかし、この旅客艇は珍しく大気圏降下も考慮されていたもので、その空力という力に対抗するため外壁はそこその厚みを持っていた。

その厚い外壁を何枚も剥がし、それを使って艇と同じような形になるよう急ぎ組み立てた！ 外壁は補修を考えられた作りで、ユニット化されているため剥がすのは容易だ。

この外壁材だけのダミー、それを罫に使い駆逐艦が引っ掛かってくれれば逃げ切れる。

それがエカテリーナの作戦だ。

さあ、駆逐艦の側としては困ったことになった。その策を看破したのはいいのだが、だとしても二つの中でどちらを追えばいいのか判断に迷うからだ。二つとも撃破する

のは時間的にかなり厳しい。

果たして追うべきなのはどちらなのか。本当の旅客艇はどちらだ。欺瞞の外壁材を見分ける方法は。

駆逐艦は迷いながらもできるだけ精査にかかり、見分ける手掛かりを得ようとする。するとこの二つは似ている形に仕上げられているが、比べると不定形の度合いに違いがあるのが分かった。探知妨害によりはつきりしないが、右舷側にいる方がよけいに不定形になっている。

時間がなくてきれいに組み立てられなかったせいで、こちらが外壁材だろうか。

いや、かえってそれが欺瞞の工作なのかもしれない。

すると突然、右舷側にいたものの方が動いてきた。

大きくカーブしながら加速をかけている。それに対し左舷のものは微速のまま直進だ。

「……よし、考え過ぎだった。右側の加速をかけている方が旅客艇だ。外壁材をわざと乱雑に外し、不定形にして欺瞞にかけようとしたのだ。だが、距離が近くなれば恐怖に耐え切れずエンジンを使ってしまったらしい。浅はかだな。では直ぐに追って撃破す

るぞー！」

駆逐艦は右舷側を追い、全速でトレースしていく。

たちまち射程距離内に捉えて砲撃する。今度は間違いなく全弾命中だ！

しかし、爆散しない！

続けて砲撃をかけても小爆発しか起こさない。

その理由はもう一つしかない。

「しまった！ 引つ掛けられた！ こつちが外壁材でできたダミーだ。どうやってこんなに動いたのかは分かんが…… とにかく全速で左側のを追え！」

「ちようどその時、駆逐艦の動きを見透かしたかのように左側のものが急加速を駆け始めた。」

「くそ、逃がすものか。なんとか追い付いてやる」

その時駆逐艦にとってまたもや思いがけないことが起こる。

「何かが、至近から接近してきます！ ちようど進路方向に当たり、避けられません！」

「何！ 機雷のようなものか？ そんなものがあるはずはないが、念のため動力を全てシールドに回し、最強度で展開！」

不思議としか言いようがない。旅客艇には何の武装もなく、機雷も爆雷もあるはずがない。

しかし現実には何か駆逐艦に衝突してきた。

シールドがそれを弾き、駆逐艦内に鈍い音が響く。

「いったい何だったんだ……」

「脱出艇のようです。あ、また接近してくるものがあります！」

またしてもシールドが弾く

駆逐艦に被害はないが、もはや追い付くのは不可能になった。シールドに全エネルギーを使ってしまえば、再び推進に切り換えてもすぐには加速せず、もう目的の旅客艇を捉えられない。

「してやられたか…… 作戦は中止だ。あの旅客艇には大物がいるぞ」

その頃旅客艇では全員が胸を撫で下ろしていた。

助かった！

なんとか欺瞞を成功させることによって駆逐艦の攻撃から逃げ切り、もうじきワープインできる。

あととは決まっている。

予定コースを変えて、確実にフェザーン警備艦隊がいるところにワープアウトすればいい。

それはあの駆逐艦も予想するだろうからもう追ってくることはない。

策は見事にはまったのだ！

エカテリーナの読みは寸分の狂いもない。

ルパートも素直に賞賛する。

初めに旅客艇の外壁を外させ、欺瞞工作のためもう一隻の形を急遽作らせた。おまけにわざと雑に作って不定形にしてある。相手を迷わすためだ。

そして内部には脱出艇を一つ仕込んでいた。

もちろん、途中で欺瞞の加速をかけるためである。使い捨てだ。

落ち着いて考えたら脱出艇の小さなエンジンでかける加速などそんなに大きいものではない。

しかし駆逐艦は見事に引っ掛かった。迷っているところにそれらしいヒントを与えられたのだ。加速したという事実だけにとらわれ、勝手なストーリーにあてはめてしまった。

仕上げは欺瞞に引っ掛けられたのを悟った駆逐艦が慌てて追ってくるだろうコース



に、無人の脱出艇が飛び込むようにセットしていた！

旅客艇には武装がなく、相手にぶつけられるものといえればそれしかないのだ。

もちろん駆逐艦の想定コースを読むのは簡単なはずがない。

しかし、エカテリーナは相手の身になって読み切った。

駆逐艦が外壁材の方と射程距離に入り、撃ち、欺瞞と悟り、次にこちらを追ってくる時間と位置を推定する。見事命中させるコースに突入させられた。

ただしそれは物事の一面でしかない。

エカテリーナの凄みは違うところにある。

旅客艇は持てる脱出艇のほとんどを、これらの工作のために使い切った！

これは宇宙においてはとてつもなく大胆なことで、実行にはすさまじい勇気が要る。

たとえ駆逐艦に追われている絶望的状况であっても最後の頼みの綱に脱出艇を残しておくものだ。とりあえずは死ぬのをわずかでも先に延ばせるから。人間の心理とはそういうものである。

この豪胆さ、戦術眼、エカテリーナはやはりラインハルトから学習したと言おうべきだろう。

エカテリーナの方では勇気を使い切り、安心して気が抜けた次には強い感情が沸き起くる。

「見てらっしゃい。こんなことをして、ただで済ますもんですか。私を怒らせたツケは大きいのよ」

首謀者を推理してあぶり出すのだ。

こんな実力行使をしたツケを払わせてやる。

「宇宙の戦いなんてもうごめんだわ。そんなことは軍人がすればいい。でも、それ以外なら負けないから！」

## 第八話 482年11月 誰がピエロ

エカテリーナとルパートがフェザンに着くとアドリアン・ルビンスキーが出迎えに  
来ていた。

ルビンスキーは普通ならそんなことをしない。フェザンはその二人にとってホー  
ムタウンなのだから。

しかしその駆逐艦の事件を聞いたので心配になったのだ。

フェザンの誇る軌道エレベーター、その旅客用下部ゲートが開くのももどかしくエ  
カテリーナとルパートを見つめる。

「おお、エカテリン、生きててよかった！」

それは泣かんばかりな姿だ。

ルビンスキーの謀略家としての姿しか知らない政治家や官僚が見たら到底信じられ  
ないだろう。

しかし、エカテリーナにはアドリアン・ルビンスキーのこのような一面の方こそ自然

に思える。いつでも子煩悩が抜けない優しい父親だ。

「まだ十六歳で死んでなるもんですか。お父様」

「よかった。生きてさえいれば。そしてルパート、お前も無事で何よりだ」

ルパート・ケツセルリンクはエカテリーナと違い、ルビンスキーの言葉で動揺せざるをえない。

この宇宙でも指折りのシニカルな策略家が本心から良かったと言うのだ。

自分が死ななかつたことが、アドリアン・ルビンスキーにとつて喜びに値することだとは。

いったいどういう反応を返せばいいのか。

「自治領主。まだ仕事はたまっていますから。引き継ぎもしないうちに消えるわけにはいきません」

そんな取つて付けた言葉を返しながら、離れていくしかない。

この事件は多くの意味で首謀者の心づもりとは逆の結果になった。

ルビンスキー家は結束し、確かに強くなる方向に進み始めたのだ。

「それでお父様、どんな情勢なんですか?」

エカテリーナはそういう言い方で単刀直入に聞いた。

今回の無茶苦茶な襲撃、最初から首謀者が判明するわけではない。

これほど大それたことをするなら尻尾を掴ませないようにしてあるだろう。

ただしそれでも丁寧に分析していけば手掛かりがあるかもしれない、そのためにはできるだけの情報を集めた方がいい。

初めに大まかな情勢を知るのが第一歩だ。

それに対してアドリアン・ルビンスキーが説明を始める。エカテリーナの質問の意図を完全に理解しながら。

「先ずは自治領主選定の件だ。先代自治領主は後継者を明確にしないうちに死んでしまった。そのために選定は金と実力の勝負になる」

「まあ実にフェザンらしいわね」

「本当にそうだな。そして自慢ではないが儂も十中八九は大丈夫なところに漕ぎつけたつもりだ。だがまだ確定ではなく、しつこく妨害を画策している者どもがいる。エカテリンの思う通り、事件の首謀者と思われる者も含めて」

なるほどこれは分かりやすい。利害関係が明瞭で。

物理的証拠はたぶん挙げられないが、確定できれば大きな前進だ。

「お父様はもう目星を付けているのね。最も怪しい人物は誰？」

「うむ、反対を画策しているのは一人二人ではないが、それらをまとめた黒幕はおそらくニコラス・ボルテックだろうな。表向きはこちらに媚びへつらっているが、奴こそ怪しい。権力欲が人一倍なくせに妙に追従ばかり言う。自分に実力も人気も無いのを知って屈折しているのだろう。それでも野心を捨てていないのが滑稽だ」

「屈折した人間の方が時として理屈に合わない無茶をするものですわね」

「今さら策を巡らせても遅い。言う通り、無茶をする」

もう一つ聞いておきたいことがある。

「そこまでお父様が分かっておいでで、なぜボルテックを早々と潰さないのです?」

「奴は官僚機構の中から上級補佐官まで出世してきた。家柄や財産の力を借りていない。その分、官僚機構には深く結びついている。そちらの方面からの支持も厚い。明確な不法や不正でもなければ簡単に追い落とすことはできない。それに儼としても自治領主になれば官僚機構の力はどうしても必要で、必要以上の波風はまずいのだ」

フェザーンの統治機構は自治領主とその補佐官たちが軸である。

これまでの慣習ではむしろ補佐官が主役だ。そこから各官僚機構へとつながっている。例えていえば銀河帝国における尚書のようなものである。

そんな補佐官は文字通り自治領主を補佐する者であり、数は多い。

上級補佐官という有力な者から、どうでもいい部署を任されているだけの者までいるが、ともあれその数とそれぞれの分野の専門的知識から補佐官たちの協力なしにフェザーンの統治は回らない。

ボルテックはその補佐官の最上位に近い地位にいるのだ。

官僚にとつては心理的にボルテックこそリーダーのようなものだ。それが厄介である。下手なことをすればルビンスキー家は官僚機構を敵に回してしまう。

フェザーン屈指の有力者ルビンスキーも正当な理由なく手出しはできない。自治領主になってしまい、そこから徐々に体制を変えればどうにかなるかもしれないが、今はそうではない。

つまりフェザーンでは家柄や実力があっても、あまり無理な横車はできないということだ。権力者が気まぐれに法を破ろうとしても有形無形の縛りがある。見方によつてはフェザーンは帝国と同盟の中間の政体ともいえ、形式的には帝国、慣習的には同盟のような政体と見なすことができる。

少し離れたところから会話を聞いていたルパートがここで異を唱える。

「いくら焦っていたとしても実力行使の襲撃とは考えにくいのでは。襲撃が成功していれば、それは打撃にはなるだろうが、あまりにリスクが大きすぎる。復讐心を煽るだけになる可能性すらあるのに。それでも実行する必然性はどこに」

全くその通りだ。今回の事は実行するには無茶すぎる。

「これは、何かもつと複雑なことがあるのでは」

「確かにそう、ルパート兄さん。それに駆逐艦を手配なんて大それたことはいくら隠蔽しても無理があるはずだし」

小綺麗なオフィスに白い清潔な照明が映える。しかし、汚い罵り声が全てを台無しにして響き渡る。

「いったい、お前は何てことをしてくれたのだ！ 一つの可能性を言っただけなのに、勝手に事を進めるとは独断にも程があるぞ!!」

ニコラス・ボルテックは体格は小さい方なのに声は響く。

今は感情のままに声を上げ、しかも激しくデスクに両手をつく動きをした。最初から乱雑な黒髪がいつそう振り乱される。

「申しわけありません。補佐官。てつきりルビンスキーの子供らを消すのが名案とお考えのように伺えましたもので」

フェザーン外交部上級補佐官ニコラス・ボルテックは今執務室で第一秘書に対峙している。



これほど感情を叩きつけられているにも関わらず、第一秘書はのつぺりとした顔に何の表情も浮かばせていない。そのコントラストが異様なほどだ。

「……とにかく隠蔽はしつかりしろ!! グラスノフ。完璧にだ! ルビンスキーは鼻が利くぞ。お前が発案から実行まで全てやったということにしても、俺の秘書である限り、言い逃れはできんのだから」

「隠蔽はお任せ下さい。ちょうど今頃全て終わっているでしょう」

その通り、フェザーン領の片隅で誰にも知られることのない事件があった。

一隻の帝国軍駆逐艦がワープ事故のためその乗員ごと全て原子に還元されていた。不幸にも狂っていた航路データが入力されていたのか、隕石の多い宙域にワープアウトし、一瞬で爆発した。

「そう言うなら確かなのだろう。お前は能力だけは信じられる。だが言っておく。二度と勝手なこととはするな!」

「重ねて肝に銘じます」

その退出する第一秘書グラスノフを見ながらボルテックは思う。

気味の悪い奴だ。

しかし、有能なことも確かだ。これまでの働きは常に期待以上のことをしてみせ、能力を証明してきた。今回のことで肅清してもよかったが切るのも惜しい。

一方のグラズノフもまた思惑がある。

襲撃が成功すればよかった。

そうすればアドリアン・ルビンスキーに非常な打撃になり、フェザーンの将来に影響を及ぼす。しかも悪い方の影響を。

しかし失敗してもそれはそれでいい。

隠蔽さえしつかりしておけば、今度は襲撃したという事実がカードとして自分の物になるのだ。

それはボルテックを牽制したり、場合によつては脅したりする良い材料になる。どちらに転んでも使える。

「ニコラス・ボルテック、あんな小才子が分不相応な夢を見ているとは滑稽だ。自治領主の座に本当に届くとも思っているのか。もしもそんなことが実現したら、フェザーンはその程度の存在だったということだ。それが一番楽でいい」

エカテリーナたちへの襲撃についてももちろんアドリアン・ルビンスキーはできるかぎり入念な調査を命じている。

ところが何も判明してこない！

駆逐艦用備品や推進剤の線も、航路局データも、最近行方不明になっている船乗りの線まで調べても、何の手がかりも得られなかった。

「これは探るのは無理だな。よほどできる奴が隠蔽している」

事実は受け入れなければならぬ。こんな想定範囲内のことにいちいち驚くことはない。

ただし、証拠が出せないなら次はこちらから仕掛けてやる。逆襲だ。

「お父様、それではニコラス・ボルテックを逆に追い落とす策を考えましょう」

「そうだな。積極策で揺さぶりをかけるのもいいが……しかし簡単なことでもないいや、これまでも仕掛けたことがないわけでもない」

「それはどういふふうなものですの？」

「ボルテックを補佐官から外そうと試みてきた。それさえできれば奴の力は半減する。だが奴ほど上級補佐官になると理由なくおいそれと罷免することはできん。そこで先ずは奴への経済的支援者に裏から手を回して離反させた。その上で密かに賄賂の話を持ち掛けた。この罠に食いつけばスキャンダルにできて罷免できたのだが……しかし、奴は食いつかなかった」

「密かに調べたところによると、奴には有能な第一秘書がいて、その者におそらく罠を見破られたかと」

確かに有効そうな罫であったけれどうまくいかなかったようだ。

その第一秘書というのがブレインなのか。

「その通りだ。ルパート。次に色恋スキャンダルも、いくら探しても見つからない。ボルテックの奴はそもそもそういう志向は無いようだ。政治的な野心はあるがそういうところは手堅い官僚だ」

「お父様、妥協や、あるいは手を結ぶということとは？」

「もちろん味方に取り込めないかと思つたこともあつた。しかし、取引には応じてこない。高い地位を約束しても無駄だつた。奴の野心はもつと高いところにあるのだろう。それこそ自治領主そのものだろうな。それにここでも第一秘書とやらが見透かして妨害してくる」

三人はまた思考の海に沈む。

ニコラス・ボルテックを何とか叩き、排除する手はないのか。

「それなら方法は一つしかないわ」

「そりや何だい、エカテリン」

「兄さん、それはボルテックが自分から補佐官を離れることよ」

「そんな馬鹿な！ 発想としては面白いが自分から補佐官を辞めるわけがない！」

これはルパートにすれば荒唐無稽に見える。

アドリアン・ルビンスキーも同意見だが、しかしさすがにルパートと違いアドリアン・ルビンスキーは経験が深い。

エカテリーナの言葉に見えてくる物があつた。

「なるほど、強いことができなければ自分からするように仕向ける、か。ルパート、おそらくエカテリンの考えは魅力的なエサで釣ることなのだろう」

少女の微笑みは、ただのいたずらの仕掛けをする子供のものだ。

後に偉大な謀略家となる少女でも、今はそれを覆い隠すのに充分な子供の姿だった。

「その通りです、お父様。野心家ならば野心で釣ればいいのです。とびっきりのエサを用意してあげましょう」

## 第九話 482年11月 政策綱領

話し合った次の日のことである。

政府広報担当官たちに対してアドリアン・ルビンスキーは次の自治領主に就任すればフェザーンをどう運営するか、その政策綱領を打ち出した。

これは気軽な談話の中で出たという体裁を取ったものだが、もちろんお膳立てはルビンスキーの方だ。

驚くべきはその内容である。

それはフェザーン自治領内での帝国籍艦艇の航路制限、通貨レートの一元化と変動相場への移行、それに付随しての取引市場の設立、帝国と独立した政策金利、そして同盟との貿易禁止物資品目の大幅な緩和など多岐に渡っている。

更なるフェザーン発展の基礎になるものと言えば聞こえはいい。

しかしこれは危険な一面を持っている！

帝国からの離脱と自主独立を鮮明にしたものだからだ。

今までそれをしてこなかったのはフェザーンの帝国からの独立志向が一線を超えな  
いよう配慮していたからなのだが、それを踏み越えようとしている。

これはたちまちフェザーン内の民衆に大きな反響を呼び起こした。  
全体としては歓迎されたといつていい。

商人たちにとっては今まで以上にやりやすくなるのだ。

帝国の側が勝手に商売をするのを抑え、フェザーンがいつそう金融センターとして発  
展する。貿易も拡大し更に富を持ち込むだろう。これまで以上にきらびやかな未来が  
見える。

しかし、もちろん反対論者も出る。

帝国から距離を置くなどともない。そんなことをすればかえって帝国から本気  
で疎外されるかもしれない。もちろんそうなれば経済的に計り知れない打撃になる。

帝国には大人しく従えばいいのだ。目先の繁栄に浮かれて宿り木が宿主に逆らつて  
はならない。

更に悪いシナリオもある。

帝国当局の怒りを呼び、もしも、苦勞して築き上げた自治権を奪われることにでもな  
れば取り返しがつかない。帝国の持つ実力を使われたら話にならないのだ。

現状維持とそこそこの繁栄がフェザーンの限度であり、分を弁えた方がいい。

実際のところそういう反対論者の声は少数派にとどまる。

多数の民衆は経済的な効果を検証したり、冷静な議論をするよりも感情が先に立つてしまった。

独立というのは民衆の目にはそれほど魅力的なスローガンであり、感情に熱気をもたらずのものである。

そこに理屈も何もない。

そうした下地を作った上でルパートがボルテック側に工作を仕掛けた。

ボルテックの周りに限つての噂を流したのだ。それはいかにもこの情勢に合わせた自然なものである。

「フェザーンの独立志向に対して銀河帝国は我慢の限界に達している。政治的な独立志向をはらんだ改革など言語同断であり、フェザーンの思いつきを帝国はもはや看過しえない。遠からずして帝国自ら手を下し、フェザーンの政体を根本から作り変えることを決定した」

それはフェザーンの悪夢である帝国の実力行使についての噂だった。

ほどなくボルテックの耳にも入る。しかし、ボルテックは何も慌てる様子がない。

もちろん政敵ルピンスキーなどに注進に来ることもない。フェザーンにとってこれ



以上なく重大な内容であるにも関わらず。

「やはりボルテックの奴は動かないか」

「お父様、これで決定的になりましたわね。」

「予想が当たつても嬉しくないものだ。もちろん外れてもいつそう嬉しくないが」

「またもルビンスキー家は三人で密談をしている。」

「ルパート、本当に動きはないんだな？」

「ええ、そうです。普通ならそんな恐ろしい噂を聞けば注進に来るか、少なくとも危惧するところでしょうが。ボルテックがこちらに隔意があるのは明らか、いえそれ以上にフェザーン全体のことを考えていないのかと」

「残念なことだわ。善良だとは思っていないけれど、やっぱり」

「まあいい。ここはフェザーン、個人の正義感より能力と実績が問われる場所だ。さて次の仕掛けも頼むぞ、ルパート」

「それも任せて下さい。うまく乗せてやるだけの話ですから」

ボルテックはルパート・ケッセルリンクがふいに訪問してきたことに驚きもしなかった。

それは完全に予想していたことだ。

ボルテックにはボルテックの計算がある。

ルビンスキーは独立志向を鮮明に打ち出した。完全に勇み足だな。自分がまだ自治領主になってもいけないのに、大衆に迎合したとは。そして予想外に帝国上層部の反発に驚き、しつかり足元を固めておこうと慌てているのだろう。まあいい。どのみちこちらに損はなく、いったん出方を伺うとするか。

言葉にするとすれば、ボルテックの考えはそういうことになる。

ルパート・ケツセルリンクがボルテックの執務室に入り、対面すると上級補佐官に対する慇懃な挨拶をする。

ボルテックから促したところで本論に入った。

「ボルテック上級補佐官、先ごろからフェザーンで議論されている事項は充分ご存知であると拝察します。自治領主候補であるアドリアン・ルビンスキー氏が談話で発表した政策について様々な反響があるようです。そこでルビンスキー氏より、ボルテック上級補佐官に特別に調整したいことがあるとの旨、お預かりしましたので、本日伺わせてもらいました。」

「ほう、ケツセルリンク補佐官、用向きというのはそういう話なのか。特別の調整とはいつたい……ともあれ談話などで口を滑らせたとはルビンスキー氏らしくもない。」

その後始末に困るとは。まあ、フェザーンの独立志向などというものは帝国にしつかり根回ししなければ実現できるはずもなく、うかつな言葉で反発を招くのは必然の部類だ」

「全くお言葉通りです」

「それでは初めに伺っておくが、補佐官はフェザーン政府からの立場なのか、ルビンスキー氏個人の使いで来ているのか、はつきりさせてもらいたい」

最初にボルテックは軽い牽制をかけたつもりだ。

そんなことを知っても仕方がないし、どのみち本当のことなど聞けやしない。ルパトがルビンスキーの子だということは周知の事実である。

「それは要件とは関わりがないことと存じ上げます。あえてお答えすれば、どちらにせよフェザーンの利益のためというのは間違いないものです」

「そんなはぐらかした答えに満足するはずもないが、フェザーンの利益のためということであれば、私も大いに願うところだ」

フェザーンの利益、それはルビンスキーにとつては自治領主になることと同義語である。

逆にボルテックにとつてはそれを阻害することだがフェザーンの利益とも思ってい

る。

「ではボルテック上級補佐官、重大な問題なので今一度確認します。ルビンスキー氏の主義主張がフェザーンの独立志向と受け止められてしまいました」

「大変に大きな問題だな」

ボルテックは自分がそれに賛成か反対か言わないだけの慎重さはあった。

実のところボルテックでさえ内心は独立に賛成である。やはり、フェザーン人として帝国からの独立は魅力的なのだ。

「困ったことにフェザーンだけの問題ではなく、帝国に過剰な反応を引き起こしているようで、これをルビンスキー氏は憂慮しています」

「そのことは噂でよく耳にしている。フェザーンの独立志向に我慢ならず、帝国がフェザーン介入に前向きだと。実力行使も辞さない勢いだとか」

「補佐官、それはいったいどこから聞いた噂なのでしょう。大変興味を引かれます」

本当に何食わぬ顔でルパートが言う。

ボルテックもまさかそのルパートが噂を焚きつけた本人だとは思えない。

「いや、ケッセルリンク補佐官、それを詮索することもない。本当に風の噂というやつだ。はなから信憑性については取るに足りん」

「そう、普通であれば噂など放置するのが一番と存じます。ところが補佐官、この場合はほぼ真実だと分かりました。だからこそルビンスキー氏は憂慮しているのです」

「何と、それはゆゆしきことだな！ フェザンが今日あるのは、先人たちの苦勞あつて自治領として維持されているおかげだ。それが脅かされるとは、多少の富が手に入ったところでもとても割に合わん！」

ボルテックは大げさに驚いてみせた。

ルビンスキーの失態であるからにはそれもまた小気味いい。

「全くその通りです。帝国に介入され、築き上げてきた自治を失うわけにはいきません。そのために私 came ました」

「ほう、そのための話だったのか。話が回りくどいようだが、それを防ぐ何かうまい手があるとしても」

「では率直に申し上げます。それはボルテック上級補佐官、あなたにオーデインへ行つて頂きたいのです」

「な、何だと!!」

「フェザンの高等弁務官としてオーデインへ行き、帝国政府にフェザンの立場を説明し、帝国がフェザンに介入しないように抑えて頂きたい。これがルビンスキー氏の要請です」

これにはボルテックも驚く！

言葉通りに受け取っているわけではない。

この困った事態を逆に利用して自分をフェザンから遠ざけてしまおうとは、正にルビンスキーにとっては実に都合がいい話を持って来たものだ。

今、自分がオーデインへ行つてしまえば、官僚たちを糾合した妨害工作もままならぬ。

遠からずしてルビンスキーは自治領主になつてしまふだろう。

そしておまけに帝国によるフェザン介入も防げれば万々歳というものだ。

まるで敵に塩を送るような真似であり、そんなことはできるわけがない。

「それはとても即答できないことだな。私が弁務官として赴いても力及ばず、帝国の介入が現実にもなれば、かえつて申し訳ないというものだ」

「ボルテック上級補佐官が最も適任だとルビンスキー氏は考えておいでです。その力量を高く評価し、ボルテック上級補佐官にできなければ誰にもできない、とのこと。ちなみにもし引き受けてもらえたら帝国との交渉権を全権一任するとの話まで」

「ふん、ルビンスキー氏にそこまで高く評価してくれたのは光栄だ。話は一応聞いた、すぐに返事などできない、それだけをルビンスキー氏に伝えておいてもらいたい」

話し合いを終えて執務室を退出するルパートは予定通りの感触にほくそ笑む。

あと一押し、そこまで来ている。

帰り道、ルパートはエレベーターまでの廊下を歩いていると何人かとすれ違う。

行政ビルなのだから知った顔がないとも限らず、見過ごして失礼に当たらないためにもちらちらと視線を投げる。それは自然なことだ。

しかし、見えた者の一人に何か引つ掛かるものを感じてしまった。

その相手は無表情だった。

一瞬だけ視線が合っても何も表情が浮かんでいない。

それがかえって気を引いたのだ。

## 第十話 482年12月 陰に潜む者

ニコラス・ボルテックはルパートを通して伝えられたルビンスキーからの要請を即座に却下はしない。

いかにもルビンスキーに都合のいい話だが、ボルテックはボルテックで思うところがあ

る。そこを見極めて、ルパートは更に仕掛けを強化する。確実に耳に入るであろう噂をばらまく。

「帝国は実力を用いることも辞さない。叛徒との戦いが長引く中、もう一度帝国を引き締めるため、フェザーンの勝手など許さない。フェザーンが自主独立などという夢を見るなら、早めにその芽を叩き潰し、従来正しい秩序を重んじる者の手に任せると決めた」

そういった噂を流したのだ。

するとボルテックの強すぎる野心が一つの方向を向くことになってしまふ。いや、向



かわせられてしまう。

ボルテックはそのことを相談するため、最も有能な側近である第一秘書グラズノフを呼び出した。

「グラズノフ、帝国はフェザーンの動向に重大な関心があり、もはや介入も辞さないようだな」

「帝国としては当然でしょう。フェザーンの独立志向など許せるわけがありません。帝国はフェザーンがあくまで帝国の一部と思っているはず」

「だから危険だ。愚かなことに民衆が帝国の危険に感づくのはよっぽど後のことだ。その一方でルビンスキーは民衆の支持も上がっている。正直なところ、いくらルビンスキーを妨害したところで奴は自治領主になれるだけの人気を得てしまった」

「非常に残念ですが、その通りです。もはや避けられないでしょう」

「そこで俺は路線の変更を考えた」

「……ボルテック上級補佐官、それはまさか帝国の力を借りる、ということでしょうか」

「グラズノフ、よく分かったな。その通りだ。先ずはフェザーンの高等弁務官として

オーディンへ行く。ルビンスキーめに乗せられたふりをするので。そこで帝国に取り入り、帝国の支持を俺に取り付ける」

「なるほど……」

「その上でルビンスキーの危険性を帝国に訴える。といつてもこれは事実だがな。そして帝国に腰を上げさせ、その介入によってフェザーンの自治領主をすげ替える時に俺がその地位を手に入れる。それができる可能性は高い」

重大な相談である。ボルテックが自治領主になるために亡国スレスレの戦略を考えているのだから。

だがそこまで言つても第一秘書グラズノフは表情を変えない。能面のままだ。

ボルテックとしては少し意外に思ったが、まさかグラズノフがこれを聞く前にこれを予想していたのか……しかし逆に言えばこのグラズノフが有能だという証左だともいえる。

「上級補佐官、帝国政府を後ろ盾を付ける、良い考えだと思えます」

そしてあっさりと言つてグラズノフは肯定した。

ボルテックにとつてこれは意外だ。いつもならボルテックの考えに反対するか修正するか、とにかくすんなり納得することはほとんど無いのに。

「問題は二つあるでしょう」

「それは何だ、グラズノフ」

「先ず一つ、帝国の実力者にこちらが利用価値があると思わせる方法です。二つ目は帝国の実力者がいったい誰なのか、これから誰になるのか、慎重に見極めて売り込まなければなりません」

「全くその通りだ、グラズノフ。非の打ちどころのない答えだ。オーデインへ行けばお前にもっと活躍してもらわねばならんだろう」

「この身の限りお手伝いさせていただきます」

「よし、それではあのルビンスキーの使い走り呼び出してくれ。喜ぶだろうな。ルビンスキーに自治領主の座は預けておいてやる。乗せられたフリをして」

それから間もなくボルテックはルパート・ケッセルリンクを呼び出し、弁務官としてオーデイン行きを了承したと告げた。

「ケッセルリンク補佐官、よく考えたのだが、微力ながら私もまたフェザーンのために力を尽くそうと決めた。ルビンスキー氏の推薦は大変光栄だ。オーデインに赴き、帝国がフェザーンに手出ししないよう精一杯の説得工作をすると約束する」

「それはボルテック上級補佐官、大いに感謝いたします。ルビンスキー氏も安心するで

しよう。重大な職務に最もふさわしい人選がなかったのですから」

「それで前に聞いていた全権委任のことだが、帝国の誰と交渉するか、折り合いをどうつけるか、自由裁量でいいのだな。それに情報調査の権限と充分な説得資金も。それを確認しておきたい」

引つ掛かったな。

ルパートは心の中で祝杯を上げる！

ボルテックは帝国を自分の後ろ盾にするためオーデインに行く気だ。考えるまでもなく意図が透けて見える。

「それはもちろん、自由裁量は保証するところです。それに日々の報告も不要でしょう」  
最後の一押しだ。

どうせボルテックはオーデインに行けば好き勝手するに決まっている。報告書など最初から当てになるものか。

「ならばフェザーンのために働いてくる。ルビンスキー氏には安心せられたし、と伝えておいてほしい」

ボルテックは隠しきれない皮肉の言葉を言ったが、ルパートはそれを見透かしている。

会談を終え、深く一礼してルパートは執務室を出ていく。

そのドアを閉めて数歩も歩いたところで、逆に執務室に入ろうと近付いていた男とすれ違う。

陰気で表情の乏しい男だ。

しかし、意外なことにその男から話しかけてきた。

「策に乗せたものですか。ボルテック上級補佐官を」

「……いったい何の話でしょう。よく分からないのですが」

ルパートは一瞬で緊張した！

相手が何を言ってるのかは明らか、確認するまでもない。

今回、ばらまいた噂といかにも都合の良い話でボルテックを踊らせた。それを見抜かれている。

「でははつきり申し上げる。弁務官としてオーデインへ自分から行くよう仕向けた、そのことを言ったつもりですが」

「本当に意味が分かりません。ボルテック上級補佐官にオーデイン行きを要請したのは確かですが、それはあくまでフェザーンのため。どなたか存じませんが何か妙な誤解をしておいでは？」

「フェザーンのためとは、いかにも意味深長ですな」

この時にはルパートはこの男の名を頭に浮かべている。

ボルテックの第一秘書グラスノフだ。

ボルテック側のことは調べた。そして、前回執務室を訪問した時にも見たこの無表情の者がグラスノフということも知っている。今の言葉はただの確認だ。

「ボルテック上級補佐官の第一秘書グラスノフです。それで、妙な誤解と言われましたか。もしそうならこちらが勘ぐり過ぎたこと、お詫び申し上げなければなりません。そしてこちらは一安心というものです」

「分かっていただければ充分です」

もちろんグラスノフはルパートの言葉で納得した感じではなく、とうていそんな口調ではない。この件についてももう議論する気はないというつもりなのだろう。

ルパートは会釈をするとその場を離れた。

そのことも含めてルパートはアドリアン・ルビンスキーとエカテリーナに報告した。

「……それは見抜かれているな。ルパート」

「まずいことでしょう。ボルテック本人が策に乗っても、その第一秘書に見抜かれてし

まったとは、この先どう転ぶでしょうか」

「いや、ルパート、そのことなら安心していい」

「安心とは？ あの男の言うことをボルテックが聞けば、これまでの策が無駄になるのでは」

「いいや、様子から察するとその第一秘書はボルテックに何も言わないだろう。本当に策の邪魔をするつもりならここまで至るはずがない」

「私もお父様と同じ考えです。兄さん、今回の策は見抜けば妨害するのは簡単だったはずです」

「そうならエカテリン、どうして見抜いていてもその第一秘書は妨害しないのか。むしろその方が不気味じゃないか。意図が分からない」

「私も分かりません。その第一秘書が何を考えているのか。しかしそれ以上に不思議なのは、どうして兄さんに話しかけて、わざわざ牽制のようなまねをするのか」

「全くその通りだ。不思議なことは多いね。確実に言えることがあるとすれば、そのグラズノフはボルテックの忠実な部下ではない、ということかな」

ルビンスキー家の三人がそんな話をしていると同じ時刻、そのグラズノフが動いて

いる。

フェザン政府ビルの一室に入り、しつかりドアを閉めた。

それは政府関係者専用の超光速通信のための小さな部屋である。

グラスノフは複雑な手順を経て通信機を起動させる。ここの通信機には特殊な暗号化を行う装置が備えられていて、この部屋からの通信に限り決して盗聴されることがない。

もしグラスノフが超光速通信を使ったという事実だけが残っても、外交部上級補佐官ボルテックの第一秘書が使用したことだ。誰に疑われることがあるだろう。

グラスノフは明るくなった画面の向こうに話しかける。

「おいプレツェリ、挨拶は抜きだ。至急の報告がある。バグダツシユ中佐に伝えといてくれ。ボルテックは策に嵌まってオーディンに高等弁務官として行く。これでフェザンの次期自治領主はアドリアン・ルピンスキーに確定だ！」

「それは大ニュースじゃないか！ 至急伝える。グラスノフ、それでお前はとうなるんだ。ボルテックとオーディンに行くのか？」

「もちろん俺も一緒に行くさ。こんな機会は滅多にないぞ。帝国の喉元で活動できるんだ。しかもフェザンの工作に見せかけられるという立場で」



「そいつは最高だな！」

まさかグラスノフの話す相手が自由惑星同盟情報部とは誰が知ろう！

それほどグラスノフの諜報活動は精緻を極め、疑われることなくボルテックの第一秘書にまでなっていたのだ。

「ただしグラスノフ、既にオーデインに入れてある職員には伝えないぞ。お前はフェザーン高等弁務官の第一秘書の立場を持って行くんだ。下手に接触する方が危険だ。その分、職員ネットワークのサポートは受けられないが了承してくれ」

「そいつは構わん。他の職員の情報まで知らなくていい。かえって心配ごとが増える」

その自信はいつものことだ。同盟の敏腕スパイであるグラスノフは帝国中枢部へ赴くことに恐れはない。

「お前は一人でもやれるさ。グラスノフ。しかし羨ましい。こっちはしばらくハイネセンだ。まったく、同盟の諜報員のくせにハイネセンにいるなんて冗談にもならんぞ」

「いいさプレツェリ。ハイネセンにいるにも意味がある。お前がフェザーンの弁務官としてハイネセンにいてくれれば、こうして通信するのも安心だ」

一方のプレツェリはもちろん同盟の職員だが、先にフェザーン内で地位を得て、そ

してハイネセンに帰ってきている。むろんフェザン経由の情報を誰にも疑われず受け取り、同盟情報部に渡すためである。

「ま、それだけの意味といえはそうだけだな」

「話を戻すが、今回ボルテックを嵌めたルビンスキーの策はかなりのものだった。予想外に上手い策を使ってきた。こりやあ自治領主として先代以上の大物になるかもしれない。ボルテックのためでもあったが、ルビンスキーを潰そうとしたのは自分でも正解だったように思う。一応、最後に多少の牽制をかけたつもりだが」

「おいグラズノフ、危ないことはするなよ。お前は調子に乗り過ぎだ」

「俺は普段は無表情の第一秘書で通してるぞ。お調子者は奴一人で充分だ」

「奴って…… 誰のことだ。ああ、そうかお調子者のヘンスローのことか。いいじやないか。ああいう奴がいるとフェザンに同盟が馬鹿だと思ってもらえる。道化の使い道には上策だ」

「全くだな。それじゃ」

今言ったのは同盟側から正式に弁務官としてフェザンにいるヘンスローということだ。その者は同盟情報部とは関係なく、本人はどう思っているか知らないがグラズノフたちからすれば遊んでいるようなものだ。

重要な報告と軽口をとりあわせた通信を終えると、グラスノフは元の無表情に戻り、この部屋を出ていく。

これからはオーデインで仕事が続いているのだ。自由惑星同盟のために。

## 第二章 渦の中

### 第十一話 483年 1月 新しい国

翌月、アドリアン・ルビンスキーがついにフェザン第五代自治領主に就任した！  
しかし華やかな式典はない。

フェザン行政府の通達が各地へ行くだけで済ませる。  
ルビンスキーによる所信演説も映像配信だけであり、大勢を集めた舞台などない。いかにもフェザンらしい実質的で合理的なものだ。

もしも帝国の一般的な貴族領であればこうはいかず、代替わりに際しては華やかな式典と数多くのパーティーで莫大な経費を使ってしまうところだ。それが普通である。

その場合、一般民衆は貴族の代替わりを祝うどころか重税のためにかえって呪うのが常である。

フェザンのやり方はもちろんフェザン商人や民衆には歓迎されるものだ。

新しい自治領主の誕生はすぐさまフェザン市場への好反応となつて表れる。

強力なリーダーシップをとるであろう自治領主の出現を心から歓迎した。そこには大きな期待感がある。

このニュースはもちろん帝国や同盟にも流された。もちろんその動向は大きな経済的影響を持つからだ。

そして様々な反応をもたらず。

オーデインへ着任したばかりの高等弁務官ボルテックは苦虫を噛み潰した顔だが、特に何も言わない。嫌なことではあるが市場の好反応は予測の範囲内だ。その場にいた第一秘書もいつもの無表情を崩さなかった。

オーデインではもう一人、このニュースを重大な関心を持って聞いている者がいた。帝国の政治を一手に握る國務尚書、リヒテンラーデ侯その人である。

「新しい自治領主、さてどんな奴腹かの。帝国に仇なす者でなければよいのじゃが。儂が手を伸ばさねばならぬものか、確かめる必要があるわい」

自治領主就任、これでルビンスキー家の権限と実行力は格段に増大する。

こうなつては今まで抵抗してきた官僚サイドは自分の職域を守れるかどうか全てだ。警戒心を高めて変化を待ち受ける。たが核となるボルテックが去つた以上表立つ

て反抗のリーダーシップを取ろうとする者はいない。しかしルビンスキー家は特に報復はしなかった。

しかし始めから通告していた通り、自主独立路線を進めることを改めて示す。

意外なことにそれは性急なものではなく、どの政策もじっくりと議論を煮詰めてから決める日程にしてあり、穏やかなものだ。

そのため混乱は最小限に抑えられる。

「内政はこれでいい。フェザーンはどのみち繁栄に向けて転がり出した石だ。思わぬ障害さえなければいつそう？ 榮していくだろう。フェザーンの位置そのものが繁栄の基盤である限り」

「お父様、すると問題は外交でしよう」

「エカテリン、その通りだ。これをうまくやっていかねばな。帝国と同盟のどちらも刺戟せずに政治的独立を保ち続かねばならん。それがフェザーンの基本だ」

近頃、ルビンスキーは子供たち相手に語ることが多い。

特に才気を見せるこの娘相手に。

その才がどこまで伸びるのか、それを確かめたいという思いがある。

「でも低姿勢だけではいけませんわね」

「どういふことだい、エカテリン。地道に帝国の警戒心を解く努力を続けなくちゃ」

ここでルパートが素直に疑問を口にして会話に割って入る。

ルパートもひとかどの策士であり、外では様々な表情と口ぶりで相手を惑わし、その優れた話術は場を支配する力を持つ。

しかしこのルビンスキーの家の中では心の内を偽る必要はなく、素直でいられる。

ここにアドリアン・ルビンスキー一人ならばまた違ったのかもしれない、とルパート自身も考える。実際は妹エカテリーナの存在により緊張感はなく、虚勢を張る必要もない。

今も気取らずに率直に聞いただけだ。

「兄さん、フェザンを下手に攻撃したらかえって損になるときっちり意識させるのも大事なことよ。フェザンの繁栄で帝国も同盟も経済が回る。しかし、欲張ってフェザンを手に入れようとしたら、経済がたちまち滞って莫大な損をする、と。もつと言えば、占領して統治しようものならとうてい無理だと。フェザン人は今と違う統治になれば必ず反発し、すんなり従うはずはない。そう思わせなくては」

「手を出しても厄介極まる、そういうことだね。エカテリーン。そういう印象をあえて強く見せつけて」

「そうよ兄さん。庭に咲けば可憐で美しいけれど食べれば毒になるすずらんの花みたい  
に」

これらの会話を聞いてアドリアン・ルビンスキーはいたって満足げだ。

子供たちは成長し、政治的センスを身に付けつつある。

「そこで言うておく。フェザーンに手を出させない根本的な背景を心に留めておくことだ。それは帝国と同盟の力が均衡していることが必要になる。この二つがお互いを一番の敵と思っている限りフェザーンに手を出す余裕がない。無理に手を出してフェザーンさえも敵に回せばやっていけない状況であれば」

「帝国と同盟の均衡、それが絶対条件ですね」

まさにそれがフェザーンの基本方針になる。

ルビンスキーは子供たちにそれを改めて認識させる。

「しかしそれは自然に任せておいてはならない。微妙な均衡など簡単に崩れてしまう。フェザーンがそれを保たせるのだ。強い方を弱め、均衡を保つ。そのために策を打つ」

「そうだと思います。でもお父様、それにも二つ条件があるように思いますわ。一つは、フェザーンが何をしてても均衡を保つのが無理なほど傾いてしまうことがないこと。それともう一つ、帝国と同盟が宥和してしまう事態が起きて、フェザーンだけが孤立してもいけませんわ」

そしてルビンスキーは最後に最も重要なことを伝える。要となるものだ。



「エカテリン、そのためには正しい手を早く早く打たねばならん。誰よりも早く。フェザーンの何よりの武器はこの位置だ。経済もだが、何といてもどちらの情報も握ることができる位置だ。得た情報を加工し、適切なタイミングで適切な場所に流すことで帝国と同盟を踊らせてやればいい。もちろんその前に正確な情報をくまなく集めて分析することが絶対だ」

三人の会話はほぼそれで終わる。

しかしエカテリーナはもう一つのことも思った。

今の権力者の動きも大事だが、未来にとつて最も大事なのはこれから躍り出るだろう人間の實力や意志ではないか。

そう思ってしまったことについて、エカテリンは自分でも不思議だ。

何かが基になっている。

まだ歴史の舞台に立っていないくとも、必ず登場してくる實力を持った者たちがいる。心に浮かんだのは黄金色をした少年である。

狂気ともいえる激しさと苛烈な意志、そして抜群の軍事センスを持っている少年だ。

幼年学校を卒業し、帝国軍に入った後はどうしているだろう。そのことが頭から離れない。

アドリアン・ルビンスキーはエカテリーナの心を知つてか知らずか一言だけ言った。「宇宙の動きはいっそう加速しているように思える。未来へもつと目を向けねばな。今までの常識がこの先も通用するとは限らんのだから」

アドリアン・ルビンスキーは着々とフェザーンの実権を掌握し支配を盤石にしている。ルパートやエカテリーナもよく働いた。

「フェザーンの隠し財産がこれほどあるとはなあ。財務官僚をすげ替えて帳簿を洗い直しただけで出てくるとは。しかも関係改善調整金とか、一目みるだけでは何の意味か分からないようにわざと変えてるんだから始末に負えないよ」

「兄さん、そんなものだわ。嘘はつかない、だけど勝手に誤解するものを親切に教えてあげることはしない、そんなところね。姑息だけでしょうがないのかもしれないわ」

忙しさも一段落した頃、エカテリーナに朗報が届いた。

あのナイトハルト・ミュラーが中尉となり、そしてついにフェザーンへ駐在武官として赴任するというニュースが届いたのだ！

工作通りだが意外に早くなった。

待ち遠しかったその日、仕事を捨て置いてエカテリーナは軌道エレベーターに迎えにいく。

「ミュラー、ようこそフェザンへ。また会えて嬉しいわ」

「エカテリン、いやフェザン自治領主ルビンスキー家令嬢エカテリーナ様、御意を得ます」

もちろんミュラーはおどけて言っているのである。

二人の立場は変わったとはいえそこまで杓子定規なミュラーではない。

「銀河帝国フェザン駐在武官、ナイトハルト・ミュラー中尉、ただいま着任しました」  
「ご苦労。ではさっそく引き継ぎを行ない、任務につきたまえ。くれぐれも言うておくが粗相のないようにな」

二人はひとしきり笑う。

ミュラーもエカテリーナも中身が変わるはずはない。

「ミュラー、案内してあげるわ。フェザンに来たからには見るものも食べるものも多いわよ！」

エカテリーナは張り切って自分のホームタウンを案内するつもりだ。

それは自分の地元に来た友達を案内する少女のノリである。

一方のミュラーはフェザーンの観光案内なんかより、エカテリーナが相変わらずの接し方をしてくれることの方が嬉しい！

ミュラーはもともと都会の華やかさに興味を魅かれるような人間ではない。どちらかといえば貧乏性な小市民だ。

それよりもしもエカテリーナが自分に興味を失い、名前さえ忘れるようなことになっていたら……そして単なる帝国の下っ端を見るような目になっていたら……

心配だったのだ。

元から身分の差は隔絶している。

いや、自分は何を考えているのか。

令嬢の子供時代のおふざけが永遠に続くはずなどないではないか！

いつか令嬢は身分を自覚し、それなりの階級の者しか相手にしなくなるのだ。それはもうどうしようもなく確かなことである。今そうではないことで安心するのは滑稽としか言いようがない。

そう思おうとしても、やはり目の前の変わらぬ様子に安堵する自分がいる。

ミュラーは着任してもやるべき仕事はあまり多くない。

駐在武官というものは文官である弁務官の警護と、軍事上の専門知識を生かしての軍

事情報分析のアドバイザーが仕事である。

ところが、フェザンは今のところ安定しているので、嚴重な警備は必要ない。

そして、フェザンには商業輸送艇を海賊から守る警備艇はあつても、本格的な艦隊戦を行なえるような艦隊はない。

そこまでは必要ない。なぜなら海賊は貧弱な仮装巡洋艦を使って襲つてくるものであり、本格的な軍用艦を一隻くらい闇市場で手に入れることもないことはないが、それにしても数十隻並べて艦隊を成すことなどあり得ない。

海賊に対処するフェザンの警備艦艇はせいぜい一度に百隻も運用すれば御の字だ。むしろフェザンは軍事力を持たないから帝国を刺激しないでいられるのだし、その方針に合わせる。

つまり駐在武官が注意を払うべき軍事力そのものが最初から無い。

帝国にとって問題となる軍事力はフェザンではなく、自由惑星同盟を名乗る叛徒の軍である。しかしそれについてはもちろんイゼルローン回廊で情報収集すべきものだ。

それでもここフェザンに駐在武官が必要とされる理由がないわけではない。いるだけでフェザンに帝国の軍事力を身近に感じさせるためだ。

つまり単なる広告塔の役目である。軍服を着てパーティーに出るだけで帝国軍を意識させ、無言の牽制をするのに役に立つ。

若いミュラーは仕事がこんなに少なくないのかな、と思う。

更に言えば、自分で言うのもなんだがフェザンを威圧するような硬い軍人の雰囲気が無いのも分かっている。

これではあまり役に立っていないのではないか？

帝国のフェザーン駐在高等弁務官、すなわちミュラーの直接の上司はレムシャイド伯爵である。

伯爵にはミュラーが平民だからといって蔑む雰囲気はなく噂通り帝国貴族の中では開明的である。だからフェザーンで弁務官ができるのか、弁務官をしているからそうなったのか、ミュラーには分からない。

ともかく顔つきは穏やかであり、貴族にしては人当たりが柔らかい。

「ミュラー中尉、情報収集などの外交は文官がする。まあ、駐在武官職は艦隊勤務の合間の骨休めだと思ってもらっている。羽目を外したり、問題を起こさなければとりあえず良い。君は見た所トラブルを起こさない人物と思つたが、私のこの見立てを外さないでくれ」

「そう言つて頂いてありがとうございます。帝国のため、勤めを果たさせて頂きます」

「それと君はルビンスキー家の令嬢と親しいようだね。噂では令嬢がオーデインの女学

校にいた頃からの知り合いだとか？」

「その通りです。弁務官殿。なぜか親しくさせてもらっています」

「ではなおさら女関係のトラブルに気を付けてもらいたい。その令嬢にとって面白くないことになれば、フェザーンと帝国の外交に響くやもしれん」

「気を付けます。よもや帝国の外交に妨げになるようなことはいたしません」

妙な釘を刺されたものだ。

女関係のトラブル？

つまりエカテリンが嫉妬をするような事態がありえるのか？

ミユラーは自分に限ってそのどちらもあり得ないと考えた。

## 第十二話 483年 2月 義侠心は健在なり

レムシャイド伯爵が更に続ける。

「若い者の友誼はいいものだ。ただし、この場合は政治的に非常に興味を引くものだ。君も分かっているとは思うが、報告は怠らないように頼むよ」

要するにエカテリーナを通して帝国に有用な情報を引き出せと言っているのだ。

レムシャイド伯爵は穏やかなだけの人間ではない。

帝国の外交の第一線に立っている。そのことをレムシャイド伯爵は理解している。

更に言えば、仕事の範囲は帝国とフェザーンの間のことだけではなく、自由惑星同盟の情報もできれば手に入れなくてはいけない。

帝国と自由惑星同盟の間には過去も現在も条約など存在せず、話し合いもない。当然のことながら大使や外交官をお互いに置くことなど考えられない。

単なる別国家ではなく、もはや仇敵なのだ。

それで互いにとって情報を集める窓口は限られ、ここフェザーンは主要な場だ。



むろん同盟の方でもフェザーンに弁務官も駐在武官も置いてある。裏では丁々発止の情報戦が熾烈に展開されている。

別にレムシャイド伯の私心から出たことではないので、ミュラーはエカテリーナから有益な情報を探れと言われても不快ではない。

しかしエカテリーナはそこまで馬鹿ではなく、おそらく期待するような重要情報のリークはないだろうとも思ってしまう。

逆にエカテリーナから聞かれてしまった。

「ミュラー、幼年学校を卒業したあのラインハルトとキルヒアイスという少年たちは軍の中でうまくやってるかしら。なんだか幼年学校の調子で行ったら大変なように思えて」

あの過激さと一本気な性格では周りと調子を合わせることなどできないに違いない。周りとの軋轢は単なる喧嘩ならまだいい。

軍という生き死にと直接関わる場では重大な結果をもたらさないと限らない。

「うーん、あの二人か……あまり噂は聞かないから大丈夫じゃないかな。カプチェランカで手柄を立てて昇進したと聞いたことはあるなあ。でも上にはあまり良く思われていないらしいね」

「え、上に良く思われない？ それは逆でしょう？ 皇帝の寵姫の弟よ」

「いや、軍では実際そうらしい。でもそれ以上は分からないよ。一介の中尉に伝わってくることは少ないから」

確かにそうかもしれない、エカテリーナは思い直した。

上司にとっては腫れ物にさわるようなもの、厄介な存在かもしれない。

そして宮廷での策謀など複雑極まりなく、下手をしたらどこでどう火の粉が降りかかるか分からず、上司からすれば大変に疎ましく思われても不思議ではない。

エカテリーナはオーデインに行くことがあれば調べてみようと思った。

その機会は案外早く訪れた！

アドリアン・ルビンスキーはフェザン自治領主就任の各種手続きと挨拶のためオーデインへ行く必要があった。

皇帝の言葉を賜ることが形式的なことであっても必要は必要なのだ。

フェザンは法的に帝国の貴族私領に準じるものであり、血統によつて引き継いでものでなくとも他の貴族同様に任命を受けて初めて有効になる。

しかも帝国の國務尚書などに実際会つて細かな確認とその了承も得なければならぬ。

このオーデイン行きにエカテリーナも随行を願ひ出た。

アドリアン・ルビンスキーは先の襲撃のこともあつて難色を示したが、逆にフェザーンにルパートが残ることで納得した。そこでルパートに話しておいたのだ。

「ルパート、儂とエカテリンに何かあればフェザーンを頼む。そして常に冷静に対処するのだ。もう一度言うが、謀略に対抗するのは冷静さしかない」

「任せて下さい。しかし、無事に帰つてきますよう。」

ルパートはアドリアン・ルビンスキーの信頼を得て高揚する。事実上の代理権を与えられたのと同じである。

横で見ているエカテリーナもとても気分がよかつた。

家族は、こうでなくてはいけない。

そして一行は出立し、二百隻もの警備艇を引き連れながらオーデインへ向かつた。ここぞという時の経費は充分にかけるべきだ。

今度は襲撃もなく無事に移動を終える。

その後アドリアン・ルビンスキーと公務を次々とこなす。皇帝への謁見もあつたがそれは黒真珠の間にかしずき、一言二言も言葉をもらえばいいだけの話だ。全くの形式的な儀式に過ぎない。

重要なのは國務尚書リヒテンラーデ侯との話し合いだ。

それは簡単なことではなく互いに腹の探り合いから始まる。

さすがに銀河帝国を實質的に預かつているリヒテンラーデ侯は細かな所まで見逃さない。そして帝国の安寧を脅かす存在を排除するという断固とした意識を持っている。

当然ながらフェザーンのことを決して快く思っていない。自治領という特別な立場は帝国にとってイレギュラーな存在であり、はなから目障りなのである。経済的な利益という観点から現状を容認しているだけのことで、機会があれば帝国の直接支配に持ち込みたい。

話し合いは形式的な報告から始まり、実質的な取り決めの折衝に入る。

互いに主張しあい、妥協とのつばぜりあいになる。経済的な政策は多岐に渡るもののでいささかも気を抜けない。どの項目が将来重大な影響を及ぼすのかわからないからだ。

今回、アドリアン・ルビンスキーは特にフェザーン領の航行権の支配を明確化したいと思っていた。他は妥協してもいい。結果的に成功と言える範囲でまとめることができた。

数日に及ぶ折衝が終わった後、リヒテンラーデ侯がつぶやく。

「フェザーンめ。今度の自治領主は以前より数段切れ者じゃな。これは、将来帝国の脅威になるやもしれん」

リヒテンラーデ侯は帝国を守るためならどんなことでもする。忠臣中の忠臣たるゆえんだ。

その間、エカテリーナは久しぶりのオーデインを楽しんでいた。懐かしいというほど長く離れていたわけではないが、それでも変化はいいものだ。

そして思いがけずラインハルトとキルヒアイスもまたオーデインに知っていることを知った！

あの二人もまた所用のためにオーデインに帰っていたのだ。

エカテリーナがそのことを聞いたのは、ヴェストパーレ男爵夫人からだった。エカテリーナがオーデインで訪ねるべき人物は多くはない。その一人である男爵夫人が言ったのだ。

「貴族の争いなんて本当につまらないものよ。どんな争いでも。負けたらもつとつまらないけれど」

「どうしたんですか、男爵夫人。何か争い事でも？」

何にでも興味を持ち、首を突っ込みたがるのはエカテリーナの習性だ。

「最近困ったことがあってね。いえ、自分のことではないのよ。シャフハウゼン子爵夫

人がいきなり決闘を申し込まれて困っているそうなのよ。子爵夫人が決闘なんてできるわけがないのに。人一倍繊細な夫人なんですもの」

それはとある子爵夫人の話であり、ヴェストパーレ男爵夫人ととても親しい間柄だということが分かった。貴族というものは複雑な血縁関係があるものだ。

しかし話としてはあまりに物騒ではないか。

決闘とは貴族らしいといえそうだが、古風なことだ。

そこに至る経緯はともかく普通の貴族の夫人であれば決闘などできるわけがない。

お転婆なエカテリーナだつてできない。ふと思ったが決闘ができる貴族夫人なんて、

あのヒルダくらいなものだろう。

「しかし男爵夫人、普通なら決闘は代理人を使うものだと聞いています。その子爵夫人が自分で決闘をするわけではないでしょうに」

「それが違うのよ。決闘をふっかけた側のヘルクスハイマー伯爵が裏で手を回して決闘代理人を立てられないようにしているという話で」

「えっ、それは……」

「でも何もしないで負けを認めるのも悔しいことですよ。それで、わたくしが別なお友達とその話をしていたら、そのお友達の弟さんが義侠心からかれて代理人に名乗り出て

きてくれたのよ！」

「まあ、そんな親切な人がいたんですか、貴族に。よっぽど強い人なんですか？」

「良いことなのかどうか…… それで困っているのよ。その弟さんというのは気持ちは強いかもしれないけど、去年幼年学校を出たばかりで。一応軍にいますとしてもまだ子供よ。わたくしも調子に乗って代理人証書の証人になってあげただけど、少し後悔しているわ。もし何かあったら」

ちよつと待つて。

去年幼年学校卒業？ 義侠心が強い？ それはまさか。

「男爵夫人、ちよつとお尋ねしますがそのお友達というのは誰です？ それで弟さんというのもしかして金髪なの？」

「あら、その通りよ！ わたくしのお友達というのはグリューネワルト伯爵夫人で、その弟さんは見事な金髪のラインハルトさんというの」

あ！ やつぱりだ！

ラインハルトだった。

その義侠心は今でも健在のようだ。有力貴族の無法無体を見逃すことはできなかつたのだらう。それで無茶な申し出を。

しかし男爵夫人の心配は当然である。

今度は単なる喧嘩ではなく決闘だ。そして相手方のヘルクスハイマー伯は必ず勝つつもりで相当な決闘代理人を立ててくるに違いない。これはとても危ない。

「私もその弟さんを知ってますわ！ 確かに気持ちは強い方ですけど…… ヴェストパーレ男爵夫人、その決闘の日取りと内容を教えて下さいな」

ラインハルトを守るため、何か手を打たねばならない！

残った日は多くない。エカテリーナはフェザーンの力を遠慮なく使う。

先ずは相手方が雇った決闘代理人を突き止め、その人物がかなりの腕前なのを知る。

これはかなり厳しい。

決闘は旧い時代の火薬式銃を使ったものになるらしい。何とかラインハルトに怪我をさせないように最小限の腕前を身に付けさせなくては。

名案は浮かばない。その火薬式銃に詳しい人間を見つけてコツをラインハルトへ伝授してもらおう、それくらいしか方策がない。

しかもそんなレクチャーを頼むのはヘルクスハイマー伯爵の手の届かない者でなければいけない。決闘代理人として知られた者ではだめだ。貴族もだめだろう。察知されれば妨害されるに違いない。



エカテリーナは帝国軍のうちで当てはまる人物を全速で検索させた。ようやく、一人のめばしい人物が浮かび上がる。

名はコルネリアス・ルッツ、帝国軍の現役の少佐だ。

幾度も射撃競技会で入賞している。そして本人の趣味がそもそも銃器類という筋金入りのマニアらしい。直ちにエカテリーナはコネを使ってその人物に会う。ルッツがたまたまオーデインにいたのは本当に幸運なことだった。

「ルッツ少佐、少しお願い事がございまして。ある人物に火薬式銃の基本を教えてくださいたいんですの」

エカテリーナは気が急いで単刀直入に依頼した。もちろん謝礼についても相当の額を払うつもりだ。

しかし、意外なことにたちまち断られた。謝礼の話をする前から。

「せっかくのお話ですが、お断りさせて頂きます」

「え、それはいったいどうして！ 失礼ですが理由をお聞かせ願えますか？」

「火薬式銃の使い方というと、思うに貴族の決闘に関係したものでしょう。違いますか？ 普通の戦いに使うようなものではありませんから。そんな貴族の争いに関わる気はありません。まして一方に加担することには」

ルッツ少佐の言うことは正論である。エカテリーナはそういう正論を言うルッツが

真つ当な人間だと思ふ。しかし何とか頼まなくては話が進まない。

「おっしゃることはよく分かります。事実だと認めましょう。しかし弁解させて下さいませんか。こうなつた原因は、とある有力貴族が弱小貴族に言いがかりをつけて決闘にもちこんだからなのです。そして更に、義侠心かられた者が経験もないのにその弱小貴族の側の決闘代理人になつたのです。これが公平だと言えるでしょうか？」

最初からほとんど全ての内幕をばらした。

下手な術策を弄するよりも、この実直なルツツという人物にはこちらの事情を正直に話し、その誠実さに賭けるしかない。

## 第十三話 483年 2月 帝国の手

「これを聞いてしまえばルッツは驚く他ない。

「それは本当のことですか？ 全く経験もないのに決闘の代理人になるとはにわか信じがたいことです。 命の危険があるのですよ？ 火薬式銃というものは、素人が簡単に使えるものではなく、ブラスターとは違います。 その話が本当なら無謀としか言いようがない」

「本当のことですから仕方ありません。 だからお願いしているのです。 教えてあげるのはほんの基本から結構です」

ルッツ少佐は納得してくれたようだ。 いや、納得というよりも、経験なしで決闘の代理人になるという尋常ではない無鉄砲さに圧倒されたのだ。

よく聞くと義侠心から買って出たというこれまた凄い動機だった。

「話は分かりましたが、どうしてここにその本人がいないのです？」

「これにはエカテリーナも困った。 痛いところを突かれてしまった。

「その本人はまだ幼年学校を卒業したばかりの若さで、何と言いましようか自分に対す

る万能感を過剰に持っているのです。決闘も気力で何とかなると思っているのですよ。更なるお願いですが、私がお膳立てしたことは本人には決して言わないで欲しいのです。たまたま、偶然教えることになってしまったという流れにして頂いて」

これはさすがにルッツには理解し難い。本人から頼むのが筋というものだ。けれど結局は引き受けた。

それは頼んでいるエカテリーナも充分に幼いのにそんな分析をしているのが不思議に思われたからだ。エカテリーナだって決闘代理人になる者と同じくらいの年のはずなのに。

エカテリーナの頼んだ通り、ルッツは下手な演技までやってくれた。ラインハルトたちが練習しているところへ偶然に出会い、火薬式銃の使い方を教えることに流れにもっていったようだ。

物陰からエカテリーナがその様子を見る。

ラインハルトは覚えたての火薬式銃に夢中になっていた。

よく考えたらたまたま火薬式銃に詳しい人間が通りがかるのはおかしいのだが。

そんな偶然があるものか。

ラインハルトはそこまで気が回っていないが、一緒にいるキルヒアイスは不思議そう

だった。

しかしこれで結果的には様になりそうだった。

久しぶりに見るラインハルトとキルヒアイスはなんだか少し遅しくなり、特にキルヒアイスはまた背が伸びたのではないだろうか。

時間が過ぎ、夕陽に近くなった。

金髪も赤毛も逆光の中ではいつそう美しい。

ルッツはルッツでこの金髪の少年が想像以上に利発で飲み込みが早いことを知る。アドバイスを着実に自分のものにしていくのだ。

基本は教えた。決闘の相手が手練れであっても、とりあえず最小限の怪我で済ます方法くらいは伝授できたらう。

「最後に見本を見せておく」

ルッツは銃を四度続けざまに撃ったがどれもが的中心を射抜いた。

少年たちが感嘆する中、ルッツは更に練習するように言い残し少年たちを後にする。

後はルッツと依頼主のエカテリーナとの話だ。

「ありがとうございます。私も見ていましたが的確なアドバイスだったように思います」

「いや、本当に基本を言っただけです。あの少年がきちんと意味を理解し、ためらわず実践しただけのこと。たいしたことをしたわけではありません」

ルッツの謙遜と、ラインハルトが褒められたことの両方が嬉しい。

「いろいろな意味で先行きの楽しみな二人なんですよ。ここで死なせるわけにいきません」

「私も彼らの先が楽しみになってきました。軍にいればまた会うこともあるでしょう」  
ルッツに予見できるはずはなかった。

あの少年二人が自分の運命どころか宇宙の運命さえ変えてしまうとは。

決闘の当日、エカテリーナはその場に行っていない。心配だが自分が行ってどうなるものでもない。

シヤフハウゼン子爵夫人は当事者として、ヴェストパーレ男爵夫人は決闘代理人の証人として行かざるを得ない。正直誰もそんな血生臭い決闘を見たくはないのだが。

決闘の様相がどうだったか、エカテリーナは男爵夫人から聞くことにしようと思っ  
いた。

しかしそれを別の人物の口から聞くことになる。

「どちらも第一撃は外したんです。第二撃は相手の決闘代理人の肩に、こちらも腕に当てられました」

「腕に当たった！ ヒルダ、ではラインハルト様は腕に怪我をして！ だけど死んだわけではないのね」

その者とはヒルデガルト・フォン・マリィンドルフ、むろんエカテリーナの友人だ。

ヴェストパーレ男爵夫人が女学校の生徒であるヒルダを伴っていた。そうなつたいきさつまで聞いていないが、おそらく決闘の話を目にしたヒルダの方から付いていきたがったのだろう。

「でもそれが問題なんです！ 自分をかばっていた腕を撃たれた、つまりかばってなければ心臓の辺りに命中して死んでいたかもしれません。決闘ではルール上やっつてはいけないことです。名の知れた決闘代理人であればするはずありません。銃の後ですぐ剣を持ち出したりするのも変でした」

まあその詮索も大事だが、ラインハルトが死んだりしていなければいい。とりあえずエカテリーナは安堵した。

結局のところ決闘そのものが皇帝の仲裁によって無理やり終わったこと、おそらく姉アンネローゼの働きかけがあつたことなどをヒルダは続けて話しているが、エカテリーナはうわの空で聞いている。

決闘の勝ち負け自体に興味はない。まして事の原因となったシャフハウゼン子爵夫人の持つ鉞山利権などどうでもいい。

一方、ヒルダの方は決闘を直に見れて興奮している。

そして自分と一歳しか違わない少年が行なったことに驚いている。豪華な金髪を持ち、決して気持ちの上で負けなかった少年、その印象が強く焼き付いた。

ヒルダの話の聞き終わり、エカテリーナはやつと考えた。

「しかし殺すつもりを決闘をしかけたとはおかしなことだわ。いえ、それが本当の狙いだったとしたら。何か裏があるのかもしれない」

考えているだけでは意味がない。自分の持つ力で調査を厳命した。

しかしそれはちつとも進まなかった！ 通常の調査では強固な壁に阻まれて無理である。

フェザーンの力を使うといつても警察ではないのだ。

金の力で買収して吐かせるには限界があり、そしてもう一つ時期が悪い。自治領主が代替わりしたばかりでまだ充分に情報網を構築できていない。

エカテリーナもまさかラインハルトの姉アンネローゼに対するベーネミュンデ侯爵夫人の嫉妬が原因だとは思いつかなかつた。本人は真面目かもしれないが、そんな下ら



ない嫉妬の矛先が向いたただけだったのだ。

しかし銀河の策謀は攻めもあれば守りもある。

実に真理である。フェザーンの側ばかり策謀を巡らすわけではない。密かにフェザーンに対し計画が発動していた。ついに銀河でも最大級の陰謀家が牙を剥いたのだ。

銀河帝国國務尚書リヒテンラーデ侯は秘蔵の姪っ子呼び出した。

正確に言えば、リヒテンラーデ侯の姉の子の、更にその子だ。25歳になる。

妙齢ともいえる年の貴族令嬢なのだが……見かけも中身も特異な者である。

髪を乱雑に放置しているだけで驚きだ。貴族令嬢ならたつぶり一日一時間は髪を整えるために費やしてもおかしくないのに。

見た目に気を使わないことは一目で分かる。

しかし、その中身もまた貴族らしからぬ伶俐な切れ者だった。

まさにその才によってリヒテンラーデも惚れ込んでいる。

もう一つの特徴がある。彼女はリヒテンラーデ一族に連なる名門の生まれでありながら、見た目の噂どころかほとんど知られてもいない。なぜなら本人は社交界に全く興味がなく、出たこともないからだ。

それが何よりリヒテンラーデ侯に好都合なことだ！

隠匿すべき仕事を任せるには。

「エルフリーデよ。一つ仕事を頼みたいのじゃが。フェザーンの新しい自治領主は警戒すべき人物と見た。これを探る作業員を早急に見繕い入れようと思う。できれば隙をみて陥れられたらなおよい」

「ふうん、大おじさま、それで私にフェザーンへ行つてやつてこいとう？」

「いや、懐に入つて動くのはふさわしい作業員を選ばばよい。それを適切に操作して指示を出せばいいじやろう。使えそうな人物については社会秩序維持局のラングめに候補を出させてある。頼むぞエルフリーデ」

その恐るべき女エルフリーデ・フォン・コールラウシュは了承し、さつそく動き出す。手始めに尖兵となつて働かせるべき作業員候補に会つた。

それは妖艶な女性であり、何と行政内務省地下の拘置室に閉じ込められていたではないか！

「ふふん、牢にいと珍しい幻影が見えるねえ。貴族夫人が面会に来る、みたいな」

エルフリーデがそこに赴くと、候補となる女はいきなり皮肉めいた言葉を投げつけてよこす。

見たところ顔は整っていて美しく、赤みがあった長い髪も綺麗だ。

しかし斜に構えた性格が滲み出ている。牢獄の生活で根性が歪んでしまったのだろうか。

ここまでエルフリーデと一緒に来た人物が女に声をかける。

「言葉に気を付けた方がよいぞ。ドミニク・サン・ピエール、牢から出られるチャンスがあるというのだから」

「ふん、秩序維持局の親玉が自ら来るとは、よっぽど大事な用があるんだろ。それくらい分かる頭は持つてるつもりだよ」

社会秩序維持局ラング局長は仕方がないといった顔でエルフリーデの方を向いた。

このドミニクという女を紹介した以上説明の義務がある。

「お嬢様、紹介して言うのもなんですが、この者はどうも躰がなっていないようで。まあ見た通り工員ができるくらい気の強さは保証致しますが」

「この女はどうして社会秩序維持局の牢に？」

「恋人が共和主義者どものリーダーなので。見せしめのためにも捕まえたこの女を牢から出すわけにはいかんですな。無言の圧力になる」

「なるほど。この女に罪がなくとも……」

「それはこの場合関係ありませんですなあ。むしろ共和主義という社会よりも個人を大

事にするとかいう発想のグループが、この女を犠牲にしていることが滑稽という他ありませんまい」

自分のことを棚に上げてラング局長が共和主義者を揶揄している。

しかしエルフリーデは納得した。

この女はあらゆる意味で工作員候補にふさわしい。そう勘が告げている。

「ドミニク・サン・ピエール、牢から出たいと思うか。私の言うことを聞き、素直に従うのなら牢から出し、そして恋人の追及に手心を加えると約束する」

エルフリーデはこのたった一人を選び、共にフェザーンへ向かった。

フェザーンを探り、その弱みを見つけ、中枢であるルピンスキー家を倒すために。

## 第十四話 483年 3月 諦観の女

エルフリーデはドミニクに些細な仕事をさせるつもりはない。

ずばり大胆に狙った懐に入らせる。

その狙いはフェザン自治領主アドリアン・ルビンスキーそのものだ。フェザンをどうにかする以上最短距離である。

事前に帝国情報部に分析させてあるのだが、それによるとアドリアン・ルビンスキーが好むのは頭が良く、自我がはっきりしていて、それでいて影のある女だそう。

おそらく頭の良い女というのは共に語り合えるだけの力量を欲するという意味だろう。

単なる聞き役では物足りないのだろう。

影のある女というのは、自分が理解し守ってやるべき対象ということなのかもしれない。

連れてきたドミニクはそれらの条件に正に合致している。

だがエルフリーデは報告書だけでは信用せず実際にアドリアン・ルビンスキーを見るべきと思った。

最後は自分の目を信じる。

それがエルフリーデの習い性だ。

大胆に社交パーティーの給仕に化けて潜入し、アドリアン・ルビンスキーを直に観察すること数度に及んだ。同じ会場のパーティーならば常にいても不思議ではない。

直観が閃く。

このアドリアン・ルビンスキーという男はただの政治家ではない。上昇志向が見て取れるが、それだけに捉われているのでもない。何かこう、大きな流れを見ている。その遠い目は例えていえば壮大な滝を傍観しているような目だ。歴史という壮大すぎる滝を。

「この男は、世の中について諦観のようなものを持っている。だとすれば同じような諦観を持つ女と共感するに違いない。ドミニクはそれにびつたりね。装う必要すらないわ」

自然と笑みがこぼれる。

ドミニクを接近させるよう企てるのはたやすいことだ。しかしそこからが難しく、最後の詰めは運を天に任せるようなもの、賭けでしかない。相性が合わなければそれまで

の苦勞が水の泡になる。

だが直観は絶対にうまくいくと告げている。

その後しばらくしてエカテリーナが異変に気が付いた。

父アドリアン・ルビンスキーに何やら変化がある。

家でゆっくり酒を飲みながら談笑するのが常だったのに、外で飲んでくることが多くなってきたのだ。それに家族と政策談義をすることも減ってきた。

その変化の理由を直接聞いてみても、特に何も答えることはない。まるで変化を自分で感じていないかのような素振りだ。

いや、これは絶対に何かある！

そう思ったエカテリーナは調査しようとした。

しかし上がってきた報告は、変わった行動は見うけられない、というものばかりだった。

エカテリーナはそれで納得しない。

父アドリアン・ルビンスキーは策士だ。しかも最上級の。調査などエカテリーナに届く前に買収していかようにもするだろう。

自分で調べてみるしかない。

密かに張り込んだ。

父にそんなことをするのが悪いとは思いません。

逆に、何かあれば対処してあげるのが子供として正しいではないか！

そしてついに見たのだ。

父アドリアン・ルビンスキーが隠れ家的なところに入って行くのを。

そこで考え込むエカテリーナではない。

女の影があったことも一瞬確認している。長髪で細面の美人だった。

本来、父親が別にどこでどうしようと口を挟める権利はないのかもしれないが……

しかしエカテリーナはそういう考えはせず、はつきりさせるのが当然と思った。しかもこういう問題は時間をかけて考えるほどややこしくなるものだとも知っている。

ためらいなくそこへ踏み込んだのだ。

むろんエカテリーナを見たアドリアン・ルビンスキーは驚いている。

「予想はしていたが、こんなに早いとは。エカテリーナ、お前は策士に欠けがちなものをしつかりと持っているようだ」

「こんな時に、とは思いますがそれは何のですの？ お父様」



「果斷だ。往々にして策士は考えを巡らすこと自体を目的としてしまう。そして機会を逃がしやすい。常にはないが即斷が必要なことがある。褒めているのだ、エカテリン」

「このような時でなければもつと褒めてほしいところですね。しかし、今はそれよりも説明の方が嬉しく思います」

エカテリーナはその目をしっかりとソファアに座っている女に向けている。

その存在について説明が欲しい。

女はこんなやり取りを至近で聞いても悠々とグラスにウイスキーを注いでいる。そばで見ると憎たらしいほど整った顔立ちだ。ほぼストレートな髪も羨ましい。エカテリンの髪はウエーブが少し入っているのに。

「そうか、ではエカテリンに紹介しよう。こちらはドミニク・サン・ピエール、パーティーで給仕をしていた人だ。ある時、パーティー中に会場のピアノストが急病で倒れたことがあった。しかも代わりのピアノストが一人もない時だった。そこで、偶然その場にいたこのドミニクが急遽立てられ、ピアノを弾きながら歌うことになったのだ。それは見事な弾き語りで注目を集めた。そこからの知り合いだな。」

「最初はそういう事件から。でも知り合いでしょうか。ただの」

「まあいろいろと付随することもある」

互いに一呼吸置く。

エカテリーナは少し異和感を感じた。いきなり踏み込まれたのに父親はまずいことがばれて焦っているような感じがしない。

しかし、逆に開き直っているのでもない。

あえて言えば純粹に面白がっているようなのだ。

「何か、事情があるのでしょね。そんな気がします。お父様」

「おおエカテリン、これは驚いた。洞察力も大したものだ。では少し話を進めよう。ドミニク、お前の手で遮蔽力場のスイッチを押してもらえないか」

そのドミニクという女はやや訝しがったが、言われたまま遮蔽力場のスイッチを入れられた。これで外部から一切の盗聴、通信はできない力場が発生した。自治領主の行くところどこにでもその設備はある。

それを見届けてからアドリアン・ルビンスキーが言う。

「ではその付随物もいろいろあるが、その一番大きいところを言っておこうか」

何か楽し気にさえ見える。手品のネタばらしのように。

「エカテリン、このドミニクは帝国からありがたく頂いた贈り物だ」

ドミニクがいきなり立ち上がった。

グラスを手にしたままだ。人はあまりに驚くと、手から何かを落とすという事はあり得ない。むしろ縮む方向に筋肉が働く。それで逆に力が入り状態を保持してしまうものなのだ。

ドミニクの驚きは大きく、顔にも出ている。

しかしやがて体の力を抜き、ソファーに座り直す。

グラスをテーブルに置いてそれをじっと見る。

「なるほどね、もうばれていたのね。世の中つていろんなことが多すぎてめまいがしちゃうよ」

しかし驚くのはドミニクだけではなくエカテリーナも同じだ。

このドミニクという女は父親の何かではなかった。帝国から送り込まれた作業員だったとは！

もつと驚くべきは父親はそのことを既に見抜いていた。その上で何食わぬ顔をしていたのだ。

「さすがですわ。お父様」

「もつと褒めてくれて構わんぞ、エカテリーナ」

当事者であるドミニクはようやくグラスから目を離し、他人事のようにつぶやいた。

「どうして、そう思ったの？ ルビンスキー」

「それはあまりに完璧だったからだ。いくら調査させてもお前の出所、経歴、疑うべきは微塵もなかった。だから偽造だと確信できたのだ。そして偽造なら工作員に違いなく、ちようどこの時期は帝国が動き出してもいいタイミングだ」

「ずいぶん単純だわね。驚いてしまいわ。疑うべきものが無いから疑わしいと、そんな風に考えるのなら誰でも疑わしいことになるわよ」

ドミニクの言う通りだ。

聞いているエカテリーナも一瞬そう思った。そんなに疑心暗鬼なら疑っても疑っても切りがない。

しかし父親が言う解答も予見できる気がした。

「いやドミニク、そうではない。お前には影があり過ぎる。そんなことを感じないほどの間抜けではないつもりだ。そういうお前が表社会を堂々と歩いてきたはずがなく、だから後ろめたい経歴が見つからないのはおかしいのだ」

アドリアン・ルビンスキーは簡単に言つてのけるが、それは結果論だ。どれほどの洞察力と隠された知恵が必要なことか。

「そう、鍵はわたし自身だったの。それで、逮捕するの？　せめてこれを飲んでからにして頂戴」

ドミニクは再びグラスを手にした。

あつさりしたものだ。ドミニクの世の中に対する諦観が習い性となってそうさせている。自分の退場も冷笑をもって迎え入れるのだ。

今度はアドリアン・ルビンスキーが大笑で応えた。

「逮捕？ そんなことをする理由はない。する必要もない。お前は生え抜きの職員ではなく、おそらく何も帝国の情報を持っていないだろう。失敗する可能性があるのに帝国内部に詳しい者を投入してくるはずがないからな。俺が帝国の者ならきつとそう考える」

「しかしこのまま野放ししてことにはないでしょうねえ。どうするの？」

あくまで他人事のようにドミニクが言う。その諦観は筋金入りだ。

「だからどうもしないから安心しろ。野放しでなければ、そうだな、こちらの家族にでもなってもらうか」

「はあ!？」

これにエカテリーナの方が驚いた！

冗談に聞こえない。

そして冗談でなければ父アドリアン・ルビンスキーは確かにこの女を気に入っているということだ！

「話がこの家に踏み込んだ理由まで戻っているではないか！ おまけに帝国の工作員と判明した以上余計たちが悪い。」

罅が明かない。

ルパート兄さんもいる場で釈明させる必要がある。エカテリーナは父親を強引に連れ出した。

そんな様子を見ながらドミニクがゆっくりと声を出す。

「家族…… 久しぶりだわ、そんな言葉。またわたしが聞くことがあつたのね」

エカテリーナやアドリアン・ルビンスキーの方を見ることもなくつぶやく。

「教えてあげる。遠い昔、家族はみんな死んだわ。強制収容所で。ちよつとした不満の言葉だったのに、隣人に告げ口されてしまったのね。運悪く帝国に対する反逆罪なんてたいそうなものを着せられてしまったわ。いつそのことそれほどの大物ならまだ良かったのに、ただの庶民だった」

「……」

「世の中にはどこでも不幸が転がってるものよ。それは当たり前のように転がっている不幸の一つだった」

ドミニクの声にわずか震えが入った。

この諦観の女、その根本的な理由が分かった。だが本人は本心では納得していない。その生い立ちはどうしようもないことだったとしても、口ほどには理不尽を受け入れていない。

「ここで家族、それもいいわね……　ただし帝国がわたしを消すまでのほんの短い間でいいかしら」

これにエカテリーナが振り向く。顔は複雑な表情だ。

「同情したわけじゃないけど一応親切であなたに言っておくわよ。帝国は手出しはしないわ。任務に失敗したとしても命を狙ったりしない。あなたが工作員にさせられた理由が報酬か脅しかわからないけど、何も心配いらなと思うわ」

笑いながらアドリアン・ルビンスキーも付け足す。

「そうだなエカテリーナ。その通りだ。帝国にとつてドミニクを生かしておく理由もないが、殺す理由はもつとない。わざわざ問題をこじらせることなどしないだろう」

「いいから早く出るのよ、お父様」

父親の腕を掴んだ指に力を入れる。わざと痛くさせるように。

実際のところエカテリーナは怒っているのだ！





## 第十五話 483年 4月 試作品

エルフリーデはドミニクを送り込んで計画を進めようとしたが、あっさり失敗してしまつたのを悟つた。

ドミニクから相変わらず報告が届いている。

しかし、その微妙なところで心に警報が鳴るのだ。

何かおかしい。

それに、一度だけがやけに遮蔽力場を長く張られていた記録が残っている。

それはドミニク自身の手で張られたもので、普通なら怪しむことはない。しかしエルフリーデは決して無能ではなく慧眼だった。起こつた事態をほぼ正確に見抜く。

「さて、失敗だわ。ドミニクは取り込まれたのね。確認なんかするより失敗だったら早めに撤収するのが吉だわ。もつと残念なことになる前に」

さつさとオーデインに戻つた。そうと決めたら躊躇しない。

それは実に危機一髪だった。フェザーンの手の者がエルフリーデを捕らえる直前だったのだ。

オーディンに着くとリヒテンラーデ侯に報告する。

「簡単に見破られたわよ。予想よりもずっと早く。でもこれで分かることは、あのルビンスキーという自治領主は決して侮れないってことね」

「ふむ、それもまた収穫といえるものじゃの。手はまた打てばよい」

「収穫といえば、ちよと面白いことがあるわね。今オーディンにいるフェザン弁務官のボルテックという者、フェザンではまるで人気がなく、何かに使えそうにもないってこと。人望のないただの官僚よ。将来ボルテックを傀儡に仕上げて、フェザン人が治まるとも思えないわ」

「奴のことか。近頃何かと動き回っておるわ。小物とは思っておったが、そこまでか。まあ憶えておくことにしよう。エルフリーデが言うのじゃから間違いないの」

エルフリーデは主な目的を果たせなくとも充分な土産を持ち帰ることはする。決して手ぶらでは帰らない。

「それともう一つ面白いことが分かったわよ」

エルフリーデはフェザンに潜入する際、帝国の弁務官事務所にも秘密裏に行っている。帝国からフェザンに置いている高等弁務官レムシャイド伯に会うためだ。

もちろんレムシャイド伯ともなればエルフリーデ・フォン・コルラウシュがリヒテンラーデ侯の懐刀であることを知っている。

「これはお嬢様、この度はフェザンによるこそ。何か問題でもありましたか」

「レムシャイド伯爵、リヒテンラーデ侯はフェザンの動向に重大な関心を寄せていますわ。そこで先ずは私に情報を洗いざらい寄越して下さい。そこで私が判断し、重要と思つたことに追加情報をお願いします」

急な命令だったがレムシャイド伯爵は素直に従う。エルフリーデの言葉は國務尚書リヒテンラーデ侯の言葉と同義であり、帝国の意向そのものである。

そして取りそろえた情報の中には何とルピンスキー家の令嬢エカテリーナと帝国駐在武官ミュラーの私的な交友のことまで含まれていた。

これをエルフリーデは面白いと思つた。

できるだけ情報を集めるが、やはり最後は自分の目で確かめる。

その日はエカテリーナもヒマで、ミュラーも休養日だった。

しかも天気が良い。乾燥しがちな惑星であるフェザンはやや薄曇りで直射日光が和らいでいるくらいが最上の天気なのだ。

そんな中、ミュラーはまたエカテリーナに呼び出される。

今回は小舟で川下りをするのに付き合わされるらしい。

二人は水が跳ね飛ぶスリルをしばし楽しんだ。

そういう急な流れの所は多くはなく、危険はない。間もなく澄んだ穏やかな水面に出た。

オールを漕がずに静止するに任せた。

しばらく待つと波紋が消え、その水面から下が見える。水底の藻が浅緑に揺らいでいるのも、所々に紅色の石があり、細かな影を作りながら輝いているのも全て見える。

「ミユラー、水が透き通っているとなんだか小舟が空に浮いてるみたい。すごく面白いわ」

「ああ、本当だ。不思議な感じだね。足が届かないほどの水底がこんなにはつきり見えるなんて」

「こんなことを言うのもなんだけど、星の中のようだね」

エカテリーナは少し遠慮しながら言った。

まるで小舟が星空の中にいるようだと思っただけの事実だが、ミユラーは常にその星空の中にいたのだ。しかもそれは軍だ。決して楽しいことばかりではなく震えるような危険な思いもしただろうに。

それを思い出させてしまったのではないか。せつかくの楽しいお出かけなのに。

言ってしまったから、自分は気遣いが足りなかったとエカテリーナは思った。「星空はもつと綺麗だよ。人に優しくはないけど」

それを知ってか知らずかミュラーは言葉をつないでくれた。

エカテリーナはタイミングを見てまた声をかける。

「ミュラー、今日はまたサンドウィッチを作ってきたわ。試作品だけど面白い味だと思うよ」

二人は川岸に小舟を止めて、陸に上がってランチとする。

これまたエカテリーナ自慢の新作を披露するのだ。

「これはね、マヨネーズを薄く両面に塗って、そこにバナナスライスを挟んでいるのよ。どう？ 新しい味でしょう」

「へえ、そういう試作品なんだ。うん、美味しいね。結構合うと思うよ」

「マヨネーズを両面に塗るのがコツなのよ。最初にマヨネーズの味がするように」

二人の談笑は間もなく中断されることになる。

ふいに声をかけてきた女がいたのだ。

「お二人さん、楽しそうな会ですこと」

ミュラーとエカテリンは同時に目を向ける。

その先にはブロンドの髪を雑にして、簡素なドレスを着た女がいた。

「あら御免なさい。若い恋人の邪魔をするつもりではありませんことよ」

「いえ邪魔だなんて。ここは誰の川辺でもありません」

「でも思わず声をかけてしまつて御免なさい。本当に仲が良さそうで、つい」

「それに恋人と仰いましたか。仲が良いのはその通りですが、私たちはそうじゃありませんわ」

「そうかしら？ 恋人以外には見えなくてよ。では早めに失礼いたしますわ」

女はそそくさとその場を離れようとする。

いったいなぜそこにおいて、二人に声をかけてきたのだろう。

女は去る前に、ミュラーへ小さな声で言った。

「あなた、相当なお馬鹿さんね。そのサンドウィッチが本当に試作品だと思つたの？」

ミュラーとエカテリーナは啞然とする。

次にはエカテリーナが赤面する番だ。

ミュラーもやつと理解した。このサンドウィッチは決して試作品などではない。入念に計算し、幾度も試してようやく作り上げたものだ。

それはエカテリーナが料理好きというだけの理由ではなかった。エカテリーナはオーソドックスなものを作るより、意外性のあるもので新鮮な驚きを与えたい。だがそ

の大前提として不味い物なら意味がない。時間と労力をかけて美味いように作るのだ。それは全てミユラーのためである。

エカテリーナが決してミユラーを憎く思っていないことを表わしている。幼な過ぎでそれが愛とか恋とか意識していないとしても。

一方、その場を離れおさせたエルフリーデは独り言を言う。

「偵察だけのはずだったのに。自分でも何をやってるのだろう」

その通り、遠目に観察して判断材料の一つでも収集しようと思っただけだ。ルビンスキーの令嬢と帝国の駐在武官との交流とは興味をそそられる。

それが思わず飛び出て声をかけてしまった。

あのミユラーという駐在武官は自分の顔を知らないからできることもあるが、しかし何かを勘繰られるリスクがあることも確かであり、その行動は軽率というべきものだ。

「しかしまあ、やってしまったものは仕方ないわね。なんか見てられなかったんだもの」  
そう言って切り換える。間もなくドミニクの件で急ぎフェザーンから離れることになったため、その後は知らない。

「…… そういうわけで大おじさま、令嬢とその駐在武官は仲がいいわ。これは私の勘だけど、将来必ず恋仲になるわね。こういうのに私の勘は外れたことが無いのよ」

リヒテンラーデ侯に対するエルフリーデの報告が続く。

些細なことのようだが、エルフリーデにはリヒテンラーデの貴重な時間を割いてでも報告すべき事柄に思えたのだ。

「平民出の一介の駐在武官が、ルビンスキー家の令嬢と、かの。珍しいこともあるものじゃ。憶えておこう。さしあたってその者が前線に戻ってから戦いで死ぬことがないよう儂が取り計らっておくことにしようぞ。近頃は軍部に頼みごとが多いので。ついでじゃ」

「大おじさま、軍部に頼み？ それなら私にも分かるわ。グリューネワルト伯爵夫人の弟さんのことね」

その話題に切り替わる。

リヒテンラーデもエルフリーデには別に隠しごともせず率直に語る。

「エルフリーデも知っておったか。ベーネミュンデ侯爵夫人にも困ったものだて。グリューネワルト伯爵夫人憎しのあまりその弟まで亡き者にしようとしておる。ついに帝国軍の中にまで刺客を送り込んだようなのじゃ。一応、軍内のグリーンメルスハウゼン老人に守ってくれるよう頼むつもりじゃが、さてどうなるものか」



エルフリーデにもアンネローゼ・フォン・グリューネワルト伯爵夫人の弟ラインハルトの話は聞こえている。加えてリヒテンラーデがそのラインハルトを暗殺させたくないのも知っている。

それはアンネローゼ・フォン・グリューネワルトを心の支えにしている皇帝陛下に対する忠義の一環であり、皇帝の寵姫アンネローゼ・フォン・グリューネワルトを悲しませないためのものである。

ただしそれだけではない。

常日頃からリヒテンラーデは大貴族が帝国の政治を引っ掻き回すのを苦々しく思っている。そのため政治色のないアンネローゼの存在は非常に好ましい。

できればその弟にも少し力を与え、他の貴族に対する牽制にできたら重畳だ。

現皇帝フリードリヒ四世の子、ルードヴィッヒ皇太子は病弱であり貴族の干渉を跳ねのけるのは無理だろう。帝室のため、今のうちから貴族の力を弱めておかねばならない。

全てはリヒテンラーデの帝室に対する忠義のためだ。

「へえ、軍内に刺客？　大おじさま、失地挽回よ。そんな刺客は私が潰すわ」

直後に起こった第五次イゼルローン攻防戦において、ある人物にとり手筈に大幅な狂いが生じた。

名をクルムバツハ少佐という。

宮中のやんごとなき方からの特別な命令を受けてここにいる。

「なぜ、誰も来ない！ 今が絶好のチャンスではないか。この戦闘中なら背後から襲えば簡単だ！」

帝国軍と叛徒の戦う艦隊戦がいよいよ佳境に入り、通信も指揮も乱れてきた。

辛抱して待った甲斐があり、暗殺には絶好の機会が訪れた。

だがしばらく待つてみても同志は誰も来なかった。ラインハルト暗殺という密命実行のため、何人もこの艦の中に潜り込み準備をしていたはずなのに。

仕方がない。クルムバツハは単身でも暗殺を執行する方を選ぶ。

本来暗殺部隊の指揮だけ執って自分が撃つことはないと思っていたのだが。

ターゲットのラインハルトにも部下がいるし、艦には保安要員もいる。こんな激しい戦闘中でなければとても暗殺はできない。やるなら今しかないのだ。

確かにおびき出し、しかも背後を取ることができた。暗殺は間違いなく成功したかに思えた。

しかしクルムバツハに最後の詰めはできなかつた。

駆けつけたキルヒアイスの手によってラインハルト暗殺が失敗したことと、無念にも自分の命がここで消える羽目になつたことを理解した。

どうしてこんな結末になつたのか……

裏で糸を引いて暗殺を失敗に導いた女がいたことなど最後まで知るはずもなかつた。

第十六話 483年 10月 帝国軍技術部

走れ！

もつと早く走らねば努力が水の泡になる。

失敗してはならない！

これは自由惑星同盟へ絶対に届けなくてはならない情報なのだ。

数万人、いや数百万人の命が懸かっている。近い将来、同盟軍兵士の命が。

こんな恐るべき兵器を帝国軍は作り上げていたのか……

その兵器の名は指向性ゼツフル粒子。

ゼツフル粒子とは非常に引火性が強く、ひとたび反応が起きれば膨大な熱エネルギーを放出させるといふ粒子だ。その存在は帝国軍と自由惑星同盟軍のどちらにとつても銃火器を使用しない白兵戦の意義を残すことになった。戦場にどちらかがそれをバラまけば、自分ごと焼き払われる自殺志願でもなければたちまち銃火器は何も使えなくなる。後は弓と刃、そして兵士自身の肉体を使って戦うしかない。

その危険な粒子を地表や艦の中のみならず、宇宙空間での戦闘に適用しようと研究されてきた。しかし低い濃度になっても反応を起こすとはいえ宇宙空間は広すぎる。拡散してしまえばそれっきりだ。

だがしかし、そのゼツフル粒子に指向性を与え、誘導するという実験を帝国軍は成功させていた！

もし兵器に応用されれば、自在にゼツフル粒子を操り、狙った宙域を高熱で掃討できる。さすがに艦艇なら動いて避けられるかもしれないが、少なくとも機雷、あるいは小型の要塞さえ一瞬で破壊できるだろう。

戦いを一変するほどの兵器だ。

こんな兵器を大会戦のここぞという場面で使用されてしまえば同盟軍にとって壊滅的な打撃になるのは容易に想像がつく。いずれは兵器の常として対抗兵器が作られるだろうが、その間はどうしようもない。

だから今、その兵器の情報を何としてでも同盟に届けなくてはならない。悲劇が起こる前に。

多少の危険は覚悟の上だ。

あるいは自分の命と引き換えても全然構わない。

今までのスキルを全て投入し、絶対に情報の持ち出しを成功させる！

グラズノフは走った。

しばらく前のことだ。

相変わらずグラズノフはオーデインで諜報活動を続けていた。

フェザーンの高等弁務官ニコラス・ボルテックの第一秘書、この肩書きは有利にも不利にも働く。帝国側にどうしてもマークされてしまうのは不利な点だろう。それが同盟ではなくフェザーンの工作活動と誤解される結果のことであっても。

有利なことは行動に自由が効くことと、やはり情報が集まりやすいことだ。

その重大な情報が手に入ったのはいくつかの商談を調査したところから始まった。

オーデインのフェザーン弁務官事務所には次々と商談の話が持ち込まれる。大半は通常の民間取引の範疇ではまともでない話だ。複雑な許可が必要な大型案件、あるいは特別に急ぎであったり特殊な物品であったりする商談だ。

つまり弁務官事務所からの口利きが必要になる場合なのである。

それらを峻別し、本当に推薦を与えて後押しをすべき商談なのかどうか考えなくてはならない。もちろんフェザーンの利益になる商談なら積極的に口利きをする。それも弁務官事務所の必要な仕事である。

グラスノフもまたそこへ関わっていた。

すると、とある機材についての商談が目を引いたのだ。急ぎ帝国がフェザーンから入手したい物品であり、形も材質もかなり特殊なもののようにだ。

それだけならグラスノフも調べようとまでしなかったに違いない。

ところが、その機材の納入先が帝国の通常の商業組合などではなく、帝国軍の存在を隠すためのダミー会社だと見抜いた。

この時点で特別な関心を抱かざるを得ない。なぜそんなややこしいことをする。その特殊な機材はいったい何に使うものだろうか。どうしても気になったグラスノフはフェザーンに問い合わせたのだ。

すると驚くべきことが分かった！

高い確率で大型のゼツフル粒子発生装置のためのものらしい。その大きさは通常の歩兵戦闘で使うようなものとは桁がいくつも違う。これまでにない大型で、だからこそ国内では全て賄い切れることはなく、フェザーン製の部品まで調達する必要があったのだろう。

これは怪しい匂いがする。

更にグラスノフは帝国軍の動き、特に技術部の動きに着目して調べた。

はたして帝国軍技術部にそれらしい動きがあった。技術部の人事面ではシャフトな

る気鋭の技術者が昇進を果たしたばかりなのだが、その者が中心となって非常に大掛かりなプロジェクトを進めているらしい。

そこまで分かれれば後は接近して探るしかない。

グラスノフはすつとぼけながら帝国軍技術部に直接ねじこんだ。

「弁務官事務所の秘書官グラスノフと申します。この度フェザンに発注された特殊な機材が帝国軍に納入されることは分かっています。フェザンの目は欺けません。分かってしまった以上、帝国軍がわざわざダミー会社を作つて隠蔽しようとした理由を知らなければ、フェザン政府としてこのまま納入させるわけにはいきません。形式上のことですが、書類を整えるために用途を言ってもらわねば困ります」

一応立派な名目を立てている。

対するシャフトは技術的天才かもしれないが、思慮の浅い俗人だった。

「それは機材調達を担当する部署に言うべき言葉だな。ここは技術者が崇高な実験をする場である。書類を作つたり支払いをするのは下賤なことしかできない輩がすればよいことだ」

シャフトはにべもなく撥ねつけてきた。

あまり人付き合いの良いタイプではないな、グラスノフにはそう思えた。しかし実の



ところこういう尊大な人間の方が攻略しやすい。

「詳しい用途など窓口では分からないから、直接技術員に聞いてこいと言われてきたのですが」

グラスノフは機嫌が悪くなったように装う。

今言ったのは大胆な嘘だ。シャフトはおそらくそれを疑って問い合わせにかかったりしないだろう。

それにこの時は技術部プロジェクト長のシャフトより上の立場の者はいない。その時間帯を狙ってきたのだ。

「……しようがないな。簡単に言えばその機材はゼツフル粒子の実験に使うものだ」

やはりシャフトは脇が甘い。

グラスノフはゼツフル粒子発生装置に関わるものだと確認できた。

しかしほくそえむ心の中と違って、顔では大げさな波面を作る。

「ええと、その何とか粒子に使うものですか。私はただの秘書官なので技術的用語には見当もつかなくて申し訳ない。それで、その書く綴りも分からないので教えて頂ければありがたいのですが」

ここでシャフトは大声で笑いだした！

グラスノフを心の底から馬鹿にしきった笑いだ。

「何と！ ゼツフル粒子を知らない者が世の中にいたとは驚きだ！ やはり文官など何も分からないものだ。無用の存在だ。やはり技術部が先に立たねば何も進歩がない」

グラスノフはやはりぼかん、とした顔をして何も分からないフリを続ける。

それに対してシャフトは一気に上機嫌になった。

「いや失敬失敬。グラスノフ氏とやら、気を悪くされるな。一般的なことについて言つたまでで、貴官のことを言つたつもりではないのだ。そうだな、どこから説明したものやら」

言葉はそうだが嘲りの笑いを隠そうともしない。技術を知らない者に対して自分が完全に上に立っている場面なのだから。

つまりシャフトは技術を至上とする価値観があり、自分はそれに優れたものだと思つている。要約すれば尊大なことこの上もない。

そこからシャフトが長々とゼツフル粒子の説明をしていく。

グラスノフはもう頭が一杯になって音を上げたように装い、ついに核心に踏み込む！ 「形式上のことだからと私などが技術部に来たのが間違いだつたようです。ちよつと理解が追いつかないようでも申し訳ない。しかしまあ、そんな変な粒子を一度に多く作つてどうなるのでしょうか」

務めて何気なく言つてのけた。シャフトは乗せられて完全に油断している。

「それは意味がある。宇宙で使うからだ。指向性をつけてゼツフル粒子を移動させ、そして使いたいところに持つてきて点火すればいい」

それが新兵器の要だ。得意満面に答えたシャフトは、自分が言い過ぎてしまったことも分からない。それを聞いても何のことか分かつていなさそうな相手なのだから。

一方、グラズノフは内心冷や汗が出た。

それは革新的な軍事技術ではないか！ 思わぬところでとんでもなく重大な情報が手に入った。

「ともあれフェザンとしては商談を進めていけるのならそれで結構です。それで話を聞くと何やらどんどん大型の契約が結べそうな気配を感じますな。技術部プロジェクト長とせつかく知り合えたことでもあり、今後の契約をより円滑に進めたいものです」  
最後までグラズノフは技術に何も関心がなく、商談と利益にしか目がないように語った。ダメ押しだ。

そして丁寧に紙に包まれた物を差し出す。それは手の平に収まる程度の大きさだ。片手で器用に紙の包装をめくり上げ、中に金板が入っているのを覗かせる。

シャフトは驚いたが、すぐに下卑た顔でそれを受け取る。

どうやら崇高なる科学の使徒と自負する信条と、リベートを取って自身の利益を図ることは意外にも相反しないらしい。

グラズノフは弁務官事務所に帰るとボルテックに簡単な報告をした。

帝国軍技術部がフェザーンに特殊な機材を発注していることを型通り伝えた。そこに嘘は何もない。

もちろんボルテックこそ真正銘軍事技術に何も興味はない。それこそシャフトが馬鹿にしても仕方がないような根っからの文官なのだから。通常案件として処理する以上のことは考えもしない。

ここからだ。

グラズノフは何としてもその新技術の情報を盗み取らなければならない。

帝国軍技術部のセキュリティや警備状況は調べたが、安全に盗み出せるほどの確信は得られない。しかし、どうしてもやらねばならないほどの重大な情報なのだ。

夜間、その敷地近くへ忍び込んだ。

ついで極超短波の狙撃銃を帝国軍技術部の建物のセキュリティコンピューターの置かれているあたりに向けて撃った。極超短波は金属に当たると電流に変換される。そ

れで電子機器はいったんシャットダウンしてしまい、自動で迂回路を探して修復がかかるまでの時間は無力になる。これは同盟の最新装置だ。

素早く敷地内に入ると建物に侵入する。グラスノフは交渉やフェイクのみならず、こうした工作活動においても極めて優秀だった。

間もなく見つけた端末の一つから技術情報ストレージコンピュターにウイルスを流し込み、機密情報を守るウォールを食い荒らさせる。

そしてついに目的の情報の入ったフォルダを見つけ出した。

それを丸ごとマイクロメモリに移す。

中身を確認している暇はない。後は素早く脱出だ。

しかしここまでは運が味方しても、警備兵に全く見つからないほどの幸運を持ち合わせてはいなかった。侵入は気付かれてしまったのだ。

走れ。早く。

技術部の警備兵は幾人かの集団を形成しながら追ってきた。

グラスノフはやつとその敷地を抜け、市街地に向かう。そこまで行けばなんとでもなる。しかし、いったん撒いたと思つた警備兵が再び後ろに小さく見えてきた。

音が続けて聞こえてくる。いよいよ発砲してきたのだ。向こうも決して逃げ切らせるともりはないようだ。

終わりが訪れた。

警備兵は早くに二手に分かれ、グラスノフに対して挟み撃ちを考えていたらしい。ふいに前方にも警備兵が出てきた。整然と銃を構え、鬼ごっこの終わりを告げる。

「くっ、これまでか……」

グラスノフは諦めざるを得ず、そのまま連行される。

## 第十七話 483年 12月 争奪戦

こうなった以上、グラズノフが考えるべきことは自分に関する情報の隠匿のことだ。捕まってしまったのは悔しいが、もはや考えても仕方がない。

自分がフェザン高等弁務官の秘書であることは隠しようもないことだ。しかしグラズノフにとってそれはあまり重要ではない。いやむしろそれでいい。

何としても隠すべきなのは同盟の工作員であるという点だけしかない。

もちろんフェザンの者だとしても帝国軍の情報盗んだことが知られば厳罰を受けるに決まっている。自分はもちろんのこと、上司であるボルテック高等弁務官も何らかの罰を受けるだろう。帝国側としても秘書官が単独で事を行ったとは考えず、ボルテックの指示でスパイをやったと思う方がよっぽど自然だからだ。

ただしそれで終わらない。当然ボルテックも疑いを持つに違いない。

普段から独断専行の多い秘書ではあるが、それでも危険なスパイ行為をわざわざやるべき道理がないからだ。もちろんそんなスキルを持つていること自体がおかしい。

ボルテックが詳細に調べれば自分と同盟とのつながりが見えてくるかもしれない。

いいや、最悪同盟の諜報員ということが露見してしまったとしよう。

それでも自分とプレツェリとの線を感じさせてはならない。そこまで探索されれば同盟の情報網が壊滅してしまう。長い年月をかけて密かに構築したのだ。その苦労が水の泡となり、多数の工作員が犠牲となる。

そこまで考えればグラスノフも覚悟を決めなくてはならない。

それは自爆だ。そうすれば少なくとも尋問はできず、調査は遅れ、その間に同盟が別の工作員を使ってなんとかしてくる可能性が出てくる。

むろんグラスノフは同盟工作員になった時からそんな覚悟はある。

祖国のため、信じる民主主義の正義のため、とうに命は捨てている。

しかし、一度は手に入れた指向性ゼツフル粒子の情報を届けられなかったことだけが無念極まる。

「おとなしく手を地面に着けろ」

銃を突きつけた警備兵が言う。グラスノフは先ずこれに従わなくてはならない。

帝国軍技術部警備兵の長らしいものが重ねて言ってきた。

「貴様、どこのスパイか知らんが技術部に忍び込むとは大胆な奴だ。逃げおおせるとでも思ったか」



「ここで一応の反論をする。無駄と分かっているも。」

「スパイ？　いったい何のことだ。自分はフェザン高等弁務官の秘書だ。何を言っているのかさっぱり分からない」

「ふざけるな！　たった今、帝国軍に侵入者が入ったのを感知した。我々が追うと敷地から走って逃げた。貴様のことだろう。この目で見ているんだ！」

「そんなことは知らない」

「では逆に問うが貴様は何でこんなところにいる？　真夜中に技術部の目の前に」

「フェザンと帝国軍で大きな商談の予定がある。その契約上の調査のためここにいただけだ。夜でも明かりがついているか、人がいるか見るだけでも活動状況を知る上で参考になる。それくらいは商売の基本だからな」

「よくもぬけぬけと……」

「そうしていたら、突然警備兵が迫ってきたから思わず逃げただけだ。無用なトラブルは御免だからな。こつちこそ迷惑極まる」

「ふん、まあいい。どのみちすぐ分かることだ」

その時、ここへ警備兵が一人やってきて警備兵の長に耳打ちする。

たちまちにんまりと笑顔が広がる。

「侵入者が忍び込んだ目的が分かった。技術部から情報が盗まれたそうだ。それを貴様  
が持つていれば何よりの証拠になる。それでもまだ何か言うのなら聞いてやろうか。  
言いたいことが残っていればだが」

グラスノフは引つ立てられ、先ずは警備兵の詰所に監禁される。

しつかり見張られて逃げることも不可能だ。

そして身体検査で情報メモリを見つけられてしまった。それを取り上げ、警備兵の長  
はどこかへ行った。もちろん解析させるためだろう。

万事休すだ。

後は事が露見した瞬間自爆するだけだ。

手を縛られていてもそれは可能である。こういう状態まで予期し、爆薬は服の肩口に  
縫い込んである。やる場合にはその起爆ポイントを噛んで起爆させればいい。

間もなくその警備兵の長が戻ってきた。

いよいよその時か。

しかしながらグラスノフが問い詰められることはなく、悔しそうな呟きを聞くだけ  
になる。

「……技術部の情報なんか、どこにもなかった。あのメモリは空だ。限りなくクロなの

に証拠がないとは、フェザン人でなければ拷問で吐かせるところだったが……くそ、まずいことになった」

警部兵の長は、部下にグラスノフの身分証明のコピーを取り、その後に釈放するようにだけ命じてそそくさと消える。

身分証明は本物だ。

フェザンからの高等弁務官の秘書であるからには、話が大きくなってしまった場合政治的に厄介な話になるかもしれない。そんなことに巻き込まれてもつまらない。ではないか

意外なのはグラスノフの方だ!!

それを顔に出さないのに努力がいる。

なぜだ。どうしてこうなった？

確実に指向性ゼツフル粒子の技術情報はダウンロードしたはずだ。

自爆しなくてよくなったことも忘れて啞然とする。フェザン人らしく悪態をついたり抗議したりする演技をすることさえ忘れている。

ようやく弁務官事務所に戻ってから考える。

あのメモリに情報が無いのは事実であり、そこに疑うべき余地はない。だったら警備

兵の中にグラスノフとは別の同盟工作員が紛れ込んでいて、グラスノフを助けるためにデータを消去したのか？

いいやそんな時間はなかったはずだ。

警備兵の長が嘘を言ったとも考えられない。

仮にこれが罫で、敢えて泳がせるつもりなら、情報が無いのではなくニセ情報でも入れている方がいかに決まっている。そもそも警備兵が捕まえる必要すら無いではないか。

別の可能性はないだろうか。

最初から技術部は新兵器の開発していないのか。あるいはその技術開発に失敗したのでは。

いいや、あのシャフトの言い方は憎たらしいほど自信満々で、本当に実用化寸前のようだった。

こうして消去法で考えていくと残る可能性は多くない。

技術情報がすでに空だった。盗まれた後ということはないだろうか？ 誰か別の人間によって。そうだとしたら技術部がまだ気付いていない、ごく最近ということになる。

気を取り直したグラズノフはその可能性も考えて調べ始めた。

帝国に流れる他のニユースと慎重に照らし合わせる。

すると符号の合うニユースが見つかった！

帝国軍はいくつかの工廠を持ち、当然分担しながら生産を行なっている。基本は帝国軍の基地の近傍か、あるいは皇帝直轄領内だ。もちろん民間領や貴族領で生産することはほとんどない。

しかし、ヘルクスハイマー伯爵領だけは別だった。

そこには貴族領としては異例なほど高度な工業惑星が存在し、帝国軍の開発と生産にも深く関わっている。

ヘルクスハイマー伯爵が先年、シャフハウゼン子爵領にあるハイドロメタル鉱山を手に入れようと画策したのも工業生産の材料を手に入れるためだ。

驚いたことにそのヘルクスハイマー伯爵が一家を引き連れ、なぜか突然出奔したというのだ。

これは大ニユースである！

行方をくらませるといっても伯爵家だ。それほどのものが潜伏できるところが帝国内にあるとも思えない。

すると亡命であり、その行き先は自由惑星同盟しかない。同盟に行くのにイゼルロー

ン回廊を通れることはないので、必然的にフェザーンを経由した亡命になる。

おそらく指向性ゼツフル粒子の技術情報をそのヘルクスハイマー伯爵が持つて逃げたのだ。

ヘルクスハイマー伯爵であれば自由に技術部に出入りし、情報ストレージにもアクセスできる。

どういふつもりで盗んだのかわからないが、自由惑星同盟に対する土産にでも考えているのだろうか。

それが事実ならグラズノフにとって重畳極まりない。

ヘルクスハイマー伯によつて技術情報が自由惑星同盟にもたらされる。むろんその見返りは要求されるだろうが大会戦の敗北に比べたら微々たるものだ。

帝国軍は技術情報を盗まれたといつても機材や技術者はそのまま残っているのだから、どのみち新技術を開発し直せるだろう。しかし、その前に自由惑星同盟は技術情報を得て対抗兵器を作れるに違いない。そうなれば問題は解決する。

しかし、別の事実も分かった。

平民ならまだしも名門貴族の亡命だ。帝国はこのまま捨て置かず、追手をかけている。それは当然ともいえるが、憲兵ではなく帝国軍まで動員されてヘルクスハイマー伯爵の行方を追っているらしい。

そんな大規模な捕り物になるのは尋常なことではなく、その理由は不明である。技術部の情報は関係ないはずだ。今分かったことなのだから。

いったんグラスノフはフェザン経由でハイネセンの弁務官事務所に通信を繋げる。もちろん、このことを早くプレツェリに伝えるためだ。

「プレツェリ、これは重大な軍事技術だぞ。早めに対処を頼む。情報はそのヘルクスハイマー伯爵がたぶん持つて逃げています。伯爵が同盟領に入ったらすぐに保護して手に入れるんだ。それなら帝国を出し抜ける」

「ああ分かった。すぐに上に伝える。しかしグラスノフ、ずいぶんお前さんも無茶したようだな。実働部隊に任せるという選択肢もあつたんじゃないか。話を聞く限り、その伯爵が情報を持ち出していなかったらお前さんは命が無かつたぞ」

「勇み足だったのは認めるが早くしたかつたんだ。無茶でも仕事はするさ。まあ、これでも愛国者なんでね」

「俺だつてそのつもりだ、グラスノフ」

「いや、俺のが上だ。ハイネセンにいたら憂国騎士団にでも入つていたところだ」

「これに思わず二人は笑つた。」

後方の安全なところに居て、苦勞も知らず愛国ごっこをしている憂国騎士団など唾棄

すべき存在である。彼ら最前線で命を張る人間にとってみれば。

「グラスノフ、今回の働きは無駄にはしない。真面目に言うがこれ以上は無茶するなよ」  
それで通信を終わる。あまり長く通信していれば怪しまれることもでてくるだろう。

こういう気安い会話ができるのは、二人が訓練学校時代から親友だからである。

プレツエリの方が出世は早かった。

皆にヒゲのおつさんと呼ばれている、同盟軍情報部きつての敏腕作業員バグダツシユの配下にプレツエリは付いていた。

そのバグダツシユは苦勞してフェザーンに同盟の情報ルートを切り開くことに成功している。そのルートでプレツエリはハイネセン駐在のフェザーン弁務官の立場になりおおせた。今ではそこを起点として幾つかの同盟作業員ネットワークを統括している。

グラスノフに指示を出す方の立場になったが、この二人はお互いを友達分として、友情は損なわれることなく続いてきたのだ。



## 第十八話 484年 1月 思惑

その頃、ひたすらフェザーンに向かうヘルクスハイマー伯爵は焦っていた。

亡命の成功が風前の灯になってきたのだ。

「どうしてこうなった。国務省どころか帝国軍まで追ってきている。それもこんなに早く出てくるとは」

あともう少し、フェザーン領は目の前なのだ。

しかし、既に帝国軍の巡航艦が迫ってきている。

やむを得ず、乗っている高速旅客艇のエンジンに過負荷をかけても出力を絞り出させる。  
る。

目一杯の速度になる。

ヘルクスハイマー伯爵は技術に詳しく、どれほどの出力まで出せるか、どこまでが安全範囲か知っている。

それに持っている艇にも相当のこだわりがあり、その中でも選りすぐりの高速艇に

乗っている。

並みの軍用艦が追いつけるような代物ではない。

しかしながら、そんなことは追う帝国軍も充分わかっていたことだ。帝国軍も馬鹿ではなく、ヘルクスハイマー伯爵の乗って逃げた艇が判明した時点でその性能は織り込み済みだ。

追う方も最新鋭の高速巡航艦で追っている。

惜しむらくはそんな新造巡航艦は多くなく、この捕り物に参加しているのはせいぜい数隻だ。

「なんとかフェザーン回廊には入った。だが無理か…… 同盟に行ける前に追い付かれる」

ヘルクスハイマー伯爵の願いもむなしく、どう逃げようと確実に距離を詰められていく。

この追いかけてこもやがて最終局面が訪れる。砲撃可能距離まで近づかれてしまい、いよいよ観念せざるを得ない。

「生まれ、止まらんと撃つぞ」

帝国軍巡航艦から何のオリジナリティも感じられない停船命令が届く。どうしよう

もなく従うしかない。宇宙の藻屑になりたくなければ。

しかしこの時、どちらにとつても予期しない事態が起こつた！

フェザーン所属の警備船団が近付いてきたのだ。

「この領域の宇宙艇全てに告げる。現在位置はフェザーン自治領に属する宙域である。不法侵入に関しては臨検を行ない、処分を決定する」

帝国軍艦艇が即刻言い返した。

「こちらは帝国軍所属の巡航艦だ。作戦行動中である。それを妨害することは許されない。簡単に言えば我々の邪魔をするな」

「繰り返す。ここはフェザーン自治領である。通告なしの作戦行動は認めない。合法か非合法かはフェザーン政府並びに自治領主が決定する」

帝国軍としてはこれに苛立ちを隠せない。作戦目標は目の前なのに。

「ええいうるさい！ こっちは帝国軍だと言ってるんだ。フェザーンだつて帝国の一部、国内で誰が帝国軍の邪魔をできる！ 下らん文句をこれ以上続けるならお前らも撃つぞー！」

「一切の軍事行動を禁止する。もしも実力を行使するというなら当方も相応のオプショ

ンを考慮する。直ちに撤退せられたし」

軍事的性能はさすがにフェザーンの警備艇などより帝国軍巡航艦がはるか上だ。実力で見れば比べるまでもない。

しかしフェザーン警備艇は続々と集まり数を増やしていく。

それ以上に驚くべきことはフェザーン側は何と強硬なことか。これまでにはおよそ考えられなかった態度ではないか。

「何でこうなるんだ！ フェザーンの警備艇などクズのようなものだったのに」

帝国軍にとってフェザーンなど何の妨げにもならない弱腰だったはずだ。

それで何も考えずにヘルクスハイマー伯を追ってフェザーン自治領にまで入った。

それが予想もしない態度に会い、押し問答もしても埒が明かない。

いったいなぜだ。

フェザーンが新しい自治領主になったせいか。

その通り、新しい自治領主アドリアン・ルビンスキーは日頃から警備船団に厳命していたことがある。

「全て法に乗っ取った行動をするように。フェザーンの威をおとしめる行為を慎み、フェザーン自治領の矜持を保て」

これは正に天祐だ。意外な展開になったことによりヘルクスハイマー伯爵は胸を撫で下ろした。

助かった。

フェザーン警備船団に守られる形となつてそのまま前進を続ける。帝国軍巡航艦は渋々作戦を中止し、歯噛みをするがそれを見送るしかない。

フェザーンに到着するとヘルクスハイマー伯爵は自由惑星同盟への亡命の手続きを始めた。

亡命希望をきちんと自由惑星同盟の政府に伝え、そして正式に受理されなくてはならない。そうでなければ今度は自由惑星同盟軍に不法侵入で撃沈されてしまう。

同盟側から返事が来るまで数週間はかかると思っていた。

ところが意に反して直ぐに返事が来た。それはあたかも亡命を待っていたかのような早さだ。

「ヘルクスハイマー伯爵の亡命は既に受理した。ハイネセンに向け直ぐに出立せられたし。受け入れ準備は滞りなく進行中」

この返事にかえってヘルクスハイマー伯は訝しんだ。

「どうしてこんなに受け入れが早いのだ。まるでこちらが軍事技術の情報を持っていることが分かっているような。そんなはずはないだろう。これはおかしい」

交渉の切り札に使うはずの軍事情報、まだその話はしていない。

グラスノフから伝えられた話が自由惑星同盟軍で真剣に討議され、技術情報をどうしても手に入れたがっていることまで知らない。

無駄な猜疑心によってヘルクスハイマー伯は貴重な数日を逡巡することに費やしてしまった。その代償はいずれ命でつぐなうことになる。

一方の帝国軍は思わぬフェザン側の強硬姿勢によってヘルクスハイマー伯を取り逃がし、フェザンまで行かせてしまったことを知るや否や間髪おかずに次の行動に出た。

なぜか帝国中枢部から何としてもヘルクスハイマー伯の亡命を阻止せよとの厳命が出たのだ。これが帝国でも大貴族として知られたリッテンハイム家から出されたものであることは秘匿されている。

帝国軍はそこで大胆な作戦をとる。

今度は先回りだ。もうそれしか方法がない。

新鋭巡航艦をただ一隻、密かにイゼルローン回廊の方から自由惑星同盟領へ出すのだ。

もちろん敵領内になり、高度な隠密作戦ができる力量が前提になる。

そこからフェザーン回廊へ向かわせる。つまりフェザーン回廊から亡命の為ハイネセンへ向かおうとするヘルクスハイマー伯を逆方向から待ち構える。それはあまりにも危険であり、困難な任務になる。

命じられた巡航艦の名はヘーシユリツヒ・エンチエン、艦長は新任のラインハルト・フォン・ミューゼル中佐だ。

ラインハルトは命令を受けるや否や勇躍し、電光の疾さで出立する。どんな困難な任務でも逃げることはあり得ず、自分なら可能性を現実に行けると思っている。

予定通りイゼルローン回廊から同盟領に侵入し、同盟軍の隙を突きながら、フェザーン回廊の同盟側出口付近まで行くことができた。むろん言うほど簡単ではない。途中、幾重にも張られた哨戒網を神業的な読みと胆力で突破した。傍らにいるキルヒアイスも見事な操艦をしてそれを助けている。

しかし、実はここからが問題である。

哨戒網に引っ掛からないようにするためには、常に先読みして移動し続けなければな

らない。少しでも引っ掛かればどんなに逃げても逃げ切れることはない。だが任務を遂行するためにはフェザン回廊同盟側出口までぎりぎり近付くことが必要だ。

そこまで行かず離れたままでは待ち伏せすることはできない。

それには理由があり、フェザン回廊出口から離れるほど航路が次々と分岐し、どの航路を使つてハイネセンまで行くのか分からず、もはや追いやがらない。捕捉できるのはフェザン回廊出口付近のただ一カ所だけなのだ。

つまりヘルクスハイマー伯がフェザンを出立するタイミングにぴったり合わせて捕捉し、素早く任務を遂行するしかないのだ。

ということとは情報が死命を決する。

ヘルクスハイマー伯がいつフェザンから出てくるのか、たったそれだけの情報が必要。

この亡命事件のことはフェザン当局でも認識していた。異例の大貴族の亡命だから。

ただしヘルクスハイマー伯が重大な軍事情報を持っていることまで知るよしもない。

アドリアン・ルビンスキーが言う。

「不思議なことだが帝国でも指折りの大貴族が同盟に亡命したがつているようだ。それ



を帝国はよほど重要に思っているらしく、大規模に追っている。フェザーンとしては思案のしどころだ」

「お父様、先ずはその詳細を知るべきなのでは？ 亡命の理由も、助けた場合の価値もその逆の価値も」

エカテリーナが順当なことを返した。

詳細なところが分からないのだから安易に結論を出さず、事情を知ってから決めるべきだろう。

「エカテリン、それには時間が足りないだろうね。そのヘルクスハイマー伯爵に尋ねても真実を語るはずがないし」

今度はルパートがそう返してくる。

「兄さん、亡命希望はヘルクスハイマー伯爵の一家だけなの？」

「そうだよ。そして自家用艇から乗り換えたりせずにそのまま同盟に持ち込むつもりだよだね」

「え？ それは妙ね。ヘルクスハイマー伯は工業技術に造詣が深くて、自家用艇にもこだわりがあるのかしら……」

「僕もそれは妙に思ったんだ。だけど臨検は拒まれてしまったよ。もちろん強引に探つて一部は分かっている。その自家用艇にはどうも見たことのない何かの装置があるよう

なんだ」

「それで帝国が追っているのかしら。たぶんそうね」

「しかしエカテリン、装置のことはさておき選ぶ道は二つしかないよ。帝国に利するようヘルクスハイマー伯の亡命を妨害するか、同盟に恩を売るよう亡命を万全にするか、どちらかをだね」

「その二つね。でもヘルクスハイマー伯の亡命を完全に防ぐことはできないわ。まして捕縛して帝国に引き渡すことはフェザーンの利益にはならない。そんなことをしたら今後フェザーンを頼りに亡命してくる人間がいなくなってしまうもの」

「そうだね、エカテリン。フェザーンは見かけ上中立の透明な立場でなくては。亡命ビジネスのために」

帝国から同盟に向かう亡命者を通過させ、その時に相応の金を落としてもらう。

この亡命ビジネスもまたフェザーンの主要な産業と言えるものだ。その信用を落としてしまえば大きな経済的打撃になる。ルパートの発言はそれを指している。

「でも積極的にヘルクスハイマー伯を助けても利益にはならないわ。同盟はフェザーンが苦勞して亡命させたなんて思いもせず、ただ通過しただけくらいに考えるでしょう。フェザーンが帝国に対してどんなに神経を使ってるか想像もしていないわ。だから大

した恩は感じない」

「それはフェザンが同盟に寄り過ぎたための弊害だね。同盟にはフェザンが帝国の一部であることを敢えて強調していないから。同盟との商売をするためには政治的背景は見せない方がいいからね」

このルパートとエカテリンの会話に満足そうにうなずき、最終的にアドリアン・ルビンスキーが決断した。

「よし、それでは今回は帝国に利することにしよう。ただし亡命自体を邪魔するのではなく、足取りと日時の情報をも帝国に流すだけだ。このところフェザンは帝国を刺激し過ぎたからには少し宥和的なところを見せておくのもいい。警備船団が強硬に出たことでフェザンを侮られないという目的は充分に達している」

アドリアン・ルビンスキーの言うことを聞いてエカテリーナの目がすつとキツくなった。思うところがあるのだ。ルパートと同時に言う。

「お父様、帝国に恩を売るのはそれだけの理由で」「自治領主、帝国にことさら味方する理由は」

その二人に対し、アドリアン・ルビンスキーは苦笑するしかない。

この場にいる皆に暗黙の諒解がある。

アドリアン・ルビンスキーは先に帝国の工作員だったドミニク・サン・ピエールを預かった。その代価を帝国に払おうというのではないか。貴重な情報という代価を払えば今後帝国はドミニクに何も仕掛けてこないだろう。

「エカテリン、ルパート、何を気を回している。これはフェザン自治領主としてフェザンの私益を考えた結果であり、何も矛盾したことはなくたまたま合致しただけだ」  
「……分かりましたわ。お父様。では私からも帝国への情報のリークに一つ注文があります。その程度はいいでしょう？」

フェザンの利益にとつて合理的な判断である以上、エカテリーナも同意はする。しかし剣呑な目の光を緩ませていない。

ふと見ると、ルパートの方はそんなに咎めている感じがしない。

それがまたエカテリーナを苛立たせた。ルパートも内心はドミニクが安堵されるのを良しとしているのだ。

「我が家の男どもは！」

「どいつもこいつも美人に弱すぎるではないか！」

## 第十九話 484年 1月 遭遇戦

エカテリーナは唐突にミュラーを呼び出した。

今度は公園や街角ではない。

フェザン自治領統治府ビルのカフェテリアである。明るく機能的に作られている。先ず二人はそれぞれブルーベリーの乗ったロールケーキとミルクティーをトレイに取り、相向かいに座った。

「ミュラー、今日は遊びの計画で呼んだんじゃないわ。話があるの」

「それは珍しいね。だからこんな場所？ 何の用だい？」

エカテリーナは少し深刻そうだった。

先日の船遊び以来エカテリーナとミュラーはわずかギクシヤクしている。それは別に悪い意味ではなく、慎重に相手を観察するようになったからである。

「帝国からフェザンにヘルクスハイマー伯爵が来てるのはたぶん知ってるわよね。同盟へ亡命希望のために」

これにはミユラーも意表を突かれた。

エカテリーナがそんな話題を出すとは意外過ぎる。今までフェザーンの政治的情報については敢えて避けているらしく、何も語ったことなどないのに。

もちろんそのヘルクスハイマー伯亡命事件はミユラーも知っている。

というより、その事件のため今や帝国弁務官事務所はてんやわんやの大騒ぎになっているのだ。

「どんな方法でもいい。どんなに金がかかってもいい。大至急情報収集せよ!! この言葉を一言一句その通りにとらえよ」

そうオーデインの国務尚書リヒテンラーデ侯から要請が来ている。前例のないほど強い調子で。国務尚書本人から緊急通信まで使つての直接命令など弁務官事務所ではレムシャイド伯爵を含め誰も経験したことがない。

もしも何の成果も挙げなければ誰かが詰め腹を切られそうなほどの厳命だ。

それでレムシャイド伯爵以下全員が八方手を尽くしている。

航路局の者に接近したり、物資調達を調べたりするが思うような情報は得られない。挙句の果てにフェザーン政府の廃棄物を探ることまでしている。何か有用な書類が含まれていないか探るためだ。

弁務官事務所にいるのは銀河帝国でもエリート文官なのである。それが今やゴミ漁

りとは。

しかし焦るばかりで成果はなく、いよいよ切羽詰まっている。弁務官事務所は今異様な雰囲気になっているのである。

「それで伝えることがあるのよ、ミュラー。簡単に言うわ。ヘルクスハイマー伯爵がフェザーンを出立する日と時間が決まったわよ」

これには驚きのあまりミュラーは声も出ない。

「フェザーン航路局の管制部へ宇宙艇の出立予定が出ているから確かなことよ。今、帝国にとって是非とも知りたい情報でしょう」

「えー、そんなのか！　しかしエカテリン、それを、何で」

こんな重要な情報を語ってくるとは全く意外なことだ。

意外というのはエカテリーナが何故情報を言うのか、ではなく、何故わざわざミュラーに言うのかということだ。情報を知っていること自体はエカテリーナがフェザーン中枢にいる以上不思議なことではない。

「その情報を帝国側に教える、それがフェザーンの方針だからよ」

それでもミュラーを選んで言う理由にはならない。

だから分かった。

エカテリーナはミュラーの立場を考え、手柄を与えてやろうというのだろう。駐在武

官は軍事的な手柄を立てようがなく、文官の牙城である弁務官事務所の中ではただのお客さんのような立場になり、自然と軽んじられるものだから。

エカテリーナがルビンスキーに情報の出し方について注文をつけたのはそのためだ。

ミュラーとしてはそれを聞いた以上のんびりなどしてられない。今は時間が大事、エカテリーナに感謝を重ねて言うのもロールケーキを食べるのも後回しにする。

ミュラーは直ちに弁務官事務所へ情報を伝えるべく走った。

「よくやってくれた!! ミュラー君! これでリヒテンラーデ侯に面目が立つ。私の首も連がつていられるというものだ」

情報を聞いた瞬間レムシャイド伯は大声を出した。その場において話を聞いていた文官たちは小躍りして喜ぶ。弁務官事務所に歓声が響き、書類がまき散らされた。

「高等弁務官殿、では早く」

「ああそうだ、直ぐにこの情報をオーディンに伝えねばならん。いやしかし、ルビンスキー家の令嬢に近い君がいてくれて本当に助かった。大いに感謝する。何が幸いするか分からんな」

ミュラーとしてはこれ以上なく喜ぶレムシャイド伯を見るのは嫌なことではない。しかしエカテリーナと自分とのことを謀略の糸口のように言われるのは若干複雑であ



る。

エカテリーナと自分は、別の連がりがあるのだ。

それは何だろう。

ミュラーはまだ恋という文字を奥底に封印していることにさえ気付かない。

ヘルクスハイマー伯爵がフェザン回廊を出てくる日時が特定できた。

危険な敵領で遊弋していた巡航艦ヘーシユリツヒ・エンチエンとラインハルトは、駐在武官ミュラーなる者が手に入れたという情報を元に最適解を導いた。こんなラインハルトの行動までフェザンが予期しているはずはなく、せいぜい何かやるくらいにか思っていないかったのだが、帝国はあまりにしっかりと準備していた。それが真価を發揮しようとしている。

「よし、ヘルクスハイマー伯を逃がしはしない！　これで航路に待ち伏せてやる。キルヒアイス、俺たちがこんなところで任務失敗などしてたまるか」

「そうですね。ラインハルト様。先は長いのですから」

そう、二人の先にはこれから塗り替えられるべき世界が広がっているのだ。任務はきつちり仕上げ、更なる飛躍のステップにする。

さあ、では今は目の前の任務を考える。

それは思ったより簡単ではなかった。ヘルクスハイマー伯の自家用艇を捕捉し、帝国の新兵器指向性ゼツフル粒子発生装置を取り返すまでは予定通りだが、この宙域に同盟艦が予想外なほど多数存在し、新鋭巡航艦ヘーシユリツヒ・エンチエンといえどもそれらを振り切るのには容易ではない。

だがしかし、ラインハルト達は奇策でそれを乗り切る！

接收したばかりの指向性ゼツフル粒子発生装置を試運転もなしに起動させて使ったのだ。あまりに大胆な行動だがそれで乗り切り、任務はほぼ達成できた。

そして巡航艦ヘーシユリツヒ・エンチエンはイゼルローン回廊に戻らず、何とフェザン回廊を使って帝国に帰還している。

この作戦は指向性ゼツフル粒子発生装置などとは関係なく、それ以上に銀河の歴史を変えるほどの大きな影響を与えることになる。それはこの時からラインハルトの胸の内にある。

「しかし分かったことがある。キルヒアイス、回廊は二つあるのだ。今イゼルローン回廊ばかりで帝国と叛徒は戦っているが、これはとても奇妙なことではないか」

「そうですね、ラインハルト様」

「敵も味方も視野狭窄と言うべきだ。二つの回廊を使えばよりダイナミックな戦略が取

れる」

「いずれラインハルト様が帝国軍の指揮をお執りになった際にはフェザーン回廊もお使いになると」

「そうだ。今はまだそんな力はない。ただしいずれ力を蓄え、誰もなしえなかったことをして宇宙を手に入れたい」

「その日が楽しみでございます、ラインハルト様」

ヘルクスハイマー伯爵夫妻は亡命に失敗した。

それどころか途中で死んでいる。艇を脱出する際のミスが原因だ。

いくらラインハルトに追われて慌てていたとはいえ、技術に詳しい伯爵にしては痛恨のミスだった。

生き残りはたった一人、伯爵家の一人娘マルガレーテだけがヘルクスハイマー家の従者ベンドリング少佐と共に亡命を続けることになった。ラインハルトとキルヒアイスは親を失ったこの娘に深く同情し、騙して帝国に連れ帰ることはできなかったのだ。任務の内に含まれていない以上、わずかな上乘せのためにその娘を犠牲にすることはない。

帝国政府はその報告を受けても、不思議と娘の亡命について何も言うことはなかつ

た。

オーデインのリヒテンラーデ侯はその娘のことに関心がなかったからだ。

「ヘルクスハイマー家の娘などどうでもよい。ましてゼツフル粒子なんかの武器などどうなってもよいのじゃ。一番大事なのは帝室であり、それについての情報は守れた。それで充分よの」

銀河の反対側ではこれも緊急で動いている人間たちがいる。

「それでグリーンヒル君、情報部からの話は確かなのか。間違い、あるいは欺瞞であるという可能性についてはどうか」

きちんとした座り方をして堂々とした態度を崩さない人物がいる。幾多の戦歴と英知が顔に刻まれている。

しかし、今はそこにわずか憔悴の色があった。

ここ自由惑星同盟軍統合作戦本部ビルの一室において、その中枢となる二人の人物が話し合っている。

「シトレ本部長、それについて情報部ブロンズ中將も確実性は百分に近いと言ってきます。オーデインに潜入した工作員は特に有能で、ガセの可能性は小さいと」

「事実であれば事は重大だ。確認するために時間を取る猶予はないな」

「それに帝国とすればわざわざガセネタを使う理由は一つもありますまい。亡命者にこ  
とさら注意を引いて得することは何もありません」

「では何としてもその指向性ゼツフル粒子に関する技術情報を手に入れる必要がある。  
帝国も空恐ろしい兵器を作ったものだ。よろしい、現在時刻をもつて本部長命令を発令  
する」

統合作戦本部長シトレ元帥は無能とは程遠い。

新兵器の重要性を正しく認識して命令を下した。

「ではフェザーンに最も近い第十二艦隊に緊急出動を命令する。ボロディン君に連絡を  
頼む」

「了解しました。しかし本部長、より早くであれば別の方法があります。本部艦隊のう  
ちで現在哨戒任務に就いている艦隊を差し向けた方が早いと思われます。ここ数日帝  
国軍艦艇の侵入が多く、通常より大規模に哨戒を出していますので」

ここでグリーンヒル大将もまた的確な助言をする。

名参謀と称されるゆえんだ。

「なるほどその通りだ。グリーンヒル君。それでフェザーン方向に哨戒任務中の艦隊は  
誰が指揮している？」

「現在いくつかの艦隊が出ていますが、最新の報告によると最もフェザーンの近くに  
いるのはラルフ・カールセン准将、艦艇数約千二百隻の分隊です」

シトレとグリーンヒルの二人の脳裏には、士官学校卒業ではないがその分苦労して実  
績を積み上げてきた軍人の姿が浮かぶ。

実直で有能な軍人だ。

昇進は遅いが実績を評価され、准将にしては大きな艦隊を任されている。

「カールセン准将ならその方がいいだろう。直ちにその艦隊の哨戒任務を解く。フェ  
ザーン回廊に向けて急行するよう通達するのだ」

「分かりました。情報部と補給基地にも連絡を取ります」

その頃には既にラインハルトは任務を終了させようとしていた。

しかし、実は帝国軍はラインハルトのみ派遣したのではなかった！

それは当たり前のことであり。帝国軍はヘルクスハイマー伯亡命阻止の重要性を  
しっかりと認識している以上、ラインハルトの一隻のみに賭けるマネはしない。

実際、新鋭巡航艦をいくつも派遣していたのだ。

それらのほとんどはイゼルローン回廊から出て間もなく同盟の哨戒網にかかって撃

沈されていた。そうでなくとも早々と諦めてイゼルローンに逃げ帰った。

結果的にはヘーシユリツヒ・エンチエンとラインハルトだけが任務を達成できた。

ラインハルトが急ぎフェザーン回廊へ向けて進んでいた時、すれ違う帝国艦隊がいた。通信封鎖のためどちらもその存在に気が付かない。

それは単艦ではなく分隊規模の艦隊である。帝国軍は単艦での潜入作戦だけではなく、なんと艦隊さえ投入していたのである。犠牲は承知、捨て石に近い物でも艦隊を動かす、敵領深くへと送っている。

帝国軍に対し帝国政府中枢から異例なまで強い圧力がかけられているのだ。いかなる犠牲も厭わず伯爵家を抹殺せよとの要請である。帝国軍はそれに応じて幾重にも作戦を発動しているが、潜入と同時に、ある程度の抵抗を排除できる戦力を投入し、そのどちらかが任務を達成すればいい。そうでなくても陽動として目くらましにはなる。

その特命を帯びた帝国艦隊千七百隻はシユムーデ少将が率いている。シユムーデ少将が命じられたには理由がある。

忠実な将であり、それゆえ任務に臆することがない。今までの会戦において司令部にとって非常に使い勝手の良い将であった。攻守のバランスでいえば特に攻勢において迷わず愚直に進める特徴があり、最終局面の突進に多く用いられて高い評価を得てきた。

この達成困難な作戦についても「やれることをやるだけだ」と言っただけで命令通りに引き受けた。

ここで教科書に書いたような遭遇戦が展開されることになった。

帝国と同盟、二つの艦隊はフェザーン回廊の同盟側出口付近という同じ所を目指して進んでいたのだ。

カールセンとシユムーデが遭遇するのは必然である。



## 第二十話 484年 1月 良将

ラルフ・カールセン准将の率いる同盟軍本部分隊千二百隻と、シユムーデ少将率いる帝国軍千七百隻はほぼ同時にお互いを探知した。

どちらも自分の任務には充分過ぎる艦艇数だと思っていた。ところがもはやそう思っている事態ではない。これは本格的な艦隊戦になる。

数の上では帝国軍の方が明らかに多く、これはカールセンの同盟側には憂慮すべき戦力差である。

しかし帝国軍にとってここは敵地だ。さっさと任務を済ませてどちらかの回廊まで逃げなくてはならない。同盟の本格的な後詰が来れば終わりだ。この時間的制約、また補給のない物資的制約を考えればおのずと使える戦術は狭められ、シユムーデの帝国艦隊は不利な状況に立たされていることを自覚せざるを得ない。

「敵艦隊発見！ 接近しつつあり！」

何度聞いても聞き飽きることがない緊張のセリフだ。言うオペレーターも聞く側にとっても鼓動の高鳴る一瞬である。

探知はほぼ同時だった。

しかし、反応はシユムーデ少将の方が早かった。敵地にいる緊張感が良い方向に作用したのだ。

そして驚くことで時間を空費するような無能ではない。

シユムーデ少将は相手が自分たちより少数であることを知った瞬間、直ちに急戦を選  
択した。

どのみち逃げても振り切ることはできない。地理不案内なこちらよりも相手の方が  
速度を出せるだろう。それならばここで一戦して破っておいた方がいい。下手に付か  
ず離れず追尾され、その上応援を呼ばれたら挟撃の憂き目にあつて全滅してしまう。

「急進して短時間のうちに決着をつけることを企図する。全艦最大戦速、最短距離を  
とつて向かえ！ その間に戦艦はエネルギー充填、長距離砲斉射準備。レッドゾーンに  
入りしだい斉射をかける！」

対するカールセンは乱戦を望まない。

探知しても慌てることなく出方を伺っていた。きちんと準備して後の先を取るつも  
りだ。

そして帝国軍の思惑が予想の範囲内だと知る。

「防御力の強い艦を前へ。空母及び駆逐艦は後方に移動。被弾しにくいよう敵に対し真つすぐ向き、陣形を整えろ！ 基本は損害を少なくし、徐々に後退する。どのみち帝國側は深追いするわけがない」

互いの艦隊が近付く。

イエローゾーン突破、そしてレッドゾーン。

「撃て！」

「フアイア!!」

ここから死のエネルギー束が互いに飛び交う。宙域は明るい光の帯で一気に白熱した。

帝國軍の勢いが勝った。その数と斉射の威力に優れていたのだ。

「よし、コースそのまま、攻勢を強化して敵中央部を突破する！」

シムムーデは序盤においてうまくいったのを知る。

敵陣の中でも防御の弱い小型艦艇を中心に被害が拡大していき、陣形も乱れてきたのを見て取った。

「押せ押せ！ こっちは背水の陣だ。ここでモタモタしたら全員生きて本国を拜めないぞ。死ぬ気で戦え！」

シムムーデ少将はもともと正統派の戦術を好み、こういった猛攻が性に合っている。

部下を叱咤した。聞いている兵士もここが敵地なことくらい言われなくとも分かっている以上、必死にならざるを得ない。

帝国軍の攻勢は尋常なものではなく、これはカールセンの予想を上回るものだ。

しかしカールセンは落ち着きを崩さない。

「全艦隊、ゆっくりと後退しつつ撃ち返せ。集中砲火は必要ない。間断なく撃ちかけ、相手に斉射をさせないよう妨害すればいい」

同盟側はいったん守勢に回りながらチャンスを伺うことに徹する。艦隊をコンパクトにまとめ、乱れた陣形を修復して付け入る隙を与えない。

「回避行動は直撃を同時に食らわないことのみ心掛ける。先ずは損害を最小に抑えるんだ。ミサイルで牽制しながら距離を保て。相手の帝国軍は補給を受けられない以上こんな猛攻は続けることはない。柔軟防御に徹してチャンスを待てばいい」

二つの艦隊は戦いながら互いの力量を推し量る。

帝国軍の鋭鋒があと一步で突破を果たし、分断に成功するところまで来た。

しかし、またしてもカールセンの同盟軍は一瞬早く艦列の隙間を埋めてそれを許さない。

「むう、だめか……」

シウムーデは決定的に破ることができないのを悟った。敵は無能ではない。

瓦解に持ち込むのは無理だ。

このままの戦いを続ければ帝国艦隊の方が先に行動限界点に達してしまい、敵領でそんな状態になるのは100%の死を意味する。

この戦いを諦め、帰還の方を優先させるよう方針を転換した。

「全艦、もう一度斉射と同時にミサイルをありつたけ撃て。そうしたら着弾を見ることがなく急速後退せよ。敵が艦列の修復を図る間にできるだけ距離をとれ」

欺瞞の大攻勢をかけ、その一撃の際にシウムーデは撤退をはかった。

攻撃の成果を観測することもなく後退に転ずるというのも常識外れの戦術だ。シウムーデは思い切った行動も取れる良将だった。

さて帝国軍が撤退に転ずれば、カールセンの方では待ちに待った反撃のチャンスとなる。

「よし、前進を始めろ！ 攻勢に出るぞ。帝国艦隊の後尾を削り取ってやれ」

しかし慎重さを捨てることはないのは、カールセンもまた凡庸な将ではないからである。

「慌てて突出すると逆撃に遭う。落ち着いた行動をしろ。距離を丁寧に観測しながら長距離砲でゆっくり迫ればいい。向こうは必ず罠をしかけることを考えている」

その通りだった。シユムーデの方は逆撃をもう一度や二度行えるくらいのエネルギーと弾薬は残していたのだ。

ここから丸一日にも渡る撤退と追撃の戦いは、互いに疲労の貯まる神経戦になった。

戦いの帰趨は双方にとって不満足な結果に終わったといえる。

シユムーデの艦隊のうち半数にも満たない八百隻だけが追撃から逃れることができた。

実はすぐ近くまで同盟軍ボロディン第十二艦隊が来ていたのだが、ぎりぎり遭遇しないで済んだのは本当に幸運だった。もしも一個艦隊の一万隻以上と戦うことになっていたら全滅は火を見るより明らかだ。

シユムーデは物資の関係でそこから更に三百隻を断腸の思いで廃棄することになる。そうしないとイゼルローン要塞まで戻ることできない。

こうして艦隊の大半を失いつつ帰還できたシユムーデは驚くべきことを知る。

当初の目標であるヘルクスハイマー伯が自分とは別に出動していた巡航艦によって片付けられていたのだ。

「シユムーデ少将、ご苦勞であつた。亡命貴族ヘルクスハイマー伯爵の件は別働艦によつて片付いたと知つていよう。ただしそれは結果論に過ぎず、卿の働きも無駄ではない」

「ミュツケンベルガー元帥、当艦隊が任務に失敗してしまい弁解の言葉もございません。しかしそんな別働艦が出ていたとは複雑な気分にならざるを得ません」

シユムーデも敵領へ決死の作戦を敢行したのだ。ミュツケンベルガーもシユムーデの意を汲み、その勞をいたわる。

「卿の気持ちはよく分かる。いかに取り繕つたところで、卿の艦隊はただの匣であり捨て石にされたようなものだからな。しかし、今回の任務は二重三重の手を打たねばならないほど重要なものだったのだ。帝国中枢部からの厳命である。そして、作戦の目標が達成されたのは重畳だ。卿が敵と戦い、目を引いてくれたおかげとも言える」

「ありがたいお言葉です元帥。多数の部下が帝国に還ることなく散りました。この作戦に意味があつたという今の言葉は大いに慰めになるでしょう」

「それだけではない。よく敵地での遭遇戦からよくぞ五百隻も戻させた。この功により卿には中将への昇進が内示されている」

複雑な表情のまま退室するシユムーデを見ながら、ミュツケンベルガーは考えた。

次に帝国軍が軍事行動を取る際にはシユムーデの面目を施してやろう。

一方、こちらは同盟軍カールセンである。

同盟領に侵入してきた帝国艦隊を全滅させられなかったのを至極残念に思った。有利な状況の追撃戦にやつと持ち込んだのに。

それには一つの理由がある。

追撃の最終局面で救難信号の出ている脱出艇を感知したのだ！ それは民間航路上にあつたのだが、この戦場から遠くない。通信をとってみれば、何とヘルクスハイマー伯爵の子女と従者が乗っている艇だった！

その子女が乗っていた自家用旅客艇は度重なる過負荷によってエンジンが不安定になり、暴走の危険が生じたため廃棄したとのことだ。

カールセンは勇猛な軍人ではあるが非情ではなく、追撃よりもその救助を優先させた。

「妾は狭苦しいところにずっとおつたのじゃ！ 遅いではないか。同盟軍とやら」

その小さな娘は最初から機嫌が悪い。

さすがに帝国屈指の貴族ヘルクスハイマー家、脱出艇といえども普通のものよりよほ



ど金がかかった立派なものだ。それなのに狭くなったのは豪華過ぎるドレスと山ほどある荷物のせいではないかとカールセンは思ったが、ここは丁重な言葉で返した。

「ヘルクスハイマー家の方ですか。ご安心下さい。自由惑星同盟に亡命希望ということ聞いています。その亡命は受理されていますので、先ずはこちらの戦艦に移乗下さい。艦内での行動の自由は保証します。ではこれより首都星ハイネセンまで航行を開始します」

「そちは平民じゃろう。言葉の使い方がまるでなつておらぬぞ。敬意が感じられぬ」  
カールセンは驚いた！

少女の返事は救助してくれた感謝どころか居丈高としか言いようがない。

自分としてはかなり気を使った物の言い方だったのだ。それをいきなり否定されるとは。

この少女の隣には帝国軍の軍服を着た従者らしいものが控えている。

無言ではあるが目はこちらに必死で訴えていた。「こういうものなのです。ご容赦下さい。」

帝国貴族とはそんなものなのか。たかが十歳程度の娘でも尊大だ。

カールセンは心で溜息をつきながら、しかしいつそう丁寧な言い方を心掛けた。

「お嬢様に置かれましては、ごゆるりとお過ごし下さいませ。この艦で一番上等な部屋を

「ご用意いたしますので。旅が快適になりますよう私共一同、そろって努力いたしたく存じます。途中、何なりとお申しつけ頂ければ」

「そんなこと当たり前じゃ。いちいち言うでない。それより早う案内せよ。バンドリング、荷物を持ってまいれ」

このときカールセンの部下の少なくとも半数が駆け出して行った！

手近な物陰かあるいは別通路に入り込む。そこで大笑いをするためだ。

日頃謹厳実直な艦隊司令官が、取って付けたような丁寧語で子供の機嫌を取っている。

まるで出来損ないのメイドのような珍妙な言葉だ。

これは笑わないではいられない。物陰に到達する前に笑い声を隠しきれない者までいた。

カールセンもそんな部下の気持ちにはよく分かる。

元々カールセンは部下には寛容な苦勞人であった。

しかし、後で部下の数人が周りにウケを狙って、「全艦主砲、お撃ちになつて下さいませ」シールド展開して頂かないとわたくし困りますわ」などと言っているのを偶然聞いてしまった際には、遠慮なくぶちのめした。



## 第二十一話 484年 1月 内患

カールセンらがハイネセンに向かつて航行している途中、そのヘルクスハイマー家の子女マルガレーテ・フォン・ヘルクスハイマーが重大なことを言ってきた。

「同盟軍のヒゲのむさくるしい将よ、そのヒゲはどうかならぬか」

これにカールセンは一瞬詰まった。

そう言われたのなら、どうにかしなければならぬのか。しかし自分のトレードマークともいえる立派な髭を今さら。

「はっ、冗談じゃ。妾が言いたいのはそんなことではない」

本当に冗談なのか？

マルガレーテの顔は決して楽しそうではないのだが。

「いえ小官の心遣いが足りませんでした。直ぐに対処いたしますのでご容赦の程を」

「冗談じゃと言うておろうが！ しつこい！ 根に持つ方か？」

これは理不尽だ。カールセンもぐつと詰まる。

ただし少女の次の言葉でそんな気持ちは消え去る。

「妾は一応伝えておかねばならぬことがあるのじゃ。父上から万一の時のために言付かったことゆえ」

「勿体なきお言葉。それは何でございましょう、お嬢様。わたくしで良ければ承ります」  
もはやカールセンは諦めの境地だ。返答にもすっかりメイド言葉が板についてきた。  
また部下が笑いをこらえている顔なのが気に入らない。

「それは、父上は新しい武器の情報を妾に預けていた。品物は帝国軍の追手に渡したのじゃが…… とにかくすんなり亡命できたのなら、その方らに渡して誼をつなぐつもりなのじゃ。しかし妾としては同盟軍とやらを今一つ信用できぬ。よって今も持つておるがまだ渡すことはせん」

よく少女は打ち明けてくれた！ それは口にした言葉とは違い、カールセンの実直さを知ったからであり、また同盟艦の将兵らが屈託なく明るいのを目にしたためだ。

ともあれこれが真実なら、いずれ同盟軍は指向性ゼツフル粒子の詳細な技術情報を手にできる。

今回の作戦は完全な形ではなくともその成果は充分なものだった。

これでオーデインで孤独な任務を行うグラスノフの努力もやつと報われる。

実のところ、この事件は帝国軍と同盟軍の両方ともその目的を達成するという非常に稀な例になったのだ。

ハイネセンの統合作戦本部ではまた同盟軍中枢の二人が安堵の溜息をもらす。

「帝国軍新兵器の技術情報はなんとか手に入ったわけだ。先ずは一安心と言える」

「シトレ本部長、まだ手にしたわけではありません。その貴族の子供から情報を渡してもらい、更に検証いたしませんと」

「グリーンヒル君、子供を手なずけるのはなんとかやつてもらいたい。情報部が下手に介入するとその子供にとっても不幸なことになるだろう」

「私もそう思います。情報部では強引なやり方をするかもしれません」

二人には共通の危惧がある。そのやり方というのは強引で、おそらく洗腦的、あるいは薬物的な方法を含むからだ。

「重大な情報を持つとはいえ、正当な手続きを踏んでやって来た亡命者であることには変わりがない。その人権を保障するのが民主国家というものだ」

「確かにそうです、本部長。では子供を手なずけるのは早めに」

シトレ本部長の言葉に感動を憶えながらドワイト・グリーンヒルは同意を示した。

グリーンヒルは同時に別のことも考えた。このシトレ本部長は正しく民主国家の軍のあり方を知っている。それは貴重なものだ。今問題にしている貴族の子供のみなら

ず同盟軍全体にとつても。

しかしそんな民主的な考えを持たない者も軍にはいるのだ。

今、同盟軍には公然と派閥抗争がある。

どこにも属さない異端児もいるが、軍内のほとんどの者はそれぞれ派閥に属して争いが止むことはない。

中でも強固な派閥を作り上げ、次々と子飼いの将を重職につけているロボス元帥派が台風の目だ。周りがいかに牽制しても勢いは止まらない。同盟軍の派閥抗争そのものを嫌っているドワイト・グリーンヒルも暗に抑えにかかっていた。しかし、着々とロボス元帥派の面々は勢力を伸ばし、ついには同盟軍の実働戦力である艦隊司令官職さえも蚕食しつつある。もはや同盟軍十二個艦隊の半分以上はロボス派に占められてしまつた。

一方、もうひとりの元帥であるシトレ元帥もまた派閥を好まない。しかし、士官学校の校長が長いシトレ元帥は、ほとんどの士官がその清廉な人格を知っている。敬愛する者も多く、シトレ元帥の側にも人が絶えない。第五次イゼルローン攻防戦の後で元帥昇進を果たし、それはロボス元帥より後であるにもかかわらず統合戦本部長に就任できたのは好意的な評判が大いに後押しした。

しかしそのことがかえってロボス元帥派を刺激し、対立を深めることにもなっている

のは皮肉なことである。

他にも同盟軍にはウランフ中將を中心とした主戦派という者たちがいる。同盟軍の存在意義とは帝国艦隊と戦うこと、それしかないと信じている。

主戦派の將は帝国との会戦があれば率先して参加を名乗り出るのが常であった。そのためウランフ第十艦隊などは出世か死か、どちらかの艦隊と言われるようになった。必然的に勇猛なものが残っていき、それがますます艦隊の性格をはつきりさせる結果になる。

それらともう一つ派閥らしいものが存在する。

同盟軍内の後方部は後方部で前線將兵から侮られることに嫌気がさしていた。確かに後方部は命の危険は少ないかもしれない。ただし、何の苦勞もしていないわけではない。

むしろ平時に苦勞を背負っているのは後方部だ。將兵はいつでも食うし給料も要る。前線將兵がその苦勞を理解せず侮蔑してくるならば後方部は依怙地にならざるを得ない。

後方部はドーソン大將を中心としてまとめ、そんな侮蔑に対し神経過敏なほど反撃する。

そんな中、ドワイト・グリーンヒル大將はいつの間にか周りから良識派軍人の筆頭と



見なされる立場になった。誰とでもきちんと会話をし、礼節と友誼を保つことを自分に課しているからだ。

本人は心情的にはシトレ本部長に最も近いと思っている。

しかし、なんとか同盟軍内の派閥抗争をクールダウンし、宥和的にもつていこうと常に苦心していたのだ。

つまり同盟軍は大きく分けて、ロボス派、シトレ元帥派、主戦派、後方部、そして良識派というものが存在し、実に複雑な色合いになっている。しかもそれぞれが宥和、あるいは牽制しあっている。

良識派筆頭ドワイト・グリーンヒルは士官学校で2学年下だったアーサー・リンチ少将と深い親交があった。そのリンチを日頃から臆病者だと公言して嫌っていた主戦派ウランフ中將やボロディン中將とは仕方のないことだがグリーンヒルは自然に疎遠になつてしまう。

逆にグリーンヒルは後方部代表格ドーソン大將とは士官学校から友達だったのだ。

「おいドワイト、お前は何でも一人で考えて苦勞する癖がある。たまにはできないもんだできないと言つたらどうなんだ？」

「そうできれば気が楽だが、ドーソン、お前にだけは言われたくないな。後方部だつて我

慢し過ぎでひねくれてるんじゃないか」

「おつ、言い方はともかくちよつとは苦勞を分かつてきたのか。なあに、適当にガス抜きしているさ。後方に文句を言ってきた艦隊には物資になぜか齟齬が出るんだ。特に食料品にな」

「おいおい、そいつは聞かなかつたことにしておくぞ」

今、その亡命貴族の少女のことで問題にしているのは、同盟軍の最大派閥であるロボス元帥派とその息がかかっている情報部とが民主的な思想をほとんど理解していないということだ。民主国家の軍なのに。

軍は民から養われていて、民を守るために存在しているものだということをすっかり忘れ、まるで軍が民の上にあるものであるかのように思っているし、実際そう振る舞っている。

その嫌な懸念をいったん頭から振り払い、ドワイト・グリーンヒルは先を言う。

「シトレ本部長、その新兵器指向性ゼツフル粒子が、いつ使われることになるか。帝国軍がどういふふうに切り札にしてくるか。これを常に頭において会戦に臨まなければなりません」

「その通りだグリーンヒル君。願わくは決定的な場面でなければよいのだが」

—— 帝国と同盟の争いは年を追うごとに激しくなる。

どちらの体制も長く続き過ぎ、爛熟して変化を欲しているようだ。

翌年早々にヴァンフリート星域において戦いがあつた。

これは惑星上の基地を巡つての小競り合いで終わるはずのものだった。

しかし、お互いに戦力を逐次投入した結果、本格的な機動部隊を動員しての戦いになつてしまい、どちらの損害も大きい。

また、この年の終わりには第六次イゼルローン攻防戦が巻き起こる。これはお互い何個艦隊も動員する本格的な艦隊戦だ。もちろん戦死は数百万人規模に上り、帝国軍も同盟軍も屋台骨が揺らぐほどのものである。

それを傍観する立場のフェザーンでは戦いの前に得られた情報を元にして精密に予測を立てた。やや同盟軍不利という分析の結果が出たことを受けて、フェザーンは同盟寄りの態度をとつた。フェザーンは同盟に対し物資の融通、負債の償還繰り延べ、国債の引き受けといった方法をとつた。フェザーンの利益自体には極力影響のない範囲内で下支えする。

それは均衡政策をとるフェザーンとしては当然だ。

決定的に天秤が傾くことは避けなければならない。これまでのところ大半の場合同盟側にテコ入れしている。これまで繰り返された戦いで同じ程度の損害を被っている。帝国より人口と社会資本の少ない同盟の方が相対的にダメージが大きく、国力の變化がゆっくりと帝国に傾きつつあったからだ。これまで人口において帝国の半分の規模である同盟が拮抗できていたのは高い生産性のためだが、このところ疲弊が進んでいる。その回復力は帝国を下回り、戦いで引き分けでも同盟には辛い。まして負けてしまえばそれを取り返すのは大変だ。

しかしながら、迎えた第六次イゼルローン攻防戦でははつきりと帝国の勝利という結果が出てしまう。

「これは重大なことだ」

戦いの記録を自宅のスクリーンで見ながら、アドリアン・ルビンスキーが珍しく深い溜息をつく。

「損害は一方的というほどではありません。壊滅は避けられたようです。フェザーンの経済支援のため、同盟軍に物資が豊富だったことも大いに役に立ったかと」

ルパート・ケッセルリンクが客観的な事実を言う。

「ルパート、その言は間違っていない。フェザーンの支援は無駄ではなかった。確かに

同盟軍は艦隊戦では決定的な劣勢ではない。戦いの決着はやはりトウルハンマーによるものだった。ただし、二つの考えるべきことがあるのだ」

アドリアン・ルビンスキーはウイスキーの入ったグラスを手取る。それは横にいるドミニクが氷を入れて作ったものだ。その手慣れた様子を見たエカテリーナはどうしても目がきつくなる。

そんなことをよそにアドリアン・ルビンスキーが説明を始めた。

## 第二十二話 486年 2月 構想

アドリアン・ルビンスキーの言葉、それはフェザーンの今後の方針に関わる分析だった。

「一つはこのフェザーンが肩入れしても同盟が負けた、その事実だ。穏やかな肩入れでは戦局を左右するに至らない。経済支援という単純な方法では戦いの帰趨までフェザーンの力は及ばないということだ」

「つまりお父様、今後はもつと直接的なことをしなくてはならないということね」

「エカテリン、そうだ。お互いが動員する戦力の規模や主な将帥、こういった情報をどちらからも手に入れられるのはフェザーンだけだ。今後はそういった情報の操作も考えねばなるまい」

ルビンスキーはこれまで情報を手札に使ったことは幾度もある。

しかし会戦の軍事的機密を直接どちらかに流したことはない。そうしてこなかったからこそ、フェザーンに帝国軍も同盟軍も多くの部品を発注したりするので。その発注だけで動員規模も損害もかなり正確に推測できるのに。

もしも情報漏洩の疑いを持たれて取り引きを失えばフェザーンの経済的打撃は大きい。

しかしそれでもなお、ルビンスキーは強く介入しようとしている。

「……自治領主、それでは嚴重に抗議されるのでは。フェザーンには両方の弁務官がいて、いわば監視されているのですから」

「確かにそうだがルパート、均衡が崩れてからでは遅いのだ。」

「そこまで言われるのは、もう一つの理由があるせいですか？ 自治領主」

「おお、よく分かったなルパート。その通りだ。戦いを詳しく見れば単に物量の差で決着が着いたのではない。率いる将帥の指揮ぶりに差がある！ こういった人的資質の差というものがどうも気になる。これは一朝一夕でついたものではない。深い所で帝国と同盟に予想以上の力の開きが隠れているのではないか。だからこそ憂慮すべき事態なのだ」

そのルビンスキーの話を聞きながら、エカテリーナには思うことがある。

見ていた戦いの記録にはラインハルト・フォン・ミューゼル少将の名があった！

そんな記録に名が記されるほどの人物になったのだ。しかも、戦いでは大いに活躍している。帝国軍で筆頭の功績ではないか。

エカテリーナはあのオーディンでの日々でラインハルトが見せた的確な戦術眼を思

い出さざるを得ない。やはり実戦でも人並み外れた力量を發揮したのだ。

「お父様、私もそう思います。均衡を取るなら次の戦いではもつと同盟の方に力を貸す必要があると思います。ついに表舞台に出てきた若者たち、並ではありませんから」

そして次の会戦はわずか三か月後に起こった。誰にとつても予想外の早さだ。

自由惑星同盟の選挙年には軍事行動が付き物だ。理由はもちろん、勝てば現政権は人氣を博し支持率が上がる。

それだけではなく、救いがたいことに負けても都合がいいのだ。

政府にとつて都合の悪いニュースから選挙民の目を逸らすという重要な効能がある。下らないスキャンダルに始終悩まされている政局運営者にとつては他に大きなニュースが欲しい。

災害はまさか作り出すわけにいかないが、戦争なら作り出せるではないか！

それに国難ともなれば国民は団結せざるを得ないし、それもまた現政権に有利に働く。

そのため定期的に馬鹿馬鹿しい軍事行動が起こされる。軍部の中の良識派にとつては投げ出したくなる厄介ごとだ。

近年は同盟から積極的にイゼルローン要塞へ攻めかかることが続いている。同盟の



多くの兵士が故郷に帰れることもなく回廊の露になつていくといふのに。

一方、帝国の側にも事情がある。

この年は皇帝フリードリヒ四世の在位三十年に当たり、節目になる年だった。帝国の側ではこれを祝う華が欲しい。帝国の誰もが喜べるニュースを。

そのため、帝国の側から何らかの軍事行動があることは確実視されていた。先だつて帝国軍も同盟軍も準備をしている。補給物資を整え、新兵を訓練し、艦艇の増産と補修をやり、艦隊戦に備える。

それがこんなにも早い月に、それも単なる示威行動で収まらない規模になるとは！  
フェザンはこの戦いで初めて直接的な情報を同盟に渡した。

帝国軍がイゼルローン要塞から同盟方向に出撃する、その規模が四万隻に近いものになること、順当にミュツケンベルガー元帥が率いることまで伝えた。

恩を着せるためハイネセンにあるフェザンの弁務官事務所を使わず、逆に同盟のフェザン駐在弁務官ヘンスローにもつたいぶつて伝えた。

しかし誤算がある。

ヘンスローは外交官にあるまじき無能者だった。せつかく与えられた情報も、パーティーの二日酔いのために決定的な遅れになつてしまふ。いや、二日酔いが覚めても急ぎもせず情報の重要性を認識さえしていなかった。そのため情報の価値は半減してし

まう。

この戦いは第三次ティアマト会戦と名付けられた。

会戦の結果はまたしても帝国軍の勝利だった。

同盟軍の方が早く戦場から退いた。帝国軍も皇帝の在位を祝う式典に華を添えるという目的を達して帰還する。式典の途中で皇帝や貴族をたつたの一分ほど楽しませるニュースを作るためだ。

黒真珠の間で談笑しながら舞踏の準備をしていた貴族たちはニュースを聞いて顔をほころばせる。帝国にとって素晴らしいニュースだ。

しかし、ほんの一分後には中断された談笑の続きを思い出してまた始める。

たつたそれだけのため、勝った側の帝国軍兵士もまた百万人が死ぬことになったというのに。

フェザーンの側では深刻な事態を認識している。

フェザーンからの流した情報と本格的な経済支援を得て、同盟軍はハイネセン近辺に大規模な後詰めを用意できていた。万が一、帝国軍が長駆して侵攻してきた場合に備えてのことだ。おかげでティアマトから早めに撤退することが可能になり、動員された三個艦隊のどれも壊滅には至っていない。

しかし結果を見れば大敗は大敗だ。ヘンスローの無能さがあつたにせよ、もしも情報を渡したことを知られたらフェザンが懲罰されるという綱渡り、つまり危険なほどの水準で肩入れしたというのに、結果は同盟が勝つどころではない。

情報操作だけではエスカレートしていく軍事行動をコントロールできないのか。

このまま帝国と同盟の軍事バランスが崩れるのをフェザンは座して見るわけにいいかない。

そこでアドリアン・ルピンスキーは政治的仕事を帝国と同盟に仕掛けようとする。

しかし、帝国国務尚書リヒテンラーデ侯とその懐刀の目をかいくぐるのは容易ではない。

その一方で同盟については比較的うまくいき、若い有望な政治家に接近することができた。選挙資金や選挙アドバイザーという形での支援が容易だったからだ。これで影ながら影響力を行使できる。もちろんすぐにといいわけではないが、政治への先行投資ははずれ有効になる。

「帝国よりも、市民の意見が政治の主体であるという国是の同盟の方が操りやすいとは皮肉なものだ。帝国貴族の伝統が、選挙運動でひっくり返る同盟権力よりも強固だとは面白い」

「しかしお父様、同盟に対するフェザーンの影響力が実を結ぶのはまだ先になりそうですわ」

「それでも何もしいないよりいい。同盟の弱体化といっても十年や二十年は持ちこたえるだろう」

「そう思いますが、いろいろな選択肢を考えて対処しなくては」

エカテリーナがこう言うのには理由があった。

心の内で一つの選択肢を作り上げていたのだ。

それはかつてオーデインにいた頃、エカテリーナがラインハルトたちと過ごし、いろいろな戦いの話を聞いたことが元になっている。

エカテリーナ本人でも気が付かないうちにラインハルトから結構な影響を受けていた。

そうして出たエカテリーナの考え、それはフェザーンも直接的な軍事力を持つというものだ！

今の段階で帝国や同盟に対抗するという意味ではなく、将来的な保険のために。

もしも帝国と同盟に決定的な差が付き、一方的に貪食されるような事態になったら必ずフェザーンも狙われる。それは必然だ。フェザーンの繁栄が放置されることなどあり得ない。

今は同盟の弱体化が大きな問題になっているが、あるいは帝国の方が政変で無力化することだってあり得る。

フェザーンもある程度の力が必要ではないか。

それは簡単に言うとは常設フェザーン防衛艦隊、である。

軍備を整えること自体は古くから認められていることで、違法ではない。帝国の有力貴族はたいてい大規模な私領艦隊を備えているからだ。武門から始まった貴族家は特にそういう傾向を持つ。あるいは権勢を誇示するために使い道もなく数万隻規模の艦隊を抱えていることだってある。

フェザーンは貴族領というわけではないが、とにかく自治領である限り帝国から法的に咎められはしないだろう。

もちろん今までそうしてこなかったのは下手に軍備を整えたら帝国にも同盟にも警戒されてしまうからである。経済だけのひ弱な花のような立場を装うことで生き延びてきたのだ。軍備を持たないことをことさらアピールしてきたのにここで方針を変えられることは目を引いてしまう。

特に帝国に対しては皇帝に対する叛乱準備という名目を付けられる可能性がある。フェザーンを潰そうとするならば格好の名分を与える形になるため、そうさせないよう

これまで以上に神経を使う。同盟に対してさえ刺激すれば軍事目標にされてしまうかもしれない。

だが、それらを考慮してもなお軍備を持った方がよいのではないか。

それに、軍備を整えるには時間がかかるのだ。いかにフェザンが財政的に豊かであり、技術力にも心配がないとしても時間はいかんともしがたい。ならば準備を始めるには早いほうがいい。

アドリアン・ルビンスキーとルパート、エカテリーナはこの件について慎重に討議を繰り返す。

ちょうどこの時、帝国で前代未聞の事件が起きた！

それは当初フェザンと直接の関係はないように思えたが、やがて大きく関わることになる。

## 第三章 運命の交錯

## 第二十三話 486年 3月 フェザーンの危機

それは帝国の歴史でもかつて見られたことのない悲惨な出来事だ。

何と上級貴族のパーティーの席で爆破テロが起きた！

高貴な貴族が幾人も倒れ、華やかなパーティーに血の赤が加えられる。一瞬にして場面もさながらの悲劇の舞台に変わったのだ。その場に居合わせた者は長いこと酷い記憶にうなされることになった。

原因はすぐに判明した。犯人はことさら逃げようなどと思ひもしなかったためだ。

数ある帝国貴族でもルドルフ大帝の御代より続く名門中の名門貴族であるクロプシュトツク侯が反旗を翻したのである。

クロプシュトツク侯は現皇帝フリードリヒ四世の即位に反対し、別の候補者を応援した過去がある。政争に積極的に関与し、大きな賭けに出た挙句、破れた。その後長いこと貴族社会から締め出され、不遇を囲っていたのだ。

そのクロプシュトツク侯がテロを起こした。正に短慮である。自分の老い先が短い

ことを悟って、人生の清算を図つてのことだとしても。

現皇帝フリードリヒ四世は優しい人格である。特に功績もないが苛烈なことは何もしていない。その即位に反対した者たちに対しても、肅清どころか過去を水に流している。もちろんクロプシュトゥック侯に対しても例外ではなく、出仕するよう長いこと願っていた。

かえつてクロプシュトゥック侯が依怙地になつていた側面の方が大きい。早くに子供を亡くし、何も守るべきものがないクロプシュトゥック侯は、逆恨みを募らせ最後の復讐に及んだのだ。

そのテロは皮肉なことに偶然によつて阻まれ目的を果たせなかつた。

「そうか、あやつめの意地と強情を最後まで解くことができなかったのは、余の不明だな」

事件を知り、フリードリヒ四世が寂しく述懐した。

そして帝位などというものはるか未来のことだった子供時代を思い出す。その頃の自分は兄たちとも仲良く、将来帝位を争うことになるとは思ひもよらなかつた。

その上覚えている。

クロプシュトゥック侯も颯爽とした少壮の姿を持っていたのだ。

名門中の名門貴族である侯は宮廷にも気軽に入れる。そして危険でない範囲で狩猟



の真似事などを企画しては自分と兄を喜ばせてくれた。男の子らしい遊びと一緒にやってくれた貴族は他にいない。クロプシユトック侯は宮廷でも一風変わった貴族だったのだ。そこで子供でも扱えるボウガンなどを最初から教えてくれた。

そして実際の狩猟になるとクロプシユトック侯は見事な腕前を披露したものだ。ウインクなど投げては周囲を感嘆させる魅力的な大人であった。

宮廷に吹く爽やかな風のように。

子供の目には眩しく、それは一つの憧れでさえあった……

それから時が流れ、事件を知ったフリードリヒ四世はいつものように庭園で赤いバラを切り取る。しかし、何かしら事務的にも見えた。

そしてバラには通り雨のような水滴がついていたともいう。

しかし銀河帝国はそんな個人的な感傷など許さない。

皇帝弑逆未遂、この大罪に対しては当然極刑しかない。

国務尚書リヒテンラーデ侯がクロプシユトック侯討伐を進言、勅命を得て軍務省に通達する。

そんな迂遠なことをせず直ちに進発した艦隊があった。舞踏会を主宰し、テロの標的にもされていた大貴族ブラウンシユバイク公が素早く私領艦隊を動かしたのだ。

「直ちに成敗してくれ。復讐は貴族の誇りを守る権利である。今我らの手にそれがあ  
る以上、誰も文句は言えまい。先んじてブラウンシュバイク家が討伐する」

ブラウンシュバイク公派閥である多くの貴族が我も我もと参加して思わぬ大艦隊に  
膨れ上がった。大義名分などこの際どうでもいい。おそらく略奪のためにクロプシュ  
トゥク領に赴くのだ。得をする機会を見逃しはしない。

この様子を見てブラウンシュバイク公はご満悦である。

大艦隊という目に見える形で自分の力を示せたのだ。その艦隊は数限りなく、なんと  
勇壮なことか。

この経験がブラウンシュバイク公の自己評価を過大なまでに押し上げることになっ  
てしまう。しかもあろうことか軍事面に関しての評価だ。それはブラウンシュバイク  
公の運命に重大な結果をもたらすのだが、もっと先の将来になる。

とにかく、本来は帝国軍が主に行動するべきものが後手に回った。慌てて帝国軍は目  
付けと戦術指南のための軍監だけは送り届けた。それだけでも必要である。ブラウ  
ンシュバイク公は貴族の誇りを謳っているが、クロプシュトゥク侯の領地惑星の略奪を  
狙っていることは誰の目にも明らかだ。

そして実際の侵攻が始まった。

クロプシュトック私領艦隊が抵抗を試みる。クロプシュトック侯はあまり武門の家柄ではないが古くからの名門であり、四千隻余りの艦隊があったのだ。

しばらくの時間は持ちこたえることができた。押し寄せたブラウンシュバイク公の大艦隊は戦術も何もなく、ただの烏合の衆である。略奪のために参加しただけで、戦うことなど思ってもいない艦が多い。それに対してクロプシュトック側は自分たちの惑星を守ろうとする必死さがある。

二週間もの間、攻防戦が続けられた。

しかし結局はクロプシュトック側が蹴散らされた。数の力に負けたというのもあるが、ブラウンシュバイク側の艦隊には幸いにも現役軍人であるフレーゲル男爵が含まれていたのだ。一応、艦隊戦の形をなしていたのはそのせいである。

戦いが終わり、クロプシュトック領惑星へ侵攻を許す。もはや何の根拠地も持たない敗残のクロプシュトック私領艦隊は途方に暮れる。

順当なところをいえば、艦艇を自沈させ、兵士は帝国軍で雇ってもらえればいい。

しかし、そういった過去を持つ兵士は帝国軍内で冷遇されるだろう。貴族私領艦隊出身の食い詰め者の立場など考えるまでもない。よほど苛められるか、あるいは最前線に送られるのは覚悟しなくてはならない。本当に宇宙の藻屑となつて消え去るまで消耗品の扱いだ。

ならばいつそのこと行方をくらし宇宙海賊になつてみるのもいい、多くの者がそう考えた。だが、将兵にも家族や係累がいる。自分が犯罪者になれば必ず累が及ぶ。善良な縁者までが罪に問われることになりかねない。

進退窮まつた。

そこで自然と亡命という考えが出るくるのだ。宇宙海賊よりは罪としてだいぶ軽く、親類縁者丸ごと処刑ということはないだろう。

クロプシウトツク艦隊は砂山のように崩れ、同盟領へ向かう艦艇が出てきた。次々と連鎖反应的に増えていく。先の戦いで偶然にも司令部を失っていたこともあり、皆が流れやすい方に流れる。

もちろん同盟へ亡命を図るならフェザーンを経由することになる。幸か不幸かクロプシウトツク領はフェザーンからそう遠くない。

フェザーン回廊は数千隻という今までにない数の戦闘用艦艇の列が続く。

その多くは戦いで傷つき、物資もほとんど底を突いているが、とにかくこれは戦闘力を持つ艦隊である。

フェザーンもこの事態に驚きつつ反応した。

「従来の亡命手続きに乗つ取つた範囲として扱う。フェザーンは人道に配慮して受け入

れを考える」

自治領主アドリアン・ルビンスキーはこういう声明を出す一方、帝国に対しては困った事態であることを訴える。

「フェザーンは軍事的に無力であり、今回の大量の亡命希望者を刺激しないよう対処するしか方法がない。彼らに暴れられたらフェザーンは灰燼に帰してしまおう」

もちろん考えていることは狡猾だ。

表向き災難であるかのように装いながら、ルビンスキー家ではむしろこれを幸運ととらえる。

今、フェザーンは重大な賭けに踏み出す。

機会が向こうからやってきた。

これらの艦艇を手に入れ、隠匿すればフェザーン防衛艦隊の端緒とできるのだ。

大急ぎで亡命手続きを進めた。そして戦闘用艦艇について恒星突入処理予定と公表し、一ヶ所に固めておこうとする。その裏では惜しみなく物資をつぎ込み、応急修理を進めている。

だがここで大きな問題が起きた！

先の戦いで、ブラウンシユバイク公派閥貴族の艦隊にも少なからず被害があった。圧

勝といえども間拔けな艦隊行動の隙を突かれてそれなりに反撃されたからだ。

それらの貴族が艦隊を連れて尚も追尾してきたのだ。

復讐のためと言いつつ、内実はただの憂さ晴らしだ。出遅れてしまったためにクロプシユトック領惑星での分捕りのおこぼれにあずかれなかったからである。

しかし、それでも数は戦闘用艦艇千隻をはるか超えている。

どうせフェザーンに武力はないと高をくくり、何とフェザーン回廊に突入してきたのだ。

「ここはフェザーン領である。これを聞いたなら直ちに引き返せ」

フェザーン警備艇から勇氣ある勧告がなされる。しかしそれは全くの無意味だった。

「うるさい、そこにクロプシユトックの奴らが逃げ込んだのは分かっているんだ。それつらに對し復讐する権利がある。我らは貴族の誇りにかけて戦う。邪魔するな」

「ここで私領艦隊の狼藉は許されない。帝国軍からの軍監に聞いて法に従え」

「軍監だと？ そんな貴族の誇りの分からん奴はとづくに片付けられた」

それは事実であり、もはや貴族たちに抑えは利かない。警告もはなから無視される。

報告を聞いたルビンスキー家は憂慮した。

このままではクロプシユトック艦隊の亡命を援助したことが仇となる。フェザーン  
の利どころか戦火が及ぶとは思わぬ事態だ。

実際、警告射撃を行ったフェザン警備艇が逆に撃たれて大破する。もはや実力行使を辞さないらしい。

どうするか。

今回フェザンの利は諦め、クロプシュトック艦と乗員を貴族に差し出して憂さ晴らしをやってもらい、解決とするか。

いや、それはあまりにも無体だ。

鴨撃ちとは違う。一撃で百人単位の人間が命を失う虐殺である。

かといって十億人が住む惑星フェザンに被害を及ぼしてはならない。

本当は実力でそんなことはさせないのがいいのだろう。しかしフェザンの警備団の艦艇は小型艇しかない。数こそ集めれば二千隻はあるだろうが到底戦力として数えられるほどではない。あつさり蹴散らされるのが関の山だ。

とはいえ、敗残のクロプシュトック侯艦隊はすぐに戦力にはならない。

「お父様、帝国へ対処の要請と、ついでにここにある帝国弁務官事務所に解決策を聞いてみては」

「先ずはそれしかないな。よしルパート、弁務官事務所に行き、交渉してくれ。お前に任せろ」

ルパート・ケツセルリンクはルピンスキーに重大なことを任された。

さっそくルパートはフェザーンにある帝国弁務官事務所に赴いた。そのつくりは帝  
国風ではなく、フェザーンの他の建物と同様の機能的なビルである。

一室に通されたが、シンプルなテーブルと深いソファアが相向かいに置かれている。  
全体に無駄な装飾は省かれすっきりとした観葉植物が一つきり置かれている。かろうじ  
てオーデインにあるノイエ・サンスーシーの写真が壁に小さく掛けられていることで帝  
国とのつながりを思い出させてくれる。

ルパートは長く待たされることなく、帝国高等弁務官レムシャイド伯爵と話すことが  
できた。

「そういうわけですレムシャイド伯、この事態を早急かつ根本的に解決して頂きたい。  
むろんこれは帝国に責任がある。なぜなら勝手にフェザーンを帝国内の貴族の争いに  
巻き込んでいるわけですから」

先ずはルパートが先手を取る。

こういつた交渉こそルパート・ケツセルリンクが真価を發揮するのだ。

実は微妙に問題をすり替えている。帝国貴族とフェザーンの問題ではなく、帝国と  
フェザーンの問題にしている。むろん、帝国の責任において対処をさせるためだ。

「補佐官、困った事態になっているのは理解しています。しかし、フェザーンに全く非が



無いように聞こえるのですが、聞き間違いでしょうか。先にクロプシユトツクの者ども  
の亡命受け入れを決めたのはフェザンではありませんか」

「それでもフェザン領内で艦隊戦など行われるのはいかなるものでしょう。フェザ  
ンの意図ではなく、それどころかフェザンは人道的という立場で首尾一貫していま  
す。亡命受け入れも当然ながらその一環であることは疑いようもないと思います」

ルパートがゆったりした口調と鋭い言葉で場を支配していく。

第二十四話 486年 3月 父とルパート

ルパートがそう告げる。

その骨子は、フェザーンの立場は帝国のいざこざと距離を置くものであり、たまたま被害者になったことである。

「……補佐官、まあ経過を蒸し返すのはやめにしましょう。それで時間を費やすことはありません」

舌戦の不利を悟ったレムシャイド伯がそう言った。

老練なレムシャイド伯の見たところ、この年下の補佐官は予想以上に手ごわい。付け入る隙もなく、当初考えていた帝国の責任逃れは無理そうだ。さすがにルビンスキー家につながる者だけのことはある。

こうしてルパートの方が主導権を握った。話題を相手に転換させるよう仕向け、先ずは優位に立つ。

「レムシャイド弁務官殿、それには同意します。話を先に進めるべきですな。有意義に

なるように」

「しかしこれからの対処ですが、私共が考えても良い方法は見つけれません。残念なことですが」

「それは困りました。しかし全く解決がないわけではないでしょう」  
意外なことだ。

無茶な貴族私領艦隊が迫る中、何ができるといえるのだろうか。

「それはいかような。補佐官、教えて頂ければありがたい」

「差し出がましいようですが、弁務官殿は伯爵という立派な貴族であらせられる。だとすれば貴族の狼藉に何かできるのでは。残念ながらフェザーンの者は貴族ではなく、何もできないのですが」

その提案は意外なことだ。確かにそんな可能性も無くはないが、具体的などころが見えない。

「私の肩書のことを指しているのですか……しかし、この場合いかに仲裁したのか」  
「例えば、戦闘宙域の中間に赴いて呼びかけてみてはいかがですか？ 伯が貴族艦隊の目の前に出れば、思い直してくれる可能性も出てくるのでは」

「そんな！ 私に生きて帰るなど言うのも同然ではありませんか！」

レムシャイド伯は震え上がってしまう。

その提案は無理過ぎる。

血気に逸った貴族艦隊を抑えられるとはとても思えない。しかも伯爵というのは貴族の中では上位と言い切れるものでもなく、一喝して黙らせるのは無理がある。たとえ出ていったところで、むしろ貴族の誇りが分からない裏切り者として宇宙の塵に変えられるのがオチだ。

こうなつてはレムシャイド伯も必死で考える。何か方法はないのか。実は今の今までフェザーンの困難など他人事だったのだ。

帝国から来た弁務官のほとんどは繁栄するフェザーンに反感さえ持つものだ。レムシャイド伯ほど公平な人間でもその例外ではない。むしろ今回の事件を愉快とさえ思っていた。フェザーンは少し痛い目に遭えばいい、と。

それがルパートという切れ者の補佐官と会談したことで一変する。

よもや自分の命のかかった事態になつてしまふとは。

いいアイデアもなく、問題を他に転嫁するぐらいしか頭に浮かばない。慌てて大声を出した。

「駐在武官のミュラー君はいるか！ 急ぎ呼んで来い！」

飛んできたミュラーはレムシャイド伯から詳しい状況説明を受けた。

フェザン回廊に押し入ってきた貴族私領艦隊は総数にして千八百隻もの数、あと二日以内でここへ到着する。

この戦力は大きい。

それに対抗するべきフェザンの警備艇は全部で二千六百隻あるが、しかし大半は小型艇ばかりだ。航路を文字通り警備するだけの艇なので当たり前である。

最も大型のものでも正規巡航艦にはるか及ばない。まして戦艦を相手にすることなど考えられない。戦いになれば防御も砲撃も全く歯が立たず、一方的に虐殺されるだけだ。

もう一つ、警備艇は文字通り警備を普段の仕事としている。

決して戦闘経験は多くない。しかもせいぜいその相手は宇宙海賊であり、作戦行動単位は多くても数十隻単位なのだ。指揮系統はそれに見合った細かなものしか存在せず、まとまって大会戦ができるような態勢ではない。

要するに貴族私領艦隊と比べてさえもソフトウェア的に劣る。

他に使えるとすれば最初に逃げ込んできたクロプシウトック艦隊なのだが……しかしそれらの艦の大半は被弾して、まだ修理もできていない。速度もシールドもとうてい本来の性能とは言い難い。

それにフェザン警備艇とは通信設備も戦術システムも違い、これはお互いに艦運動

の連携や斉射といった同期ができないことにつながる。何よりもクロプシュトゥク艦が再び戦えば貴族もいっそう収まりが付かず、それこそ凄惨な殲滅戦になる恐れがある。

「それでも何とかならんかね。私は軍事に疎いが、状況がはなはだ悪いことは分かる。君は専門だ。何かいいアイデアを出せるなら言つてほしい。頼む」

レムシャイド伯のそんなすがるような目を見ても、ミュラーは困った顔しかできない。

戦力差は絶望的に大きく、抑えるどころかまともに戦うことさえできないだろう。

「純軍事的に言えば貴族私領艦隊を警備艇で追い払える可能性はあまりに少なく、徹底して交戦を避けるべきかと存じます」

「それを何とかして欲しいんだが。やはりダメか……では結局クロプシュトゥクの兵を差し出し、乗り切るしかないということになるか」

ミュラーもそれを分かつて暗い顔をせざるを得ない。レムシャイド伯の言うことは、クロプシュトゥクの兵を血祭りの犠牲にすることだ。

それが最小限の犠牲で済む方法と分かっても悲惨な話である。

貴族の言う、復讐は貴族の誇り、それが理不尽なせいでこんなことが起きる。兵士たちのほとんどはたまたまクロプシュトゥク領に生まれただけの平民なのに。

「やれやれ、そんな結論になりましたか。フェザンとしては今後の亡命ビジネスに多大な影響のあること、帝国にはこの上なく大きな貸しになりますが、それでよろしいのですな」

横でしばし待っていたルパートが言う。交渉上そうは言ったが、クロプシュトゥク兵を犠牲にする案が嬉しいはずはない。

だが会談が終わりかけた時、ミュラーがまた発言した。

明るい表情ではない。ようやく言葉を絞り出す。

「お待ち下さい補佐官殿。もう少し考えましよう。クロプシュトゥク艦隊の兵は亡命に一縷の望みをかけてやってきたのです。罪もない彼らに死ねというのは、あまりにも……」

「しかし他に方法があるのだろうか、駐在武官殿。伝え聞いただけでもクロプシュトゥク領惑星で貴族の乱暴狼藉はとどまるところを知らず、その悲劇は空恐ろしい様子だったとか。このフェザンをそうさせてはならず、そのために最善を尽くさなくてはならない。駐在武官殿はフェザンが戦火に焼かれてもいいと」

「そうではありません。もちろんフェザンを守らねばなりません。先ほど私は撃退の可能性がほとんどないと言いました。しかし、決してゼロとは言っておりません」

「それはどういうことでしょうか？」

「戦力が不充分でも、戦術的に最善手をとれば、あるいは。」

「驚きました。失礼ですが現実離れしているのでは？ 具体的にはその優れた戦術とやらを誰がどのように行うと？」

しばしの沈黙が流れる。

ルパートにはもう分かっていた。

このミュラーという駐在武官、同情心の強い優しい男だ。クロプシュトック兵の立場で考えている。

しかしただ言葉の上で反対したのではなく、本当に勝算がゼロと思っていないように思える。

歯切れが悪い言い方をするが、食い下がってくるのはそのためだ。

ただし同時に分かる。その撃退の可能性というのはおそらくミュラー自身が戦場に赴き、戦術を組み立て、それが実行された場合のことなのだろう。それでこそ撃退の可能性があると。

言い換えれば自分がフェザーン警備艇とクロプシュトック残存という戦力の指揮をとればあるいは、と思っているのだ。

しかしそんな自信にも関わらず、この男は奥ゆかしい。



自分からそうとは言い出さない。いや言い出せない性格だ。

おそらく駐在武官という立場の者が駐在先のフェザーンの艇を指揮するというのは筋違いであるし、そもそも自分の大尉とかいう位が低すぎて指揮を執るのに萎縮している。

だがそれでは話が先に進まない。

「レムシャイド伯、何やら駐在武官殿は軍事的な方法を見出されているようだ」

ルパートの方としても考えがまとまったわけではない。

自分一人で決められる問題ではない。フェザーン戦力の指揮系統という手続き的にもそうだが、何より事が重大過ぎる。結果はフェザーンの運命を決めてしまうことであり、取り返しが付かない。

「では、しばしお待ち頂きたい」

判断できないルパートはそれを言い残し、しばし退室してアドリアン・ルビンスキーとエカテリーナに連絡をとった。

「まあ、ミュラーがそんなことを！ ルパート兄さん、ミュラーがそう思うのならおそらく問題ないわ！」

エカテリーナはもちろんミュラーのことはよく知っている。決して大言壮語するよ

うな人間ではなく、何の根拠もなく希望を口にする人間ではないことも。ならば大胆に指揮を任せてもいい。

「そう思うかいエカテリン。だがそのミュラーという駐在武官は若く、経験もない。大尉ということは軍では本当に下っ端なんじゃないか。しかもこの場合フェザーンの警備艇を任せるんだぞ」

その言葉も間違っていない。フェザーンの運命を託すにはあまりに心もとない。だが、それではどうすればいいのだ。

アドリアン・ルビンスキーがやつと口を開き、重々しくルパートに言う。

「ルパート、お前はその男を見てどう思った。年や地位などの背景で本質を見誤ることはするな」

さすがに深い知恵と経験を持つ男の言葉だ。

しかも、それは同時にルパートの父親としての言葉でもある。

「人を見る力量を自分で試せ。自分の目を信じて決めろ。これはお前にとってまた新しい成長の機会だ」

ルパートは今まで自分がいかに甘かったか痛感した。

本当に厳しい決断をしたことがなかったのだ。

取り返しのつかない重い決断を任せられたことはなく、反発はしていても、やはり父に保護されていた。

一方、父は常に一人で重い決断をこなしてきた。今の今、やっとその意味が分かる。そのアドリアン・ルビンスキーともあるう者がここでルパートへ無責任に押し付けたとは考えられない。おそらくその逆であり結果がどのようになっても受け入れるという覚悟をしている。

それもまた父親としての度量と暖かきではないか。

ルパートは今こそそれに対し、しっかりと応えて一人前であると証明してみせなければならぬ。

ルパートはこの通信後一つ大きく呼吸する。

ミユラーとレムシャイド伯のいる部屋に再び入り、決めたことをはっきりと伝える。「やっていただきましょう。駐在武官殿。フェザン警備艇の指揮をお任せする。クロプシュトゥク艦も出動できるものは加えましょう」

「私が、本当によろしいのですか？ いえ、本当に差し出がましいことで、何と申したらよいのか……」

「お任せすると決めたのです。地位のことならば特務として艦隊指揮にふさわしいもの

を臨時に設定します。遠慮する必要はありません」

ルパート・ケツセルリンクは大きな決断をした。

後悔はしない。

決まれば直ちに行動が開始される。躊躇する時間は残っていない。

戦いの迫る足音がする。

ミュラーが宇宙に向かう直前、軌道エレベーター入り口でエカテリーナが呼び止める。

「ミュラー、突然こんなことになるなんて…… どう言ったらいいか」

「エカテリン、僕は軍人なんだから、戦うのは当然さ。パーティーに出るのが本当の仕事じゃない」

ミュラーはわざと明るいい声を出す。いつもの自然な思いやりである。

「あ、いや、仕事は戦うだけじゃだめだな。勝ってこなきゃね」

「そうね、その通りだわ。ミュラー、あなたは負けないわ。大丈夫よ」

「ありがとう、とつても嬉しいね。そう言ってくれて元氣が出るよ」

「大丈夫だわ。根拠は無いけど！」

「一言余計だよ、エカテリン。凹むなあ、もう」

二人はそう言つて笑う。

エカテリーナも決して湿っぽくなどするものか。女の涙なんかこういう場面には必要なく、場違いだ。

どんな時もエカテリーナらしく振る舞う、そう決めている。

## 第二十五話 486年 3月 防御の真髓

ミユラーはさつそく戦いの準備をする。

先ずはフェザン警備艇の中で最も通信設備の良いものを選び、それを臨時の旗艦に設定した。

艦の大きさにはこだわらない。

何といっても通信が艦隊運動の成否を分けると知っていた。大きな数で動いたことのないフェザン警備艇で戦いを行うのであれば、艦隊運動をまとめあげるのが何より重要だ。それができなければ戦術も何もやりようがない。

制御コンピュータの同期、通信プロトコルの統一、やるべきことは山ほどある。しかも数時間で仕上げなくてはならない。

同時にミユラーはフェザン警備艇の乗組員を観察している。

それらは見たところ帝国軍の兵より動きも良くミスも少ないようだった。フェザンの方が平均して質がいい。これは意外だ。帝国軍よりもはるかに戦闘経験が少ないはずなのに……

しかし帝国軍の兵には少なくない数の破産者、食い詰め者、社会不適応者が含まれていることを考えると納得できる気もする。帝国軍はエリート士官はエリート士官で存在するが、末端はひどいものだからだ。世間知らずの志願兵、やむなく来た徴集兵、そして社会のはみ出し者のごちゃ混ぜで構成されている。

そういつた雑多な集団を従わせるにはやむなく規律で縛らせざるをえない。そのせいもあつて帝国軍は硬直化し、更に陰湿で息苦しい組織になつてしまつてゐる。

フェザーン警備艇の組織はそんな悪癖から無縁だつた。

一方、フェザーン警備艇の側では、いきなり指揮官の立場に立つたミュラーのことを訝しむ態度をとつた。

それは色々な意味で当たり前だ。

しかし、それを推し量つて恐縮しているミュラーを目の当たりにすれば和らいでいく。

特にミュラーと直接対応することになつた旗艦の艦長は、見かけも中身も温厚な人物だつた。それはミュラーの親にも近い年齢の人物だが、年若いミュラーに反抗することもなく従う。

「オルラウ大尉、宜しくお願ひします。本当にその、諸事情でこういうことになつて恐縮です」

「こちらこそ、ミュラー特務司令官。遠慮している暇はありませんぞ。やることは多いですから。どうぞ遠慮なくご指示下さい。各システムについては、そのドレウエンツ中尉に聞いて下さい。奴は以前帝国軍にいたこともあって、システムの違いが分かつてますから」

それはとても温かく、決して無視したり妨害するような態度ではなかった。ミュラーは安心する。

「ドレウエンツ中尉、では先ず火器管制のシステムと指示手順を教えてくださいませんか？」  
「ミュラー特務司令官殿、帝国軍とは用語にも手順にも特別な作法の差はありません。あえて言えば復唱が簡略で、しかも操作が同時に開始されるというのが違いでしょうか。そのため砲撃においてはワンテンポ早まると思つて下さい」

「分かりました。それと中尉、作戦の間は私の側でサポートして頂けませんか」

「了解です。本当に遠慮せずご指示下さい。たぶん、誤解されているのではないですか？ 自分がフェザーン警備艇を戦いに出してしまい、危険な目に遭わせてしまつています。それでこつちが迷惑に思っているのだと」

ミュラーは正直に言う。その通りなのだ。

「本当に皆様には何と申し上げていいやら」



「だからそれが誤解なんですよ！ フェザーンを守るのが我らの仕事です。それが誇りなんです。もちろん勝ち目の薄い戦いなどしたくないですし、実際怖いですが、怯んてなんかないません。帝国の貴族艦隊なんか好き勝手させるもんですか。むしろ、特務司令官こそわざわざ宇宙に出てフェザーンを守る戦いに挑むのが、不思議なくらいです。フェザーン人でもないのにここを墓標にしていいんですか？」

ミユラーにはドレウエンツ中尉が少しでも自分をリラックスさせるために言っているのと分かっている。

「ありがとうございます。そう言ってくれる心遣い嬉しく思います。しかしここを墓標にする気はありません。墓碑銘も考えていませんし。他人が勝手に墓碑銘を書くと思えばおちおち死んでもいられません」

「はは…… それは私の方も同じです。ついでに一言言わせてもらえませんか」「何でしょう」

ドレウエンツ中尉の表情はいかにもフェザーン人らしい飄々としたものだが、目は真剣だった。

「期待してまず、特務司令官殿。本当に」

実はドレウエンツ中尉は一つ隠していることがあった。

ミュラーの使命感の強さ、そして真剣さを目の当たりにすればとてもそんなことは言えない。自分の目で見ればミュラーの真面目な性格が分かる。

しかし、ミュラーを見ていない多くの者が言っていることがあるのだ。

「エカテリーナお嬢様の守り人が、気合いを入れた挙句、今度はついに惑星規模の守りに入った」

そんなユーモアある噂である。字面だけなら立派な揶揄だが、その意味するところは少し違う。

エカテリーナは実のところフェザーン人に大層な人気がある。

その年齢と、澆漓とした見かけで。

しかしその度を越したやんちゃぶりもよく知られている。本人はもちろん評判など気にすることなく、どこ吹く風だ。そのためアイドル的なものではなくニユースメイカーとして人気がある。

エカテリーナと親しいという噂のあるこの駐在武官も別に憎まれることはない。

気の毒に、フェザーンも女はあまたいるのに何だつてこんな極端な者を好き好んで、と思われているくらいなのだ。

誰が何を考えようと時間は刻一刻と過ぎ、現実が否応なくやってくる。

フェザン回廊を進んでいた貴族私領艦隊はやつと目指す獲物を見つけた。

「前方に艦影あり！ 多数の戦闘艦です。艦型照合、やはりクロプシュトック艦隊がの模様！」

貴族艦隊のオペレーターがそう伝えてくる。

「ふん、やつと見つかったか。それで、どんな様子だ。何隻いる？ そしてフェザンの警備艇もついているか？ 蚊のようなものでも手向かってくるかもしれん」

フェザンの警備艇は数だけはそこそこいるはずだ。

先のいきさつから妨害してくることは充分に考えられる。もともと、戦力としてはもの数ではないが。

「クロプシュトック艦、約五百隻。こちらから逃走しているようです。付近にフェザン警備艇は見当たりません」

艦橋にいた貴族たちは呆れて笑うしかない。

復讐の目的であるクロプシュトック艦が逃げるのは当たり前前だとして、フェザン警備艇が一緒にいないとは。

「何だ、フェザンは結局のところ我らの実力に恐れをなしたのか。当然かもしれんが、

クロプシュトック艦を見捨てるとは、大口を叩いておいて何だ」

「結局のところ自分が大事だということだろうよ。ならば最初から逆らわなければいいものを」

「たかが商人風情の国、誇りというものが理解できんのだろう」

「しかし無様ではないか。これで全銀河に知れ渡った。フェザーンなど力に対して尻尾を振ってくる犬のようなものだ。犬ならば鞭で躰をしてやる必要がある。」

貴族たちは口々にそう言つてフェザーンを嘲笑う。

貴族私領艦隊はそうしている間にも急速にクロプシュトック艦隊に迫る。

クロプシュトック艦隊の速度は決して早くない。おそらく損傷を受けた艦が多くて速度を出せないのだろう。

だつたらあつさり追い付き、クロプシュトック兵の命もろとも艦を宇宙の塵に変え、復讐を達成するのだ。

その後はどうしようか？

どうせフェザーンに来たのだ。行きがけの駄賃を貰つてもいいではないか。先に邪魔しにかかった分、フェザーンにそれなりの賠償を払ってもらおう。それさえ拒むようなら脅してでも分捕ろうか。

貴族たちはもうそんな甘い皮算用を始めていた。

「クロプシュトック艦隊との距離、イエローゾーン突入！」

「早く撃て撃て！ 蜂の巣にしてやれ！」

貴族艦の火器管制に携わる兵たちはその命令を聞いて顔をしかめた。

貴族の馬鹿どもには武器の間合いも分からないのか。

しかし平民出身の兵たちは決して意見具申などしない。そんなことをしても上司である貴族の心証を悪くするだけで、何の得にもならないと分かり切っている。尊敬とは真逆の感情を持ちながら命令に従う。

予期した通り、貴族艦隊からいくら撃つても当たらないか、まぐれで着弾してもシールドを貫けることはない。損傷の多いクロプシュトック艦にすら損害を与えられない。

ところが、それでも意味はあったようだ。クロプシュトック艦隊は砲撃されたと分かると反撃どころか算を乱し無秩序に陣形が崩れていく。

恐慌を起こして逃げ惑っているのだ。

貴族たちは益々草食動物を狩る気分になり、嗜虐趣味が増していく。

「まったく無様な奴らだ。このまま撃ちまくれ！」

そのわずか三十分後だった。

急進していた貴族艦隊に突如として整った光条の列が降り注いできた。横合いから次々に突き刺さる。

これは明らかに多数の艦の一斉射撃である。

「な、何だこれは！ いったいどうなった！」

その攻撃はクロプシュトゥク艦隊からのものではない。

フェザーン警備艇からのものだった！

クロプシュトゥク艦隊は今までただ逃げ惑っていたのではなく、その無様な擬態であらかじめ潜んでいたフェザーン警備艇のところまで貴族艦隊をおびき押せていたので。

そして、フェザーン警備艇がクロプシュトゥク艦隊とすれ違った直後、満を持して突進し一斉射撃を仕掛けた。

貴族艦隊は思わぬことに慌てる。危険なことなど全くなく一方的に狩りを楽しめると思っていたのだ。それがこんな逆撃をくらうとは。

しかしほどなくして思ったほど損害がないことに気が付いた。

相手はただの警備艇、その貧弱な砲火では一斉射撃で複数命中しても戦艦のシールドならば持ちこたえられる。理想的な横撃といえども貧弱では意味がない。

「くそ、ヒヤリとさせられたぞ。しかし何だ、その程度か」

「下らない策など弄して笑止千万だ。フェザーンめ、その報いをくれてやろう」  
「よほど死にたいらしい。まとめて踏み潰してやれ！」

一安心した貴族たちは蹂躪にかかる。

ところがフェザーン警備艇の群れはヒラリヒラリとその鋭鋒をかわし、捉えられることはない。貴族艦からすれば有効射程に迫ったと思ってもやはり巧妙に逃げられている。

「ええい小癩な！ どうなってるんだ！」

どうしても撃ち崩すことができない！

貴族艦隊が目標を決めて追つても、意外な方向から砲撃が届き、やむなくそちらへシールドを強化して対処するとその間に逃げられる。

それならばと一気に急進しても、ピンポイントのクロスファイヤに誘い込まれるだけだ。そんなことが幾度も繰り返され、貴族側が考えて動きを工夫したつもりでも、かえって裏をかかれて余計に悪い結果にしかない。

それは貴族艦隊の誰もが経験したことがない細緻な柔軟防御だった。どちらにも損害が出ないまま我慢くわが続く。

貴族の中には、ようやく相手の戦術の見事さに気が付いた者がいた。二度も三度も防がれるとは偶然ではなく、指揮が優れているのだ。警備艇は弱くとも互角以上に戦って

いる、その事実を認めざるを得ない。

「フェザーンの警備艇ごとくきがこれほど悩ませるとは。いったいどうい奴がこんな指揮をしている？」

そして調べた結果、判明した事実は意外なものだった。ミュラーという帝国軍所属のフェザーン駐在武官が指揮をしているらしい。だがそれを知ればかえつて貴族たちは関心を失くしてしまう。平民など劣つた存在であり眼中にはない。

「ふん、何だ笑わせる。名のある将でも何でもなく、平民出の若造だったとはな。てつきり退役した帝国軍の将が偶然フェザーンにいたとでも思つたぞ」

しかし、それを聞いた若い士官の中には、ミュラーの名に聞き覚えのある者がいた。

「まさか、ナイトハルト・ミュラーが!? 同姓同名の別人だろう? あいつがそんな艦隊指揮をする立場であるはずがない。フェザーンに行つたとは聞いたことがあるが……いやまさかそんなわけはない。しかし、この防御はどうだ?」

半信半疑、いや名を聞いても信じられないのは無理はない。

彼らの知るミュラーは士官学校を卒業してわずか二年、大尉でしかないはずだ。

だが、士官学校でミュラーと同期だったものは皆知つていることを思い出さざるを得ない。



士官学校の重要なカリキュラムに艦隊戦シミュレーションがある。戦術理論担当のシユターデン教官が見守る中、学生たちはあれこれ知恵を絞って戦い合う。

そこでナイトハルト・ミュラーは優れた成績を収めるのだが、際立って特徴的な戦術を駆使するのだ。とにかく柔軟防御において優れていて、相手がどんな手を打つてもそれを弾き返し、破られることがない。

「く、くそ、またミュラーの奴にやられた。どうして破れないんだ！」

ミュラーに敗けた者たちは悔しそうに悪態をつくのが常だ。しかしその悪態は本気ではない。勝って逆に済まなそうにしているミュラーを見れば憎しみなど起きるはずがない。ミュラーの驚くほど優しい気性も皆はよく知っている。

シミュレーション結果を検証していくシユターデン教官は大いに唸るのだった。

「ううむ、局地的に自陣の二倍、いや三倍を相手にしても破らせないと……皆もこれをよく見習うように。理想的な柔軟防御の例になる。正に防御の真髄と言えよう」

この「防御の真髄」というのがしばらくの間ミュラーのあだ名になった。

業を煮やした貴族艦隊はやたらめつたら攻勢を続ける。

その雑な攻勢の最中では背後からフェザーン警備団の別動隊が迫るのにも気づかなくて当然だ。攻撃にばかり気をとられて索敵すら怠っているからには。

探知した時にはもう距離を詰められていた。

「フェザーン警備艇の別動隊に後背へ付かれました！ 至近です！」

オペレーターからやや焦りの声が届く。彼らには命の危険が迫っているという認識がある。しかし貴族たちの反応は鈍い。

「小賢しい。下らない戦術など問題ではなく、どうせ奴らの貧弱な火力で何ができよう。一応シールドを最大強化していったん防御し、その後回頭して反撃だ。蹴散らしてくれよ！」

貴族たちは大したことはないと言った。実際に斉射を浴びる瞬間までは。

## 第二十六話 486年 4月 次幕

オペレーターは貴族たちと違い楽観などしていない理由がある。

「それが、エネルギー蓄積量がシールド強化に足りません！」

「何だと！」

貴族艦隊はあまりに攻撃ばかり考えていたため、エネルギー量のモニターすら気に留めていなかったのだ。本来戦闘行動でやってはならない度を越した無茶な攻勢を連続して行っていたため、限界に近かった。

つまり、これまでの攻勢は全て乗せられたものであり、ミュラーの緻密な防御そのものが罠だった。

オペレーターやモニタリングの下級士官たちはもちろんそれを知って危ぶんでいたが、貴族に敢えて注進する者はいなかった。兵と貴族の乖離がここに表れている。

そして今度の光条の雨は最初のものより格段に強力だった！

距離を詰められていることもある。

ただしそれだけではなく、フェザーン警備艇の中でも特に大型の艇で艦列が組まれて

いたのだ。

実は最初の貧弱な火力と雑な斉射こそが欺瞞だったのだ。貴族側を油断させるための。

ここからが戦術の本番であり、見事に結果を出していく。

貴族艦隊のシールドは耐えられず貫通されてしまう。

一つ一つの着弾は威力が小さく、直撃でもいきなり爆散する例は少ないが、それでも小破大破される艦が相次いでいく。特に後背から撃たれた以上、必然的に動力部が損壊しやすく、そうなればもはやどうにもならない。動力が低下すればシールドを張るのも推進して逃げることもできなくなるからだ。それもまたミユラーの計算のうちである。

これで貴族たちの気分は急変する。命の危険を悟って無様にも慌ててしまう。

「こんな、こんなはずはない！」

戦場にいるのに今さら危険を認識するのもおかしな話だが、貴族たちは余裕で復讐するつもりでしかなく、返り討ちにされることなど考えもしなかった。

ようやく出した結論は実に簡単なものだ。

何より自分の命が大事な貴族は、他の艦のことなど考えもせず逃げる、それどころか僚艦を犠牲にして助かろうとあがく。

そこには先ほども口にしていた誇りも何も無い。

しかしフェザーン警備艇の数は多く、前後から挟撃態勢をとって押し包んでいく。戦いが進むにつれ、ミュラーの指揮がよりいっそう滑らかに機能し始めた。信頼感というものを潤滑剤として。

最終局面だ。無理な方向転換をした艦から狙い撃ち、冷静に削り取っていく。

貴族艦隊の戦意が衰えていくにつれ、ミュラーは威嚇にとどめて降伏を受け入れていく。

やがて完全に戦いは決着した。

フェザーン警備艇の勝利だ。貴族艦隊の艦のほとんどは逃走もままならず、降伏し、拿捕される結果となった。

「投降、いいや、動力を失ったため不本意ながら援助を仰ぐものだ」

貴族たちは四苦八苦しながら威厳を保とうと言葉だけは紡ぎ出す。単に降伏と言うことさえつまらない工夫で避けようとするのだが、聞く者を失笑させる効果しかない。下らない上つ面のプライドだ。

それでもミュラーは丁寧な言葉で返す。

「了承しました。完全に火器の停止、制御の明け渡しをして下さい。それを降伏の意志とみなし、攻撃はいたしません」

戦いを通してミュラーの横にいて、その指揮ぶりを一部始終見ていたドレウエンツ中尉は感嘆を隠せない。

ミュラーの正確な艦運動指示、精緻な行動予測の能力に舌を巻く。

特に防衛戦術においては敵と味方、どちらの動きも上手に予測しなければとうてい無理なのだ。

そして必然的にこの勝利がある。

「本当に、勝つてしまったんだ。指揮一つでまさかこれほどの結果になるとは、凄い……」

しかしミュラーはそれほど浮かれた表情もせず、命令を伝える。

「まだ一仕事お願いします。行方不明者の搜索をもう一度行いましょう。戦場全体をくまなく。そして被弾して消火作業中のものであれば最大限の応援を。一人でも犠牲を少なくするために」

その様子がまた周囲の驚きを生む。歓声を上げて勝利を喜ぶどころか、犠牲を出していることに沈んでいるとは。

オルラウもドレウエンツも確信した。

「この人についていこう。とても平凡な人ではなく、将来必ずもつと大きい舞台に立つ。名將として」

ミュラーは帰還しながら先ず推挙してくれたルパートに簡潔に戦いの経過と結果を伝えた。

むろんそれを聞いたルパートはすぐに賛辞を贈った。

「あなたにお願ひしてよかった。駐在武官殿」

それは大声ではなく簡潔なものだが、心が込められている。派手な賛辞などレムシャイド伯がするだろう。

帰還すれば、ミュラーは待ち構えていたエカテリーナと真つ先に会う。

「おめでとう、凄いわミュラー！」

もちろんエカテリーナは上気しながら祝ってくる。

「うまく行き過ぎくらいさエカテリーン。僕は運が良かったんだ」

「いいえ、運じゃない。あなたの戦術指揮のおかげじゃない。今記録を見たけど凄いわ。特に柔軟防御が大したものよ、全然危なげなかったもの」

「へえ、エカテリーンはそんな軍事の言葉も知っていたんだ」

エカテリーナは心から嬉しかった。

戦いに勝ったこと、ミュラーが無事だったこと、そしてクロプシュトック艦隊の兵が守られたこともある。

フェザーンもまた守られた。ついでに貴族艦隊を拿捕し、多大な収穫を得た。

もう一つ重要なことがある。ミユラーはクロプシュトゥク艦隊を単なる囹の役にかかわらず、直接戦わせることはなかった。これはたぶん復讐の連鎖を避けるためなのだろう。おそらくミユラーはそこまで考えてくれたのだ。

「全然破られる感じがしなかったわ。鉄壁よ、ミユラー」

フェザーンはこの一連の事件をなるべく穏便に済ませた。

貴族たちはフェザーン回廊に不法侵入し、あまつさえフェザーン警備艇と交戦したのだ。捕虜にした貴族をフェザーンはいかようにもできる立場である。しかし敢えて罪に問うことはしない。

ただし艦は全て没収した。

クロプシュトゥク艦と同様に、有用な機材は取り外したのち恒星突入処理すると公表した。

クロプシュトゥク兵たちはようやくこれで一安心できる。フェザーンにしばらく逗留しながら、自由惑星同盟側の亡命受け入れの決定を待つ。

「フェザーン、自由の国、万歳！」



そこには笑顔があった。

皆、フェザンに心から感謝していた。正直フェザンがこうまでしてくれるとは思わなかった。実はクロプシュトック兵でさえフェザンなど商人の国に過ぎず、金儲けの狡猾なイメージしか持っていなかったのだ。それなのにフェザンはあれほどの危険を冒しても絶望から自分たちを救ってくれたとは。

事件の顛末を弁務官レムシャイド伯爵がとりまとめ、オーデインの国務尚書リヒテンラーデ侯に報告した。

「そういうわけで戦いは我が帝国の駐在武官の活躍により無事収まりました。フェザン回廊に不法侵入した貴族たちは迷惑料という賠償金をフェザンに払うことで解放されたよにございます。クロプシュトック兵の方は予定通り叛徒方面へ順次亡命を」「ふむ、これは儂としても思わぬ事件になったの。しかし伯の適切な対処のためそれだけで済んだと言えよう。ご苦労じやった」

「もつたいないお言葉にございます。国務尚書閣下。」

通信が切れた後、リヒテンラーデ侯が言う。

「フェザンめ、この事件も利用して焼け太りおつて。帝国に貸しを作ったつもりかの。」

それに戦いが済んだ後、艦艇を本当に処分したのじやろうか。まっこと胡散臭い。油断ならんの」

そんな呟きが終わるやいなや、横から声がかけられる。

「大おじさま、それならフェザーンをまた探ってみるの?」

「いや、エルフリーデを呼んだのは別のことを頼みたいと思うたからじゃ。実のところ事件はまだ終わっておらん」

「別のこと?」

リヒテンラーデ侯がエルフリーデにその頼みごとを説明していく。

それはフェザーンとはまるで関係がなく、むしろ帝国軍内部の動きについてであり、政治的なものだった。

「今、ブラウンシュバイクめのところに帝国軍の少将が捕らわれておる」

「え? それがどうかしたの?」

「そのことだけなら儂が関与するようなものではない。その少将とやらは軍監をしていたがブラウンシュバイク公の逆鱗に触れたかなにか、つまり冤罪で捕らわれた。問題はここからじゃ。その少将と仲間がああグリューネワルト伯爵夫人の弟に助けを求めて接近しようとしておる」

エルフリーデは素早く考えを巡らせ、リヒテンラーデ侯の言いたいことを先取りする。

「分かったわ。その事件によつてどんどん結びつきができていくつてことね。少将は助けられたら忠誠心を抱く、いや忠誠心を引き換えに助けるでしょう。要するに、その弟が帝国軍内で派閥化するかもしれないってことかしら」

「おお、よく分かったのうエルフリーデ。これも良い機会かもしれないと思うてな。その実態を探つてほしいのじゃ」

恐るべき懐刀、エルフリーデ・フォン・コールラウシュが密かに動き出す。

## 第二十七話 486年 4月 女と男

「しかし、よくよく私もその弟に縁があるものね。先にはひと働きしたばかりなのに」  
その通り、ラインハルトに関することでエルフリーデは繰り返し良い働きを見せていた。

色々な陰謀からラインハルトを守ったのはエルフリーデなのだ。リヒテンラーデ侯の意を受けて。

初めに刺客を片付けている。これはかつて宮中のベーネミュンデ侯爵夫人が八つ当たりでラインハルトを害そうとしたので対処したのだ。

次にはノルデン少将という曲者をラインハルトから遠ざけている。

ラインハルトの地位が上がるにつれ、貴族の反感は急速に高まり、ついにはベーネミュンデ侯爵夫人以外にもラインハルトを害そうと企む者が他にも出てきたのだ。

寵姫の弟、しがたない没落貴族出身、そして何より本人の不遜な態度、上位貴族たちが反感を持つ理由はいくらでもあった。

害する方法として何とラインハルトの参謀にまで間者を送り込んできたのだが、それ

がノルデン少将だった。

しかしエルフリーデの目を逃れることなど不可能である。

巧みに糸を操り、そのノルデン少将を引き離し、ついでに激戦地へ送り込んでいる。これでノルデン少将が斃されるのも時間の問題だ。

その働きは、これほど離れた場所からでも陰謀が有効だということの好例である。

ただし、人類社会をその権謀術策で一手に操るリヒテンラーデにとってすれば、姪エルフリーデの働きは頼もしいものであっても意外とまで思わない。

今回委託した任務もそつなくこなしてくれるだろう。

「その捕らわれた少将の救出にはエルフリーデが手を下さずともよい。頼むのはそんな簡単なことではなく、ラインハルト・フォン・ミューゼルが将来、帝国軍を左右する派閥を作り得るか、派閥の頭領となるほどの器量があるか見てほしいのじゃ。今後どこまで重要になるか判断する材料を得るためにな」

「そういうところね。分かったわ、大叔父様」

「いくら才能があつても一人では限界があり、部下を心服させて派閥が作れるかどうか、それが鍵となるからの」

エルフリーデはひとまず状況を把握する。

先のクロプシュトゥック侯討伐の際、ブラウンシュバイク公艦隊へ帝国軍から軍監が一人付けられた。

それが今回問題になっているウォルフガンク・ミッターマイヤー少将だ。

その若さで少将という異例のスピード出世を果たしている有能な人物である。しかも平民出身というから驚きだ。

しかし、軍監という任務には致命的に向いていなかった。

平民出身であることが大いにマイナスに作用したのだ。

クロプシュトゥック侯の私領艦隊を破るのにミッターマイヤー少将はその軍事的な才気を使って指南しようとした。しかし、貴族たちにとり平民出身の軍監など論外だった。無視、あるいは煙たがれるだけに終わる。能力以前に平民出身というだけで軽視し、その策に従うことなど全く無い。

しかも、その策にしたところで貴族私領艦隊の寄せ集めには実現不可能なことが多い。烏合の衆なのに帝国軍のような訓練された統一行動などどだい無理なのだ。

真面目に職務を考えていたミッターマイヤー少将は呆れかえるしかない。

「貴族私領艦隊とはこんな体たらくなのか。まともな軍なら俺が指揮してクロプシュトゥック艦隊など三時間あれば破れるものを」

このことを伝え聞いた貴族たちははつきりとした反発と憎しみを抱いた。

それはミッターマイヤーらしからぬうかつさであったが、これは率直さが裏目に出た格好だ。軍という実力の世界にいたために貴族というものの考え方を深くは知らない。

その後、ブラウンシュバイク公側の貴族艦隊はなんとかクロプシュトック私領艦隊を押し切り、領地惑星に降下して占領作戦に移る。それは数の力だけの行動で、戦術も何もあつたものではなく、ミッターマイヤーは呆れるしかない。

ただし問題はその先にあつたのだ。

貴族の本質はここに現れた。

クロプシュトック領惑星は阿鼻叫喚の地獄絵図となつた。貴族たちは分捕り放題、領民を殺して奪うことしか考えていない。そもそもが貴族というのは奪う存在なのである。それが復讐という大義名分を得た以上、どんなことでもやってのける。

そういった貴族どもの無法を許しておけるミッターマイヤーではない。

正義感は一倍持つている。

懸命に貴族の乱暴狼藉を防ぎ、領民を守ろうとした。

そしてついに決定的な事件が起きてしまう。目に余る無法を働いたコルプト子爵家の子弟をミッターマイヤーは射殺してしまったのだ！

それは狼藉の現行犯に対し、警告を経た上で行った軍監として正当な処置である。法的には何も問題ないだろう。しかし、貴族たちにとって平民が貴族を射殺したということのみが重要な問題だ。

不当にもミッターマイヤー少将は捕縛され、コルプト子爵の縁者の復讐に晒される。悪いことにコルプト子爵家は大貴族ブラウンシュバイク公に連なる家柄であった。

ミッターマイヤーはすぐに殺されることはなかったが、仮に正当な裁判を求めても無駄である。

おそらく何かの捏造でもでっちあげられて、死と同義の厳罰が下されるのは明らか、帝国において大貴族の意向は法に優先されて当たり前である。

更にややこしいことに、同じ帝国軍少将という地位にあったフレーゲル男爵までもがしやしやり出て、ここぞとばかりにミッターマイヤー少将を亡き者にしようとした。

ブラウンシュバイク公の甥であるフレーゲル男爵は歪んだ貴族選民主義の持ち主で、日頃から平民出身の将官など帝国軍には不要と公言している人物である。

スピード出世の平民将帥など最初から忌むべき者であり、極刑を願うのは当たり前である。



この逼迫した事態に最も早く行動を起こしたのはミッターマイヤー少将の親友であるオスカー・フォン・ロイエンタール少将だった。

この人物はミッターマイヤー少将とは見かけも性格もまるで違う。

しかし、過去同じ戦場で共に戦って以来親友になっっている。余人では伺い知ることができないくらいに強い友情で結ばれているのだ。

今回の事態も自分のこと以上に心配している。

そして心配だけではなく、ミッターマイヤーの危機になりふり構わず行動する。

順当なことをいえば法の下に事件を引き出すべきなのかもしれない。しかし大貴族が絡んでいる以上全く無理なこと、しかも法の正義など期待できない。

道はたつた一つしか残されていない。

誰か別の有力者の庇護を求めろのだ。しかしその候補はあまりに見つけにくい。それはロイエンタールの人脈が広くないというだけではなく、有力者は貴族でなければ意味がないのにも関わらず貴族の選民思想に染まっっていない者でなくてはいけない。

そんな都合のいい者を見つけられるだろうか。しかも期限内に。

例えば、ミュッケンベルガー元帥は戦場経験が豊富だけあってそういった選民意識は持っていない印象だが、さすがに一介の少将のことを相談するには敷居が高すぎて無

理だ。それに有力ではあつても貴族たちとしがらみが多く、貴族と正面切つて事を構える可能性があるのでに請け負つてくれるとは思えない。

ブラウンシュバイク公に敵対する人物としてリッテンハイム侯という大貴族がいる。しかしながら、陣営が違うという一点のみ異なるだけで、帝国貴族としての考えは同じようなものである。おそらく平民の庇護に興味もないだろう。これもまた味方してくれるように説得するのは不可能だ。

たつた一人、頼めそうな人物が選択肢に残つた！

それがラインハルト・フォン・ミューゼル大將だつた。帝国軍内における評判は極めて悪い。皇帝の寵姫である姉の威光で実力と関係なく出世した鼻持ちならない人物とみなされている。それは貴族のみならず、いや平民出身の将兵もまたそう思い、妬んでいるほどだ。

これまでの戦果など偶然の産物に過ぎず、異常な出世がそもそもおかしいと。

更には本人の言動も素行も過激なもので、およそ穩便とはかけ離れていることがそれに拍車をかけている。

華麗な表現の皮肉を得意としていた。

人目もはばからずそれを行なうのだ。

側にいる赤毛の副官がいつもなだめるが、間に合わないことも多く、そのため無用な

反発を受けることも多くあった。

だがしかし、客観的に見れば実際の艦隊指揮ぶりは水際立って優れ、いつでもその地位にふさわしい以上の戦果を上げている。ロイエンタールは直接部下になったことはないが、それはよく分かる。

賭けだ。この未知数の人物にオスカー・フォン・ロイエンタールは友人ともども運命を託すと決めた。噂は噂に過ぎず、どんな考えを持つ人物かは会って見ないと分からない。しかし、少なくとも貴族社会の常識的な価値観を持つていないだろう。

ロイエンタールは事前に連絡をした上で、ラインハルトと会談を試みた。

その動きをエルフリーデが察知した！

ミッターマイヤー少将の数少ない人脈と、それらの人々の人となりを知ればアンテナを張るのは簡単だ。ロイエンタールの思惑も動きも予想の範囲に充分収まる。

ただし、ロイエンタールの動きは予想よりも早かった。

おまけに断固とした意志で、一刻の猶予もならないという姿勢を崩さない。

何と大嵐の晩にも関わらず会談に向かったのだ！

そんなことで日を改めることはせず、万難を排して会談場所のラインハルト・フォン・ミューゼル大将の別邸へ行くこうとしている。

その行動を知ったエルフリーデもまた直ちに後を追う。

追ってどうするのだろうか。しかし、何か重要なものが得られる予感がしたのだ。予感に従うのがエルフリーデの常である。

大体にして既に得られた情報がある。というのは、ロイエンタールという人物が嵐をもとめせずに友のために行動する人間であるということ、そして危機にあるミッターマイヤーと固い友情で結ばれていること、これらは疑うべくもない。

エルフリーデは普通通り車を使い、ロイエンタールの足跡を追った。

もちろんロイエンタールも当然車を使ってその別邸へ行くものと思っていた。オーデイン郊外は夕暮れからますます風は強くなり、雨も大粒になっている。間もなく叩き付けるような大雨になるだろう。風に卷かれる木々の音も不気味に高まっている。こんな嵐の日は車でしか移動できない。

ところが前方に見えてきたものに驚かざるを得ない。

目標とするロイエンタールは何と馬に乗って走っているではないか！

なぜ？ と考えたがここで止まるわけにはいかない。

それではエルフリーデが後をつけてきたことが丸分かりになってしまう。やむなく追い越して行かざるを得なかった。

そこで偶然にも都合の良いことが起こった。

いきなり稲光りが周囲を照らし、数秒後に大音響が響き渡った！

落雷だ。

しかもそんなに離れた場所ではないとは、少なからず危険である。

エルフリーデは落雷を天祐として最大限利用することにした。

車のスピードを落とし、やがて追い付いてきたロイエンタールの馬に並びかける。

ロイエンタールの方もそんな車両を訝しがり、一瞬間を向けてきたが、直ぐ前に戻した。嵐の中で馬を駆っているのだから当たり前だ。

しかしそんなロイエンタールにエルフリーデの方が見とれてしまう。レインコートに半分隠れていたが、ロイエンタールの横顔は際立って端正だった。

二度目の落雷が光る。

またしても大音響、しかも距離はさつきより近い。

エルフリーデは車の窓を開けてロイエンタールに声をかける。

「もし、馬では落雷に対して危険ですわ。車の中の方が安全です。よろしければこちらにお乗りになったら？」

「ご婦人、それは親切なことで、ありがたい」

確かに落雷には車の中が一番安全である。

ロイエンタールは遠慮すべき場合ではないと認識し、簡潔に謝意を表わしてこの申し出を受けることにした。

車の中では特に会話らしい会話はなかった。

「お急ぎでしょうか。嵐は嫌なものですわね。こんな夜更けは特に」

こう言つて話を振つてもごく簡単な返事しか返らない。

それはロイエンタールがエルフリーデのことを警戒しているのではなく、頭の中が別のことで一杯になっているせいなのだろう。

その通り、目的地に着いたらロイエンタールは全身全霊をかけて相手を説得し頼みごとを請け負つて貰わなくてはならないのだ。そう簡単なことではない。

またしても稲光が光った。

エルフリーデはさつとロイエンタールの顔を見る。一生懸命に友のことだけを考える真摯な顔だ。

思ひ切つて尋ねる。

「こんな夜に、何の用事があるのです？ 事情を聞くのも差し出がましいようですが、怖いほど深刻な顔をなさつておいでですわ」

逆にご婦人こそ何でここに、と聞かれたら困ることになる。

しかしながらエルフリーデはどうしても尋ねたかった。

それは情報収集のためなどではなく、この男と会話したいという思いが勝ったからだ。

エルフリーデの予感自身は自身の運命までも変えるものだった。

第二十八話 486年 4月 アスターテへの道

嵐の中で馬を駆っていたのはなぜか。

エルフリーデのぶしつけともいえる質問にロイエンタールが正直に答える。

それは車に乗せてもらっているからということではなく、やはりこれからのことで頭が一杯になっているので、いつもの警戒心に隙があるからだろう。

「どうしても行きたい所がある。今夜のうちに」

「そう、では大切な用事なんでしょうね。そんな厳しい顔で考え込むほどの」

「自分、というより友のために何としても行かねば」

半ば予期していたとはいえ、この断固たる言葉に衝撃を受けた！

権謀術策の渦巻く宮廷に染まったエルフリーデには驚きになる。

このロイエンタールという男は友をおそらく自分よりも大事にしている。

それはまるで自分の命よりも。

「友のため……それは素晴らしいことと思いますが、何でしょう、自分より大事にしているように聞こえますわ。何かこう、むしろ自分を大切にしていないような」



しまった！ 正直に思った通りを言い過ぎたとエルフリーデは思った。

普通の貴族婦人に外れたことを言ってしまった。下手に洞察力を発揮したことを言えば怪しまれてしまう。

しかしロイエンタールといえば、また自分の思いに沈みこみ、話を半分も聞いていない。

エルフリーデもそれを刺激しないよう再び黙り込む。

雨と風の音は耳になじんできたが、ワイパーの音だけがひっきりなしに聞こえてやまない。

女と男、二人は嵐の中、無言のまま車を進ませる。

進んでいくにつれて、しだいに道が狭くなってきた。

それだけならまだしも嵐に吹き散らされた木の枝が散らばってきている。嵐が激しさを増し、枝を折るほどに風が強くなっているせいだ。

だがエルフリーデの車は、なんとそれらをものともせず次々跳ね飛ばしながらスピードを落とさず進む。

それにはさすがにロイエンタールも気付き、驚かざるを得ない。

「これは、ご婦人の運転とはとても思えない！ 枝で車が傷つくと思えますが……」  
互いに正式の自己紹介はしていなかった。

しかしロイエンタールが思うにおそらくこの女は貴族の婦人、雰囲気ではな  
いか。

しかし、貴族はよほどでなければ自分で運転などしないものだ。特にこんな夜には。  
現実に運転しているとところから、極端に活動的な婦人だろうと踏んでいる。

しかしこんな運転は尋常ではない。

車が傷付くこともそうだが、障害物を跳ね飛ばす衝撃は、普通の婦人なら青ざめるほ  
どのものではないか。例えていえば直撃をくらった戦艦のような感じである。

「いえ、お気になさらず。先ほどとても大事な用があると聞きしました。それはこん  
な車よりたぶん大事なことなのでしょう。心配なさらずとも良いですわ」

しかし、ついに終わりが訪れた！

道に大きな倒木がある。しかも倒れ方が悪く、ちようど道路を横断する形になってい  
る。こんな大きさ、手で持ち上げて撤去しようにも一目で無理だと分かる。

道は塞がれて、もう車では通れないということだ。

「申し訳ありません。今頃やつと分かりましたわ。なるほど、嵐なのに馬に乗っていら

したのは、こういうことを予期されていたのですね。余計なことをしてしまい、お詫びの言葉もございません」

確かに馬で走っているのであればこういう思わぬ障害物でも乗り越えられる。

とんでもなく古風な方法に見えたが、乗馬とは実に合理的な判断だった。それは目的地に行くための最も確実な方法だったのだ。

ロイエンタールはまたしても驚く。それを直ぐに気付いたこの女の頭の良さに。

「結果的にはそうかもしれないが、落雷が近かったのは想定外で自分のミスだ。ご婦人、ここまで乗せて頂いて感謝する」

「しかしここからどうやって」

「いいや心配なさることはない。行きたい所はもうすぐそこに見えているので、歩いても時間はかからない」

確かにラインハルトの別邸が、近くの丘の上に立っているのが見えている。

「ご婦人、本当に助かった。この親切に礼の言葉もない。ご婦人こそ引き返すのは大変なのでは？」

「いいえ私のことなど…… お役に立てたのなら嬉しく思いますわ」

それで別れた。

しかし、後日この出会いがエルフリーデ・フォン・コールラウシュとオスカー・フォ

ン・ロイエンタール、二人の運命を大きく変え、更には宇宙の運命まで変えたのだ。

その後、ロイエンタールがラインハルトやキルヒアイスに会ってどんな会話をしたのか、エルフリーデに知るすべはない。

しかし結果は詳しく知っている。

ロイエンタールの願った通りになり、ラインハルトは他の貴族たちの妨害をものともせずミッターマイヤーを保護した。ミッターマイヤーはこれで命拾うことができ、目的は達せられたのだ。

しかもその後が面白い。ミッターマイヤー、ロイエンタールの両将ともラインハルトに近い仲になり、あたかも幕下に加わっているような印象である。

その事実とあの嵐の夜の真摯な顔からエルフリーデはほぼ正確に想像できた。

ロイエンタールは友を救うべくラインハルトへ率直に願い出たのだ。その代価はおそらく財などではない。忠誠だろう。

そしてラインハルトはそれを貴重なものと感じ、だからこそ動いた。

ロイエンタールの持つ才も見抜いたに違いない。

そう考えるとラインハルト・フォン・ミューゼルというのは度量もあり、行動力もある

る。友情を理解し大事にする感性もある。有能な人物をこれからも引き付けるのではないか。先々、これは何より重要だ。

エルフリーデの諜報活動は半ば達成されている形になったが、もう少し確証を得たいと考えた。

そしてもう一人、ラインハルトの陣営に属すると見なされている人物に近付いてみたのだ。

それにエルフリーデのピアノ演奏の素養が役に立つとは！

その人物、エルネスト・メックリンガー准将と高名なピアノ演奏家のツテで何とか知り合えた。

ただし、実際に話しができたのは一回しかない。

なぜならメックリンガー准将には芸術パトロンのヴェストパーレ男爵夫人が付いている。

この男爵夫人はとても嗅覚の鋭い女であり、エルフリーデが探りを入れるために接点を持つと画策してもなぜか邪魔を入れてくる。

こうなると探り過ぎて逆に騒動に発展したらかなわぬ。エルフリーデは早めに撤退した。

しかし探りとしては必要充分だ。芸術的な才能などこの際どうでもいいが、メックリ  
ンガー准将が落ち着いた知的な人物であることはすぐに分かる。軍人としても水準以  
上の能力があることは明らかだ。

理論をベースに考えを進めながら、頭の良さで先を見通し修正する柔軟性もある、そ  
んな将だろうと思えた。

そんな人物を麾下に取り込むとはラインハルトの将来性は明るい、エルフリーデは確  
信を持った。

そうリヒテンラーデ侯にも報告する。

「おお、ようやくってくれた、エルフリーデ。そうか、グリューネワルト伯爵夫人の弟ライ  
ンハルトは将来力を持ちそうか」

「そうね、有能な者は有能な者を呼ぶもの。思ったより強くなりそうよ。今はまだ貴族  
社会でも軍でも小さい炎かもしれない。でも先のことは分からないわ」

「簡単に吹き消されるか、それとも誰にも消せない大火事になるか。儂の手の平に収ま  
ればよいのじやがな」

「それじゃ、もつと見張ってみる？ 私もあの派閥には興味があるわ」

それは嘘ではない。

正確にはエルフリーデはランハルト派閥の主要な一人に興味を持っている。もちろんあの晩に会った男、オスカー・フォン・ロイエンタールである。

だがリヒテンラーデ侯は溜息をつき、別のことを言う。

「いや、エルフリーデには、今は違うことを頼みたいのじゃ。今の宮廷も問題が多い。ベーネミュンデ侯爵夫人がまた良からぬことを企まぬよう、見張っている者が必要じゃからの」

リヒテンラーデ侯は疲れたように付け足す。最近の帝国は問題が山積している。

「それにまだまだ問題がある。今度はカストロプ家にも不審な動きがある。クロプシュトック家のことが終わったばかりじゃというのに、ようも次々あるものよの。儂も疲れおる暇はないわい」

リヒテンラーデはこの年、長く盟友として付き合っていたグリーンメルスハウゼン老人を喪っている。その老人は軍にいながらにして貴族社会の陰謀を解き明かしてはリヒテンラーデの大きな力になっていた。

それでいよいよリヒテンラーデの責務は重い。

今まで帝国を支えてきた重責は皺になって刻まれている。しかし目の光はいささかも損なわれていないのだ。

気概は衰えていない。この銀河帝国を支え、命の限り忠臣たらんとする思いは。

この年、もう一度大規模な戦いが巻き起こる。

それは第四次ティアマト会戦と記録されるものである。

この戦いに際してもフェザンは自由惑星同盟に大きく肩入れし、情報を流した。

ところが戦いは双方互角という程度に終わった。どちらも大きな損害を被ったが、比率で見るとならば同盟の方が傷は深い。同じ損害でも同盟は人的にも経済的にも回復力に劣るのだ。

この結果もまたフェザンのルビンスキー家にまたしても深刻な課題を突き付ける。

もう一つ、小さな問題かもしれないが、この戦いにナイトハルト・ミュラーも帝国軍として前線参加している。

先のフェザン警備艇を見事に指揮してのけたゆえだ。

その素晴らしさに着目した帝国軍はフェザン駐在武官の任期満了を待たずしてその任を解き、前線に呼び戻した。一度にはないが、二階級も上げて中佐になっている。平民出身としては異例なこと、これは弁務官レムシャイド伯爵の報告がとも率直だったゆえである。

そしてミュラーは抜擢に見事応え、この第四次ティアマト会戦において大きな武功を



立てた。

ほぼ壊滅した分隊の指揮を引き継ぎ、自分の乗る駆逐艦を含めた駆逐隊を生き残らせ、おまけに逆撃までしてのけている。

この活躍により、更に昇進し大佐になった。

それは軍人として大変嬉しいことだが、ミュラーは心の奥底で思うことがある。

フェザンでの日々をいつも思うのだ。

それは殺し合いなどしない、穏やかな日々だった。軍人として晴れがましいことはないかもしれないが人間らしい時を過ごした。フェザン一のおてんば娘エカテリーナと共に。

あれはもう取り戻せない過去でしかないのか。

思い出として残されたという意味しかないのか。

そんな個人の感傷の一方、否応なく銀河の歴史は進む。

歴史上、極めて大きな転換点となり、その後を決定付けた戦いが引き起こされた。

その戦いの名は、アスターテ会戦。

ここから歴史は英雄の時代に入る。帝国に一人、そして同盟に一人。

## 第二十九話 486年12月 政治家

この年、帝国軍は大規模な軍事行動を計画していた。今回は帝国側から仕掛け、敵領に侵入し、成果を持ち帰ろうというものだ。

純軍事的にはあまり意味がない。

恒久的に支配領域を広げることは最初から無理だと分かる。

だが作戦にはたった一つだけ意味があった。それは宮廷行事に華を添え、皇帝の治世に成果があつたと記するためのものだ。

今の皇帝フリードリッヒ四世にはあまり特記すべき事項はなく、平凡である。その平凡であることがいかに貴重なものであるか分かりもせず、歴史記録にちよつとした一行を加えたい者たちによって企画された、下らない侵攻作戦だ。

ただし、その軍事行動には珍しいことが含まれていた。

一つはラインハルト・フォン・ローエングラム上級大將が率いていることである。

なるほど地位だけを見れば上級大將が行うにふさわしい作戦かもしれない。規模か

らすれば数個艦隊を率いる元帥ではなく、通常の一個艦隊を率いる大将でもない。ただし、それは普通の上級大将であった場合だ。

現時点でこの上級大将はわずか21歳である！

幼年学校を卒業して五年にもならず、仮にこれが士官学校卒だとしたら、学校を出たばかりのヒヨツ子ではないか。

むろん、この上級大将は自分が全責任を負って会戦を行なった経験などない。

元帥の副官という経験、いやそれどころか参謀長の立場で会戦を見た経験すらない。ということは大会戦をコントロールすることの一端に触れたことがない！

いくらこれまで華麗な艦隊行動を指揮してみせた実績があるとはいえ、あくまでも会戦の一部として機能していただけに過ぎない。

そんな人物がいきなり三百万人の兵の命を預かるのである。

しかも艦隊は編成されたばかりで実戦どころか訓練すら充分ではないのだ。とどめに補給も後詰もあり得ない敵領に遠征するとは自殺行為ではないか。

作戦自体も摩訶不思議なものだった。

骨子は帝国軍艦艇二万隻を率いてイゼルローン回廊から出撃し、敵領地に入って戦うということだ。

この戦力は威力偵察にはあまりに大きすぎる。そんな規模の話ではなく、れつきとし

た帝国による同盟領侵攻という範疇になり、つまり近年にない帝国からの長距離出撃だ。

しかしながら、敵首都星を突く、あるいはそれに準じた重要拠点を叩くというにはあまりに戦力が足りない。

なににせよ戦略的に中途半端であり、兵たちが出撃前から絶望的になるのには理由にお釣りがくる。

単に捨て駒にされるように思えたからだ。

「少将閣下、いつもより兵たちが動揺しています。中には有り金全部使い切って連日飲み歩く連中さえいます」

「間もなく金を使うこともできない世界に行くかもしれない。それくらいは好きにさせておけ」

「では、この件は放置と……」

「そうだ。実際それが一番利口なのかもしれないからな」

今から敵領に入ろうとする帝国軍艦艇二万隻、それは本隊の他に分艦隊が五つも含まれている。それで通常の一個艦隊よりも数が多くなっている。

それは分艦隊の将たちで、年若い総司令官である上級大将を補佐するようという配

慮に見える。ただし表向きはそうでも、内実は帝国軍の厄介者である将を押し付けただけに過ぎない。無能者、硬直した者、逆らいやすい者などだ。

今、参謀にそう言われて返事を返したのはその一人だ。

薄氷色の瞳を持つ将、アーダルベルト・フォン・ファーレンハイト少将である。

本人も帝国軍中枢部に厄介者扱いされている自覚はあり、その原因が中枢部批判や命令違反を繰り返した過去にあることも知っている。どうしても皮肉屋の性質が抜けず、覚えをめでたくすることなどできないしする意思もない。

しかし、帝国軍の将にしては珍しく根性論、鉄の規律などという言葉とは無縁だ。規律にむやみと厳しいことはない。

だからこそそういう返事を返している。

戦いでは生き残るための運か才能がなければ死ぬ、というシニカルな考えが厳しいというのなら、間違いなく厳しい方の将かもしれないが。

「兵たちは酒に酔うと司令部批判まで行います。規律上多少は問題かと」

「それを責めることはできない。俺もたぶん同じことを言いたい。今回の作戦について、思う所はあり過ぎる」

ファーレンハイトには帝国軍上層部の意向が薄々分かる。帝国政府に言われて始められた作戦ではあっても、軍には軍の思惑があるのだ。

若い金髪の上級大将を試す、はつきり言えば実力が地位と釣りあつて無ければ死んでこい、といったところだ。そして厄介払いのついでに自分も嬉しくない抜擢をされた。

とんでもなく運が悪いとしか言いようがない。

「貴官も同じことを思っているのではないか。兵たちや俺と同じく」

「それでも表向き言つたりはしません。金髪と赤毛の二人だけで行つてこい、クソツタレ、などという言葉は決して」

これにはさすがに皮肉家のファーレンハイトも驚き、苦笑する。

「貴官は顔は優しいが言葉は悪いな。末席参謀のザンデルス中佐といったか」

さて、この帝国からの侵攻を受ける側の自由惑星同盟である。

どのみち侵攻に対して取るべき対応は一つだ。国交もない国同士、交渉や政略は考えられない。

攻めて来るなら防衛戦を戦うしかない。

何としても自領の有人惑星を守り、同盟市民を保護する。それが同盟軍の存在意義である。

それら帝国と同盟という当事者の他にも動く者がいる。

フェザンは戦いを前にした状況でまたしても同盟に肩入れしていく。

特に今回は貴重な情報を同盟に伝えるという思い切ったことをしている。

しかもそれをフェザンの同盟弁務官を通すのではなく、ハイネセン駐在のフェザーン弁務官を使って情報を流した。もちろん先のことがあり同盟からの弁務官ヘンスローをもらってフェザンは信用していないからだ。

ただしそれは理由としてはおまけに過ぎなかったのかもしれない。

そのことに気付いた人物がいた。

ハイネセンに駐在するフェザーン弁務官は当然ブレツェリだった。今、フェザーンから同盟に帝国軍の機密を渡す役を担うことになる。表面ではフェザーン弁務官の業務の一環として粛々とそれを行なっているが、もちろん内心は狂喜している。同盟にとつてこれほど貴重な情報はなく、軍事的に計り知れないアドバンテージを得られるものだ。

ところが不審な点がある。

フェザーンが軍事情報を渡す相手は同盟最高評議会議長ではなく、同盟軍統合作戦本部の誰かでもない。

何と国防委員ヨブ・トリユーニヒトだった！

このことをフェザン自治領主の名で指示されていたのだ。

確かに他の委員に渡すよりは国防委員に情報を与えるのは変ではない。だが他にもっとふさわしい人物がいそうなものだ。もっと地位の高い政治家か、あるいは直接作戦を立案する軍人か。

なぜフェザンの指定はヨブ・トリユーニヒトなのか。

何かしらのつながりがあるのか。これはプレツェリとしても慎重に会談に臨む必要がある。

「ではトリユーニヒト国防委員殿、フェザンからこれをお渡しします。出処を書いてはいませんが、もちろんフェザン自治領主アドリアン・ルビンスキーからのものです。お分かりとは思いますが極秘情報ですので、目を通されたら今日の内に書類は全て処分すると確約して頂きたい。念のためです」

「それはもちろんお約束します、プレツェリ弁務官。これほどの重大情報、フェザンにとっては証拠を残しておけるはずもないでしょうな」

内実を知る者にとっては茶番だろう。

同じ同盟の側に属する人間同士がおためごかしに話している。

しかもここはハイネセンだ。



とはいえ、プレツエリは真実を明かすことはしない。今は素性を隠し、あくまでフェザン弁務官という人間の立場で責務を果たすのだ。まるで二重スパイのようだな、とプレツエリは思わないでもなかったが、気を許さないのも職務の内である。

情報を渡せば仕事は終わりだ。

プレツエリはこれで席を立つてもよかったが、やはり確認しておきたいことがあった。

「我がフェザンは情報というものの重要性と怖さを認識しております」

「それは当然です。私も同じ認識ですよ。情報を軽んじる輩の気持ちがるでわかりません」

「今回お渡しした情報も戦いの帰趨を左右するものになるでしょう。間違わずに活用すれば。結果、そちら側の兵士の命に換算すればどれほどの数に値するか」

プレツエリはそうやって話を向けた。

何気ないおまけの会話のようだが、このヨブ・トリユーニヒトの考えを探る助けになればいい。

自分はそれを確かめたいのだ。

ヨブ・トリユーニヒトがそれに対して即答してくる。

「そう、どれほどの数に及ぶでしょうか。我が同盟軍兵士の犠牲を一人でも減らすため、

最大限役に立てなくては」

「そうしてもらわねば困ります。せっかくお渡しするのですから」

そこだけはプレツエリの本心だ。

同盟のため、その情報を是非とも使ってもらいたい。

「ついでの話ですが、国防委員長、この情報を具体的にどう使うか思いつくことはありませんか？」

更にプレツエリは一步踏み込んだ。

トリユーニヒトは少し首を傾げ、今度は一呼吸考えてから言う。

「いえ知つての通り、私は軍事の本当の専門家ではありません。国防委員ではありませんが、それはいわゆる文民統制の一環としてのものです。私などが思いつけるのは常識の範囲を超えないものでしょう。いわゆる素人考えというものです。まあ、それで言ってしまうえば、もちろん敵帝国艦隊より十二分に上回る戦力をあらかじめ用意して、一気に決着を付けるべきでしょう」

「なるほど、全く同意できる考えですな」

「帝国側の戦力が分かっているらば対応する戦力が容易く計算できます。それに、下手に小出しにして持久戦になってしまえば有人惑星に被害が及ぶ可能性が出てくるでしょうし。破れかぶれになって思いもよらないことをしでかしたら厄介と考えます」

「確かに民間人被害を考慮するのは最優先でしょう」

「もう一つ気になるポイントは帝国軍の司令官のことです。あまりに若い。帝国軍の意図が何なのか判断しかねますが、司令官が分かれば性格と能力を確実に分析できます。順当に考えるならば、若さゆえ作戦行動は短慮で性急であるかもしれませんが、あるいは別の可能性も……」

ここで話が途切れた。

ヨブ・トリューニヒトの顔に警戒心が垣間見える。

おそらく、話に乗せられてしゃべり過ぎたと思っっているのだろう。ここはこれ以上探るべきではない。

「軍事も単純ではなさそうですが、しかし驚きました。文官である国防委員長が直ぐにそれだけおっしゃることができるということ、自由惑星同盟の人的資質も捨てたものではないようです。」

「お褒めいただきは何よりです。まあ、これでも私は市民から任されて国防委員の椅子に座っている者ですから、多少は勉強したつもりです。しかし、今おっしゃられた人的資質というものは相対的なもので、同盟がフェザーンや帝国に比べてどうか心許ない。いや向上の努力を継続し続けないと同盟の未来が暗いものになってしまうでしょう」

それで会談は打ち切られた。

しかし、プレツェリはヨブ・トリューニヒトという政治家が、本気で同盟のことを思う真摯な政治家であることを知った。

会話をしたのは今回初めてだが、権力や金、地位、票のことばかり考える悪徳政治家には見えなかった。他の凡百の政治家に比べればよほどいい。

ヨブ・トリューニヒトは他の政治家についてはあえて言及しなかったようだが、今の自由惑星同盟には能力以前の問題で政治家たるにふさわしくない人物が多いことは明らかだ。同盟の最高評議会議長サンフォードすら黒い噂が付きまとうほどに。

そしてトリューニヒトは知的能力についても水準以上に思えた。

もう一つ、会話中で特に気を引かれたことがある。

今回の情報を利用して兵士の犠牲を減らす、と言っていた。

決して帝国軍と戦って勝利するという言い方ではなかったのだ。そうプレツェリは記憶している。

そして渡された情報は無駄にはならず、しっかりと活かされた。

同盟軍統合作戦本部は侵攻してくる帝国艦隊が二万隻規模と知り、それに対応した作戦案を練り上げたのだ。

結果、第二艦隊と第六艦隊の二個艦隊を動員して迎撃に当たる、当初軍部ではそんな作戦を考えた。その二個艦隊だけで艦艇二万八千隻になる。帝国艦隊より充分な優位に立てる数だ。

加えて帝国艦隊にとつては敵地であり、同盟にとつては自領なのだ。戦況が持久戦になれば物資面でも有利になる。

ところが驚くべきことに国防委員会はこの作戦案を却下した。

もつと多くの艦隊を動員し、大戦力を一気に叩きつけて確実に勝利すべし、との注釈をつけて送り返してきたのだ。辺境領民への配慮が足りないとも明記してある。

ヨブ・トリューニヒト国防委員がそれを特に強く主張したとの噂だ。

すると今回同盟側の作戦を担当するロボス元帥は面目を失い、消極的になった。

もつと簡単に言えばふてくされた！

その結果自分が総司令として戦場に行くことをやめ、現地司令官の状況判断に任せ、と決めてしまった。

複数の艦隊を動員するのに総司令部を置かないなどというのも普通には考えられない。いくら有利な戦力比でも連携が取れないではないか。

銀河の歴史に燦然と名を残すアスターテ会戦、結果的に大きな意義となる。

しかし戦う前に同盟側の歯車は狂い始めていたのだ。

## 第三十話

487年

2月

アスターテ

平行線

同盟軍統合作戦本部シトレ元帥はロボス元帥の我儘ぶりに呆れて翻意を促した。  
総司令部無しで大会戦を戦うというのか！

事は同盟將兵多数の命に関わる問題であり、統合作戦本部としてほっておくわけにいかない。だが余計依怙地になったロボス元帥は作戦担当という立場を盾にとつて変えようとしなない。

かといって今さら作戦担当をシトレ元帥に譲る気配もないとは！

戦いを慎重に考えていたシトレ元帥とは違い、ロボス元帥は自領で迎撃する作戦であり、戦力でも優っているのではどう戦っても勝利すると樂觀していたからだ。

自分がわざわざ行くこともない。そして勝てば自分の株も上がるという姑息な計算をしていた。

この頃、統合作戦本部からグリーンヒル大将が再びロボス元帥の参謀長に異動になっていた。

しかしそのグリーンヒル大将も手の打ちようがない。これまでと同様、ロボス元帥は参謀の意見に耳を貸さないからである。いやむしろ年をとるごとに頑迷さの度が増しているように感じる。

ただしシトレ元帥の圧力と、暗に動くグリーンヒル大将の根回しは全くの無意味に終わったわけではない。

国防委員会の主張によりやむなく追加でもう一個艦隊を追加することになったのだが、ロボス元帥はむろんロボス派の構成員である第四艦隊パストーレ中将を推挙した。しかしそうはならなかった。

もちろん例の通りウランフ中将、アツプルトン中将といった主戦派の面々が追加される艦隊へ参加を希望してきたが、とりわけ強くボロデイン中将が参加を希望したのだ。先のシユムード少将の帝国艦隊に運悪く出会えず、すんでのところで逃がした悔しさがあつたからである。

軍部にそれを是とする雰囲気があり、ロボス元帥も空気を読んで渋々認めざるを得ず、追加される艦隊はボロデイン中将に決まった。

最終的に同盟軍は三個艦隊四万隻を差し向けることとなる。

第二艦隊。パエツタ中将、第六艦隊ムーア中将、そして第十二艦隊ボロデイン中将という陣容だ。



手に入れた情報は正しく、やがて帝国軍艦隊二万隻がイゼルローン回廊を抜けて同盟領に侵攻してきた。

同盟政府は大急ぎでイゼルローン方面辺境星系から住民の避難を進める。

それらの人々は思う。また我が家へ戻れるのか。

避難民たちは同盟軍の奮戦に期待を寄せる。もしも同盟軍が敗退し、帝国軍が惑星表面を占拠ないし破壊するようなことがあれば無情にも生活の拠点を失ってしまう。他の惑星で肩身の狭い思いをしながらもう一度開拓を始めなければならぬのだ。

それでも帝国軍に捕まって農奴にされてしまうより千倍マシなのは言うまでもない。避難を始めた星系は幾つかあるが、エル・ファシルもそういった一つである。

住民は皆忙しく避難の準備をしている。しかし、その表情は疲れの中にも明るさがあつた。

報道管制をぬつて一つの情報が広まっていたのだ。

今回、帝国艦隊を迎撃に向かう同盟軍艦隊の中に第二艦隊が含まれている。つまり、ヤン・ウエンリーが参加しているということなのだ！

あのエル・ファシルの英雄が今度もなんとかしてくれるのに違いない。

特に若い女性は熱の入ったファンレターを送るのだった。

「先輩、このファンレターの山を取っておくんですか？ 返事はどうするんです」

「アッテンボロー、今さらそれを聞くのかい？ 自分ならどうする？」

「そりゃあ、返事なんかできませんよ。一つに書いたら他のも全部書かなきゃいけないし」

「そうだろうとも。他に考えようもない」

同盟艦隊がハイネセンを出港し、今までの忙しさが一段落した時のことだ。

それまで軽口を言う暇もなかったが、ようやくファンレターといった雑事の話ができるまでになっている。

「でも先輩、あるいはこの艦隊の空戦隊にいるポプランっていう色男のように美人の写真付きのだけ返事するって方法を使うとか。」

「いちいち封を開けて中を見る時間も取れない、いや取りたくないんだがねえ」

「いや分かっていますよ。そりゃあ、先輩の勤勉さは限られていますから。しかも小さ目にどうせなら別の方に有効活用してほしいのは山々で」

参謀として第二艦隊に随伴しているヤン・ウエンリーに話しかけているのはもちろんその後輩ダステイ・アッテンボローだ。そのアッテンボローはファンレターの一つをつ

まんでひらひらさせながら首をかしげている。

おどけて冗談を言うポーズである。

しかしここで軽口を止め、表情を少しだけ真面目な方に傾けた。

「ところで先輩、今回の戦いはどうなんですか？ みんなもう楽勝ムードなんですが、本当に同盟側の楽勝になるんでしょうか。順調過ぎるのも心配で」

「そうだなあ、普通に考えれば帝国艦隊の二倍の兵力、よくここまで大盤振る舞いしてくれたと政府に感謝したいところだよ。大兵力で短期に終わらず、それが可能なら一番に考えるべき方策だからね。今回はいい判断をしてくれたものだ。しかし、どうも艦隊の配置が気になる」

「今回は三方の平行進撃から包囲殲滅でしょう。完勝には一番の態勢じゃないですか」「そうなればいいんだけど、向こうがもし本当に有能だったら、そうとばかりも……いや、確かにここで想像ばかりしていても仕方ないな。仕事の一環にした方が建設的だ」

なおさら疑問顔になってしまったアテンボローをさておいて、ヤンが少しばかり思索に入った。

今回の戦いは帝国側の動員数を事前に知っていた同盟側の圧倒的有利だ。

動員兵力は二倍に達し、陣形もいい。しかし懸念が残らないわけではない。

この会話の直後、ヤンは上司である第二艦隊司令官パエツタ中将に具申した。

参謀としての権限による直球だ。その内容は同盟軍作戦の骨子である平行進撃の危険性についてである。

「同盟軍の三個艦隊は率直に言つて距離が離れ過ぎています。少なくとも互いに状況の分かる距離、時間距離にして数時間内にとどめるべきです。どんな事態になつても連携を失わなければ数の利を失わない態勢にできるでしょう。すなわち危険なく勝てます」  
「そんなことはわかっている。ヤン准将。だが、そうすれば帝国軍を包囲に取り込めないではないか。向こうの立場なら絶対的に不利と分かっているとわざわざ飛び込むはずがない。回れ右されてしまえば殲滅できなくなり作戦は失敗する。油断させて食い付かせてこそ作戦がうまくいくのだ。そのために当初はやや距離を取らざるをえん」

ヤンにもパエツタの言い分はよく分かる。

確かに明らかに必敗になるところへ帝国艦隊が来るわけがない。

しかし、あえて言わなくてはならない。自分の思うところの戦略的考えを。

それは勝利というものの捉え方だ。

ヤンは今回、防衛戦という見方をしている。すなわち自領の市民を守ることが勝利で

あり、目的である。

しかしパエツタはあくまで帝国艦を葬ることを目指している。

「戦いが起きないのが失敗でしょうか？ 帝国側が不利を悟り、戦わず撤退してくればそれに越したことはないでしょう。犠牲は何もありません」

「みすみす逃がして、戦いにすらならなければ何が勝利だ？」

「今回、帝国艦隊を同盟領から撤退に追い込むことが目的であり、戦い自体はその手段に過ぎません。同盟の辺境星系を守る上で戦いが回避できるなら願ってもないことです」

「いいや戦って帝国軍を少しでも撃ち減らしておくのだ。今回はその絶好の機会だ。生かして帰らせてはならない。ヤン准将、軍人が戦いを避けてどうする！」

「犠牲無くして目標を達成するのが最良の結果ではありませんか」

これは考え方の違いである。

どちらも自分の考えというものがある。話してもやはり平行線にしかならない。

「しかしヤン准将、その考えにも聞くべきところがある。進言は感謝しよう」

パエツタ中將から議論の矛先を収めた。

この年下の冴えない風貌の参謀を邪険に扱うことはしない。最後は少し相手に気を遣った言葉だ。

それに今までこの参謀の意見は的確そのものであった。幾度の戦いにおいて、その進言は少なくとも後から考えたら間違いであった試しがない。

何より第二艦隊司令パエツタ中將は猛将として知られるが暴虐ではなく、無駄に威張り散らすタイプではない。むしろ同盟軍の艦隊司令官の中では公正な方である。若い頃はもつと私の強い司令官だったが、年齢とともに熟成されバランスがとれてきている。

それが分かっているヤンも言い方を変えた。

「いえ司令官、私も出過ぎたことを言いました。それでは少しでも危険を減らせる策を考えましょう。帝国軍のあらゆる動きを予めシミュレートして即応できる状態にしておき、いわゆる虚を突かれる事態を防ぐのです。それと他の艦隊との連携をもう一度調整しましょう」

それにはパエツタ中將も同意した。用心に越したことはないのはその通りだ。

一方の帝国艦隊の側である。

イゼルローン回廊を進み、まもなくそこを出て敵領に入る。

戦いは間近、総司令官であるラインハルトは高揚している。

「キルヒアイス、楽しみだな。この戦いに勝てばようやく俺も元帥になれるだろうか。

「ここまで長かったな」

「ラインハルト様、これで長いと言ったら聞く者がやつかみましよう」

ラインハルトはまだ二十一歳なのだ！

帝国軍では異例としか言いようがないほど出世を極め、この齡で上級大将の位についているのにそれでも遅いという感覚は普通ではない。

「先にはローエンングラム家の名跡などという形ばかりのものを貰ったが。俺には元帥の方がいい」

そんなことを聞いてキルヒアイスは苦笑するしかなかった。帝国に古くから存在し、今は名跡が途絶えているローエンングラム家という大貴族家の名をもらったのに少しも有難がっていない。人によっては気も狂わんばかりにうらやましく思うだろうに。

それよりも帝国元帥という軍事的能力を欲している。

おまけに来たるべき大会戦でもう勝った気ではないか。キルヒアイスの知り通りラインハルトは気が早い。それは子供時代から変わっていない。

「そうですね、ラインハルト様。ですが戦いに際しては敵にも考えがあるでしょう。勝つてからお考えになってもよろしいのではないですか」

もう一つキルヒアイスに分かっていることがある。

ラインハルトはただ単に昇進の手段として戦うのではなく、戦いそのものを欲してい

る。

有能な敵と火花を散らして戦うのが本来の望みなのだ。

「そうだな。確かに敵には敵の考えがある。しかしキルヒアイス、これまで敵に歯応えなどなかったぞ。今回の戦いも勝つて下さいと言わんばかりではないか。味方が足を引つ張らなければ負ける要素など思いつかない」

「そのことです。ラインハルト様、今回の遠征では帝国軍の曲者ばかりを押し付けられたようです。実力としてはメルカツ中將、ファーレンハイト少將には見るべきところもございりますが扱いにくいという評判、そして他の將に特に語るべきものは」

「キルヒアイス」

「ラインハルト様」

「キルヒアイス、お前さえ側にいれば俺は勝てる。必ずだ。他は邪魔したり裏切ったりしなければそれだけでいい」

その自信を持って戦いに挑む。

アスターテ会戦、それは華麗な響きとして後世に記憶され、ラインハルトの生涯を彩る一つになる。



# 第三十一話 487年 2月 アスターテ く光芒の宇宙く

同盟領に入った帝国軍二万隻はゆつくりと行軍した。もちろんその軌跡は同盟領に多数設置されている索敵ブイによつてモニターされている。途中で引き返すこともなく、分散することもない。極めてオーソドックスな行軍だ。

それに同盟側にとつて安堵したことがある。

今回の帝国艦隊は近隣の同盟領星系を強略することがなかったのだ。そんな利益にはまるで興味が無いように進んでいく。当たり前のようにだが、今までの帝国艦隊の行動からすれば良い意味で驚きなのである。

一方、同盟艦隊はそれに対応した迎撃ルートをとつた。

三方からの包囲完成を目論み、三個艦隊を分散させ進撃させている。大きく迂回して帝国軍艦隊の後方に回り込むのだ。それがうまくいけば自領での大軍による包囲作戦の完成である。理想的な殲滅戦になり、大勝利は疑いないと思われた。

予定宙域はアスターテ星系付近と見込まれた。気が早いことに戦いはアスターテ会戦と名付けられているほど予定通り進んでいく。

ところが帝国艦隊は忽然と姿を消す！

いきなり濃密な電波妨害をかけてきた。そのみならず、索敵ブイも片っ端から破壊してしまつたようだ。今までそんなことをしなかつたのは、未熟な司令官が油断して進撃しているように見せかける帝国側の欺瞞だつた。

同盟側が手を打てないうちに、帝国艦隊は最大戦速でいずこかへ消えた。

「先に索敵を潰すとは、その若い司令官とやらも意外に手強いな。しかし逆に帝国艦隊の狙いが明らかになつた。必ずや奇襲を考えている。直ちに駆逐艦を全方位に展開して索敵網を作り直せ！」

こう言うのは包囲の一角を担う第十二艦隊ボロディン中将、勇将として名高い。即座に考えを巡らせ、状況に対応していく。

「帝国艦隊はどこから襲つてくるか分からん。だがしかし、おそらく我が艦隊の後方を狙つて来るに違いない。こちらが三方から包囲を図つていたことをおそらく知つているだろうから、向いている方向も特定しているはずだ。しかしそれを逆手に取つてやる

！ 艦隊方向を変えつつ、移動するぞ」

この早い段階でボロデインは包囲網の完成をすっぱり諦めた。

敵帝国艦隊の所在がはつきりしなくなった以上、包囲にこだわるのは意味がない。いやむしろ動かなければ先手を取られて危険になる。

しかし、艦隊を移動させるとしてもどこへ向かえばいいのか？

いったん状況を仕切り直してハイネセン方向へ戻るか。それが順当かもしれない。帝国側が有人惑星の攻撃をしていないなら、もう一度迎撃の作戦を練り直しても間に合う。

それに第二艦隊か第六艦隊へ今から向かって、同じようなことを考えて既に移動を始めた可能性があり、合流できないかもしれない。

だがボロデインは考え直した。

それはダメだ。逆に言えば第二艦隊や第六艦隊が同じように考えている保証はないのだ。

帝国艦隊が奇襲をかけてくるならば、一個艦隊は確実に犠牲になってしまう。この第十二艦隊が単独で撤退してはならない。

ボロディンは考えた挙句、第六艦隊の方を選び、第十二艦隊へそこへ向けての移動を指示した。

しかしこれは結果的にわずか遅かったのだ。友軍の方を考えてしまったからであるが、常日頃果敢なボロディンにしては痛恨である。

ボロディン第十二艦隊のオペレーターが叫ぶ！

「後方より帝国艦隊！ 数、およそ二万隻！ 急速に接近しています！ 推定接触時間、あと一時間」

「何、何だと！ あと一時間とは早すぎる！ 帝国軍はいつたいどんな魔法を使ったんだ」

ボロディンはさすがに焦る。奇襲の可能性を考え、逆手に取ることも考えていたのが間に合わない。全体の方向転換はまだ終わっていないのだ。

まして他の同盟艦隊の動きも分からず、応援がいつ来るのか目途が立たない。

「全艦、速度上げろ！ 第六艦隊方向へ急げ！ 襲ってきた帝国艦隊へ回頭はするな。

この態勢では自殺行為だ。それに、どのみちこの艦隊だけで二万隻に対抗はできん」

ボロディンは勇将の誉れ高いが決して無駄に勇猛なのではない。果敢に戦うべき時とそうでない時をきちんと弁えている。

今、ボロディンの第十二艦隊は一万二千隻、今回動員された三個艦隊の中では一番少

ない。同盟軍では、比較の後で結成された艦隊である第十、第十一、第十二艦隊は小さなものだ。

だからこそ帝国軍はこれを狙ってきた。

「ほう、三方からの包囲などという下らない夢を諦め、もう移動を始めていたのか。なるほど、敵もまるつきり無能というわけではなさそうだな」

「しかし間に合いました。予定の各個撃破には差し支えないかと」

「そうだなキルヒアイス。始めるとしようか」

この帝国艦隊の総旗艦は白く優美、しかし高性能なブリュンヒルトという新造艦である。

今、ラインハルトはその指揮シートから立ち上がった。

その姿は艦橋の誰もが美神と見紛う光に満ち溢れていた。覇気の微粒子がきらめいて全身を包んでいるような錯覚さえ覚える。

「長距離砲戦用意！ あくまで敵の後方を捉えたまま、戦艦は全て連携して主砲斉射準備に入れ」

「イエローゾーン突破、あと三秒でレッドゾーン抜けます、3、2、1、」

「よし、砲撃開始！」

最初の斉射三連だけで同盟第十二艦隊に少くない損害が出る。

「何という的確な集中砲火だ。この帝国艦隊は強い。しかも速く、ただ逃げ切るのは難しい。やむをえん、艦隊をやや散開させて惑わすのだ。ミサイルで牽制しながら空母だけは守れ」

第十二艦隊としては全滅は避けなくてはならない。分艦隊もあえて固まらず散開させる。これもボロデインの冷静な判断だ。

「第六艦隊はまだ見えないか。最後に確認した位置から移動してしまったのか……合流できれば戦いようもあるのに」

それでもボロデインは一方的に打ち崩されたわけではない。

冷静に観察すると、敵帝国軍艦隊の中でも動きにワンテンポ遅れる部隊がいくつかあるのに気付いた。

「帝国艦隊の中でも濃淡があるな。付け入る隙が無いわけではない。動きの鈍い部隊を集中して狙え！そこを崩せば向こうも足を止めざるをえない。それで時間が稼げる」さすがに実力派で知られた闘将ボロデインの狙いは的確だった。

これで一瞬だが帝国艦隊側にむしる爆散が相次ぎ、損害が出る。逆転はしないまでも

一息つけることになる。

「敵の集中砲火にてエルラツハ少将の部隊に被害甚大！」

「何だと、無様な」

もちろん帝国側でもブリュンヒルトにその報告が行く。

ラインハルトは怒気を収めると、この悲報にたじろぐことなく命ずる。

「被害艦など捨てていけ。全体の艦隊行動に影響を及ぼしてはならない。迅速な行動こそ勝利の鍵である」

しかし、通信オペレーターはすぐに動けなかった。

ほんのわずか躊躇してしまったのだ。必要な指示であるのは理解できる。ここは戦場であり、合理性のために犠牲が必要になることもある。まして艦隊総数で劣るのだから機動力を失うわけにいかないのも分かる。

しかし、敵領内において味方艦隊からはぐれてとり残されるのは、兵にとって希望が絶無になることを意味するもので、あまりに非情な命令だった。

ここにいる通信オペレーターは総司令部付けであり、もちろん有能な者が選ばれている。普段は遅滞などするはずがないのに。

オペレーターたちの心情が分かる人間がいる。

いつもラインハルトの横にいて、優しい眼差しを絶やすことのない盟友が。

その胸には遠い昔、ラインハルトともう一人の人物に立てた誓いを秘めている。

「ラインハルト様、皆が戸惑っているようです。もう一言付け加えておいては」

「あ、ああ、そうだな、キルヒアイス。その通りだ」

ラインハルトはキルヒアイスの助言ならば素直に受け入れ、命令の解釈を付け加えたのだ。

「損害を被った艦で速度が出せないものについて、その乗員は全員速やかに最寄りの艦に移乗、それを確認したのち被害艦をためらわず自爆させよ」

今度は通信オペレーターも安心して命令を伝える。

そんなオペレーター達は戦闘中に無用なことを考えてしまった。金髪の美神は長身の赤毛の従者が寄り添ってこそ完璧になれる。それで完全なのだ、と。

戦いが進み、やはり刻々と第十二艦隊が削られていく。その破綻が秒読みだ。

その時、ようやく待ち望んだ希望の光が差し込んできた。

「艦影を探知！ 友軍です！ やはり第六艦隊が前方にいました！」

同盟三個艦隊のうちでも第六艦隊ムーア中将は状況の変化についていけず、移動もしていなかったのだ。



どうしていいか分からなくなって留まっていたというのが正しい。

実際には移動を強く進言する参謀がいたのだが、ムーア中将はいったんその案を却下した手前、その無駄なプライドによって最後まで聞き入れることはなかった。

そして第十二艦隊に見つけられたが、逆に第六艦隊の側も第十二艦隊を探知した。よくよく見ると、何と第十二艦隊は半壊状態ではないか！ 艦列を保つのがやっとだ。

おまけにその背後には帝国軍艦隊も見える。

「あ、あれは何だ！ 帝国軍は包囲網の中にいるはずではないか。それが第十二艦隊を追っているとは、どうなっている！」

ムーア中将はそう言うが、現実に帝国艦隊の方が第十二艦隊を後方から追って攻勢を加えている。

一方、ボロディンと第十二艦隊は歓喜している。

「よし、第六艦隊となんとか合流できる。これで数の上では逆転だ。我が艦隊は大きく迂回しながら回頭し、艦列を第六艦隊にそろえる。そうしたら逆撃を加えるぞ。もう戦いはこちらのものだ」

やっと一安心できる。これで勝てるだろう。

当初の三個艦隊で圧倒するというものではないが、二個艦隊が揃えば同盟側が数で優位に立てる。

予定通り撃滅してくれる。

帝国艦隊もここまで戦ってきて疲労が蓄積しているはずだ。同盟領に侵攻してきた報いを受けてもらおう。

「ラインハルト様、数の上では不利になりましたが、お逃げになりますか。今戦いを終わらせても一定の戦果になるでしょう」

「バカを言うな、キルヒアイス。分かっているんだろう？ 敵の新たな艦隊、といつても動かなかつただけだ。それで無能なことは明らかではないか。そんな艦隊が応援についても何ら憂慮するに及ばん」

もちろんこのラインハルトの返事はキルヒアイスの予定内だ。

ラインハルトの覇気はここで逃げるのを良しとするはずがない。もちろん、大言壮語ではなく、勝てる充分な実力があつて言っているのだ。

キルヒアイスは穏やかに微笑み、スクリーンの一点を指し示した。

「では、攻撃続行を。見るとこのポイントに間隙がありますので、そこを突けば敵の二個艦隊は連携が取れないでしょう」

「こいつめ、最初からそのつもりだったな。そう、そこを突けば事実上各個撃破と同じこ

とになる」

全体として、同盟艦隊の方が数の優位を当て込んで攻勢を強めた。ただしそれはわずかな間に過ぎない。

帝国軍は巧みに同盟二個艦隊の連携の結節点を撃ち抜き、混乱を引き起こす。

「くそ、これはまずい。とにかくいつたん攻勢を強めて敵を引き離せ。このままでは瓦解するのはこちらになり、第六艦隊と共同歩調もとれない」

ボロディン第十二艦隊が温存していた残り弾薬のありつたけを放って大攻勢に出る。それは長く続けられるものではないが、一定の戦果をもたらしてくれた。

「フォーゲル少将負傷！ 損失多数！」

この報がまたしてもブリュンヒルトを駆け巡る。

貴重な五つの分艦隊のうち、これで二つまでもが決定的に破られてしまったのだ。

「愚か者が、この局面で油断するとは何を考えていた！ 敵の大攻勢の目的は目くらましに過ぎず、照準も雑だ。対処は難しくないはずなのに」

「ラインハルト様、しかしそこから崩れますと、多少は困ったことに」

キルヒアイスに言われるまでもなく、帝国軍としては早急に対処が必要だ。

分艦隊のレベルで艦列に穴が開けば、そこを付け込まれて乱戦になってしまうかもし

れない。そうなれば数で劣る帝国軍が圧倒的に不利に決まっている。もちろん同盟側もあまり乱戦は好むはずはないが、戦闘というものは得てしてそうなる。

しかし、帝国艦隊が策を打つ前に、敵が突破してくるところか弾き返されたではないか。

もはや対処に動く必要がない。

先ほどまでの動きの悪いフォーゲル分艦隊と同じ分艦隊なのに、鮮やかな艦隊運動で敵の突破を許さなかった。

「これは見事だが、いったいどうしたことか。フォーゲル少将の分艦隊に状況報告を求めよ」

ラインハルトが最後まで言い切らないうちだった。その分艦隊の旗艦からブリュンヒルトに通信が届けられたのだ。

スクリーンが通信に切り替わると、そこには乱雑に破壊された艦橋が映し出されていた。

倒れた柱や投げ出されたシートがいくつも見えている。これはよくある被弾した艦の有様であり、未だ搬送されていない怪我人がある。

それどころか搬送も治療も必要なくなった動かない兵がそのままにされている。

報告してきた士官さえあちこち包帯を巻かれていて、怪我は決して軽くなさそうだがスクリーンの越しにラインハルトへ向かってしっかり敬礼してきた。

それは砂色の髪をした若い士官だった。

## 第三十二話 487年 2月 アスターテ 〈総力戦〉

その砂色の髪をした士官は簡潔に状況を伝えてきた。

「現在フォーゲル分艦隊の指揮を代行しております、ナイトハルト・ミュラー大佐であります。司令官フォーゲル少将は旗艦艦橋被弾と同時に負傷され、先ほどから意識混濁にあります。その直前、末席参謀の小官が一番負傷が軽いので臨時代行を指名されました」

なるほどそういうことか。

しかし一番負傷が軽いといってもスクリーンに映るミュラー大佐はそう思えないほどの怪我を負っているようだ。立っているのがようやくの姿ではないか。

しかしそれより、ラインハルトの関心はこの者が先ほどの見事な艦隊運動を指揮したのか、という点にある。その確認と、事実であればねぎらいの言葉が必要だ。

「貴官が先ほどの見事な防御戦術を指揮したのか。よく敵の突破を許さなかったものだ」

「恐れ入ります、総司令官殿」

「貴官が分艦隊の指揮をそのまま代行せよ。もしも貴官の怪我も悪化するようなら、無理せず艦隊を後方まで下げるよう」

ラインハルトはわずかに気遣いを見せられるほど機嫌を直していた。

「キルヒアイス、少しは良いこともあるものだ。フォーゲルが負傷したせいで良いものを見る事ができた。先ほどのナイトハルト・ミュラー大佐、覚えておこう」

そこでラインハルトはもう一つの事を思い出した。

フォーゲル分艦隊の前に、エルラツハ少将の分艦隊もまた被害を被っていたはずだ。

それは今どうなっているか。壊滅との報告は届いていない。

あまり最初から当てにしていけない艦隊ではあったが、行く末を確認しておかねばならない。

戦況を報告させると、驚くべきことが判明した。

エルラツハ少将の艦隊は立派に敵の第六艦隊と渡り合っているではないか！

その隣で崩れかけながら四苦八苦してなんとか形だけは保っているシユターデン中將の分艦隊とは違う。見間違いのようだが、事実はそうである。

「エルラツハを呼び出せ」

変な話だが、味方が強い方がかえってラインハルトは疑問に思う。エルラツハがこれほど有能なはずはない。

果たしてそれに対する答えがあった。

通信スクリーンに出てきたエルラツハ少将は目が虚ろだ。総司令官ラインハルトと通信しているというのに敬礼すら取らなかつた。

だがラインハルトはそれを咎める気にもならない。

エルラツハ少将は明らかな心神喪失状態だ。

怪我をしているわけではないが、これではとても艦隊指揮ができていのように思えない。

たぶん、この戦いの序盤で思いがけず敵の攻勢を受けた際、精神的に過大な衝撃を受けたのだろう。それで心の平衡が崩れたのだ。エルラツハ少将はもともと無能どころか艦隊戦に向いていない人間だった。貴族上がりで苦労せずに出世してしまい、提督になつた者にありがちなことである。後方勤務の方が兵も自分も幸せであつたろう。

そしてラインハルトがスクリーンで観察した限り、実際の分艦隊指揮はエルラツハ少将に代わつて参謀が行っているようだ。

艦橋では一人の参謀が大きな声で指示を出しているのがひとときわ目立つ。

大柄でいかにも軍人らしい風貌をした参謀だった。



ラインハルトは少し興味を持ち、その大柄の男を呼んでスクリーンに出すように命じた。

「貴官は分艦隊の参謀のようだが、なかなか澆漓とした指揮ではないか。エルラツハ少将は良い部下を持っていたようだ。艦隊が崩壊どころか善戦しているのも貴官のおかげだろう。ところで貴官の名は何と言う」

「はっ、総司令官殿。小官はカール・グスタフ・ケンプ大佐と申します。いささか出過ぎたマネをいたしております」

「よろしい。では詳しい報告は事後でいい。今はそのまま艦隊指揮に注力せよ」

戦いは帝国艦隊が優勢を保ったまま推移している。

同盟側ではこんなはずではないと思うものの、事実はそのうだ。

特に第六艦隊の方に被害が積み増されているようだ。いったん後手に回った第六艦隊は形勢を崩し、主導権を取り戻せない。もう間もなく残存艦数でも同盟側の優位は失われるだろう。

帝国艦隊に天秤は傾き、加速度的に優劣がついていく。

ついに同盟第六艦隊の艦列は綻び、修復もままならず決壊した。

「よし、これで決着はついた。最終局面だ。整然と圧力をかけていけ」

ラインハルトは最終攻勢を命じようとした。

押しまくる帝国軍は沸き立っている。苦しい戦いをくぐり抜け、もはや勝利は揺るぎないように見えたのだ。

だがしかし、いきなり冷や水を浴びせられた！

「敵艦隊探知しました！ 急速接近中！ 艦艇総数約一万五千隻！」

ここにきて同盟軍最後の第二艦隊が戦場に現れた！

参加した三個艦隊のうちで最も数が多く、一気に形勢を変えられる戦力である。

遡ること数時間前、考えがまとまらず逡巡する第二艦隊司令パエツタ中将に参謀としてヤンが意見具申した。

「パエツタ司令、この宙域に留まっても益はありません。もう同盟軍の包囲作戦は破綻しています」

「む、確かに言う通りかもしれん。しかし、帝国艦隊を見失う事態は想定外だ。どうすべきか取り決めてはいなかった。ここは慎重に考えねばならん」

「そうです。状況を鑑みて行動しましょう。なるべく早く」

「しかし下手に動いた方が連携が取れないのではないか。他の艦隊も百戦錬磨、それぞれに考えているはずだ」

このアスターテにおける同盟側の基礎的失態は、総司令部が存在しないことである。重大な場面でそれが露呈したのは不運でもなんでもなく同盟の人災というべきものだろう。

早急に動くべきだというヤンの意見は保留された。

しかし状況に変化がないまま数時間、これ以上時間を空費できない。パエツタは今度は真剣に意見を聞く気になった。

「ヤン准将、これからの行動について君のことだ。きつと意見を持っているのだろう。先ほどの続きを言ってみたまえ」

「司令、直ちにこの宙域を放棄、他の艦隊と合流を図るべきです」

「動くことには同意するが、撤退ではなく、合流か……」

「帝国軍としては当然のようにこちらの三個艦隊を各個撃破にかかるとしよう。今の時点でこの艦隊に向かってこないということは、他の艦隊が危機に晒されていることと同義です。応援に行かなければ間に合いません」

「ヤン准将、他の艦隊もむぎむぎとやられはするまい。であれば第二艦隊はイゼルローン方面に赴き、帝国艦隊の退路を遮断するという方法もある」

この意見にはヤンもしばし考える。

パエツタ司令は経験の賜物か、なかなかどうして戦略眼があった。

しかしながら現実的にはあまり有効とは思えない。

「司令、その退路遮断もまた一つの方法ではありません。ただしこの第二艦隊だけで行うのは非現実的です。帝国艦隊の損耗が少なければむしろ数で劣りますから。それよりも早急に他の同盟艦隊を支援する方がトータルで有効になります」

「仮に君の意見が正しく、応援に行くとしよう。では第六艦隊と第十二艦隊とどちらへ行けばよいのか。その点はどうか考える」

パエツタ中將はここにきて真剣にヤンの進言を聞く気になっていた。敵も見えないが、味方の状況も分からず、不安があったからだ。それに面子にこだわり拒絶を続けるほどパエツタは硬直な人間ではない。

「それは、おそらく第六艦隊の方が適切と考えます。わずかばかり距離が近いので」  
そう理由を付けたが、実はヤンの嘘だった。

ヤンは心中で第十二艦隊のポロディン中將を高く評価していたので、仮に帝国艦隊と交戦しても壊滅することはないと踏んでいたのだ。

帝国艦隊だって本当の死闘を望んでいるわけではない。

ここは同盟領であり、そんなリスクを冒すわけがない。であれば第十二艦隊が果敢に抵抗を続ければ帝国艦隊が有利であろうともしつこく戦うことはない、と。

ヤンでさえ帝国軍が今までと別格の強さを持つていてるまで想像できなかったのだ。

一方、もしも第六艦隊が帝国軍と当たっていけば全滅もあり得るとは想像した。ムーア中将は硬直的であり奇襲にはことさら弱いと思われる。ついでに言えば、第六艦隊には親友ジャン・ロベール・ラップがいる。第六艦隊が全滅したら死なせてしまう。それは全く個人的なことではあるが。

ようやく同盟第二艦隊はヤンの進言通り、第六艦隊に向かって移動を始める。

それは遅過ぎた。しかし、他の選択よりよほど良い結果をもたらす。

「うろたえるな！ 再び敵に応援がついたからといって、慌てることは何もない。先ほどこから我が艦隊と戦っていた敵の二個艦隊はもはや半壊状態、脅威ではなくなった。我らは新たな敵艦隊も破り、より完全な勝利を得る機会を手に入れたのだ。予定した各個撃破の間隔が少し短くなった、それだけのことでないか！」

総旗艦ブリュンヒルトからラインハルトが各艦に通信をとった。

これで士気をもう一度鼓舞する。敵領にいる以上、弱気が致命傷になりうるからだ。

勝利の美神の姿が再び各艦のスクリーンに映され、その覇気までが伝達される。これで帝国軍の衰えかけた戦意は再び高まった。

「ただし各員はその力量を見せてもらおう。もはや遊んでいられる艦はない。総力戦になる。勝利の美酒は怠惰な者が飲んでいいものではないからだ」

一方、同盟第二艦隊は友軍の危機を認めるや、直ちに応援に入る。ここに同盟の第六艦隊と第十二艦隊がいるというのに明らかに旗色が悪い。その理由を詮索している時間はない。

パエツタが考えられるほほ順当な行動を命じた。今でこそ多少丸くなつたが、元は猛将と呼ばれたこともある有能な将である。

「各艦最大戦速！ 急進し、帝国艦隊に横から一撃を加える。それで味方が後退する時間を稼ぐのだ。それができたら連携して陣形を再編する。あとは再び攻勢に出て帝国艦隊を撃滅する」

そして第二艦隊は帝国艦隊の一角に取りついた。

「間もなくレッドゾーン、長距離砲有効射程内！」

「よし、各列戦艦斉射用意、撃て！」

「この部位の帝国艦隊は戦い続けて疲労していたのか、思ったほどの抵抗は感じられない。第二艦隊は易々と進むことができる。」

もちろんそれをブリュンヒルトのラインハルトが見ている。

「あそこはシュターデンの分艦隊か！　これはまずい。偶然にも新たな敵がそこに接触したとはな。このままでは破られるのも時間の問題だ」

少し苛立つてくる。決して負けるとは思っていないのだが、苛立ちはある。

「ラインハルト様、こちらをご覧下さい」

ここでキルヒアイスがいち早く気付いた。

その言葉によってラインハルトが目線をずらすと、そのシュターデン分艦隊に真っすぐ向かっていく帝国軍の分艦隊があるではないか。

「何だ？　対処が早いのは良いが、このままではシュターデン艦隊と交錯するではないか。無茶をするものだ」

ラインハルトは一目でその分艦隊の狙い分かる。防衛線を修復すると同時に側背攻撃をかけて出血を強いるものだろう。

「いったいどこの艦隊だ」

「あれはファールンハイト少将の分艦隊です。少将は攻勢をかける嗅覚と速さに定評があるようですね、ラインハルト様」

「なるほど、やるものだな。俺とキルヒアイス以外にも有能なものはいたのは収穫だな。今後のための」

そのファールレンハイト少将は先ほどから艦橋で薄笑いを浮かべている。

「いい訓示だ。総力戦ということは、勝手に動いてもいい、そういう解釈をしてもいいわけだな。面白い。ではせっかくの機会を存分に楽しむとしよう。全艦速度を上げてシユターデン艦隊に突っ込め！」

聞いた兵たちに恐れが走った。

命令から実行までやや間が空く。ファールレンハイトの艦隊にしては珍しいことだ。

ファールレンハイトは少し苦みのある表情になったが、面白いことを思いついたように、ふいにくくつと笑った。そして横の者に言う。

「艦隊行動が遅いな。ザンデルス中佐、貴官も何か言ってみるか？」

この場面で意外な命令だが、末席参謀ザンデルス中佐は意図を汲んで素直すぎる従い方をした。ファールレンハイトはザンデルスの顔に似合わない口の悪さを知っている。

「全艦いいから前に行け！ ケツに靴跡が付くまで蹴られないと進めないか？」

ようやく進み始めたが兵たちの恐れも尤もな理由がある。



このまま増速しシユターデン艦隊に突入したら、馬鹿馬鹿しくも味方同士が衝突することになるではないか。

だがそうはならなかった。

帝国軍同士の交錯という事態にはならないのだ。

フアーレンハイトは敵同盟第二艦隊の攻撃力を正確に見計らっていた。

おそらくシユターデン分艦隊は支えきれない。必ず突破されてしまうだろう。

その突破された瞬間に敵艦隊の頭を叩いてやるのだ。そのタイミングで攻勢をかけるのが最も効果的だから。

果たして同盟第二艦隊はエネルギーのありつただけを使ってシユターデン艦隊を破りにかかり、ようやくそれがかなう。

その直後、苛烈な斉射をともに浴びた。

フアーレンハイト分艦隊の攻勢は同盟第二艦隊を易々と切り裂き、あろうことか旗艦パトロクロスにまで直撃を与えたのだ。

パトロクロスの艦橋ではしっかり固定されていない機器は皆宙を舞うことになった。オペレーターのレシーバーから、コーヒーを入れた紙コップまで。

しかし重要なのは重さ60kgほどの柔らかく脆弱な物体だ。即ち人間である。

パトロクロスの艦橋の床にいろいろなものが散らばり、人間もまた無造作に横たわっ

ていた。呻き声があちこちから聞こえる。

## 第三十三話 487年 2月 アスターテ 〱 覇氣と

ペテン〱

同盟第二艦隊は旗艦パトロクロスが被弾し、いったん司令部の機能が麻痺してしま  
う。

もちろん艦隊としての統一行動が取れなくなり、その攻撃力も半減してしまった。  
せっかく帝国軍シュターデン分艦隊を破ったというのにその甲斐も無く進行を停止せ  
ざるを得ない。そうしないと帝国軍を分断どころかフアーレンハイト分艦隊の餌食に  
なるばかりだ。

とすれば、またしても戦場の支配権を握ったのは帝国艦隊となる。

危険な同盟第二艦隊の応援という要素を撥ね退けたのだ。

帝国艦隊と戦う他の同盟艦隊といえはムーア第六艦隊はもはや有効な攻撃ができる  
ような状態ではない。艦隊は統一行動を諦め、四散し、それぞれが逃げ惑っている。

ボロディン第十二艦隊はまだしも艦列といえるものを残しており、果敢に抵抗してい  
るが帝国艦隊に押され続けている。

戦っている艦艇数を合計すればまだ同盟艦の方が一回り多いというのに、戦いの趨勢では全く逆である。

次々と同盟艦がまとめて虚空に消えていくばかりだ。

「パエツタ司令、お気を確かに！ 軍医が間もなく来ます！」

艦橋の硬い床に横たわったパエツタ中將は動くこともままならない。骨か内臓のどこかを損傷したようだ。

「ヤン准将か…… 第二艦隊は、どうなっている。今司令部が指揮をしないわけにはいかん。君には怪我はないようだな。艦隊指揮の戦時代行を宣言する。君が、指揮を、とれ…… 頼んだ」

それだけは艦隊司令官として言わなければならない。もはや自分ができないのを分かっている。パエツタは気力を絞って艦隊指揮権の移譲を言い終え、昏倒する。直後、駆けつけた軍医によって艦橋から病室へ急ぎ移送させられた。

ヤンはそのパエツタに向かい、しっかりと敬礼を一つした。

決してそりが合うとは言えなかったが、パエツタ中將には数々の美点があり、ヤンは敬意を払っていたのだ。

そしてヤンはベレー帽を整え、第二艦隊各艦への伝達のためマイクを取る。

「パエツタ司令から艦隊指揮の戦時代行を命じられたヤン准将だ。第二艦隊の各艦に告げる。我々は現在負けているが、慌てなくていい。生還したいものは指示に従ってほしい」

ぶつけて痛む頭を押しさえながらパトロクロスの艦橋に入ったアツテンポローがつぶやく。それは懇願ではない。言葉通りであり、必ずそうなるという確信がある。

「どうにかしてくれると期待してますよ、先輩」

第二艦隊はヤンの指示に従い、コンパクトにまとまった。いったんファアレンハイトの分艦隊に対処するためである。艦列が濃密になり、隙はなくなる。好き勝手に暴れることができなくなったファアレンハイト艦隊は退かざるを得ない。

そこから第二艦隊は驚くべき陣形を取り始めた。

何と再び分散を始め、薄い壁のように形を変えていくではないか。そして帝国軍を包囲するような構えを見せた。

これに帝国軍の将兵も一様に驚くしかない！

「何だ、数において劣る方が包囲作戦とは、どういうことだ」

その通り、第二艦隊単独では明らかに帝国艦隊より少ない。だからこそ訝しんだが、現実に包囲しようとしている。

ラインハルトもその意図を読みかねた。しかし、逡巡することはなく、素早く決断する。

「苦し紛れか…… あるいはこの期に及んでも包囲殲滅を夢見ているのか。どのみち薄い包囲網など無意味だ。さっさと食い破ってやれ」

帝国軍は余力を残していた艦や大型艦を中心とした部隊を編制すると、その包囲網に突っ込ませる。重火力を叩きつけて破るのだ。

ところが、帝国軍の反撃に直面した部分の包囲網は一目散に逃げていくではないか！ これもまた帝国軍には理解できない。

「包囲網とは、攻撃をしてくる敵を足止めし、その脆弱な横面や後方を砲火で叩いて出血を強いるから意味があるのだ。それもせずただ逃げるとは何の意味がある」

やがて同盟第二艦隊から砲火がやってきた。しかし、思わぬところに向かつて。

それは包囲を食い破るために出てきた艦艇に対するものではない。むしろそれ以外の、戦い続けて疲労し、動けなかつた艦艇を狙ったものだ。

その攻撃をどうにか妨害しようと帝国軍が集中運用して向かうと、やはり同盟艦は逃げる。

そして別の面から帝国艦隊の疲労した動きの鈍い艦がまた攻撃される。

「狡猾な！ こんなペテンを！」

「ラインハルト様、これは……」

「そうだキルヒアイス、敵の包囲網は包囲するためのものではなかった。こちらの疲労した艦を見極めて狙い撃つためのものだったとは」

さすがにラインハルトの天才は誰よりも早く看破した。

悪辣としか言いようがないが、その有効性もまたラインハルトにはよく理解できる。

その意図が明らかになっても、しかし対処は困難である。

普通なら疲労が蓄積して行動限界に近い艦は下がらせるのだが、包囲下にあつては完全に安全な領域は無いのだ。

そしてここまでの戦いで疲労しきっている艦は決して少数ではない。帝国軍はここまで勝ち続けてきた。しかし連戦のダメージは見えないところに蓄積されていたのだ。

「先輩、これはどういう狙いですか？ 逃げたり戻ったり忙しい作戦で。損害が少なく済むのはいいとしても、やつと五分五分くらいに持ち込めたつてどこですか」

「これでいいのさ、アッテンボロー。お互いに決定的な殲滅はできない。帝国軍はさすがにエネルギーや弾薬が残り少ないはずだからね。そればかりはどうにもならないのさ。物理的な消耗は指揮官が優秀でも士気が高くても補えない」

「なるほど、じゃあ、このままいけば……」

「そう、この態勢の狙いはもう全くの消耗戦だ。いわば加速した消耗戦を作り上げたんだよ。今回の戦い、そもそも帝国軍は戦略的条件において劣っている。二万隻という数と遠征の距離、そして補給を考えればね。相手の司令官は華麗な戦術を使うかもしれないが、戦略的不利を戦術で覆せはしない。各個撃破は見事でも、それだけだ。やがて帝国軍はここが敵地であることを思い出してくれるだろうね。これ以上の戦いは諦めてくれるんじゃないかな。それがなるべく早いところちも楽なだけだ」

ヤンの狙い通り、一方的に追い散らされる場所もあれば、攻撃が効果的に効く場所もある。どちらにとつても一進一退の消耗戦だ。

ようやくラインハルトの気持ちに踏ん切りがつく。

悔しいがこれ以上を望むと先に破綻してしまう。帝国軍の戦略的不利を覆い隠すことができなくなるのだ。

「もう少し勝ちたかったな。最後に勝ちきれなくなるとは。予想外のことをされてしまった。キルヒアイス、ここで我慢しなくてはならないのか」



「充分でしょう、ラインハルト様。いつその戦果を求めるより、味方将兵の損耗こそお気になさるべきかと思えます」

帝国軍は撤退にかかった。

ほぼ行動限界点に近付いていた艦をしっかりと保護するような強固な紡錘陣を作り上げると、まとまって包囲網から外に出て、そのままイゼルローン回廊に向かう。

同盟第二艦隊は追撃をしない。第六艦隊、第十二艦隊の救護を最優先にしたためである。

アスターテの戦い、その意義という点から見れば同盟側の勝ちである。

同盟領に侵攻してきた帝国艦隊を撤退に追い込んだ。

防衛には成功した、これは勝利条件を達成したことになる。有人惑星に何も被害はない。

避難民たちは同盟艦隊に感謝しながら、家に戻っていつも通りの生活を続けることができた。

しかしながら帝国も同盟もアスターテの戦いは帝国側の勝利としか思っていない。

戦いの結果、参加した帝国艦隊二万隻のうち未帰還は四千隻余り、決して少ない損耗

とはいえない。

ただし同盟側の損害はその数倍に達している。自領であつたため人員の救護や艦艇の修理という面で有利であつた。それでも失われた艦は一万隻を優に超え、失われた人命は百万人に近い。局地戦としては正に大敗である。

そして何よりも帝国軍ラインハルト上級大将の華麗な戦いをまざまざと見せつけられた。これ以上ないほどの美しい指揮により、艦艇数で半数という圧倒的に不利な帝国軍があつさり勝利を掴んだ。

同盟にとつてすればその天才的な艦隊指揮は悪夢のようだ。

反対に帝国軍将兵にとつては歓呼して迎える期待の星だ。

これまではラインハルトの若さや皇帝の寵姫の弟という経歴は憂慮すべき問題だつた。

しかしそんなことはアスターテでどうでもいい過去に成り下がる。将兵の心酔する名将がここに誕生したのだ。

帝国軍中枢部はラインハルトの功に対し、元帥昇進をもつてそれに応えた。

アスターテの戦いの歴史的意義はそこにあつたといつてもいい。

ラインハルトが待ちに待つた元帥だ！

むろん直ちに元帥府を開いた。

これでラインハルトは誰に何の掣肘も受けず、人事を決定できる。同盟とは違い帝国軍には封建的などころが残っている。

その幕下に有能だと見込んだ将を次々と招き入れ、子飼いの将とする。

ラインハルトはもちろん性格や出身にかかわりなく能力で選ぶ。その態度ゆえに帝国軍ではラインハルトの幕下に招かれることは榮譽と見なされ、皆にうらやましがられた。招かれて断る者はほほいしない。

その数少ない例としてメルカッツ中将がいる。

正確に言えば、招かれる前に幕下に加わるつもりがないことを周囲に漏らしていたのだ。

「若いが天才的な指揮をする名将、ラインハルト・フォン・ローエングラム、確かに帝国軍にとって朗報かもしれん。儂もアスターテで直にその指揮ぶりを見ている。ただし、その忠誠心が見えんのだ。人はあまりに強い輝きには目がくらんでしまうものだが、儂は年の功があるので、眩しければ目が慣れるまで待つのがいいと知っている。見えるようになってから判断すべきだ」

ラインハルトの幕下にミッターマイヤー中将、ロイエンタール中将がいるのは当然と

みなされた。比較的早い段階で子飼いになっていゝし、能力もよく知られていゝ。その他、メックリンガー、ワーレン、ビッテンフェルト、ルツツなどの将も順当に加わつていゝ。

しかし、これまであまり名を聞かなかつたが、能力を見出されて一躍拔擢された者もいゝ。

アスターテの戦いで見事な守備を披露したナイトハルト・ミュラーもそういう一人だ。准将に昇進の後招聘される。

実際に調査し、元帥府に加えるのを推挙したのはキルヒアイスであるが、任命はもちろんラインハルトが行う。

豪華な金髪に覇氣をたなびかせ、ゆつたりとミュラーに命じた。

「卿には期待してゐる。経歴を調べて驚いた。卿は何とフェザン警備艦を率いて貴族艦隊を撃破したそうだな。更にその戦いぶりも調べさせてもらったが、特に防御戦術において非凡な艦隊指揮ができる人物と知つた」

「小官ごときをお目に留めて頂いたばかりかお褒めの言葉、誠に恐縮です」

ミュラーは実直に応答した。元帥があんなフェザンでの揉め事まで調べていることに恐れ入る。

「そこ」でだ。ミュラー准将、是非とも我が元帥府に招きたい。この先も大いに活躍して

ほしい。私のために」

「は、重ねての過分なるお言葉、御期待に沿えますよう誠心誠意努めていく所存であります」

ミュラーはふと思い出した。

士官学校時代、オーデインで貴族子弟に吹っかけられた騒動において守ってもらったことがある。ラインハルトの方では似たようなことが多いので忘れてしまっているのかもしれない。そもそもミュラーは名乗っていないかった。

といっても自分の方も既に倒れていたため、ラインハルトらが無茶ぶりを示したのを目にしていない。後でエカテリーナから話を聞いた限り、恐いほど烈しい若者ということだった。

他の人間の例に漏れず、ミュラーはこのラインハルトの斬新さと烈しさに期待する。

淀んでしまったこの帝国をより良く変えてくれるのではないかと。

大事な言葉をミュラーは気に留めなかった。

ラインハルトの最後の言葉だ。私のため、つまり帝国軍を私兵化するととれる危険な言葉だったのに。

ラインハルトは元帥府内でミュラーを単なる参謀職にはせず、准将としては異例の分艦隊を指揮する立場につけた。

同じように抜擢したクナツプシュタイン少将の元に配属する。このクナツプシュタインはバランスのとれた人格で情に厚く、ミュラーには働きやすいものであった。

## 第四章 翼よ、高く舞い上がれ

### 第三十四話 487年 4月 危険な訪問者

一方の同盟側は帝国よりもアスターテの傷は深刻だ。

防衛に成功したというだけで、損害は厳然として大きい。失われた艦艇は二万隻、人命は二百万人に達する。

そのため同盟軍は事後処理に手一杯だ。

戦死者の追悼、負傷者の治療、年金支給、艦艇修理など様々な必要がある。同盟軍でも後方部とその下にある病院や資材担当などは大忙しだ。この時一番忙しかったのはドーソン大将とキャゼルヌ少将だったろう。

もちろん中枢部は中枢部で別の仕事がある。

先ず政府は防衛戦勝利を謳い、その痛手を隠そうとする。

その役は国防委員ヨブ・トリューニヒトが逃げずに買って出た。

「誰かが表に出て説明をしなくてはならない。当然戦死者の遺族に非難されるだろう。

いや、たぶんその前に売名行為だと言われるだろうな。軍部からも敗戦さえ自分のために利用する気かと」

そうと分かりつつ、意を決して行こう。どのみち誰かがやらねばならない。

予想通り遺族からむきだしの憎悪をぶつけられる。

作戦自体は軍部が取ったものであり、国防委員に直接の責任があるはずは無い。しかし遺族にはそんなことは関係ない。とにかく目に見える者に感情を叩きつけるしかないのだ。

なぜお前が生きている、なぜ作戦を命じたお前が後方で安泰だったのかと言われても答えようがない。

国防委員などの政治家が最前線に出ても仕方がなく、そこで戦死したら無駄死になり、更に迷惑がかかるだけだ。しかしそんな当たり前の理屈は通じないだろう。

どのみちこれは帝国から仕掛けられた戦いであり、回避することは不可能だった。もちろん最善の努力をしている。

なおかつ帝国軍の強さは誰しも予想できないものだった。

それでも責任を取らなければならないのが政治家の辛いところである。良識のある政治家ほどそれに心が削られることになるとは。

「損な役回りとしか言いようがないが、これは戦場に出ない者のなすべきことだ。それ



に同盟政府への求心力が失われ、各星系が離反するようなことにでもなったらそれこそ同盟に致命傷となり、艦隊の損害どころの話ではなくなってしまう。綺麗ごとを並べるようだが戦死者を悼むばかりでは先へ進めない」

その信念を持ち、ヨブ・トリューニヒトは何とか式典や公式発表を乗り越えた。

そして実は戦災孤児慈善事業に給料の半年分もの個人的な寄付をしていた。これはかなり後になるまで誰にも知られることのない行いだった。

同盟軍中枢部も慌てて方策をとる。

アスターテの戦いで大いに奮戦したポロディン提督や、名誉の負傷をしたパエツタ提督を持ち上げた。

そして何より、同盟第二艦隊を途中から指揮し、その結果見事に帝国軍を撃退したヤン・ウェンリーをアスターテの英雄と喧伝したのだ。

もちろん人事にも反映され、本人の意思に関わらずヤンは新設の同盟第十三艦隊の司令官に就任させられた。

「やれやれ、シトレ元帥に仕事を増やされそうだなあ。いいことと言えば、年金には不自由しなくなったことくらいかな」

「先輩……」

「いいやこれから増えた仕事の分だけ年金が増えるとなると、まいったな、やつぱり朗報とは言えない」

「いつまで何言ってるんですか。不自由な参謀職よりは忙しい司令官職の方がいいでしょうよ。普通なら」

ヤンのぼやきに対してアッテンボローが呆れている。

若くして艦隊司令官に就任するという昇進を果たしながら、何でそれがぼやくネタになるのか。誰しもが羨望する立場なのに、なぜ年金の計算をするのだろうか。

動きがあるのは帝国や同盟だけではなく、フェザーンも同様だ。

もちろん、ルビンスキー家がアスターテの戦いの詳細を知って溜め息をつくのも当然である。

またしても帝国の勝利とは！

このまま同盟は斜陽化し、軍事バランスは修復不可能になるのだろうか。物量だけではなく、質まで劣り、坂道を転げ落ちるように。

未来は予測がつかないが、一つ確実に言えることは、同盟の滅亡はすなわちフェザー

ンの座を危うくする。

だが、違う用件でフェザンは揺れていたのだ。

事はフェザンに突然の来客があつたことから始まっている。

その人物とはエリザベート・フォン・カストロプ、エカテリーナの女学校の卒業生だ。いつたい何をしにフェザンへ来たのだろう。

「あんなこまっしやくくれた小娘と会わなくちゃいけないなんて、笑つてしまいわ。あの兄の頭がおかしくなければこんなことにはならなかつたのに……」

そんなことを言いながらフェザンの軌道エレベーターからエリザベートが降り立つた。

口とは違い、ちつとも笑つた顔ではない。

むしろ苦澁を浮かべた暗い表情だ。

これからエカテリーナと会わねばならないのだから。そのエカテリーナとは仲が良かったことはなく、むしろ昔から険悪な仲なのである。

アポイントを取るだけでも気が重かつた。

「エリザベート・フォン・カストロプと申します。カストロプ家の名代としてフェザン

に参りました。先ずは女学校の同窓生であるエカテリーナ様に挨拶をしたいと思ひまして」

フェザン側の管制官にそう伝えた。

それを受け付けた者は大層驚く。それもそのはず、カストロプ家といえど誰もが知る大貴族だ。その家柄、血筋、そして権威は帝国でも指折りである。

驚く理由は他にもある。通商案件のことであればわざわざフェザンに名代が来る必要はない。

フェザンはこれまでもカストロプ家とは活発に通商を行なってきたのだ。

カストロプ家領地惑星は帝国航路でも最重要ポイントにあり、まさに要衝に位置するため、通商はフェザンにもカストロプ家にも莫大な利益をもたらしてきた。フェザンと緊密なパートナーであるカストロプ家が今さらかしこまる必要はない。

しかも初めに言うことがエカテリーナに会いたいと、これまでそんなことはなかった。

直ちにエカテリーナにエリザベートの来訪が伝えられる。

「え？ あのエリザベートが!? 女学校の同窓生だからって会いたいなんてはずないわ。旧交を温めるって、その旧交自体が無いものね。ミユラーの事件で今さら何か言う

はずもないし」

エカテリーナは素早く頭を巡らせた。エリザベート・フォン・カストロプはあの事件の当事者の一人だが、もうとうに過去の話である。

「こっちもそうだけど、エリザベートだつて会いたくないだろうから、何か裏があるわね。会わねばならない理由が。世間話で終わるはずがない」

一応、会談を持つ段取りを付けた。

逆にいえばとりたてて拒む理由はない。昔のことはさて置き、どちらも大人になった今日では。

「単に会うだけじゃなくて、通商絡みの案件なのか、それとも頼みごとでもあるのかしら。私に根回しをしておかなくてはいけないような。あるいはもう一つ可能性があるわ。帝国の誰かに知られちゃまずいとか……とにかくそんなところね」

エカテリーナはもちろん父や兄にこのことを伝え、そしてエリザベートに会いに行った。

場所はフェザン統治府から歩いていけるレストランに決め、その個室をとった。豪華とも質素ともつかない平凡なものだ。

「これはエリザベート様、ごきげん麗しゅう」

「エカテリーナ様こそお変わりなく何よりですわ。お会いするのはオーティン以来ですわね」

「お懐かしい、本当に。女学校やあの頃の自分を思い出します。今回は遠くフェザンまで足を運んで頂きありがとうございます」

「こちらこそフェザンには一度行つてみたいと思つておりましたわ。その念願がなつて、そしてあなたに会えて本当に嬉しいわ」

言葉だけ聞けば仲のよい同窓生が歓談するように聞こえる。

しかし、実際の二人は少しも楽しそうではない。テーブルに置かれたアペリティブに口をつけてもいないのだ。せつかくこの店名物の爽やかなシールドが無駄になる。

その後はしばらく会話もなく無言だ。お互いに探り合いが続く。

ついにエリザベートが口を開いた。

「お互い、肩が凝るわね。エカテリン、いつまで仲良しごっこをするつもり?」

「やつと地を出したわね。エリザベート。確かに肩が凝るわ」

その場の雰囲気は一気に変わるが、どちらも肩の力を抜き地でやりあう。

「私もあなた相手に昔話するつもりはないわ。用事があるから来たのよ」

「じゃあ単刀直入にその話をすればいいでしょう」

「そうね、用事を済ませましょう。兄から言われたのでなけりや、あなたとこんなふうに会って食事なんか」

そう言いながら、エリザベートは周囲を見渡す。むろんエカテリーナには理由の想像がなかった。

「心配しなくても大丈夫よエリザベート。ここには遮音力場があるから。それを私が自分でスイッチを入れて確認してるわ」

それを早く言えといわんばかりなエリザベートだったが、これでやっと用件を話し出した。

「簡単に言えば、カストロプ家はフェザーンから惑星を防衛するための設備を購入したの。軍事的なものよ。それも調達できるだけ多く。しかも絶対に秘密のうちに」

エカテリーナは驚いた。

なるほど、そんな用件だからエカテリーナに直接話しかかったのか。

普通に商業者を通すことはできない用件だ。もちろん自治領主アドリアン・ルビンスキーと直接話して決めるべき重大案件なのだが、自治領主と会うこと自体が簡単ではない。

秘密裏に事を運んだつもりでも、自治領主とコンタクトを付けたこと自体が漏れてしまう可能性がある。

それだけでもとんでもないことになりかねない。重大過ぎる話だからだ。

そこでカストロプロ家はうまい手を打った。

エリザベートがエカテリーナに会うならば、女学校の同窓というわけで恰好がつき、誰かに察知されても怪しまれることはないではないか。

さつきエリザベートが兄に言われてというのは、このアイデアを渋々実行したからだろう。

「え、防衛設備!? 何それ? 確かに変わった案件だけど、海賊退治のことならフェザーンにはそれを担当する部署があるわ。話を通す?」

エカテリーナは分かっているがらはぐらかした。

海賊相手の軍事設備なら話を秘匿するわけがない。むしろそれを大つぴらにした方が海賊は寄ってこなくなるだろう。

最近、エカテリーナに兄ルパート譲りの交渉術がちよっぴり身に付いてきた。

それに練達している兄から言わせればまだまだなのだけれども。

本心と擬態、そのどちらかに傾いてはいけけない、その二つをどう混ぜ込んで見せるかが相手を惑わすポイントだといつも言われている。

「イライラするわね! そんなに簡単な話なわけないでしょ。さつきも言ったはずよ。



惑星を守るためのものだって」

「飾りじゃなくて本当に戦いに使いたいつていうことかしら。惑星防衛ということは宇宙海賊が惑星を襲うってこと？ それも大規模に？ 防衛設備をできるだけたくさんということとは、けっこう重要な星系なのね」

「そりゃあもちろんそうよ。カストロプ家の本領惑星だから」

エカテリーナは自分でエリザベートから聞き出し、余計に驚いた！

エリザベートのカストロプ家本領惑星は帝国の主要航路上にあり、そもそも簡単に宇宙海賊が活動できるような場ではない。

よほどのトラブルで激昂した海賊が後先考ええず押し寄せてくるというのか？

しかしそんなことなら、防衛の仕事は帝国軍がやるべきだ。帝国軍に頼んだら事が済む。

カストロプ家は確かに名門であるが文官の家系であり、そのため帝国軍と縁が薄いのかも知れない。しかしこれほどの大貴族の頼みであれば帝国軍が動かないはずがない。「まあ、これ以上事情は聞かないでおくわ。カストロプ家が帝国軍に借りを作りたくないとか、自前で内々に対処したいのかもしれないし。で、エリザベート、自治領主に秘密裏に商談できればいいわけね。そういうことでしょ？」

エカテリーナとすれば、最終判断はどのみち父アドリアン・ルビンスキーがする以上、重大な商談をつながない理由はない。

その場でできばきと密会の手筈を整えた。

女学校の同窓会ということでパーティー開催を企画するも、その日になりエカテリーナが急に体調不良になってしまい病院に運ばれるという筋書きにした。

心配したエリザベートは病院に付き添い、そして同じようにアドリアン・ルビンスキーも駆けつけるのだ。

誰に知られても疑われることのない、これ以上なく自然な流れではないか。徹底した隠密行動を取るのがフェザーン流だ。

そして手筈通りに事は運び、エリザベートとアドリアン・ルビンスキーは秘密裏に商談をした。

語られた内容はアドリアン・ルビンスキーが家に帰ってエカテリーナとルパートに話す。

「大変に興味深い内容だった。商談自体も、その背景も」

「前置きは要りませんお父様。エリザベートは何を？」

少し聞きかじっているエカテリーナは気が急いでいる。

そんな様子をたしなめるでもなく、面白そうにアドリアン・ルビンスキーが話を継いでいく。

「そう急かせるな、エカテリン。こちらも話すペースというのがあるぞ。まあ手短かに言うが、カストロプ家はおよそ頭が正常範囲内の思考をするならとうてい考えないことを企んでいる」

父がそう言うのだ。これは思ったよりも大ごとらしい。海賊退治がよほど大規模なのだろうか。

今は黙って次の言葉を待つ。

「帝国軍に頼めるわけがない。全く逆の話だからな。帝国に対する反抗、いやそんな生易しいものではない」

一瞬後、エカテリーナもルパートも計り知れない衝撃を受けた。

想像のはるか範囲外だ。考えられない。

「はつきり言おう。カストロプ家がやろうとしているのは、独立戦争だ」

## 第三十五話 487年 4月 色褪せた世界

銀河帝国はうんざりするほど長く叛徒と戦い続けている。もう百五十年にはなる。

しかしそれはどちらも国家としての体裁ができあがってから、回廊の発見により否応なく始まったことである。

どちらにとつても存亡を賭けた戦いになっていくが、好きで戦っているわけではない。それどころかイデオロギーを守るためのやむを得ない戦いだ。特に叛徒と言われている自由惑星同盟にとつては。

帝国内で独立といえばもう一つ、もちろんフェザーン自治領が存在する。

それは事実上の独立国のようなものだ。しかしこれは長い時間をかけた根回しと交渉の末にやっと実現したことであり、決して戦って勝ちとつたものではない。戦ったりすれば帝国にも面子がある以上、フェザーンを滅ぼす以外に選択肢を持たない。

しかし、今回のカストロプ領が企てている独立戦争とは何だろう。

別に叛徒のように帝国と相容れないイデオロギーを持つているわけではない。

今の領主、マクシミリアン・フォン・カストロプが帝政否定論者だとは聞いたことが無い。

むしろマクシミリアンはどっぷり貴族制度に浸かり、その恩恵を受けている方の人間だ。

政体の論客どころか金儲けにしか興味のないうるくでもない人物という評判である。いつそう悪いことに放蕩でもあった。いや、放蕩をするために金儲けをしているようなものだ。

どんなつもりで戦いを考えているのかは分からないが、カストロプ領独立達成の実現可能性など考えるまでもなく皆無だ。

先ず帝国がそんなことを認めはしない。これは絶対である。

およそ人類社会は丸ごと皇帝の持ち物であり、人は全て皇帝の支配下にあつて生きることを許される、これが国是なのだ。

独立戦争など起こせば際限なく軍事力をつぎ込んでくるだろう。そんなことは当たり前だ。そして帝国軍に対抗できる軍事力などこの世のどこにも存在しない。

ついでに言えば叛徒の領地と違うのは、カストロプ家の領地は帝国の内部にある、という動かしがたい事実である。

そこに回廊のような障壁は何もない。

防衛の地の利は限りなく薄い。

仮に帝国軍と戦うことになれば易々と本領惑星に迫られてしまう。

つまり、あらゆる意味で独立戦争など頭のまともな人間の考えることではない。

「そうね、エリザベートがイライラしてたのもそのせいかしら。エリザベートも決してうまく行くなんで考えてないんでしょうね。当たり前だけれど」

「その通りだが、それでも戦いをしなくてはならない理由がある、エカテリン」

それがエカテリーナの一番聞きたいポイントだった。無謀なことであればあるほどやるからには強い動機があるはずだ。

事もなげにアドリアン・ルビンスキーが答えを言い放つ。

「カストロプ家はこのままではどのみち破滅する。だから、やられる前に仕掛ける。本当に単純過ぎるほど単純だ」

それも驚きだ！

カストロプ家が破滅とはにわかには信じがたい。

まず大抵の困難ならば帝国屈指の名門貴族たるカストロプ家が乗り越えられないことはないと思える。家柄だけではなく財力も途方もない力がある。

「お父様、それはもつと疑問です。カストロプ家が破滅とは、よほどの罪が発覚したので

しょうか。例えば皇帝弑逆罪が露見したとか？」

「……これは突飛な発想で面白い。なるほどそう思ったかエカテリン。半分は正しいが半分は気の回し過ぎだ」

アドリアン・ルビンスキーは呆れ顔になってしまったが、エカテリーナの思考能力を楽しんでいる。

「もちろん、エリザベート・フォン・カストロプとやらもそこまで語ってくれることはなかった。しかしどうもカストロプ家の先代、いや先々代から重ねられてきた問題があるらしい。確かにカストロプ家といえば先代も先々代も帝国の財務尚書だった。そのせいか今の財務尚書ゲルラツハ子爵とは折り合いが悪いと聞いたこともある。そこいらが怪しいポイントだ」

可能性があるとすればそこだろう。

代々財務尚書を輩出してきたカストロプ家、何か後ろめたいことをやっけていてもおかしくはない。

それが明るみに出たらまずいことになる。

はるか前から重ねられた罪であれば、釈明のしようもない。名門カストロプ家であっても罪の数によっては断罪される可能性がある。ましてそのゲルラツハ子爵が画策し

ているのならば。

だが、それでもだ。

それでも帝国に対し独立を目指して戦うとは、正気の沙汰ではない。

帝国に対する忠誠心が無いのは、他にもそういう貴族はいるかもしれない。しかし帝国軍に対する恐怖心すらないというのか。

「どのみち破れかぶれにしか聞こえませぬわ。いずれにしても破滅するだけで、汚名で終わるか、もつと汚名で終わるかの違いだけでしよう」

「いい考えだ。結論としては全くエカテリンの言う通りだ。なぜ亡命しようとしなくても分らない。しかし事実をもう一度確認すれば、カストロプ家の現当主マクシミリアンは戦いの方を選択している。戦うことに何か希望があるのだろうか」

「確かに同盟へ亡命したところで刺客に怯えなくてはならないのも分かりますけれど。帝国軍相手に戦って希望なんて」

「希望の理由が何か、今のところ判明しない。カストロプ家は先のヘルクスハイマー家亡命事件の後、ブラウンシユバイク公からヘルクスハイマー領工業惑星の管理を任されている。そのあたりにヒントがあるかもしれない」



フェザーンでの商談の後、エリザベート・フォン・カストロプは自領惑星に帰り着いた。

商談は半分うまく行った。逆に言えば半分まとまらなかったが、エリザベートとしてはどうしようもない。

「何だ、たったこれだけか！ エリザベート、期待外れもいいところだぞ」

「お兄様。これでも精一杯交渉したつもりです」

カストロプ家当主マクシミリアンがエリザベートに対していきり立っている。

その手には今回フェザーンから購入することになった武器のリストがある。

大量の機雷やミサイル、仮装巡航艦に改造できそうな大型輸送艦のリストだ。

一生懸命交渉をして帰ってきたばかりの妹エリザベートから出されたものだ。だがマクシミリアンはエリザベートの疲れをねぎらうどころか、それを手にして大いに不満の顔だ。

もつと大量に、もつと良い武器が手に入ると思っていたのだろう。

「それにお兄様、予算と照らし合わせても決して高く買ったわけではないと思います。むしろ相場より安いくらいに」

「ふざけるなエリザベート！ お前は分かっているのか。このままではカストロプ家が

どうなるかを。破滅したいのか！ 今回は少なくとも横流しの帝国軍艦艇を欲しかったというのに！」

次第にマクシミリアンは血走っている。不満顔にどす黒い怒りが加わり、形相が代わっていく。

逆にエリザベートは蒼白だ。

兄が激昂するとどうなるのか、忘れてはいない。この身が忘れるはずなどない。

実のところ帝国軍との戦いなど止めて欲しいと心では叫んでいるのだが、それを口に出すなど思いもよらない。

「妹でありながらそんなことも分かっていない！ あるいはお前も下僕どもと同じように俺を侮っているのか？ そうか、そうなんだろう。ならばもう一度教え直す必要がありそうだ」

「いいえ、そんなことはありません！ 私の交渉が悪かったです。済みません、お兄様。お赦し下さい」

今、エリザベートが大理石の床に平伏しその肩が震えている。

小さく縮こまって見えるばかりだ。素晴らしく均整のとれた体型で、平均よりやや大柄のエリザベートなのだ。

ブロンドの直毛が床に触れるまで垂れ下がり、いつも放っている輝きはどこにもな

い。

怒気を発するマクシミリアンの横にいつの間にか召使いの一人が傳っている。

若い表情の乏しい女だ。

マクシミリアンに向かって両手を捧げるように前に出し、その手の平の上には恐ろしいことに電磁ムチがある！

エリザベートは見た。

その召使いは一瞬こちらに顔を向け、憐れむような目をしたのを。しかし、それ以上に安堵していた表情だった。

今日のムチの犠牲は自分ではない。この妹が犠牲になることで、当主の激昂は収まり、少なくとも今日は自分が酷い目を見ることはない、という。

それもまたエリザベートには屈辱の極みだ。

この自分が召使いにさえ犠牲の身代わりになる人形のように思われているとは。

「お待ち下さい。お兄様。またフェザーンに行つて参ります！ 必ず、もつと良いものを手に入れます！」

エリザベートの息使いは激しい。

しかしそれは浅い呼吸で、酸素は充分に行き渡らない。極度の緊張のせいだ。

「今頃分かつて来たのか？ 本当かエリザベート。しかしこれもお前のためだ。ムチの味でもっと忘れないようにした方がいい」

「忘れません！ 今度はお兄様が満足する物を手に入れます！」

「そうか、では直ぐ行つてこい。直ぐにだ」

少し態度を和らげたマクシミリアンがエリザベートにそう命ずる。

逆にその様子を見た召使いに動揺が走つた！

その能面のような顔に今度はいつかりと驚きが刻まれる。今日の犠牲は妹ではない。しかし、この当主は日に一回くらい癩癩を起こし、つまらない理由を見つけては誰かにムチを振るうのが常である。

今日の電磁ムチの犠牲は誰か。

一番可能性が高いのは近くにいるこの自分ではないか。今まで安堵していた分、その思いで泣きそうな顔になる。

エリザベートは召使いの表情をちらりと見るだけでその感情がよく分かる。同情心が少し湧かないでもないが、この女はついさつきまで犠牲の振り替えを考えていたではないか。ざまをみる、との思いもある。

再びフェザーンに向かう艇内でエリザベートは思う。

どうしてこうなってしまうのか。今までもさんざん思い、何の解決も得られないことを。

エリザベートの父、つまり先代のカストロプ当主オイゲン・フォン・カストロプは吝嗇家ではあったが少なくとも暴力を嫌う優しい人だった。エリザベートも何ら不自由なく育てられた。それは幸せな時代だった。

エリザベートは貴族令嬢としては活発な少女として育った。

大貴族カストロプ家の力に魅かれた取り巻きたちと練り歩いて素行不良な真似事まですしている。

しかし基本的には影が無く、いつも正直で明るかった。

そんな時代は父親の死とともに突然終わった！

父が死ぬと、カストロプ家は当然のことながら長子であるマクシミリアンが受け継ぐことになる。

エリザベートにとってマクシミリアンはやせっぽちでボソボソとしかしゃべらない気味の悪い兄だった。

確かにそんな兄を軽んじていた。両親もまた何を考えているのか分からないマクシミリアンより、周囲を明るく照らすように輝くエリザベートを愛していたからだ。

そんな兄があまりに早く当主の位を継いでしまったのだ。

その途端、兄マクシミリアンはまるでペールを脱いだように態度を変えた！

抑圧されるものがなくなり、元々持っていた粗暴な性質がしだいに膨れ上がってきた結果のように見える。

体もぶくぶく太り、変な古代趣味まで持ち、その装束を自分も周りにも強要した。

そんなことだけならまだしも、いつも厳しい顔をして崩さない。そして度々癩癩を起こしては、力いっぱい周囲に当たり散らすのだ。

当主がそんな手の付けられない様子になったのを見てカストロプ家の縁者たちは次々離れていく。帝国発祥の頃から存在する名門貴族カストロプ家は急速に味方を失ってしまった。内部でも代々執事を務めていた者でさえ度重なる折檻に耐えかねて逃げ出した。

しかし、膨大な財力の貯えがあったのだ。多少の放蕩で尽きることはない。

そして不条理なことにマクシミリアンは知能にだけ優れ、特に財をなす方面に異常なまでの才能があった。

カストロプ本領は帝国航路上の要衝を押さえる商業惑星である。しかも古くから開拓されていたため、インフラは整い、農業も工業も充分に開発されていた。

それを背景にしてマクシミリアンは才能を存分に発揮し、いつそう財産においては豊かになった。やがて財政面だけでいえばあの帝国最大の貴族ブラウンシュバイク家、リッテンハイム家さえ凌ぐまでになる。

しかし、心はどこまでも貧しかった。

## 第三十六話 487年 4月 本当の理由

当然、兄妹の関係も瞬く間に険悪になる。

エリザベートは貴族子女らしい尊大なところもあつたが、陰険ではなく、まして暴虐ではない。

最初は兄マクシミリアンを諫めていたものだ。

しかしマクシミリアンはそれを聞くことはなく、かえつて反発を増していく。ついに被害妄想が高まり、妹エリザベートにまでムチを振るうようになったのだ。

最初のきつかけは今となつてはどうでもいい理由なのだろう。

まるで水位が高まり、溢れ出すようにそれは始まつた。エリザベートが両親の愛を独占していたことへの苛立ちや羨望だつたならまだしも対処が可能だつたらう。しかし、そもその原因がマクシミリアンの暴虐趣味ならば話し合いも意味を持たない。改善できる見込みもなかつた。

エリザベート自身もムチを振るつたことが全くなかつたわけではない。従者が悪意で何かをしでかした時などにはやむを得ず使つたものだ。



しかし今、エリザベートが電磁ムチを自分の体に受ける側に回って、その衝撃と痛みを知った。

ひどく後悔した。

今までムチを軽く考えていた。これほどのものだとは思わないで自分は使っていた！

従者の失敗をムチで罰するのは貴族のたしなみの一部、だがこの痛みほどのことをしたろうか。やはり貴族の奢りがそこにあったのだ。

エリザベートはようやく弱者の思いとその哀しみを知った。

ただし、それで慈愛あふれる心になったかというところではない。それどころではないのだ。

自分がムチ打たれることへの絶えざる不安のために心は苛まれ、他を思いやる余裕はない。

最初は兄に抵抗しようという反抗心が芽生えたこともあった。

公に訴え出る道がないわけではない。しかし当主がマクシミリアンであることは帝国の法によって守られている。勝手に財産を分割して退去ということはできないのだ。

そのうちにマクシミリアンに逆らう心自体を失った。ムチが繰り返されることに恐怖に足がすくみ、反抗心ごと砕かれてしまったのだ。

こうしてエリザベートは精神的に落ち着かない虚勢を張る女に出来上がってしまったのである。対外的には無駄に強がり、女学校での最後は粗野な生徒で通っていた。礼儀を馬鹿にし、不良の真似事をして皆に恐れられた。

エリザベートは諦め、それでいいと思った。

私は私の辛い人生を一人でとぼとぼ歩いていくのだ。

誰がこの境遇を分かってくれるというのだろう！ 逃げられない苦しみを背負った自分を。

女学校の中に生活する上で、他の女学生たちに対してももちろん好き嫌いという感情は生じる。それは誰しもそうだろう。しかし、思いつく理由もなく感情が先に立つことは少ない。

エリザベートはそこまで感覚のみで生きている女ではなかった。

むしろ知性は一歩外れて優れていたのだ。そして理屈のない好悪は恥だとも理解している。

そんなエリザベートにとつての例外はエカテリーナだった。

エカテリーナと利害関係を持つほどの交流は存在しない。しかし何のためか分からないけれど好かないのだ。

どうしてなのか、ゆっくりと判明してきた。

このエカテリーナという女は少なくとも家族関係において全く影がない。しかも、しかもエリザベートが許しがたいことにエカテリーナはルパートという兄とたいそう仲がいい。

もちろん家族関係が良好な貴族令嬢など他にいくらでもいる。それこそ兄妹で仲のよい家も。

それでもエカテリーナの場合は特別なのだ。

理由がある。

噂ではエカテリーナの兄ルパートというのは腹違いの者らしい。それなら仲がいいとは思えないのに、事實は世間のいかにも想像するような骨肉の争いなどということからあまりに遠い。

兄ルパートはこの度が過ぎるほど活発な妹の世話をこまごまと焼き、まるでそれが楽しいものであるかのようだ。そして妹エカテリーナは兄に幾度迷惑をかけても反省したそぶりさえ見せない。いつも天真爛漫に振る舞っている。

そんなふうに見えるのは、要するに互いに深い信頼を持ち、心を許しているからだ。

普通の兄妹よりもよほど仲がいい。

それがエリザベートが決してエカテリーナを容認できない本当の理由だった。

兄妹で仲がいいなど、そんな価値基準はエリザベートにはとうてい許せないのだ。自分分は兄のせいでこれほど苦しみ続けているのに。

そんなカストロプ家にもついに天誅が下される時が来た。

カストロプ家は帝国の財務尚書として先代も先々代も在任していたが、その地位を利用して私腹を肥やしていた。巧妙に隠していたので発覚せず、追及されても逃れた。

しかしそういう立場を利用して甘い汁を吸うのは珍しいことではない。それこそ利益のために立場を求めるのが普通であり、帝国への忠誠心のために地位を得る方がよっぽど珍しいくらいだ。

要するにカストロプ家が特別なのではない。

ところが不運はカストロプ家だけに舞い降りてしまう。

後任の財務尚書であるゲルラツハ子爵はカストロプ家を嫌っていた。もちろん、争つた末に財務尚書の立場を勝ち取ったのだからそれもやむを得ない。おまけに偏執狂的なところがあり、過去に遡ってカストロプ家の罪を見つけようとまで試みたのだ。

もう一つ、偶然が重なった。今の帝国司法尚書ルーゲ伯爵はこれもまた異常なほどに潔癖症だった。司法尚書がそうであるのは、ある意味良いことであり、本人も周りも幸

せかもしれない。

それがゲルラツハ子爵の調査に協力してしまったことから運命は転がり出す。ゲルラツハ子爵は自分も甘い汁を吸うつもりだったので、それほど執拗な調査をするつもりがなかったのだが、ルーゲ伯爵はそうではない。恐ろしく苛烈な調査を断行したのだ。

そして、カストロプ家が代替わりし、ここまで時が過ぎてから過去の罪がようやく明るみに出てきた。

過去のものとはいえ、その罪は大きい。

財務尚書は銀河帝国の莫大な財政を預かる以上、その利権は他の尚書の比ではなく途方もない額になる。どんな貴族でもそのおこぼれとして賄賂を受け取る魅力に勝てない。ただし、それだけだったら帝国の藩屏たる名門貴族が罰せられるものではない。

しかし、このカストロプ家の場合は通常に処理できない理由があった。賄賂だけではなかったのだ。

問題は帝国の国庫そのものにまで手をつけていたことである。

このの意味するところは賄賂などとは次元が違う。国庫は皇帝の財産である。言い換えれば、カストロプ家は皇帝の財布から掠め取ったということになり、これは叛逆罪にも値する重罪である。

正直、現在の皇帝フリードリッヒ四世自身は国庫に興味はない。大規模な建設事業に

も大勢の後宮にも縁がない地味な皇帝なのだ。国庫を気にする必要は最初からない。そのため今回のことでカストロプ家に怒りを向けているわけではないのだが、法に照らし合わせれば重罪にそれなりの処罰をしなくてはならない。

帝国の威信に関わることで、公表はされず内々に処分が決まる。

それは数年をかけカストロプ家は手持ちの財産を全て処分しそれを国庫に納入する、それが終わり次第カストロプ家は爵位を返上し、貴族から庶民へと落とされ、オーディンから追放されるというものだ。厳しいといえれば厳しいが、牢獄でもなく血を見ることもない。

しかしマクシミリアン・フォン・カストロプにとっては死に等しい。

名誉も財産も失い、放蕩もできなくなる。

そこでマクシミリアンは一つのことを思い出した。

その少し前に起きた事件である名門貴族ヘルクスハイマー伯爵家の逃亡劇だ。

結果、ヘルクスハイマー家の所有していた多くのものが周辺帰属に分捕られることになった。その中にはヘルクスハイマー家らしい工業的な設備や開発中の製品も多数含まれていた。

貴族たちは自分に価値が分からないそれらのものを、分かる人間に託した。普通の貴族には宝石や美術品くらいしか鑑定できないからだ。

こうしてヘルクスハイマー家の遺産である工業部門について、通商に明るいカストロプ家が運営に携わることになっていった。

それについての事業を進める中でマクシミリアンはなんとも意外な発見をしたのだ。ヘルクスハイマー領では高度工業の一分野として兵器の開発をしてきたが、そこに艦艇などではない面白いものが含まれていた。

それは小型ながら惑星を丸ごと守護するシステムチックな防空用の人工要塞だった。十二個ほどがシステムを組み、効率を最大限に高めて防御に働く。今までこのようなものは帝国にはない。惑星を丸々防御するという必要がなかったからだ。

既に設計は完了し、部材も大半用意されていた。後は組み立てと調整を残すばかりだった。

完成後のシミュレーションテストの結果が出ている。それは驚くべき性能だった。一個艦隊どころかそれ以上でさえ侵攻を許さないほどの代物ではないか。

開発計画書には、このアイデアの元が記されている。既に同様のシステムが運用されている例があるらしい。帝国情報部がようやく手に入れた資料によると、何と叛徒はその首都星ハイネセンをこれで守っている。

逆に言えばあの叛徒どもが首都星の守りの要しているということが、有効だという何よりの証拠ではないか。ならばもつと大がかりのものを作り、オーデインを含む帝国主要星系に設置したらどうか。

純粋な技術的興味と、皇帝の覚えをめでたくするという実利的な意味の両方とでヘルクスハイマー家は建造を進めていたらしい。

そんなことを知ってもマクシミリアンは興味を引かれなかった。その時には建造コストや販路といった商売的なことしか思わなかったのだ。

しかし今や帝国から死にも等しい宣告を受け、マクシミリアンはその重要性を思い出す。

その新しい防衛システムがあれば、少なくとも本領惑星は守れるのではないか。帝国軍だつてこんなシステムは見たこともないはずだ。

少なくともシミュレーションでは艦隊を通しはしない。

それに期待する思いから、帝国に齒向かう危険な発想が芽生えた。

元々帝国や帝室に対する尊敬など持っていない人間だ。そして粗暴な心が逆に恐れを知らない方に変化した。

こうなれば帝国に反逆し、討伐艦隊を蹴散らし、独立体制を作つてやる。



細かい計算もある。今の帝国軍は叛徒と戦い続けて疲弊している。しかもイゼルローン回廊付近から実戦部隊はそう離れられない。おそらく何個艦隊も引き抜いてこちらに持つてくることはないだろう。少なくとも最初は。

そして幾度か討伐軍が来ても、カストロプ家が防衛システムでもってその都度跳ね返し、容易に攻略できないことを見せつけてやればいい。

そうしたら何かの和約を結べる可能性がある。

もちろん帝国は面子が最も大事なのだ。うまく皇帝の顔を立てる必要がある。

タイミングを見ていったん降伏という形を取らざるを得ないだろうが、名誉を失ったとしても実際は自治を認められる、そうもっていければ万々歳だ。

フェザーン自治領という格好の事例があるではないか！ それと同じように事実上の独立国のようになればいい。

独立国、それは甘美な誘惑だ。誰にも何も掣肘を加えられることなく思うがままに事を成せる。今でもたいがい貴族はその私領では自由なのだが、いつそう全てを足の下に置き、どんな不埒な放蕩でもできるのだ。上に戴くものは何も無い。

この考えに憑りつかれたら後戻りはできない。

マクシミリアン・フォン・カストロプは財産を肅々と処分して現金化し、あたかも帝

国の意向に従っているように見せかけながら、その現金を防衛衛星システムの残りの部材調達に使った。

帝国は遅まきながらマクシミリアンに不審なところを見つけ、その意図に気付き、国務尚書リヒテンラーデ侯まで報告を上げてきた。

しかしリヒテンラーデ侯が事態を知った時にはもはや防衛衛星の建造は最終段階にあり、間もなく軌道上で稼働できるまで仕上がっていたのだ。

「悔しいのう。儂としたことが後手に回ってしまったようじゃ。しかし、よもや帝国の藩屏たる名門カストロプ家がそこまで帝国に忠義を感じていないとはの」  
リヒテンラーデにとっては意外に過ぎた。

凡百の貴族の話ではない。帝国の財務尚書まで務めた重鎮カストロプ家が、よもや帝国に逆らうばかりか武力抗争まで画策するとは。人の裏の裏まで読むリヒテンラーデも、いったい何を信じたらよいのかめまいがする。

もしもリヒテンラーデであれば、その忠義によって皇帝が一言命じるだけで何であろうと従うのは自明なことだ。皇帝が「帝国のため死ぬ」と仮に言ったら、即座に死ぬ。そんなことは当たり前ではないか。



## 第三十七話 487年 4月 盟友

マクシミリアンは更に考える。気違いじみた反逆を企んでいても、それなりに合理的な算段をつける頭はある。

カストロプ家本領惑星は防空衛星システムを使って艦隊の侵入を許さないとしても、懸念はいくつもある。帝国が長期に渡って諦めず、艦隊を惑星近辺に留めておくという可能性があるので。長く囲まれてしまうことは即ち流通が断たれることを意味し、カストロプ領のような商業惑星は立ち枯れるほかない。幸いにも農業や工業、資源も充分に存在するため直ちに飢えにつながることはないが、繁栄など不可能だ。

カストロプ家はそんな事態に対処するのに武器を多く備えて多すぎることはない。今のうちに調達できるだけ調達しておこう。

妹エリザベートをフェザーンに送ったのもそのためである。フェザーンは基本商人の惑星、金か利権をちらつかせれば売らないものはない。ただし酷薄なことも確かだ。帝国が気づいて横やりを入れてくればあっさり手の平を返すだろう。できるだけ秘匿し、買えるだけ買いい切っておく必要がある。

そんな差し迫った事態なのに、エリザベートは理解しているのかしていないのか、機雷やミサイルを通常に買う程度の商談でまとめてきた。

馬鹿者が、理解できる頭が無いのか。少しでも戦闘艦艇を買ってこい。

叛乱準備もいよいよ大詰めを迎えている。

もちろんマクシミリアンは性格の捻じ曲がった人物であり、自分以外のものを思いやる心が決定的に欠けていた。腐った帝国貴族の典型的な一人である。

しかし物事を進めるのに非凡なセンスがあった。もしも軍人になっていたら戦果を上げ出世していたかもしれない。いや先に戦闘時の残虐行為や捕虜虐待で失脚した可能性が高いが。

マクシミリアンはここで大きな動きに出た。

純粋な武力抗争だけではなく、政略においても手を打つ、具体的には帝国の重要人物を人質に取ろうと企んだ。

カストロプ家が不穏な動きをしているという噂は自然と広まってしまふ。ごく小さなことでさえ貴族社会では格好のネタにして話すからだ。

しかしマクシミリアンはそれをも利用していった。

カストロプ家領地に隣接するところに古くからの名門貴族がいる。

それはマリーンドルフ家というカストロプ家に匹敵する名家のことだ。国務尚書を輩出すること数度に及び、同じように財務尚書を出すことの多いカストロプ家とは昔から深い親交がある家である。過去を遡ると複雑な血縁関係もある。

その当主フランツ・フォン・マリーンドルフ伯爵がカストロプ領を尋ねてきたのだ。反乱の噂を聞いて真意を問うためである。もちろん、マリーンドルフ伯も本当にマクシミリアンが謀反を起こすとは考えていない。いや、マリーンドルフ伯爵だけでなく、噂を囁す者さえ誰一人帝国に反逆など本当のこととは思っていないかった。

ともあれマリーンドルフ伯は変な噂が一人歩きしていると考え、困っているであろうマクシミリアンと一緒に対処を講じてあげようとしたのだ。

マリーンドルフ伯は貴族らしからぬ温厚かつ親切な人間であったが、ここで痛恨のミスをしてしまった。マクシミリアンの本意を見抜けなかったのだ。護衛もつけず、それどころか長年交流をもっているカストロプ家に久しぶりに表敬する意味もあつて一人娘のヒルダを伴って訪問した。

ヒルダはこの訪問をとて嫌に思った。昔からマクシミリアンのことを好きではない。何というか趣味が合わない以上に視線も雰囲気もぞつとするものを感じていた。

むろん父親に言われて拒むような娘ではない。一緒にカストロプ家本領惑星に行つ

たことは行つた。

しかしながら、その軌道上から降下はしなかった。

「お父様、万が一、万が一です。そのカストロプ家の謀反が本当だとしたら皆で降り立つのは危険です！ マリーンドルフ伯爵家はお父様と私の二人だけ、そのどちらも捕らわれたら伯爵家はお終いではありませんか」

「ヒルダ、我が家とカストロプ家とは数百年の交流がある。捕らえるなどあるわけがない。ずいぶん心配性に育ってしまったのかな、私の娘は。どうせ今回の謀反騒ぎも噂が勝手に燃え広がっただけだろう」

「数百年の交流とはいっても今のマクシミリアンが数百年生きているわけでなし、危険です。お父様」

「普段のおてんばはどこに行つたのだろう。何にでも首を突っ込みたがるお前が。まあ、そう言うなら私が降りて先に話を始めておくよ。話が終わったら呼ぶからその時に来なさい。夜のパーティーだけにでも出ればいい」

ヒルダは本当にその危険を考えていたのだが、マリーンドルフ伯は娘が単に嫌がつているものと考えた。しかし、無理強いはず、ヒルダの意見を聞いた。フランツ・フォーン・マリーンドルフ伯はそれほど優しい心の持ち主だったのだ。

マクシミリアンにとっては飛んで火にいる夏の虫だ！

惑星表面に降りてきたマリィンドルフ伯を難なく捕らえた。マリィンドルフ伯はひどくがっかりしながら素直に捕まった。どのみち抵抗しても無駄なことだ。

しかし娘を早急に逃がさなくてはならない。

「噂は本当だったのか…… ヒルダの用心は適切だった。さすがは我が自慢の娘だ。しかし、今は早く知らせて逃げさせなければ」

大人しくしているフリをしながら隙をみて軌道上の艇に連絡しようとした。それはなんとかうまくいき、ヒルダに直ちに去るように命じた。

しかしこれにヒルダは従えない。

「お父様だけを置いて逃げることは、できませんー！」

なるほど理性で事態を考えれば、自分だけでも逃げるべきなのだが、しかし父親を見捨てて逃げるなど感情がそれを許さない。

救出の方法を考えているうちにマクシミリアンが先手を取る。むろん、もつとも狡猾で順当な方法を使って。

「マリィンドルフ家の艇に告げる。当主は捕らえた。艇にいるものは全員直ちに降りてこい」

「……反逆は本当だったのですね。マクシミリアン・フォン・カストロプ。そつちこそお



父様を返しなさい。罪を重ねてどうする気ですか」

「マリンドルフ伯は温厚なのにその娘はずいぶん気が強いな。だが人質を取つてある以上、命令する権利はそちらではなくこちらにあると分かるか。さつさと降りてこいと  
言つてるんだ」

「人質といつても殺したりできるもんですか。それこそ同情の余地がなくなるだけのことです」

「ふん、口は達者だが議論など無駄なことだ。もう一度言おう。生殺与奪の権利はこちらにある」

「犯罪者が権利など口にしていいものではありません。更に指摘してあげます。仮にマリンドルフ家を人質を取つたとしても帝国の態度が変わるでしょうか。手心を加えるとお思い？ いや、おそらくマリンドルフ家は帝国のため命を捧げたと讃えられる結果になるだけでしょうね」

マクシミリアンは驚いた。マリンドルフ伯の娘は本当に賢い。

こんな場合、並の貴族令嬢なら泣いて喚き散らすしかできないだろう。それがメソメソするどころか素早い頭の回転で逆に交渉術を仕掛けてくるとは。やむを得ず更に狡猾な手を使った。

「帝国が手心を加えるかどうかは、これまでのマリンドルフ家の忠勤によるだろう。ではこちらも指摘しておこう。人質を殺さなくとも痛めつけるといふ選択肢が残っているぞ。そちらには不幸かもしれないが、電磁ムチの用意ならいくつもできている」

これではさすがにヒルダも交渉継続は無理になる。

自分も降下して捕まるしかなく、マリンドルフ家の断絶という最悪の事態も含めた状況になってしまう。

おまけにマクシミリアンはもつと悪辣なことを考えていた。

この娘はただ帝国に対する人質にしておくのは勿体ない！

その頭脳をこちらのために利用すれば理想的ではないか。

結果、ヒルダは不本意極まりない利用のされ方を強要された。父親が共に捕らわれている以上仕方がない。

後にその知謀、一個艦隊に優ると讃えられたヒルデガルト・フォン・マリンドルフの冠絶した頭脳がこの時マクシミリアンに味方する。

それが一貴族の単純な反乱で終わるはずのものを銀河の歴史に関わる大事件に変えていくとは、誰も予想もしなかった。

一方、こちらはフェザンである。

エリザベート・フォン・カストロプがまたやってきた。

帰ったばかりなのに、いったいどういふことかといぶかしく思いながらもエカテリーナが応対しようとした。

その時のことだ！

エカテリーナは驚いて固まるしかない。

あの粗野なエリザベートが自分の目の前に平伏している。

フェザン統治府ビルのカーペットもない硬い床の上に。しかもここは部屋ですらなく、廊下のところで。

それは人としてのプライドを全て投げ捨てた、正に全面降伏の姿だった。

肩を震わせ泣いている。そんな中、エリザベートはただお願いだけを口に出している。

「どうか、憐憫をたまわりたく存じます。お助け下さい。そう言う資格も義理もないのは分かっております。これまでの冷淡な交友を考えれば。ですが今はただひたすら憐みを請うことをお許し下さい」

「え…… どういふこと……」

エカテリーナは困惑するしかない。

別にエリザベートが自分に平伏する姿を見て嬉しいことは何も無い。

エカテリーナは勝ち誇る快感を欲しい種類の人間ではないのだ。相手が誰で、これまでの経過が何であつても。

対等に戦っているならともかく、平伏の姿を取っている相手を更に傷つけることなどではしない。

「と、とにかく顔を上げてエリザベート。あなたがどうしてそんなことをするのかちつとも分からないわ」

「代価は私にはありません。しかし、どんなことでも致します。どうかカストロプ家に何かの武器をお与え下さい」

「止めて！ あなたがそこまでする理由を聞きたいわ。是非聞かせて頂戴」

エリザベートはこれまでの長い長い話を涙ながらに話す。

それは誰にも話したことのないカストロプ家の暗部である。家の恥になることだ。しかも長きに渡つて自分がムチ打たれていることまで話すのは本当に恥ずかしく、心が痛んで止まない。

話を進めていくうちに、次第にエリザベートは自分で気が付いた。

本当は武器などどうでもよかつたのだ。

いつとき兄への恐怖から逃れるためにそれを欲していたのだが、自分が真実欲しいのはそんなものではなかった。むしろ武器などないほうがよい、カストロプ家など破滅してしまえとさえ思うのが本心だ。自分も兄もこの世には要らない人間なのだ。世のため何の役にも立たず、むしろ害であり、消えてしまえ。

滑稽なことに本人たちですら幸せではない。痛めつけられている自分も、狂った考えに取りつかれている兄マクシミリアンも。

しかし、もしも、もしも過去に戻れるのならば得たいものがある。

自分が望んでいたのは心を開ける友だった！

ただそれだけが欲しかった。

今までそんな友を得たことがないのは、兄のことで自分から心を閉ざしていたせいだ。それは単なる言い訳に過ぎない。今、ここにきてようやく思い知った。

エカテリーナの方ではエリザベートの心の傷を知った。

全く思いもよらない話であり、幸せに育ってきたエカテリーナにはそれがどんなに酷いことか正確に想像することは無理だ。

しかし分かることがある。

エリザベートは単純に粗野で気の強い女などではなかったのだ。そうなるべき悲痛

なほどの理由があった。

エリザベートの心はあまりに深く傷つき、決して癒されることがない。

今もなお溢れ出る血は止まっていない。エリザベートはその血の底でもがき苦しんでいるのだ。

エカテリーナはその痛みを自分の痛みとして感じた。

この瞬間、長年の敵対関係は終わり、二人の確執はきれいさっぱり消失した。いや、それどころか二人は互いに盟友を得たのだ。

友として絆で結ばれた。

死によって引き裂かれるまで決して崩れることのない絆で。

加えて、エカテリーナはエリザベートが望んだ武器などを遥かに超える物を持っていった。

今、それが明らかになる。

フェザーン自治領が秘密裏に作り上げた力、フェザーン防衛艦隊、である。

## 第三十八話 487年 4月 不安

フェザーン防衛艦隊、それはいずれフェザーンの防衛を担うために創られた。

エカテリーナの発案によるものであり、アドリアン・ルビンスキーもそれを良しとした。そうと決まれば資金は充分にある。

今はまだ雛型にしか過ぎない。

艦艇数にすれば総数九千隻足らず、旧ヘルクスハイマー私領艦隊の艦、それを追ってきて鹵獲された貴族艦隊、そしてフェザーン警備艦隊を融合させたものだ。

人員はヘルクスハイマー艦隊のうち同盟への移住をではなくフェザーンに残留を希望した者、またはフェザーン人で急遽教育訓練を受けた者など雑多である。

この艦隊は今も雌伏しているが、いずれは世に出るのだ。

エカテリーナは今、出すべき時なのかと思った。

もちろんこの重大事を父アドリアン・ルビンスキーに相談する。

「お父様、これも機会だと思えますわ。フェザーン防衛艦隊はやつと形を取り繕ったと

しても、決定的に欠けていることがあります」

「ほう、それは何だ、エカテリン」

アドリアン・ルビンスキーはいつもの楽し気な表情だ。子供の成長はいつでも親の楽しみである。

「艦隊には実戦経験が不足しています。機会を見つけて経験を増やさなければいざという場合に大きな不安が残ります。それに帝国に対しすつと隠し通せるわけもなく、いずれは艦隊の存在が明るみに出ます。しかも今、カストロプ家に貸与すれば大変な恩を売ることになり、見返りにかなりの大きな利権を取れるでしょう」

「なるほどそう思うかエカテリン。では簡単に言っておく。結論は賛成だ。ただしお前の意見には反対だ」

アドリアン・ルビンスキーはことさらわざと優しい声色を出している。表情も穏やかなままだ。

これはアドリアン・ルビンスキーがエカテリーナを叱責する時、いつも取る態度なのだ。もちろんエカテリーナはそこらの娘とは違う。アドリアン・ルビンスキーが聡明なエカテリーナを叱責することなど滅多にない。その数少ない場合でも、やむを得ず行うことであり、それ以上にエカテリーナに愛情を持っていることを表わすためのサインである。



「エカテリン、戦う経験を持たなかった艦隊がいかに弱いか、それはよく分かる。数だけは帝国の半個艦隊ほどだが戦力はもつと劣るだろう。いずれ問題になってくるのは事実だ。このタイミングでカストロプ家に貸与するのもいいだろう」

エカテリーナはじつと聞いている。口を挟まない。父は何事かを言わんとしている。「だから結論としては艦隊を貸与、これは良しとする。しかし言っておきたいことがある。エカテリン、お前は理由を並べ立てたな。それが間違いなのだ。行動する場合には、理由はたった一つ、目的はたった一つでいい。たった一つを確実に達成すればいいのだ。人は明確な理屈が分からない時に限って理由を並べ立てる。そして間違った方向に行く」

あ、そうだったのか！ エカテリーナに父の言うことが分かってきた。私は間違っていた。

しかしまだ口を挟む時ではない。

今思いついた返事など返したら、理解が上つ面のものになってしまう。それでは忠告が決して身に付かないだろう。

「エカテリン、決断を下す方法を学んでおけ。お前は高い所に立って、大きく全てを見渡して決断し、人を導かなくてはならん。でなければフェザーンを背負って立つことはで

きん。その訓練が今から必要なのだ」

今、父は自分を帝王教育しようとしている。人々を正しい方向へ導く帝王学を教えている。

アドリアン・ルビンスキーの湛えられた叡智は深く広い。その一端に触れさせてもらっているのだ。

しかしなぜこの自分に。

それもこんな早い時期から。

「済みませんお父様、ようやく分かりました。理由というものは明確に一つでいいものだと。今改めてそれを学びました。ですが何か落ち着きません。お父様に何かあるんでしょうか」

「どうしたというんだエカテリン。それとも何か、今のが遺言のように聞こえたとしても言うのか？」

「いえそんなことは決して。ですが」

「教えることはいくらでも残っている。まだまだあるのだぞ、お前が思うよりも。一つ一つ確実に学んでいくのだ。そのために時間はいくらあっても足りない」

時間……

少しばかり引つ掛かるものがあつた。アドリアン・ルビンスキーの父も祖父も若い時

に病死している。

「まあ、ルビンスキー家は決して長命の家系とはいえんからな」

「これからも多くを学んでいこうと思います、お父様。必ず」

「そうしてくれるか、エカテリン」

「ここでアドリアン・ルビンスキーは父親としての柔らかな表情に戻る。

「そうだ、良いことを言えば、お前はルパートと本当に仲がいい。これからもそれは続くだろう。これは一つ大いに安心できるものだな。人の好悪というものは自分で変えられず、一番学ぶのが難しい種類のことなのだ」

「ここで決定された。」

フェザーン防衛艦隊の半数以上にも当たる六千隻が期限を決めてカストロプ家に貸与される。

むろん、期待をはるかに超えた望外な約束にエリザベートは安堵した。

「ありがとう、エカテリン。本当に……」

「これ以上の言葉は不要だ。」

今は友人となった二人なのである。長い長い感謝の言葉もそれを聞くこともしなく

ていい。

もちろん契約上としては使用意図についてフェザンは何も聞いていないという体裁だ。純粋な商売上のレンタルであるという形である。

あくまで宇宙海賊への圧力と警備のためであり、それ以外のことは想定していないことになっている。契約書にはご丁寧にも一方的な襲撃に対しやむを得ず対処せざるをえない場合以外、積極的戦闘使用は原則不可、という条項まで入れている。もちろんとつてつけたようなもので、言い訳の準備以外の何物でもないのは誰の目にも明らかだ。

その対価は大きい。フェザンはカストロプ家がオーデインに残してあつた広大な屋敷や美術工芸品を全て貰い受けることとした

この契約成立の報はいちはやくカストロプ本領惑星に届けられる。

マクシミリアン・フォン・カストロプは珍しく喜色満面の笑みを浮かべた。

「おお、エリザベート、これは褒めてやろう。大したものだ。フェザンから六千もの艦隊の貸与を引き出すとは期待以上にうまくやってくれた。さしずめ女学校の同窓とかいう娘をうまく丸め込んだのだろう」

エリザベートは怒られるよりは良かったものの、複雑な感情を抱いた。

自分はエカテリーナに誠心誠意頼んで、エカテリーナはそんな自分を信じて決めてく

れたことなのだ。

断じて騙したのではない。

一方、帝国政府はマクシミリアン・フォン・カストロプの真意を問いたただすためにオーデインに召喚の命令を下すが、のらりくらりと躲されることが続いていく。業を煮やして迎への艦を派遣しても病氣療養中を理由に逃げられる。

最後、皇帝の勅命という何人も逆らえない形を用いて呼んでも無視される。ここに至ってカストロプ家の叛逆は明確になった。

國務尚書クラウス・フォン・リヒテンラーデが皇帝に奏上する。黒真珠の間がその国の場所だ。

銀河帝国皇帝に直接裁可をいただくという重大事はリヒテンラーデしか言えない。

この黒真珠の間に、関係者として財務尚書ゲルラツハ子爵を始めとして司法尚書や宮廷尚書らの文官が控えている。しかし、それらとリヒテンラーデとは隔絶した差があり、同じ尚書でも重みが全く違う。宮廷尚書など金で買えるとまで言われている程度のどうでもいいものである。

もちろん違いはその立場のみならず、リヒテンラーデ個人の国事における権威、皇帝の信頼の厚さが明らかだ。

「皇帝陛下、ルドルフ大帝の功臣カストロプ公爵家、まことに残念ですが時の流れは忠誠心をも押し流し、今の代に残されてはいけません。名家を消すのは忍びないことではありませんが、帝室の威信を示すため、謀反には断固とした態度をお示しあるよう奏上申し上げます。既に軍部は討伐準備を進めておりますれば、一言お言葉を賜りたく」

「その言を良しとする」

皇帝にとりカストロプ家はどうでもいい存在であり、関心はない。マクシミリアン・フォン・カストロプを見たことがあるのかもしれないが、特に印象はなく、謁見があったことさえ記憶にない。

少し前に事件を起こしたクロプシュトゥック侯なら別だ。

幼い頃可愛がってもらったという良い思い出とかつて憧れていたという個人的な思いがあった。クロプシュトゥック侯が消えることは皇帝の心に少なくない痛みを与えたものだ。

しかし、今回のカストロプ家討伐には何の感情もなく淡々と従う。

「銀河帝国皇帝フリードリッヒ四世の名において討伐を許す。その通り行なえ」

「では直ちに。皇帝陛下」

奏上と裁可が終わり、誰もいなくなった広間に一人皇帝が残っていた。そして自分自身に声を加えるのだった。

その光景は、きらめく銀河帝国の中心というにはあまりに寂しい。

「皇帝は銀河帝国の臣民を全て手にしていると言われるが、すぐ横には人がおらん。クラウスよ。そっちは最後まで余と共にあれ。決して離れてくれるでないぞ」

皇帝フリードリッヒ四世は真に忠誠心を持つ者がクラウス・フォン・リヒテンラーデ侯くらいしかいないと思っている。他の凡百の貴族は貴族制度に寄り掛かっているだけで、それ以上のものではない。今回のカストロプ家の反乱もつまるところその結果だ。

皇帝は意外にも正確に把握していたのである。

リヒテンラーデ侯は先のクロプシュトゥク侯討伐における失敗の轍を踏むことはなかった。途中から利権分捕りのために貴族どもがしゃしゃり出てきてはたまらない。「これは貴族の問題である。帝国に迷惑をかける貴族が出たなら、まずは貴族の間で事を解決するのが本筋であろう」

そういつた詭弁すら出てくる可能性がある。どうせカストロプ家の富が狙いなのに。そんなことになる前に帝国艦隊を向かわせられるよう根回しを進めていたのだ。

帝国軍が動き出してからようやく討伐を布告する。

その作戦はリヒテンラーデ侯から詳細を聞いた軍務尚書エーレンベルク元帥がミュッケンベルガー元帥とも相談して決めた。

派遣する討伐艦隊の指揮官が最も重要である。

これについて、早々とシユムーデ中将と決定された。これはもちろん先の同盟領内の作戦が消化不良に終わった償いの意味があつたからだ。

派遣する規模は艦艇数三千隻、これで充分討伐可能と見込まれた。

カストロプ家は武門の家柄ではない。古くからの貴族であり、豊かな惑星を所持している以上、私領艦隊もそれなりの数はあり、その数はだいたい五千から一万隻と見積もられた。

だが、貴族の私領艦隊などに帝国軍正規部隊が負けるはずなどない。

兵の錬度、実戦経験の差、装備のレベル、ともかく格が違うのだ。戦うために創られ、実際に戦ってきた集団はお飾りの艦隊とは違う。

数の違いなど問題にならず、鎧袖一触と思われた。

「シユムーデ中将、今回の討伐作戦の指揮を卿に任せる」

「は、ミュッケンベルガー元帥、謹んで任務を拝領いたします。」

「卿には簡単過ぎる任務だろうが、なに、これも形式の一つだ。先に昇進した分の武勲に



はなる」

「では早めに片付けて参ります。閣下」

こうして帝国の討伐艦隊が進発した頃、ついにカストロプ領へフェザンから艦隊が到着した。

エリザベートへの約束通り総数六千隻、古い艦も真新しい艦も混在している。

割合としては買い取った旧クロプシュトック艦隊のものが多く、他にも横流しされた帝国軍の退役艦、フェザン工廠で作られたばかりの新造艦も混ざっている。

臨時で艦隊指揮官はオルラウ、副官はドレウエンツが務める。

この艦隊は戦闘どころか長距離航海も初めてである。訓練航海を兼ねての航行であったが、脱落や事故を起こさないで辿り着くだけで精一杯だった。もちろんオルラウらが無能ということはないのだが、それでも経験の不足がそこかしこに響いている。

その少し前のことである。

カストロプ領ではヒルデガルト・フォン・マリィンドルフがマクシミリアンの圧力に耐えかねていた。

「お父様を人質にされて、その上協力など厚かましいにも程があります。断じてあなた

に協力などいたしません」

しかし厳然として父親を捕らわれている以上、抗しきれない。

やむを得ずマクシミリアンを利する考えを出す。

それを聞き、マクシミリアンは驚愕してしまう。そのダイナミックな発想はいつたいどうやって思いつくのだ。

「やはり賢い娘だ。そういつた策を求めていた。なるほど、いい策だ」

ヒルダは不本意であることを目いっぱい顔に表して抗議する。

受け流すマクシミリアンは歪んだ笑いを隠しきれない。

「艦隊は揃っても、運用を任せられる指揮官がいなければ役に立たん。艦隊は指揮官次第、その通りだ。もちろん帝国軍から引き抜いたり寝返らせるなどできるわけではない。しかし、言われてみれば帝国に人材自体が存在しないわけではなかったな。はは、なるほど盲点だ」

そのマクシミリアンの姿を物陰からエリザベートが見ている。

今までのエリザベートのような弱々しい目ではなく、そこには力があつた。

盟友を得たエリザベートはこれまでと違う。

動乱は風雲急を告げ、予測しえない流れになる。

## 第三十九話 487年 4月 動乱～死に場所～

ヒルダは一つの考えを口にしたのだ。

現状でマクシミリアンの持つカストロプ家私領艦隊は一万隻を数える。

ただしその質は驚くほど低い。

マクシミリアンは私領艦隊などというものは貴族の見栄を張るものだとして認識していた。昔の大帝の時期ならいざしらず、今はそんなに大規模な海賊はいない。艦隊の必要性はなく、貴族は自分の地位や財産を目に見える形にするための飾りとして持っているだけだ。

そんな見栄のためにマクシミリアンは経費をかけるつもりはなかった。叛乱など思ってもしなかつた頃には。

他の貴族は帝国軍の退役艦をかうことが多いが、マクシミリアンはそこから更に貴族が手放すくらいのお朽艦をもらい受けるのが常であり、それで充分だと思っていた。大貴族であると思われる最低限の費用しか使わない。

ただしマクシミリアンは艦隊に興味がないゆえに積極的に廃棄することもしなかつ

た。それで数だけは残ってしまっている。

むろん形ばかりの艦隊であり、もはや存在しているだけの老朽艦では本当の戦闘には耐えられない。その多くが最大戦速など出したら分解しかねないほどのものである。

そんな状態なのを熟知しているマクシミリアンにとって、今回フェザンから貸与される六千隻の艦隊は喉から手が出るほど欲しいものだった。

しかしヒルダは言う。

なるほど確かにフェザンから艦隊を貸与してもらい、戦力の形だけは整うかもしれない。

だが実際に機能するかは分からない。

艦隊を実際に指揮して戦える者が決定的に不足している。この貸与されたフェザン艦隊は正にその状態にある。

これでは何の役にも立たない。

惑星の防衛衛星システムだけは自動化されているが、艦隊は優秀な指揮官あつてこそ力になるのだ。

「こちらの艦隊は多分役に立たないでしょう。カストロプ家私領艦隊は論外としても、フェザンの艦隊さえ各艦で戦えるというだけのことです。指揮官がいなければ艦隊

戦を戦うのは無理です」

「ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ、確かにそれには同意する。運用する人間が重要だということは分かる。よくぞそこに着目した」

「おそらく私が軍事など知らないからそう思うのでしよう。数の暴力、数の戦いを見たことがないので、他の面がよく見えます」

「なるほど、軍事経験がないからこそシンプルに本質を見られるというわけか」

マクシミリアンも同意した。元々頭は悪くなく、素早く理解できた。

しかしながらマクシミリアンは自分が艦隊指揮をするつもりはない。

そこは正しく認識し、自分にそんな訓練の経験もなく、能力もないことは弁えている。「それは困ったことだ。ここには俺も含め誰も艦隊指揮をとれる人間はいない。防衛態勢がとれないではないか。現状を正しく認めるのは良いが、解決策がないのでは何にもならん」

「ええ、しかも帝国軍の者を引き抜こうとしても無駄でしょう。いくら不満がある者でもまさか帝国軍と戦うなど考えるはずありませんから」

「そんな者はどこにもいるものか。帝国軍の力を熟知していれば、逆らう気力など持てはるはずがない。しかし今はどうしても人材が必要だ。何か策があるだろうか」

「策はあります。帝国軍ではなくて軍事的に能力も経験もある者、それが正に帝国領にいます。」

「帝国領に、だと!! どこにいるのかそんな者は! 勿体つけずに言え!」

「それは、捕虜収容所です!」

マクシミリアンは盲点を突かれた!

驚きの発想だ。

なるほど、確かにそこに帝国軍以外の人材が存在するではないか。ヒルデガルト・フォン・マリーンドルフ、やはり得がたい娘だった。

帝国軍には当然いくつも捕虜収容所があり、叛徒の軍から捕らえたもの、投降してきた者をまとめて押し込めている。

捕虜はほとんどが生粋の軍人だ。農奴として貴族に渡すことはできない。

妙に軍事的知識を働かせ、反乱を起こされたらたまらないからだ。そういう御し難い者たちは拡散させず、ほとんどは開発途上の惑星に置かれた収容所に閉じ込め、辛い開拓に従事させている。

そういった捕虜の多くは下級の兵卒である。しかし数が数だけに、中にはごく稀に将帥もいるのだ。

これを奪えば人材が手に入る！

ひそかに調査すると、やはり少将クラスまで存在したのだ！ マクシミリアンはそのアーサー・リンチ少将という叛徒の将帥に目を付けた。

捕虜は粗末な宿舎に放り込まれ、決して充分な食糧も与えられず、そして昼間は過酷な惑星開発の労働力に使われている。帝国軍の復讐という側面もあるが、主には捕虜に経費をかけないせいである。

しかし、さすがに階級が高い者にはそれなりの待遇を図っている。

なぜなら階級差別の強い帝国の風風が反映されているからだ。叛徒である自由惑星同盟には貴族出身士官など存在しないのに。

捕虜でも尉官クラス、佐官クラスと上がるつれ住居も食料も不自由はしない。

まして片手で数えるほどしかない将官クラスはある程度の自由と独立した住居を与えられている。

それに加え、アーサー・リンチには独立住居であるべき特別な理由があった。

それは、同じ叛徒の捕虜がアーサー・リンチに執拗な侮蔑と嘲りを入れてくるのだ！ もちろん捕虜のほとんどは少将より低い階級でしかないが、精神的に堪えるいびりをすることはできる。

理由は明らかだ。



アーサー・リンチは普通の捕虜ではない。

戦闘中に艦が動かなくなった、あるいは囲まれてしまいやむを得ず降伏をしたのではない。アーサー・リンチは何とその前に民間人を置いて自分だけ逃亡していたのだ！惑星上の民間人保護のために派遣されていたというのに。

この話は有名で、捕虜の誰もが知っている。

捕虜といっても誇りある自由惑星同盟の軍人であり、卑怯を嫌う。

当然、全員がアーサー・リンチに敵意を持っていた。

アーサー・リンチもあの時どうしてそんなことをしたのか自分でも分からぬ。

追い詰められたための異常な心理状況だったとしか言いようがないからだ。

それまでは思慮がありバランスのとれた思考の人間だった。自他ともにそう認める有望な将官だった。親交のあったグリーンヒル大将も自分のそういうところを見込んでくれていたほどだ。

それがただの一回、心の弱さが出てしまった！

このエル・ファシルでの不名誉によつて全ては台無しになり、あらゆる意味で未来を失くしてしまったのだ。

あの時、自分は確かに臆病風に吹かれていた。明らかに多数の帝国艦隊が来襲すると分かった時から。

しかしながらエル・ファシルへ同盟軍の援軍を呼んでくるために先行したのも確かなことで、決して自分の命惜しきだけで行動したのではない。

どのみち麾下の少数の艦隊では帝国軍に対抗できないだろうことは明白だ。民間人を連れて脱出しても、足の遅い輸送船であれば必ず追いつかれる。

帝国は見逃すことなどあり得ない。

軍人の捕虜は捕虜収容所にしか使えないが、民間人なら農奴に使える。常に多量の農奴を欲している帝国にとって、人員を乗せているらしい輸送船は格好の獲物だ。

それならばむしろ民間人をエル・ファシルから宇宙に出さない方がマシだ。宇宙で輸送船を拿捕されたのなら、もはや逃げ場はない。一卷の終わりだ。

しかし、惑星の表面ならば分散して隠ればいい。捕まるのは一部で済むではないか。

思い返してもあの場合、民間人をエル・ファシル表面に広く散らせて、同盟艦艇は急ぎ発進し、援軍をできるだけ早く連れてくるのが唯一の方法だったはずだ。

もちろん、自分が残るべきだったのだろう。艦隊もある程度は残すべきだった。エル・ファシル住民に対し説明責任もあつた。

自分はそこまで否定しない。

ただ方法論として自分の考えも間違っていないはずだ。これについては自分が臆病

風に吹かれて最初に出てしまったのとはまた別の議論である。

自分は結果的に帝国軍によって囲まれ、簡単に捕虜になってしまった。

その後の様子は捕虜収容所で伝え聞いた。

何とあのヤン・ウエンリーの策が鮮やかに決まったらしい！

もちろん賞賛すべきことだと思っている。民間人をしっかりと保護したのだから立派なことだ。

結果論だ、などと非難がましいことは言わない。苦勞するだろうことを知りつつ、自分が民間人の只中に残したヤン・ウエンリーは素晴らしい働きをして英雄になった。冴えない風貌のために凡庸な士官と判断した自分は間違っていた。

自分を帝国に対する囹として使った戦術についてはとやかく言わない。ただし軍事上の観点ではリスクの高いイレギュラーなことだとは思ふ。英雄に対する負け惜しみかもしれないが。

ともあれ、自分はあの瞬間のわずかな臆病のせいで巨大な不名誉を負うことになった。捕虜収容所で他の同盟將兵から嘲られるのも仕方がない。

だから今、自分はひたすら願っていることがある。

もはや不名誉を挽回しようなどと思わない。

ただ、死に場所が欲しい。

自分は確かに自由惑星同盟軍の将、同盟に対する忠誠がある。だからこそ、それにふさわしい意味のある死に場所を。

そしてそのアーサー・リンチのいる捕虜収容所へマクシミリアンが精鋭を送る。強襲し、アーサー・リンチ他の有能な艦隊指揮官を奪うためだ。

ここで帝国軍は後手に回った。

むろんマクシミリアンは宣戦布告などするわけはなかったし、隙を突けるといふ利点を最大限に活かした。この時点ではマクシミリアンが武力抗争を起こすとは帝国の方にも疑心暗鬼だった。

全てはヒルダの策である。

マクシミリアンのカストロプ家は討伐に対する防衛態勢どころか機先を制してきたとは！ おまけに帝国の捕虜収容所もまさか帝国領内で襲撃など考えてもいない。防備はあくまでも捕虜が逃げ出さないためのものしか用意がない。

結果、捕虜収容所を簡単に制圧し、多数の捕虜を奪うことに成功する。

それら捕虜の中からアーサー・リンチを取り分け、マクシミリアンが相対する。アー

サー・リンチの方もなんとなく自分が目的だということは感じている。

しかし、会った瞬間、アーサー・リンチは嫌悪感しか感じなかった。ただでさえ帝国貴族は自由惑星同盟の怨敵だが、それが理由ではない。

目の前の男はいかにも帝国貴族らしい尊大そうな姿だった。太つて人相も悪い。吐き気がするほどの嫌悪感を抱いた。服装も奇妙な古代貴族の出で立ちだ。側には同じような格好をさせた下女を多く侍らせてもいる。

「私をここに招いた、いや帝国軍から強奪したのはそちらだな。今一度確認しておこうか」

「叛徒の少将、その通りだ。強奪したとは、帝国軍から見たらそうかもしれない。しかし別の言い方でも良いとは思わないか。救出と言ってくれて構わない。もちろん、こちらに感謝も添えてだが」

アーサー・リンチは余計に不快感が増す。

その尊大な言い方と、内容と両方に。

「何が感謝だ！ 恩着せがましいな。不愉快だ。こちらから頼んだ覚えはない！」

「本当ならそんな口利きを平民が言おうものなら懲罰するところだぞ！ 今回だけは特別に許してやる。時間が惜しい。そろそろ用件に入ろうと思うがどうだ」

「それには全く同意する。こちららも無駄口など言いたくない。早く用件とやらを言って

くれ。どうせろくでもないことだろう」

「いいか、よく聞け。このカストロプ領星系に艦隊を用意させている。一言で言えばその統率と指揮をやってもらおう」

これは驚きだ！

アーサー・リンチにとっては意外な申し出である。

まあ自分は軍人なのだから、何かの警備に使うのかと思っていた。あるいは後ろめた  
い目的の強奪か、それに類するものを。

それが何と艦隊指揮だとは！

もちろん艦隊指揮官である自分に対する仕事としてそれが最もふさわしいともい  
える。が、事の経緯からすると帝国軍とは関係ない。更に言えば偉そうな貴族が持ち掛  
けているのだ。

ちよつと理解が及ばず、混乱するしかない。

だが、次の言葉にもつと驚くこととなる。

「その上でここにやってくる帝国艦隊を撃退してもらいたい。」

「何だ?!」

「ここはもちろん帝国領……そして帝国艦隊を撃退? どういう冗談だ。」

だが合理的結論はたった一つだ。

目の前の貴族が帝国艦隊、つまり帝国政府に弓を引くつもりなのか。

「なるほどな。無謀としか言いようがない。我が同盟軍でさえ勝てない帝国軍相手に戦うとは、よくもまあそこまで無知でいられたものだ」

口からは皮肉と真実の両方を兼ねた言葉が出てくる。

帝国軍と戦う!? こんな、帝国内の一領地が？

おまけにそんなもののために艦隊指揮など馬鹿馬鹿しい。帝国貴族のために同盟軍人が働けるものか。

「なぜ俺がそんなことをしなくてはならん。何の必然性も無い。俺は自由惑星同盟の艦隊指揮官であつて、帝国貴族の犬などなるものか。話すだけ無駄だぞ」

「くそツ、丁寧な言葉を使ってやれば増長しおつて！ アーサー・リンチ少将、言つておくれが貴様の方に選択肢などない。温情によつて命を助け、報酬もやろう。それで何が不足だと言うのだ？ 良いこと尽くしではないか！」

「今さら金だと？ 帝国貴族というものは尊大なだけではなく理解が遅いというのも初めて知つた。もう一度言つてほしいのか」

話が合うはずがない。そもそも自由惑星軍の敵とは帝国軍ではなく、それはただの盾

であり、内部の帝国主義者が敵なのだ。すなわち帝国貴族である。

「おのれ！ 何を言う。そんな口を利かせるために連れてきたのではないぞ！」

「帝国とその貴族を打倒するための自由惑星同盟軍だ。俺は今でもその一員であることが誇りだ。無駄足をさせた礼として親切に言つてやるが、そんな用件を任せたいならもつと志の低い者を当たるべきだろう」

二人の敵意ある視線が交錯する。

だがその一日後、熱心にカストロプ家艦隊の概要を把握しようとするアーサー・リンチの姿があつた。

思い直したのだ。

どうせ何をしてでも貴族の反乱などうまくいくわけはなく、潰される。

だったら協力してもいい。奇妙な立場であれ、帝国軍と戦うことになるのだ。それだけ間違いない。

であれば充分に意味がある。願つたりかたつたりではないか！

このまま捕虜収容所で生涯を朽ち果てさせても、何の甲斐もない。

他人に何を言われても、何を誤解されても構わない。金や命惜しさに魂を売つたと非難されてもいい。汚名など今さらどうということはない。



帝国軍と戦い、手傷を負わせられるならば他に理由など必要あるものか。自分が同盟軍の一員である証しはそこにだけ存在する。

貴族が用意してくれる舞台を使うのだ。

帝国軍と戦って、死に場所を得るために。

## 第四十話 487年 5月 動乱～逆撃～

一方、シムムデー中将の率いる帝国軍討伐艦隊は思いのほか妨害を受けず、順調に航行する。

進発から十日もしないうちにカストロプ領宙域に到達し、そのまま本領惑星を含む星系内に入るところまで来た。

戦力は充分という思いがあつたが、そこは訓練された軍人である。

貴族私領艦隊などとは違い、相手を侮ることはなく、どんな時も戦う気構えと作法を忘れることはない。

ここからは慎重な行動を取る。

先ずは偵察隊を出したが、そのほとんどが戻つてこない。おそらく索敵に引つ掛かり撃滅されたのだろう。これで分かるのはカストロプ家が軍事的な抵抗を試みるつもりであることだ。この討伐艦隊を震えながら待つだけではなく、立ち向かつてくる。

「ここに至つても恭順の姿勢がないとは…… 帝国艦隊と戦うことがどれほど無謀なことか、分からないのだろうか。一般兵たちが可哀想だ」

シムムーデには軍事的な実力差を知らないだけに思える。

「それはともかく問題は次にあるだろう。向こうは制宙権を奪われ、惑星上に艦隊が来られたら、結局のところ降伏するしかない。しかしこちらが降伏勧告をしたとしても、素直に従うだろうか。あくまで降伏にしなかつたらオーデインに連行するのが厄介だ。少しばかり気が重いな」

その懸念は大いにある。戦いの勝利を疑っていないが、問題はその次にある。

カストロプ家が潔く降伏してくればいいのだが、地上戦に及べばどうなるか。

むろん徹底抗戦する構えでいるのなら、帝国艦隊が包囲してただ待っているわけにもいかない。自給自足可能な豊かな惑星であれば、それこそ年単位で持久戦が可能である。

そして都合の悪いことにカストロプ本領惑星は商業惑星にもかかわらず鉱物資源も農業も一応の自立に不足はなかった。

仮に帝国軍を降下させ、地上戦に突入する事態になれば兵士の犠牲も決して少なくないだらう。

カストロプ家の兵士の練度や士気が高いとは思えない。

だが無理やり領民を動員することも考えられるのだ。脅しか洗脳という手段を使っ

て。

練度はともかく数で来られてはたまったものではない。

更に頭の痛いことに人質としてマリーンドルフ伯爵が捕らえられていることが既に判明している。状況の変化によっては切り札に使われる可能性が高い。

だがそんな時の対処法は教えられていない。

シムムーデはよほどミュッケンベルガー元帥に人質の扱いについて聞いてみようかと思つた。

だがそれを聞かれても元帥は困るだけだろう。まさか見殺しにせよとも明言できないが、かといつて絶対助けよと命じることもしかない。

人質が絶対優先かというところは違う。

例えばマクシミリアンが交渉中に帝室に対して不敬な言動をしたとしよう。人質がいようがいまいが帝国軍としては直ちに抹殺しなければならない。それは絶対だ。もしそれに躊躇してしまえば、こちらにも不敬に加担するのと同義になってしまう。

結果、人質のままマリーンドルフ伯爵が死ねば、伯爵は皇帝のために命を投げうつたという名誉が得られる。本人には何の意味もないだろうが。

とにかくつ今回の討伐に際してはそんな臨機応変さも要求されているのだ。

シムムーデはあまりマリーンドルフ伯爵に面識はないが、やはり人質のまま死ぬのは可

哀想だという思いから、できるだけ助けてやりたい。

そんなことを考えながらシムムーデ中將が通信のマイクをとり、正に降伏勧告を送ろうという時だった。

「艦隊発見！ 急速接近中、総数約一千隻！」

旗艦のオペレーターが緊張の声を上げた。

「何？ 戦闘配備を維持せよ。先ずはその艦隊の所属を問いただせ。それと近付く意図も」

こう言いながら、シムムーデはむしろ肩の荷が降りた感じがした。

艦隊戦なら望むところだ。

一応確認はするが、やはりカストロプ家は私領艦隊を使って抵抗を試みようとしてきた。私領艦隊風情が、しかもそんな数で何ができようか。

「通信に応答ありません！」

「やはりな。ではこの討伐艦隊の敵とみなす。イエローゾーンに入り次第砲撃開始せよ。先ずは威嚇だ」

ところが更に接近してきたではないか。威嚇射撃にも何ら恐れる様子がない。

「これは一体どうしたわけだ？ 戦いの結果は明らかだろうに…… 戦いの経験がないから逆に恐れを知らず、無謀なのか。あるいは、脅されて死んでこいとも言われているのか。家族を人質にされたらそれも有り得るな。可哀想だが、ただしこれで見せしめにはできる」

シムムーデは自分で納得した。

本当に艦隊決戦になってしまったが、それに応じて戦闘態勢を整えていく。

「接近され過ぎてはこちらにも被害が出るかもしれない。かすり傷でも負えば帝国軍の名折れだ。いったんシールドを強化しながら防御を固め、敵の砲撃を受け流したら直ちに反撃しろ。いくら命じられてのこととはいえ帝国軍と戦った罪は罪だ。皇帝陛下と喧嘩しているのと同じことだ。きれいに消滅させてやれ。もちろん、途中で降伏してくる艦は保護しろ」

シムムーデには余裕があった。

質において大差を付けているという自負に加えて、艦数でも三倍上回っている。どうやっても負ける要素が見つからない。

むしろこの戦いを利用することさえ考えていた。

「これは良いことかもしれない。鎧袖一触、目の前で私領艦隊が無様に敗北するのを見せつけてやればカストロプ家が降伏に応じる可能性がある。頼みの綱が断ち切られる心

理的打撃を与え、そのタイミングで降伏勧告すれば一番いい」

向こうの私領艦隊は整った斉射を二回行い、シムムーデの艦隊にほんのかすり傷を与えた。

だが何も慌てる必要はない。

「よし、全艦用意はいいか。撃ち返すと同時に突進、一気に撃滅しろ！」

向こうは帝国軍討伐艦隊の出方を伺うように静止していた。驚いていったん退くとも思っていたのか。

そこへ満を持しての反撃だ。質も量も圧倒的である。

私領艦隊は慌てて逃げに転じ、隊列も編成も何もなく、見る間に崩れている。

「予想はしていたが、無様な艦隊だな。最初の空元気はやはり見せかけか。このまま追い詰めていけ。しかし意外に逃げ足が速いな……」

「シムムーデ提督、敵私領艦隊は高速巡航艦ばかりの編成のようです」

「何だと？ それは妙だな。まさかたまたまそればかり買ってそろえていたのか。艦隊運用のことなど何も分からず数だけ揃えて。それも有り得るが……もちろん別に本隊が隠れている可能性も無くはない。素敵は充分にしておけ」

これが自由惑星同盟軍の艦隊相手であれば、シムムーデも深く考え、慎重な態度を

とつただろう。シユムーデも苦勞して階級を上げてきた実力ある将だ。

しかし、この時はしよせん貴族の私領艦隊だという思いが支配していた。

「本隊が隠れて待ち構えていたとしても、完全な不意打ちでなければ対処は容易だ。それにカストロプ家の私領艦隊はどんなにまとめても大した戦力ではない。全艦加速し、このまま立ち直らせることなく仕留めろ」

私領艦隊はばらばらに砕けながら、尚もカストロプ本領惑星の方に逃げて行く。それは思いの他早い。

死にも狂いなのだろう。それに本拠地に逃げようとするのは当然だ。

しかしこれはかえって好都合、討伐艦隊の力を間近で見せつけるためには。

かなりの速度のまま追撃を行いつつ、ついにその本領惑星が視認できるところに到達した。

「…… あれはいったい何だ？ 全艦隊、警戒を維持したまま速度落とせ」

そこで初めて、シユムーデもオペレーターも気付いた。

妙に大きな人工衛星が本領惑星の衛星軌道上にいくつも浮かんでいるではないか。しかも同じものが等間隔で惑星を取り囲んでいる。

気を効かせてオペレーターがもう解析を始め、わずかな時間の後で驚愕の声を上げ



る。

「軌道上の物体、ただの人工衛星ではありません。防空衛星です！ 軍用高性能反応炉と多数の砲が認められます！」

それを言い終わった瞬間だった。

シユムーデの艦隊はいきなり多数のエネルギー線に貫かれた。スクリーンで見てもその砲撃は威力に満ち、禍々しく、尋常なものではない。

「全艦最大戦速、直ちに散開！ 損害を報告しろ！」

思わぬ事態でもさすがにシユムーデ有能であり、素早く反応する。

しかし報告を聞いて青ざめる他ない。恐るべき損害だった。

そのエネルギー線はどんな艦のシールドも貫き、驚いたことに大型の戦艦ですら一撃であっけなく沈めた。近くをかすめただけでも損害を被る。そんな防御不能な砲撃が見える限りの衛星から同時に襲い掛かってきたのだ。

イゼルローンのトゥールハンマーと違うのはエネルギー線の半径だけだ。それはさすがに小さく、一度に何隻も沈められることはないが、あまり慰めにはならない。この場合は数がある分だけ砲撃は途切れることがなく、次々とその餌食にされるからだ。

「全艦、今はとにかく逃げろ！」

シムムーデは反撃しろとは言わない。

本当ならいくら犠牲を出しても衛星システムの攻撃と防御の能力を調べることが必要なかもしれない。帝国軍にとっては。

しかし、シムムーデはそんな自殺行為を部下に命じたりできなかつた。

みんな自分を信頼して命を預けてくれる部下なのである。

一人一人は人間であつて決して使い捨ての駒とは違う。

大事な命が宇宙に消えることが、戦死者の数字が一つ増えるだけのことは考えない。

人とはそんな薄っぺらい存在ではない！

人は数字として記載されるだけのために数十年の人生を重ねてきたのではないのだ。

「済まない。最初の逃走はおそらく見せかけだつた。それに乗せられてまんまとここにおびき寄せられたのだ。あんな軍事衛星は初めて見るが、カストロプ家が切り札にしていたのだろうか」

そしてシムムーデには次に来るものが分かっている。

軍事衛星でさんざん叩かれたこの討伐艦隊に止めを刺そうとするはずだ。

「旗艦は殿に残る。皆、この星系から脱出せよ」

予想通り、混乱の隙を突いてどこからともなく私領艦隊が忍び寄り、退路を断ちつつある。

シユムーデはなんとかそれを突破させ、先ほどとは攻守逆転した追撃戦を戦っている。そして自分の命を使ってその責任を取ろうとする。

この旗艦に攻撃が集中される。

その熾烈な砲火をシユムーデは長年の戦場の勘を頼りにかいくぐっていく。伊達に将官になったのではない。

だがそれだけではなかった。

シユムーデの思いをよそに旗艦を守って散っていく艦も決して少なくなかったのだ。

「シユムーデ提督をお守りしろ！ 我らがいるのは何のためか！」

「何、何をしているんだ！ 貴様ら早く逃げろというのが分かんのか！」

「いいえ提督こそ分かっておられませんか。長きに渡ってお供してきました。今まで多くの仲間が消えましたが、今は我らの番です。それだけのことです」

「馬鹿なことを言うな！ ここで終わりになどするなと言うのに！」

「ここまで生き永らえたのは全てシユムーデ提督の厚情を賜ったおかげ、提督の下にいられた幸運は言葉にもできません」

覚悟を決めた艦艇が次から次へと付き添って旗艦を守る。

そこに悲愴感はない。むしろ充実した気分にいる。

この死は意味があるのだ！

ためらいなどあるはずがない。

「馬鹿者どもが…… こつちの気持ちも分からんで……」

そんなことを思えた時間は長くなく、ついに旗艦へ直撃が相次ぐ。

爆散が至近であることを悟ったシユムーデは笑みを浮かべた。

「皇帝万歳、そんなこと言うものか。俺はこんな部下たちと共にいられたことを誇りに思う。そして、できたら、また一緒に……」

シユムーデ中将は戦死、艦隊はほぼ壊滅し、これによって帝国によるカストロプ家討伐作戦は失敗に終わった。

もちろん、これは動乱の序章に過ぎない。

第四十一話 487年 6月 動乱くヒルダ、その恐  
るべき戦略く

帝国軍討伐艦隊は壊滅し、カストロプ側の完勝だ。むろんその家本領惑星は無傷に終わっている。

「思った通りだった。いや、それ以上に凄まじい威力だな。やはりこの防衛衛星システムは役に立つ。帝国軍がもう少し大規模な艦隊でやってきた方が派手でよかつたろうに。たかが三千隻程度だったとは、少しばかり残念だ」

そう言つてマクシミリアン・フォン・カストロプが喜色満面だ。

惑星の守りが鉄壁だと知り、うってかわつて強気に出ている。防衛衛星の性能に多少の不安があつたが、もうすっかり払拭された。

「まあ、そつちもうまくやつてくれた。逃げるマネをしたただけだがな」

ここで特に意図もせず失言をした。

その言葉を受けたのはアーサー・リンチである。だが表情も変えず、無言のままである。

もちろんアーサー・リンチはマクシミリアンにおべんちやらを言うつもりなど欠片もない。しかし、逆に褒められる言葉を予期しているわけでもないのだ。ならばこんな嫌味を言われても今さらがっかりすることもない。

それに逃げる真似をしただけというのは事実だ。

戦いの帰趨を決める防衛衛星システムの性能は最初から分かっている。

アーサー・リンチの指揮する今回の作戦の要は、そのシステムの射程内に帝国艦隊を深く誘い込むことだった。それができなければ一気に損害を与えられず、撤退に追い込めない。

だがマクシミリアンは知りもしないが、艦隊戦において逃げる真似というのは簡単ではない。

付かず離れずの駆け引きを成功させ、食いつかせながら損害をできるだけ減らす。それには高度な艦隊行動をやり遂げる必要があった。それも錬度の低い艦隊がやれる技量の範囲内で。

勝利はその結果だ。

更には言えば、アーサー・リンチは最初からそれを可能とする編成にしていたのだ。フェザーンの艦隊の中から性能の揃った高速巡航艦を選び抜いていた。それが今回の作戦で動いた千隻だ。

多少練度が低くとも、同じ大きさと性能の艦ならば比較的乱れずに艦隊行動ができる。

ただしそれだけではなく、アーサー・リンチは本当に細かい配慮をしていたのだ。乗員の質や癖まで把握したうえで各艦を指揮し、破綻なく艦隊行動をやり切らせている。

アーサー・リンチとしてはマクシミリアンからの評価なんかどうでもいい。

褒められようが、けなされようが。

それより今はただ、帝国軍と戦ったという事実を噛みしめる。

自分の心中では自由惑星同盟軍の将として帝国軍を相手に戦い、勝った。

それでいい。それこそ、自分がこの世に存在する証しだ。

討伐艦隊を派遣した帝国軍中枢部は戦いの結果を知って大いに慌てた。

非情なことではあるが、それはシユムーデという人材を失ったことが原因ではない。

ましてや数十万人の兵の命のことではない。

帝国軍が貴族の私領艦隊に破れてしまったということが問題なのだ。

そんなことはあつてはならない！

元々帝国軍は叛徒と戦うために創られたものではなく、内乱の鎮圧のための装置である。それが目的果たせず敗北したとあつては権威は形無しだ。

もしもそのせいで帝国軍が貴族どもに侮られることがあれば、今後は抑止力にならず、長きに渡つて叛乱が頻発する恐れがある。

帝国軍には何としても権威が必要であるし、絶対に敗北は許されぬ。

間髪置かず討伐艦隊の第二陣が編成された。もちろん異例の早さだ。ニュースが広まり、貴族に帝国軍が侮られる前に決着を着ける必要がある。

今度は過剰戦力ともいふべき一万二千隻、一個艦隊にも迫ろうという規模を動員して向かわせた。

帝国軍中枢部は吉報を待つ。できるだけ早くそれが欲しい。

ところがそれは最悪の悲報となつて返つてきた！

二度目の討伐艦隊はまたしても敗北し、数を半分に減らして戻つてきたのだ。

「いったい、どうしたわけだ！ 先の戦いでカストロプ側は防空衛星のようなものと、戦艦が千隻程度で戦つたと聞いている。これに帝国軍の一個艦隊がなぜ負けねばならぬ！」

帝国軍上層部では軍務尚書エーレンベルク元帥とミュッケンベルガー元帥がすぐさ



ま戦いの推移を問いたです。

その詳細は驚くべきものだった！

先回のシミュレーテ討伐艦隊は相手がたつた千隻ということで、うかつに追撃し、結果衛星システムの射程内に誘い込まれた。初手なのでそれは仕方がない範疇だと言える。

ところが今回はそうではない。

防空衛星の存在を知らながら、何とその射程内に押し込められてしまったのだ！

カストロプ本領星系に入った帝国軍討伐艦隊はつい油断していた。

惑星上空に到達し、衛星システムと対峙してから本格的に戦いが始まると考えていた。カストロプ家はそれに縋っているのだろうし、それしか勝利の目がない。この一個艦隊に衛星の助力無しに挑むなど自殺行為だ。

予定としては邪魔を適当にあしらいつつ、工作艦でその衛星システムを処理する手筈だった。

遠距離から飽和攻撃を仕掛けつつ、それに紛れて工作艦多数で一つずつ衛星を囲み、ネットワークを断ち切る。そして専門家がコンピュータをハッキングして停止コードを割り出すのだ。

少しばかり時間はかかるかもしれないが、衛星の処理自体は可能だと踏んでいた。

だが予想外にも防衛衛星システムが見える前から切り裂くように敵襲があった。

それは選りすぐりの高速艦による突撃らしく、油断して後手に回った帝国の討伐艦隊はあっさり分断されてしまう。

「小癪な！ 相手はどうせ小勢だ。落ち着いて再合流すれば何ということはない」  
ここで驚くべきことが起きる。

分断された一方がいつのまにか囲まれていたではないか。

それも艦数にすれば五千隻もの数によって。

これで局所的に帝国側討伐艦隊の数の優位は失われてしまう。

しかもそのカストロプ側の五千隻は精緻な艦隊運動を見せ、逆に討伐艦隊は思うような艦列をとらせてもらえず、必死にもがくしかなかった。いくら艦が強力でも包囲されての十字砲火は凌げない。

もちろん討伐艦隊の分断されたもう一方は直ちに救援をはかる。

同士討ちをしない攻撃ポイントを選んで布陣し、カストロプ側の包囲網を崩して味方の窮地を救う。そうすれば確実に逆転勝利できるはずだ。

まさに斉射を掛けようという瞬間のことである。

救出をしようとした討伐艦隊の片割れへ敵襲が来た。

図つたようなタイミングで、しかも後背に着かれているとは。それも小型艦中心とはいえ五千隻という数で。

「しまった！ 救出位置を読まれていたか…… だがまたしても五千隻だと！ カストロプ家にはいつたいどれほどの兵力があるのか！」

討伐艦隊は一個艦隊規模、未だ総数で上回り、錬度も高い。

しかし態勢を崩された不利を覆すことができず、全てが後手に回る。反撃の糸口を掴めず、主導権を握られたまま対処するしかない。

最後の決着は帝国軍の側の悲鳴で終わった。

「エネルギー波急速接近、回避できません！」

いつの間にか衛星近辺に戦場を移動させられていたのだ！

気が付いた時にはもう遅い。大局的にそこまで押し込められていた。

満を持し、防衛衛星システムが思うさま狂暴なエネルギーを叩きつけてくる。

もはや討伐艦隊は四分五裂して逃げ惑う。当てられれば確実に沈められる、衛星からの砲撃はどうにも防げない。

衛星システムの威力によって恐慌をきたし、これほど無様に敗退すればカストロプ側にとって追撃は容易だ。

もはや一方的な狩りにしかならない。

こうして帝国の討伐艦隊は二度までも敗北を喫した。

アーサー・リンチがカストロプ家私領艦隊とフェザーン貸与艦隊の両方を駆使した結果である。

帝国軍中枢部はうめくばかりだ。

今回の戦いではつきりしたことがある。カストロプ家の持つ艦隊は決して弱兵ではない。それどころか確実に一線級の指揮官が存在し、帝国一線級の艦隊もかくやという戦術を駆使してみせる。

その指揮は常に討伐艦隊を上回り、全く見事という他なかった。

「これは侮れぬ。だがしかし、次こそは絶対に失敗してはならん」

帝国軍としてはこのまま負けっぱなしではいられない。

権威は形無しだ。

その失地を回復するためには、三回目の討伐で完全な勝利が必要であり、それ以外にはない。

もはや交渉の余地などない。絶対に軍事的に討伐しなくては収まらない。

仮に帝国政府の考えが弱気になったとしても、帝国軍五百年の歴史の重みを考えれば

それしかないのだ。

つまりマクシミリアンの思惑は完全に外れた。

帝国は講和に切り換えて済ませるほど弱腰ではなく、第三回目の討伐軍は質も量も圧倒するべくこれまででない大規模なものと決め、派遣の準備を始めた。

ところがこれは実現しない。

帝国軍が討伐艦隊を送れる事態ではなくなった。

マクシミリアンの策謀の結果、というより正確に言えばヒルダの献策による。

それはつまり、カストロプ家の名で帝国内の主要な貴族に宛てて、脅しを通達したゆえである。

「今回、帝国軍があることか叛乱討伐を謳って我が領地に侵攻してきたのは、もちろん何者かの陰謀の結果である。カストロプ家はその始まりから今も変わることなく帝室に忠誠を誓い、敬っているのが真実だ。ところがカストロプ家は無実であるにも関わらず陰謀を仕掛けられ、帝国政府に誤解されてしまい、討伐という事態となった。

正義はカストロプ家にある。仕掛けてきた犯人を決して赦さない。カストロプ家は疑わしい貴族家に我が艦隊を派遣し、復讐を成し遂げるであろう。その力があることは

戦つて帝国軍を破つたことで証明された。

潔白と思う貴族家はその私領艦隊を動かし、共に卑劣な犯人に鉄槌を下し、この騒動の決着に貢献すべし」

それはカストロプ家としての釈明を装いながら、決してそれだけではない。

二度までも帝国討伐艦隊に完勝したという事実に基づき、強力をアピールするものだ。

そして更には他の貴族家に脅しをかけている。カストロプ家はあくまで被害者であり、犯人を叩きに行く。

ヒルダからこの策を聞いたマクシミリアンは、当然ながら不思議に思った。

「ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ、そんな布告に何の意味がある。言葉を綺麗に連ねたところで、もはやカストロプ家が叛乱を起こしているという事実が変わるわらんぞ。どう言葉を使ったところで他の貴族が味方してくれるはずはない。第一、こちらは防衛に手一杯で他の貴族と事を構えたりはできない。それこそ自殺行為だ」

ヒルダは表情を変えず説明する。

「いいえ、実際に他の貴族を巻き込むものではありません。貴族を動揺させ、身構えさせるだけでいいのです。この脅しを聞けば、おそらく多くの貴族が万が一のためにそれぞれ

の私領艦隊の準備を始めるでしょう。カストロプ家が何か誤解してしまつて攻め寄せてきてはたまりませんから。それでいいのです。カストロプ家に備えさせるのが目的です」

「それはいったい何だ？　まるで逆ではないか！　貴族をわざわざこちらに対応させるとは、カストロプ家にとって不利になる」

ヒルダは分かりやすく言葉を足していく。

次第にその壮大な意図が明らかになり、マクシミリアンは足が震えてくる。

「ではお聞きしますが、帝国軍はいったい何のためにあるのでしょうか。それは不穏な貴族に対処し、反乱を防止するためです。何であれ貴族の私領艦隊が動きを見せれば、帝国軍は必ずそれに釘付けになります。各家の私領艦隊の意図がどこにあつても、帝国軍はそうせざるをえません。つまり、カストロプ家に対し敵であろうが味方であろうが、帝国中の貴族が騒ぐだけで、結果として帝国軍を動けなくさせてしまうのです。質はとにかく、数だけでいえば帝国軍よりも貴族私領艦隊の総数の方が多いのですから、帝国軍は手一杯になるでしょう」

舌を巻くしかない。

マクシミリアンの目の前にいる小娘は予想をはるかに超えた戦略家だった。帝国軍を手玉に取るのはこの者だ。

「ううむ、何と見事な策だろうか…… 文書一つでこれほどのことを成せるとは！」

それ以上の言葉も出せず、恐ろしいときえ思う。

ヒルデガルト・フォン・マリンドルフの策が冴え渡る。

ヒルダ自身はそんな自分に対して嫌気が差している。マクシミリアンに協力することもぞつとするほど不快なことだ。

しかし本当の理由はそんなことではない。

「自分はいったいなんなのだろう。策を出す、策略を練る、それが楽しいと思っている。どんなに否定しても自分は楽しんでる。戦いでは大勢の人間が傷つき、死んでいくのに私はそれを駒のように扱い、しかも心はゲームをするように弾んでいるとは。私はこんな人間だったのね」

自分の策で世の中が大きく動くのを見る、実はそれを望んでいたのか。

この動乱に巻き込まれることで自分の隠れた本性を知った思いだ。

ヒルダは悩むしかないのだ。

本当に心置きなく才能を発揮できる場に巡り合うまでは。

太陽のように輝き、その存在に絶対の忠誠と信頼をおける主君を見つけるまでは。



## 第四十二話 487年 6月 動乱く上に立つ器く

銀河の歴史は時に意外なつながりを見せる。

現在、帝国首都星オーデインにいる同盟工作員グラスノフは、帝国貴族の反乱騒ぎを耳にした。

むろん帝国は同盟と違つて自由な報道などあるはずはないし、まして帝国に不都合な情報は流れない。

だがグラスノフにとって情報統制は別に障壁はならない。

表向き弁務官秘書なのだから、誰はばからずその情報網を駆使できる立場である。

しかしよりによつて貴族の反乱とは……

仮にその情報が事実ならば、是非とも詳細を知りたいところだ。

首謀者は誰なのか、原因は何なのか、何を意図しているのか、どこまで燃え広がるのか…… これらは全て重大な政治動向であり、むろん同盟政府に伝えねばならない。

さてここからだ。

反乱が事実であることを確認できたが、その一段上の情報を得るためには工夫が要する。

詳しい情報を手に入れるためにはやはり情報網を作り上げる他にはない。

これまでも地道にそれを行なってきたが、ここにきてもう一步踏み込むべきだと考えた。

狙いは既につけてある。

ボーデン侯爵という名の人物がいる。今は宮内省高等参事官という地位にいたが、相当の野心家であり、次は尚書の地位を手に入れようと企んでいた。

今がそれを狙う好機でもある。

現在の宮廷尚書アイゼンフート伯爵はもう八十歳を超え、もはや引退していかないのが奇跡のようなものである。近いうちに替わるのは間違いなく、その時に次の宮廷尚書の座を勝ち取りたい。

ボーデン侯爵はその工作資金のために多額の金を要していた。

帝国の尚書は國務尚書や軍務尚書などの国政に携わる重要なものもあるが、そればかりではなく、尚書は尚書でも典札尚書や宮廷尚書のような誰でもできる程度のものである。帝国政府内でも比較的軽んじられ、それらはコネと金で買うことができる。

しかし尚書は尚書だ。この一角になれば末代までの誉れとなる。

それはグラスノフにとって都合がいい。今、帝国政府内に金を欲しがっている人物がいることは。

早速上司であるボルテック弁務官に計画を持ち掛ける。

「帝国の情報を手に入れるのに、非常に都合のいい人物がいます。多少金はかかりますがこの機会を逃す手はありません。これから長く使えることを考えれば」

「なるほどグラスノフ、面白い話だな。金のことは構わん、進めておけ」

一方のボルテックとすれば、自分がいない間にルビンスキーがフェザンにて盤石の政治体制を作り上げているのが癪にさわる。せめて弁務官事務所の経費くらい使い切つてやれ、という憂さ晴らしの意味があつた。それで情報のパイプが得られるのなら将来の布石にもなるというものだ。

こうしてボルテックの許可を得て計画を進めるグラスノフは笑いが止まらない。

フェザンの金を使って、同盟のために堂々と帝国内に情報網を作れるのだから。その工作活動は成功した。

ボーデン侯爵を通し、帝国政府内に流れる情報をようやく掴んだ。

それは驚くべき情報だった！

反乱を起こしたのは何とカストロプ家、帝国でも指折りの有力貴族だった。

原因までとはつかめず、私怨なのかイデオロギー的なものなのかは分からない。もちろん貴族なのだから民主主義を唱えてということとは絶対ない。

しかし情報の価値は次のことにこそある。

当然帝国軍が反乱討伐に向かったのだが、なんと二度までも撃退されてしまっていた

！

しかも未だに鎮圧がかなわないというのだ。そんなことが有り得るのか？ 帝国軍

相手に一貴族が？

おまけに、今や帝国の有力貴族がこぞって動きを見せているらしい。

帝国軍はそれらを見据えてただならぬ緊張状態にある。

帝国の大貴族の武力反乱、こんな大事件はそう滅多にあるものではない。歴史に載るほどのものであり、多くても数十年に一度であろう。それも普通ならば皇位継承争いに絡んだものである。政情不安定に乗じて政敵を追い詰め、結果的にそうなった例である。

だが今の帝国は中身が腐つていても外面では平和そのものだ。フリードリツヒ四世の治政は内務尚書リヒテンラーデの努力の甲斐もあって決して悪くはない。つまり貴族の反乱などあるはずがないのだ。

それなのに、私怨が原因とはいえクロプシユトツク侯によるテロがつい一年前に起きている。それなのにまたしても大貴族が反乱とは。

これは帝国の規律に何か変動がある兆しなのか、きちんと分析する必要がある。

グラズノフは一分一秒も早くこの情報を同盟首都ハイネセンに伝えたい。暗号化するのもどかしく、直ちにフェザーン経由でプレツェリに送付した。

グラズノフからの情報は無事に届き、直ちに同盟政府の最重要検討事項になる。

政府内の情報分析班が仕事を始め、その政治的潮流の変化や今後についての予想パターンを作りにかかる。

ところが、情報の持つ別の一面に鋭く着目した人物がいた！

同盟軍統合作戦本部長シトレ元帥である。

同盟で正にこの時期、この人物が相応しい地位についていたことは本当に幸運であった。

その慧眼が情報の真の価値を見抜いたのだ！ 政治的経済的ではなく、純粹軍事的意義について。

「これは、回廊へ仕掛けるのに大変な好機ではないかな、グリーンヒル君」

「まさに好機です。帝国軍にとつて内乱こそ最重要課題、今はイゼルローン要塞から目を離し、すぐに対応はできないでしょう。戦力的にも人材的にも」

「よし、決断すべき時だ」

現在の同盟軍トップとして、シトレ元帥は責務を果たそうとした。

千載一遇の好機、これを逃してはならない。

「グリーンヒル君、これまでの情報によると今イゼルローン要塞にいる帝国軍の司令官は二人いるが、指揮能力については凡庸との分析が出ていたと記憶している」

「しかもお互い不仲であるらしいとの話もあります。同格なだけにいつそうややこしいと」

「それも喜ばしい。帝国から援軍が望めない今であればいつそう間隙が突ける」

帝国軍は今イゼルローンに構ってられない。逆に同盟にとつてはイゼルローン要塞奪取は悲願なのだ。

「元帥、いよいよですか。しかし、リスクも多分にあり、最悪の場合同盟軍は最も将来性のある将を失うことになります」

「君は、反対かね」

「いいえそうではありません。一応指摘したままで、私は賛成です。準備は相応に進め

ています」

「これ以上のタイミングは望めない。同盟第十三艦隊に攻略を命じよう。ヤン・ウエンリー君には私が話す」

こうしてヤン・ウエンリーの同盟第十三艦隊にイゼルローン攻略の命令が発せられる。

シトレ元帥はタイミングと人材を大局的に判断した。

統合作戦本部長というのは直接戦いの現場に赴いて指揮に携わることではできない。しかし、同盟軍の作戦が成功するよう、大きなところで考えるのが仕事である。

その能力は他の地位にない高度なものが求められ、人の上に立つ者としての力が試される。シトレ元帥は充分にそれを持つ器だったのだ。

間もなくその結果が出た！

およそ近年にない衝撃が帝国を襲った。

想像もできないあり得るべからざるニュースである。

「イゼルローン要塞、陥落！ 叛徒のわずか半個艦隊が要塞を占拠、要塞駐留艦隊に甚大

な被害、艦隊司令官ゼークト大将戦死！」

帝国が莫大な国力を費やして作り上げた大要塞、それが丸ごと失われた。

しかも破壊されたのではなく叛徒の手に渡った。人員のほぼ全てが捕虜になるとい  
うおまけ付きである。

その意味するところは計り知れないほど大きなものだ。

もちろんイゼルローン要塞は主砲トウルハンマーの絶大な威力を持ち、攻撃力は申し分なく、その上分厚い液体金属装甲によって強固な防御力も兼ね備えている。

敵艦隊を一度に千隻も蒸発させ、核融合ミサイルの斉射にも耐える。絵に描いたような難攻不落の拠点である。

おまけに二万隻の艦隊の駐留機能、人員の宿泊、そして長期滞在を考慮した娯楽施設を持つ。艦隊への補給も可能である。

加えて要塞は巨大な工場という一面を持ち、極めて生産効率の良い工業惑星のようなものだ。原料はさすがに自給できないが数年分以上の備蓄があり、その価値も天文学的な数字になる。

帝国の国力の数十年分を費やしたこの要塞はありとあらゆる面で技術とコストの結晶だ。



そして話は戦力やコストのことだけではない。

戦略的に最も重要なことはイゼルローン回廊の支配権が移動したことである。

要塞は回廊中のほぼ中央、最も狭隘なところに位置しているのだ。要塞を持つ方が回廊通行の自由を得、持たざる方は事実上不可能になる。

この位置に要塞を建造する際、帝国軍は薄氷を踏む思いで同盟軍を退け続けた。

一時的に同盟領へ波状攻撃をかけて回廊に侵入を許さず、また大軍の出兵という偽情報を通して同盟をけむに巻いた。同盟はそれに踊らされ、慌てて回廊出口に縦深陣を敷いて待ち構えたが何にもならない。逆に帝国は要塞建造という本当の情報はしっかりと遮断した。

同盟はこの時痛恨の見逃しをしてしまったのだ。悔やんでも悔やみ切れない。

以来、同盟がイゼルローン回廊を突破することは夢物語となった。

幾度も攻防戦が繰り返された。

しかし、攻略はならない。要塞はその度ごとに跳ね返し、同盟軍に多大な出血を強いた。主要な会戦における損害比率は同盟側の方が明らかに高い。

それが同盟の国力停滞の原因の一つになっている。

ベテラン兵の補充、戦闘艦艇という超高度工業製品の生産は多大な重荷になる。それ

以前はとにもかくにも同盟の方が成長率では上回っていたはずなのに。

それもこれもイゼルローン回廊の支配権という戦術的キャスティングボードを帝国が握っていたからだ。

そして今より後、帝国と同盟は攻守ところを変えて対峙する。

イゼルローン要塞という絶対の拠り所の価値はどちらの側も余すところなく知っている。

帝国軍は今までイゼルローン要塞の力に甘んじ、その上に立つて戦略構想を組み立てていた。今、予想もしない事態に根本的な変更を迫られる。根底にあるのは今までのことが未来に通じるとは限らない不安だ。

この事態が知れると、帝国軍の一兵卒から上層部まで絶え間ない激論が戦わされ、どこでも二人三人集まれば議論の始まりになる。

すぐに奪還を考える者もいる。

帝国軍の中でも戦いたい将、武勲を立てて出世したいものはいるので。それらの者にとつては好機に映った。

今まで叛徒が攻め寄せてきた時に大規模な艦隊決戦が行なわれる。帝国から遠征する場合もなくはないが、イゼルローン要塞があるかぎりそれを利用するのが基本とな

る。

今後は困難な奪還作戦になり、好戦派にとつては活躍する機会が増えるだろう。

また純粋に皇帝に忠義を尽くす将も戦いを望んでいた。帝国の威信を守るため、イゼルローン要塞を取られたままにしておけない。

しかしながら多くの者は慎重な態度を取った。

イゼルローン要塞の防衛力を知っている以上、うかつに仕掛けてもうまくいかず、最悪奪還に失敗すればいっそう帝国の権威は失墜する。

ともあれ、それぞれの意見に共通して言えることはイゼルローン要塞こそ帝国維持の最重要であるということだ。

「エーレンベルク、これは断じて譲らんぞ！」

「リヒテンラーデよ、大きな声を出すな。もうお互い若くはないのだぞ。あの頃とは違う」

「誰も大声を出したくて出すのではないわ。はつきり言うておく。帝国軍は間違つておる！」

「ここでも激論が戦わされていた。

しかも帝国の中樞、この上なく重要な人物である二人が言い争っている。

国務尚書リヒテンラーデ侯が越権を承知で軍務尚書エーレンベルク元帥に面会してきたのだ。

リヒテンラーデ侯に付き添い、エルフリーデもまたその場に同席していた。そして目を見張る。滅多にないものを見ているからだ。

いつも皮肉っぽいがゆったりと話すリヒテンラーデ侯がこんな興奮した姿を見せている。

実はリヒテンラーデとエーレンベルク、この二人は古くからの盟友なのだ。

若い頃に知り合い、以来変わることなく友情は続いてきた。それぞれ文官と武官、道は二つに分かれたが共に能力を遺憾なく発揮した。

今は国務尚書と軍務尚書として帝国を支え続けている。

リヒテンラーデが今大声を出したのは、心許せる友が相手だからなのだろう。

ただし、その中身が重大なものであるのも確か、正に帝国の運命を左右することである。

## 第四十三話 487年 7月 動乱と確信と

國務尚書リヒテンラーデと軍務尚書エーレンベルクの議論は尚も続いている。

「儂はの、正しい順番で事に当たれと言うておるのじゃ！ エーレンベルク、よもや要塞の方を先にするのではあるまいな」

「何だリヒテンラーデ、そこまで言うなら答えてやろう。その通り、帝國軍はイゼルローン要塞を奪還する準備で忙しい。今ごちやごちや政府の世迷い言を聞いている暇はない！」

「事の軽重を間違えてはならんぞ、エーレンベルク！」

二人の立場の違いが、認識の違いを生んでいる。

それが判断の元になっている以上なかなか折り合いがつかない。

「お主の言いたいことは分かっているつもりだ。だがこれも知っておいてもらいたい。イゼルローン陥落というのはそんなに軽い物事ではないのだ。オーデインにいればそれは分からんだろう。こういう言い方をしてしまうのもどうかと思うが、イゼルローン

回廊で叛徒と戦ったことのある者でなければ分からん。奴らは狂信者なのだ」

「儂は確かにオーデインにしかおらん。むろんイゼルローン回廊に行ったこともなく、艦隊で戦うなど想像だにできん。じゃが叛徒どもが狂信者というのは分かつておるつもりじゃ。民主制などというたわけた思想を持ち、帝国に齒向かつて止まず、どこまでも帝国を攻撃する厄介な害虫じゃ。いずれ片付けねばならんとは儂も思うておる」

「イゼルローン要塞を陥としたことで奴らが調子付けばどのようなことになるか。その前には是非でも奪還せねばならん。これは国難なのだ。帝国そのものが吹っ飛んだらなんとしよう」

エーレンベルクはイゼルローン要塞の早期奪還こそ重要だと唱える。

軍部としては当たり前だろう。イゼルローン要塞の戦術的戦略的価値を充分に知っている。

しかも百五十年もの長きに渡って間帝国軍が戦ってきたのは叛徒相手であり、ここで取り返しのつかない失態をしでかすわけにはいかない。イゼルローン要塞を完全に掌握され、運用される前に奪還すべきなのはその通りだ。

リヒテンラーデもそれ自体に反論しているのではない。一定理解しつつも今はその時ではないと主張する。

「そうかもしれないがエーレンベルク、考えてみてくれんか。叛徒が今すぐオーデインに

攻めてくれるかを。儂の目にはそれより貴族どもの方が余程危険に映るのじゃ！」

「貴族など内輪のことはどうでもいい。リヒテンラーデ、どうせ奴らは腰抜けの集まりに過ぎん。帝国を引っくり返すことなどできるものか。国難はあくまで叛徒との戦いにある！」

「いやそうではない。この言い方も赦してもらいたいが、逆にお主こそ分かつておらん。それは当然かもしれない。オーデインの宮廷におらねば分らんこともあるのじゃ。貴族三千家を侮つてはならん。現にブラウンシユバイクやリツテンハイムすら艦隊を動かしたと聞いておる。他の貴族も好機と見て要らぬことをせんとも限らぬ」

内患と外憂、共に重視するポイントが違うのだ。

これでは平行線のまま議論が尽きない。

「リヒテンラーデ、悪いとは思いますが軍務尚書としては優先順位はやはりイゼルローン奪還だ」

「帝国にとつて帝室が大事ではないか。もう一度言うが、外から征服されずとも帝室を倒されれば帝国は終わりなのじゃ。一刻も早く貴族を鎮めねば危うい。遠くの叛徒よりも今は貴族が問題じゃ」

ただし、帝国のために我らはいる、この一点で二人は固くお互いを信じている。

友がそう言うのだ。最後はそれは信じるしかないではないか。

「そこまで言うならリヒテンラーデ、分かった。なんとかしようぞ。軍内部では誰も分かってくれんだろうが…… 説得が難航すれば、その時には軍務尚書を退くのと引き換えにすれば鎮められよう」

エーレンベルクは覚悟を示した。

進退を賭け、自分にとつても帝国にとつても重大な判断を下した。

「それほどの大それたときつと約束してくれるのだな、リヒテンラーデ」

「約束しよう。儂はそう思うておる。エーレンベルク、帝国のためなのじゃ。逆にもしも叛徒がオーディンに来ることがあれば、儂が盾となつて真つ先に散ると約束しようぞ」

一人の覚悟をもう一人がしっかりと受け止めた。

エーレンベルクは直ちに第三次カストロプ討伐を宣言した。

帝国軍の誰もが驚き、反対した。

こんな時に貴族相手に帝国艦隊を使うなど考えられず、エーレンベルク元帥は狂つたと言われた。

イゼルローン陥落の衝撃から現実逃避をする老いぼれとまで陰口を叩かれた。更に



は責任回避のためではないかと疑う声すらあった。

理解してくれる味方など誰もいない。それでも引退を確約することでなんとか押し通した。

先の席でリヒテンラーデはもう一つ、具体的な事をエーレンベルクに言っていた。

「儂に軍事のことは分からん。じゃが貴族のことは分かる。今回、貴族どもの動きを鎮めるのはたやすい。貴族というものは、根は臆病なのじゃ。一罰百戒、カストロプ家を潰せばたちまちおとなしくなろう。ブラウンシュバイクらの大貴族も武力など元から不得手じゃ。中心を潰せば事は済む」

正確に把握している。さすがに政略に冠絶するリヒテンラーデならではだ。

「しかしリヒテンラーデ、それも簡単にはいかん話だぞ。かなりの作戦が必要なことがこれまでの戦いで分かっている。厄介な防衛衛星システムがあるのに加え、妙に動きの良い私領艦隊もあるのだ。一個艦隊で破れた以上、今度はどれだけ動員すればよからうか」

「そこでじゃ、エーレンベルク、実はローエングラム元帥から儂のところへ推薦状が来ておるのだ。腹心の少将がいるらしいの。それでな、かの者であれば少数の艦隊でも確実にカストロプ討伐がかなうだろうと」

「何だそれは？ あの孺子の、そのまた家来が？ 一個艦隊でもできなかったことを少数でやれるだと」

「やらせてみてもよいではないか。軍部をそれで説得できはせんか」

「どのみち今は帝国軍から大艦隊を割くことはできない。それこそイゼルローン回廊方面が心配だ。」

「エーレンベルクは承知した。」

「分かった。リヒテンラーデ。カストロプ家討伐はその者にやらせてみよう」

「イゼルローン失陥で焦燥にかられる帝国軍、しかしこの時期に喜んでいる人物がいた。」

「もちろんラインハルトだ。」

「喜べ！ キルヒアイス。カストロプ討伐の話が通ったぞ。期待はしていなかったのだがな」

「先の推薦の話ですね。わたくしがカストロプ家討伐に行つてくるといふ。ラインハルト様、わざわざお膳立てありがとうございます」

「キルヒアイスは感情の波を表わしやすいラインハルトとは違い、涼しい表情を崩さな

い。

「もつといいニュースもあるぞ、キルヒアイス。預けられる艦はたったの三千隻だ！これはシユムムデーとやらがあっさり失敗したのと同数じゃないか。最高だな。この武勲でお前の昇進は間違いないだ！」

こう言つて本当にラインハルトが喜ぶ。キルヒアイスの昇進は我がことのように嬉しい。

「ラインハルト様、お忘れのようですが、お言葉の中にもし作戦が成功したら、というものが抜けているようです」

「こいつめ、そんな言葉が必要か？」

訂正する必要などあろうものか。

「成功するなという方がよっほど無茶だろう。お前には」

ここまで言われてはキルヒアイスとしても苦笑するばかりだ。

ラインハルトはキルヒアイスが艦隊指揮をすることに万に一つの心配もしていない。「お前がやるのならむしろ三千隻も要らないな。いや、あまり戦果が華々しいとかえつてやつかまれる。それぐらいが丁度良いのか。過ぎたるは及ばざるが如し、だからな」

こう言つたラインハルトは褒めてもらえるつもりだ。

周りの事も一応考えたように言つたのだから。

「大人になりました、ラインハルト様。そんな言葉を言われるとは」

二人は無邪気に笑っている。

ラインハルトは終生の友としてキルヒアイスを認識している。別に副官でも秘書でもなく友だ。初めて会ったその日から。

しかし、二人とも軍にいる以上、公式には友という立場は存在しえない。何らかの地位が必要なのだ。

キルヒアイスは未だ少将の一人に過ぎない。

将官といえど、膨大な人員がいる帝国軍では掃いて捨てるほどの地位である。

それに対し、ラインハルトは今や指折り数えるほどしかない帝国元帥である。その信頼する副官が少将ではとても格好がつかない。上級大将、せいぜい大将くらいでなければ側近とは呼べないのだ。

実害も生じてしまう。幕僚内にまだ総参謀長は設定されていないが、しかしいずれは設けなくてはならない。その時にもしキルヒアイスがそれ以下の地位でしかなければ、副官といえどもラインハルトに直接の意見はできなくなってしまうのだ。意見具申は階級が上の総参謀長を通さなければ越権行為に当たる。

ラインハルトはどうかしてキルヒアイスを昇進させる必要があった。

もちろんラインハルトにとってキルヒアイスが親友兼副官なのは絶対的決定事項なのだから。

悠長なことをせずキルヒアイスの昇進を成し遂げるには、やはり武勲を立てさせるしかない。今回のカストロプ動乱はラインハルトの目には格好の機会に映った。

「それと老人にも感謝せねばな。あの老人は頑固だが私心はない」

キルヒアイスを推挙しようとするラインハルトと、カストロプ家の反乱を一刻も早く鎮めようとする国務尚書リヒテンラーデ侯は利害が一致した。結果キルヒアイスに活躍の場を与える支援をしてくれたのだ。この繋がりには後に別の形で生きてくることになる。

「そうですね、ラインハルト様」

「それにしても貴族の反乱なんかの討伐を失敗するとは帝国軍も不甲斐ないな。しかも二回もだ。だがこれで都合がいい。キルヒアイスを昇進させる舞台が整った」

ここでラインハルトが更に茶目っ気のある顔を見せた。

「本当ならもつといい昇進の機会があつたぞ。イゼルローン要塞の奪還だ。だがキルヒアイス、それはお前には譲らん。俺がやってみせる」

「それは良いでしょう。ではわたくしは、ラインハルト様が失敗した後で試すことにい

たします」

むろん冗談だ。

第一、イゼルローン奪還などの大作戦でラインハルトがキルヒアイスを伴わないはずがない。

こんな壮大な冗談が言えるほど、二人の未来は晴れやかであり、先に続く道はどこまでも伸びている。

# 第四十四話 487年 7月 動乱く自分だけの同盟艦隊く

今の帝国軍はイゼルローン要塞失陥という未曾有の事態、貴族の反乱などに割ける艦隊は無い、という空気が流れる。

そこをエーレンベルク軍務尚書が強行するので第三次討伐艦隊には三千隻しか与えられなかったのだが、それをキルヒアイスは綺麗に統率して進む。

途中、キルヒアイスはその帝国軍の二度にわたる討伐失敗の記録を詳細に調べている。

「これはなかなかのもですね。今の帝国軍の将官級と比べても上回るかもしれません」

カストロプ家艦隊にいる敵司令官の能力と戦術について思索する。  
あくまでも穏やかに、理知的な瞳を持って。

討伐艦隊の出立をいち早くマクシミリアンが察知した。

実はこれもまたヒルダの献策のゆえだった。情報の重要性を知るヒルダは、オーディンから情報を得る策をいくつか考え、実践させていた。

目を付けたルートは何と女学校つながりだ！

口の堅い者でも、つい家族には話してしまうものである。そして女学校にいるような若い娘はいつでも噂のネタを探しているものであり、どんな些細なことも直ぐに話に出してしまう。

それを用いればたいがい情報は手に入る。まして軍の情報なら貴族子弟が士官として乗り込む者も少なくなく、それを家族が知らないはずはない。

こうして得た情報を聞いてもマクシミリアンは嘲笑うばかりだ。

「性懲りもなくまた来たのか。帝国軍の中には諦めの悪い者がいるものだ。また返り討ちにしてくれる」

余裕の態度を示している。

これが数個艦隊規模なら冷や汗が流れてもおかしくないが、そうではなく、わずか三千隻であることが同時に判明しているからだ。

「ただの自殺志願の集まりなのか……いや、そうではないかもしれない。帝国軍は討伐のポーズを作りつつ、軍内の厄介者を片付けようとしているのか。恰好の機会として。もしそうなら俺を食えぬ使い方してくれたものだ」



マクシミリアンが最大限自分に有利であり、かつ的外れな推測をする。実際のところ数年前ならそれも正しかったかもしれないのが帝国軍の救いがたいところだ。

ここに冷や水を掛ける者がいる。いつの間にか横にいたアーサー・リンチだ。

「そうではなく、むしろ逆だ。今度は心してかかった方がいい。今度の討伐艦隊は決して弱くない」

この頃までには、アーサー・リンチはカストロプ領内外の航路に探査機を多数設置していたので詳細が分かる。

討伐艦隊の様子を一瞥しただけで並以上に優れた統率が取れているのが分かるのだ。最初のシムムーデ艦隊も決して無能ではなかったが、今度はそれを遥かに凌ぐ有能な将が率いている。ならば今度の三千隻という小規模であるのが不気味である。よほどの勝算があるのか。だとしたらその根拠は何だ。

「こちら側の戦力を全て呼び戻してくれ。今直ぐに。全戦力を集中させ、三度目の討伐艦隊に当たりたい」

何を、というのは自明のことだった。

マクシミリアンはこの少し前に艦隊の半数を割き、隣接するマリーンドルフ領へ進軍させていた。

さすがにマリーンドルフ領ともなれば一応はヒルダにも相談している。

「お前の策を完全にしたいためだ。実際にカストロプ家の私領艦隊が他の貴族に向かうのを明らかにすれば、貴族たちはこぞって今より大騒ぎするだろう。カストロプ家が実力行使するのを見せつけることが、混乱をもっと深める何よりの手段になる」

もちろんヒルダにはこの手は決して愉快なはずはない。こんな下らない反乱にマリーンドルフ領の人々を巻き込みたくない。

だが結局了承せざるを得なかった。

考え方によっては、最悪ではないとも言えるからだ。

もっと悪辣なのは、ヒルダかフランツ伯が領主として自領に向かいカストロプ家の反乱に手を貸せと命令させられることである。それよりはずっとマシである。

そしてカストロプ家私領艦隊は難なくマリーンドルフ領に到着し、そこにある産物を押さえている。

その様子を見て周囲の貴族領主も怯えてご機嫌伺いに来る始末、ここはマクシミリアンの思った通りに事は進む。

ここに至り、カストロプ家の叛乱が大乱になる兆しを見せてきた。

仮に周囲の貴族領を屈服させ、それらが所持している私領艦隊を接収していけば雪だるま式に戦力も増える。

この時期に帝国軍がイゼルローン要塞を失ったことはマクシミリアンにとって正に天祐だ。

おまけにこの軍事行動をヒルダや周囲には策略としてそう言ったのだが、マクシミリアンの本心は別のところにあった。

マリィンドルフ領は資源や自然条件はあまり良くなくとも、そこそこ繁栄している。それは歴代の伯爵家が善政を行なってきたためだ。もちろんそれに見合っただけの人口もいる。

手つかずのマリィンドルフ領には美人も多くいるだろう。

それを大量に捕らえてここへ連れてくる、それが目的だった！

ヒルダは、どうせマクシミリアンはマリィンドルフ領にある富を狙い、火事場泥棒のようなことをすると理解している。

しかし実際はもつと酷いことだった。

マクシミリアンのどす黒い心は、密かな愉しみの皮算用を始めている。

捕らえてきた娘たちは、怯え、驚き、やがて恐怖に屈服し諦める。その様を思う存分愉しむ。

それこそマクシミリアンが反乱を起こした目的そのものであり、美味しい果実なのだ。

しかし一人だけそんな魂胆を見抜いている者がいた。

エリザベートには兄マクシミリアンの心根など透けて見える。

そんな愉しみを実践させてはならない。これ以上被害者を増やしてはならない！

策謀をマクシミリアンと共に図っているヒルダはまだ若く、たぶんそこまで分かっているのだ。

エリザベートは思い余って、ただ一人相談できそうな相手に話を持ち掛けていた。

その相手とはアーサー・リンチであり、密かに話す。

「兄はまた恐ろしいことを考えています。今度はマリーンドルフ領の人たちが危険です。艦隊司令に訴えるのも筋違いなことですが、話せる人が他にいないのです」

これはアーサー・リンチにとっても驚くばかりだ。

帝国貴族は平民を虐げ、搾取するものと思っていたが、直接暴力を振るって愉しむことまでするとは。

「そこまで酷いことが…… 帝国の貴族は歪み切っている。帝国に生まれた領民は災難だな」

「何とか止められる方法はありますか？」

「悲劇が起こるというのなら見過ごしたくはない。だが、どのみち帝国内部の話ではないか？ 貴族も領民も帝国の者、ならば俺には関係ないな。俺としては帝国艦隊と戦えればいいだけだ」

人としてそういう悲劇は防ぎたいのは山々だ。しかし領民といえども帝国人であり、そこから将兵を出して同盟と戦うことを考えれば気分は複雑になる。

しかし、ここで突然アーサー・リンチの心が動く。

胸に鋭い痛みが走る。

帝国の領民とは、つまりは一般市民と言い換えることができる。

かつて自分はエル・ファシルの一般市民を守ることができなかつたから、汚名を着ることになったのではないか。帝国の捕虜になったのはおまけのことだ。

エリザベートの言う領民を救うことは、単なる自己満足、偽善に過ぎないのだろうか？

いや、そうではない！

帝国と同盟の違いは問題ではない。

場所は変われど悲劇に見舞われる力なき民衆という点では変わらない。

今度は救わねばならない。マリンドルフ領の民衆を。

かつてエル・ファシルの市民を置き去りにした汚名を濯げはしないとしても。誰にも理解されない贖罪だったとしても。

自分は、心に誓ってそうしなくてはならないのだ。

アーサー・リンチは決断した。

先ずはマリンドルフ領へ派遣されていた艦隊へ連絡を通達する。

暴力を振るったりできないよう、艦隊は決して地上への降下を許さない。

ただこれには反発する艦も多々いたのだ。

ここまで来て略奪と暴力を許されないことが不満なのである。マクシミリアンならずとも暴力を楽しめると期待している者は多くいたのだ。こつそり降下しようとする艦が引きも切らない。

アーサー・リンチはそんな艦は問答無用で討ち果たすようにも通達していた。そぶりを見せただけでも容赦してはならないと。

もちろん自分もすぐさま高速艦で向かった。

命令を徹底させるため自らが砲撃して見せた。

結果、なんとか軍規は保たれ、マリンドルフ領の民衆は不安に怯えながらも実害を被ることはなかった。

アーサー・リンチはカストロプ領に戻り、しかし顛末の報告はしていない。

だが直ぐに知られることだ。

制宙権を確保するにとどめ、地上戦を演じなければ兵を損じないという理屈を述べるつもりだった。

当然その詭弁は通じるはずがなく、マクシミリアンの不興を買う。物も人も得たいマクシミリアンがアーサー・リンチの越権行為に納得するとは思われない。

おそらく激昂するだろう。その後はどうなるか分からない。

だが、非常にタイミングよく三回目の討伐艦隊が来てくれた！

このおかげで名分が立つ。

アーサー・リンチは艦隊を集中させることを進言できた。もちろん、今度の討伐艦隊が並みのものではないというのは本音である。

マクシミリアンは渋々であるが、アーサー・リンチの言葉に同意した。

マリンドルフ領の占領作戦は中止とし、艦隊を呼び戻して再び一本化する。

だが、心の内では何を大げさな、とアーサー・リンチに向かい舌打ちした。

迎撃を万全にするためとはいえ、たかが三千隻程度の討伐艦隊にそこまで慎重になることはないだろう。

まあ、今だけは言うことも聞いてやらねばならないか…… アーサー・リンチは任せられる唯一の艦隊司令官なのだから、つまらぬことで諍いを起こすことはない。

だが、用済みになれば必ず肅清してやる！

忠誠心どころかこんな仏頂面しか見せない部下など必要ない。その時泣き顔に変わるのを見てやりたい。功績を言い立てても無視してやれ。

マリーンドルフ領の占領は少し遅れても必ず行う。愉しみが少し先に延びただけのことだ。

マクシミリアンが心中はどうであれ艦隊を集中させることに同意し、それをアーサー・リンチはさつそくエリザベートに伝える。

エリザベートも心底安心して礼を述べる。そこへ巧まずして一つの言葉を加えている。

それはアーサー・リンチにとってこの上もなく重い意味を持つ言葉だったのだ。

聞いた瞬間、アーサー・リンチの心に安らぎが戻った！



何年も何年も苦しんでいた痛みが取り払われた。

「ありがとうございませす艦隊司令官。一つの惑星の住民たちが守られました」

「住民が、守られた……」

「そうです。すべてあなた様のおかげです」

アーサー・リンチは本当の意味で前を向く。

今こそ完全に集中できる。

来るべき戦いに向け、心置きなく闘志を燃やす。

帝国軍よ、早く来い。全身全霊をかけて戦いに臨んでやる。

戦いは間近い。

精査すると今度の討伐艦隊は真つすぐカストロプ本領惑星を目指して進んでいる。

その様子を見たアーサー・リンチは安心が半分、腑に落ちないことが半分だ。

「必ず奇策を講じてくると思っていた。別働隊を駆使して回り込ませるなどの策を使つて。それなのにただ直進してくるとはどういうことか。よし、そうなら打つ手は一つだ」

アーサー・リンチは堂々の布陣を組み、待ち受ける。

今、戦力になりそうな艦のほとんどを宇宙に上げてまとめ上げた。相変わらず老朽艦が多くを占めるとはいえその総数一万三千隻にも及ぶ。

「これは一個艦隊以上だな。初めにこの数を案山子に使い、怯えさせるのだ。相手が慎重姿勢になったところで押し包む。防衛衛星システムとの間に挟めば半包围でも充分になる。それで終わりだ」

ふいにアーサー・リンチは乾いた笑いを漏らす。

かすかに自嘲の入った笑いだ。

「二個艦隊の指揮、か。同盟軍なら中将のすることだ。俺も出世したものだ。帝国貴族の艦隊で中将の仕事とはな。こんな下らない運命なのか、俺は。グリーンヒル大将が知ったら何と言うだろう」

懐かしい同盟軍を思い出すが、同時に皮肉な運命を笑うしかない。自分の数少ない理解者であったグリーンヒル大将の顔を思い浮かべても今は何の意味もない。

「俺が指揮するのは帝国貴族の艦隊じゃない。自由惑星同盟の第十三艦隊だ。いや、ヤンがいるのが第十三艦隊だったか。ならばこれは第十四艦隊だな」

これこそ本望だ。

帝国艦隊と戦う。見かけはどうあれ、今は自分こそが同盟軍ではないか。

「行くか。帝国軍と戦うために行く。俺だけの同盟第十四艦隊だ！」

## 第四十五話 487年 7月 動乱～物静かな提督～

一方の帝国軍討伐艦隊である。

それはキルヒアイスを司令官としているが、将官級はもちろん一人ではない。

配下にはベルゲングリューン准将とビューロー准将が参謀としてついている。もちろん二人のどちらもラインハルトの艦隊でキルヒアイスと共にいたことがある。

その時、実際にキルヒアイスがラインハルトへ極めて有用な助言をする姿を一度ならず見ていた。

だが、そんな二人でもキルヒアイス自身が艦隊指揮を執るのを見るのは初めてだ。

キルヒアイスは今回、艦隊の最高司令官であり、ラインハルトの副官という立場ではない。司令官としてのどの程度の力量があるのか分かりようがないのだ。

年齢ももちろんラインハルトと同じ若さである。

ラインハルトという傑出した者の例を見ている、それは特別なことであり、普通には若さは未熟ということと同義である。

司令官の艦隊指揮能力が未知数で、しかもわずか三千隻という少ない戦力での作戦と

なれば不安が残るのは仕方がない。

この二人は決して言葉にも態度にもそれを表すことはない。だが、末端の兵になればどうだろう。

しかし驚くべきことに不満が噴出することはなかった。動揺も最小限だ。

キルヒアイスの態度はいつも物静かで紳士的である。

ただ勇猛なだけの艦隊司令が多い帝国軍内では特異な存在だ。無思慮で粗暴な者とは一線を画す。

キルヒアイスは自然と皆に尊敬を抱かせるには充分だったのである。

ついにキルヒアイスとアーサー・リンチ、二つの艦隊が対峙する！

ここに至つてさすがにビュローもベルゲングリューンも慌てていた。

「キルヒアイス閣下！ カストロプ私領艦隊は総数一万を遥かに超え、予想以上の大艦隊です！ これでは正面決戦はとて無理かと」「いったん撤退し、様子を見ながら隙をうかがうべきでしょう。早めの離脱を進言いたします」

目の前のスクリーンに映る大艦隊をキルヒアイスも見ている。

二人の進言を聞いても穏やかな表情を変えることはない。

「いいえ、進行を続けて下さい。この陣形で予定通り戦闘を行いません」

これに周囲は驚くばかりだ。これには同じ進言を繰り返すしかない。

「閣下！　ともかく相手は我が方の五倍近く、戦闘になるかどうか。もし包囲されれば一方的に殲滅される危険性があります！」

「小官も同じ意見です。戦力比があります。司令官閣下、何か策をお考えでしょうか。もしそうなら明かしていただければ小官も皆も安心できますが」

皆は、おそらくキルヒアイスに秘策があるだろうと思っている。

これほど冷静な司令官なのだ。自信のある策がきつと存在するのだろう。しかしそうであっても不安なものは不安であり、早いところ聞かせてほしい。

だが、キルヒアイスの答えは驚くべきものだった。

「策でしょうか。いえ、特別にそんなものはありません。敢えて言えばもう終わっています。この艦隊が三千隻という少数であること自体が策なのですから」

どうということなのか。皆には意味が分からず、啞然とする。

キルヒアイスの方はいつとき夢想してしまった。

この場にラインハルト様がいなければ言うことは決まっている。瞬時に意図を見抜いただろう。

「こいつめ、やっぱりそうするか。もちろんお前のことだ、味方の犠牲が一番少なくて済

む方法を選んだのだな」

そう言つて笑つただらうに。

「敵艦隊接近中！ 推定接触時間、あと一時間！」

ここでキルヒアイスは少しばかり動きを見せた。

「そろそろですね。このリストにある艦を前面に出して下さい。他の艦はその後ろに付くように」

いつの間にか作つてあつたりリストを出してきたではないか。

見ると、それは五百隻ほどの艦の名が記されている。

ベルゲングリユーンもビューローも無能ではなく、それが高速に動ける艦ばかりのリストだということを見て取る。

そして詳しく見るほど驚かされてしまう。損傷、経歴、練度などを丁寧に勘案した後が分かるのだ。それだけでも優れた分析力が伺える。この三千隻の中でこれ以上なく的確に選抜されている。

「それらとこの旗艦は先行します。ビューロー准将、ベルゲングリユーン准将は後方に残る艦隊の指揮をお任せします。よつて速やかに旗艦から移乗して下さい」

「お待ちください閣下！ 閣下が先頭に出て戦うのですか？」

「その通りです。お二人への戦闘指示としては、先行する私の状況を見ながら、思うタイミングと方法で戦いに参加して下さい。以上です」

「そんな、あまりに危険過ぎます。むしろ我らが前に出て、閣下が後方より指揮をお執り下さい！」

「お二方の心配してくれるお気持ちは嬉しく思います。ですが、ここは従って下さい。適宜対応をお願いします」

キルヒアイスは自分が先頭に立って戦いに臨む。

今までベルゲングリーンとビューローは若干の誤解をしていたことを痛切に感じる。このキルヒアイスという提督は穏やかで優しいだけの提督ではないのだ。

もちろん無謀な猛将だということはあり得ないが、少なくとも臆病とは無縁であり、度胸も充分にあることが分かった。そしてその結果はこれから出る。

「イエローゾーン突入！」

「私と、選抜した艦は直ちに進発、最大戦速まで増速しそのまま突入して下さい。今ならば相手の照準に捉えられることはありません」

キルヒアイスの言う通りだった。狙い撃ちにされる前に敵陣へ突入できた。損害らしい損害はない。



敵カストロプ私領艦隊は、つつきりこちらが防御のために固く陣を構えると思つていたのでろう。そのわずかの隙を突いたのだ。

そして肉薄してしまえばますます照準に捉えられることはなくなる。

普通ならば近付くほどの的は大きくなり当てやすいものだが、この場合は違い、むしろ逆だ。近付くほど動きも大きく、また迫つて見えるため、練度が低いとかえつて当て難い。慌てれば慌てるほど練度の低さが露呈し、有効な砲撃にならなくなる。

後方からその様子を見ていたビュローとベルゲングリーンは、司令官キルヒアイスが無事に突撃を敢行したのを見届けた。

「司令官にはこのことが分かつていたのか…… 相手は練度が極端に低い。弾幕を作つて撃ち合うのではなく、そこを突く。下手に防御陣を敷いて迎撃するよりも、なるほど突撃の方が理にかなっている」

しかし、その驚きは直ぐに塗り替えられることになる。

突入したキルヒアイスが驚異的な艦隊運動を見せていったのだ！

まるで一体化した艦運動が、損害を受けることなく次々と相手に出血を強いていく。それは見事な統率力と判断力ではないか。長く軍にいるビュローとベルゲングリーンもこれほど素晴らしい突進攻撃は見たことがない。

やがてカストロプ側艦隊は耐えられず綻びを見せた。

「今だ、こちらも突撃！」

ビュローローとベルゲングリユーンが同時に同じことを言う。ここで艦列の亀裂を見逃すほど二人は無能ではない。タイミング良く攻勢を一気に強めた。

勝機を掴んだ。

さんざん翻弄し、カストロプ側を叩くことができたが、しかし止めを刺すことはできなかった。

決定的な場面に至る前にカストロプ側が撤退したからである。

敗勢になると無理をすることなく、早めの退却を決断している。

帝国側討伐艦隊もそれらを深追いしない。

補給などの地の利は向こう側にあり、まだ長駆して賭けに出る時ではないと判断している。いったん陣形を取り直す方が先だ。

「閣下、見事な突撃でした」

「小官もそう思います。あれほど素晴らしいものは見たことがありません！」

艦隊戦の興奮冷めらやぬビュローローとベルゲングリユーンが合流を終えたキルヒア

イスにそう言う。

もはや最初に抱いていた疑問はない。

キルヒアイスの指揮能力は立証された！ それもかつてない高いレベルで。

この一度の勝利でしつかりと将兵の心を掴むことができたのだ。

しかし、キルヒアイスは穏やかに微笑むばかりであり、いつもと何も変わらず、興奮した様子も見えない。

「いいえ、決定的な瓦解に持ち込むことはできませんでしたね。相手はきちんとした判断力を持つ将と見えます。早めに撤退し、次の戦いのために温存するのはとてもいい判断だったでしょう」

「ですが閣下、わずか三千隻の我らが一万四千隻に完勝したのです。閣下の戦術のおかげで」

キルヒアイスは艦隊司令官とは思えない優しい言い方でありながら、ここで一つ厳しいことを言った。

「ビューロー准将、ベルゲングリユーン准将、わたくしに対して過ぎた程の賛辞がありますがとうございます。ですが、お二方に申し上げておきます。今回、突撃のことなどは語る程のことではありません。見るべきところは別にあります」

それは二人には意外な言葉だった。あの見事な突撃はさほどでないことと言うのか

?

「閣下、それは何なのでしよう。正直申し上げますが、分かりません。ご教示頂きたく存じます」

「ではお話しします。最初に私たちは三千隻で単純に直進し、分隊や伏兵を設けないことをあからさまに示しました。これは相手ができるだけ大艦隊を作るように誘導するためののです」

「わざわざ大艦隊を作らせる、それはいったい……」

「もしも伏兵の疑いなどがあれば、慎重に艦隊を分けることもあつたでしょう。それをさせず、艦数で一気に圧倒することができると相手に思わせるためでした」

「閣下、ではわざと作らせた大艦隊、だからこそ」

「ここまで聞いて分かってきた。」

ビューローにもベルゲングリユーンにもやつと理解が追い付いてくる。

キルヒアイスはもはや戦闘が始まる前に勝っていたのだ。初めから勝利は確定していた。

「そうです。そして大艦隊にすればするほど、艦の性能も練度も混在してきます。敵の司令官が有能でも図体が大きければ鈍くなり、対処が送れます。また、艦列の濃淡を見れば突撃を行なうのもたやすく、そして敢行すれば綻びを見せるのは当然でした」

想像した以上に素晴らしい司令官だった。わざと敵に圧倒させ、だからこそ勝つたのだ。

ここで不意にキルヒアイスが少しばかり笑った。ビューローもベルゲングリューンも戸惑う。

キルヒアイスはラインハルトならば当然言ったであろうことを思い描いてしまったのだ。考えるまでもなく心に浮かんでくる。

「キルヒアイス、部下に親切なのはお前の美点だが、少々過ぎているのではないか。お前も苦労性だな」

笑いを収め、キルヒアイスは二人に向かって最後に告げる。

「お二方とも勉強して下さい。あなた方の総司令、ローエングラム元帥は戦術でも戦略でもこんなものではありませんから」

一方、こちらはカストロプ側である。

帰還してきたアーサー・リンチは早速罵倒の声を浴びせられることになる。

「どういうことだ！ 数であれば優っておいて、一方的にやられるばかりだったでは

ないか。無様にも程がある。この役立たずめ、何か言い訳を言いたいなら言ってみる！

マクシミリアンが戦いの結果を見てそう言ってくるのは完全に予想の範囲内だ。

罵倒されているアーサー・リンチとしては表情を変える必要も覚えな。ましてや這いつくばって謝罪することもない。

「負けたことについては、確かに俺の責任だ。戦術で敗北したのだから弁明の言葉もない。今回の帝国軍は今までとはまるで違う強さだ。おそらく優れた将が率いている。しかし、今さら何を言っても言い訳だ」

そう言われるとマクシミリアンも銚を収めざるを得ない。

平伏して謝罪するのを見たい気持ちは山々だが、他に艦隊指揮官がない以上、任せ続ける他はないからだ。

特に今回の帝国艦隊が強いとなれば、下手に司令官を代えるのは悪手であるとマクシミリアンにも分かつている。

「ふん、責任は分かっているようだ。充分に反省しておけ。それはともかく、次は勝つんだらうな」

「そのつもりで戦う。当たり前だ」

この時ばかりはアーサー・リンチも眼光が鋭くなる。

帝国軍の優れた将、名は分からないが相手にとって不足はない。二度目も負けてなるものか！

自分は自由惑星同盟軍の将として思う存分戦ってみせる。

こんな二人の様子を陰から伺っている者がいた。

エリザベートだ。

今回の帝国軍は強い、だったら動くにはチャンスではないか。エリザベートは心を決め、ヒルダにこっそり会いに行つた。

## 第四十六話 487年 7月 動乱～夢の中の歩み～

補給を終えたカストロプ私領艦隊は再び宇宙に布陣している。

率いるアーサー・リンチは前回とまるで布陣を変えた。

あえて数で圧倒する策を捨てた。

足並みを乱すかもしれない老朽艦を無理に駆り出すことはなく、きちんと選び抜いた艦だけを用いている。前回の半数以下である六千隻、しかしより筋肉質なのだ。同時にそれは指揮を執りやすい数でもある。

「同じ失敗をするものか。充分に統率できれば、突入攻撃などさせはしない」

また、本領惑星を遠く離れることもせず、戦理にかなった防衛陣を敷いて帝国艦隊を待ち構えている。

「これは、手ごわそうですね」

帝国側討伐艦隊の旗艦ではベルゲングリューンがそう言った。横のビューローも同意の表情をしている。



この艦隊も修繕などを済ませ、徐々に接近している。前回の戦いで受けた損害は軽微、約二千八百隻が布陣を組む。

「確かにそのようです。相手は今回六千隻、しかし前回よりよほど洗練されていますね。数を絞りながら、しかも優位性を失わない絶妙な数にしています。加えて布陣の方も防衛衛星システムを背にして理想的な形といえるでしょう。こちらは挟撃もできず、持久戦も分が悪く、戦術的に相当の不利があります」

「キルヒアイス司令、ではどうやって攻略を」

今度はベルゲングリューンもビューローも撤退を進言したりしない。

司令官キルヒアイスを信頼し、この悪い状況下でどう戦うのか楽しみなくらいだ。

「簡単なことです。お二方とも、今から示すポイントに一気に集中砲火ができるよう、入念に準備しておいて下さい」

キルヒアイスは見る者を安心させる微笑みを絶やさず、指示を伝えた。

たつたそれだけのこと！

二人は驚いたがキルヒアイスに考えがあるのでだろうと納得した。

艦隊戦が始まる。それはあまりにもオーソドックスな長距離砲戦から始まった。

お互いイエローゾーンから踏み込むことはなく、距離を保つ。

損害らしい損害もなくひたすら撃ちあつた。しつこい我慢比べが続く。

だが、次第にキルヒアイス側が有利に傾く。狙いが的確であり、艦列の統率もより優れているからだ。

「ここに大型艦を移動させて下さい。次に相手は必ず狙つてきます。その隙に他の艦はエネルギーを節約して備蓄して下さい」

キルヒアイスは次々とそんな指示を出していく。常に先手を取つて読み勝つのだ。合理的で決して無理がない。

しかも指示をするときに大声を出したりことさら勇猛さを見せたりすることがない。キルヒアイスはそんな精神論からは無縁なのだ。しかし従う方は焦りが消え、ビューローやベルゲングリューン以下、将兵は自然に信頼を深めていく。気持ちがあ回りすることがなくなる分だけ強さを発揮できる。

これがキルヒアイスの艦隊なのだ。

ただし、カストロプ側も簡単に負けることはない。

なんとといっても艦数が多いのは有利なのだ。それを上手に生かして戦列を立て直し、局地的に不利になつてもきれいに対処している。

しかしながら、全面攻勢に出ようとしてもうまく抑えられてしまう。

かえつて先に綻びを見せ始めた。

最後は艦列の修復を諦めゆつくり退きにかかった。これは最初の戦いと同じ、勝負を切り上げた早めの撤退だ。そこには例え撃ち負けても致命傷を負わなければいいという計算があるのだろうか。確かに物資の面で言えば、帝国軍討伐艦隊の方が先に枯渇してしまうだろう。別に勝っているからといって推進剤も弾も使わないわけがない。

だが今、カストロプ側の撤退行動を知って、キルヒアイス側は一気に追撃をかけた。「司令、敵はまたもや無理をせず、退却するようです。今度はどうされますか」

「前進速度を上げて下さい」

ビューローの問いかけにキルヒアイスが答える。

一方、討伐艦隊が追ってくるのを見たカストロプ側は艦列を乱してきた。無秩序なまま撤退の速度を早めていく。

「今です。前進を止め、攻撃を開始して下さい！」

キルヒアイスの満を持した合図にベルゲングリユーンとビューローが素早く反応する。

「全艦、先に入力してあるポイントへ向け攻撃！」

「計算は終えているはずだ。同期して全火力を叩きつけろ！」

たった一点に向けて全砲撃が集中した。

そこはカストロプ側の艦隊が今まさに通過しようとする宙域だった！ 先回りして数千数万の光条がそこに伸びる。

完璧に準備されたピンポイント攻撃には大型艦すら耐えられない。ましてカストロプ私領艦隊は小型艦が多く、次々に火球に変えられる地獄となった。

もはや致命傷となる。

名刀が一閃したような瞬間、そこで勝負は決まった。

「なるほど、そうだったのか。負けたな」

カストロプ側の旗艦でアーサー・リンチがつぶやく。

「うまくやったつもりが最初から読まれていたのか。帝国の将は大した人物だ。恐ろしいくらいに」

悔しいのは当たり前だ。しかしそこに憎しみはなかった。優れた敵に対し、軍人として尊敬を持つのはおかしなことではない。

「いよいよ最後を飾ろうか。潮時だ」

アーサー・リンチは自分の艦以外を分散、逃走させた。自分は足止めのために停止し、迫る帝国討伐艦隊を待ち構えた。

一方、ベルゲングリューンもビューローも興奮を抑えきれない。

あつけないほどの勝負の幕切れだからだ。

司令官が戦いの始まる前から示したポイントに、見事に相手が来たとは、まるで魔法のような予言ではないか！

最初から全艦での集中砲火をセットしていたため最大限の効果を発揮し、あつさり敵に致命傷を負わせた。

「どうして司令官には分かったのでしょうか。不思議でなりません」

頭を捻る二人にキルヒアイスが説明する。

「そんなに難しい理屈ではありません。向こうは前回の反省を生かし、数で押しつけてくるだけの策は取りません。当たり前のことです。であれば、向こうの取る策はただ一つしか考えられないのです」

「キルヒアイス閣下、それはいったい……」

二人はまるで教官に向かって質問をする学生のようにだった。本人たちもそのつもりだったろう。

「防衛衛星の力を借りることで。最後は必ずそこへ誘導しようとするでしょう。堂々の艦隊戦は見かけだけです。案の定、早めの後退も、その後の綻びのように見せた行動さえもうまく見せた擬態なのです」

「誘いだつたとは……なるほど分かりました。しかし、それでもあのポイントに行く

とは限らないと思えますが」

「そうですね。偶然などではありません。あのポイントである理由があります。防衛衛星は動けないので、戦場から見て惑星の陰になる分の衛星は、ミサイルはともかくビーム兵器は使えず無駄になります。半分近くの衛星はそうなってしまうでしょう」

「確かに。その通りでしょう」

キルヒアイスは種明かしをしていく。それは常人よりもはるかに広い視点の産物だった。

「そこで、衛星の最大数を使って攻撃できる方向を考えました。こちらが追撃して行った場合、あのポイントで攻撃参加しうる衛星の数が最大になるはずでした。そんな場所なのです。相手の司令官が優秀なだけに、必ずそこへ誘導することを図って後退するものと予想しました」

あまりに単純、しかし思いつかなかった理屈なのだ。

ベルゲングリューンもビューローも哑然とするしかない。

さも簡単に言うが、相手の力量を寸分の狂いもなく推し量れてこそできる戦術ではないか。

カストロプ側艦隊は前回の戦闘で早めに退いたことさえ擬態の下地に利用した。い

や、逆に最初からこれをするために前回は撤退したのかもしれない。

だが、キルヒアイスはそんな巧緻を極めた戦術もあつさり見抜き、更にな上を行つた。

二人はますます信頼を寄せる。人格だけではなく、能力も申し分ない司令官ではないか。

「話はさておいて、これから最大戦速で惑星に向かいます。今なら散らばつた向こうの艦が邪魔になり防衛要塞は稼働できないでしょう」

敵味方入り乱れる平行追撃で防衛衛星を無力化し侵攻する。

キルヒアイスの作戦の第二段階が始まつた。

ところが、前進していくと目の前に小艦隊が停泊している。

わずか十艦もない。

それだけでキルヒアイスはカストロプ側の司令官だと気付いた。戦いに負けても自分だけ命冥加に逃げることはせず、武人の態度を取り、最後の時を待っているのだ。

キルヒアイスには想像がつく。おそらく立派な人物なのだろう。

「降伏勧告をいたします。通信をとつて下さい」

無駄だとは思つたが、それでも降伏勧告をしようとした。

しかしながら救いたいと思つたのは本当である。

それがキルヒアイスという者なのだ。

しばし応答を待ち、通信スクリーンを見る。

そして映し出されたのは意外なことにまだ若いといえる将だった。

ただし驚きは別のところにある！

何と、帝国軍ではない緑色の制服を着ている。これは叛徒の制服だ。なぜ、カストロ

プという帝国貴族の艦隊に叛徒がいるのか。

キルヒアイスが問う前に言われた。

「これは驚きました。あなたが帝国艦隊の司令官ですか。お若い」

どちらも若いのであるが、確かに比較すればキルヒアイスの方がずっと若い。

そして丁寧な言葉を使ってきた。

戦いで負けて怒り狂っているわけでもなく、落ち込んで呆然自失でもない。自然な表

情だ。

だが、そうであるからこそキルヒアイスは降伏の説得が無理だと悟った。

「帝国軍少将ジークフリード・キルヒアイスと申します。戦いは終わりました。これ以

上は無益です。降伏をお勧めいたします」

「私は自由惑星同盟軍アーサー・リンチ少将です。訳あって帝国貴族の艦隊にいますが、

降伏勧告をして頂けるとはありがたい。逃走中の艦隊を無用に撃沈しないと期待でき



ますか。どうせ艦隊は惑星防衛に戻ってくることはないでしょう」

ただし、最も重要なことを凜と言い放つ。

「しかしながら、私自身は降伏しません」

「アーサー・リンチ少将、とても残念に思います。それでは結果は一つになります。しかし、ここで死ぬのは誰にとっても良くないではありませんか。翻意なさるべきです」

「重ねての心遣い、感謝に堪えません。キルヒアイス少将」

アーサー・リンチは穏やかな表情を崩さない。

もう自分の成すべき生涯の仕事は終わった。

「最後にあなたと戦えてよかった。驚くほど強い、帝国軍のお若い将」

人生というものは、後悔することが多いものだ。

しかし、今は自分の人生に満足な気がした。他の人間がどう思ってもいい。自分は満足なのである。

「ではこれで。私が言うのもなんですが、ご武運を」

アーサー・リンチは通信を切った。

自分のことより、あの優し過ぎるほど優しい帝国軍の司令官のことを考えていた。

そしてここにいるわずかな艦によって砲撃を始める。

これは全て人員のいない自動射撃だ。アーサー・リンチは無駄に自分の道連れなど作

るつもりはない。

照準はまるででたらめ、単なる開始の合図のようなものだ。

キルヒアイスはそれを認めるや、表情を曇らせる。その胸中は誰にも分からない。そして小さな声で命じる。

「やむを得ません。前進です。攻撃を再開して下さい」

全てが夢の中のようにだった。

自分の人生の歩み、それが夢のように思える。

これまでの人生、特に同盟軍人としてのいろいろなことも、今となっては。

士官学校から始まり、とんとん拍子に栄達し、将帥になった。

同盟軍次世代のホープとまで言われたこともある。

それがエル・ファシルでのたった一度のつまづきにより、暗転する。酷い汚名を受ける身となった。

その汚名を晴らせることはついにない。

しかし、最後の最後に一つの惑星領民を救うことができたのが慰めだろうか。

奇妙な運命に導かれ、故国から遠く離れた帝国領内で、何と貴族の私領艦隊なんかを

率いることになった。そんなことは想像もしていなかったことだ。

他人はこんな自分の人生など下らないと思うかもしれない。実際自分は誰にも顧みられることもなく、称賛されることもなく、終わりを迎える。今回の戦いもしよせん歴史の傍流に過ぎず、何かしらの価値もないのだろう。

だが一つだけ誰にも否定できない確かなことがある。

自分は自由惑星同盟のため、その灯を消さないため、帝国軍と戦うことに人生を捧げたのだ。それが望みであり生きる意味だった。

今、爆散と共にアーサー・リンチは生涯を閉じる。

帝国と全身全霊をかけて戦い、命を燃やした。

艦隊戦の晴れ舞台で。

心の底から自由惑星同盟軍の将として。

その魂に曇りはない！

だから最後まで叫ぶのだ。

自由惑星同盟よ、いつか帝国の圧政を倒し、自由の旗を打ち立てよ。  
民主主義の光よ、全ての人の上に照り輝き、まっすぐに道を示せよ。

そして遠く異郷にあつてもなお臉に浮かんでやまない。  
麗しきハイネセン、美しきふるさとハイネセンよ、永遠なれ。

## 第四十七話 487年 7月 動乱と脱出

艦隊戦の決着がつく少し前のことだ。エリザベート・フォン・カストロプがひた走る。目当てはヒルダだ。

ヒルダは囚われの身とはいえ、一部屋に監禁されていることはなく、いくつかの行動の自由は与えられていた。

図書室や温室などの部屋には好きに出入りができる。

マクシミリアンはヒルダに対し、快適性もなければ良いアイデアも出ないだろうと考える度量を持っていたからだ。

ただし、当然ながら宇宙港や通信室につながる所には出られるわけはなく、また監視カメラによって見張られている。

エリザベートがヒルダに接触を図ること自体はそう難しくもない。

しかし、それを今すぐ兄マクシミリアンに知られるのはまずいことだ。明晰な兄は自分のしようとする意図を見抜くかもしれない。

まずは監視員を買収しにかかるが、それは意外なほど簡単にできた。かえって拍子抜

けするぐらいだ。なぜなら誰もマクシミリアンに忠誠心などあるわけがなく、金さえあればいつでも出て行きたいと思っっている人間ばかりだったからだ。

「カストロプ家は砂上の楼閣なのだわ。滅びる運命なのよ」

改めてそう思う。

銀河帝国の名門中の名門、五百年続くカストロプ家といってもこの程度だ。

努力せず、過去の栄光により寄り頼んでいては崩れ去るものでしかない。

そしてヒルダに会ったエリザベートは先ず詫びにかかる。

「マリンドルフ家のヒルデガルト様、この度は本当に兄マクシミリアンのためにとんでもない災難を被り、心からお詫び申し上げます。帝国への反乱などという大それたことに巻き込んでしまいました。私もカストロプ家の一員として、責任を重々感じております」

「これはエリザベート様、いいえあなたが悪いのではありません。私には分かっております」

実はこれまで二人に面識はない。

エリザベートとヒルダの年齢では女学校で重なる年度がなかったからだ。しかし、共通の知り合いとしてエカテリーナがいることは既に知っており、その意味で親しみを

持った。

「エリザベート様、本当にお気遣いなく、お詫びなど、そんな心配なさらないで下さい」  
エリザベートとしては、ヒルダがカストロプ家に恨みを持つことを恐れていた。

いや、それはごく当然のことだろう。親切心からカストロプ家を訪ねてきたのに、いきなり捕らえられて人質にされてしまったのだ。

だが予想は良い方に外れる。

ヒルダは理性的であり、きちんと首謀者マクシミリアンとエリザベートを区別して見せた。

むしろエリザベートがそんなことを心配しているだろうと、気持ちを一先回りして安心させてやろうとまで思っている。ついでに言えば、エリザベートこそマクシミリアンの一番の被害者なのではないかとヒルダの頭脳は薄々感づいてもいたのだ。

「ありがとうございます。ヒルデガルト様。そこまで言っていたら、安心しました。では手短かに用件を言います。今、カストロプ領にまた帝国軍討伐艦隊が来ていますが、今度はなかなか厄介なようでアーサー・リンチ提督も苦戦しています。ですがこれこそチャンスです。兄がそつちに気を取られれば隙ができるでしょう。そこでなんとかフランツ伯とあなたを解放し、ここから脱出できるように努力いたします」

「ありがとうございます！ エリザベート様。父上の解放を本当にお願ひします。私な

どより優先して下さい」

「いいえ、必ずお二人ともそろって脱出させます」

ここでエリザベートは最後の言葉を飲み込んだ。命に代えましても、という言葉だ。やり遂げて見せる。決意は固い。

「頃合いを見てまた参ります、ヒルデガルト様。それと、今これをお渡ししておきましょう」

エリザベートの手の平には一つの指輪があつた。

豪華といえばそうだが貴族が持つ物としては一般的なデザインで、よくあるタイプだ。白金細工の上にきれいにカットイングされた大きめのトパーズが一つ乗っていて、その周囲に細かい紫水晶を品よく散らせてある。

「これは……指輪でしょうか。いったいどういう？」

「敢えて普通の指輪のように作ってありますが、中身は違います。精密な装置です。通信機の機能があるのでこれで連絡できますが、それだけではありません。超小型のブラスターが仕込まれているのです。護身用の武器として、役に立つことがあるかもしれません」

ヒルダも実際見たことはなかったが、その存在は知っていた。



こんなに小さいのに通信とブラスターの機能があるとはどれほどの技術なのだろう。そのヘルクスハイマー製の特別な指輪は、そこらの貴族が持てるようなものではない。

よほど裕福な大貴族だけが買えるとしてもなく高価な代物なのだ。

そこからエリザベートは次の目標に向かった。

やるべきことは分かっている。

その頃、マクシミリアンは急ごしらえの司令室にいる。

館の一番広い大広間にスクリーンやコンソール、通信装置を運び込んで作ったものだ。

その広間には奇妙な古代趣味の装飾や、無駄な柱、意味のない噴水がちやごちや詰め込まれている。これを良しとする者の美的センスが疑われる。むろん、マクシミリアンの勝手な趣味なのだ。

それらの中に加わった近代的な機材がおかしな対比を見せている。

今、この惑星近傍で戦われている艦隊戦、その様子が丸ごとスクリーンに映されている。

それでマクシミリアンは頼みの艦隊の敗北を知った。

「くそつ、役立たずめ。また負けおつて！ 死んで当然だ」

アーサー・リンチの最期も知った。

だがマクシミリアンに何の感傷も湧くはずがない。使い終わった道具の一つでしかないからだ。

「艦隊戦などもういい！ かくなる上は討伐艦隊を防衛衛星によつて宇宙の藻屑にしてくれる。どのみち帝国軍の討伐艦隊が三千隻しかいないのは変わりないではないか。下手な小細工はせず機械に任せればいいだけだ」

マクシミリアンの言うことも理にかなっている。

今回の帝国艦隊は三千隻であり、防衛衛星で対処できない規模ではない。想定最大防衛容量は一万隻もあり、そこまでの艦隊なら食い止められる設計なのだ。

しかしそれは平行追撃されている私領艦隊を見捨てるということでもある。

マクシミリアンには何のためらいもなかった。艦隊の兵士の命などどうでもいい。自分が痛むわけではない。自分を守るために、帝国艦隊ごと全てまとめて薙ぎ払ってしまふのだ。

「直ぐに防衛衛星を稼働させる。もちろん敵味方識別の解除をしておけ。今軌道上にある艦を全て攻撃し、沈めてしまえ！」

何という自分勝手な命令だろうか！ 非人間的過ぎる。

その広間にいた操作オペレーター役の下僕たちも一瞬動きが止まる。

しかし、マクシミリアンが睨みつけると命令通りにしようとする。電磁ムチの懲罰が怖いのだ。

しかし、そのわずかな時間が大きな違いになった！

「防衛衛星システムに異常！ 応答ありません！ インプットを受け入れません！」

「何だと、どういうことだ！ 何でもいいから早く動かせ！」

「分かりません、調査中です。それと、現在こちらの通信設備が稼働しているようです」

「何、通信が？ こちらから通信とは？ それはいったい何だ。ここにも出してみろ」

すると広間にその通信音声がかつた。内容はあまりに驚くべきものだ。

「繰り返し、接近中の帝国艦隊に申し上げます。私はエリザベート・フォン・カストロプ。

反乱についての処罰は後でお受けしますが、防衛衛星を解除しました。今ならば降下可能です」

思わぬことに驚いたのは帝国艦隊側も同様だ。

「閣下、どういうことでしょうか。あの恐るべき防衛衛星が解除されているとは。畏でしようか。これはうかつに近づけません」

「ベルゲングリユーン准将、いえ、私には今の通信が本当のように感じました。向こうも一枚岩ではない、ということでしょうね」

「し、しかし一片の通信に過ぎず、信じるのは余りに危険です!」

「今が好機だと考えます。速やかに惑星へ降下しましょう。予定は変更です」

艦隊旗艦内ではそんな会話が あった。

キルヒアイスは上手に平行追撃をかけて防空衛星を無力化したつもりだが、それでも敵味方もろとも攻撃してくる可能性を考えていた。

キルヒアイスならば味方まで撃つようなことをするはずもないが、自分を基準にして戦術を組み立てることはない。最悪の想定も必要である。

反乱を起こした側は、正に最後の砦を失い、後が無い状態である。なりふり構わぬ手段を取るかもしれない、仮にそんなことをされたら被害甚大だ。ましてやキルヒアイスはマクシミリアンの為人を事前に調べ、その酷薄な人格を知っていたのだ。

そのため、とっておきの用意があった。

指向性ゼツフル粒子である。この新兵器で防衛衛星を丸ごと焼き払うのだ。動かない衛星にはうってつけとも言える。

ただし、実戦で一度も使われたことのない新兵器なので未知の部分が多い。

先にオーディンで技術部からこれの詳細な説明を受けたキルヒアイスは疑問を持つ

ていた。共に聞いていたラインハルトも同様だった。

説明をした太った帝国軍技術部の開発担当者は自信満々で効果を説明していたのだが、それが大いに不快であったことも影響している。シャフトというその開発者は技術的難題を自分の才能で解決したと誇り、技術者としての能力を誇示する態度に終始していた。これが不快だ。

それだけならまだしも、一番嫌なことは兵器の安全性を軽視し、扱う兵たちのことを頭の片隅にも入れていないことだ。

仮に思わぬ事故があった場合、自分の身に何もなければそれでいい、という他人事の態度である。自分が痛むのではないことには驚くほど関心がない。

ああ、事故で何人死んだ、それは残念、そんな細かいことはともかく技術的に失敗したことだけは残念、きつとそう言うだろう。

それともう一つ、実際に使用した場合、どのくらいの範囲に影響するのか確定していない。

ただ威力があるというだけでも兵器としては使えるのかもしれないが、それでは片手落ちではないか。

特に今回は惑星軌道上の防衛衛星に対して使うのだ。惑星のすぐ近くにこれまでになく大量のゼツフル粒子を撒いた場合、惑星住民に思わぬ被害はないのだろうか。カス

トロップ領惑星は人口が多く、もしそうなれば恐ろしい被害になる。

もちろん、指向性ゼツフル粒子は宇宙空間で幾度もテストされている。しかし、今回のように大規模な防衛衛星を巻き込み、誘爆を起こさせる実験など試してはいないだろう。何しろ指向性ゼツフル粒子だけではなく、防衛衛星自体が新しいものなのだから。

キルヒアイスはそれを考え、できれば今回の作戦で指向性ゼツフル粒子は使いたくないと思っていた。

エリザベート・フォン・カストロップが防衛衛星を無力化したというのが本当なら渡りに船だ。

エリザベートは隠しコンソールから防衛衛星システムを停止させ、帝国艦隊へ先ほどの通信を送っただけではない。

館中を巡っては叫んでいた。

「もう終わりです！ 間もなく帝国軍が来るでしょう。逃げなければ巻き添えで死ぬだけです！」

これは効果てきめんだった！

誰しもがマクシミリアンへの恐怖で従っていただけで、忠誠心などない。そのマクシ

ミリアンが破滅するのなら誰が職務を遂行するだろう。

ましてや帝国に対する反乱に加担していたと見られ、自分まで罰せられるのは心外だ。

混乱と崩壊が加速度的に広まっていた。

そんな中、エリザベートは先ずフランツ・フォン・マリンドルフ伯の救出を優先した。ここでも惜しみなく宝石類を買収に使い、浮足立っていた監視員を去らせている。

「マリンドルフ伯、本当に申し訳ありませんでした。カストロプ家の一員として、この度の迷惑に対し、お詫びの言葉もありません」

「あなたが悪いのではないでしょう。エリザベート嬢。それよりも助けて頂けるようはこちらこそ感謝せねば。ともあれ私の娘と合流したいので案内してもらえますかな」

「もちろん。お二方そろって脱出させます」

マリンドルフ伯の言うことはヒルダと大変似ている。その見識ある言葉に安心し、エリザベートは伯をヒルダの元に案内する。

次に、感動の再会を果たした父娘を脱出させなければならぬ。

宇宙港に連れて行こうとしたが、これはそう簡単ではなさそうだった。

混乱が進む中、当然ながら宇宙に逃れようとする人間は多い。ここにいればマクシミリアンのとばっちりで処罰されてしまうかもしれず、それよりは宇宙船を盗んで命から

がら脱出する、そう考えた人間が多いからだ。

エリザベートはその混乱を見た。

そこでカストロプ家の者だけが知っている秘密通路などを伝って進む。そういつた通路が領民反乱などの万が一の時の脱出用に作られている。

宇宙港の一角、特別格納庫まで辿り着いた。

もう一步だ。

カストロプ家の宇宙艇はまだそこにあつた。

しかし悪いことがある。

一人の狂暴そうな男が宇宙艇のハッチ付近にいたのだ！

服装からすれば館の給仕といったところだろうか。やつきになって艇のロックを解除しようとしているが、うまくいっていない。

「くそっ、開かないのか。ぶち壊すぞ！」

その男の存在に走ってきたエリザベート、ヒルダ、フランツ伯が気付く。

だが遅かった。

驚いて対処を考える間に男の方もまた三人に気付いてしまった。



男は訝しむ表情から、幸運を甘受する表情へと変える。

「ん？ おい、おまえら。おまえらもこの宇宙艇が目当てで来たんだな？ ならば開け方を知ってるだろう。さっさと開けてもらおうか」

こんな奴を同乗させるわけにいかない！

この男は目が血走っていて、半分正気を失っているようだ。そのポケットにはプレスレットやネットワークスが乱暴に突っ込まれているのが見えている。たぶん行きがけの駄賃に奪ってきたのだろう。単なる脱出ではなく、窃盗をしての逃亡だ。服もあちこち破れていて、明らかに争った形跡がある。

こんな男が帝国軍に保護を求めるはずがなく、それどころか何をしでかすか分からない。

十五メートルばかりの距離を置き、無言で睨み合う。

「ふん、何だ。協力しないつもりか。では実力行使で協力させてやるぞー」

男は女二人と痩せた貴族一人、何ができると侮っている。もう見た目からして荒事などは絶対に無縁の生活をしてきたような三人だ。しかも武器は何も持っていない。

男はそれを見て、余裕の表情で近付こうとした。意図は明白だ。見せしめに少しばかり痛めつけ、艇の扉を開けさせ、そして奴隷として艇を操縦させようとも考えている

のだろう。

「おまえら、最初から素直に協力すればいいものを。後悔するのは俺のせいじゃないぜ」

その時ヒルダが腕を上げた。

そして男に向かい、まっすぐに伸ばす。

「いいえあなたこそ素直にどいた方が身のためよ。痛い目を見る前に」

その手先から細いエネルギー線が伸びた！

細い白銀の線が、男から斜め上のかかなり外れたところに逸れていった。

思わぬことに男は一瞬止まり、驚いたようだったが、それで怯む様子はない。武器が無いと思っていたのは間違いで、ブラスターがあつたようだ。しかしそれはあまり威力がないタイプである。

まして今それを撃つたのは、三人のうちでもっともか弱く見える娘だった。

「何、威勢がいいと思つたら隠し銃か。だがお嬢ちゃん、使い方を教わつてはいないようだな」

どうせ当てられやしない。

銃を撃つなどどうせ初めてのこと、ましてや人に向かって撃てるものか。

今もやむにやまれず撃つてしまっただけだろう。

男は表情をいつそう凶悪なものに変える。

一応は考えたのだろう、身を低くかがめ、左右にステップを踏み始める。素早くジグザグに走りながら近寄るのだ。

これで万が一にも当てられるようなことはない。素人の、しかも明らかに十代の娘には。

「そんな危ないおもちゃを持つとは、お前からお仕置きしてやる！ 逆らえないように指の一本も折ってやるぞ！ 今は俺がご主人だ！」

男が逃げるどころか向かって来ようとしているのを見て取り、ヒルダはもう一度手を伸ばす。

「またしてもエネルギー線が伸びる！」

だが今度は外れることなく命中した！ それも男のど真ん中だ。

たまたま男はうめき声を上げて崩折れる。そこから苦悶の声を絞り上げ、床をのたうち回っている。

確かにこの超小型ブラスタの細いエネルギー線では、一度当たったくらいでは心臓や動脈などに命中しないかぎり致命傷にならない。ヒルダはそれと知って撃っている。

「これはお見事です！ ヒルデガルト様。驚きました！」

エリザベートとフランツ伯が目を見張った。

特にエリザベートには予想外だ。ヒルダは指輪型ブラスターを見事に使いこなした。こんな危急の時によく当てることができたものだ。

「二度外しただけで完全に修正してしまわれた。射撃にも才能がおりですわ！」

これにヒルダがわずかに微笑み、驚くべき返事を返してくる。

「ありがとうございます、エリザベート様。ですが、一度目は警告のつもりでしたのに、少々外し過ぎてしまいましたわ」

## 第四十八話 487年 7月 動乱く思いを託してく

エリザベートが宇宙艇の扉のロックにパスワードを打ち込み、開いたところへヒルダとフランツ伯の二人を乗り込ませた。自分は素早く宇宙艇が正常に稼働するのを確認する。

「これでお二人は脱出して下さい。宇宙に出たなら、帝国軍の艦艇を目指して進み、呼びかければ保護してくれると思います」

「え!? どういうことでしょう、エリザベート様。私たち二人と一緒にではないのですか」  
「私は…… 一緒には行けません。帝国軍はカストロプ家の一員として私を捕らえるでしょう。いえ、それが嫌というわけではなくて、まだここでするべきことが残っています。私の一番の義務です。兄と決着をつけなくてはなりません」

「そんなー!」

ヒルダはエリザベートの覚悟を知った。

自分の運命に目をそらさず、向かおうとしている。

マクシミリアンの妹として生まれたことも運命だ。ならばそれに決着をつけるため

エリザベートは兄マクシミリアンと刺し違える覚悟で挑む。

「哀しいことですが、私のカストロプ家は世の中に害にしかありませんでした。それに終止符を打つのがせめてもの償いです。これはカストロプ家の者がやらねばなりません」

もはやヒルダに言える言葉はない。

覚悟を決めた人間に、それを変えさせる権利などない。その美しい姿に誰が反対できるだろう。

一度微笑んだエリザベートが宇宙船から外に出て、来た道に走り去る。

その後ろ姿を見ながら、ヒルダの頬に涙が伝った。

エリザベートは館の中心部へと引き返す。その途中にも声を響かせ叫んでいる。

「カストロプ家は破滅、私にも兄マクシミリアンにも処罰が待っているだけです！ここにいる皆も帝国軍に捕まるでしょう！」

更に混乱が広がっていく。本来の持ち場にとどまっている人間はいない。

そんな中、エリザベートは次の目標に走る。

それは防衛衛星システムにアクセス可能な端末だ。

もちろんそういった重要端末はそこらにあるわけがない。ただし全くないわけでは

なく、故障や破損時の予備としていくつか準備されている。実は前々からエリザベートはその片手で数えられるほどしかない端末を執拗に探し続け、ようやく見つけていたのだ。既に防空衛星システムに働きかけられることを確認している。

その端末から防衛衛星システムに素早く入力した。もちろん停止コードである。その上で入力アクセスにブロックをかけていたのだ。

最後の仕上げは帝国艦隊への通信である。これは遠隔操作で通信機を作動、予め入れている音声を流させた。これが帝国艦隊側に聞こえていた通信だったのである。

「これでいい…… もうこれ以上カストロプ家が迷惑をかけなくて済む。さあ、最後にお兄様と話さなくてはいけません」

エリザベートは大きく息を吐いた。

これまでの長い年月と、幾多の出来事を思い返した。

兄マクシミリアンに対して染みついた恐怖が自然と心を縛っていく。トラウマとなった記憶たちが心を凍らせていく。

しかし今、それを振り払らねばならない！

前へ足を踏み出し、決着をつけに行くのだ。

マクシミリアンがいるだろう大広間に歩みを進めた。

その広間ではむろんマクシミリアンが叫び続けている。

「エリザベートが俺を裏切ったのか！ 生意気な妹だ。ただではおかんぞー！」

だが、マクシミリアンは広間から動けない。一分でも早く防空衛星のコントロールを取り戻さなければ帝国艦隊に降下され、敗北が決定してしまうからだ。

「エリザベートのことは後にして、今は衛星を動かさねばどうにもならん。くそつ、何とかならんのか！」

あれこれ指示を飛ばしながら、マクシミリアンが焦りの色を深める。

しかしその復旧作業は思ったより時間がかかる。いったんロツクをかけられた衛星のシステムは再起動コードを容易には受け付けない。

そしてマクシミリアンは悪魔のようなことを思いついた。

「おのれ、こうなれば手動操作で再起動するしかない！ 衛星の外壁にその制御盤がある。お前ら、隠してある高速艇で衛星に行け！ 行ってスイッチを押すだけだ。お前らでもできる！」

広間には制御オペレーターばかりではなく、下女が七、八人も残っていた。

その内の二人だけを残し、他の下女をその操作のたれに向かわせたのだ。下女たちは



いずれも表情のない能面の顔のまま従った。

だが、帝国軍艦艇の進軍は速い。

マクシミリアンの予想以上の速さだった。

そして頼みの綱の防衛衛星の様子をじりじりとして待つが、一向に再起動してくれる気配はない。たったの一つも。

「くそつ、あの下女どもは何をしている！ もしや行かなかったのか？」  
その懸念に辿り着いた。

マクシミリアンは衛星が再起動したら間髪おかずに最大火力で攻撃を始めさせるつもりだった。

しかしそれは、衛星外壁にまだ取り付いているだろう下女がエネルギー波の余波で無惨にも焼かれて死ぬことを意味する。

当然のごとくマクシミリアンはたかが下女数人の命より、攻撃を一秒でも早くする方を選ぶ。下女が生きたまま焼かれ、あまりの苦しみに狂い死んでいこうがそんなことはどうだっていい。

そこを見抜かれていたのか。

時が過ぎ、帝国軍がついに衛星軌道に到達、そして抜けてしまう。もう限界だ。

今から防衛衛星が再起動しても帝国艦隊を撃滅することはかなわない。

マクシミリアンの敗北と破滅が確定した。

「なんと、裏切りからこんなことに……」

気落ちしたのは一瞬のことで、むしろマクシミリアンは怒りに目もくらむばかりだ。復讐の指示を出す。

「先ずは宇宙港から逃げ出そうとする人間が多いのは分かっている。それらに対してだ。」

「この惑星を逃げ出す奴らを一人残らず撃ち落とせ！ 防空ミサイルも少しくらいあるだろう。帝国軍に撃つてもどうせ無駄だ。ならばそいつらの方に照準を向けろ！」

それだけに飽き足りるわけではない。

「ミサイル操作のために一人だけ残り、他のオペレーターは全員ついてこい！ 俺を裏切った者を全て探して始末してくれろ！ 絶対に逃すものか！」

操作オペレーター達のうち一人を除いた全員、それらと下女二人を併せて従えながら憤怒の表情でマクシミリアンが歩き出す。

「探す必要はありません」

ふいに広間に声が響いた。

マクシミリアンが目をやると、入り口にエリザベートが立っている。

「私を見つけに行こうというのでしよう。ここです、お兄様」

「何だ、そこにいたのかエリザベート！　なぜ俺を裏切った！」

マクシミリアンがエリザベートを鋭く問いただす。もはや正気の見線ではない。

「帝国軍に俺を売ったんだな。それで自分だけ助かると思ったか、そうなんだろう！」

「いいえ、自分のためにやったものではありません」

「無駄だ。取り引きをしたところで帝国がそんな約束を守るものか。浅はかなことを考える妹め」

「誓って言いますがそんな汚いことはしません。信じてもらえないでしょうがそんな憶測は違います。私が助かるうとか、どうでもいいことです」

「では何だ！」

もうカストロプ家は破滅を免れない。

エリザベートはせめてそれを見苦しくないものにしたかった。

「止めるためです。もう終わりにしましょう、お兄様。これ以上無駄なことはせず、おと

なしく帝国軍の処罰を待つのです」

「ふざけるな！ こうなったら俺はフェザンにでも逃げて再起してやる。ここさえ凌げればいいのだ。超高速シャトルが残してある。帝国の軍用艦でも追い付けるものか。星系の小惑星に隠してある高速船まで行き、それに乗り換えればフェザンへ逃げられる。ふん、俺はヘルクスハイマー伯のようなヘマはしない」

「…… 銀河帝国の名門貴族カストロプ家、せめてその名にふさわしく綺麗に終わりを飾りましょう。これ以上、あがくのは誰のためにもなりません」

「ふん、無理だと思っているのか。残念だったなエリザベート、お前の考え通りにはならんぞ。実は財産を叛徒の領内に隠してあるのだ。奥の手に使おうと思つてな」

「ではなおさら今止めなくてはなりません。お兄様がそんなおつもりなら。私がカストロプ家を終わりにします」

やはりそうだった。マクシミリアンは性格が破綻しているが馬鹿ではない。

最後の最後に一筋の手段を残していたのだ。

「エリザベート！ さつきからカストロプ家カストロプ家とうるさい！ それが何だ！」

ついにマクシミリアンが激発する時がきた。

「カストロプロ家の誰が俺のことを分かつてくれた！ 誰が俺に優しくしてくれた！ 俺はお前と違う！」

二人のやり取りを傍観していたオペレーター達はこの様子に震え上がり、エリザベトの背にある出入り口から走り去る。

下女たちの方は動かない。

「しかも今回、そもそも俺が悪いんじゃないぞ、エリザベト、分かっているのか。親の財務尚書時代の罪が発端だ。あいつらは俺が築き上げた物を死んでからまで壊そうというのか！ どこまでふざけたマネを！」

今、マクシミリアンは妹エリザベトを通し、両親への積もり積もった恨みを語っている。

そこまで言つて、酸素不足でマクシミリアンがあえいだ。

巨体を揺らし大きく息をしている。

しかしその発言はエリザベトにとって意外なものではなかった。

兄が歪んでいるのは幼少期から愛されてなかったことも一因である。親に対する怨念が重なり、心を黒く染め上げている。それは分かっている。可哀想と言えなくもない。

ただし、そこからどれほど他人を深く傷つけてきたことか。

それとこれとは別だ。自分が傷ついたからといって、決して他の人間を傷つけていい理由にならない。

他人を痛める権利などなく、それは本人の罪である。

エリザベートには、今さら兄マクシミリアンへ同情する気持ちは起きない。

このままではいけない。

話し合いは無意味に終わり、ついに実力行使をしなければならぬのか。

エリザベートは隠し持っていた果物ナイフを出した。両手に一本ずつ握りしめている。

ヒルダにブラスターを渡しながらもエリザベート自身に射撃の経験はなく、武器としてナイフを選んだのだ。

マクシミリアンの手の届くところに電磁ムチがあるが、それに怯まずに戦うならばナイフの方が有効だろう。

今は心を強く保ち、ムチの痛みも過去の恐怖も忘れるのだ。

「お願いです。おとなしくして下さい。帝国軍が来るまでここに一緒にいましょう、お兄様」

！  
そう言うやいなや、マクシミリアンではなくエリザベートの方が大きく目を見開いたが、つくり膝をつく。

何が起こったのか。

既にどちらのナイフも取り落とした。エリザベートは激痛の来る左肩に手をやる。そこから血が流れ、指にまとわりつくのが感じられる。

エネルギー線に左肩を撃ち抜かれたのだ！

その原因はすぐに分かった。マクシミリアンの姿勢で。

腕をまっすぐ伸ばし、それで撃つてきたのだ。つまり兄マクシミリアンも指輪型ブラスタ―を使った。

うかつだった。

兄の武器が電磁ムチだけだと思っていた。

マクシミリアンは普段から指にいくつも指輪をはめている。しかしそれは装飾用のものではなく、この時もいつもと同じものをしているのを見た。

実は兄は常日頃から指輪型ブラスタ―をつけていたのだ！

どんな時でも、誰という時でも。ブラスタ―を肌身離さずに。

病的に人を信じられないのか。兄がそこまで用心していたとは。

「説教はそれだけか？ エリザベート。妹だから俺がためらうとも思ったのか。手加減するとも？」

言葉の冷たさに沿うように、もう一度エネルギー線が伸びた。

今度はエリザベートの右肩に当たる。

エリザベートは床に転がり浅い息をした。

赤い血の華がドレスを染める。散った血が、顔をせめて最後の化粧のように彩っている。

「いや、妹だからこそ最後はこうなるのに決まっていたのだ。それが今になった」

冷酷な言葉通り、マクシミリアンの表情にも行動にも何のためらいも感じられない。

「これで終わりだ。どうした、何か言ってみろエリザベート。親が俺に残したのは何だ、金か、地位か、どれだ」

自分で語ることにマクシミリアンの心から際限なく怒りが湧いて出るようだ。

「それとも恨みか、愛か。どうだエリザベート、言えないだろう。親が残したものはな、敢えて言えば虚無だ。俺にはな！」

私はここで終わる。



兄は本気だ。

兄妹であることはマクシミリアンにとって何ほどの意味もなかった。

笑うしかない。

兄妹だからこそこちらはずっと悩んできたのだ。しかし向こうはそんなことを考えもしていないかつたとは。

最後の最後、兄を止めることはかなわなかった。

これが結末なのか。世の中とはなんと厳しく、私は無力だった。

いったい私は何のためにいたのだろう。カストロプ家に生まれ、今の今まで。

エカテリーナ、エカテリーナ、あなたに会えたことは本当に幸せだった。

私を初めて分かってくれた友よ、それで私の心は救われた。

運命に流されるままでなく、勇気を持ち、最後の最後に自分の意思で立ち向かえた。

そして、私にはなんと分かることがある。

光の中を歩んできたあなたなら、こんな理不尽な世を変えられる。

この世を軽々とひっくり返し、誰も見なかった未来を指し示す。あなたが。

見てみたかった。

もうそれがかなわない今、私はあなたに託したい。

この思いを届けたい。

私には何もできなかつた。しかし、あなたにはきつとできる。

視界の片隅に光が映る。それは白く、鮮やかに。

無情にも三度目のエネルギー線がエリザベートを貫いた。

## 第四十九話 487年 7月 動乱く終結く

エリザベートに向かって放たれたエネルギー線は右腿に当たった。

これにより出血は多く、転がったまま動けない。放っておけば出血多量で死ぬのは明らかだ。

そこまでの暴虐をしてのけても、なおマクシミリアンは怒りの表情のままだった。

実の妹の死にゆく姿でさえ解毒できないのか。

それほど世に対する怒りは強く、深いものだともいうのか。

「エリザベート。恨むなら、何の疑問もなく親に愛されたお前自身を恨め」  
蒼白になり意識も失った妹にとどめの四度目を撃つ。

そのはずだった。

マクシミリアンが驚きの表情を浮かべる。

その背にナイフを突き立てられた！

果物ナイフで後ろから刺されたのだ。

「何だ、何をするか！」

原因はすぐに分かった。

取るに足りないと思っていた下女の手によって刺されたのだ！

振り返ったマクシミリアンが怒りの声を上げ、素早く指輪型ブラスターを使おうとした。その背からナイフが抜け落ちる。

だが同時に気付いた。もう一人、別の下女までナイフを持って近づいてきている。それを認めたわずかな隙に、また初めの下女がナイフを拾い、迫ってくる。

二人の下女はどちらもナイフを持っている。

マクシミリアンは同時に両方を避けることはできない。

迷った一瞬の隙に、またもや刺され、動きが止まったところを他方に刺された。

指輪型ブラスターの射線はあえなく外れている。

暴れながらまた撃とうとしたが、再び刺された。今度は足である。

「おのれ、殺してやる。下賤の分際で、俺に逆らうとは……」

だがマクシミリアンはたまらず床に倒れている。

頼みとする武器、指輪型ブラスターは指ごと床に縫い付けられてしまった。射線はあらゆる方向に向いたままだが、痛みのため無駄に撃ちまくった。エネルギーパックが切れるまで。

いくつかが広間にある制御コンソールに当たってしまった、発火したようだ。そこから煙が急速に噴き出している。

その時、床に倒れて苦しむマクシミリアンの視界に見えた。

何と広間の入り口から下女が次々入り、四人、五人、六人と増え続けているのだ！

これは防衛衛星の再起動のため使い捨てるはずだった下女たちではないか。やはりマクシミリアンの残酷な意図に気付いて衛星に向かわなかったのだ。

下女に憎しみの表情や怒りの声があるならば、マクシミリアンも言い返し怒気をぶつけただろう。しかし下女は何の表情も浮かべていない。すべて能面の顔をして忍び寄る。

ここに至ってマクシミリアンは怒りよりも恐怖が上回る。

「ま、待て、お前たち！ 何のつもりだ！」

下女たちは更にナイフを刺してきた。

ゆっくりと、しかし浅く。

急所は全て外してある。それだけが下女たちの知性を感じさせる。

能面の下女たちが入れ替わりながら刺していく。決して急所を刺さず、繰り返す。繰り返す。

ナイフが次々とその手に渡っていく。むろん、マクシミリアンの懇願に何の反応もない。

「お前ら、いつもいつも俺に従っていたらどうが！ 忠誠心はどこに行った！ 俺はお前らの主人だぞ！」

この時だけはナイフにねじる動作が加わった。マクシミリアンはそれ以上言葉を続けず、苦痛の叫びに変えるしかない。

幾度刺され続けても傷は浅く、そしてマクシミリアンの巨体が持つ体力が無駄に死を引き延ばす。

「痛い痛い！ 分かった、いくらでも金をやるぞ！」

痛みに耐えきれず、ついに悪態ではなく懇願に変える。

「頼む、やめてくれ、俺が悪かった！」

それでも下女たちのナイフは止まらない。

マクシミリアンが絶命したのは、それからたつぷり二時間もしてからのことだ。刺し傷は実に百を超えるものだったが、それでも過去に振るった電磁ムチの回数に及ぶものだろうか。下女たちの怨嗟は半分も報われていない。

死んだマクシミリアンに残された表情はその生きざまにふさわしい泣き顔だった。

「ここだ！　ここにいた！」

「あ、倒れてますね。煙に巻かれて、いや、違う。凄い出血です！」

「まだ息がある。直ちに艦に運ぶぞ！」

この広間に駆け込んでくる者がいた。そして倒れて意識のないエリザベートを確認し、まだ生きていると見るや素早く移送にかかる。

「良かった、見つかった。しかしこの出血は……　ブラスターに撃たれたのか。助かればいいが」

広間にはエリザベートの他には誰もいなかった。たった一つ、死体が転がっていたのを除けば。

下女たちはマクシミリアンが死んだのをしっかりと確認するまでいたが、その後は去っていたのだ。エリザベートについては、敢えて痛めることもしないが絶対に助けようとしたわけでもない。マクシミリアンの被害者でもあり、カストロプ家の一員でもあるエリザベートに対して愛憎あつたのだろうか。

「原因はあれかな、ドレウエンツ」

「何ともいえませんが、ともかくマクシミリアン・フォン・カストロプの方は死亡ですね。それで、この死体はどうします？」

「ほっておけ。じきに帝国軍がやってくる。そっちに任せよう」

二人ともマクシミリアンには良い感情を持っていない。わざわざ死体の搬送などするつもりはなかった。

ゆつくり目を開けた。

ここはどこなのだろう。私は生きているのか。

あの広間での様相が思い出される。兄マクシミリアンは私を幾度も撃ち、そしてどうなったのか。

「気が付かれましたか。エリザベート・フォン・カストロプ嬢。安心して下さい。命に別状はありません」

「ここはどこですか。宇宙船の中ですか」

わずか聞こえる音と振動から、エリザベートは宇宙船だと察しがついた。

「そうです。本艦は先にカストロプ家に貸与されたフェザン艦です。私は艦長のオルラウと申します。今、本艦はフェザンに帰投しているところです」

「それでは帝国軍が追ってくるでしょう。帝国軍が反乱の首謀者カストロプ家の者を赦すはずがありません。私を引き渡さなければフェザン艦にまで迷惑が及びます。覚悟はできています。助けて頂いたことには感謝しますが、しかし直ちに引き渡しを」



「いいえ、そのことですが、帝国艦隊が我らを追ってくることはありませんでした。不思議なことです」

それからエリザベートは説明を聞いた。

エリザベートの傷は快方に向かうだろうということ。簡単な止血がされていたこと。エリザベートは知らないが、下女たちはそこまでのことはしていた。

そして何より、兄マクシミリアンがあの場で死んでいたことを淡々として聞いた。

自分でも判別できない思いが胸をよぎる。

それは悲しみとも安堵ともいえない深いものだ。

兄の人生とその最期は、何の意味があったのだろうか。

良き方向に行った可能性はなかったのだろうか。どこかで道を間違えただけで。

楽しく微笑みながら生きる人生、兄と私がカストロプ家の残った家族として、手を携え協力する姿にはなれなかったのだろうか。

そんなことは夢だ。

兄妹二人が手を取り合う可能性は微塵もなかった。兄の方がそんな人生を選ぶ意思はなかったのだから。現実には現実である。

そして兄の死によってカストロプ家の叛乱に終止符が打たれた。これ以上迷惑をかけることはない。

館は燃え落ち、下僕も下女もその多くが死んだということだ。

死者たちはもう語ることはない。悲しみも恨み言も。

せめて安らかであれ。

多くの人を巻き込んだ悪夢は終わった。

深い静寂がそれに取ってかわる。

悲劇はようやく歴史の彼方に埋もれたのだ。

そしてエリザベートは自分がなぜ救出されたのかも分かった。

「我らは事前にエカテリーナ様に二つの要件を授かっていました。一つは戦闘によってフェザン艦隊に損害が出た場合、二割を超えれば自動的にフェザンに戻るよう、と。これはカストロプ家のために艦隊をすり潰されることがないための配慮でしょう。実際はアーサー・リンチ司令官が殿について我らを逃してくれましたが。それで館の広間に到着するのが間に合いました」

エカテリーナが安全弁を用意していたのはいわば当たり前のことだ。しかしその配慮は結果として必要なく、フェザン艦隊には大きな損害はない。アーサー・リンチの

潔い最期がそれを可能にした。

「そしてもう一つのこととは、エリザベート様、あなたのことです。エカテリーナ様は必ずあなたを救い、殺されたり自害することなく連れ帰れと厳命しておいででした」

「そう、やはり」

エカテリーナの配慮だった。

それはいかにも考えそうなことだ。エリザベートが覚悟を持って兄と対峙することを予期していたのだろうか。

そこから救い出す。友は、友を見捨てない。

帝国軍がカストロプ家の私領艦隊を倒し、最大の問題である防衛衛星も突破したことはオーディンのの政府に到達されている。大乱になりかけた事件は燃え上がることなく終息に向かうことが確定したのだ。

国務尚書リヒテンラーデ侯は深い溜息と共に思考の海に沈む。

「ようやく終わったか。大変な騒ぎだったの。いや、終わっていないのかもしれないね」

「終わったが終わっていない、確かに。リヒテンラーデ、考えていることは分かる。単純に喜ぶ気にはなれん」

「そうじゃな、エーレンベルク。以前なら帝国は絶対であり、弓を引くことなど考えられ

もせんかった。それが当たり前じゃった。知らぬうちに帝国が変わってきたのかもしれぬな。カストロプ家のことはいわば表層に過ぎぬ。心せねば」

「これからの帝国、頼むぞ、リヒテンラーデ」

リヒテンラーデはエーレンベルクの言い方により、その真意が分かった。

「それはいかん！ いかんぞエーレンベルク。引退など早い！」

「いや、どのみちイゼルローン要塞失陥の引責は誰かがせねばならん。カストロプ討伐がかなっただけでも儲けものと思わねばな」

「引退などせずともよいではないか。帝室に忠義なるものの数は残念ながらもう少ないのじゃ」

確かに、本当に忠義の者は少ないのだ。そして帝国は大きい。支えるには一人でも多く必要なのに。

「リヒテンラーデよ、貴様がいれば帝室は大丈夫だ。何だその顔は？ 儂が褒めるのがおかしいか。ならば口だけでなしに一番上等のワインで形にしてやろう。今夜、館に来い。二人が初めて参事になった年のワインを一本残してある」

「おお、あの年か…… あの頃とは人も帝国も変わったの。懐かしいものじゃ」

もうそれ以上は言えない。引き留めることはできないと悟った。

リヒテンラーデにもエーレンベルクと同じ思いが去来する。

それは二人の若い頃、未来には希望があり、信じる正義に傾倒できた頃だ。そんな日々は帰らない。

## 第五章 帝国の崩壊

### 第五十話

487年 8月

波の間に

エリザベートはまたもう一つのことを思った。

なぜ帝国軍が追つてこなかったのか？

その理由について、うつすら想像するしかできなかつたが、まさしくそれは外れていない。

事件の終結から少し前のこと、宇宙艇で脱出したヒルダとマリンドルフ伯の二人は安心というところから程遠いところにあつた。

何と、惑星表面から対空ミサイルが追つてきたのだ！

二人に限らず、慌てて宇宙港から脱出してきた宇宙艇は少なくない数に及ぶ。それらに次々とミサイルが当たり、墮とされていく。

もちろんマクシミリアンの指示により逃げ出そうとする人間を皆殺しにするためだ。命だけは守ろうとした人々は結局それもできず、宇宙艇もろとも散つていく。

ヒルダの宇宙艇の周りにいくつも眩い火球が生じては外壁を照らし出す。その度ごとに小窓から強く明かりが差し込み、ヒルダの瞳に輝く光点を作る。内心の焦りは相当のものだったが、それでもヒルダは操作を進めていく。先ずは救難信号を上げた。

その上での確に操舵していく。ミサイルの発射地点から遠ざかるようにジグザグを描く。その上、他の艇にミサイルが先に当たるよう、先読みして航路を交わらせるのだ。多少悪辣だが仕方がない。

緊張する読みの勝負、ヒルダはそれに全て勝った。

救難信号を受けたキルヒアイスと帝国艦隊が二人の保護に全力を挙げる。

「急ぎ弾幕を張って下さい。惑星への降下は中止です。保護を優先させます」  
弾幕だけでは撃ち漏らしが出る。小型のミサイルというものは本当に厄介だった。そのため艦艇ごと間に割って入り、戦闘用艦艇の強力なシールドでミサイルを弾こうとした。

それでも間に合わない。

ヒルダの宇宙艇の周りには、もう一隻も他の宇宙艇はなかった。ただしその前に爆散の破片が飛んでいたのだ。それがヒルダの艇に当たっていた。

この宇宙艇に次々と異常が生じていく。

「第二エンジン緊急停止。第一エンジン出力低下。冷却系に損傷あり、現在出力40%」  
合成音声が入況を知らせてくる。あまり良くない報告だ。

もうミサイルを避ける操船どころか航行まで不可能になりつつある。

「外壁に複数の亀裂、船内気圧の低下、自動修復開始」

不気味な振動に加え、あちこちから機器の作動音が聞こえてきて本当に心臓に悪い。  
どこかで鈍い爆発音が聞こえた。

ふいに髪に風を感じる。音声が言う通り、どこから艇内の空気が漏れているらしい。いくつも風船が流されていくのが見える。これは粘性樹脂でできた風船だ。船体に損傷箇所がある場合に作られて浮かぶ。空気漏れに緊急で対処するためのもので、当たると破裂して損傷箇所を塞ぐ。隔壁閉鎖までそれで凌ぐのだ。

危急を知らせる赤い明滅と警報音まで加わってきた。これは本当に危ない。

ところが、唐突にミサイルの雨が止んだ。

カストロプの館でミサイル発射を操作していたオペレーターがマクシミリアンとエリザベートの対決を見て逃げたためなのだが、この時点でそれは知らない。

そこで帝国軍はようやく救助を成し遂げる。



ヒルダの宇宙艇を囲み、危険な箇所に急速冷凍措置を施す。そして壊れかけた扉を外から開けて二人を移乗させた。

これで帝国艦隊は人質になっていた伯爵家二人の救助を達成できたのだ。当然、艦隊司令官が挨拶をする。

「本艦隊を任されています、ジークフリード・キルヒアイス少将です。お二人ともよくご無事で。以後は安心して当艦でおくつろぎ下さい」

その司令官は赤毛で長身だった。勇猛な軍人にはどうてもい見えない。想像していた将官級帝国軍人のイメージとは大違いだ。

「ご厚意に感謝します。キルヒアイス提督」

「お気遣いなく。フランツ・フォン・マリンドルフ伯爵。」

……しかし、不思議なことに宇宙艇にはお二方の他に誰もいらつしやいませんでしたが、どなたが操艦を？」

「はは、驚かれるかもしれませんが、実はうちの娘がそれをやっていたのです。少々お転婆が過ぎる娘です」

「ヒルデガルト・フォン・マリンドルフと申します」

「お嬢さんが、あの操艦を？」にわかには信じられません……わたくしもその操艦を見ていましたが、驚くほどの確で見事なものでした。帝国軍人でもあれだけのことは

できないでしょう」

「本職と比べられるとは、過分なお言葉いたみいます」

そんな会話をしながら、ヒルダはキルヒアイスを観察している。

穏やかな表情と真摯な姿勢は本物であり、人質の救出ができて心の底から安堵していると感じ取れる。任務達成という意味ではなく、二人の人間が助かったことを喜んでゐるのだ。

「ともあれ本艦隊は作戦が終わり次第、帝都オーデインに帰還する予定です。お二人はどうされますか？」

「私は帝国政府に経緯説明のためオーデインへ一緒に参りますが、娘はできればマリィンドルフ領にお送り頂きたい」

フランツ伯は娘ヒルダのことを気遣っていた。

娘は今回の動乱に関わり、あのマクシミリアンに対応しどんなにか消耗しただろう。最後の脱出劇も大変なものだった。しかも事の発端は気乗りしない娘を連れてきた自分にあるのだ。マリィンドルフ領にてゆっくり静養すればいい、と考えていた。

それをヒルダがきっぱり断る。

「いいえ、一緒にオーデインに参ります、お父様。帝国政府への証言は私もしなくてはな

りません。何より、まだ惑星に残っているエリザベート様のために」

キルヒアイスには言葉の意味自体は分からなかったが、この賢そうな娘が何かを意図しているのが分かった。

「今もキルヒアイス提督に申し上げます。今回の反乱を企んだのはマクシミリアン・フォン・カストロプただ一人です。カストロプ家の一員とはいえ、妹エリザベート様は関与しておりません。いいえ、それどころかエリザベート様は兄マクシミリアンを止めようと死ぬ覚悟で残りました。その証言を私がいたします！　そもそも私たち二人を脱出させてくれたのはエリザベート様なのです」

なるほどそういうことだったのか。

キルヒアイスはエリザベートが防衛衛星を無力化したことをもちろん憶えている。

そのおかげで指向性ゼツフル粒子を使わなくて済んだのだ。その内応には感謝してもしきれない。

どうやらエリザベート・フォン・カストロプは必死に兄を止めようとしていたのだ。

ただし、ヒルダの証言があっても、帝国がどうするかは別のことだ。

単純な罪でさえ縁者まで揃って罰を与えるのが帝国だ。

ましてやこれほどの大反乱、首謀者の妹を帝国が助命するなどとは考えられない。む

しろそんなことを主張するヒルダの方が反乱への深い関与を疑われたらどうするのか。

先に、マリンドルフ家は脅されてやむなくということ、反乱への関与は不問にする  
と通達されている。もしもそれさえフイになったら。

キルヒアイスの見るところ、目の前の娘は非常に聡明であり、そんなことは分かり  
切っていると思える。しかし断固として言うのだ。

「救われた私はなんとしてもそう主張しなくてはなりません。私はそうします、お父様」

ともあれ、オーデインへの帰還前に艦隊は惑星降下作戦に移る。

ベルゲングリューンが装甲擲弾兵の指揮を任せられ、ビュローは工兵隊を率いる。

二人はカストロプロ側が地上戦に持ち込んで徹底抗戦するつもりが全くないのを知る。

懸念は杞憂だった。

凄惨な地上戦にはならない。

それどころかカストロプロの警備兵は怯えて逃げるだけだ。時折来る射線も思わず  
撃ってしまったというだけで、戦意は全くない。何をどうしたらよいのかも分からない  
ようだ。

装甲擲弾兵は何も抵抗を受けないうちに主要な箇所は押さえた。工兵が通信設備や  
エネルギープラントを調べ、トラップや自爆装置などがセットされていないかチェック

する。

司令部があると思われるカストロプ家の館は何もする前から発火していた。

もう消火は無理かもしれないが、まだ猛火ではなく、装甲擲弾兵の重装備であれば多少の炎は跳ねのけることができる。

そのまま内部の探索にかかった。

反乱の首謀者マクシミリアン・フォン・カストロプをやつと発見したが、既に死んでいた。仮司令室らしい広間に死体が寂しく残されている。

自殺などではなくナイフの刺し傷が無数にある惨状だった。

更に調査したところ、カストロプ家の残りであるエリザベートはフェザーンの手の者に救助され、既にフェザーンへ向かっていると判明した。

キルヒアイスの任務は惑星占領ではなく、反乱の討伐である。その完全遂行のためには、まだ生きている関係者を根こそぎ捕らえてオーディンへ連行すべきなのである。見せしめに行われる処罰は生きている者にしか下せない。

そしてキルヒアイスの手腕をもってすればフェザーンに向かう艦隊に追い付くことは充分可能である。追い付いて撃滅する脅しをかけ、エリザベートの引き渡しを要求すればそれがかなう。

だがこの時、キルヒアイスはエリザベートの捕縛のため追うことはなかった。

ヒルダの言葉を信じた。

復讐や見せしめのために罪のないエリザベートを捕まえることはしない。

この惑星の混乱を鎮め、秩序を保つことが必要という理由をつけて動かなかつただ。

「遅かつたじゃないかキルヒアイス。お前のことだ、また余計なことをしたんだらう？」  
討伐作戦を全て終了し、オーデインに引き揚げてきたキルヒアイスを出迎えたラインハルトが最初に言ったのはそんな言葉だ。

特にねぎらいはしない。

戦いに赴くのは軍人として当たり前のことだと思っっている。更に言えば、ラインハルトにとって戦いが嫌なものだという認識はどこにもない。

加えて結果については言及する必要すらない。キルヒアイスが勝って武勲を上げるのは当然のことと思っっている。それ以外はあり得ない。

「申しわけありませんラインハルト様。カストロプ家の者がいなくなつた後、領民の混乱がひどく、多少手を貸す必要がありました」

「なるほどそうか」

遅くなったのは事実である。

キルヒアイスは勝つただけで戻りはしなかった。きちんと領民を安堵させ、秩序を取り戻し、暮らしが安定するように取り計らったのだ。

キルヒアイスの優しさの発露である。

むろん、気持ちだけではなくそういった行政的施策にもキルヒアイスは極めて有能だった。

混乱はほどなく収まり、食糧分配や治安維持も問題ない。

「一時はどうなることかと思いましたが、カストロプ家の頃よりもずっと良くなりました。このままキルヒアイス様が治めて下さったら、どんなに嬉しいか」

心の底から感謝する領民たちはそう言ってキルヒアイスが離れるのを残念がったほどだ。

「まあいい、キルヒアイス。お前がいけない間にいよいよ始まったぞ。今回は俺の出番はないから、年寄りがどこまでやれるか、見物といこうじゃないか」

「ついに始まったのですか…… うまくいくでしょうか」

特に説明しなくとも二人にとって自明のことである。

帝国軍はイゼルローン要塞を獲られたままにはおけない！

要塞奪還作戦が始まっていたのだ。

今回は元帥に就任したばかりのラインハルトが作戦を担当することはなかった。帝国軍で最も信頼感のあるベテランのミュッケンベルガー元帥がその任をになう。

動員戦力は何と四個艦隊六万隻にも及ぶ。帝国が一度に動員する戦力としては近年にないものだ。

それらをミュッケンベルガー元帥が率い、イゼルローン回廊に向かった。

「キルヒアイス、うまくいくものか。その程度で陥ちるものなら叛徒がとつくに陥としている」

「ラインハルト様もお人が悪い。であればそれとなく助力してみては。司令官はともかく艦隊の一般兵たちがむざと死ぬのは頂けません」

「いいや、あの年寄りもまるつきり無能ではない。たぶん、ひと当てしてみようというだけじゃないか。まだこの時期なら、叛徒があつたの要塞を完全に運用できるとも限らん。そこに勝機があればよし、無ければ戻ってくるだろうな」

ラインハルトは、その年寄り、ミュッケンベルガー元帥を最低限は評価している。

実際のところミュッケンベルガーの心づもりもラインハルトの言つたことと一致していた。



それと同じ時、オーデインの片隅で、ある者の心にわずかな波が立っていた。ヒルダは今回のカストロプ領での出来事を思い出す。

様々な事があり、嫌な記憶も多く、できれば消し去りたいほどだ。

危機も多かった。

父親共々よく無事に脱出できたものだ。

最後は帝国艦隊に保護された。それは心から感謝する。特に、いつも穏やかで心優しいジークフリード・キルヒアイスという司令官に。

戦艦に逗留していると、将兵と話す機会もある。むしろヒルダの方が積極的に話しかけたものだ。兵たちと会話をしていると、キルヒアイスがいかに凄い司令官であるか、いかに卓越した指揮をとるか、心酔しているような言葉を聞くことが多い。

確かにそうなのだろう。

ヒルダもキルヒアイスの行った艦隊戦のあらましは知っている。

ただし、ヒルダは何か別の感情が起きるのも自覚していた！

それは全く理不尽であることも自分で分かっている。

けれど思ってしまうのだ。

キルヒアイスが悪いのではなく、感謝のみあるべきだと理解していても。

「私がいくら策を考えても、あの心優しい将には何も通じなかった。アーサー・リンチ提督も、一万隻以上の艦隊も何もできずに負けている。私が戦いの条件を整え、情報を得て、万全の戦力を用意したつもりなのに……私の考えなどは何の価値もなくただ粉砕されるだけのものではないか」

いいえ、それは違う。

ジークフリード・キルヒアイス提督という別格なまでに優れた将が相手だったからであり、他の者相手なら勝ったはずだ。

しかしここでキルヒアイス提督に打ちのめされ、最初から風下に立つと認めてしまうのは、早すぎる。

もちろん同じ正義に立つならば頼もしい味方としか言いようがない。しかし仮に相反する立場であったとしたら、その時はどうなる。

いや、自分はどうする。

後世にその名を轟かす稀代の大戦略家、ヒルデガルト・フォン・マリンドルフが終生の好敵手と認め、知謀の限りを尽くす相手と巡り合った。

まさにその瞬間である。

## 第五十一話 487年 9月 新天地へ

その頃、オーデインから遠く離れたフェザーンでも慌ただしい動きがある。

ついに帝国は察知して、フェザーン政府に圧力をかけてきたのだ。

銀河帝国を揺るがした武力反乱、その首謀者マクシミリアン・フォン・カストロプは死んでいる。しかしその妹エリザベート・フォン・カストロプが生きてフェザーンに逃れている。

巧妙なキルヒアイスの報告書があるうと兄妹がいるのは分かっているだから、帝国がその事実を知るのは時間の問題である。

艦隊戦まで伴う大乱である。

帝国政府に真正面から対決し、その絶対権威を踏みにじった。

討伐が済んだとはいえ、関わった者を軒並み極刑に処さなければ帝国の威厳が保たれないのだ。ヒルダの証言は案の定それをとどめることはできない。

フェザーンに対し内々に、しかし強硬に帝国はエリザベートの身柄の引き渡しを求めてきた。

「エカテリーナ、あなたに迷惑はかけられない。私は覚悟はできているわ。オーディンで刑に処せられることは怖くない。カストロプ家の者としてけじめをつけたいの」

渦中の本人は淡々としてそう言った。

そんなエリザベートをエカテリーナが見つめる。

「それは本気？ 違うでしょ、エリザベート。誰も本当に死にたい人はいないわ。あなたは突然兄がいなくなつて、まだ新しいことが考えられないだけよ。そんな空虚な気分はいつか変わるわ」

「そうかもしれない。でも今、フェザーンに迷惑がかかるのも確かだわ」

「生きていれば、するべきことも必ず見つかるわ。それにエリザベート、フェザーンのことなら心配要らない」

「これは大きく出たな、エカテリーン。心配要らないと言うか」

いつの間にか横にいたアドリアン・ルピンスキーが二人の会話に入ってきた。

「個人的な友誼は結構だが、フェザーンのことも考えてもらわねばな」

そうは言うものの、詰問するような言い方とはまるで違う。

それが分かっているエカテリーナは、ひたすら恐縮するエリザベートと違い、あつさり返す。

「それでもフェザーンのことは心配要らない、でしょう。お父様」

「親の足元を見るとはお前もしたたかになったものだ。それは嬉しいことでもあるがな。まあ、今回のことを言えば、お前の言う通りだ。今帝国はイゼルローン要塞に力を注いでいる。余力などあるものか。フェザーンに対し面倒なことを言うのはポーズにしか過ぎず。今フェザーンと事を構えるなど帝国には悪夢でしかない」

アドリアン・ルビンスキーは合理的に物事を考え、エカテリーナと同じ結論に達している。

ただし完全に同じではなく、付け加えがあった。

「アドリアン・ルビンスキー自治領主様、そう言って頂いて感謝の言葉もございません。ただ、ご好意に甘えるのも心苦しく、いつそ帝国の心証を良くするため、取引材料に使って頂いても構わないと思っております。それが私の最後の役割りだと」

「エリザベート嬢、覚悟は結構だが今は素直にエカテリンの言うことを聞いてもよいのではないか。それに実はこちらも欲がある。ただで安全を提供しようというのではない。それなりの代価は頂くつもりだ」

エリザベートはこの言葉を妙に思った。

とてもありがたい申し出ではあるが、ただではないとは、何だろうか？ カストロプ家

の財産のことだろうか。

エカテリーナの方は黙っている。多少の察しはついていたのだ。

実は昨夜、アドリアン・ルビンスキーが言っていたことがあった。

「エカテリン、妙だとは思わんか。このところ帝国内部の情報が同盟に伝わるのが早い。早過ぎる。どうせ諜報活動をお互いやっているのだろうが、これは同盟の方がよほどうまくやっている証しだ。組織が優れているのか、個人の技量が良いのかは分からないが、ともかく驚くほどうまくやっている」

「そうですね。お父様。カストロプ家の叛乱のこともタイミングよく同盟は掴みました。そうでなければイゼルローン要塞を取れるわけもなし、取れても素早く奪還されたいでしょうね」

「そうだ。まあ、同盟が優秀なこと自体は、パワーバランス維持からは歓迎すべきとも言えるが」

「しかし困ったこともあると、そう思っているのでしょうか。お父様」

アドリアン・ルビンスキーは情報の重要さを誰よりも熟知している。当然、情報戦の勝負についても多大な関心があるのだ。

そして見るところ、同盟は帝国に圧倒的に勝っている。この意味は何か。

エカテリーナはそれに加え、考えを先取りして言つてのけた。

だからアドリアン・ルビンスキーは満足感を覚えながら言葉を足していく。

「同盟の諜報活動が優秀ということは、当然わがフェザーンの情報も安全ではないということだ。しかも帝国の情報同盟に流れるには必ずここを通る。お膝元の我らフェザーンがその流れを把握できないまままでいいものではない」

「確かに、気分は良くありませんわ」

「これは絶対に調べてみる必要がある。秘密裏に。どこでどうなっているか分からん以上、既存の者ではなく、できれば新しい者に調べさせたいものだ。」

エリザベートに安全を保障する一方、要求する対価とは。

おそらく、その昨夜の会話と関係がある。

「エリザベート嬢、今、空虚で投げやりな気分にいるのなら、仕事をしてはどうだろう。フェザーンのためやってもらいたいことがある。それに帝国に言い訳するにも都合がいい。仕事というのは自由惑星同盟のところに行つてもらふことだからだ」

「やってみたらいいわ、エリザベート。案外それに向いているかもしれないわよ」

アドリアン・ルビンスキーもエカテリーナもそう勧めてくる。

むろんエリザベートに否はない。

クールな取引ではなく、自分を心配してそう仕向けているのがよく分かるからだ。

「分かりました。私で本当によろしければ、是非お願いします」

このありがたい申し出を受けた。

フェザンは帝国に対して言い訳ができる。エリザベートを自由惑星同盟に行かせれば、叛徒のところへ亡命して逃げられてしまったといえるのだ。その実、フェザンのために重要な仕事をしてもらう。

おまけにもう一つのことをアドリアン・ルピンスキーが言っている。

「エリザベート嬢、もしも過去を消してしまいたいのなら、うってつけの方法がある。この場合は仕事上必須のことでもあるがな」

「自治領主様、それは何でしょう?」

「名前を変えて行かねばならん。それに名を変えると気分も変わるだろう」  
偽名に変えた上で同盟に送り出すのだ。

あれこれ相談した挙句、その名前はオーレリー・ボアヌと決めた!

それは古い時代の聖人の名から来ている。帝国ではまず聞かない名前であり、いかにもフェザンならではの雰囲気がある。

「オーレリー・ボアヌ、なんだか不思議ね。確かに新しく生まれたような気分よ、エカテ



リン」

「いい名前だわ。そうだ、エリザベート、じゃなくてオーレリー、あなた言葉は大丈夫？」  
これからエリザベートは自由惑星同盟に行く。

しかも首都星ハイネセンにあるフェザーン弁務官事務所の補充職員として派遣される立場をとる。ハイネセンがその仕事場であるからには、周りは皆それなりのエリートがそろっている。

むろん全員が同盟の言語も何不自由なく話せるのは最低限のことだ。

「同盟の言葉はたぶん大丈夫だと思うわ。女学校も役に立つものよ」

オーデインの女学校では言語学上の大きな柱として自由惑星同盟の言語も習っている。

もちろん、帝国語と対等という扱いではない。

帝国語よりもはるかに洗練されていない野蛮な言葉としてである。当然それは学問的な意味ではなく政治的な偏向のためだ。

元々言語というものは、例えば詩を書くのに向いている、あるいは論理を記述するのに向いているなどということはあり得なくもないが、優劣など付けられるはずがない。しかし帝国の人間は頭から帝国語の優位を信じている。ただし、同盟語も現実に話す人口は多いわけで、一種の教養として習うのだ。

実際に自由惑星同盟の人間と接することが無くとも、過去の遺物の死語よりは教わる価値がある。帝国では、諜報員などでなくとも知識人であれば多少は同盟語を知っているのだ。

特に貴族用女学校は他の実用的な政治・経済・科学の科目がほぼ皆無である代わりに、こういう人文的分野の授業は多かつた。

「そうね。あなたは素行不良の割には学校の成績は良かったんだわ、エリザベート。じゃなくてオーレリー」

周りの方が間違えてどうする。

二人は大きく笑った。

エリザベートの方は、言葉にはしないが「エカテリン、いくら何でもあなたから素行不良と言われるなんて」という笑いも含まれている。

エリザベートが降り立った地表は旅客船の内部よりもやや温度が高かつた。

この惑星の最大都市ハイネセンポリスは予め盛夏の季節と聞いている。実際そうだろうと感じられた。太陽も眩しいくらいだ。

青空が澄み渡る。

雲が遙か上の方にあるのが見える。

風が爽やかに肌を撫でている。もしも風がなければ汗ばむほどだったろう。

ただし、暑過ぎて困ることはない。

今のエリザベートはすっきりと機能的なスーツを着ている。オーティンや領地にいるときにはドレスが当たり前だったが、これからはスーツが基本の服装になるのだ。特別な舞踏会の時など以外は。

「私の名はオーレリー、庶民の生まれ、父は動力供給公社勤め、フェザーン文科大学毕业」  
これから成りきるべき与えられたプロフィールを誦んじる。架空のものだが、だからこそ完璧に覚えておかなくてはいけない。

「そして一人娘……」

この時ばかりは胸がチクリとしてしまう。

あの兄のことが心に浮かびかけて、慌てて振り払う。そんなことを思い出してはならない。

エリザベート・フォン・カストロプという名で今まで自分の歴史が積み重ねられてきた。それは否定しえない事実だ。

しかし、これからは新しい名、新しい場所、新しい自分として生きる。  
それがどのようなものになるのかは分からない。これから決まる。いや、これから決めるのだ。流されることなく、前を向いて生きる。

しかしこの時、誰にも予見しようがなかった。

エリザベートの歩みが、銀河の歴史へ兄よりも遥かに大きな足跡を残すことになるのを。

## 第五十二話 487年 9月 魅かれ合う者

ハイネセンポリス到着後、エリザベートは早速フェザン弁務官事務所にて赴任の報告に行く。

ゆつくり観光をする時間などあるはずがない。

しかし通りすがりに見るだけでも、街並みや人々の服装に驚く。想像以上に帝国とはまるで違う光景だ。

「オーレリー・ボアヌです。フェザンから只今到着しました」

「君が新しく来た補充要員だね。まあ、気楽にしてくれ」

フェザン弁務官事務所では緊張しながら到着の挨拶をすると、このトップであるプレツエリが対応した。

そう答えながらも、先に送られている人物情報ファイルをめぐりながら項目の確認をするようだ。

「オーレリー・ボアヌ、フェザン文科大学卒業、その後も大学に残り研究生を続けた、と。それはここ自由惑星同盟に興味を持ったのが理由とあるが」

「そうです。帝国ともフェザーンとも異なる歴史、文化、風物、とても面白いと思いで、もう少し自由惑星同盟について研究を続けたいと。ついにながら同盟語もその時に学んでいます」

「それでこのハイネセンポリス駐留フェザーン弁務官事務所の欠員補充に応募したのかな。しかし、同盟に来るだけなら民間でも良いのでは？」

「いいえ、最近では帝国と同盟の戦闘が激化したおかげで、なかなか首都星ハイネセンまで行けるような募集はありません」

それは本当のことだ。

近年は帝国も同盟も出入りが厳しく、制限が設けられている。

むろん比較すれば同盟の方がゆるやかなのだが、最近だけに限ればそうでもない。一時期は治まっていた戦闘がこのところ激しくなったのが大きな理由だ。

しかしそれだけではない。

帝国から脱出してきた亡命希望者を同盟が喜ばなくなっている。昔はそれこそ手放して歓迎したものだ。帝国の圧政から逃れた同志として温かく受け入れていた。ところがそういう亡命者が必ずしも善良というわけはなく、年々犯罪者まがいの者の割合が増えているのが現状なのだ。

同盟はそれに倦み、段々と保守的になってきている。

尤も、貿易自体は帝国と同盟、どちらにも必要なものである以上、今も活発に行われている。

元々レアメタルなどはどちらかにしか産出しないものもある。

それに加え、工業製品の多くがいづれかの領土のみで製造されることが多い。これは長期間の貿易のせいで劣勢な方の工業分野が淘汰されたためだ。長期間続けば続くほど、貿易が無ければお互いが成り立たないような構造になってくる。

それを知っているフェザン人は帝国と同盟のイデオロギーを賭けた戦争など鼻で嗤う。

しかし帝国と同盟が完全に仲良くなれば、嗤ってばかりもいられないことになるのは当のフェザン人も知っているのだが。

ともあれ政治的なことを抜きにすれば、産業的には帝国と同盟、どちらも互いに依存する体質に変わったのだ。一方が混乱すれば必ずもう一方にも波及する。

締め付けが厳しくなればどちらの側でも自国籍の艦船でなければ航行できなくなる。すると当然貿易はフェザンがその中心になる。フェザンで貨物を積み替えることが多くなり、中継貿易の利が否が応でもフェザンを繁栄させるのだ。

「まあ、君はその後、倍率の高い選考を突破し、実際にハイネセンに連れて念願かなった、というところかな」

「そうです。本当に夢のようです。自由惑星同盟の首都星ハイネセンをこの目で見られるなんて。しかも仕事として来れたのですから」

「おめでとう、と言うべきかな。しかしここに憧れている君に厳しいことを言うように申し訳ないが、仕事は多い。それ以上に文化が違うんだ。人々の気風も、食べ物も違う。馴染めればいいのだが。現に最後まで馴染めずにホームシックにかかる人間も多くてね。今回の欠員補充も、そうしたホームシックで帰りがついていた事務員を帰すために長いこと要望していたのだよ」

プレツェリは今、完全にフェザーン弁務官を演じた言葉を投げかけながら、素早くファイルにある他の項目にも目を通していく。

何気ない態度だったが、到着した補充職員のあらましを高速でチェックしながら記憶していくのだ。

弁務官事務所の上司として当然やるべきことではあるが、もちろんプレツェリには別の目的がある。

この目の前の者が、ありきたりの補充要員なら問題ない。仕事ができてもできなくとも。



問題は帝国、あるいはフェザーンの諜報員であるのかどうかだ！

確かにここは情報の通過場所として非常に重要だ。プレツエリの正体を知らず、このルートで諜報員を送り込むことも充分考えられる。フェザーンの者か、帝国の者かは別にして。

ファイルの情報で分かる限り、理屈が通っており怪しいところは全くない。

おまけにその雰囲気ではどうてもいい諜報員には思えない。

それどころか普通の娘よりも浮世離れしたような感じなのだ。馬鹿ではないが感覚的に鷹揚とし過ぎている。諜報員のような鋭さや、あるいは逆に平凡に見せかける擬態というのを感じない。

それでは普通に職員として扱うまでだ。

先ずは見習いの地位に置こう。大学に長くいたのなら、実社会は初めてなのだろうか。

その期間が終われば秘書の補充要員なのだからその仕事をさせよう。

「では、君の最初の仕事は私の秘書の、そのまた補助だ。新たに勉強するべきことは多いので、しっかり頼む」

こうしてオーレリー、いやの任務が始まった。

一方、ここハイネセンの同盟政府中枢部は超多忙中にある。

ヤン・ウエンリーによるイゼルローン要塞攻略はもちろんここにも激震をもたらしている。

長年の夢だったとはいえ、まさかあつけなく実現してしまうとは！

帝国との関係は、軍事的力関係という観点では同盟が持ち直し、大いに改善したと言える。

ただし喜ばしいことばかりではない。

かえって帝国が焦り、軍事作戦をこれまで以上に頻発させることも十分に予想できる。そうなると同盟に決してプラスではない。

まして貿易・経済の観点では未知数なことだらけだ。

それでも情報をまとめ、予測を立て、レポートを作らねばならない。多大な負荷がかかることだがそれは政府の責任だ。同盟のどのセクションでもそれを喉から手が出るほど求めている。

しかし、そんなことだけなら多忙という範疇で済むことかもしれない。

政府要人にとってはもつと頭の痛いことがある。

それは市民の政治的関心、有権者の意見だ。

イゼルローン要塞の攻略以来、次第に好戦的な意見が目立つようになってきた。

積極的な軍事作戦を主張する論説が多数出され、市民もそれになびく。あたかも市民の総意であるかのごとく熱気が高まる。

それは帝国の軍事的能力を知っている者からすれば、深刻に憂うべき事態である。やれば成功する、そんなはずはないのだ。

このままでは浮かれた同盟がどのような冒険をしないとも限らない。確かにイゼロン要塞を取ったことは大きいですが、それは防衛に適するということであり、じつくり帝国をいなしにいけばいいのだ。それがもつとも有効な使い方である。

何もこつちから積極的に仕掛ける必要はない。

良識ある政治家はこれらのことをきちんと市民に説明する義務がある。

根拠のない無謀な熱気を取めるために必要なのだが、反発と支持率の低下を招かずに行うのは至難の業である。

ここでヨブ・トリューニヒトも苦慮していた。

国防委員から国防委員長に繰り上がったばかりだった。そのタイミングでこの事態に遭遇している。

「賭け事でも最初に勝つとのめり込んでのつびきならぬ事態になる。国も同じだな。むしろ少しずつ負け続けた方がいいのかもしれない」

更に嫌なことがあった。

現在の同盟政府トップである最高評議会議長はロイヤル・サンフォードであるが、政治家としての説明責任を放棄している感がある。自身の支持率ばかり気にして、確たる意見を持っていない。

良い言い方をすれば真の民主主義、悪い言い方をすれば存在価値がない。どっちつかずの態度など、トップである人間のすべき態度ではない。

そのため市民の側へのスポークスマンとしての役割も、最高評議会の一人としての根回しも、更に軍部との意見交換もほとんどヨブ・トリユーニヒト一人の仕事となる。

むろんその一環としてヨブ・トリユーニヒトはフェザンとの交渉をすることもある。経済的分野であれば他の委員の仕事なのだが、軍事的な視点では自分が話し合う必要がある。

自由惑星同盟とフェザンは元々微妙な関係だ。

フェザンが帝国の一部という名目上の立場で捉えるなら、明らかに敵同士である。しかし実態はどちらかというと逆であり、対帝国陣営の味方に近い。しかしそんなことは決して明文化できず、流動的なものでしかない。潮流に応じてどうなるか分からないのだ。意見交換は重要な仕事である。

そこでヨブ・トリユーニヒトはハイネセンポリス駐在フェザン弁務官事務所トップ

のプレツエリと話すことが多い。

そんな中、プレツエリの連れている秘書団に見慣れない顔があるのに気が付いた。

その者と直接話をする機会もあるはずはないが、どういうわけか忘れられない顔なのだ。

「国防委員長、何か気になりますか。あの者はオーレリーという新しくフェザンから来た補充の秘書ですよ。まだ見習いですが」

プレツエリは別段他意もなく、あっさりと言明した。

そんな時期である。

同盟とフェザンの外交の一部として親睦のための舞踏会が開催された。

舞踏会を開くこと自体は珍しいことだ。自由惑星同盟にはそういった文化・風習は一般的なものではないのに。

それが開かれたのは、同盟がフェザンともつと親密になりたいというメッセージの意味を含んでいたからだ。フェザンの好むことを敢えて同盟がする、これに意味がある。

しかし実のところ同盟の考え過ぎであり、フェザンがいかに帝国の一部であり文化も帝国風なところが残っているとはいえ、そんな風習はない。そのため実際のところ弁

務官事務所の職員で舞踏会が楽しみな者は少なく、むしろありがた迷惑なこと甚だしい。

各自舞踏会の準備をする。

エリザベートはしまい込んであったドレスを着た。一応同盟まで持ってきていたのだ。さすがに貴族社交界に着ていった頃のような豪華なものではないが、シンプルでもかなり上質のものである。それくらいがカストロプ家の悲しい遺産といえる。

エリザベート自身も今のところドレスの方がよほどしっくりくる。いずれはスーツの方が体に馴染み、ドレスは着なれないものになるのだろうか。

舞踏会というのも懐かしい。

以前は一日置きに舞踏会があったといっても過言ではない。オーティンの女学校の上級生だった頃が一番多いだろうか。気を使うことも多々あるが、基本的には楽しいものだ。軽やかな音楽、きらめくシャンデリア、絢爛たる会はやはり心躍る。

久しぶりの舞踏会なのだ。

今は銀河帝国指折りの大貴族令嬢という立場ではないが、楽しもう。

エリザベートはそのドレスを着こみ、舞踏会に臨んだ。

「何だ、あの新任の秘書見習い、やけに上手いな」

そんなエリザベートの姿を見てプレツエリにちよつとした驚きがある。ダンスが上手い。

それもテクニツク的に身に着けたという程度ではなく、もはや基礎が完璧なのだ。これは長い年月をかけてようやく到達するレベルである。

しかしプレツエリが注目したのはそこではない。ダンスが上手いだけならば、そういう家に育つたということも考えられなくはない。おかしいのは堂々とした雰囲気なのである。

秘書見習いという立場は当然この同盟政府主催の舞踏会において最も下つ端の地位になる。大多数の者にとつてどうでもいい取るに足りない存在だ。

政府高官が多数集うこの場所では、秘書見習いは必要以上に委縮するくらいが普通ではないか。

ところが、あたかもこの舞踏会の主役のように輝いているではないか！ それも自然な立ち振る舞いのままに。

放つオーラは他を圧して、人々の視線を釘付けにする。

そういば、とプレツエリはもう一つのことを思い出す。

おかしなことと言えば、普段からあの秘書見習いオーレリーにはおかしなことがあ

る。

身に付けるアクセサリーや靴など、よくよく見るとちぐはぐな点が多過ぎるのだ。やたら高価なものと、どこにでもある安価なものが混在している。

あまりに奇妙なことに思えたので、プレツエリが聞いてみたことがある。

「他意はないのだが、オーレリー君に聞きたいことがある。今君が付けているペンダント、その宝石に見える物が模造品であればいいのだが。もしそうでなければ窃盗に狙われたら大ごとだ。ハイネセンポリスの治安は安定しているが、完全でもない。そんな心配をしてしまうくらい随分と高そうな物に見える。本物であれば、それは何か先祖伝来だったりするのだろうか」

「あ、すみません。そこまで考えませんでした。このペンダントの宝石のことでしょうか？ これは本物です。本物でなければ輝きが薄くなりますから。つい先週街で見つけて買ったのです。なんだかいいペンダントだな、と思ったもので」

プレツエリが最初に理解したのはこの秘書見習いにとんでもなく金銭感覚が欠如しているということだ。

ちよつと妙である。情報ファイルでは彼女の父親の職業は特に高給だという感じはない。であれば代々の金持ちなのだろうか。買う物の値段を見てから買っているとはとうてい思えない。



次に思うことがある。

秘書見習いは、自分の感性のみ信じて買っている。

高かろうが安かろうが、自分に合うものを自信を持って選んでいる。これは成金の育ちではない。普通なら、値段がそのまま価値と感じてしまうところを、そうではなく自分が主体となっているのだ。

最初からとんでもなくハイクラスの家庭に育ったのではないか…… おかしなことだ。

しかし、むしろこのせいでプレツエリはオーレリーという秘書見習いが諜報員の類いであるとは少しも考えなかった。もしも諜報員であればそんなおかしなことをして目立つわけがない。

このエリザベートの踊る姿をヨブ・トリユーニヒトもまたじつと見ていた。

幾度か逡巡し、溜息をつく。

ついに意を決し、近付く。それはダンスを申し込むためだ。

「オーレリー嬢、新しく弁務官事務所に赴任してきた方とお聞きしました。私はヨブ・トリユーニヒトと申します。あなたはダンスがとてもお上手ですね。ついていけるかわかりませんが、どうか私と一曲お願いします」

「オーレリー・ボアヌと申します。まあ、それではあなたが自由惑星同盟の国防委員長でいらつしやいますのね。お名前はかねがね存じております。ええ、私でよければ喜んでお相手させてもらいます」

口で謙遜するほどにはヨブ・トリユーニヒトのダンスは下手ではなかった。二人は流れるように踊り、回り、手をたおやかに繋ぎあつた。

この舞踏会の白眉ともいうべき麗しいダンスは周囲を魅了するほどに美しい。

結局、四曲もそのまま踊つた。

「とても楽しい時間でした。オーレリー嬢。また機会があれば踊りたいものです」

「ごちらこそ、国防委員長。是非」

そのまま満足の笑みで二人は離れるはずだった。

だが、いきなりエリザベートの目に涙がこぼれてしまう。

自分でもなぜだか分からない。

特に悲しいわけではない。舞踏会は楽しかったではないか。

おそらくダンスをきっかけにして昔の記憶がごちゃごちゃに動き、深い所で情動になつたのだろう。

ここしばらく偽名を使って新天地で別人のような生活をしているため押し込められていたものが、舞踏会という懐かしい場でひよっこり出てきたのだ。

「どうされました？」

言つてからヨブ・トリユーニヒトはしまった、と思つた。

本当なら見なかつたふりをして離れるべきだつた。

それが紳士の態度だ。女の涙の由縁などどんな時でも聞いてはならない。理由を聞くなどほぼ最悪の態度だろう。

「いいえ、済みません。何でもないので。私にもよく分からなくて」

正直にエリザベートが言う。それしか答えようがない。

「そうですか。つい気になつてしまったもので。オーレリー嬢、何か、できることは」

「いえ、こちらこそ気を遣わせてしまつて。ありがとうございます、国防委員長」

こうした会話をして二人は離れた。

ヨブ・トリユーニヒトは初めてプレツエリの秘書団の中に彼女を見たときから気になつていた。

何かが違う。この嬢は他の人間にはない何かがある。

普通とは違う、強い生き方をしてきたような。

そしてこの涙はヨブ・トリユーニヒトの心を動かす決定打となつた。

エリザベートの方でも、この闊達な青年政治家が見かけ以上に魅力あふれる人物であることを知った。手腕や経歴、地位から想像するよりもよほど純真だった。そんな人間は真つすぐ何かの理想を追い求める人間でもあると知っている。

しかも暖かく、優しい。

何年一緒にいても親しくならない間柄もある。

時間をかけてゆつくり熟成される恋もある。

ふと気が付いた時、恋であることを知ってしまうこともある。

だがこの場合には、たったこれだけの時間で充分だったのだ。

二人が恋に落ちるには。

## 第五十三話 487年 9月 奪還作戦

艦隊が大要塞に挑もうとしている。

それだけなら特に奇異なものではない。

過去を見れば、自由惑星同盟軍は実に六度に渡ってそれを繰り返し、帝国軍イゼルローン要塞の前に敗退を余儀なくされている。そのうち四度は要塞主砲トゥールハンマーを使われ、大打撃を被っているというおまけつきだ。

だが今から始まる戦いは立場が真逆だ。

その主を代え、自由惑星同盟のものになったイゼルローン要塞に銀河帝国の艦隊が挑む構図となっている。

帝国元帥ミュッケンベルガーの指揮下、要塞前面に堂々の布陣を組む。ミュッケンベルガーは大艦隊の統率に経験豊富であり、最も得意としている。

「前衛戦艦群、主砲の同期はいいな。揃えねば意味がない」

「元帥閣下、戦艦主砲、同期終わりました」

「よし、では距離を正確に報告しろ。トゥールハンマーの射程ぎりぎりにもっていけ」

このショーは前例がない。今だ誰も見たことのない、とてつもない規模の戦艦主砲同時攻撃になる。

「距離、予定点到達！」

「全艦、撃て！」

光条が宙域を眩しく染め上げた。

帝国艦隊総数六万隻、その前衛の戦艦全てから軌跡が伸びる。

軽く十万条を超える光の棒が束になり、要塞に襲いかかる。並の物体であったなら瞬時にも保たず、消し飛ばされたであろう。

しかし白熱の光条は難なく弾かれてしまった。

要塞の液体金属装甲をわずか蒸発させ、波を立てる程度にしかならない。まさに小揺るぎもしいという状態だ。しかも波もいずれは収まり、何事もなかったかのようになるだろう。

必殺のレーザーやビームといえども鏡面に反射してどこかへ散り、ウラン弾などの実体高速弾は液体に受け止められエネルギーを失う。

いずれの攻撃も貫通にはほど遠い。

さすがに難攻不落のイゼルローン要塞である。

「やはりこうなる、か。意外ではないがな」

特に驚きもせず眩きを漏らす。

艦砲など通じないのは、イゼルローンを知り尽くすミュッケンベルガー元帥には当たり前のことである。これまでは守備側でその堅牢な守りを実感していたのだから。

それでも攻撃をかけたのは要塞液体金属装甲に多数存在する浮遊砲台を牽制するためだ。流体金属層に波が立つてるうちであれば、主砲トゥールハンマーならまだしも浮遊砲台を運用するのは困難になる。

いくら重力場を調整しても狙点は定まらなくなるのだ。高速コンピュータを使っ  
て照準をつけるのだが、それは攻撃する側の艦も同じである。撃ち落とすべき相手もまたそれを回避しようと刻々動くのだから。

「イゼルローン要塞がこちらの物であるときにもそう思っていたが、対峙する側になっ  
ていつそう恐ろしさが分かるものだな。これでトゥールハンマーを撃たれでもすれば、  
これ以上なく分かるのだろうか……」

全くの予想通りであつても、これほどの集中砲火を受けて傷一つ付かないイゼルロー  
ン要塞の防御力にはため息が漏れる。

「次の作戦に移る。ミサイル艦隊、三方から進撃、予定点から順次放て！」

ミユツケンベルガーが今回要塞攻略のため立てた作戦は、浮遊砲台に牽制をかけた上で三方からミサイル攻撃を仕掛け、外壁を破ろうというものだ。

外壁を破れば、陸戦隊を送り込み白兵戦で要塞を占拠できる。要塞主砲トゥールハーマーは威力は絶大でも小回りは利かず、多数の強襲揚陸艇の接近を阻止できはしない。

これはかつて叛徒が用いたことのある陽動作戦と似ている。トリツキーなことをして成功に近づいたが、最後までうまくいくことはなかった。

今回、同じような作戦をより大規模にして帝国側が使うのだ。

これは艦隊機動兵力で上回る帝国軍でしかできない作戦といえる。なぜなら強襲揚陸艇は防御側に艦隊戦力が残っていれば駆逐されてしまう。

しかし今、要塞内に駐留している叛徒の艦隊は少なく、あえて出撃してくる可能性はあまりない。いずれは応援に駆けつけてくる艦隊があるかもしれないが、それはまだ先のことだ。

つまり今現在、艦隊決戦は明らかに不可能である。防衛は要塞そのものの防御力に頼るしかない。

こうなるとミユツケンベルガーの作戦も十分な勝算がある。ただし、下手なことをしてトゥールハーマーにより本隊かあるいはミサイル攻撃艦隊が大損害を受けてしまつ



たら話にならない。

だが逆に言えば叛徒が要塞を充分に使いこなせず、トゥールハンマーの運用に遅れが出れば作戦は確実に成功する。

「トゥールハンマー全放射器浮上、姿勢安定。反応炉と接続、充填開始。狙点固定よし。発射準備シークエンス完了！」

「撃てー！」

イゼルローン要塞内部の管制室でヤン・ウエンリーが指示を下している。

帝国軍のミサイル攻撃艦隊が要塞へ忍び寄っていたが、その最も重要な部分を狙い撃った。

膨大なエネルギーを含む白い帯が伸びていくのが見える。

このトゥールハンマーの威力により、一気に千隻もの艦が消し飛ばされた！

艦も人も痕跡すら残さず虚空に変えられたのだ。最初からそこに何も存在しなかったかのように。

多大な建造費をかけた戦闘艦もはや存在しない。

数十年の間歩んできた一人一人の人生さえ無に帰す。正にゆりかごから幾多の季節を生きてきて、色々な人と出会い、泣きも笑いもした人生が宇宙のこんな場所でききな

り最期を迎える。

帰りを待つ人がいる方が幸せなのか、いない方が幸せなのか、深刻な命題だろう。

一つ言えるのは例えようもなく残酷だということだ。

「続けて近い方の帝国攻撃艦隊に向けトウルルハンマー砲台移動、反応炉のエネルギー産生量を最大のまま保ち、充填再開のこと。」

その指示に沿って同盟軍のオペレーター達がきびきび動いている。

「どうやら間に合いそうですね。先輩。三方から同時に仕掛けられた時にはヒヤヒヤしましたよ」

「うん、そうだなアツテンボロー。これは教頭のおかげだな」

「そうですね。もちろん、帝国軍の作戦を読んで、コースも想定していた先輩も凄いですよ」

二人の会話に出てくる教頭というのは現実の教頭のことではない。

グリーンヒル大将のことを指して言っている。

シトレ元帥がかつて士官学校の校長であったから、二人はシトレ元帥を今でも校長と呼んでいる。グリーンヒル大将はそのシトレ元帥の側にあり参謀長として補佐することが多く、それをもじって教頭と呼んでいるのだ。

「確かに見事なもんでしたね、こっちのオペレーターやメカニックたちは。システムも規格も違う。それなのに全然戸惑うことがない。先輩の指示にドンピシャ応えたとは」「やれやれアッテンボロー、こいつは一杯食わされた。校長も教頭もイゼルローン攻略をあんなに深刻ぶって命じておいて、実は攻略できる前提で準備していたんだ。出来レースだったんだよ」

「でも悔しがることじゃないでしょう。それで今助かったんですから」

「それはそうだ。アッテンボローの言う通りなんだろう。しかし、悔しいのと感謝とは両立するんだなあ」

もちろん本気でヤンが怒るわけもないし、むしろ今は感謝してもしきれない。

イゼルローン要塞に赴任してきた同盟軍の技術者たちは、見事にこの帝国製の要塞を使いこなしたのだ。それでヤンの指示にしっかり応じられた。

長年かけて同盟軍情報部はイゼルローン要塞の情報を集めている。

そのハードウェア的なスペック、またソフトウェア的な運用などどんな情報でも貪欲に欲した。もちろん攻略に不可欠だからである。

設計図の奪取、設計者の買収、勤務していた帝国技術者の脅迫、あらゆることを試みている。そういった同盟軍情報部のたゆまぬ努力の結果、イゼルローン要塞の設計と運用をほぼ掌握することができていた。

そこから更にグリーンヒル大將は要塞を奪取できた場合のことを考え、間髪おかずに運用が可能になるよう準備をしていた！

何もかも違うシステムをいきなり扱うのは無理である。帝国と同盟では規格の違うものが余りに多い。設計思想そのものに違いがある。

実際の運用はスイッチの置き場所一つつまずいただけで時間を取られ、全体が上手くいかないのは分かっている。そうならないためにはけっこうな訓練を必要とするのは当たり前だ。マニュアルを用意するだけではとうてい足りない。

グリーンヒル大將は同盟軍の最高練度のオペレーター達の中から更に精鋭を選び出していた。その上で事前に入念な訓練を施している。

そのおかげなのだ。

ヤンがあらましを言うだけで、オペレーター達はトゥールハンマーもスムーズに運用する。

この戦いの後、ヤン・ウエンリーは更に名を上げるが、今度の魔術はヤンよりもグリーンヒル大將が立役者だろう。それをよく知るヤン自身がそう言い回ったものである。

ミュッケンベルガーの努力は報われることがなかった。

せっかく三方から同時に仕掛けたミサイル艦隊は、見事にコースを読まれた。

その上でいずれもトウルハンマーに狙い撃たれ、大半が何もできずに散った。見事なまでに効率的にトールハンマーの使つてのけられたのだ。そこに隙などなかった。

「叛徒がこれほどうまくイゼルローン要塞を運用するとは、計算違いだった。冗談ではなく帝国軍より上手いくらいいではないか。ミサイル艦隊の残存は撤退だ。本隊はその援護をしろ。仕切り直しだ」

作戦中止と決めればまごまごできない。統制を失つて混乱しているミサイル艦隊を今度は浮遊砲台がつけ狙うだろう。

その後もミユツケンベルガーはあれこれ工夫して仕掛けようとするが、やはり要塞の防御に阻まれ、攻略には程遠い。

やがて自由惑星同盟側から進発してきた応援艦隊の接近を感知するとそれさえ断念する。

もちろん帝国艦隊の規模は大きく、艦隊戦に転じてそれら相手に憂さ晴らしすることも可能かもしれない。

しかしミユツケンベルガーは正しく兵法を理解していた。戦略的目標と戦術を混同するほど無能ではなかったのだ。

今回の目標はあくまで要塞の奪還である。艦隊戦を演じるのは作戦には含まれず、目標を達成できないのであれば他のことは意味がない。

「残念だが撤収する。このまま続けても要塞奪還の可能性がないのは歴然だ」

攻守ところを代えてから、第一回目のイゼルローン要塞攻防戦は同盟が無事乗り切った。

要塞中に歓声が上がリ、シャンパンが開けられる。

ヤンはベレー帽を投げることにそしないが、少しの間だけ持ち上げ、将兵の歓呼に応えた。

「要塞守備なんて慣れないことをするのは疲れるなあ。だからブランデーが必要なんだ。グリーンヒル中尉、紅茶にブランデーをいつもの倍入れてくれないか？」

きれいな短髪のプロントを持つ秘書官フレデリカ・グリーンヒル中尉は一瞬だけ目を丸くする。

「ヤン提督、論理に何か飛躍があるようですよ。でも分かりました。いつもの1.5倍を入れて差し上げます」

「え？ グリーンヒル中尉、いつもブランデー一滴だけじゃないか。その1.5倍って、どうやって入れるんだい」

ヤンは論理的に考え、不思議な顔をする他ない。

「こうやります」

フレデリカは紅茶を一杯持つてくると、ブレンダーを2滴加えた。そこから中身のいくらかを別の紙コップに移し、その後でヤンに渡した。ヤンが呆れて見ているとフレデリカは移した方の紅茶を自分で一息に飲んだ。多忙な業務が続き、フレデリカも疲れていたのだ。

## 第五十四話 487年 9月 会議室の戦い

帝国はイゼルローン要塞奪還が成らなかつたことに失望した。

この戦いは非常に局地的なものであつたが、いくつかの波紋をもたらず。

直接的にはミュッケンベルガー元帥の発言力が低下してしまう。出撃しても奪還を果たせなかつたのは事実なのだ。

むろん、戦いについて見る者が見れば、単にひと当てしただけに過ぎないことが分かる。

非常に戦理になつてゐることは明白であるし、むしろ損害を最小限にするため潔く撤退した方を賞賛するべきだと。

ただし末端の兵にはそこまで分らない。

自然、ミュッケンベルガーの評価が下がる。

兵たちはもちろん死ぬのが嫌であるが、自分が死ぬのでなければ帝国が負けるのは我慢ならないのだ。

帝国政府の文官もまたその通りである。相対的にもう一人の帝国元帥であるライン



ハルトの評価が上がり、次の軍事作戦はラインハルト・フォン・ローエングラムが行うものという空気が生まれていた。

そしてもう一つの波紋はいつそう深刻なものである。

皮肉なことに、防衛に成功した側の自由惑星同盟がその舞台である。

この防衛戦の少し前、イゼルローン要塞奪取成功を市民たちは大いに祝ったものだ。その大戦果に心から酔った。長年の悲願であっただけにその余韻が長く続いている。

次第に好戦的な空気になるのは自明のことだ。

スポーツチームでさえ大勝利すれば関心が増し、ファンも増える。ましてこれは自由惑星同盟の国是に関わる現実の戦争だ。勝ち負けは即刻雰囲気反映される。

その感情的な濁流を、現実派官僚や反戦派代議士が必死になって押しとどめている。依然として人口・国力とも帝国が上であり、現有機動戦力もまた数段の格差がある。それが厳然とした事実だ。

同盟最高評議会国防委員長ヨブ・トリューニヒトもそんな現実派の一人である。

「今、帝国軍と戦うべきではない。むしろ、絶好の休息の機会ととらえるべきだ。生産リソースを拡大再生産に振り向け、確固たる基盤を作らねばならない。人口や経済の成長率が帝国より常に上回る状態になるようにもっていく。戦略的にそれが最も重要であ

り、いやそれなくして最終的な勝利は無い。成長こそが戦略的勝利の鍵となる。実際の戦術などはそれが軌道に乗った後の話だ」

この時、トリューニヒトは、帝国との和平条約交渉まで夢想していたヤン・ウエンリーには及ばずともそれに近い考えをしていた。

そしてヨブ・トリューニヒトは自分の支持者のみならず、広く市民にそう呼びかけた。反戦派代議士と宥和し、その協調をアピールすることさえも考えた。

これは警戒心ばかり強く、独善的かつヒステリックな反戦派の方から拒絶されたのが。

ところがミュツケンベルガーによるイゼルローン要塞奪還作戦とその撤退は、そんな和平努力を一気に無駄にしてしまった。

市民は同盟軍の積極攻勢を渴望してやまない。

その熱気がメディアの論調を覆い尽くす。連日テレビでは楽観的に過ぎる予想が流される。

タレント出身の安っぽいコメンテーターたちはこぞつてにわか評論家になる。

どこから捻り出したかと思われるグラフなどを用いて、同盟の戦力優位を言い立てる。一部を誇張し、都合の悪い部分を故意に隠されたデータが次々に出てくるものだ。

それだけなら国家が動くわけではない。

だが、ついに同盟最高評議会にその議題が出る時が来た。

一般市民の井戸端会議ではなく現実政治に及んだのだ。

いかにも客観的に出てきた議題であるかのようになりながら、議長ロイヤル・サンフォードが軍事的積極策を決めたくてたまらないものだということは、多くの評議員にとって明白である。

国防委員長としてその場にいたヨブ・トリューニヒトもうんざりした気分だ。

議員たちを見渡す。その中でもホアン・ルイなどは最初からだるそうにあくびをしている。自分とはあまり話したことはない議員だが、その心中は同じなのだろう。

しかし、気を引き締めなければならない。自由惑星同盟のためこの会議だけは的確で説得力のある演説をする。

目をぎらつかせ、今日の議題を賛成多数で通したくてたまらない議員たちの方を向いた。自分の得票のために軍を利用しようと思っっている連中だ。

軍事作戦が仮に上手くいったら「たかが数十万人死んだだけで、それは相手より少ない」と言うであろう。そして失敗に終わったら「残念なことに数百万人が死んでしまった」としか考えない。

この連中は同盟がどうなろうと関心が無い。極端に言えば、自分が議員である任期の間だけ同盟が存続していればいいのだ。

会議は順次進み、一般的な討議事項を終え、最も重大な議題に差し掛かる。

議長ロイヤル・サンフォードが帝国への積極的侵攻作戦についての方針を説明する。

そしてここからいよいよ討議だ。

「議長、発言してよろしいでしょうか。帝国への出兵に関して、人的資源委員としては実現不可能と主張します。理由は申し上げるまでもないでしょう。労働人口、生産力はマインナス成長に入つて久しい。そのため現在、同盟の社会システムは現状を維持するのに精一杯であり、かろうじて破綻しない程度であります。それはまさにガラス細工と言ふべきもの、帝国への出兵はそれにハンマーを振りかざすごとき愚行でありましょう」

ホアン・ルイが機先を制して堂々と反対意見を述べた。

ありがたい。

ヨブ・トリューニヒトも続けて語る。

「国防委員からも説明させて頂きます。わが同盟の現状機動兵力は帝国の六割程度に過ぎず、帝国領への出兵による戦線の急拡大は自滅行為になります。戦力を投入すればするほど帝国の思うつぼの結果を生むでしょう。加えて言えばせつかくイゼルローン要

塞を奪い、守りの拠点を得た意味がなくなり、よしんば緒戦で勝ち進み、ある程度進軍できて、占領星域を確保し続けられる見込みは全くありません」

無駄だった。

帝国領への出兵は議員賛成多数で可決された。

論理的な反対意見も、ウインザー交通委員の下らない精神論の賛成意見も、最初からどうでもよかつたのだ。

この会議は出兵という結論ありきの出来レースだった。

ヨブ・トリューニヒトは最後まで抵抗し、議決には反対を押し通した。

ただし、ここで投げ出してしまつては政治家ではない。

落胆はするが、次善の策を練るのをやめてはいけない。現実というのは100%うまくいくことは望めないものだ。それでもふて腐らず努力を継続する。それが政治家の責任というものではないか。

「出兵に決まつたものは仕方がない……しかし、同盟の傷を最小限にする方法を考えよう」

この会議の後も、ひたすら各委員と粘り強く折衝する。国防委員長としての権限を活かしながら味方を増やす努力を惜しまない。

後は軍部から提出されるだろう作戦案が理性的なものであることを望み、それに判断を付けるだけだ。

一方、具体的な出兵計画を検討する同盟軍統合作戦本部も決して一枚板ではない。ピルの高層階の一室において、それについて話し合われている。

「今回は事が事だけに私も我儘を言うつもりなのだがね。グリーンヒル君。帝国本土へ向けて侵攻とは、今までにない規模のものになるだろう。しかも未知数は多い」

「シトレ本部長、私は全く同意します。ロボス元帥が指揮をとれば、おそらく無秩序な戦線拡大を図るでしょうから。そうなればリスクは計り知れないほど増大します。ここは是非とも本部長が侵攻作戦の総指揮を」

「多少悪辣ではあるが、策を講ずることにしよう。私としては同盟軍内でそんなところに配慮しなくてはならないのが残念なことだがね」

いち早く同盟軍の統帥作戦本部長という職をうまいことロボス元帥に譲り渡さなくてはならない。意図を気付かれる前に。

それはうまくいった。

もともとロボス元帥は別に好戦的というわけではない。第一線で帝国軍と戦いたいという気持ちはない。今までどちらかといえば積極的に戦いに出たがっていたのは、自

分の出世の手段にするためだ。

自分が安全な範囲内ならば戦う。負ければ部下や情勢のせいによければいい。もちろん勝てば自分の功績として出世に使う。戦う理由は単純だ。

結果的に恨みを買うこともあるが、それ以上に人が集まってくる。権勢が増していく人間にはおこぼれにあずかろうと人が寄ってくるものだ。

そんなロボス元帥にとって自由惑星同盟軍最高の地位、統帥作戦本部長という職は涎が出るほど魅力的だった。

シトレ元帥と交替にその職に就き、地位の上では逆転したのだから得意満面だ。

こうしてうまく出世に見せかけながらロボス元帥を躍らせ、艦隊戦の現場から引き離れた。

その直後、帝国領出兵について政府から具体的作戦案作成及び提示の要求が来た。

ロボス元帥はここでようやくシトレ元帥の真意を理解できた。

自分を出兵作戦に加えないためだったのか！ それは若干不快なことではあるが、それ以上ではない。本部長の椅子を手に入れたことも事実だ。それに満足感があり、わざわざそれを投げうって第一戦に出るとまでは言い出さなかった。

さて、シトレ元帥とグリーンヒル大將が中心となって作成した侵攻作戦案は手堅いも

のだった。

できれば出兵などしたくないに決まっている。

しかし、政府が命じることであるならば従わざるを得ない。文民統制の軍としては。ただし、現場に携わる者としてリスクを最小限に抑える案にするのだ。

幸いにも政府は作戦内容に関わることは言っていない。単に帝国領へ侵攻をしようとだけである。

案は決まった。

最大の懸案である規模に関して、五個艦隊で出撃する。中途半端な規模ではかえってリスクが高い。綿密に検討を繰り返し、この規模に決定した。

侵攻ルートはとにかく手堅く、主要航路を離れない。

そして決して分散せず、周辺星域を探っていく。

作戦目的は航路の確定と惑星住民の実態を知ることだ。それ以上のことではない。今までもそういった情報は手にしているが、あらましを伝え聞いた程度と実際に目で見ながら調べるのではきつと違いがあるだろう。

決してこちらの方から帝国艦隊との会敵は求めない。

それは虫のいいことと言わざるを得ず、いずれ帝国側は実力で排除しようと迎撃して



くるであろうが、なるべく接触を避ける。

また、帝国の生産設備の破壊といった戦略的打撃を与えることもしない。なぜなら、どのみち帝国にとって辺境星系の重みなど大したことではなく、逆にリスクが大きくなるので見合わないのだ。

つまり、まとめて言えば派手ではない。艦隊がまとまって帝国領に入り、そして引き返すというだけだ。

華々しい戦果を求めることは最初から放棄している。敢えていえば、ただの偵察だ。

同盟軍からこんな作戦案の提示を受けたヨブ・トリューニヒトは大変満足した。

それは驚くほど自分の意に沿っている。

今まで、軍部を好戦的な集団、資源や生産力を食いつぶしてはばからない集団と色眼鏡で見えていた。しかしこの作戦案は見事に理性的だ。

この案をそのまま最高評議会に提示するが、あまりに消極的であると不満が噴出した。

帝国を一気に征服などの威勢のいい言葉をなぜ入れないのか、と。

そして得られる予定のものが、余りに地味で、市民にアピールできない、と。

しかし、シトレ元帥やグリーンヒル大將は評議会の席上に赴き、数字を使つて丁寧に具体的に説明していった。特に出兵にかかるコストについて入念に説明した。評議員にはこれが一番効き目があると分かっている。

グリーンヒル大將はこのためついに切り札を使った。軍の後方部からドーソン大將を同行してきたのだ。

「同盟最高評議会の皆様、艦隊維持の経費、そして作戦行動に移った場合の経費、戦闘で損害が出た場合の復旧経費、どのくらいかご存知でしょう。一艦当たりには換算して」

ドーソン大將は思った通り、莫大な作戦コストと当初予算との不調和について熱弁を振るつた。

「物資は消耗だけでなく、貯留しておくだけでもコストがかかります。その上イゼルローンどころか帝国領とは、膨大な輸送コストまで必要です」

それはシトレ元帥やグリーンヒル大將も唸るほどの説得力だった。

「さあ、皆さんのお手元にそれぞれ計算機を用意しました！ 実際に自分の手を使って計算して頂くためです。より具体的にお分かりになるでしょう。今から言う数字を打ち込んで下さい。まずは通常国防予算の何日分に値するか比較計算です」

後方部らしい思いもよらないパフォーマンスまで用意していた。

これに最高評議会の委員たちは音を上げてしまう。

元々自分たちの選挙の票のための出兵計画である。戦果は欲しいが、コストはかけたくない。しかもコストは勇ましい精神論でも隠せない。現実の数字だからだ。もしも選挙の対立候補に後々攻撃材料として利用されてはかなわない。

終わってみると、ほぼ最初の提案がそのまま通る結果となっている。

「おいドーソン、やってくれるじゃないか！ お前を呼んだ甲斐があった。委員たちも目を白黒だ」

「ドワイト、俺は嘘は言っていないぞ。数字は嘘をつかない」

「分かっているさ、もちろん。だが助かった。これで出兵計画が修正と称して拡張されることはないだろう。牽制をかけられたのだから上々だ。どうだ、今夜家で飯でも食おう。礼代わりに何か作ってやるぞ」

「お前が作るのか。士官学校から器用な奴だと思っていたが。お前がするから娘が飯を作れなくなつたんじやないか」

娘フレデリカ・グリーンヒルの料理下手は噂でドーソン大将も知っていた。

しかもその理由まで正確にその通りだったのだ。

「まあ、それを否定はしないが、娘はたまたま別の方向に才能が偏っただけだ」

かわいい娘のことだけにドワイト・グリーンヒルも反論する。それには根拠もある。

娘は士官学校次席卒業の才媛、歩く記憶装置と呼ばれているのだ。

「俺も料理の才能があるわけじゃないが、ジャガイモの皮は向こうが見えるくらいに剥いてやれるぞ」

儉約を申し渡すのにジャガイモの皮の厚みまで調べたというドーソン大将の噂を使い、ドワイト・グリーンヒルも逆襲した。

二人はその夜、笑いあつて厨房に並び料理を作る。

それを聞いた者は、「家の厨房なんかに同盟軍のルークとナイトが揃つて、言うべき言葉もない」と呆れたという。

## 第五十五話 487年 9月 帝国領侵攻

同盟軍の帝国領出兵計画はほぼ原案のまま通った。

粛々と出撃準備にかかる。シトレ元帥を総司令とし、グリーンヒル大将が総参謀長に就いた。

今回動員される機動艦隊は、

ルフェーブル第三艦隊

ビュコック第五艦隊

ホーウッド第七艦隊

アツプルトン第八艦隊

ウランフ第十艦隊

という五個艦隊、艦艇総数六万七千隻に及ぶもので、一度に動員する数としては空前の規模になる。

各艦隊の準備状況や配備位置などを考慮して決められたが、軍内の主戦派を軸にした上でロボス派の諸将も加えている。後々のことを考えると一応ロボス元帥に配慮した

形としておいた方がいいからだ。

しかし、ここに実績のない艦隊はない。しかも攻勢と守勢、バランスのいい構成になっている。

ドーソン大将とアレックス・キャゼルヌ少将という有能なコンビにより、後方物資の集積が予定量に達した。疲弊した同盟の生産力、予算の少なさを乗り越え、作戦を決行できる分だけは用意できたのだ。

艦隊の編成、新兵の訓練も終了した。

五個艦隊は管轄している各同盟管区から出発、そして次々とイゼルローン回廊に入る。

イゼルローン要塞周辺で集合し、勇壮な姿を見せた後、いよいよ回廊の帝国側出口に向かつて進軍する。

そこから先は同盟軍にとって未知の帝国領だ。

イゼルローン要塞では、そんな同盟艦隊の出兵をヤン達が見送る。

「先輩、どうです。同盟が勝ちますかね」

「校長と教頭がいるんだ。なんとかなるさ。アッテンボローが心配することもないだろ

う」

要塞守備の続行を命じられ、ヤンとアッテンボローの同盟第十三艦隊が出動することはなかった。

だからこそ見守るしかできない。

「なんとかなるって、先輩もアバウトな。まあ、深刻ぶられるよりマシですけどね。それなら聞かなきゃよかったって思うだけですから」

アッテンボローが壁にもたれながら手を広げて感想を言う。それは全く確かなことだ。

「アッテンボロー、果報は寝て待てというだろう。昼寝でもして待つき。でも案外と早く帰ってくる可能性が高い。校長は危ないことをしないだろうから。戦いになるとも限らないしね」

「そのまま寝てて下さい。でもキャゼル先輩には見つからない方がいいですよ。なにせ後方補給部はてんでこ舞いですから、精神衛生上先輩の昼寝は見せない方がいいでしょう」

二人の士官学校の先輩であるキャゼルもまたイゼルローン要塞に来る予定だ。ここが帝国領侵攻作戦のための輸送物資貯蔵庫になるからである。

この同盟軍の動きは直ちに帝国側も察知する。

もちろん迎撃のために帝国軍が編成される。叛徒の軍が帝国領に出てくるなど未曾有の事態だ。それがオーデインを突こうというものでないことくらいは分かるが、だからといって静観するなどということは有り得ない。

確実に撃滅し、帝国の威信を保つ。

迎撃作戦の総指揮をとるのはラインハルト・フォン・ローエングラム元帥となる。

「行くか、キルヒアイス。家にハエが入ってきたようだ。目障りだから退治しよう」

いつもの通り表現の幅が広い、というか例えが妙なのがラインハルトである。本人は気に入ってそう話しているのだが。

「ラインハルト様。情報によると向こうは五個艦隊ほどの大規模で侵攻してくるようです。ハエではなく、家に野良犬が入ってきたくらいなのでは？」

「そうだな。しかし、できれば全軍で来ればよいものを。全軍余さず平らげれば、こっちにも好都合というものだ」

この大言壮語は自信の表れだ。

しかし別の意味もある。

何の都合か、二人には口に出さずとも分かっている。

二人はアンネローゼを奪った帝国を赦さない！



最終的にゴールデンバウム王朝を打倒し、この五百年続いた銀河の秩序を根こそぎ引っくり返してやるのだ。

そのためには熾烈な内乱を戦い抜かなくてはならない。

内乱途中で叛徒が要らぬちよつかいをかけてきたら、不測の攪乱要因になる。それができないよう今徹底的に叩いておくことができれば越したことはない。いい機会が向こうから訪れたのだ。

「出撃は今すぐなさいますか」

当然キルヒアイスはラインハルトがすぐに艦隊を率いて出陣し、元帥府麾下の有能な提督たちを使い、華麗な用兵を駆使するものだと思っていた。よく知るラインハルトの性格上、そう考えるのが妥当である。

「いや、今回はそうではない。実はもう決めてある。最初にやるのは相手の補給を消耗させる焦土作戦だ」

「それは、意外なことです。ラインハルト様」

キルヒアイスは正直に驚きを表わした。

そして素早く考え、一つのことを指摘しなければいけないと思ひ至る。

「焦土作戦であれば、帝国の辺境星域にある領民に苦しみを与えるのでは。その苦しみ

が作戦の一部である以上」

「そうだ、キルヒアイス。しかし焦土作戦が最も確実に叩ける。帝国領深くに引きずり込み、物資の窮乏した中で戦わざるを得ないようにするのだ」

「それは、その通りですが、ラインハルト様」

「味方の損害が少なくて済む。俺たちは次のために無駄な損害は出せない」

「艦隊の損失に限って言えば、のことです。ラインハルト様。辺境領民の被害は避けられません」

「これはおかしい。」

益々ラインハルトの性格とかけ離れたことを言う。普段なら、目の前の敵に全力で当たるのがラインハルトだ。

もちろん、キルヒアイスはラインハルトの戦略眼を疑ったことはない。最善手が持久戦ならばそれを採ってもおかしいことは何も無い。

しかし今回は持久戦にせざるを得ない戦力比ではなく、動員できる機動兵力ならば確実に帝国軍の方が上回る。無理せずとも七個艦隊は優に用意できるだろう。帝国領民に塗炭の苦しみを与える作戦など採る必要はないのだ。

「合理的に考えてそういう作戦になったのだ。キルヒアイス、心配するな。餓死者が出るほどの焦土作戦にはしない。叛徒の艦隊が物資徴収に困る程度のことだ」

「それを聞いて安心しました。ラインハルト様」

餓死者が出るほどにならないければ、勝利した後で十分な補償をすれば、取り返しがつく範囲だ。とりあえずキルヒアイスは安堵した。

しかしもう一つ懸念がある。そんな作戦をラインハルトが一人で考えたのだろうか……

いやそんなことはない。

作戦はいつもキルヒアイズと話しながら決めていたではないか。急にラインハルトが独断になるとは思えない。

今回、ラインハルトに焦土作戦案を提示した人間がいるのだろう。

それならキルヒアイズには思い当たる節がある。先のイゼルローン要塞失陥の際、辛くも脱出したオーベルシュタイン大佐という人物が准将としてラインハルトの元帥府に加えられている。

その者は何やらラインハルトに意見をしたがっていたようだ。

キルヒアイズの印象では、極度な合理主義者である。焦土作戦という冷酷で、合理的な作戦をいかにも考えそうな人物である。

「ラインハルト様、その焦土作戦というのはもしかやオーベルシュタイン准将の発案では

？」

キルヒアイスは率直に聞いた。

いつまでも心に引つ掛かるよりは、今すぐに聞いてしまった方がいい。

「まあ、かの者の意見具申の結果、俺がそれを採用した」

若干の歯切れの悪さがラインハルトらしくない。

焦土作戦がオーベルシュタイン准将の発案であることは確かなのだが、それをあまり公表しないよう決めているのだろうか。

それも合理的といえそうだ。准将の意見に元帥が従ったというのは、どちらにとってもあまり良い評判にならないだろう。

焦土作戦も確かに合理的、侵攻してきた大軍を撤退に追い込むには常道ともいえる。古来からそれは確実な撃退法として存在する。それはキルヒアイスも認めることだ。本来のラインハルトらしくはないがその提案が害になつてゐるわけでない以上、反対すべき理由もない。

「どのみちキルヒアイス、最後はこつちから行くぞ。焦土作戦だけで撤退に追い込むのは確かに辺境領民は苦しむ。そうではなく、物資を失い、慌ててゐる叛徒を艦隊戦で叩ききつてやる。家まで帰らせてやるものか」

それはラインハルトがキルヒアイスにわずか気を遣い、いつもの覇気を敢えて見せた

のだった。

シトレ元帥と同盟五個艦隊は当初の予定通り、イゼルローン回廊を出て帝国領を慎重に航行する。

先ずはアムリッツア星系を目指した。その星系自体に占領する価値はない。アムリッツアまでは正確な航路情報が入手できているからだ。

その先が問題だ。

一応、もつと深くまでの航路を諜報活動によつて手に入れていた。また、これまでの幾多の戦いで鹵獲した帝国艦から航路図を取り出し、それと合致していることを確認もしている。

しかしながら、それすら帝国側の巧妙な策謀であり、欺瞞情報を掴まされているという可能性も無くはない。慎重に進む必要がある。

同盟艦隊がアムリッツアの次に到達したのはドヴェルグ星系である。そこは帝国にとつて辺境も辺境、人口も三十万人に達さない程度のものだ。

しかし有人惑星であることには違いない。

すると、同盟軍が占拠した初の帝国領有人惑星という快挙になる！

ところが、領民を観察した同盟将兵は驚いた。

「何と、古い時代を見ているようだ。帝国の開拓惑星というのはこういうものなのか」  
話に聞いていたのと寸分たがわぬ様相にシトレ元帥も驚きを隠せない。

そこで見たのは同盟の辺境星系より遙かに古い生活様式を保ち、貧窮している民衆だった。

この星系の支配者層である貴族代理や警備兵はとつくに逃げている。領民に何も告げることなく逃げたらしく、同盟艦隊が進駐しても民衆は呆然として立ちすくむばかりだ。

調査すると生活様式ばかりでなく、その知識や教育の面でもひどく立ち遅れていた。

いや、遅れているのではなく、支配者層は敢えて民衆に教育を施すことを妨げ、余計な知識を入れない悪意すら感じられる。

「これが帝国の支配のやりかたか！ 民衆も一人一人人間なのに、敢えて何も教えず、何も考えさせず、低い生活レベルで一生の間労働させ、搾取していく。なるほど高価な機械を買って生産性を上げるよりも単純に労働者を増やした方がコスト的には安く済むのだろう。人間は機械と違って勝手に増えるものだから」

同盟将兵は帝国と帝国貴族のやり方に憤りを感じざるを得ない。同盟であればいかに辺境でも科学技術や教育の面で劣っていることはないのに。

「教育を受けない民衆は現状に甘んじ、それがどんなにおかしなことか考えることもできない。一生の間民主主義の存在など知る機会もないのだろう。まさに農奴、機械の部品以下の扱いではないか」

これらの人々を何としても民主制の下に連れ出すのだ。  
改めて帝国打倒の信念を堅くした。

しかしシトレ元帥と同盟艦隊は長居をしない。一ヶ所に留まることはそれだけリスクを増やす。次にビルロスト星系に向けて進路をとる。

ここでシトレ元帥とグリーンヒル大将には帝国軍の作戦が読めた。

「おかしいとは思わないかね。グリーンヒル君。ここまで何も抵抗がないとは」

「元帥、もしこれが同盟なら有人惑星を守りもせず、脱出もさせないことは考えられません。帝国が民衆のことを軽視しているとしても異常なことです。おそらく、帝国軍の戦略的撤退と推察できます」

「そうだ。帝国軍は焦土作戦を取っている。ドヴェルグ星系でも民衆を置き去りにするばかりか生活物資さえ残り少なかった。というより敢えて持ち去られた形跡がある。我々が物資を接収どころか民衆に供出しなくてはならないくらいに」

「もし焦土作戦が本当なら、深入りは避けるべきでしょう」

「よし、次のビルロスト星系でも同じ状況なら焦土作戦であることは確定だ。頃合いをみて後退にかかると」

「分かりました。索敵を充分にすることと、艦隊が分散しないように改めて通達しましょう」

その二人の考察は正しかった。ビルロスト星系でも状況は似たようなものだ。

困窮した民衆と、空になった物資倉庫が見つかるばかりだ。

それが分かると直ちにシトレ元帥は同盟艦隊に撤退を通知した。

元々出兵の目的は領地拡大といった目に見える派手なものではなく、航路の確認、帝国領民の生活実態の観察、帝国軍の補給基地等のデータ収集である。ここで撤退しても充分に目的を達成する。

しかし、シトレ元帥にも意外なことが起きた。

撤退の通知は多くの司令官の疑義という形で返ってきた。普段ならばシトレ元帥に對し、司令官たちが疑問を呈することはなかったであろう。シトレ元帥は能力も実績も、十二分に信頼されている。しかもその人柄は敬愛の対象ですらあった。

だが今回は帝国領出兵というこれまでなら考えられなかった状況なのだ。

四人の艦隊司令官から一斉に意見具申の申し込みが殺到した。

たった一人、第五艦隊司令官ビュコック大将だけは特に何も言わず撤退の準備にか



かった。

「さて、長生きをしたおかげで帝国領という珍しいものを見れたわけだし、そろそろ遠足も終わりじやろう。年寄りは見慣れないところに長居すると疲れるでな」

## 第五十六話 487年10月 意見具申

シトレ元帥の受けた最初の意見具申はウランフ中将からのものだ。

もはや内容は聞くまでもなく分かっていることであるが、シトレ元帥は無下にはせずそれを聞く。

「シトレ元帥に申し上げます。小官も撤退の方向性は正しいと認識しています。ですが、その前にもう少し直接的な軍事的成果を求めてもよろしいのではないのでしょうか。艦隊戦が望めないとしても、具体的には帝国軍補給基地の破壊、時限機雷を敷設しての通商妨害などを行ない、戦略的な打撃を与えるのです」

「ウランフ君。君が積極作戦を求めることは分かっている。そして私も君の意見を否定しない。だがおそらくリスク認識の違いだけだ。ここは敵地深くであり、航路の把握もしていない。更に補給は今のところ強く妨害されていないが、焦土作戦をとる以上、近いうち必ず相手は遮断してくる。そうなれば我々は物資が乏しく、推進剤もミサイルも残りを気にしながら困難な撤退戦を演じる羽目に陥る。要するに時間的な長期滞在はそれだけでリスクになるのだ。どのみち星系保持もせず、艦隊戦も避けるのであれば、

敢えて細かな戦果よりもリスクの方を正しく認識すべきだと思っている」

それを聞き、ウランフ中將は引き下がった。

シトレ元帥の理性的な思慮を認めて納得したのだ。そういった潔さもウランフ中將の美点である。

ウランフ中將は実績も能力もある将帥として同盟軍の至宝である。

同時に主戦派の筆頭格である。その考え方は、軍事的側面では非常に単純明快だ。

「帝国軍を叩く。叩いて叩いて叩きまくる。自分の代で帝国が滅べば最高だが、そうでなくとも次の代で滅ぼせればいい。とにかく帝国軍と戦い、後の世代に託するのが今に生きる人間の責任だろう。いろいろな事を考えるのは、帝国が無くなった後でいいのだ。帝国は誰がどう言おうと民主主義の脅威である。その帝国が存在する限り、とにかく早く滅ぼすために努力するのが正しい」

いつもそう思っているし、公言もしている。

だが根っから単純なわけではない。むしろ思慮があり、正しい判断力を持ち、冷静な分析もする。だからこそ第十艦隊は他の艦隊にも増して戦いに赴くことが多いが、これまで消滅もせず戦い抜いてこれたのだ。

次にシトレ元帥に面会を希望してきたのはアップルトン中將だった。

このアップルトン中將も主戦派に分類される。しかしウランフ中將ほど極端ではなく、柔軟な考え方をしている。これまで同盟軍内において、ウランフ中將やボロディン中將の主張する強硬意見に同調することも多いが、かえって彼らを抑えにまわることもしばしばだった。

それは貴重なバランス感覚であり、ウランフ中將らもそれを認めている。軍内の人望も厚い。

シトレ元帥はアップルトン中將もまた強硬策を主張してくると予期し、ウランフ中將に言った説明をもう一度しようとした。

だが、その前に言われてしまったのだ。

「シトレ元帥、私の前に退出していったのはウランフ中將ですな。ということとは、もう私が積極攻勢の意見を具申するまでもないようです。ただ、戦術的な一つの可能性を提示しておきたく存じます」

「ほう、どのような提示なのかな、アップルトン君」

いったい何だろう。

シトレ元帥は興味を持った。すっかり生徒の答えを採点する校長のようだ。

「帝国領を調査し、なおかつ最終的に撤退するのは何も来た道に戻るばかりではありません。違うルートがあります。ここから帝国領内をフェザーン回廊に向かって進み、そ

ここを通って同盟領に帰還するという方法です。帝国辺境をかすめるコースなら会敵の可能性も低いでしょう」

この案はさすがに斬新だった。シトレ元帥も虚を突かれた格好になる。

「なるほど、君の案は非常にダイナミックで面白い。ただし残念なことにそれを深く検討する時間はなさそうだ。それにフェザン回廊までの航路確定は今後の作戦にあまり重要でもないだろう。」

「確かにそうです。それに艦隊の回廊通過はフェザンの不興を買うやもしれません」  
これで面会は終わる。

アップルトン中將もそのフェザン回廊行きを検討の材料に提供するつもりで言っただけで、強硬に言い張るつもりはなかったのだ。

ここまではシトレ元帥もさほどストレスではない。ウランフ中將やアップルトン中將はいわば話せば分かる将だからだ。

しかし、三人目となるルフエール中將との面会には相当神経をすり減らされることになる。

「シトレ元帥！ 何ら戦果もなく帰るとは、小官にはとても承服できかねる。わざわざ

ここまで出兵してきた意義がどこにあるかと。今回帝国が焦土作戦など姑息な手を使ってきたのは、単に準備が不足して慌てている証左。我らを恐れて正面決戦を先延ばしにしている結果に過ぎないと思えない。ここで一気に帝国中枢部に迫ることこそ我らに課せられた使命と確信する」

主張そのものはウランフ中将と似ていると言えなくもない。

ただしそこに至るまでの思考過程の深さには雲泥の差がある。

「……ルフェーブル君、いくつか君に指摘させてもらう。先ず焦土戦術は立派な戦術だ。帝国軍は慌てているわけでも逃げているのでもない。物資を意図的に不足させておくという計画性がその証拠だ。距離を防壁そのものにするのは古来から常套手段の一つだ。君は士官学校で習わなかったかね。もう一つ、今回の出兵で航路などの幾つか重要な情報が手に入った。これは立派な戦果だよ。君には艦隊戦で敵艦を沈めなければ戦果に見えないのかもしれないが」

それでもルフェーブル中将はせせら笑うだけで引き下がらない。

ルフェーブルはロボス派の中核であり、ロボス元帥がバックについている以上シトレ元帥に遠慮する気持ちなど最初からない。不遜ともいえる態度を崩さないのはその理由からだ。

「そんなつまらないことを戦果と主張なさるなら結構。ただし、私のみならず同盟政府、

そして同盟市民が同じ認識をするという保証はない。同盟市民はそんな詭弁ではなくもつと大きい戦果を望んでいる。私は断言するが、ここで撤退することは同盟軍のせつかくの勝機を手放すことと同義であり、チャンスが臆病のために棒に振つたと後世にまで語り継がれることになる。元帥がそういう評価を望んで受けたと思うのであれば勝手になさるとよろしいが、小官もそれに名を連ねるのは看過できません」

さすがにここまで言われ、温厚なシトレ元帥もわずか眉を動かした。

「臆病？ 私のことを臆病と、君は言うのかね」

「その表現が端的かつ適切でしょう。同盟軍将兵は戦うためにいるのであり、戦わずに逃げる兵に何の意味があるのかと。ましてやそれを命じる司令部に何の存在意義が」

「では君に私の考えをはつきりと言っておこう。妄言を言う余地が無いように。二度とは言わないから承知しておきたまえ」

シトレ元帥にしては大変珍しく相手の話を遮った。どんな相手のどんな話でも最後まできちんと聞くのが常なのに。

「ルフエーブル君、兵の命というものは貴重なものだ。一人一人に恋人も家族もいよう。今、我々はそんな一千万人も兵の命と共に帝国領に入っており、彼らが無事に帰してやるのが私の考えることである。戦うべき時にはもちろん戦う。しかしリスクを常に正しく認識するのが司令部に課せられた責任というものではないか。当初の作戦目標

を変更し、無駄にリスクを負うなど愚か者のすることだ」

ルフエーブル中將はロボス派の中で昇りつめてきた。

そしてロボス派以外からの評判は悪い。世渡りで中將になったという専らの評判である。

もちろん、さすがに同盟軍一個艦隊の指揮官であり、ともかくにも生き残ってこれたのだからあからさまに無能とは言えない。運だけではそうはならないからだ。多少なりとも戦理を理解する才覚はある。

しかしロボス派にくつついていなければ、この地位に相応しくないと見られているのも確かなことである。

誰もがルフエーブル中將をこう揶揄していた。「おべつかをいう以外に何ができるんだろう。そのおべんちやらを言う口と同じ口で艦隊指揮もするんだとよ」

ルフエーブル中將は納得せず、言うだけ言うとして退席した。

「では帝国軍は勝手に勝利宣言をするでしょうな。戦う意気地すらない同盟軍は、帝国軍の陰に怯えて逃げ帰ったと。この政治宣伝に対しても、シトレ元帥は言い訳を準備した方がよろしかろう」

この面会、シトレ元帥も後味は悪い。

お互いに最後の言葉を飲み込んだのはどちらにとつても正解だった。



もしもルフエーブル中将が心に思うだけで出さなかった言葉、利敵行為とまで口に出していたら。シトレ元帥も心に浮かんでいた言葉、艦隊指揮権の一時剥奪を申し渡していたに違いない。

シトレ元帥は最後の四人目、ホーウッド中将と面会した。

同じロボス派であるルフエーブル中将と同じことを言ってくるのではないかと予期し、シトレ元帥はうんざりした気分だ。

だがホーウッド中将の言うことは全く異なったもので、少なからず驚かせられた。

「撤退の方針を示されたことについて、異議はありません。小官がお聞きしたいのは、今まで観察してきたドヴェルグ星系やビルロスト星系をどうするのか、ということですよ。その民衆は帝国の圧政のため、貧困に喘ぎ、労働を強いられてきました。この民衆をあつさり見捨てて帰るのでしょうか。帝国の支配が再び始まれば搾取されるだけです。帝国の民衆だからといって同盟の市民と区別してよいのですか。我ら民主主義の軍隊が来たのに、何もしないのでは何の価値があるのかと」

それは意外な意見だった。

元々ホーウッド中将はとにかく穏やかで地味な存在だ。

ことさらおべんちゃらをいうわけではないが、危険な野心を持っていないことが周囲

によく分かる。ロボス派に対し積極的な貢献はしていないものの、その穏やかさがむしろ操縦しやすいと受け取られた結果、艦隊司令という地位に就けられた。

指揮官としての能力は水準以上と評価されている。ただし、これまでの戦いで積極攻勢の局面において輝くことはあまりなく、撤退の守勢で犠牲を少なくする方が目立つ能力だ。その性格によるのだろう。

ロボス派に属している関係上それ以外からの評判は良いとはいえないが、ただしその人柄から嫌われていることもなかった。

シトレ元帥はさすがに即答できない。

この質問は同盟軍の政治哲学の根幹に関わることだからだ。

「ホーウッド君、それについては、大変に難しい……」

先ずはそれしか言えない。

シトレ元帥としても民衆を救いたいのは山々だ。

だが、現実的には困難なことが多すぎる。

民衆を同盟領まで移住させずに民主化など論外だ。直ぐに帝国軍が来る。中途半端に民主主義の種を播き、責任を取らないのは最悪の結果を招くだろう。

帝国の弾圧と民衆の悲劇、おそらく流血で終わるのは火を見るより明らかだ。

帝国は必ず民衆を危険思想に染まった病原体のように駆除にかかる。

その場合同盟は、彼らを捨て駒に使ったという汚名を受ける。

かといって民衆を同盟領に移動させようとした場合、はたして民衆自体がそれを望むだろうか。

いいや、生活基盤を捨て去つてまでも同盟領に来るとは考えられない。今現在、民衆は民主主義を理解しているわけでも傾倒しているわけでもないのだ。同盟領に来ようという自発的な意志がないのにもかかわらず移住させれば、すなわちそれこそ民主主義ではない。

最後に考えるべきは仮に帝国領民を同盟に移住させた場合、帝国の方はどう受け取るだろう。

おそらく拉致略奪としか認識しない。

帝国は今まで同盟領の有人惑星をしばしば掠めとつてきた。人をまさに拉致して思想矯正という名目で事実上の農奴にしたことは多い。

それに対し同盟はもちろん非難し、政治的プロパガンダに使い、同盟星系の結末に使っている。今後、同盟も同じことをしているではないかと口実を与えることになってしまふ。拉致が堂々と正当化されてしまふことになる。

答えに詰まるシトレ元帥に対し、ホーウッド中將もそれ以上詰問することはない。

「元帥、対応の困難さは小官も充分承知しているつもりです。ではせめて、農業技術書や工作機械を現地に置いていくことを許可願います。政治的なことはともかく、少なくとも彼らの暮らし向きが向上するようにしてやればと思います」

それは同時に敵国を富ませることもでもある。戦略的にはやってならないことだ。しかし、シトレ元帥は快諾した。

「もちろん、それは許可しよう。人道的なことであるからには戦略より優先する」

「元帥、それともう一つ、今の段階で同盟への移住を希望する人間についてだけは艦隊と同行することも」

「それもいいだろう。入国審査や許可については私から取り計らう。今回、進軍できた星系の民衆だけでも救いたかった。それがかなわなくて私も残念に思っているのだよ。ホーウッド中将」

その結果である。ホーウッド第七艦隊所属のヴァーリモン少尉は帝国領で恋仲になったテレエを同盟に連れて戻った。ほどなく結婚して二人は幸せに暮らした。

こうして帝国領出兵は少なくとも二人の人間を幸福にすることはできたのである。

シトレ元帥と同盟軍五個艦隊は何ら戦わず、一兵も損じることなくイゼルローン要塞への撤退を完了した。



## 第五十七話 487年10月 空洞の帝国

「しまった！ 結局逃げられたのか。叛徒どもは艦隊戦をする気が無く、すぐに戻るつもりだったとは…… 忌々しいほど理性的だ」

こう言つてラインハルトが悔しがる。

敵艦隊が帝国領に深く入ったところを満を持して反撃にかかる予定だった。

逃さず叩き、全てを討ち果たすために。

多数の艦隊を準備し、取り掛かろうとしたその矢先、敵は間一髪のところまで消えていた。

戦いたかつたラインハルトは大いに悔しがる。

ところがその様子を見るオーベルシュタインの方は何も表情を変えず、事実だけを言つた。

「敵は撤退しました。帝国領を守り切つたことこそを功となさるべきです。戦う機会はこの先いくらでもあるでしょう」

戦いそのものを欲していたラインハルトの内心を承知していながら言う。

ただし帝国の防衛に成功したことも間違いではない。

「オーベルシュタイン、問題はこの先だ。次に戦う機会とやらが嫌なタイミングでなければいいが」

戦いの後始末をする者をもつと複雑な感情を抱く。

ラインハルト麾下の各将たちは焦土作戦を決して是としていたわけではない。単純に作戦の消極性そのものに不満を持っていたビツテンフェルトはともかく、焦土作戦の持つ民衆への損害は容易に想像できるからである。

今回、叛徒は早く退いて行つた。そのため餓死者が出るほどにはならなかった。

しかし、暴動や混乱はひどいものだったのだ。なぜなら焦土作戦はイゼルローン要塞とオーデインを結ぶ線のほぼ半分に至る有人惑星に適用され、軽く三百を超える数だったのである。

おまけに直接戦闘がなかったことは、戦略眼のないほとんどの者にとつては中途半端に映る。侵攻した側の同盟では、犠牲を出すことなく帰還できて安堵しているシトレ元帥以外の者は納得しづらい。

それは帝国内でも同じことになったのだ。

帝国では相手の侵攻を撤退させた功がある以上、ラインハルトに対し表立って逆風に

はならない。皇帝によるねぎらいの言葉さえ受けられた。

しかしながら、一部の者から過剰に侮られることになってしまった。

「あの金髪の孺子も大したことはないな。ただ眺めているしかできなかつたではないか。叛徒の方が勝手に帰ったことで大きい顔をしているだけだ。僥倖に過ぎぬ。元帥などという地位がそもそも過剰なのだ」

喜んでこれを言うのは銀河帝国随一の大貴族オットー・フォン・ブラウンシュバイク公爵だ。

銀河帝国発祥の頃からの名家の当主であり、クロプシュトック家などと違うのは、血筋だけではなく領地も財力も膨大な力を有している。

真の帝国貴族、貴族の中の貴族を自負しているブラウンシュバイクは、かねてより成り上がり貴族を嫌っている。そのため、わずか数年で帝国元帥にまで昇りつめたラインハルトを苦々しく思っているのだ。

ブラウンシュバイク公の話聞くのは、その一族に連なっている、甥のフレーゲル男爵である。

「叔父上、だから常日頃から言っているではありませんか。姉の威光を傘にきる成り上



がり風情が運だけで元帥とは、いずれ化けの皮が剥がれるのは必然。あのような者、形ばかり貴族で卑しい血筋の者などに何の実力もあるはずはありません」

「フレীগエル、だがそんな孺子が今や帝国軍で一番大きい顔をしているとはな。エーレンベルクやシュタインホフは引退した。唯一孺子以外で残っている元帥はミュッケンベルガーだが、最近は精彩を欠くとか。帝国の現状にも困ったものだ」

「なればこそ、帝国を我らに変える好機」

「不敬だぞ、フレীগエル。帝国は皇帝陛下のものであり、変える権利は陛下にのみある」  
そう言いながら、ブラウンシュバイク公は言葉とはうらはらに楽し気だった。

ここはブラウンシュバイク家の山荘だ。

豪華な屋敷ではなく、敢えてこの小さい山荘で過ごすことも時々あるのだ。しかし、山荘とはいえ置かれた調度品の数々は間違いなく超一級品である。手にしたワイングラスも、その中身もそうである。

この夜、暖炉で焚かれている薪でさえ選り抜かれた一級品だ。それほどの権勢を誇っているのである。

オットー・フォン・ブラウンシュバイクは多少撥ねつ返りだが純粹なこのフレীগエルを親族中で一番気に入っていた。この山荘で過ごす時にはたいがい一緒だ。

「叔父上、ルドルフ大帝以来の名家が帝国の中心となり、正しい秩序を守るのです。由緒

正しい血筋の者がふさわしい位置に立つこと、これしか帝国を保つ道はありませんまい」  
その名家というのが自分たちを指すのは自明だ。肥大した自尊心には甘く響く言葉である。

「そうだなフレীগエル。しかし、我らの思惑だけで動くものでもない。特にリッテンハイムの奴は何を考えているのやら。あ奴は開明派とかいう連中まで抱き込んでいるよ  
うだからな」

「なればいつそのこと、まとめて排除してみては。ブラウンシュバイクの叔父上が一声  
かければ、帝国貴族三千家、雪崩を打って従いましょうぞ」

「まあ待て。我が娘もまだ小さいのだ。その時になるまでは待つておれ」

二人はあまりに危険な野心を持っている。

だが、それを実現しうる根拠も充分にあった。

現皇帝フリードリッヒ四世の皇太子は一昨年逝去している。その子供が一人いるが  
まだ幼児でしかない。現皇帝の子で成人している者はたった二人しかないのだ。

すなわちブラウンシュバイク家に降嫁したアマリーエ・フォン・ブラウンシュバイク、  
リッテンハイム家に降嫁したクリステイーネ・フォン・リッテンハイムのことである。

皇帝はいずれ死ぬ。

いや、フリードリッヒ四世は元々体が強い方ではなく、心臓に持病を抱えている。

その死後、皇位は三人の継承権保持者のいずれかが手にする。それ以外にはいない。本来皇族はもつと多くいるべきなのだが、皇位争いの度に繰り返された悲劇のせいでこんなことになった。皇帝の兄たちはまとめて既に死んでいる。

人口二百五十億人を抱える銀河帝国の皇室が、たったのそれだけになっているとは。

そして更に重要なことは、皇族はたいがい生まれても成人まで生きる方がずっと少ないという事実だ。原因がどうであれ、事実はそうである。皇太子の子供は成人するまで年月を要する。そこまで生きるとは限らない。いや、そうならない可能性の方がはるかに大きい。

であれば、皇位を受け継ぐのはぼ間違いなくアマリーエかクリステイーネのいずれかになる。

もう一つ重要なことがある。アマリーエにもクリステイーネにもそれぞれ娘がいる。仮にアマリーエが皇帝になり、娘がそれを引き継いだとしよう。

そうすればブラウンシュバイク家当主オットー・フォン・ブラウンシュバイクは国父の立場になり、もはや皇帝に近い存在に上り詰める。

これはリッテンハイム家に置き換えても全く同じことである。

帝国の全ての人間は当然のようにそれを知っている。だからこの二つの家は貴族の

中でも特別なのである。それぞれを中心として周りを巻き込み、争いを続けていた。

帝国の安定を願うリヒテンラーデ侯が苦心する由縁である。

もしも皇族が多くだらば、帝国を揺るがす危険要因のブラウンシュバイク家とリッテンハイム家を単に排除すればいいだけだ。随一の陰謀家であるリヒテンラーデにはたやすいことであつたらう。策略を駆使して、裏切り者を使うか濡れ衣を着せるか、方法はともかく一つ一つ無力化すればいい。

だが、現実にはジレンマがある。

両家のどちらも失つてはならない。確実に次代の皇帝を出すからには、ただでさえ少ない皇位継承者をこれ以上減らすなどできるわけがない。両家が帝室に忠義がないことは分かりきつていても、肅清するわけにはいかないのだ。

リヒテンラーデが手をこまねいているうちにこの二家は力を持ち過ぎた。

ブラウンシュバイク家とリッテンハイム家を比べてみると、どちらもルドルフ大帝以来の名家である。しかし家格としてはわずかにブラウンシュバイクの方が上といえる。

権勢も大差はないとはいえ厳密に言えばブラウンシュバイクの方が強い。

更にリッテンハイムの派閥に大きな痛手があつた。派閥の中核に位置していたヘルクスハイマー伯爵家の謎の出奔と死がその原因である。

元々領地の大ききで比べるとリッテンハイムの派閥の方が劣る。しかし経済力では逆にブラウンシュバイクの派閥を凌駕していた。

これは高度工業惑星を持つヘルクスハイマー家のおかげだった。強い競争力を持つ工業製品を手にしていれば、それを組み込む多くの産業でやはり優位に立てる。リッテンハイム派閥はそのネットワークを基盤に強勢を誇っていたのだ。

しかしそれはもはや失われた。そうなると経済力でさえ劣勢に追い込まれてしまう。人間というのは正直なものだ。いや、貴族であればこそ機を見るに敏だ。

誰しも勝ち組になりたい。

国父を頂く派閥の一員として今以上の権勢を誇るか、破れた派閥として冷や飯を食わねばならないかの差である。下手をすれば社交界追放の憂き目を見るくらいで済まないかもしれない。

沈みゆくリッテンハイムの派閥から何とか抜け出し、ブラウンシュバイク家によしみをつなごうとする寝返り貴族が出てくるのは必然だ。

それが分かりながらリッテンハイムの方では焦るばかりである。逆にブラウンシュバイクは黙っていても勝負がつく情勢に笑いが止まらない。

先頃、ブラウンシュバイクの持つ富が帝国の富の実にほぼ六分の一にもなることが分かり、六分の一殿という言葉われ方まで囁かれている。それが加速度をつけて肥え太るの

だ。

もう少し待ってアマーリエの娘エリザベートが社交界に出てしつかり認知され、誰もがブラウンシュバイク家の隆盛を認めた時、すなわち帝国を継ぐのが当然とみなされた時、何もせずとも勝負がつく。

ところが多くの人間の思惑をよそに情勢がいきなり変わる。

現皇帝フリードリッヒ四世が心臓発作で倒れた。

豪華絢爛たる銀河帝国はその内部に弱点を抱える砂上の楼閣だった。それが誰の目にも分かるようになるまで、それほど時間はかからなかった。

## 第五十八話 487年10月 歡迎

銀河帝国皇帝フリードリッヒ四世が心臓発作を起こした！

幸い、命に別状はなかったがもう寿命が長くないのだと誰もが悟った。

最も困ったのは国務尚書リヒテンラーデである。彼にとつて最善のシナリオは現皇帝がもう少し長生きし、直系の孫である幼児がある程度成長した後、次期皇帝に指名する。

そうしておけば皇位継承の際、帝国に混乱はない。

多少若くとも判断力のついた皇帝がいたならブラウンシュバイク家もリッテンハイム家も帝国に叛乱を起こすとは考えにくい。不遜ではあるが、帝国貴族の考えが骨の髄まで染み込んだ彼らには皇帝に挑む気概はないだろう。

だがそれは絵に描いた餅になりそうだ。

もしも幼児が成人する前に皇帝が亡くなった場合、やむを得ずブラウンシュバイク家

アマリーエを次期皇帝に指名する。

その頃になればリッテンハイム家はますます弱体化し、ブラウンシュバイク家に対し内乱を挑むことはないと考えられる。

その逆をしてみれば内乱の危険性が残る。リッテンハイム家クリステイーネが皇帝になりそうならブラウンシュバイク家が実力を行使する恐れが残る。

リヒテンラーデにとって帝国の内乱こそ最大の悪夢である。

それに比べたら、皇帝の資質のあるなしは大きな問題ではない。というより自分が補佐してどうにでもなる。

そうはいってもアマリーエが皇位を継げば、それはそれで問題が生じる。

当然ブラウンシュバイク家の権勢は天を衝くばかりになり、その当主ブラウンシュバイク公は帝国の政治を我が物とするに違いない。その専横を何としても防がなければ帝国の未来はない。

もう一つ、ブラウンシュバイク家は後顧の憂いを断つため、あるいは長年の敵対の復讐のため、または財産没収のため、あらゆる理由でリッテンハイム家を抹殺にかかるのは間違いない。それもまた防がなくてはならない。将来何があるかわからない以上皇位継承者を減らすべきではないのだ。



とにかく舵取りは難しい。

リヒテンラーデは自分の死後まで考え、能力も性格も信頼できるエルフリーデに何らかの方法で権力を授けることまで考えている。

ところが現実はどうなシナリオも崩れてしまう。

現皇帝があまりに早く亡くなれば、もはや混乱を防ぐすべはない。

今現在、ブラウンシュバイク家はリッテンハイム家に対し大幅優位なのは確かだが、圧倒するまでには至っていない。そのため内乱の可能性が残る。だがそれを避けようとして皇孫である幼児を次期皇帝に指名したところで、両家が共闘して葬られるだけであらう。

よしんばその幼児にブラウンシュバイク家やリッテンハイム家の圧力をはねのける実力者を後ろ盾に付けたらどうだろう。

いや、余計にひどい内乱になり、帝国そのものが吹き飛ぶ。

そして一番救われないことは、その実力者が勝ったとしても専横を働けば何のことはない、元の木阿弥だ。

実力者のアテとしても帝国軍の将帥や、フェザーンなどが考えられるが、いずれも帝室に忠義があると言えるだろうか？ 否、としか言いようがない。

ルドルフ大帝の血筋を保つ者が皇帝に立ち、秩序を守り、分裂国家になるのを防ぐ、それがリヒテンラーデの願いだ。

たつたそれだけのことがどうしてこんなに困難なのか。

しかし皇帝が今急死したら困るのはブラウンシュバイク家も同様だ。

現皇帝があまりに長生きしてもらつても困るが、早く死なれても困る。リッテンハイム家が弱体化し、誰もが次期権力者はブラウンシュバイク家と見なしていればこそスムースに事が運ぶ。

でなければ万が一実力行使の必要が生じるかもしれない。

それは避けたいことだ。

大貴族といえどそれには経験がない。私領艦隊は今の段階でもブラウンシュバイク家はリッテンハイム家をかなり上回っている。だが確実に勝てるかは不明である。歴史上劣勢だった方が奇跡的に逆転勝利を収めたという例は枚挙に暇がない。

それに帝国軍の存在が無視できない。

いきなりリッテンハイム家に肩入れするとは思われないが、どう出るか予測がつかない。

だから帝国軍は邪魔なのだ。帝国軍が弱い方が実はブラウンシュバイク家にとって

都合がいい。ブラウンシュバイクとフレーゲルが楽し気に帝国軍を擲擧するのはこれが下地になっている。

一方、リッテンハイム家はもはや切羽詰まっている。

なりふり構わず派閥の強化に走っている。それは門閥貴族から一線を画し、真面目に帝国の政治を考えるいわゆる開明派と言われる貴族にすら及んでいる。

そういう中立に近い立場を取っている貴族を引き込むのに必死だ。

そして今、いよいよリッテンハイム家は大きな決断をする！

開明派貴族の中でも大物中の大物である貴族に声を掛けようとしていた。

国務尚書さえ幾度も輩出し、政治に影響力を持つ古くからの名家、マリンドルフ伯爵家である。

リッテンハイム家からの招待状をフランツ・フォン・マリンドルフ伯が受け取る。

「ヒルダ、お前が以前から予想した通りだ。リッテンハイム家からのお誘いだよ。気軽なお茶会とあるが、真意は言うまでもない。さて、これをどうするね。我が家は招待を受けるか受けないか、先ず最初の選択を迫られる」

父フランツ伯から問われたヒルダが即答する。

これは以前から予期していたことであり、また論理的に答えを出すのは難しくない。「この招待を受けないという選択肢はないでしょう。仮にリッテンハイム派につくなら当然のこと、逆にブラウンシユバイク派につくにせよ会谈自体を断るより会谈内容を手土産にした方が利益になります。反対に会谈を断ってしまうメリットは、せいぜい当家が中立を保つ意志を周りにアピールできることですが、当家が長きにわたって中立を保っていたことは誰もが知っています。今さらアピールするメリットはわずかなものですわ」

「やはり我が家の娘は賢いな。ではヒルダ、この件はお前に任せる。リッテンハイム家からの招待に応じ、マリーンドルフ家の行く末をお前が決めるんだ」

「私が、決めてよろしいんですの、お父様」

「さすがにフランツ伯は高い見識を持つ者だった。そして娘ヒルデガルトの能力を信頼している。」

「マリーンドルフ家とはすなわちお前の人生そのものになる。どのみち私はお前より長く生きるわけではない。その先のことまで責任をとれるのは、ヒルダ、お前自身しかない。一つ注文をつけるとすれば、マリーンドルフ家の今後だけではなく、もつと世の中のために大切なことを考えて決断してほしい」

ヒルダは今、リッテンハイム家の屋敷の前に到着する。

馬車に乗ったまま、高い門をくぐり、幅の広い階段の横につけた。御者が馬車をシヨックなく上手に停める。

執事が先に降り、先方の執事と話す。

本当に豪勢な屋敷だ。

さすがに銀河帝国の二大派閥の頂点リッテンハイム家の屋敷である。

ここまで近付くと屋根が視野に収まりきらず、よほど上を見ないと玄関の天蓋すら全ては見えない。マリーンドルフ家の屋敷も古く、精緻な装飾があちこちにある立派なものだが、これとはまるで比較にならない。

ヒルダは若干の緊張で顔を固くなっているのが分かり、二回ばかり頬に息を貯めてほぐそうとした。

いよいよヒルダ自身も馬車から降りて玄関前の階段を昇る。

一ダースもの侍女たちが音もせず礼をする中、屋敷に足を踏み入れた。会談は意外なほど暖かなものだった。

ヒルダは丁々発止のやり取りを予想し、頭脳をフル回転させる準備をしていた。

ところが、最初に出されたのは軽食、しかもこれは渦中の皇位継承権保持者クリステイーン・フォン・リッテンハイムの手作りだというのだから驚きだ。

「ソーセージを軽く揚げてからスライスして挟んだサンドウィッチですよ。案外その方が軽い感じになりますの。焦げないうちに火が通り、しかも茹でるのと違っておいしさが逃げませんから」

気さくな説明だった。ヒルダは緊張しながらも食べてみて美味しい、と思った。

なんとなくもう一つの似たことを思いだす。エカテリーナのサンドウィッチも美味かったものだ。どちらかというところフルーツやクリームが主体のものだったけれど。

ひとしきりサンドウィッチとワインを流し込んだあと、話の本題に入る。

改まった表情でリッテンハイム侯爵が話す。

「マリーンドルフ伯爵家自慢の息女、この屋敷に招待した用件は既にお察しのことだろう。だがここで改めて言おう。わがリッテンハイム家に味方しては頂けまいか」

「ええ、もちろんそのようなお話であろうことは存じております。ただし、それが当家にとつてどれほど重要なことか、そして即答などできないことだともお分かりだと思いません」

立て板に水のようにヒルダが答える。

リッテンハイム家がマリーンドルフ家に助力を申し入れるのは当然のことだ。その上でヒルダの聞きたいのは、その場合の条件やリッテンハイム家の覚悟、つまり真意で

ある。

劣勢の方だからといって頭からリッテンハイム家を否定するつもりはない。ブラウンシユバイク家に味方するとも決めていない。真つ白なところから一步一步論理を積み上げて決めるつもりでいる。

「そう、確かにそちらの家にとつては重大な選択だ。しかし招待に応じてここに見えられたということは可能性が残されていると理解してもよろしいか」

「もちろん、そうです。なればこそマリーンドルフ家の名代としてお話しを伺いに参りました」

「率直に言つて、現状、我がリッテンハイム家は窮地に立たされている。いや、もはや破滅寸前といつていい」

リッテンハイム家はかなり事態を悲観的に捉えていた。

しかもこれは高度に政治的な話である。この時まで同席していたクリステイーネが娘のサビーネを連れて部屋を出る。サビーネに聞かせるには酷な話だと判断したためだ。

娘サビーネはいたのか分からないほどおとなしい少女だった。やや濃いめのブロンドの髪をきれいに結び上げ、細やかな白い肌と首の細さが強調される。絵に描いたよう

な深窓の令嬢である。

だがおとなしいだけではない。

おどおどしているわけでも縮こまっているわけでもない。

広間を出る際、客であるヒルダにしっかりと向かい目を合わせた。そしてドレスの裾を引いて丁寧なお辞儀をしてきた。その流れるような動きに利発さと躰の良さが感じられる。

「我が家は当然のこと、この銀河帝国も危機にある。もしリッテンハイム家が消滅したら、権力は全てブラウンシュバイク家が握ってしまおうだろう。それはあらゆる意味で危険だ。ヒルデガルト嬢、あなたにもお分かりだと思う」

「ええ、理解しております。ブラウンシュバイク家の縁者が帝国の要職を独占し、帝国政治を根本から揺るがす恐れがあります。国父となった暁にはブラウンシュバイク公の専横は止めようがありません。帝国は長きに渡って傷を負うでしょう」

ここでヒルダは肯定するが、必要以上に強い言葉を使っている。

それは仮にリッテンハイム家が争いに勝った場合も同様でしょう、と言外に皮肉を含めたつもりだからだ。

「なればこそ、リッテンハイム家が存続し、対抗せねばならない。これは帝国を腐敗から



守るためなのだ。力を貸して頂きたい」

逆にリッテンハイム側が勝つたら帝国は良くなるのか。

どんな世を作るつもりか。

そこをヒルダは確認しておく必要があった。帝国が良い方向に行かなければ何にもならない。開明派を抱き込んでいるのは切羽詰まったの方便だろう。リッテンハイム家に政治的ヴィジョンはあるのだろうか。

「お話は分かりました、リッテンハイム侯。しかし、帝国に対する愛国心、民衆に対する責任感、本当にそういう理由でしょうか」

底の浅い話だったらお見通しだ、そうヒルダの目は語っている。

帝国政治の危機などと大層なことを語っているが、単なる自分の権力欲を隠すために言っているのなら見極めてやろう。

リッテンハイム侯はこれに多少うろたえたようだ。

「いや、そうか、あなたには建前は通じないか。確かに今のは建前だったかもしれない」  
「建前？　そうおっしゃいますと他に何か？」

やはりリッテンハイム侯も国父となつて最高権力の座に着きたいのか。

「これは自分の我が儘かもしれない。もしもブラウンシュバイクとの争いに負ければ、

私はともかく妻と娘はどうなってしまうのか。おそらく生かされることはないだろう。だから負けられない。特に娘は小さいのだ。この子だけは何がなんでも守ってやりた  
い」

リッテンハイム侯は聞かれたことに何か勘違いをした。

だが本心を語っている。

リッテンハイムがこの争いに勝とうとする動機は権力欲などではない。もっと私的なことだった。

もちろん銀河帝国を左右する大貴族、私人としての情だけで行動していいものではない。リッテンハイム家の動きで運命の変わる者はそれこそ何億人もいるのだ。派閥の長たる立場と引き換えにその責務から逃れられない。

それにリッテンハイムは先にヘルクスハイマー家をその幼い娘ごと逃亡する憂き目に合わせた張本人とも言われている。自分の娘だけは、というのであれば我が儘と言われなくても仕方あるまい。

だが、それでも貴い動機だということには間違いない！  
娘を守りたいという親心なのだから。

ヒルダは思わぬ返答に衝撃を受けた。

## 第五十九話 487年10月 二者択一

「お話は分かりました。即答はできませんので、いずれ後日に」

こうしてヒルダはリッテンハイムの屋敷を退出した。

驚くことも多かつたが、心に留め置き、そして冷静に比較検討しなくてはならない。重大なことは感情に流されてはならない。

ヒルダは自分の屋敷に帰り、父フランツ伯に報告する。

「あまり政治的な話ではできませんでした。正直申し上げれば、リッテンハイム侯は策略を弄するタイプではないようです。ですがもつと大事な話をしたような気がします」

「そうなのかい。では結局どうするのだね、ヒルダ」

「それはまだ決まりません。リッテンハイム側とブラウンシュバイク側の比較をした後で決めるべきでしょう。そこでお父様にお願ひがあります。ブラウンシュバイク公の耳にマリーンドルフ家とリッテンハイム家が会談をしたという事実だけは伝わるようにして下さい」

ヒルダの明晰な頭脳は止まることがない。

この会談のことが伝わったら、ブラウンシユバイク家はいつたいう反応をするだろうか。

一つの可能性として、まるで無視するかもしれない。

その場合はブラウンシユバイク公は両家ごと踏み潰せる自信があるのか、と推察できる。

あるいはもう実力行使を決めているため、今となつては武力のないマリーンドルフ家などどうでもいいと思つているのか。

一つには慌ててブラウンシユバイク側もこちらに会談を申し込んでくる可能性がある。

それなら勝てる自信が足りないということに通ずる。もしくは勝つために念には念を入れる周到さがある策略家とも考えられる。

一つには会談ではなく、裏に回り、策をもつて両家を離反させる手を打ってくるか。それはそれで策を用いる知力が備わつている証拠になる。

こういつたように、出方を見るだけでブラウンシユバイク家の思惑と力量を推し量れる。ヒルダはそこまで考えているのだ。

結果はほどなく出た。

ブラウンシュバイク家からマリーンドルフ家に会談の申し込みがあった。

むろんこれに応じ、またヒルダが赴く。

「儂はブラウンシュバイク家の当主だぞ！ その儂が呼んだのに当主が来ないとは何たることだ。娘などでは話にならん！」

会談の第一声はある意味予測通りだった。

ブラウンシュバイク公の尊大で短気な性格は既に聞いているところだ。

それにヒルダは理解しているが、ブラウンシュバイク公の言うことは別に間違つておらず、当主が来ないのは確かに非礼である。口に出すか出さないかは別として。

「大變申しわけなく存じます、公爵様。なれど父フランツは政治的なことを全てわたくしに委ねると決めておりまして、それゆえ会談には差し支えないと存じます。どうか宜しくご寛恕下さいませ」

「この銀河帝国でそのような無礼が許されると思うな。儂は無礼なもの嫌いだ」

そこまでは言い過ぎだろう。

ルドルフ大帝の御代から続く古い貴族家どうし、本来優劣はないはずだ。

もちろん家格も権威もブラウンシュバイク家が遙かに上なのは事実だが、マリーンドルフ家がその臣下というわけではない。この会談自体も事前の相談があったわけでは

く、一方的に日時を指定して通告してきただけではないか。もはや会談の申し込みではなく呼び出しに近いものだった。

しかしヒルダは別に腹を立てることはない。ブラウンシュバイク公の意図を推し量っているからである。

これほどの態度を示すとは、ブラウンシュバイク公が既に一般貴族より一段高いところに昇ったことを見せつけるということも含まれるのではないか。

既に勝利し、国父となる道が見えていることを言外に示しているのだ。おそらくマリンドルフ家以外の貴族に対しても同じ態度なのだ。

これはこれで一つの示威行動としての策であり、理解できるものである。ともあれ、ヒルダは平伏とまではいかなくとも目を伏せる姿勢をとる。

ここに喧嘩をするために来たのではない。

「マリンドルフ伯の娘、まあそちらがそれで構わないというなら、言うだけ言おう。我がブラウンシュバイク家に助力せよ。リッテンハイムなどではなく」

「我がマリンドルフ家を評価して頂き感謝します。なれどこれは難しいお話しと存じます」

「何が難しいというのだ。無礼な上に面白くもない冗談を言う。マリンドルフ家にとって良い話ではないか。こちらはマリンドルフ家が助力してもしなくても勝つ。

絶対だ。その上で、これまで味方してこなかった咎を水に流そうというばかりか、今さらこちらへ加わるのを赦してやろうと言っている」

「叔父上の言う通りです。親切でマリンドルフ家を助けようというのですぞー」

この声はフレーゲル男爵のものだ。最初から広間にいながらワインを飲んでいるフレーゲル男爵が話に加わってきた。

今、まるで腰巾着のようにブラウンシュバイク公の横にすり寄っている。

「実に叔父上は寛大だ。名家の血筋が無駄に滅びるのを避ける、そのためにわざわざ時間を取るとは。これぞ帝国貴族のあるべき姿」

ヒルダはこのフレーゲル男爵が最初から好きではない。生理的に。

かつてのマクシミリアン・フォン・カストロプと同じように。

感情にあえて理屈をつけるとすると、フレーゲルは見かけただけ上級貴族らしく小さくぱりとまとめているが、その内面に矮小で暗いものを感じる。

そこだけ見れば、フレーゲルはマクシミリアンより悪いくらいだ。

マクシミリアンは歪な選民意識と世に対する怨念を持っていたが、少なくとも自分の足で立つ実行力を持っていた。褒めるわけではないが前を向く気概を持っていたことも確かだ。



フレーゲルはあくまでブラウンシユバイクの腰巾着、虎の威を借る狐に過ぎない。

ところでこの会談の場にブラウンシユバイク夫人のアマーリエとその娘はいなかった。噂ではオットー・フォン・ブラウンシユバイクとアマーリエの仲は良くなく、館を別にしているというが、その噂は本当のようである。

「今一度言うが、フレーゲルが今申したように、こちらはマリンドルフ家を助けてやろうというのだ。リッテンハイムなどについたらマリンドルフ家は踏み潰されるのがオチであろう」

「我がマリンドルフ家に対してのご親切は本当にありがとうございます。しかし、せつかくの機会、公にお聞きしたいことがござります」

「うん？ それはいったい何だ」

「今後のことです。物事が終わった後、ブラウンシユバイク家がどういうおつもりで帝国を動かすのか知らねば決めることができません」

ここでブラウンシユバイクが口角を上げた。

ヒルダにとっては全く不愉快な笑いだ。

「これはそうか、なるほど、そこを確認したいのは道理だな。なかなか思ったよりもしたかな娘だ」

ブラウンシユバイクは勝手に頭を回し、何か誤解したようだった。

「では約束しよう。我がブラウンシュバイク家に助力した場合、いずれマリーンドルフ家に国務尚書の椅子をくれてやろう。これは破格の待遇だ。分かるであろう」

「叔父上！ いくら何でも国務尚書とは！」

「まあいいではないか。フレীগエル、お前は軍務尚書の方を望んでおつたらう」

そうブラウンシュバイク公にいなされてもフレীগエルは納得せず不満顔だ。今さら味方してくる貴族なんかに尚書の地位を獲られるのだから。おそらく政治を我が物とした場合の地位の割り振りまでフレীগエルなりに皮算用をしているのだ。

もう一つ言えば、ブラウンシュバイク公は少なくともマリーンドルフ家が国務尚書を度々輩出しているのを知っているが、フレীগエルはそれすら失念している。おまけに、帝国の尚書は決して地位争いの道具にしていいものではなく、その地位に見合った責任と努力が必要なことを全く理解していない。

「娘よ、この重大さがそちでも分かるであろう。どうだ。これをそなたの父、フランツ伯が聞いたらおそらく涙を流して喜び、直ちに助力を言うに違いない」

会談の最後までヒルダの名前を呼ぶことはなかった。名すら憶えるに値しないというのか。

「ただしその場合、こちらとしては古くからの血筋の貴族家もブラウンシュバイク家の

前にひれ伏して忠誠を誓うとだけは宣伝させてもらう。先ずはそこからだ」

ヒルダが回答を欲していた帝国の在るべき姿、そして政治手法の話など一つも出ることなく終わった。

おそらくブラウンシュバイク公はこれまでの帝国政治を変えるつもりなど全くない。既にあるものを私物化するだけであり、良くしようなどはなから考えもしていない。それでは帝国は傾き、民衆は不幸になるのが目に見えている。

ヒルダの質問の内容も助力と引き換えに与えられる報酬のことと勘違いしている。その意図も透けて見える。

確かに国務尚書の椅子というのは大盤振る舞いに見えるが、どのみち政治権力を与えられることはなく、国父ブラウンシュバイクの使い走りにされてしまうだけだと予測できる。

更に言えば、何のためにマリィンドルフ家に尚書の地位を与えるか。

おそらく専横を隠し、旧来の秩序を崩していないとアピールするための看板の代わりに使おうとしているのだ。専横に反発する人間の目を逸らし、風聞を良くする。

そんなお飾りの国務尚書では、肩書きに価値を見出す凡人なら別だが、ヒルダに何も魅力的なことはない。

むしろその前もマリィンドルフ家の名前を使われるだろう。古くからの名門貴族が

率先してブラウンシュバイク家に忠誠を誓えば、他の中立貴族も雪崩を打ってそれにならうだろう。これで確実の上にも確実にリッテンハイム家との闘争に勝利できる。

その決定打に使えるのだ。利用価値はそこにある。

もちろんこの場での即答は避け、ヒルダは帰った。

ブラウンシュバイク公はヒルダのことをただの使い走りと見ていたのだから、そこを逆手に取って保留に持つていったのだ

その後のブラウンシュバイクとフレーゲルの会話をヒルダがもしも聞くことができたら、一ミリ秒も考えることなく即答しただろうに。

「フレーゲルよ、ブラウンシュバイク家当主のこの儂が直々に声を掛けたとは、マリーンドルフ家にとってまこと名誉なことだとは思わぬか」

「叔父上の仰る通りです」

「それなのに、即答できぬとよくも言いおった。何という不遜な娘か！」

「確かに。おそらく気が強いだけで道理も分からぬほど愚昧な娘なのでしょう。叔父上、今気がつきました！ あるいはフランツ伯はそこが狙いで娘をよこしたのかも」

「フレーゲルの意見はまるで見当違いではあるが、ブラウンシュバイク公には心地よいものだった。」

「なるほど。老練なフランツ伯が儂をけむに巻くために……つまり鈍い答えを繰り返して、そこで儂が業を煮やし、報酬の上澄みの言質をうっかり漏らすのを期待した、と。不愉快だ。しかしフレーゲル、我が甥ながらよく気が付いた。お前の知恵もなかなか大したものだ」

「お褒めに預かり恐縮の至り。このフレーゲル、全力を挙げて叔父上にお仕えする所存」

「頼りにしておるぞ。まあ、あの娘については儂の話をフランツ伯に持ち帰るお使いになつてくれればよからう。そうだフレーゲル、事が終わつたらあの娘をお前の妾にでもしたらどうだ。短髪とは変わった趣味だが、顔そのものは悪くない。血筋に対して敬意を払うよう、念入りに躰をしてやつた上で妾に」

「叔父上、ご冗談を。むしろ叔父上の妾に。」

「あのような娘、願ひ下げだ。気が強いばかりの女などアマリーエで充分だからな」

## 第六十話

487年10月

約束

ようやくヒルダは決断した。

このままブラウンシュバイク家にもリッテンハイム家にも与せず、中立の立場を貫けば、なるほど抹殺だけはされないかもしれない。

しかし今後、帝国の重要な職には預かれず、マリンドルフ家は徐々に衰退していく。血筋だけ立派な没落貴族になるだろう。そんなふうになつた貴族はあまた存在し、しかも再浮上することはほぼない。

逆に言えばマリンドルフ家が積極的に帝国政治に関与できる好機でもある。それに参加して自分の能力を活かしたい。ヒルダはこの好機を逃すつもりはない。

「お父様、わたくしなりに考えました。聞いて頂けますでしょうか」

今は決断する時なのだ。もちろん、理屈の通つた根拠を持つ。

「ようやく決めたんだね、ヒルダ。聞かせてもらおう」

フランツ伯はどんな決断でも受け入れるつもりだ。

娘の能力も正義感も信頼している。

フランツ伯はヒルダを溺愛するのではなく、これまできちんと一人の人間として向かい合ってきた。ヒルダが幼い時には手を引いて導いたが、今ではヒルダの考えに委ねるということを知っている。

微笑みをもって娘を見守るばかりだ。

「今回、ブラウンシュバイク家の方はマリーンドルフ家の助力の見返りに国務尚書の椅子を提示してきました。それは一見魅力的といえます。しかも現状ブラウンシュバイク家の方が優勢であり、しかも時が経つほど明確化しつつあります」

「確かにそうだね」

「お父様、しかし、我が家は敢えてリッテンハイム家に味方します」

「ほう、どうしてだね。ヒルダ」

意外そうなところは全くなく、フランツ伯は先を促す。

ヒルダが訪問から帰って来た様子から半ば予期していたのだ。

「一つは当家がリッテンハイム侯に味方した方が後に重用されるからです。逆にブラウンシュバイク公に付いたのでは今さら勝ち馬に乗るだけと侮られかねません。先の国務尚書の椅子さえ有名無実にされるでしょう。それどころか反故にされる恐れすらあります。ブラウンシュバイク公の気質はそういうものに見えました。それは仮に覚書

を取ったとしても意味がありません。公は気が変わったというたった一言でそれができるほどの権力を持つでしょうから」

「そうだね、ヒルダ。ブラウンシユバイク公はそうだろう」

「そしてもう一つは、勝敗はまだ決していません。ブラウンシユバイク家は勝ったつもりでいるかもしれませんが、覆せないほどの差ではありません」

「それについてはヒルダ、理由にならないよ。逆に、差があることも確か、という言い方もできる。しかもそれを覆すのも簡単なこととは思えないのだが」

フランツ伯はただ聞いているばかりではない。

ヒルダの言うことを論理的に考え、そして疑わしいところがあれば率直に突いてくる。

それもまた愛情だ。むろん、ヒルダもそれを分かっているし、こうして父と話すことは楽しいことだ。

「いえ、詳しく言うところです。両家の実力を比較したら、というのはあまり気にし過ぎなくともよいと言いたいです。意味がないといつてもいいでしょう。両家とも貴族の派閥ばかりを気にしていますが、軍部などへの働きかけはまだまだ充分ではないと見ました。どうも両家ともこれまでの宮廷闘争の考えから抜けきっていないようです」



「なるほどヒルダ、その通りだ」

こういわれたらフランツ伯も納得する。

確かに実力勝負なら、家柄や、格式や、財産すらも問題ではない。政略でさえ事前準備の一つに過ぎない。

戦いに勝つのは純粹に軍事が強い方だ。

「そして最後、ここからの帝国をどうするかということが重要です。ブラウンシュバイク公が権力を握った場合、多くの人々が危惧する通りの専横政治になると思えます。端的に言って今より悪くなることはあっても良くなることはありません。帝国の将来は限りなく暗いものになるでしょう。しかし、リッテンハイム家であれば、それよりはマシな政治になる可能性があります」

「ヒルダ、一ついいかな。そこも少し分からない。リッテンハイム侯は典型的な門閥貴族の一つだろう。これまで政治に特段の実績もなく、ブラウンシュバイク公以上に有能だと聞いたこともないのだが」

フランツ伯の指摘はその通りである。リッテンハイム侯には特筆すべき思想も業績もない。

だが、そここそがヒルダの直感であり、最短距離で真実に達する道なのだ。

「あくまで可能性です。ですが確信に近く思っています。なぜならリッテンハイム侯は人に愛情を持てる方と感じました。これこそ重要なことではないでしょうか。能力は下の者が補佐をすればいいのです。上に立つ者は慈しむ心があれば、それだけでも合格だと考えます」

「なるほど、ヒルダの考えはよく分かった。思い通りにしなさい」

ヒルダはその最終決定を伝えるため、またリッテンハイム家を訪れた。

その屋敷に入る直前、玄関の階段のところでサビーネと目が合う。

サビーネは外に出て、たまたま庭遊びをしていたのだ。まだ昼下がりの時間、日は高い。しかし風は秋の涼やかさである。

サビーネは屋敷に戻るところだった。

今まで花を摘んでいたのだろう。リンドウやクレマチスを花束のようにして胸のところに両手で持っている。

着ている純白のドレスがまるで画布のようにも見え、水色と赤紫を散らせた絵画のような姿だ。

「まあ、サビーネ様。きれいなお花。屋敷に飾りますの？」

「花瓶にいっぱい花を入れて、夕食のテーブルに飾るんです。お母様はこのお花を見な

「がら食べるのがいいって言っていました」  
ヒルダには分かる。

たぶんクリスティーネ夫人はこの花が好きだからではない。サビーネが自分のために持つてきてくれた花だから、嬉しくて嬉しくて何よりも見ていたいのだ。

ふとヒルダは母のいない自分を思った。父はそれこそ二人分以上の愛情を注いでくれている。昔から今までそうだった。子供の頃は野山を駆け巡る自分に付き合ってくれた。そして知識も学問も導いてくれた。窮屈な女学校に叩きこまれてしまい、いつときは恨んだものだが、今では大いなる愛情の一環だと分かっている。

しかし、もしも自分に母がいればどんなだったろう。それは想像の域を出ない。

成り行き上、ヒルダとサビーネは一緒に花瓶へ花を活けている。

多くの花瓶が置いてある、厨房へつながる小部屋を使う。

二人は花の配色と形を考え、組み合わせを話し合う。サビーネは子供らしくとにかく詰め込んで豪華にする。青でも赤でもはつきりした色を多く使う。

しかしヒルダはそれだけではダメで、高低、奥行きという対比があつてこそ映えるということを知っている。おまけにヒルダは植物にも詳しい。ただしサビーネの意見も尊重する。意外に子供らしい勢いが躍動感につながつて良い物になることも多いのだ。

出来上がったいくつかの花瓶はいつもより綺麗に仕上がりに、サビーネは活け方による差を目の当たりにして喜んだ。

「また一緒に花を飾りましょう。今度は花を摘むところから、ね。お姉さん？」

姉という言葉聞いて今度はヒルダの方が目を丸くする。

サビーネの方が年下であるが、一人娘の自分が姉と呼ばれるとは、あまりに言われ慣れていない言葉である。

おまけに向こうは大貴族リッテンハイム家の娘、ついでに言えば帝室の血筋を引く高貴な身分ではないか。

だが釣られるように答えてしまう。

「はい、また一緒に。今度は何の花になりますやら。秋が深くなれば花の色は鮮やかになります。もともともと綺麗に飾りましょう」

「じゃあ約束」

サビーネの澄んだ瞳は花にも劣らず美しい。二人はこうして約束をする。

このやり取りの後半をリッテンハイム侯とクリステイーネ夫人が見ていた。

ヒルダが屋敷に到着したとの知らせを受けても大広間に来る様子がないので、ここままで来ていたのだ。

「ヒルデガルト嬢、また今度、と娘と約束しているように見えた。では答えを期待してよろしいのか」

リッテンハイム侯はどうにも気がせいっているようだ。

いきなり核心を聞いてくる。もちろんマリンドルフ家の下した結論を聞きたくてたまらないのだろう。横にいたクリステイーネ夫人が軽く侯を睨む。あまりにがつつき過ぎていように見えたからだ。

「それではリッテンハイム侯、端的に申し上げます」

ヒルダは笑みをたたえた。

リッテンハイム侯は言葉の駆け引きが苦手な人に見える。それもまた、ヒルダには悪いことだと思えない。

「我がマリンドルフ伯爵家はリッテンハイム侯爵様の陣営にお味方いたします。以後、どうかよろしく取り扱い下さるよう」

これを聞き、もちろんリッテンハイム侯は小躍りして喜ぶ。

「ありがたい。本当にありがたい。この上は力を合わせて乗り切ろう」

「ええ、その通りです。必ず勝ちましょう」

この様子を見てクリステイーネとサビーネも丁寧なお辞儀をしてきた。見るとサビーネは本当に品のあるお辞儀をする。

ヒルダも足を引いて深くお辞儀を返した。  
心の内に思う。

この少女を私は必ず守り切ってみせる。この私が、なんとしてでも、子供の戯れ言かもしれない。それでも自分を姉と言ってくれた少女に、また姉と言われない。

これから厳しい闘争になるかもしれない。

いろいろな方面、いろいろな局面で手を打ち続けなければならない。一手でも誤ればお終いだ。

そこを何としても勝ち抜く。絶対に負けない。

秘策がある。

逆転を成し遂げるには軍事的な実力者を引きずり込めばいいのだ。そのための方法は既に考えてある。

乾坤一擲の秘策を心にしまい、ヒルダは爪を研いでタイミングを図る。

## 第六十一話 487年10月 回りだす齒車

マリーンドルフ伯爵家はリッテンハイム派閥の一員として協力する。

このニュースはオーデインを駆け巡り、多くの者に驚きをもたらした。

今頃になってマリーンドルフ家が中立の立場を崩す、これも理由だが、やはりブラウンシュバイク派閥ではなくリッテンハイム派閥だということが最大の理由だ。

どうして明らかに劣勢のリッテンハイム派閥に？

憶測は憶測を呼ぶ。

少なくとも血迷った結果ではなく、またリッテンハイム侯がうまく騙した結果とも思われぬ。マリーンドルフ伯爵家の高い見識は信用がある。

こうして貴族の間に波紋が広がることもヒルダの計算の内である。

逆にブラウンシュバイク公は地団駄踏んで悔しがる！

ヒルダからの返答は礼節を逸しない大変丁寧なものであるが、中身としてはきつぱりと助力を断るものだ。あれこれ理由は付けない。付けても仕方がない。

「おのれ！ 儂の陣営に加えてやろうと言うに断つてくるとは！ 馬鹿にしおつて！

あんな娘、妾にすらしてやるものか。死ぬよりも辛い屈辱を味わわせてくれよう」

「当然です叔父上。この銀河帝国でブラウンシユバイク家を愚弄した罪より重いものがありますか？」

「事が終われば名門伯爵家から平民に墮としてくれる！」

「叔父上、いつそのこと農奴にまで墮とし、開拓惑星に送り込むというのは」

「そうか、それも面白いなフレীগエル。そこで一生ドレスを着ることもなく、粗末なパンを食い、舞踏会の代わりに畑を耕して終わるがいい。いずれ必ず後悔し、儂に懇願してくるだろうが、その泣き顔を見るのが今から楽しみだ」

この頃、銀河の反対側でも動きがある。

ここ自由惑星同盟では後悔している者、溜息をつく者が何人もいた。

「グリーンヒル君、私の思い違いだったらしい。これほど同盟市民の熱狂が激しいとは計算違いだった」

「その責は私も負うべきものです。正に裏目に出ました」

シトレ元帥もグリーンヒル大将も、一度帝国領に侵攻すれば政治家も市民も納得する



と思つていた。どのみちある程度のガス抜きが必要なのだ。それなら手堅い作戦で行えばいいと考えた。熱狂が収まれば市民は理性的にもなるだろう、と。

しかし事實は逆だった。

尚のこと市民は熱狂的に直接的な戦果を求めるようになってきたのだ。そして目に見える戦果を持ち帰らなかつたシトレ元帥に対する不満にもなる。あれほど神経を使う帝国領侵攻が全く評価されていない。派手な戦果の有る無しだけが問題なのだ。

皮肉にも、ルフエーブル中将が言ったことが現実になりつつある。

「同盟は一度手痛い目に遭わなければ目が覚めないのかもしれない、グリーンヒル君。だが、ここで一つ忘れてはならないことがある。戦いで死んだ者は生き返ることはない。いくら後悔しても、恋人や家族が泣き叫んでも戻つてこないのだ」

「……シトレ元帥、誠に残念です」

「もし死者が自分は何のために死んだのか問う権利があつたとしたら、自国の市民の熱狂を冷ますためと知るだろう。そんな理由のために死んだとは、その魂が納得してくれとは到底思えない」

この晩秋、ハイネセンポリスの日は短い。もう夕陽の時間だった。

統合作戦本部ビルの大きいガラス窓を通し、赤に近いオレンジの光が横から差し込ん

でくる。

それが二人の表情を更に沈痛なものに見せている。いや、その落日の光こそが心情を表わすのにふさわしい。

「元帥、この上は善処しましょう。甲斐がないとしても」

その二人の心情を理解できる者がたった一人だけ存在する。今はハイネセンではなく、イゼルローン要塞の司令室に座っている。

ベレー帽を手に取り、きつく握りしめ、そのままコンソールに叩きつける。

「シトレ元帥があれほど見事に偵察を成功させたというのに…… 同盟は帝国に滅ぼされるんじゃない。いや、それならまだマシだ。歴史書に堂々と惑星同盟の名を載せられるだろう。だが、これでは史上稀にみる愚かな国として書かれるだろうさ。自分から滅びに行った国として」

「先輩……」

たまたま側にいたアツテンボローがおや、という顔をする。ヤンがそこまで感情を露するのは滅多にないことだ。

もちろん、その理由も心情もよく分かる。もしもヤンが冷静だったら、かえってアツテンボローがベレー帽を床に叩きつけていた。ヤンがそういうセリフを言ったからそうしなかっただけだ。

たった先ほど、イゼルローン要塞防衛司令官と駐留する同盟第十三艦隊司令官を兼ねているヤン・ウエンリーに通信があった。

ハイネセンから決定事項として通達されている。

それは、帝国領再侵攻、であった。

同盟最高評議会はまたしても賛成多数で侵攻を可決した！

しかも前回の可決では棄権も何人かいたが、今回はいない。

反対を投じたのはまたしてもホアン・ルイ、ジョアン・レベロとヨブ・トリユーニヒトのたった三人だけである。

徒労感を感じながらもヨブ・トリユーニヒトはここで投げ出すことはできない。また同じことをやって、同盟のために傷の少ない作戦にする努力を傾けるだけだ。

「何か、お疲れでしょうか。国防委員長」

「オーレリー嬢、あなたにもそう見えますか。これは失敬。あなたを誘った方が疲れを見せて気を使わせるなんて、僕はエスコート役として失格ですね」

「いいえ、素直にそう言っただけで頂いた方がはるかに気が楽です。しかし、それなら休んでいられたほうが……」

「いや実は、休んでいる方がかえって気が焦るのですよ」

それは本当である。ヨブ・トリューニヒトは同盟による帝国領再侵攻のことばかり頭に浮かび、四六時中心の休まる時がない。それを忘れ、穏やかな気分になれるのはこの時だけなのだ。

「こうして誰かと話している方が楽なのです。あ、これはまた失敬。さつきから自分の都合ばかり言っている」

「そう言つて頂けて、とても嬉しく思います。私でよければ話相手にでもなりますわ。話甲斐のある相手になればよろしいのですけれど」

「有難いですが、きつと退屈なことでしょう、オーレリー嬢」

ヨブ・トリューニヒトはそう言つてくれるのが嬉しい。できればこの悩みを共有したいくらいだ。しかし、それは彼女には決して興味を引く話にはならないだろう。

「確かに私は政治の難しい話は分かりませんし、知識も理解力も乏しいと存じております。失望されてしまいますわ」

エリザベートはエリザベートで気を回している。

この国防委員長がもつと晴れやかに、楽しそうになればいいのに。

「政治の話をするなら、国防委員長の周りにはもつと相応しい方もおいででしょうが…… それこそ、女の方も」

これはちよつとエリザベートが言い過ぎてしまった。

あまり深く考えず、感情に突き動かされて思わず素直に言つてしまったのだ。こんな探るような言葉を。

まつたく、エリザベートらしくない。

「いえ、そんなことはありません。あなたと話しているのが僕にとって一番、いいのです」

例えれば、二人はまるで十代のウブな生徒のようだった。

今は手探りの気遣いこそ大事なのである。

相手は真摯な心を持ち、決してスレていることはなく、真実を尽くしてくれると分かっている。

あの舞踏会の後、ようやくヨブ・トリユーニヒトはエリザベートを誘い出した。

心で何十何百回とシミュレーションを繰り返し、さんざん逡巡した上でのことである。

「ぜひ今度は食事など一緒に一緒にしたい」

たったこれだけを伝えればいいのに。

意を決して伝えたトリューニヒトの誘いは断られなかった。そして次の約束まで取り付けることに成功したのだ。

結果、このように昼食と散歩を共にできるようになったのである。

その時間はヨブ・トリューニヒトにとつてもとても幸せな時間だ。

エリザベートの方では、もちろん誘いを断るはずはない。

相手は一つの国家を代表する最高評議委員という立場にあり、秘書見習いとは目もくらむばかりに違う立場である。エリザベートにはあたかも帝国尚書のように感じられる。

だが、そんなことは感情とは関係がない。

一人の純真な青年という面を見てしまう。とても好ましく、吸い寄せられるくらいに。

エリザベートがエカテリーナやアドリアン・ルビンスキーから言われていたのは、帝  
国から同盟への情報漏洩を探り、その流れを掴むことである。

別に同盟の情報を知ることではない。

それであればヨブ・トリューニヒトとのことは任務に関係がない。気兼ねなく、純粹に不器用なデートを楽しんだ。顔は自然と華やいでいる。ようやく、カストロプ家で暗い影を宿していた頃の姿を終わらせたのか。

任務と言えば、エリザベートは先日不思議なことを目にしていた。

秘書見習いの業務の一つとして、掃除や片付けをしていた時のことだ。

エリザベートはもちろん貴族令嬢であるが、そういう雑用をあまり苦にしない。むしろ体を動かすのは好きな方だ。

雑巾を持つのも新鮮な驚きになる。

それに汚れものも気にならない。なぜなら手が汚れは心の汚れに比べればどうというものではなく、人にとって心こそが大事なのである。エリザベートは今までの壮絶な経験でそれが分かっている。

そんな時、一つのこと気が付いた。

シユレッターにかけられ、細かく裁断された廃棄書類を処分する際、目に留まった文字がある。

もちろん情報抹消のために文字よりも細かく破碎されているのではつきり確認できるわけではない。

だが紙を見た瞬間、エリザベートには浮き上がって見えた文字があった。

なぜならそこにはカストロプ、と書かれているように感じられたのだ！

普通ならそんな紙くず同然を見て誰も思い浮かぶことはなかったろう。

しかし、エリザベートにはそうではない。

二十年以上使ってきた自分の名前なのである。シユレッダーで崩されていても感覚で分かってしまったのだ。

その上おかしなことに周辺書類の日付けがあまり新しいものではない。フェザーン弁務官事務所にカストロプ家反乱の情報伝わるよりもかなり前の日付なのである。



## 第六十二話 487年10月 疑惑の弁務官

元の文字はカストロプと書かれている。

目をこらして見ても、絶対にそうとしか思われない。

エリザベートは自分のことにも関係するのとても気になる。

周囲に聞いたところ、廃棄書類は弁務官トップであるプレツエリが自分でシユレッツダーに入れているようだ。他人に任せないのは意外だが、それは念をいれた秘密保持を遵守ということで理解できる。

それが最近のことならば、カストロプ家のことが書かれていても不思議でも何でもない。フェザンから帝国の内乱についての情報が通達されただけ、という単純なことだ。

ただ問題はその時期だ。

その廃棄書類はかなり早い時期に貯められたものだ。エリザベートは見て取っている。

自分の記憶と照らし合わせてもおかしい。その時期は、帝国の討伐艦隊が撃退された

時期のようだ。かなり前なのである。

しかしここハイネセンの弁務官事務所に教えられたのはそれよりずっと遅いはずである。帝国の情報統制をかくぐり、ここまで届けられるのが早いはずはないからだ。つまりフェザン政府が通達した公式情報の書類とすれば、時期があり得ないほど早く、説明がつかなくなる。

どうして弁務官プレツエリがカストロプ家反乱の情報を早く手にしたのか。

このちよつとした疑問を心に抱きながら日々仕事を続けた。

エリザベートは本職の諜報員ではない。そういった訓練を受けていないのだ。

そんな心持ちで過ごしていれば、何となく雰囲気にはしみ出てしまう。諜報員としては失格だろう。

当のプレツエリにもようやく疑問が浮かんだ。この秘書見習いが急に何か探るような目になつたとは。

プレツエリは再びオーレリー・ボアヌの情報を洗い直す。しかしどんなに見てもおかしなところはない。念のため、経歴に顔型照合までかけて検索した。それでも矛盾は出てこない。出るはずがない。実際はエカテリーナらが完璧に情報を仕上げているのだから。

だが、プレツエリには敏腕諜報員としての勘がある。なぜかその勘が危機感を知らせてくる。今までそのおかげで何度も危機を乗り越えてこれた。最後はその直感を信じる。

確認のための最終手段としてフェザーン文科大学卒業者に片っ端から当たり、オーレリーの経歴が本当か、実在するのか尋ねて回ることでまで考えた。しかしその実行はほんのわずか遅かったのだ。

その前に決定的なことが訪れる。

今、プレツエリはオーデインのグラズノフから帝国貴族の動向についての報告を受け続けている。

帝国内の不穏な動きは加速度的に速くなり、正に風雲急を告げている。

これまで考えられなかった帝国貴族同士の内乱さえ予想の範囲内に入っている。帝国がどこへ向かっているか、とにかくこれまでの常識では考えられない。

しかも今は同盟側から軍事作戦が予定されているタイミングなのだ。

そのためオーデインからもたらされる情報はあまりに貴重で、逐一報告させる必要がある。

今もまた劣勢側の貴族派閥にどうしたことか名門貴族家が味方に加わるという重大

情報が来たところだ。

弁務官事務所にフェザーンから来る通信は数多いが、プレツェリ宛に来る通信の場合、それを受け取るのに一人だけで通信室に入るのが常である。

エリザベートにはもちろん、他の弁務官事務所の人間にも通信内容は一切分からない。

そうするのは機密保持のために当たり前だと誰もがみなしている。

ただしエリザベートに分かることがあった。

それは通信の内容ではなく、時間だった！

その記録を取るのとは簡単である。プレツェリが通信室に入る時間を見ておけばいい。

エリザベートはプレツェリが通信を行った時間について、いくつか記録をとっていき、ある時内容の検索を試みた。

何気ない気持ちからだ。

最初から期待などしていない。通信の内容が検索で出るはずがない。

プレツェリでなくとも弁務官事務所の通信内容は保存しておかないのが普通だ。本当に大事なものは紙に打ち出す。

案の定、通信の情報は何も得られなかった。

「通信内容検索の結果、お知らせします。該当する通信、ありません」通信コンピューターがそつげなく告げてくる。

しかし、エリザベートはおかしなことに気付いた。

妙なのだ。

内容以前の問題で、通信そのものが無いということもしばしば認められた。

「通信の内容が消えてるの？ 通信が無いの？」

「通信の事実がありません」

確認するとコンピューターがそう答えた。

エリザベートの記録した通信時間に通信が無いとは？ そんなはずはない。だって考えられることは一つしかない。通信の後でわざわざコンピューターへ改ざんの工作をしている。

なぜだろう。本来なら内容の消去で充分なはずだ。本国フェザーンから弁務官事務所への通信にそんなことをする必要があろうか。

エリザベートに何かがおぼろげながら見えてきた。

元々エリザベートはそういった方面が得意だ。であればこそ、かつてカストロプ領惑

星の防空衛星の解除という難しい操作も可能だった。

直ちにフェザーンへ自分が記録した通信時間を問い合わせる。

すると驚くべきことが判明した！

フェザーンからここハイネセンに通信した記録が無いのは、改ざんを受けたとして理解できる。

ただし、同時に分かったことがある。

フェザーンは各方面と膨大な通信をしているが、エリザベートの記録した時間とびつたり一致する特定の通信が浮かび上がったのだ！

それはなんとハイネセンと関係ないはずの通信だ。

帝国首都オーデインからフェザーンに向けた通信だった。

もう結論は明らかである。

フェザーンに秘密にしたまま、オーデインからハイネセンへ直接情報が伝わるルートが存在する。

オーデインに誰がいるのかは分からない。

しかし少なくともこのプレツェリが情報を受け取るキーパーソンなのだ。おまけに通信の改ざんをしているので知らぬ存せぬは通らない。

プレツエリの隠蔽工作が裏目に出た。

通信そのものの消去という念の入った改ざんをしていなければ、エリザベートが察知することはなかったろうに。

それに不運でもある。

エリザベートがここに赴任してきたことだ。

エカテリーナらがエリザベートをハイネセンに送るのに、民間団体や企業などを使えるわけがない。エリザベートは本職の諜報員ではないのだ。万が一の場合、自分で自分の身を守れない。安全確保とフォローを考え、弁務官事務所に送った。この偶然によって発覚してしまった。

エリザベートはプレツエリが悪い人間には思えなかった。弁務官という立場でありながらフェザンを裏切っていたとは驚く他ない。

少なくともエリザベートには気さくで面倒見の良い上司だ。

都合のよいことに任務上では動機などについて調べなくていい。証拠を集めることも必要ない。エカテリーナらへ情報の流れの真実を教えるだけだ。

「お手柄よエリザベート！ よく突き止めてくれたわ！」

画面の向こう側ではエカテリーナが歓喜している。

まさかこんなに早く、エリザベートが成果を上げるとは思いもしていない。いや、成果など最初から期待していなかった。

エリザベートがハイネセンで新しい生活を送り、心の傷を癒してくればそれで充分だと考えていた。

それは過小評価だったようだ。

エリザベートの方もエカテリーナの役に立ててほつとしていて。ようやく借りの一部を返せた気分になる。

「しかし結果は驚くべきものだったな。まさかハイネセン駐在フェザン弁務官のトップが同盟の諜報員だったとは」

通信画面でアドリアン・ルビンスキーも嘆いている。

この後の調査によりプレツエリが同盟出身で、フェザン出身と偽って弁務官に就いた、つまり同盟工作員だと確定した。

それだけではない。

もう一つ、プレツエリが受けた通信、それはグラスノフからのものだと分かった。何とオーデインにいるボルテックの第一秘書が工作員だった！

ハイネセンとオーデイン、この二ヶ所のそれぞれ重要な場所に工作員がいて自由に通



信できたのでは情報漏洩も当たり前だった。

しかし、エカテリーナはプレツエリやグラスノフを取り押さえることはしない。見えて見ぬ振りをして泳がせる方を選択した。元々同盟工作員ならばフェザーンと利害が相反することはなく、諜報活動を止めさせる理由はない。

フェザーンの通信網を使われることは不快だが、逆にいえば優秀な諜報員を雇ったと思えばいいのだ。しっかりと監視を続け、利害が異なる事態になった時に取り押さえれば済む。

もう一つ、任務を終えたエリザベートはどうするか。

エカテリーナは本人に聞いてみた。たぶんフェザーンに帰ってくるだろうと思っただけだが、これは当てが外れた。

「エカテリン、私なら、ここの空気が合うみたいで。もうちよつと居させてもらえれば嬉しいのだけど」

むろんエリザベートは理由まで伝えられない。

まさか恋人候補と一緒にいたいためとは恥ずかしくて言えないではないか！

## 第六章 氷の刃

### 第六十三話 487年11月 日は陰りて

ヨブ・トリユーニヒトは努力を続けた。再び始まる帝国領侵攻の損害を最小限にするために。

それには軍部との意思統一が不可欠である。

ところが今度は前回と打って変わって困難だった。その相手がロボス元帥だったからである。

今度の帝国領再侵攻作戦はシトレ元帥に代わりロボス元帥が主導する。これは前回からの交代でもあり、同盟市民の感情的にもシトレ元帥では無理だ。これは前回

ロボス元帥が主導して作り出した軍事作戦案は先ずその規模が目を引く。

何と同盟軍八個艦隊を動員するというのだ！

これは実に同盟全機動戦力の七割にも及ぶ。一度の作戦に六割もチップを賭けるのはどう見ても異常だ。ただの賭け事であったとしてもそんな異常なことをすれば破産必須ではないか。

しかもそれほど大規模なのに肝心の作戦目的が抽象的であやふやなものときている。ヨブ・トリューニヒトから見ても実現不可能に思えた。

場合によつては帝国を一気に滅ぼす。でなければ帝国軍と戦い打撃を加える。

そんな無茶苦茶なことができるわけがない。

軍事的にも、社会的にもそうだ。そういう文言を平気で入れるとは正気の沙汰ではない。

トリューニヒトは呆れながら、主に動員規模について最大限の抵抗をした。それが傷を小さくする早道だ。

前回の侵攻と同程度の五個艦隊規模へ減らし、作戦行動範囲も縮小するよう申し渡す。

予想外にもロボス元帥はそれに従わず、どこを修正したのか分からないくらいの案を平気で再提出してきた。

ならば直接詰問する。国防委員長である自分の権限ではつきりと修正させる。

「ロボス元帥、修正案を見ましたが、再考願えますか。こちらの意見をしっかりと取り入れ、形として頂きたいのですが」

「あらゆる検討をした結果ですよ国防委員長。もしこれにもご不満ということであれ

ば、最高評議委員会議長に直接裁可頂く」

「直接、議長に？」

何とロボス元帥は暗に最高評議委員会議長サンフォードとの連携を仄めかしてきた。

ロボス元帥は軍人らしからぬ策謀好きであり、しっかりとパイプを築いていたらしい。

そして作戦決定の場を最高評議会に求めれば、自分の意見が通ると自信を持っているようだ。

それは悔しいが本当にそうなる。

再侵攻に反対した三人以外の委員は、史上空前、帝国撃破といった威勢のいい言葉に酔いしれるに違いない。そして自分の名誉と選挙の得票のことに結び付ける。

そこでヨブ・トリューニヒトは方向を変え、名を捨てて実を取る方向に出た。

作戦を概ね肯定するものの、実質的な規模削減を図った。八個艦隊というのは変えない。ロボス元帥の面子を保つため八個艦隊を動員するというのにケチはつけない。

しかし、内容を調整し動員艦数を減らすのだ。

この折衝はかなりのところまで成功した。たまたまロボス元帥のロボス派艦隊司令官偏重とも合致していた結果だからだ。

ルフエーブル第三艦隊

パストーレ第四艦隊

ムーア第六艦隊

ホーウッド第七艦隊

アツプルトン第八艦隊

アル・サレム第九艦隊

ルグランジュ第十一艦隊

ボロディン第十二艦隊

アツプルトンとボロディンの両主戦派を除けば見事なまでにロボス派の面々である。ウランフ、ビュコツクなどは外された。むろん連続で出兵参加させないというのが建前だが、ロボス派ではないという理由なのは誰でも知っている。

動員艦隊数は八個艦隊の割には少ない七万九千隻になる。

それには理由があつた。

例えば第十一艦隊は先の第三次ティアマト会戦で一度壊滅している。戦死したホーランド中将に代わり新しくルグランジュ中将が司令官に立てられ、再建の途上にあつたが未だ半個艦隊にも満たない。

第六艦隊もアスターテ会戦で大半が失われ、同じく半個艦隊未満という現状だ。

再び大艦隊がイゼルローン回廊に集められ、イゼルローン要塞で物資を積み込み、帝国領へ向け進発する。

結果的にこの出兵は惨敗に終わり、多くの意味で悲劇にしかならなかった。

自由惑星同盟はもはや癒されない傷を負う。

当初、帝国領に入ったロボス元帥と同盟艦隊は快調に進撃を続けた。

帝国軍の妨害がないこともあるが、何よりシトレ元帥によつて綿密な航路図が作製されていたからだ。皮肉なことにそのおかげでかえつて補給線が延びてしまう。

その後同盟艦隊はどうしたことか艦隊ごとに分散し、ひたすら多くの星系を占領にかかった。軍事上考えられない悪手である。

ロボス元帥は帝国軍を弱腰と見てすっかり侮つていたのだ。

同盟政府からの要望もある。民主主義万歳、と歓呼する帝国領民の姿を放映したいというつまらない理由が元である。

またしても帝国はこの侵攻に対し、焦土作戦をとつた。

帝国軍の諸将は表立つて反抗はしなくとも、反発を覚える者は多かつた。

焦土作戦という消極作戦に不満がある。

更に言えば、末端の将兵ほど憤っている。

帝国軍内でこの辺境星域を出身地とする将兵の割合が高い。イゼルローン回廊に近い方面の辺境の方が領民に危機感があることも理由である。そういつた将兵は自分の故郷が物資不足で飢え苦しむことに平気なわけがない！

前回、叛徒の侵攻艦隊は思いがけないほど早く撤退していった。そのため餓死で死者累々という事態になっていない。しかし、今回も同様だという保証はないのだ。

諸将の中でもキルヒアイスは特に焦土作戦には反対だ。

だが、ラインハルトのすることに直接意見はしなかった。ただし、帝国軍の各艦隊に過剰なまでに食糧品を分配するのを忘れてはいない。それはいざ領民に向けて食糧を放出する際、できるだけ早く与えられるためという優しい配慮だった。

その時が来た。

同盟の各艦隊はとても連携がとれないほど分散した。おまけに物資を失い、立ち往生寸前に追い込まれた。

ここで帝国軍は総反撃を開始したのだ。

その始まりはビルロスト星系だ。

結果として同盟第四艦隊はそこで無様に敗退、しかしパストーレ中将の司令部は辛くも撤退に成功している。

それができた理由はパストーレ中将の側ではなく意外なところにあった。

この同盟第四艦隊が戦った相手の帝国軍はロイエンタール中将の指揮する艦隊だった。

艦隊戦自体は小気味いいほどあっさり勝負がついてしまう。

ロイエンタールの指揮はあまりに完全であり、最初から第四艦隊を圧倒し、つけ入る隙など微塵も与えない。パストーレ中将は確かに歴戦であり、多くの経験を持ち、普通の戦いならば状況に応じて様々な戦術を編み出すことができる力量がある。

だがこの場合は力量の差が絶望的に大きかった。

ただし第四艦隊は同盟軍の中で比較的数の多い艦隊だった。ここしばらく第一線に出たことがなく、その分消耗することがなかったため本来の一個艦隊の形を保っていたのだ。ロイエンタールの帝国艦隊と遜色ない程の艦数である。戦いであつという間に負けたとしてもまだ壊滅ではない。

そしてロイエンタールの麾下にいくつかの分艦隊があつたのだが、その一つにクナツプシュタイン少将指揮のものがある。

おおまかに艦隊戦の態勢が判明したところでそのクナツプシュタイン分艦隊が離脱し、ビルロスト星系惑星に向かおうとしたのだ。

もちろんその前に指揮官ロイエンタールに伺いを立てる。



「ロイエンタール提督、クナツプシュタイン少将であります。艦隊戦はもはや終局、ここでわが分艦隊だけでもビルロスト星系に向かいたいのですが。一刻も早く手持ちの食糧を送り届けるために。」

「食糧？ なるほど卿は確かこのあたりの辺境星系の出身だったな。領民たちのことを心配する気持ちは分からなくもない。焦土作戦が始まってから既にこの日数が経つ。惑星領民がどうなっているか、想像の翼を使うまでもないことだ」

「そうです。だからこそ早く救援をしなくては」

「…… 卿には気の毒だがまだ許可はできない。今回の戦いは勝敗だけでは意味がなく、掃討戦まで行い、敵の戦力を戻らせないことに意義がある。卿の分艦隊二千隻は貴重なものだ。ならば一刻も早くそれが終わるよう努力を期待する」

ロイエンタールは叱責の声は出さなかった。「目の前にまだ敵がいるのに何が領民だ！」などと喚く旧いタイプの指揮官の悪癖とは無縁である。

クナツプシュタインの気持ちは理解できるし、その優しさは貴重なものだ。そして食糧を早く送りたいのはロイエンタールも同じなのである。そもそも焦土作戦には思うところがあり過ぎる。

しかし、合理的理由で許可自体は出していない。

クナツプシュタインは一応納得した。しかし惑星領民に物資を届けることばかりを

考えていたため、意図しなくとも全艦隊の中で進行がワントンポ遅れ、後方に下がる恰好になってしまった。

それが同盟艦隊から見れば艦列の隙、と見えてしまったのだ。

脱出の血路を開くべくそこにめがけて突進する。

クナツプシュタインの分艦隊は同盟艦隊を一手に引き受ける形になり、支えることができず破られてしまった。

「我が艦隊が破られるとは不名誉だな。まあいい。どうにでもなる程度だ」

ロイエンタールは眉を二ミリほど上げただけで、慌てるそぶりは一切無い。

「バルトハウザー、今から言う宙域に急行せよ。意味は言うまでもない。卿の快速に期待する」

同盟艦隊の進路をきれいに予測し、他の分艦隊を先回りさせて頭を抑えにかかると。その後ロイエンタールの本隊はタイミングよく最終攻勢を加え、一気に瓦解に持ち込む。

あまりにロイエンタールの能力は隔絶していた。ただし偶然にもパストレー中将の旗艦レオニダス他司令部は逃走に成功したのである。

一方のクナツプシュタインも戦死はしていない。

思わぬ激闘の最中、盾となった艦隊がいたのだ。

クナツプシユタインの下にいるナイトハルト・ミユラー准将の艦隊、わずか四百隻である。

同盟艦隊の濁流の中で慌てることなく防御を展開し、みごとクナツプシユタインを守り切っている。

一連の会戦終了後、ロイエンタールは特にクナツプシユタインを責めてはいない。

「卿の行動は艦隊の足並みを乱し、作戦に支障をきたした。責任を厳しく問われることになる。しかし今すぐではない。領民に食糧を与える時間くらいはある」

指揮官らしい言い方ではあるが、領民を救えと言っているのだ。

これがロイエンタールの度量というものである。

## 第六十四話 487年11月 仕掛け

その頃、オーデインでヒルダが活動を続けている。

手始めは積極的に社交界に出ることだ。つまらない舞踏会にも出席してさりげなく存在をアピールする。

正直言えばヒルダの苦手な分野である。運動は得意だがダンスは好きではなく、そして何よりも率直の欠片もない迂遠な世間話をしたくない。毒にも薬にもならない話をだらだら続け、時間を無駄にするのが嫌なのである。世の婦人方は何であんなにどうでもいい話題が好きなのだろう。

一応目に留まる場所にいれば目的は達成、そういった話に巻き込まれる必要はない。

むろん、思惑通り周囲の貴族はヒルダのことを噂する。

マリンドルフ家がリッテンハイム側に付いたことは格好の話題として瞬く間に伝わり、多くの者を驚嘆させる。

しかし、だからといってリッテンハイム側が盛り返したとまでは言えず、大差がついたまままだ。

それでもマリーンドルフ家が付いたということは、何かまだ分からない有利な要素が隠されているのだろうか、貴族たちにそういった疑心暗鬼を抱かせるには充分だった。

そのため、一時期は続出していたリッテンハイム側陣営からブラウンシュバイク側陣営に寝返る貴族は激減することになる。寝返りは一度はあり得るが、二度はできない芸当であり、臆病な貴族は慎重にならざるを得ない。

それに加え、ヒルダは中立派貴族たちにも積極的に関与している。むしろ、あまりおかしな貴族まで味方にしようとは思わず、ヒルダの目になつた貴族だけだ。

ただし、この時点でブラウンシュバイクとリッテンハイムのどちらにも付いておらず、中立を保っているのは弱小貴族がほとんどだった。有力なものはありません。

たった一人を除けば。

その者は逆に中立でなければおかしいとみなされている。

リヒテンラーデ侯のことだ。

現段階で帝国における随一の権力者が動けば、良かれ悪しかれ情勢は一気に変わるだろう。

ただし、リヒテンラーデ侯を陣営に引き込むのはどうも不可能、ヒルダも重々承知している。帝国の安定を願うリヒテンラーデはブラウンシュバイク側に肩入れするこ

とはあつてもリッツテンハイム側に良い顔はしないだろう。内乱を避けるためだ。ヒルダもそういうところはよく理解している。

しかし、一応ヒルダはリヒテンラーデ侯と接触を持つとうとした。

マリーンドルフ家として会見を申し込む。

これは当然のように拒否された。

会見を持つことだけで、政治的な裏をとられる。謀略に長けたリヒテンラーデ侯としては当たり前だ。現在の微妙な情勢でそんな初歩的なミスをすることは考えられない。

しかしながら全くの無駄に終わったわけではない。

リヒテンラーデは代わりに腹心エルフリーデをヒルダのところへ遣わした。

会見の場に二人とも申し合わせたように質素なドレスを着てきた。

ブラウニーと紅茶が並べられたテーブルを挟んで向かい合う。

ヒルダとエルフリーデは、一目で互いに相手が油断ならないことを悟った！

英雄は英雄を知ることだ。ここに見えない火花が散る。

しかし、この場はお互いの利益を得るためのもので、喧嘩をするためのものではない。型通りの挨拶の後、エルフリーデが先制を仕掛けた。

「マリーンドルフ伯爵家の令嬢、ヒルデガルト様、わたくしは決して誰かの名代などで来

たわけではないのですが、ここで面識を得るのも何かのご縁でしょう。お互い社交界ではなかなかお会いできませんでしたから」

冒頭でリヒテンラーデ侯の名代でないことをはっきり宣言する。

何の言質も与えないため、政治的に重要なことだ。

むろん、エルフリーデが実質的にリヒテンラーデ侯そのものであるのはヒルダにも分かる。目の前の女には底が知れない凄みがあり、ただの伝書鳩であるはずがない。

そして今まで会う機会がなかったというのは本当のことである。どちらも社交界に出ることを好まなかったため、自然とそうなる。

「そうですわねエルフリーデ様、今日は楽しく世間話などいたしましたでしょう。殺伐とした世の中には気晴らしも必要だと思いますわ」

「本当に同意いたします。ヒルデガルト様。世の中に争いなどなければよろしいのに。なぜ争いなくならないのでしょうか。それは負けている方があがくのがいけないのかもしれませんわ。無駄ですわね」

具体的な名を出さないだけで分かり易い話を言う。

エルフリーデからの軽いジャブだ。ヒルダは一瞬眉をひそめたが、直ぐに笑みを湛える。

「勝負の後で仲良く握手をして終われば、爽やかですのに。エルフリーデ様、そうでないから最後まで必死にならざるを得ないのは当然でしょう。そして無駄かどうかはまだ分かりませんわ」

「確かに終わってみなければ分かりませんわね。ヒルデガルト様は本当に頭の良い御方」

ヒルダは軽くお返しをする。

香りの良い紅茶を無駄にせず二人は飲む。

動きはあくまで貴族子女らしい優雅さを保ち、しかし頭脳はフルに動かす必要がある。この女は一筋縄ではない！

そして話はここまですが前座だ。

「エルフリーデ様、世の中にいる人の考えはさまざま。例えば三つのお菓子が並んでいるとして、どれも美味しそうだったらどうしましょう。何を選んだらいいのか難しいところの上ありません」

ここで一気に迫る。

本題、いや核心だ。

銀河帝国の後継者争いは避けられない。誰に肩入れするのか。三つとはもちろんブ



ラウンシユバイク公のアマールエ、リッテンハイム侯のクリステイーネ、そして直系の幼児を表す。

「まあヒルデガルト様、本当に難しいお話をなさいますこと。でも、それなら一番良いものを選びたいのは山々ですわ。私は食いしん坊ですから、大きいものの方が」

エルフリーデはいったんはぐらかす。

しかし、現状ブラウンシユバイク陣営が最有力と見ていること、そしてリヒテンラーデ侯もまたそちらを重視していることを匂わせている。

「そうですね。でも、未だ選択肢は残っていると思いますわ、エルフリーデ様。どうせなら、最も小さいお菓子を選んでみるのも面白いことでしょうに。食べてみなければ、味が分かりませんから」

「最も小さいもの？ それはまた不思議な話ですわね」

思わずエルフリーデは釣られてしまう。

あまりに意外だったのだ！

ヒルダの言う最も小さいもの、それはつまり年端もいかない幼児エルウインのことを指している。

そんなことを言うのはおかしい。

このヒルデガルトという女はリッテンハイム側の立場ではないか。

リッテンハイム側にこちらを引き込むことは考えても、その一応対抗馬である幼児の話をなぜ出すのか。どう考えても逆効果のほずであり、有り得ない。

もうお互い菓子例えで話す必要はなくなった。

「エルフリーデ様、今のところ最も弱い方なれど、そこへ肩入れする者が出てきたらどうなるか分かりませんわ」

「肩入れする者？ ふふ、それもまたどんな意味でしょう。帝国ではもう有力な者は旗色を鮮明にしているはずですから。ヒルデガルト様もご存知でしょうに」

「いいえ、帝国には力があるにも関わらずどこにも加わっていない者もまだおりますわ。けれどそんな方に限って不明瞭なことだらけ。その実力も、思惑も、まだはつきりとは。それでは何も決まりません」

「そうなら早くはつきりした方が誰にとつてもいいことでしょうにね。ああ、今日は面白いお話をたくさんできましたわ。もうお腹いっぱい。ここらでお暇しましょう」

「エルフリーデ様、またお話しできる日を楽しみにお待ちしております」

エルフリーデは帰る道すがら不思議な会話の内容を吟味する。

ヒルダはリッテンハイム陣営に加わるようには言わなかった。それを予期して疑

わなかったのに。

その代わり、幼児エルウィンに誰かが肩入れする可能性を示した。しかもヒルダはそれを妨げる意図はないと。

何が言いたかったのかまるで分からない。

エルフリーデから正確にその報告を聞いた後、リヒテンラーデ侯は会話の内容を解き明かしていく。

さすがに銀河帝国広しといえども策謀にかけてリヒテンラーデ侯は当代最高だ。

もはや別格ともいえる頂にいる。

ヒルダの分かりにくい謎かけを造作もなく読んでみせた。

「なるほどの。マリィンドルフ伯爵家の息女は賢い娘のようじゃの。エルフリーデよ、負けてはおれぬぞ」

リヒテンラーデはとても嬉しそうだ。笑みを絶やささない。

敵か味方かはともかく、ヒルダという思わぬ才能の光を見つけたことが嬉しいのか。

「しかし、話には分からないことが多すぎますわ、大叔父様。どういう意味でしょう」

「なに、こゝとは単純じゃ。先ずそのヒルダという娘はリッテンハイムに勝たせたいの

じやろう。先ずは動かせない事実をきちんと押さえるべきじや。そこから考えねばならん。エルフリーデ」

「それはそうですわね。確かに」

「さすれば、何かをしたいがためにわざわざ違うことを言っておるのじや。その他にはない」

「何かをするため？ それが幼児、いえエルウイン様の話になぜ？」

「そうじやの。エルウイン様の後ろ盾のことじや。結論を言つてしまおう。エルウイン様の後ろ楯になれるとすれば、しがらみや縁故の多い貴族ではない。儂のような帝国政府の文官か、軍を握っている軍人じやろうな。そして軍人のことであれば、ローエングラム元帥のことと思つて間違ひなからうて。いろいろな点から見ても他には居まい」

「それでも、いったいどうしてローエングラム元帥の話などを、ヒルデガルト様が」

正直にそう言うほかない。

まだエルフリーデには分からなかった。物事を中心は、誰を応援するかということであり、そこにリッテンハイムの名が入らないのはおかしい。

「そこじやよ。儂の選択肢の一つを読み切つて、その上で提案してきておる」

「提案を？」

「そうじや。儂がブラウンシュバイクめに帝国を渡す以外の選択肢をとるとしたら、の

話じゃ。それならばエルウィン様のことになるのは自明よの。しかし儂だけが肩入れしたところでどうにもならぬ。もう一人実力者を後ろ楯を付ける必要がある。儂も実はローエングラム元帥に目を付けておるのじゃ。そこまでヒルデガルト嬢は読んだ上で、しかし元帥の側の思惑が分からぬだろうと問うておるのだ。それではどうにも扱えないだろうと」

「ここまで話されて、ようやくエルフリーデも掴めかけてきた。

「こちらの考えの確認をわざわざしている、と。そして元帥を……」

「簡単に言えば、利害の一致する範囲内での協力じゃ。つまりローエングラム元帥がどんな人物かつきとめることがお互いに利益になる、と」

リヒテンラーデは本当に面白そうに笑う。

「まだまだ帝国の情勢は動く。貴族の派閥争いで優位であるブラウンシュバイク公といても、決定的なものではない。まだまだひっくり返せる余地はある。現にヒルダはそのために動いているのだ。」

「エルフリーデよ、面白いものが見れるかもしれないねぞ。ヒルデガルト嬢は動く。ここで儂の黙認を取り付け、何かを仕掛けようとしておる」

ヒルダの意図は達成された。

リヒテンラーデ侯がきちんと読み切ってくれ、ことを予期した上での話だった。

これで自分がローエングラム元帥に何かを仕掛けても、リヒテンラーデ侯は理解し、便宜を図ってくれる。少なくとも足を引っ張ることはしない。

言うまでもないがリヒテンラーデ侯が気にするのは、ローエングラム元帥が帝室に対してどれくらい忠誠心があるのかだろう。それが未知数な以上はローエングラム元帥を手駒に使えない。

もしも危険な駒をうかつに使えば、それこそ帝室に脅威になる。

ブラウンシュバイク公やリッテンハイム侯が権力を握って専横を働く方がまだマシだ。彼らはまだ帝国の体制の枠内でしか物事を考えられず、それを壊すことを思いもしないだろう。だがローエングラム元帥はどうなのか。

現実、ローエングラム元帥が帝室を尊重する理由も義理もないのだ。確かに姉のおかげで帝室に引き立てられここまで軍内で立場を確立できている。しかしそれを当人が恩義に思っているかは分からない。

これでは、リヒテンラーデの残す選択肢の一つ、エルウイン・ヨーゼフの後ろ楯に仕立てるわけにはいかない。

そこが付け目だ。

い。 さつそくヒルダは事を起こす。 相応にリスクのあることだが、やらなければならない

戦略家の武器は情報だ。

## 第六十五話 487年11月 墓標

帝国軍は一気呵成に反撃する。

それを受け、各星系において個別に戦いが始まっていく。

その全てで同盟艦隊は敗退した。

同盟艦隊でも戦巧者の提督は幾人もいるが、それでも勝利できた艦隊はない。

たいがい一個艦隊同士の戦いになったが、艦数において帝国艦隊の方が充実している。しかも地の利は帝国艦隊にある。同盟艦隊にとっては敵地の奥深く、しかも物資の不足した状態で戦わなければならないのだ。その残量を気にしながら戦うというのは相当の戦術的不利がある。

しかも味方の状況も不明である。攻勢に出てもよいのか、完全に守勢に回るべきか、分らない。時間稼ぎをしたところで友軍が駆けつけてくれるかどうか知りようもない。せいぜい分かるのは、おそらく友軍も帝国軍と交戦して同じく苦戦しているだろうというほぼ確実な予測だけだ。

これでは勝てるはずがない。戦巧者の提督であつても損害をなるべく抑えるのがせ



いぜいで、しかもそれは相手の力量が予想範囲に収まった場合に限られる。

同盟第三艦隊はレージング星系で敗退、ルフエーブル中将はあつさり戦死した。

その瞬間何を思い、何を言い残したかは記録に残されていない。戦いが始まって直ぐに旗艦は爆散し、兵員も脱出できなかったからである。

「ここは危ない！ ぐずぐずするな、直ちに反転せんか！ 早く逃げるぞ！」というのが最後の言葉とまことしやかに伝えられている。

それは想像に過ぎず、真実は誰も知らない。

同盟第六艦隊はリユーゲン星系で壊滅した。

指揮官ムーア中将は怯むことなく、果敢に迎撃戦を戦う。さすがに勇猛で鳴る将だった。だが元々数が少ない。その上不運なことに相手取った帝国軍は勇猛で鳴らしている黒色槍騎兵だったのだ。

損失が多くなっても諦めず戦ったことで余計に悲劇的結末になる。むろんムーア中将は戦死している。

同盟第七艦隊はドヴェルグ星系で粘り強く戦ったがやはり破れた。

うまく防御し、欺瞞の策をいくつも仕掛け、逆襲を伺っていたつもりだ。

しかし驚くべきことにそういう罠は一つたりとも通用せず、動けば動くほど損害ばかりが増えていく。

戦いの中、早い段階でホーウッド中将は降伏勧告を受け取った。

その降伏勧告は同盟艦隊の奮戦を称える言葉から始まる、丁重かつ礼節あるものだ。真摯な人柄が短い文章からでも分かる。

ホーウッド中将は同盟将兵の損害を考えてやむなく受諾し、帝国艦隊の寛容な赤毛の将の前に停止した。

同盟第八艦隊は善戦といえた。ヴァンステイド星系で交戦したが秩序を保ったまま撤退できた。

アップルトン中将は帝国艦隊があまり無理をしないことに付け込むことができたのだ。分艦隊の一つを指揮していたグエン少将は戦死してしまっただが、それでも全体の八割以上は脱出に成功していた。

それと反対に同盟第九艦隊はアルヴィース星系でなすすべなく蹴散らされた。

味方の損害の艦数を表示するカウンターの数字が上がるのが速過ぎて誰も目で追う

ことができなかつた。それほどの一瞬のうちである。

アル・サレム中將はわずかな艦と共に脱出できたものの、旗艦パラミデュースは運悪く大破、艦橋に直撃を受けた際断裂したワイヤーが宙を舞い、それに叩かれ重傷を負う。

同盟第十一艦隊はヤヴァンハール星系で交戦に入った。

帝国艦隊は何と艦載機を中心とした近接戦闘で挑んできた。もちろんこれによつて少なくない同盟艦が斃されてしまったが、第十一艦隊は速やかに密集し、短距離砲を多数持つ防空巡航艦を並べた。

その態勢で物資を使い切らんばかりの連続砲撃で対処する。弾幕は熾烈を極め、帝国軍艦載機の多数が失われる結果となつた。そのため帝国艦隊は一旦仕切り直しと再編を余儀なくされる。

その瞬間を見逃さず、ルグランジュ中將は猛進を仕掛け戦場から撤退した。

同盟第十二艦隊はボルソルン星系で敗退した。

第十二艦隊は元々アスターテ会戦で消耗し、補充も少なかつたため艦数が少ない。

しかも不運なことにボルソルン星系は同盟艦隊が侵攻した中で最も帝国領深くにある。

同盟の破綻寸前の補給線では支え切れていない。そのため実は既に転進を願っていたのだが、総司令部に実情を理解されず、許可されていなかった。

そんなところで帝国軍に急襲されたのだ。まともに戦えるはずがない。

特に推進剤が残り少なかったのが致命的になる。

司令官ポロディン提督はやむなく推進剤を少数の艦にまとめ、他の艦はそれらを逃がすことに全力を挙げた。

つまり三千隻に推進剤を積んで撤退の用意をさせ、残り六千隻は覚悟を決めた死兵となつて戦う。

「ここにてつかい墓標が要るさ。第十二艦隊の墓標にするんだ。名前をいくつ書けばいい？」

「そりや面倒だな。お前さんのはイニシャルで充分だろ」

「おいおい、考えてみるよ。何万人もいるんだ。それじゃ同じイニシャルの奴がいつばいだぞ。誰だか分からなくなる」

「だからいいんじゃないか。同じイニシャルなら共同にすれば数が減る。書く奴の手間を考えろ。それが嫌なら番号にでもするんだな」

「俺は死んでまで番号なのかよ」

生きて還らぬと定まった兵たちはそんな軽口を言いながら奮戦する。

尊敬するポロディン提督の下、最後の仕事をするので。

それこそ今までにないくらい見事な仕事をしなければ、生きてきた証が立てられない。

逆に生き延びさせると決めた艦には、艦隊の女性兵を集め、詰め込んでいる。

先のアスターテ会戦でも似たようなことがあったので、この第十二艦隊には女性兵の割合が高くなっている。

だが女性兵といえども誇り高き同盟軍兵士だ。

持ち場を離れての急な移乗には抵抗する。

「私共も同盟軍の一員です。この艦に女性兵がいなくなれば戦闘行動にも支障が出るでしょう。女だからといって理不尽です。そんな移乗命令には従えません」

そういう女性兵は少なくない数に及んだ。

戦況が絶望的であり、戦死の未来しかないのは承知の上である。それでも同盟軍の責任意は消えていない。

そこを半ば強引に移乗させた。

頑強に抵抗する女性兵はその恋人と抱きしめあうように取り計らった。いや、そういう女性兵にはたいい同じ艦に恋人がいるものだ。

「ナタリー、君はこの艦にいてはいけない」「ローザ、早く艦を降りて行くんだ」そこそこ同じ会話がなされる。

女性兵がその説得で移乗するはずはない。恋人を置いていけはしない。

しかしそれも計算の内だ。

抱きしめあつたところで、男は同僚に合図する。

女性兵を後ろからショック銃によって気絶させ、そうしたところを移乗させる。

恋人と共に戦死をと考えている女性兵は覚悟の表情の中にも涙がある。目覚めた時にはもつと悲嘆の涙に暮れるのだろう。中にはアスターテと今回で二度も恋人と死に別れる者すらいるのだ。今度こそ共に死を、と願つていても。

その心は悲しみに壊れてしまわないだろうか。

しかし、男の方に涙はない。

気を失つて艦から降ろされる女性兵の手に形見を忍ばせ、その顔を目に焼き付ける。「君といた日々は幸せだった」それで充分だ。

最後にしてやれることは、盾となつて守り抜き、命と想いを継がせることしかない。

これから向かう戦いに闘志を立ち昇らせる。これ以上意味のある戦いがあるだろうか。そこに挑むのは喜びだ。

死兵たちは職務を全うできた。

ポロディン中将の冴え渡る指揮の下、激闘を繰り広げた結果だ。

どの艦も退かず、もし記録に残るのであれば新記録に違いのない連射を続け、人間も艦も限界を超えていく。

反応炉のケージがとつくにレッドゾーンを振り切り、そのため継ぎ目から放射能が漏れても気にする者はない。

死兵がいったい何を恐れよう！

被弾して片手を失っても、内臓が見えるほどの傷を負っても、コンソールから離れる者はない。

絶命の瞬間まで職務を続けるのだ。

そして死んでしまえば無造作に取り除けられ、次の要員が血まみれの椅子にそのまま座り直す。

指にも背にも血が付くが、それは汚れなんかではない！

そこを死守し、燃え尽きるまで戦った男の魂の残滓だ。

誰がそれを拭き取れるというのか。

やがて生き延びるべき艦が無事戦場を離脱していくのが見える。最後の艦までを

見送った。

ようやく安堵できた。

もはや残っている艦は少ない。しかも中破大破、傷のない艦はない。

それらは一つにまとまって帝国艦隊に向かい、最後の突撃を敢行した。残りいくばくもない推進剤を一気に振り絞り、命を武器にしての突撃だ。

もはや方向転換をする推進剤さえ持たない同盟艦は攻撃を続け、そして攻撃を受け、最後に爆散する運命を辿っていく。

男たちの命は華麗に散り、求めた願いとかりそめの夢を虚空に叩きつける。実現できたはずの幸せな夢、しかし実現できなかつた夢を。

絶対の支配者たる宇宙の闇といえど、今だけは男たちの意気にたじろがざるを得ない。鮮やかな極彩色が一瞬でも闇に打ち勝つ。

ただの爆散の光ではない。余ったエネルギーの発散、そんなものではない。

それは人の愛に彩られた幻だ。

全ての想いが込められた美しい華だ。

「もうなすべきことは終わった」

「ボロディン中将は自殺している。同盟軍はあまりに貴重な勇将をここに失った。全滅寸前、コナリー少将が後を引き継いで降伏する。」



帝国軍コルネリアス・ルッツ中将は同盟艦隊のあまりに潔い戦いぶりに感銘を受け、自身の出した降伏勧告があまりに遅きに逸したことを心から悔いた。

「これぞ戦う者の鏡だ。敵ながら称賛に足り。」

後年、このボルソルン星域の近くを通過する際にルッツは必ず直立と敬礼を欠かさない。それは最後まで変わらなかつた。

ここで同盟将兵の軽口に出てきた墓標というのは意味を成したのだ。  
いみじくも、敵将ルッツによって。

## 第六十六話 487年11月 友と手を

だがしかし、同盟艦隊の悲劇はこれだけで終わらなかつた。

八個艦隊全てが各個撃破され、大打撃を受けても、総指揮をとるロボス元帥はまだ戦う気でいたのだ。

「このままでは帰れん。シトレの奴にそれ見たことかと笑われる。奴は帝国領から戦わないで帰った。臆病者だ。そんな奴よりもすっかり戦った儂の方が評価が低くなるとは道理に合わんではないか！ 少しばかり兵を損じたことが何だ」

このままでは自分の評価が地に落ちる焦燥感に捉われる。

少しばかりの兵、その言い方がロボス元帥の自我をよく言い表している。

「帝国軍も何で今頃仕掛けてくるんだ！ 儂に悪意でもあるのか。儂は悪くない。シトレよりも運が悪かつただけだ」

肥大した自我がひたすら一人相撲を続ける。

同盟將兵の悲鳴も絶望も頭らない。

「とにかく戦果だ。うまく言い逃れるためには戦果を一つでも挙げればいい。たったそ

れだけでよいのだ」

この時点で同盟艦隊は総数四万隻を切っている。実に半分以上が失われ、戦史に記載される大敗北だ。困難な撤退戦を続け、奮闘しながら逃れてきた艦艇はこれしかない。

だが、それすらロボス元帥の目には四万もいると映っている。確かに普通の会戦なら四万隻は戦力として大きく、一矢報いるには充分だろう。

ただし各艦艇は物資の不足と損傷でポロボロだ。何より、ここまで痛めつけた帝国の大戦力が相手になる。今さら集まってもどうてい勝てるはずがない。

ところがロボス元帥は命令を発動し、同盟艦艇をアムリツツア星系に集結させ、決戦を挑んだ。

単なる自分の正当化のためである。

もちろん帝国側のラインハルトにとっては重畳この上ない。

わざわざ全滅するために集まってくれるとは。掃除はゴミが集まってくれた方が簡単でいい。

しかし、ここでラインハルトの元に驚愕のニュースが飛び込んでくる！

「皇帝フリードリッヒ四世、再び病状悪化」

これを聞いてしまった臣下は全て皇帝のもとに馳せ参じなければならない。

それは帝室に忠誠を誓う者として当たり前のことだ。

誰一人として例外は無い。

皇帝より重要なことがこの帝国においてであろうはずがないのだ。

その時何をしている途中なのかは一切切問題ではない。例え重要な軍事行動を行なっている最中であろうとも。

いやむしろ、皇帝が弱つてる時に軍権を発動している方が謀反の疑いがある。

とにかく今は馳せ参じなければ、逆臣と断じられても仕方がない。どんなに地位のある高官でも、権力のある大貴族であつても、功績のある将であつても。

この重大事にラインハルトは迷った。

目の前には傷ついた敵艦隊が集結し、全滅を待つばかりの美味しい獲物になっている。

ラインハルトの幕僚たちの中でもオーベルシュタインは落ち着き払っていた。表情を変えず、何も言わない。

誰もその思惑は分からない。ラインハルトの覚悟を試そうとしているのか、あるいは帝国とラインハルトの間に溝ができるのを望んでいたのか、後世の人間は想像するしかない。

そしてラインハルトは決断した。やはりチャンス逃す手はない。

「敵を撃滅する。この好機をむぎむぎ逃がしはしない。直ちにアムリッツアへ急行せよ」

そして行われたアムリッツア会戦は悲劇にしかならなかった。もちろん同盟将兵にとつてである。

乏しい物資と低下した士気をもって帝国の大軍を相手にした勇氣は褒められるべきである。戦いの趨勢は黒色槍騎兵に突破され、周りを包囲され、後背からも攻め立てられ、万に一つも勝機はない。

戦闘終了後、生きてイゼルローン要塞へ辿り着いた艦はわずか二万七千隻を数えるばかりだ。他の五万隻もの艦と、もちろん乗っている将兵がこの帝国領再侵攻で永遠に失われた。

これでもう自由惑星同盟は機動兵力において帝国と正面切つて戦える相手ではなくなつたのだ。

歴史の主役から滑り落ちた瞬間である。

ここで全滅までしなかつたのは、帝国軍の攻勢がいったん弱まり、しばらく混乱をき

たしていたせいだ。

それには理由がある。

帝国領再侵攻の無謀さと、そのリスクを危惧していたヤン・ウエンリーは撤退支援の意見をハイネセン統合戦本部に出していた。

「現在帝国領に展開する同盟艦隊は分散し、星系の占領を始めたと聞いています。それが事実なら、帝国の手に踊らされ、いや自ら踊っているのは明らかでしょう。このままでは大きな打撃を被る危険があります」

言葉は丁寧だが、その中身は辛辣なものだ。

対応するのは統合戦本部長から一步退き、それに準ずる宇宙艦隊司令という地位にいるシトレ元帥である。

ヤンの上層部批判がその範囲にとどまっているのは、そこまで思っていないからではない。ヤンはシトレ元帥が同じことを考え、内に憤りを持っていると確信している。

「私もそう案じている。それで何を言いたいのかね、ヤン中将」

「シトレ元帥、少なくとも我が第十三艦隊をイゼルローンから帝国領出口まで移動させ、帝国軍に対する牽制に使うのです。決戦を図る帝国軍にとり、こちらが大規模な援軍送るかどうかは常に気がかりのはず、第十三艦隊をわざとゆつくり進ませればその懸念を認識させられるでしょう。多少の早い遅いは問題ではなく、必ず勝てる大戦力を用意し

ているように誤解させます」

「なるほど、こちらを大きく見せかける、というわけだな。」

「そうです。たとえ第十三艦隊が戦場まで駆けつけても戦力は相対的に小さく、おそらく戦局全体を覆すことはできません。それなら牽制に使用した方が意味があります。帝国にとつては同盟がそれこそ存亡を賭けた大勝負に打って出る可能性も捨てきれないはずですから」

「よろしい、分かった。君の最善と思う行動をしたまえ。私がそれを許可する」

同盟艦隊の将兵のことをシトレ元帥は心の底から心配している。

そしてヤンが最大限有効な手を打てるかと信じてもいる。提案してきたこけ脅しはまさにぴったりの作戦だ。

「何、敵の増援だと！ この後に及んで増援とは何の意味がある。敵は狂っているのか！」

ラインハルトが声を上げた。

最初から敵の増援を警戒していたラインハルトは、優秀な偵察隊をイゼルローン回廊へ派遣していたのだ。それらから同盟第十三艦隊が回廊出口付近に遊弋しているという急報がもたらされた。

だがラインハルトでなくとも誰にも分かる。

今さらイゼルローンから増援を繰り出すなど一番悪いタイミングではないか。もうアムリッツア会戦の大局は決している。戦力の逐次投入そのものだ。

「閣下、これはまたしても好機です。敵の増援があるならばもう一度ここまで引き付け、まとめて殲滅するのです」

控えていたオーベルシュタインが順当なことを言う。

「攻撃を一旦中止し、退くのがよいと心得ます。いかにも攻撃に息切れしたかのように装って。敵の全滅を先に延ばせば、必ずここに増援が吸い寄せられましょう。もちろん遠くから迂回し、大きな包囲網を構築し、完全に退路を断ちながら行うのです」

「確かにそうだろう。だがそれを行なうのには一つ懸念がある」

ラインハルトは珍しく逡巡する。

オーベルシュタインと少し離れたところから、キルヒアイスの目があった。

実はアムリッツアにおける決戦前にキルヒアイスから言われていたことがある。

「ラインハルト様、焦土作戦のために帝国辺境領民の生活はおそらく限界に達しています。餓死者すら出始まっていると報告がありました。決戦をできるだけ早く終わらせ、すぐにでも領民保護に向かう必要があります」



「キルヒアイスは本当に心を痛めている。直接的な非難はしないが。それはラインハルトも分かっている。各星系系での戦いに勝ち、もうそれで充分なのである。どんどん戦い続けることはない。」

「そこでラインハルトもアムリツツアの戦いをできるだけ早く終わらせ、それ以上のことはしないと確約していたのである。」

「ここでオーベルシュタインの言う通りにすれば領民の救援は限りなく遅くなり、どれだけ凄惨なことになるか想像もつかない。」

「オーベルシュタイン、辺境領民のことが気になる。その手を使うかは慎重に考える必要がある。」

「閣下へ率直に申し上げます。辺境領民の数は決して多くはございません。たかだか数千万人、その中から焦土作戦で死者が出たとしても百万人にも及びますまい。これは閣下の艦隊将兵の十分の一以下でしかありません。完全に勝つことの方が重要なのは自明のことです。」

「餓死は百万人。それが少ない数だから判断しろと言うのか」

「そうです。それにこの餓死は閣下にとり決して悪くは働かないと存じます。」

「オーベルシュタインの義眼がマキヤベリズムの極致を告げる。」

「何、それはどういうことだオーベルシュタイン。卿の言い間違いか。珍しいことだ」  
「いいえ、閣下、言い間違いでも聞き間違いでもございません。百万人の領民の犠牲は帝国政府にとつて何の痛痒もないでしょう。それどころか感謝される要因になりえると考えます」

ラインハルトの目が鋭くなる。血迷つたような発言を聞いて。

「感謝？ オーベルシュタイン、何を言っている。領民を餓死させて感謝だと？」

「根拠がございません。帝国政府はそんな犠牲より叛徒の共和思想とやらの蔓延を最も危惧しているはず。帝国の屋台骨を揺るがす思想こそ何よりも重視するでしょう。すなわち叛徒の艦隊が訪れた惑星は帝国にとつて癌です。思想が汚染された危険性のある領民は丸ごと消えてもらったほうが良いと考えるものと確信します」

それは絶対零度の合理性だった。

ラインハルトは理解すると同時に、わずか血の気を失う。

なぜならラインハルトにとつて死とは戦死であつて、戦いの結果だ。少なくともそこには高揚がある。しかしこの場合はただの掃除だ。もちろん掃除される側にとつて地獄の虐殺である。おまけに自分で望んで思想を変えたわけでもない。いや、実際共和制を支持した証拠もないというのに。

「人間を害虫のように駆除するというのか。思想一つで」

だが、確かにそれはあり得る。

オーベルシュタインのいうことはおそらく間違っていないのだろう。これまでの帝国の在り方を考えたら当然のような気もする。血迷っているのは帝国の方だ。

しかし、それなら帝国を倒すことを心に秘めている人間はどうなるのか。

餓死に追いやられる領民など比較にならぬ害虫以下の存在なのか。

ラインハルトは大事なことを忘れていたことに気がついた。

自分が達成すべき目的は姉アンネローゼを助け出すことだ。そして、姉を奪うことが堂々とまかり通るような腐った帝国を倒すことだ。

かけがえない友キルヒアイスと共に必ず成し遂げる。

だが、それを行なうのに帝国の暴虐を利用するのであれば、自分が帝国になったようなものである。

それは滑稽なパラドックスだ。

ルドルフを倒すのにルドルフになるというのだから。

「閣下、ご決断を。餓死が増えるほどよいのです。そしてこれは皇帝の病いに駆けつけなかつたことに対する詫びとしてふさわしいものでしょう」

「オーベルシュタイン。結論を簡潔に言おう。これ以上の焦土作戦は無用である。アム

リッツアにおける戦いは間もなく終局する。それが最後であり、再び持久策を取ることはない」

「閣下、それは僭越ながら合理的な策とは申せません」

「これは決めたことだオーベルシュタイン」

もう迷いはない。これを言い捨てて、ラインハルトはキルヒアイスの方を見た。

「キルヒアイス、頼む。お前が指揮を執り、困窮した領民たちのところへ急行し、救え。これ以上の餓死者など出させるな」

焦土作戦を始めて以来、しばらくぶりで直視した気がした。

友は優しい微笑みで返してくる。それはいつもと少しも変わらない。

直接言葉を交わし合うことなど必要ない。

信頼は取り戻された。

ラインハルトは思う。

二度と、この信頼を手放すことはするまい。

## 第六十七話

487年12月

## 秘策

キルヒアイスとラインハルトの仲は修復された。今度こそお互いに失ってはならない半身と悟った。

ラインハルトはそれと同時にもう一つ考えていることがある。

叛徒の艦隊をできるだけ叩いておかねばならないのは、別に軍人としての責務などではない。

無理をする必要はまるでないのだ。

ただ近い将来必ず起こるべき帝国の内乱、その時に邪魔されないようにするという意味でしかない。ラインハルトは必ず内乱を勝ち抜いて帝国を倒すつもりでいたが、それでも背後から襲来されてはたまらない。

しかし、それを阻止するのは別の方法でも良いのではないか？

要は叛徒がイゼルローンからこちら側へ出て来れないようにすればいいだけだ。

それができれば、オーベルシュタインの案を却下し焦土作戦の続行を拒否したことも問題なくなり、二つの命題を同時に達成できる。

そして事態は最初から身構える必要もないことだったと判明する。

結局、イゼルローン要塞から大規模応援が繰り出されることはなかったのだ。

ヤンの第十三艦隊はイゼルローン回廊出口から非常にゆっくり航行し、アムリッツアに近寄ることはない。もちろん意図的なものだ。そしてアムリッツアからバラバラに逃げてくる同盟艦隊の撤退支援に徹している。

それら同盟艦隊は死に物狂いでイゼルローン回廊を目指し逃げる。

どの艦も物資は底を尽き、破損個所のない艦はない。

艦内で決死の修理を続けながら航行だけは可能にしているのだ。どの部署の人間も艦の機関室に全面的な応援をしている。士官服を脱ぎ、汚れも気にせず作業をする。なんと機関部の下級兵に士官が従って動いている非常事態だ。とにかく艦を動かし続けるために。

シールドや砲撃はこの際どうでもいい。壊れたまま放置している。もはや同盟領内のドックに入っても復帰不可能と思われる艦も少なくなない。

人間も数日食っていない、という艦さえ当たり前にある。

「人間の方が艦より丈夫だとは初めて知った。人間は食わなくてもすぐには死なないが、艦は食わせなきゃ死んだも同然だからなあ」

疲労と空腹でやつと動いているばかりの兵たちもそんな冗談を言う。

艦内の動力が切れかけて冷気に震えていたり、放射能漏れに怯えたりしているのだが、どうやら口を動かすエネルギーだけはあるようだ。

もちろん、アムリツツアの薄い赤色に照らされながら宇宙を漂い、永遠に口を動かす必要のない兵よりはマシだ。

第十三艦隊はそんな損傷艦を見つけるとすぐに手を打つ。応急修理、病院搬送、とにかく一つでも多くの艦、一人でも多くの人命を救いにかかる。

物資が本当に無くなり、救難信号を出すしかできない艦も丹念に探し出し、可能な限り救う。

当然ながら追撃してくる帝国艦隊に逆撃を食らわせるのも仕事の内だ。

第十三艦隊の戦意はこれ以上なくらいに高い。

追撃してきた帝国の前衛艦隊を叩きのめし、引きちぎった。

突出して追ってきた帝国軍カルナップの分艦隊などは、ヤン・ウエンリーによって正に瞬殺されることになる。

こうして同盟艦隊の残存はやつとのことではイゼルローンに逃げ込んだ。

それを見届け、第十三艦隊も撤退にかかる。

一方の帝国艦隊はアムリツツアの戦闘が終局に向かう中、キルヒアイスを筆頭にして帝国辺境星系へ物資を届けることを最優先に行った。

被害を最小限に抑えるためだ。

といつてもその惨状は目を覆いたくなるものだった。

暴徒に破壊された商店などには商品は残されていない。残っているのは買ひ占めを噂された店主の死体だけだ。その買ひ占めが本当だったのかを知る者はいない。

路上には、餓死させてしまった赤ん坊を離さず抱いたまま気の狂った女が徘徊している。狂ってしまうまでどれほど苦悩したか、どれほど恨んだか、周囲の人間には想像するしかない。本当のところは本人しか分かりようがないのだから。

領民に救援物資を配る時でも感謝などされなかった。

罵倒、侮蔑ならまだいい。

死んだような目を向けられただけだ。そこに何も映っていない。

もはや擦り切れてしまっている。領民は希望や落胆といった激しい感情を吐き出して、心のエネルギーまでが空になってしまい、人形のようになっている。

それに領民は帝国軍の救いを単純に感謝するほどお人好しではない。

この戦いで見捨てられ、物資を奪われ、地獄を見たのはその帝国軍が原因だと知っている。



自分たちは戦いを有利にするための生け贄にされた。心を持つ人間なのに、使い捨ての道具にされたのだ。

ここに生まれ育ったというだけでなぜこんな理不尽な目に遭わされるのか。救援に来た帝国艦隊の将兵の心は焦土作戦の結果に深く傷つけられた。

ナイトハルト・ミュラーもその一人である。

自分は喜んで元帥府の招きに応じた。それが素晴らしいことだと思っていた。しかしそれでよかったのか。本当にこのままでいいのか。考えこまざるを得ない。

ラインハルトは焦土作戦の復旧に一応の目途が立ったのを確認すると、麾下の艦隊をもう一度集結させた。

その覇気はアムリツツアで収まることはなかったのだ。

各艦隊司令官は何事かと思いつながら、ラインハルト・フォン・ローエングラムが意味もなくそんなことを命じるはずがないとも知っている。

しかし、通達された言葉は予想をはるか上回り、驚愕をもって迎えるしかない。

「我が元帥府に所属する艦隊の将兵よ。先の戦いでは見事な戦いを示してくれた。その結果我らは敵をさんざん打ち破り、叩きのめした。勝利の女神はこちらに笑みを向け、敵を足で蹴ったのだ。これもみな全将兵の奮戦のゆえであると感謝する。ただし、これ

で終わりではない。終わらせてはならない」

何を言うのだろうか。

敵は向こうに逃げ帰り、戦いはもう終わったのだ。

「根本的原因が未だ残されている。現状では向こうが望むたびに悲劇は繰り返し返される。すなわちイゼルローン要塞が敵の手にある限り、帝国への侵攻などという夢を見続け、戦いを仕掛けることを企むであろう。そんな甘い夢を見させる原因を断たねばならない。よって我が艦隊はこれよりイゼルローンへ赴く。要塞を再び帝国の手に取り戻すのだ！」

帝国軍将兵の熱狂がそれに応えた。

「帝国、万歳！ 再び勝利を！ 忌まわしき叛徒に鉄槌を！」

焦土作戦の始末で萎えた闘志が再びよみがえる。

その後始末は辛かった。だが、今から行うイゼルローン奪回作戦はそんなことを繰り返さないためのものなのだ。

金髪の美神の指揮の下、再び戦う。

ラインハルトと麾下の艦隊は回廊に突入した。

率いる艦艇は四万隻余りの艦隊だ。全艦隊を動員したのではない。やはり焦土作戦

の復旧があるので、ミッターマイヤーやロイエンタールなどを伴うことはできなかつた。

しかしラインハルトはこの数でも充分過ぎると思つている。

艦隊の兵たちは先の要塞奪還作戦でミュッケンベルガーが六万隻を用いてさえ失敗したことを知っているが、不安に思う者はいない。

今度は常勝のラインハルト・フォン・ローエングラム元帥がいるのだ。

士気は溢れんばかりに高い。

これこそが来たるべき内乱に介入されることを阻止するためのラインハルトの一手である。イゼルローン要塞さえ取れば、そこで栓をして封じ込めておける。

イゼルローン要塞を白熱させる、第二次奪還作戦が始まろうとしていた。

そんなラインハルトの行動を遠くから注視している者がいる。

オーデインでそれを考え、分析する。

「やはり敵と戦い続ける、そちらを選びましたわね。思つた通りでしたわ。ローエングラム元帥」

ヒルデガルト・フォン・マリィンドルフだった。

実は先の皇帝病状の報はヒルダが策を講じて流した情報だ。ラインハルトに仕掛け

た罨である。

「皇帝の病状は一日の中でも波がある。それはもちろん当たり前のことなのだ

しかしそこを敢えて強調し、いかにも急激に悪化したように誇張して作り上げたものだった。決して完全な嘘ではないという巧妙なものである。

「軍事に才能があり、極端に強いがゆえに、どうしても発想が偏つてしまう。その結果宮廷闘争というものを軽んじる。それはローエングラム元帥が悪いのではなく、人間の性質というものでしょう。どれにも万能の天才なんていないのですから」

紅茶を飲みながら、淡々と独り言を言う。

別にヒルダにはラインハルトに対し悪意を持つ理由はない。

むしろ好意的なのだが、それと策謀には関係ない。

ここでラインハルトの帝国内での立場を一気に失わせてしまう。追い込めるだけ追い込んでから料理する。

それが大戦略家ヒルダの恐るべき策であった。

ラインハルトは気付かぬうちにヒルダの罨にかけられたのだ。

## 第六十八話 487年12月 要塞攻略戦〜ラインハルトの天才〜

ラインハルトと麾下の艦隊はそのまま抵抗を受けることもなく航行を続ける。

帝国軍にとっては勝手知ったイゼルローンの航路だ。

全く抵抗が無いのは、アムリッツアの戦いで敗北し撤退した敵艦隊は全て敵領土に戻っているからだ。それもまた予定通りといえる。被った打撃が大きく、イゼルローン回廊の守備も放棄しているのだろう。下手な妨害は意味がなく、全てイゼルローンに任せる、それも順当なことだ。

ついにラインハルトはイゼルローン要塞に到達する。

直ちに各艦隊が動き、トウールハンマーの射程外に整然と布陣する。要塞駐留の同盟艦隊が迎撃に出てこないのをしっかりと確認すると、やがて陣形を薄く横に伸ばし始めた。

横陣という範疇をはるかに超え、要塞を薄くほぼ半包囲といえるまで包みこんだの

だ。

「いよいよ始めるぞ、キルヒアイス。俺がこの要塞を陥としてみせる」

「外側からイゼルローン要塞を陥とす初めての例になりますね、ラインハルト様」

二人は戦いに臨み、輝くばかりに高揚している。

「そうだ。別に独創性を競うわけではないが、気分は良いものだ」

帝国艦隊は要塞を半包围したまま細かな機雷状のものを放出する。

何とゼツフル粒子発生装置だった！

それらは要塞を囲むように分布し、ひたすらゼツフル粒子をまき散らす。しかしゼツフル粒子は普通なら宇宙にそのまま拡散して無害なものになるはずである。

ただし今はそうではない。

あくまで要塞から一定以上離れず、ゆっくり包み込んだようになっていた。

これは指向性を持たせているからこそなしうる芸当だ。つまり、ここで帝国軍の新兵器指向性ゼツフル粒子を使ってきた。

むろんイゼルローン要塞司令室からもその光景が見える。

「ありやあ何ですか、先輩。帝国軍はゼツフル粒子を使ってきたように見えますが」

「確かにそのようだ。しかし腑に落ちない。なぜそんなことをするのか」

「イゼルローン要塞にゼツフル粒子なんて、戦車にマツチみたいなものでしょう。普通の要塞とか艦ならまだしも、このイゼルローンですよ？　この装甲にそんなものが通用するわけがない」

「アッテンボローの言う通りなんだが、だからこそ敢えて使ってくる帝国軍の意図が読めない。やれやれ、これは厳しい戦いになるかもしれないぞ」

ゼツフル粒子が十分な濃度で要塞を包み込んだ瞬間、一気に点火された！

まばゆいほどの光と熱を放ち、見た目には派手である。美しいといっても過言ではない。スクリーンは白一色となる。

ただし、要塞に何の実害もなかった。流体金属に存在する浮遊砲台さえ、いったん沈めておけば完全に守られる。

ところが帝国軍の取った次の行動にヤンの目が険しくなった。

その爆発の作る光の幕を通して艦隊が急進してきたのだ！

「なるほど先輩、ゼツフル粒子は目くらましですか。突撃を敢行するための」

「アッテンボロー、とりあえず迎撃する。グリーンヒル中尉、防御プログラムの発動を」  
セオリー通り、直ちに浮遊砲台を上げて濃密なビームとレーザーの弾幕を張る。

「ふう、帝国軍もいろんな仕掛けをしてくるもんだ。勤勉なことで。なかなか飽きさせ

てもくれない。奴らはエンターテイナーの素質もあるんですかね、先輩。でも防ぎきれないほどじゃないでしょう」

「これが劇場ならまだ前座かもしれない。アツテンボロー、山場が後に控えてる気がするんだ。何かがおかしい。やれやれ、意図が分からないというのが一番厄介だな」

帝国軍の突撃はまさに命知らずの熾烈なものだった。しかし、数としてはたかだか三千隻程度であり、一気呵成に全軍が来たのではない。それほどの大博打ではなかったらしい。

要塞側が応戦すると、急激に撃ち減らされていく。

たぶん流体金属装甲まで辿り着けそうなのは百隻もないだろう。

これでは要塞外壁を破ることはできない。

浮遊砲台の弾幕をくぐり抜け、死角に取り付いたとしても無駄である。

要塞から発射されるミサイルには途中で反転し、流体金属にいる艦まで破壊する機能があるのだ。それも流体金属装甲が絶対の強さを持つことで可能になっている。

帝国軍の突撃は無駄に終わるかに思えた。

しかしヤンは気付く。



帝国艦が行う砲撃はばらばらなもので、斉射などとはとてもいえない。通常の突撃にはあり得ないことだ。現に浮遊砲台に何も損傷はない。

間もなく落下物が損傷艦であることが判明した！

「しまった、これらはみな無人にした艦だ。だとすれば帝国の意図はいつたい……」

帝国軍は先のアムリツツアの戦いで損傷して使えない艦を廃棄せずまとめて持つてきていた。それを無人にした上でゼツフル粒子の爆雲を通し落下させてきただけだ。

ゼツフル粒子は確かに目くらましだった。

無人艦は要塞至近から勢いよく落下してくる。確かに無人艦から多少ゼツフル粒子にやられてどうでもいい。

浮遊砲台がいくら稼働しても全ては撃滅できず、一旦は要塞表面に取りつかれたが、やがて片付けられる。

しかし、そんな無人艦が問題ではない。どうせ無人艦をぶつけても装甲は敗れない。帝国軍の戦術は大胆にも無人艦ですらただの目くらまし使うだけだった。

恐るべきことに、全て撃滅される直前、無人艦から多数放たれたものがある。

要塞側がそれに気が付かないうちに、流体金属装甲に着弾した。ただしそこで爆発するわけではない。それなら要塞に傷一つ付けられなかつたらう。

爆発はしないが、しかし決して不発弾というわけではない。

ある種の誘導弾というべきものだった。

何と流体金属の中に潜り込み、その中で移動を始めたではないか！

要塞側がやっとその存在に気付くと、もちろんこの不気味な誘導弾を直ちに破壊しようとする。

だがそれがあまりに困難なことを知って愕然とする！

探知が先ず困難なのだ。

こんなことは予想外なので、流体金属内に用いる探知装置など用意されていない。そもそも原理的に難しいことこの上ないのだ。むろんレーダーは使えず、音響といっても先ほどの無人艦の衝突のため波立っていて意味がない。

おぼろげながら進路が分かっても、対処がまた難しい。

誘導弾は流体金属に守られている格好だ。

イゼルローン要塞は艦隊を退けるのが基本戦術であり、流体金属の中で戦うなど想定外だ。

そして重く、強い流体金属層の中で稼働できる艦は存在しない。宇宙で使う戦闘艦にとって流体金属層は基本通過するだけのものであり、長時間とどまることすら無理である。

それにビームなどは流体金属を通れるわけがない。散弾や弹幕というのも論外である。

要塞表面から広がる宇宙空間ならば全然どうでもいいレベルの誘導弾だったろうが、いったん潜られただけで打つ手が無いとは。

「キルヒアイス、どうやらうまくいった。ゼツフル粒子と無人艦は無事に仕事を終えたようだ」

「これであとはトゥールハンマーを無力化、でございますね。ラインハルト様」  
「そうだ。要塞はもはや張り子の虎に成り下がった。攻めれば落ちる」

帝国側ではラインハルトとキルヒアイスが談笑する。

この恐るべき戦術、きれいに成功した。さて、ここからが仕上げだ。

「やられた、アッテンボロー。帝国軍は恐ろしい戦術を使ってきた。難攻不落のイゼルローン要塞、その装甲が流体金属であることを逆手に取られたんだ」

「そんな、だったら……」

ヤンはこの潜航する誘導弾の目的を想像し、苦慮するしかない。

おそらく特定の場所を攻撃するつもりなのだ。どうせ流体金属層の下にある硬い装

甲は誘導弾程度で破れない。とすれはもう決まっている。

その狙いの場所がある。そのために流体金属層の中を移動するのだ。

それこそトウルハンマー砲台に違いない。

イゼルローン要塞の弱点は宇宙港とイゼルローン砲台だ。どちらかを叩き潰せば要塞の攻略は可能になる。これは自明だ。艦隊を封じ込めるか、トウルハンマーを撃てなくすれば要塞の攻撃力は無くなり、あとは時間をかけて料理すればいい。

宇宙港の方なら、たとえ塞がれても防御側としては無理やり新たな出口を作り上げることもできよう。そもそも最初から宇宙港は一つではない。

しかし、トウルハンマーの方は、それを放つ砲台はわずか一つしかないのだ。

それに代えはない。

巨大エネルギーを扱う砲台は空恐ろしいほどの量の希少元素を使って建造されている。いかに銀河帝国の莫大なりソースといえどもおいそれと予備を建造できるものはなかったのだ。

そのたった一つを使用不能にすれば攻略戦は勝負あり、である。防御側は必ず負ける。

アッテンボローも意味が分かった。声も出ない。

イゼルローン要塞の強大な防御力の源泉はもちろん流体金属装甲である。帝国は膨

大な量の資源を使い、直径六十kmもの大要塞の全面に隙間なく施している。過去幾度もその無敵の防御力は実証されてきた。

おまけに格納も移動も容易な浮遊砲台という概念も生まれた。その延長線上にトウルハンマーがある。普段は隠れているが、敵艦隊がやってくる正面に砲台だけ素早く持つてくる。

そこで静止し、エネルギー回路と接続され、撃つ。

これが固定砲台なら要塞ごと回転させないと不可能だ。このイゼルローンの大きさでそれをやろうと思えば時間がかかり過ぎ、照準も難しい。一気に多方向から来られたら対処できなくなってしまう。

流体金属であればこそ全て解決できる。移動が早ければトウルハンマー砲台が一つしかなくとも何ら不都合ない。素晴らしい発想の産物だった。

しかし、今ここに流体金属ならではの弱点が存在したことが明らかになる。

もちろんそれを使った戦術を考え出すことができたのは戦争の天才、ラインハルトただ一人だ。

ヤンは続けて嘆息する。帝国側の発想には原典があることを知っている。

「昔、液体の中を移動する誘導弾、すなわちその名を魚雷というものが猛威を振るう時代

があつた。雷撃というものだが、帝国軍のなかにまさかそんな発想のできる者がいたとは」

ヤンは昔の戦術や兵器に詳しい。

人類がまだ地球という惑星にとどまっていた頃、海を制することが何よりも重要であつた。そこに浮かんでいる艦を攻撃するには海の中を進行する魚雷が何よりも有効だつた。海という液体の中では視認もできず、探知も回避も困難で、しかも威力が大きいからだ。

次に予期した危惧が現実のものとなつた。

帝国艦隊は移動し、要塞側がトゥールハンマーを撃たざるを得ない状況を作り出す。有効射程内に帝国艦隊は分艦隊単位で侵入してきた。

それに対し、否が応でも要塞側ではトゥールハンマーを使つて対処せざるを得ない。なぜなら迫る帝国艦隊が無人艦なのかそうでないのか、肉薄されない限り要塞の側で知るすべは無いからだ。うっかり疑心暗鬼が過ぎて接近を許し、それが致命傷になったら取り返しがつかない。

なるべくトゥールハンマーを使うのを先延ばしにしたいが、使わざるを得ないところまで追い込まれる

そして一度でもトウルハンマーを使ってしまえば、砲台の位置が明らかになってしまおう。

そうなると一斉に魚雷が砲台を目指し、進んでくる。

「アッテンボロー、先の言葉は撤回させてもらうよ。意図が分からないのが一番悪いと思つてたんだが、意図が分かつても最悪というのはあるんだなあ」

さすがに呆れた声しか返つてこない。

「先輩、言い直しなんか期待してませんから後にして下さい。それよりこのピンチをどうするか、そつちを期待してますよ」

第六十九話 487年12月 要塞攻略戦～前代未聞

（

ここでヤンは流体金属層内の魚雷を迎撃する方法を思いつく。

トゥールハンマー砲台の周りに、急ぎ浮遊砲台による輪形陣を作らせた。

その浮遊砲台を無人にし、金属層に沈降させた後、自爆させる。

いわゆる爆雷攻撃だ。

この際コストは度外視する。とにかく砲台だけを死守すればいい。これを考えついたヤンもまた天才である。

この防衛法も帝国艦隊の方では観測している。

拡大スクリーンを見て、ラインハルトが高揚しながらそれを論じる。

「ほほう、面白い手を使う。さすが魔術師ヤン・ウエンリー、要塞を守備するのも魔術を使う。ただし、それで防ぎきれるかな」

確かに、これだけでは魚雷を防ぎきれないのは自明だ。浮遊砲台の方が絶対的に少な



い。

ここでトゥールハンマー砲台が破壊されたりすれば、要塞はその牙をもがれ、回廊に君臨する王者の立場から敵に怯える草食動物の立場へと変わってしまう。

「ええい、数がこんなにー！」

イゼルローン要塞の指令室で奮闘しているのはフレデリカである。

ヤンの作戦通り、浮遊砲台の自爆によってトゥールハンマーの砲台を守る。

多くの魚雷を迎撃するためには、爆雷代わりに使う浮遊砲台を最大限効率よく使わねばならない。浮遊砲台の方が圧倒的に数が足りないことは分かっている。魚雷を多数道連れにしなくては割りに合わない。

魚雷は都合が悪いことに時間差をつけて順次やってくる。流体金属に着弾した場所から潜航し、砲台に来るので、偶然近ければ早くなるのは当たり前だ。離れた場所に着弾したものは後から押し寄せてくる。

浮遊砲台の自爆はタイミングよく、しかも深さも重要である。金属層内の圧力を最も高める場所であれば魚雷を斃せない。それらの最適解を出すには綿密な計算が必要なこと、ヤンの仕事ではない。

それは人一倍計算力と記憶力に優れたフレデリカ・グリーンヒル、呼吸するCPUの

役割だ。指令室に詰めている優秀なオペレーターたちと組んでその仕事をしている。

「また来たわ！ 何で砲台に寄ってくるのよ！ あっち行ってよ、このクソ！」

フレデリカもイゼルローン要塞が窮地にあることを理解している。

いや、それどころか正に絶対絶命の危機にある。

焦りからそんなことを言ってしまった。

第十三艦隊の自由な空気により、皆は気ままに悪態をつくことが多く、普段からそれが赦されている。だがそんな中でもフレデリカだけは滅多にそんなことは言わない。さすがにグリーンヒル大将に育てられた一人娘、育ちの良さが現れている。

しかし今の危機にフレデリカでさえ思わず口が悪くなったのだ。

その言葉はヤンの耳にも届いた。

「ん？ 今何を言ったんだい、グリーンヒル中尉」

「え、あの、このクソ、でしょうか。済みませんヤン提督」

一瞬きよとんとしたフレデリカであったが、俯いて小声で言うしかない。

尊敬する上官ヤンに非難され、しかも理由がとんでもなく恥ずかしい悪態なのだから後悔するしかない。

どう思われてしまったのだろう。

泣きたい気分だ。口の悪い女。今まで作ってきた自分のイメージが台無しになったのではないか。

「あ、ごめん、そうじゃなくて。その前に言ったのは」

消え入りそうなフレデリカに、むしろそんな態度をとらせてしまったヤンの方が若干後悔する。

「それでしたら、どうして砲台に寄ってくるのかと……」

「そう、それだ！」

ヤンの頭にはいろいろな可能性が生まれては整理されていく。

「魚雷が正確に砲台目がけてやってくるのは何かの仕掛けがあるせいだ。まだその方法は分からないが、これが鍵になるかもしれない。よし、実験してみよう」

ヤンはトゥールハンマー砲台をあえて動かしたり、静止させたり、あるいはエネルギーを入れたりする。

同時に魚雷の集まり具合を見極める。どうやって魚雷が操作されているのか、高速で推論しては捨て、正しい可能性を残していく。急速にその可能性の数が絞られていく。

周りの人間には何が何やら分からない。

「よし、分かったぞアッテンボロー、直ちにシェーンコップを呼んできてくれ」

「先輩、早く教えて下さいよ。魚雷はどういう仕掛けなんです？　そして魚雷をなんとかしたいのに、何でローゼンリッターを？」

「先ずは伝令を伝え、ローゼンリッターに緊急出動を指示した後、アッテンボローは聞きたくて仕方がなかったことを聞く。」

もちろんフレデリカ以下指令室の誰もがそれを聞きたい。

「まさか先輩、魚雷相手にローゼンリッターが白兵戦ですか？」

「え、なんだいそりゃ？　白兵戦？」

「ヤンは不思議そうな顔をしてアッテンボローの顔を見返す。一瞬でもそれを思い浮かべたのだろうか。」

「先輩、流体金属に潜ってトマホークをぶん回して。うん、よく考えたらかの御仁ならできるともしれない。何しろ人間から一光秒ばかり離れてますから」

「冗談でもそんなわけはないよ、アッテンボロー」

「ヤンも思わず笑いがこぼれた。金属層の中でトマホークなんて。」

「いや、そうじゃない。あの魚雷の誘導方法が分かったからだ。最初は砲台からなにか漏れ出る廃棄物でも探知しているのかと思っていた。しかし、砲台を完全に浮上させるまで魚雷が寄ってくることはなかった」

一言も聞き漏らすまいとアッテンボローもフレデリカも真剣に聞いている。

「だからその可能性は無いと分かる。次に砲台の音ということも考えたが、流体金属は水と違って重く、やはりそれを何kmも先から探知するのも考え難い。それと、砲台から対極にいた魚雷までもが正確に向かつてきている。つまり魚雷から見えないは関係ない。最後に一つ。魚雷自体に流体金属表面に出るアンテナのような物はない。こう考えると方法は一つしかないんだ。魚雷は個別に動いているのではなく、誘導するための装置が別に存在するはずだ。砲台の位置情報を受け取り、魚雷にそれを受け渡している司令塔のようなものが」

皆は感嘆した。

さすがにヤン・ウエンリーである。

このピンチに見事な洞察力を發揮した。期待通りの魔術師だ。

「そしてその装置は、魚雷に信号を送るため流体金属に接していなければならない。だが埋もれていることはなく、逆に宇宙空間に一部が出ていないとおかしい。砲台位置の情報を受け取るために。つまり、形のイメージとしてはブイのようなものだ」と推測できる。それが流体金属の表面に浮いているはずなんだ」

「凄いですね先輩！ それをぶつ壊せば誘導できないから魚雷は砲台に来れなくなるってわけですか」

魚雷の詳細が分かってくる。だが、その対処法が分からない。

「しかし先輩、その破壊方法とローゼンリッターとは、またどうしてつながるんです？」  
「理由があるのさ。その誘導装置の形も大きさも分からないからだ。少なくとも今まで変わった物は見えていなかったんだから決して魚雷より大きいものであるはずがない。そんな目立たないものを見つけて破壊するには人の手による他はないと思っただ」

その時ちようどシエーンコップが装甲服に着替えて指令室に入ってきた。

シエーンコップが着ると装甲服さえダンディーに着こなしているように見える。

銀色のトマホークを軽々と持ち歩き、さしずめ少し大きなアクセサリーといったところだ。その姿は女性兵の目を自然と固定して離さない。

そんな機能美に無頓着というか気が付かないのはヤンとアツテンボローの二人だけだ。

今、そのシエーンコップは素早く作戦の説明を聞く。

「魚雷の誘導装置を探して潰す。ヤン提督、それは大役ですな」

言葉はいつもの飄々とした感じだが、すっかり具体的な絵図面を思い描いているのだろう。十秒ほど考え込んでから意見を言う。

「ですが、困難なことがあるのも確かでしょう」

「何だい、シェーンコップ准将」

ヤンは答えを半ば予期しながら聞く。そう、このやり方にはかなりの無理があるのだ。

「それはイゼルローン要塞の大きさです。直径六十kmもの要塞の表面、しかも探し物となれば何回往復しなければならぬか。ローゼンリッターといえど、いつもの複座移動機ではとても時間がかかりすぎ、現実的な話ではなくなりますな」

「もつと速く移動できるものを用意すれば、なんとかなるだろうか。いや、そうしなければならぬ。かといって駆逐艦などを宇宙港から出せば、それこそ狙い撃ちにされるだろう」

そこで皆は場違いなまでに陽気な声を聞く。

要塞防衛戦が勝つか負けるか、この作戦の一点にかかっているという時に。

「出撃命令もなく、ただ一方的に殴られるのが嫌でやつてくれば、みんな集まってパーティーをしてるなんて。ああ嫌だ嫌だ。人気者過ぎて指令室にやつかまれ、呼ばれもしない」

その声はもちろん第一空戦隊長オリビエ・ポプランだった。

オレンジの空戦隊服を着崩している。戦闘時以外は真面目に着る必要はないと思っ

ているのだ。その姿もまたシェーンコップと拮抗する独特の魅力がある。

しかし、要塞中枢部に対しそんな軽口を言うのも尋常ではない。ヤンはもちろん、アッテンボローさえそうは見えないが一応は将帥なのだから。

確かに言う通り指令室に呼ばれていないが、そこは考えてもいないようだ。

ポプランはヤン艦隊の自由を最も体現する一人である。他の空戦隊のエース、イワン・コーネフなどは勝手に要塞指令室に入ってくることはない。呆れてポプランを止めることもしないが。

だがポプランの実力は折り紙付きで、単座戦闘機スパルタニアンを駆って宇宙を疾駆する動きは芸術品だ。帝国軍の戦闘機など寄せ付けず、撃墜数はエースの中のエースと呼ぶべき数に上り、これまでも第十三艦隊を幾度も助けている。

「で、横から聞いてりゃ、探し物のために人間を要塞表面で素早く移動？　そういうことなら、撃墜数に入らない仕事でもたまにはやってみようかなんて、これが正にエースの余裕ってやつさ」

「なるほどなあ。その手があつた！　でもできるのかい？」

「その中年が見かけ倒しでなけりゃ、ね」

ポプランが考えていることをヤンも理解した。



空戦隊のスパルタニアンでローゼンリッターを運ぼうというのだ。本当にできるのか、やってみなければ分からない。しかし慎重に考える時間はない。やるしかないのだ。

こうして、空戦隊と白兵戦連隊という同じ戦場に立つことは絶対にあり得ないはずの二つの部隊は史上初めて連動する。

誰もが驚く空前絶後の作戦が始まった。

## 第七十話

487年12月

要塞攻略戦～意気を見

よ～

ポプランの言い方は、面白そうな仕事だからちよつとやってみる、という軽いものだ。実際のところは要塞の危機をしつかり理解し、そのために自分にやれることで貢献したいと真剣に願っている。

スパルタニアンが要塞表面に出る。

いつもとは違い、何かそりのようなものを曳航しながら。

そこへローゼンリッターの隊員を乗せ、高速で運ぶという算段である。

言葉にすればそれだけなのだが、決して簡単なことではない！

流体金属と付かず離れず、完璧に一定の高度と速度を保つという極限の集中力が必要だ。なぜなら流体金属は完全な平滑ではない。ただでさえ要塞の振動を受けて多少の波が立っているものだし、まして浮遊砲台の近くともなればその波は大きい。浮遊砲台は砲撃の度ごとに反動で沈み込み、それが波になるのだ。

その上、そもそもイゼルローン要塞は球体であり、単に真つすぐ飛ばばいいものではない。その球体のカーブに沿う技術がいる。

誤つて近付き過ぎれば即座に突つ込んで墜落死してしまう。水ならまだしも、重くて粘性の高い流体金属に突つ込んだらスパルタニアンの機体はお終いだ。更に言えば宇宙の戦いよりもつと悪いことに、スパルタニアンから脱出する余裕もない。

逆に表面から離れ過ぎれば、そりを宙吊りにしてしまふ。それでは乗っているローゼンリッターが振り落とされ、いくら装甲服を着ていても一瞬で死ぬだろう。

この作戦は技術と精神力と、何よりもお互いの信頼が重要だ。

そしてポプランもシェーンコップもその責務を果たした。

要塞表面をスパルタニアンがそりを引きながら三回も回つたころ、ついに発見したのだ！

帝国軍の魚雷を誘導しているとおぼしきブイが浮いてるではないか。

そして一つを見つければ、その形の情報を共有し次が見つけやすくなる。続いてローゼンリッター副長カスパー・リンツなども同様に発見する。

そのブイは予想通り小さいもので流体金属の表面を注視しないと見えない。スパルタニアンのパイロットではなく、そりに乗つてるローゼンリッターでないとは分からない

くらいに。

発見後直ちにその位置へゼツフル粒子発生装置を落とし、そのまま移動する。そうしておけば他のスパルタニアンが適当に銃撃するだけでいい。たちまち発火し、その誘導装置を破壊できるという寸法だ。要塞表面を大がかりに焼き払えるゼツフル粒子発生装置が要塞にない以上、それがベターである。

幸先はいい。

ただしシエーンコップが指摘した通り、要塞表面をくまなく探すためには気の遠くなるほど往復せねばならず、まだまだ端緒についたばかりだ。

その誘導ブイがいくつあるのかは不明である。おそらく要塞全体を包むように相当数が浮いていると予測される。

おそらくブイ一個で魚雷をいくつか誘導しているのだろう。逆に言えば一個を破壊しても、それがカバーしている範囲の魚雷にしか有効ではない。

では逆に、ブイヘトウールハンマー砲台の位置情報を伝える敵艦というのが存在するはずであり、そつちを叩いた方が早いのか？ いや、その敵艦を特定する方法が無く、現実的に無理である。

今はブイの破壊作業を地道に続けるしかない。

「砲台に接近する魚雷数、先ほどより減少しています！」

やっとフレデリカが明るい声を出した。

朗報だ。

その誘導ブイを破壊していくことは確かに意味があった。依然厳しい状態が続いていることに変わりはないのだが、光明が差している。

「作戦を続行。それと第二空戦隊以下、発進準備」

ヤンがベレー帽を被り直した。こうするのは作戦が佳境に入った時にする無意識の癖である。

今は大好きな紅茶を飲んでいない。

フレデリカが紅茶を淹れるどころではないからだ。しかし不思議なことにヤンは他の者に紅茶を淹れてきてくれるよう命ずることはない。

それを知り、フレデリカは歌い出したいくらい気分が良くなる。

この要塞側による誘導ブイの破壊は帝国軍の方でも察知していた。

オペレーターがラインハルトに告げてくる。

「先ほどよりロストする誘導装置が明らかに増加しています！ これは人為的に破壊されつつある証拠です」

「何だと……小賢しい、とも言えないな。的確に弱点を突いてくるとは、ヤン・ウエンリーもさすがだ。キルヒアイス」

若干困ったことになったが、ラインハルトは敵の力量を認める器の大きさがある。

「ラインハルト様、やはり魔術師と呼ばれる者だけのことはあるようですね」

「だがそれで対処されるとは限らない。どんな手段を使おうと、誘導装置を短時間に破壊しきることは困難だからな。しかし、それに対してこちらは一発でも砲台に命中せれば事が済む。せいぜい無駄な掃除を頑張ってもらおう」

全くその通りだ。ラインハルトが慌てないのも充分な根拠がある。

しかも今は横にキルヒアイスがいる。

ラインハルトが気づかないことでも赤毛の友人がカバーしてくれるのだ。今もキルヒアイスの目が鋭くスクリーンを読み取り、推察し、正確に思考をまとめる。

「ラインハルト様、拡大映像で見る限り要塞側は艦載機を使って遂行しているようです。これはかなりユニークですが、効率のいい方法ですね。有利といえど油断せず、こちらも艦載機で叩いてみては」

「それはいい考えだが、艦載機戦では分が悪いこともあるだろう、キルヒアイス」

「確かに今までは、どちらかという艦載機戦では帝国軍に不利なことも多くありまし

た」

ラインハルトとキルヒアイスは同じ懸念を持った。

過去を振り返ると艦載機戦では帝国側が負けることが多かったのだ。

同盟軍艦載機スパルタニアンは単座ながら対艦攻撃を主目的として作られた艦載機である。

物量の少ない同盟の苦肉の策なのだ。少ない艦数で戦力を充実させるための方法である。

それが案外有効になったので、今度は被害を受ける側の帝国軍が対抗策を編み出す。そのスパルタニアンを駆逐するためにワルキューレという艦載機を開発した。

ワルキューレはスパルタニアンを墜とすためだけの機体である。帝国軍では対艦攻撃は戦闘艦が行うものであり、役割分担がはつきりしている。

その意味からすればワルキューレはスパルタニアンより絶対的に優位なはずだった。

しかし、できたワルキューレは格闘戦を重視し、小回りを利かせるためにノズルなどを可変式にしてある。結果として非常に操縦が難しく、しかも可変部の振動によって安定性に欠けるものになった。アイデアは悪くなかったのだが、帝国軍技術部はやや頭でっかちだったようであり。実用性はあまり良くなかったのだ。往々にして技術というのはそういうことがある。しかも一度出来上がれば直ぐに抜本的改善をしないのが

帝国のあまり良くない面である。

同盟軍の方では、帝国軍のワルキューレを脅威に感じたが、こちらもまた対ワルキューレ専用の艦載機を開発できなかった。あまり多種の試作をするゆとりがなかったからである。

しかしその代わりに、スパルタニアンへ単純にエンジン出力増大と武装強化というシンプルな対策を施している。

結果的にはそれが正解だった。

実戦において、複雑な機構を持つワルキューレはかえって単純かつ重武装なスパルタニアンに押されてしまう場面が多い。

それが分かっていて、ラインハルトはわずか嘆息した。

「ここにあのメルカッツでも居れば艦載機を使つたらうに。頑固一徹にも困つたものだ」

メルカッツを元帥府に入れるのは叶わなかった。手を指し伸ばしても丁重に断られてしまっている。

ラインハルトは近接戦闘の達人メルカッツを是非とも招き入れたかったのだが。

そのメルカッツは艦載機を使わせたら帝国軍随一の名手と誉れ高い。通常ワル



キューレの方が敵のスパルタニアンより損耗率が高いのだが、メルカツツが指揮をとれば、優れた戦術によりたやすく逆転する。しかもワルキューレをここぞという場面で集中させ、対艦攻撃にも使い、近接戦闘で無類の浸透力を誇る。過去幾度もそれは証明されているのだ。

「いえラインハルト様、それに代わり得る者が元帥府にはありませんか」

「そうか、ケンプのことか。なるほど、直ちにケンプに命じよう」

呼び出されたケンプにラインハルトが短く指令を出す。

「ケンプよ。先の戦いではあまりいいところを見せられなかったようだな。艦載機戦にこだわりの、それが崩れると相手に主導権を握られて回復できなかった」

それは帝国領内に侵攻してきた艦隊を各星系で各個撃破した時のことだ。確かにケンプは艦載機戦を挑み、その結果戦術の柔軟性を失い、殲滅の機会を失っている。

「面目次第ありません。閣下」

「しかしそれを今さら責めるために呼んだのではない。卿のこだわりがここでは重要なのだ。今こそ雪辱の機会を得たと思え。これより艦載機全隊を卿に与える。こちらの砲台破壊作戦を完璧にするため、敵の艦載機を要塞表面から駆逐せよ。できるか？」

「必ずやり遂げて見せます。艦載機の戦いにおいては個々人の技量と精神力が物をいい

ますが、ちょうど小官の愛弟子がおります。その者がご期待に沿えるでしょう」  
「よし、直ちに行動に移れ」

ラインハルトはこう言つて焚きつけ、ケンプに艦載機戦を任せた。

なぜケンプがそこにこだわるのか、それはケンプ自身が艦載機乗りから将官にまで昇つた稀有な人物だからだ。先のアスターテ会戦でラインハルトに見出され、以来元帥府に加わり出世を続けてきた。

むろん自身も常にワルキューレ乗りの矜持を宿している。しかし今は艦隊指揮官であつて、自分がワルキューレに乗れるわけではない。

代わりに操縦技術を伝え、弟子を育ててきたのだ。

今もつとも信頼できる弟子に戦いを託す。

「任せるぞシューラー。艦載機の戦いをここの全帝国艦隊に見せつけてやれ。我らこそが戦いの主役になりえるのだと」

「分かりました。微力を尽くします」

その者、ホルスト・シューラー大尉は淡々と答える。

元々あまり表情を変えない方の人間だ。

心の中では、ケンプがメルカツツに競争心を持っていることに気付いている。ケンプはメルカツツ以上という評価を欲しがっているらしい。

ただしそんなことは戦いの場には関係ない。戦いは男たちの気迫の勝負なのだ。

現時点で押しも押されもしない帝国軍のエース、撃墜数五十機を数えるホルスト・シューラーはワルキューレ隊員たちに激を飛ばす。

「いいか、俺たちが主役だ。舞台のど真ん中で無様な真似はするな。敵はどうせ『棺桶もどき』に乗っている。用意がいいじゃないか。遠慮はいらん。本物の棺桶に変えてやれ！」

「了解！ 奴らをそのまま火葬にしてやります！」

ワルキューレの隊員たちはスパルタニアンのことを「棺桶もどき」と呼んでいる。スパルタニアンは銃座だけが可動式であり、本体はずんぐりとした箱型の形状をしているからだ。華奢な可変式ノズルが特徴であるワルキューレとまるで違う。

今、ワルキューレの大群がイゼルローン要塞に向けて発進する。

そして近付くにつれて視界に要塞がどんどん大きくなっていき、視界が大半それで塞がれてくる。圧倒的な威圧感だ。

しかし男たちは怯むことなく進む。

一方のヤンもワルキューレの来襲を既に予想していた。

こつちがスパルタニアンで作戦を開始している以上、帝国軍はきつとそうしてくるの  
に違いない。だからこそ要塞から手持ちの空戦隊を既に上げている。

こうして要塞攻防戦は次の段階に入る。

雲霞のごとき帝国軍艦載機ワルキューレを同盟軍艦載機スパルタニアンが迎え撃つ。  
あつという間に敵味方入り乱れて戦う。獲物を見つけて一目散に向かえば、いつの間  
にか後背に付かれて銃撃を食らう。しかし、その相手もまた横あいから撃たれる。

一瞬の油断が撃墜につながるのだ。

空間は飛び回る艦載機に満たされた。これほど多数のドッグファイトが同時に展開  
されることは滅多にない。

要塞表面は弾ける火花で彩られた。一つ一つが命の華だ。

帝国も同盟も、男たちはその技量と精神力を叩きつける。

スロツトルもレバーも銃撃スイツチも頼れる相棒、それどころか自分の体の一部であ  
る。たった一人で戦う艦載機戦ではそれらと自分の体だけが武器であり、命綱である。

いや、男たちばかりでなく、同盟スパルタニアンには女性パイロツトも少なくない。

女たちも叫び声を上げる。負けじと自分に気合いを入れるために。

今まで生きてきた、その存在の重みを乗せて立ち向かう。

自分の信じるもののため、この瞬間、持てる全てを賭けないでどうする。



第七十一話 487年12月 要塞攻略戦～思わぬ結末～

艦載機戦は完全に実力の世界だ。

撃墜を重ね、エースの称号を得て称賛を受ける者が出る一方、あつさり空虚に消えていく者がいる。どんなに善人でも、どんなに期待されていても、ここでは実力しか問われない。不条理と言ってもそれが現実である。

そしてエースといえども油断すれば消えて過去の人になる。

怯える者は狩られ、実力より勇気のあり過ぎる者もまた消える。

初めて尽くしの要塞攻防戦、艦載機対艦載機の死闘が続く。

激しい戦いの中で同盟第十三艦隊第二空戦隊隊長イワン・コーネフが隊員たち指示を伝える。

「みんな、慌てる必要はない。ワルキューレは数は多いがそれだけのことだ。向こうは浮遊砲台からの狙撃を避けながら行動する分、動きはかなり制約される。ぶんぶん飛び回るように見えるのは逆にゆとりがない証拠だ。落ち着いて狙っていけば必ず墜とせ

る」

第一空戦隊のポプランはどちらかというと隊員たちに勢いをつけ、士気を鼓舞する。無駄な詭弁もユーモアもそのためにある。多彩な表現力は空戦隊に必要な精神的インフルだ。

孤独な戦いを強いられる空戦では何よりも精神力で負けてはならない。逆に気負い過ぎてダメであり、肩の力を抜くことが必要になる。

ポプランは思いつきではなく考えてユニークなことを言っているのだが、だからといって誰にもできることではなく、ポプランならではの天性ともいえる。

第一空戦隊はいつでも怯えることなく、楽し気に戦う。

しかしイワン・コーネフの持ち味は落ち着きと熟慮である。それもまた必要なことだ。コーネフは自分の操縦技量もポプランに劣らないものでありながら、広い視野で戦局を考えることができた。隊員たち皆のことを把握し、攻勢と撤退を見切るのが特徴だ。そのため隊員の信頼はいやが上にも増す。

コーネフを尊敬した隊員たちの中には、コーネフの趣味であるクロスワードパズルを始める者が続出したが誰も長続きはしなかった。もちろん、第一空戦隊の方でポプランのマネをする者ももしも出てきたら、同盟軍の風紀の上で大問題になっただろうから、まだマシだったとも言える。

他の空戦隊のエース、ヒューズやシェイクリたちも自分なりの指揮方法というものを確立し、隊員たちの尊敬を集めている。結果空戦隊は自分たちの指揮官について時折呆れたりもしているが皆好いている。

面白いことに指揮官の性格が違う各空戦隊同士に、ありがちな派閥などは存在しない。指揮官同士が仲が良いということも大いに関与している。競うのは戦果、撃墜数のみだ。

コーネフの第二空戦隊が交戦を始めたことを知ると、地味に要塞表面にいたポプランが通信機に割り込んできた。

「ようコーネフ、第一空戦隊が荷物引きずってる間に撃墜数を稼ごうってのはせこいじゃないか。知ってるか。せこいと女も寄ってこないし、お前さんもパズルが解けないぞ。でも今回くらいはハンデってことにしといてやってもいい」

言うだけ言うのとポプランは通信を切る。作戦実行中なのでポプランも会話を続ける余裕はない。それなら最初から通信をしてこなければいいようなものだが、それでも一言言ってくるのがポプランたるゆえんだ。

「真面目にやれ、ポプラン。しかもハンデってのは負けてる方が言うことじゃない」

コーネフは呆れるしかない。まあ、ポプランの第一空戦隊の分まで頑張るのはもちろ



んのことである。

艦載機戦のことはともかく、要塞攻略戦は佳境に入った。

勝負はまだ決さないとはいえ、防御する側は深刻度が増している。次第に減ってきているとはいっても魚雷が全く来なくなったわけではない。

それに対し守りに使う浮遊砲台が足りない。やはり帝国軍が戦術の上で先手をとったのが大きく、後手に回った同盟が不利過ぎる。

そのことが次第に明らかになり、トゥールハンマー砲台を最後まで守りきるのが無理だと悟らざるを得なくなった。

「やれやれ、何か手を打たなきゃいけないが、時間がないときだ」

ヤンは飄々として言うが、顔は真剣なままだ。

ラインハルトの方では「もう一息だな」と言いつつ戦況を見る。こちらも真剣だ。

艦載機戦は期待したほど芳しいものではなく、ケンプに対し失望しているといつてもいい。損失の方が上回っている状態が続いているからである。未だ誘導ブイの破壊は続いているのだ。そのため実は魚雷の半分以上が操作不能になって失われている。

しかし、ラインハルトはただ艦載機に任せていたのではない。

たびたび艦隊を繰り出して、トゥールハンマーの死角を突けないか狙っている。なぜならトゥールハンマー砲台は今や自由に動けない。下手に動いて魚雷の濃密なところに行ってしまうと目も当てられず、自滅してしまう。そして魚雷の位置や進行状況は帝国軍しか知らないのだ。

トゥールハンマーは正面ばかりではなく射軸調整によって斜め方向にも撃てるのは確かだが、格段に照準も射程も甘くなってしまう。うまく突ければ艦隊でも戦える。そういつたこともまた帝国軍はよく知っているのだ。元々は帝国軍の要塞だったのだから。

ヤンはそれに対処するのに、下手に第十三艦隊を出せば混戦に持ち込まれ、数で優る帝国軍の思うつぼになるのが分かり切っている。

しかしこの時、驚きの声が上がった。

旗艦ブリュンヒルトのオペレーターが叫ぶ。

「緊急報告します！ 後背より艦隊接近！」

「何！ 何だと！」

ラインハルトも驚きを禁じ得ない。しかし素早く立ち直り考える。帝国艦隊が今さ

ら応援に来た？ いやそんなはずはない。

敵が増えたのならそれにも対処するだけだ。どうせそんなに戦力が残っているはずがなく、応援がそれほど大規模とは思えない。

おそらく陽動だろう。驚かせて撤退させようというのだ。姑息ともいえるが順当な戦術である。だがそんな陽動ごとまとめて叩いてくれる。ラインハルトにとつて要塞攻略の方が面倒で、むしろ艦隊戦なら望むところだ。この四万隻があればいかようにも叩いてくれる。

緊張と高揚に包まれ、ラインハルトの覇気がいつそう増大する。

しかし、後背からというはちよつと解せない。

ここまでイゼルローン回廊を注意深く索敵しながら来たのだ。作戦行動中に伏兵に襲われたりすることがないために用心しながら。敵艦隊がこつそり動いていたなら見逃すはずがないのに。

「しかし、事実を事実と認めないのは愚か者のすることだ。行うべきことは新しい事態に対処することであつて目をつむることではない」

やはり勝利の美神である。

そんなラインハルトをオペレーターたちが称賛の目で見ると。

「それで、詳しいことは分からないのですか。所属や規模は？」

キルヒアイスがオペレーターに問うた。それは当然の疑問である。

「戦闘行動の通信妨害のため、解析が完全ではありません。いえ、今出ました!」

またしてもオペレーターは驚愕している。いや、その驚きは前よりも大きい。

声が一瞬途切れる。

そこをラインハルトが促す。

「どうした。驚くのは構わないが時間を空費する必要を認めないぞ」

「申し上げます! 接近中の艦隊は敵ではありません! しかし、友軍のコードではありません!」

「何! 敵でも味方でもないとはどういうことか。存外貴官らも独創性のある発想をするものだ。しかし今それを発揮するのは遠慮してもらおう」

「いえ、これは帝国軍に属する艦隊ではないということです。つまり、帝国貴族の私領艦隊だと思われれます!」

これにラインハルトも声を失う。敵でも味方でもないという報告は正直ラインハルトも戸惑うものだった。その回答は実に正直なものであったが、驚きは何倍にも増す。あり得ないことが起きているからだ。

作戦行動中の帝国艦隊に貴族の私領艦隊が接近するなどラインハルトの記憶のどこにもない。

「続けて報告します！ 艦型照合、出ました！ し、しかし、これは本当でしょうか。艦隊の中心にいる旗艦らしいものはオストマルク、戦艦オストマルクです！」

やっと詳しいことが分かりかけてきたが……だとしても何も考えようがない。

どう解釈したらいいのだろう。

「ラインハルト様。戦艦オストマルクとは、確かりツテンハイム侯の私領艦隊の旗艦になっっているものでは」

「そうだキルヒアイス、どでかいばかりの代物だろう。貴族どもの悪趣味の産物だ」

ラインハルトは艦や武器というものは性能を追求し、しかもスマートで美しいものであるべきだと思っている。今乗っているブリュンヒルトのように。

ゴテゴテ貴族趣味を詰め込んで膨れ上がった艦など眼中にない。

しかしそんなことより、なぜここにいるかが問題だ。とにかく意図が分からない。

「通信を送れ。こちらは帝国軍ローエングラム元帥、作戦行動中だ。見て分かるだろう。しかもイゼルローン要塞を奪還するための重大な局面である。直ちに接近する意図を明らかにせよ、と」

返信が返ってくる間にも頭は休むことなく考え続ける。

「ラインハルト様、帝国軍に貴族の私領艦隊が近付くとは聞いたことがあります。しかも、ここはイゼルローン回廊です。叛徒とどうして今さら戦う気になったのでしょうか」

「確かにそうだ。そもそも私領艦隊など貴族の馬鹿どもが海賊相手にお遊びするくらいのおもちゃに過ぎん。本物の戦闘に使えるようなものではない。前線に何の用がある。しかも強力な探知妨害をかけながら来るとは。」

二人はしばし考え込み、同じ結論を出した。

「そうか、キルヒアイス。今さら来るとは要塞奪還の功にしたり顔であずかろうということか。貴族らしい姑息なことだ。そうまでして名を上げたいのかりッテンハイム侯は。確かりッテンハイムといえばブラウンシュバイクに水をあけられて焦っているはずだからな」

「確かにそう考えると良いタイミングですね。要塞攻略が佳境に入った今が最適でしょう。わずかな手伝いで報酬は大きくなりますから」

「ふん、忌々しいことだ。かといって追い返すこともできない」

「どうなさいます。ラインハルト様、要塞奪還の功を分け与えるのですか。逆に言えばリッテンハイム侯に恩を売る機会でもありませんが」

「手柄を分ける？ そんなことをするものかキルヒアイス、要塞奪還に貴族の手など一切必要ない。そこでおとなしく待たせておけばいい。恩を売る必要もないだろう」

ラインハルトは結論を出した。

あくまでイゼルローン要塞は自分の手で奪還する。政治的なことなど考慮しない。

「またオストマルクに通信を送れ。そこに停船し、作戦終了を待つべし、と」

しかし、今度こそ想像もしなかったことが待ち受けていた！

オペレーターはまたしても驚愕の声で報告してくる。

「探知妨害解かれました。詳細出ます！ リッテンハイム侯私領艦隊、総数、総数三万隻以上！ そして、主砲充填反応見られます！ これは、まさか攻撃準備では!!」

「全艦直ちに急速発進！ 先頭はイゼルローン要塞をかすめるようにカーブしつつ散開！ 後衛はその隙間を最大戦速まで増速しながら進め！ とにかく急げ！ 反転時期は後で指示する」

さすがにラインハルトである。一瞬の間も置かず、考えられる限り正しい指示を伝える。

私領艦隊とはいっても大貴族リッテンハイム侯の艦隊だ。内容的にはともかく数は多く、ここに展開する帝国軍とそう差はない。しかも圧倒的に有利な位置に着かれてし

まっている。

リッテンハイム侯の艦隊とすれば後背から迫るのだから、何も考える必要はなく、いかに弱兵といえどただ撃つことぐらいできるだろう。

おまけにラインハルトは未だ敵の物であるイゼルローン要塞との間に挟まれる格好になっている。これでは艦隊運動も制限を受け、必敗である。それが分からないラインハルトではない。

「通信が入りました！」

「オストマルクからか。いったいどういうつもりだというのか！」

「いえ、違います。オストマルクからではなく、首都星オーデインからの超光速通信です。そしてその電文は、」

今度もオペレーターが固まった。いったい何度目の驚きになるのだろう。



## 第七十二話 488年 1月 失望

「ここにきて貴族の私領艦隊などが敵になるのか。その軽挙の報いを受けるがいい」  
そう言いながらラインハルトは唇を噛む。

狼狽などしない。覇気がいつそう荒れ狂うばかりだ。

いったんはこの絶対不利な態勢から逃れるべく前進している。そこから反転し、どうやって戦う。

意図したことか分からないが、今や三万隻の貴族私領艦隊とイゼルローン要塞が協同歩調となっている。これではラインハルト麾下の四万隻でも難敵だ。少なくとも要塞攻略戦の遂行は難しくなった。

ラインハルトがどう決断するのか、何を優先し、どんな戦術を使うのか皆が注視している。

やっとオペレーターがオーデインから発せられた電文を伝えてくる。それもいっそう驚くべきものだった。

「皇帝フリードリッヒ四世、不弔!!」

「何! 何だと! 皇帝が……」

全く同じ時、リッテンハイム侯私領艦隊旗艦オストマルクにも同様の電文が届いた。皇帝不弔とは、それはヒルダにとっても驚きだ。

今、ヒルダはオストマルクの艦橋にある貴族用の貴賓席にいる。

帝国軍の艦船と違い、さすがに私領艦は乗員兵士以外の貴族が乗船することも考えて作られている。しかもオストマルクは大貴族リッテンハイム侯の御座船であり、艦橋にもまるで館の一室を思わせる豪華な一角が用意されている。実際はリッテンハイム侯が戦闘艦に乗ることはあまり考えられないのだが、それでも作りはそうなっている。

ヒルダは軽装用のドレスを着て、座り心地の良いシートに座っていた。

「こんなタイミングでそんなことがあるなんて。予想外のこともあるものね。作戦を少し修正しなくてはならないわ」

ヒルダの当初の作戦案は、先ずラインハルトに対し、皇帝病状悪化の報を聞いているにも関わらずそれを無視したことをなじることだ。

直ちにオーデインに帰参してこなかったことは臣下としてあるまじきことだと。

その上で、リッテンハイム家はその罪をとりなしてやると言えはいい。

ラインハルトの性格は分かっている。そんな恩着せがましいことを嫌い、おそらく激昂するに違いない。

しかし、実際にオーデインに来てみれば、アムリッツアで大勝利した凱旋どころか絶對零度の空気に色を失うだろう。

帝国で不敬は何によっても贖えない罪なのだ。

ランハルトは軍事の天才でも貴族としての経験は浅く、そういうところが分かっている。

そこで初めてリッテンハイム家のとりなしの重要さに気付く。そうすれば、恩を着せると同時にリッテンハイム側と密約を結ばせるのだ。たぶん、ブラウンシュバイク側にそんな大胆な発想も実行力もないだろう。ラインハルトを侮るばかりなのだから。仮に同じことを考えたとしても動きの早いこちらが勝つ。

それがヒルダの練り上げた策だった。

順序立てれば簡単そうに見えるが、ラインハルトの立場を少しずつ悪化させながら、しかも決定的に追い詰めてはならない。その匙加減が重要になる。

しかし今、思いがけず皇帝不予の方に接し、少しの修正が必要かもしれない。

「向こうの旗艦ブリュンヒルトに連絡を取って下さい」

今度こそオストマルクからの通信を受け、ラインハルトとキルヒアイスがブリュンヒルトのスクリーンに立つ。

画面上で一番驚いたのはキルヒアイスだったろう。通信画面には先の事件で面識のあるマリンドルフ家令嬢が映っているのだから。予想したリッテンハイム侯などではなく。

お互い軽く会釈する。その二人の様子に、ヒルダを初めて見たラインハルトは不思議そうにするしかない。逆にヒルダの方はかつてラインハルトを見たことがある。シャフハウゼン子爵領を巡ってラインハルトが決闘代理人になった時のことだ。

ヒルダは決闘で輝く美しい青年、ラインハルトを見て興奮したものだ。淡い記憶である。

まだ人生の何たるかも知らず、ただ無邪気であることが許された女学生の頃だった。あれから時が流れたのだ。

「帝国軍ローエングラム元帥、驚かせて申し訳ありません。私はヒルデガルト・フォン・マリンドルフと申します。リッテンハイム侯の命を受けここまで参りました。用向きを手短に言います。元帥が正道に立ち返るかどうか見極めるためです」

「フロイライン、それで我が帝国軍に敵対行動とはずいぶんな挨拶ではないか。しかも

こんな大艦隊で。おまけに今、正道とか面白い冗談を聞いたように思うのだが」  
ラインハルトが敵対心も露わなのは当たり前だ。

しかしそれを撥ね退け、ヒルダが素早く話を進める。機先を制するため。

「冗談などではございません。元帥の行動は皇帝に忠義かどうか疑わしいものがあります。しかしながら元帥は帝国軍でまことに有能な方であり、余人をもつて代えがたいとリッテンハイム侯も理解しておられます。そんな元帥を今後あたら不遇な目に遭わすのには忍びない、リッテンハイム侯はそうも考えておいでです。元帥の力量とこれまでの功を評価し、守るべきである、それが帝国の藩屏、リッテンハイム家の責務だと」

「それほど長々と冗談を言うとは、セリフを覚えるのも一苦労だったのではないか。フロイライン。褒めてくれるのは嬉しいがなぜ私がこれから不遇な目に遭うのだ？ そのおかしな前提から議論を始めるのは無駄というものだ。その上、リッテンハイム侯がそれを哀れんで助けようなどと妄言が過ぎよう。かの御仁とはこれまで友誼もなく、理由の欠片も見つからない。妄言も行動が伴えば有害になる」

「では元帥、オーデインにて自分の目で確かめればよろしいでしょう。確かに議論をしている時間はありません。こちらと同様、皇帝陛下不遇の報を聞いておられるはずで。直ちに艦隊を反転し、できうる限り早くオーデインへ戻るべきだと存じます。できれば元帥は帝国に叛旗をひるがえしたと断じられ、取り返しのない事態になるの

は自明です。こちらの艦隊が攻撃の準備をしたのは、嫌疑に対する用心のためです。そうせざるを得ない事態であるのはご理解下さい。わたくし個人は元帥が謀反を考えているとは思わず、望んでもいませんが、必ずしも皆がそう考えているとは限りません」これにはさすがにラインハルトも考え込む。

ヒルダの言うことは理路整然としている。

皇帝に何かあれば、臣下は何をさせておき参内しなくてはならない。文字通り何をさせておき、である。それが忠誠心ある臣下の何より大事なことなのだ。

その程度はラインハルトにも分かっている。

先の病状悪化の知らせに対して無視をした負い目があるのも、今指摘された通りだ。

まして今回の報は皇帝不予、つまり意識不明とはそれと比較しても重大過ぎる。

帝国は石ころ一つでさえ全て皇帝のものである。まして帝国軍は皇帝の軍隊であり、皇帝の私物なのだ。帝国元帥といっても皇帝の道具に過ぎない。

皇帝の意識が無いということは、すなわち何も意思決定できる状態ではないという意味になる。もちろんそんな時に軍を動かすのは論外だ。

それに逆らえば、たとえ帝国の益になることが分かり切った軍事行動だろうが関係なく、当然のように元帥号剥奪の上、帝国軍を放逐されるであろう。いや、謀反とまで言われれば逆臣として討伐の対象になる。

通信を切った後、ラインハルトは一時間だけ迷う。

「しかしいかにも悪いタイミングだ。こんな要塞攻略戦の最中に。イゼルローン要塞はあともう一步で陥ちる。もう一步なのだ。それを諦めるのか。まるでアスターテの時と同じではないか」

その友キルヒアイスも気持ちは同じだ。あまりに残念である。しかしもう一つのことを考えてしまった。

「どうも釈然としません。リッテンハイム家の行動は何か恣意的なものを感じます」

キルヒアイスはヒルダの人となりをわずかにでも知る以上、引つ掛かるものがある。

あの頭がよく、公明正大で正義感のある少女がどうしてリッテンハイム家に肩入れしているのだろうか。

だが、ラインハルトにもキルヒアイスにも一つの事実がのしかかる。

それが存在する以上、決断せざるを得ない。

「ですがラインハルト様、申し上げます。我々だけのことであれば、何があってもよろしいのですが」

「そうだキルヒアイス。お前の言う通りだ…… 姉上に何かあれば、取り返しがつかな  
い」

軍事上だけのことなら、ラインハルトやキルヒアイスにはどうとでもできる。今の窮地を脱し、たとえ謀反を疑われ討伐を受けても返り討ちにする。

だが今、キルヒアイスが言ったのはもちろんオーデインにいるアンネローゼのことだ。

それだけは絶対に守らねばならない。

ラインハルトらが逆臣の疑いをかけられたらアンネローゼまで咎を負う危険性がある。

そして宮廷にいるアンネローゼは今現在身を守るすべが無いのだ。

アンネローゼは例外的に周囲からあまり恨まれてはいない。皇帝の一番の寵姫でありながら、穏やかで控えめな態度を変えないからだ。しかしそれも比較的、ということではない。全く恨まれていないという保証はなく、かつてのベーネミュンデ侯夫人のように害そうという輩がいけないとは言い切れない。

しかもアンネローゼをこれまで守ってきた絶対の盾である皇帝自身が今や意識が無いとは。

このまま急死すれば、どんな変事が勃発しないと限らない。オーデインに戻り、変事からアンネローゼを守るのはラインハルトらだけだ。



「仕方がないか、キルヒアイス」

「要塞攻略など後でも可能でしょう。ラインハルト様の戦術の引き出しはもう尽きましたか」

「こいつめ、尽きるものか。人が作った要塞、人が陥とせぬはずがあるまい。ましてやこの俺が」

ラインハルトの覇気がこれで無くなるわけではない。わずか回り道するだけのことだ。

「よし、撤退する。全艦隊にそう伝えよ。先ずは艦載機隊の收容と救助を速やかに行え」

ヒルダの賭けはこうして成功した。

ラインハルトへ多少の貸しができたのだ。

## 第七十三話 488年 1月 癒されぬ傷

ラインハルト麾下の将兵たちは撤退命令を受けて意気消沈する。せつかく要塞攻略戦を進めてきたのに。

ただし皇帝の変事があつたことを敢えて匂わせれば、すぐに納得させられる。それからラインハルトが悪いのではなく、仕方のないことなのだ。

ただし、それでも尋常ではなく悔しがる者がいた。

ケンプは艦載機戦が膠着状態になってしまつていたことに苛々し、このままではラインハルトに叱責されると思ひ込んでいたからだ。命じられた掃討は実現できそうにない。

それで撤退の命令を出すのに若干の躊躇があつた。

そこを突かれた。帝国の艦載機ワルキューレたちは、帝国艦隊に動きがあることでわずかな不安に駆られる。自分たちの母艦である空母もまたそれに含まれるからだ。

捨てて行かれるとまでは考えもしないが、少なくとも補給までの道が遠くなつてしまふ。もしも艦載機で補給が滞る事態になれば待つのは敵中での無力な漂流であり、むろ

ん絶対的な死しかない。

そして激戦中では、そんなわずかな心理状態の変化が影響してしまう。

「ワルキューレの動きが鈍い。よし、回り込んで一気に叩く機会だ」

第二空戦隊長イワン・コーネフが的確にそれを捉えた。改めて全体指示を出し、戦いをより優位に持つていく。

たまたまそのワルキューレの中に帝国のエース、ホルスト・シューラーがいた。スパルタニアンが有利な態勢であったにも関わらず逆撃にあつてしまったことで、コーネフはここに帝国のエースがいることを確信する。

ポプランだったなら強敵の発見に躍り上がって喜び、即座に勝負を仕掛けただろう。

しかしコーネフはあくまで冷静に、きちんと追い詰め、確実に叩く方を選ぶ。逃してはならない。

結果ホルスト・シューラーは孤立させられてしまう。それでも個人技は充分に脅威であり、うかつなことはできない。最後はコーネフが自分で相対する。

むろんワルキューレとスパルタニアンで通信など通じるわけがない。それでもお互いにエース同士、力量を認め、勝負にかかる。

ホルスト・シューラーは一步及ばなかった。

同盟のエース、イワン・コーネフに斃されてしまう。

これを後で聞いたポプランは「ちえ、帝国も見る目が無い。いや俺様に恐れをなし、せめて師範代に勝負をかけたんだな」としか言わない。むろんコーネフとしてはそんなわけがあるかという思いもあるが、余計ポプランを悔しがらせても仕方がないので黙っている。そういうところは大人だ。

逆に帝国の方ではケンプがシューラーの喪失を聞く。

大いに嘆き、艦載機の全面撤退を改めて指示した。

「悪かった、シューラー。俺のせいだ」

帝国艦隊はイゼルローン要塞から転じ、オーディンへの帰途につく。ヒルダのリッテナハイム侯私領艦隊は一足早く進発していた。そしてヒルダは一文だけ通信を送っている。

「よく決断なさいました。元帥の行動はわたくしが証言いたします」

それに対し、ラインハルトは返信を送っていない。今さら、よしなに頼みたいというのも卑屈な感じがしたからだ。

むしろラインハルトは別の方向に向けて通信を送ろうとした。

「そうだキルヒアイス、イゼルローン要塞に通信文でも送ろう」

「ラインハルト様、どういう言葉を送られますか」

「勇戦に敬意を表する、戻ってくるまで要塞を預かってほしい、それまで掃除を忘れぬように、と」

いつもの微笑みのまま、キルヒアイスがそれを要塞に送る。別にこんな言葉に深い意味は無い。

その帝国艦隊の撤退はイゼルローン要塞からも見える。

「ありやあ何ですか。おかしいなあ。どう見ても撤退していくようにしか見えませんが。欺瞞ですか、先輩」

「うーん、どういうことだろう。あの動きは欺瞞とも思えない。それに今さらそんな誘い出してする意味もない。とすれば本当に撤退するんだろう」

「今撤退なんて、帝国の奴らはここまで遊びにきたっていうんですか。ステーキを作つて、皿に並べて、さあこれから食うぞつて時に店じまいだなんて」

「確かに意味が通らない。急な撤退命令でも出たのかな」  
ともあれ助かった。

このピンチから救われるのなら別にどんな理由でもいい。

そして帝国艦隊の不可解な撤退を認めて直ぐに通信文が届く。それを見てヤンが言

う。

「そう言われても、掃除は苦手なんだがなあ。特に家には猫がいるからすぐ汚れる」  
そんな感想はどうだっていい。その文を帝国艦隊へ返信として送れるものか。

アツテンボローはやれやれと手を上げる。どうせなら「要塞はもう返さないから来てくれないぞ」くらいに言ってほしいものだが。

そのヤンらしいことに司令室の面々も呆れるしかない。

しかし皆が安心した瞬間、凶事が舞い込む！

たった一発の魚雷がついに守りを破り、トゥールハンマー砲台に到達したのだ！  
それは砲台の放射器の一つに当たって爆発する。

これに全員が色を失う。

トゥールハンマーは莫大なエネルギーを扱う以上、砲台に少しの傷があっても使用できない。万が一エネルギー充填中に暴発したら要塞の方が吹き飛んでしまうからだ。

入念な修理が必要なのは当然なのだが、そんなに簡単な話ではなく、期間もかかる。貴重な資源を使わなくてはならないのは当然だが、おまけに元々は帝国軍のものであるからには各種規格が同盟のものとは合わず、いちいち修正しなくてはならない。

「トゥールハンマー砲台ダメージ、報告いたします。放射器一台大破。修理は可能です

が概算で数ヶ月はかかる見込みです」

フレデリカが肩を落として報告する。砲台を守り切ることができなかつた。

「仕方がないさ。良いこと尽くしの人生つてもものはない。しばらくはか弱い要塞になつてもしょうがないね。虎からせいぜい猫につてところだ」

フレデリカは一瞬「また猫の話を」と考えたが、それより言わねばならないことがある。

「ですがヤン提督、今砲台に損傷を受け、トゥールハンマーが使用できないことは帝国軍からでも見えているはずです。反転してまた攻略に来ましたら」

「いや、来ないだろう。少なくとも今直ぐには。あの通信文を見る限り、帝国軍の指揮官はそんな人物じゃない。敵に対して言うのはなんだけど独特の美学を感じるんだ。信頼感という言葉に置き換えてもいい」

「そんなものでしょうか。提督」

「それよりも中尉、帝国軍がいないのであれば、しばらくぶりで紅茶を頼むよ」

フレデリカはヤンに紅茶を淹れる。

そつとブランドデーも二滴にしておいた。

イゼルローン要塞は同盟が守りきり、帝国領再侵攻、そしてアムリツツア会戦から統

く長い戦いはここに終結した。

ヤンは要塞攻防戦を戦いながら、最悪の場合は温存してある第十三艦隊を使い、将兵と民間人を脱出させようと考えていた。

重要なのは人間の命だ。ついで第十三艦隊という機動戦力である。帝国が嵩にかかって同盟に侵攻してきた際にはそれが何よりも重要になる。

要塞は要といえどどうせ動けないものであり、最悪帝国に返せばいい。

だがヤンの思考はその次にある。

要塞を自爆させるかどうか、である。

なるほど要塞を自爆させた方が奪われるよりもいい。しかし、その結果、帝国軍がむしろ同盟領に積極攻勢をかけてきたらどうなるだろう。物量を単純に行使されれば同盟は守れない。

その場合、逆にイゼルローン要塞を帝国軍に持たせた方が良いのではないか。精神的に帝国を落ち着かせ、積極策をとらないようにするためには。

なぜなら人間は盾があるからこそ安住してしまうものだ。

するとかえって同盟の軍事力再建の時間が稼げるということだ。戦術的に故意に負けることが戦略的な勝利になりえる。

結果的にヤンの迷いは不必要なまま済む。



しかし一連の戦いはその後だけがまともであつたに過ぎない。

意気揚々と帝国領再侵攻を図つた同盟軍は歴史的惨敗を喫した。これまで幾度もあつた敗戦、例えばアスターテ会戦なんかよりほほど大きな文字で歴史書にその哀れさが書かれるのだろう。

自由惑星同盟軍の大きな損失と深い傷は総括される。

これほどの膨大な犠牲を出した責任は先ず総司令官が取らなければならない。

だがそのロボス元帥は更迭されることも降格されることもなかった。

撤退の途中、ロボス元帥旗艦アイアースもまた沈んでしまつている。ロボス元帥は死んでいたので。

幸せなことだ。敗戦の非難をまともに浴びなくて済む唯一の道を辿つたのだから。本人がそんなことを志向するはずがない。

事実、とにかく生き延びようと逃げにかかつていた。そんな同盟総司令部の混乱を見逃さない帝国艦隊がいたので。ワールン艦隊がそこを襲いにかかる。思わぬ乱戦の中、防衛の固い旗艦アイアースだが、そのシールドを流れ弾がたつた一つだけ通過した。その被弾が偶然にも動力炉の近くに到達したのが致命傷になる。

動力を失って漂うしかなかったアイアースは帝国艦に補足され、包囲された。

そのままメツタ撃ちにされたのだ。降伏信号が故障して出せなかったのか、濃密な通信妨害のために伝わらなかったのかは判然としない。

ただしはつきりしていることが一つある。

近くに何隻もいた同盟艦はアイアースが囲まれて救出困難と判断した時点でさっさと見捨てて後退していた。

ただの一艦も決死の覚悟で突入することはない。アイアースの盾になり、身代わりになることなど考えもしなかったのだ。

アムリッツアの戦いの結果、第十一艦隊ルグランジュ中將は捕虜になった。

第八艦隊アップルトン中將も同様だ。

これは二人の將が共にアムリッツアの戦いに意義を見出していないことが根底にある。

二人は命を賭してまで戦い抜くべき決戦と認識していない。

物資の欠乏と戦力差、最初から負けると分かり切った戦いだ。こんな馬鹿な戦闘はなく、総司令部が命じるような意地の反攻など何になろう。もはや無意味な消化試合に過ぎない。怒りは総司令部に向くことはあっても帝国軍ではない。

「戦いは無駄だ。こんな諦めの気持ちで戦うとは、帝国軍にも申し訳ないくらいだ。せつかく下らない戦いに付き合ってもらっているのだからな」

この二人の猛将は戦う意義があれば自分を含めた最後の一兵まで戦い抜いただろう。しかしここでは配下の将兵を逃がすことが第一だ。

それが終わってしまえば、敢えて玉砕など選択することもない。包囲されたら降伏するだけである。

第九艦隊アル・サレム中將は死去している。

これは重傷の身でありながら無理をして指揮を執り続け、命数を使い果たした結果だ。応急処置ばかりで出血も止まらないのに艦橋から移動せず、医師の鎮静剤をも拒否した。

「ここで眠るわけにはいかんだろう。僕はいつも眠ったようなぼんやりした艦隊指揮だと言われていたものだ。しかし最後に本当に眠っていたらしやれにもならんではないか」

同盟軍の艦隊指揮官が八人もいた中でイゼルローンに無事戻れたのはパストーレ中將だけといっても過言ではない。

ところが同盟市民はパストーレを英雄になど思わなかった。

多大な犠牲に呆然自失した同盟市民は責任者を探し始める。ロボス元帥が死んだ今、戦死者の遺族はまだ生きているパストーレ中將を非難するしか感情のやり場がなかったのだ。

それに反論することなく、パストーレ中將は激しい非難を甘受する道を選んだ。

責任を感じていたことも確かだった。生きて帰った将だからこそできる責任の取り方を選ぶ。

その結果、この孤独な英雄は精神を病んでしまうことになる。

軍病院での療養を続け、正式に退役を受理される。

アムリツツアから帰った同盟艦隊の再建は当分できそうにない。

今の同盟にはクブルスリー第一艦隊、パエツタ第二艦隊、ビュコック第五艦隊、ウラ  
ンフ第十艦隊、そしてヤンの第十三艦隊しかない。

同盟の機動兵力は下らない冒険の結果、四割以下になった。

そして同盟軍のトップである統合作戦本部長の席は空席のままだ。

シトレ元帥にも若干の間接的責任を問う声があり、本部長への復帰は無理である。

しかし長くその席を空白にはおけない。結局、クブルスリー大將、ビュコック大  
將、グリーンヒル大將、ドーソン大將の四人の大將を候補にして選ばれる。

こんな大変な時期に本部長になるのは完全に貧乏クジとしか言いようがない。ただ

し、四人とも自分が選ばれば全力で責務を果たすつもりであり、逆に自分がならなければ選ばれた者をやはり全力で支える気概を持っていた。

結局、着任順と実績を考慮されクブルスリー大將が選ばれた。

クブルスリー大將は高潔な人格と高い見識に定評がある。若くから猛將として幾多の戦いに臨み、何度も軍功を立てている。ウランフ中將などから尊敬を集める存在だ。年を取るごとに円熟して更にバランスが取れている。

長く第一艦隊の司令官であったが、ここしばらくは統合作戦本部に勤務していた。第一艦隊はハイネセンを含むバーラト星系付近をその管区とし、首都ハイネセン直衛にもなっている。ほぼ遠征に出ることはなく第一艦隊司令官と兼任していても問題はなかったからである。

今、難局の中で一步一步進み出す。

「同盟軍の傷を癒すのに魔法などない。正しく、焦らず、努力を重ねるだけだ。ただし、帝国がそれを待っていてくれるだろうか。」

## 第七十四話 488年 1月 冷氣

一方、既に撤退を始めたラインハルトも魚雷がようやくトゥールハンマー砲台に命中したことを知る。

今ならイゼルローン要塞はトゥールハンマーを撃てず怖くはない。攻略も容易だ。

しかしそこで反転して再度攻略にかかることはしない。ラインハルトはそんな色気を出して決定を曲げることを考えもしなかった。

この戦いを教訓にして、いずれ流体金属内でも迎撃できる何らかの防御策が講じられるだろう。二度と同じ手は使えない。しかし攻略のため立てた戦術は正しかったのであり、果実は得られなかったが矜持は守られる。

まあそうだとしても悔しさを全く忘れたわけではない。

皇帝不予の報はあまりにもタイミングが悪く、たったの数日遅ければよかったのだ。要塞攻略は決まったも同然だった。

しかラインハルトは思う。

欲を言えばタイミングとしてはもっと遅ければよかった。

今はまだ元帥府を開いてまだ日が浅い。帝国と正面切つて戦うことはリスクが大きい。

この時点でそれに踏み切れれば将兵の動揺がひどく、戦いにならないかもしれない。たとえばどんなに腐った帝国であってもゴールデンバウム王朝と戦うというのは普通の兵にとつて驚天動地、絶対にあり得ないことだからだ。謀反の汚名を着て帝国に逆らう、そんな覚悟を普通の人間に求めるのは無理だ。

むろんミッターマイヤーやロイエンタールのような将帥は別だ。ラインハルトの力量を正しく理解している。また、自分たちもゴールデンバウム王朝の存続を良しとしておらず、その意味でも心は一つだ。将帥たちはラインハルトの元から離脱せず、共に戦う。

日が過ぎ、一般兵までもを完全にラインハルトの私兵と化した時こそ万全の戦いができる。現時点のミッターマイヤーやロイエンタールのような信頼を得てからの話だ。日が経つだけでそれが成せるだろうか。

一般兵にはラインハルト・フォン・ローエングラムの天才を見せつけ、輝く勝利の美神と信じさせなければならぬ。ついていけば必ず勝利し、敵対する側につけば必ず負けると思わせるほど。

むろんアマリッツアで半ば以上は成功している。

イゼルローンの攻略は成功すれば最後の一押しだったはずだ。もちろん魚雷戦術という誰も考えつかなかった戦術を駆使し、陥落寸前まで要塞を追い詰めただけでも兵たちは驚き、賞賛を送っている。しかしやはり陥とした場合とは違う。

オーデインに帰還したラインハルトらがなすべきことは多い。

軍内においては賞罰が最も大きな仕事になり、これまでの戦いをまとめて、将兵の評価を付けなければならない。

この場合はそれほど難しいことではなかった。

アムリツツア会戦に参加した将兵の多くは昇進することになる。帝国軍が歴史的大勝を挙げたので当然のことだ。普通に仕事をこなしていれば何らかの戦果に関わることになる。これにより兵士は給料が増して単純に喜ぶ。

戦果の全くない者、怠慢をした者でさえ据え置き程度で済む。

しかし、降格となるのはよほどのことだ。物資の横流しや捕虜虐待などの軍規違反を働いたごく少数に限られる。

将帥も多くが階級を上げる中で、わずか一人だけが軍規違反を理由に降格を言い渡された。すなわちクナツプシュタイン少将が准将に下げられたのだ。

その代わりに、見事な戦いをしたミユラー准将が少将へ昇格する。



上司を下げ、その部下が取って代わる。この賞罰はあてつけではないか、少なくともミュラーはそう思った。

「お待ち下さいロイエンタール閣下！　クナツプシュタイン少将は領民のことを思うがゆえにわずかが気が逸つたのです。それだけのことであり、積極的に利敵行為をしたのはありません。結局のところ戦線を離脱したのは敵の逆撃のためであり、恣意的なものではなかったではありませんか」

普段おとなしいミュラーがロイエンタールの下に具申しに行く。

それをロイエンタールは興味深げに聞いて返答した。

「それでもあのとクナツプシュタインの艦隊に遅れがでて、結果我が艦隊に乱れが生じたことには違いない。勝利はしたが一時は不利な局面にならざるを得なかった。特に不公平な報告を元帥府に上げたつもりはない」

「ロイエンタール閣下が不公平なことをする方でないことは充分に承知しております。それに疑いを持ったことはありません。しかしこのクナツプシュタイン少将の降格、その原因が領民への配慮である以上、苛烈に過ぎるものではありませんか。他に降格となる将がないのでは尚さら」

降格の将が一人では確かに目立つ。

人の噂となるのは必定で、将以外の一般士官や兵にまで侮られるようになるだろう。

「しかも閣下、同時に小官が昇格とは、どのようなことかと」

「卿の昇進はその働きによるものであつて他意はない。ほう、卿は普段優しい顔ばかりしているが、こういう時には決意が顔に出るのだな。なるほど推察するに卿は自分の昇格を打ち消す代わりにクナツプシユタインの降格を取り消させるつもりのようなうか」

「そこまで分かつておいででしょうか、閣下。もちろんそうして頂ければありがたく存じます」

「卿の決意は人間的に賞賛に値するものだと言わせてもらおう。しかし残念なことに結論は変わらない。卿もよく知っているだろうと思うのだが」

仕方がない。ロイエンタールの方はやはり公明正大であり、何も悪意がないのだから、ミュラーはそれ以上何をどうしようもない。

ミュラーはクナツプシユタインの所に行つて自身の昇格を済まなそうに告げた。

「ミュラー、卿がそんな気を使うことはない。今回の降格は私の不手際により艦隊全体に迷惑をかけた結果によるもので当然だ。そして卿の昇進もまた正当なものだ。卿の戦いは見事であり、あの時の防御がなければ私の命も危なかつた。あ、いや今度からは私の上官になるのだな。申し訳ない。言葉を変えねばならん。ミュラー少将、私などにお氣遣いとは身に余る光榮ですが、無用のことと存じます」

「済みません、クナツプシユタイン准将……」

先に帝国軍がとつた焦土作戦、そのことでもやもやしている将は多い。

ミュラーももちろんその一人だ。悲劇、それも帝国軍があえて招いた悲劇を忘れるものではない。

ここではつきりとした形になってくる。帝国軍の在り方は何かが違う。

実はミュラーは知らず、ロイエンタールもまた呟いている。

「確かに苛烈に過ぎた人事だな。クナツプシユタインも情に流されやすいだけで、元々力量はあるのだ」

ロイエンタールはクナツプシユタインの律儀だが感情の豊かな性格を知っている。手柄を立てさせ、雪辱の機会を与えようと取り計らった。

結果、ほどなくして少将に復帰した。

そんなロイエンタールの配慮にクナツプシユタインはいたく感動し、ますます傾倒することになる。

ラインハルトやキルヒアイスの方は間もなく細かい人事などに気を使う余裕はなくなる。

思い違いをしていた。

やはり、帝国と帝室を心のどこかで軽んじていた。いつか倒すべきものと断じ、忠誠心どころか強烈な反逆心を隠し持っているのだから当然かもしれない。

それが招いた結果を思い知らされることになる。全くヒルダの言った通りだ。

オーデインに戻ったラインハルトは官僚や貴族の冷ややかな目に晒された。

とうていアムリッツアで帝国軍を大勝に導き、叛徒から帝国を守った帝国元帥が凱旋するような雰囲気ではない。実際何の式典も行われなかった。皆が少しずつ持つ悪意が固まってそういう結果をもたらす。

帝室の大事に遅滞したというのはそれほど大事なのだ。

そのわずかな差が帝国にとって絶対である。

ラインハルトはそんなことなどイゼルローン要塞を獲れば補いがつくと思っていた。皇帝はあくまで不予であり、死んだというわけではない。

だがそれさえも多分違う。イゼルローンを獲ったところで何も変わらなかつただろう。

それどころではない。

ラインハルトにとって致命的になる噂が出て、いつそう追い詰められた。

「ローエングラム元帥は謀反を企んでいる。イゼルローン要塞へのこだわりは尋常では

なかった。それは決して帝国のためではなく、そこを拠点にして自分が独立したためだ。難攻不落のイゼルローン要塞ほど独立するのに適したところはなく、獲れば帝国に叛旗を翻すのもたやすい。いや、それ以上かもしれない。本気で戦っていたのかさえ怪しいものだ。実は叛徒とも裏で手を組んでいるのではないか」

まことしやかな噂だ。

実はヒルダがラインハルトを追い詰めるとすれば同様な噂を作り出すことを選択肢の一つに考えていた。しかしそんなことをするまでもなく、自然と流れている。しかもヒルダがそうしようと思っていたよりもはるかに苛烈な表現で。

無責任に憶測だけで物を言い、あたかもそれを真実であるかのように囁し立てる人間というのはいつでもいるものだ。

ラインハルトの周りの空気は急激に冷え込む。

特に、ある者にとって決定的な変化となった。これが後々まで計り知れない違いを生む。銀河の歴史は些細なことで大きく歩みを変えることがあるのだ。

「なるほど、ラインハルト・フォン・ローエングラムはやはり忠義の者ではなかったの。単に血気に逸り、戦いの方を優先したのやも知れぬ。帝室に含むところはなないのかも知れぬ。道理を弁えなんなのは若さゆえかもしれない。ただし、帝室を第一に思わぬこと

は分かった。それで充分じゃ。これでは儂と共にエルウィン様の後ろ盾にするわけにはいかぬ。危険過ぎるからじゃ。もう一度考え直さねばならん」

本当に残念そうに戦略の修正を行う。

もう一つ、些細な手を打った。最初に前線まで通達された皇帝病状悪化の報の出所を分からぬように取り計らった。それがヒルダとの暗黙の了解なのを忘れていなかったからだ。

## 第七十五話 488年 2月 利と理と情と

ついにヒルダはラインハルトに対し、正式にリッテンハイム陣営との共闘を申し込んだ。

このタイミングしかないと読んでの行動だ。

案の定、会談自体は断られなかった。ラインハルトは今や周辺の文官や貴族の悪意に晒され、身動きが取れない。更には姉アンネローゼを守らねばならない足枷がある。皇帝フリードリッヒ四世が生きていても不承というのは最も困る状態だったのだ。アンネローゼを連れ去って守ることもできない。

会談には何ら飾った言葉は必要ない。

ヒルダの話は単刀直入な言葉から始まる。ラインハルトが率直さを好み、回りくどい言い方を嫌うのも理解していた。

「ローエングラム元帥、帝国の情勢について改めてわたくしが説明するまでもなく分かっているのだと思います。そこでわたくしどもの擁するリッテンハイム家クリステイーネ様の皇位継承に助力いただけられないでしょうか。むろんお互いの利益になるこ

とであり、こちらだけではなく元帥の利益にもなります。いえ、敢えて言えば元帥にとつて他の道は無いものと確信いたしております」

ところがラインハルトは話のこれ以上ない重大性とそこに潜む危険を感じ、先ずは牽制を仕掛けた。

「ほう、皇帝が存命の内からそんなことを言われるとは、フロイライン、それこそ不敬なのではないか。皇位継承に絡んだ協定とは、今の皇帝の逝去を前提にした話だろう」

「元帥の方からそう言われるとは思いませんでした。いえ、皮肉ではありません」

現在のところ参内の遅滞により、皇帝に不敬という大合唱を受けているのはラインハルトの方なのだが。分かり切つてることを敢えてヒルダも指摘しない。

「それはともかく、フロイライン、今一度整理しておこう。こちらは帝国軍に属する者であり、皇帝のみに忠誠を誓う。貴族家のいざこざに対しては基本中立が正しい。新しい皇帝に誰がなろうがそれに忠誠を尽くすのみだ。反対に貴族家の側としても帝国軍に手を出す道理もない。すなわちフロイライン、こちらとしては中立で一向に構わないのだ」

「それは筋論としては正しいと存じます。しかし、元帥の本心からの言葉とは思えません。軍について言えば、仮にブラウンシュバイク家が権力を握った場合、帝国軍もまた



変容するのは必至でしょう。帝国軍三長官の人事もどうなりますやら」

それはラインハルトも重々承知している。

ブラウンシュバイク公が権力を振るえば、叛徒との戦いなどどうでもいいことになるだろう。

思うがままに人事が決まる。

どんな滅茶苦茶でも通るので。軍功や能力に関係なくブラウンシュバイク家に連なる者が要職に就く。

ブラウンシュバイク公にとって軍というのは単なる利権や名誉を得る格好のものであり、実力をもって戦うものだとは考えもしていない。

帝国軍の弱体化などどうでもいい。

どうせ戦いで勝った負けたは平民出身の兵がわずか死ぬか、多く死ぬかという違いではない。前線のどんな怨嗟の声もオーディンで優雅にダンスを繰り広げる宮廷社会には届かない。

最悪、ブラウンシュバイク公の甥フレーゲルが三長官の立場に立つたらどうなるだろう。

ラインハルトがフレーゲルの下で働かなければならなくなる。それも、ラインハルトが肅清されなければの話であり、肅清されないだけでもどんな卑屈な態度を取らなければ

ばならないのか。

そんな笑えない冗談をラインハルトが容認できるはずがない。

「リッテンハイム家に味方して頂ければ、元帥にそんな心配をかけることはないでしょう。これまで同様、いや、それ以上に元帥の立場が確立されると約束します」

ヒルダはこのように利をもつて誘った。しかも充分に現実的な利である。

しかしラインハルトはこれに乗らない。

「フロイライン、心配してくれるのは結構だが、それには及ばない。降りかかる火の粉を振り払うことくらいはできるつもりだ。火の粉を払い、ついでに火元を叩き伏せる、それだけのことだ」

ヒルダとしてはラインハルトがこれに乗ってくれたら重畳だったのだが、そうでないとしても予想の範囲内である。ラインハルトの矜持は追い込まれたからやむなくこちらと手を組むなど良しとしない。

「元帥の実力はよく存じているつもりです。けれどももうお分かりと思いますが、帝国というものは実力のみが物を言うのではなく、風評、大義名分が必要なものです。それを手に入れる道があるのでしようか」

実のところその道はヒルダが断っている。

ヒルダの策によつてラインハルトは踊らされ、その忠誠具合を暴かされている。それをリヒテンラーデ侯がしつかり見ているのだから、幼児エルウインの後ろ盾になる道はない。リヒテンラーデ侯は何より帝室に忠義の者を求め、そうでない者を最も危険視する。自分の駒に加えるはずはない。

ともあれ、このまま何もしないではラインハルトが大義名分を得られることはない。

こうして次にヒルダは理を説いたことになる。

それでもラインハルトはうん、とは言わない。

ラインハルトの目的は帝室も貴族も打ち倒し、帝国の腐つた秩序を焼き払うことだからだ。

「まだ道がないことはない。仮に内乱になったら、それこそ帝国軍が仲裁し、宥和させる鍵を握るといふこともできるのではないか。それならば名分もあり、しかも主導権を握れる」

そんな可能性についてはヒルダが即座に否定する。

「現実的に言つてそれは無理でしょう。両家は長年に渡る怨恨があり、よほどのことがない限り宥和することなどあり得ません。それに帝国軍が仲介をしようとも、実際に砲火を交えることまでしないのなら、少なくともブラウンシュバイク家には侮られたまま

でしょう。大変失礼ながら、元帥の出目で」

それは事実だ。典型的な没落貴族出身のラインハルトは姉の威光で成り上がったお飾りの元帥と思われている。少なくともブラウンシュバイクの側では。

これでは仲裁を聞き入れるはずがない。そして争いが終わった後、ラインハルトの立場は余計に悪化する。

「だがフロイライン、最後にもう一つ道がある。私に敵するというなら、旧来の勢力を全て相手どつて戦うということもありえるではないか。大義名分がなく、兵力も少なく、いったん困難に見えたところで、私とキルヒアイスが最終的に負けることなどない」

実力をもって事を成すなら、ラインハルトに負けるつもりはない。

ブラウンシュバイクだろうがリッテンハイムだろうが、あるいは両方を相手にすることになつても。

その上ブラウンシュバイクの息のかかった保守的な帝国軍が敵に回つてもだ。

自分の元帥府にとどまる将兵だけで戦いを挑んでくれる。仮定の話とはいえこれは決して言葉遊びなどではなく、ラインハルトの最も本心に近い。

ヒルダはラインハルトの圧倒的な覇気をまともに受けた。

普通なら思わず怯むところだが、今のヒルダはたじろぐことはない。ヒルダもまた自分の守るべき者のために戦っているのだ。

「ですが、閣下はよろしくとも閣下の姉君アンネローゼ様のお立場はどうなりますか」「何！ それを言うのか。フロイライン、言葉に気を付けねば墓穴を掘るだけなのを知っておいてもらおう」

ラインハルトの鋭気が場を切り裂いて暴れ狂う。

正に綱渡りだ。ヒルダの言葉使い一つで場の空気はどう変化するだろう。

アンネローゼ！ まさにそのためにラインハルトもキルヒアイスも遠い日に誓いを立て、全ての戦いを戦ってきた。

「では事実を申し上げます。閣下が帝室も貴族もないがしろになさるということは、逆賊と罵られることが必然ということにつながります。もちろん、アンネローゼ様もそうならざるを得ません。これまで帝室に寄り添ってきたアンネローゼ様が今さら全てを失うのです」

「全てを失うだと！ それは、あの日に決まったことではないか！ 皇帝の手によって」  
そう、あの日アンネローゼがラインハルトとキルヒアイスの手が届かない所へ連れ去られた。

あの時から時は止まったのだ。

だが、いったん櫛したラインハルトもヒルダの言う意味が分からなくはない。

自分の意志ではなくとも結果的にアンネローゼほど皇帝に寄り添い、最後までその力になった者はない。

そんなアンネローゼが逆賊とは、耐えられる仕打ちではない！

あまりに事実と異なるからだ。

また身の置き所と安全確保という面をとつても、ラインハルトが激戦の最中に身を投じる以上、多少の困難さは避けられない。やはりアンネローゼには帝国の反逆者のレッテルではなく、安全な庇護が必要になる。

こうしてヒルダは情に訴えたのだ。

ラインハルトが霸王に徹してアンネローゼを見捨ててまでも上を目指すということはありませんと分かっている。

「なるほどフロイライン、そういうことか。話は分かった。一両日中に返事はする。」

その後、ラインハルトはキルヒアイスに相談した。

オーベルシュタインに相談しても言うことは明らかだ。どうせ軍事力で片をつけるなら、一方と組んで取りあえず勝ち、その後で切り捨てれば最も効率がいいと言うだろ

う。それもまた合理的だが、こちらから裏切って武力を行使するのが前提になる。

「どうすべきだろうキルヒアイス。あの嬢の言うことは多少不愉快だが、決して間違っているのではない。だが本来ならもう少し麾下の將兵を結束させ、一気に帝国と貴族を葬ればよかった。あるいはいったん幼児を強奪し傀儡の皇帝に立ててもよかった。しかしどちらも今すぐには不可能だ」

キルヒアイスには珍しく時間をかけて熟慮した上で答えた。重要過ぎる戦略上の決断なのだ。

「ラインハルト様、難しい選択だと考えます。確かに現状で考えればリッツェンハイム側と手を組むのが適切でしょう。ただしこの話はあまりにタイミングが良すぎ、随分と乗せられたもののように思います。もう一つわたくしが気になりますのはそのマリーンドルフ令嬢の人となりです」

「確かにそうだな。協定も何も、信頼できるかどうかが第一歩だ。信頼できぬ者と組んでも仕方がない」

「ラインハルト様、そうではありません。わたくしの考えていることは逆のことです」

「何だキルヒアイス、逆というのは」

「カストロプ家の動乱の際に会った感じで言えば、マリーンドルフ令嬢は義に厚く、揺るがない性格のようでした。おそらく裏切ることはないでしょう。闘争に勝った後で切

り捨てられる恐れはないように思います。ただし、逆にこちらが何かしようとしてもなかなか隙がないのも確か、これは良いことか悪いことか難しいところですよ」

キルヒアイスが言いたいのは、派閥のどちらかと組むなら、愚かな方と組む方がいいということだ。

順番からいえば先に賢い方を確実に倒しておくべきなのである。

そうすれば残りをどう扱うにせよ御しやすくなる。

ここにキルヒアイスとヒルダ、二人の頭脳戦が展開されている。それは見えない火花だ。

ただし現実的なことを考えれば、ブラウンシュバイクと組む選択肢は最初からない。また幼児エルウィンを立てようにも、声がかからなければいかに帝国元帥でも近付くすべがない。

ヒルダの案に乗るしかないのだ。

密約は成った。

その内容は、もしも内乱が起きて軍事的な実力を行使せざるを得ない事態になった際には、ローエングラム元帥府は皇位継承者クリステイーネ・フォン・リツテンハイムに支援をする。



そして逆にリッテンハイム側はラインハルトにクリステイーネを守るという大義名分を与え、加えて事が終わればそれ相応の地位を与えろというものだ。

銀河の歴史はここに大きく動いた。

## 第七十六話 488年 3月 最後の忠臣

その密約から一ヶ月の後、皇帝フリードリッヒ四世は今度こそ回復せず亡くなった。

若すぎるということはないが、それでも急なことではある。

もしも回復すれば密約など最初から意味がなくなつたろう。帝国の後継者もしつかり定められ、正式に文書として公示されただろうから。さすがにそれに対して逆らえばどんな大貴族もただの逆賊になる。

ただし現実的には正式な後継者は立てられていない。

正確に言えば、直系である皇孫エルウインが最も優先順位の高い継承権を持つ。しかし、あまりにエルウインが幼いところからエリザベート・フォン・ブラウンシュバイク・クリスティーネ・フォン・リッテンハイムが継承しても何らおかしくない。

荘厳な葬儀が行われた後、すぐに不穏な空気が漂い始める。

今、最も力のあるものが継承者の地位を奪い取れる。

運命の気まぐれで皇帝になり、自分が望んでもいなかつたその椅子で一生を過ごさね

ばならなかったフリードリッヒ四世が、まさにそれゆえ運命に仕返しをしたのではないかと噂された。

事實はそれと少し違う。

フリードリッヒ四世は兄たちの熾烈な皇位争いと、それに伴う悲劇をつぶさに見ている。結果兄たちも、妻も、その子らまでも肅清され、フリードリッヒ四世以外に生き残った者はいないのだ。後継者争いの醜さと悲劇を知らないはずはない。

若い時は放蕩な生活をしていた皇帝であり、多少世に拗ねたところがある。あまり皇帝らしくない皇帝だった。

だが、いくら政治に関わらない皇帝であつても銀河帝国二百五十億の臣民の運命がかかっていることくらい理解している。

明言しないつもりではなく、あまりに考え過ぎて決めかねていたところ予想外に早く発作が起きてしまい、不予になつてしまったのだ。ついでながら側妃アンネローゼの扱についてさえ言い残していない。

そんな空気の中、ブラウンシュバイク側が先手を打った。

とうよりブラウンシュバイク派閥の一部貴族が先走つたのだ。もうアマールエ・フォン・ブラウンシュバイクが皇帝になると決まつたと宣伝し、戴冠式の日まで噂がし

てしまっている。

もちろんでたらめな噂に過ぎないものだが、いつの間にやら独り立ちして既成事実のようになり、広く信じられつつある。

当のブラウンシュバイク家はそれを打ち消すこともせず放置の構えだ。

「気が早い奴がいるものだ。まあ、多少先走っているだけで、いずれはそうなることだが」

しかし、こんな風潮へ過敏に反応せざるをえない人物がいる。

国務尚書リヒテンラーデ侯はそんな雰囲気にも全力で逆らう。

「そのような噂、決して看過していいものではないわ。帝国は正しい順序で立てられた皇帝が支配するものじゃ」

通常は皇帝崩御から遅くとも一ヶ月以内に後継者が決まり、戴冠式を行う。

今回は異例の事態だ。

力のある二大派閥は牽制し合い、文官をまとめる国務尚書にも迷いがあり、今だ決まらない。

しかし、そういうリヒテンラーデ侯に対し逆にブラウンシュバイク派閥の側もまた反発する。

根底には先の皇帝フリードリッヒ四世の治下、巨大な権勢を握っていたリヒテンラー

デ侯に対する根深い反感がある。

領地、財産、もちろん兵力という面でもはるかにブラウンシユバイク家に劣るのに、今までは皇帝の信を得て地位と権力を保持してきた。そして実際リヒテンラーデは術策を使い何人もの貴族を葬ってきたのだ。

それは当然ブラウンシユバイク派閥だった者も含まれる。もちろん皇帝から信任されているだけあって全ては帝国の安定のためであり、リヒテンラーデに何も私心はない。ただしそれは受け取る側に気持ちによることであり、理解されとは限らない。

「リヒテンラーデも直ちに引退すれば静かな余生が送れるだろうに。我らの邪魔をするのであれば実力をもって排除するのみ。皇帝という後ろ盾のない今、これまでのように権力を振るえるとも思っているのか。ただの一老人が滑稽なことだ」

そう言つて嘲笑う者たちがいる。

そんなことくらい当のリヒテンラーデに分かつていないわけがない。事実、ブラウンシユバイク家に権勢を渡してもやむなしと考えていたのだ。

ただし、他の後継者に仇なすのを座視できなかった。

クリステイーネ・フォン・リッテンハイムを救うのは……今さらだ。無理かもしれない。できれば帝室の血を多く残したいのだが……だがリッテンハイム家はブラウンシユバイク家とあまりにも確執を続けてきた。

しかし少なくとも幼児エルウィン・ヨーゼフは守らねばならない。

ブラウンシュバイク家と自分が地道に交渉し、抹殺を阻止できればいい。ブラウンシュバイク側が難を示したとしても、相手は幼児であり、直ぐに何かできるわけでもないことを理由にして。そうしておけば将来につながる。

その将来とは、婚姻だ。

エルウィンの代、あるいは次の代にでも婚姻によつて平和的に家系組み直せばよいのだ。リヒテンラーデとしてはその約束を取り付けられでもしたら万々歳である。

だが情勢はそれを待っていてはくれなかつた。

ついに暴発する時がきてしまう！

始まりはやはりブラウンシュバイク派閥にある下級貴族たちの妄動であつた。

それら下級貴族たちは、このままいけばあまり恩恵にあずかれないと知つている。ブラウンシュバイクの派閥は大きいがゆえに、末端はうまみが少ない。

何か、ブラウンシュバイク公の役に立ち、目にとまる大功を立てなければ。

その焦りから公然と武装を始めてしまう。しかし誰も取り締まる者はいない。官警すらブラウンシュバイクの権勢を恐れて機能していない状況では。

短慮から驚きの大事件が起きた！

何と邪魔な派閥の筆頭リッテンハイム侯の暗殺を企んだのだ。確かに成功すればこの上ない勲功となり、形ばかりいったん罰せられても、いずれブラウンシュバイク公から望むままの褒美をもらえるだろう。

しかしそれはあつさりとし敗れる。最初から無謀だったとしか言いようがない。さすがにリッテンハイム側でも同様に武装し完全な警備を敷いていたからだ。

ブラウンシュバイク側にはわずか劣るとはいえ、派閥の頂点、財力も人員もいる。更に言えばヒルダをオーデインに送ってきた私領艦隊の一部が宇宙港にとどまっていたため、その意味でも警備の人数など充分だった。

失敗し、リッテンハイム側に返り討ちにされた下級貴族たちは数を半分に減らしながらもこのままでは引き下がれない。

「まずい…… 何も手柄がないでは、ブラウンシュバイク公に切り捨てられ、先に我らが肅清されかねない。こうなれば何でも手柄になることをやる他ない」

そんな末端貴族たちは覚悟を決める。

なけなしの財産をはたき、ならず者たちを雇い、それなりの武器を闇で購入する。

そして向かった先は……

何と後継者候補の一人、エルウィン・ヨーゼフのところだ！

それを捕らえるか殺すかすれば、皇位継承者候補を一人減らせる。これもまた成功すればブラウンシュバイク公に対し大いなる手柄になる。皇族殺しだろうと、どうせブラウンシュバイク家が権力を握ったら罪に問われることはないだろう。

こうして凶器の暴徒がエルウイン・ヨーゼフのいる無憂宮に迫る。

本当ならば皇帝の私邸ともいふべき無憂宮は何重にも防御されている。銀河帝国の最重要の部分なので当然だ。しかし今は皇帝が崩御したばかりであり、若干の弛緩があつた。

おまけに暴徒貴族の中には、れつきとした士官学校卒で帝国軍に属していた者も少なくなかつた。それらはむろん軍事訓練も受けている。

本気で襲撃し、それが防衛を突破してしまう。

その時、無憂宮には幼児エルウイン・ヨーゼフと侍女という名の子守りたち、文官、近衛兵が詰めていた。その中にリヒテンラーデとエルフリーデもいた。日夜そこで帝国の動揺を治めるための協議をしていたのだ。

鋭い爆発音が響き、この無憂宮で変事が起こったことを悟った。

このあり得るべからざる事態、しかし狼狽しているヒマはない！ そして最大優先でなすべきことは決まっているではないか。それは詮索でも迎撃でもない。



エルウィン・ヨーゼフを逃がすことに尽きる。

それこそ臣下として何としてもやらねばならないことだ。ここにいる全員の命に代えても。

そして無憂宮には亡くなった皇帝と、皇帝に最も信頼されたりヒテンラーデの他に誰も知らない逃げ道がある。万が一のために用意されたものだ。そこまでたどり着ければ一安心である。

リヒテンラーデはエルウィン・ヨーゼフを連れてそこへ急ぐ。

「大叔父様、先に行つて下さい。ここは食い止めます」

そう言つてエルフリーデが近衛兵と共に残る。リヒテンラーデと一瞬目が合った。それで充分、お互いになすべきことを確認するには。

もちろんエルフリーデはリヒテンラーデにとつて最高に出来の良い弟子であり、帝国に必要な才能であり、何よりも可愛い姪なのだ。ここで危険な目に合わせるなどさせたくないに決まっている。ただしそれでも幼児エルウィンを守るためであれば仕方がない。それには代えがないのだ。

それにリヒテンラーデは理解している。エルフリーデの謀略の才は、こうした軍事的な実力の場面でも一定の効果を挙げられるということ。

リヒテンラーデたちが立ち去った後、その場所で近衛兵と暴徒たちは戦闘を繰り広げる。それは短くも激しく、近衛は次々に打ち倒されてしまう。暴徒たちは数に勝り、そして次第に凶暴さが増している。この無憂宮のきらびやかな間は平民はもとより、下級貴族からすれば目にしたこともない場所である。そこに足を踏み入れ、非日常にさらされ、平常心を失っている。

そんな暴徒の側から見たら残りは少人数、しかも女さえ含まれてはいないか。邪魔者はさつさと全滅させ、皇帝候補エルウインを抹殺すべく行かなくてはならない。

近衛兵たちは職務を全うすべく立ち向かい、結局全滅してしまっただが、一つの意味はあった。

エルフリーデが策を練る時間を与えたのだ。

わざと目に留まるように走り去り、時折「エルウイン様」と叫ぶ。これでいかにも宮廷付きの女官が後を追っているように見えるだろう。

目的は巧みに暴徒を誘導することだ。射撃も何もできず戦闘力の無いエルフリーデは自分にできることを知っている。無憂宮の防備と仕掛けの数々をリヒテンラーデから聞いているからには、それを使う。

慌てて逃げ込む演技をして、暴徒たちの一団をそんな仕掛け部屋に誘い入れ、自分は壁の抜け穴から素早く脱出する。暴徒が追って入ってもそこには誰もいない。窓があ

るが、それは投射して映された欺瞞のものであり、実際は全て壁に囲まれている部屋だ。そしてエルフリーデは素早く仕掛けを作動させる。それは部屋を一瞬で無酸素に変えるものだ。暴徒たちはそこで自らの所業にふさわしい報いを受ける。

成功を確認してからようやくエルフリーデはリヒテンラーデたちの後を追って走り出す。

一方、先に行つたりヒテンラーデの方は順調というわけには行かず、不運が見舞つた。暴徒の別な一隊が探索していたのだ。

おまけに彼らは壁をぶち抜けるほど威力のある重火器を所持していた。複雑に入り組み、見通しの悪い無憂宮に業を煮やし、でたらめに何発も放つていく。

あちこちの壁を撃ち抜いて爆発したが、その中の一発がたまたまりヒテンラーデたちが走っていたところに当たつてしまった！

エルウィン・ヨーゼフと侍女たちに怪我はない。ところがパニックになつた彼らはリヒテンラーデの言うことも聞かずに走り出してしまふ。

正しく向かうべき場所へ先導するはずのリヒテンラーデはそれらを追えない。爆発に巻き込まれ、床に叩きつけられた時に足を折られた。しかも壁の破片が胸にめり込んで、内部で激しい出血を起こしている。

「そちらではありませぬ。すぐ右に曲がったところに隠し扉が」

もう大きな声が出せない。

そうしているうちに、暴徒たちの方がエルウィンと侍女たちを見つけ、後を追っている。後を追っているうちに、暴徒たちの方がエルウィンと侍女たちを見つけ、後を追っている。

リヒテンラーデからもはや見えないところまで行ってしまったが、遠くからいくつも爆発音が聞こえてきた。エルウィン・ヨーゼフはもう生きていることはあるまい。守ることはかなわなかった。

ここに帝国にとって最重要の皇帝候補者が斃されてしまったのだ。

その時、エルフリーデがやっとここまで辿りつき、リヒテンラーデが倒れているのを見つめる。

「あつ、大叔父様！」

近くまで駆け寄れば、リヒテンラーデが大怪我をしているのが分かり、愕然とする。明らかに助からない傷だ。

「しっかりして下さい。直ちに医師を呼んで参ります！ 必ず、必ず助けます」

「いや、もう無理じゃ。エルフリーデ、むしろここには危ない、早う逃げよ」

「いいえエルフリーデは一緒にいます。大叔父様を一人にしては行けません」

ここでリヒテンラーデはエルフリーデをしつかりと見据えた。目の光は依然鋭い。

「よいかエルフリーデ、お前は最後まで決して死んではならん。儂の言いたいことは分かるであろう。早う行け」

リヒテンラーデという偉大な忠臣の考えはエルフリーデにも染みついている。今何を考えているか、改めて言葉にされるまでもない。

帝国のため、為すべきことを為せといたいのだろう。

それでもなお、エルフリーデは共にいたかった。

忠誠だけのことではない。理念に共鳴してただけではない。

この頑固で優しかった大叔父様を大好きだったのだ。

それはとても深く、エルフリーデの心の奥底にまで根を張っている。

幼い時よりエルフリーデは自他共に認める変わり者だった。そのため周囲に理解されず、孤立し、煙たがられることが多かった。

そんなエルフリーデを分かってくれたのはリヒテンラーデただ一人だ。ほんの十歳ばかりの時に、偏屈になりそうだったエルフリーデを認め、その才能のきらめきを感じた。

エルフリーデにとっては誰よりも深く理解してくれる者がいる。もう孤独ではない。

リヒテンラーデはエルフリーデの変なカーテシーを許し、社交界のダンスに出ないのも黙認する。ただし論理のつながらない言い方や考えを見逃さず、必ず正してきたものだ。

そしてエルフリーデは成長し、見事に期待に応えてきた。リヒテンラーデの薫陶の下、才能を開花させ、本当に銀河の中核として数々の謀略に関わってきたのだ。

エルフリーデがリヒテンラーデと同じように帝室への忠誠心を持っているのは、リヒテンラーデそのものへの忠誠と同義だからである。

リヒテンラーデこそエルフリーデにとつて常に導いてくれる太陽だった。

「大叔父様、最後までご一緒いたしたく思っています。でも分かりました。遺志は私が継ぎます。安心して下さい」

この危急の時、無駄な時間を取っているべきではない。

別れを惜しんだり慟哭することではない。

今為すべきことは、その崇高な遺志を継ぐ、それだけだ。

最後にエルフリーデが見るリヒテンラーデの表情には、淡い優しさがあるように感じた。

「すまんの、エルフリーデ。それしか言えん」

「帝国は私が必ずや守ります。大叔父様、見守っていて下さいませ」

涙はいったん止める。止めなければならぬ。

エルフリーデはリヒテンラーデを置いて去る。なんとか脱出路を開き、無憂宮から逃走に成功する。

行き先をどうするか。

貴族などいつ裏切るか分からず、誰も当てにできない。ブラウンシュバイク公の息がかかっている者は論外としても、この情勢では中立派でさえ信頼できない。こんな暴力で国務尚書さえ害されるのなら政府内とて安心ではない。

一兵も持たないエルフリーデにはフェザーンも遠すぎる。

結論としていえば当座はオーディンに潜伏する以外にない。エルフリーデにとって潜伏だけならいともたやすいことだ。

もう誰もいなくなった廊下で静かにリヒテンラーデは目を閉じる。

銀河帝国の国務尚書たる者がひっそりと、誰にも看取られずに息を引き取ろうとしている。

暴徒はリヒテンラーデを討ち取ることが目的ではなく、齒牙にもかけなかつたらし

い。

「心残りが無いといえは嘘じゃ。帝国の行く末を思うなら無念でならぬ。しかし、これもまた受け入れるべき現実というものじゃな」

リヒテンラーデの胸は帝国の未来図のことでいっぱいだ。しかし、ふとエルフリーデのことも思う。

あの聡明な姪にあまりにも大きな荷を負わせてしまった。

銀河帝国を支えるという重荷を。

可哀想に……普通の人生を送らせればよかつたのだろうか。わずか後悔に似たものがある。

幸せになれ、エルフリーデ。

帝国の今後もだが、儂はエルフリーデの幸せこそ望んでいたのだ。

いや、向こうから拒否してくるかもしれない。埒もないことを考えた。

失血が続き、やがてリヒテンラーデの意識が混濁してきた。

脳裏にはなぜか若い日の皇帝フリードリッヒ四世が浮かんでくる。

自分で望みもしなかつた玉座が転がり込んでしまい、慌てている皇帝。戴冠式を始めとしていろいろな行事で失態を犯し、陰で笑われる。ましてや行政のことは何も分から



ず決定一つままならない。善良なだけで皇帝たるべき能力はなかった。その先代まで知っているリヒテンラーデは余計にそう思う。

ただし、フリードリッヒ四世はその善性によつて素晴らしい仕事を成した。

高等参事官だったクラウス・フォン・リヒテンラーデの純粹さを見出し、行政を一手に任せるといふ。

それは間違いなく正しい選択だった。

まだまだ少壮であつたりリヒテンラーデは感激し、忠誠を捧げ、以来数十年にも渡つて帝国の重責を担うことになる。

リヒテンラーデにとつてその旅路は苦しいこともあつたが、少なくとも充実した人生だった。

貴族の無用な動きを阻止するための権謀術策は全て皇帝と帝国のために行つたことだ。皇帝は一度としてリヒテンラーデのやることに疑義を差し挟んでくることはなかった。

あえて失政を言うなら、リヒテンラーデが有能過ぎて、ただでさえ政治に興味の薄い皇帝が全く関心を無くしたこともかもしれない。

そうだとしてもこの治世の間帝国は安定を続けた。リヒテンラーデによつて帝国は回り続け、臣民は安んじて暮らせてきたのだ。

「フリードリッヒ四世陛下、クラウスも御許に参ります」

最後は微笑みで終わろう。

帝国と皇帝のために歩んできた人生、その最後の時は。

今はせめて、ヴァルハラに行っても陛下の忠臣として仕え続ける、そんな楽しい夢を見よう。

それきりリヒテンラーデの意識は途切れた。

こうして、最後の忠臣クラウス・フォン・リヒテンラーデは歴史の舞台から姿を消す。その美しい忠誠心と多大な功績は後世において正しく評価されている。

どんな民主主義者もリヒテンラーデを悪者と扱うことはできない。

リヒテンラーデは忠義という一点を貫き、自分にも他にも正しくあらんとしたのだ。

## 第七章 エカテリーナの両翼

第七十七話 488年 4月 責務

無憂宮襲撃事件、そして皇帝候補者エルウイン・ヨーゼフ殺害は当然ながら帝国内に大きな波紋を投げかける。

いよいよ事態は逼迫してきた。

襲撃をかけ、エルウイン・ヨーゼフはおろか國務尚書リヒテンラーデ侯まで殺害したのはブラウンシュバイク陣営の貴族だ。

それが明らかでありながら、当のブラウンシュバイクが知らぬ存ぜぬを貫けば、誰も罪に問うことはできない。直接の襲撃者らもブラウンシュバイクのもとに隠れば何の問題もない。むしろ望んだ褒美をもらっているくらいだ。

官警はブラウンシュバイク公の警備員すら突破できず、すごすごと帰らざるを得ない。

この事実、帝国が法と秩序ではなく力だけが正義の世になったことを表わしてい

る。

実質的に帝国はもはや瓦解しているのだ。その変容がこれで誰の目にも明らかになった。

だが、重要なのは結果である。

これで皇位継承者を持つのは二人だけになってしまった。

エルウィン・ヨーゼフが皇帝に立てられ、二大貴族ブラウンシュバイク公とリッテンハイム侯が共に引つ込むという穏便な方法の可能性が消えた。

二大貴族のうちどちらかが頂点に立つ。

もはやブラウンシュバイクとリッテンハイムが共に天を頂くことはない。

実力で決着をつけざるを得ないという認識に、どちらもオーデイン近くへ私領艦隊を呼び寄せる。

オーデインからの航路は閉ざされ、首都星の住民たちはいつ戦火が及ぶのか気が気ではない。動乱がオーデインを丸ごと破壊するかもしれないのだ。

銀河帝国の中心にして皇帝のお膝元、永遠の首都オーデイン、どんな動乱からも絶対の安全圏だったオーデイン、なのに今では怯えるしかないとは。

二大陣営はお互いに牽制しあい、睨み合いが続く。

緊張が危険水準まで増している。

この時、ラインハルトらは既に宇宙に出ていた。

ヒルダを通して結ばれたリッテンハイム侯との密約に従い、艦隊を集め、軍事的に介入するためだ。

ところが、それには案外と時間がかかった。

ブラウンシュバイク側も広く貴族子弟の士官に呼びかけ、味方するように通達していたからだ。これにはラインハルト麾下の艦隊においても動揺する者がいる。ブラウンシュバイク領の出身で家族をそこに残している兵士も将官もいるのだ。その離脱はやむを得ない。

それ以上に野心のある者がいた。勝ち馬に乗って栄達を夢見ているのだ。見た目の勢力を重視し、ラインハルトの実力を過小評価し、ブラウンシュバイク側について方がいいと思っている者たちだ。

更には言えば、そういった者を最大限引き入れるべくフレーゲルなどが蠢動している。

対するラインハルトとしては多少数が減つてもいい。ふるい落とすだけのことだ。

多少数が減つても負ける気はなかった。

万が一明らかに艦隊維持ができないほど将兵が抜けるような事態になれば方法もあ

る。クリステイーネ・フォン・リッテンハイムが帝位につくようお味方する、つまりその密約を公にすればいい。そうすれば将兵の動搖は一定範囲に収まるだろう。

ただし、今すぐそうしないのは理由があった。

別の問題がある。信用できない兵や艦を内部に抱え込むことはできない。戦いの重要な局面で裏切りに遭い内部から崩壊すれば、いかにラインハルトが華麗な戦術を駆使しようとも無駄になり、敗北につながる。

ブラウンシュバイク側のスパイを内部に含むのが一番怖い。誘いに動搖するような将兵ならむしろ峻別すべきなのだ。

リッテンハイム陣営は私領艦隊約四万五千隻を集め、ラインハルト元帥府艦隊の到着を今か今かと待っていた。

しかし、対するブラウンシュバイクの側にはもっと大兵力があった！

私領艦隊合計で十万隻を超えている。勝ち組につこうとした貴族らが次々となげなしの艦隊と共に馳せ参じているのだ。

その上、ラインハルトに先んじて、帝国軍からの離脱組をまとめたフレーゲルがこの陣営に加わった。少なくとも数の若手貴族士官がフレーゲルに従っている。

フレーゲルの自己陶醉したような貴族賛歌のプロパガンタでも賛同するものは多かったのだ。

「今こそ帝国貴族の底力を見せる時！ 我らが帝国を本来あるべき姿に戻すのだ！ 貴族によって運営されてこそ帝国なのである！ 平民に蚕食されつつある帝国を救い、再び帝国の栄華を取り戻そう。それができるのはブラウンシュバイク家以外にない！ 味方せよ、その素晴らしき未来のために！」

その数は何と三万隻にも及び、主だった将ではシュターデン中将なども加わっている。

これでブラウンシュバイク側とリッテンハイム側とで予想以上の戦力差がついた。差があってもせいぜい数割程度かと思われていたが、よもやそれをはるかに越えるとは。正に地滑りのな勢いだ。

勝利を確信したブラウンシュバイクはリップシュタットの館に賛同する貴族を集め、高らかに宣言する。

「銀河帝国はここに新たな未来を開く。わが妻アマリエ・フォン・ブラウンシュバイクこそが帝国の後継者である。それに賛同し、ここに集いし貴族が共に新しい帝国を作り上げるのだ。しかしこれに反対する愚かな者どもがまだ存在する。我らが初めに成すべきなのはそんな者どもに鉄槌を下すことである。愚か者はその愚かさゆえに報いを受けるであろう」

二千家に近い貴族家がこの宣言に署名し、氣勢を上げる。どの顔もこれから勝利し、分け与えられるだろう利権の匂いに酔っている。

この様子が伝えられると、リッテンハイム陣營の貴族にどうしようもなく不安が膨れ上がってくる。やはり選択を誤ったのか……

リッテンハイム侯自身も心痛激しく、ヒルダに相談するしかない。いつの間にかヒルダがリッテンハイム陣營の頭脳になっていた。

だがこの厳しく見える状況下でも、ヒルダに不安など微塵もない。

「リッテンハイム侯、何も心配ないとどっしり構えていたらよいのです。そのリッペンシュタットの盟約など気にする必要はさらさらありません。なぜなら、そんな威勢のいい言葉を言うくらいならば、さつさと即位した方がいいのは明らかです。しかしそれをしない、いやできないのです。つまりここにリッペンハイム側がいる限り、即位まで強行はできないことを表わしています。もちろんこちらも同じことです」

「なるほどそうか、言われてみればそれも確かだな。こちらに付いている貴族の動揺が激しくて、つい埒もないことを聞いてしまった」

「下手に動くのは危険です。お互いここオーディンを焼け野原にするつもりがないのなら、逆にオーディンこそ一番安全です。ローエングラム元帥の援軍が来るのを待ちま



しよう」

ヒルダは確信をもって告げる。

「いずれローエングラム元帥が必ず決着をつけます。この戦い、先に動いた方が負けになります」

ところがここでブラウンシュバイク側は妙手を打った。

提案してきたのはブラウンシュバイク家私領艦隊の参謀長を長く務めているアン斯巴ツハ准将だった。

アン斯巴ツハは准将という地位でありながら事実上ブラウンシュバイク家の大艦隊を統率している。ブラウンシュバイクはアン斯巴ツハの力量とその思慮を高く評価しているのだ。おまけに軍事に限らず数々の謀略を相談している。准将という比較的低い地位に留め置いているのは、単に甥のフレーゲルが帝国軍少将だからである。いつか将来フレーゲルが私領艦隊を率いる含みを持たせている。そうなった暁にはアン斯巴ツハはおそらくブラウンシュバイク家の家宰にでもなるのだろう。

ともあれブラウンシュバイク家の知恵袋とも言われ、切れ者で通っているアン斯巴ツハが提案した。

「公よ、このままリッテンハイム側と睨み合いを続けても益がないでしょう。オーディ

ン近傍にいる限り、惑星へ被害を及ぼすことはできず、会戦を行えません。あたり大戦力がありながら無駄となります。先ずはリッテンハイム側を引き剥がす策を打つ必要があります。宇宙での戦いに持ち込んだらしめたもの、一気に片付けられます」

「それはそうだがアンスバツハ、そういうからにはうまい方法でもあるのか」

「こちらには余剰兵力があります。艦隊を分けて、別動隊が向こうの領地を全て奪う、いや奪うフリをするのです。そうすればリッテンハイム側は出て来ざるを得ません」

「なるほど、それで釣り出すのか。いい案だ。アンスバツハ」

アンスバツハが言うのは本拠地を脅かすという古来からある手である。しかし戦力差があればこれほど有効なものはない。

これを聞くブラウンシユバイク公は尊大であるが理解力が不足していることはない。

「感謝します、ブラウンシユバイク公。ではさつそく」

「よし、やってみろ。ただ……そうだな。フレীগエルも連れて行け」

最後の言葉にやや眉をしかめたがアンスバツハは作戦を実行に移す。たぶんブラウンシユバイク公は甥のフレীগエルに功績を上積みし、今後のために地位を固めさせるつもりだ。

艦隊を二分しても数は充分に足りる。

余剰兵力を有効活用する手に出る。進発した別動隊がリッテンハイム側貴族の領地

を襲い、押さえにかかった。

リッテンハイム派閥の貴族たちから今度こそ悲鳴が上がる。

このままではブラウンシュバイク家に全てを奪われ、たつた身一つでオーデインにいいことになるではないか。

これに対し、やむを得ずリッテンハイム侯はオーデインを出ようとすする。

ヒルダは慌てて押しとどめにかかった。

「もう一度同じことを申します！　ここは動かないのが得策なのです。リッテンハイム侯がオーデインにおられるから向こうも過激なことができないのです。しかし宇宙では単純な力勝負になるでしょう。今、領地の方を襲っているのも、侯爵閣下をオーデインから誘いだすための見え透いた罠です。そうせざるを得ない向こうをむしろ笑ってやればいいのです」

「いいや、そうはいかないのだ。ヒルデガルト嬢。これはリッテンハイム家の責務なのだ。ここまで追い詰められながら裏切ることもなく我が家に忠誠を尽くしてくれている貴族たちがいる。今領地を奪われているのはそういう貴族たちだ。見捨てることはできない」

「それは後でいくらでも取り返しがつきます。軽挙はいけません」

「ヒルデガルト嬢、派閥の長というのは庇護の責任と不可分にある」

寂し気に笑う。

「誰もが羨む派閥の長、しかしそこには余人の知らない苦悩と重さというものがある。

ヒルダの言う合理的なやり方ばかりもできない。

「それが生まれもって派閥を率いてきた私の取るべき義務なのだ。済まないな」

## 第七十八話 488年 4月 幕開け

リツテンハイム侯はその言葉を残し、オーデインを出立する準備に入る。

リツテンハイム家私領艦隊から四万隻、つまりその大部分を連れて行く以上、クリスティーネとサビーネをこのままオーデインに残しておけない。

ヒルダについていえば、少し迷った。

いよいよブラウンシュバイク家の天下となるオーデインに残るのは危険だ。ヒルダはリツテンハイム側についていることが知られており、その経緯によつて特にブラウンシュバイクに睨まれている。

だが、いったんオーデインに残つてアマーリエ・フォン・ブラウンシュバイクの即位を妨害する方を選択した。

アマーリエとその夫であるブラウンシュバイク公との仲は必ずしも良くなく、その間隙を突けるかもしれない。

もちろんいつでも脱出できる用意はしている。

即位を強行されるついでに肅清される可能性が高いだろうから。

そしてヒルダはリッテンハイム侯に最後の最後まで釘を刺しておくのを忘れない。

「リッテンハイム侯、ではせめて、絶対に戦いはしないとお決め下さい。艦隊は威嚇に使うだけにとどめ、戦いになりそうになれば徹底的に逃げるように。戦いはローエングラム元帥が来れば必ず勝てます！ それまでの辛抱です」

ヒルダはリッテンハイム家の三人を本当に心配していた。この三人の仲の良い家族を守りたい。

そしてローエングラム元帥が来れば絶対に勝てると思っっている。

ヒルダはカストロプロ家艦隊の末路を直に見ているのだ。その大艦隊は勝機など微塵もなく、わずか四分の一の相手に転げ落ちるように敗退した。

キルヒアイス、そしてラインハルトの力量は圧倒的なものである。それはブラウンシュバイクの大艦隊といえども造作もなく破ると確信させるに充分だった。

リッテンハイム側が動き始めたことを知ったブラウンシュバイク陣営はほくそ笑む。

「公よ、とうとう向こうはオーデインから動きました。これで勝てます」

「ようやく釣り上げられたか。思うつぼになったな。アンスバッハ、お前も知恵者だ」

オーデインからリッテンハイム侯を出してしまえば、宇宙でいかようにも料理できる。

ブラウンシユバイクは勝利の予感に酔う。

ただしブラウンシユバイク側にも思わぬ足並みの乱れがあった。

先に出た別動隊は三万隻の規模である。ここでアンズバツハが六万隻を率いて急進し、先ずは合流しようとした。まとめあげて大艦隊にしなければ意味がない。そうして初めてリッテンハイム側を数で圧倒し、危なげなく勝利することができるのだ。

何とそれが別動隊の側から拒否されてしまった。

別動隊を構成しているブラウンシユバイク陣営貴族は欲に目がくらみ、広大なリッテンハイム領で略奪を続けようとした。

それらの貴族にとつては無防備な甘い果実である。取らない法はない。散らばつてリッテンハイム領を容赦なく荒らしにかかっている。いや、そもそも別動隊に志願したのはこれを行うためである。

アンズバツハは厳しい言葉でそれを戒めた。

これでは別動隊による陽動という本来の目的が失われ、作戦自体が成り立たない。

そうこうしているうちに別動隊の様子を知る本隊からも略奪を希望する声が上がった。我慢ばかり強いられ、不公平ではないかと。もちろんそんなことを許せば収拾がつかない。

アン斯巴ツハは嚴罰をもって略奪を禁じ、艦隊を統率しようとしたが、それらの貴族たちは従うどころかなんとフレীগエルの方に泣きついた。

元からここにいる六万隻はその半分の三万隻がフレীগエル配下の若手貴族たちだ。最初からアン斯巴ツハに対する反感がある。

ここにアン斯巴ツハとフレীগエルの確執が生じた。

いや、これまでの確執が表面化したのだ。

最初にこの作戦を立案し、実行したのはアン斯巴ツハである。ブラウンシュバイク公の信認の元にそれを行っている。

ただし妙なことに形の上ではフレীগエルが総司令官ということになっている。ブラウンシュバイク公の親族なのだから、私領艦隊である以上、そうなるのは仕方がない。ブラウンシュバイクはフレীগエルに対し、明確にアン斯巴ツハに従えと言わずに送り出した。ブラウンシュバイクにとってはどちらも重要であるし、何より思慮がそこまで深くなかったせいだ。

ここに奇妙なねじれが存在する。

更にややこしいことに、艦隊の一般兵士にとってアン斯巴ツハこそ指揮官である。私領艦隊でありながら、ブラウンシュバイク家に対する忠誠心よりも実力と公平さが知られているアン斯巴ツハについている。見るからに平民差別意識の強いフレীগエルが一



番上に立つなど冗談にしか思えない。

アンスバツハはこの雰囲気を敏感に感じ取り、何よりも艦隊の分裂を恐れ、フレーゲルに対し丁重に出た。

「フレーゲル男爵様。先ずは成すべきことを成すのです。別動隊の派遣はあくまでリッテンハイムを領地におびき寄せる手段。これに成功した今、リッテンハイム艦隊を全力をもって叩き潰すのが先であり、それこそブラウンシュバイク公の意に沿うことです。ひとまずその方向でお考え頂きたい」

「何だアンスバツハ、それは命令か。不愉快だ」

ところがフレーゲルの方ではそんな思慮など無視する。

反発を隠そうともせず、一方的に言う。

「命令していいのはブラウンシュバイクの叔父上だけではないか。しかも、我が陣営の貴族が要求しているのはリッテンハイム家への懲罰であろう。それもまた正当な権利であり、止めさせる必要などない」

「懲罰と言われましたか。貴族同士の決闘ならいざしらず、単なる惑星領民への略奪など言い訳もできません。それはブラウンシュバイク公の評判にも傷が付くのは必定、かえって不興を被るやも知れませんか」

アンスバツハもリツテンハイム領に住んでいるというだけで、何の罪もない平民が略奪に遭うのを座して見ているわけにいかない。平民へ多分に同情的なのである。

だがそんな配慮などフレーゲルには無縁のことだ。

「貴族が平民を略奪して何が悪い。しかもリツテンハイム領にいた虫けらどもではないか」

もはや平行線だ。話にならない。

しかし、フレーゲルの思惑は唐突にリツテンハイム私領艦隊撃破の方に向いた。

アンスバツハに言われたせいではないが、艦隊戦で勝利ということに魅力を感じたのだ。

リツテンハイム艦隊を破ればブラウンシュバイク公の覚えがめでたくなる。褒美の言葉は細かい略奪などよりはるかに魅力的だ。いっそう地位が確立でき、あわよくばブラウンシュバイク政権でかなりの上位に食い込めるのでないか。

もう一つ、やはり大会戦で勝利を飾った側の指揮官と言われたい。これまでフレーゲルにはそういう機会がなく、ただの情実人事の結果の少将にしか過ぎない。

ここで勝ってみせれば歴史に名が残る。

ブラウンシュバイク家主導の帝国を据えたのはフレーゲル、そういう形で。

だったら早く成し遂げたい。

気が変わったフレীগセルは自分の手勢をまとめて進発し、むしろアンスバッハを置き去りにして進んでいった。

「あまりに自分勝手ではないか。ここまで周囲を振り回すとは何とも我儘な御仁だ。ブラウンシュバイク家はどうなるのだろうか」

一抹の不安を残し、慌ててアンスバッハも後を追う。

一方のラインハルトは進発が更に遅れてしまった。

理由がある。

艦隊はほぼ予定通りの数がそろった。多くも少なくもなく、見込み通りだ。しかし欲をいえばできるだけ多くして盤石にしたい。そうこうしているうちに帝国軍の辺境地域担当の将官から連絡があった。辺境地域から艦艇をかき集めれば、相当数になると。

ラインハルトらはそれを待つてから進発しようとしたのだ。

辺境から連絡してきたのはヘルムート・レンネンキャンプ少将といい、長く辺境地域にいた将だ。辺境地域にいる者は、能力がないため左遷されてきている者が多い。

そういう者は全てを諦めて安きに甘んじている者か、逆に何としても浮かび上がろうと必死になる者か極端なことが多い。レンネンキャンプは後者だった。そして機会を

狙っていた。

このラインハルトの元帥府に加わるのは絶好の出世の機会に思えたのだ。

辺境星域の艦隊を献上すれば、めでたく出世するばかりか艦隊指揮官に成り上がれるかもしれない。

ところがレンネンキャンプにも誤算があった。

辺境星域にいる艦艇はラインハルトの元帥府に加わるのを良しとしない。理由はもちろんラインハルトによる二度までの焦土作戦の恨みだった。レンネンキャンプが思ったようにならないが、既に約束した以上、艦艇をそろえなければレンネンキャンプも立つ瀬が無い。半ば強引に行おうとした。

それに対して辺境星系の帝国艦艇は軍中枢部にその暴挙を訴えた。

もちろん、帝国軍の有力な艦隊はことごとくラインハルトの元帥府に集っている。それ以外の者は既にフレーゲルの方に賛同して出て行った。

今や帝国軍本部とあろうものが空洞だ。そこに将もほとんどいない。

だが、ゼロではなかった。

残っていた将がいたのだ。

それがウイリバルト・ヨアヒム・フォン・メルカツとアーダルベルト・フォン・ファールンハイトである。

この二人は年齢も性格も艦隊指揮もまるで違っていたが、共通しているところがある。それは独自の美意識があり、世の中を斜に構えているところだった。そのため身の処し方を勢いに任せることをしなかった。あのアスターテにおけるラインハルトの戦いを知る二人は元帥府からの誘いに応ずることはなかった。逆にフレーゲルになびくこともない。

この二人がわずかに四千足らずの艦隊を連れて辺境星域に急行したのだ。

レンネンカンブはどうせ釈明しても仕方がないものと諦め、実力をもって排除しようと決めた。その時までにかき集めた辺境の艦隊八千をもつて対峙したのだ。

だが、戦いは一方的な結果となった。

ファーレンハイトの突入攻勢は何によつても妨げられず、あっさりと艦隊中央を破り去った。勝負が決まればメルカツの指揮する近接戦闘が間髪入れず掃討にかかる。

レンネンカンブはほぼ何もすることができないうちに敗死させられた。

この報を聞いたラインハルトは嘆息する。わずかな艦艇を期待して無駄に時間を費やしてしまったからだ。

ようやく辺境などに構わず、麾下の五万一千隻の艦隊を率いて進発する。向かうはオーデインの近くにいるだろうブラウンシユバイク側の私領艦隊だ。

一方、こちらのリッテンハイム私領艦隊は領民の保護には成功する。

略奪のためにぎりぎりまで惑星に残っていたブラウンシユバイク側貴族は慌てて宇宙に出てきた。これに対し、リッテンハイム艦隊約四万隻は燃えるような復讐心で一気に攻勢をかけた。

ここにリップシユタット戦役と呼ばれる一連の戦いが幕を上げる。

戦いにお互い戦術も何もあつたものではなかったが、士気と数の両方に優るリッテンハイム側が押し破つた。

「奴らが領地でやつた報いをくれてやれ！ ブラウンシユバイクを赦すな！」

兵たちはこう言い、逃げ出す相手を一隻も許さない。

結果、ブラウンシユバイク側の強欲な貴族は宇宙の塵となる。

この宙域には貴族たちの奪つた寶石や貴金属が無駄に漂う。指輪を嵌められるだけ付け、ネックレスを幾重にも巻いた貴族の死体は回収もされない。表情はどれも驚き、後悔、苦悶のいずれかだ。

略奪の報いは受けた。

二万隻もの艦隊と、その命を失うことで。

もちろん寶石の数の何倍もの死体が惑星表面に転がっている。略奪する貴族により無念にも殺された者たちだ。しかしその死体は地上から葬られる。

だが、ここ宇宙にある貴族の死体は消えず漂うだけだ。

遠い恒星から照らされるわずかな光さえも集め、煌めきを見せる。

本来貴婦人の胸元を飾るべく作られた宝飾だ。それが今は凍り付き干からびた物体と入り混じっている。

それは美醜という範疇ではなく、ただただおぞましい光景だ。

リッテンハイム侯は戦いの後に領地へ降下し、領民の惨状を見て心を痛める。何とか混乱を鎮め、再びオーデインへ戻ろうとした。

だが、アンズバツハやフレーゲルのいるブラウンシュバイクの本隊はその時間を利用して、帰路にあたる航路を既に抑えていたのだ。

その姿を見てリッテンハイム艦隊は航路を変更したが、このため通常航路から次第に外れて行き、かえつてのつびきならない状況に追い込まれてしまう。

気が付いた時にはオーデインへ帰る道はなく、しかも相手を振り切れない距離にまで詰められていた。アンズバツハもフレーゲルも決して無能ではなく、そこまで考えている。

これではリッテンハイム侯は望まなくとも戦いを選択せざるを得ない。

「しまった！ ヒルデガルト嬢にあれほど言われていたのに、こんなことになってしま

うとは。何と愚かなことだ」

後悔しても遅い。

こうして、ブラウンシユバイク、リッテンハイム両家の艦隊が相まみえる舞台が整った。

そこはキフオイザー星域、淡い緑の光を持つ恒星は歴史書に一躍載せられることになる。

キフオイザーの戦いはこうして始まった。



## 第七十九話 488年 4月 キフオイザーの戦い

ついに大会戦が始まる。

宇宙の覇権を賭けた戦い、歴史書に名が残る一戦だ。

今までは貴族らしく宮廷闘争や派閥争いの範疇に過ぎなかった。しかし、今こそ軍事力という実力を行使して皇帝の座を奪う。それだけではなく互いの存亡がかかっている。

帝国の後継者候補が二大陣営のそれぞれに属する以上、不可避なことだったのかもしれない。

当初キフオイザーの戦いに参加したのはブラウンシュバイク艦隊が七万隻、リッテンハイム艦隊が四万九千隻である。

先の領地騒動で義憤を感じてリッテンハイム側へ加わってきた艦が多少加わっていたが、それでも数において大差がある。その上、ブラウンシュバイクの側にはまだオーディン近傍に残した分のおよそ五万隻が別にあるのだ。

だがリッテンハイム側にも勝算がないわけではない。

私領艦隊は帝国軍に比べたら装備も艦隊編成も貧弱である。そして圧倒的に戦闘経験が少ない。海賊相手の警備程度であり、強力な敵手と戦ったことがないのだ。

つまり、純粋な戦力の戦いにならない可能性がある。いくら数が多くとも、怯んで崩れてしまえば何にもならない。大艦隊であればこそいったん崩れれば混乱を立て直すのは容易ではなく、押し合いへし合いの烏合の衆になってしまう。

精神力が勝負を決める重要な要因になる。

その意味でいえば先の領地においてブラウンシユバイク側貴族艦艇を叩いたりツテンハイム側にも勢いがある。

艦隊戦はオーソドックスな砲撃戦で始まった。

双方ともに不手際が数多くある。うっかり斉射の前に撃ってしまったったり、艦が重なって攻撃不能になったりした。艦同士が整列する前に衝突してしまうことすら数十に及んだ。私領艦隊ならではの無様な行動である。

そういったミスはどちらにも同じ頻度で起こったので、時間が経つと数の多い方がやはり優位に立つ。

ブラウンシユバイク側はアンスバツハの指揮の下、数を生かしてひた押しに押す。

下手な艦隊運動は混乱を招き、かえって敗因になるかもしれない。数で勝るならその

まま押し潰すのが最良なのだ。それに加え、ブラウンシュバイク側にもう一つ優位があった。それでも帝国軍の艦艇と将が配合されているのだ。

シュターデン中将がうまくまとめ、教科書通りの戦術を打ち、うっかり崩れることがないようにしていた。

シュターデン中将は地位こそ帝国軍中将だが、この艦隊ではアン斯巴ツハやフレーゲルに遠慮して最高指揮官になろうとは言わなかった。悪いようにとれば大会戦の責任を取るのが精神的に過大なため放棄したとも言えるが、できる範囲の仕事である戦理の実践はきちんとして行っている。

一方のフレーゲルは自らが先頭に出て攻勢をかける機会を狙っていた。艦隊の中心にいて采配するなど性に合わない。目がけた目標に襲い掛かるだけだ。

華々しく戦うことこそ帝国貴族、フレーゲルの独特の美意識のゆえである。少なくとも臆病ではない。

リッテンハイム侯を斃す。それこそが戦いの目的であり、殊勲になる。

自分がそれを成し遂げればブラウンシュバイク公はどんなに喜び、褒賞を与えるだろう。フレーゲルを自慢の甥と言うかもしれない。

やがてリッテンハイム側に艦列の綻びを見つけ、勇んで突進にかかる。

それをなすうるだけの力量はあった。フレーゲルは一応帝国軍で戦ってきたのも確

かだ。単なる力勝負に見えるこの戦いでは、それなりの技術を見せつける。

「突撃だ！ これからブラウンシュバイクの叔父上が帝国を手中にする。我らの時代はもはや目の前だ。その前祝い代わりに目障りなりッテンハイムなど宇宙から消してしまえ！」

リッテンハイム侯の方ではついに撤退を考える。

この戦いは勝てない。

今や数でも勢いでも明らかな劣勢にある。しかもリッテンハイム艦隊の側方や後背に回り、退路を断つ動きさえ見られる。早くしなければ誰一人として逃れることもできない。

「こうなってしまったか。ヒルデガルト嬢の言った通りだ」

リッテンハイム侯は後悔してもし切れない。

もはやリッテンハイム艦隊には敗北の未来しかないのだ。

戦いの帰趨は決定した。

アンスバッハはここで降伏勧告を出している。

本来、戦うことが目的なのではない。リッテンハイムの艦隊を消滅させることも必要ない。ただ一つ、リッテンハイム侯を捕らえればそれで派閥は消失、皇位継承争いの目

的は達成なのである。

リッテンハイム側では、もはや負けを悟り、降伏勧告に応じて停止した艦が続出した。だがここで驚くべき光景が展開される！

何と、降伏に応じて停止信号を出した艦をフレীগエル麾下の艦が攻撃したのだ。

これは有り得ない。リッテンハイム艦隊はパニックになった。その狂奔は敵も味方も引つ掻き回し大混乱に陥れる。

一瞬声を失ったアン斯巴ツハは、当然のごとく激怒した。

「何ということをして！ 降伏を受諾した艦を攻撃など、およそ武人である限り決してやってはならないことではありませんか！」

そんな激しい抗議に対し、フレীগエルは涼しい顔で答えてきた。

「ふん、随分と言ってくれるアン斯巴ツハ。相手を見よ。リッテンハイムなどブラウンシュバイク家に逆らったという時点で万死に値する罪だ。今さら降伏しても赦されるものか。どのようにしても構わぬことは自明だ。いちいち口を挟むな」

「これが口を出さずにいられますようか。相手が誰であつてもこちらは武人であるべきです。戦いには最低限の礼儀が必要でしょうに。こんなことでブラウンシュバイク家の名声が守れるとお思いか」

「しつこいぞ。まだ文句があるのかアン斯巴ツハ。ではこちらも言うが降伏勧告を出す

など叔父上の許可も得ずにやっていいことではないわ。このフレーゲル、叔父上のお考えはよく分かっているつもりだ。奴らには全滅こそふさわしく、降伏を許すのは越権行為以外の何物でもない！」

ここにはどうしても埋まらない溝がある。

アンスバッハの方は悔しさをこらえ、引き下がる。実力でそれを阻止しようにもかえって混乱し大惨事になるだろうからだ。

一方、リッテンハイムは願ってもない混乱の際にやるべきことがある。

もはや艦隊戦は終局だ。

手遅れになる前にクリステイーネ夫人と娘サビーネをオストマルクから降ろそうとした。最高速の出る巡航艦に移乗させ、戦場からこの二人を脱出させなくてはならない。

リッテンハイム家私領艦隊旗艦オストマルクの脱出艇発着場で最後の言葉を交わす。

「クリステイーネ、サビーネを頼む」

「あなた、サビーネのことは任せて下さい」

短い挨拶で充分だ。夫婦は目で分かり合う。

二人にとり、一番大事なのは娘サビーネなのだ。これを守るために成すべきことを成す。

それでもわずかな言葉に感情を込める。

「言うまでもないことだが、言葉にしておきたい。お前と一緒に過ごさせて幸せだった」

「少し違いますわ。幸せにしてもらえたのは私のほうです」

「いいや、その倍は幸せにしてもらった。感謝している」

ここで二人はほのかに笑った。

別れの時、万感の思いは胸につかえて、苦しい。相手に最大限の感謝を伝えたいのに。ああ、どんな言葉ももどかしい。

サビーネは蒼白になって父と母を見ている。

この悲劇が避けられぬ運命であることを理解できる年齢だ。泣き喚いたり、騒ぎ立てたりして困らせることはしない。

ただし、目に涙を貯めるのまで抑えることができようか。

その目で父をしつかり見た。

父ウイルヘルムはそんなサビーネを向き、諭す声を出した。

「よいかサビーネ、今よりお前は自由だ。リッテンハイムという名に縛られることなく、

お前が思う通りに生きろ」

それは派閥の長として少なからず生き方を縛られてきたリッテンハイム侯なりのためだけの言葉だった。

サビーネは自由に生き、そして自分の幸せを見つけてほしい。

「お父様、分かりました。その通りに生きていきます。ですが、お父様の背負ったリッテンハイムの名を忘れたりしません」

それで充分だ。

リッテンハイム侯はこれ以上ない笑みを見せる。

やがて二人を残し、表情を引き締めオストマルクの艦橋に戻った。

サビーネは後年に至るまでその時の笑顔を憶えている。

そして、最後の最後に見た父の横顔も。

それは幼い時分、父と一緒に馬で草原を駆けた時、ふと見た横顔に似ている、と思った。

クリステイーネとサビーネは護衛の巡航艦隊と共に逃走した。といつてもオーディンへ向かうことはできない。

今さら領地に行くのも危険、とにかく早く戦場を離れるのだ。



一方でリッテンハイム侯は追手を向かわせないために最後の攻勢に出た。相手を沈めなくてもいい。傷を負わせ、追いかけさせなければいい。ありつたけのミサイルや弾薬を放ち、ブラウンシュバイクの大艦隊に立ち向かう。

その闘志は一瞬相手をたじろがせる。

いつときブラウンシュバイク艦隊を崩し、後退させたほどだ。

しかし悲しいかな、リッテンハイム侯はやはり軍事的には素人だった。

隙を見たフレーゲルが難なくかいくぐり、リッテンハイム艦隊を切り裂き、中央部に達した。

そしてついに旗艦オストマルクを射程に捉える。

リッテンハイム侯もブラウンシュバイクの甥フレーゲルが迫ってきたのに気付く。

しかし今こそ妻と子のために、意気を見せるのだ。

「来い、ブラウンシュバイクの甥のフレーゲルとやら。一騎打ちだ」

銀河帝国を二分してきた派閥の長だ。背を見せることはない。

だが、さすがにフレーゲルも挑発に乗る寸前でこらえた。それは最初から不可能だ。戦艦オストマルクはコストを度外視して作られたリッテンハイム家の御座船であり、火力も防御力も並の艦ではない。一騎打ちをするなど考えられない。

フレーゲルは三隊計十二隻の戦艦を連携させ、集中砲火を浴びせる。

ついにオストマルクのシールドは破られ、多数が着弾した。一瞬後、まばゆい光を残し爆散する。

権勢を誇った派閥の長、ウイルヘルム・フォン・リッテンハイムはここに斃れる。最後に思ったのはやはり妻と娘だったのか。

## 第八十話 488年 4月 二人の愛を受けて

キフオイザーの戦いは終結した。

ブラウンシュバイク側が勝利し、リッテンハイム侯は斃された。

これで積年の両家の争いに決着が着いたのだ。ブラウンシュバイクのアマーリエが即位し皇帝になるのを阻止する者はいない。

リッテンハイム艦隊の残存は決して少なくなかったが、リッテンハイム侯がいなければもはや戦いを続けても意味がない。散り散りになって逃げていく。

アンズバッハはそれらを追わず、むしろ脱出艇の救助や補給を開始した。被弾した際の脱出すらままならない艦も多いのだ。お飾りである貴族の私領艦隊はそんな経験すら一度もないからである。

ところがフレーゲルの方は尚も戦意が衰えない。

「戦いの途中から逃げて行つた巡航艦隊はおそらくリッテンハイム家の者だ。皇位継承権を持つクリステイーネ・フォン・リッテンハイムもいるに違いない。これをまとめ消し、後顧の憂いを断てば、いつそうブラウンシュバイクの叔父上はお喜びになるだろ

う。急ぎ後を追うぞ！」

また艦隊を率いて独断で出ていく。慌てて二万隻程度が命令に従う。周りの艦から補給物資をかき集めての急発進だ。

アンズバツハはもはや言葉すらかけずに、残つて後始末をするだけである。

一方、逃走していったクリステイーネらはひとまず補給と休息が必要だった。もはや領地には戻れない。

格好の補給地を見つけることができた。

それはレンテンベルク要塞といい、小惑星を改造した帝国軍の要塞だった。貴族の反乱に備えて作られ、ちようど航路の要衝を押さえている。しかも貯蔵している物資はかなりの量になる。

その要塞を守備していた帝国軍将兵はクリステイーネからの通信を受けて戸惑った。何と貴族私領艦隊から物資補給の要請が来るとは。そんな前例はない。

本来ならば筋違いな欲求であり、断つてもいいはずである。

だが、クリステイーネ・フォン・リッテンハイムはれつきとした皇女なのだ。皇帝の血筋を引き、単なる高位貴族ではない。

帝国軍は皇帝に従う軍なのだから、皇帝が空位である以上それに準ずる皇位継承者に

従う方が正しいのではないか。結果、クリステイーネらを要求通り受け入れている。そのため補給と休息をとることができた。

しかし出立する直前、悲報が舞い込む。

尚もしつこく追って来たフレーゲルの艦隊が迫りつつある。

「レンテンベルク要塞に告げる。リッテンハイム家の者がいるなら聞くがいい。もはやどこにも逃げられん。だったら潔い態度を示したらどうだ。帝国貴族たるもの、常に美学を追求するのだ」

フレーゲルからこんな通信が来た。

何が言いたいのか分からないフレーゲルの自己陶醉に付き合っている暇はない。

しばしクリステイーネは考えたが、娘を守るために返信した。

何としても娘サビーネは守る。夫との固い約束だ。

「フレーゲル男爵、クリステイーネ・フォン・リッテンハイムです。先の戦いで軍事的に破れはしましたが、リッテンハイム家への丁重な扱いを要求します」

「今さら丁重な扱いなどふざけているのか。誰が降伏をしろと言った。きれいに消えるのも貴族の美学、せめて潔くヴァルハラに行くのを手伝ってやろうというのだ」

やはり、フレーゲルはここでリッテンハイム家を抹殺しようとしている。

皇女を手にかけるのは本来赦されざる大罪だが、向こうにはアマールエがいて、それが即位すれば確かに何ほどの問題でもなくなる。勝てばなんでもいいのだ。

しかも、悪いことにフレーゲルを説得しても意味がない。

ここで降伏し、オーディンへ移送されたとしても、そこで待つのは死だけだ。

クリステイーネが一度降伏を匂わせたのは、次の言葉を印象付けるためだ。ここで賭けに出た。

「黙れ下賤の者！ 銀河帝国皇帝の娘たる妾に男爵風情が口をきくのもおこがましい！

しかも何という言いさまか！ 身分を弁えよ！」

クリステイーネは穏やかな性格であり、日頃から大声など出したことはない。しかし、ここで普段はしないような啖呵を切った。

それはフレーゲルの痛いところ突き、怒らせ、向かってこさせるためだ。

とにかく乱戦に持ち込む。長距離から囲まれてじっくり攻められてはたまらない。

娘サビーネだけは逃がすためである。

そして頭を働かせ、乗ってきた私領艦隊の巡航艦ではなく、レンテンベルク要塞に元から停泊していた帝国軍の艦にサビーネを乗せて逃がした。

つまり、貴族同士の争いに巻き込まれそうになり慌てて退去する帝国軍を装ったの

だ。むろん、要塞にいた帝国軍兵士も一緒に逃がす。

「サビーネ、ここからは一人でお行きなさい」

「え、お母様は！ どうして！」

「それは、母に皇位継承権があるため、一番に狙われているからです。母がいる限り追われ続けます。だからここにいななければいけません」

クリステイーネもリッツテンハイム侯同様、囹となることを心に決めている。サビーネのために。

「お母様、お母様！」

サビーネは今度こそ叫ぶ。

先に父を喪い、立て続けに母まで喪ってしまうのか。

それは少女の耐えられる限度を超えている。

クリステイーネは両手の平でサビーネの頬を優しく挟んだ。そして顔を寄せ、語りかける。

「サビーネ、よく聞きなさい。あなたの母でいられて幸せだったわ。母の人生はとても幸せだった。これだけは言っておきたいの」

「そんな、どうして、どうして！」

サビーネはそれしか言えなくなっている。

それは魂の慟哭が引き起こす叫びだ。この幼さでは感情をうまく表現できない。

「あなたを守らなくては、先にお父様にした約束が守れないのよ。行きなさい、サビーネ」

決然と言い切った。

そこに何の余地もない。父と母はサビーネを守るのだ。それは何よりも深い娘への愛だ。

「サビーネ、まだあなたは一人ではありません」

最後にクリステイーネはそれだけを言っておく必要がある。

まだこの帝国には娘を託せる者がいるのだ。クリステイーネはそれを知っている。

「あの方を頼りなさいサビーネ。ヒルデガルト・フォン・マリィンドルフ嬢です。きつと力を与えてくれます」

クリステイーネはヒルダが聡明であり、その思慮は別格と言えるほど高いレベルにあることが分かっていた。

しかも、もつと大事なことがある。

ヒルダは賢くはあるが決して冷徹ではない。むしろ愛情深い人間だ。

リッテンハイム家がここまで無様に破られても、もはやブラウンシュバイクの世に



なつても、希望が極小になつても、絶対に見捨てることはない。

普通の貴族であればさつきと見切りをつけ、逃げ出すだろう。裏切つてブラウンシユバイクへ媚びを売るだろう。ましてやマリーンドルフ家は昔ながらのリッテンハイム派閥ではなく加わつたばかりなのだ。裏切つても非難はされない。

しかし、クリステイーネは分かっている。

ヒルダだけはサビーネを捨てない。

サビーネがヒルダに守られ、まばゆい道を堂々と歩いていく幻影が見えた気がする。いや、幻影というよりもはるかに確かな未来に感じた。

サビーネをなんとか送り出した直後、クリステイーネに業を煮やしたフレーゲルは艦隊を率いレンテンベルク要塞に襲い掛かつてきた。

しかし二万隻の大艦隊といえどレンテンベルク要塞は破壊に至らない。元は人工物ではなく、大きな岩石を改造して作られた要塞なのだ。雨のようにミサイルやビームを浴びせられても通用しない。これを外側から破壊するのは至難の業である。

フレーゲルはやむなく白兵戦部隊を投入した。

すると再びクリスティーネはフレージェルに挑発を仕掛けた。それは、クリスティーネがまだ要塞に居ることを誇示し、脱出したサビーネの方を追わせないためだった。

「恥を知れ！ 皇女を手にかけてようとは。しかも、男爵など末端貴族の分際で。ブラウンシュバイクにたつた一つ同情でできることがあるとすれば、こんな甥を持ったことか」  
フレージェルにとって思いっきり痛撃になった。

実は爵位で言われたら、フレージェルの爵位は貴族の中でかなり低い立場の男爵であった。ブラウンシュバイク公の甥という立場でも、爵位はそれだ。

それはフレージェルの肥大した自尊心に合わない。

誰にも分かれられないように隠し続けていたが、内心では気にしている。ブラウンシュバイク公にも爵位を上げてもらえるようねだったことはないが、早く察して上げてくれないか熱望している。

爵位はフレージェルの最大のコンプレックスだったのだ。

それをなんとなくフレージェルの反応から察知したクリスティーネは容赦のない言葉でそこを抉っていく。

「男爵など貴族というにもおこがましい。本来なら舞踏会の末席にいるものを。いや、フレージェル男爵、本当に末席にいたのを見たことがある。たまたま目の端に入った時に。妾からすれば男爵など平民の方によほど近い。そんな男爵が偉そうにしていると

は、小物ほど調子に乗るとは正にこのこと」

「黙れ黙れ黙れ！ 誰でもいい、あの女をここまでひきずってこい！」

それは皇女に対して言っているいい言葉ではない。フレーゲルの粗末な本性が露わになる。もはや貴族の仮面は剥がれ、泡を吹きながら猛り狂っている。

艦橋のオペレーターたちは啞然とし、首をすくめてやり過ぎすしかない。

やがてフレーゲルの遣わした白兵戦部隊が要塞に取り付き、その通路を制圧しつつ進んでいる。

間もなく自分の居場所まで到達するだろうことを知ると、クリステイーネは要塞中心部にある反応炉を暴走させる所謂自爆スイッチを入れた。

要塞そのものが壊れることはない。

だが、そこに開けられている通路の全てから宇宙に向かってまばゆい光が迸った。

無数の光の剣のようだ。あたりの宙域を白く染め上げ、続いて各種残骸も噴出する。レンテンベルク要塞は自爆でその使命を終えることになった。

皇女クリステイーネはここに斃れる。

愛娘サビーネ、たった一筋の愛を残しながら、その身は消えた。



## 第八十一話 488年 5月 共同作戦

サビーネを乗せてレンテンベルク要塞を脱出した艦は帝国軍本部を目指したのではない。

そこでさえ危険なのである。本当ならリッテンハイム家の味方であるラインハルト元帥府に赴くべきなのだが、もうラインハルトは出立して作戦行動に入っており、正確な位置がつかめない。

現状、最も安全であると思われる場所を目指した。

それは帝国と距離をおく独立勢力、フェザンだ。もはやそこしかない。

今、フェザンは帝国の内乱が勃発しても不気味な沈黙を守っている。

レンテンベルク要塞に元からいた兵士たちを途中で降ろすと、サビーネとほんのわずかな従者たちはフェザンへ向けて進んだ。

それを予期した者がいる。

リッテンハイム侯の艦隊が進路を塞がれ、オーデインへ戻って来れなくなったことを

知ったヒルダは、もはや艦隊戦の帰趨を負けと予想している。ブラウンシュバイク側の艦隊には質でも量でも勝てまい。

「どんなことをしてもリッテンハイム侯をお止めすればよかった。私が悪かったのだわ」

悔やんでばかりいても仕方がなく、次のことを考えるべきだ。

むろんそれはヒルダの進退のことではない。ヒルダにとつてリッテンハイム家を見捨てて寝返るといふ選択肢は考えもしていない。

そうではなく、考えるべきは戦いで敗れたリッテンハイム家の今後である。

おそらくフェザーンしかリッテンハイム家の行くところは無い、そう思った。

消去法で他のところでは有り得ない。

戦いになったのならそれを見越し、ヒルダもまたオーディンから出ることを画策する。もうオーディンに在るべき理由はない。完全にブラウンシュバイク派閥の天下になるオーディンに留まるのは危険だ。

そして同時に二人の者もまた同時に脱出させ、守る。その一人は父フランツ伯であり、それはもちろんのことだ。

もう一人はラインハルトの姉アンネローゼだ。

ブラウンシュバイク公は前皇帝の寵姫など疎んじ、何をするか分からない。平民に落とすならまだしも処刑する可能性だってある。ヒルダはそこに同情せざるを得ない。

しかし、もつと深刻なのは戦術に利用されてしまうことだ。

ラインハルトがブラウンシュバイクの艦隊と戦うことになれば、むろんアンネローゼは捕らえられて材料にされてしまう。いくらなんでもそこまで考え付かないわけがない。

そして現実的にアンネローゼを人質に取られてもしたら、おそらくラインハルトは戦う前から白旗を上げるだろう。アンネローゼこそラインハルトにとって何にも代えがたいものであり、敗戦さえ呑むに違いない。

もちろん、その際ブラウンシュバイクは将来自分の死刑執行書にサインしたことになるのは明らかだが…… しかしいったんラインハルトは屈辱に甘んじることだろう。

ヒルダとしてはアンネローゼを何とか説得し、オーデインを共に脱出し、フェザーンに同行させることが必要になる。

ヒルダはアンネローゼと直接の面識はないが、ラインハルトと密約を交わしていることを匂わせれば訪問を断られることはなかった。

だがしかし、オーデイン脱出の説得は予想外に難しかったのだ。

「アンネローゼ様、オーデインにいるのは危険です。わたくしと是非ご同行下さい。切にお願いいたします」

「ヒルデガルト様、お気遣い本当にありがとうございます。ですが、わたくしは弟やジークの足手まといになりたくはありません」

アンネローゼは動かない。

なぜならもう半分世捨て人であり、命をつなぐことを考えていない。皇帝の死去からもうこんな感じである。

仮にブラウンシュバイクの手の者に捕らえられる事態になれば自害すると決めているらしい。その覚悟はヒルダにも分かった。

しかしそれでは解決とは程遠いのだ。

もしアンネローゼが自害すれば、ラインハルトはすぐさまブラウンシュバイクを地獄行きの特急に乗せるだろう。

それはヒルダにとって利益になるといえばそうである。勝利は余計確固たるものになる。

しかし、ヒルダとしては決して望んだ結末ではない。もしもアンネローゼが失われたら、ラインハルトの鋭気はどこに向かうというのだろう。それは銀河帝国にもラインハ



ルト自身にも計り知れない深い傷となる。

なんとかしなくてはならないのだが……

そんなヒルダに接近してきた者がいた。

かつてお互いに火花を散らすほど牽制し合った仲の者が。

「ヒルデガルト様、ご機嫌うるわしゅう。またお会いできましたわね。意外に早くに」

エルフリーデ・フォン・コールラウシユだった。

ヒルダは驚くしかない。

亡きリヒテンラーデ侯の懐刀エルフリーデ、無憂宮での事件の後には行方不明のはずだ。それがなぜか今自分の目の前に出てきた。昨日会ったばかりのような気易い声で。

しかもヒルダは現在の居場所を秘密にしている。ブラウンシユバイク側から襲撃されないために。

しかしエルフリーデがそれを見通していたということとは、情報力も分析力もあるということだ。やはり侮れない相手であることは確かなようだ。

「驚きましたわ。エルフリーデ様。それで御用向きは？」

ヒルダとしても思わず口調が厳しくなるのは仕方がない。意図が不明なのだから。

「警戒しなくともよろしくてよ。ちよつとしたお願いがありますの。おそらくフェザーンへ行こうというのでしょうか。ならばこちらも同乗してよろしいかしら？」

エルフリーデはヒルダがフェザーンへ向け脱出するのを見通している。

しかも、それだけではない。

「エルフリーデ様、よくお分かりですわね。しかし申し訳ないことですが、いつ出発とは申せませんわ」

「ふふ、ヒルデガルト様も回りくどいことをおつしやる。今の懸念はアンネローゼ様のことでしょう。その方をお連れしなくては、どうにもならないのは分かりますわ。しかし動かすのは難儀でしょうね。直接訴えても、なかなか」

「正直また驚きました。そこまでお分かりとは」

エルフリーデはずうずうしいお願いをしてきたと思えば、今のヒルダの困難も見通している。おそらく同じ思考経路を辿り、アンネローゼの安全こそ鍵になると理解しているのだ。

そして何と解決策を示唆してきたではないか！

もう作り上げた案があるらしい。

「ヒルデガルト様、それなら方法があると思いますわ。アンネローゼ様は優しいお方。周りの人に危害が及ぶとなると、たぶん動くでしょうね」

「…… エルフリーデ様、そのお考えに興味がありますわ」

こうしてヒルダとエルフリーデの共同作戦が始まった。

実はこのことだけではない。

以後、二人は長きに渡って協調していくことになった。

天性の戦略家ということではヒルダがずっと上だろう。頭の回転の速さもそうである。ただし、実戦で鍛えられた凄みはエルフリーデに分がある。最高の策略家リヒテンラーデ侯に長く師事していたのは伊達ではない。

二人は陰に陽に役割を果たし、銀河の歴史を変えていくことになる。

これはその始まりであった。

アンネローゼに知古は少ないが、一番交友関係があるのはヴェストパーレ男爵夫人であった。

そこを利用しようというのがエルフリーデの考えだ。

偶然にも都合のよいことがあった。

ヴェストパーレ男爵夫人ならば、ヒルダには知己である。かつてヴェストパーレ男爵夫人はヒルダのいた女学校で芸術科目の講師をしていたからだ。

さつそくヒルダが訪問する。

「突然訪問して失礼します。先生、緊急にお願いしたいことがあつて参りました」

「何でしょうヒルダ。卒業した今頃補習をしたくなつたのですか。あなたは試験はとびつきりですが、指先を使う実技はさつぱりですからね。それでやりたいのは音楽ですか、それとも刺繍？ まさか料理ではないでしょうか？」

これは単なる冗談だ。この情勢下でそんなはずはない。

ヴェストパーレ男爵夫人はユーモアがあり、快活な婦人だった。

「先生、どれも違います。どうせわたくしは習つても上手にはなりません。料理なんか何年やつても。そうではなくお願いしたいのは、グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼ様のことです。この方を守るため、オーデインを出るよう一緒に説得して欲しいのです」

まずはヴェストパーレ男爵夫人を引き込むのだ。お互いを思いやる心を利用する。

その後アンネローゼを説得すればいい。この順番が逆ではうまくいかないだろう。ヴェストパーレ男爵夫人もアンネローゼも自分が犠牲になる方を選んでしまふだろうから。

策を巡らし、多少悪辣であつても、今はそうしなければ誰もが不幸になる。

協力を約束してくれたヴェストパーレ男爵夫人を連れて、今度はエルフリーデがアンネローゼの元に赴く。

「エルフリーデ・フォン・コールラウシユと申します。アンネローゼ様、早くフェザーンへ逃げないと危険です」

「わたくしのためにそう言つて頂けるのはありがたいのですが、申し訳ありません」

「ではアンネローゼ様、これだけは申します。我が叔父リヒテンラーデ侯は誰もが知る忠義の者。そのため皇帝から常々本心を聞いていました。皇帝は他の者は知らず、ただ一人アンネローゼ様だけは末永く平穏な人生を送つてほしいとおっしゃつておられたそうです。自分の死後も決して歩みを止めず、凍りついたような人生ではなく、幸せになつて欲しいと」

「まあ、皇帝陛下が、そんなことを……」

これはエルフリーデの真つ赤な嘘だ。

しかし、聞いていないだけで事実と違うかどうかはまた別のことだ。

「アンネローゼ、フェザーンへ逃げましょう。私も一緒に行きますから」

横からヴェストパーレ男爵夫人が口添えする。こちらもアンネローゼを救うために熱が入る。

「ここぞとばかりにエルフリーデは畳みかけた。」

「アンネローゼ様、動かなければ男爵夫人も巻き添えになつてどんなことになるか。おそらくアンネローゼ様に近い者は皆酷いことになるでしょう。ここままでは全員が」  
エルフリーデがそう言うのに合わせて、ヴェストパーレ男爵夫人もコクコクと首を頷かせる。ヴェストパーレ男爵夫人は自分の危険を訴える演技をしている。

「アンネローゼ、考えるのは後にして。そこのかわいい侍女さんでさえ、このままではどんな目に遭うかもしれせんよ」

ヴェストパーレ男爵夫人はたまたまそこに飲み物を運んで来た侍女を指さした。

確か、アンネローゼに付いているマリーカ・フォン・フォイエルバッハという名の侍女だ。マリーカは突然視線を集め、目を丸くして、盆を両腕で胸に抱いたまま固まる。まだまだ無邪気な子供だ。

「分かりました。一緒にフェザンへ参ります」

こうしてヒルダとエルフリーデの作戦は無事成功した。

アンネローゼと侍女たち、ヴェストパーレ男爵夫人を連れ、エルフリーデ、ヒルダ、フランツ伯はフェザンへと旅立つ。

## 第八十二話 488年 5月 フェザーンへ

リッテンハイム私領艦隊を撃滅し、リッテンハイム侯もクリステイーネも斃したブラウンシュバイク公はついにアマールエの戴冠式を強行した。

オーディンで邪魔をするものはいない。

形式的にも皇位継承者はアマールエで間違いない。

クリステイーネの子サビーネの死は報告されていないが、継承権はアマールエのはるか下に過ぎない。エルウインは皇太子ではなく皇孫だったが、男子直系の子孫であればこそ候補の一人であった。しかしサビーネはそうではなく、皇位継承の対抗馬にすらならない。

行政府の文官たちもこれからのことを考えて嘆息するが協力する他にないのだ。ブラウンシュバイク公の専横と悪政はもはや覚悟して甘受するしかない。

戴冠式はさすがに準備期間が足りなかった。やたらと金をかけ豪勢に仕立て上げられたが、全く洗練されていなかった。アイゼンフート伯爵の代わりに宮廷尚書になったばかりのボーデン侯爵は無能であり役に立たない。音楽も段取りもぎくしゃくしたも

のだ。

居並ぶ廷臣たちというのと、文官はまだしも武官は本当にちらほらいる程度だった。無駄に豪華な装飾が目立ったが、これが逆にブラウンシュバイク家の世になったことをアピールする結果になったのは皮肉である。

普通の代替わりではないことが誰の目にも明らかだったからだ。

ゴールデンバウム王朝ははつきりと一つの曲がり角に立った。

とにかく銀河帝国皇帝はアマーリエ・フォン・ブラウンシュバイクと定まった。

もはやブラウンシュバイク家とそれに味方する貴族は我が世の春と浮かれ、その権勢は天をも突く勢いである。

他の帝国臣民は首をすくめてこれからのことを思いやる。

新皇帝の名を借りてブラウンシュバイク公が初めに行ったことは、ブラウンシュバイク家に敵対してきた者全てを賊と断じたことだ。

いかなる理由があろうと決して帰参を赦さないと明言した。

これはブラウンシュバイク公の性格を考えたら予測がつくものだが、それでも厳しい態度と言わざるを得ない。

旧来のわだかまりを解消して手を携え共に未来を作るところではない。そんな甘さ



は微塵もなかった。かつての敵を抹殺し、きれいさっぱり掃除をするところから始めようというのだ。

これでリッテンハイム側貴族の命脈は断たれた。奇しくもアンズバツハよりフレールの方が正しかったのだ。

ともあれヒルダやアンネローゼたちの脱出は的確な判断だった。

リッテンハイム側と見なされていた貴族は全て財産を没収されていく。そしてさらに家族ともども爵位を没収されてしまう。

しかしそれは下級貴族の場合だ。リッテンハイム派閥で主要な位置にいた貴族はそんなことでは済まされず、やはり肅清が待っている。

誰しも肅清などされたくない。

そして自分が肅清されないための方法がたった一つ残されている。

オーディンには密告の嵐が吹き荒れた。

自分が犠牲にならないためには、先に密告するしかない。主にターゲットにされたのはリッテンハイム側からブラウンシュバイク側へ寝返って日が浅い者たちだ。それらの者たちは事実か事実でないかさえもはつきりしないまま、密告によってあっさり肅清されてしまう。

そんな密告による肅清に主に携わったのは内務省で地歩を築いていたハイドリツヒ・ラングである。ある意味ラングは職務に忠実な者であり、かつその方面で極めて有能だ。ブラウンシュバイク家の世になつても冷遇されなかつた数少ない者の一人である。ブラウンシュバイク公もその有用性を認め、そのまま遂行させている。

ラングは密告によつて捕らわれた者を「自白」させ、それによつて刑罰に処した。

帝国を暗雲が広く覆つた。多くの者が未来を悲観するようになる。

最後まで中立を保つた貴族すら財産没収の憂き目にあつてしまふとは。

オーデインの市街には今や没落貴族が群れをなしている。

飽食と贅沢に代わり、その日の糧を汲々として得なければならぬ。そして、侍女や下僕からの仕返しに怯えるのだ。

それまでによつてきたことをそっくりそのまま自分の身に受ける。心優しかつた貴族は、暖かい無償の援助を受けて涙する。こんな時だからこそ人の本性が出る。善意は善意を呼び、お互い抱きしめ合つて、これから助け合うことを誓う。

しかしそれは貴族の中でもわずかなものだった。圧倒的多くの貴族は悪行を重ねてきた報いを受けなくてはならない。

かつての下僕が強盗に変装し襲つてくる。なけなしの金を盗られ、身ぐるみ剥がれて途方にくれる。住むところもなく、行くあてもなく、どうすればいいのか。もちろん官

警に訴えても相手にされない。

中には直ぐに死体に変えられる貴族さえいた。しかし同情はされない。される訳がない。その者は、以前から下僕や侍女に電磁ムチを振るっていたのだ。

しかし今の銀河帝国でブラウンシユバイク家に従わない者がまだいる。

当然、ラインハルトの元帥府にいた将兵たちのことだ。

当たり前のことだが銀河帝国に敵する賊軍とされた。

しかし、本人がそれで怯むことは微塵もない。それどころか堂々と反論でもって返す。

「皇女クリステイーネ様を害した張本人たるブラウンシユバイク家に帝国を継承する資格など最初からない。不服であれば実力をもって正統性を示すがいい」

こう発布した。

既に帝国の皇帝はアマリーエなのだから、これは単なる詭弁にしか過ぎない。普通の遺産相続とは違い、いったん皇帝になったものが全てを握るのだ。その手段は何も問わず結果が全てと言える。

しかし、ラインハルトとしては賊軍とされることに痛痒はないが、ブラウンシユバイク公の上に立たれるのは気分が良くない。それだけのことだ。

実際、賊軍とされても今さら離脱するものは少なかった。

麾下のものはラインハルトに心酔している者が大半であり、残りも直接の上官であるミッターマイヤーやロイエンタールといった諸將に忠誠を誓っている。

長く戦いの場にいた者たちは実力が全てだということを知っているのだ。皇帝の権威など砲弾の一つにも値しないことを知っている。

それだけではない。

平民出身将兵の中には唾棄すべき貴族と戦うというだけで戦意を高める者も少なくなかった。ラインハルトが一応貴族出身とはいえほとんど平民の暮らしと変わらない没落貴族出身であることがここではプラスに働いた。

確かにラインハルトの家は市井にあり、木の柵しかない質素なものである。兵たちから見て貴族同士の内乱とは捉えられなかったのだ。しかもこれまでの多くの戦いでラインハルトが門閥貴族派の軍中枢部から嫌がらせを受け、たびたび死地に追いやられたことも公然の事実である。

「貴族と戦うなんて最高じゃないか。こんな機会が逃がせるか。俺は叛徒なんかより貴族に恨みがあるんだ！」

こんな声が兵の声を代表している。

だがそれでも離脱する者が全くいないわけではない。

その者は迷いつつも、元帥府からの離脱を上官に告げる。

「ロイエンタール閣下、その、ここまでお世話になって言うのも心苦しいのですが」

「みなまで言うなミュラー少将。卿の言いたいことは分かるつもりだ。ここで卿に離脱されるのは元帥府のみならず我が艦隊にとって痛いことだが、押しとどめることは卿を不幸にするだけだろう」

さすがにロイエンタールは度量が大きい。

ミュラーの心情を正確に分かった上でそれを赦した。

言葉にしなくとも伝わっている。ミュラーは別にラインハルトが賊軍だから離脱するのではない。

ましてや、新皇帝アマリーエとブラウンシュバイク側に寝返り、褒賞をもらったり栄達することなど考えてもいない。むしろそんな者がいればミュラーこそ真つ先に立ち向かったことだろう。ミュラーもまた誇りある武人なのである。

ミュラーが気にするのは、これから帝国の内乱に向かえば同じ帝国人と戦わなければならないことだ。そんな同士討ちなどしたくない。できれば敵とさえ戦いたくないと思っているくらいなのに。

もちろんこれまで過ごしてきた艦隊に思い入れはある。ロイエンタールを始め多く

の人に世話になつてきた。それを振り捨てるのは辛いことだ。

思い余つた末に出した結論なのである。

「ミュラー少将、艦を一隻用意する。これは、俺からの餞別だ。気にせずもらつておけ」

ミュラーは驚いた！

それは破格のことだ。普通なら離脱しようとする者など拘束するのが普通ではないか。それを許すどころか艦をくれるというのだから。

「ロイエンタール閣下、そこまで小官などのために。あまりに心苦しいことです」

「なに、叛乱など起こさず、最初から俺に談判に来た卿の潔癖さのお返しだ。そして卿の人望のため付いていきたいと思う者も結構な数があるだろう。艦が一隻で済むかの方が心配だ。それにだ、俺の親友でもやはり同じことをするだろうな。今度そいつとワインを飲むときの格好のネタを提供してくれた礼でもある」

その後、ミュラーはまた驚くことになった。その艦は駆逐艦などではなく、巡航艦でもない。就役したばかりの新鋭戦艦。パーティバルだった。ロイエンタールがわざわざ餞別というだけのことはあり、ミュラーは最大限感謝しながらそれに乗つて出る。

行き先を考えた。

それはどんなに考えても一つしか思い浮かばない。むろんフェザーン、帝国の内乱が

及ばないのはそこしかない。

ナイトハルト・ミュラーはフェザーンに来た。

そして思いがけない歓迎を受ける。

ミュラーも実は歓迎されるかもしれないという期待があった。しかし、論外として拒絶される可能性も考えていた。自分は今や何の身分もなく、ただの放浪の逃亡兵なのだ。帝国軍少将の地位も過去のことである。フェザーンとしては到着すら拒んでもおかしくはない。

エカテリーナとの個人的な友誼はこの際当てにならない。そんなことを言える情勢ではなく、エカテリーナが常識的な判断をすれば逃亡兵など受け入れないのが当然だ。ミュラーの心は期待と不安、この二つの間で揺れ動いていたのである。

「来ると思っていたわ。ミュラー。遅すぎるくらいよ」

なぜか自信満々にエカテリーナが歓迎する。自分の予測が当たったと言わんばかりに。

「へえ、待っていてくれたのかいエカテリーン。正直嬉しいよ。でももし来なかったら」

「我らもお待ちしておりました。」

ふいに横から声を掛けられた。

見ると、以前フェザーン艦隊で世話になった二人が立っているではないか。その二人をミュラーは忘れていない。

「あ、あなた方は、確かオルラウ大尉とドレウエンツ中尉では……」

「根拠らしい根拠があるわけではないのですが、またお会いできるものと思っております」

この二人もまたミュラーのことを待っていたと告げている。

「また我らの艦隊を指揮して頂きたい。いえ、あなた以外におりません」

ミュラーを待っていた根拠について二人とも口を濁したが、実はミュラーの優しさであつた。

帝国軍には綺麗ごとばかりではない。

若く、理想の高いミュラーは必ずや疑問を抱き、長くはいられないだろうと踏んでいたのである。

「ミュラー、教えるけどフェザーンにはもう一個艦隊くらいの艦隊戦力があるわよ。あなたにはそれを率いてもらうわ。これはもう決めてるの」

実のところミュラーはアスターテの戦時艦隊指揮代行を除けば、帝国軍ではクナツプシユタインの下でせいぜい五百隻程度の艦隊を率いていた経験しかない。



それをいきなり一個艦隊の指揮、しかも、部外者だったミュラーが！

この人事決定は全てエカテリーナの決断力によってなされる。

決して縁故でもなくきつちり見据えた上での決断だ。

それが破天荒に見えるのは、むしろ責任から逃げなかつたゆえである。常識や慣習の範囲内で動くことは容易い。しかしエカテリーナにはそれ以上が求められているのだ。

ならば決断しなくてはならない責任を踏みしめて、その上で決断できる能力を行使した。

「エカテリン、そんな。僕にできるかな」

まごついたミュラーにまた優しいサポートがつく。

「いいえ、あなたであれば何の問題もなくできるのでしよう。我らもお供します。」

「よろしく願います。オルラウ大尉。」

「あの、すみません、いつ言おうかと思っていたのですが、艦隊創設と共にお恥ずかしいことながら大尉から出世いたしましたして、こんな小官でも今は准将であります」

一瞬の間を置いた後、エカテリーナがけらけら笑う。

つられてミュラーも笑う。

それはこのフェザーン艦隊の明るい未来を示すような始まりだった。

## 第八十三話 488年 6月 見えない炎

ラインハルトは帝国に反逆する賊とされても、おとなしく帰順するどころか公然と敵対する意志を示した。

麾下の艦隊五万隻余りは帝国軍ではなくもはやラインハルトの私物だ。

これを帝国が捨てておけるはずがない。一刻も早く撃滅しなくては新しい皇帝アマリーエの権威、ひいてはブラウンシュバイク家の権威が形無しだ。

それ以前にラインハルトのことを感情的に許せない人間がいた。

もちろんフレージェルだ。

ラインハルトがまだ将官ですらない時分から敵対し、常に隙を伺っては亡き者にしようと思んできた。それはティアマトやアスターテなどにおいても見られ、帝国軍の作戦を捻じ曲げるほどに執拗なものだった。いや、フレージェルはラインハルトのみならずラインハルト麾下のミッタマイヤーなどにさえ因縁がある。

まあフレージェルは最も成り上がり、最も勝利を飾ってきたラインハルトを目の敵にしていただけで、基本的には平民出身の士官であれば誰彼かまわず追い落とそうとしてき

た。特に人望のある者にフレーゲルは激しく嫉妬している。

今こそラインハルトと決着をつけずにはいられない。

「正統なる帝室に逆らう不埒者が！ いやしくも帝国軍にいた者が艦隊を奪って叛逆に走るとは、このフレーゲルの目は正しかった。いずれ奴が帝国に仇なす者になるだろうと見抜いていたのだ。やはり確実に殺しておくべきだった」

フレーゲルはラインハルトの行動を非難しつつ、同時に自分の慧眼を誇った。

それは皮肉にも的外れとはいえない。早めに潰しておけばこういうことにはならなかったのも事実である。

「こうなれば堂々と戦い、亡き者にしてくれる。銀河帝国の伝統と権威、そしてそれを支える我ら帝国貴族の力を思い知るがいい！」

何と皇帝の裁可も得ずに、早急に集められる艦隊を率い、勝手に出撃していった。もはや帝国軍を私物化しているのはフレーゲルなのだが、本人はいたって真面目に帝国のためと思っている。

それをアンスバツハは冷ややかに見送っている。

それと同じ頃、ヒルダらがやっとフェザーンに到着した。

ブラウンシュバイク艦隊の目を盗みながら進むため、だいぶ迂回した航路を通らねば

ならなかった。しかもただ迂回するだけでもいけない。二重三重に網が張られており、それをかいくぐるのは大変な困難さがあつた。

もちろんヒルダに限らず逃亡を図っている元リッテンハイム派閥貴族を捕えようという網である。それら貴族はもはや銀河帝国にいればブラウンシユバイク派閥に肅清されるのを待つだけであり、フェザーンを経由して亡命する他にはないからである。

それらの網をかいくぐつて進むためにはよほど深い読みが必要だったのだが、この場合は尋常ではない人間が二人もいる。明晰な頭脳を持つヒルダとエルフリーデの二人がいればそれは不可能から可能に変わるのだ。

ともあれフェザーンに到着後、初めにしなければならぬことがあつた。

当たり前だが滞在許可を得なければどうにもならない。

通常なら別に何でもないことだが、ヒルダもエルフリーデも、アンネローゼも余りに名が知られ過ぎていて、ブラウンシユバイク側にとってそれぞれがそれぞれ別の意味で不快な害虫であり、それを置くことはフェザーンにとって大きな政治的問題になるからだ。

今、帝国はフェザーンに対して何か言つてきているわけではない。帝国のブラウンシユバイク体制はまだ始まったばかりであり、そういう余裕はない。さしあたってフェザーン側から干渉してくるのでない限り放置の構えだ。それはブラウンシユバイク公

はオーデインの宮廷や社交界にしか関心がなく、帝国の辺境など視野に入っていないということが多い。

ただしいつまでもそうではなく、いずれ帝国の体制が固まれば、経済的繁栄を謳歌するフェザーンに対し何か仕掛けてくるのだろう。

そんなことを考えれば、やはりヒルダらを置くことはフェザーンの立場上問題である。

だがヒルダはごまかしてフェザーンに潜入することは考えなかった。

それは、信頼する女学校の先輩エカテリーナへの裏切りになつてしまう。

発すべき言葉を考えつつ、フェザーン航路局管制からエカテリーナへ通信をつないでもらう。

「ヒルダ、フェザーンへよく来てくれたわ！ 歓迎するわよ」

ヒルダが言葉を言う前にエカテリーナから声をかけられた。それは予期せぬ暖かいものだ。

「エカテリーン、いえ自治領主令嬢エカテリーナ様、正式な滞在許可を頂きたく申請いたします」

「そんな言い方はしなくていいわ。フェザーンにいるのは構わない。しかし、その硬い

言い方があなたらしくないと言うか、あなたらしいと言ったらよいのか、実物より冷たく感じ取れるから損だわ。やめた方がいいわよ」

挨拶代わりに冗談めいた忠告を言いながら、エカテリーナは到着した人物リストを見てまた声を上げる。

「だいたい予想してた通りね。あ！ ヴェストパーレ先生がいる。先生がいらつしやれば、同窓会ができそうよ、ヒルダ。そうだ、エリザベートも呼びたいところだけどあいにく遠くにいるから残念だわ」

「エカテリーン、その、滞在についてはあなたじゃなくて自治領主の判断なの？」

ヒルダはエカテリーナがあまりに軽く許可を出し、深刻そうなところが少しもないのを見て逆に心配になった。

政治的な重さを理解できていないのだろうか。

同窓会の算段を話している場合ではない。

そこをヒルダに問われたエカテリーナは意図を分かかって答えた。

「ちゃんと意味があるのよ。実は、フェザーンはもう帝国の附属物じゃない。帝国の混乱を機会に独立を仕掛けるの」

「それは驚いたわ！ しかし、今それを私たちに言うなんて」

ヒルダは理解した。

フェザーンはもう帝国の顔色を伺うことはしない。綱渡りの交渉で汲々と自治を守ることがはしない。力を持った勢力として対等の立場を目指すのだ。

今フェザーンが沈黙を守っているのは、帝国の新体制がどうなるか右往左往する必要がなく、それより力を貯える方を重視しているためだった。

だからヒルダらの滞在で将来の火種を呼び込むことなど問題としない。

しかしながらこの段階でヒルダに重大に過ぎる政治判断を明かしてしまつてよいかどうかは別のことだ。

その答えは次に得られる。

エカテリーナはヒルダの才能を買つていて、それなりに算段を立てていたのだ。

「それでせっかくフェザーンにいるなら、ヒルダ、少しは働いてもらつていいかしら。エリザベートも働いているのよ」

それにエカテリーナは決してマキャベリズムの権化ではない。

「もう一つ言つておくわヒルダ。最初から追い返すつもりなんてなかった。ここフェザーンはね、逃れる者たちの拠り所なのよ」

それでもヒルダは一つのことを確認する必要がある。それは自分のこと以上に重要



な問題なのだ。

「それではエカテリン、リッテンハイム家の人間が逃れてきてもフェザーンに滞在できるのかしら」

なぜならリッテンハイム家の者を置くことはヒルダらと比較にもならない程大きなリスクがあるからだ。

下手をすればそれだけでフェザーンと帝国の戦争の引き金になりうる。ブラウンシュバイク公がそれを知れば、たぶん激怒するに違いない。口実に使うどころか正にその理由でフェザーンが潰される可能性が高いのだ。

ブラウンシュバイク家とリッテンハイム家はどこにいたところで仇敵であり、共存はできない。

それはヒルダの期待以上の返事で明らかになった。

「ヒルダ、あなたが味方しているリッテンハイム家は、もうフェザーンに來ているわ。二日前に」

もう來ていたのか！　ここフェザーンに。

ヒルダは安堵すると同時に、やはり自分の最も悪い予想になってしまったことを考える。返す返すも無謀な艦隊戦勝負を止めれば良かったのだ。リッテンハイム家の人間が生きていれば挽回はできるだろうが、実力を大きく削がれた現状からは道のりが遠

い。

そんなヒルダの複雑な表情を見て、エカテリーナの方もまた例えようもなく難しい表情になる。

多大な決意を要する言葉を言わなければならないからだ。

ヒルダの心情を思いやり、これから味わわなければならない痛みを知るからこそ。

エカテリーナはそれに耐えられず、たった一言だけ言うど通信を切った。

「リッテンハイム家は…… サビーネ様お一人よ、ヒルダ」

フェザーンに着いてからその二日間、サビーネ・フォン・リッテンハイムは人形のように過ごしていた。

ここしばらくのことが夢のようだ。

父と母と、自分がいたオーディインの暮らしがあまりにもあっけなく暗転した。

宇宙で戦った結果、父は死に、母もそれに続いてしまった。今、自分だけがフェザーンに逃れている。これは現実なのだろうか。

軌道エレベーターから降りたヒルダは、真っ先にそんなサビーネの元へ駆けつける。

リッテンハイム侯とクリステイーネ夫人は、それぞれキフオイザーとレンテンベルクで失われたと知った。たった一人、サビーネだけが残された。

悔やんでも悔やみ切れない！

自分を責めるしかない。ヒルダの失態だった。

やがてヒルダはサビーネの姿を認める。それはのろのろと、虚ろだった。

その心に受けた痛みを思い、ヒルダはさすがに一瞬ためらう。

だが、せめてその悲しみを受け止めなくてはならない。そして、その悲しみの何倍もの幸せで包み、忘れさせてやらなければならない。それがせめて自分の成すべきことなのだ。

ヒルダは少女をしつかり抱きとめる。

今は言葉よりも先に行動だ。挨拶などしている時間は勿体ない。できるだけ面積を取り、触れ合った肌で感情を伝える。

おとなしく人形のようにされるがままになっていたサビーネが突然泣き出した。

その心に負った傷、深いところからの慟哭を、息もできないほど激しく泣くことで表している。

ヒルダはそれをすっぽり包みこむ。

そのまま両腕に強く強く力を込めた。おいおい泣く少女をまるで力で泣き止ますか

のように。

「こんな、こんなことになるなんて。おいたわしいサビーネ様」

両親を突然喪った少女の心を思い、ヒルダもまた大いにもらい泣きしてしまう。

だが、ここでヒルダに凄まじい感情が溢れ出す。

「サビーネ様、私がついております！」

もはや二人の姿はびったり重なり、まるで一人のようだ。サビーネの耳元でヒルダの口が何事かを告げている。

動きは止まったように見えるが、しかし、指先のかすかな震えがヒルダの全身全霊の決意を表わす。

「あなた様の敵は、必ずや私が倒します。全てを跪かせ、銀河帝国をあなた様の足元にひれ伏させてごらんにいれます」

「それは父上と母上も喜ぶこと？」

「そうです、きっと喜ばれます。それがかなった時、キフオイザーとレンテンベルクに花を持って参りましょう」

ヒルダはうかつにも先走り、口に出してしまった言葉に自分を呪った。

それこそ幸せな一家を象徴する言葉だったからだ。

自分は痛めつけられた少女にまたしても過去の幸せを思い出させるといふ仕打ちをしてしまったのか。

しかし、ヒルダが気を回したことを悟ったサビーネから逆に言われた。

「花を…… それはいつも庭から持ってきて、食卓に飾っていたように」

二人で花瓶に飾った花。

リッテンハイム家の食卓に添えられ、クリステイーネ夫人を大いに喜ばせた花。

それはもはや二度と繰り返せない思い出だ。もはや淡い青い過去の一つになってしまった。

楽しい記憶であるはずのそれが、今はどこまでも心を締め付けてやまない。

ヒルダの方こそ耐えられず、それを思つて大泣きに泣いてしまった。

大粒の涙がサビーネへ雫となって降りかかる。

「サビーネ様、そうです。サビーネ様」

「絶対に持つて行きたい。父上と、母上の元に」

サビーネは背中が曲がるほど強く抱きとめられ、顔を上にあげながら、尚も目を閉じ涙を流している。

しかしヒルダはサビーネの震えながらも強く言い切った言葉を聞き、涙の中で大きく

目を開けた。

胸はどこまでも苦しいが、熱い。

幸せな過去に戻れないなら未来を作るしかない。

「このヒルデガルト・フォン・マリーンドルフにお命じ下さい。サビーネ様、一緒に歩み、必ず成し遂げましょう。ここに約束します」

ヒルダの魂の底から発していた。

それは、見えざる炎である。

行く手を阻むものがあれば、何であろうと全て焼き尽くさないではおかない。

## 第八十四話 488年 7月 霸王の道

フレーゲルがラインハルトを討伐するといつて勝手に出撃していく、それを知ったアンスバッハは嘆息するしかない。

もう何度目のわがままなのだろう。

本人は自分なりの理由を持っているのだろうが、そういう問題ではない。

「軍とは、目的に沿った作戦をきちんと検討し、命令系統に従つて動くものだ。費用や補給も考えなくてはいけない。ただ声を掛けて聞こえた範囲の艦を引き連れていく、それでは子供が公園でやる遊びではないか。到底まともな軍とは言えない」

フレーゲルはブラウンシュバイクから将来軍務尚書へ、との約束を得ている。だがそれが何だというのか。今はまだ一介の少将でしかなく、それなら少将のわずかな権限内で動くべきだ。

だがフレーゲルはもはや自分を特別視している。

ブラウンシュバイク公の覚えもめでたき甥ということ、軍に関することなら何でも私物化していいと思つている。

アンスバツハは止むを得ずブラウンシュバイク公に伺いを立てる。フリーゲル本人に何を言っても無駄だからだ。

実はアンスバツハはブラウンシュバイク公私領艦隊を統率する身分であり、正確には帝国軍の所属ではない。

ただし両者の統合が既に始まっている。分裂して弱体化した帝国軍と、数だけが多い私領艦隊の統合は合理的であり、多くの予算をかけたくないブラウンシュバイク公の意向でもある。それならばアンスバツハはフリーゲルのやることに知らぬ存ぜぬを通すわけにもいかない。

そもそも敵であるラインハルトはフリーゲルや帝国軍ではなく、ブラウンシュバイク家を倒しに来るのだ。それなら尚のことアンスバツハが対処すべき問題なのである。

「公爵閣下に申し上げます。ラインハルト・フォン・ローエングラム元帥が公然と敵対し、艦隊を率いてオーディンに近付いています。毎つて勝てるような相手ではありません。元帥自身の力量もさることながら率いる将帥も並大抵ではなく、まさに精鋭中の精鋭です。これと戦うにはよほどの準備と戦術が必要となりますでしょう」

「何だアンスバツハ、あの金髪の孺子のことか。さっさと片付けてしまえ」

「ここが正念場なのです。戦うためには全軍をまとめなければいけません。今、憚りながらフリーゲル男爵閣下が迎撃に出ました。早急に呼び戻し、態勢をしつかり整えてか



ら戦うべきと存じます」

だが、ブラウンシュバイク公の返事は思いもかけず気のないものだった。

「なんだ、フレীগエルがもう戦いに出たと申すのか。ならばアンスバッハ、それでよいではないか」

「いえ、決してうまくいかないだろうと愚考します」

ブラウンシュバイク公もまたフレীগエル同様の考え方をする。法の順守という概念はなく、フレীগエルの勝手を咎める様子もない。

無然とせざるを得ないが、ただしそれはアンスバッハも予測の範囲内だ。伊達にブラウンシュバイク公に長く仕えてきたわけではない。

それでも、自分の意見はしっかりとっておくべきである。

「もう一度申しますが、全戦力をまとめるのです。向こうの艦隊数はおよそ五万から五万五千隻、対してこちらは数だけはその倍近くを集められます。それらを使い、オーディン近くに万全の迎撃態勢を敷けばよいでしょう。向こうはどのみちオーディンへやってくるのですから。万が一にも破れぬよう、大軍を使い二重三重にも罫を構築しておけばよろしいかと」

「そんな必要があるのかアンスバッハ」

やはり、もうブラウンシュバイクはアンズバッハの言うことを聞いてはいなかった。

既に帝国の実権を手に入れたと思ひ、軍事などはもう遠い話だ。いつとき必要があつて関心を向けたが、元からブラウンシュバイクにとっては地位と権力、つまりオーディンの貴族社会が全てなのであり、軍など野蛮な乱暴者がすることだ。ラインハルトのことも眼中にない。

「どのみちフレーゲルが片付けるだろう。もうよい。農は忙しい。このところ立て続けに舞踏会なのでな」

空しくアンズバッハはブラウンシュバイクのいる部屋から出された。扉の外で呟くしかない。

「もう終わりかもしれないな、この家は。時代の流れが分かつていない。もはや爵位や権勢など砂上の楼閣に過ぎないというのに」

アンズバッハがこれからできることは、せいぜいフレーゲルの応援のため今からでも艦隊を進発させることぐらいだ。もしもフレーゲルの艦隊が大損害を受けてしまえばこれからの戦略にとって痛すぎる。

むろん、戦いに間に合うかどうかどうかも分からないし、間に合つてもフレーゲルに感謝などされないのは分かり切っているのだが。

悔しい思いを抱きながら手に持った書類を掴み潰した。

アン斯巴ツハが考える、軍事力を決定的に強化する切り札についてのものだった。すなわち辺境に留まっているメルカツツとファーレンハイトの両名を大将に抜擢し、艦隊指揮を任せるといふ建議書が握られていたのに。

それと同時刻、ゆっくり進行するラインハルトの艦隊に一つの通信がもたらされた。その通信はあまりに短かったが内容の重大さはそれに反比例している。

「グリューネワルト伯爵夫人アンネローゼ、及びヴェストパーレ男爵夫人、無事。オーデインを脱し現在フエザーンにて保護」

もちろん、ラインハルトとキルヒアイスにとってこれ以上ない吉報ではないか。

「ラインハルト様、待ちに待った報告です。本当に良かった」

「はしやぐなキルヒアイス、お前らしくもない」

「ではラインハルト様は、なぜ歩き回っておいでです？」

それはもうじつとしていられない程の喜びなのだ。

この二人にとって帝国軍、すなわちブラウンシュバイク側の艦隊と戦うこと自体に何も不安はない。だが、アンネローゼのことが気がかりでオーデインに急進できなかつた。

「リッテンハイムの艦隊がキフオイザーで負けたと聞いてから、長かったな」

「そうですね、ラインハルト様。とても心配でした。よもやアンネローゼ様が人質にされたりしないかと…… マリーンドルフ嬢がなんとかしてくれるとは思っていたのですが」

二人がブラウンシュバイク側に帰順など考えもしなかったのはヒルダの知恵を信じていたからだ。

自分たちがオーデインにいない以上、アンネローゼの保護はできない。あの時点ではまだ皇帝は崩御しておらず、アンネローゼを連れ出すことはできなかったのだ。ならばアンネローゼのことはオーデインのヒルダに任せるより他にはない。むろん、ヒルダが約束をたがえることはないという確信はある。

しかしそれでも不安は尽きなかったのだ。

アンネローゼこそ何にも代えがたい。他に何を失ってもアンネローゼだけを守る、それは二人にとって言葉通り絶対である。

だが今、アンネローゼは無事、ヒルダからのその通信を受けて心は限りなく軽くなる。もう何も心配なく決戦に挑めることになった。

それは正に絶妙なタイミングだった。

既にフレーゲルの艦隊が近付いていたのだ。フレーゲルは威勢よく大艦隊を引き連れていた。編成や将帥はともかく、数だけ見れば七万隻以上にも及んだ。

それは皇帝の軍だから帝国軍と呼称するのは間違ではないが、内実はブラウンシュバイク家私領艦隊が大半を占める。いや、フレーゲルが勝手にする以上、形の上でも私領艦隊のようなものだ。

対するラインハルトは五万一千隻を擁している。

大艦隊同士、互いに察知し、ふさわしい決戦場を選ぶ。

どちらも自信を持って完勝を企図しているのだ。ならば下手に障害物があつたり狭かつたりする場所は大艦隊戦に適さない。航路上でもやや開けているところが必要である。

その舞台には、有人惑星を持たないながらも帝国航路の主要結節点であるアルテナ星系が選ばれた。

「帝国の禄をはみながら、ここにきて歯向かうとは叛徒にも劣る所業！ 金髪の孺子、言いが逃れができると思うな。恩を仇で返すとはこのことだ。犬にも劣る！」

会戦に先立って威勢よくフレーゲルが啖呵を切る。

通信を申し込み、自分に大義があることをを高らかに示す。それもフレーゲルの好む貴族の美学というものだ。

「よく吠えるな。犬とは貴様の方だフレーゲル。こちらに躰をしてやる義務もなし、そして今さら躰をしても無駄だ。ここを墓場にするため来たのだから、さつさと墓に入れ」

「うるさい！ 言うに事欠いて開き直ったか孺子。かくなる上はこのフレーゲルが皇帝の威をもつて、帝国に逆らう犬畜生を成敗してくれる！」

「せいぜい頑張るのだな。最後まで面倒な奴だ」

ラインハルトは舌戦などする気もない。その必要もない。軽くないただけだ。

その音声を聞くミッターマイヤーやロイエンタールも苦笑する。

ラインハルト以上といつてもいい程二人にとつて因縁あるフレーゲル相手、戦意はもちろん高いのだが、気合いを入れるというよりは楽しいことを待つという表情だ。

この戦いは死闘というほどになるはずがない。

相手が帝国軍でも名のある将、例えばメルカツツなどが率いているならよほど気を引き締めるところだが、フレーゲルなどという門閥貴族の小物が相手とは拍子抜けもいところだ。戦理と戦術をもって戦いを進めれば、勝ちたくななくても勝ってしまうだろう。

そして会戦が始まったのだが、ミッターマイヤー、ロイエンタール共に予想外なほど早く出番が来てしまう。

最終攻勢の局面で指示を受けるくらいだろうと思っていたのに、そうではなくなっている。

「ミッターマイヤー、ロイエンタール、麾下の艦隊を用いて速やかに逆撃に出よ。具体的なところは任せる」

そうなったには理由がある。

当初、ラインハルトの方ではフレীগエルがまとまった陣をつくり、ひたひたと押してくるものと予想していた。

それこそ大軍が危なげなく勝つための常道だからだ。しかもフレীগエルは貴族の優越を信じ切っている。単純に踏み潰す方を選ぶだろう。

ラインハルトはそれに対し、各艦隊の機動力を生かして翻弄すればよいと思っていた。大軍でも切り裂き解体すれば何も恐ろしいことはない。

そして、ラインハルトはそれが可能な力量を持つ提督を何人も持っている。

ところがフレীগエルは全艦隊をいきなり急進させ、突っ込んできたではないか。

もはや編成も何もなくひたすら雪崩れ込んできた。

会戦はただの殴り合いから始まる。

「なるほど、乱戦に持ち込むつもりか。フレーゲルの奴もまるっきりの馬鹿ではなかったのだな。下手な軍事上の常識に捉われない柔軟性があったとは」

「ラインハルト様、乱戦は犠牲は大きくなりますが、数の優位を生かすのに適した戦術でもありますね」

「そうだ。しかし、戦いの序盤から乱戦とは意表を突かれた。この俺が後手に回らされてしまったか。見れば向こうに後詰も予備兵力もあつたものではない。一丸といえは聞こえはいいが、随分とふざけたマネをしてくれる」

「フレーゲル男爵も思い切つた作戦をとつたものです」

ラインハルトとキルヒアイスが嘆息するのには理由がある。

乱戦というのはフレーゲルの最適解かもしれない。もちろん、そうなつてもラインハルトは負ける気は微塵もない。どのみち各艦単位、あるいは小隊単位で見ても圧倒的に強いからだ。ラインハルト麾下の将兵の練度は数段上なのである。

ただし乱戦では勝つてもそれなりの損害を被つてしまう。それが問題となる。

「確かに向こうにとつては一回勝てばそれでいいのだからな」

「そうなのでようね。悔しいですが、勝ち続けなければならぬこちらと違つて犠牲を考慮しなくて済みます」



この会戦に参加している戦力が全てではない。

ざっと計算してもブラウンシュバイクと帝国側には余剰戦力がまだまだあるはずだ。それを考えたならラインハルトの側は痛み分けは許されず、また大損害も受けるわけにいかない。

おまけに短期決戦に終わらなければ、帝国の財貨と生産能力は望めば艦隊を立て直すのに充分である。そんな回復力のある敵を相手にしている。

そして数回会戦を行い、一度でもブラウンシュバイク側が勝てばそれでいい。いや、そこまで至る必要もない。ラインハルトが壊滅せずとも、後退したという事実を作り出せばいい。そうなればラインハルトの不敗神話が崩れ、麾下の将兵は動揺し瓦解するだろう。

歴史上、最初だけ勢いのある叛乱が一回つまずいただけで雲霧消散する例は多い。

まさかあのフリーゲルの思考がそこまでの戦略的深みに及んだというのか。

それだけではなく、二人には別の憂慮がある。

「キルヒアイス、まさかフリーゲルの奴はあれにも気が付いているのだろうか」

「どうでしょう、ラインハルト様。しかし看破されていけば…… 少しばかり苦しくなりますね」

それは物資面のことだ。

元々艦隊数に比べて物資の少ないラインハルト側は、均一な配分をするには足りない。

どうしても集中させて用いる他はない。今、艦隊の右翼左翼に配置しているミッターマイヤーとロイエンタール、及び艦隊中央のラインハルト本隊に物資を優先的に配備してある。しかし後衛のメックリンガーやケンプらには物資を多く回せず、その艦隊は一瞬の局面しか稼働できない状態なのだ。乱戦がそこに及んだら長くは保たない。それを巧妙に隠しているつもりなのに。

そのため、ミッターマイヤーらを序盤で動かし、乱戦を早めに治めようとしたのだ。

実際のところ、ラインハルトもキルヒアイスもフレーゲルを買い被っていた。

フレーゲルは単純にラインハルトを侮るあまり、何も考えず片付けようとしただけの話である。それがたまたま最適解に近かったのだ。

## 第八十五話 488年 7月 一周回つて

ラインハルトの命令を受けたミッターマイヤーとロイエンタールは的確な艦隊運動で対処を開始した。

自由を与えられたら、どちらも力量を最大限に發揮し、期待にたがわぬ将である。決して見た目の混乱に惑わされず、確実に相手に損害を強いていくではないか。

それは構えを作ることもなくやたら刀を振り回す相手に、急所へ一撃を加えるのと同じである。

これがラインハルト側艦隊の大きな利点なのだ。艦隊司令官級の人材が豊富にあり、しかもそれぞれが極めて有能である。他にもワーレン、ルツツ、ビットェンフェルト、メックリンガー、シュタインメッツ、ケンプ、アイゼナツハがいるのだ。いちいち細かい指示を出すこともない。

この乱戦の中にあつてフレーゲルの側は刻一刻と艦数を削られていく。今は元の艦数が多いから目立たないだけで、いずれ破綻する時が来るだろう。

だがしかし、フレーゲルの側でもきちんとしている艦隊がないわけではない。

それはただ一つ、シュターデン中将麾下の艦隊である。

教科書通りの陣を組み、戦理に乗っ取った艦隊運動をする。普通ならそれで十分な指揮であり、事実最初は互角以上の戦いをしてみせた。

ところが、ついにある者がシュターデン艦隊へ目を付けた。

「あれは……なるほど基本をしっかりと押さえてある艦隊のようだ。整然と動き、しかも編成を初期から崩すことなく運用している。おそらくシュターデンの艦隊だろう。そういうええ思い出した。講義室の黒板に書いてあった艦隊運用ではないか」

ミッターマイヤー艦隊がそれと見定めて襲い掛かる。

講義で聞いたような戦術がどれほど有効か、今暴いてみせる。

「教官殿の腕前を拝見といこうか。士官学校では学生同士とやるだけで、教官とシミュレーションはしなかったからな」

そしてその結果は直ぐに表れてくる。

見る者が見ればシュターデンの艦隊運用はかえって行動予測が容易なぶん組し易い。とにかく意外性が無いために、ミッターマイヤーの側では安心して叩いていけるのだ。

結果、シュターデンの方は対処をことごとく読まれ、裏をかかれる。ミッターマイ

ヤーの素早い攻勢に慌てて防御を図ればもうそこにはいない。やっと攻撃を始められると思えば逃げられ、計ったようなタイミングで思わぬ横撃が来る。シュターデンの一万隻がミッターマイヤーの七千隻の前に成すすべがない。

こうしてシュターデンの艦隊を充分に翻弄し、隊形を崩したと見たミッターマイヤーは一気に破つて瓦解させた。正に神速の艦隊運動である。

最後は皮肉で締めくくった。

「講義室の話が実戦で通用するか、お分かり頂けたでしょうか。教官殿」

ラインハルト麾下の諸提督はこのように見事に期待に応えた。

ミッターマイヤーと同じ程度にロイエンタールもまた戦果を上げつつある。ミッターマイヤーほどダイナミックではないが、逆に危なげな局面が一切ない盤石の戦である。その中でも最前列に抜擢されたクナップシュタインの分隊が特筆に値される活躍をした。

乱戦はラインハルト側が制した。危惧していた消耗戦に入るとは避けられそうである。

ここを勝機と見定めたラインハルトは、もう一度各提督の艦隊をまとめ上げると、一

気にフレーゲルの艦隊中心部を狙って突入する。もはや相手はそれを拒める態勢ではない。

防御を突破し、中心部を殲滅すれば戦意を丸ごと刈り取る。それでこの艦隊戦は決着となる。物資面での不安が現実化する前に終わりにできるはずだ。

思う通りに進み、確かに突入攻勢に成功したのだが、ここで不可解なことが起きた。

もう中心部を失ったにもかかわらずフレーゲルの艦隊は瓦解も逃走もしないのだ。通常の軍事行動ではあり得ない。

「何だ、何が起きた…… いったいどういうことだ」

「もしか、これが罠だったのでは。ラインハルト様、いわば囲まれた形になっています」これが作戦であり、今までわざと無様に振る舞って突入を誘ったのか？

ある程度の犠牲を覚悟の、乾坤一擲の策として。

ならば確かに今、ラインハルト側は包囲下にさらされている。敵中心部を破った瞬間逆に死地にいたのだ。思わぬ危機に際しラインハルトもキルヒアイスも表情を引き締める。

「しまった、中心部こそ罠だったとは。フレーゲルのあの道化は芝居とでもいうのか。奴にこんな小細工をしてくる頭があるとは驚きだ」

だがここでラインハルトの覇気が一段と輝きを増す。

「奴の罨など何ほどのものか。食い破るのは決して難しくない。速度を上げて後背に食いつかれないように振り切り、大きく回つてもう一度叩き潰す」

実は罨ではなかった。

最初からフレীগエルは中心部に布陣する本隊にいなかったただけである。何と七万隻という大艦隊の総司令官でありながら思いつきり前線に出ていたのだ。

「あの金髪の孺子はこの手で斃してやる。このフレীগエルの手で」

フレীগエルの行動は軍事行動上からみてあまりに非常識、それがたまたま一周回つてラインハルトの意表を突くものになってしまった。

そして今、遮二無二ラインハルトのところを目指して進む。大艦隊で取り込んだ形のラインハルトに自分の指揮する五千隻の部隊で突進をかける。偶然にも相手の動きを制限した圧倒的に有利な態勢で。

だがフレীগエルの攻勢はメックリンガーに止められた。

メックリンガーは鋭鋒を惑わして鈍らせる。それは実戦的かつ高度な戦理に基づいたものであり、芸術家提督がまた一枚美しい芸術を描き上げた。そこへ横からアイゼナツハが加勢し、攻め立てる。これもまた効率的で容赦がない。

逆にフレーゲルの方が防御陣を失い、絶体絶命になってしまふ。

「ええい、くそ！ 孺子の手下どもが邪魔だてするか！ 他の味方はどうした」

ラインハルト側を大きく囲んでいる味方の艦隊はそのまま包囲を縮めていくだけで良さそうなものだが、指揮系統の乱れのため動きがバラバラになる。包囲は何ら有効にならず、それを食い破りにかかったラインハルトの提督たちに各個撃破される体たらくだ。

しかしその時、またしても戦局が動く。

「新たな艦影発見！ 急速接近中！ 約四万隻！」

ブリュンヒルトのオペレーターが驚きつつそう告げてくる。

「何！ 敵の増援か。なるほど、これが奴の決定戦力というわけか。フレーゲルめ、またしてもやってくれる」

ラインハルトは多少苛立った。

それは主に自分に対してだ。

取るに足りない門閥貴族のフレーゲル、口ばかりで実力などあるはずがないと思つていたフレーゲルが……あの会戦前の下らないおしゃべりの影で高度な戦術を編んでいたとは！



しかも、それは大胆かつ緻密なものだ。ラインハルトの予想をはるかに超えていた。「正直に認めねばなるまい。慢心し、フレーゲルを侮り過ぎた。予備兵力を残さず全て投入してきた段階で思い至るべきだった。時間差をつけた増援の可能性に気付けたらうに」

「そうですね。おそらくこちらの油断を誘い、決定機にのみ使う手筈だったのでしょう」「こちらが疲弊し、あともう少しといったところで無傷の新手を来させる。そのために見えない位置に置いていたとはな」

「ラインハルト様、意外といえませんが、優れた心理戦術です」  
「キルヒアイスも同意する。」

この時期の増援、しかもかなりの艦数というところから策略としか思えない。

「キルヒアイス、悔しいがフレーゲルの策は見事だ。俺は踊らされた」

「これよりいかなさいます、ラインハルト様」

「ただし慌てるほどのことはない。結果的にタイミングとして敵の増援は少しばかり遅かった」

今相手にしているフレーゲルの艦隊はもう組織的な反撃は無理だろう。

ラインハルトはその増援とひとまとめに相手にしても勝てないことはないだろうと踏んだ。

しかしながら士気や艦数はともかく、物資の面において新たに四万隻を相手にするのは多少のリスクをはらむことも理解している。特にメックリンガーなどをもう戦力参加させてしまった以上、万が一物資不足が表面化すればそこから遊兵化してしまう。

「ここまでで充分でしょう、ラインハルト様」

「分かった。フレージェルを倒せることもなく、多くの食い残しが出たのは悔しいが、いったん退くでしょう。不思議なことに敵の増援は攻勢を企図していないようだ。突撃の態勢でもなく、こちらの退路を断つように回り込んでくるわけでもない」

「わたくしには攻勢よりも先に味方の救出を図っているように見えます。前面に機雷を散布しているような気配がありますから、たぶんそうでしょう。向こうにすれば好機でしょうに、不思議なことです。ですがそのために撤退は容易でしょう、ラインハルト様」

アルテナ星域会戦はそれで終結した。

ラインハルト側艦隊と、フレージェル率いるブラウンシユバイク側艦隊との正面決戦だ。

結果から見ればラインハルトの勝利であり、フレージェルの方は大きな損害を被っている。

「遅いではないかアンスバツハ！ なぜもつと早く来なかった！」

あわやという危機から救出されたフレーゲルが応援に来たアンスバツハを罵倒している。

アンスバツハの方は強行軍につぐ強行軍でやつと間に合わせたのに。

それがラインハルトたちが誤解した増援艦隊の真相である。

アンスバツハは最初から果敢な攻勢を諦め、フレーゲルの救出を優先させた。それなのにフレーゲルは敗戦の八つ当たりをしたくてそう言ってくる。

もはやアンスバツハは言い返すことはない。

何を言っても、理屈もどうせ通用しない。

一方、ラインハルトは元々少ない物資が戦いで枯渇寸前の危機にあった。

そこでやむを得ず帝国軍の物資を奪うことを実行する。オーディンに直進することなく、やや寄り道してガルミッシュ要塞を占拠する方を優先させた。

それぐらいしか方法がない。帝国軍ガルミッシュ要塞は航路の要衝に位置する比較的大規模な要塞であり、ある程度物資の集積もある。

それで一息つき、再び艦隊戦が行える態勢ができた。



# 第八十六話 488年 7月 シュターデンのアルバム

敗残の艦隊をまとめてオーデインに戻ったフレীগエルを待っていたのは当然ブラウンシュバイク公の怒声だ。

「何をしておるフレীগエル！ なぜおめおめ帰ってきた。オーデインの騒ぎは全てお前のせいだぞ！」

ブラウンシュバイク公はフレীগエルを激しくなじるが、それには苛立ちに加え不安が混じっている。

先の会戦でフレীগエルがラインハルトに破れたことは、もちろん皇帝の軍が敗れ、権威が失墜することを意味している。ラインハルトより大軍であるのにも関わらず敗れたことがいつそうそれを際立たせた。

軍事力という面でラインハルトを止められなければどうなるのか。

先行き不安のため、帝国の政府機構は麻痺しつつある。

新体制はまだ固まり切っていない。それなのに現在の体制で存在し続けるのか不安があれば機能するはずがない。

おまけに一般庶民レベルではラインハルトの方に人気がある。ブラウンシュバイク派閥のような高位貴族の出身ではなく、平民に近い没落貴族出身ということが大いにプラスとなる。それはブラウンシュバイクの専横に眉をひそめていたことの裏返しだ。

そして面白いことに保守派の貴族や行政に携わる文官にもラインハルトの支持者が多い。それは前皇帝の寵姫の弟だということが、前体制を思い起こさせるためである。ラインハルトからすれば皮肉なことである。

ともあれブラウンシュバイク派閥の跋扈する帝国政治に嫌気がさし、怨嗟の声を漏らしていた人々がここぞとばかりに息を吹き返し、語り合う。

「ブラウンシュバイク公もお終いだ。公の宴は短いものだった」

だがフレーゲルはようやく顔を上げ、屈辱と復讐の表情を見せて言う。

「叔父上、雪辱の機会を与えて下さい。今回の戦いでは単に実力を発揮できないうちに終わっただけ、次こそ必ずや孺子を片付けてきます」

「当たり前だ。とつとと金髪の孺子を始末してこい、フレーゲル」

そんな会話をうすぼんやりと聞きながら、別のことをアン斯巴ツハは考えていた。

戦いでは二万隻以上の艦が失われ、六千隻以上の艦が修復不能の大破を被っている。

その中にシュターデン中将が乗る旗艦が含まれていたのだ。シュターデンは負傷し、そのまま亡くなっている。

アン斯巴ツハはシュターデンのことを悼む気持ちが大きかった。

戦いが終わりがけた時、そのシュターデンの死を知った。そして戦った相手がミッターマイヤーの指揮下の艦隊だったことが分かるとアン斯巴ツハは越権ながらとある通信を送っていたのだ。

「ミッターマイヤー提督、お見事でしたな。ただし一言だけ言わせてもらいますぞ。今あるのはシュターデン中将のおかげであり、中将が堂々たる武人であったことをくれぐれもお忘れあるな」

こんな通信をアン斯巴ツハから受けたミッターマイヤーは初め真意が分からず戸惑うしかなかったが、やがて思い当たることがあり頭を垂れた。

そして戦場を去る直前、肅然と敬礼をとっている。

「シュターデン提督、いや我らが教官殿に感謝を」

そんなミッターマイヤーの変化ぶりにもっと戸惑ったのは配下のバイエルラインやドロイゼンらだ。戦いの最中、あんなにも意気込んでシュターデン中将に向かい、叩き

のめしたのではなかったか。それなのに今は最上級の礼をとっているとは。

しかしとりあえず宇宙の漆黒に向かい、ミッターマイヤーに並んで敬礼をとった。

シュターデンはあつきり斃されたように見える。ただしそれは戦いの結果だけの話だ。

帝国軍人として節を曲げたことは一度もない。

この戦いで明らかに不利な状況になっても逃げなかった。

いやしくも士官学校の教官だったのだ。しかも戦術理論だ。ラインハルトが規格外の強さであることぐらい分かり切っている。この戦いもおそらく負けるだろう思っていた。

実のところラインハルトが士官学校ではなく軍幼年学校出身であったことで、シュターデンとその意味では接点がなく、最初はほとんど意識していなかったものだ。

そのため天才とも認識できなかったが、姉の威光を傘に着た甘ったれとは思わない。異例に早い出世のスピードはともかく、前線で幾度も戦い、生き残ってきたからには実力が無いはずはないからだ。叛徒の側にとつては相手が誰であつても遠慮して手を抜く義務はない。シュターデンは色眼鏡で人を見ることはしないつもりだ。

だが、ある時からシュターデンはラインハルトを決定的に忌避することになる。



かつての第六次イゼルローン攻防戦からだ。ラインハルトがその前哨戦において、奇策を好んで繰り返し返した指揮官だったからである。

自分の考えた戦術を試す、たかがそんなことのために戦略的に意味のない無駄な作戦行動をしていた。そして結局、智将ヤン・ウエンリーの策に敗れ大きな損害を出してしまっている。

それでシュターデンは赦せないほど憤慨した。

その戦いではシュターデンの可愛い士官学校の教え子たちが何人も死んでいる！

「ベルント、なぜ死んだのだ！ 人一倍臆病だったくせに…… フェルス、お前もだ」  
ラインハルトによる、まるで戦術シミュレーションを実戦で行ったような行動のために死んだ。

死は軍人にとって背中合わせである。それでも無駄死にしていはいはずがない。この戦いの結果はことのほかシュターデンに堪えるものだった。

「イゴール、オルベルトも。そしてダンツ、お前はもうすぐ結婚だったはずだ！ 招待状まで送ってきただろうが！」

教官というものは生徒のことを本当に長く覚えていいるものだ。生徒の側から考えるよりもはるかに。

その例に漏れず、いや普通の教官以上にシュターデンもそれぞれの生徒の個性、テストの点、声も顔も覚えている。素直な生徒も、厄介な生徒もいた。みんな覚えている。「そういえばこの学年は戦術シミュレーションさえ怖がつて失禁した者がいたな。しかしそのおかげでシミュレーターが壊れて中断になり、試合は引き分けになった。それが戦術で漏らしたなら凄いと思わず笑ってしまったものだ。シミュレーション実習中に笑ったのはそれが最初で最後だった……」

講義の中でわずか楽しいエピソードも覚えている。

ただし、そんな楽しい思いは直ぐに消え、戦死者名簿を見ては溜息に変わる。

そして、やめるべきと自分で分かっている、どうしてもやめられないことがある。

士官学校の卒業アルバムを取り出し、見てしまう！

そこには生きていた生徒たちの希望に満ちた顔があるのだ。

誰も自分の死など考えていない。好きな女にどう告げようか算段することや、軍に入る前に美味い物を思いつきり食うことや、出世や、親への恩返し、それぞれがそれぞれに将来を夢見ている。

アルバムのところどころに教官シュターデンを囲んで撮っている写真まで残されている。

「お前たちに先に逝って欲しくなかった。この教官泣かせどもが」

こんな思いになるのは分かっており、アルバムなど決して見たくないのに捨てられないのだ。

そこにだけは彼らと共に過ごした時間が残されている。

現実には、彼らの死によりもはや永遠に消えたと同じだ。彼らがいなくなれば、夢や将来もまた失われたことになる。ただしアルバムの写真は消えず、その痕跡だけをただ映している。

何の意味もない。

敢えていえば、シュターデンの心をこんなにも刺し貫くだけなのに。

戦死を聞くとしても涙を落としてしまう。

また一つ、また一つとシュターデンの持つアルバムに、滲みが増えられていくのだ。失われた生徒の数だけ繰り返し、繰り返し。

実はそれがアスターテ会戦でシュターデンがラインハルトに敵対的な態度をとった遠因なのだ。あの軍律に厳しいことで有名なシュターデンが上官ラインハルトの作戦説明に最後まで反対したとは、シュターデンを知る者であればにわかには信じられないだろう。

ただし、逆にアスターテでラインハルトの実力を見せつけられた。正に特等席で。

遊びのような戦術を使って兵を無駄死にさせる者とばかり思っていたが、それは過去のことであり、今のラインハルトはまるで違う。シュターデンは理を重んじる教官として認めなくてはならない。ラインハルトは他の将帥とは次元が異なる。

敵に回せばいずれ敗北する。

それが分かかっていてもシュターデンは軍人として最後の最後まで自己のなせる最善を尽くし、銀河帝国へ忠義を貫いた。そして半ば予定された死を選んで逝った。

シュターデンは気弱そうであり、覇気が見えないから誤解されることが多い。

教官時代は本当に生真面目に職務を果たした。融通が利かないことで一部の生徒から嘲られていることぐらい知っている。

だが生徒のほとんどを占める凡才には基本こそ大事、だからごく一部の天才が用いる奇策ではなく基本だけをしつこいほど叩きこむべき、その固い信念を曲げることはなかった。

それは卒業していった生徒たちが宇宙の戦いで死なないためだ。

誰にも死んでほしくない。

生真面目な教官の顔の裏にはシュターデンなりの深い愛情があった。

この戦いで死ぬ前にシュターデンが言ったことがある。

シュターデンは艦が爆散しての即死ではなく、艦橋に被弾した際に受けた怪我により、治療のいかにもなく死んでいるのだが、その間いくつかの言葉を残している。

「ヴアルハラが近いか。そこは平和で戦術の授業など必要な方がいいが。さて、どんな顔で生徒たちに会おう」

一瞬後、満足の微笑みを浮かべた。そう、自分を敗北に追い込んだのもまさに生徒ではないか。

「最後の相手はミッターマイヤーだったな。敵味方になったのも運命。あの撥ねっ返りが。しかし見事に成長したものだ」

シュターデンはミッターマイヤーについて多くの思い出がある。

決して扱いやすいとはいえない生徒として。

試験を出すと平気で白紙を出してきたこともあるミッターマイヤー。

シュターデンの教えた基本に忠実な生徒を選んで戦術シミュレーションを吹っかけてくるミッターマイヤー。

そして見事勝ち、それみたことかと得意になる、手に負えない異端児ミッターマイヤー。

だがそんなミッターマイヤーであつてもシュターデンにとっては育むべき生徒の一

人だったのである。

憎まれ口を叩く生徒だからといって愛情をかけないはずはない。

その成長を喜ばないはずはない。

もしも戦いでシュターデンが死なずにミッターマイヤーの方が死んだら、むしろシュターデンは嘆いただろう。

そしてミッターマイヤーの載る卒業アルバムを取り出し、深く深く滲みを重ねたに違いない。

最期を迎えたシュターデンの顔は穏やかなものだった。

「皆、そこにいるか…… 待たせて済まなかった」

この時、シュターデンの脳裏に浮かんだのはやはり士官学校だ。

緑の風が吹き抜けるあの場所。

いつも教え子たちのジョークや議論の明るい声が響く場所。

彼らの青春と希望が満ち溢れる場所。

それきり苦しむことなく逝った。

オーデインの書斎にあるシュターデンのアルバムは、これでもう誰も取り出して見る者はいない。

そこに写されている者らの記憶に涙する者はいない。  
役割を完全に終えたのだ。

もう二度と滲みが加わることはない。  
アルバムもまた永遠の安らぎについた。

## 第八十七話 488年 7月 宴の終わり

ともあれブラウンシュバイク公は敗戦に怒り、再びフレーゲルにラインハルト討伐を命じている。

これからの戦いこそ真の決戦だろう。

むろんアンスバッハもできるだけ支援をしなくてはならない。

「そうだフレーゲル、今度はアンスバッハと一緒に向け。そして作戦の指示を仰ぐのだ。その方が確実だろう」

「叔父上！ それはあまりな……」

「よいか、儂の命だ。しかと言ったぞ、フレーゲル、アンスバッハ」

珍しくブラウンシュバイク公が軍事行動に口を出してきた。ラインハルト迎撃のため退出しようとしたフレーゲルに対し、何とアンスバッハの言う事を聞けと喋っている。

もちろんブラウンシュバイク公としてはフレーゲルを重用したい。

だが、アンスバッハの能力も高く買っているのだ。負けられない戦いをするならアン



スバツハを加えた方が確実だろう、そういうまともな判断をしている。

思わぬブラウンシユバイク公の口添えにより、アンスバツハは若干ほつとしていた。逆にフレーゲルの方はブラウンシユバイク公の言うことなので否の言いようもなかったが、屈辱的なことこの上ない。退出してから早速言ってきたこと。

「アンスバツハ、叔父上の言うことなので一緒に艦橋に置いてやるが、作戦には口を出すな」

いかにも上からの口調だが、アンスバツハにとってはいつものことだ。感情的なフレーゲルは意味もなく攻撃してくる。

それよりアンスバツハは言わなければならないことがあるのだ。

「そのことですが、確実な勝算はあるのでしょうか。艦を増やしただけで勝てるとは思えません」

「何！ 二度までも不覚をとるといふのかアンスバツハ。このフレーゲルが金髪の孺子に劣るとも言うのか！」

ここでアンスバツハは最大限下手に出るしかない。自分の持つ腹案を通すためには。「いえ、男爵閣下の実力には疑いはございません。しかしながら向こうが強いのは理由があり、それは優秀な将帥が多いことです。それで実力以上になっているのでしよ

う。しかし、逆にこちらは男爵閣下の手足となる将が少ないと懸念しております。だからせつかくの男爵閣下の優れた実力が発揮されないばかりか、足を引つ張られることに」

「なるほど……アンズバツハ、確かにそうかもしれない。実力があつても発揮されないのなら意味がない。孺子との差はそこだ。そこしかない」

「これではせつかくの実力が生かされず、不測の事態がありえると心配です。そこで男爵閣下に提案があります。辺境星系に留まつているメルカツ提督とファーレンハイト提督を急ぎ呼び寄せ、指揮下に加えるのです。今信頼できる提督はその兩名くらいでしょう」

フレীগエルは一瞬考えた。アンズバツハの言うことは一理も二理もある。

しかし、出てきた言葉はそれを否定するものだった。

「ええい、そんな悠長なことができるか。辺境星系から呼んでくるのでは間に合わず、その間に孺子がオーディンまで来たらどうする。皇帝の権威を守り、ブラウンシュバイクの叔父上の御心をこれ以上騒がせないためには一刻も早く孺子を打ち破るのだ！」

アンズバツハは知らなかったのだ。

フレীগエルはメルカツとファーレンハイトの名声を聞いていないわけではない。

しかしどちらも下級貴族出身ということであつて。その上フレীগエルにとつて

気に入らないことにメルカツツは中将という上官であつたし、ファーレンハイトはフリーゲルと同じ少将であるがゆえに実力を比較され、揶揄されたことも一度や二度ではない。ほとんど全ての場合フリーゲルにとつて全く受け入れられない評価をされた。

そしてフリーゲルは自分の感情を優先する。勝利のために気に入らない者にまで頼むこむなど考えられない。

もはやアンズバツハにできることは何もなかった。

フリーゲルの考えなど透けて見えている。もつと言い方を変えればよかつたのかと後悔したが、やはり同じことだと思ひ返す。

「これほど狭量な者が大艦隊を率いるとは、世に悲劇が尽きることはない。シユターデーン中将は結末を見ることがなく逝つたが、もしかして良かつたのか。こちらは最後まで見届けなくてはならん」

せめて詳細な戦術の検討と戦場設定を行い、少ない勝利の可能性を上げるしかない。

再び衝突の時が来た。

ガルミツシユ要塞の近辺でまたしても大会戦が繰り広げられる。

フレーゲルが早く戦いたかったのでここまで来たのだ。アンスバッハはわずか難色を示したが、結局はそれを了承している。

戦力はラインハルト側が四万七千隻、対するフレーゲルなどのブラウンシュバイク側は何と九万隻の大艦隊を擁している。この九万隻はブラウンシュバイク側にとって動員できる戦力いっぱいなのだ、これで前回以上に数の優位を確保している。

「もはや問答無用、塵となって罪を贖え、金髪の孺子！」

「問答無用とはありがたい。無駄口を聞かなくて済むのだから感謝するぞフレーゲル。そしてお前などと戦うのももう飽きた。三度目がないようここで消えろ。」

フレーゲルはやはり前口上を述べてくる。ラインハルトはそれにあっさり返し、フレーゲルもそれ以上言うことはない。

このときアンスバッハはフレーゲルの元に控えている。

ブラウンシュバイク家私領艦隊の旗艦ベルリンの艦橋にいたので。このベルリンはブラウンシュバイク家の御座船であり、かつてのリッテンハイム家御座船オストマルクをしのぐ豪華さである。

アンスバッハは自分は艦隊を駆つて縦横無尽に動かす能力など持っていないのを理解し、参謀職が本分なのを弁えている。だから分艦隊などに移ることなく、ここベルリンでフレーゲルのやろうとする作戦をなだめすかしつつ改良することに専念する。

そんなアンズバツハの努力により、ブラウンシュバイク側艦隊は全体として落ち着き、破綻するような濃淡を見せない。

「今度は向こうの艦隊にも戦理というものが見えるようだな。フレীগエルにも学習する能力があつたとは意外なことだ。まあ、それくらいの頭はあるか」

「ラインハルト様、先の戦いでも分かる通りフレীগエル男爵相手に油断は禁物です」

「分かった、キルヒアイス、冗談だ」

「それに向こうの戦術はまだ不明です。持久戦となれば難しくなるかもしれません」

「そうだな。敵は数ばかり多いが、こちらの物資を減らすのには役に立つ。最大限効率よく斃していくことにしよう」

ガルミツシユ要塞の物資によって一息ついたが、全体としてラインハルト側の補給物資は完全とはいえない。何も考えず戦えば途中で息切れして、一気に逆転負けを喫する可能性がある。敵がいくら弱いといつても数があれば、物資を消耗するのは当たり前だ。

「よし、今度は徹底して乱戦を避け、こちらから先に仕掛ける。ビットェンフェルトに先陣を任せよう」

そしてラインハルトはオレンジの髪を持つ猛将に短く命令を下す。

「たまには一番いい獲物をやろう。ビッテンフェルト、一撃を加え、あの凶体ばかりでない艦隊の足をすくって転ばせてやれ」

「元帥閣下の命が出た！ 行くぞ、このケーニヒス・ティーゲルに続け！」

ビッテンフェルトは前回の戦いでは活躍の機会がなかった。今、先鋒を命じられて勢い込んでいる。

それが乗り移ったのか、艦隊はすさまじい破壊力を示しながら直線で突き進む。

「進め、撃て、進め、撃て。我が艦隊にはこの二つの言葉しか必要ない！ 今がその時だ！」

ビッテンフェルトの参謀オイゲン准将がそれを真に受ける。

「提督、それではいつ止まるので」

「馬鹿か貴様は。艦が爆散すればそれで止まるではないか」

どこまで冗談なのか本気なのか。その見極めがつかずオイゲンは目を白黒させるしかない。

このビッテンフェルトの突進を見てもアンスバッハは慌てることがない。

「これはかえって好都合、行動限界点までいなしておけばいい。向こうが何か仕掛けて動けば動くほど勝利は近くなる」

アンズバッハはラインハルト側が絶対的に少数であり、物資も不足がちなことを知っている。

確かにラインハルトの艦隊は強く、ともに相手はできないが、この場合は破綻なく保っているだけで必ず優位になる局面が来る。

ところがフレーゲルはとも待っていることができない。

更に今相手の猛攻を受けて精神が無駄に高揚している。

「よし、向こうが攻めるなら攻め返すまでだ。あの小癩な艦隊に集中砲火を浴びせて叩け。そしてこちらにも艦隊を割いて出るぞ。このフレーゲルに続け！」

「しばしお待ちを！ あんな艦隊はもとにもに相手をせず、鋭鋒を避ければいいだけと心得ます。そして戦いはまだ序盤、別動隊の駆使はまだ戦局を見極めませんと」

「うるさい！ 臆病者は引っ込んでおれ」

「フレーゲル男爵、ブラウンシュバイク公のおっしゃられたことをお忘れか。作戦は相談の上と厳命されたものではありませんか！」

フレーゲルは聞く耳を持たない。最初からこうなることは火を見るより明らかだったのだ。

「男爵閣下、翻意なされませ！ 下手な分散は隙を生むだけ、大軍はまとまってこそ意味があるのですぞ！」

二人の戦術構想には大きな隔たりがある。

もちろんアンスバツハの方が堅実で順当だ。

何しろ数で勝るのだ。間合いを保ち、後の先を取れば少なくとも負けない戦いができる。そして引き分けで終わっても何も問題はない。引き分けを繰り返せば、回復力のないラインハルト側の勢いは必ず衰える。すなわち戦略的にこちらの勝ちになるのだ。

そのアンスバツハに比べればフレーゲルの方が浅慮なのだが、見方を変えれば大軍の利点を活かした臨機応変で大胆な戦術ともいえる。

だがこの場合二人の組み合わせが最悪の形で艦隊指揮に出てしまう。

それは二人の性格や相性の問題、つまり偶然だったろうか。いや、そうではなくともな軍としての指揮体系ができていないのが問題であり、構造的なものだ。

アンスバツハの制止を振り切り、フレーゲルは艦隊の半数を割いて出ていった。やや迂回して進み、ラインハルト側の中心部に狙うつもりのようなうまいけば華麗かつダイナミックな戦術になるだろう。



「ぬるいな。そんな動きで何をしたい」

ラインハルトは冷たく言い放つ。

フレীগелの別動隊など動きが遅すぎて無様なものにしか見えない。

「好機が来たな。キルヒアイス、これで終わりにしよう」

「ようやくでございませぬ、ラインハルト様」

「全艦隊、突撃せよ！」

フレীগелの方に目もくれず、半減したブラウンシユバイク側艦隊へ一気に攻勢をかける。

この攻勢は行動限界点に近くなっていたビットェンフェルトの艦隊を救うため、そして同時に持久戦などとらせず決着をつけるためだ。

ミッターマイヤー以下各将もようやく本領を發揮して勇躍する。

「ビットェンフェルトの奴にいいところを持つて行かれるかと思つて心配だった。ここからが本番だ」

その攻勢をアンスバッハは支えきれない。信頼できる中級指揮官はなく、アンスバッハには過大な負荷がかかった。局地的な艦数において互角に持ち込まれた今、ラインハルト側の苛烈な攻勢に耐えられるはずがない。

本当ならアンスバッハは陣をコンパクトに作り替え、決定的に破られる前に後退した

い。じっくりと仕切り直しをしながら相手の疲労を待つのだ。そして隙をうかがい反撃する。それが順当であり勝利の条件だ。

だがそうしたくともできない。

何故なら、大きく後退してしまえばフレーゲルの別動隊を孤立させ、見捨てることになる。普通の陽動ならそういうところは臨機応変にするだろう。しかしフレーゲルは犠牲をものともせず、攻勢に終始するかもしれない。

アン斯巴ツハは粘るしかないのだ。別動隊の退路になる可能性がある以上、機雷を散布して防備することもできず、ひたすら艦列の補充に努める。

しかし、それにも限界がある。

ついに艦隊はバラバラに乱れ、損失が加速度的に増していく。通信には救援要請が相次ぎ、悲鳴がそれに取って代わる。

恐怖に駆られて勝手に逃走する艦さえ出てくる始末だ。もはや組織的抵抗ができないところまで崩され、草食動物のように追い掛け回されるだけの無力な獲物に成り下がる。

「よし、これでいい。次に別動隊の方を片付ける」

ようやくラインハルトらしい戦いができた。

そこへやつとフレーゲルの別動隊が挑みかかってくるが、その前にラインハルトは艦隊を纏め、主砲の充填と斉射用意を命じている。

満を持し、ラインハルトが必殺の攻撃を命じる。

「全艦斉射三連、撃て！」

斉射により、シールドへ複数同時に被弾すれば破られる。たちまちフレーゲルの別動隊に爆散が相次ぎ、光の球が重なりあつて巨大な一つの渦となる。

これほど甚大な被害を受けても、尚もフレーゲルは進もうとした。

「ええい、怯むな！ このまま突撃し、孺子を倒すのだ！ 帝国貴族の誇りを見せつけてくれる！」

だがそれは叶わなかった。

フレーゲルはいきなり倒れた。

艦橋にいた護衛兵たちが後ろから撃つたのだ。巻き添えになつて無駄死にすること恐れての決断である。「俺には妻も子もいる。こんなところで犬死になどごめんだ！」

その様子を見たフレーゲル付きの参謀シューマツハ大佐は慌てた。しかし、そんな護衛兵たちを責められない。自分勝手に、高慢で、自分を特別だと思ひ込んでいるフレーゲルに忠誠心など持ちようもなく、とうに涸れ果てている。

フレーゲルは何も成せずに死んだ。

栄達も名誉も手にできなかつた。

しかも配下である平民から撃たれるというおよそ貴族らしくない不名誉な死に方である。せめて即死だったのが救いだつたのかもしれない。

自らのヒロイズムに酔い、甘い夢を見ながら斃れたのだから。

## 第八十八話 488年 7月 苦闘

この短時間の戦闘でフレーゲルの別動隊も総崩れになる。

注意深く様子を見守り、危機に陥るようならフレーゲルのため無理にでも攻勢に出ようとしたアンスバッハは、それをする前にフレーゲルの死を知った。

そうと分かれば後始末にかかる。無駄な戦闘継続など考えもしない。

「全艦に通達、直ちに撤退だ。逃走経路は各艦個別に決定せよ、つまりバラバラの方向で構わん。再集結は逃げおおせた後でいい。どうせ向こうに追撃してくる余力はないはずだ」

アンスバッハの言う通り、ラインハルト側の追撃はなかった。回復力のないラインハルト側には勝ちをフィにする可能性がある冒険をするゆとりはなかったからだ。

とはいえ、再集結できたブラウンシュバイク側艦艇は多くない。当初の九万隻のうち四万隻もが撃沈もしくは自沈、そして必死の逃走中に故障から失われる艦も多い。

結局残されたのは四万四千隻にしかない。

半数以下になったのだ。アンスバッハの力量により、逃亡や反逆がなかったのがせめてもの救いかもしれない。

敗北してオーディンに戻ったアンスバッハをブラウンシュバイク公は一時間ほど罵倒する。

その中にフレーゲルを悼む言葉はついになかった。

たつたの一言も、である。

フレーゲルは傲慢かつ偏狭ではあってもブラウンシュバイク派閥にこれ以上なく忠実であった。ブラウンシュバイク公に対し、叔父ということで慕ってもいた。

それが見事に使い捨てられたのだ。これをもし知ることができたら何と言っただろう。

そしてブラウンシュバイク公は感情が収まると、今度は恐れがとつてかわった。

艦隊戦で二度までも破れた。

しかも二回目はほぼ全艦隊を繰り出しての討伐なのに返り討ちにされた。今に至つて、ようやくラインハルトの軍事的実力の意味が分かってきたのだ。

権勢や爵位など実力の前には何の役にも立たない。ブラウンシュバイクからすればそれが全てだったのだが、実は砂上の楼閣に過ぎなかった。

おまけに敵はラインハルトだけでも限らない。軍事的敗北のために帝室の權威は有名無実になり、ブラウンシュバイクもいつ寝首を搔かれるか分かったものではない。派閥というのは厄介な面があり、貴族というものはいつでも強い方になびき、裏切りや変節は当たり前だ。

ブラウンシュバイクに不安と焦りが急速に膨れ上がる。

そうなるのと逆に頼りになるのはアン斯巴ツハしかいない。

そのアン斯巴ツハはブラウンシュバイク公の許可を得る前に帝国辺境星系にいるだろうメルカツツとファーレンハイト兩名を確保するべく動いていた。

だが、大いに失望することになる。

わずかな差でもう出奔されていたのだ。

その二人はすっかりブラウンシュバイク家の私物と化し、道理も何もなくなつてしまつた帝国軍を横目に見て、愛想を尽かしていた。体裁はまだ帝国軍ではあつても変質してしまい、かつての帝国軍とは別物である。

メルカツツとファーレンハイトはアスターテ会戦以来の知り合いであり、互いに親しみを覚えている。しかも力量を知り、尊敬さえしていた。確かにメルカツツの近接戦闘

やファアーレンハイトの速攻は余人の及ぶところではない。

今後の身の振り方について相談する。

「メルカツツ提督、我らの皮肉な運命について思う所を忌憚なく聞かせて頂きたい」

「卿も儂も、よほど運命というものに嫌われているようだな」

「ローエングラム元帥府と戦った以上、もうそこに帰参する道はないでしょう」

二人は先に、勝手に辺境艦隊を集めようとしたレンネンキャンプを敗死させている。それはもちろん帝国軍として当然の命令に従っただけだ。しかし、結果としてラインハルトに敵対行動をとったことには変わらない。

「ファアーレンハイトよ、儂は長いこと帝国軍のために働いてきた。今さら賊軍と定められたローエングラム元帥府に降ることはせん。しかしながら帝国軍の方も昔と違う。ブラウンシュバイク家の私領艦隊といつてもいいくらいだ。それに味方することもできん」

「これほどあからさまに私物化されるとは。お飾りの皇帝などあつてなきが如し、ブラウンシュバイクの専横は今後いつそう激しくなるでしょう」

それは一昔前なら極刑にされるほど不敬な言動である。しかしファアーレンハイトは言葉を繕うことなく言い切った。

元々ファアーレンハイトは「食うために軍に入った」と周囲に公然と言い放っているほ



どの人物である。

それは本音でもあり嘘でもある。

辛酸を舐めた貧乏貴族出身として世に拗ねている、その発露なのだ。つまり、信念や愛国心という美しいものを純粹に信じてこれた貴族出身者への当てつけである。

そういう裕福で食うことに何の心配もない人間は簡単に信念を口にする。

自分はそうではない。食うことで精一杯なら美しい信念なんか持てるものか。そんな自分という存在を見る、という意味なのだ。

だが心の中身は違う。

忠誠心の拠り所を誰よりも求めていた。尊敬できる者のために働いて、そして死にたいと願っている。

メルカッツもまたそれに似て、帝国軍に単純な忠誠心を持っているわけではない。軍歴が長いだけファーレンハイトよりむしろ帝国軍内の実情をよく知っていた。

それでもメルカッツは皇帝陛下のためであれば従うという忠誠心を持ち合わせている。ゴールデンバウム王朝皇帝に従う帝国軍の誇りと忠誠は失われていない。

ただし、それは正統な皇帝である。先にエルウィン・ヨーゼフを殺し、そしてクリステイーネ・フォン・リッテンハイムを亡き者にしたブラウンシュバイク家の傀儡に過ぎない皇帝ではない。

「フアーレンハイト、もうこの帝国に居場所はないのかもしれない。副官のシュナイダーとも相談しているところだ」

「では…… やはり亡命ですね。お供します。メルカツツ提督」

二人の出奔を知ったアンスバツハは、その心情もまた理解できた。

それに、多少の羨ましきもあつた。アンスバツハは今もおブラウンシュバイク家に縛られ、忠誠を求められている。その二人のように解き放たれることは最初から望めない籠の鳥である。

しかし、現実的に軍事的實力によつてラインハルト側へ反攻することは不可能になつた。

艦数の上では四万四千隻、ラインハルト側の四万隻ちようどに比べてまだ優位である。

しかし優秀な人材がいなければどうにもならない。

何度戦つたところで同じことだ。

だがまだ方策はある。

今からは政治的経済的に仕掛ければいい。

最初にやらねばならないことは、すっかり捨て鉢になってしまったブラウンシュバイク公を立ち直らせることだ。ブラウンシュバイク公はやがてやってくるだろうラインハルトの艦隊に怯えている。そして、いつ裏切つて暗殺を企むかもしれない貴族にも怯えている。日中から現実逃避の酒浸りだ。

「儂を裏切るつもりだな！ あの子に尻尾を振りおつて、いくら貰う約束をした！」  
周りの貴族にそう言つて怒鳴り散らす。

派閥に長いこと属する忠義の貴族にさえそう言うのだ。これでは心あるものから真つ先にブラウンシュバイク家から離反する。残るのは既得権益にしがみつくしか能のない貴族だけだ。その意味のないおべんちやらがブラウンシュバイクには耳触りよく響く。

権勢を誇つたブラウンシュバイク派閥は急速に瓦解しようとしていた。アンスバツハはそこをなんとかしなくてはならない。

「しつかりなさいませ。戦いはまだこれからではありませんか」

「何だアンスバツハ、まだ孺子を討ち取る方策があるのか」

「残念ながら、早急に討ち取るのは無理かと存じます。ただし、向こうもこちらを易々と攻められないでしょう。我々が宇宙の中心オーデインを人質にとつたようなものである以上、何もできないと存じます。仮にオーデインを爆撃などで破壊すれば文化文明は

失われ、人間は原始時代に逆戻りですから」

「そ、そうか……」

「それでもしも地上戦で制圧しようと思うならば、兵士の数もこちらが圧倒的に有利です。何よりあの方が負けるはずはありません」

「地上戦で、あの方？　そうか、お前が言っているのはオフレッツサーのことか！」

「そうです。オフレッツサー装甲擲弾兵総監閣下、地上戦でこれ以上頼りになる方はおりません」

「なるほど、あ奴がいる限り最後の最後で負けることはない。その通りだアンスバッハ！」

ブラウンシュバイク公はようやく生気を取り戻した。

今二人が言ったのはオフレッツサー装甲擲弾兵総監、肉弾戦で上級大将にまで成り上がった人物のことだ。

その強さは歴代最強、いや人類史上最強と誉れ高く、もはや伝説である。特にゼツフル粒子がある場所での強さは際立っている。敵兵の数もボウガンの雨もものともしない。オフレッツサー専用の重く強靱な戦斧やメイスを目にした敵兵は、それがこの世で見た最後の物体になる。

オフレッツサーの性格も実に都合がいい。

帝室へ単純な忠誠心を持ち、そして反ラインハルトで知られている。ラインハルトなど権力者に姉を差し出し栄達を図った奸臣と思っているからだ。

しかし、残念なことに宇宙で装甲擲弾兵が活躍する場は多くはない。普通は制宙権の確保がそのまま星域の確保につながるからだ。活躍するのは有人惑星での地上戦や要塞争奪戦、あるいは強襲揚陸艇での超接近戦の時に限られてしまう。

そのためオフレッサーは常に戦う場を求めている。

今の情勢がここオーデインを戦場にしような気配に意気軒高であると聞く。

「皇帝陛下の御前に我ら装甲擲弾兵の戦う勇姿を見せん。そして金髪の孺子の首を差し出し、御心を安んじ参らせる。早く来い、孺子！」

ブラウンシュバイク公がここに至って生氣を取り戻し、そしてアンスバッハへ聞く耳を持つてくれたのは喜ばしい。

「お互い手詰まりになり、膠着状態に陥れば、時はこちらに味方します。向こうが破竹の勢いで勝っているからこそ向こうになびく者もいるでしょう。しかし、変化がなくなればそれだけで失望へと変わるものです。それが人の心というものです」

アンスバッハは軍人だ。しかし私領艦隊の将というものは、その性格上純粋な戦いではなく貴族家のことに深く関わっている。アンスバッハもブラウンシュバイク公の執

事や秘書という立場ではないが、長いこと相談役のような形をとっているのだ。また、それができる能力をアンスバツハは持ち合わせている。

「もちろん膠着状態では皇帝の権威は損なわれており、仮にローエングラム元帥が帝国内に独立勢力を構えようと図っているならば、時が経つほど不利になりましょう。しかし幸いなことに向こうはそれを企図せずあくまでオーデインを狙っているものと見ました」

そしてアンスバツハは視野が広く、政治経済を含めた総合的なところで考える。

「まだまだこちらにも反撃のしようがあります。経済的にはオーデインを抑えている方が圧倒的に優位です。資本も工場もそうです。全ての活動の拠点なのですから」

「なるほどアンスバツハ、金と物は確かにこちらにあるな。逆に無いのは艦隊だけだ」

「それに何といつてもこちらが銀河帝国政府という名を持つことは有利です。例えばフェザーンを味方に引き入れるのも妙手かと存じます」

「フェザーンか。信用できぬ輩ではあるが、確かにまとまった勢力はそれくらいかもしれん」

「おそらくそれには大幅な自治権の譲歩が必要でしょうが。フェザーンがこちらに付けば、向こうはどこにいたところで立ち枯れるのみです」

ここから勝てる方策、その糸口が見えてきた。アンスバツハは艦隊を正面決戦に使わず、あくまでオーデインへの航路防備に使う。そして物資も生産力もないラインハルト側を締め上げるのだ。

「艦隊だけで帝国を支配するのは不可能、金があれば長く人は従いません。つまり家に猛獣がいると思えばいいのです。確かに恐るべき事態ですが、やることは一つ、その疲れを待つて捕らえるだけです」

## 第八十九話 488年 7月 会議の行方

一方のフェザーンである。

それでも長く協議が続けられていた。それはルビンスキー家の三人の話し合いから始まっている。

「エカテリン、ルパート、これはいよいよ面白くなってきたな」

「面白がってばかりもいられません、自治領主」

「ルパートよ、これが楽しいと感じられるくらいにならねばならん。変化を楽しめるのはまだ生きている者の特権だ」

「しかしお父様、具体的に帝国は今や分裂状態、フェザーンの経済活動にも支障が出ているのも確かだわ。物価の乱高下、債権の踏み倒し、夜逃げなんかも激増して」

「確かに分裂状態の弊害はある。純粹に経済活動の側面を見ればフェザーンにとって困ったことだ。しかしそれでも面白いではないか。オーディンの帝国政府、それに公然と敵対するローエングラム元帥、右往左往する各領主、こんな混乱が見られるとはな。更にフェザーンの動き一つでどうこれが変わるか」



いつもの水割りを味わいながらアドリアン・ルビンスキーは楽しげだ。

「そのことでお父様、ここフェザンにも人物が集まっていますわ。今後を考えるため、一度皆で会ってみるといふのはどうかしら」

「それでは皆というのを確認しておこうか、エカテリーナ」

「今フェザンに逃れている者は数多くいるけれど、その中でキーとなる人間、ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ、サビーネ・フォン・リッテンハイム、エルフリーデ・フォン・コールラウシユを」

日をおかずしてエカテリーナのセツティングした会談が始まる。

皆は事態の打開を求めており、その突破口になりうる会談に積極的だった。

最初にエカテリーナにとつて驚くことがある。

エルフリーデ・フォン・コールラウシユ、亡きリヒテンラーデ侯の姪にして懐刀、数々の策略を取り仕切っていたと言われる女だ。エカテリーナはその経歴などをもちろん調べていて、その重要さを知り、だからこそ呼んでいる。

しかし、あろうことかその顔に見覚えがあるとは！

かつてミュラーとの水遊びの時に声を掛けてきた女だ。実物を見るまで分からなかったのはその時と化粧がだいぶ違うためだ。あえてそんなことをしていた理由は—

つしか考えられない。すなわち何かの意図があつてエカテリーナを見張る工作活動をしていたということになる。

エルフリーデの方もエカテリーナのそんな心の動きを捉え、軽く会釈でとぼけた。

だがしかし、エルフリーデの側にこそ驚きがあつた！

この場にルビンスキー家の者は三人いるのだが、それに加えてグラスに水割りを作り、アドリアン・ルビンスキーに差し出す四人目の者がいる。

何と、ドミニク・サン・ピエールがまだ存在していたのだ。

とづくに放逐されたと思つていた。利用価値などないはずだ。それがまるでルビンスキー家の一員のように、フェザンの中枢にいるとはエルフリーデの想像の範囲外だった。

そしてついに会議が始まる。人数的には小さな会合ではあるが、人類社会に計り知れない影響をもたらす話し合いだ。

「フェザンとして取りうる方策はいろいろあるでしょうが、その一つとしてこのサビーネ様を擁立しオーディンの現帝国政府に対抗する選択肢を提案いたします」

話の口火を切つたのはヒルダだ。そこから淀みなく話をつないでいる。

「ローエングラム元帥の戦いの終結を待つ必要はありません。どうせ勝つことは決まっ

ていますから。しかしその場合問題になるのは、サビーネ様とローエングラム陣営のきしみでしょう。それについて先手を打つため、サビーネ様の健在をアピールしなくてはなりません。何となればフェザーンでサビーネ様が皇帝に即位し、ここを拠点とした政権を樹立することも考えられます。その場合、仮の名は銀河帝国正統政府とでもなるでしょうか」

冒頭から重大な内容に触れている。

あいまいさなどないきつぱりした発言だ。大胆かつ相手に逃げを許さない。

エカテリーナは本当にヒルダらしいと思った。その点何も変わっていない。

アドリアン・ルビンスキーがグラスを片手に話を受け止める。賛成とも反対とも伺い知れない。

「マリンドルフ嬢の言うことは大変興味深い。要するにフェザーンとして内乱に対する立場を鮮明にせよと言うのだな」

「自治領主様、もちろん、これはフェザーンにとって利益になる提案です。第一に帝国現政権からの干渉を今後受けることがなくなるでしょう。そして第二にフェザーンが政権交代の立役者になることを広く知らしめることは、フェザーンの貢献と実力を示すことでもあります。今後の活動に有利になるのは自明です」

「なるほど、確かにフェザーンのためになりそうな話にまとめてあるな。しかし本当に

そうだろうか。例えば最終的にオーディンがブラウンシュバイク家からリッテンハイム家に変わったところで、フェザーンに対する圧力が変化する保証はない」

ヒルダの言うことも嘘ではなく、正しい。

しかし慌てることはない。そして話の穴を見つけ出すのだ。

「マリーンドルフ嬢、政権を形にするのを急ぐのは別の理由があるのだろう。ローエングラム元帥側との意思疎通が充分ではない印象を受ける」

アドリアン・ルビンスキーはいったん話を別の方向に振り向けた。

「二つの事実をここで明らかにしておこう。実は帝国からも提案が来ている。ラインハルト・フォン・ローエングラムを相手にせず、経済的取引は全て帝国政府側とだけ行う、それをフェザーンが明確に公言せよと。そうすれば今後恒久的な自治を認めるという約束だ。これはフェザーンにとって願ったりかなったり、悲願の達成だ」

この場ではルビンスキー家しか知らない情報である。

それは帝国側からいかにも言っつきそうな魅力的な話である。意図も明白だ。そんなことをされたらブラウンシュバイク側が戦略的に有利になる。

サビーネのことなど見事に無視されている。

もちろんローエングラム元帥のことが片付けば、軍事的実力のないサビーネなど当然

問題にもならない。

ヒルダもしばし思考に入らざるを得なかった。

「ふうん、そんな言葉に意味があるのかしら？」

ここでエルフリーデが斜に構えた発言をする。

「恒久的？ とつても面白いわ。帝国の辞書で恒久的、というのを引けば、きつと動乱が治まるまでと書いてあるのね」

フェザーンにとって例えようもなく魅力的なブラウンシュバイク側の提案、しかしその信憑性など考えるまでもない、と言う。

ブラウンシュバイク公が約束を守るものか。

いったん敵を排除して安泰になれば、フェザーンという美味しい果実をほっておくわけがない。

エルフリーデには分かり切った話である。貴族の考えなど誰よりも知り尽くしているのだ。

それに答えてきたのはルパートだった。

「仰る通り。信用できるかどうかは別問題でしょう。実はフェザーンの見解でも信用できないと結論を出しました。今の帝国政権が不安定かつ短慮であることを思えば、フェ

ザーンの自治が将来危うくなることも予想していません。ですがここで一つ問いますが、フェザーンが中立を保つことこそ最も安全であるのも否定できないのでは。難しい賭けなら最初から賭けない方がいいことはフェザーン人なら誰でも知るところです」

それにはヒルダが否定してよこす。自明のことだ。

「中立はどちらの勢力にも恨みを残すことになり、とうてい賢いやり方とは言えません。どう転んでも確実に復讐を呼ぶだけのことでしよう」

「ではもつと野心的な案もあると指摘します。ローエングラム元帥と帝国政府が争いを続けるよう巧みに誘導し、共倒れしたところを支配下に入れるという案もなかなか思案の妙ですか？」

小出しにして話を組み立て、巧みに会話を取り仕切る。

この様子にアドリアン・ルビンスキーも満足げだ。ルパートは優れた話術を身に付けた。もう自分が先導する必要はなく、子供たちは立派に成長した。

「それは机上の空論でしょう。フェザーンが飲み込むには帝国は大き過ぎます。帝国の統制を崩さず、官僚を有効に使うには当面帝政を保つ他はありません。しかもフェザーンが望むのは混乱しない帝国であって、戦乱により荒廃した帝国ではないはずです。今のところ独立を宣言した星系はありませんが、情勢次第ではどうなるか。仮にそうなれば戦乱は限りなく拡大するでしょう」

「確かにお嬢さんの仰る通り。取り引き相手のいなくなったフェザーンに繁栄はないというのもそうでしょう」

ここでルパートが最大の問題に立ち返る。

「では、話を元に戻しましょう。お嬢さんにお伺いします。自信を持つておいでですが、ローエンングラム元帥が確実に勝てるでしょうか。何を考える上でもそれが大前提になります」

確かにブラウンシュバイク側を倒せるということが出発点だ。これがない限り話に意味がない。

「確かに艦隊戦は問題ないでしょう。ローエンングラム元帥は既に二度も勝ちました。しかし艦隊しか持たない元帥がオーデインを陥とせるでしょうか。そうしなければ現政権の打倒はできません。そして、オーデインには宇宙最強の精鋭地上部隊がいると聞いております。艦隊にいる陸戦隊などではとてもとても」

ラインハルトとキルヒアイスの実力はどれほど声を大にして言ってもいい。ヒルダはそう確信している。

だが同時に人口二十億という巨大なオーデイン、それを相手にする困難さも想像できる。数で来られたら何ができるといえるのだろうか。

そこをルパートに突かれてしまい、しばし口をつくむ。

「うふふ、そこを何とかする策があれば、ローエングラム元帥が勝ち、サビーネ様が即位、そしてフェザンも利益を得る、理想の結末だわね」

明るく声を投げかけ、軽くまとめたのはエルフリーデだ。

皆がそちらを振り向いた。

そんな策が簡単に見つかるとも思えない。エルフリーデは何を言いたいのだろう。

だが今、エルフリーデの胸には、大叔父様リヒテンラーデ侯ならばきつとこう考える、というものがある。

「では何とかいたしましたでしょう。ヒルデガルト様もご一緒に。ついでにルビンスキー家の皆様に一つお願いがあるのですが、よろしいでしょうか」

「それは何だろう、エルフリーデ嬢」

「大したことではありませんわ。少しの間、そのドミニクをお借りしてもよろしい？」

エルフリーデからの突然の指名にドミニク・サン・ピエールは目を見開いた。

なぜ、そんな銀河の戦いに、この自分が……

だが一瞬おいて妖しく笑う。



「私を？ まあ面白いこと。人生のドラマは多過ぎた気もするけど、もう一つくらい重ねても同じかしらね」

素早く頭を巡らせ、ドミニクにはある程度の想像がつく。

自分を指名するということは、エルフリーデが表に出られない仕事を担うということだ。

すなわちエルフリーデの顔を知る貴族を相手に仕掛けることを意味する。

ここまで話を聞いていたエカテリーナがまどめにかかる。

「いい策があるというのね。では、それをやつてもらえばいいわ。オーディンの戦いを有利にするために。でもまだ話は終わっていない。その後、勝利を掴んだリッツテンハイム家が帝国をどうするのか、そしてフェザーンをどう扱うのか、はつきり言ってもらわないと」

フェザーンの立場としてはその通り、当然の要求である。フェザーンの利益の確約が欲しい。それがなければブラウンシュバイク側の提案に乗ると何ら変わりがない。

そしてこの質問に答えられるのはヒルダではない。

代わって答えることはできない。

言うべきなのは他の誰でもなく、リッテンハイム家の生き残り、クリステイーネの子にして皇位継承者サビーネだけなのだ。

「父と母の遺志に従って、皇帝になります」

サビーネの透き通った少女らしい声を通る。

まだ幼い少女であり、政略の難しい話にはついていけず、またヒルダを信頼して任せられている以上それまで黙って話を聞いていた。

しかし今は皇帝候補としての立場で話す時なのだ。

「そこに至るまで助力頂いた全ての者が満足できるような報酬を必ず与えます。もちろんフェザーンとの関係も含めて。今それを約束します」

明確な決意に満ちている。

単なる口約束ではない。真実の約束であることを誰もが信じる、そんな声だ。

そしてサビーネの言葉はそれで終わることなく、結びがあった。

「皇帝になった後、見たこともないような素晴らしい国を作り上げます。悲劇が二度と起こることはなく、帝国もフェザーンも、誰もが幸せに生きられるように」

一同は目を見開いた。

少女が指し示したのは、今問題にしている細かい争いなどではなかった。

見据える先は人類社会の大きな未来だ。

そして同時に威厳の萌芽とも言うべき風を感じ、居住まいを正す。

皆は頭を垂れ、ルビンスキーでさえグラスをテーブルに戻し手を離した。

この小さな少女もまた、あのルドルフ大帝の子孫なのだ。

## 第九十話

488年

7月

## 孤軍奮闘

フェザーンの会議の後、さつそくヒルデガルトはフェザーンから旅立った。

行く先はもちろんラインハルトのところだ。

ヒルダはラインハルトに必ず確認しておくべきことがあった。

先に密約を交わしているが、それが今も有効であること、である。

密約はクリステイーネ・フォン・リッテンハイムを擁立することであり、そのクリステイーネが亡くなっている現在、既に破綻している。しかし、まだその子サビーネが皇位継承権保持者として残されている。

約束を今一度確認して、リッテンハイム家への助力とサビーネの即位を明言してもらわねばならない。

その心配があるのは、クリステイーネが斃されたというだけの理由ではない。

ラインハルトがリッテンハイム家側に立っていることを公にしていない点にある。確かに一時期クリステイーネへの助力を口実にして、麾下の艦隊の崩壊を防ぎ、進軍を始めた。しかし実際の艦隊戦の前後からは何も言っていない。

もはや約束は終わったものとして意に介していない可能性がある。それはどうにもヒルダには不安なことだ。

ラインハルトの旗艦ブリュンヒルトに接舷するのは妨げられなかった。直ちにヒルダは艦橋に上り、ラインハルトに会おうとした。しかし、予想外にも直ぐには許可が下りない。

この時点でヒルダには嫌な予感しかしらない。

ようやく許可を得て謁見するが、そこにはラインハルトの他にキルヒアイスがいるのは予測の内なのだが、それに加えて三人目の者がいた。それは見たことがない痩せた銀髪の将だった。

「フロイラインマリンドルフ。話のおおよその予想はついている。しかしその前に紹介しよう。我が元帥府の参謀、パウル・フォン・オーベルシュタイン中将だ」  
「ヒルデガルト・フォン・マリンドルフと申します。どうぞお見知りおきを」  
礼を持ってヒルダが返す。

この時、不思議なものが見えた。男の両眼に細くて赤い光が走ったのだ。

「失敬。私の眼は義眼で、時々調子が悪くなるのです。話には不都合無いので、どうかお

気になさらず」

言葉の内容よりもその言い方が気になった。オーベルシュタイン中將は悪びれるわけでもなく、開き直るでもなく、丁寧ではあるが感情を感じさせない言い方はまるで自分と関係ない物事のようなのだ。

しかしそんな事を考え続ける時間はない。

ヒルダは率直にラインハルトへ問う。

「では、端的にここへ来た目的を申し上げます。先の約束の確認と、今後の具体的内容の保証についてです」

この質問に答えてきたのはラインハルトではなく、遮るようにその義眼の將が話し出した。ヒルダの言うことを予測し主にその中將が応対するように事前に決めてあったのだろう。

「こちらの陣營とリッテンハイム家が交わした密約については聞き及んでおります。マリンドルフ伯爵令嬢。こちらはそれを遵守、といたいところですが。しかし今となれば既に形骸かと存じます。まことに残念ながら」

その意味するところを知りながらヒルダは反論を始める。

最初にそう返されるくらいは想定内の範囲だ。

「形骸と言われましたが、それが正しいかどうかは主観によりましょう。フェザーンにクリステイーネ様の子、サビーネ様が残っていらつしやいます。血統が絶えていない限り、約束の遵守を求めます」

「ですが密約はあくまでクリステイーネ様に味方、と聞いております。主観と言われればそれまででしょうが、事実は事実、もはやクリステイーネ様がいらつしやらない以上成しようがありますまい。不可能な約束になったのであれば、破棄されたも同然と申し上げます」

「それは否定できません。ただし、繰り返し申し上げますがサビーネ様という皇位継承者が存在する限りいらつしやれば約束は今も生きております。しかも亡きエルウィン・ヨーゼフとは異なり幼児ではなく、自分の判断のできる年齢です」

多少の歩の悪さをヒルダが感じないわけがない。それでも主張すべきところは主張する。

だがそれは直ぐに否定されることになる。やはりラインハルト側はサビーネを立てることをもはや考えていない。戦いでブラウンシュバイクを破り、実権を手に入れたなら帝国を一から刷新するつもりだろうか。

既存のゴールデンバウム王朝の血統も権威も必要ないのだ。

「ご納得は難しいようです。マリーンドルフ嬢。ならば理屈を細かく申しませう。恐れながらサビーネ様は皇位継承者とはいえ、今の皇帝アマリーエ様と争える継承順位ではなく、それを立てるのはメリットとして極小と存じます。せいぜい完全な賊軍ではないといったところで、篡奪者、あるいは賊軍のレッテルを剥がし切るには力不足かと」

ヒルダは痛いところを突かれた。

ブラウンシュバイク家と対等な立場の内乱にできる看板なら意味がある。

そうでなければメリットはない。

サビーネは血統を受け継いでいるが、皇孫にしか過ぎない。

そもそも皇位継承順位で皇女たるアマリーエ・フォン・ブラウンシュバイクとは争うこともできないのだ。加えてもう既にアマリーエが皇帝であるし、賊軍とされたことは事実である。

つまり今さら幼いサビーネを立てても誰も納得しないだろう。継承者争いに手を貸すのではなく明らかにごり押しにしか見えないからだ。

確かにラインハルトからすれば密約は形骸になっている。

しばし言い淀んでいるヒルダにラインハルトから声が掛けられた。

「だがこちらにメリットがなくなっても、約束は約束だ。決して忘れたわけではない。



それに何よりもフロイラインには姉上をオーディンから連れ出してもらった。その巨大な恩義がある。フロイライン、こちらはその遺児サビーネの命を保証し、リッテンハイム家の領地も保全してあげよう。そうすれば内乱前と同様の大貴族でいられる。銀河帝国の7%に及ぶ領地だ。サビーネとやらも何不自由なく暮らせるだろう」

これはラインハルトの親切から出た言葉だ。

約束を反故にすることをラインハルトは決して良しとしない。少年らしい潔癖さの表れである。キルヒアイスとも話し合い、そこまでの譲歩を決めていた。もちろんキルヒアイスも賛成だ。

アンネローゼを救ってもらった恩をやつと返せる。

だが逆に言えば、これがギリギリの線である。帝国を刷新し、無能な門閥貴族を一掃し、ルドルフの血脈を断つのがラインハルトの本来の目的なのだから。

この譲歩を聞いた義眼の男も表情にはつきり出さなくとも不満であるような感じがした。想像だが、事前に相談されていなかったか、相談されていてもこの譲歩について反対なのだろう。帝国貴族の一掃を望んでいると思われる。

ラインハルトの律儀さと親切を感じ、心苦しいながらヒルダは尚も言つてのける。

「ローエンングラム元帥、そのお心遣い、まことにありがとうございます。本心を言えば感謝にたえません。それでもこちらといたしましてはあくまでリッテンハイム家との共闘、

そして皇帝位を手に入れることが密約の骨子であったはずだと申し上げます」

「だがそれならこちらも言うことがある。フロイライン、忘れたわけではあるまい。共闘を図るといふ約束、それが守られたであろうか。それどころかリッテンハイム家の艦隊は勝手に出撃し、自ら敗北を招いたのではないか」

ラインハルトは甘いだけではない。リッテンハイム家が戦いにおいて何ら役に立たず、密約の実が何もなかったことを忘れてはいない。ヒルダが讓歩案に乗ればそこまで言う気はなかったのだろうが、ここに至ればラインハルトも指摘する。

いや、ラインハルトにとってはサビーネの継承権順位などよりもこつちの方が重要なのかも知れない。同じ陣営というならば、やはり轡を並べて戦うことが必要だったのだ。

義眼の将がその話を引き取り、簡潔にまとめる。

「つまり、実際に戦ったのはこちら側だけであり、こちらの実力で勝ってきたという訳です。リッテンハイム家は共闘を待つこともできず、自ら密約を放棄したと言つても過言ではありません。今さら約束の遵守を言い立てることができるものかと。それで分かり頂けたでしょうか。まだ否定できる言葉をお持ちなら伺いましょう」

これもまたヒルダへの痛打になった。

否定できない事実だからだ。こちらが先に約束を守らなかつた。戦いで物を言った

のはラインハルトの実力だけである。

もはやヒルダは外堀内堀ともに埋められている。

しかもラインハルトとは違い、この義眼の男に感情面での揺さぶりは通用しないように思われた。ヒルダの交渉相手としては相性が悪く、手強い。

「否定の言葉はありません。密約は結果的におっしやる通りになりました」

だが、それでもヒルダは反撃をしなくてはならない。

サビーネを皇帝にする、その道をなんとかしても開くのだ。綱渡りでもなんでもいい。そこに至る道筋を絶やすわけにはいかない。

ここでヒルダは最後のカードを切る！

それはリッテンハイム家の側も勝利に貢献、いやそれ以上に勝利に必須であったとラインハルト側に認めさせることである。

このカードを最大限有効にするためヒルダは弁舌をふるう。

「ですが、本当に結果が見えているのでしょうか。未だ勝利は確定していないのではあ

りませんか。オーデインに皇帝アマリーエがおられ、帝国は何も変わっていません。ならば密約は決して過去のものではありません」

「フロイラインマリンドルフ。今さら我が艦隊の勝利を疑うのか。既に決戦に勝利した。いったい何を見てきたというのだ」

「わたくしは事実を申し上げました。オーデインを陥落させたわけではございません。首都オーデインにある玉座を手に入れ、支配権を握った時こそ初めて勝利と言えるのではないのでしょうか」

それには義眼の男が淡々と答える。

「確かにその理屈自体は認めるとします。ですがもう艦隊を妨げるものは存在せず、いずれオーデインも陥落させられるでしょう」

「いずれとはいつになるでしょう。短時間にオーデイン攻略ができませんでしょう。しかも、この艦隊の物資が切れる前に。失礼ながら物資が万全ではない以上、困難を極めると予想します。ここの艦隊将兵はざっと五百万人も数がいるでしょうから、陸戦隊もそれなりの数と推察します。しかし、オーデインには二十億の民がいるのです」

確かにラインハルトは艦隊戦では完勝した。

そしてオーデインには防空衛星のようなものもない。いくらアンズバッハが残存艦

隊を使つて妨害しても、それを撥ね退け、制宙権を取つて包囲するまでは可能だろう。

しかしながらブラウンシュバイク側が降伏せず、徹底抗戦されたらどうなるか。

むろん地上戦になつてしまふ。

どれほどの血が流れることか、決して少ないものであるはずがない。

古来より惑星一つを地上戦で完全制圧など絵空事で、軍事上の禁忌である。

仮に皇帝アマリーエが激を飛ばし、将兵を立ち上がらせれば、ラインハルトは単なる言葉上の賊などではない。二十億の民の怨敵となる。その後の治世がどれほど困難になることか。

おまけにヒルダは指摘した。

ラインハルトの側には経済活動はなく、物資の生産などない。艦隊の物資を今のところなんとかやりくりしているが、消耗していくだけである。要するに維持するだけでもタイムリミットが存在するのだ。もしも安定的に調達しようと思えば、むしろオーディンを諦めてどこかの裕福な領地を占領し、独立する他はない。それは戦略の大転換であり非現実的である。

義眼の将も否定はできず、率直に認めた。

「困難さがあることもご指摘の通りかと。ですがその不利をわざわざ言い立てるとは、

実りなき議論になるだけでしょ」

「話は先にあります。改めて申し上げます。オーディンでの戦いこそわたくしどもリッテンハイム家の出番となります。ローエングラム元帥、はつきり申し上げます。リッテンハイム家との共闘が勝利に不可欠であったと認めてもらうため、わたくしどもがオーディンを陥落させてごらんにいれましょう」

表情に出さないだけで義眼の将も驚いたようだ。むろん、ラインハルトの方は驚きを隠しもしない。

「何、何だと！ フロイラインマリンドルフ、そんなことが可能だとしても言うのか！ にわかには信じがたい。今となつてはリッテンハイム家に戦力など無きに等しいではないか」

実際はリッテンハイム私領艦隊の残存艦がフェザーンに逃れている場合が多く、一万隻、いや一万五千隻は存在する。だがヒルダはもちろんそんなものを使う気はない。

「いいえ、こちらにも実力はあります。元帥におかれましてはしばらくここに留まり、オーディンに近付かず結果をお待ち下さい。その間の物資のことについては、元帥が気を遣うことはありません。多少の物資であればフェザーンから融通してもらえる約束を取り付けてあります。フェザーンがサビーネ様を見込んでのことです。これもまた、リッテンハイム家から元帥への手土産だとお考え下さい」

そしてヒルダは念を押すように強く言い切った。

「わたくしどもの成果をしっかりと見て頂き、約束を思い出してもらえれば幸いです。  
ローエングラム元帥」

もう後には引けない。

実のところ計略は既に動き出していたのだ。

綿密な打ち合わせの後、ドミニクがオーデインに潜入している。

その一方、エルフリーデはブラウンシュバイク公に連なる貴族の一人、シャイド男爵なるものに目を付けている。その者はブラウンシュバイク領の星系一つを任せられ、未だオーデインには来ずにとどまっていたからだ。

エルフリーデが計略のため赴いたのは、そのシャイド男爵の治めるちつぽけな開拓途上惑星だった。

その惑星の名は、ヴェスターラントという。

## 第九十一話 488年 8月 大それた罊

会談は最後に驚くべき言葉で終わった。

オーデインを陥落させてみせるというのだ。それをラインハルトらに明言したヒルダはブリュンヒルトを後にする。

もちろんそこからラインハルトらは話し合う。

「あの嬢の言う通りだ。オーデインを陥とすのは困難を極める」

実はヒルダに改めて言われるまでもなく分かっている。オーデインで地上戦など余りにも悪手、どんなに困難なことか。

しかし、ブラウンシュバイクの握る帝国政府を倒す最後の一手をきっちり詰めないことには、これまで艦隊戦を勝ってきたことに全く意味がなくなる。

オーデインを何としても攻略するのだ。だが、どうやって。

「ラインハルト様、オーデインは決して破壊してはならないものです。市街を守り、臣民に被害を与えないために艦からの砲撃や爆撃はできません。もちろん艦載機も大気圏内で使えません。自ずと地上戦が必至になります。これまでのようにはいかないで



しよう。何といつてもオーデインには装甲擲弾兵総監、オフレツサー上級大将がおります」

「あの石器時代の原始人か。キルヒアイスも俺も奴と二対一では逃げるしかないだろうな。いや、二対一でも俺は逃げる」

「わたくしも逃げます。ラインハルト様」

二人の顔に思わず笑みが入った。しかし、それは現実であつて冗談では済まない。オフレツサーと戦う地上戦は論外である。

「オーデインを決して破壊せず、か。もし絵の一枚でも燃えたらメックリングーは軍を辞めて贖罪のために絵描きに専念するに違いない」

さすがにこれは冗談の範囲内だ。

そんな二人の会話にオーベルシュタインが割つて入る。

「恐れながら申し上げます。オーデインを地上戦で力押しにするのは愚の骨頂。ならば内部分裂に持ち込むのが上策でしょう。おそらくマリィンドルフ嬢もそれを狙っているはず」

「それは確かに言う通りだが、何か方法があるのかオーベルシュタイン。オーデインに叛乱を起こさせる謀略を仕掛けるのか。今さらこちらと結ぶ貴族を作り、組織化するの

は時間もかかり、また下手な貴族を使つたのでは後顧の憂いを残すぞ」

「そのような迂遠な方法を取るまでもありません。別の方法がございます。残念ながらオーデインを全く破壊しない方法ではありませんが」

「ほう、その方法とは何だろう」

ラインハルトは少し興味を持つ。そんな方法があるなら重畳、わざわざヒルダの策の成就を待つまでもない。

「閣下、最小の労力で最大の効果が得られます。すなわちオーデインのどこかを選び、空爆を敢行するのです」

「そんなことか。しかし地下に退避されたら意味がない。それなりの退避施設を作っていることだろう。しかもブラウンシュバイクをピンポイントで狙うには、どこにいるか確実な情報が必要だ」

「閣下、ブラウンシュバイク公を狙うと申しておらず。必要ありません。オーデインのどこか、と申し上げます。この攻撃は通常のものではなく、核攻撃を使用します」

「何！ 何を言っているのか分かつているのかオーベルシュタイン。それは禁忌のはずだ！」

これにはラインハルトもキルヒアイスも驚かざるを得ない。

惑星表面に対する核攻撃！

これは威力もさることながら、まさに非人道的な虐殺になる。恐ろしいことだ。人命を人命とも思わぬゴールデンバウム王朝でさえ、それを禁忌としたのだ。叛徒との戦争でもそんなことをした記憶はない。

「禁忌を破るから効果的なのです。この先はどうなるのかという恐怖によって混乱するのは必定でございます。オーディンは人口が多いただけにいったん統制がとれなくなれば崩壊するばかりでしょう。何も手を下さずともノイエ・サンスーシーは暴徒の波に飲まれ、後は頃合いを見て降下し、ブラウンシュバイク公も皇帝も始末するまで。もちろん暴徒によって死んでいればこれ以上望ましいことはありません」

「そんなことで人が従うのか！ 事が終わった後でどんな申し開きができるというのだ。オーディンを核攻撃した支配者が赦されると思うか！」

確かにこの方法を使えば、オーベルシュタインの言う通りのことになるだろう。惑星中の騒乱はとどまることを知らず、帝室保護もままならないだろう。

しかし、それは地獄を作り出してこそだ。

「その後のことはご心配には及びません。すみやかに国庫を開いて金品を恵み、善政を施けば誰も記憶には残しません。死んだものに口はなく、生きている者の記憶は簡単に塗り替えられます。少なくとも数十年も続くものではございません」

死人に口なし。

もちろんラインハルトが帝国の支配者にふさわしい善政を施くのが前提ではあるが、なんという恐るべき手段だろうか。

「加えて申し開きはいとも簡単でしょう。ブラウンシュバイク公を早く退場させ、戦乱による犠牲を減らすため断腸の思いで決行したやむを得ない核攻撃だった、と喧伝するだけのことです。しかもその大義は事実なのでから」

「オーベルシュタイン、残念だがその策が有効なのは認めるとしよう。それは策を考えてくれた卿への褒美だ。だが言っておく。その方策は決してとらない」

「閣下、では手詰まりになり、地上戦で予想される損害は時間が経つほど増加する計算になります。核攻撃の損害など比較にならないほどに」

「……いや、オーベルシュタイン、待つのも一つの手法。確たる自信があるわけではないが、待ってみよう。あのマリンドルフ嬢のやりようを見るのも面白いではないか」

ラインハルトはその策を検討することもなく却下した。

その様子を見てキルヒアイスはいっそう微笑む。自分のラインハルト様は焦土作戦の結果を知り、成長された。

民を慈しむことなくして善政はない。効率で人の命を測ることはできないのだ。

一方、ヴェスタールアントに降り立ったエルフリーデは得意の工作活動を開始する。

ヴェスタールアントはブラウンシュバイク領の末端にあるちつぽけな惑星だ。

ヴェスタールアント  
正に西方の地である。

一応居住可能な大気を保てる適度な重力を持ち、熱環境や地殻も安定しているため開拓されているが、鉱物資源は乏しく、何より水が少なかつた。点在するオアシスで細々と農業を営む以外の産業は育っていない。工業を興そうにもそれには農業以上に水を要するからだ。もちろん人口も多いはずはなく二百万人ほどしかない。

この貧しい開拓惑星をブラウンシュバイク公の代理として治めていたのは甥のシャイド男爵だつた。

シャイド男爵というのは典型的な門閥貴族であり、貴族の優越を頭から信じ、領民に何の遠慮もない。それに平素からこんな田舎惑星に住むことに対して不満がある。自分だつてオーデインの社交界に出て、舞踏会で貴族令嬢と踊りたいのだ。

結果、憂さ晴らしとして領民に必要以上の重税を課し、蓄財することを趣味にしていた。領民は苦しみ、開拓は遅々として進まなくなるといふ悪循環である。本当にぎりぎりの生活を強いられ、領主シャイド男爵に対し怨嗟の声を漏らすしかない。救いがたいことにこういつた惑星は少なくはない、というより普通に存在する。

こんな下地がある以上、エルフリーデが領民に叛乱を起こさせるのはいとも容易いこ

とだった。いや、工作の必要すらなかったかもしれない。

ラインハルトの艦隊がここに進軍、という噂を流せばいい。

ついでにエルフリーデが表に出なくて済むよう、叛乱のオピニオンリーダーになりそうな活発で見栄えのいい少女を調査して選んだ。

直ぐにエルフリーデはその少女に偶然を装って近付き、ある考えを吹き込む。

「あの方を頼りましょう。ローエンングラム元帥を」

それで充分だ。

領民は吹き込まれた考えをあたかも自分たちで考えた名案のように思う。

自分たちのような平民に近いラインハルトならば、きつとこの辛い生活を理解してなんとかしてくれる、傲慢な貴族による搾取をどうにかしてくれる。そんな気体である。

ついに蜂起した。ブラウンシュバイク家の領地から脱し、ラインハルトの保護下に移ろうと実行に移したのだ。

シャイド男爵は領主として当然叛乱を抑えようとしたが、直ぐに無理を悟って逃走にかかった。

いったん事を起こした領民たちは決死の覚悟をもって戦っている。叛乱には、その理由の如何に関わらず重罰をもって対処するのが、ブラウンシュバイク家のみならず銀河帝国の掟なのだ。それでもやるからには叛乱を起こす側には覚悟がある。

シャイド男爵の方にとことん対峙する根性などありはしない。

逆に言えば、平民の村を見せしめに全滅させるとか、首謀者を虐殺するなどの無慈悲なことは考えなかった。一応領主として装甲車両やロケット弾などの兵器は持っていたのだ。しかしそれを鋤や鍬、せいぜい小火器しか持っていない民衆に撃ち込むことはせず、放棄している。

そこまでの悪人ではなかったからこそ逃げる方を選んだ。

エルフリーデはシャイド男爵が無事に脱出できるように手を打った。逃走路を確保し、それとなく誘導する。領民の集まっている場所を避けながら宇宙港に辿り着けるように。

死なれてしまつては困るのだ。

領民の目を免れ、生きて惑星を出られるようにしなくては。

そしてシャイド男爵を罠に追いやらねばならない。

それは宇宙に浮かぶ巨大な要塞だ。帝国軍でイゼルローンに次ぐ規模を誇る大要塞、ガイエスブルクである。

この要塞は単なる物資の集積や、艦隊停泊、修理のためのものではない。帝国内の貴族が内乱を起こそうという気持ちそのものを刈り取り、未然に防ぐことを企図して作ら

れた。そのため貴族私領の入り組んだ結節点に置かれている。

何より帝国軍の威信を目に見える形で示すために必要以上の大きさと力をもった要塞だ。

特に要塞主砲ガイエスハーケンの威力は凄まじく、絶対の防衛力を備えている。ラインハルトも防衛力の薄いガルミツシュ要塞は襲ったが、ガイエスブルクを攻略して物資を奪うことは選択肢にも入れなかった。イゼルローン要塞ほどの規模ではないが、数万隻の艦隊を退ける力がある。というよりガイエスブルク要塞建造のノウハウを使い、スケールアップして作られたのがイゼルローン要塞なのである。

ただし場所はオーデインと離れているため、アン斯巴ツハも戦略的使用は考えていない。単純に防備だけさせているに留めている。ラインハルトの方も攻略対象にするのではなく放置の構えだ。

そこでうまくシャイド男爵に暗示のように一つのアイデアを入れる。

「叛乱の鎮圧もかなわず、行くところがない。オーデインへ向かっても運悪くローエングラム元帥の艦隊と出会えば一巻の終わり、捕らえられて処刑を待つのみだ。安全な場所、どんなことがあっても艦隊を退けられる要塞しかない。幸いにもガイエスブルク要塞は皇帝に従う帝国軍の勢力圏内にある。そこに逃げこめば大丈夫だ」

こうしてシャイド男爵は一路ガイエスブルクを目指した。



そこをタイミングよく、艦隊が待ち構えている。

リッテンハイム家残存艦隊である。ヒルダが遺児サビーネの名代としてそれらを引き連れていたのだ。

そしてシャイド男爵をわざと緩慢に追尾にかかると。

「シャイド男爵の艦と距離を保ち、時折撃ちかけて下さい。しかし決して当ててはいけません」

もちろんシャイド男爵の側では驚き慌てる。

「な、何だ！ リッテンハイム家の艦隊だ?! とにかく逃げなくては！ 早くガイエスブルクへ」

艦隊戦の経験などないシャイド男爵は、相手艦隊の砲撃が意図的に外されていることなど分からない。必死で逃げ、いや意図的に逃げ切らせてガイエスブルク要塞に入らせた。

「要塞に向かって盛大に無駄な攻撃をします。その後、反撃を食らう前にすみやかに撤退して下さい」

艦隊指揮というほどのものではなく、そんな命令を下すだけなら経験のないヒルダでもできる。苦勞といえ、相手のシャイド男爵がブラウンシュバイク公の縁者だと知る

艦長たちが復讐を考えるのを抑え、命令を徹底させることくらいだ。

ガイエスブルク要塞の方では領民の叛乱にあつた貴族が逃げてきたのだ。

それもブラウンシュバイク公の甥であるシャイド男爵である。これを保護するのは当然のことだ。

そしてヒルダと艦隊は退いた。目的は達成した。

「これでいいわ。あとはオーティンね」

ヒルダは艦の窓を通して漆黒を見る。

そこは虚無だ。

しかし本当にそうだろうか。

目に見えないだけで、宇宙は陰謀の糸が渦巻いている。

## 第九十二話 488年 8月 籠の鳥

一方、オーデインでの工作も進んでいた。

貴族の社交界でエルフリーデはほぼ無名だとはいえ、それでも顔を知られ過ぎていてる。

そこで、工作活動をするのはドミニク・サン・ピエールだ。

フェザン人と違ってオーデインにも明るい。工作活動にはうってつけだ。

先ずはオーデインにとある噂を流す。

「ローエングラム元帥はあくまでブラウンシュバイク家と対決するつもりだ。その専横を赦さず、妥協をせず戦いぬく。もちろん心優しい元帥はオーデインを破壊したくない。だがそれでも穏便に済まない場合、オーデインを戦場にせざるを得ない。早く脱出しなないと火の海に飲まれることになる」

これで人心の不安を煽るのだ。予想通りの混乱がいたるところに見られた。

しかしブラウンシュバイクの側では対抗してアンスバッハもまた人心の掌握に力を注いでいる。

先の噂が自然に口に昇ったのか、何者かが策謀として広めているのか、確証はない。だがここで反論しておかなくては統制がとれなくなる。

「銀河帝国は五百年続いてきた。その間、いろいろな政変があつた。しかし帝都オーデインは保たれ、王朝は途切れることなく続いている。この事実と伝統を思い出せ。今回のことも何ほどでもない。逆賊はいずれ討伐され、皇帝のおわすオーデインは再び安寧を取り戻す。いつときの混乱など過去何度もあつたことではないか。そのとき右往左往した者は皆後で恥をかいた。その例にならつてはならない」

さすがに上手い火消しだ。

もう一つ、アンスバツハは手立てを打つ。オフレッツサー以下の装甲擲弾兵をノイエ・サンスーシーに集合させ、そこを臨時の拠点とさせた。

そして皇帝の閲兵を演出したのである。皇帝直々の声による出動という形を取り、異例の市街地巡回をさせた。足並みを揃え、街を闊歩する装甲擲弾兵の勇姿は人心を落着かせるのにこれ以上ない効果があつた。

ドミニクとアンスバツハはお互い、先ずは宣伝戦で火花を散らす。

ただしそれは単なる地ならしであつてドミニクの主な任務ではない。

次にドミニクはエルフリーデの指示に従つたとある貴族家に接近する。

狙った貴族はあまり目立たないが古くからブラウンシユバイク派閥の貴族として知られたヒルデスハイム伯爵だった。

巧みに焚きつけていく。

「オーデインはもうお終いだ。先に流れた噂はオーデインの破滅を貴族のせいにしたいうローエンングラム元帥の策略であり、責任をブラウンシユバイク派閥貴族の罪へすり替える悪辣なものだ。そしてもうオーデインへ空爆を行うことを決めている。ローエンングラム元帥はオーデインに巣くう貴族社会そのものを憎んでいるからだ。空爆によって死の星にするのも厭わないだろう」

そして、ちようどうまい具合にヒルデスハイム家に高速の宇宙船が手に入る。

商人が最後の一台だといって売り込んできたのだ。それはいかにもオーデインを脱出して下さいと言わんばかりのものだが、本人には気が付かない。

少し考えれば有り得ないことだと分かったろう。もちろん、ドミニクの差し金である。

ヒルデスハイム伯はさつそくオーデインを出ることを考えるが、問題は行き先だ。領地に行つても安全とは到底いえない。

そこで、ドミニクが格好の逃げ場所を吹き込んだ。

「安全な場所がまだ残っている。ついこの前、シャイド男爵がガイエスブルク要塞に逃

げ込んだ。今の帝国軍が持つ最大の要塞、難攻不落のガイエスブルク、そこだけは大丈夫、いかに戦上手のローエングラム元帥でも手が届かない」

これだけお膳立てすればもう充分である。思い通り、ヒルデスハイム伯爵は家財をまとめて逃げ出す算段をつける。

ここぞとどめだ。

「ローエングラム元帥は物資の関係でオーディン進軍ができないでいる。しかし、それをもまもなく解決がつく。フェザーンが密かに物資の融通を決めたからだ。日を置かずして進発し、オーディンを艦隊で囲むだろう」

これは隠しようもない事実である。

ヒルデスハイム伯爵は今のうちだと慌てて出立し、そしてシャイド男爵同様ガイエスブルクに辿り着くことができた。

頃合いを見計らってまたドミニクはオーディンで噂を流す。どこにどういふ話を流せば瞬く間に広まるか、そして火元を分らないようにできるかはエルフリーデがよく知っている。だいたいにしてそれは亡きリヒテンラーデ侯が確立したものだ。

「ブラウンシュバイク公はもうローエングラム元帥と手を打っている。もう強硬派筆頭のフレীগエル男爵はいない。ブラウンシュバイク公はほとんどの貴族をオーディンこ

とローエングラム元帥に売り渡す密約を交わした。代わりに自分だけは逃げられる手筈を整えている。先に腹心ヒルデスハイム伯爵が出奔したのは、実は露払いのために出したのだ」

オーデインの貴族社会は一気に疑心暗鬼に陥った。

各自がバラバラに生き残りを考え、もはや機能不全だ。

その噂と、貴族たちの動揺を知ったブラウンシュバイク公はアンスバッハに問う。

「アンスバッハ、もうこうなれば噂通りに配下の者を孺子に売り渡し、なんとか折り合いをつけられんか」

とうてい派閥の長とは思われない。責任感も矜持も何もない発言だ。

その弱気な言葉にアンスバッハも驚き呆れる。

「閣下、何ということをおっしゃいますか！ 今、帝国全ての臣民を背負って立っているのですぞ。政治を動かし、多くの人間の運命を変えられるお立場なのです。上に立つ者の矜持をお持ちなされ。皆が動揺しているのならば尚更どっしり構え、安心させてやらねばなりません」

「儂の命がかかっておる時に下々のことなど考えておられるか！」

「公は長く派閥の長にありました。少なくともその責務があるではありませんか。忠義の者も未だ多くおります」

「責務か。どうでもいいわ！ そんなことを考えていてはリッテンハイムの二の舞だ。アンスバツハ、儂はそんな末路はごめんだ」

危機だからこそその性根が露わになるのだ。

ブラウンシュバイク公は責務を最後まで放棄しなかったリッテンハイム侯とは違う。派閥というものは自分へ奉仕するために存在するものと思っっている。アンスバツハはそれについての問答をすることは無駄だと理解した。

「しかし、その噂こそ出所が怪しいものです。自然に出たものではなくおそらく向こうの策略でしょう。ラングめに命じ、調査を強化いたします」

今さらどうしようもないかもしれないと思いつつもアンスバツハはすべきことをするしかない。

だがブラウンシュバイク公はもはやそれを聞いてもいなかった。

「そうだ、アマーリエや娘を取引材料にはできんか。ローエングラム元帥と婚姻という手もあるな……」

尚も一人で非現実的なことを呟いている。

その後、ブラウンシュバイク公はガイエスブルクに通信することを思い立つ。ヒルデスハイム伯爵の真意を問いただすためだ。



「ヒルデスハイム、その方は儂を裏切つてオーディンを脱出したのか。どうなんだ」  
「あ、いえ、公爵様、決してそのようなことは」

ブラウンシュバイクの重い声に縮み上がる。ヒルデスハイムは苦しい立場に立たされた。根が殊の外小心なヒルデスハイムは派閥の首領ブラウンシュバイク公の怒気に委縮するばかりだ。実際自分だけが助かるためにした行動なので咄嗟に言い訳も思いつかない。

「行動が示しておるわ。自分だけオーディンを逃げ出したではないか。世間では露払いだの申しておるが、そうさせた覚えはない。まさか儂の物覚えが悪くて、儂だけが忘れたのか」

ヒルデスハイムは目を躍らせながら必死に言い逃れの言葉を探す。

「いえ、そんな、滅相もない。実は少し相談が遅れただけで、このガイエスブルク要塞は難攻不落、その詳細を確認すべく先に来た次第で」

途中からヒルデスハイムは自分の思い付きの言葉に酔い、いかにも素晴らしいアイデアを持つていたかのように力説する。

「ですので、露払いというのもまんざら嘘ではありません。全て公爵様のためにしたことです」

「本当か。そんな忠誠心のあるお前だったか」

「そんな！　そういえば先にシャイド男爵がガイエスブルクに来たそうです。そちらにも聞いてみてはいかがでしょう」

次に通信画面にシャイド男爵が引きずり出される。

余計なことを言ってくれたとヒルデスハイム伯爵を恨んだが、それもブラウンシュバイクの顔を見るまでだ。シャイド男爵は派閥の長という以上にブラウンシュバイク公は叔父である。その詰問の声に頭が真っ白になってしまふ。

「シャイド、お前はなぜそこにいる。預けてあつたヴェスタラントはどうした」

シャイド男爵はブラウンシュバイク領惑星の一つを任されているながら氾濫によつて失つた負い目がある。その失態を隠す理屈を捻り出さなければならぬ。

「そ、それは、貧乏惑星一つよりも、大事なことがあると思ひまして、ここガイエスブルクのことを頭にあつたもので、それでなんとか」

「意味が分からん。何を言っているのだシャイド」

「ヒルデスハイム伯と同じです！　ガ、ガイエスブルクは強い要塞なんです。艦隊に追われてもあつさり跳ねのけました！」

シャイド男爵は若く、ヒルデスハイム伯ほど言葉がすらすら出てこない。しかし、言いたいことはヒルデスハイムと同じ、ガイエスブルクの安全さの確認である。

つまりブラウンシュバイク公の逃げ込む経路の確保ということだ。

この言葉にブラウンシユバイクは納得し、安全な場所があったことに内心喜んだ。「なるほど、そうだったのか。ではシャイド、ヒルデスハイム、ガイエスブルクをしつかり確保しておけ」

エルフリーデの用意した罠は周到である。それをヒルダとドミニク、三重奏で演奏し切った。

今回ブラウンシユバイク公に幾重にも仕掛け、何が虚偽で何が真実なのか分からないようにしている。亡きリヒテンラーデ侯ならばこうした罠の糸をもっと美しく織り上げただろうか。

エルフリーデはこうした謀略を考える際、いつもリヒテンラーデ侯のことを思う。

いつの日かそんなこともなくなり、自前で全て完結することになるのだろうか。

それがいいことなのか。いや、そうではない。そうなるべき必要はない。

エルフリーデはこう考える。リヒテンラーデはエルフリーデの内に住み、今も帝国のため力を尽くしている。帝国を支えたりヒテンラーデは自分という分身を残した。限りなく支え続けるために。

エルフリーデはそんな甘美な妄想に身を委ねる。帝国のために動くことは決して重荷ではなく、むしろリヒテンラーデの育んできた唯一無二の申し子として、自分の誇り

なのだ。

誰よりもそれを誇ってやろうではないか。

「大叔父様、願いは私が引き継ぎました。見ていて下さいませ」

また、それが今のところエルフリーデの幸せでもあったのだ。いつの日か、他のことが心を占めるまで。

## 第九十三話

488年

9月

発端

オーデインではいよいよ離反していく貴族が顕在化してきた。ブラウンシュバイク派閥は本格的に空中分解していくのだ。

そんな貴族たちは来たるラインハルトに媚びを売るため、実績を求めている。

何かの設備を奪ったり、帝国軍施設の爆破を企むものもいる。パニックになった平民の暴動と一体になり治安などという言葉はあつてなきが如しだ。

当初、それらは散発的に起きていたため対応も容易であった。しかし、ついにその暴動が組織的になりそうな気配がある。

なぜなら肅清寸前にまで追い詰められていた旧リッテンハイム派閥の貴族、そして要職を追われた文官貴族などが組む動きを見せてきたからである。

おまけに暴動はとある有力貴族が旗印になる。

それは武勇の名門トウルナイゼン子爵家である。

代々武官を輩出してきた家柄であり、帝国史に残る提督たちを輩出してきた実績を誇る。

そしてオーデインの屋敷にも私兵を多く抱えている。平時なら無駄なほどの数を揃えているのだ。

重要なことに、今の当主はその次男イザーク・フォン・トゥルナイゼンを軍幼年学校に入学させていた。その者は優秀な成績で卒業後、あるうことか反貴族の色彩が強いローエングラム元帥府に加わり将官にまでなってしまうている。当然ブラウンシユバイク家からは睨まれ、トゥルナイゼン子爵家は今や全ての官職を奪われている。

だがそのことがかえって幸運に転じているのだ。

ここオーデインで数少ないラインハルト元帥につてを持ちうる立場にいるからである。

そのため、ブラウンシユバイク家から離反しようとする貴族たちに求心力を発揮しようとしていた。

この動きに対し、アン斯巴ツハはむろん警戒を怠らない。ある程度の軍事的行動すらやむなしと覚悟した。これがうまくいけば一罰百戒だが、下手をすれば大騒動になる。トゥルナイゼン子爵家に対し懐柔で済ませたい。細心の注意を払って接近し、交渉可能にまで持っていく。

この一連のことでまたしてもアン斯巴ツハの手腕が発揮されている。

その後のことをアン斯巴ツハは同僚のシユトライトに任せようとしたが、今度は不思

議なことにはシュトライトの態度が煮え切らない。元々能力も高く、しかも誠実そのものの性格であるシュトライトが、まさにそれゆえにブラウンシュバイク体制の維持に積極性でない。「民衆の幸せを第一にしなければならぬ。文字通り第一に」それがシュトライトの信条である。

それは美しいとアン斯巴ツハも認めるが、騒動が大きくなればいずれ罪もない民衆が苦しむことになる。それをどう考えているか問いたい。

ともあれ、いつそうアン斯巴ツハに負荷がかかり、このトゥルナイゼン子爵家の問題もアン斯巴ツハが最後まで片付ける他はない。

これほど重要かつ緊急の仕事をしていたため、ブラウンシュバイク公と顔を合わせる機会がしばらく減ってしまったのは仕方がないことだ。

だが、結果的には取り返しのつかない大きな失策となつて跳ね返ってきた。

アン斯巴ツハはそれを直ぐに思い知る。

いきなりブラウンシュバイク公が呼びつけ、言いだした。

「アン斯巴ツハ、面倒なことはもうよい！ 儂はガイエスブルクに行く！」

「な、なんとということを一閣下……」

アン斯巴ツハは絶句する。

あらゆる意味でその選択肢はあり得ない。だがブラウンシユバイク公が大真面目で  
そう言う以上、慌てて反論する。

「失礼ながら、お気を確かに。ここオーディンを捨て、軍事要塞に籠るなど愚の骨頂では  
ありませんか。…… ああなるほど、気付くのが遅くなりましたが、今確信しました。  
流れていた数々の噂も一本の線につながります。それはこちらをオーディンから誘い  
出そうとする向こうの謀略だったのです！」

さすがにアンスバツハは理解した！

ラインハルト側はオーディン攻略の困難さを重々承知、ならばブラウンシユバイク公  
をオーディンから宇宙に誘い出して始末しようと考えたのだろう。先にヒルデスハイ  
ム伯爵らがガイエスブルクに辿り着けたこと自体がよくよく考えれば不自然なこと  
である。しかし謀略と仮定すると納得がいく。

やっと治まる目途が立ったトゥルナイゼン子爵家の怪しい動きも謀略の一つだった  
のではないか。もしかするとシユトライトにも既に手が伸びていたのかもしれない。

そして今、看破するだけではないけない。

謀略ならば阻止しないと負けるに決まっている。

「アンスバツハ、儂は行くと決めたのだ！ さすればもう孺子の艦隊に怯えなくて済む。  
少なくとも殺されることはない」



迫りくるラインハルト側艦隊への恐怖がここまで醸成されていたとは。

しかしここをなんとか抑えなければ万事休すだ。

「いかにガイエスブルク要塞といえど純軍事的な勝負などもつての他です！ それこそ向こうの思う壺、翻意頂けねば困ります。オーデインを押さえているから向こうも手出しできないのです。オーデインこそ人口、文化、生産、権威の全てであり、死守すれば逆転の芽も出てきましよう。要塞なんかについては先細りするだけ、何もできません」

「アンズバツハ、孺子が来てからでは遅いわ！ 孺子は儂を空爆でどこまでも追い回し、高笑いしながらなぶり殺しにするに決まっている」

「そんなことは絶対にありません、閣下」

「いや、それこそ儂は何もできず無様に逃げ惑い、焼かれるのを待つばかりではないか！」

ブラウンシュバイク公はガイエスブルク要塞に行くといつてきかない。

アンズバツハの考えではラインハルトがオーデインを破壊することは絶対にない。それを前提にして物事を組み立て、それで持久戦や地上戦を想定している。向こうがどうやつてもこちらを早期に打倒できない以上、戦略戦で勝ち目があると算段している。

しかしブラウンシュバイク公はそう思っていない。自分が向こうの立場ならばオーデインの半分を殺しても玉座を手に入れるだろう。平民なら全員殺しても構わない。

空爆でも禁忌の核攻撃でもためらうことなどない。

自分をベースに思考する以上、相手もまたそうだろうと思ってしまう。それが人間だ。

アンスバツハが理詰めで説得するのはもう無理だ。

日頃の考え方がアンスバツハとブラウンシユバイク公、二人の決定的差なのである。

実はそういうこともエルフリーデは見切っている。

ブラウンシユバイク公の側近にも頭の切れる者はいるだろう。そういった者が誘い出しに気付き、謀略阻止に動くくらいのは予測の範囲内だ。

それでもブラウンシユバイク公は必ずや誘いに乗る。

謀略の戦いは、やはりエルフリーデの勝利に終わる。

結局、ブラウンシユバイク公はアンスバツハの反対を押し切る。

ほとんどの貴族をオーディンへ置き去りにするつもりだ。疑心暗鬼に駆られてどんな身近な貴族でも怪しい者は切り捨てる。裏切って自分の首をラインハルトへの手土産にされたら話にならない。

むろんアンスバツハは連れて行く。それだけは別であり、唯一の頼りなのだから。

連れていくべき者はもう一人いる。

今後どういふ情勢になろうとも、必ず必要になる者だ。

銀河帝国皇帝アマールリエである。

正統性を主張するためには不可欠であり、また帝国軍への命令権という意味でも絶対に必要なのである。

また、ラインハルトが全く新しい国を一から作るというのも考えにくい。それなら、ラインハルトが銀河帝国を受け継ぐにはアマールリエからの禅譲という形式が必要となる。

とにかくアマールリエの確保が重要なのだ。

ところがここで驚くべき事態となる。

「妾はここオーデインを動きません。ガイエスブルクに行くというなら一人で行ってらっしゃいな」

「何！　ふざけるなアマールリエ、お前が旗印になって儂と一緒にいなければ、いつ賊にされるか分かったものではないわ。ついて来い！」

当たり前のようにブラウンシュバイク公が皇帝アマールリエに同行を命じたが、意外なことに真つ向から拒否されてしまった！

「もう一度言います。ここを動きません。どうせあなたはあなたに相応しいろくでもな

い末路を辿るのでしよう。要塞に行つても同じことです。ならばオーデインにいた方がまだマシというものでしょう」

「儂が連れて行くといつたら連れて行く、分らんかアマーリエ！」

「どうしてもというなら、銀河帝国皇帝としての実力で拒否します」

「何……」

これにはブラウンシュバイクも絶句する。梃子でも動かない気であることがわかったからだ。

「何が実力だ！ アマーリエ。よくもそんなことを。儂がお前を皇帝に立てたから皇帝になつただけではないか。ここで儂の思い通りにならないことなど何もない」

「もう夫とは思いません。最後まで自分のことしか考えず、他人はどうでもいいと思つているんですね。妾も娘も利用する道具にされ、いつ使い捨てられることか」

「うるさい！ 儂に逆らうことなど許さん！」

ブラウンシュバイクは顔を赤くして怒鳴りつけるだけだ。

逆にアマーリエは静かに刺すように答える。瞳に深い怒りを湛えている。

なぜこれほどまで強硬にアマーリエはブラウンシュバイク公に逆らうのだろうか。

それは単なるわがままではなかった。

そうなるべき深い理由があったのだ。

「だったら聞きます。甥のフレーゲルはどうしました？ あんなに可愛がっていたようなのは、見せかけだったのですか！」

むろんフレーゲルはブラウンシュバイクの側の親戚だ。アマーリエとはあまり関係がない。

しかしフレーゲルは偏った考えながらルドルフ大帝を非常に崇拝し、その理念に心底共鳴していた。当然、その子孫である帝室を敬う心を持っていた。

そのためブラウンシュバイクの腰巾着でありながらアマーリエにも丁重に礼を尽くしていたのだ。

「皇女叔母様」とても語呂の悪い言い方であったが、フレーゲルは敬意を込めてアマーリエのことをそう呼んでいた。そしてお土産品を持ってきたり、誕生日には豪華な祝会を企画したりしてアマーリエを喜ばせたものだ。

フレーゲルにはそんな純粋な一面があった。

そういうフレーゲルであるからアマーリエはたいそう可愛がっていた。

「本当に痛ましい。フレーゲルはとても大事な甥でした。軍人だから死ぬことがあり得るとはいえ、フレーゲルは最後まで忠義を尽くし、我が家のために勇ましく戦って死んだのです」

「何を……」

「それなのに負けて死んだからどうでもいいのですか！ もう役に立たないから忘れていいのですか！ いくら頼んでもあなたはフレーゲルを国葬にしてやらず、いいえ、あなたという人は弔いにさえ来なかつたではありませんか！」

最後はアマリーエの叫び声だ。

心からの悲痛を表している。

しかしブラウンシュバイクは反省どころかたじろぐこともない。自分の考えしか心に入れる余地がないのだ。その鈍重な感性は心からの嘆きや訴えですら簡単に遮断し、胸に響かせることはない。

もはや問答無用、どうしてもアマリーエをガイエスブルク要塞に連れて行くため、前に出て掴みかかろうとしたブラウンシュバイクだが、視界の横から出てきた物体に驚いて歩みを止める。

それは戦斧の刃だった。

それも特別製の重量級のものとも一目で分かる。

威圧感半端ではない。しかし一瞬前にはなかつたはず。その戦斧が驚くべき速さ

で出現し、ブラウンシュバイクの目の前五十c mのところに静止している。

「何のマネだ！」

そしてブラウンシュバイクが見る先にはあの装甲擲弾兵総監、オフレッサーの巨体があつた。

「オフレッサー、この儂に何をするか！」

「皇帝陛下を守護奉る臣として当然のこと。このオフレッサー、アマールエ陛下のため忠義を尽くし、手足となつて働くのみ」

ブラウンシュバイクは続けざまにうまくいかないことが重なり、怒りに目もくらむばかりだ。

しかし何も言えない。もはやブラウンシュバイクは一步も進めない。

もしもオフレッサーが本気になればまばたきの間に挽肉にされるだけと分かっている。

オフレッサーは忠義か同情かは判然としないが、とにかくアマールエの側に付いてしまつている。ならばもちろん装甲擲弾兵たちも一緒だろう。

ブラウンシュバイクは引き下がるしかなかつた。

夫婦の亀裂が長い時間をかけて進んでいた。修復不能に至るまで。よもやこんな時

に問題になるとは。

いったん退いたブラウンシユバイクだが、それでもアマリーエを置いていくつもりはない。

「おのれ、力づくでも連れていくぞ。儂に逆らうことはできんと教えてやる！」

即座に兵を動員してノイエ・サンスーシーにけしかけた。もちろんアンスバツハに知られれば反対されるのは分かり切っているので、アンスバツハには別の方面への視察を命じて遠ざけておくくらいの頭は使った。

「ええい、こんな面倒なことになるとは。おそらく、アンスバツハの奴が装甲擲弾兵をノイエ・サンスーシーに招いたからだろう。余計なことをしおつて！」

そしてオーデインの動乱はここに一つの転機を迎える。

よもや皇帝の玉座において白兵戦が展開されるとは、長い帝国の歴史でも例がない。その凄惨さは長く語り継がれることになる。



## 第九十四話

488年10月

勇士と美姫

オフレッサーは下級貴族出身であり、その立身出世は驚くべきものだ。壮年と青年の中間の年齢でありながら帝国軍上級大将という帝国元帥のすぐ下の地位にまで昇っている。

むろん戦果もさることながら、そればかりの理由で出世したのではなく、帝国の気風というものが関係している。貴族の美学というものがたなびいている帝国軍にあつては、自分の肉体を使い、目の前の敵を恐れず立ち向かうということに高い価値が置かれている。

つまり、白兵戦こそ貴族の精神を最も体現するものだ。

その象徴としてオフレッサーは称賛され、順調に出世を遂げてきた。

その反面、上級大將らしい戦略眼も指揮能力も求められていない。そのことはオフレッサー自身も分かっている。

ただし勇者の筆頭として白兵戦では無敵であらねばならなかった。どんな戦いでも平然と挑まねばならない。どんな不利な状況になっても逃げることは許されない。そ

の勇氣と忠誠心のため、味方だけではなく敵である同盟軍兵士さえ多大な恐怖とともに賞賛もしている。

オフレツサーはそんな過酷な責務を見事果たし続けてくれた。

大きな体格と筋力がそれに大いに貢献している。しかも体格に見合わない俊敏さと身のこなしもあり、戦闘技術全般に秀でている。

かつて帝国軍でも白兵戦で勇名を馳せたりユーネブルクがなる者がいた。

確かに強く、武勳も華々しい。だがその者でさえオフレツサーとだけは競おうともしなかった。その嗅覚で、自分とオフレツサーの差は鍛錬や技術で乗り越えられる程度ではないと分かっていたからだ。猫がいかに鍛錬しようとも虎にはかなわない。

オフレツサーとはかように生まれながらの戦士である。

行動は粗野と言われ、オフレツサーは怖がられることも多い。事実多少はそういう面もあるが、見かけと大きな声によって過剰に判断されていることが多い。

加えていかにも数多くの人間を殺しまくったように言われているが、数だけで言うならそれは不当であり言いがかりに近い。なぜなら艦隊戦で失われる人命は何百万人にもなり白兵戦の比ではないではないか。一機の艦載機が一隻の巡航艦を斃せば、それで数百人殺してしまうではないか。しかも艦隊戦での緩慢な死の方がむしろ白兵戦の死より惨いものである。

しかし、オフレツサーは有言実行の武人、そんな反論をすることはない。

普通には煙たがられてもおおかしくはないが、意外にも上流貴族や帝国軍中枢部との折り合いは悪くなかった。

それはオフレツサーに元帥や軍務尚書を狙う政治的野心がなく、そういう意味では安心感があつた。

何よりもオフレツサーには帝室へ単純な忠誠心があつた。

確かな忠誠心、それには理由がある。

華やかな上流社交界に対する憧れが妬みよりもはるかに優つたからだ。

それは自分が求めても得られない美や洗練の満ちる別世界だ。上級貴族の優雅な振る舞い、完璧なマナー、どれもこれもお伽話の世界に見える。戦場をさすらう自分からすれば天界の住人たちだ。

特に貴婦人の美には共にいるだけでいたたまれなくなり、自分を振り返つて恥ずかしくなる。

そんなオフレツサーなのだから、貴族の頂点である帝室に憧れと忠誠を持つのは当たり前前のことである。

その一点において、美に何も不自由したことがなく、当然気後れするはずもないラインハルトと決定的に異なる。むろん、ラインハルトの方が珍しい例なのだが。

むろん部下からは恐れと尊敬の両方を受けていた。

装甲擲弾兵は名譽の職である。

帝国軍内で尊敬され一目置かれている。もちろんそれと引き換えに過酷な戦闘と、それに備えるための厳しい訓練を強いられる。指揮官オフレツサーが充分な信頼を受けていなければ、そんな装甲擲弾兵をまとめることはできない。いかに白兵戦といえど個人技ばかりの世界ではなく、通常は集団戦である。オフレツサーは自分の目が届く範囲の指揮はできるし、部下がついてこなくては戦果を上げるはずもない。

そんなオフレツサーに先日、ブラウンシユバイク公側近アンスバツハから無憂宮への出動命令が出された。これは異例のことだ。無憂宮は銀河帝国皇帝の過ごすところ、普通ならば一握りの高官や側近、上流貴族やその子弟しか入ることができない。オフレツサーは望んでも叶えられない場所に行くことができるのだ。正に夢見心地で無憂宮に足を踏み入れた。

そして皇帝アマリーエの閲兵という名譽を受けた。

実のところ閲兵自体は初めてではない。フリードリツヒ四世の時代にもあったのだが、それは正に一瞥というにふさわしい程度のものであった。

だがアマリーエは違った！

「兵士の皆、臣民にその勇姿を見せ、落ち着かせよ。その方らにはそれができる力があるのじゃ」

装甲擲弾兵たちの整列のわずか数メートルにまで近付き、直々に声を掛けた。

もしも裏切り者がいれば命のない距離だ。しかしアマールエはそんなことを気にしない。

その態度と言葉に奮い立たぬ装甲擲弾兵などいるはずがない。当然オフレッツサーは人一倍感激した。

「無用な混乱と不安における臣民は可哀想じゃ。救わねばならぬ。妾の願いを聞いてくれるか。その方らの忠誠と働きを期待しておるぞ」

アマールエはかつて社交界一の美姫と謳われた。

その圧倒的な美貌はいささかも衰えを見せていない。今、皇帝として身に付けている最上質のドレスもきらめく飾りも、アマールエの美に勝つことができず脇役に甘んじている。

そういう見たことも想像したこともないレベルの美姫が無骨な装甲擲弾兵たちに願ったのだ。もちろん彼らの意気は天を突くばかりになる。

残念なことに、そこで一杯になってしまったオフレッツサーは総監としての返答を忘れてしまった。

部下にせつつかれるまで無用な間が空いてしまい、思わずアマリエもクスリとしてしまった。それもまた例えようもなく魅力的だ。

オフレツサーは心に誓う。

この皇帝アマリエのため全力を尽くす。

もしもアマリエが危機の際には、絶対に守る。どんな敵が相手でも、絶対に守り切つてやると。

そして今、ここ無憂宮が戦場になるとは。

オーデインを離れることを納得しないアマリエに対し、ブラウンシュバイク公が兵を向けたからだ。

オフレツサーは予測したローエングラム元帥の軍ではなく、何とブラウンシュバイク公配下の帝国軍が敵になってしまったことに驚くが、誰が相手だろうと関係はなく、戦うだけだ。

出動する前にアマリエに挨拶をしようとしたが、思いがけず通路で鉢合わせしてしまった。

わざわざアマリエの方から出向いてきてくれたからだ。

「陛下、謹んで申し上げます。安んじてお待ちあれ。我ら装甲擲弾兵、必ずや陛下をお守

り奉りますゆえ」

オフレツサーは跪いたまま言上する。

アマーリエから返答はない。白い顔をいつそう青白くして立ちすくんでいる。

オフレツサーは敵兵を恐れているのか、と考えた。それも当然だ。何と自分を目指し兵たちが来るのだ。しかも見通せるくらいの距離にまで。貴人にこんな事態は想像もできなかったことで、身に走る恐怖はいかばかりだろう。

「何の心配も無用に存じます、陛下」

アマーリエに気を遣い、その恐怖を解くために重ねて言葉を投げかけた。

だがアマーリエの心配はまるつきり別のことだった。

「妾のために戦うと申すか。ブラウンシユバイクの兵は多いじやろう。戦えば死ぬやもしれん」

何とアマーリエは自分のことではなく装甲擲弾兵の身を心配していたのだ！

震える長い睫毛も、わずかにかすれる声も、その気持ちが本物であることを示している。

アマーリエの心配には理由があるのだ……

それははるか昔、その生い立ちから始まっている。

もちろんアマールエは戦場など縁があるはずもない。しかし、宮廷というものはそれ以上に危険な場所なのである。

現にアマールエの母も死んでいる。ある日突然倒れ、口のきけない危篤の中で、最後までアマールエを心配しながら死んだ。急病とされたがそれは絶対に嘘だ。急に倒れるまでは元気だったのに、たった一日で逝ってしまうものか。それは明らかに毒殺である。犯人は結局のところ分からずに終わっている。

当時寵姫に上がったばかりのペーネミュンデ侯爵夫人が妬んで事に及んだと思う人間は多かったが、確証はない。当時の寵姫は別に一人ではなかったからだ。宮廷は悪しき思惑が渦巻く伏魔殿である。こういう毒殺など宮廷では珍しいことではないという救いがたい事実がある。

この母の死で、アマールエはその心に身近な人を失う恐怖を刻み込まれた。

それだけならまだしも、毒見役を兼ねていた乳母もまた失っている。

給仕や侍女を毒見役として別に立てたのでは買収される恐れがある。毒見役は最も近くにいる者が担うのだ。

そして失つていった乳母は一人二人ではない！

優しい乳母、アマールエが懐いていつまでも共にと願った乳母が死んでいく。数年以



上一緒にいられた者はいない。

「ずつと妾と一緒にいるのじゃ！ 妾を一人にするな。約束じゃぞー！」

不安があるからこそ、そう言つて泣きじやくつたこともある。

「はいはい、甘えん坊さん。私めでよければいつまでもアマーリエ様のお側におりますよ。いいえ、アマーリエ様が飽きてしまわれても側においてやりますから。さあてどうしましよう」

そう言つて明るく笑つてくれた乳母もいた。共にいると約束してくれた。

それなのに…… やがてアマーリエを残して逝つてしまうのだ。

乳母たちの記憶はいつも死に顔で終わる。

それがどんなにアマーリエの心を引き裂いても。

中でもアマーリエはゾンネという乳母に懐いたものである。それは特別だった。

「そちは母に似ておるの」

初めて会つた時、アマーリエはそう言った。

「それは光栄ですこと。では母のように躡をしてもよろしいでしょうか、アマーリエ様」  
ゾンネは茶目つ氣たつぷりに返してころころ笑つた。

そして母に似ているのは見かけだけでなく、アマールリエに心からの愛情を注いでくれたのである。ゾンネはよく微笑んでいた。「可愛いアマールリエ様」そう言いながら見せる柔らかな微笑みがアマールリエを包みこんだ。

アマールリエの方も幸せの中にいる。二人は仲良く押し花を作ったり、絵本を読んだりした。

その時も「楽しいな。二人は楽しいな、ゾンネ。ずっと一緒におろうな」と言っていたものだ。

だがゾンネを含め、乳母たちがした約束は本心ではない。

アマールリエを安心させてやるための嘘だ。

あの国務尚書リヒテンラーデ侯といえども全ての謀略を砕くことはできない。すなわちその守りも絶対ではなく、アマールリエのもつとも身近にいる毒見役がずっと無事でいられるわけがない。成功すれば儲けものという毒殺の試みが絶えることはないのだ。

乳母たちは皆、アマールリエのためを思い、自分が身代わりとなつて守るため覚悟を決めている。皇女の乳母たる者の務めだからだ。

「可愛いアマールリエ様。どうか、あなた様はご無事に。共にいられて幸せでした」

そして乳母たちは皆予定ともいえる死を受け入れて逝く。

その覚悟が、アマールリエに突き刺さる。

こうしてアマリーエは自分を守ろうとした人間が死んでいくのを目にすることになる。それも皆突然に。

「一緒にいると約束したではないか！　そうであろう！　嘘を言うな！」

その度ごとに涙を枯らしてきた。心が壊れるほど痛いのに、まさにその分かち合う人間がもういない。

それは言うまでもなく、ゾンネの死に対しては狂乱というにふさわしいほどひどかった。

手から血を流してもなお死体を叩いている。

「妾が命じる、動け！　目を開けよ！」

無理やり引きはがされる。

死に顔には微笑みが消えておらず、それはせめてゾンネがアマリーエのために残したもののだろうか。

「生き返って参れ！　また二人で遊ぼう。ゾンネ、お願いじゃ」

鎮静剤を打たれてもなおアマリーエは叫ぶのをやめない。完全に意識を失うまで続いた。

「それなら、妾も連れて行ってくれ。もう一人は嫌なのじゃ。頼む、ゾンネ……」

誰かを失うごとにアマリーエは伏してベッドから起き上がれなくなつたものだ。それは、夢うつつの時だけが現実から逃れ、心が壊れないでいられる。夢の中でだけ会いたかつた乳母に会える。

皇女に生まれた宿命、背負うにはあまりに悲しく重すぎた。

アマリーエの美しい顔は変わらない。しかし、その陰で心に負つた傷がどれほど積み重なつてきたことか。

長じては犯人を挙げることに血道を上げる。そのためなら皇女の絶大な権力を遠慮なく駆使する。使える者は憲兵や、社会秩序維持局のラングさえ使つた。有能だからだ。

どれほどの過去に遡ろうと諦めず、細い筋道からでも犯人を突き止める。そしてもちろん容赦のない残忍な復讐をした。どんな下っ端で、端役に過ぎない者でも極刑以外にすることはしない。

「後悔していると言うか。ならば自らの血と肉で贖え。弁明があるなら地獄で続きを申すのじゃな」

犯人がどれほど高位の貴族でも高貴な血筋であつても決して赦しを受け入れることはなかつた。血筋や家柄を言うなら皇女アマリーエにかなう者などいない。命乞いの

涙など踏みにじって処刑台に送る。

復讐の夜又アマリーエと呼ばれることすらあった。

アマリーエの異母妹クリステイーネも同じような運命を背負ったが、こちらは少しばかり穏やかな人生を送ることが出来ている。アマリーエの方が勝ち気であったが、同時に鋭い感受性を持つていた分だけ心が水晶細工のように脆かった。

出会いの数だけ別れに別れを重ね、魂が壊れてしまっている。

そんな一面を知っていたからこそ、リヒテンラーデ侯はアマリーエらを立てることにためらいがあつたのかもしれない。

アマリーエは既に傷つき過ぎていたのだ。

そして今、この無憂宮に兵が来る。

ここで再び自分を守るために死ぬ人間が出てしまうのか。アマリーエは取り乱さないのが精いっぱいだ。

そんなことは容認できないと心が泣いて、泣いて、叫んでいる。

「陛下、地上で戦う限り、我ら装甲擲弾兵は無敵ですぞ。敵を陛下のお側に決して近寄せさせることはありません」

オフレツサーは更に頼もしい言葉を言った。しかし、アマーリエの顔は晴れない。

「いや、戦いが不利になれば傷つく前に降伏という手もあるう。しかも裏切ればブラウンシュバイクからの恩賞は思いのままぞ」

「さようなことは決して！ このオフレツサー、先の言葉、嘘偽りは申ししておりません！」

「済まん。妾の言い方が悪かった。忠義を疑ごうてはおらんぞ。そうではなく、ただ一つ分かつてくれればよい。妾のためにそちが死ぬことなどあつてはならんのじゃ！」

「陛下、陛下はその御身だけをお考え下さい。塵あくたに過ぎぬこの身にそのような氣遣い頂くとは、なんと感謝申し上げれば」

オフレツサーは直接の返答を避けた。必ず戻るなどと軽く約束するのは武人のすべきことではない。アマーリエを守り切るつもりであるが、そのための戦いが決して簡単だと考えてもいない。

「なれば御厚情、この戦斧への力に変えて礼といたします」

皇帝の臣としての忠義、最強の装甲擲弾兵の誇り、そんなことのために戦うのではない。

ただ一人の戦士として立ち向かおう。

美姫アマーリエを守る。

それだけが理由でいい。迷う必要は微塵もない。命ある限り全力で戦うのだ。今オフレッツサーは戦場へと歩き出す。

おそらくこれが人生で最後の戦場になる。後悔などあるものか。

アマーリエはオフレッツサーの背を見ながら、かつて自分を守って逝った、還らぬゾネの姿を重ねる。

尚も眩き続けるのだった。

繰り返し、幾度も。

「無事に帰ってくるのじゃ、オフレッツサー。頼む。無事に」

## 第九十五話 488年10月 ノイエ・サンスーシーの死闘

一方、ブラウンシユバイクの兵たちは無憂宮に突入し、皇帝に向かうということに多大な惧れを感じる。

想像もしなかった事態だからだ。

おまけに兵たちは知っている。無憂宮には今、恐るべき装甲擲弾兵が詰めているのではないか。

あのオフレッツサー総監と装甲擲弾兵を相手に戦うなど自殺志願にしか思えない。戦意など最初からあるはずがなかった。

それでもブラウンシユバイクの非情な命令によって兵たちはおずおずと進み出る。

貴人が馬車でくぐるべき無憂宮の優美な門、そこを装甲服の兵たちが通り、庭園に足を踏み込む。

だが、一瞬で命のない血塊に変えられた。

門のすぐ後ろでオフレッツサーが待ち構えていたのだ。オフレッツサーとしてはアマー



リエのいる無憂宮まで近寄らせることもしたくない。複雑な建物の中はなるほど防御には都合がいいかもしれないが、逆に討ち漏らしが出る可能性がある。一兵たりとも進ませてはならないのだ。

ここで兵たちは一気に恐怖に染まる。

足はすくみ震えがくるが、後ろから次々に背を押され、進む以外にない。しかし門から庭園に入った瞬間が絶命の時だ。

「儂の運動不足を心配して来てくれたというのか。では遠慮なく解消させてもらおう！」  
突然オフレッツサーの大音声が響いた。

「皇帝陛下の過ごされる無憂宮を何と心得る。不埒な行いを今すぐ悔いて帰るならばよし、でなければ体が二つになって帰ることもできませんが、それでもよいか！」

オフレッツサーの言葉に一つも嘘がないことを誰もが知っている。兵の死体を見れば分かる通り、その戦斧によって本当に体を二つに分けられて転がっているのだ。まるで巨大工場の裁断機に誤って巻き込まれたような惨状である。

普通ならば装甲服に刃物は通らない。

叛徒のトマホークが当たると衝撃で骨が碎けるくらいはあるが、重要臓器までダメージが来ることは少ない。

しかしオフレッツサーの戦斧を受ければ別だ。服ごと体を叩き斬られる。オフレッツ

サーの尋常でない力に合わせ、刃こぼれしない強さ、折れない柄を持つ特別製の戦斧である。しかも普通のものより二回りも大きい。

それが凄まじい力と風を切る速さを持つて襲い掛かる。しかも二本同時だ。通常両手で扱う戦斧をオフレツサーだけは片手で易々と操る。

かつて大帝ルドルフは艦隊を率いては陣頭で戦い、より若い時は白兵戦でも自ら打つて出て刃を振るつた。その姿に敵は怖気づき、味方はこれ以上なく奮い立つた。鍛え上げた強い肉体とそれを危険に晒しても平然としている胆力、それこそ帝国を貫く貴族精神の根幹だ。それが民衆を熱狂させ帝国の礎を築いた。

今、ノイエ・サンスーシーの誰の目にもそれが具体化して見えている。

寄せてきた兵たちは気も狂わんばかりに泣く。そんな人外と戦つて勝てるわけがない。味方であればこれ以上なく頼もしいが、戦うならば魔物としか思えない。

その場に断末魔の悲鳴と戦斧の唸りが果てしなく交互に響く。命のかき消えていく二重奏だ。

ようやく数だけを頼みにして庭園への突入を果たしたが、そこにも絶望の光景が広がっていた。

銀河帝国で最も美しく高貴な場所、普段なら上流貴族たちが優雅に談笑するべき場所

だ。寸分の狂いもなく整えられ、貴人を迎えては楽団の音楽と笑いさざめく声の満ちるところだ。

それが今や簡易な要塞のようになっていないか。

相当な広さのある庭園にいくつも遮蔽物が急造されていた。簡単に無憂宮の建物へ近付けさせないためである。装甲擲弾兵たちは単に力が強い者が選ばれているのではなく、戦場の条件に合わせ、最適の陣地を短時間のうちに作り上げるといふ頭脳を持ち合わせている。

しかも遮蔽物は強靱な即硬化材料を使って作り上げられていた。白兵戦に有利な遮蔽という意味だけではない。地中から建物への攻撃も防ぎ、何よりも車両さえ阻める。

ブラウンシュバイク側には車両があり、その速さで一気に突入されたら危なかつたが、それはもう不可能になった。

攻める方はやはり数を頼みの白兵戦だ。

広く、同時に多くの白兵戦が展開された。激戦に見えるがむしろ圧倒的に装甲擲弾兵が強い。数の差を逆転し、装甲擲弾兵たちは有利に戦いを進めている。

何よりオフレツサー総監が陣頭で戦っている。

銀河帝国上級大將が戦斧を振るっている。その横で無様な戦いはできない。それにこの戦いは皇帝のまさに膝元で守護する正義の戦い、戦士としての最高の晴れ舞台だ。

装甲擲弾兵たちに士気の上がらぬわけがない。

「オフレツサー総監閣下に続け！ 我ら装甲擲弾兵、閣下に力は及ばずともせめて勇気で劣つてはならない！」

「勇気も儂に敵うものか。ヒヨツ子どもが。死なない程度に軽く戦つておけ」

オフレツサーは指揮官としてあえて余裕を演じる必要がある。それ以上に部下たちに対して充分な愛情を持つていた。不器用な表現しかできないが、それは確かだ。

もちろん、部下の方もそれは充分承知している。

戦闘開始から一時間が経過した。

もはや庭園には足の踏み場もないほど死体が積み重なる。しかしそれを越えて無憂宮の建物へ辿り着いた兵はいない。白兵戦における装甲擲弾兵の強さはやはり別格だ。どんな末端の装甲擲弾兵でも最初から怯んでいるブラウンシユバイクの兵など寄せ付けはしない。

戦況を見るブラウンシユバイクは業を煮やし、重火器で吹っ飛ばしてやろうと考えたが思いとどまった。ゼツフル粒子発生装置が庭園のあちこちに転がっている。それだけなら敢えて砲撃を加え、敵味方ごと殲滅することも実行したに違いない。しかし、ゼツフル粒子発生装置は門から外にも広く飛ばされ、散布された粒子は意外なところに

まで分布している。

つまりどこからどう分布し、つながっているか分からない。

ゼツフル粒子の爆発力は凄まじく、いったん発火すれば次々と伝わって誘爆する。つまり誘爆が線で結ばれて続くのだ。これではどこまで被害が及ぶか見当がつかない。

しかしこのままでは戦いがどうにも進展しないのが分かる。素人目にも装甲擲弾兵が白兵戦で無類の強さを持つことがはつきり認められる。

「次々に行け！ よいか、尻込みする者は分かっておろうな」

そう言つて兵をけしかけても戦局が好転する様子はなく、ブラウンシュバイクは焦り出す。

「おのれオフレッサーめ、奴には疲れるということがないのか。よし、白兵戦で奴を倒せんのならば無憂宮ごと空爆してやる！ それなら白兵戦などどうでもよくなる。アマリーエをいぶり出してやるぞ！」

実際は無憂宮の内部にはシエルターが備わっており、先のリヒテンラーデ侯暗殺以来大幅に強化されていた。通常の空爆で破壊されることはない。ただし空中から攻撃できるといふ脅しの意味もある。それに投石にとどめればゼツフル粒子に引火しないで済む。

ブラウンシュバイクは試しに駆逐艦一隻を急行させた。

ところが脅しにすらならなかった。無憂宮のどこに隠してあったのか、小型の強襲揚陸艇が発進し、たちどころに接舷したではないか。接着し、艦壁を溶かして乗り込まれる。この移乗攻撃を敢行したのはむろん帝国最強の装甲擲弾兵だ。通常の陸戦隊などとは格が違う。駆逐艦などものの数分で完全に制圧され、降下した。

同時にこのことは落下傘降下によりノイエ・サンスーシーの建物へ直接取りつくことも不可能であることを示す。

「くそ、何か方法はないのか!」

ブラウンシュバイクはそう息巻いてはみたものの、打つ手がない。もちろん多数の戦艦を動員し、宇宙から砲撃する手はある。それなら防御のしようもないだろう。

だがそんな方法は現実的ではなく、無憂宮を程よく破壊などできるわけがない。しかも標準が正確とも限らず、おそらくかなりの広範囲に被害が及んでしまう。

何よりそんな派手な方法を使ったのでは皇帝アマリーエを害することが満天下に知られてしまうではないか。自分が謀反人と誰の目にも明らかにされれば人心は完全に離れ、どうにもならなくなるだろう。それくらいは理解していた。

だが、ついにブラウンシュバイクは禁断の方法を思いつく。

他の人間の命など一欠片も考慮しないからこそやってのけられる方法だ。

ボウガンを遠くから装甲擲弾兵へ向け雨あられと放たせたのだ。ただ射たのではない。

何とこちら側の兵もまた戦っているところに射かけた。それは装甲擲弾兵を隠れさせず、釘付けにするための道具扱いだ。およそ考えられない非情さである。

ボウガン自体は装甲擲弾兵の側も準備していたが、それはブラウンシュバイク側がグライダー兵などを使ってきた場合に備えてのことであり、応射はしない。そもそも数が違い過ぎて全く無駄だ。

悲惨なのはブラウンシュバイクの兵たちである。

理不尽にも装甲擲弾兵に斬られながら、自陣からの矢まで背中に突き立てられるのだ。こんなに哀れなことはない。

「やめてくれ！ どうして、まだここにいるのに！」

生きている人間が、それまでの人生など何も意味がなかったかのように動かぬ物体になってしまう。

どれほど無念だろう。

まるで虫けらだ。父として、息子として、あるいは兄として弟として生きてきた。家族や恋人、友人たちと昨日まで楽しく語り合っていたのだ。

あつさり命と将来を奪われ、消えていくとは。

射られるのは地獄、射る方もまた涙目と共に絶叫している。

訓練を受けた兵士といえども味方を殺していくことに平気でいられるわけがない。

今日の今日まで冗談を言いながらふざけあっていた僚友を自分が殺したのだ。

僚友の名前や性格どころではなく、互いに家族の写真を見せ合い、妻や子供の数も年齢も、あるいは婚約者の名前も分かっているというのに。死ねば誰がどれだけ悲しみ泣き叫ぶか知っているというのに。

それまでとは比較にならない速度で死体が量産されていく。庭園の敷石は血の色で余すところなく染められ、文字通りの血の池になる。

ただし効果はあった。

矢だけだったなら簡単に防がれただろうが、装甲擲弾兵といえど手は二本しかなく、敵兵と矢を同時に防ぐことはできない。装甲擲弾兵にも傷つき倒れるものが続出する。

もちろん最大の障害物オフレツサーに集中して矢が降り注ぐ。

オフレツサーの装甲は、その筋力に合わせてあらゆる強化を施された特別製だ。チタムセラミック多重装甲が厚く施され、戦斧の刃も強酸液もはねのける。結晶炭素の矢といえど貫通できない。

ただし関節の可動部だけは別である。そこは強化繊維装甲でつながれているが、比較



的脆弱だ。角度によっては矢が通ってしまふ。

オフレッサーはむろんそれを分かかっていて留意していたが、戦斧を振るつて戦いながらのことだ。ついに射抜かれた。

だが痛みなどまるで感じないごとく動きが止まる様子はない。

「なんのこれしき。このオフレッサー、陛下への約束を必ず守り通す！」

しかし、隙をついて二本目が刺さった。そしてそんな継ぎ目には動脈が近いのだ。激しく流れ出した血が装甲服の内側を流れゆく。

戦いで動くごとに血しぶきとなって周囲に注がれる。

それでも倒れない。

それでも戦斧の威力にいささかの衰えもない。

むしろその刃音は鋭くなったのではないか。美姫アマリーエを思う心が折れることなどあり得ない。

一人でも二人でも、十人が相手でも、ものともせず戦い続ける。

もはや兵たちの精神は限界に達した。

人間が戦える相手ではない。恐怖により精神が崩壊し、逃げ始めると全員がどんな制止も聞かず逃げた。

「分かつておろうな。逃げたら家族共々皆殺しだ。妻も幼子も命はないものと思えー」  
人として言つてはならない非情な脅しだ。ブラウンシユバイクのそんな脅しによつて兵は泣きながらも白兵戦を戦い、弓を射ていたが、もう正気を失つていれば意味がない。

兵たちは逃亡し、戦いは終わった。

悔しさに顔を真っ赤にしながら、ここに至つてブラウンシユバイクも無憂宮の制圧を断念せざるを得ない。もうアマリーエのことは諦めるのだ。

四時間にも及ぶ戦闘の末、残されたのは五千もの死体だ。半分は戦斧、半分は矢で死んでいる。そのほとんどはブラウンシユバイクの兵である。二百人いた装甲擲弾兵は三十人ほどが失われ、百人は負傷している。

凄惨な戦いだつた。

敵兵がどこにもいなくなったのを見て取ると、ようやくオフレッツサーは戦斧を取り落とした。もはや握る力も残っていない。

そして膝から崩れ落ちる。一瞬後、音を立てて地面に倒れ、そのまま横たわつた。  
もう意識はない。

いったいいつからだろう。それでも戦い続けていたのだ。  
美姫アマールエを守り抜いた。

これまでの生き様が、最後に大きな華となつて報われた。  
自分のやってきたどんな戦いよりも満足だ。いや、この最後の戦いのために今までが  
あつたのではないか。

オフレッサーは今、一人の勇者として後悔のない戦いを終えた。

## 第九十六話 488年10月 微笑み

戦いは終わったが、オフレツサーは意識を失い動けない。

無憂宮の建物に急ぎ運び込まれ手当てを受ける。もちろん重傷だが、なんとか一命は取り留められた。

半日後、再びオフレツサーは目を開けた。

何かが見える。

仮設寝台に横たわっていた自分だが、驚いたことに皇帝アマリエの顔が間近にあった！

「よくぞ、ここまで忠義を尽くし、妾のため戦ってくれた。見事じゃ」

アマリエは今、伏し目になり、ようやくそれを言った。

オフレツサーはその顔を見て気付くことがある。

頬に涙の線が隠れようもなく通っているではないか。おそらく、床には雫が溜まっているのだろう。

それだけでも驚きなのに、オフレッサーが意識のないうちに触れたのだろうか、その手にも袖にも血が付いている。

しなやかな手も、高貴な衣装も血で汚すことを何もためらわなかったのだ。

「皇帝陛下！　なんともつたいない、そのお姿は」

「オフレッサー、見事じゃった。よく約束を守ってくれた。妾にはせめて戦いぶりを見てやる義務があつたものを、途中から見ておれなんだ。悪い皇帝じゃ」

「そんな、過分のお言葉にございます、皇帝陛下。装甲擲弾兵総監として陛下を護り奉つたまでのこと。臣下として当然のことはしただけにありますれば」

「済まぬオフレッサー。本当に済まなんだ。その方が傷つくことはなかったのじゃ。全ては妾の我儘から出たこと。妾がブラウンシュバイクめに最初から従い、白旗を上げておればこんなことにはならぬのに」

オフレッサーは自分の体の痛みにもかまわず、多数の兵に屈することもなく、戦い抜いた。それは口先で何とでも言えるような浅い忠義ではない。

そしてその忠義はただ一人、皇帝アマリエに向けてられたものだ。

しかしアマリエからすれば自分のせいでオフレッサーが傷ついた。それも事実であり、詫びるしかない。

「いえ、臣のこんな傷など陛下が心配あそばすに及びません！ 陛下は陛下のお考えで動けばよろしいのです」

「その結果がそちの命も危うい重傷か？ オフレツサー、妾のつまらない意地のためにそちが傷ついた。これほどまでに、深い傷を」

「とんでもない！ 陛下に従うのが世の道理。陛下の意に沿わぬことがあつてはなりません。今回武力をもって寄せてきたのはブラウンシユバイク公の方、どちらに非があるかは明らか！」

だがオフレツサーはそれが当然と言う。アマーリエのために戦つたのだ。自分の傷に構わず、勝利を喜び笑つてほしい。

「皇帝陛下、美しいお顔を曇らせなさいますな。敵は逃げ去り、オフレツサーはこの通り生きております。陛下が気に病むことは何もございません。笑つて下さいませ。それが下賤なる者のわずかな望みでございます」

普段なら言えるはずがない。この時だからこそ言える願いをオフレツサーは言つた。

アマーリエは思い出す。かつて似たようなことを言われたことがある。「可愛いアマーリエ様、いつも笑つたお顔をお見せ下さいませ。このゾンネが心配の虫を退治してあげますから」

もう一度泣いてしまう。

アマリーエはオフレッツサーの無私的心と自分に対する忠義に触れた。アマリーエへの深い思いやりが感じられる。

その真心が、とてもとても暖かい。

「護つてくれて礼を言う、オフレッツサー。いいえ、礼を言わせて下さい。ありがとうオフレッツサー。どう償いをすればいいのか」

アマリーエは深く膝を折った。

その仕草は銀河帝国皇帝のものではなく、一人の女だ。

再びその両手を伸ばす。仮設寝台から起きられないオフレッツサーの左腕と肩に優しく添える。

ふいに全ての指を握り込んだ。

「ありがとう。そしてよく生きて戻ってくれました。よく一人にしないでくれました」  
ついでアマリーエは顔を伏し、額をオフレッツサーの腕に押し当てた。

「この先もずっとずっと、一人にしないと、今度はその約束を」

美しい皇帝が号泣している。

その涙は、これまで水晶細工の心に重ねられた傷の代価を払い、癒やすものなのだろうか。

自分に縋って泣く美姫に、オフレツサーは今度こそ本当にどうしていいか分からなくなつてしまつた。

一方、ブラウンシュバイク公は間もなくガイエスブルクへ逃げ去つた。

どんなに卑怯と言われても、身の安全を圖つたのだ。もちろん迫りくるラインハルトへの恐怖のためである。おまけに無優宮においてアマーリエに敗北したのも大きい。アマーリエはその後何も言つてこなかつたが、その不気味さは逆襲を圖つているようにも見えたからだ。もうオーデインは安住の地ではない。

当然のごとく、付き添うアンスバツハは溜息をつく。こうなるだろうことは薄々感じていた。自分の優れた方策は何の意味もなく、ブラウンシュバイク公の精神的弱さを突かれただけで瓦解するのだ。

どうせガイエスブルクに行つたところで延命にしかならない。かえつて何の政略も打てず、逆転の目を完全に断たれてしまつた。

そしてブラウンシュバイク公が何もかも放り投げて去つたオーデインが混乱に陥るのは当たり前である。ブラウンシュバイク公とその側近、つまり統治機構の最上部が突



如崩壊したのだから。残された官僚や下級貴族は右往左往するばかりである。

そこへエルフリーデが降り立つ。ブラウンシュバイク公の逃亡、つまり謀略の成功を確認すると、混乱を素早く鎮めなくてはならない。

その手始めは皇帝アマリーエと折衝していくつかの取り決めを交わすことである。

意外なことに折衝はスムーズにいった。

アマリーエにとつてお飾りの皇帝という立場などもうたくさんだ。かといって自分が帝国皇帝らしく全てを考え、全てを決め、権力を行使するのも重荷に過ぎる。自分のことばかりではなく帝国臣民のことを思う気持ちがあるからこそ悩んでしまうのだ。

もう皇帝位はできれば他の人間に譲りたいとまで思っていたのが本当だ。

「アマリーエ陛下、一時の混乱はあれど、銀河帝国をしつかりと立て直さねばなりません。それが我が叔父リヒテンラーデ侯の終生の願いでもありますれば」

「そう、確かにリヒテンラーデ侯は帝国のために力を尽くしてくれておった」

「申し上げにくいことなれど、そこでリッテンハイム家の遺児サビーネ様に皇帝位の禅譲をお願い申し上げます。サビーネ様はゴールデンバウム王朝の血をひく御方、官僚も貴族たちも納得いたします。そして何よりローエングラム元帥との宥和が成し遂げられますよう。最初から密約で結ばれていたのですから」

「ここではつきりとエルフリーデは皇帝位を譲ることを求めた。」

それは決して勝者が脅すということではなく、誰にも幸せをもたらすものとして伝えるのだ。

「そうなれば陛下、帝国は揺るぎないものになります。そしてローエングラム元帥の軍事力によって叛徒を抑え、またフェザーンとの協調も同時に達成できるのです。帝国の心配ことは全て消え去り、このオーディンも以前にも勝る繁栄が約束されるでしょう」  
おそらくエルフリーデの言う通りなのだ。それが一番なのだろう。ただしアマーリエにとつては自分が役に立たなかつたことを突き付けられるのと同義である。

だが、それだからこそ、最後はきつちり皇帝らしいことをしなければならぬ。

「よい、わかつた。妾にも夫のやりようは苛烈であり臣民が動揺しておることは分かつておつた。むしろ今まで目をそむけ、責任をから逃げておつた。何としたことよの。本当に皆には済まんと思うておる。そんな妾に皇帝の器はない。むろん退位はかまわぬ」

この言葉を引き出し、エルフリーデは安堵する。

アマーリエは善良な人間であり、権力の亡者などではなかつた。最悪の場合も想定していたが全く無用に済みそうだ。

「その賢明な判断、さすがに陛下です。今後、アマーリエ陛下には安寧な生活を営んで頂きながら、帝国の興隆をご覧頂きますよう」

「そうじやの。姪のサビーネがこれからどう帝国を導くのか、見守ろう。できれば万民を幸せにしてもraitたい」

「ありがとうございます、陛下」

「しかし少なくとも妾と娘は手が届く範囲で幸せがあれば充分じや。それが人にとって一番のこと。無駄な財貨も虚飾もいらぬ」

それは熾烈な宮廷闘争の中を皇女として育ち、そして皇帝になった者が言う重い言葉だ。

人の幸せとは何だろう。

そしてアマールエは何気なく言葉を付け足した。

「従者も多くは必要ない。妾の近衛としてオフレッサーがおればよい」

そこまで多くの事情を知らないエルフリーデはむろん肯定する。

装甲擲弾兵の武勇は聞いている。近衛としても妥当だ。

会談の最後の最後、アマールエは努めて棘の無い声で軽く言った。

「そうじや、エルフリーデとやら、一つ頼みがある。なに、ちよつとしたことじやが是非聞いてもらいたたい」

「何なりと、陛下」

「あのオットー・フォン・ブラウンシュバイクを、きつと殺せ」

夫婦の業というものを思い知り絶句する。

さすがのエルフリーデも背筋が凍った。

そしてこれ以降、元銀河帝国皇帝アマリーエとその娘は歴史の舞台から姿を消す。

装甲擲弾兵総監オフレツサー上級大將の行方も同様だった。

オフレツサーの武勇を惜しむ声も決して少なくなかったが、本人の希望もあつてのとだと説明された。

政治的反動分子からのテロを防ぐため移住先の惑星は固く秘匿され、ついに歴史書にも名が書かれることはなかった。あのエルフリーデが万全を期したのだから当然かもしれない。

それは旧ブラウンシュバイク領の惑星とも噂された。あるいはかえつて遠くを選びフエザーン近くの惑星であるとも言われた。また、名を変えオーデインのどこかに住んでいたと主張する者もいる。そのいずれも根拠がない。

ただしアマリーエは死んだり害されることはなく、そのまま長く生きた。

しかも、ついに幸せを掴み取ったのだ。

それだけは確実視されている。全てを取り計らったエルフリーデが事あるごとにそ

う語っていたからだ。

かつてアマーリエはどんなに願っても乳母たちに一人置いていかれた。

しかし今、ようやくその呪縛から解き放たれる。その痛みを忘れていい時がやってきたのだ。

ゾンネの記憶もまた長きに渡ってアマーリエの苦しみだった。

やっと今、あの柔らかな微笑みと共に思い起こせるように変わった。それこそが乳母ゾンネが望んでいたことではなかったか。自分についての記憶が苦しみになることなどゾンネは決して望まず、アマーリエの幸せだけを願っていたのだから。

微笑もう。

これからはそれができる。

アマーリエには今、どこまでも一緒に生きると約束してくれる勇者がいる。

## 第九十七話 488年11月 二匹目のドジョウ

ブラウンシュバイク公は途中妨害を受けることなくガイエスブルク要塞に到着する。ヒルダとしては無理に攻撃したり待ち伏せることも必要ない。むしろ要塞に辿り着いてもらわねば困る。

そこから先は簡単だからだ。

ヒルダはガイエスブルクへ既に工作員を入れてある。そしていつでも破壊工作ができるように仕組んであったのである。

それをさせるのにうってつけの人物がいた。

先にフェザーンに逃亡してきたシューマツハ大佐と部下たちだ。

シューマツハ大佐はあのフレーゲル男爵の惨めな死に立ち会ってる。いや、それどころか実行犯になってしまった部下たちを逮捕もせず庇い、一緒に逃げる道を選んでいたので。

もちろん部下共々帝国のどこにも居場所はない。こうなればフェザーンを経由して

亡命し、どこかの開拓惑星にでも行って地道に生きるしかない決めていた。

しかしそれさえも簡単ではなかった。

以前とは異なり、近頃は亡命も簡単に受け入れてもらえないからである。結果、先行きのないままフェザーンに留まらざるを得なかった。

人格が清廉であり、かつ実力もある者として密かにリストに入れている。

そんなシユーマツハ大佐本人との交渉については、ヒルダらはフェザーンに委ねて出立している。というわけで具体的にはルパート・ケツセルリンクが担当した。

ルパートはダイナミックな戦略と凄みにおいて父アドリアン・ルビンスキーに及ばないのを自分でよく分かっている。しかも発想力は妹エカテリーナに劣る。そこでルパートは自分の貢献できる分野で補佐に徹しようとしている。

ルパートの強みとは、何の策でも実行するにあたって不可決になる交渉力だ。これが無ければ物事は進められない。

いかに理屈上は誰もが利益を得る話し合いであっても、ちよつとした行き違いで話が壊れることはいくらでもある。話をいつでも確実にまとめ上げるには思った以上の技術が必要なのだ。

それを持ち合わせている数少ない人物がルパートだ。

今、嫌々ではなく積極的な協力をレオポルド・シューマツハ大佐から引き出す必要がある。

「シューマツハ大佐、フェザーンに来た顛末は調査させて頂きました。災難でしたな。下の者の命など考えない主君に仕えるとは、なかなか大変だったでしょう。同情を禁じえません」

「挨拶は立派で痛み入るが、フェザーンは何を考えている？ 同情などしてくれなくていい。早く部下たちに安寧な暮らしを約束してほしいものだ。いくら貧しい惑星でも構わない。辺境の開拓惑星にでも送ってくれ。そこで働き、ささやかに暮らしたい」

シューマツハ大佐にも猜疑心がある。なぜフェザーンの補佐官がわざわざ出向いているのだ。逮捕するつもりなら別の者がくるだろう。

「亡命というご希望に沿いたいのは山々です。しかし、やったことの巨大さを考えますと、それもちよつと。何しろ銀河帝国を實質支配しているブラウンシユバイク家の中枢であったフリーゲル男爵を斃した実行犯まで含むとなれば、これは重大なこと。ご希望に沿うことは政治的に難しいことをご理解頂きたい」

「それでは直ちに帝国へ引き渡したらどうだ。それをせず、こうして話を始めるとは素直ではない意図を感じる」

「なかなか大佐は頭が切れる方のようです。喜ばしい。私の話は簡単、ただし前提があ



ります。率直にお聞きしますが、亡きフレーゲル男爵への忠誠心の泉はどれほど保たれていますか。もちろん出頭せず逃亡していることから類推はできますが、長いことブラウンシュバイク私領艦隊におり、大佐まで出世しているのも事実、是非お答え頂きたい」

「それを聞く意図が不明な以上、無いとも有るとも答えられんと言っておく」

「結構。今のは思慮の深さを試すテストのようなものです。もちろん、もう忠誠がないのは分かっていますから」

それはルパートの嘘だった。まだ忠誠があると答えられたら困ったことになる。もちろんルパートはおくびにも出さない。

こうやって冗長に見えるほど話を重ねていくのにも目的がある。

自然と相手は舞台上に乗り、術中に引き込まれてしまう。これが交渉というものである。

「簡単に言ってくれ。フェザーンは我らに何を望んでいる？」

シューマツハの精一杯の強がりだ。

何も持たず、ただ逃げてきたシューマツハラには選択権がない。帝国に引き渡されたらそれでお終いであり、そうでないとしても、フェザーンの助力がなければ生活の拠点

を確保できない。

「シューマツハ大佐、順番を変えて話すなら、今回やつてもらいたい仕事の報酬を先に申し上げましょう。もちろん仕事は一回限りで充分です。その報酬とは確実に亡命の手筈を整えて差し上げることです。しかも部下全員と共にご希望の開拓惑星に行けるようにします。やや貧乏ではあつても、過酷な所ではないようなところへ。それに開拓に必要な設備も言つてくれるだけお付けしましょう。もう一つ、誰も足跡を追えないような措置もつけて差し上げます。ご希望に対し十二分に応えられると思ひますが」

「希望が分かつていたような報酬だな。至れり尽くせりだ」

これにシューマツハは乗る。いや、乗らざるを得ない。

フェザーン側に感謝すべきだ。何から何まで考えてくれた提案であり、これで部下たちは安心した暮らしができる。

「了承した。それで、結局何を」

「端的に言えばブラウンシユバイク公に引導を渡して頂きたい。いかがです」

これには大いに驚いた！

なるほど、ブラウンシユバイク公に欠片でも忠誠心があればできるはずがない仕事だ。しかし実際の所ためらう心などどこにも存在しない。

「分かった。引き受けよう。ただし、それが終わればもう軍人の仕事などたくさんだ」

シューマツハラはフェザーンの指示通りの行動を開始した。ガイエスブルクにうまく潜入する。

平時のガイエスブルクならそんなことはできるはずがない。いくら何万人もの兵士が詰めているとしても、帝国軍兵士は名と所属をはっきり管理されている。行動範囲も定められている。それを超えたら直ちに不審行動として拘束されてしまう。

いくらフェザーン特製の偽造IDでも無駄だろう。その厳しきについては、もともとスパイの対策ということではない。宇宙での戦いの特性のためだ。行方不明と戦死の区別がどうしても判別しにくい宇宙では、兵の居場所が重要であり、その把握をしつかりやっておかなくてはならないからだ。

ただし今、ガイエスブルク要塞はごった返している。

シャイド男爵のことを聞きつけた近隣の貴族がブラウンシユバイク公と同じようなことを考え、安全を求めて続々とガイエスブルクに詰め掛けてきていた。貴族たちは勝手に庇護を求めてやってくる。もちろん従者や護衛の私兵団までも連れてくるのだ。

それをガイエスブルクの方ではむげに拒否もできない。内乱時の貴族保護もまた帝国軍の任務の一環である。

そしてガイエスブルクに入った貴族たちは勝手気ままに動くこうとするのだ。あえて

そうするのではなく、貴族らしい行動を変えなければそうなる。行動制限もID確認も貴族にとつては面倒なことに過ぎず、あつという間に骨抜きにされてしまう。

通常は帝国軍兵しかいないガイエスブルク要塞がこんな有様になってしまえば隠密行動することも容易いことだ。

シューマツハと部下たちは架空の輸送部隊を装って乗り込めば、あとはどうとでもなる。

そしてやるべき仕事は暗殺などではない。さすがにそれなら難しいだろう。やるべき仕事はもつと簡単なこと、内部からちよつとした工作するだけでいいのだ。

ガイエスブルクの主砲ガイエスハーケンの回路に仕掛けをする。いつでもそれを使用不能にできるように。

その頃、フェザーンのエカテリーナは別のことにかかりつきりになっている。

「ヒルダたちはブラウンシュバイク公の打倒に勤しんでいるわね。それしかラインハルト様と対等に交渉する方法がないのだから仕方ないけど、そんなに単純かしら。成果を上げてそれでラインハルト様が引つ込み、帝国宰相くらいの地位で満足するなんて。そしてサビーネ様を皇帝に立てて、それに従うって」

あり得ない。

それは甘い予想だと直感が言っている。

ヒルダらと違い、エカテリーナはラインハルトの幼年学校時代をよく知っているのだ。ラインハルトの覇気の強さを誰よりも感じている。

だつたら決まっている。

ラインハルトはおそらく帝国宰相くらいで満足しないだろう。宇宙を全て握り、君臨するまで歩みを止めることはないに違いない。強すぎる覇気はそれ以外の道を許さない。

「この情勢の中でできるだけのことをするしかないわね。ラインハルト様に媚びを売っても一時しのぎにしかならず、フェザーンは必ず狙われる。フェザーンの独立は風前の灯というべきだわ」

ここまで考えている。

そして、今までのやり方は通用しない。帝国と同盟の軍事的バランスを保たせ、その均衡のもとにフェザーンを窺うゆとりを持たせない、そんなことはもうできない。

自由惑星同盟はアムリッツアの敗戦によつて弱り過ぎた。再建はまだまだ先の話だ。

そしてラインハルトが悠長にそれを待つはずがない。この隙に同盟へ致命傷を与えようと行動を起こすだろう。

エカテリーナは心情的にむしろラインハルトらに好感を持っている。

その性格も分かっている。辛辣さもあるが、基本的には純粹で、良きところも多いのだ。やろうとしている宇宙の覇権争いも小気味いい。

ただし、エカテリーナとしてはフェザーンの発展を第一に考える必要がある。

先にミュラーを得たのは大いに喜ばしい。これでフェザーン艦隊の体裁が多少は整う。しかし、欲を言えばまだ足りない。もっともつと艦隊という実力が欲しい。

それについて、エカテリーナは既にヒルダに相談していた。

「この先、情勢がどうなるにせよ充分に抵抗できる戦力を持つしか、フェザーンが生き残る術はないわ。戦力がなければ受動的な立場にしかならない。そうではなく自分の足で立ちたいわ。でも、フェザーンの財力をもつてしても艦はともかく人が足りない。特に指揮官が足らなくて戦力たりえない。ヒルダ、あなたに聞きたいのはそのことよ」

ヒルダは少し考え、エカテリーナの意に沿う方法を明確に示す。

「それなら、二匹目のドジョウ狙いでいけるでしょうね。エカテリン」

この意味をエカテリーナは即座に理解した。

状況は以前のカストロプ動乱の時と同じだ。あの時も艦隊指揮官を工面することが必要で、帝国内の捕虜收容所を襲うという奇策をヒルダは用いている。その結果、なん

とかアーサー・リンチ少将を強奪できたのだ。そしてカストロプ艦隊はその指揮によって思いもよらず善戦している。

そして今言うのは、またしても帝国内の捕虜を強奪することだ。

「なるほどそうね、ヒルダ。それもできるわね」

「エカテリン、この方法は三度は絶対できない。でも二度はできる。一度目よりもっと簡単だと保証するわ」

通常なら同じ泥棒など二度目はうまくいかないと考ええる。

先のカストロプ動乱での失態があり、もちろん帝国軍は捕虜収容所の警備を嚴重にしていた。しかし、逆にそう考えるからこそもう襲撃など企むものはいないと油断してしまふものである。

心理の裏をとる作戦だ。さすがに戦略家ヒルダである。

今度はフェザーン艦が帝国の捕虜収容所へ一気に襲撃をかける。

具体的な策を練り、躊躇なく実行する。

強奪というようなこつそりしたのではなく、もはや大規模な侵攻に近い。どうせ邪魔者は現れないと見切った上での行動だ。

## 第九十八話 488年11月 両翼

フエザーンに戦鬪艦はあれど人がいない。それには理由がある。

先のキフオイザー会戦後、エカテリーナらは敗北したリッテンハイム家私領艦隊がフエザーンに逃げてくることを予期し、待ち受けていた。

ただしそれが想定よりも相当上回る数となった。五千から一万隻と見積もっていたのに、結局その倍を軽く超える数になり、未だ天井知らずで増え続けている。

それはキフオイザー会戦において徹底抗戦を命じられていかなかったせいだ。むしろリッテンハイム侯は自分の死後殉死するのを求めず、残存艦隊に逃げのびるよう最初から命じていた。

また勝った側のブラウンシュバイク私領艦隊では、アンスバッハが掃討戦を考えていなかった。逃げ散った艦隊に用はないのだ。ブラウンシュバイク家が勝った、覇権を握った、という政治的宣伝の意義だけで充分と思っていたのだ。

そしてリッテンハイム私領艦隊には帰るところがない。リッテンハイム領に帰って死守しようと思っても長く続けられるはずがない。確執を続けた二大貴族の決着は甘



いもので済まないだろう。帝国が安定してきたら討滅されるのは明らかである。いずれはリッテンハイム家に味方した不埒者ということで残忍な処刑が待っている。

そんな運命よりはフェザーンへ逃れる方を選んだ。フェザーンならば回廊を通って亡命できるかもしれないし、そうでなくとも帝国の威光が届きにくい。

その敗残艦隊の対応にフェザーンが追われていたころ、何と次にはラインハルトに敗れたブラウンシュバイク艦隊の残党がやってきた。

仇敵の艦隊同士が同じところに時間差を付けてやって来た、という何とも皮肉な事態である。

その二つの共通項は敗残の身だということだけだ。

ラインハルトに敗れたブラウンシュバイク私領艦隊は、尚もオーデインに戻り帝国軍の殻を被る場合もあったが、もはやブラウンシュバイク公やフレーゲルに愛想を尽かして戻らないことも多かった。

彼らは身をもつてラインハルトの強さを知っており、戦い続けられずれヴァルハラ行きが確実になることが分かっている。

ともあれ逃れてきた艦隊は衣食住を得るため、価値のあるものとして艦を提供するし

か方法がない。逆にフェザンとしてもそれしか代価として取れるものがない。

むろん敗れた側の艦艇というものは、多くの場合被弾しており、船殻に亀裂があるか、そうでなくても少なからず歪みがある。内部の推進器も無理を続けたため損耗している。過負荷が続くと熱に弱い部品から急激に劣化するのだ。フェザンの修理技術をもつてしても使い物にならない艦は多い。

しかし逆に使える艦もある。フェザンに引き取られる戦闘艦がうなぎ登りに増えている以上、そういった艦もまた貯まっていくな。

おまけにその以前からエカテリーナは自前での艦隊の充実を続けている。

ミユラーが自分から来なくともいずれスカウトし、指揮をさせるつもりだったからだ。

カストロプ動乱時にも艦隊は形になりつつあり、だからこそ貸与ということができた。

その後も艦を手に入れる見込みは立っていた。動乱があれば、どうせ貧窮した貴族が手持ちの私領艦隊を売りに出し、現金化をはかることを予想している。暴落した値段で艦をいくらでも買い叩けるのだ。フェザン艦隊を安く整える絶好のチャンスである。

それに加えて今、これほどの逃亡艦が来ている。

そして艦隊維持費用ならフェザーンには十分な経済的余力がある。

帝国に動乱があらうとなかろうと、着々とフェザーンは資産を作り上げている。全銀河の十三%を占めると言われる経済力は伊達ではない。フェザーン商人たちは状況に適応して抜け目なく稼ぎ続け、その一部を税金として渋々納める。

元々フェザーン政府はアドリアン・ルビンスキーの努力もあつて債権はあつても負債はなく、健全な財政だつた。余剰の資本は債権投資という形で同盟に地歩を築き、同時に同盟政府へ影響力を行使する。戦略上それは必要だ。

無かつたのは軍用艦を丸ごと一隻作り上げる施設だけだ。警備艇、巡視艇を作るのと艦隊戦を行う戦闘艦を作るのでは施設の規模が違う。

帝国の目がある以上、そこまでフェザーンが持つことはできなかった。帝国軍はフェザーンに軍用部品を発注することはあつても艦そのものを作らせることは避けていたからだ。その一点さえ押さえれば、帝国はフェザーンの軍事力増大を恐れなくて済む。

修繕や交換部品について、軍用の特殊な材料や部品であれば要求される精度や信頼性は桁違いになるが、それでもフェザーンには対応できる技術力と生産力がある。それはこれまでで培ってきた実力だ。

ついでにフェザーンならではの技術的優位点をもたらす要因がある。

フェザーンは完全な自由競争ではないが経済の統制については帝国よりはるかに緩

く、むしろ同盟に近い。しかも市場はフェザンだけ見れば小さいものだが、事実上帝国と同盟のどちらも市場にできる地の利がある。それなりに技術開発投資ができるのだ。それに帝国か同盟の技術情報をどうしても手に入れようと思えば、どちらから手に入れられる。

そして今から戦艦を作ろうと思えば、小型艦に限れば民間用から転用も可能だ。だが、大型の戦艦などについてはさすがに困難である。必要なものが無さ過ぎる。武装の検査機器も、厚い装甲のための溶接設備もない。帝国がこういったことは許さなかったのには相応の意味がある。

だが困難を乗り越え、エカテリーナの尽力もあつてようやく作り上げられる。試作や検証が終わり、複数の設備でいよいよ量産体制に入った。

まだまだ少ないながらもフェザン製の大型戦艦も存在するのだ。

しかし艦の数だけ増やしても運用できるかは別の話になる。

付随する係留施設や、病院、あるいは兵舎という後方部であれば財力を使った急ごしらえでもなんとかなるだろう。

ただしどうにもならないことがある。

決定的に人員が不足している。

フエザンへ逃れてきた貴族私領艦の乗員の大半は同盟領に亡命するか、あるいはいくばくかの金銭と共に故郷へ帰ることを望んだ。元々私領艦隊の兵士は戦争が職業ではなく、軍人という意識は薄かったのだ。そのため軍というものにこだわりはなく、艦艇を換金したら別の生き方を探るのに抵抗がないものだ。

後方の整備士、あるいは経理などのホワイト層なら人員も不可能ではない。艦艇に乗り組む人員でも機関部や通信部などであれば、募集から短期間の訓練でなんとかなるかもしれない。

だが、砲術や火器管制となると話は全く異なる。

まして指揮を執るべき上級士官となると決定的にどうにもならない。

フエザンにはまともな士官学校すらなかった。

宇宙船の乗組員といえば民間船のための乗員訓練校と、一部に警備艦や護衛艦のための訓練校があるだけだ。そこでもせいぜい武器の取り扱いを教わるだけで、戦術理論も何もない。

まして格闘術も空戦訓練もない。戦争をしていないのだから当たり前だ。

エカテリーナは将来を考えて学校自体を新しく作り始めているが、もちろん士官養成には数年を要する。これだけは財力をいくらかけてもどうにもならない。急激な需要に対応するのは最初から無理だ。

その中でも高度な能力を要する艦隊指揮官を用意するのは全く不可能である。それは知識だけではなく経験が加わってはじめて出来ることなのだから。

それを一挙に解決すべく帝国の捕虜收容所を襲う。

帝国に対する言い逃れを一応準備しているが、おそらく必要ないだろう。今の帝国はそれどころではない。ブラウンシュバイク側もラインハルト側も来れるはずがない。

ミュラーはこの作戦に参加していなかった。

それはエカテリーナがミュラーには帝国軍と敵対行為をさせるには早いと判断したせいである。

そして作戦はうまくいった。ヒルダの言った通り、收容所の帝国軍が意表を突かれたということもある。だが、基本的にはアムリツツア会戦で帝国が得た捕虜の数が多過ぎて、どの收容施設も膨張しきっていたのだ。一気に二百万人に近い数が加わったので当然である。警備も手が回っていない。

フェザーン側は凄惨な戦闘などする気はなかった。しかし気付かれないように隠密行動をすることもない。

むしろ逆だ。警備の帝国軍地上部隊を圧倒する数の艦で覆い切り、抵抗する気力を奪った。

それでも警備をする側が素直に降伏するかどうかは別の話だ。捕虜に逃げられるくらいなら皆殺しにするという選択肢すら存在する。それ用の重火器や毒ガスさえ用意されていた。

どうすべきか、悲鳴に似た通信がオーディンへ飛ぶ。指示を仰ぐためだ。

だが大変に間が悪い。

その頃、ブラウンシュバイク公はアマリーエの騒動の最中であり、遠い捕虜收容所の話など聞きもしなかった。

フェザーン側が降下し收容された捕虜を解放しだすと、後は予想通りの動きになった。捕虜は自由を得るやいなや他の仲間を助けに動く。もちろん、一般人などではなく兵であるから、どこをどうすればいいかは自分たちで充分考えて動く。

膨れた風船を割るごとく一気に事が進んでいく。

フェザーンはついとばかりに帝国領侵攻作戦失敗で鹵獲された同盟艦艇も奪う。

幸いなことに同盟艦はほとんど処分されていなかった。有用な艦内設備を取り外し、帝国艦に転用するのは規格が違い過ぎたために難しかったのだ。それが終われば大半の艦体は恒星投棄処分されるはずだった。それでなければ訓練用の標的だ。艦体自体の帝国軍への転用は考えもしていない。

捕虜收容所から解放した人員は用意した輸送艦でフェザンへと運ぶ。

そこからは無理強いはず、希望に任せる。

同盟に帰らせるのなら同盟政府に恩を売ることになる。フェザンの兵士募集に応じてくれるのなら万々歳だ。その割合は決して多くなかったが。

しかしフェザンの目標はそんなところではなく、一番は将官の人材なのである。帝  
国領侵攻作戦で降伏して捕らえられていた同盟将官は何人も存在し、今は身柄をフェ  
ザンがいつたん確保した。予定通りだ。

ここからが難題である。この帝国に喧嘩を売ることがとく危険な冒険が実を結ぶかど  
うか、正念場だ。

エカテリーナは知っている。

艦隊指揮は強いられてできるものではない。拘束したり騙したりしてさせることは  
できない。

自発的に、納得することが必要だ。それはとても難しいことになるだろう。

自由惑星同盟軍の将はもちろん同盟軍にしか忠誠心を持たない。

故郷を愛するというだけではなく、自由と民主主義の旗というイデオロギーを信奉  
し、それに従うからだ。よほど偏屈であり、同盟軍に対して常に不平を言っている者で  
さえ、同盟軍以外で働くなど冗談のようなものだろう。



フェザーンは帝国であつて帝国ではなく、むしろ同盟に近いというのは詭弁だ。帝国軍で働くのなら、裏切りで論外だが、フェザーンであつても微妙に裏切りの範疇ではないか。同盟ではないのだから。

かつてカストロプのために働いたアーサー・リンチの場合は事情が異なる。同盟では民間人を見捨てた卑怯者とされ、仮に同盟へ帰郷できても石を投げられるだけだった。それは特別なケースだ。しかしそれでも内心は納得していない。

しかし今、フェザーンに連れてきた同盟各将はアムリッツアの敗戦の責任はなく、堂々と同盟に帰れる立場である。

これらを説得できるものだろうか。あまりの困難さにエカテリーナは考えあぐねる。自分で考えて分らないことは人に頼る。それは決して恥ずかしいことではない。

エカテリーナは兄ルパート、交渉の達人に聞いた。

ルパートはちよつと首をかしげて考え込んだ。ルパートは顔には出さないが自分の得意分野で頼ってくれたことが非常に嬉しい。

「エカテリン、ちよつと悪辣かもしれないが、これでいこう」

ルパート・ケッセルリンクの真骨頂がまた見られることになった。

## 第九十九話 488年11月 運命の糸

フェザンは、同盟捕虜の一般兵へ向けて事実を伝える。

アムリッツア会戦での同盟軍上層部の無策と人命軽視だ。少しの誇張も必要ない酷い現実であり、兵士たちは改めて義憤に駆られる。その上で、フェザンはフェザン艦隊へ留まってくれた場合の有利な報酬を提示する。

これで、決して多くはないが兵士のうち一定の人数はフェザンに残ることに決めてくれた。

だが、将官へはこんな手は通用するはずがない。長く同盟艦隊のために労を尽くし、忠誠心に溢れた将を利で釣ることなど到底不可能だろう。

「まあ難しいだろうね。交渉は僕がするからエカテリンはついておいで」  
ルパートは軽くこう言い、同盟将官との交渉のテーブルについた。

「正直にフェザン側の希望を伝えます。フェザンに移籍し、ようやく数が揃ってきたフェザン艦隊を率いて頂きたいのです。将がいなければ艦隊は張り子の虎にしか

ならず、役に立ちません。どうか力をお貸し下さい」

ルパートははつきりと最初からフェザン側の要望を伝えた。

ここに同席しているエカテリーナは驚いてしまう。ルパートがゆるゆると状況説明から入り、雰囲気作りから始めると思っていたのだ。そして外堀を埋めて選択権を奪うのだらうと。

ルパートが話すのはエカテリーナにとって正直過ぎることで、とうてい交渉術を弄しているようには見えない。

当然どの将もあっさりと断る。アップルトン中将も、ホーウッド中将も、ルグランジユ中将も。他の少将以下も皆そうである。

「そんなことはできるはずがありません。能力を評価して頂くのはありがたいことですが、お断り申し上げます」

「しかし我がフェザンと自由惑星同盟は敵対関係になく、むしろ協力関係に近い間柄ではありませんか。難しいことではないはずです」

「ですが我が同盟と同じはありません。思想も体制も違うのは明らか。フェザンには民主制の根本である一般選挙が行われていない、その意味では帝国と同じです。世襲ではなく実力主義というところは帝国と違うでしょうが、それだけです。つまり移籍という穏やかな言葉を使われていても実質亡命に近いものでしょう。長らく同盟軍の祿を

食んだ者としてとうてい無理というものです」

一度目の交渉はこれで終わる。

あつさり不首尾になったことを不思議がるエカテリーナにルパートは言う。

「不調に終わったように見えるのかい、エカテリン。今のは相手の方に状況を整理させるよう仕向けるものだよ。ただそれだけの意味だね」

それでもルパートは飄々としている。

一日置いて、また会談を持つ。

各将としてはフェザーンの要望はもう分かったことで、また同じ話かと思っていた。熱意は分かるが答えは同じだ。

そこヘルパートが何気なく切り込む。

「重ねてフェザーンへの移籍をお願いする次第です。その点では同じですが、言い忘れていたことをここで付け足さなければなりません。艦隊指揮を引き受けてもらえれば、他の方々については自由惑星同盟に送り返しましょう」

そういう約束を持ち出した。

ルパートが悪辣と言ったのは、それぞれの将を呼び、この言葉を個別に言うところである。

誰かがこれに乗ればいい。それが自己犠牲の精神であつても。

どのみち将官の全員を手に入れることはできないという感触だつた。それなら情に訴えることに使うべきなのだ。

実のところフェザーンにどうしても靡かない場合、飼い殺しにする予定はない。同盟に返すこと自体は予定しているので嘘ではないのだ。

「アップルトン中将、これは脅かしではなく要望です。重ねて申し上げますがフェザーン艦隊に来て頂けないでしょうか。そうすれば他の将、ホーウッド中将、ルグランジュ中将などを解放できるのですが」

言うことは体のいい脅迫のようなものだ。暗にフェザーンは将たちを容易には解放しないことをほのめかしている。ただしあくまで慫慂であり、決して高圧的なところはなく、お願いをするという態度に終始している。

会談の流れと雰囲気を読んでそのバランスを保つのがルパートならではのことだ。

ついでにいえば、ルパートはいつものクリーム色のスーツではなく真摯に見える深い紺色のスーツにしている。

ここで自分が犠牲になれば、他の将は同盟に還れる。この事実を各将は突き付けられた。

「もう一つ申し添えます。この決定には同盟政府からの干渉は受け付けません。侵攻作

戦とその終局でのアムリッツア会戦が酷い人命軽視の産物であることをフェザーンは知っており、捕虜になった経緯についても義憤を感じておりますので」

もつともなことらしく見せながら、更にルパートはほのめかす。同盟政府から将の引き渡しを求められても断り、フェザーンの同意がなければ将は還れない。逆にフェザーンに残ることを決断した将を保護することも含めている。

エカテリーナは上手い、と舌を巻かざるを得なかった。

さすがは兄ルパートの交渉だ。幾重にも重なり、しかも研ぎ澄まされている。一度の交渉は、各将が同盟に自分と、他の将も必要と言う当たり前の認識を再確認させるためのものだった。

意外なことにそれでもホーウッド中將は提案に乗ってこなかった。

当てが外れた。もし提案に乗るとすれば、情に厚いという定評があるホーウッド中將が最も可能性が高いと予期していたのだが。

「フェザーン側の提案は、個人的な感想で言えば大変ありがたいものであると考えています。しかし、残念ですがそれに応えることはできません。なぜなら、利で語るべき次元ではないからです。自由惑星同盟に忠誠を誓った者として、旗を変えることは最初からできないのです。それをすれば自分を赦せないでしょう。むろん、そんな将はフェ

ザーンの役にも立ちません。残念ながら」

ルグランジユ中将はもつとはつきりしていた。苦渋の表情ではあったが、断固として言い切った。

「自由惑星同盟の将は、自由惑星同盟軍のためだけに働く。その矜持は言うまでもなく同盟軍の将帥として当然である。それがどういふ場合であつても。どんな結果になつたとしても、失われることはない」

しかしながら、アツプルトン中将だけは別の考えをした。

もはや形式や矜持に捉われている場合ではない。

同盟にはもうそんなゆとりがない。おそらく同盟軍はアムリツツアの戦いで多くの将を失っているはずであり、そのため再建に大きな障害が出ているだろう。

下手に意地を張り、同盟が帝国によって攻め滅ぼされたらどうなる。

なるほど自分の矜持を守ることは簡単だろう。しかしそのために同盟が滅んだらいくら後悔しても遅い。

真に同盟軍のことを思えば、どんな形であつても将を還すことこそ第一に優先することだ。フェザーンの提案に乗って自分が留まつて他の将を還すことが現実的には正に

最適解ではないか。

しかもアップルトン中将だけは家族がいなかった。

妻とは離別している。仕事熱心なのが仇となった。ただでさえアップルトンの率いる第八艦隊の管区はハイネセンに遠いフェザン方面近くであり、ハイネセンに帰っている時間は少ないが、更にその少ない時間さえ職務に当てていた。

実子はいない。トラバース法によって養子がいたのだが、今は士官学校の寄宿舎にいてもう手が離れている。

帝国軍の捕虜になっていた同盟軍アップルトン中将はフェザンの提案に乗ることを決断する！

運命のいたずらに従い、フェザン艦隊を指揮するのだ。

ルパートは許諾の返事を聞き、安堵した柔らかな表情を見せる。

それだけではない。

ここで心を動かすダメ押しの切り札を放ったのだ。

「こちらの提案を了承して頂き、感謝にたえません。そこでもう一つ付け加えましょう。率いてもらうフェザン艦隊は決して自由惑星同盟軍と戦いません。中将に祖国自由惑星同盟と戦わせたりするものですか。これを約束します」



話が決まると、すぐさまフェザーン側は重要な約束を守った。他のホーウッド中将、ルグランジユ中将を同盟に送り届ける。

他、フェザーンにとって望外にもコナリー少将はアップルトン中将の決断を聞き、その元に行くことを願ってきた。「自分は長いことウランフ中将の副官でした。ウランフ中将と仲のよかったアップルトン中将だけをフェザーンに残すことはできません。一人では手が回らないでしょう」

この重要な交渉に成功したことで、もちろんエカテリーナはルパートを褒めそやす。ルパートも悪い気はしない。

しかし、可愛い妹のために一つ釘を刺すことも忘れなかった。

「エカテリーナ、交渉術は魔法じゃないよ。どちらにも良いと思われる提案を現実にもつていくのが交渉なんだ。その利益配分の多少で罅迫り合いがあってもね、基本はそうだ。交渉は、水が低い所に流れる、それをスムーズにするようなものと思えばいい。どちらかにとって明らかに悪いものであれば、それは交渉ではなく騙しになる。いつときは良くとも信頼関係は失われ、長く続けられない。この違いを分からないといけないね」

「分かったわ。確かに交渉の上手い人は尊敬される。兄さんのようにね。でも騙しの上

手い人は尊敬されることがないわ」

「その理解でいいのかなあ、エカテリン」

こうしてフェザーン艦隊が形を成してくる。

フェザーン工廠の新造艦に、リッテンハイム私領艦隊からの購入艦を選抜したものを合わせ一万七千隻を編成し、ミュラー指揮下の一個艦隊とした。

強奪に成功した旧同盟艦を主体に、ブラウンシュバイク私領艦隊からの購入艦を加え、一万六千隻としてアツプルトン麾下の一個艦隊を形作った。

もちろん過去の遺恨を考慮してリッテンハイム私領艦隊とブラウンシュバイク私領艦隊を同一しない配慮だ。

艦隊編成という側面で見れば空母が少ないのだが、これは艦載機パイロットが少ないのだから仕方がない。なぜなら艦載機は戦いで降伏することが少ないので捕虜はほとんどいかなかったのだ。

逆にやや大型艦の比率を多くしてある。それは、急造の兵では多くの業務を覚えられない。小型艦ではどうしても兼任しなくてはならないことが多く、その意味で大型艦の方が人員育成が楽なのだ。

その他にも戦闘艦艇として実はフェザンにまだ一万隻以上残っているのだが、もう一個の艦隊を作ることとはしていない。修理が必要な艦が多いのに加え、それ以前に乗員も指揮官もいない。いったんプールして置いている。

艦隊に必要なドックや病院などの後方設備はエカテリーナが力押しで作り上げた。艦隊運用の生命線である稼働率をなるべく上げられるよう、惜しみなく投資して整えている。

そしてミュラーとアップルトンの階級はどちらも中将待遇ということにしている。

帝国軍だったら往々にして大将が一個艦隊司令官になるものだが、同盟軍でそれは中将が一般的である。しかし急造のフェザン艦隊ではそういう面が流動的であり、どちらも中将にしたのは二人が同格であるという意味合いに過ぎない。

こうして誕生したフェザンの二個艦隊、指揮官ミュラーとアップルトン、フェザーン艦隊を担う二人は後の世に語り継がれる。

「魔女帝エカテリーナの両翼」という名で。

## 第八章 さらば父よ

## 第百話 489年 1月 ガイエスブルクの広間

「見事なものだ。どんな謀略を使つたか、ブラウンシュバイクをガイエスブルクに釣り出すとはな。もうオーデインで戦うことも必要ない。」

そう言つてラインハルトは感嘆する。

ヒルダはリッテンハイム家の力を見せるため、オーデイン攻略を宣言し、見事成功した。

オーデインを攻め取るという発想ではなく、ブラウンシュバイク公を放逐するわけでもなく、自らオーデインから出る釣り出しという方法で成し遂げた。

ついでに素早く皇帝アマリーエと交渉し、それにも成功している。

「そうですね、ラインハルト様。マリィンドルフ嬢は有言実行をなさいました。確かにこれでリッテンハイム家の貢献も無視できないものになりましたね」

キルヒアイスも肯定する。

事実を述べただけだが、むろんキルヒアイスも内心感嘆しているのだ。

一方、オーベルシュタインは何も言わず、表情も変えない。

その後、ヒルダからラインハルトの艦隊へまたしても連絡があった。

「ブラウンシュバイク公はもはや籠の鳥になりました。あとの料理はお任せします。たぶん損害は軽微でしょう。事のついでにガイエスブルクの主砲ガイエスハーケンも封じておきましたから」

ヒルダは自らガイエスブルクを攻めることなく、ラインハルトに連絡すれば充分と考えた。釣り出す策を成功させたら、やりすぎてもいけないと思ったのだ。

ラインハルトの艦隊はガイエスブルク要塞へ動き出す。

そしてガイエスブルク要塞内ではシューマツハ大佐らが工作し、ガイエスハーケンの回路を破壊した。その後は素早く要塞を脱している。

もちろんブラウンシュバイク公は青ざめるしかない。

さすがに主砲が使えなくなった意味を理解した。安全と思っていたガイエスブルクがこんな体たらくなのだ。しかもタイミングよく破壊工作をされるとは、やはりアンスバッハが言う通り、全てが謀略だった。

「おのれ！ 儂をたばかる者どもが！ 儂を誰だと思つている！」

しかしブラウンシュバイク公が激昂したのは最初だけだ。

そこからは打ちひしがれ、見るも哀れなものに変わつていく。

「死にたくない。死にたくないのだアンスバッハ！ 何とかならんか。命ばかりは助かる方策はないのか」

「もはや手遅れでございます、公爵閣下。間もなくローエングラム侯の艦隊が到着し、無条件降伏を要求してくることでしよう。残念ながら、そこで捕らえられ、後は何かの理由を付けて処刑される運命が待つております」

アンスバッハは淡々としてそれを言う。

もう全ての反撃の芽は摘まれたのだ。オーデインを捨て、ガイエスブルクに来た時点でもう運命は極まつている。ガイエスハーケンを壊されたのはその仕上げに過ぎない。「そんなことを言つてくれるなアンスバッハ。儂は公爵だぞ。銀河帝国随一の貴族ブラウンシュバイクだぞ。それが何で殺されねばならぬ」

「その地位だからこそ生かされることがないのです。お分かりになりませんか」

ここでブラウンシュバイクは最も卑屈な生き残り方を思いついた。

「そうだ、帝国貴族が全て孺子に従うことの象徴になろう。孺子の側に転向するには儂こそ適任で、利用価値がある」

「今さらです。それに、今までの矜持はいかがなされましたか」

「足元にひれ伏し、孺子の靴を舐めれば皆にもそれが分かる。そうだ、それなら孺子も儂を生かしておいてくれる」

自分の命を消さないためだけに全てを捨てるというのだ。

確かに潔いともいえるが、そして繋いだ命に何の意味があるう。仮にいつか逆転し見返すために屈辱に甘んじるといふのなら分かる。しかしそうではなく、ただの卑屈だ。

アンスバツハの表情は暗い。半ば予期していたこととはいえ、実際にブラウンシユバイクの口からそんな言葉が出るのを聞いてしまうとは。

「それがいい。手始めに恭順の証しとしてこの要塞にいる貴族の首を差し出してやる。ヒルデスハイムとシャイド、他にも貴族の首を出して、いったん交渉に入るのだ」

「今さら無意味でしょう、閣下」

それは無意味どころか逆効果になった！

ブラウンシユバイク公の考えを漏れ聞いた貴族たちは公然と反逆する。貴族たちの側にとってはむしろブラウンシユバイク公の首をラインハルトに差し出すことこそ生き残りの鍵になる。今までは派閥の長たるブラウンシユバイク公に惧れを感じて実行できていなかっただけだ。

しかし、今ブラウンシュバイク公の方から自分たちを生贄にしようというなら、もう遠慮は要らない。今まで忠実に従っていたのは何だったのか。

ガイエスブルク要塞のあちこちで小競り合いが始まり、拡大していく。

大要塞は今や混乱の坩堝にある。貴族たちの私兵、ブラウンシュバイク公の私兵、そして貴族の持ち込んだ財宝で買収された帝国軍兵、争いは拡大するばかりだ。

昨日の友は今日の敵、めまぐるしく陣営は攻守を変えながら互いにすり潰し合う。裏切りが裏切りを呼び、要塞内に閉じ込められた者同士で醜く争う。

途中ヒルデスハイムもシャイドも身の処し方を誤りあっさり死んでしまった。

この大要塞自体も小競り合いのために生じた傷が重なりつつある。損傷のため酸素やエネルギー供給のされない区画が増えてきた。隔壁で閉鎖された部分は修理もされず放置される。食糧庫から他の区画への移送もままならなくなってきた。

生存に直結する事態に優雅な貴族たちもなりふり構っていられない。法や秩序が崩壊すると貴族の誇りも投げ捨てられる。貴族令嬢でさえ扇子を放り投げ、代わりにブラスターを手に食糧と水を確保する。

ブラウンシュバイク公の周りにいた少数の貴族も従者も裏切つて去った。もはや閑散としたものだ。

これを見てアンスパツハはついに計画を実行した。



ブラウンシュバイク公のワインに毒を入れた。体調に異変を感じ、ブラウンシュバイクはアンスバッハを疑いの目で見ると。アンスバッハは動じることなく言葉を投げかけた。

「もはや終わりなのです。公爵閣下の御姿をこれ以上貶めたいためには、ここで退場して頂く他はありません」

「何、何を言っているアンスバッハ、儂は死にたくないぞ」

「けれどこのアンスバッハ、約束をいたしません。決してローエングラム元帥の世にはしません。ブラウンシュバイク家の世にはできずとも、奴に銀河帝国を渡しはしません」  
「そんなことはどうでもいい。く、苦しいアンスバッハ、助けてくれ……」

それが最後の言葉になる。

ブラウンシュバイク公はもう泡を吹いて倒れた。しばらく手足をバタつかせ、胸をかきむしる。その後は痙攣だけになり、ついに目の光は失われた。

誰にも惜しまれずに逝った。

帝国一の貴族の哀れな最期である。

帝国の内乱はここに終焉する。勝者はラインハルトとリッテンハイム家、敗者はそれ以外ということになる。貴族家の九割、そしてエルウィン公は歴史から消え去る運命になった。

どれほど悲劇に悲劇が重なっただろう。原因を探ったり、教訓を得るのは後の歴史家の仕事だ。今は悲劇から立ち直らなければならぬ。

この頃、ラインハルトの艦隊はガイエスブルク要塞を緩く包囲したままだ。時折、無理に脱出を図る貴族の艇を撃滅するにとどめている。

そのガイエスブルクを代表し、アンズバッハがラインハルトの艦隊へ向け降伏の信号を出す。

そしてブラウンシュバイク公の死を明らかにした。

ラインハルトの側では戦闘も無く事が終わったのは重畳だ。

おまけにブラウンシュバイクを生かしておくことは考えもなかったが、その場合大義名分などを捻り出さねばならない。その必要がなくなつたのは喜ぶべきことである。

しかし罫の疑いがある。

ブラウンシュバイク側がラインハルトを謀殺する罫を設けるなら最後にして最大のチャンスでもあるからだ。ラインハルトは先に陸戦隊を送り込み、要塞を完全に制圧し、徹底的に精査した。それこそ爆発物の一かけら、銃器の一つまで探し出した。

そうしてからラインハルトと諸提督たちはガイエスブルクに降り立つ。

いよいよ全銀河へ向け勝利宣言をするつもりだ。

それに先立ち、ブラウンシュバイク公の首実検を行なう。その死を衆目の前で明らかなものとする必要がある。なぜなら、歴史上死を偽って逃亡し再起を図る例は枚挙に暇がないからだ。

その直前、ヒルダもまたガイエスブルクに到着した。

また、フェザーンからはエカテリーナも来ている。

意外なことだが、エカテリーナがラインハルトに對面するのは幼年学校卒業以来初めてのことになるだろう。

逆にラインハルト側から分かれて進発する艦隊がある。軍事的能力と政治的センスを併せ持つ堯將ロイエンタールがオーデインを受領することを命じられ、一足先にオーデインへ向かっている。

ブラウンシュバイク公の首実検、それはガイエスブルクの広間で行われた。

広間に入れたのはラインハルト、キルヒアイス、オーベルシュタイン、諸提督たちである。その各艦隊の副官や参謀もまた付き従う。それに加えて密約をしていたヒルダ、フェザーンの全権大使のエカテリーナがいる。

オーベルシュタインの進言により、広間に入った全ての者は銃器類の武器を取り上げられた。安全のためであると説明されたが、それが主な目的ではない。もう門閥貴族と

の抗争に勝利した。これからのラインハルトは艦隊指揮官に留まらず、政治的支配者になる道を踏み出すのだ。それを諸提督に認識させるのが目的である。

キルヒアイスも一瞬ためらったが、素直にブラスターを差し出している。キルヒアイスとしてはラインハルトの覇業の助けになるなら拒む理由はない。

首実検とはいえ帝国の大貴族ブランシユバイク公爵であり、首だけ出すという意味ではない。

荘重な棺に入れられ、堂々と広間に持ち込まれた。

付き従うのは降伏を伝えてきたアンスバッハただ一人である。

アンスバッハはこの場に必要だった。死体が正しく本人だという証言が要る。それにはブラウンシユバイク公を最も知る側近中の側近アンスバッハでなくてはならない。

棺が広間の中央に運ばれた。死因は貴族らしい見事な自死と説明されている。

「ローエンングラム元帥、わが主ブラウンシユバイク公爵の亡骸です。よくご覧のほどを」「よい、もう死んでいるのだろう。それがブラウンシユバイク本人であることが分かれば充分だ」

「いえそのようなこと。もっと近くでご覧になった方が」

ラインハルトは近寄らず、早めに下がらせようとした。確実に死んでいれば充分ではないか。ラインハルトには敵手の死体を見て勝ち誇る趣味など微塵もない。

「では、我が主と共にヴァルハラに逝けばよろしかろう！」

それはいきなりだった！

アンスバツハは声を上げると棺に手をかけた。バネ仕掛けなのか、その蓋がすぐに跳ね上がった。添えられた白い花が空中に飛ぶ。

そしてブラウンシユバイク公の死体の下に手を入れ、何かを取り出した。

ハンドキャノンだ。

銃よりも必殺の道具である。命中せずとも殺傷できる。また、何かに隠れようと無駄であり、たいていの物なら貫通して爆発する。アンスバツハは広間に最適な武器を考え、考えて選んでいた。

広間の皆が硬直する。

思いがけない事態、大胆不敵なテロだ。

武器などないと思っていたのに、何とブラウンシユバイク公の死体で隠れていたとは。そしてアンスバツハは自身の生還など考えてもいない。ラインハルトを斃すためだけに自分の残り全生涯をかけ、必殺の準備をしていた。

最も早く反応したのはやはりキルヒアイスだった。

ラインハルトを護る、その意識が誰よりも高いキルヒアイスが飛び出し、アンスバッ  
ハへ駆け出す。

## 第百一話

489年

1月

供養

この緊急事態、もしもキルヒアイスがブラスターを持つていたならば、正確な射撃で難なくアンスバツハを倒しただろう。

しかし今はそれがない。

アンスバツハへ素手で格闘戦を挑むしか方法はない。そして格闘戦ならキルヒアイスの技量は確かである。迷うことなくアンスバツハへ突き進む。

ここで目を大きく見開いた者がいる。

ヒルダだ。

広間に諸提督たちと並んで立っていたのだ。もちろんこのテロに驚くばかりである。ただし今の衝撃はそういう意味ではない！

その目にはアンスバツハの手が映っている。いや、正確には指だ。

指にはめられている物体、それはヒルダもよく知っている指輪型ブラスターではないか。

この広間の警備兵は指輪型ブラスタの存在さえ知らず、そのチェックはできなかった。とうてい高級貴族しか買えない希少な超小型ブラスターであり、その小ささにブラスターとは思いつきさえしなかったからだ。

アンスバッハはハンドキャノンだけではなく、ブラスターも持っている。これではキルヒアイスが危ない！

「その指輪が！ ブラスター！」

ヒルダの慌てた声に一瞬キルヒアイスも動きが鈍る。

ついでヒルダは叫びながら腕を前に差し伸ばす。この場で武器を持っているのはアンスバッハ以外ではヒルダしかない。

警備兵はアンスバッハの指輪もチェックできなかつたと同様にヒルダの方も見逃してしまっている。

指輪はヒルダの細い指にはやや大振りで、デザインも洗練されているわけではない。しかし帝国貴族というものは、その昔指輪は家印として使われていたという古事を知っていて、往々にしてそれを形ばかり真似ている場合がある。また、先祖の形見として代々受け継いだ指輪を身につけている場合も少なくない。ヒルダの指輪も特に奇異には思われなかった。

今、ためらっている時ではない。



握り拳を作り、アンスバッハに向け狙いをつける。

撃った！

ところがヒルダの射撃は大きく外れた。

殊の外射撃の上手いヒルダでもこの距離からでは無理だった。

指輪型ブラスターを当てることは最初から難しい。普通のブラスターと違い射軸の微妙な調整はできず、安定しないためだ。基本的に近距離の護身用にしか使えない武器である。

だがアンスバッハを驚かせることには成功した。

自分以外にも指輪型ブラスターを持っている者がいたとは、アンスバッハにとって予想外だ。

ブラウンシュバイク家ほど豊かな貴族がこの場にいたのだろうか？

もちろん、アンスバッハはヒルダが名門カストロプ家令嬢エリザベートから直々に指輪を渡されていたとは思ってもよらない。

アンスバッハはヒルダへ自分の指輪型ブラスターを向ける。邪魔者を排除する奥の手のつもりだったが仕方がない。すぐさま撃ち返す。だがそれも当たらない。

アンスバツハは牽制のために使っただけだ。

ヒルダのような貴族令嬢を殺すことに意味はない。むしろ指輪型ブラスターの射程外であることを確認さえすれば充分である。

もうそれ以上ヒルダに構わず、再びハンドキャノンを持ち上げようとした。

それによつてラインハルトを斃す。もう迫るキルヒアイズごと貫通させて当てよう。威力のあるハンドキャノンではそれができる。

ヒルダはそんなアンスバツハを見て、また右腕を上げて撃とうとした。

当たるとは自分でも思えない。だが他に何もできることがない。

そこへ突然右腕を掴まれたのを見た。ヒルダの近くにいた男が掴んだのだ。

「お嬢さん、驚かずに。そのまま腕の力を抜いて」

ヒルダはそう言われても驚かざるを得ない。

しかし、それが射撃を邪魔しようとするものではなく、その逆であることもなんとなく分かった。

「足を開いて、柔らかく。顎は引くこと」

その男は腕を保持し、アンスバツハへ向け軸を合わせてきた。

「今です、撃つて！」

放った！

命じられるままにヒルダが撃った、その一撃が命中した。

アンスバッハの肩を射抜き、ハンドキャノンを取り落とさせた。重要な神経を貫いたのだろう。再び拾おうとしても腕に力が入らない。

ヒルダは自分の射撃の成果に目を見張る。

「お見事」

その不思議な男は腕を離し、丁寧に礼をしてくる。

「これは失礼しましたお嬢さん。私はコルネリアス・ルツツと申します」

その者がヒルダの近くにいたのは本当に幸運だ。

ここで重要なアシストを務めた者こそ、帝国軍でも随一の射撃の名手、ルツツ提督だったのだ。

ラインハルト暗殺は失敗した。

アンスバッハはキルヒアイスに取り押さえられえてしまった。

その直後、アンスバッハは血を吐く。失敗を悟るやいなや予め口に含んであった自害用の毒を嘔み潰している。

しかしラインハルトを見据えてこう言い放った。

「ローエングラムよ、このことは憶えておくがいい。お前は自分の実力で勝ち切ったと思っただろうがそれは違う。お前に勝つ方法はあったのだ。聞きたいか」

アンスバツハは毒のため呼吸もままならない状態になったが、目の光は依然として鋭い。

「こちらが帝国軍の補給基地に命じ、物資を汚染させれば必ず勝っていた。あの艦隊を維持するには相当の物資を消費するはず、物資不足を最初から見抜いていた。しかしこちらはそういう手は使わなかった。なぜか分かるか。物資を求めて略奪に走る恐れがあったからだ」

「むう……」

「領民への被害を恐れた。だがお前はどうか。以前勝つためだけに焦土作戦をとったことがあるだろうか！」

アンスバツハは途中からキルヒアイスが押さえる必要もなく横たわり、どこにも力はない。

ただし顔はラインハルトに向け、それを言い切った。

言葉はブラウンシュバイク公の恨みつらみなどではなかった。

そうではなく、意外なことに艦隊戦の前の戦略についてであった。

ラインハルトは何も言い返すことができない。

アンスバツハの言うことは正しいことだからだ。

帝国軍の補給基地から物資を奪えなければ、とても艦隊行動を続けることはできなかった。元からの物資では全く足りない。

しかし強奪する前に対策を立てられたらどうなっただろう。すなわち、物資を放射能で汚染されれば推進剤はともかく食糧はどうしようもなくなつたはずだ。やむなく近隣の星系から略奪して足しにするか、白旗を上げるしかなかった。

アンスバツハはそんな略奪をさせてしまう可能性を考え、ラインハルトに物資面からの戦術をあえて仕掛けなかつたのだ。

武人の矜持として、あえてそうしなかつたと言っている。

「勝てるのにそうしなかつたこつちと、領民を餓えて死に追いやりうとも自分が勝てばいいと思つたお前には差があるぞ！ 今、お前は汚れ切つた帝国貴族を掃除したと思つているだろう。だがその手を自分で見てみる。ラインハルト・フォン・ローエングラム、汚れ切つた手で何を掴めるといふのか！」

このアンスバツハの罵倒は、これ以上ないラインハルトへの痛撃になる。

ここでただ一人アンスバツハに言葉を返せた者がいた。

「言いたいことはそれだけか。アンスバツハ准将。いや、失敗したテロリスト。では

言っておくが、ローエンングラム元帥に具申し、叛徒との戦いで辺境を焦土に変えたのはこの私だ。その言葉は私に向けて言うべきだった」

それはオーベルシュタインだ。

冷たい義眼が揺らぎもせずアン斯巴ツハを射抜く。その信念は、一命を燃やし尽くした忠臣の言葉さえ退けるものなのか。

しかしアン斯巴ツハはもはや言葉を発することはできず、そのまま息を引き取る。どのみち会話をしたいのではなく、言いたいことを言い切ったことで充分だ。

忠臣としての壮烈な死に様だった。

それが幸せなことなのか、満足したのかは本人しか知らない。

仕える相手がブラウンシュバイク公だったことに対し、後悔はないのか、それもまた不明だ。他人には分かりようがないことである。

ただし、最後まで寸分も曲げることなく忠義を貫き通したという事実は変わらない。

ラインハルトは忠臣アン斯巴ツハをせめて丁重に葬るのだった。

その陰った表情を見て、キルヒアイスはこう言う他ない。

「ラインハルト様、お気になさることはありません。皆のために前に進むのが課せられた義務なのですから。藪の中に道を切り拓く者は、藪を切り倒さなければなりません。

藪の蔓には蔓の言い分があるでしょう。それを聞くのも大事なことだと思えます。しかし、それで止まることはできないのです」

「分かった、キルヒアイス。心配するな。俺は立ち止まったりはしない」

そしてついに、ラインハルトはアンスバッハのための真の供養に気付いたのだ。

「逆説的になるが、帝国を新しく作り変えることこそがあのアンスバッハという者の供養になる」

「ラインハルト様、それはどのような」

「門閥貴族に忠義を強いられる運命は過酷なものだった。アンスバッハも結局はそんな者の一人だ。これからはそういう運命になる者を無くしたい。つまり、二度とアンスバッハのような者を出さないのが供養だ」

「そうですね、ラインハルト様。今まで皇帝を打倒してアンネローゼ様を救い出すことばかり考えていました。しかし、これからは新しい目標を持たなければなりません」

ラインハルトはキルヒアイスに大きくうなずき返した。

「そうだ、そのためにも俺は帝国を全て新しくする。そして俺は忠義を求めない。忠義は寄せられるものであって求めるものではない。上に立つ者がふがいないければ忠義など不要、いつでも取って代われればいい」

それは本物の霸王に変わろうとする瞬間であつたのかもしれない。  
ゴールデン・ルーヴェは天空に向かい大きく羽ばたいた。



## 第百二話 489年 2月 転回

帝国の歴史はまた一つ大きく動いた。

これでいつときオーデインを覆ったブラウンシュバイク家の支配は完全に消えた。しかし、次の時代はまだ定まっていない。

ラインハルトにさつそくヒルダが会見を申し込もうとした。それを制し、初めにエカテリーナが会見に臨んだ。

「久しぶりね。ラインハルト様」

「確かに久しぶりだ。エカテリン嬢。幼年学校では世話になった。しかしこんな場だ。旧交を温めに来たのではないだろう」

「そうね、今はフェザン全権大使として来たのだから、用件を済まさないで。一応フェザンからの事情説明が必要ですよ」

言葉ほど雰囲気はとげとげしくない。

キルヒアイスも含めた三人には幼い日の思い出がある。決して悪い日々ではなく、懐かしさと共に思い出せる。何もかも幼かった。

しかし確かに昔話をしにきたわけではない。

「エカテリン嬢、その説明とはフェザーンのやった蠢動のことについてのものだろうな。それについては聞いている。フェザーンが帝国の捕虜収容所を襲ったとは、正に火事場泥棒だ。他に面白い表現をしたのだが生憎それしか表現のしようがない」

「うまい表現なんか考えなくていいわよ。ラインハルト様はいつも斜めの表現しかしないもの」

「……」

「それはちよつとした行き違い、つまり誤解だと説明しておくわ」

「ちよつとした行き違い？ ほほう、それは面白い。エカテリン嬢の表現力も多彩なものだ。いささか一方向に偏っているようだが」

エカテリーナは機先を制するために来たのだ。

いずれはバレること、屁理屈でも最初に言っておくことに意義がある。

「捕虜収容所で何かゴタゴタがあると聞きつけて、フェザーンは帝国に応援するつもりで行ったのよ。少しでも帝国に貢献するつもりで。でも、既に捕虜の叛乱が始まっていて、そこでフェザーンが仲裁に入ったというわけ。捕虜の要求を多少は聞かないと収まりがつきそうにもなかつから、やむを得ずフェザーンに輸送した、それだけよ」

あまりに白々しい。とってつけたような理屈で、言い訳にもなっていない。

「少し調べれば分かることを。フェザーンは随分と冒険をしたのだな。その代価は高くつこう。フェザーンが艦隊を作っていることはもう判明しているのだから」

「誤解されるのは嫌なものね」

最後までエカテリーナはとぼけた。

そしてもう一つのことをしつかり言っておく。

「だけど逆にフェザーンにだって功績はあるのよ。ここではつきり言っておくわ。ラインハルト様、たぶん知らなかったでしょう。自由惑星同盟、いえ叛徒をこのタイミングで来させなかったのはフェザーンのおかげなのよ」

「どういうことだ、エカテリン嬢」

「フェザーンが情報操作をした。それも上手にね」

これには嘘偽りがなく、事実だった。

エリザベートの功績により、オーディンからハイネセンまでの情報ルートをフェザーンは掴んでいる。

そして巧みな操作でそれをいったん遮断したのだ。

これで帝国の内乱の全容が同盟に掴めなくなっている。他のルートの情報は信憑性

が薄く、欺瞞情報を混ぜ込めばもう使えない。

「それは感謝だな。いらぬ邪魔が入らなくてよかった」

フェザーンがこの内乱に関与していたとは。

しかも情報戦を駆使し、大きなところで動かしていた。

確かにその意味は大きく、ラインハルトもフェザーンに感謝すべきなのかもしれない。

ただし、ラインハルトは額面通りに受け取ったのではない。フェザーンが善意で帝国のためにそんなことをしたはずがないからだ。自分に賭けた？ いやそれにしては沈黙が長過ぎた。

そして事實は、フェザーンの側の分析にあった。

自由惑星同盟の現状を考えると、政治的にも国力的にも帝国へ軍事的干渉をするのは無理だろう。そして実際に干渉などしたらかえって危険であり、火傷するだけだ。

その考えのもと、フェザーンはあえて情報を遮断した、それだけのことだ。

後出しジャンケンのようにラインハルトへ恩を売りつつ、その内容は同盟をいったん守るためである。

「あらラインハルト様、熱のない感謝ね。まあいいわ」

そして、エカテリーナは何気なく重大なことを聞いた。

「では、それも含めて新しい皇帝に全て申し開きをしなくてはいけないわね。ここで練習しても仕方がないもの。難しそうだけど、そこで誤解も解けるかしら」

「いや、それには及ばない。フェザーンの苦心した言い訳をここで知れば充分だ」

これを聞いたかった！

エカテリーナの狙いはこの一点にある。ラインハルトがどれほど高みを目指しているかを知りたかった。

皇帝の下でよいのか、自分が支配したいのか、である。

結果は出た。ラインハルトは誰かの下にいるつもりがない。それはつまり皇帝を上にして、臣下のままでいるつもりがないことを意味する。

「先が思いやられるわ。正直言うけど」

エカテリーナは多くの意味でそう言った。

銀河の安定はどうやらもう少し先のことになりそうである。願わくは、フェザーンに作り上げた艦隊が役に立つ事態が来なければいいのに。

次にヒルダがラインハルトに会見を申し込む。

「サビーネ様の代理としてわたくしヒルデガルト・フォン・マリィンドルフが申し上げます。今回、オーディン攻略をわたくしどもが成し遂げました。相応の働きというにはこれで充分、交渉の条件は整ったと存じ上げます。では先の密約通り、サビーネ様の皇帝即位を認め、その後ろ盾となることを元帥に求めます」

「フロイライン、それには考慮の余地があるだろう」

「余地と仰いますと？ 意図がわかりかねます」

ヒルダは思わず表情を厳しくせざるを得ない。

スムーズに行かないとは思っていたが、やはりそうなるのだろうか。

「もちろん元帥の今後について、帝国宰相の地位及び一切の帝国軍権を任せる、というのがサビーネ様とわたくしの結論でございます」

それはヒルダらの譲歩できるギリギリのところである。

そこまで認めると、帝室にとつて危険なまでに権力が集中してしまう。文官と武官の両方を統制するということだからだ。

ただしそこまで約束しないとラインハルトは拒否するだろう。仕方なく、皮一枚でこちらが上に立つというのとどめる。

しかしこの時、またしても義眼の男が前に進み出てきた。

ヒルダには嫌な予感しかない。

「リッテンハイム家によるオーティン攻略は見事なものでした。その多大な功績を鑑みて、サビーネ・フォン・リッテンハイムを皇帝に立てるのは認めたいと存じます。ただし、それは国政に関与しない立場としての皇帝であり、実際に事を運ぶのは我らに一切をお任せ下さいませ。具体的には政治決定を尚書の合議という形にします。そして尚書の任命権を宰相に」

「それを認めるわけには参りません！ それでは皇帝といつてもただのお飾りではありませんか。名前だけの人形の立場など何の意味がありません」

これほどまでラインハルト側が強硬な態度でくるとは、ヒルダにとって意外だった。その義眼の男はヒルダの様子に構わず淡々として話を続ける。

「そう言われると思っていました。ではもう一つの選択肢を用意してございます。旧リッテンハイム領全てを帝国内の自治領として認めて差し上げます。事実上の一国のようなものです。以後、そこを治めればよろしいでしょう。最も穏便な解決法だと思います。もちろん、今のフェザーンのように裏で何かを企むようなのではなく、帝国への従順な自治領としてですが」

これにもヒルダは答えることはできない。

単なるまかない領地ではなく、独自の法と体制を持てる自治領も魅力がないことはな

い。だが、あくまでもサビーネに銀河帝国を続べさせる、この目的のために全てのことをやってきたのだ。

それなのに義眼の男はアマールエが退位し、空になった皇帝の座をラインハルトが受け継ぐのを当然視している。

ここに至る前、オーベルシュタインとラインハルトらは協議を繰り返していた。ヒルダの要求は分かり切ったことだからだ。

オーベルシュタインには考えがあり、それを直言する。

「閣下、リッテンハイム家に力を与えるのは危険でございます。その策謀の見事さは予想をはるかに超えるもの。先のブラウンシュバイク公釣り出しで明らかです。今後の覇業を考えましたら、向こうの目を摘む努力を怠ってはなりません」

「確かにそうだ、オーベルシュタイン。しかし向こうの言い分もあり、実権を渡さないことに納得はするまい。それ以上に、五百年続いたゴールデンバウム王朝がここで断絶するとは、民衆の驚きと混乱は大きいものだろう。いずれは倒すとしてもこのタイミングはいかにもまずい」

「閣下、はたしてそうでございましょうか。僭越ながらもはやその懸念は無用のものとお官は断言いたします」



オーベルシュタインは想像がついていた。

潮流は転回したのだ。

確かにゴールデンバウム王朝の継続は、官僚も貴族たちにも安心材料であり、その意味では政権の維持に役に立つことだろう。

ただし一つの事実がある。民衆はもう飽きているのだ。

ゴールデンバウム王朝の継続が当然と思っていたのは過去になった。ブラウンシュバイク公の専横と失脚を目の当たりにした今となってはそうではない。

ゴールデンバウム王朝など消えて無くなっても特に構わない。ゴタゴタの続くそんな王朝などむしろ過去の遺物として振り払ってしまいたい、そんな空気なのだ。

新しい帝国、政治の抜本的刷新、むしろその方へ期待している。

オーベルシュタインはラインハルトよりもその点深く分かっている。

ラインハルトは多少貧乏であったが基本綺麗な中で育ってきた。例えばブラウンシュバイク公の専横を聞いても、通り一遍にしか理解できない。

息を潜めて密告や裏切りに怯え、絶対的な理不尽に踏みにじられることがどんなものか知らない。

いくらラインハルトは姉を後宮に奪われた経験があるといっても、それと比較にもな

らないほどの悲劇がいくらでもあるのだ。例えば一家皆殺しということが今のオーディンならば日常茶飯事である。

そういう悲劇を体験した人間は心が荒み、王朝どころか世の中全てを消去することさえ望むものだ。

オーベルシユタインは尚も進言する。

「もはやリツテンハイム家サビーネを立てるのは必要どころかマイナスにしかありません。ゴールデンバウム王朝の命脈はもう尽きているのです。民心の掌握には逆の方策が望ましいかと」

「逆、逆とはなんだオーベルシユタイン」

「まさに逆でございます。ゴールデンバウム王朝を守護するという謳い文句を捨てるのです。これまでの帝国の負の面を全てゴールデンバウム王朝の責に帰し、それを糾弾する立場に変えるのです。そうすれば民衆はゴールデンバウム王朝を敵とし、刷新をはかる閣下の政権をますます信奉するでしょう」

これは…… ラインハルトにはオーベルシユタインの言うことが理解できるのだが、それでも狡猾な策であることには違いない。

「有効なことは認めるが、そこそ民衆の感情の吐け口に利用しようとするものだ。第一、サビーネなるものにはこれまでのゴールデンバウム王朝の悪とは関わり合いがな

「い

「ならば閣下は覇業の足をここで踏み止めるおつもりでしょうか。そうではありません。この機会にゴールデンバウム王朝を完全に払拭し、全てを刷新すべきと存じ上げます」

会談でラインハルトもヒルダに話しかける。

「フロイライン、こちらとしても自治領が精一杯の譲歩なのだ。どうかそこで妥協してもらいたい。ここで交渉が決裂することはお互いにとって良くないことになる」

それは、命令というより丁寧にお願いをする調子だ。

下手な騙し合いよりも真摯な方が交渉の余地は少ないものである。

真面目なラインハルトを見て、これは折り合いが難しい、ヒルダはそう感じた。

そして結論を先送りして引き下がる。そして交渉の顛末を通信で送った。報告と相談のためだ。

その相手とは、オーデインを一旦掌握しているエルフリーデである。

一方、ラインハルトが先に派遣した艦隊がオーデインへ近付いている。

艦隊指揮能力だけではなく政治的な能力も期待されて、オスカー・フォン・ロイエン

タールが金銀妖瞳の光と共に進む。

ロイエンタールとエルフリーデとはあの嵐の日に会った以来だ。

またしても二人は会う運命にあった。

それが銀河の歴史を変えていく。

## 第百三話 489年 3月 狐と狸

「お初にお目にかかる。と言いたかったがそれは違うようだ」

オーデインに到着し、地表に降り立ったロイエンタールはそこで待ち受けていた者に對して渋い顔つきで挨拶をする。

その相手のエルフリーデ・フォン・コールラウシュは知らない女ではなかった！  
それどころか強い印象がある。

会話をしたのもわずかであり、単に車と一緒に乗ったことがあるというだけだ。だが、その特殊な状況から忘れられるものか。

そして今のエルフリーデの立場を考え合わせると、警戒すべき結論が出る。

エルフリーデは今や皇帝アマリーリエから直々に委託されたという形で帝国政府を支えている。

それは居並ぶ文官たちも驚くほど素晴らしい手腕であり、オーデインの混乱を瞬く間に鎮めている。もはや戒嚴令は解除され、街に物々しきはない。治安も街を一人で歩け

るまでに回復している。商店の壊れたガラス窓は片付けられた。そして最も重要なことである食糧輸入と流通は回復し、もう人々が奪い合うことはなく、その表情にも明るさが戻っている。

エルフリーデはヒルダやサビーネの陣営の重要人物であり、能力も高いことが証明された。そんな人間がロイエンタールとあの嵐の夜に偶然出会ったわけがないのだ。縁などという甘い言葉で言うべきではなく、ロイエンタールはあの時見張られていたという結論を出さざるを得ない。とんだ食わせ物だ。

「ようこそオーディンへ。ロイエンタール提督」

エルフリーデの方では前に出会ったことなどおくびにも出さず、涼しい顔だ。

「エルフリーデ嬢、いろいろと聞きたいことがないわけではないが、それは本題ではない。目的を話そう。こちらはローエングラム元帥からの指示でオーディンを受け取り、暫定統治をするために来た。しかし暫定統治の方は手を下すまでもなくうまく回っているようだ。街を一目見ただけでも分かる。そのことについては深く感謝する」

「ほめてくれるのかしら。とつても嬉しいわ」

それには取り合わずロイエンタールは話を続ける。下手にそういうところへ返事を返すと話が捻じ曲がるものだ。謀略家を相手にする時には気を付けなくてはならない。「ついでには後のことを我らに任せ、早々にガイエスブルクのマリーンドルフ嬢のところ

へ立ち去るのがよかろう。もちろん送って差し上げる」

「冷たいわね。そう急がなくてもよろしくてよ。別にこちらは地上部隊を動かすこともせず、抵抗していいのですから警戒されるいわれはないわ。どのみちローエングラム元帥の到着はもうしばらく先のことでしょように」

「だからといって先に延ばす必要もないだろう。お互いのためにも」

「お互いのために、ね。そうかしら？」

ロイエンタールはいよいよもってエルフリーデを早くオーデインから出すべきだと感じた。

何を企んでいるのか分からない以上、火種はなるべく遠ざけた方がいい。

だが結局のらりくらりとエルフリーデはオーデインに留まった。

エルフリーデはヒルダからもう連絡を受けていた。

ローエングラム元帥が政権をサビーネに渡さないつもりだと知った。心楽しくはないが、ヒルダほどには衝撃は受けない。銀河帝国を統べる権力、それは誰を狂わせても驚くには値しない。

ヒルダは本当の意味での権力の巨大さが分かっているのだろう、と思う。

誰かを投獄したり処刑したり、逆に褒美を与えて喜ばせたり、権力があれば何でも

きるのだ。

戦いを始めるのも止めるのもできる。

恋人を引き裂いたり結び合わせたりさえできる。舞踏会に呼ぶのも前線に送るのも心一つでどうにでもできる。それを楽しいと思う人間には権力は至福であり、人生をかけて追い求めるものだ。

ヒルダがそういうことを分かっているのは善良だからである。権力を悪用することを考えず、民衆への統治責任を先に考え、その重みを感じ取るからだ。

しかし自分にはそうしたヒルダだからこそ好ましいと思っているのも事実である。ここでエルフリーデは思う。

もしサビーネが皇帝になれば、自動的にヒルダも帝国の尚書級の高官になるのは自明であるが、そこまで考えているのだろうか。

とはいえ、現実に立ち返ればヒルダにも自分にもローエングラム元帥を阻む實力はない。ここでオーディンの地上部隊という軍事力を駆使しても全く無駄だ。それなら中途半端はせずに今は協力するフリだけでもしておいた方がいい。

そういうわけで、ロイエンタールを出迎えた。

ここからはエルフリーデ自身でも分かっている心奥底がある。

オスカー・フォン・ロイエンタールという男に興味を持っている。なぜだろう。



あの嵐の中、稲妻の光を浴びている横顔を見た時から、なのか。

一方、この二転三転する情勢に揺れるオーディンで、野心を持つ者がまだ存在した。それは先にアンスバッハをさんざん悩ませたトゥルナイゼン子爵家だった。未だ一定の数の貴族から支持を得ている。

密かにエルフリーデとロイエンタールの衝突を期待していた。そうならば漁夫の利が期待できる。一方に与すれば影響力は拡大し、もしも仮に共倒れしてくれば、自分が上立ってオーディンを統治するチャンスがくるのではないか。

しかし現実はいまうまいかなかった。なにしろエルフリーデは冷静で、ロイエンタールと争う気が全く見えない。

そこでやや危険な賭けに出してしまう。

逆にロイエンタールを焚きつける、という。

オーディンを根拠地にしてロイエンタールが自立の挙に出ればいい。

それは全く荒唐無稽な話ではない。それなりの勝算もある。

今回、ロイエンタールは一万五千隻もの艦隊を与えられている。それはオーディンで変事があるかもしれないというラインハルトの危惧により、それだけの数が割かれているのだ。しかも、ロイエンタールは部下からの信望が厚い将である。

オーデインの確保と艦隊、両方の条件が揃う。ローエングラム元帥の手下にある艦隊はたつたの三万、対抗も可能だ。

加えて大義を掲げることができると。

最初から逆臣とされたローエングラム元帥から離れ正道に立ち返るとすれば理由として充分ではないか。

ロイエンタールにそんな内容の密書が届けられた。

いちいちそんなことに構うほどロイエンタールは神経質ではないが、退屈しにぎに読んでみた。

そこにはオーデインを根拠地に独立をしないか、という危険な誘いだ。オーデインを占拠すればどれほど有利なのか、どれほどの権力を得るのか詳細に記されてある。おまけに、独立に心が決まれば、オーデインにまだ残っていて穩然たる力を持つ武断派貴族こそつて味方すると書いてあった。

「何だと思えば要するに叛逆か。俺がローエングラム元帥に叛意を持つとも思つたのか。馬鹿なことを。平時に乱を起こそうとする輩はどこにでもいるものだな」

しかしロイエンタールはこの密書の意外な活用法を思いついた。

ネタに使い、あのエルフリーデの反応を見て今後の参考にしよう、と。

エルフリーデをデイナーに招待し、さつそくそれを披露する。

「陳腐なものね。軽拳妄動を絵に描いたようだよ。下らない。人をそんなことで操れると思っているのかしら。私が言うのもなんだけど、謀略家を馬鹿にしているわ。もし実現の可能性があると本当に思っているなら更に馬鹿だよわね」

エルフリーデは小気味よく切って捨てた。

そのはつきりした物言いにロイエンタールも爽快感を覚えて笑ってしまふ。

「俺と同じようなことを言う」

「それでどうするの？ まさかこれに乗るの？ こちらとしては乗ってくれて、それで自滅してもらえれば助かるけど」

その時分には二人ともワインを数本開けている。

二人とも自分が酒に強い方だと思っているが、いささか量が多すぎる。その力もあつてぎつくばらんな話ができる気持ちになった。

「そんなわけはない。ローエングラム元帥に逆らうなど考えたこともない。俺はこう見えて忠臣だ」

エルフリーデはけらけら笑った。傑作の冗談を聞いたようだ。

「そうね、面白いわ。いろんな意味で。人は自分が考えるほど自分のことが分かっているものよ。その瞳の奥を見せてくれない？」

「俺の瞳など見ても面白くない。自分で言うのもなんだが」

思わず金銀妖瞳を逸らした。ロイエンタールはその瞳にまつわる悲劇も、それによる自分の心の屈折もエルフリーデに話していない。いや、ミッターマイヤー以外誰にも話したことなどない。

だが、この謀略家の女には話していないことまで瞳から読み取られてしまいそうな錯覚に陥る。

うふふ、と笑ってエルフリーデは椅子にそっくり返る。

赤ワインに香る息を吐いた。

「まあいいわ。あ、ところでその密書、誰からか突き止めて逮捕させてもいいわよ。簡単なことだわ。暇潰しにいいかもしれない」

「それには及ばない。そんな下らないことで処罰したら刑務所がいくつあつても足りないだろう」

その夜、二人はいつそう深酒をしながら話込んだ。

ロイエンタールは自分の一面を話さずとも理解してくれるように感じた。しかしそれは不思議なことに不快ではない。

数日後、今度は逆にエルフリーデがロイエンタールを呼び出した。

「もうオーディンにいる意味はないし、そろそろお暇するわ。ローエングラム元帥がオーディンに来る前に出て行かないと面倒なことになりそうだし」

「そうか。だが、もう一度会える日を楽しみにしている」

「どんな女にもそう言うんでしょね。口が滑らかだわ」

「疑われるかもしれないが、それは本心だ」

「疑ってしまうわ。女たらしさん」

そう言うのと、エルフリーデはあっさり宇宙港から出立した。行き先はもちろんフェザーンだ。

そのきつかり三日後、またエルフリーデは宇宙艇からロイエンタールに連絡を取る。

それはもはやロイエンタールの艦隊がエルフリーデを追っても追いつけないと分かっている位置を計算してのことだ。

「ロイエンタール提督、一つ報告しておくわね。やっぱり密書を書いたトゥルナイゼン子爵はそのままにしておけなかったわ。少し脅かして、財産をほとんど戦災孤児基金に寄付させたわよ」

そんなことを言いながら、エルフリーデは右手を上げて何かを通信画面に見えるよう

にした。

実はトウルナイゼン子爵のことなどほんのオマケの話に過ぎない。

伝えたい重要なことは別にある。

エルフリーデの細い手、そこに持たれていたものはロイエンタールでも分かる。画面を通して小さく見えるだけだが、その意味も貴重さもケタ外れの物体だ。

エルフリーデは銀河帝国の国璽を手に行っている！

それこそ正式の皇帝即位に必要なものである。

おそらくエルフリーデは日数をかけてそれを探し回り、ついに見つけたのだろう。ブラウンシュバイク公がアマーリエを即位させた後、アマーリエさえ知らないところに秘匿しておいたものだ。

これにはさすがに冷静沈着なロイエンタールもしまった、という顔をした。

それを見て、エルフリーデがまるでいたずらを仕掛けた子供のように笑顔を作った。

## 第四百四話

489年

3月

立て直し

「申し訳ございません。閣下。あの女狐にしてやられました」

オーディンに到着したラインハルトはロイエンタールから国璽を持ち去られたことを聞いた。

「まあいい。どのみち血統では正統な皇帝になりようがないのだから、ゴールドデンバウム王朝時代の形式など取り繕っても仕方がない。そんな石ころのようなもので騒ぐ必要もなからう」

ラインハルトは自身の覇気をきらめかせてそう言った。この実力の時代、伝統や形式の出番はない。

「だがしかし、ロイエンタール、卿にしては不始末ではないか」

そういう面に疎いラインハルトでも、ロイエンタールがエルフリーデという女にしてやられた所以が想像できた。伶俐なロイエンタールでも甘いところが出てしまったのだ。

しかしラインハルトの表情は言葉ほどきつくなく、そのことで咎めることはない。む

しろ面白がっているようだ。

ここでオーベルシュタインが一つのことを指摘する。

「しかしその問題はこちらに関するのではなく、向こうの側にあるものです。すなわち、こちらにはただの石ころでも、向こうが活用すれば大きな意味を持つかもしれない」

「オーベルシュタイン、国璽は皇帝即位に使う物、つまり向こうがそれを行使するということは、オーデインではない場所で即位をする可能性があるということだな」

「御意。サビーネ・フォン・リッテンハイムが正式な皇帝として即位をしてくる可能性があり、火種になるやもしれません。帝国にはまだまだ実力よりも形式を重んじる者がいると存じます」

一方、ヒルダやサビーネはどういう方策を立てたか。

実は最後の最後までヒルダはラインハルトに対し確約を結んでいない。

ヒルダとしては自治領を手にすることで妥協してもその先の展望が見えない。じり貧に追い込まれてしまうのは明らかだ。

ラインハルトが最初からヒルダらを潰すつもりで自治領を提案してくるほど悪辣だとは思えない。



しかしこちらから何か仕掛けたら別だ。いや、そう誤解されるだけでお終いだ。ラインハルト側からすれば、こちらを潰すには軍事すら必要ない。

リッテンハイム領は現時点で豊かな星系が多いが、帝国の思惑一つで孤立させられ、経済的に締められたら全くお手上げだ。本当にやる気になれば方法はいくらでもある。そうされたらリッテンハイム家は貧乏星系の主に成り下がってしまい、領民は納得せず、下手をしたら暴動になる。誰しも他の星系より貧しいのを見せつけられたら我慢できないだろう。

つまり同じ自治領といってもフェザーンとはまるで置かれた条件が違うのだ。

フェザーンなら位置的に帝国と同盟との貿易を独占でき、それによる莫大な利潤は帝国といえど無視できない。

やはり自治領の案は呑めない。

それでは自動的に帝国政府に媚びへつらっていかねばならず、事実上の臣下であるのと変わりがない。

しかし他の選択肢も苦しい。

例えばいったんフェザーンに身を寄せるといっても不安定に過ぎる。フェザーンの思惑が今後どうなるのか分かりようがないし、力を貯えることもできない。

かといって帝国政府内に食い込み、ラインハルトによる新しい秩序の建設に協力する

…… いやそれは論外だ。正にそのゴールデンバウム王朝の血統が邪魔をしてしまうのだらう。刷新には古い血は邪魔でしかない。

結局のところヒルダはサビーネのいるフェザーンに戻った。

それをエカテリーナも何も言わずに迎え入れる。

仕切り直した。

しかしまだ負けたわけではない。情勢を見ながら再び仕掛けるだけだ。

銀河のもう一方の勢力、自由惑星同盟はどうか。

銀河帝国の未曾有の内乱という絶好機にも関わらず、軍事的に手を出さなかった。アムリッツアでの多大な損失を癒すのが優先と誰もが思っていたのだ。

フェザーンによる情報遮断で帝国の情勢が掴み切れないという事情もあったが、帝国の変化を全く感じ取れないわけではない。最も内乱について肌身を感じるのは最前線、すなわちイゼルローン要塞である。

大会戦の行われていない平時でも、帝国側哨戒艦隊と回廊内で出会うことは定期便ともいえるくらい頻繁にあり、それらと偶発的な遭遇戦になってしまっても日常茶飯事だ。

しかし、それが目に見えて減ってきていた。

「やれやれ、帝国軍も休暇を取ったのかなあ。それとも超過勤務手当が出なくて嫌になったのかもしれないな」

「先輩、ちよつと先輩の基準で物事を考えないで下さいよ。帝国軍相手に」

「冗談だよアッテンボロー。手当があつても割に合わないさ。哨戒も楽じゃない」

本当に冗談なのだろうか、とアッテンボローは思つてしまふ。

「しかしアッテンボロー、帝国側の哨戒が減つたことは事実だが、それだけでは何とも言えない。考えられる可能性が多すぎる。良い可能性も、悪い可能性もね」

「では少しばかりこちらの哨戒網を広げてみてはいかがです」

「そうだな、それもまたいい案だ、アッテンボロー。ただし動員する将兵の超過勤務手当はきちんとつけてやってくれよ」

はいはい、と言いつつアッテンボロー自身が戦艦マサソイトに乗り、遠距離偵察に出た。しかし、やはり帝国側の哨戒と全く遭遇しないではないか。それならとばかりにイゼルローン回廊の帝国側出口付近にまで進んでも抵抗を受けない。

「やつぱりこいつはおかしい」

これを受け、ヤンはイゼルローン要塞からハイネセンへ向け重要通信を送つた。イゼルローン回廊から帝国軍消失、というものである。そして返つてきた返事は「イゼルローン要塞を守備しながら引き続き情報収集に当たられたし」という辺り障りのないも

のだった。

そのようなハイネセンの消極的な姿勢をヤンも是とした。

イゼルローン要塞の主砲トゥールハンマーの修理は思いのほか難航して未だ終わっていない。そのため帝国の異変に付け込んだとしても、かえってしっぺ返しを喰らったら大ごとになる。今攻められたらイゼルローン要塞を守りきれるか分からない。従つて、迂闊な事はできないのだ。

アムリツツアで機動戦力に決定的打撃を蒙った同盟軍は艦隊再建までの間、冒険せず雌伏した方がいい。

それでもヤンは非常に慎重に足掛かりをつける。

回廊の帝国側出口周辺にまで基地を設置したのだ。それは帝国への侵攻のための橋頭堡という意味ではなく、あくまで防御のためのものであり、索敵が主な目的となる。

それがあまりにも早く役に立つ時がくる。

「帝国軍高速巡洋艦隊約五十隻、使節信号を出したまま回廊に侵入しつつあり！」

それら基地が驚きの事件を知らせてきた。

「何だつて？ 侵攻ではなく使節信号…… それなら通信の周波数を合わせて音声に変換を」

ヤンがそう指示してから直ぐに音声が届いた。

「こちら帝国軍ウイリバルト・フォン・メルカッツ大将、及びアーダルベルト・フォン・ファーレンハイト中将、自由惑星同盟への亡命を希望する」

これにはイゼルローン要塞も大騒ぎになる。

元々イゼルローン回廊は軍事的な前線であり、亡命者がここへ来ることはなく、亡命希望者は全てフェザーン回廊の方を通るものだ。

いや、そういう問題ではない。やって来た人物が重要過ぎる。

この少し前、メルカッツやファーレンハイトは辺境をゆつくりと航行している時にブラウンシュバイク公の死を聞いた。

続けてラインハルトがオーディン入りしたニュースが入り、これで帝国の実権はラインハルトが握ることに確定した。

メルカッツらはゴールデンバウム王朝の末裔サビーネが即位し治めることを期待していたのだが、これでその望みが消えたことになる。もう帝国の実権はラインハルトのものだ。当然、帝国軍も刷新される。

「これで我らの居場所は完全になくなったな、ファーレンハイト」

「ではメルカッツ閣下、我らはどこかへ行かねばなりませんまい。とはいえ、行き先は二つ

に限られます。フェザンか、叛徒のところか」

「フェザンはかねてから独立の機運を高めておる。帝国から我らを保護してくれようが、先の捕虜收容所への攻撃など手段を問わぬやり口から、焦りを感じざるを得ん」

フェザンは逆に大魚を逃した格好になる。

しかし、これは結果論だ。その時メルカツらは皇帝アマリーエを戴く帝国軍へ属していたのだから。

「では閣下、叛徒のところへ」

「儂の副官シユナイダーも卿と同じ意見を言う。叛徒とは長年戦ってきた敵だ。こちらにも向こうにもわだかまりはある。しかし、イゼルローンにいるヤン・ウエンリーは信頼できる人物だと」

こうしてメルカツとファーレンハイトはイゼルローン回廊にやってくる。

イゼルローン要塞は大騒ぎになったが、ヤンは二人を受け入れないという選択肢を思いもしなかった。二人を何かに利用するというのではなく、純粹に頼られたら応えたいと思っただ。

こうして二人は自由惑星同盟に亡命し、ヤンのもとに一時匿われる立場となった。

メルカツらは期待通りヤンの庇護を受ける。

イゼルローン要塞に逗留し、何と護身用ブラスター携帯と自由な行動まで許された。捕虜ではなく、市民扱いである。

しかしながらイゼルローンに留め置かれること自体は本来おかしなものであり、同盟軍統合作戦本部が身柄を預かるべきものだからだ。

辺境の勝手な動きは同盟軍として歓迎されない。

特に勝手な人事や増強は軍閥化の第一歩とみなされても不思議ではない。

ところが多くの意味で今のハイネセンは不安定であつた。こんな時にヤンからメルカツツらを送られてきたとしても火種のようなもので、ありていに言つてしまえば迷惑だつた。

統合作戦本部はシトレ元帥が事実上引退した後、クブルスリー本部長のもとグリーンヒル大将、ドーソン大将が脇を固めている。そしてやつきになつて再建を図つているが、そうそううまくいっていない。アムリツツアで受けた傷はあまりに大きいものだった。資材、人員とも圧倒的に足りない。

だが、そんな危急の情勢なのにまだロボス派の残党が暗い怨念をもつて妨害にかかるのだ。

こんな時に統合作戦本部が帝国軍の宿将を預かつてもどう扱うべきか。

どうせ何をしても揚げ足を取られ、痛烈に批判されるに決まつている。だからあまり

手を出さず無関係でいたかったのだ。

ただし同盟軍に意外なところから朗報というべきものが舞い込んできた。

アムリツツア会戦の大敗により帝国軍に囚われていた大勢の将兵が、何とフェザーン經由で帰還してきたのだ。

これで前線の将兵が賄える。

すつかり死亡扱いにしてしまったせいで遺族年金の捻出に頭を悩ませていた後方部も助かる。

何よりホーウッド中将、ルグランジュ中将の帰還は統合作戦本部を喜ばせた。艦隊指揮官こそ今の同盟軍にとって何にもかけがえがない。

「そうか、アツプルトン君はフェザーンに残ったのか。もちろん彼のことだ。我が同盟のことを思う行動なのだろう」

クブルスリー本部長がホーウッド中将とルグランジュ中将をねぎらう。アツプルトン中将のことは残念だがその動機と心情はよく分かっている。むろん裏切り行為どころかその反対に同盟を思つての行為であることも。

「本部長、まさしくその通りです。その犠牲によつて我らが同盟に帰還できたことを申し訳なく思います」



「当面はアツプルトン君について悪い噂になるだろうが、なんとかそれを鎮めよう。それともう一つ、君らに頼みたいことがある」

「何でしょう、本部長」

「特にこれはホーウッド君にやってもらいたいのだが、旧ロボス派の面々を束ねて、しっかり手綱を付けておいてほしいのだ。このままでは不貞腐れたり暴走したりする人間が出てくる。ただし、ロボス・ファミリーは元々無能な者ばかりではない。ロボス元帥が消えた今、彼らは身の置き所がなくなっている。良い方向に使われないのは我々にとって痛い損失だ。彼らを使いこなすのはロボス派の一端を担っていた君でなければならぬ」

実はこれはグリーンヒル大将の発案である。

同盟軍では今、クブルスリー本部長の実直さ、ドーソン大将の実務、グリーンヒル大将のセンスが生かされている。

## 第百五話 489年 4月 運営

自由惑星同盟内では軍事以上に政治的な面で混乱している。

そんな中、ヨブ・トリューニヒトは最高評議会議長に就任した。

先の帝国領侵攻の是非でヨブ・トリューニヒトは断固として反対票を投じた。それが追い風になり、ついに同盟のトップにまでなっている。

ただし、これについてはトリューニヒト自体が熱望したわけではなく、迷いつつも許諾したという面がある。今の同盟政治に関わるのは火中の栗を拾うようなもの、どうせ何をしても非難されるのは分かっているからだ。

やはりその運営はトリューニヒトが予期した以上に一筋縄では行かなかつた。

まず口さがないマスコミが叩く。

トリューニヒトが政権を己れの物にしたいがため、帝国領侵攻をダシにして一か八かの勝負に出ただけだと言うのだ。それに反対したのは野心のゆえであり、たまたま賭けに勝つただけのことだと。トリューニヒトに見識など何もなく、権力欲しかないとまで書かれる。

そこから更にサンフォードと密約があり、帝国領侵攻の結果がどちらに転んでもいいように仕掛けていたとまで捏造記事を書かれた。

実際、サンフォードは最高評議会議長を辞任した後国営企業の役員になり、安泰な生活を送ろうとしていたのだ。ただしそれがバレると帝国領侵攻で生じた多数の遺族に騒ぎ立てられ、辞めざるを得なくなったのだが。

トリユーニヒトはサンフォードに対し決していい感情を持っていないが、サンフォードを罰する法が存在しない以上、放置しているだけであつた。責任を取らせることと感情的ないじめとは違う。サンフォードの国営企業行きの工作は彼自身の姑息な立ち回りの産物に過ぎず、トリユーニヒトとは全く関係がないというのに。

そしてヨブ・トリユーニヒトには味方が少なかった。

同じく反対票を投じたホアン・ルイらと組もうと思つてもできない。ホアンの方に協調する気がないので。ホアンからすれば、トリユーニヒトの現実路線が薄暗い政治屋に見えるてしまう。

「同盟の国是もこれからどんどんリベートで塗りつぶされるだろうさ」

逆にトリユーニヒトから見ればホアンらは頭の固い社会資本優先主義者だ。

何でも社会資本優先にしか考えない。

企業や個人を豊かに、教育や福祉も充実、それはいかにも甘い言葉で自分さえ酔わせ

る。

しかしそれで政治家は務まらない。厳然として必要な出費というものがある。軍などはその最たるものであり、何かを産み出すものではなくとも、必要なものは必要である。同盟を存続させるためには。

トリユーニヒトからするとホアンはレベロが自分がリーダーシップを取り、泥をかぶりながら全力で事を成していくようには到底思えない。恰好のいい批判ばかり好むように見えてしまう。

更に頭の痛いことに、反戦主義者もまた勢いを増してきていた。

無視してばかりもいられない。ヨブ・トリユーニヒトが最高評議会議長に就任後、初の選挙戦になるテルヌーゼン市の欠員選挙で、トリユーニヒトは反戦主義者に手痛い敗北をした。テルヌーゼンは首都星ハイネセンにおいてハイネセンポリスに次ぐ重要な都市である。

その後、反戦主義者と話し合いをしようとしても歯車が全く噛み合わなかった。

それに比べればホアンの方がまだましである。ホアンは戦いによる消耗を避け、ひいては軍事予算の削減を要求するだけといえ、それだけである。多少国家運営に影響があるが、国家予算を配分する上での優先順位の問題に尽きる。

だが、反戦主義者は戦いそのものを否定する。

戦いを仕掛けるのは論外、それどころかどんな場合でも戦うことを認めないというのだ。

そのため、同盟軍そのものを悪として決めつけてくる。

確かに戦うことが悪という出発点に立てば、同盟軍は存在してはならないという理屈になる。同盟軍兵士の命を守るばかりか相手の帝国軍兵士の人権まで考えれば当然の帰結だ。

しかし、これは軍関係者の士気を深刻なレベルで低下させてしまう。

実際、テルヌーゼンに存在する同盟軍士官学校を放逐しようとする動きが出てきた。それまでは士官学校は国のためのエリートであり、誇りでもあったのに。

「いつそ投げ出したい。軍の予算をゼロにして解体すればいいんだ。そうすれば数年で同盟は帝国へと看板が変わり、皇帝にひれ伏す。そうなれば少なくとも戦いはなくなるね。反戦主義万歳だ」

これはヨブ・トリューニヒトの甘えだった。

実際はそうするつもりはない。あくまで政治家として粘り強く努力し、同盟を帝国から守るつもりだ。

こんな弱音を吐けるのは今の話相手がオーレリーだからである。

「あら、いつも政治に最適の環境はあり得ない、そのための政治家だ、と仰っていたのでは？」

オーレリーと呼ばれるエリザベートはそう返す。口調は穏やかだ。トリユーニヒトが甘えてそう言ってきたのは分かっている。そしてトリユーニヒトが甘えてくれることがとても嬉しい。

「でも嫌になつてしまうことはあるんだよ」

「まあ、そんなことを。ではしっかり食べなければ。食べたなら膝枕で休ませてあげます。また気力も出て来るでしょう」

食べれば元気も出てくる。エリザベートはそんなことでしかトリユーニヒトをサポートできないのは辛い。だからこそしっかりとやろう。

バスケットからエカテリーナ直伝のポークサンドウィッチを取り出して並べる。

これらの日々はまだのどかだったのだ。

後から思えばとても穏やかな日々だった。

ハイネセンポリスが激しい嵐に見舞われ、木の葉のように揺れるまで、あともう少し時間があつた。

一方、しばらく帝国軍にも動きはない。

帝国の方でも内政にかかりきりにならざるを得なかつたからだ。

それほど行政の刷新というものは難しい。大小さまさまなことで、決めることがあまりにも多過ぎる。だが決めていかなければ物事が進まない。

今、前例というものが通用しない場合が多く、いちいちルールや基準から考えなくてはならない。

しかもその基準にしたところで今度は根拠というものが必要であり、会議をして意見を言い合つたりしていたら限りなく時間を消費してしまう。

少しでも早く進めるためラインハルトはシュトライトやリヒター、カールブラツケなど有能な人材を登用しているのだが、それでも時間は必要なのだ。

今のラインハルトの立場は銀河帝国宰相代理というやや締まらないものだった。軍事的実力によって帝国を實質支配しているだけなのだから仕方がない。

ラインハルトは帝室の血筋とは違うのだからこれでも最上級だ。もちろん元帥や軍務尚書程度の地位では帝国の行政に携わることとはできず、宰相代理はギリギリそれが可能になる地位でもある。

ただし、いつまでもそうではない。

この体制で半年が過ぎ去った。

ここでようやくラインハルトが新銀河帝国として皇帝に即位し、ローエングラム朝を開く動きになってきた。いずれこうなるのは自明のことである。ようやく実質的支配者がそれにふさわしい称号を得るだけのことである。

むろんただ即位したのでは僭称になってしまう。血統どころか国璽すらない現状では。

おまけに前皇帝アマリーエが非公式ながらサビーネへの禅譲を了承したという話は広く伝えられている。これはエルフリーデらが積極的に喧伝したものだ。そのためラインハルトが今さらアマリーエを担ぎ出すこともできない。

しかし全く何も方法がないわけではない。

どんなに薄くとも、たった一滴でもゴールデンバウム王朝の血筋を持つ者を探し出し、国璽無しでもとりあえず即位させ、ラインハルトがいったん摂政なりの後見的立場となる。

そこから帝位を禅譲させればいい。

もちろん最初から臨時と分かり切った皇帝を立てるなど茶番に過ぎない。だが将来長きに渡って正統性を疑われ、叛乱を起こそうという者へわざわざ大義名分を与えてや



るよりはずつといい方法である。

帝国内乱初期にラインハルト側が政治的な手を打たなかったのは失敗だった。例えばサビーネと組まず、強引にでもエルウィン・ヨーゼフを實力で拉致していればこうしたことは必要なかったのだが、それは単なる結果論である。

時間をかけた丹念な調査の結果、ついにペクニッツ子爵家にゴールデンバウム朝の血筋が残っていることが判明した。

その一番小さい子ケートヘンはまだ乳児であり、茶番に使うにはまさにうってつけだ。

オーデインのこうした動きに敏感にならざるを得ないのはフェザーンに逗留するヒルダらである。

軍事的實力でラインハルトにかなわない以上、その武器はゴールデンバウム朝を受け継ぐ正統性にある。もしもラインハルトが無理なこじつけであつても手続きを踏んで皇帝になつたら、もうサビーネの出番はなくなつてしまふではないか。正統性は武器にならず限りなくただの叛乱分子に近いところまで成り下がる。

ならばもう先手を打つてサビーネを即位させてしまふ。

これは遅れてしまえば、後出しとして誰にも見向きもされないだろうからだ。

決定的にラインハルトと袂を分かつことになってしまふが仕方がない。

その血筋とエルフリーデの携えてきた国璽をもって、サビーネが皇帝に即位する。

オーディンの大聖堂ではなく、フェザーンにて質素に式典が行われ、ここにサビーネ・フォン・ゴールデンバウムが誕生した。

同時に形ばかりの政府組織が発表された。ヒルダ、エルフリーデ、フェザーン駐在帝国弁務官であつたレムシャイド伯爵などが名を連ねている。

その政府は銀河帝国正統政府と呼称した。

それらの動きはしかし、ラインハルトから見ればどうでもいいほど小さなことだ。どうせもうゲームをひっくり返す力はない。過去の王朝など消え去るべき残滓であろう。

それよりもラインハルトは成すべきことがある。

霸王はその足を止めず、かつてないことに挑戦する。

「キルヒアイス、いよいよこの時が来たな。宇宙を全て手に入れる」  
「ついに始まりますね、ラインハルト様」

時間は帝国の内政ばかりではなく軍事的な充実も生み出す。帝国軍艦艇は内乱で著しく損耗してしまつたが、新しい政治体制の発足と共に短期間で甦る。財政が逼迫していなければ、人口の多い帝国では新兵の補充が比較的簡単である。

帝国軍の再編が終わり、準備は整った。

新制帝国軍、それは十六万隻を数える。数だけ見たら、かつて十八個艦隊二十万隻以上もあつた帝国軍の最盛期に見劣りするかもしれない。

ただし、有能な艦隊指揮官を多く揃え、何より常勝の英雄ラインハルトが指揮をとる艦隊だ。

史上空前の強さと誰もが確信する。

## 第一百六話 489年11月 警鐘

宣戦布告などそもそも也不需要ない。

銀河帝国と自由惑星同盟の間には休戦どころか協定に関するものは存在しない。

帝国はこれまで同盟を国家として認めず、絶対的に消滅させるべき叛徒としか言っていないからだ。

ラインハルトは諸将を集め、作戦の開始を告げた。

「あまりに長きに渡った叛徒との戦い、今こそ終止符を打つ！ 150年のあいだ戦の女神は働いてきた。もう充分であり、そろそろ休ませてやろうではないか！」

ついにこの時が来た。

いずれラインハルトが叛徒と決戦を行なうというのは暗黙の了解だった。帝国領を守るだけで過ごすはずもなく、そうなるのは必然だ。

それでも開始を告げられれば嫌でも興奮を呼び起こされる。

オーデイン軍務省内の広間は尋常でない熱気に溢れた。そこにいる諸将全員が高揚

に包まれていく。

ラインハルトはその広間の一段高いところに立ち、歴史を紡ぐ言葉を発していく。「宇宙は我らのものである。進撃し、全宇宙を掌握せよ！」

ただし熱気だけではなく、諸将は別のところに興味を移した。

皆は艦隊指揮官だ。

当然、知りたいのは具体的な作戦である。成功を微塵も疑っていないが、いくら意志があつても事を現実とするためには策が必要なことを知っている。

自分たちの仰ぐ黄金の霸王は勝利を掴むため、どんな華麗な戦略を駆使するのだろうか。

「具体的な作戦の全容についてまだ明かす時ではない。しかしその第一弾として帝国艦隊四万隻を動員し、イゼルローン要塞に赴くことを決めている。総司令官にはキルヒアイス上級大将をもってこれに任ずる」

この時、段の上に立つラインハルトの横にスクリーンが用意されている。

そこへイゼルローン回廊及びイゼルローン要塞の画像が投影される。順次艦隊の単純な模式図、艦数が増えられた。そして最後にキルヒアイスの名が映されたのだ。

広間は大きくどよめいた。

あまりに予想外だった。

イゼルローン要塞へラインハルト自身が行くとはばかり思っていた。あるいは逆に先遣隊を使つて様子を見るつもりなら、ミッターマイヤーかロイエンタールが順当なところではないか。

何とラインハルトの半身ともいふべきキルヒアイスが総司令として遣わされるとは、どういう意図なのか不明であり、あらゆる面で驚かざるを得ない。

「参謀としてオーベルシュタイン、副将にワールン、ルッツの両名をあてる。準備が整い次第出立せよ」

宇宙は一気に熱に包まれる。

イゼルローン回廊近くの警報システムが緊急を告げる。

ヤンの作り上げた網が今度こそ帝国軍の襲来を捉えたのだ。

むろん、イゼルローン要塞はかりそめの休息を終え、にわかに慌ただしくなった。

「先輩、給料分働く時が来ましたよ」

「やれやれ、給料分だけにしてもらいたいね」

どんな時でも軽口から始まるのはヤンたちの伝統だ。

そうアッテンボローに返しながら、ヤンはさつそく入つてきた情報を分析する。帝国

がずっとおとなしくしているとは思っておらず、いずれは攻め掛かってくるはずだ。それが今になったというだけのことだ驚くことはないのだが、問題はその規模だった。

システムが伝えてくる情報では帝国軍は約四万隻の規模である。これではイゼルローンに駐留している第十三艦隊一万七千隻で対抗することはできない。出て行って迎撃は得策ではなく、またもや要塞に籠つての防衛戦になるのは確定だ。

そうと決まるとフレデリカが先回りしてヤンに報告してきた。

最も重要なのは防衛力の要であるトゥールハンマーの状態である。

「トゥールハンマー砲台の修理状況を報告します。現状、出力三十%が安全発射圏内、一度だけなら最大五十%にて使用可能です」

「そうかい。今から修復のピッチを早めたとして、予測された帝国軍の到着時にはどうなるかな」

「それも既に試算しています。それぞれ十%程度上乗せできるまで回復すると思われるます」

さすがにフレデリカだった。

そこまで考えて計算をしていたとは優秀な副官じゃないか、とヤンは考えたが褒めるまで気が回らない。

「それなら先ずは充分というものだろうね」

最善ではないが最悪でもない。

先の戦いで魚雷攻撃によって損傷したが、トゥールハンマーはそこまで修理されている。努力のおかげで全く撃てないということはない。

平時なら一度に千隻を葬る巨砲である。出力を絞ればそこまでには至らないが、さすがに艦砲とはケタがいくつも違う破壊力を依然として持っている。

そして最も重要なことは帝国軍にその修理状況が知られていないことだ。

「帝国軍がトゥールハンマーを撃てるのか撃てないのか分からないのは、こちらにとつてとてつもない優位性になる。疑心暗鬼になつてくれるだけで、こちらの戦術バリエーションは広がるからね」

ひたひたと要塞近くまで帝国軍が侵攻してくる。

ヤンは時間を稼ぐため地雷などを使って嫌がらせを仕掛けたが、やはり艦隊を使つての戦いはせず、半包围されるに任せた。

その帝国軍からヤンは意外な通信を受け取っている。

「要塞の将兵の皆様へ降伏を勧告いたします。無用に命を散らすのは本意ではありません。できれば今すぐ降伏してもらいたいのですが、そうもいかないでしょう。しかし今後どのタイミングでも降伏を受け入れることをお約束いたします。帝国軍上級大将



ジークフリード・キルヒアイス」

「敵は紳士ですな。相当な伊達男でしょう」

真つ先にシェーンコップがそういう感想を漏らす。

これにポプランが言い返した。

「いいや、すかした野郎だ。戦う前から余裕見せるとロクなことにならないって学習させてやった方がいい。本人のためだぜ」

「お前さんが敵将の将来まで考えているとはね。こちらの将来を考えた方が有意義だろうに」

ヤンはそんな会話も聞かず、考え込む。

降伏勧告は敵将キルヒアイスの慢心などではなく、真摯さのあらわれと見た。優しさのゆえに、真面目にそう言っているのだ。

ただしその名に驚かざるを得ない。

ジークフリード・キルヒアイスとはローエンングラム元帥の親友にして副官、事実上の帝国No.2ではないのか。ラインハルトが帝国の実権を握ると同時に上級大将の位にまで昇っている。

もう一つヤンが解せないのは艦隊の規模である。四万隻とは、もちろん大規模であるが帝国全軍からすれば一部に過ぎない。どうしてこんな中途半端な戦力を使っている

のだろう。

これらをひつくるめてどう解釈するべきか。

そして出した結論は、さすがに不敗の名将ヤン・ウエンリーの名にふさわしい。

「事実を確認すればこの艦隊は帝国の主力じゃない。主力ならローエングラム元帥本人がもつと大艦隊を率いてくるはずだ。イゼルローン要塞の力を知る以上、出し惜しみをするわけがない。もつと重要なことはローエングラム元帥は遠征を他人に任せて自分が動かずにいられるような性格じゃないってことだ。つまり、もつと大きな作戦が存在し、これが一つの側面にしか過ぎないと考えるのが最も自然だ」

帝国の戦略とはいったいなんだろう。

今、イゼルローン要塞以上に重要な作戦目標があるだろうか。

もちろんイゼルローン以外に戦場になりえる場所といえば当然一つしかありえず、フェザン回廊のことになる。

ヤンは帝国軍襲来の報と併せ、これが陽動であること、フェザン回廊こそ主戦場になる可能性があるという自身の考えをハイネセンに送った。

「第十三艦隊ヤン・ウエンリー提督から緊急通信！ イゼルローン回廊に帝国軍約四万隻が侵攻！」

同盟軍統合作戦本部はもちろん大騒ぎだ。

だが面倒なことが舞い込んだということであり、生きるか死ぬかといったことではない。

イゼルローン要塞がきつとまた帝国軍を撃退してくれるだろう。過去それよりも大規模な攻略戦を同盟が仕掛けても要塞は陥ちなかった。

しかも要塞には今、同盟軍が誇る智将ヤン・ウエンリーがいる。なんとかしてくれるに違いない。そういう雰囲気は確かにあった。トゥールハンマーの修理が完全ではないことは不安材料だが、きつとそこも何とかしてくれるに違いない。

それでも一応、統合作戦本部は補給物資の用意と後詰めの艦隊の検討をする。パエツタ第二艦隊、ウランフ第十艦隊に出動準備が命じられた。

迎撃作戦に限れば統合作戦本部が裁可するだけで、政府の許可を受けなくとも行動できる。迎撃は時間との勝負なのだから当然だ。

しかしその場合であっても作戦内容を可及的速やかに政府に報告する義務がある。

「これで良いのか。何か見落としている点はないのか」

ヨブ・トリューニヒトは統合作戦本部から提出された報告書を見て考える。以前の同盟軍よりも風通しがよくなっている分評議会議長に真っ先に情報が届けられている。

トリユーニヒトの見るところ、統合作戦本部の考えは尤もなことに見える。

同盟軍の迎撃作戦は、パルメンドやエル・ファシルといった回廊周辺星域に防衛網を構築すると同時にイゼルローン回廊へ伏兵としてひっそりと潜入するというものである。イゼルローン要塞が帝国軍を引き付けておきながら、タイミングを計り、呼応して一気に帝国軍を挟撃する。イゼルローン要塞が一定持ちこたえることを前提としたきれいな作戦だ。

確かに妥当ともいえる。

しかしなぜか危機感を拭えない。

素人のトリユーニヒトにさえ分かりやすい作戦案ということは、敵の帝国軍にとっても分かりやすいということなのだ。

報告書を詳細に見てトリユーニヒトに気付いたことがある。

そこにはヤン・ウエンリー大將がフェザン回廊に細心の注意を払うべし、という見解を添えていると書かれてあった。統合作戦本部はそれを限りなく可能性が低いもの、つまり言葉を変えれば非現実と捉えてまるで無視している。

それがどうにも気になる。

考え続けているトリユーニヒトは、つい恋人オーレリーと話している時でさえ上の空になった。もちろん同盟政府の極秘事項を恋人とはいえ部外者にしゃべることはでき

ず、相談などもつてのほかだ。それ以前にトリユーニヒトがオーレリーに政治的判断を期待することはない。

しかし、ついうっかり出てしまった言葉がある。

「帝国軍は四万隻、総司令官はキルヒアイスなる者、か。」

「キルヒアイス!?!」

オーレリーという擬態も忘れてエリザベートは叫んでしまった。

キルヒアイス、この名をエリザベートが忘れるはずがない。

自分の運命を変えた人間なのだ。

あのカストロプ動乱、アーサー・リンチ提督はカストロプ艦隊を率い幾度も帝国軍を退け、防衛を成功させてきた。しかしそれはキルヒアイス提督が来るまでのことだ。キルヒアイスはカストロプ艦隊をあつさり壊滅させ、アーサー・リンチは戦死した。圧倒的寡兵ありながらまるで紙を破るようにやすやすと成し遂げている。戦争に疎いエリザベートでもその恐ろしいまでの実力が分かる。

しかもその強さとはうらはらに非常に紳士的であり、領民に優しい扱いをしたとも聞いている。

「どうしたんだいオーレリー、なぜ君がそんなに驚く?」

トリユーニヒトの何気ない言葉、その相手がエリザベートだったのは偶然だ。しかし、それが歴史を変えてしまうとは誰も思いもしなかった。

## 第百七話

489年12月

戦略家

今度はトリユーニヒトが訝しがっている。

それも当然、オーレリーの反応は過剰であり、明らかにキルヒアイスの名を知っているとしか思えないものだからだ。

「あ、いえ、その名前には聞き覚えがあつて」

これだけはエリザベートも正直に認める。

「フェザンでもよく出ていた名前でした。」

それは嘘ではないが、誤魔化しの範疇である。

トリユーニヒトはそういうこともあるかと納得してしまった。オーレリーは一年ちよつと前までフェザンにいたのだから。

「フェザンでも有名……キルヒアイス上級大将の戦歴を見るとローエングラム元帥の副官が長くて、自分が指揮をとったことはほとんどないらしい。帝国のカストロプ動乱以外には目立った功績は見当たらない。つまり補佐として良い働きをしているかもしれないが、それもローエングラム元帥の旧くからの友人であることを割り引かなくて

はならないし、まして自分が艦隊指揮をとった場合はどうだろうか。実績の薄い者を当てるなど、帝国軍の人選はちよつと謎だな。どこまで本気なのだろう」

「いいえ！ 決してそんなことはありません！」

エリザベートは全力でそれを否定した。しばしトリユーニヒトも言葉を返せなくなるほどに。

「その者は凄く強い指揮官と聞いています。並外れた才覚ともちきりでした。あ、フェザーンの噂で」

「なるほど、フェザーンではそんなふう判断しているのか。あのフェザーンが」

エリザベートはそれだけは伝えたかった。

自分の正体がエリザベートだとバレないためには、素知らぬフリをするのが一番だろう。

しかし、敢えて危険を冒してもそれだけは言いたかったのだ。

このハイネセンの平和が壊される予感がする。

自分が手に入れた平和、しばしの安らぎも春の雪のように消え去る、そんな予感が。

「帝国軍は、本気です！」

キルヒアイスは優しい人格なのだろうが、それと能力は別だ。

とにかく敵に回せば危険なのだ。尋常な相手ではない。



結局、ヨブ・トリユーニヒトはエリザベートの言葉を帝国の情報に通じているだろう。フェザーンの判断と捉えた。それ以外に解釈のしようがない。

そしてそれを統合作戦本部の見解より優先させた。

帝国はもう大きく変わった。それなのに統合作戦本部こそ過去の情報に引きずられている可能性があるとした。

それを政治家らしいセンスで思い至ったのだ。

ヨブ・トリユーニヒトは同盟軍統合作戦本部の案を承認せず、疑義を挟んで送り返す。帝国軍の動向には不明の点がある。最前線のヤン・ウエンリー提督の意見を汲み、もう一度協議すべし、と注釈を付けた。同盟政府を率いる最高評議会議長の見解として。

それを受け、統合作戦本部でもフェザーン回廊への注意が向けるようになる。

今の同盟軍には政府に自分たちの作戦案が拒絶されたことで面子を潰されたと思うような狭量な者はいない。担当したグリーンヒル大將は柔軟な考え方をする将である。

同盟艦隊の動員予定は大幅に引き上げられ、予算や物資が計算された。

ビュコック第五艦隊、再建途上のホーランド第七艦隊、ルグランジュ第十一艦隊も出動準備が命じられ、首都星直衛の第一艦隊以外の同盟軍機動兵力の全てが即応態勢をとったのである。

そうした影響を及ぼしたエリザベートはもう一つのことを考えている。フェザーンが危険だ。

あのフェザーンのことだから自分が考えている以上のことを既に考慮している公算が高い。

それでも自分は重ねて伝えなければならない。

とにかくあのキルヒアイスを帝国が使ってきた、その意味は計り知れない大きなことに思えるのだ。

その予感に従い、エリザベートはフェザーンのエカテリーナに向けて危急を知らせる。

実はその頃、フェザーンでもキルヒアイス出陣を掴んでいる。

さらには帝国国内での追加の艦隊の出動準備が進められている情報まで集めていた。帝国中の経済情報が集まるフェザーンであれば、物資の流通や価格から情報を紐解くことには長けている。

帝国は大規模に軍事行動予定している。いったい何を企んでいるのか。

その不穏な情勢にフェザーンのルビンスキー家も協議を繰り返していた。

「帝国の内政も固まっていないうちにまた出征とは、帝国も飽きないことだな」

「いえ、お父様、内政を固めるために出征が必要なのでは？」

「なるほどエカテリン、そうなるか。確かにな」

アドリアン・ルビンスキーは満足げである。

娘エカテリーナの利発な分析は健在だった。

このところアドリアン・ルビンスキーはなぜか体調を崩し、周囲が心配する中、一向に回復しない。

そのため今はあまり私宅から出ずに政務を行なっている。子供たちが立派に成長するのがいつそう楽しみになっているのだ。

「確認するがその意味は何だ、エカテリン」

「一つにはローエングラム元帥の軍事的実力を保守派に今一度知らしめることかしら。他にも、外征で結果を出して民衆の支持を盤石にすることもあるわ。まあ軍事行動が単なるポーズではなく、征服の果実を手にするのが目的であることは変わらないでしょうけど」

「いずれにせよローエングラム元帥は負けることなど考えてもいないだろうな」

エカテリーナはいったんラインハルトが軍事行動を起こす以上、絶対に勝ちに行くことを見ている。単なる見せかけということとは有り得ない。

「エカテリン、もしそうだとすればどこまでを視野に入れていたかが問題だ。イゼルローン要塞を取り返すことか、あるいはそれ以上の征服なのか」

「いくら自信があつても戦いには相手があること、イゼルローンを取るだけでも難しいことでしょうに」

先の戦いでもラインハルトは急ぎよオーデインに戻らざるを得なかったため、要塞を陥とすまで至らなかつた。しかし要塞側でもけつこうな善戦をしていたのだ。同盟軍隨一の智将ヤン・ウエンリーの魔術のような策によつて。

「我がフェザーンへの影響としては、その外征が失敗に終わった場合、帝国がこつちに矛先を向けてくる恐れがある。何としても戦果を上げるための八つ当たりだ。外征がうまくいっても同盟が弱体化、八つ当たりはそれ以上に迷惑なことだな」

「あるいは無理を承知の同時作戦、ということも」

そこまで考え至つたのはエカテリーナの慧眼である。

柔軟な思考により、帝国がフェザーンを狙う可能性を排除していない。

しかし、エカテリーナも実のところ本当にそうだと思つていなかった。

軍事上の常識として一つの戦場に力を集中すべきだからだ。

それにイゼルローン奪還こそ誰しも分かりやすいパフォーマンスになり得る戦果で、しかもラインハルト自身がやりかけたことでもある。是非とも達成したいだろう。

この時期にハイネセンのエリザベートから緊急の通信が入った。

エカテリーナらはキルヒアイスの出陣自体は既に知っていることでもあり、ハイネセンの同盟政府が危機感を持って迎撃を考えていることはむしろ安心材料だ。

だが、一つ気になる。

エリザベートの通信には、イゼルローン要塞のヤン・ウエンリーがフェザーン回廊こそ主戦場になる可能性があり、注意が必要だと言っていることまで含まれている。トリューニヒトからエリザベートが何気なしに聞いた情報である。

それがエカテリーナの神経をざわつかせた。

「帝国軍は、フェザーンに来る！」

エカテリーナはそのヤンの思考過程を忠実に後追いつし、全く同じ結論を導き出した。「お父様、ラインハルト・フォン・ローエングラムがフェザーンを狙っています！ 帝国は思いのほか大作戦をとるつもりですわ！」

時間を無駄にせずエカテリーナはアドリアン・ルビンスキーに主張する。

「いきなり考えを変えらるとは、その根拠は何だエカテリン。単なる直感では済まないことだぞ。その考えに辿り着く理由がある。そもそも帝国がフェザーンに対し実力を振るうなど前例がない」

「実のところ直感が本当の理由だけど、もちろん客観的根拠もあるわ。一つにはローエングラム公が大作戦を人任せにすることなどあり得ない」

「それについては、帝国の内政が完全に落ち着いたわけではなく、オーデインを留守にできないのが理由だとも言える。それに今まではローエングラム公が陣頭に立って戦いたがる性格であつても、立場が変わつたのだ。もう単なる軍事的指導者ではない。ローエングラム公が為政者となつたからには自ずとやり方を変えることもあろう。むしろ為政者の長が戦いの前線に出る方があつてはならないことだ」

一応アドリアン・ルピンスキーは常識的な判断を伝える。だが、そんな常識は捨てるべきだとエカテリーナの方では確信している。

「普通ならそう考えても不思議ではないでしょう。自分の身を守ることがすなわち帝国を守ることだ、と。しかしローエングラム公がそうするでしょうか。あのローエングラム公が」

「……確かにそうだ」

「それにキルヒアイスを遣わすとは絶対に勝利する決意もあるでしょう。友であるキルヒアイスに敗戦の不名誉をかけることは考えられないもの。しかし現実には帝国軍の一部しか与えていない。これは大きな矛盾としか言えない」

このエカテリーナの考えをアドリアン・ルピンスキーも理解した。

フェザーン自治領主ならずとも為政者というものは、どんな厳しい未来でも目をつむることは許されない。樂觀的な予測に逃げるなど愚かであり、かつ卑怯だ。

「最後の理由、それは同盟軍最高の智将ヤン・ウエンリー提督が気付いているということ。これはとてつもない重みを持つことだわ。これ以上どんな根拠が必要でしょうか。早く対処しましょう、お父様」

その一方、フェザーンには今ヒルダらの銀河帝国正統政府が存在している。正式にフェザーンが認めたという形ではなく、単なる客として宿泊しているという形だ。

先のサビーネのささやかな皇帝即位、そして正統政府の発足を発表しても不思議なことにオーデインの帝国は干渉してこなかった。

ヒルダは考える。

「もうこちらの小勢力など相手をするまでもなく、消滅すると思っているのかしら。いえ、そんなことはないでしょうね」

ヒルダの策としては帝国継承の正統性を確保した上で、フェザーンの庇護のもと粘り強く交渉していくつもりだった。いずれ情勢は変化し、妥協点も変わるだろう。

例えばラインハルトの行方政策が急進的過ぎて、旧来の勢力が反発して結集し、再び混乱するかもしれない。あるいは利権に溺れて理想を忘れた者たちによって腐敗する

かもしれない。情勢はまだ決定的ではないのだ。時を待つのも策の一つである。

ヒルダとしてはラインハルトと決定的に対立するのではなく、最終的に宥和し、納得できる優越を確保してサビーネをオーデインに迎え入れさせたい。

ただしヒルダの持久策はあくまで帝国、フェザーン、同盟の枠組みが存続するのが前提である。

今、ヒルダもまたエカテリーナから帝国軍の動きを聞いた。

帝国軍の規模、率いる将、そしてエリザベートからもたらされたヤンの戦略的思考も含めた一切の情報だ。

ヒルダはいっそう情報を吟味し、誰よりも深く考えている。

四万隻でのイゼルローン要塞攻撃、そして総司令がキルヒアイスであること。

キルヒアイスの為人についてヒルダはエリザベート以上に知っている。

何かひっかかる。

どうしてキルヒアイスなのか。何かの意味があるのか。

答えを出せそうで出せない。

エカテリーナは軍功による箔を付けさせるためと考えたようだが、本当だろうか。

いいえ、それはない。もはやキルヒアイスが帝国のNo.2であることは明らかであり、今さらそんな必要はない。



考えろ。考えろ。

指揮下の艦隊司令がワーレンという用兵巧者、ヒルダも知るルッツという良将、これらは順当なところであり、不思議はない。

しかし参謀がオーベルシュタインというのが最も解せない。

不自然なものに感じられてならない。

思慮深いキルヒアイスにオーベルシュタインは正直あまり必要なく、またこの二人が仲が良いとも考えられない。

だいたいにしてオーベルシュタインは軍人ではあるが、どちらかという和政治的な駆け引きが得意であり文官に近いという感触がある。ヒルダは少なくとも会談を通して何度も煮え湯を飲まされた経験から分かっている。

オーベルシュタインの意味とは……

ここでようやくヒルダの思考が結晶になる。

だが、その結論は自分でも冷や汗が出るものだ。

帝国の戦略はそれほど恐ろしい。ヒルダはエカテリーナにすぐさまそれを伝えた。

「違う。イゼルローン方面が単なる陽動で、帝国軍の本隊はフェザーンを狙っている、そんな単純なものじゃないわ！」

大戦略家ヒルデガルト・フォン・マリンドルフ、その叡智は生涯に渡って数々の功を上げている。

その中でも最大に位置付けられる功績が目前であった。

「エカテリン、帝国の考えはたぶん、いえ確実に二重の罠だわ」

「二重の罠!?! ヒルダ、それっていったい……」

## 第百八話 489年12月 恋の時間

イゼルローン要塞と帝国艦隊の戦いは終始平凡なまま続いている。

帝国軍は決してトゥールハンマーの射程内には入ってこない。

キルヒアイスは、トゥールハンマー砲台の損傷を知っているが、だからといって色気を出して強引な作戦を取ったりはしていない。そういうことに捉われることなく、作戦を揺るがせないのはさすがにキルヒアイスである。

結果的に帝国軍の攻撃はミサイルを撃ちかけるくらいにとどめている。しかしその程度で要塞自体は小揺るぎもしない。せいぜい浮遊砲台が偶然それに当たってしまった程度で壊される程度でしかない。

「面白い戦いであくびが出るぜ。見ても退屈、出番もないとききた。帝国軍は余ったミサイルを捨てにここまで来たんじゃないか」

そんなポプランにアツテンボローが呆れて返す。

「イゼルローン要塞がゴミ捨て場か。すると俺たちはゴミ虫つてことに」

「冗談じゃない。こんなダンディなゴミ虫がどこにいるってんだ」

そんな会話を聞きながら、ヤンも考える。

確かに戦いは平凡に過ぎて、やはり要塞を本当に陥とすつもりなどないのか。おまけに敵味方の損害を極力減らそうという意図を感じる。

戦いが始まり、早くも二週間が経過した。

要塞側は試しに宇宙港を開け、艦隊を出すフリをした。それでも食いついてこず、誘いは無駄になる。ひよつとするとトウルハンマーの修理が完全に終わったと思つているのだろうか。

膠着した戦い、いたずらに時間が過ぎていく。

「時間はどちらに味方するのだろう。同盟か、帝国か。個人としてはこうして紅茶が頂けるのは嬉しいことなんだが」

ヤンはそう言いながらフレデリカの淹れてくれた紅茶を飲んでいる。

アッテンボローが、また給料泥棒と言われますよ、と言いかけたがやめた。しかしヤンの表情が口調と違ってあまりに厳しく、さすがのアッテンボローも無駄口をしようと思わなかった。

一方、フェザーンがついに動く。

エカテリーナが果敢に行動する。そこに何の躊躇もない。

後に魔女帝の電撃と言われるほどの行動力だった。

その骨子は惑星フェザンをいったん捨て去るといふあまりに大胆なことだ。もちろんあらゆる方面から反発を受けるのだが仕方がない。

しかし断固として行う。

昨日あったことが明日も続くとは限らない。惰性で考えてはならない。

嵐の襲来に目をそむけることは許されないのだ。

帝国が軍事力を向けてくるのならフェザンを守りきれはるはずはなく、せつかく造り上げたフェザン艦隊も無駄になる。商業惑星フェザンは最初から防衛システムを持つていない。要塞とは違うのだ。

それならいったん明け渡し、自治権を放棄し、戦略的に撤退した方がいい。

もちろんかなうものなら情勢の変化に応じて奪還にかかるつもりだ。温存する艦隊はその時に力になるだろう。

経済的な混乱を最小限にするため、取引の一部制限、物資の放出を行ない、強制的に物資価格の乱高下を抑え込む。

そして各種惑星の産業データ、商取引データといった情報に最大限のプロテクトを掛けていく。

もちろん航路データはフェザンの持つ最重要の機密であり、考えられる限り厳重に

秘匿している。何重ものプロテクトの上、数限りない欺瞞データを散りばめて万全の態勢とする。それをうかつに信じたら、ワープ後すぐにブラックホールに突入するほどの危険なトラップである。

そして官僚などにはルパートが上手に説明をする。帝国軍の侵攻を匂わせながら明言せずに人を動かすのは至難の業だ。絶妙なバランスが必要とされる作業を、しかしルパートは見事やり切った。

雌伏には準備が必要だ。

フェザーンの持つ貴重な軍事的実力である二個艦隊をエカテリーナは回廊を越えて同盟領付近に展開させた。自由惑星同盟には事後承諾だ。

「エカテリン、艦隊を急遽動かすんだね」

「そうよミユラー。作って間もない艦隊だけでもう出番が来そうよ。女学校の演劇みたいにドタバタのにわか造りね」

それは下手なジョークだったが目は真剣だ。

「一緒に戦って頂戴。フェザーンの未来がかかっているわ」

エカテリーナは真つすぐにミユラーを見た。

ここに至ってその危険性を誤魔化すことは考えない。

「ミュラー、相手は帝国軍。ローエングラム元帥と戦うのよ。あなたの上官だったロイエンタール提督もおそらく一緒にしようね」

だがそうだとってもミュラーに動揺はない。

フェザーンを守る艦隊にいる限り、いずれ帝国軍が敵になるのは分かっていたからだ。

それにエカテリーナがそう言うてくるのはミュラーに配慮しているからだろう。かつての上官や同僚と戦わせなくてはいけないことに対して。

今、その気遣いが無用なことをしっかりと示さなければならぬ。

自分は艦隊指揮官であり、エカテリーナを安心させるのが本分であり、逆に気遣われるのはおかしい。

何よりも自分は男ではないか。

「エカテリン、そんなに気をつかうことはないよ。迷いなんか無い。今はフェザーン機動艦隊の指揮官だ。相手は関係無いだろう？」

「あなたはそう言うだろうと思っていたわ。だから戦えるのかどうかは聞かなかつた」

そこを乗り越えてもエカテリーナの表情が和らぐことはない。

もう一つ言うべきことがあるからだ。

「ローエングラム元帥は帝国にある艦隊のほとんどを率いて来るでしょうね。そんな大

艦隊が相手、戦いは厳しくなるわ。絶望的と言ってもいい」

「だから艦隊はフェザンから撤退するんだね。まともに迎撃したところで意味がない。それは賢明だと思うよ。自由惑星同盟の領地に入った帝国軍が苦戦した時、やっと勝機が訪れる。そしてフェザンを奪還する」

「確かに帝国軍が苦戦するのが前提、いいえ希望的観測だけれど」

「でも希望はある。可能性がゼロじゃない以上、最善を尽くすよ。そしてエカテリン、戦いがどうなろうと君だけは絶対に守る」

今、エカテリーナは少しばかり表情を変えた。

責務を負うフェザンの支配層の顔から、あどけない少女の顔に。

しかし自分でそれが分かり、あえて元に戻す。だが瞳孔がやや開いたのは隠しようがない。

「そうねミュラー、守ってくれなきゃ困るわ。この自由と繁栄のフェザンを消し去らないためルビンスキー家を絶やしてはいけないもの」

あえて茶化した。ミュラーの言う意味を感じ取りながら。

ここではつきりさせるのは怖い。

「もう一度言う。絶対に君を守る。何があっても」



ミユラーはエカテリーナがその頭の回転の速さで誤魔化したのが分かるので繰り返す。

この時、艦隊指揮官としてではなく個人的なことで一步踏み込もうとしていた。何があつても守る、つまり自分が斃されても守る、ということだ。

ミユラーのその当たり前のように決めている決断の強さを感じざるを得ない。

「そういうことを言わないで、ミユラー。さつきは戦つてくれと言つておきながら矛盾するようだけど、負けてどうしようもなくなったら逃げちゃえがいいのよ」

「君を捨てて、逃げろだつて！」

「そうよ！ 死ぬのはダメよミユラー。あなたには生きていてほしい」

どうしてそこまで言うのか、理由は聞かなかつた。聞くまでもない。

「ミユラー、知ってる？ フェザン人は無駄なことをしない、切り替えの速さが自慢なのよ。いよいよの時は名前を捨て、どこか遠くの開拓惑星に行けばいい」

「僕は軍人だ。それに指揮官が一番守りたいものを捨てて逃げていいわけないよ。最後まで盾になるんだ」

「いいえ、逃げていいのよ。それに私だつて死ぬつもりはないわ。帝国軍に殺されてたまるもんですか。負けても終わりじゃないし、その時のミユラーには役に立つてもらうんだから。絶対よ」

「負けた後でも……」

「その時には、名も知らない惑星で畑と一緒に耕しましょう」

二人の視線が交錯する。

想いは力となって眼に込められる。

「私は土も嫌いじゃないわ。水路を引いて、家も作りましょう。私は役に立つわよ。自慢じゃないけど虫も叩けないお嬢様と違うもの。知つてると思うけど」

どれほど綺麗に組み合わせさせて飾った言葉より情熱的なプロポーズだ。

苦労を嫌うのではなく、二人で分かち合えば、それは幸せに変えられる。

「エカテリーナ、耕すのは僕だけでいい。君は家で、そう料理でもしてくれたりいいな。その方が君らしいし、得意だろう？」

ミユラーは愛を軽く口にできるほど器用な人間ではない。

しかし強い想いは決して伝わらないことはない。いや、今のこの時こそ互いに伝わらないでどうする。

何年も前からお互いを分かっていた。

おてんばでどこまでも自由だけれど芯のあるエカテリーナ、優しくて底抜けにお人好

しで意外に短気なところもあるミユラー、そう知っている。

何年もかけて次第に分かってきた。

どれほど相手が自分の心の多くを占めてしまっているのか、どれほど相手が自分に必要なのか、それを感情が知っている。

二人の想いは同じである。

どんな嵐に見舞われようと生涯を共にと願う。

今が誓いの時だ。

数秒後、男女の影が重なった。

## 第九百九話

489年12月

建国の遺志

エカテリーナはミユラーと同様にアツプルトン提督に対しても艦隊の展開を命じた。フエザーンの二個艦隊は帝国軍を迎撃せず、自由惑星同盟領に退避する。

しかしそれは来たるべき時に反攻するためだ。それまで自由惑星同盟軍と協調して行動するか、あるいははっきり隠れるか、決めていない。

「アツプルトン提督、艦隊をしっかりとめ上げ、ミユラー提督と連動して下さい」「もちろん、ご命令とあれば」

アツプルトン中将は嬉しそうだ。そして気を引き締めつつも闘志を掻き立てている。自分がこの艦隊を率いる意味がもう間もなくはつきりするだろう。

来る敵は帝国軍、思いっきり戦う。今度はアムリツツアでの借りを返してやる。「作戦は何かいいでしょう。アツプルトン提督」

エカテリーナは率直に意見を聞いた。

腹の探り合いはせず、短い言葉で真つ向から聞いたのだ。それはもはや客人としての提督ではなく、信頼できる同志のような扱いである。その真実がアツプルトンの胸にす

とんと伝わる。

「最適な迎撃法でしょうか。帝国軍が万全の態勢を整え、苛烈な意志をもって迫るのであれば正直自由惑星同盟の存続は危ういでしょう。悔しいことですがあのローエングラム公には戦力も覇気もあります。銀河の歴史を変えるほどの英雄が出てきたと思うべきでしょう。対して同盟は相対的に弱体化しきっています。であればフェザンが取るべき道は悠長なことをせず、全力で自由惑星同盟軍と協調しなければなりません」

「つまり、最初から同盟と協調すべきってことね」

「そうです。傍観者ではいくら姑息に立ち回っても帝国が同盟を倒すついでに踏み潰されるのがオチです」

フェザンとしては二大勢力の漁夫の利を得るのが効率的である。

しかしこの情勢はそんなに生易しいものではなく、帝国側の優位は動かない。ならば生き残るためには弱い方、すなわち自由惑星同盟に全面的に味方した方がいい。

「なるほど理にかなっています。そして具体的な方法は」

「帝国軍の数にもよりますが、フェザン回廊出口に縦深陣を敷いて待ち構え、最大限効率的に消耗させていくべきでしょう。同盟としては航路と補給の両面で自領で戦う優位性を生かさねばなりません。つまりハイネセンまでの距離を味方にします。逆にいえば橋頭保を簡単には作らせず、力勝負に持ち込ませない、これに尽きます」

「そうね。おそらく同盟の首脳部もそう考えるでしょうね」

一方のヒルダである。フェザーンに留まるのは自分にもサビーネにも危険だと思っ  
ている。

銀河帝国正統政府とラインハルトが戦闘状態というわけではない。ラインハルトか  
ら賊と決められたこともなく、逆にラインハルトを賊と認定したこともない。

一種の放置状態だ。

皇帝であるサビーネを敬わない時点でラインハルトを賊と認定してもよい根拠はあ  
るのだが、そこはヒルダの政治判断であり、決定的な亀裂を表面化させないためだ。

だが、フェザーンが帝国軍に占拠されればさすがに捕らえられてしまうだろう。ライ  
ンハルトの側でもさすがに放置するわけにはいかない。ペクニッツ子爵家の娘が見つ  
かっている以上、銀河帝国正統政府など名目上も不要で、目障りであり、存続させるに  
値しない。

そこでヒルダは正式に自由惑星同盟政府に亡命の打診をした。

こっそりフェザーン艦隊に紛れて同盟領に移動することはしない。それをすればま  
すます敗残の皇帝僭称者というイメージになる。

さすがにこの案件は同盟政府を揺るがせた！

何と同盟と150年もの間戦ってきたゴールデンバウム王朝が亡命してこようというのだから。

事は重大、ニュースは直ちに極秘扱いになり、最高評議会議長ヨブ・トリユーニヒトに伝えられた。

しかしここでヨブ・トリユーニヒトは先送りや隠蔽といった方策はとらない。

むしろ民主的な判断に従い、まずは議員にしっかりと情報を開示し、その上で意見交換を行うこととした。

しかし様々な議論が飛び交い、たちまち議会は収拾がつかない状態になってしまった。

「即刻拒絶だ！ それしかない！」

「考えるまでもない話だ。今帝国を刺激してどうなる。責任が取れるのか！」

「もしもローエングラム公がそれを理由に侵攻を正当化したら。身震いがする」

評議員の大多数がそういう反応をした。

それこそ拒絶反応といってもいい。

しかしそれにも一理あり、現実的な判断ともいえる。どんな火種も今は遠ざけるべきである。燃え盛る大火になる前に消すのだ。今、同盟の国力は帝国と堂々と渡り合える状態にないのだから、刺激は避けるべきである。

「いや、ここは一つ受け入れた方がいい。いざとなればその正統政府とやらの首を差し出せばいいではないか」

「武力で帝国と差がある今、政治的な交渉が何より大事だ。手札は一枚でも多い方がいい」

「これは逆に帝国に恩を売るチャンスだ。その道具にしてしまえばいいだけだ」

そう主張する者たちも一定数いる。リアリストのグループのようだった。その主張は酷薄なようだが、同盟のため利用できるものは何でも利用する、そういう判断に基づいている。

一方、ひときわ声を張り上げるグループもいる。

「冗談じゃない！ ゴールデンバウム王朝の子孫など受け入れられるか！」

「話にならない。150年の英霊に何と云えばいいんだ。初めから議論するようなことじゃないだろう」

激しい感情で反発する。愛国心が強ければ強いほどそういう人間が多い。

確かにこれまで同盟軍が戦い続けた相手は何だったか、ゴールデンバウム王朝そのものではないか。



「受け入れなど無理だ。帝国とゴールデンバウム王朝は同義語だろう。市民が納得するはずがない」

若干穏健な発言でも市民感情はおそらく反発しないと予想している。

ヨブ・トリューニヒトはしばらく議論に任せた。こうなることは予想の範疇だ。

ただし自分はまだ結論を出している。それが受け入れられるかそうでないかは分からない。

ただしそれが受け入れられなくとも、多数決により最終的に決まったことには従うつもりだ。

民主的な手続きは何より尊い。ただしその前に全力で説得を試みることはもちろんである。

「諸君、大体の意見は聞いた。しかしここで議長として私も主張させてもらう。何だろう、これまでにない新規な意見だろうか。」

しばし議会は静寂に包まれ、トリューニヒト議長の発言に耳を傾ける。

「諸君らがこの同盟を思う気持ちには分かった。それなら今からの話を理解できるだろう。なぜなら、我が自由惑星同盟の建国の精神を問うものだからだ。アーレ・ハイネセンはかつて何を言ったか。それは帝国から逃れる者たち、帝国から迫害される者たちは

同志である。共に力をあわせ、新天地で礎を築こう、というものだ」

そこまでは皆も意見は一致している。

同盟の発足以来の国是だ。

「今回の案件も本来なら議論すら必要なく、入国管理局の事務手続きで済むはずだったろう。しかし私も亡命を希望する者の名が特別な意味を持つことを理解している。そこで議会での討論を行うこととした。だが討論が次第に本来の道から外れていくことを看過しえない。同盟の精神が忘れられていることを許容できない。諸君らにはもう一度原点に立ち返ってもらいたいのだ。そうすれば見えるものがある」

ヨブ・トリユーニヒトは力を込めた。

同盟の政治家ならば決して忘れてはならないものがある。

「アーレ・ハイネセンがこの話を知ったなら、寛大にも亡命を受け入れるだろうと私は確信している。帝国の顔色をうかがう必要などない。利用価値を計算することは更に必要ない。我が自由惑星同盟は、自らの理念に基づいてのみ行動を決める。それだけが指針なのだ。例えば亡命希望者がゴールデンバウム王朝の末裔だろうとその理念を適用できないはずはない。利益のために、あるいは復讐の怨念のために理念から外れてはならない。帝国の現政権から圧迫されている者を迎え入れよう。簡単なことではないか。それこそが我々が同盟の後継者である証しであり、更にアーレ・ハイネセンの心を今に

伝える者の義務である」

同盟の精神、それは何にも増して尊いものだ。

それを捨てたらもはや同盟ではない。アーレ・ハイネセンの子ではなくなるのだ。

物理的な国家の存亡以前に同盟はその精神において滅びてしまう。

「諸君、我々の誇りとはどこにあるのか、忘れてはならない。それは建国の遺志ではないか。そしてその灯を保つことではないのだろうか」

政治家たちはこの演説を聞き、襟を正した。

同盟の誇りはそこにこそあるのだ。

議会では投票が行われたが、結果は本当にごくわずかの差で亡命受け入れが可決された。

ヨブ・トリューニヒトは安堵の溜息を漏らした。

それを聞きつけたホアン・ルイが声を掛ける。

「議長、名演説だったね。演説が得意な御仁だと思っていたがやはり大したものだ。いや、これは皮肉じゃない。皮肉っぽいのは私の癖だが、今のはそうじゃない。私も実は議長が建国の遺志を持ち出してきたことで安心しているんだ。それは大事なことだからね。議長も亡命受け入れを決められて安心だろう」

「受け入れが決まって安堵しているのは事実だが、少し思い違いをされているようだ。私が最も安心しているのは投票の結果の方だ。僅差だったろう。それでこそ安心できた」

「それは何のことだろうね、議長……」

さすがのホアンでもトリユーニヒトとが言う意味が分からない。

投票の結果が僅差、それが良いとはいったい何だろう。

しかしさすがに思い当たることがあり、顔の表情が緩む。そしてヨブ・トリユーニヒトの政治家としての姿勢に信頼を持った。

「そうか、議長、掛け値なしに見直したよー」

「分かったようだね。そう、私の演説によって意見を変えた者も多い。しかし、一時の感情に流されず、自分の思う所を曲げない者も多くいたのだ。だから僅差になった。その冷静さも大切なことだろう」

「ああ、確かにそうだよ議長。同盟の精神と民主主義は熱狂ではなく、それぞれが真摯に考え、考えを押し付けも捻じ曲げもせず、互いの考え方を認め合うことで守られる」

ホアンは更に笑顔になった。

軍事力はさておき、精神面において同盟はまだまだ捨てたものではない。そう分かっ

た  
か  
ら  
だ。  
。

## 第一百話 489年12月 父の決意

イゼルローン方面に帝国側から戦闘艦ではなく、大規模な輸送船団が到着した。

これ見よがしなその姿を、要塞の側ではやはり沈黙で見守るだけだ。

「これで帝国軍としては長期布陣が可能になる。それだけの物資が届けられた。むしろ長期戦は本意ではないと思うんだが」

ヤンは情勢の変化に応じて思考を巡らしていく。

「長期戦つてことじゃないでしょうよ。なぜなら物資ならイゼルローンの方が多く、物資でこつちが音を上げるとは考えられませんから。単純な誘い出しじゃないですか？ 遠征してきた相手の補給を叩く、これは当たり前ですから、それを敢えてさせよう」と

「おつ、アツテンボローも戦術を語るようになったなあ。成長はいいことだ。先輩として嬉しいね」

「茶化さないで下さいよ。では先輩は釣り出し以外に何だと思うんです？」

「うーん、他に考えられることは守備側に対する精神的な疲労と圧迫を加えることだろ

うか」

「それなら輸送船の中身が空でもいいわけですね。確かに効率的な手で」

「本当にそうなのかどうかは別として、今は考える材料が不足している。当面守備を固める以外にやることがないのは、変わらないんだが」

その頃、既に帝国軍本隊は動いていた。

「今や機は熟した。ミッターマイヤー、ロイエンタール、ビットェンフェルト、シユタインメッツ、ケンブ、各艦隊を率いて準備が整い次第出陣せよ！メックリンガーは本隊に留まり幕僚長に任ずる。首都星オーディンの治安はケスラーを憲兵総監として最高責任者に任ずる。また、アイゼナツハは自身の艦隊と共にオーディンとどまりそれを補佐せよ」

諸提督は既に出陣を予定していたが、やはり実際に行動するとなると興奮はある。

「卿らの目的地はイゼルローンに非ず、フェザンである。今こそフェザン回廊を利用して戦いに終止符を打つ！」

黄金の霸王はこれまで誰もしなかったような華麗な軍略を駆使する、それはもはや確信に近かった。

何と、これまで誰も考えなかったフェザン回廊を利用することで、叛徒に攻め入る

とは。どれほどダイナミックな戦略なのだろう。

各艦隊司令が慌ただしく準備を進めて行く中、ミッターマイヤーとロイエンタールは共にワインを傾けることを忘れない。いったん出陣すれば次はどこで合流できるかわからないのだから。

「ミッターマイヤー、今回の大作戦だがやはりあの方らしい壮大なものだ」

「そうだな。あの方はこうすると思っていた」

「だがその壮大さに目がくらんでしまうが、やや腑に落ちない部分があるのも事実だ」

「それは俺も考えていることと一緒にだろうな。変な言い方だが、さすがだロイエンタール」

「そう返されるとは思わなかったミッターマイヤー。不敬だぞ、くらいに言われるかと思っていたのだがな」

ロイエンタールとミッターマイヤーは帝国の双壁と呼ばれる将である。その考えは戦略的にも深くに及んでいる。

だからこそ解せないものがあるのだ。今回の出兵においてただ一点だけ。

「本当に不敬な時にはそう言うさロイエンタール。ともあれ今回の出陣、妙なのはそのスピードだ。敵の意表を突き、思いもしないフェザーン回廊から攻め込むというのが作



戦の根幹だろう。それなら出陣をいったん欺瞞で覆い隠すべきではないか」

「全くその通りだ。最も有効なのはイゼルローンに行くと思わなければならぬ。一気にフェザーンを陥とすことだろうな。そんな電撃戦をとらないとは思議だ」

これ以上は考えても分からない。

しかしながら勝利を疑うことは微塵もなかった。

帝国軍は戦闘用艦艇だけで十一万三千隻を擁する大艦隊になる。これは先年の同盟軍による帝国領侵攻作戦以上の規模だ。

フェザーンを指呼に臨む距離に集結していく。

主力戦艦、戦艦、空母、軽空母、重巡航艦、軽巡航艦、駆逐艦、水雷艇から編成される一個艦隊、それぞれが整然と布陣を揃えつつある。微調整が終われば各艦隊はきっちり同じ距離を保つようになるだろう。

見る者が見れば、その布陣の綺麗さだけでも指揮官の力量が分かる。そうでなくとも美しい光点の列の壮大きさに心打たれる。

反面オーディンにはわずか一万八千隻の一個艦隊しか残されていない。アイゼナツハは攻守にバランスが取れ、柔軟性のある将だが艦の数は少ない。それはラインハルトの本隊はもちろぬイゼルローン方面のキルヒアイスも絶対に敗れることはないという

自信の表れだ。

このフェザーン回廊への侵攻は各方面へ急報としてもたらされる。

イゼルローン回廊とは違い、フェザーン回廊近辺には民間用航路と軍用航路の別はない。というより軍用航路がほぼ存在しない。これまでは帝国軍もフェザーン回廊方面など考慮していなかったからだ。

そうなると帝国艦隊は民間輸送船団に容易に発見される。何も隠しようがない。

「な、何だあれば！ 帝国軍か！ しかしどれだけの数があるんだ！」

民間商船の艦橋では、スクリーンに捉えきれないほどの光点を見て、異口同音に啞然とした声が漏れた。見たことも無い大船団、いや軍用艦で構成された大艦隊である。

帝国軍は民間船に対し航路からの退避命令を発してきたが、攻撃をかけてくることはない。

逆に帝国艦隊へフェザーン側の警備隊や航路局が静止を呼びかけても応えることはない。むしろ、誰もがこんな大艦隊に何をどう呼びかけても無駄だと思っただが、無駄を嫌うフェザーン人の中にも一応職務を全うしようとする者がいたのだ。

しかしさすがにフェザーン政府直々の通信に対しては艦隊も返答を返してきた。し

かしそれは問答無用というのに等しい。

「フェザンといえど帝国領である。そこへ帝国軍が向かうことについて何の不思議もなく、事前通告は不要と判断した。むしろ艦隊駐留の準備を速やかに整えられたし」

自治領であることについて全く考慮の欠片すら見せない。

もはやフェザンの軍事的占領は既定路線だと言い放っている。

そのニュースがフェザン二十億人を驚かせながら駆け巡ると、慌ただしく各種の艦船がフェザンから出航していく。

もちろん帝国軍から逃げるように出ていくのだ。しかし、それはフェザンに停泊していた民間船全体からすれば一部だった。フェザン商人たちはしたたかで、帝国軍がフェザンに来たところでむやみに暴虐を働かないことを見通している。もしかすると新しい商売のチャンスがあるかもしれない。

何より帝国軍としてもフェザン商人からの信用を破壊することは得策ではない、そう考えるだろう。今後ともフェザン商人の協力を得た方がいいのは自明だ。

そして脱出していく側の船の一つにエカテリーナが乗っている。兄ルパートや父親アドリアン・ルピンスキーとは一緒の船ではない。もちろんルピンスキー家としてリスク分散のためだ。ちなみにヒルダやサビーネなどの正統政府の面々はもう一足先にハ

イネセンへ向かっている。

フェザーン回廊からあとわずかで同盟領に入ろうと言う時、エカテリーナはルパートに連絡する。

その通信で互いが無事に脱出したことを確認して喜んだのはいいが…… エカテリーナへ寝耳に水の情報が伝えられた。

「エカテリン、驚かないでほしい。自治領主アドリアン・ルビンスキーはフェザーンを脱出していない。」

「えっ、お父様が脱出できなかったの！ そんな、どうして！ まさかあのお父様に限ってハマなんか」

「違うエカテリン。脱出できなかったんじゃない。脱出しなかったんだ。それを本人の口から聞いた」

「よけい変だわ！ それで兄さんは平気なの？ 自治領主のいないフェザーンなんて、どこをどうやって復興するの！ いいえ、そんなことよりお父様の安全が第一だわ。帝國軍は見つけようと探しまくるに違いない。そして見つかったらただじゃ済まないでしょう。そうなったらどうするの！」

「平気とかそういう問題じゃないんだ。自治領主が自治領主として判断し、行動したん

だ。僕らがどうこう言うべきじゃない」  
ルパートも困る。

むろんエカテリーナの気持ちも分かるんだが、それとこれとは別だ。自治領主の判断に誰も逆らってはいけない。

「でも兄さん、これはそんな、普通のことじゃないもの！」

「気持ちは一緒だよ、エカテリン。しかしフェザンは僕らに託されたんだ。まだ通信ならフェザンに届く。早く、今のうち聞いておくといい」

言われるまでもない。

エカテリーナは直ちに父アドリアン・ルピンスキーに連絡をとる。

「お父様、言い訳は一切聞きません。早く脱出して下さい！」

「エカテリン、やはりそう言うか。お前が必死なのはよく分かる。それも父として嬉しいことだ。しかし、結論は変わらん。ここに残る」

それでも食い下がるエカテリーナを優しく見て、簡潔に告げる。

「一つ隠していたことがあるのだ。エカテリン、実はこの父はもう長くはない。脳腫瘍だ。これはもはや末期で治しようがないらしい。もつてあと数ヶ月とのことなのだ」

「えっ、そんな！ このところ調子が悪いと言っていたのは、そのせいだったの！」

エカテリーナは絶句する。

自治領主アドリアン・ルビンスキーが知らぬうちに重病にあったとは。

「間抜けだと思つたろう。自分でもそう思つたぞ。大きなことを言いながら、自分のことはおろそかになっていた。ただし、それでも死ぬまでは働く。どうせならフェザーンに残り、さんざん帝国軍を悩ませ、後ろから攪乱して見せる。それくらいはやるつもりだ。お前たちとフェザーンのために」

やつとアドリアン・ルビンスキーの真意が知れる。

もはや助からないなら、最後までフェザーンのために命を燃やすのだ。

「エカテリン、お前という娘を持って幸せだった。親馬鹿かもしれないんがお前はフェザーンを託すに足る器になれる。いや、経験が浅いことを除けばもうその器になっている。ルパートと共に、未来を作れ」

「そんな！ お父様のいないフェザーンを作つてもどんな意味があるというの！ ダメだわ、そんなの、そんなの許せない」

エカテリーナの驚き、嘆き、それに構うこともなく父は締めくくる。

「かの同盟軍のヤン・ウエンリーは口を開けば年金のことばかり言っているそうだが、この父に年金は不要になった。その代わりドミニクを頼む。あれはあれで皮肉っぽいながら、忠義などところがあるのだ。助けてやってくれ」

それで通信は切られた。

歴代最高と言われたフェザン自治領主アドリアン・ルビンスキー、いや一人の父親としてもつと話したいことはあつたろう。これが本当に最後の会話になるのだから。

しかし、そんな未練は自分から断ち切った。

剛毅な父、そして自治領主、その姿を覚えておいてもらいたかつたのだ。

エカテリーナの方も再び通信をとることはなかつた。

父との別れ、感情は渦巻いて果てることがない。

こんな日が来るとは予想もせず、いつまでも一家は優しい風の中にいると思つていた。それが思いもよらない悲しみになるとは、こんなに突然に。

ただし頭では分かっている。

こんな悲劇は銀河のどこにでも転がっていて、長く続く戦乱の人類社会では珍らしいと言うに値しない。

そして何よりもここで立ち止まることは、父の期待に背く。

これまで教えられ、培われてきた父の思いを無にする。

先に立つて導く人間はもういない。だが自分はアドリアン・ルビンスキーの子として、その誇りを胸に力の限りを尽くす。

これからは自分の信じる道を行くのだ。

俯いた表情も、身に走る震えも、消してやる。

呼吸すら難しい嗚咽も、胸を潰してくる痛みも、今だけのものだ。  
明日には引きずらない、そう決めた。

だから今は敢えて言おう。

さらば父よ、と。



## 第百十一話 489年12月 縦深陣を突破せよ

「フェザーン回廊出口からの航路、ここを破らねば話にならん、か。面白い戦いになりそうだ」

ラインハルトがブリュンヒルト艦橋の指揮シートに浅く座り、足を組んだまま言う。目の前には拡大されたスクリーンがあり、今は戦術支援モードであることが示されている。それは入力された指示の通りに簡単なシミュレーションを行い、判断の材料を与える機能のことである。しかしまだ何も入力されず、待機状態のままであり使われる兆しもない。ラインハルトは天性の直感と壮大な戦略で戦うタイプであって、細かなデータ入力などする気もない。

「概要から申せば、敵は予想よりもはるかに準備が整っている模様です」

横に立つ幕僚長エルネスト・メックリンガーがそう指摘する。ラインハルトがもう分かっていることでも確認するのが幕僚の役割である。

「少しは敵にも準備期間を与えるつもりが、与え過ぎたというわけか。いや、そうではない。おそらく我が艦隊がフェザーン回廊を使うと察していたのだろうな。かの魔術師

ヤン・ウエンリーあたりが見抜いたのであろうが」

実際にはヤンだけではなく、トリューニヒトに進言したエリザベートの役割が大きかったのだが、そこまでラインハルトが知るよしもない。

「まあいいだろう。勝利の条件が揺らいだわけではない」

そう言つてラインハルトは自信を覗かせる。むしろ戦いが簡単な作業ではなく、興奮するものであることが嬉しい。

現在、帝国艦隊十万余りはフェザン回廊の同盟領出口付近にまで進んでいる。

その前にフェザンを簡単に占拠した。

そこには小競り合いも地上戦もない。フェザン側は抵抗するそぶりも示さなかったからだ。

ただし占領による益もまた無かった。

経済的な利権や、特に帝国と同盟に貸し与え続け、膨大な額に膨れ上がっているだろう債権のデータがない。それどころか通商関係のデータは一切見つかっていない。

これはきれいに持ち出されていたためだ。

特に問題になるのは同盟領内の航路情報が消されていたことだ。これは軍事行動において制限が加わることと同義である。

ラインハルトはそのことでわずか表情を険しくしたが、特に何も言わなかった。

フェザーンには暫定統治と治安のためにロイエンタールだけを残り、その他の艦隊を全て率い、フェザーン回廊を進んだのである。

再びメックリングーが生真面目に統括を続ける。

「フェザーン回廊から敵領地内へ合計六本の航路が存在します。その内、大艦隊を展開できるのはわずか二本の主要航路、マル・アデツタ航路とポレヴィト航路しかありません。その両方へ敵の偵察隊とおぼしき小艦隊が遊弋しております」

「つまり、我が方が艦隊を分散させるという愚を犯さなければ、そのどちらかの航路を選んで進む以外にない、というわけだな。こちらは二本の航路を選択できるという利点はあるが小さなことだ。むしろ航路周辺に伏兵を置かれるか、包囲陣を敷かれる可能性があるのは大きな懸念になる。おまけに航路情報が充分にない以上、こちらの陣形をあまり広げるわけにはいかないのだからな」

「御意。いやはや、閣下が参謀の仕事までなされるとは、自分の存在意義を失ってしまいます」

メックリングーは芸術家らしくやや長めにしてある黒髪を掻き上げた。

それは呆れとも感嘆とも言える思いのゆえである。参謀の力を借りずともラインハ

ルトは瞬時にして戦いのデザインを把握できる才がある。

それでもラインハルトの常にある側にあったキルヒアイスは有用だったのだから、その凄さを思わざるを得ない。

「そう言うな、メックリンガー。卿の仕事を奪うつもりはない。その先を続けてほしい」  
ラインハルトもメックリンガーの気持ちがかかってわずかに笑う。キルヒアイスの代わりなど誰にもできないというのが本当だ。

「それでは続けましょう。敵主力は現在、その二本の航路のどちらにも対応できるギリギリの位置にあります。偵察の報告によるとその艦数は約五万一千隻、この数は事前に予測した範囲内に収まるものといえるでしょう。しかしながらそれに予想外の艦隊が加わっているのも事実です」

「例のフェザン艦隊か。実戦経験もない新造の艦隊、実力の程は分からんな。まあ、だからといって侮るのは愚か者のすることだが」

「そのフェザン艦隊はおよそ三万三千隻、無視はできない規模と思われます。帝国艦隊の圧倒的な数の優位は消されぬまでも縮小は免れません」

だが戦うことは決まっているのだ。

黄金の霸王は躊躇せずに言う。

「それでも戦わぬという選択肢はない。敵の抵抗はその全てを蹴散らす。航路を制し、

ガンダルヴァ星系ウルヴァシー近辺まで侵攻できれば、敵領内で橋頭堡を築けるだろう。メックリンガー、作戦の第一段階を伝える。マル・アデッタ航路の方へ急速前進し、そこを通ると見せかけて直前で機雷を散布、直ちに反転しポレヴィト航路から速やかに侵攻を開始する。これは下手に使える航路を開けておけば艦隊の後背に回られるかもしれない、それを防止するためである。そしてポレヴィト航路内では全体として紡錘陣形を維持せよ」

ラインハルトの天才がきらめき、戦いの未来を見据えている。それは確実な未来絵図なのだろうか。

同じ頃、フェザンに残されたロイエンタールは疲労の極みにあった。

フェザンの複雑な行政機構を理解し、官僚たちを使って統治しなくてはならない。はつきりと反抗してくるならまだしも巧妙にサボタージュされれば判別のしようがない。逆に反抗と決めつけければ、単なる間違いだつたりもするのだ。そんな中で官僚たちをなだめすかして働かせるのは本当に難しい。

ロイエンタールには戦闘よりも疲れる作業である。

「暫定統治の役も俺は二回目だ。そのうち艦隊戦よりも多くなるのではないか」

ロイエンタールは自分に向けてそんな皮肉を言う。

ただし、暫定といえども統治ができるからこそロイエンタールが選ばれるのであり、それに必要な政治的能力を持っている事が評価されている証しでもある。

それほど気分が悪いものではない。

おまけにロイエンタールは自分の戦いの力量について十分な自信をもっている。つまり目先の軍功を得る必要が最初から存在しない。

今のフェザーン人は帝国艦隊に表立った抵抗はしないが、憎悪の目を向けてくることは避けられない。フェザーン人は利益優先に思われているが、自主独立の気概を強く持っている。それを軍事力で踏みにじったのだから当然だ。

そして全ての生活を統治府とホテルで過ごせる上級将校ならまだしも、一般兵は艦から街に繰り出せないのはストレスが溜まる。もちろんそれを全面的に解禁にはできない。帝国兵が街に行けばフェザーン人とどんなトラブルになるか分かったものではない。何せ自分達は歓迎されざる侵入者なのだから。

逆に帝国軍兵の中には征服者として尊大であるのが当然と思う者もいる。其処はお互い様ではあるが、それもまた厄介なトラブルを招くだろう。

またロイエンタールには治安維持などの他、フェザーンにとって重要な通商の再開という仕事がある。もちろん帝国軍にとっては物資調達のための後方支援を得るとい

意図もある。おびただしい物資を帝国軍は本国から輸送してきたが、フェザーンの物資を得られればそれに越したことはないからだ。

これでは忙しくても仕方がない。

ロイエンタール艦隊麾下のクナップシュタインらは分艦隊ごとラインハルトの本隊に付け、侵攻に随伴させている。フェザーンに残った部下はバルトハウザーらの少数である。

突然、そのバルトハウザーが重大な報告を持つて飛び込んできた。

「ロイエンタール提督、ご報告申し上げます！ とある重要人物を捕縛いたしました！」  
「とある重要人物とは何だ？ バルトハウザー、卿は本来攻勢に強い艦隊指揮官であり、ここで警察のようなマネをさせているのは俺としても心苦しい。そんな言い訳をした上で言うのだが、職務である以上報告は正確に頼む」

「それが、フェザーンにおける重要人物でもあり、銀河帝国正統政府という賊の一味でもある者です」

「まあ分かった。それでその者の名は何だ」

「エルフリーデ・フォン・コールラウシュという女です。」

何だと！ ロイエンタールは驚く。

先ずエルフリーデほどの重要人物を捕らえるのに成功したことについてだ。

だがそれは驚きの一部でしかない。

あの謀略家エルフリーデ・フォン・コルラウシュがどうして捕まるといふミスをやらかしたか、そこに最も驚きを感じる。

彼女は無能な人物ではなく、一流の謀略家だ。とつづくフェザーンを脱出してしかるべきではないか。どうしてそうなったのか。

ロイエンタールは直ちに謁見する。エルフリーデは統治府の簡素な一室で取り調べを受けていたが、そこに飛び込む。

「うふふ、また会えたわね。ロイエンタール提督。今回は私も思いがけなかったわ。こ  
うやって捕まってるなんて、自分でも情けないわね」

あのエルフリーデのいつもの調子で出迎えられた。

若干の陰りはあるがロイエンタールには馴染みのものだ。

「驚いた……なるほど、それが捕まった理由か」

ロイエンタールは一目で理解した。それは隠しようがない。

エルフリーデの腹部は膨らみ、明らかに妊婦だったのだ。しかもほとんど臨月の大きさに見える。



「理由は見たまんまよロイエンタール提督。これでは宇宙船に乗ってもワープはできない。だからフェザーンから出ることは最初から無理なことだわ」

「だが胎児への影響を無視すれば逃げられたはずだ」

「うふふ、そんな薄情な女に見られたのなら心外だわ」

妊婦ではワープの悪影響が胎児に及ぶ。

エルフリーデがこんな体になっていれば、フェザーンに留まらざるを得ず、捕まるのは当たり前かもしれない。

そしてロイエンタールにはエルフリーデが妊婦になった原因についてはっきり自分のせいだと思いがたることがある。

オーデインで二人が深酒した夜のことだ。

時期もちょうど合う。他の男が原因などと考える必要もなかった。エルフリーデは本当に意外なことに生娘だったからだ。

「ロイエンタール提督、もしこうなるのを予見していたとしたら、たいした謀略家だわね。私を上回る謀略よ、素直に脱帽するわ。というより、私が女として自分で転んだというべきかしら。気になる男に目がくらんだ馬鹿な女、どこが謀略家なのか笑うわ。一時の気の緩みで万事休すつてやつよ」

「謀略？　ワープさせないために子を？　そんなわけはないだろう。それに子を望むこ

となど俺にはあり得ない」

エルフリーデの自嘲の言葉に自分の自嘲を乗せて返す。

それはロイエンタールの素直な言葉である。ロイエンタールほど出生から母親に憎まれた者はなく、その捻じれた感情から子を持つことを拒否してきたからだ。

ただし、ロイエンタールにはもう一つの疑問が残る。

どうしてエルフリーデは子を産む決心をしたのか。

今のような動乱の時期、フェザンから移動する必要があることを予期できなかったのか。いや、そんなはずはない。謀略家エルフリーデがそんなことも見通せないはずがない。それでも子を守って産もうとしたのだ。それを譲らなかつた意図が不明である。

「ふふ、何を考えているか分かるわよ。でもね、私は産むわ。後悔なんてしていない。ロイエンタール提督、自分が親になれないなんて考えるのはやめて頂戴」

「どのみちここまできたら産むしかないのだろう……」

「もちろんそうね。認めるついでにもう一步進めて父親になつてほしいわ」

「それはできない。理由は、言わずとも分かるだろう。俺に家庭は築けない。築く資格もありません」

「私のことはともかくロイエンタール提督、あなたは父親になるべきよ。何よりも自分のために」

ロイエンタールは若干の混乱のまま、結論を保留にした。

だがエルフリーデを官警に引き渡すことはせず、匿うことは決めている。官僚との交渉に必要との名目をつけてホテルのフロアを借り切り、そこにエルフリーデを留めおいたのである。

## 第一百十二話 490年 1月 ポレヴィト会戦

帝国軍がフェザン回廊を突破して同盟領に雪崩れ込む少し前のことだ。

同盟軍統合作戦本部は必死に対処を考えていた。

「どうやらヤン・ウエンリーの言うことが正しかった、というわけだ。なるほど神眼とも言うべき戦略眼だな。いや、世間で言う魔術師といったところか、グリーンヒル君」

「クブルスリー本部長、正にそうです。ですがこれは喜ぶべきことではなく、我が同盟にとつて最悪に近い予想が当たったというものです」

帝国軍、フェザンを占拠。

そのとんでもないニュースは同盟首都ハイネセンにも伝わり、随所でパニックを引き起こしていた。

「ともあれ直ちに出撃だ。しかし準備が整っていてよかつた。今すぐに出れば、なんとか帝国艦隊が領内に入る前にフェザン回廊近辺に到着できるだろう。」

「本当に幸運です、本部長。ヤン提督とその言を見逃すことがなかつた同盟政府に感謝するしかありません。政府の疑義がなければ我々はおそらく一笑に付していたでしょ

うから」

「全くその通りだ。軍事行動において政府に足を引つ張られることが多かったものが、よもや助けられることがあるとは思わなかった」

同盟艦隊はフェザーン回廊へ向け急いで航行する。

帝国軍が同盟全軍よりも多いと分かっている以上、少なくとも地の利を活かし、準備を万端にしておかなくては戦いにならない。

ハイネセンには第一艦隊のみを残し、残りの全てである第二艦隊、第五艦隊、第七艦隊、第十艦隊、第十一艦隊が即座に動員された。とはいえこれまでの戦いの傷は深く、半個艦隊しか数のない艦隊も多い。

もはや非常時、総力戦に近い。

補給物資は目録も在庫確認も全て後回しにして、随時同盟領内の補給基地から吸い上げながら足を止めずに進んでいく。

今回、迎撃を指揮する総司令官は第五艦隊アレクサンドル・ビュコック大将と定められた。

戦歴、実績共に並ぶものがなく、当然のことだ。

当初、式典も無しに元帥への昇進という話もあったがこれはビュコックが断ってい

る。

「戦果もなしに昇進はできんし、そんなことは後回しでもよいじやろう。勝てばもちろん喜んで昇進させてもらうが、もし負けたら同盟も同盟軍もなくなっており当然昇進もないから都合がよい。縁起でもないがその通りじや」

司令部総参謀長は士官学校から転任してきたばかりのチユン・ウー中将、副官にスールズカリッター中佐が当てられた。

同盟市民は軍部をさんざん無能呼ばわりしたが、いざ艦隊が出撃したのが分かると、祈りを込めて勝利を待ち望むしかできない。

もし敗れて帝国が同盟を占拠する事態になれば、市民は思想矯正という名目で收容所に入れられる可能性がある。人間扱いもされず、開拓惑星をさまよい続ける未来など考えたくもない。

思想を押し殺し、帝国万歳と叫ぶまで事実上の奴隷にされるかもしれないのだ。本気でそう叫べば心が壊れてしまった証であるし、うわべだけで叫べば、アーレ・ハイネセンの子を自称する同盟市民の誇りを自ら投げ捨てたことになり、屈辱の極みとなる。いずれにせよ悲惨な未来だ。

「さて諸君、帝国軍との戦いにあたり先ずは儂の方から感謝を伝えようと思う。この祖

国存亡の危機に一緒に戦えることを光榮に思う」

同盟第五艦隊旗艦リオ・グランデの作戦会議室においてビュコックが居並ぶ諸將に言う。これも若干縁起の悪い言葉だったが、それは本心であり、何よりもこの戦いの重大さはこれまでの比ではない。

「帝国軍は約十万五千隻の大艦隊でやってくる。おそらく同盟領を少しばかり掠め取る、というつもりではなからうて。もしそんなことをすれば先年の同盟軍の二の舞になる。おそらく大艦隊で一氣にこちらの首都星ハイネセンを突くつもりなのじゃろうな。それでこそ長い戦いの終止符になるというわけじゃ。こちらの望みとは全く逆の形で」

諸提督もそこには完全同意だ。帝国軍は同盟を一氣に滅ぼす決意であるとの認識は共通である。

「具体的な迎撃案についてはチュン参謀長から説明があろう」

ビュコックからの指名を受けてチュン・ウー・チェンがスクリーンを指し示しながら話し始める。

「本来なら帝国艦隊を領内深くまで誘いこみ、補給を断ち、包囲するのが順当なところだと思われます。それが自領で戦う利点を最大に生かせるものであり、仮に敵が撤退に転じたら理想的な追撃戦になり殲滅も可能でしょう。まさに同盟が行った帝国領侵攻の

焼き直しです。しかしこの場合向こうが大艦隊であることが厄介なポイントです。すなわち乱戦から下手に拡散させれば、最終的に撃滅できたとしても有人惑星に対する被害が途方もなく広がると予想されます。そしてもう一つ、深く侵攻してしまえば、敵の方としても心理的に撤退を考えにくくなるでしょう。言い方を変えれば帝国軍の諦めが悪くなるというわけです。こちらは撤退をしてくれればよいのであつて殲滅まで望んでいるわけではありません」

参謀長の理路整然とした言葉に皆は頷き返す。

補給を断つ長期戦はできない。帝国のような焦土作戦は最初からできないのだ。それは同盟の置かれた条件による。すなわち、同盟は有人惑星の同盟関係で成り立っている。いくら迎撃に必要だからといって犠牲を甘受するわけにはいかない。敢えて犠牲にする作戦は取ってはならない。

「以上の点から、帝国艦隊を深く誘い込むのではなく、フェザーン回廊から同盟領内に入った時点で仕掛け、随時出血を強いていきます。その損害が無視しえなくなれば継戦を断念し、撤退するに違いありません。つまり回廊から大きく縦深陣を敷き、有利な態勢を保ったまま粘り強く戦い続けるといのが基本になります。幸いなことに向こうはハイネセンを最終目標にしている以上、無駄な回り道をしている余裕はなく、こちらとしては予想侵攻航路を十分に絞り込めるといいうわけです」



ここまで話し、チュン参謀長は言葉を区切る。

各人が充分に思考し、あらましを思い描くためだ。

「分かった、参謀長。ならば具体的にはマル・アデッタ航路かポレヴィト航路なのだろう。最初はそのどちらかで待ち受けるのだな」

そう言ってきたのは第二艦隊パエツタ中将だ。考え方がやや硬直化しているくらいはあるが、歴戦の闘将として知られている。戦いのデザインが分かったのだろう。

「その通りです。百パーセントの確信ではありませんが、おそらく考慮すべきなのはポレヴィト航路だけでしょう。なぜならウルヴァシーという補給基地化も可能な惑星が存在するからです。大気と重力が適正なのに開発されず無人なのはそしかりません。しかも近くには重要な通商惑星ランテマリオがあり、同時にこちらへ心理的圧迫を加えられますから」

こうして同盟軍の基本方針は定まった。

各艦隊の陣形を想定しながらポレヴィト航路内の詳細な検討にかかる。劣勢な側としては何としても勝利を続けなくてはならない。

ここで同盟軍に不思議な幸運が転がり込んできた。

何とフェザーン自治領所属の艦隊が同盟軍と共闘すると通達してきたのだ。

フエザーンは帝国領の一部だが、既に帝国軍によって占拠され、いわば亡国にある。だが意外なことに独自の艦隊を保持していたのだ。しかも無駄な抵抗をすることなく早めに逃げ、温存されている。しかもその数は二個艦隊丸ごとという大規模なものである。その実力は未知数ながらここで同盟艦隊と共闘して帝国軍に抵抗してもらえれば非常な助けになる。今はいくらでも戦力が欲しい。

ビュコック総司令の判断で合流を快諾し、ポレヴィト航路に到着する直前に合流する。

「フエザーン自治領所属機動艦隊司令、アップルトンと申します」

「同盟軍アレクサンドル・ビュコック、この迎撃艦隊の総司令官をやらせてもらっておる」

これが通信画面の最初になる。もちろん本当なら自己紹介など不要だ。

アップルトンとビュコックは旧知であり、短期間だが過去アップルトンはビュコック第五艦隊の分隊指揮官だったことすらあるのだ。しかし今はお互いの立場を考え、打ち解けた会話をするわけにはいかない。

「この度の迎撃戦にフエザーン艦隊も及ばずながら助力いたします。作戦行動の主体は同盟軍なので、何なりとお命じ下さい」

「助力頂ける話は聞いておる。ありがたい」

だがしかし、ここでビュコックはたったの一言を付け加えずにはいられなかった。

「そして貴官も健勝の様子、何より良かったことじやて」

「また一緒に戦えて光栄です。閣下」

アッブルトンは多くの思いを込めて敬礼し、通信を終わらせる。

細かな連携や戦術をすり合わせる時間はなかった。それはシステムが違うのでかなりの時間を要することである。いかに元は同盟軍将官であるアッブルトンでもそこは仕方ない。本当は演習を繰り返し行い、初めて合同作戦が可能になるものだ。

しかしそこまで完全な連携でなくともフェザン艦隊の存在だけで敵の帝国軍から見れば大きな掣肘となるだろう。

同盟軍にとってすればフェザン艦隊を見せかけに置いておくだけで意味がある。

戦機は熟す。

帝国軍はチュン中将の見立て通り、ポレヴィト航路の中央を進んでくる。

全体陣形としてはやや密集した紡錘陣のままである。航路の情報が不充分なのでそれは仕方がない。

もちろん航路は回廊とは違い、衝撃波面によって周りを制限されていることはない。しかし航路外には思わぬ障害物や宇宙気流があるかもしれないのだ。帝国軍としては

そんなことで損耗するわけにはいかない。

それでも航路の途中には急に狭くなる狭隘部が存在する。ポレヴィト航路のような主要航路には少ないが、それでもいくつかはある。

そういうところにはえてしてダークマターの濃縮された塊が存在し、その重力場によつて遠距離ワープが難しくなり、慎重に通常航法で行かなくてはならない。

逆にいえば航行する艦船にとつてはワープ装置の作動を停止してメンテナンスができる場でもある。そもそもワープはそんなに連続で行えるものではない。時々しつかりと再調整しなくては直ぐに事故になつてしまうほどデリケートなものだ。

航路のあらまししか知らず、詳細なデータのない帝国軍にはそういう場所がどこなのか分からない。従つて必然的に航路の中央に密集する。おまけに適切な場所でメンテナンスできなければ、随時やるしかなく、全体として航行は遅くなる。

だが同盟軍の方はそういう航路狭隘部を熟知している。

それが地の利というものだ。

その理想的な一つを選び、決戦地とする。

同盟軍は航路の端いっぱいを使い、各艦隊を同心円状に配置して迎撃陣を敷いた。つまり帝国軍がただ来るだけで包囲網を完成させられるのだ。

航路中央部に進行してくる帝国軍に対し必殺の十字砲火を浴びせれば、理想的な損失比を保ちながら迎撃が可能になる。帝国軍は同盟迎撃陣の更に外側へ回り込むことは不可能だ。結果として帝国軍はその数の有利さを生かすことができない。

むしろ同盟側はその目的のために入念に射軸の調整などをして待ち受ける。

もちろん狭隘部なので同盟各艦隊の距離は充分に通信が取れるまでに収まっている。

そのため、仮に帝国軍が包囲を嫌って各個撃破の方針を取り、一方に偏ったとしても、それはアスターテの二番煎じにはならない。同盟各艦隊はすぐさまそれに呼応して動き、帝国軍の後背へ取り付き、それこそ袋叩きにできる。

要するに地の利を活かすだけでこれほど有利なのだ。

素晴らしいことに帝国軍がどのように動いても必ず同盟側が有利な態勢を保持していられる。

ちなみに共同歩調を取るフェザーン艦隊は同盟迎撃陣からやや後方に置かれた。

戦いが理想的に推移すれば、ある程度戦って帝国軍へ打撃を与えた後、乱戦になる前に同盟軍は素早く撤退する算段である。どのみち航路の利という絶対的利点がある限り帝国軍より速く移動でき、取りすがられる可能性はないのだ。つまり大軍に有利な消耗戦にさせられてしまうことはない。

そして同盟軍はまた別の狭隘部で待ち構えればいい。

繰り返していけば帝国軍の方に損害が重なり、いずれそれに耐えられなくなる。ハイネセンに近寄らせることなく撤退させられるだろう。

こうしてポレヴィト会戦が始まる！

銀河帝国、自由惑星同盟、そしてフェザーンの運命がかかった戦いだ。

「敵艦隊発見！ 接触予想時間、あと二時間、至近です！」

帝国軍総旗艦ブリュンヒルトのオペレーターが慌ただしく伝えてくる。

通常航法に移って半日、各種装置のメンテナンスや点検を行っている中でこの時を迎えた。

「なるほど、ワープに安全装置が働いて通常航法しかできないこの宙域、航路の難所となる。迎撃には適しているというべきだ。このあたりで漸減作戦を仕掛けてくるか。なかなかどうして理にかなっているな。スクリーンに全容を出せ」

ラインハルトに慌てる様子も無い。むしろそのスクリーンを見てメックリンガーがわずかに動揺する。

「閣下、警戒を解いていなかったとはいえ我が軍は戦闘準備に遅れを取らざるを得ません。二時間ではギリギリ間に合わせられるかどうか。しかも見る限り敵はこちらの進路を取り込む形で円形陣を敷いています。おそらく安全航路いっぱい的位置なので

しよう。この陣形を取られてしまつてはさすがに」

「さすがに、とはなんだメックリンガー、まづいと言うのか」

「残念ながら、このままでは我が軍が突破できないとは言いませんが損失は大きくなるでしょう。一度退き、航路の変更も含めて対策をお考えになるべきかと」

メックリンガーは正直に思うところを答えた。

ラインハルトが別の考えを持っているのかもしれないと想像が及んでいても言い渡すことはない。

虚飾のないそんな実直さもメックリンガーの美点である。艦隊指揮官として良し、参謀として良しという評判も当然のことだ。メックリンガーとしても自分の乗艦クヴァシルを離れてこのブリュンヒルトにいるが、芸術的ともいえる霸王の側にいることは決して嫌ではない。

「なるほど、さすがに卿は有能だな、メックリンガー。敵もそう考えるだろう。だからこそいい」

そしてラインハルトは奇妙な命令を出す！

誰にも予期できなかった艦隊運動であり、それを聞く各将も驚いてしまう。

「帝国全軍に告げる。全体の陣形を直ちに横へ広げる。それぞれの艦隊が隙を作らない

ようにしながら伸ばせ。そして最右翼にはビットテンフェルト、最左翼にミッターマイヤーが布陣せよ」

これを聞くや否や各将はラインハルトへの信頼によつて素早く動く。常識では考えられないことでも決めたのはあの黄金の霸王なのだ。

特にビットテンフェルトは自身が会戦における最終決定戦力と認識していただけにむしろ喜んでいる。

「司令官閣下、これは損害も多少は覚悟いたしませんと。今のうちに防御の弱い小型艦を後方へ移動させておいては」

ビットテンフェルトの参謀の一人がそう言った。順当な進言だが、しかしそんな言は受け入れられない。

「うるさい！ 全艦攻撃隊形だ。もつと喜ばんかグローブナー。出番が早まったのだぞ。前座も黒色槍騎兵、真打ちも黒色槍騎兵、カーテンコールも全て黒色槍騎兵だ！」



## 第百十三話 490年 1月 常勝の英雄

ポレヴィト会戦が始まった。

この戦い、結論から言えば同盟軍は大打撃を受けて敗退することになった。またしてもラインハルトの天才が同盟軍の思惑を打ち砕いたのだ。

帝国軍は横に広がった平板のような陣形でゆっくりと前進してきた。同盟軍側ではその意図が分からないが、当初の予定通り円形に包囲したまま撃ちかけ始める。

「帝国艦隊前衛、イエローゾーンからレッドゾーン突入！」  
「撃て！」

このままいけば全て予定通りだ。この包囲態勢で戦うのなら、同盟側の戦力が半数であつても負けはない。

同盟側はこのまま帝国軍を叩き、頃合いを見て順次後退すればいい。だが、ここで同盟軍に思わぬ足並みの乱れが出た。

スクリーンではつきり分かるくらい突出しつつある部隊がある。

「何かの、あの部隊は。接近し過ぎのように見える」

「あれは当艦隊に配属されたサンドル・アラルコン少将の分艦隊でしょう。ビュコック閣下、元に戻るよう警告なさいますか」

連携の乱れを危惧したビュコックとチュン・ウーは直ちに通信をとった。だが、戦意に酔った者にその警告は届かなかつたのだ。逆にビュコックに無礼ともいえる返信が返ってきた。

「閣下は甘い！ 敵を叩ける時に叩いておかなくては後顧の憂いを残しますぞ！ ここは急進し、一気に瓦解させなくては」

ビュコックはアラルコンの返信に再度の警告はしなかつた。

「混成艦隊の弱みが出たか。止むを得ん。適切な援護を図ることにしよう」

同盟軍は今回の戦いのため、艦船は各地の警備艇まで掻きあつめている。

艦艇数五万一千隻とはいえ内実はそんなところである。

また兵員も将官も、予備役さえ使つて数だけ揃えたが、その中には周りから能力を評価されていない者も含まれていたのだ。

このアラルコン少将もこれまで運よく戦死しなかつたから少将になっているだけで、本来は実力もなく思慮の浅い将と思われていた。これまで辺境の警備という閑職にいたのはそのためである。愛国心だけは本物かもしれないが、やれることは大きな声で蜚

勇を叫ぶだけだと。

だが自己評価はもつと上であり、そのために常日頃から周囲の評価に不満に思っていた。そのため目に見える戦果を過剰に追い求める心理に陥っている。元々の猪突猛進の性格ともあいまって総司令部に抗うという結果となった。

また総司令部としても強引な引き戻しをしなかったのに理由がある。

積極的な攻勢が戦果を積み上げることと可能だと思つてしまつたのだ。

「じゃが一理ないこともない。なぜか帝国軍の陣形は横方向に広がつておる。これに対し、上下方向から接近して挟みこめば、理想的な挟撃殲滅ができることも確かじゃな。それができれば帝国軍を一気に回廊へ押し戻すことができるやもしれん」

アラルコン少将に釣られるように若手の将たちが突出していく。帝国軍をやはり上下方向から挟み込んで猛攻を加え始めた。帝国軍からも反撃が届くが、この態勢では同盟軍の方が格段に有利である。

「それに乗るしかなからうて。この第五艦隊と第二艦隊は敵艦隊の上面、残りの第七、第十、第十一艦隊は下面から接近、効率よく敵を叩く。各艦隊に伝達を頼む」

同盟軍はこの陣形移動によつて更に優勢を保つことになる。

対する帝国軍はもう耐え忍んでいることしかできないように思えた。帝国軍の各将

は各将でこの状況について思うところがある。むろん、ラインハルトに対する信頼に揺らぎはない。敵領内であっても、一時劣勢になってもそれを保つのは驚くべきことである。

「ローエングラム公のお考えは敵を強行突破か。大軍であるからには損害に目を瞑り、侵攻を優先するというわけだ。確かに多少数を減らしても敵の首都星まで届けば勝ちだからな」

そうミッターマイヤーが言った。

実はこのセリフを大半の将も異口同音にそれぞれの場で言っていた。続けてそれぞれの口がまたしても同じことを言う。

「しかしそれにしても妙だ。速度が遅すぎる。強行突破は迅速でなければ意味がなく、このままいけばこちらが宇宙の塵になる方が早いのではないか？ 不思議なことだが」

そしてついに同盟軍の挟撃態勢が完成した。

これまでのところ、損害は帝国軍の側が遥かに大きい。

「よし、頃合いだ。そろそろ出来上がったステークにナイフを入れよう。今より全ての陣形を変える」

ラインハルトがそれまで退屈そうに指揮シートに座り、戦況を眺めていた。

しかしここで立ち上がって指を指し示す。

ここに今、霸王の霸王たるゆえんが示される。ブリュンヒルトの艦橋に緊張が走った。

「メックリンガー、直ちにビットンフェルトに通達せよ。我が陣形の真上に移動、速度を上げて敵艦隊を切り裂きながら突つ切れ、と。そしてミッターマイヤーは逆に直下へ移動せよ。同じく敵陣を撃砕しながら前進するのだ。」

ここで帝国軍は急速に形を変えていく。

「他の艦隊はそれに合わせ時間差をつけて真上または真下に移動せよ。すなわち全体の陣形を90度ひねった形へと変えるのだ。特にケンプに命じる。ビットンフェルトの艦隊のすぐ後に続き、全艦載機を発進させておくのだ。敵陣の乱れについて思うさま叩いてやれ」

ラインハルトの通達を聞き、ビットンフェルトが口笛を吹く。

その顔には傲慢ともいえる猛者の表情が浮かぶ。

「なるほどそういうことだったか。ローエングラム公が敵にやられっぱなしでいるわけがない。総司令部に委細承知と伝える。者ども怯むな！　すぐさま移動し、敵陣へ切り込む。遅れるものはこのケーニヒス・ティーゲルが討ち果たすと思え！」

各将たちは時間もかからずラインハルトの意図を理解する。

帝国軍が横に広がったため、戦果を得ようと欲をかけた同盟軍は上下方向から更に圧迫しようとした。それに対し、いきなり陣形を90度曲げた。これによつてあたかも帝国軍はナイフのように上下の同盟軍を切り裂いたのだ。

通常なら猛攻を受けている最中にこんな移動は困難なことで、それこそ非常識だ。しかしラインハルトは別の理解をしている。ビッテンフェルトの剛毅さとミッターマイヤーの迅速さを見極め、そこを信頼していたのだ。だからこそ最初からそのつもりでも移動が大きくなる端にそれぞれを置いていた。

そしてラインハルトの思い描いた通り、帝国軍は敵の分断に成功しつつあった。ビッテンフェルトとミッターマイヤーは速度を上げて、対応が間に合わず何ら有効な手を打てない敵を切り裂く。

ただでさえ同盟軍は上下から挟撃するために戦力を二分している。

そのどちらも切り裂かれ、つまり四分割されてしまった。そうなればもはや帝国軍の局地的有利は圧倒的なものになり、同盟軍は一転して狩られる獲物になってしまう。

つまり同盟側は自分で転んだ。最初の円形陣を崩さなければ、少なくとも帝国軍に敗けることはなく、当初の目的を果たしただろう。それなのにかつに接近してしまつたのだ。

おまけにその行動は、そこに航路上の障害などないことを証明したようなものであ

る。航路をよく知る利点を自ら投げ捨てたのだ。

帝国軍としては艦隊行動を行うのに余計な神経を使わなくていい。それも霸王の計算の内なのだろう。

しかしこの結果についてビュコック総司令の責任にすることはできない。暴走した若手の将たちを見殺しにすれば、それはそれで同盟艦隊は空中分解してしまっただろう。

「第七艦隊、ホーランド提督戦死！」

「第二艦隊、旗艦パトロクロス大破！ 司令部の安否は不明！」

白銀の砲火が一閃し、更に第二撃、第三撃と続く。帝国軍の反撃を受けた同盟軍に悲報が飛び交う。

むろん総司令部に悲痛な空気が満ちた。戦勝気分から一気に暗転したのだ。各艦隊は一気に乱れ、そのまま崩壊しつつある。もはや艦数で劣る同盟艦隊に勝ち目はない。「帝国のローエンングラム公は一筋縄ではいかんかったか。しかし素直に負けてやるわけにはいくまい。このまま民主主義を宇宙から消してはならん。全艦隊、航路いっぱいまで散開、そして全速でランテマリ才まで後退を図れ。帝国軍は先の航路の詳細を知らぬまま追撃を続けることはできんじやろう。諸君、ここを凌いで逃げることに専念し、次

につなげるんじや」

このビュコックの判断は全く正しい。

ただし帝国軍の各将は戦意も高く、力量もある。容易に逃すはずはなかった。

同盟軍をあつさりとは断したビッテンフェルトとミッターマイヤーは、通り過ぎた後に反転を始めている。同盟軍はそのタイミングで攻勢をかけて反転を邪魔することはできなかった。

その二つの艦隊は同盟軍にとって退路に当たるところにいる。その少ない戦力ともう一度戦わなくては撤退もできない。

そこで足止めされていると、今度はラインハルトらの艦隊が熾烈な攻勢をかけてくる。

こういった殲滅戦ではケンプの艦載機隊が特に威力を發揮した。同盟軍は当初遠距離砲戦で漸減することを企図していたため、スパルタニアの発進が一步遅れ、空母を先に叩かれてしまっている。一方的に帝国軍が制空権を奪い取った。

「カールセン少将の分艦隊は帝国艦のエンジン部だけを狙い撃て。わざと大破にとどめ、損傷した敵艦を盾にして妨害にかかるんじや。しぶとく戦えば撤退ができる。時間が経つほど補給物資の少ない向こうの方が苦しがる」



ビュコックはさすがに老練な指揮官だった。そう言って少しでも有効な戦術を伝える。

敗色が濃厚な中でも、パニックになることなく次に繋げようとするのを忘れない。

この最終局面、ミッターマイヤーが同盟軍の最後の抵抗を打ち砕き、とどめを刺そうとする。

だが、乗艦ベイオウルフの艦橋で右手を上げた瞬間、思わぬ妨害が入った。

「報告します！ 右舷より艦隊が急速接近中！ 数、およそ一万七千隻！」

「何！ 今さら敵は後詰の投入か！」

「いいえこれは叛徒の艦隊ではありません！ 識別信号なし、艦型データベースでは

…… フェザーンの新造艦です！」

「何だと！ この付近にフェザーン艦隊がいるのは分かっていたが、戦場に出張って来たのか。おそらく前方に陣取ってこちらの殲滅戦を邪魔しようという算段だろう。よし、バイエルライン、ジンツァー、ドロイゼン、それぞれ二千の分艦隊で出る。先ずはお手並み拝見だ。機動力を維持しながら撃ちかけ、敵の力量を測れ」

フェザーン機動艦隊は当初同盟軍のアシストに過ぎない立場を保っていた。もちろんここは同盟の領内であり勝手な行動はできない。

それ以上に、これまで帝国軍と直接砲火を交えたことはない。

ここでそれを行えば、決定的に帝国軍の敵となる。

フェザーンを脱出したルビンスキー家はそれで後戻りできなくなる。重大な政治的決定と同義なのだ。

だが同盟艦隊が瓦解しつつある今、動かないでいるわけにはいかない。フェザーン艦隊がエカテリーナから事前に受けていた命令はいくつかあるが、その第一のものは帝国軍の力を削ぐこと、であった。どのみち帝国軍の勝利はフェザーンの未来が無くなることに等しいからだ。

こうして戦いは新たな局面に入った。

ミッターマイヤーはフェザーン艦隊など新造に過ぎないと知っている。それでも油断せず、分艦隊によって戦力を推し量ろうとした。信頼できる部下を向かわせた後、スクリーンを凝視しながら戦いを見守る。

結果的にフェザーン艦隊の練度は非常に低いものと分かった。

バイエルラインらの艦隊運用がそのものだったということもあるが、それに比べて酷い有様だ。

駆逐艦の優位性である速力は、艦列がなかなか整わないため、それを調整するために

費やされて意味がなくなる。

そして戦艦の大火力もまるで同期していないので無駄になる。それ以前に砲撃の照準が悪すぎる。これではシールドを破る同時着弾などできっこないレベルだった。

ミッターマイヤーは蜂蜜色の髪をいじりながら言った。

「まあ、そんなものだろうな。実戦経験が無ければそうなる。可哀想だが運が悪いと思ってもらうしかない。脅威にもならんだろうが一度は叩き、我等の邪魔しないでもらおうか」

自信を持ってミッターマイヤーがそのフェザーン艦隊に切り込んだ。時間がもったいないという思いもあり、単純に仕掛けた。

だがここから思いもかけない様相を呈してしまう。

## 第百十四話 490年 1月 フェザン艦隊の戦い

なるほどミッターマイヤーの艦隊に損害はあまり出ていない。

フェザン艦隊の練度は低く、照準が悪いのは本当だろう。だがフェザン艦隊の陣を破ることもまたできないでいる。攻勢で開けた穴は憎らしいほど素早く塞がれ、隙を見出せない。

そしてあまりにも合理的に配置を組まれてしまっているのだ。これでは進路を決められないまま拒まれる。

疾風ウオルフ、帝国軍でも攻勢に長けた将であるミッターマイヤーが何と阻まれている。

高速巡航艦隊が得意の突撃しようにもいつのまにか戦艦による壁が直前に立ちはだかっている。さすがに防御力は段違いなため、それ以上進めない。そして戦艦隊はといえば水雷艇にしつこく取りすがられ、回避行動を嫌でも取らざるを得なくなり、進路を乱されてしまう。それらに対処すべき駆逐艦は大口径砲の遠距離砲撃で牽制され思うように動けない始末だ。全ての駒が有効に動けなくされてしまっている。

「何だと！ こつちがバラバラにされているではないか。いったいどういうことだ！」

自慢の流れるような艦隊運動が封じられる。若干の焦りがミッターマイヤーを襲った。そして認めざるを得ないのだが、この結果は偶然などではない。フェザン艦隊の指揮官はいまましいほど有能だ。最初からそれと分かっていたら対処もできたろうに、個々の練度の低さから自分が見誤ってしまったのだ。

このフェザン艦隊はナイトハルト・ミュラーが指揮をとっていた。

「オルラウ准将、裏から右翼に巡航艦隊を回して下さい。そして逆に同型艦を引き抜いていったん休憩を。これで敵には実数以上に固い陣に見せかけられるでしょう」

「直ちに。そしてミュラー提督、敵が断念して回頭を始めた瞬間を狙って叩けるようにミサイル艦を配備、ですな」

「その通りです。なるべく驚かせるよう派手にやって下さい」

ミュラーはこのフェザン艦隊の練度が低いことなど最初から分かっている。

だが、それでも大きなところで間違わなければ戦いはできる。むろんあのミッターマイヤー艦隊相手では勝つことは無理だろう。しかし今の目的は撃滅ではなく、ただの時間稼ぎだ。それなら戦いようはあるし、ミュラーはそういつた粘り強い守備こそ自分の艦隊戦における持ち味であることを自覚しつつあった。

「相手は、あのミッターマイヤー先輩です。士官学校ではとても尊敬していました。い

や、今でもです。だからこそみっともないマネはできません」

結果的にミッターマイヤーはミュラーの網に取り込まれたようになる。いったん突破を断念し離脱にかかるが、貴重な時間を使ってしまった。目的である同盟艦隊の掃討をするにはタイミングを逸している。

そしてこの時までにはフェザン艦隊の指揮官があのだ士官学校の後輩、ミュラーであることを知っている。

「こんなに強かったのか……あの優し気なミュラーの奴が。人は見かけによらないということか」

そして別のところではやはりフェザン艦隊が帝国艦隊を邪魔していた。

「そのまま突っ込め！ 帝国軍の黒い艦隊は速いかもかもしれないが回避行動は苦手だ」

こちらのフェザン艦隊はアップルトンが指揮をとっていた。

今こそ自分の存在意義である、帝国軍相手の戦いだ。

アップルトンは練度が低い艦隊でも一直線に進むだけなら難しくないことを分かっている。

元はといえば同盟軍でも鬪将として知られたアップルトン、その得意の突進攻撃をするにはこの艦隊でも差し支えない。

砲撃の照準も、ただ前に撃てばいいと言われれば簡単だ。そして真つすぐ前方向に撃つなら、必然的に他の艦の砲撃と重なって密度は濃くなる。その熾烈な弾幕は多少の照準の甘さをカバーして敵を打ち破ることができる。

白銀色の線が幾千となく伸び、あたりの宙域を照らし出す。

アップルトンの艦隊はビッテンフェルトの黒色槍騎兵に横合いから突つ込んだ。いつも自分たちが取っているような戦法を取られて、黒色槍騎兵が戸惑う。

「何だこの無様な状態は！ 先手を取られるなど我が艦隊の名折れではないか！ ええい、とにかく攻撃の手を休めるな。敵の砲撃が届かない艦から反転し、なるべく早く攻撃を加えろ！」

ビッテンフェルトがそういう指示を飛ばす。怯むことを知らない黒色槍騎兵が獰猛さを發揮しようとした。多少の損害などものともせず、やり返そうとする。噛みつかれた竜が首を捻って反撃するようなものだ。

しかしながらそれは空回りに終わった。

慣れない曲面行動をしようとした黒色槍騎兵の艦はそれぞれの距離を保つのに気を取られ、思ったほどの速度にならない。今まで直線の突撃ばかりやってきたツケが回つて来たのだ。アップルトンが突破して飛び去る方が先になる。

「おのれ、小癩なフェザーンの艦隊め。ただで逃がすものか！」

ビッテンフェルトはもはや同盟艦隊の殲滅よりもこのフェザーン艦隊を優先して追撃しようとした。

「やはりこつちを追つて来たか。戦場を大局的に見ればそんなことをしなくてもいいだろうに。こちらにとつては好都合だが。よし、コナリー少将、手筈通り頼む」

そんなことをアップルトンが言うと、やがていくつかの光芒がきらめいた。

黒色槍騎兵の中で爆散が起きたのだ。

何事が起きたか、一瞬分からなかったが、黒色槍騎兵旗艦ケーニヒス・ティーゲルのオペレーターが報告してきた。

「ビッテンフェルト提督、これは敵の機雷です！ 敵は航行しながら機雷を後方に散布しています！」

「悪辣な！ 最初から勝ち逃げする気だったか！」

やむを得ずビッテンフェルトは追撃を断念した。大きく迂回してまで追うことに必然性がないことくらいは分かっている。大きく迂回してまで追うことには

結局、ミッターマイヤーとビッテンフェルトは同盟軍の退路を断つことも殲滅もできなかった。

同盟軍はラインハルトらに追われて必死に逃走していたのだが、辛くも離脱できた。むろん総司令ビュコックが本隊である第五艦隊を駆使し、決死の逆撃を加えたせいもある。



る。一時はシュタインメッツ艦隊に少なくない損害を与えて後退させている。ともあれ同盟軍はポレヴィト航路から後退し、会戦は終わった。

それぞれが戦いの総括をする。

「卿らの戦いは見事だった。これで我が帝国艦隊と敵との戦力差はいつそう大きく開き、もはや向こうは縦深陣をとることはできず、航路の邪魔をすることを諦めるであろう。この結果には満足している」

そう告げるラインハルトの前に、各艦隊司令の姿を映したスクリーンが幾つも浮かんでいる。

「ただし予想外なこともあった。フェザーンの艦隊があれほどやるとはな。最後に勝ち切れなかったとは残念だ」

諸将は戦いの高揚がまだ醒めていない。

しかしその中で、二人だけは違っている。

「申し訳ございません。フェザーン艦隊による邪魔に足を掬われ、結果的に敵の殲滅に持ち込めなかったこと、この身に責があります」

ラインハルトの言葉にミッターマイヤーが応え、手を水平に胸へ回しながら目を伏せる。これは処分の沙汰を待つ姿勢である。

別のスクリーンではビットンフェルトが同じ姿勢を取っている。こちらも同様に責任を回避しようとはしていない。

「まあいい。今回のことはミッターマイヤー、ビットンフェルト、卿らしい戦いをした結果に過ぎず、気を落とす必要はない。そこに不満はない。あるとすればフェザンの艦隊に対する備えを怠った俺自身にある。思いがけず向こうの指揮官はそこそこの優秀だったようだ。艦隊の練度が高まれば一定の脅威になるう」

そんなラインハルトに口を挟む将はいない。

皆は黄金の霸王に畏敬の念を強く持っている。あれほど不利な態勢をあつさりと引っくり返し、鮮やかな逆転勝利を収めた。

経過を見れば敵が作戦を途中で変更し、入念に敷いていた迎撃陣を崩したことにより、いわば自滅のようになった。帝国軍をここで撃滅できるといふ誘惑に耐えきれなかったのだ。

しかし厳密には違うのだろう。帝国軍はそう思わせるため当初はわざと不利な状況で耐えたのだし、仮に敵が誘惑になかなか乗らなかつたとしても、やはりそうさせるための方法も考えてあつたに違いない。だからこそ霸王は揺るぎなく戦いに挑んだのだ。

「予定通りガンダルヴァ星系ウルヴァシーに駐屯基地を築く。そこでしばし休憩を取る」

これにもまた諸將は驚かせられた。勢いに乗って一気に侵攻することがない。霸王は戦いで鋭いが、一方では長躯の戦いにおいて物資面での集積を要することを知っている。そんな合理的判断もできるのだ。

もう一方ではより沈痛な空気が支配していた。

「ビュコック閣下、損害は概算ですが艦艇二万二千隻が失われました。そしてホーランド中将は戦死し、ルグランジュ中将は意識不明の重体とのことです。更にはパエツタ中将が旗艦脱出途中に宇宙病を再発、もはや艦隊勤務は不可能との診断です。第五艦隊内でもモートン少将が戦死しております」

「そうか、儂の戦いが不味いためにそうなってしまった。どんなに詫びてもすまんことじゃ」

「いいえ、参謀として冷静さに欠けておりました小官の責任です。あの時、若手将官の暴走を許してしまったのはどうにも逃れ得ない責任であります」

「いや、それは儂が悪い。ともあれ参謀長、損害について統合作戦本部へ可及的速やかに報告するんじゃ。そしてここにいる残存艦はまとまってランテマリオまで後退する。帝国軍の進行速度を見ながら、あるいはパーミリオンまで退くこともあり得る」

「こちらもまた無理をせず、縦深陣による漸減作戦を放棄しつつも戦う意志を捨てて

いない。

「閣下、艦艇の多くは被弾していて、再度の会戦を行なうためには相当数の艦の修理が必要です。無理な逃走のためにエンジンが不安定になった艦もあるでしょう。それらをハイネセンのドックに入れず、転戦の態勢を取るとは、つまり帝国軍に対し抵抗の姿勢は見せると」

「艦隊としての戦闘力が著しく低下していてもよい。簡単には屈服しない意志を見せるだけで充分じゃ。張り子の虎でもないよりはよからう。そして戦力の事であれば、同盟の戦力は決して尽きたわけではない」

「確かに。その戦力はおそらくこちらへ向かっているものと思われまます」

「そうじゃ。ヤン艦隊、それがまだ残っておる」

同盟軍の命運はまだ終わっていない。

希望はまだ残っているのだ。

## 第百十五話 490年 2月 ヤン艦隊出撃

ポレヴィト航路へ出立するのに先立ち、ビュコックは統合作戦本部にてグリーンヒル大将と会談を持っている。

それはフェザン方面の話ではなく、イゼルローン方面、つまりヤンについての話だ。二人の考えは驚くほど一致した。

「グリーンヒル大将、帝国軍の総数は多く、同盟軍は絶対的な劣勢に置かれておる。この上は遊軍を作っておく余裕はないじやろう」

「つまり同盟軍を全て有効に使う、それはイゼルローンのヤン提督のことを仰りたいのでしょうか。ビュコック提督」

この二人はどちらも大将であり階級的には同格だが、あえて言えばグリーンヒル大将の方が少しばかり先任に当たる。しかし戦歴ではビュコックの方がはるかに優り、自然とそういう言葉使いになっていた。

「むろん最初からヤンの第十三艦隊を動かすという意味ではない。今もイゼルローン要塞は四万隻もの帝国軍と戦っている最中であり、そうやすやすと要塞を放棄していいも

のではないからじゃ。じゃがもしもフェザン方面から来る帝国軍を儼らが阻止できず、フェザン方面から同盟領に雪崩れ込まれたならば、その時には必ずしもイゼルローン要塞防衛にこだわらんでよいと考える」

「実は私も同じようなことを考えてはいました。帝国軍は二方面作戦が可能な物量を持つていますが、同盟はそうではない。戦略的に選択すべきだと。しかしそれにはタイミングが問題になります。戦局に応じて素早く柔軟に判断しなくてはなりません」

「それは問題にならないじゃろう、グリーンヒル大将。そこを考えるのも全てヤンに任せてしまえばよい。なに、少しばかり昼寝の時間を削つても文句は言わん」

「なるほど……」

確かに同盟はハイネセンを陥とされれば終わる。フェザン方面から来る帝国軍か、イゼルローン方面から来るものかに違いはない。ともあれ優先順位をしっかりと見極めないで防ぐことはできない。

ここでビュコックは丸投げ、といえば聞こえは悪いが、ヤンに自由裁量の権限を与え、ことを提言している。同盟随一の智将、魔術師ヤン・ウエンリーに託すのだ。

「こう訓示しておけばよい。すなわち、最善と思われる行動を取れ、と。ついでに言えば要塞から撤退するだけでも難事ではあるが、そこはそれ、あの魔術師が何とかするじゃろうて」

「なるほど、承知しました。では訓示は統合作戦本部からイゼルローンへ通達しておきます」

そして、ヤンはイゼルローン要塞司令室のスクリーンにてヤンはグリーンヒル大将を見ることになった。

「そういうわけだ。訓示は以上になる。ヤン提督」

黒のベレー帽を握りしめ、そのまま逃げ出したいような表情でヤンはグリーンヒル大将の言葉を聞いている。

「その、具体的なことはどのように」

「ヤン提督、情勢は流動的であり、ここで決めておけるものではない。その事を踏まえての訓示であると理解してもらいたい」

ヤンはその通信の後、いつものため息をつく。本人はことさら深くため息をついたつもりでも、回りにはいつものことになしか見えないのがヤンの不徳かもしれない。

「どうしたんです、先輩。今の訓示は先輩が自由に行動していいっていうことでしょうか？ だったら良かったじゃないですか。統合作戦本部もたまにはいい話を言ってきたんだから、ここは感謝しなくちゃ」

「どこがだい、アッテンボロー。おそらくビュコック大将の入れ知恵にグリーンヒル大

将も乗っているんだろうなあ。どうも統合合作戦本部は食えない面々がそろっているよ  
うだ」

ここでヤンはしまった、という顔をした。

素早く視線を動かし、側にフレデリカがいなくても確かめる。ヤンはフレデリカが  
父親ドワイト・グリーンヒル大将を大好きなことを知っていて、フレデリカの歎心を損  
ねることはしたくないのだ。

そしてフレデリカがいないと知ると安心して話を続ける。その様子がアッテンボ  
ローやシェーンコップにバレていないと思っているとところがヤンらしい。そういう方  
面ではヤンに魔術師のまの字もない。

「お年寄りたちは若者に働かせたがるのかねえ。その訓示は休む暇なく働けてのと一  
緒じゃないのかな。自分で仕事を見つけて働けという訓示は仕事の強制と非常に近い  
関係にある」

あくまで訓示のマイナス点を言うヤンにアッテンボローも呆れ顔だ。

「ビュコックの親爺さんは置いといて、グリーンヒル大将は年寄りでもないし、先輩も若  
者と言うにはちよつと。それはとにかく、同盟が無くなれば先輩の年金も出ませんよ。  
いいんですか?」

「そいつは、困るなあ。本を読んで暮らせなくなる」



「じゃあ決まりですね。ここは一つ超過勤務して下さい」

本心では第十三艦隊を最大限有効に生かし、同盟を救いたいと思っているくせに素直じゃなく、毎回ボヤキを入れるのはなんだかなあとアッテンポローは思ってしまった。

そんな会話が終わると、ヤンの方はもう深い思索に入っていた。

その後たつぷり二週間の間、イゼルローン要塞は消極的姿勢を貫いた。具体的にはトウルハンマーを一切撃たなかったのだ。

今までは牽制のために低出力でも時折撃っていたのに。

当然帝国軍では不審に思う。

そして、こわごわと要塞との距離を縮める。もしかすると砲台の修理に不具合が起きて、トウルハンマーがもう撃てなくなっている可能性がある。

だがその時、イゼルローン要塞から堂々と第十三艦隊が発進してきた。

「キルヒアイス閣下、これは奴らの罠でした！こちらを騙して近寄せたのです。満を持して艦隊を出してきたからには、おそらく艦隊の攻撃と併せてトウルハンマーを最大出力で使うのでしょう。すぐさま離脱しないと危険です！」

参謀ベルゲングリーンがキルヒアイスに慌てて言ってきた。

イゼルローン要塞側の罨と見ての進言だ。

周りにいたワーレン、ルッツといった提督たちも軽くうなずいている。キルヒアイスの麾下にはそれに思い至らないほど思慮の浅い将はいない。

「そうですね。その可能性ももちろんあります。艦隊を一度要塞から遠ざけて下さい」  
その言い方はキルヒアイスが完全に同意していないことを示す。

そんなに単純なことをするだろうか。

しかしキルヒアイスは進言に対し、軽く微笑んで了承した。

結局、トゥールハンマーが発射されることはなかった。

そして要塞から出てきた艦隊は一目散に加速しているではないか！ それも帝国軍の方にではなく、同盟領方向を目指して進んでいる。まるで要塞を放棄して逃げ出しているかのようだった。

「何だこれは！ まさか奴らは本当に撤退しているのではないか？」

「いや、多少大胆ではあるがトゥールハンマーにおびき寄せる罨に過ぎない。少し待てば諦めて要塞に戻るだろう」

「伏兵、あるいは援軍が近いという可能性はないか」

ワーレン、ルッツなどが議論を交わし、それでも結論は出ない。

議論に終止符を打ったのは総司令官キルヒアイスだった。

「当艦隊は、まだ動かないでおきましょう。トゥールハンマーを恐れている、そのように見せておけばいいのです」

表情はいつもの穏やかな微笑みであり変わることがない。

諸将はその言い回しにわずか妙な表現が入っていることに気付く。何の駆け引きが存在するのだろうか。少しの疑問を持ったが、行動としてはその通り動かなかった。

その結果、ヤンの第十三艦隊はイゼルローン要塞にいた民間人も全て収容し、犠牲を出すことなく放棄に成功したのである。

「先輩、あそこでトゥールハンマーをお見舞いしてやればよかったですね。どうせなら一発だけ最大出力で撃てば」

「やれやれアッテンボロー、あれでいいのさ。帝国軍はトゥールハンマーを使った罠を疑っていたから艦隊の方を追わなかったのさ」

「それは逆じゃないですか。撃った方がむしろ罠に見せかけられてよかったですんじや」

「帝国軍の将は単純ではないよ。力量があることはこれまでの戦いで明らかだ。もし一発でも撃つていれば、裏を読まれ、逆に撤退を企図していることが見破られたかもしれない。撃たないのがこの場合の正解なんだ」

「そんなもんですか」

そこにはヤンとキルヒアイスの高度な頭脳戦があった。

ポレヴィト会戦の結果を知り、イゼルローン要塞放棄と艦隊脱出を決めたヤンと、イゼルローン方面の帝国軍を任せられたキルヒアイスとの。

結果だけ見れば、欺瞞の挟撃によって帝国軍を騙し、撤退に成功したヤンの勝ちに見える。しかしキルヒアイスは何も慌てず、予定通りという顔をしている。まるでヤンを放逐するのが正しいといわんばかりに。

ヤンの第十三艦隊艦隊一万七千隻は無傷で航行し、途中の星系で民間人を下ろすとそのままフェザーン回廊へ向かう。

ほどなくヤンは追加情報を得る。フェザーン回廊方面の帝国軍がウルヴァシーに大規模な駐留基地を作り、そこに留まっているという。

そこから、既に脳裏に想定戦場を思い描いていた。

それとほぼ同時期に同盟首都星ハイネセンへ銀河帝国正統政府、すなわちヒルダとサビーネなどの一行が到着していた。

亡命に必要な手続きにしばらくの日数を費やした後、代表してヒルダが同盟最高評議

会議長ヨブ・トリューニヒトと面談をすることになる。さすがにトリューニヒトとしてもヒルダらを他の単純な亡命者と同列にすることはできず、いくつかの確認が必要になるからだ。

その頃にはヒルダもまたポレヴィト会戦の結果を知った。エカテリーナがヒルダにいち早く知らせているからだ。

迎撃に向かった同盟軍は破れ、帝国軍は同盟領内に橋頭保を築いた。自由惑星同盟存亡の危機である。

ただしそれはヒルダの想定する範囲内だ。あのラインハルトが大艦隊を率いている以上、簡単に迎撃を許すはずがない。

ヒルダには次の情報こそ重大な問題だった。

ヤンの第十三艦隊がイゼルローン要塞を放棄してフェザン方面に向かっている。貴重な同盟戦力を十分に活かし、決戦を挑むためだろう。

だがこれを知った時、ヒルダはめまいがした。

着実に帝国軍は同盟側を詰んできている。

「それでは銀河帝国正統政府の方々へ、我が自由惑星同盟への亡命を了承しますが、いくつかの注意事項は遵守して頂きたい」

ヨブ・トリューニヒトは事務官から引き継ぎ、実質的な銀河帝国正統政府の長である

ヒルダへ丁寧を確認する。

ヒルダもまた気もそぞろながら、それに返答する。こういう形式もおろそかにできないのだ。

「これらの書面に記された事項ならばどれも納得のいくものです。政治活動の制限、経済活動の報告義務などは当然です。逆の立場ならやはり同じものを書き出したでしょう、議長」

「結構、それでこちらも安心できるというものです。この事項は最小限のものとお考え下さい。では書面のご確認を頂けたということで宣誓書にサインを」

むろん、亡命を希望するヒルダらに拒むという選択肢がないことを口に出すほどトリューニヒトは失礼な人間ではない。恩着せがましいことを匂わせたり、居丈高になることはない。ヒルダらに対し過度に同情的になることもないが、せめて紳士的に接するのだ。

ただしここでトリューニヒトはさっそく裏切られる。

ヒルダの言葉は悪い方に意外なものだった。

「最初からその期待を裏切る形になるのは重々承知なのですが、ここで最高評議会議長であるあなたに申し上げたいことがあります」

「それは何でしょう、ミス・マリンドルフ」

トリユーニヒトはわずかに不信感をのぞかせながらも聞き出す。署名直前に何だろう。

「ありがとうございます、議長閣下。それは先頃、ヤン提督がイゼルローン要塞を放棄したことについてです」

それに対し、さすがにトリユーニヒトは渋面を作らざるを得ない。

「ミス・マリンドルフ！ それはこの書面を読んで頂いた方がおっしゃる言葉とは思えません。最も基本的な事項として書かれている通りです。我が自由惑星同盟があなた方を受け入れるのはあくまで民主主義という理念によるものです。もちろんあなた方の思想信条を今すぐ曲げろとは言えません。ですが同盟に來られた以上、ここでは帝国への政治活動をしてはなりません」

「それは承知しております」

「むろん銀河帝国正統政府を立ち上げた立場なら何か言いたいこともあるでしょうが、少なくとも今は自重して頂きたい。同盟と帝国の政治や軍事に関わる話なら一切お聞きしません。むろんお答えも致しません」

「そのお考えはよく分かります。当然のことでしょう」

「それでは、宣誓書はまた別の者を取りに來させます。私は立場上、そういった内容の会

談はできませんので。失礼いたします」

トリユーニヒトが立ち上がりかけるも、なおヒルダは訴えをやめない。

その言葉でトリユーニヒトを刺した。

「それがこの国を亡ぼすことになってもでしょうか？ 議長、これは帝国の戦略の根幹に関わる話であり、もしも知らないでいればこの国は確実に帝国によって倒されます」

語る内容と揺るぎない態度に、思わずトリユーニヒトも動きを止めた。



## 第百十六話 490年 2月 二重の罠

「議長、今の同盟に最も重要なことは国を保つことだと存じ上げます。ここで話すことにそれだけの価値があるとわたくしは確信しております」

トリユーニヒトは何も言わずにヒルダを見る。先ほどの言葉はもちろん衝撃的だ。

沈黙を了承と受け取ったヒルダが話を続けていく。

「では端的に申し上げます。イゼルローン要塞の放棄はやむを得ないかもしれませんが、結果的に悪手です。帝国はそれを誘導しました」

「何を言いたいのでしょうか？ その理由は」

「なぜなら帝国軍はあくまでイゼルローン方面からこのハイネセンを陥落させるつもりだからです。ヤン提督のいないイゼルローン回廊を通り、間もなくここハイネセンにやってくるでしょう。逆にフェザーン方面の帝国軍こそ厄なのです」

「話されることがよく分かりません。ならば是非ともその考えに至る根拠をうかがいた  
し」

トリユーニヒトは疑わざるを得ない。なぜそんなことを確信を持って言えるのか。

目の前のマリーンドル嬢は確かに正統政府を背負って立つ傑物である。わずか二十一歳でありながら、サビーネから全幅の信頼を置かれている。実質的に銀河帝国正統政府はこの嬢に率いられているのだ。おまけにあのローエングラム公と渡り合おうというのだから無能なはずはない。

それは報告書を見ても分かるが、こうして直に見ると完全に得心が行く。

少し話ただけで伶俐な頭腦の持ち主であることはすぐに分かる。完璧な同盟語の素養、フオンのつく貴族家の令嬢でありながら短髪、そして瞳の色が薄いことさえその印象に拍車をかける。

だがしかし、それでもこの嬢は軍事の専門家ではないはずだ。それなのに極めて難解な軍略を一刀に切って捨てるとは。

「では根拠をお話ししましょう。これ以上なくシンプルなものです。この国を一過性に掠め取るならいざ知らず、ローエングラム公が恒久的に治めようとするならば最大の難点は何でしょう。それは位置そのもの、言い換えれば帝国との距離です。しかも帝国とはわずか二本の回廊でつながれているだけです」

「地理的には全くもってその通りです」

「その上で、占領地を帝国は少なくとも当初において軍事力を使って抑えつけなくては

いけません。いかに宥和的な政治を行なおうとイデオロギーの差は厳然として大きく、不安定になることは避けられません。そのため、駐留する部隊の規模を決して少なくはできないのです。軍事力は必要、しかしこれが仇になります」

「仇に？ それはいつたい……」

「仇になるとしか言いようがありません。帝国から遠く、軍事力もある。すなわち統治を任された者が叛乱を企てるには理想的な条件が整っているのではないでしょうか」

トリユーニヒトは絶句してしまった！

今、同盟の存亡の危機にある。

だがしかし、この嬢はその次のステージのことを語っているのだ！

全くもって空恐ろしい。帝国の戦略がもはや戦争後まで見据えていることを考え、それさえも上回る眼を持っているとは。

「この地理的条件がある限り、仮に同盟の滅亡後、統治を任された者は帝国に逆らうことが可能になるでしょう。それは野心を持つ者にとって大いなる誘惑といえます」

「ミス・マリンドルフ、同盟がなくなっても、やってきた帝国人によつてまた叛乱ですか。全くもって救いがたい。同盟市民は民主主義とは関係ないところで再び帝国にとつて叛徒になり、何の益もない戦乱に巻き込まれる運命になると。おっしゃる論理に

ついでには同意しますが、私としては同盟が滅んだ後のことを考えるのは正直不愉快です」

トリユーニヒトの正直な気持ちだ。

同盟は民主主義を国是とし、それを守るために苦しいながら戦ってきた。生産力を振り向け、戦場では血を流してきたのだ。

その同盟が滅び、民主主義を奪われても、なお戦乱が続くというのか。帝国人の野心というどうしようもなく下らないもののために。

「確かにこの国には災難としか言いようがありません。議長、深く同情いたします。しかし同時に帝国にとつてもせつかく手に入れた領土が叛乱の温床になるなら奪った意味がありません。しかもただ領地を失うだけではありません。帝国自体も不安定になります。部下が叛乱を起こしたとなれば、余計に悪い状態になるからです。ローエングラム公の権威が失墜することは間違いありません。ただでさえローエングラム公には王朝の血筋というような絶対的権威は無いのですから」

「その通りになるでしょう」

ヒルダはここで結論を言い放つ。

「軍事的侵攻がうまくいっても、手に入るのは宇宙統一の栄光どころではありません。距離と言う地理的条件がある限り、叛乱に対し再度討伐しても元の木阿弥、帝国にとつ

て永遠の悪夢に変わり果てます。そこで考えられるのは一つしかありません。それは叛乱を起こすことがあり得ない人間に治めさせればよいのです。いいえ、ローエングラム公の取り得る方法はそれしかないでしょう。そして該当する人間は広い帝国でもたった一人しか存在しません」

「ミス・マリーンドルフ、ローエングラム公に対し絶対に叛乱を起こさない、その人物とは」

これが肝心なところだ。

だからイゼルローン回廊が問題なのである。

「それはすなわち、ローエングラム公の親友、あるいはそれ以上の半身とも言うべき存在、ジークフリード・キルヒアイスだけなのです」

しばし時が止まる。

トリューニヒトはヒルダの言葉を噛みしめ、その意味するところを理解する。

その話はとて論理的だ。

「もちろん、征服だけを他の将にさせたり、あるいはローエングラム公自身が行うこともあり得ます。ですが将来を考えれば征服の武勲をキルヒアイス提督に与えるのが最適になるのは自明でしょう。そう考えれば全てのピースが綺麗にはめられるのです」

「全てが、解き明かせると」

「議長、キルヒアイス提督以外の将はご存知でしょうか？」

「名前くらいは報告で聞いていますが、文官である私にはその意味まで知らぬことです」  
 「ではそれぞれの名前と特徴を挙げてみましょう。参謀のオーベルシュタイン大将、この人物は戦いにおいて表舞台に立ったことはなく、戦闘指揮より政略を得意とする性格はむしろ文官に相応しいものです。そして文官として見るならこれほど伶俐で有能な人物はおりません。つまり戦いではなく、占領後の統治の補佐となることを見越して付けられたと見るべきです。他にワーレン中将、ルッツ中将はいずれも知勇に優れた将ですが、最大の特徴は武に頼らない柔軟な姿勢にあります。ここにも恐ろしく合理的な理由が認められます。占領後に住民と衝突を起こすことがないように、という」

トリユーニヒトは呼吸が浅くなる。

背筋の凍る思いだ。

ヒルダの解析はあまりに説得力に満ち、非の打ちどころがない。

そしてそこまでの壮大な戦略を描きながら侵攻してきたローエングラム公ラインハルトに惧れを感じざるを得ない。

「…… ミス・マリーンドルフ、では同盟は帝国の戦略に乗せられ、このまま滅びの道を

歩むと。しかし、それならヤン提督がイゼルローンを再び死守すれば、もう少し抵抗できるところではないでしょうか」

「いいえ、おそらく要塞を放棄した後で取り返しがつきますまい。そして、ヤン・ウエンリー提督が途中でそれに気付いたとしてもやはりフェザーン方面に行かざるを得ないのです」

「それはどういう理由でおっしゃるのでしよう」

「帝国の侵攻を完全に挫くためにはたった一つしか方法がありません。それはローエングラム公を戦場で斃すのです。彼の部下たちはそうなれば侵攻どころではなくなくなります。そもそも侵攻自体彼らにとつて必要性はなく、帝国の動揺を収める方がよほど大事なのは自明です。先を争って帝国へ引き返すでしょう。そうすればこの国の危機は去り、憂いは断たれます」

「なるほど、分かりました。ヤン提督はローエングラム公を斃すためだけに向かい、そこで勝負をかける、と」

「はい。おそらくそれができる可能性があるのはヤン提督だけ、本人もそう思っているでしょうから。そしてチャンスはこの時しかありません」

「では、同盟はそれに賭けるしか……」

「その通りです。しかし危険な賭けになります。そのヤン提督の思いも帝国軍は見透か

していることでしょうか。むろんヤン提督の軍事的能力は計り知れませんが、帝国のローエングラム公もまた相応の準備をしてくるでしょう。そしてこの帝国の罟は分かっているとしても避けられません」

「イゼルローン方面も当初牽制、フェザーン方面はローエングラム公自身が囿、二重の罟だとは…… 帝国はそこまでの戦略で」

事態は恐ろしく深刻だ。

だがトリユーニヒトは気付いた。

ここでヒルダが熱心に語っていることに意味があるに違いない。

避けられない滅亡なら語る意味もないからだ。

この戦略家はおそらく何かの考えを持っている。

「……ミス・マリンドルフ、お話を聞いて震えが止まりません。帝国に対しても、そしてあなたの戦略眼に対しても畏れるばかりです。しかし、そこまでおっしゃるなら、これを避ける手立てをお持ちだということでしょうか」

「むろんわたくしも自信などございません。帝国の二重の罟はそれほど恐ろしいものです。申し上げられることがあるとすれば、取り得る可能性の一つくらいなものです。それも極小の可能性として」



「小さな可能性も今は継りたい気分です。是非聞かせて頂きたい」

「その話にはいくつかの前提がございます。一つにはフェザン、厳密に言えばルビンスキー家と緊密に連携すること、そしてもう一つは議長閣下自身に覚悟が求められます」

小さな大戦略家ヒルダはトリユーニヒトへ秘策を話す。

銀河の歴史は確実に分岐点に差し掛かった。

その頃、イゼルローン方面では要塞から同盟艦隊が一隻残らず去ったことを知る。

むろん帝国艦隊がすぐさま動き出した。

「なんと奴ら、イゼルローン要塞を放棄したのか！ さすがはヤン・ウエンリー、なんと大胆なことを。完全に予想を外された」

「しかしこれでやつとイゼルローン要塞を獲れるではないか。魔術師に奪われた要塞を取り返す、我らの悲願が達成されるというものだ」

ルッツとワーレンがそう言っている。

四万隻の帝国軍がここイゼルローンにやって来た目的は達成されようとしている。圧迫を加え、フェザン方面と連携し、この果実をもぎ取ったのだ。

皆が興奮する中に参謀長オーベルシュタインの姿はない。これはいつものことだ。

艦橋に参謀長がいてしかるべきだが、なぜか自室で行う事務仕事があるとのことで出てきてもいない。キルヒアイスもそれを了承している。オーベルシュタインは要塞の軍事的な変化に関心すら無いようだ。

次いでビューローとベルゲングリーンも言う。

「キルヒアイス閣下、直ちに要塞へ部隊を送り込みましょう。恐らく徹底的な精査が必要と思われませぬ」

「確かに。奴らが変な置き土産をしたかも知れず、突然自爆などしたら目も当てられませぬ」

「だが、それに対するキルヒアイスの返答はその場にいた全員が耳を疑うものだった！「そうですね。ですが当艦隊は要塞の占拠をいたしません」

一同は驚いた！

理解できない。せつかく放棄に追い込んだイゼルローン要塞を占拠しないとは、いったいどういう意味なのか。再度二人が問う。

「閣下、要塞を占拠せず、ということはこのまま囲んでおくだけということでしょうか」「確かに何がしかの罠があるかもしれませんが、閣下が慎重になられるのも分かります。しかし、罠には限度があり、排除できないわけがありません。お任せ下さい」

そういった声を聞いてもキルヒアイスは笑みを増すだけだ。

手を指し伸ばし、凜とした声で四万隻の艦隊の行動を決めた。

「いいえ、要塞など放っておきます。これより全艦隊は直ちに発進、イゼルローン回廊を敵領地に向けて航行します。その後敵の首都星ハイネセンを真っすぐ突き、降伏を引き出すのです」

これほどの驚きがあるだろうか！

キルヒアイスは要塞など最初から相手にしていなかった。その攻略が目的ではない。宇宙統一、それこそがこの艦隊の使命だった。

「皆様に説明が遅れました。ラインハルト様の艦隊こそが陽動です。それにより、全ての敵の戦力がそちらへ集められることになりました。今から当艦隊が宇宙統一を図る本隊になります。物資については先の輸送船団に満載してありますから、イゼルローン要塞からわざわざ奪取する必要はなく、そんな時間は取りません」

蓄えていた補給物資は持久戦に見せかけるものではなく、敵首都星ハイネセンを直撃するためのものだった。

キルヒアイスのイゼルローン方面帝国軍はそのまま回廊同盟側出口へと航行する。

そして同盟領に入っても滑るように進み、テイアマトなどの星系へは目もくれない。

## 最終章 波濤の果てに

## 第百十七話 490年 3月 無防備都市

ヒルダは早いうちに帝国の戦略を看破している。今はトリユーニヒトにそれを語ったわけだが、その前にも一人へ向けて語っている。それはヒルダがハイネセンに赴く前、エカテリーナへ会っている時のことだ。

帝国の大戦略に対する策を考えるため二人は協議を重ねていた。

エカテリーナにすれば、帝国にあつさりと言ひ込み込まれるフェザン自治領を取り戻すためにどうすればいいか。

ヒルダにすれば、ラインハルトによる宇宙統一を阻むにはどうすればいいか。むろんそんな未曾有の功績があれば帝国臣民は熱狂し、歓呼でもって新王朝樹立を認めるだろう。サビーネは完全に過去のものになってしまう。

幾つかのアイデアを出しては消しの繰り返しが続く。

それは二人の頭脳をもってしても容易に答えが出るものではない。

しかし、いくつかのアイデアは残された。

その大半はヒルダではなく、元々エカテリーナが出したものだ。フェザン自治領の間だからこそ考えられたアイデアであり、形式に拘らないから発想できたものだ。

それゆえ、一連の策動は後世「魔女帝の伸ばした腕」と呼ばれることになる。

フェザン艦隊はポレヴィト会戦後、同盟艦隊と行動を共にしていない。

同盟艦隊は帝国軍がガンダルヴァ星系ウルヴァシーまで進んできたのに合わせ、同盟領のもつと深く、バーミリオンまで退いていた。

しかしフェザン艦隊は逆にフェザン回廊の近くに戻っていた。むろん、決して帝国軍に察知されないようにしている。普通にはあまり使われない航路を辿っているので見つかる恐れはない。帝国軍はそんな細かい横道のような航路まで把握できるはずがないからだ。

それはフェザンならではの知識であり、フェザン商人にとってすれば隅から隅まで熟知しているところで、その辺りの地理なら同盟領なのに同盟政府よりも詳しいくらいなのである。

そんな航路途中にフェザンは帝国軍来襲までのわずかな時間を使って艦隊用の補給物資を運びこんでいた。それは数回の軍事行動には不足ない量である。

つまり密かに拠点化まで行っていたことになる。

エカテリーナ自身もフェザーンを脱出してからここにいた。ルパートも一緒だ。

そこで補給を終えたフェザーン艦隊は再び出航していく。

エカテリーナから新たな命令を受け、今度はマル・アデッタ星系まで密かに進んでいったのだ。

目的地に到着するやいなや、隠密行動どころか今度は大々的に軍事的示威行動を行なった。

元々フェザーン艦隊は旧帝国貴族私領艦を主体とし、アムリツア会戦で帝国が鹵獲した旧同盟艦を更に横取りしたものを加えて構成されている。

そんなフェザーン艦隊がマル・アデッタからほど近い宙域で演習の真似事をしたのだ。それもただの演習ではなく、艦隊から幾つかの旧同盟艦を出し、何とそれらを標的に使つての攻撃演習であった。

哀れにも艦隊の前に出された無人標的艦は砲撃の餌食にされる。

更にもその様子を一般受信できるような形で広く発信した。

これは同盟人にとつては憤りを感じるシヨールになった。

シールドも張っていない旧同盟艦一隻に対し、百隻単位の帝国艦がメッタ撃ちにす

る。砲撃している旧貴族私領艦はほとんど帝国軍のお下がりであり、軍事専門家でない限り同盟領に侵攻してきた帝国艦と見分けがつくはずもない。

もちろん旧同盟艦はあえなく爆散する最期を遂げる。

これはもはや演習というものには見えない。その様子は同盟を帝国がこれからどう扱うか、分かり易い見せしめである。

それを幾度も繰り返し行うのだ。

無力な同盟が抵抗もできず帝国に打ち碎かれるかのようなデモンストレーションだった。

一方、マル・アデッタ星系には有人惑星が一つだけあるが、もちろん辺境だけあって人口は多くない。経済発展も遅れていた。

マル・アデッタは小惑星が多く通商には不向きだったからだ。そのため主要航路の側に位置しながら、その恩恵のおこぼれに預かっていない。ランテマリオが交易拠点としてそこそこ栄えているのとは対照的だ。

貧しい住民たちがその配信された見せしめ映像を見てパニックに陥った。

避難にかかる費用も捻出できず、住民のほとんどはマル・アデッタに留まっていたのである。フェザーン方面から帝国軍が侵攻してきたことはむろん知っているが、イゼル



ローン回廊付近の同盟領星系に比べて危機意識は薄かった。そのため、こんな貧乏な辺境星系まで餌食にすることはないと高をくくっていたのだ。占領する価値などないことがこの場合僥倖を生んだと思つて安心していたのに。

もしも帝国軍に侵攻を受けたなら、どんな恐ろしい運命が待っているのだろう。頼みの同盟艦隊はポレヴィトで敗退し、守ってくれる見込みはない。

結果的に一つの実を結んだ。

マル・アデツタ星系は追い込まれ、その身を守るために考えられる限り唯一の方法を使う。

すなわち、「無防備都市」の宣言をした。

これは侵攻してきた帝国軍に対し、ゲリラ的なことを含め一切の武力的な抵抗をしないことを明言するものだ。その恭順の代わりに、虐殺などの不法行為を受けない。一種の紳士協定である。

だがしかし、この方法は諸刃の剣でもある。同盟政府の命令無しに行えば、すなわち同盟からの離脱とも受け取られかねない。

追い詰められた末の最後の手段だ。

その波紋は同盟領を揺るがせ、予想外の事態を招くこととなった。

なんとマル・アデッタにほど近い星系、ジャムシードまでがそれに追隨してきたのだ。ジャムシードは地理的にハイネセンまでの航路に直接面しているわけではない。つまり今回の帝国軍侵攻が直接的に脅威になる可能性は少なく、帝国軍が仮に寄り道をすれば到達する可能性もなくはない、という程度だ。

それでもジャムシードは無防備都市宣言を敢行した。

しかもこれでハイネセンが文句を言おうものなら、ジャムシードの方から同盟を離脱することさえちらつかせるほどの強硬さだった。

こうなったのはジャムシードが以前からハイネセンの同盟政府に対し批判的だったからである。

自由惑星同盟は銀河帝国以上に人口の集中が進んでいる。

帝国とほぼ変わらない数の星系を含んでいるのに、人口は半分以下しかないのだから当然である。ハイネセンを含むバーラト星系、及びその近くのリオヴェルデ星系に人口も富も集中している。

その格差にジャムシードなどの発展途上星系は不満があった。

ゆつくりとした人口減に加えてハイネセンへの転出が慢性的に続いている。

その上憤懣やるかたないことに、同盟艦隊維持のために人員も資源も供出しているの

にも関わらず、同盟政府はイゼルローン回廊近くのエル・ファシルやシャンプール、パルメレンドなどへ投資を集中させている。エル・ファシルはともかくシャンプールなどは農業も工業もなく、駐留拠点として成り立っているような星系だ。国防上の理由でそうせざるを得ないのは分かっているけれども、それらの星系が好景気かつ豊かなのを見ればジャムシードとしては気分は複雑になる。

同盟政府によりジャムシードは寂れるままに捨て置かれている格好なのだ。

そして決定的な出来事が実は十数年前も前に生じた。

同盟の多大な国費を投じて、首都星ハイネセンに自動防空要塞システムへアルテミス  
の首飾り $\searrow$ が設置されたのだ。

その十二個の超高性能要塞群は一個艦隊でも退けるといふ恐るべきものであるが、建設費用は一個艦隊よりもはるかに高い。

良い点は人員を使わないことで、悪い点はもちろん移動できずハイネセンしか守れない。  
い。

最後までこれに反対し続けたジャムシードなどの星系は無視された。

「ふざけるな！ 同盟の国力が衰退する中、どうしてハイネセンばかりが贅沢なシステムを持てるのだ！ そもそもハイネセンに帝国軍が来る事態になつていけば、同盟の他の星系はどうなっている。とつくに蹂躪されているではないか。そんな状態でもハイ

ネセンだけを守るといふなら、もはや同盟などとは名ばかりで実態はハイネセン一國主義だ。ジャムシードはこれまでも同盟に多大な供出をしている。それが報われず、こんな結果になるのは看過できない！」

そう怒りを爆発させたものだった。

自由惑星同盟は帝国と違い、惑星同士の連合が国是である。

そんなところへあからさまなハイネセン優遇が形になつたのだ。ジャムシードが憎悪に近い反感を持つのは仕方がない。

ジャムシードが繰り返し政治的議題にしようとしても、それこそ多数決の民主主義によつて敵わず、その都度歯ぎしりをするだけに終わつてしまう。政治的発言権は人口に比例するからである。疲弊したジャムシードなどから人口が流出し、それにより更に発言権を失い、無視されるという悪循環だ。

ハイネセンからすれば言い分はある。ハイネセンを含むバーラト星系を管区とする同盟第一艦隊を大幅強化したいのに、アルテミスの首飾りで我慢してやつていゝという格好だ。首都星は政府機能を持つ中枢である。そこを守るのに他の星系と同じ規模の艦隊しか置かないのは、そもそもおかしいという論法である。確かに位置的条件を加味しなければそうとも言えるだろう。

首都星は絶対的だという思考がある限り、ジャムシードと話が合うはずがない。惑星単位で正に「帝國的」になってしまっていたのだ。

富の偏在が守るべきイデオロギーを蚕食し、形骸化する。

少数派から見れば、多数決による意見の封殺こそ帝国主義である。

こんな下地が、今回の帝国軍侵攻によってとんでもない形で噴出したのだ。

ジャムシードはむしろ人民主主義を積極的に放棄したのではない。市民の命は政治より優先されるべきという確固たる信念があるわけでもない。あえて言えば同盟に対して「不貞腐れ」たのである。

そしてジャムシードはマル・アデッタのような開拓途上惑星とは違い、人口もそれより多いが、何よりも自由惑星同盟建国時から加わっている数少ない星系の一つなのである。輝かしい伝統を持っているのだ。

たちまち同盟内に激震が走った。

特にジャムシードに立ち位置が近く、以前から同情的であったシヴァやタツシリといった星系に動揺が激しい。

ただし驚いたのは侵攻してきた帝国軍も同じである。そんな余波は考えもしていない。

それも当然、帝国人としての考えでは中央に逆らうことは謀叛であり、もちろん帝国における謀叛は絶対的に懲罰を意味する。すなわち帝国からの離脱は文字通りの意味で完全抹殺と同義だ。

今、自分たちの侵攻によってそんなことが起きるとは想定外のこと、困惑するしかない。

この事態は帝国軍内で討議され、このまま放置もできないという結論になった。

もしもそれら無防備都市宣言をした星系を放置すれば、逆に帝国軍が見捨てたという恰好になってしまう。国家からの離脱というリスクを負う星系を今度は帝国軍がなんとかしなくてはならない。そうでなければ、今後本当に必要な時に降伏を引き出す際の障害になってしまうからだ。

何よりも次々と星系がバラバラになっていけば、征服後の統治が困難になってしまう。

「やむをえん。ミッターマイヤー、ご苦労だがランテマリオからジャムシードにかけて布陣し、そこで睨みを効かせよ。そしてケンプ、マル・アデッタまで逆行し、その住民を保護せよ。決して略奪はするな」

そんな指示を与えるラインハルトに熱はない。

こんなことは純粹な戦いではなく、ラインハルトの興味を引かない。ラインハルトの

思いは来たるべき宿敵ヤン・ウエンリーに向いている。

この頃にはヤンがイゼルローン要塞を放棄した知らせが届いている。

エカテリーナとヒルダの策謀の第一段階はうまくいった。

もちろんこんな地殻変動が起きたのだ。見た目通りの単純なことではなく、ジャムシードへ相当の内部工作もした結果である。

ついでに言えば、ハイネセンの同盟政府はマル・アデッタやジャムシードなどの星系に対し明らかにさまな非難をしていない。経済的にも政治的にも報復せず、むしろ静観と  
いっていい態度をとっている。

当然ながらこれに訝しがるハイネセン市民は多く、ジャムシードが帝国に擦り寄ったとして激昂する者もいた。ハイネセンからすればジャムシードは裏切りだ。仇敵銀河帝国へ徹底抗戦をするどころか、実害もない内から早々と安全確保を図ったのだから。

その怒りの矛先はジャムシードだけではなく、評議会議長ヨブ・トリユーニヒトまで及ぶ。それにも関わらずトリユーニヒトは静観のスタンスを取り続けた。

しかもこういった場合、水面下で懐柔策を取り同盟からの離脱を引き留めるのが普通であろうが、トリユーニヒトはそういう動きも一切していない。

つまりジャムシードの対し、政治的な落としどころを探してもいないのだ。ジャム

シードとしてはそれほど強硬なことはいないつもりもあつたのに、振り上げた拳を引つ込めることができなくなつてしまった。

これではまるで同盟からの離脱を勧めているかのようだ。

むろん、それが真実である。ヒルダとトリユーニヒトの事前の協議のゆえであつた。



第一百十八話 490年 3月 決戦！ ガンダルヴァ  
くそして舞台は整うく

帝国軍はやむを得ず同盟領内で分散しつつある。

参謀長たるメックリンガーはさすがにこの現状について危惧していた。

「閣下、これは敵の手でしょう。政治上やむを得ない状態を作り出し、我が帝国軍を分散させる策を打つとは。もちろん我らを各個撃破をするためです。かつて敵が我が帝国領で似たような動きをして、結果無惨なことになったのを思い起こします」

「だとしてもメックリンガー、問題はない」

「それはいったい……」

ラインハルトも敵領内での分散が愚行なのは百も承知している。

メックリンガーに言われるまでもない。ただしこの場合、帝国軍は戦力において圧倒的に優位にあり、多少戦力を分けようが同時各個撃破される恐れはない。

「メックリンガー、周辺状況はどうであれ敵の戦力は一にも二にもヤン・ウエンリーだ。

奴ほどの者なら戦術で勝利を重ねても戦略を覆せないことはよく知っているだろう。

単純な各個撃破を繰り返す訳がなく、奴が挑んで来るとしたら狙いは一つしかない。必ずや俺を狙ってくるはずだ」

「閣下を狙ってくるとは不遜な輩ではありませんか。ではなおさら分散させずに守りを固め、ヤン・ウエンリーなどに付け入る隙を無くすべきだと存じます。閣下の戦いへの意欲は、あえて申し上げますがこの場合必要ありませんまい」

「それでは戦いにならない。向こうとしても勝算が全くなければ仕掛けてくることはあるまい。しかしそれでは奴を撃破し、敵の戦力を根絶やしにすることがかなわなくなる」

覇気にあふれたラインハルトの発言にメックリングーはそれ以上何も言えない。戦い、そして輝くのが霸王の意志なのだ。

だがもつと不快なニュースが帝国軍に飛び込んできた。

同盟領の諸星系が独自行動をしないよう牽制するため、シユタインメッツ艦隊を先遣として進ませていた。それがあることかヤン・ウエンリーの奇襲を受け大敗を喫したのである。

同盟の人口稠密部への玄関口ともいえるトリプラ星域に差し掛かったシユタインメッツ艦隊をヤン艦隊が狙い撃った。

自領であることを最大限に生かし、通信網を使って位置を正確に把握する。その上で

絵に描いたような奇襲だ。

ヤンの第十三艦隊が横合いから最大戦速で突撃にかかる。シユタインメツツ艦隊が探知したのはもう相当加速が終わった後である。今までのヤンの艦隊戦では、心理術の高さから、後の先を取った上で柔軟な対処により勝ちを収めることが多かった。

しかし突撃に不得手であることは決してない。第十三艦隊はフィツシャーの統率力やアツテンボローの思考力はこんな場合でも充分に有効だ。並の艦隊よりはるかに鋭く収斂した突撃を試みせるのは当然である。

シユタインメツツや参謀たちが對抗策を考えている間に第十三艦隊はもう至近に迫っていた。

だがシユタインメツツも一流の将帥だ。そこでうろたえて回頭などしなかった。

そのまま艦隊の前進速度を増していったん逃げの方を選択した。多少の損害はもうやむを得ないものと覚悟して、仕切り直しをするためである。それもまた思い切った策といえるものだ。

しかしそんなことをヤンは読み切っている。

むしろ愚将によつて乱戦になる方を恐れていたぐらいだ。

第十三艦隊は増速してシユタインメツツ艦隊へ接触を成功させてから、むやみと戦果を求めたりしていない。横撃の果実を得ることよりも、ひたすら鋭く切り裂いてシユタ

インメッツ艦隊の分断に徹している。

分断がうまくいけばヤン艦隊からアッテンボローの分艦隊が出撃する。シユタインメッツ艦隊の前衛の鼻先にちらつき、惑わすためだった。

「ほらほら、あんよはこちら。帝国軍の赤ちゃんたち」

結果的にシユタインメッツ艦隊の前衛はそれを無視できない。捉えられそうでいながらすんでのところで逃げられ、捉えられない。気が付いた時にはシユタインメッツのいる前衛は分断された後衛と再合流できない態勢に追い込まれている。

「しまった! 我々は乗せられたのだ!」

シユタインメッツは幕僚たちに向かい、苛立ち紛れにそう言ったが既に遅い。

この態勢を作り出せば、もはや第十三艦隊に自動的に勝利は転がり落ちてくる。

ヤンは単純に攻勢を命令するだけでいい。

戦いが開始された時点では二つの艦隊の艦数に大差はなかった。しかし今やシユタインメッツ艦隊は見事に切り分けられた。第十三艦隊の方が数的優位を確保したならば、敵味方の損失比は俄然有利になる。それは時間が経つほど加速度的に開き、第十三艦隊にほぼ損害がないままどんどんシユタインメッツ艦隊を追い詰めていく。

なんとか思い描いていた勝利を実現できて、ヤンはほっとした表情を見せる。

ベレー帽を手持って扇子、誰が見ても気が抜けている姿になっている。遠目で見て

も、やれやれうまくいったと言っているのが聞こえてきそうだ。

フレデリカが「前衛を振り回しているアッテンボロー提督の負荷が過大です」と注意し、ヤンが「ああそうだった」と答えるのと時を同じくして、会戦はほぼ終わりを告げた。

しかし次にヤンは不思議な行動をとっている。

シユタインメツツ艦隊の損壊が一定数を超えれば第十三艦隊は定跡通りの包囲殲滅にかかっていた。シユタインメツツ艦隊の各艦は大破中破、動力機関をやられシールドも張れず砲撃もできなくなったものが増えてくる。

ここで突然ヤンは攻撃を中止させる。そしていずこかへ去っていった。

この報を聞いたラインハルトだけにはその理由が分かっていた。

「あのペテン師め、シユタインメツツ艦隊を破ったばかりではなく、どうしてもこちらから救援を出させようというのだな。完全に殲滅するわけでもなく、さりとて膨大な損傷艦を敢えて残しておくというからには。そしてこちらは否が応でも更なる戦力分散をせざるを得ない」

ラインハルトはヤンの悪辣な策に苛立ちをす。しかし奇妙な興奮に捉えられてい

る。もちろん、ヤン・ウエンリーがうまく帝国軍を踊らせ、戦力を分けさせるのは不愉快だ。しかし逆に言えばこれは決戦の下準備に過ぎない。

ヤン・ウエンリーは必ずラインハルトを仕留めにやってくる。その下準備を一生懸命にやっているわけだから。

ラインハルトとしては最高の敵将であり、自身がライバルと認定する唯一の将と戦えるのだ。やっとアスターテやイゼルローンでの借りを返し、征服を完全なものとする。

「ビッテンフェルト、トリプラ星域に赴き、シユタインメッツ艦隊の残存を收容せよ」

「はっ、直ちに。しかし閣下、そうなればしばらくガンダルヴァ星系には閣下の本隊しかいなくなります。せめて誰か他の者を呼び戻されては」

「ビッテンフェルト、卿らしからぬ深慮だな。忠告と受け取っておこう。だがそんな心配は無用だ。本隊しか残らず、戦う相手がヤン・ウエンリーだとしても、俺が奴に負けると思うか」

実は横にいるメックリンガーこそビッテンフェルトと同じ心配をしていた。そして単純な猪武者だと思っていたビッテンフェルトがそんなことを言ったことで驚いた。多少見直す気になったほどだ。

それと同時にメックリンガーはもう一つのことを考えざるを得ない。

「閣下は若干危険な道を歩もうとしておられる。そこへ忠告をして、受け入れられる者はたぶん一人しかいないのだろう。ジークフリード・キルヒアイス、なんと貴重な存在であることか」

そしてついにガンダルヴァ星系近傍にヤンの第十三艦隊が姿を見せる時が来た。

待っていた報を受け、いよいよラインハルトが出立する。

「よし、直ちに出撃する！　メックリンガー、ウルヴァシーにはヴァーゲンザイルを残し、これを守らせよ。残りの全艦隊でヤン・ウエンリーを撃滅する」

「閣下！　今戦いに臨むとは勝利の条件に充分ではありません。せめてミッターマイヤー提督だけでも帰陣させ、絶対的に勝利できる戦力を保持した上で赴けばよろしいでしょう。この状態で戦うことは必要ありません」

「いや、これはどうしてもやらねばならん。俺自身がヤン・ウエンリーの非礼な挑戦を受けてやろうというのだ。そしてこれは同盟とやらの最後の希望を打ち砕くことでもある」

ラインハルトは本隊二万三千隻を率いてガンダルヴァ星系ウルヴァシーを進発し、ラ

イガールに至る航路をゆつくりと進む。ヤン・ウエンリーの艦隊がこれよりは少ないと見積もられたため、メックリンガーも最後には出立に同意している。

「ヤン・ウエンリーよ、失望させない戦いをせよ。これは命令だ。貴様がイゼルローン回廊を離れたことで、キルヒアイスが首都星ハイネセンをきつと陥とすに違いない。もはや戦略的に勝負はついているのだ。手に入るのが勝利か、あるいは完全な勝利かだけの違いしかない」

ラインハルトは一人、ブリュンヒルトの展望室にいた。

そこに備え付けられたシートに深く座り、赤ワインを手にする。

空気のない宇宙では星々が瞬くことはない。ただひたすら美しく煌めくのを眺めながら、それが目に入らないかのように呟いている。

星からすれば、豪華な金髪と赤ワインのグラスの取り合わせの方がよほど美しいだろうに。

「だが俺は完全な勝利が欲しい。国家の滅亡も個人には関係なく、宇宙では強いものが勝つ。ここで勝負だヤン・ウエンリー! 舞台は整った。俺と貴様のどちらが強いか間もなくはつきりする。これは俺にとって必要な試練だが、貴様を打ち砕き、必ず乗り越えてみせる!」



人類社会の未来、国家の興亡、そこへ英雄の意地まで乗せて運命のガンダルヴァ会戦がここに始まる。

# 第百十九話 490年 3月 決戦! ガンダルヴァ

## 〜騙し合い〜

ラインハルトの率いる帝国軍本隊がガンダルヴァ星系を立つた。

ヤン艦隊を最後に見出したところに向かい、通常速度で航行を続けていく。やがてガンダルヴァ星系は後方に小さくなり、見えなくなつた。

誰もがヤン第十三艦隊を簡単には捕捉できず、せつかく出撃しても空振りもやむなしと思つていた。ヤンの行動は神出鬼没、少数ながらダイナミックに機動力を活かすのが常だつたからである。

しかしその予想は完全に外れることになる。

星間航路に乗って間がないうちにヤン艦隊を探知できたのだ。

というよりヤンの側では既に戦術を決めて、もう戦闘行動に移していた。

「敵艦隊発見! 数、およそ二万弱。当方へ高速で接近中! 接触予想時間あと三十分! 至近です!」

「なに? 最初から突つ込んでくるとは超短期決戦だな。ヤン・ウエンリーは智将であ

ると認識していたが、案外陣頭の猛将という側面があるのか」

ラインハルトは落ち着いて評価している。

何といつてもヤンにとっては自領内、探知については帝国軍よりも有利なのだろうと予測していた。ただし、その接近速度が意外に早い。

「俺を狙ってくるのだから、鋭く攻勢をかけて一瞬でも優位に立てばよし、ということかもしれない。その意味では短期決戦こそ合理的な戦い方には違いない。まあいい。こちららは進路を維持しろ」

ラインハルトは自信を持ってそう指示した。オペレーターから発せられた報に騒然とした雰囲気は艦橋はそれで静まった。常勝の英雄ラインハルト、それに対する信頼が戦いの先手を取られた不安に優ったのだ。

ヤンの第十三艦隊は航行途中に加わってきた同盟艦を併せ、意外に数を増している。ほぼ二万隻に近い規模だ。ラインハルトの帝国軍より少ないことは確かなのだが、その差は大きくない。

今、ここぞというタイミングで帝国軍を狙い、急速前進を続ける。

しかしヤン本人は突撃の緊張とは無縁の様子で、いつもの調子である。

「やれやれ、また第十三艦隊が突進攻勢とは、これでは猪武者と言われても仕方ないな

あ

「ヤン提督、ではご自分は猪武者ではないと思っておられるので?」

「シェーンコップ、今さらそんなこと言われるとは思わなかったよ。当たり前じゃないか」

「いや、単に確認しただけですよ。むしろヤン提督は猪武者なんかじゃなく、どちらかという子羊に近いと思いますな。だからこそたまには猪もいい。第一、男は二面性があるほうが断然モテる。これだけは自信を持って保証します」

「どうも褒められた感じがしないんだが。それに個人的な人気はこの際関係ないよ」  
だがシェーンコップの最後の言葉にはヤンもわずかに反応していた。

フレデリカの方に顔を向けたり、視線を投げたりしないようにしながら、それでも視野の片隅に入れてあるフレデリカを探る。

実はこの決戦前夜、ヤンはフレデリカにプロポーズしている。しかも自分では望み薄だと思っていたのにも関わらず即座にそれが受け入れられたのだ!

それは事実だったはずだが、ヤンには本当にそうだったのか自信がない。十人が十人とも可愛いというであろうあのフレデリカが相手なのだ。年上で冴えない自分なんかフレデリカと結婚とは、一日たった今でも信じられず、願望が見せた幻のようにも感じられる。聞き間違いではなかったのか。

だから小さなことでもビクビクしてしまうのだ。シェーンコップの言う子羊が今のヤンには正に当てはまる。

フレデリカの方はコンピューター画面を見ていて、ヤンの方へ向くことはなかった。それが素っ気ないものに思えてヤンは少なからずがつくりした。業務に専念するのは素晴らしい態度だが、プロポーズを受け入れた次の日の様子とは思えない。

実はフレデリカはフレデリカでヤンの方に視線を向けないよう努力していたのだが、むろん知る由もなかった。

そんな戯れ言とは関係なく戦いが迫る。

「前衛の戦艦群は長距離砲を全て同期。撃て！」

ヤン艦隊が砲撃を始める。それと同時に、帝国軍もまた熾烈な反撃を浴びせてくる。今、この戦場は正反対の方向へと高速で飛び交うウラン弾に白熱する。

ウラン弾自体もレールガン的高温で熱せられるため光を放つが、それに加えて薄く存在する星間物質に衝突することで輝くのだ。そして弾き飛ばされた星間物質は別の星間物質に当たり、次々とそのエネルギーを受け渡していく。充分エネルギーを失うまで光り続けるため、ウラン弾の後には長く尾を引く曳光が見えるのだ。

ヤン艦隊旗艦ヒューベリオンのスクリーンが時折真っ白に染まっては消えるのを繰

り返す。至近弾がセンサー近くを通過したからだ。そして戦闘開始から刻々と光る間隔が狭くなっていく。

シールドの負荷量を表わすインジケーターがひっきりなしに数字を変えている。10%からいきなり50%に上がり、また下がる。一気に80%に上がった時には、声にはしないが皆肝を冷やしたものだ。それは同時着弾を意味する。戦艦の防御シールドは強力なものだが、逆に言えばその程度のものでしかない。

同時着弾が三つに至ればこの数字は100%を超えてしまう。もしそうなればシールドは過負荷から装置を守るため一定期間作動しなくなる。砲撃に無防備になるのだ。そんなタイミングで一撃でも直撃を食らえば大破、当たり所によってはそれ以上の運命が待っている。

もしエンジンを含む動力系統に当たれば即座に爆散し、工業技術を極めた立派な艦も生きている人間も宇宙に漂う原子雲に還元される。良くても塵程度だ。最も悲惨なのはワープ装置が誤作動した場合である。そうなれば原子すら残さず次元の狭間にすり潰される。そういったことは基礎技術が同じである帝国艦も同盟艦も変わりがない。

残酷なようだが、宇宙の戦いというのはそういうものである。

普通に考えたら、突撃側のヤン第十三艦隊の方が撃ち合いでは有利なはずである。最

初から艦隊前面に長距離砲の多い戦艦を並べ、しかも照準を付けているのだから。

だがこの場合、帝国艦隊の反撃も第十三艦隊と遜色ないものになる。

「怯むな、撃ち返せ！ 我ら帝国軍本隊が負けはしない！」

帝国軍の戦艦たちも崩れるどころか闘志をかき立てている。

さすがに統率力も練度もラインハルトの本隊はシユタインメツツ艦隊とはまるで違うレベルだ。これまでラインハルトの率いる艦隊は確かに常勝だったが、アスターテの例を挙げるまでもなく決して損耗率の低い安全な戦いをしたわけではない。輝かしい勝利の影には消え去る艦も多かったのだ。

その中を生き残り、鍛え上げられた帝国軍の精鋭たちである。

砲撃の密度、効率の良さによりたいがい突進を食い止めてみせる自信がある。同じ帝国軍の中には黒色槍騎兵という突撃の得意な艦隊があるが、もしそれに対し自分たちが戦ったら食い止められるだろうとまで思っている。

そのはずだった。

だが激しい弾幕をもつともせず、ヤン艦隊は突き進む。全く速度を落とす様子はないのだ。

その命知らずの猛進にさすがの帝国軍の精鋭も驚きを禁じ得ない。

「何だ、奴らは勇敢というより相討ち覚悟の自殺志願だ。それほど苛烈な意志があるの

か!」

もはや相討ちでもいいからラインハルトを斃す気なのか。

その覚悟の前に帝国軍は戦慄する。

だがしかし、帝国軍でただ一人、ラインハルトだけがヤン艦隊のからくりを見抜いた。スクリーンをじっと見つめ、やがて目を離して呟く。

「なるほど分かった。奴らの艦隊にはなぜか爆散が少ない。我が艦隊の命中弾は決して少なくなはずなのに。とすれば艦隊そのものが欺瞞なのだ!」

よく考えればヤンは決して人命軽視をする将ではない。欺瞞によつてみせかけの突進を演じていただけだ。それに加え、ラインハルトはもう一つのことを看破している。

「ヤン・ウエンリーめ、敢えてシユタインメツツの時と同じ戦法を取ることでこちらを騙したのだ! いや事実逆だ。おそらくこの時を考えておいてからシユタインメツツと戦つたのだろう」

ラインハルトの言葉は全く真実を突いていた。

ヤン自身を除き、ヤン艦隊の誰もが先日シユタインメツツ艦隊との戦いでは最善手で破つたと思つていた。奇襲から分断という方法だ。

しかしそれは違う。



ヤンは初めにラインハルトとの戦いを思い描き、その上で敢えてシュタインメッツ艦隊に対して突撃攻勢という手を使っていたのだ。目を眩ませ、欺瞞に気付かせないためである。逆に言えばヤンはシュタインメッツ艦隊に勝利する方策などいくらでも見つけられる。

ヤン艦隊の面々もラインハルトと同じ理解に達し、ヤンの恐るべき知略を思い知らされた。

ぼさぼさ頭の冴えない指揮官はやはり不敗の名将だ。

そして今、ラインハルトが精査させるとヤン艦隊の欺瞞の詳細が分かった。

突撃してきた艦艇は艦艇ではなかったのだ。

補修部品である外殻部材を適当に組み合わせる艦のような塊にただただ。中身は入っていない。そんなハリボテを幾つも繋げて無人艦で曳航させている。

これではいくら帝国軍の砲撃が命中してもエンジンが無い以上爆散するはずがない。空しく吸収されるだけだ。

小惑星などが存在しない主要航路なのに、それでも欺瞞の策を捻り出してくるとはさすがに奇跡のヤンである。

味方の補給基地が多いという自領ならではの条件を最大限に活かしての欺瞞だ。

「見事に騙してくれたなヤン・ウエンリー。鮮やかな陽動だ。掛けてくる砲撃の密度は大したものではなく、計算すれば実数は半分以下といったところか。しかし、そうすると奴自身は航路のどこかに潜んでいてこれを見ているはずだ。そして欺瞞の突進によりこちらの混乱がピークに達する時を待って、改めて決定戦力で攻勢をかけてくるのだろう」

今度はラインハルトがそう読んだ。次こそ本当の突撃が待っている。

「トウルナイゼン、カルナップ、ブラウヒッチ、麾下の分艦隊をやや散開させ、索敵範囲を広げよ。そして向こうの艦隊を掴んだら網に取り込み、終わらせろ」

ラインハルトの本隊から命令を受けた中級司令官たちが前に出て熱心に索敵が始まる。各司令官たちは功名心があり、出世のチャンス欲している。誰もが出世で一步先んじて、艦隊司令官になりたい。

ここで敵発見の榮譽に預かれればそれも可能かもしれない。我先にと散っていく。

「よし今だ! 白い艦だけを狙えばいい!」

ヤンの一言で戦場の様相は一変する。

突撃してきた欺瞞のヤン艦隊、無人のハリボテだったはずだ。

だが、そこから本物の一個艦隊が姿を現した!

本当のハリボテは少なかったのだ。他の多数は外側だけの話で、中心部にはれつきとした戦闘艦が入っていた。

帝国軍を見誤らせるためである。むろん、砲撃を控えてハリボテの役に徹していた。帝国軍の方はハリボテの艦艇もどきを工作艦によって処理させようとして動かしていたのだが、それらが近付いてバレるギリギリのタイミングでいきなり出現し、直ちに攻勢に出た。

一方の帝国軍は策にかかり、全体的に広く開いた形だ。思わぬことに慌てて砲火を整えても、絶対的に数が足りない。

今度こそヤン艦隊の突進を止められない。

そして突進の行きつく先はブリュンヒルトただ一隻だ。

「なるほど…… 小細工をしたのかヤン・ウエンリー。さすがだ。魔術師と呼ばれたお前らしい。いや、詐欺師と言うべきか」

それでもラインハルトに慌てた様子はない。

だが、戦いでは明らかに帝国軍の艦艇に爆散が相次いでいる。欺瞞の成功によって距離を詰めたヤン艦隊が満を持して攻勢をかけているのだ。この時ばかりは帝国軍を圧倒しているといつてよい。

「アルトリンゲン艦隊被害甚大!」

「マイフォーファー艦隊壊滅、司令部の安否は不明!」

「こちらブラウヒツチ分艦隊、来援を乞う!」

帝国軍に悲報が飛び交う。比較的力量の乏しい中級指揮官の艦隊から被害が累積していく。

「閣下、小官がクヴァシルで出る御許可を」

「無用だ。メックリンガー」

この時、ラインハルトの横にいるメックリンガーが逡巡の末、自分がブリュンヒルトを出て乗艦クヴァシルに移り、迎撃に向かうことを具申した。

しかしラインハルトは素っ気なく答えるに留まっている。

ついにヤン艦隊は帝国軍総旗艦ブリュンヒルトが見える位置まで迫り着く。

だが、砲撃可能距離まで行き着くことはなかった。

いきなりの壁が同盟艦隊を阻んだのだ。

それはラインハルトの本隊から既に発進していた膨大な数の艦載機隊だった。それからワルキューレがこのタイミングで一斉に襲い掛かってきた。

「これはいけない、フィッツシャー提督に連絡!」

ヤンの表情が曇る。

帝国軍の意図が分かったからである。

これはたまたま帝国軍が艦載機を出していたのではない。破れかぶれでもない。ブリュンヒルトを囿にして引き付けた上で、艦載機の餌食にさせようと最初から待ち構えていたのだ。

なるほど艦載機ならその宙域に最初から出しておき、エンジンを消せば探知は困難になる。分かった時には接触は免れないのだ。そして機雷と違って高速で移動できるため除去もできない。

ヤン艦隊は奇襲を仕掛けたつもりで、逆に帝国軍から奇襲を受けてしまった。

「急遽駆逐艦を前面に出し、隙がないように艦列を作らせるんだ！ こちらの艦隊の前に網を張るように。そして早いところ最大限の防空を！」

このガンダルヴァアの戦い、両雄が激しく火花を散らす。

後の歴史家に「もう見ることでできない戦術戦」とまで言わしめた芸術の戦いが続く。

第二百二十話 490年 3月 決戦! ガンダルヴァ

〜応酬〜

ここでもラインハルトの天才が輝いた。

欺瞞のハリボテからヤン艦隊が出てきた時、状況を瞬時に計算し、自分を囿にした罠を構想したのだ。

最適解を出した結果が大量の艦載機を使った壁である。最も速く、最も見つけられにくい。

「閣下も危ないことをなされる。では後はブラウヒッチたちを呼び戻して包囲、ですか」やれやれという顔でメックリングーが嘆息しながら命令の先読みをした。

同盟軍の駆逐艦の列が雨あられと弾を撃ち出す。

小口径連射砲だ。艦に対する攻撃力はほとんどないものの、シールドのない艦載機にとってはもちろん一撃必殺の脅威である。

砲はその口径によってエネルギー量が異なり、そしてエネルギーが少ないほど温度が

低く、曳光の色に赤みが入る。そのため小口径砲の弾幕は白ではなく、明るいオレンジ色のシャワーに見える。むろん、艦載機には死のシャワーである。

ヤンもまた計算を終えた。

希望的に見積もつても、ブリュンヒルトを斃すのはおそらく無理である。

あの艦載機の壁を超えることはできない。

そうであれば無理な猛攻は意味がない。実害が出ないうちに素早く後退しないと危険だ。

今は帝国軍のワルキューレを弾幕でなんとか近寄らせないようにしているが、完全に排除し切るのは不可能だろう。フィツシャアの構築したきれいな防空網でも長くは持たず、いずれかいくぐられて損害が出る。そうなれば統制のとれた弾幕が張れなくなり加速度的に損害が増えて壊滅してしまう。

ただでさえ帝国軍の各分艦隊は再び集まり包囲の動きを始めている。艦艇の絶対数ならヤン艦隊の方が最初から不利であり、退路を断たれてしまうのが見えている。

その時、ヤンに声を掛けてきた人物がいる。

「ヤン提督、艦載機での戦いを一時任せては頂けませんか。少しは状況を楽にできると思うのですが」

ヤンは声で分かっている。身柄を預かっていた帝国軍からの客将メルカッツである。そして言いたいことも充分分かっているつもりだ。艦載機同士のドッグファイトで活路を開くというのだろう。

当然ヤンもそれくらのことを考えていないはずはない。だがそうできない理由があるのだ。

撤退を考えている艦隊が艦載機を出したら、よほどうまく運用しなければ最後には収容できなくなるのは自明である。

そのため艦載機スパルタニアンの発進に逡巡していた。

出したスパルタニアンを敵の只中にとり残す、そんな非情なことはヤンの性格的にできることではない。

ただしこのメルカッツ提督なら、困難を承知で運用できる可能性がある。その近接戦闘の巧みさは同盟軍でも恐れをもって知られたところだ。

「お任せしますメルカッツ提督。やっていただきましょう。フィツシャー提督にも伝えておきます」

撤退戦での艦載機運用の難しさなど今さら口に出す必要もなく、簡潔に答えるに留める。

「私はヤン提督を信頼する。だからヤン提督の信頼するメルカッツ提督を信頼する」



艦隊運動を統率していたフィッシャー提督から返事が来た。やや硬い言い方ではあるが、生真面目なフィッシャーなりにメルカッツを歓迎して言った言葉だ。メルカッツに空母群の指揮を譲り、指示通り全体の隊形も変化させる。

時を置かずしてヤン艦隊からも次々と艦載機が発進していく。

「戦艦ムフウエセ大破！ マリノ准将重傷！」

後退へ切り替えようとしていたヤン艦隊だが、決して損害が少ないわけではない。

アッテンボローの分艦隊もマリノ准将の分艦隊も損害を被った。特にマリノ分艦隊は撤退する艦隊の最後尾についていたため、したたかに打撃を被った。

だが、帝国軍にも勝利は転がり込んでほなかつた。それは誤算のためである。

「ヤン・ウエンリーは無理を悟り、一時撤退を選択したのか。さすがだな。戦い続けて華々しく散るという下らない美学からは無縁というわけか。帝国貴族の馬鹿どもとは違う。だが、それでも逃げきれぬかな」

ラインハルトが自信を持って戦況を見るが、意に反し艦載機の戦いが思つたようにならない。ドッグファイトが開始されると帝国軍のワルキューレが数でははるかに優っているにも関わらず、互角かせいぜい優勢といったところに落ち着いている。

「む、少しばかり不甲斐ないな。一気に制空権を奪えないのか」

「閣下、やはり艦載機戦では単純に数の勝負にはならず、各人の技量が明確に出るようですな。そして運用ノウハウについて、悔しいことですが向こうが上手、いや卓越したものに見えます」

「確かにそうだ。しかしメックリンガー、ここにケンプがない以上、できることをするしかない。巡航艦による凹型陣を形成させよ。ドッグファイトで片付けるのではなく、そこへ相手を追い込んで艦砲を集中的に浴びせるのだ」

しばらく艦載機同士の死闘が続く。

動いている一つの光が一つの命だ。そのそれぞれの命が目まぐるしく飛び交っている。

それがひとときわ瞬いた時、永遠に失われたことを意味する。一つの人生が「これから」を奪われ「過去」のものになってしまう。

少しも気の抜けない激しい戦いだ。帝国スパルタニアンと同盟ワルキューレ、どちらもフルスロットルなら三十分も経たずして母艦に戻り、補給してからまた出なくてはならない。

「おいコーネフ、賭け金の追加だ！ 来月の給料の半分まで賭けてもいいぜ、今のうちに稼いでおきたいからな。どうだ、乗るか？」

「ポプラン、それは後だ。この戦いはヤバい。戻ることだけ考えた方がいい」

「ヤン艦隊にいれば、ヤバいことだらけだ。いつものことさ。なにせ奴さんは自分は昼寝をしていたいくせに人使いは荒いからな。この矛盾をどう考えているか聞いてみたいもんだぜ。しかしコーネフ、あの朴念仁が本当に負けるってことはない」

そう言いながら、ポプランが何も考えていないわけではなかった。

一人でも多くの部下の命を守るべく、指示を出し続けている。

「ウオツカ、シエリーの隊の援護に回れ！ うかつに敵艦に近付くな、ワルキューレを殺るか艦を殺るか、しつかり決めてから戦いに入るんだ」

そんな指揮は他の隊長コーネフ、ヒューズ、シエイクリも同じだ。

戦いは予想以上に厳しくとも、この四人は同盟軍空戦隊のエースである。慎重にはなっても臆病になることはない。

そしてコーネフの懸念は、確かに懸念だけで終わる。

補給が必要な時点に到達すれば必ず味方の空母が見つかる。それが繰り返されたら空母運用が非常に適切であり、信頼が置けることが分かってくるのだ。そうであれば艦載機乗りは安心して戦うことができる。

メルカツから空母群へこれ以上なく適切で、しかも無理のない指示が出ている。

「残り収容機数が二十を下回った空母は、所定の位置まで退避。次の作戦行動を待て。」

それ以上が収容可能な空母群はゆつくりと前進のこと。しかし、決して駆逐艦の弾幕の及ぶところから出てはならん。収容の優先順位は最初に右翼に向かった艦載機とする。そろそろエネルギー切れのはず、補給の用意を整えた上で収容を開始せよ。それでも収容機数にゆとりのある空母は、中央部の艦載機収容のため横方向に微速移動、次の空母が来るまでのつなぎになるのだ」

事実、第十三艦隊の空母群は帝国軍の砲撃に晒されることはないが、艦載機の発着できるギリギリの位置を捉えて運用されている。

しかも決して取りこぼしはない。また、素早く効率的な運用は稼働率の向上をもたらし、実際の機数以上に活躍できる。そうなれば戦いでは優位になり、撃墜されることが減り、結果として好循環になる。

「最初に出すのは直掩機各十機、交代しながら空母の保護を徹底するように。また、雷撃やミサイルを絶対に見逃してはならん。そして被弾やエンジントラブルにより救難信号を出した艦載機を見つけ出す努力も継続せよ。通信機の優秀な巡航艦に応援を頼んでもよい」

これが宿将メルカツツの行う艦載機戦だった。

近接戦闘において余人の追隨を許さぬ名人芸である。

艦載機同士の戦いは決着がつかずに終わる。圧倒的に数の多い帝国側をヤン艦隊が凌ぎ切った。

そして決して無理をせず、ヤン艦隊が最終離脱する直前、各艦載機隊は鮮やかなまでに一斉に着艦して引き揚げた。

次にヤン艦隊は帝国軍の各分艦隊により構築されつつあつた包囲網を際どいところですり抜けることに成功した。包囲網は有効にはならず、空振りに終わる。

帝国軍もヤンの第十三艦隊も互いに距離を取り、一息入れることになった。

こうして両雄が死力を尽くすガンダルヴァ会戦、その第一幕は終わった。

騙し合いのような激しい戦術の応酬だ。ヤンが欺瞞の艦を使った策で帝国軍を惑わせ、突進を成功させた。しかしラインハルトが艦載機による待ち伏せでそれを阻んだ。

結果的に引き分けに近い。

ここまで帝国軍本隊は二千隻、ヤン艦隊も千五百隻を失ってしまった。損失の上で比べればわずかヤン艦隊に有利な結果に終わったともいえる。

「やれやれ、まずい戦いをしてしまったなあ」

だがヤンの方ではこれで仕留めるつもりで策を練っていたのだ。そのため精神的にはむしろヤン艦隊の側にひびく堪える結果になっていた。

しかし、ここで諦めるつもりはない。

勝負をつけるために来ているのだ。

「ヤン・ウエンリー、ここで引き下がるわけではあるまい。むろん、俺もそうだ」

決戦への思いはラインハルトも同じである。

死闘中の死闘と呼ばれるガンダルヴァ会戦、その第二幕が間もなく開かれようとしていた。

人員も艦も応急の処置を終えた。

失われたものは取り返しもつかないが、これ以上失わないようにいったん取り留めている。ただしそれが一段落した時が再び戦いを始める契機になるのは最初から分かっている。

戦いの第二幕はお互いにゆっくり近付き、オーソドックスな長距離砲戦から始まった。

どちらも有効射程距離は同じようなものだ。ほぼ同時に砲撃を開始する。

有効射程とは主に照準の問題から生じている。敵艦の正面に直撃を当てられる距離ということの意味しているのだ。

ただし始めは直撃があっても艦の防御が砲撃に優るため、損害は滅多に出ない。最も

小型の艦である駆逐艦のシールドでも、中口径以下の砲撃なら一発は防げる。よほどの運が無い艦でない限り爆散することはない。

砲撃戦では、始まってからが駆け引きだ。

敵に積極的に打撃を与えるため距離を詰めるか。あるいは損失を出さず、相手の出方を伺うために距離を保つか。それを指揮官は選択していく。それは神経を使いながら行う我慢比べともいえる。

だがここで帝国軍の足並みが乱れた。

帝国軍の前衛を担っていた分艦隊が我慢しきれず前に進んでしまう。功を焦り、過度の攻勢に出てしまっている。

「よし、防御を固めながらやや後退、いったん敵の攻勢を受け流すんだ」

これをヤンがチャンスと見た。我慢比べに勝ったのだ。

ここで帝国軍の前衛だけでも叩いて無力化できれば、艦数の差を一気に逆転できる可能性がある。

ヤンは得意の心理戦術を駆使し、うまく釣り出していく。

相手に気付かせない程度の速度でゆっくり後退していくのだ。もう少し、もう少しで打撃を与えられると思わせておくのがポイントで、しかし一定の速度でもいけない。時には逆攻勢をかけ、焦らせることも必要になる。

それでも、いずれは相手も陣形が崩されたと気付く時がくる。

だがそこで慌てて戻るケースは実は少ない。せっかくここまで突出したのだから戦果をわずかでも得たい、そうでなければおめおめ戻れないと思ってしまうのが人間である。

その心理状況に追い込んだらコントロールは楽なことだ。

一方の帝国軍はラインハルトがぼんやりとスクリーンを眺めている。

「トウルナイゼンが突出したようだな。ヤン・ウエンリーに挑むには力量が足りないと自覚もできないようだ。手玉に取られているのがわからないのか。これではあのポレヴィト会戦で血気に逸った愚かな敵のことを笑えない」

「閣下！ 直ちに呼び戻しませんと危険です。トウルナイゼン艦隊は踊らされ、このままでは行動限界点に達し、敵のいい餌になるでしょう」

「メックリンガー、通信封鎖を解く必要は無い。ただしトウルナイゼンへ向けてシャトルを出し、すぐに引き返すよう伝令を二度に渡って出せ」

これは逆にメックリンガーにとって意外だった。

てつきりラインハルトが激昂すると思っていたのだ。トウルナイゼンの勝手な行動は全軍を危険にさらすものであり、またその理由が自分の出世のため、つまり矮小な功



名心の結果であるのは分かり切っている。

ラインハルトがそんなことを赦すはずがないのだが……

ところが現実にはシャトルを出して命令を伝えるだけである。

そのことでメックリンガーは命令の実効性に不安を持った。正直に注進する。

「閣下、それでトウルナイゼンが従うはずがありません。むしろ命令違反を咎められない程の戦果を是が非でも得たいと思うでしょう。閣下が戦果に関わらず厳罰に処すとしても申し伝えませんと」

「そこまでは必要ない。死にたくなければ早いうちに戻ってくるはずだ。自分は死んでも帝国軍のため戦いたいというのであれば、それはそれで是非とも救ってやりたかったのだが」

「閣下、それでは、まさか……」

「よく気付いた。そのままかだ、メックリンガー」

## 第二百一十一話 490年 3月 決戦! ガンダルヴァ

## ～盾と矛～

やがてトウルナイゼンの率いる帝国軍前衛は息切れしてくる。ここまで攻勢を継続したのだから当然のことだ。

焦って更に攻勢を強化しても相手は乗ってこない。そんなことをすればするほどエネルギーや弾薬を無駄に消耗してしまうだけである。やがては行動限界点までどれほどの猶予があるか気になり始める。

ついに、自分が主導権を握っていたのではなく、相手に乗せられ危険な位置にいると気付く時が来た。ここで一気に恐怖が押し寄せ、パニックになってしまう。

指揮官の動揺は、ほんのわずか艦隊の混乱として出るものであり、見る者が見ればそれが分かる。

しかもトウルナイゼンに対してしているのは、最高の智将ヤン・ウエンリー、その一瞬を見逃してくれるような甘い相手ではない。

「今だ! 攻勢に出てあの前衛を叩くんだ」

ヤンの指示のもと、第十三艦隊は一気に反撃に出る。その満を持した集中砲火はたちまち帝国軍前衛を薙ぎ払い、突き崩す。それに対し、エネルギーの貯留が空になっていたトウルナイゼン分艦隊に耐える力はない。

やがてトウルナイゼン分艦隊の混乱は他の帝国軍前衛艦隊にまで波及し、次々と明るい火球に変えられていく。そして艦と同時に一度に百人単位で無駄に命が消費されるのだ。

敵の損害と自軍の損失を示すカウンタがある。

ヒューベリオンのカウンタは、今や損失のものはほとんど動いていない。逆に敵帝国艦隊の損害、つまり戦果を表わすものがどんどん数字を上げていく。

まだ敵の前衛を平らげたというには及ばないが、崩壊させつつあるのは確かだ。

艦橋の誰もが顔をほころばせる。ヤン一人を除いて。

「どうもおかしい。こうなるのはおかしい」

「閣下、それだけこちらが上手に事を運んだということでは」

「いや、フレデリカ。こんな平凡な戦いになるはずがないんだ。帝国軍だってこの事態は見えているだろう。それなのに慌てた素振りが一切ないのは不自然だ。まるで予定の内でも言わんばかりに。そして帝国軍にとって想定済みと仮定すれば、自動的に策の一部ということになる」

ヤンの表情は深刻だった。

しかしフレデリカは少しばかり気分がいい。いつものグリーンヒル中尉と呼ばれていないことに気付いたからだ。

「よし、メックリンガー、この時を待っていた！ 最大戦速で前進せよ！ 我が方の壊滅した前衛艦隊を迂回し、右翼方向から敵の側面及び後方へ回り込むのだ！」

「これは閣下、ではやはり最初からトウルナイゼンの突出を見越していたのですな。そしてそれを囿にして引き付けさせ、ダイナミックな用兵を考えていたと」

「その通りだ。これは普通に策としてやったのではヤン・ウエンリーに見抜かれるだろう。しかしトウルナイゼンが策としてではなく本当に突出したのなら、見抜かれる可能性は低くなる」

「なるほど…… 確かに本気である囿など普通には考えないでしょうから」

「だがメックリンガー、俺は非情に過ぎたつもりはない。トウルナイゼンに対して捨て石になれと命じたのでもなく、決して無慈悲なことを強いたわけでもないのだ。イザーク・フォン・トウルナイゼンと俺は幼年学校の同期でもある。できれば才覚を發揮してもらいたかった。それは本当だ。いや、ただの言い訳に過ぎないか。この無謀な突出は予想できなかったことではない。俺がいる限り奴が出世に焦ることは避けられないの

だからな」

この帝国軍のダイナミックな用兵は戦況を一気に引っくり返した。

帝国軍中央部は前衛に加勢するのではなく捨て置き、その脇をかすめて前進している。これがうまくいくと第十三艦隊の側方から後背に回り込める。そうなればもはや勝つたも同然、圧倒的に有利な態勢になる。

そして第十三艦隊の方は直ぐに手は打てない。相手の前衛艦隊へ大攻勢をかけていた途中であり、急な艦隊行動に移るにはエネルギーの足りない艦があるため統率が取れないのだ。

「やられたな。帝国軍は前衛を見捨てた上で勝利を掴むつもりだった。策としてはとても単純だが、その単純さが有効になったようだ」

「閣下、ではいかがなさいますよう」

ヤンとフレデリカ、近い未来、夫婦になるべき二人が硬い会話を交わす。

今はそこに甘さはない。こんな危機的状況なのだから。

だがヤンとしても夫婦になる予定を永遠に予定のままに終わらせるつもりはない。

「こちらは不利な状況に押し込められつつある。だがしかし、一方では大いなる勝機でもある」

「え、勝機に、でしうか……」

「帝国軍は攻撃を急がず、こちらの脇を通過していこうとするだろう。向こうにとってすれば、早めに横撃をかけても十分な戦果が得られる。だがしかし、あのラインハルト・フォン・ローエングラムがそれで満足するとは思えない。性格上、完勝を企図するはずだ。そのためには必ずこつちの後背まで回りこんでくる」

「では閣下、そんな敵の心理を利用するのですか」

「そう、そこに勝機があるんだよ。向こうがそうくるなら、こつちも慌てたふりをすればいいんだ。そして帝国軍が通過するタイミングを見計らい、ただ一隻あの白い艦めがけて攻勢をかける。最も効率的に倒せるチャンスがやってきたことになる」

フレデリカは声もなく、目を見張る。不利な状況から逆に勝機を掴むなど普通では考えられない。

この心理の読みこそがミラクルヤンなのだ。

だがそれについて構想と実現の間に大きな隔たりがあるのをヤンは知っていた。

高速移動中の敵艦隊、その中の一隻だけを狙って仕掛けるのは普通には無理だ。ましてやこちらは慌てた欺瞞をしなくてはならない。油断を誘うために。

しかしヤンはその困難な突撃、それを成しうる可能性のある人物を一人だけ見出し、いた。

静かにそちらへ歩く。

「ファーレンハイト提督、その攻撃をやっていたいただきたいのですが」

「小官に、でしょうか。一介の客将が出過ぎたマネと考えるのですが。それに指揮すべき艦隊もありません」

「いえ、最も相応しい人選をしたつもりなのです。それに艦隊は、負傷療養中のマリノ准将が率いていた分艦隊があり、今は後方に控えさせています。それを使つて下さい」

尚も迷つたファーレンハイトであつたが、目に入ったメルカツツの軽いうなずきで心を決めた。この場で遠慮は無用、期待に対し最善の努力をするのが、拾つてくれたヤンに報いる道だと。

「分かりました。最善を尽くさせて頂きます」

帝国軍で烈将の呼び名も高いアーダルベルト・フォン・ファーレンハイトが出撃していく。

このヤンによる抜擢は理由があり、あのアスターテ会戦で第二艦隊を慌てさせたファーレンハイトの実力を見ていたからだ。今、最大限迅速な攻勢が要求されるものであり、この場合はアツテンポローの変幻自在の運用よりファーレンハイトの迅さこそ相応しい。

第十三艦隊の援護射撃のもと、ファールンハイトの率いる千二百隻がブリュンヒルトただ一点を目がけて突き進む。

移動している相手へ横方向から突撃するのは、例えて言えば川を渡るようなものである。よほどうまく読み切つて素早く進路を調整し続けないと、あつという間に濁流に呑まれてかき消えてしまう。敢えて利点を挙げるとすると、高速の艦隊運動中では艦載機は出せず、純粋な砲雷戦の勝負になる。

その難しいことをファールンハイトはやり遂げた。

目の覚める苛烈な攻勢だ。攻撃を仕掛けても、着弾の観測結果を待つことはない。ひたすら攻撃に攻撃を重ね、電撃のごとく進む。最短でブリュンヒルト目がけて着実に距離を縮めていく。

「む、あれは何だ。こちらへ向かつてくる艦隊がある。迅いな」

「閣下、敵はおそらくこのブリュンヒルトを斃すチャンスだと見たのでしよう。あの艦隊はなかなか鋭い攻勢を見せております。ここは陣形を変え、ブリュンヒルトを分厚く囲み、防御を固めませんと」

「いや、メックリンガー。艦隊行動を変えることはない。あくまで敵の後背に移動だ。このまま敵を逃さず、勝ち切る」



「閣下！　ここで完勝に拘る必要はありませんまい。リスクの芽を潰す方がよほど重要だと申し上げます。ですが防御に舵を切ることが閣下の意向でないならば、せめて小官を差し向けてはいかががでしょう」

「ではメックリンガー、あの小癩な艦隊を近付けさせるな」

本当ならメックリンガーの言うように、いったんブリュンヒルトの守りを優先し、敵艦隊後背への移動までは諦めた方がいい。それでも一定の勝ち収められる。だがラインハルトとしては単なる勝ちで満足ではなく、メックリンガーもそこは理解した上で妥協した。

メックリンガーは自分の本来の乗艦であるクヴァシルに移り、本隊に加えられていたメックリンガー艦隊中枢の二千隻を使って迎撃戦を展開した。

戦いは局地的に激しいものになる。

ファールレンハイトの集中運用が錐のように穴を穿ってくる。

それに対し、メックリンガーはやみくもに反撃するのではなく、隊形をそれに合わせて柔軟に変えていく。先を読んで読んで読み勝ち、相手を取り込むためである。

戦理を重視するメックリンガーらしいものだ。

精神論で勢いのまま進むのではなく、音階や和音で響かせるピアノのような艦隊運動

である。

それが芸術家提督の真骨頂だ。

「今度は参謀でなく艦隊指揮に早変わりか。いやはや我ながら器用だな。キルヒアイス閣下がいればこんなことにはならないだろうに」

ふとメックリンガーはこの大作戦が開始される前のことを思いだした。オーデインでケスラーの屋敷に招かれ、会食した時のことだ。

飲んでいるワインの銘柄や、兵たちに流行している冗談などのことは憶えてもいない。たわいもないことだ。しかし、思わず本心が出てしまったケスラーの愚痴のことは記憶に残っている。

「この度、私はオーデインの警備を仰せつかりました。大役であり、その重要性は分かっているつもりです。しかし、遠征に行けなくなつたことは、正直残念でもありません。メックリンガー殿はこのたび参謀長としてであり、艦隊指揮官ではないのですな。それでも私から見れば羨ましい限りだ」

「そういえばケスラー殿は以前から艦隊指揮官になるのがお望みでしたな」

「そう、自分の艦隊を率い、宇宙を駆けてみたかった。しかし結局のところかなえられそうにありません。ミッターマイヤー提督を始め私より優秀な指揮官があまたいる中

は、自分などとてもとても」

「ケスラー殿、実は私は今回の参謀役を残念に思っていないのですよ。こう考えているんです。参謀ができるから仰せつかったのであり、むしろ艦隊指揮官だけでなく参謀にも使えると評価して頂いた結果である、と。いや、これは自己評価がいささか高すぎますかな。しかしケスラー殿の場合、決して艦隊指揮官としての力量が足りないのではなく、単に警備や治安に対する能力がずば抜けている結果なのでは」

「なるほど、そこまで言って頂くのは少しばかり面映ゆい気もいたします。ではこれからそう思って精勤するとうしましょう」

# 第二百二十二話 490年 3月 決戦! ガンダルヴァ

## ~混迷~

局地戦の戦況は一進一退になる。

それはまるで盾と矛、メックリンガーとファーレンハイトは互いに一步も引かない。しかし時が失われていけば、すなわちヤン艦隊の敗北を意味するのである。

ヤンはスクリーンで戦況を見ている。ファーレンハイト提督は期待以上の素晴らしき快進撃を見せてくれた。ただし最後に強敵の出現によつてスピードが鈍った。この新たな難敵に苦勞しているようで、見るからに突破は容易ではない。

「このままでは不味いかもしれないな。選択肢があまりなさそうだ」

ヤンは大きな声ではないが悔しきで声を出す。

帝国艦隊は全体としてそのまま進路を維持し、ヤン第十三艦隊の後背に回り込もうとしている。

ヤンは撤退の二文字を口にしかける。

もちろんヤンの発想のどこにも玉碎覚悟の突進などありはしない。自分だけならま

だしも二百万人の命がかかっているのだ。いくら同盟を救うためとはいえ、可能性の少ない作戦に無駄に命を捨てさせることはできない。

しかし、ここで撤退すれば同盟が詰んでしまうことも確かだ。

帝国の大兵力による侵攻はもはや押しとどめようもない。ここで逆転できるたった一つのチャンスを放棄しなくてはならないとは。

ギリギリのところまで待ち、ヤンはようやく決断した。

「残念だが撤退しよう。そうと決まれば先ずは主砲斉射、ファーレンハイト提督のため退路を作るんだ。その後駆逐艦から順次反転し、離脱するように」

そして、言ってもどうにもならない愚痴をこつそり言う。

「あと二万隻あれば、いや五千隻でもいい。いや、二千でもいい。それだけの兵力があったらなあ」

フレデリカにも聞こえたが、そのヤンの愚痴も女々しいとは思わない。

悔しさも充分に分かる。それにフレデリカが誇らしいと思うほど、ヤンはここまで同盟のために戦い切ったのだ。ランハルトを斃すという目的を達成できなかったとしても誰もそれを責めることはできない。

「戦場外殻偵察ビーコンより信号、戦場に近付きつつある艦影発見！」

突然、ヒューベリオンの艦橋にオペレーターの声が響いた。

「詳細が分かり次第直ちに報告を」

ヤンはそう答える。

撤退の準備を始めていてよかつたと安堵する。

思わぬ不測の事態を避けるため、最初から無人観測機を戦場外殻に飛ばしていたのだ。

帝国軍はここにいないだけで本隊以外にもいくつか艦隊がある。それらが集まつてこようとしても間に合わないタイミングを見計らつた上での作戦開始だが、不測の事態がないとも限らない。予想外に早く到達してきた帝国艦隊にいきなり挟撃などされたらたまらない。ヤンの当然の用心だつた。

帝国軍のミッターマイヤー艦隊かビッテンフェルト艦隊が今ここに到着したのだからうか。

だとすればもうやることは一つだ。これ以上損害を出さないため、完全に退路を断たれる前にうまく躲して離脱する。

「詳細出ました! 艦艇総数五千隻以上、急速接近中。あ、こ、これは友軍です! 識別番号同盟第十艦隊の表示!」

「何だつて! 今、ここに同盟軍とは」

「旗艦らしき艦影確認、盤古ではありません。しかし、そ、そんな馬鹿な、有り得ない！艦型照合、戦艦ペルーンです！ ですが間違いなく第十艦隊ウランフ提督の暗号コードを発信中！」

「なんでそんなことが?! 戦艦ペルーンは確か第十二艦隊ボロディン中将の旗艦だ。帝國領侵攻の際失われ、登録を外されているはずだが……」

驚くことが重なりヤンは考え込む。

第十艦隊の援軍が到着、しかしそれは失われたはずの艦だとは。

帝國の策謀と思う方が順当だが、だとしても余りに手が込み過ぎている。

そこへ通信が届けられた。さすがに妨害のため映像は乱れて音声だけである。

「こちら同盟第十艦隊、只今到着した。加勢するぞヤン提督！」

その艦隊五千隻は直ちに帝國軍へ直進し、早めの砲撃を敢行する。

改めて通信してきたウランフ提督がより詳しい説明をしてくれた。

「あのポレヴィト会戦で同盟軍はかなりやられた。残存艦のほとんどに損傷があり、再び使うには本格的なドック入りが必要だろう。第十艦隊では旗艦の盤古すらその通りだ。そのためビュコック提督はヤン提督が帝國艦隊に戦いを仕掛けるのを予期していたものの、手助けできない。だがそんな時にフェザーンから艦艇供与の話があった。

フェザーンといっても今の帝国による暫定統治の方ではなく、亡命中のルビンスキー家の方だ。今は帝国に対する共闘関係にある」

ヤンはそこまでは理解できた。

しかしそれがペルーンに乗ってウランフ中將が現われたことと何のつながりがあるのだろうか。

「フェザーンは帝国領侵攻で鹵獲された同盟艦を多数奪取している。そしてほぼ修理を終えているらしいのだが、人員がいなかったため稼働できない。しかし逆に、今の同盟軍には人員はそこそこ残っていても艦がない。そこでフェザーンのほうから艦艇供与の話がきた、というわけだ」

「なるほどフェザーンが同盟艦を取っておいでくれた、と。」

「フェザーンがくれた艦艇のほとんどは元第七艦隊のものだ。しかしこの戦艦ペルーンは第十二艦隊のわずかな忘れ形見だよ。ボロディン中將が自決した後、コナリー少將のもとで降伏、拿捕されたものだからな。これに乗っているとボロディン中將の魂を感じるようだ。下手な戦いをしたら奴が化けて出てくる」

これで話がつながった。

この天祐はフェザーンのルビンスキー家の妙案が発端だった。

ウランフは知らなかったが、事実をたった一人、エカテリーナの発想である。



同盟による帝国領侵攻はむろん大敗に終わった。多くの艦艇は撃沈されている。しかし、早めに降伏した第七艦隊や先に司令部がやられた第三艦隊の場合は、拿捕されたことも多かったのだ。それを更に帝国からフェザーンが奪った。

修理が済めば、これら人員のいない艦を遊ばせておいても仕方がない。より有効に使える方法を考える必要がある。

そしてビュコック提督は政府に断りもなくフェザーンの提案に乗った。

それらの供与艦をウランフに託し、いち早くヤンの元へ送つてくれたのだ。

戦況はまたしても変わった。

外縁からウランフ提督の同盟艦隊五千隻が加わり、帝国軍は第十三艦隊との間に挟まれた格好になる。

有利な態勢からの攻勢に出る直前、一転して追い込まれているのだ。

「なに！　今さら敵に増援が来たというのか。だがこのタイミングとは、いかにもまずい」

驚きはした。

だが、さすがにラインハルトは狼狽するどころか対処は素早い。

「しかしその増援は決して多くはない。しかも急ごしらえなのか、編成にちぐはぐなど

ころがあり、そう恐れるには足りない。適当にあしらいつつ、予定通りヤン・ウエンリーの艦隊の後背に回って一気に決着をつける」

しかし、現実的にそれは無理になりつつある。

ウランフの応援艦隊では、将兵たちが急に供与された艦の扱いに戸惑っている。いかに同盟艦とはいえ、微妙に異なるところがあるからだ。通常なら一気に乗員が交代することなどあり得ず、古参の兵が艦の微妙なところを伝えるものである。それができないのならまるで新造艦のように試験航海をしなくてはならなかったところなのに。しかし実際はエンジンの微調整や砲の照準合わせをする時間は取れていない。

それでも元々同盟軍随一の勇猛さを誇るウランフ中将麾下の将兵である。急速に艦の取り扱いに習熟し、統一行動のとれた攻勢が可能になる。

この点事情を知らないラインハルトが強さを見誤ったのも仕方がない。

結局、ラインハルトとしても早期決着を諦めざるを得なかったのだ。

「仕方がない。全艦このまま増速し直進せよ。今の挟撃されている態勢から脱する。仕切り直しだ」

ラインハルトは気持ちを切り換え、ヤン艦隊を捨て置いていったん離脱する。後背からの理想的な攻撃は夢と消えた。

再び艦隊同士は距離を取り直す。

ガンダルヴァ会戦の第二幕、帝国軍の非情な策が当たって勝利しかけたが、それはならなかった。互いの損失は五分と五分に終わっている。

しかしヤン艦隊にウランフ提督という応援が到着したことにより、艦数の上で逆転した。今は帝国軍一万八千隻、同盟軍は二万二千隻になる。

だが戦いはこれで終わらない。

どちらかが死ぬか尻尾を巻いて戦場から逃げない限り、死闘は決着がつかない。

ガンダルヴァ会戦の第三幕が切って落とされた。

今度は両軍とも華麗な艦隊運動から始まった。

分艦隊を多数駆使して戦う。

それはまるで宇宙に向かい、指で掴むような動きだ。そしてできるなら、敵を最後に握り潰すための。

「カルナツプ、ブラウヒッチは右翼から敵に迫れ。予備兵力のクナツプシユタイン、グールパルツァーは左翼から出よ」

帝国軍はこれまでのところアルトリンゲン、マイホーフアー、トウルナイゼンといった中級指揮官を失っている。やむを得ず予備兵力まで動員せざるを得ない。

それに対し、ヤン艦隊もそれぞれに対応した手を打つ。

ヤンは特異な人間だ。

戦術の凄みを極めれば極めるほど、兵力差の重要性を忘れない人間である。戦力の優越というものがどれほど有利な立場になるのか熟知している。

ここであえて奇策を打つ必要はない。相手の打つ手に間違いない対応することだけを考える。

そうすれば向こうの方が先に疲弊し、必ず勝機が訪れる。そう確信しているのだ。

ラインハルトの帝国軍本隊は精鋭である。反応速度も精度も良かった。しかも補給物資はウルヴァシーから充分に持ってきているので不安はない。

何よりラインハルトの指揮は的確であり、各分艦隊の局面を同時に見ることができ。そして最適化を考えるのだ。大きなところで配分を間違うことはない。

そして分艦隊の中級指揮官たちは先のトゥルナイゼンの最期を知っていた。戦場で常勝提督の言うことを聞かないことは即自殺行為だ。

ここで指示に従わなければ生き残れないのを肌身で感じ、忠実に動くこうとしている。

この統率力のため第三幕の初めはむしろ帝国軍の優勢で推移した。

「ふう、帝国軍の奴らは有給休暇どころか昼休みも要らないくらい勤勉だなあ。我が司令官も昼寝ができるだけで同盟にいられたことを感謝しなくちゃ」

そんなことを言うのはアッテンボローである。戦艦マサソイトに乗り、分艦隊として出ている。今は帝国のクナツプシユタイン分艦隊を相手にしているが、軽口を叩ける暇があるくらいには余裕があつた。

そしてその時が来た。

粘り強く戦っていた同盟軍が押し返す。両軍に疲労が重なるにつれ、艦数の違いが覆い隠せなくなっていたのだ。そして帝国軍の中級指揮官たちは残酷な現実をカバーできなくなるほど戦術能力が高くない。

アッテンボローはクナツプシユタイン艦隊の間を見出し、解体することに成功した。見る間に崩壊へ導く。

「戦艦ウールヴールン撃沈！ 司令部は脱出した模様なるも、クナツプシユタイン艦隊壊滅しつつあり！」

「戦艦シンドウリ撃沈！ ブラウヒツチ提督の安否は不明！」

次々と悲報が総旗艦ブリュンヒルトに届けられる。

ラインハルトが暗い表情に変わっていく。

「さすがにヤン・ウエンリーだ。奇策を用いる必要がなくなれば堂々とした布陣で迫ってくる」

普通の相手であればラインハルトはいくらでも隙を見出して逆転できる自信がある。実際そうなるだろう。

しかし、今の相手は普通ではない。

魔術師ヤン・ウエンリー、どこにも隙が無く、逆転できる手が見つけられない。

「ここまでか。俺はここまでだったのか。奴に負け、逃げねばならんとは。この先征服を成し遂げてでも負けた事実は永遠に変わることがない。何が覇王か。奴の方は英雄として記憶に残り、逆に俺は宇宙を支配する資格を問われ続けることになるだろう」

今、黄金の覇王が目を落とし、自嘲に染まっている。

## 第二百二十三話 490年 4月 決戦！ ガンダルヴァ

## 〈決断〉

ヤンの方ではやつと正攻法で勝機を見出している。

反復攻撃で相手に充分損害を与えたら、再び狙いすまして白い艦を指す。

ただしヤンは最後の難関があるのを理解していた。

あの白い艦は尋常ではないシールドを持っている。それはこれまでの戦いで流れ弾を受けても小揺るぎもなかったことで明らかだ。

さすがにラインハルトの乗る帝国軍の総旗艦であり、かけられたコストと技術は天井がないのだろう。おそらく、通常よりもはるかに高出力のエンジンと、高効率のジェネレーターを持っていると推定される。その特別仕様が強力なシールドを発生しているのだ。

通常の砲撃ではなかなか沈めることができず、それこそ囲んでの袋叩きが必要だろう。だが単純に隙を狙った突進ではそういう状態を作れない。白い艦も高速で動けるのだし、また周りから次々と邪魔が入るに決まっている。

だからといって帝国軍を全滅させることが無理なものも自明だ。そんなことは途方もない損害と引き換えになることで、ヤンは選択肢には入らない。

だが、ヤンは一つの解答を出していたのだ。

宇宙艦にはこのところ目立った技術革新はなく、停滞期ともいえる。

それはやはり帝国の体制下では人が軽んじられ、高度な科学を使うよりも人を使い捨てる方が楽だからだ。そういう状態では全体的な科学の進展が止まってしまう。必要は発明の母なのである。

そして軍事技術というものは総合的な科学技術レベルの上に乗っているものであり、全体が停滞すれば必然的に軍事技術も発展しない。

それは社会全体が縮小、衰退にある自由惑星同盟でも同じようなものだった。

だがもちろん過去には目覚ましい発展があった。

その好例が艦の攻撃法と防御法である。

初期の宇宙艦同士の戦いにおいて、攻撃はレーザーなどの光線が主力だった。それに対する防御は基本鏡面反射で対応する。そこにマスキングのための煙のようなものを併用する。そういった防御は比較的容易いもので、間もなく光線による攻撃は効果が薄くなり、そうなれば用いられることもなくなつた。



代わって攻撃に粒子ビーム砲が用いられる時代が続いた。しかしこれも強力な磁場で粒子を屈曲させるシールドの発達と共に使われなくなっていく。

そして今の攻撃法の主力は電磁レールガンによって加速されるウラン弾である。実体質量があるため、シールドの反発力に優って貫くことができる。

砲撃以外にミサイルも使われないことはないが、艦の高出力核融合反応炉と超高速レールガンの発達に伴って出番が減っている。

ミサイルはどうしても原理的に初速度が遅い。そのため宇宙では超短距離戦の武器である。あるいは要塞などの動かない目標への攻撃に限って用いられる。もしくは惑星の濃密な大気圏で、レールガンでは速度が減衰してしまう場合に使われるが、いずれにせよ主役ではない。

それにミサイルのような破裂弾が必ずしも優位ということではなく、レールガン的高速弾は当たれば運動エネルギーが爆発的に波及して広範囲を破壊でき、破裂弾と大して変わらないからだ。

唯一の例外がある。

イゼルローン要塞やガイエスブルク要塞の主砲はX線レーザーである。要塞の超大型反応炉から生み出される巨大エネルギーを使えば、そこから作られるレーザーは圧倒的に防御不能だ。その威力は問答無用で艦隊を蒸発させられる。

それだけが理由ではない。レーザーならば質量弾は必要ないというメリットがある。万が一要塞の補給を長期に渡って断たれる戦術を実行されたとしても、少なくとも主砲は問題なく使い続けられることになる。

「強襲揚陸艇イストリア発進準備、シエーンコップ、用意はいいかい？」  
「いつでも、ヤン提督。」

そしてヤンはブリュンヒルトを斃すのに強襲揚陸艇を使うつもりでいた。

これこそが長年に渡る戦争の中で発展してきた攻撃法なのだ。

移乗攻撃とは太古の海戦のようでなんとも古めかしい戦法なのだが、実は現状の宇宙戦では意外なことに最適解なのだ。

強襲揚陸艇ほどの質量があればシールドの反発力を無視し、接舷できる。

そして単なるミサイルと違うのはそこに至る最適コースを自在に選んで進むところにある。また、ジャミング、熱源フレア、デコイなどというものに惑わされることがない。ミサイルの光学認識さえ欺く三次元ホログラムを使われても問題ない。確実に仕留めるならこれが一番だ。

むろん、強襲揚陸艇を先に砲撃で撃沈されればどうしようもない。ところが強襲揚陸艇のシールドは前面だけにしか張らないことと引き換えに強力なものになっている。

そのため横合いからの攻撃には弱い、標的艦からの弾幕にはめつたに墜とされること  
がない。

そしていったん接舷に成功すればこっちのものである。手練れが移乗すれば制圧は  
容易だ。むろん時間もかかり、同時多数の戦いには向かないが、タイミングをしっかりと  
合わせれば必殺の攻撃ができる。

宇宙艦隊でも肉弾戦部隊が配備されているのは非常に合理的な理由があるのだ。

ヤンは今、同盟最強白兵戦部隊に大仕事を任せようとしている。

このガンダルヴァ会戦の少し前のことになる。

イゼルローン回廊から同盟領に入ったキルヒアイスの艦隊は想定よりも進行が遅れ  
ていた。

帝国軍が航路を掴んでいた範囲ならば問題なかった。しかしそれを越えて深く進む  
と、やはり航路図の不備が問題になる。それに加えて、イゼルローン回廊から首都星ハ  
イネセンに至る随所に同盟側のトラップも存在したのだ。むろん、同盟軍が従来から帝  
国軍の侵攻ルートと想定していたため、準備していたものである。それらがここでよ  
うやく有効に働く時がきた。

暗号を入れないと作動しない航路標識、逆に暗号がないと解除できない機雷が存在するのだ。

それでもキルヒアイスの適切な機略はそれらを跳ね除けていく。

結果、ハイネセンまで半分の距離を消化し、ドーリア星域が見える直前まで来ている。その時点で帝国軍シユタインメツツ艦隊敗北のニュースが飛び込んできた。これは実は同盟側の通信を傍受して知ったものだ。しかも軍用ではなく一般回線である。つまり同盟政府としては各星系の士気を維持するためにも同盟側の勝利を喧伝する必要があったのだ。

ともあれそれを知ったキルヒアイスらは驚く。

ワーレンやルツツにもそれは衝撃的だったが、キルヒアイスはもつと深いところで嘆息することになる。

「これは危険です。おそらくヤン・ウエンリーはラインハルト様に決戦を仕掛けるつもりです。その局地戦は下地作りでしょう」

キルヒアイスは瞬時にラインハルトと同じことを思った。

ヤン・ウエンリーはただ戦うのではなく、計略を持って戦う。

ならば同盟を救う起死回生の逆転を狙っている。つまりラインハルトと戦い、斃すつもりでいる。

そして、キルヒアイスはもつと根深い問題を知っている。

「ラインハルト様はそうと分かっているにも挑戦を受けるに違いありません」

ラインハルトはやはりヤン・ウエンリーの挑戦を受け、戦うだろう。

性格上自明のことだ。

戦略で宇宙統一を成し遂げるだけでは収まらず、ヤン・ウエンリーと雌雄を決する戦いをラインハルトの方から望んでいる限り。

そして考慮すべきことがある。

艦隊戦においては、よほどの圧勝でもなければ全く安全とはいえないのだ。戦場では完璧に安全な場所などない。偶然の流れ弾が艦の最も脆弱なところに当たってしまうことがあり得る。

だからこそラインハルトが戦場にいることだけで将兵たちは奮い立つ理由にもなる。自分も危険を顧みず敵に立ち向かうということだからだ。

キルヒアイスとしては懸念せざるを得ない。

相手がヤン・ウエンリーとは、これまでにない強敵である。

そもそもヤン・ウエンリーは勝算がなければ戦わない人間であり、そのため戦うこと

になるなら帝国軍がワンサイドゲームになることは有り得ず、いずれにせよ激戦になる。

ラインハルトが危険だ。もちろんキルヒアイスはラインハルトが戦いの天才であり、比類なき強さを持つことを疑っていない。ブリュンヒルトが圧倒的に防御力に優れていることも知っている。通常の戦いなら心配することはないだろう。だが今回だけは確証が持てない。

そしてキルヒアイスにとってはアンネローゼとラインハルト、この二人は自分の命よりも大事なのだ。それより優先すべき何もものも存在しない。比較すれば宇宙統一などどうでもいいことで、論ずるまでもない。

これが客観的に見た場合、キルヒアイスの唯一の弱点でもある。

ラインハルトの危険を知りながら見逃し、当初の戦略をそのまま維持する選択肢はない。

キルヒアイスは決断し、直ちに皆に伝える。

「心苦しいことですが、戦略の変更をいたします。下策だとは重々存じていますが艦隊をここで二分します」

これには誰も反対しない。

確かに戦力の分散は愚策中の愚策だが、キルヒアイスの意図がおぼろげながら分かるからである。

「わたくしはこの旗艦バルバロッサと、とにかく高速で動ける巡航艦と小型戦艦だけを率い、急ぎラインハルト様の救援に向かいます」

「分かりました閣下。鈍足の空母や、航続距離の短い艦は使わない、ということでしょうか。しかしそれなら、たぶん一万隻にもなりますまい。それを指揮されるということでしょうか。そして、それ以外の残された艦はどうすれば」

そう尋ねたのはルッツだ。当然の疑問である。

「その数で充分です。残された艦でハイネセンを突く作戦はそのまま継続します。オーベルシュタイン大将、ワーレン中将、ルッツ中将にお任せします。実行は十分に可能と考えます。それほど強い戦力は敵に残されていないでしょう」

そしてキルヒアイスは一万隻を率いて進発した。

とにかく急ぐ。その一万隻から脱落する艦が出てくるのは予想の内だ。エンジンに無理な出力を出させれば、途中でトラブルを起こして行動不能になる艦もあるだろう。また物資の輸送艦は連れていけない。そういった脱落艦から物資と人員を移し替えるのが前提である。

キルヒアイスの見込みでは半分残ればよしと思っていたが、八千隻足らずは行動を共にできた。

それがついにガンダルヴァの戦場に到着する。

「右舷方向に新たな艦影発見！ 急速接近中！」

「今度は何だ。迅速に報告せよ」

ブリュンヒルトのオペレーターの叫びに、ラインハルトは苛立ちを隠して命じた。

ここでまた敵に増援が来れば、いつそう戦況は悪化し、離脱すらできなくなる恐れがある。

だが、一瞬後に無上の吉報だと判明する。

「詳細判明、先ほどの艦影は味方、帝国艦隊です！ 総艦艇数約八千隻！」

「そうか、おそらくミッターマイヤーだろうな」

「い、いえ、旗艦の艦型は、バルバロッサ！」

「な、何！ そんなはずはない！ バルバロッサであればキルヒアイスではないか！」

「そうです、間違いありません！ 暗号コード受信、キルヒアイス提督のもんです。あ、只今音声通信が入りました。」



ラインハルトはこの状況でキルヒアイスが来たことについて心から喜びはしたが、口調はいたって渋いものだった。

「ジークフリード・キルヒアイス、到着しました。ラインハルト様」

「キルヒアイス、そちらの艦隊はどうなった。敵の首都星を突くべき艦隊ではないか。戦略とは簡単に変えていいものではない。俺のために戦略をこんなところで投げ捨ててほしくはない」

「申しわけありません、ラインハルト様。お叱りは後でいかようにも。ですが他の提督方は残してきました。三万隻以上があれば敵首都星攻略に特に差し支えないと存じます」

「それはそうだろうが、俺は来いと言った覚えはないぞ」

ラインハルトはキルヒアイスのことなど分かっている。

心配して駆けつけた、単純にそうなのだ。戦略もなにもない。

それは遠い幼年学校の日からいつも同じだった。

「ラインハルト様、大丈夫ですか？」

いつでもキルヒアイスはそうなのだ。

ラインハルトが学友の挑発に乗って喧嘩を始める。たいていは勝つが、時には相手の

数に押されてピンチになる時もある。いかに無謀でもラインハルトは喧嘩から逃げない。そんな時に必ずキルヒアイスが駆けつけて、加勢に入るのだ。

そうすればラインハルトとキルヒアイスは無敵だ。二人が共にいれば喧嘩で百戦百勝だった。

今もまた、キルヒアイスがピンチに駆けつけてきた。

「昔と変わらないな、キルヒアイス」

「そうです、ラインハルト様。昔から喧嘩は二人でするものだったではありませんか」

キルヒアイスの方もラインハルトのことは分かっている。

同じように幼年学校のことを思い返したのだろう。

そんなことを話しているうちに、ラインハルトの内心に喜びが溢れてしまう。いつまでも依怙地にはなれない。

キルヒアイスが来たからにはいつまでも渋面でいる方が無理なのである。

ついラインハルトは笑みをこぼした。

「キルヒアイス、お前が来たんだ。もう喧嘩に負けることはない。さっさと勝って、昔のようにアップルパイでも食べるとしよう。ここに姉上のものはあるはずもないが、補給物資にそれくらいあるだろう」



## 第二百二十四話 490年 4月 決戦! ガンダルヴァ

## 手に入れた勝利

「ラインハルト様、おそらくシュタインメッツ艦隊の敗北はミッターマイヤー提督などもご存知でしょう。しかし、その時点ですぐにここへ向かわなければ間に合わないと思われませう」

「確かにそうだ。ミッターマイヤーやビツテンフェルトには会戦が始まってから命令を通達したが、間に合うことはないだろう。キルヒアイス、お前のように命令もなく動きださない限り」

やはりキルヒアイスの危惧した通りだった。

ラインハルトは少なくとも戦い初めはヤンと自らの対決を望んだ。それで勝てば矜持が最大限満たされるはずだからだ。

本当ならヤン・ウエンリーを包み込んで叩くため、例えば命令がなくても定期的にミッターマイヤーを戻らせるといった方策を立てるべきだった。しかしラインハルトはそうしていない。

「俺の油断だ。ヤン・ウエンリーの攻勢はそれほど鋭かった。だが、必ず勝つてみせる、キルヒアイス」

むろん帝国軍に応援が入ったことをヤンの方でも察知している。それもキルヒアイスという恐るべき将が。

「やれやれ、今度は向こうに応援か。八千隻とは困ったな。良いことばかり続くはずはないが、なかなか思った通りにはいかないものだ。その対応も考えなくちゃいけないなんて」

しかし、さすがにヤンである。

ここで諦めるという選択肢はなく直ちに対応する方策を立てていく。慌てることななく戦況を分析し、最適解を導いていくのだ。その冷静さもまたヤンの真骨頂である。

「急いで砲戦用意だ。向こうは最初に救援を企図し、強襲してくるだろうから。そして艦隊編成を見たところ、大型戦艦は含まれていない。たぶん強行軍のため、速度の遅い艦は連れてこれなかったんだだろうな。こちらとしてはそこが付け目になる。前面に戦艦を並べて迎撃すればいいんだ。そうすれば砲の射程でも威力でも格段に優位に立てる。少なくとも持ちこたえることはできる。そしてこちらとすれば撃滅までする必要はなく、あの白い艦を斃すまで時間を稼げばいいだけなのだから」

同盟軍は今こそ横合いからやってきたキルヒアイスの応援艦隊も跳ね除け、勝利を掴み取らなくてはならない。

そしてまだ全体の戦況は悪くないのだ。

もう少し帝国軍本隊を崩せれば、白い艦が見えるところに来る。

そしてヤンの慧眼は艦隊編成の偏りを見抜き、その対応策が同盟艦隊の共有するところとなり、応援艦隊を食い止めにかかる。

だが戦闘は思わぬ様相を呈する。

「帝国の応援艦隊、撃つてきます！ まだ有効射程ではありません！」

そのオペレーターの声にヤンの側にいたフレデリカが不思議がる。もちろんヒューベリオン艦橋の皆がそんなのだが、この場にアッテンボローがおらず、ヤンに聞けるのはフレデリカしかない。そういう空気も読んでフレデリカが問うたのだ。

「どういうことでしょうか、ヤン提督」

「分からない。応援艦隊の将はキルヒアイス上級大将と判明している。その力量は高く、砲戦の間合いを無視するはずはないんだが」

「敵の砲撃、ますます熾烈になります！ ただしこちらに損害なし」

「いったいこれは…… あ、そうか分かった！ これはただの目くらましだ！ この中

を突入してくる艦があるんだ。そうに違いない」

ヒューベリオンの艦橋は驚きに包まれる。

ヤンの洞察力が常識外れの結論を出したからだ。

無駄撃ちと分かっている乱射を援護にして、突入を図ることはそう珍しい戦術ではない。

ただしそれはあくまで射線から外れたところから突入してくるはずだ。それは当たり前のことである。

仮に熾烈な味方の砲撃の中をやって来るとすれば、確かに探知に引っ掛からないだろう。しかしそれは命知らずといって過言ではなく、味方の流れ弾に当たる可能性があるからだ。

しかもそれは敵の弾よりもっと恐ろしい。

なぜなら艦の後方には当然エンジンノズルがあり、そこにシールドを張っているはずがない！

そのため後ろから一発でも当たれば瞬時に爆散である。それでもやる覚悟が見えたのだ。

ヤンの洞察が正しかったと間もなく判明する。

「敵の小艦隊、砲火の中をこちらに向かって突っ込んできますー!」

「やはりか。これはもう接触を防ぐことはできないな。よし、それなら第一第二空戦隊緊急発進! 敵に空母はないんだ。制空権を取って撃退するのは難しくない」

それでもヤンは対応した。またしても相手の弱点を正確に読んで待ち構える。

だが突入スピードはヤンの予想を大きく上回っていた。

キルヒアイスはラインハルトのため、危険かつ困難を極める作戦をやり遂げた。

それはバルバロッサが応援艦隊の後方から発進し、味方の間をすり抜けるという驚くべき奇策を用いたからだ。充分な助走距離をとることで増速し、飛び出していった。

ジークフリード・キルヒアイス、並みの将ではない。

瞬時に戦術を編み出す能力も、その胆力も尋常ではないレベルだ。おまけにバルバロッサは高性能で鳴らした艦である。その他の突入艦も総司令官が先陣を切るのに怖気づくわけにいかない。無茶を承知で突き進む。

最初の驚きから覚めて、ヤン艦隊は指示通り艦載機を出して冷静に待ち構える。

いくら突入してくる艦隊が速く、あつという間に接触をしてきたとしても、艦載機に取りすがられれば為すすべもないだろう。

ところがまたしても驚くことがある。

突入をはたした帝国艦隊は一気に砲火を叩き付けながら、進行方向を変えてあつさり



と離脱したのだ。速度は落としていなので艦載機に取りつかれる前に飛びすきった。

「このやり方は……」

ヤンの恐るべき洞察力はこれからのことを正確に予測した。しかし、それを防ぐ術はない。

帝国の応援艦隊からは次々と小艦隊が出てきては一撃離脱の戦法を取っていく。キルヒアイス麾下にはビューロー、ベルゲングリューン、グリューネマンといった有能な中級指揮官がいて、仕事をきっちりこなしていく。

「なるほど。帝国応援艦隊の目的はこちらの目を引きつけて強引に対処させることにある。もちろん、そのやり方は距離を詰められることから打撃力は比類ないものになり、こちらの大型戦艦でも無傷というわけにいかなくなる。だが、一歩間違えば戦力の逐次投入という愚策にもなる。紙一重だね」

「しかし提督、それをやってきたということは」

「こつちがそれを撃退しようと思えば、一点集中砲火が必要になる。それをするためには一時的に多くの艦を割くことになるだろう。すると残りの艦ではあの白い艦まで突き進むことが不可能になり、向こうとしては救援の目的達成、というわけだ。憎らしい程目的をはつきりさせた戦術だなあ」

キルヒアイスのとったやり方法はヤンの戦力を無理やりにも引き付けて、ラインハ

ルトへの圧力を減らすことである。だからこんなリスクのある戦法を取ったのだ。そしてもちろん、キルヒアイスとしては長いことリスクに晒されることはないという目算があった。

なぜなら、ラインハルトの方は数の圧力さえ減れば直ちに態勢を立て直すだろう。そして逆撃に出るに違いない。

もしそうならばキルヒアイスとラインハルト、二人の息の合った挟撃を展開し、帝国側の勝利は疑いないものになる。

通信を取るまでもなくキルヒアイスもラインハルトもその意図は通じ合っている。

「キルヒアイスめ、なかなかやるな。しかし俺の応援に来ておきながら宿題を押し付けようとは」

だがそれでもだ。

ラインハルトやキルヒアイスが安心するのは早かった。

相手もまた別格の将である。

幾度も逆転勝利を飾ってきた魔術師ヤン、奇跡のヤンなのだ。

「よし、それならば方策はある。こちらは突入してくる部隊をともに相手しなければいいんだ。その突入コースに当たる艦は迎撃ではなく、退避のみ徹底するように。来れ

ば来るだけ退けばいい。もちろん、機雷の散布という嫌がらせは忘れないよう」  
そして最終決断を行なう。

「戦力を集中する。全艦隊で増速、あの白い艦を先に斃す。それでこの戦いを終わらせる。攻勢を最大限強化、各艦、ありつたけ叩きつけるんだ」

同盟艦隊はブリュンヒルトへ向け更に突き進む。キルヒアイスの策に惑わされることなく、戦いの目的を達成するのだ。ヤンの狙いは各艦も理解している。同盟存続のため、ここぞとばかりに気迫の攻撃を叩き付ける。

そしてブリュンヒルトの直掩艦隊は同盟艦隊の大攻勢の前に崩されていく。こちらも必死ではあるが、ヤンの計算と同盟艦の気迫の前に消されつつあった。

「む、さすがにヤン・ウエンリーだ。慌てることもない。そして憎らしいことに優先順位を間違えることもなさそうだ」

ラインハルトは自分に向けて迫りくる同盟艦隊を見て眩く。しだいに同盟艦がブリュンヒルト艦橋のスクリーンに大きく映り、威圧感を伴うまでになる。

「これはいけません！ ラインハルト様が危険です！」

キルヒアイスもヤンの腕の方が早いことを理解した。

バルバロッサ単艦でも駆けつけたところだが、それでも間に合わない。

同盟艦隊はついに目標を捉えた。

ブリュンヒルトへ向け、必殺の手が伸びる。

「今だ。頼んだシェーンコップ。イストリア発進！」

これで黄金の霸王は斃れ、帝国軍は撤退し、同盟は救われる。

ヤンはそう確信した。

しかしここで不思議なことが起こった。

あのブリュンヒルトが逃走どころかするすると前に出てくるではないか。

そして自爆して消えた。

もちろん音はないが、一瞬の輝きの後、盛大な爆散雲を残し影も形もなくなる。

純白の優美な艦が原子あるいは塵に成り果てた。あの技術を極めた艦がいともあつさり。

数瞬の間、敵も味方も、戦場にいる全ての人間が凍り付いた。こんなことが起こり得るはずがない。

帝国軍総旗艦ブリュンヒルトが斃れたのだ。

しかも自爆という形で。

一番先に驚きから覚めたのはヤン・ウエンリーである。

指揮シートに倒れ込んで嘆息する。

「やられた……これをされたらもう勝機はない」

「ヤン提督、どういうことでしょうか！ 帝国軍のローエングラム公がまさか自殺を！

誇り高いゆえに敗北を悟って」

「フレデリカ、そうじゃない。そんなわけはない。あ、それより早くシェーンコップを戻らせてくれ。それと全艦隊に通達、これより直ちに戦場を撤退する。これより敵の全面攻勢が予測されるが、最小限の損失にとどめるため、決して慌てず秩序を保つように、と」

フレデリカの視線によってヤンはまだ説明していないのに気が付いた。

「ああ、ローエングラム公は自殺なんかしないよ。こちらの手を詰んだのさ」

ベレー帽を掴み取り、手をやるせなく下げた。いつもの気の抜けた顔をしている。

「こちらの作戦はあくまでローエングラム公を斃すことにある。戦って勝つことじゃない。帝国艦隊がまだ他に幾つも残っている以上、ここで大損害を出して勝つても何の意味もない。そしてローエングラム公だけを斃すには、あの白い艦を斃すことと同じだった。今まではね。しかしそうではなくなったんだ」

「あ、それでは、ローエングラム公は自爆の前にどこかへ移乗したと。そしてそれがどの艦か分からない以上、ローエングラム公だけを狙うことはできなくなつた、というわけでしょうか」

「その通りだフレデリカ。そしてこちらが帝国艦隊全てを斃すことは事実上できない。だからもうこつちの勝機はなくなつたんだよ」

フレデリカは驚く。

そしてローエングラム公の恐ろしさもヤンの凄さも改めて理解した。

「しかしそれなら、どうして自爆なんかを。囷にして最後までこちらを誤認させる方が有効ではないでしょうか」

「いいや、そうじゃない。もしもこちらの手で白い艦が斃されたりしたら、帝国軍の士気はガタ落ちになることだろう。自爆という方法が敵にも味方にも一番分かり易いメツセージになるんだ」

ヤン艦隊は急な撤退に転じ、その後背に帝国艦隊が迫いすがつてくる。

そのころ、帝国艦隊全てにラインハルトの通信が入っていた。

「ラインハルト・フォン・ローエングラムから全艦に告げる。諸君らも見たように総旗艦ブリュンヒルトは失われた。だが、そんなことは大したことではない！ 敵はもう逃げ

にかかっている。今こそ勝利を掴むのだ！」

帝国艦隊はラインハルトの無事と、ブリュンヒルトの自爆が戦術的な一手であったことを知る。

むろんキルヒアイスにもラインハルトから通信が入っていた。

「お人が悪いですね、ラインハルト様。最初から言つて下さればよろしかったのに」

いつもの微笑みが消えているではないか。キルヒアイスは本当に怒っていた。

それほどまで肝を冷やしたのだ。一瞬でもラインハルトが消える悪夢を見させられた。

だがラインハルトは悪びれもしない。

「お互い様だキルヒアイス。命令もなしに救援に来たお前が悪い。だが俺はお前のおかげで目が覚めたともいえるな。勝利のため、ブリュンヒルトにこだわるべきではないと気付いたのだ。お前が砲火の中を突撃など無茶なことをするのだから、俺も相応の代価を払つて当然だ」

「二つ成長なさいましたか、ラインハルト様」

ラインハルトは多くのこだわりを持つ。

優美かつ高性能のブリュンヒルトもその一つだ。そこから移乗することは考えられない。もしもそういう時は敗死する時だ。ブリュンヒルトを捨てることは有り得ず、そ

れは負けと同じだと。

今まではそう思っていた。

だが、ここで戦っている相手はヤン・ウエンリーだ。そういうこだわりを捨て、確実に勝利を掴むべきだと考えを変えたのである。そしてその通り、これ以上なく有効な手になった。

帝国艦隊の士気は高く、追撃は鋭かった。

ラインハルトがブリュンヒルトを捨てたことは、霸王が窮地に陥ったというマイナス面ではなく勝利への覚悟と受け取られたからである。

しかしそれでもヤンは撤退を上手にやり遂げた。

フィツシャーも、アツテンボローもファーレンハイトも努力を惜しまず、ウランフ提督もまたさすがの有能さを発揮したのだ。

ガンダルヴァ星域を離脱しながらヤンは疲労と睡眠不足と、落胆のさなかにある。

「頭をかいて、誤魔化すさ」

一方のラインハルトは同じく疲労の極にありながらも深い満足感の中だ。今はメックリリングーと共に戦艦クヴァシルにいる。



ラインハルトが唯一強敵と認めるヤン・ウエンリーを下した。どんなに渴望してきた勝利だったことか。

「ようやく勝てた。今日ばかりはワインを残さず飲み干すとしようか。いや、キルヒアイスと合流してからの方が良いだろう。そうだ、次の旗艦をバルバロッサにすると言ったらどんな顔をするだろうか。それくらいの冗談は言いたいものだ」

こうしてガンダルヴァ会戦は終結した。

帝国軍と同盟軍、まさに死闘だった。

目まぐるしく攻守を変え、ヤン、ラインハルト、キルヒアイスが誰にもマネできない戦術を繰り出しては叩きつけ合った。いったいどれほどの戦術が取捨選択されていたことか。

このガンダルヴァ会戦に参加したのは最終的に帝国軍総数三万一千隻、同盟軍総数二万五千隻である。

結果、撃沈は帝国軍約九千隻、同盟軍約七千隻に及ぶ。

損害は帝国軍の方に多い。

だが、戦場を逃げたのは同盟軍である。しかも目的を達成することもなかった。これをもってガンダルヴァ会戦の勝利者は間違いなく帝国軍といえる。当事者のヤンなど

もそう思っている。

しかし、後世からの評価はもっと複雑である。

戦術では帝国軍の勝利、戦略では同盟軍の勝利、大多数の歴史学者はこう言うことになったのだ。

もしくは戦場では帝国軍の勝利、戦場以外では同盟軍の勝利、そう言い換える者もいた。

それには理由がある。

同時刻、同盟首都ハイネセンで驚くべきことが起こっていたのだ。

## 第二百二十五話 490年 4月 シヴァ星域会戦

イゼルローン方面から侵攻する帝国軍は、キルヒアイスが一万隻と共に抜けても残り  
は歩みを止めない。

敵首都星ハイネセン攻略を諦めたわけではなく、キルヒアイスからそれを託されてい  
たからだ。

多少無理なワープを重ねたため、わずかに脱落する艦がある。

それでも総数二万八千隻、これだけあれば攻略は可能だろう。今はオーベルシュタイ  
ン大将を司令官代理として、ワーレン中将、ルッツ中将が率いている。

やっとドーリア星域を抜け、シヴァ星域近傍に進みつつあった。

むろんすんなりハイネセンまで行けるとは思っていなかったが、その予想は当たるこ  
とになる。

シヴァ星域に同盟艦隊が待ち構えているのを探知した。

しかも相当接近されてしまっている。

「やはり、このあたりで仕掛けるのが敵としても最適解と見たのだ。大変合理的といえる」

オーベルシュタインはいつもの通り感情を表わさない。

淡々とした感想を述べるにとどまった。

「敵艦隊総数、約一万三千隻！ 我が方の進路上に位置しています。接触予想時間、あと二時間！」

オーベルシュタインはそのオペレーターの声に動じる気配もなく、軽くうなずくだけだ。

その落ち着き払った態度にワーレン、ルッツの方が驚く。今この三人はワーレン艦隊旗艦サラマンドルの艦橋にいる。

「オーベルシュタイン司令官代理！ いくら予想された事態とはいえ、落ち着いている場合ではないでしょう！ 敵にとつてやはり自領、こちらを早くに探知して待ち構えていたのです。もはや接触まで二時間しかないのでは戦術を検討する猶予もない」

「ワーレンの言う通りだ。敵は我が方の半分以下としてもどんな罠を張っているか知れたものではない。首都星防衛のため必死に妨害にかかるはずだ。司令官代理、時間を空費することなく早急にお決め頂きたい。強行突破か、持久戦か、航路変更か、いずれか

を」

ワーレンもルッツも無能ではない。事態を正確に把握してそう進言する。ただし元からオーベルシュタインと肌が合わず、口調が丁寧でないのは仕方がない。それを自覚していても戦いが間近い興奮でそうなってしまう。

この二人の声を聞いても、オーベルシュタインの表情に一切変化はない。

まるで表情を変える義務などないと言いたげだ。そして驚くべきことを言う。

「卿らの考えは理解する。ただし小官は艦隊戦について口を出すことはしない。お二方で戦いを進めていい。これは敵の最後の抵抗であり、さほどの戦力ではないと予想するが、それについても卿らの判断に任せるとしよう」

「な、何ですと！ 艦隊戦を任せると仰られても」

オーベルシュタインの言葉に、ワーレンは思わず丸投げするののか、と言いかけた。仮にも司令官代理という立場なのに。

会戦が始まるという事態へあまりに関心が薄すぎる。

「では司令官代理、お言葉通り我らは我らの考えで戦わせてもらう。そう受け取りましたがよろしいですか！」

ルッツはワーレンより少しばかり気が短い。

若干棘のある言い方を残し、憤然とサラマンドルを退去しようとする。自分の乗艦スキールニルに移るためだ。

「二人で戦おう、ワーレン。俺はひとまずスキールニルに戻るぞ」

その姿をオーベルシュタインはもう見てもいない。副官フェルナーを伴い艦橋から出て行こうとしている。

「ではいったん自室に戻って政務の続きを行なっている。時間が惜しい。統治に関して今から考えるべきことはいくらでもある。何か誤解をしているようだが、会戦に関心がないのではなく、卿らの実力を推し量った結果に過ぎない。ワーレン中将、戦いの報告はあまり細かいのは必要ない。終わってから簡潔に願います」

一方、ここで迎撃すべく待ち構える同盟艦隊はもう同盟軍として出せる最後の艦隊である。本来ならバーラト星系付近を管区とする第一艦隊だ。文字通りこれが最終戦力となる。

第一艦隊はこれまで外征に出ることはほとんどなかった。だが、他の同盟艦隊が傷つくと共に徐々に戦艦や空母を放出し、残ったのは老朽艦や小型艦ばかりになってしまっている。今ではとても一個艦隊の体裁はない。だがそこへ警備艇や各星系の独自戦力をかき集め、なんとか数ばかりは揃えた。

「では出立する。ドーソン大将、後は頼む。」

「了解しました、クブルスリー本部長。しかし、本部長がわざわざ迎撃に赴かないでもよろしいのでは」

「帝国軍はドーリア星域を通過するところまで来ている。シヴァまで来られたらもう同盟中枢部の玄関口だ。先手を取るという意味でも今仕掛けた方がいい。それにあの宙域は戦いに適している。それとドーソン君、忘れていたようだが第一艦隊は私の艦隊だよ。長く連れ添った古女房のようなものだ。私が最後まで付き合わなくてどうする」

クブルスリー本部長はむろん艦隊司令官として前線に赴いている時もあった。その当時は攻勢にも守勢にも強い有能な将と見られていた。ハイネセンの統合作戦本部に異動し、艦隊から離れて久しいのだが、それで能力が錆び付いていることはない。本人も改めて気合いを入れている。

「俺からも頼んだ。ドーソン」

「ドワイト、貴様も行くんだな。無事で帰ってこいなんて無粋なことは言わん。せいぜい派手にやることだ。中年組の頑張りをヤン・ウエンリーなんかの青年組に見せつけてやれ」

「そうだな、そうしてやろう。残りの宿題をそつちに押し付けるのも心苦しいが、そこは仕方がないな。諦めてくれよ」

「喜んで押し付けられてやるさ。元から後方組の俺がやることだ。それにドワイト、士官学校では宿題を写させてもらったのは俺の方だから、そのお返しだ」

湿っぽいことは言わない。ハイネセン防衛のための悲壮な戦いに赴くものであろうと。

男の別れはそれで充分だ。

シャトルはクブルスリー本部長兼艦隊司令官、参謀のグリーンヒル大将の二人を乗せ、ハイネセンから飛び立った。

そしてシヴァ星域会戦が始まる。

この戦いは勝敗というものには意味がなく、お互い戦闘目的を達成するためのものだ。

帝国軍にとっては抵抗を破って進むための戦いになる。

同盟軍にとっては継戦能力を奪って撤退させるための戦いである。

「よし、どうせ向こうは寡兵だ。急戦で一気に破るぞ。ルッツ、平行進撃で突破だ」

「分かったワーレン。では俺は進行方向左翼から行く」

帝国軍ではさすがにワーレンとルッツ、ラインハルトに信任された艦隊司令官として充分な力量を持っている。しかもこの二人は平素から仲が良く、呼吸を合わせて連携を



取るのは造作もない。

的確な間合いから砲撃戦を仕掛け、あつという間に優位に立つ。

「敵はずいぶん練度が低いな。一斉砲撃のつもりで撃つてるんだろが微妙にズレている。照準も甘い」

「ワーレン、そう思ったか。俺もだ。しかも奴ら艦列を整えるのにしよつちゆう微調整をしている。おそらく艦隊の形を成したのは最近のことで、乏しい戦力の寄せ集めなのだろう。我らの目をごまかすことはできんぞ」

同盟艦隊が寄せ集めであることを簡単に看破すると、いつそう攻勢を強める。

それに耐えかねたように同盟艦隊前衛が後退を始めた。崩壊寸前でこらえているような姿だ。

「ビューフォート君は、上手にやってくれているようだね」

「本部長、第一段階はうまくいきそうです。前衛は崩壊寸前と見せかけて後退、帝国軍を予定のポイントまで引つ張ってこれるでしょう」

同盟軍の側では、ビューフォート准将は難しいとされる欺瞞の敗走をやり遂げた。寄せ集めで弱いのは本当のことであり、その意味ではよかつたのかもしれない。

ともあれ必殺の罠を張り巡らせた宙域に帝国軍を引きずり込む。

最初に気付いたのはワールン艦隊旗艦サラマンドルのオペレーターだ。

「あ、前方に機雷原あり！」

「む、そうか、これが奴らの罠か。なるほど正面から当たれば敵わぬと見て、策を巡らせて対抗する気だな。全艦、速度を落とし退避を図れ」

「右翼方向にも機雷原発見！ 詳細判明、接触型のです！」

「何？ 敵が機雷原をあちこちに用意するのは分かる。こちらの機動力を封じ、数の差を補うつもりだろう。しかし妙だな。罠ならば艦に寄つて来る追尾型を使いそうなものだが。まあいい。ここはいったん退避だ。何も無理に押し渡ることはない」

多少疑問に思うことがないではないが、やることは一つだ。機雷原を避けて艦隊をまとめる。むろんルッツ艦隊も同様に慎重策を取る。

どちらも無理をして将兵の命を軽んずるような愚かな指揮官ではない。

だが、そこへ同盟艦隊から発進した分艦隊がいくつも襲い掛かってきたではないか。しかもそれは機雷原からだ。

「斜め前方から敵小艦隊接近、数およそ千五百！」

「右舷から同様に小艦隊接近中、数およそ千二百！」

「なんだと!? 機雷原の中を敵がやってくるのか？」

ワーレンもルッツも驚く。

現実を認めないわけにはいかないが理屈が分からない。もちろん素早く迎撃態勢を取るが、思わぬ方向から接近されたこともあつて損傷を受けた艦は少なくない。

その後も小艦隊が色々な方向からやって来てはしつこく出血を強いてくる。追おうとすると機雷原の中に消えるのだ。そして反撃しようにも帝国軍にはもちろん機雷原が邪魔になる。

まるで正規艦隊のゲリラ戦のようなものである。苛々するような戦いぶりだ。

「グリーンヒル君、反復攻撃も見事だな。特にカールセン少将の動きは特筆に値する。もっと早く艦隊司令級にすべきだった」

「本部長、今となつては遅いのですが、同盟軍が以前から実力主義であれば彼のような物が埋もれていることはなく、こんなに弱体化はしなかつたでしょう。残念です」

だがこんな戦いは続かなかつた。

ワーレンもルッツもひとかどの将であり、同盟軍の用いたからくりには気付いた。

「そうか分かつたぞルッツ！ 奴らが通れるのは、機雷原に一目では分からないような抜け道が隠されてあるのだ。接触しても爆発しない機雷を混ぜ込むことによつて。しかもそれは曲がりくねつた道なのだろう。あらかじめその道ができるように設計して

機雷を置いたのだ」

同盟軍の用いた仕掛けは単純なことだった。

だからといって対処は容易ではない。

「なるほどワーレン。だから敵は勝手に動かない接触型の機雷を使った、ということか」  
「そういうことだ。ルッツ。少し考えれば予想できたはずなのだが、このところ勝ち戦が続いて勘が鈍っていたようだ。戦術的にはさほど珍奇とも言えず、過去にいくらかも例があるだろうに」

「しかし、その抜け道を解析するのは無理だ。我らにとつて機雷は見た目では区別がつかん。それまで奴らがどこから出てくるか分からず、しかも我らがその道を追うことはできない。ここは大きく退いて、改めて迂回するか……」

だが、ここで用いられるべき方法がある。

こんな事態を予期してのものではないが、今使えばとても有効だろう。

「ルッツ、ここはあれを使うべきだろう」

「そうか、あれか！ そうすれば一気に機雷原を排除できる。使ってみるか」

ワーレンとルッツは合意し、新たな戦法を取る。

帝国艦隊から特殊な工作艦の群れが出ていった。機雷原の前に到達すると恐るべき仕事を始めていく。

それは大型のゼツフル粒子発生装置だった。しかもゼツフル粒子を移動させられる指向性を付与できるものだ。

帝国軍の特殊兵器、指向性ゼツフル粒子である。

実は敵首都星ハイネセンに防衛要塞群が存在することを既に帝国軍は掴んでいる。そのあらかしの性能も把握している。一個艦隊をも寄せ付けないというのは厄介なしろものだ。

それが嘘ではない証拠に、かつてカストロプ家がほぼ同じようなしろもので惑星の守りに使い、凄まじい防衛力を見せていたではないか。

だからこそ防衛要塞群を排除するための方策を用意した。

それがこれである。衛星軌道上に絞ってゼツフル粒子を分布させ、一気に発火させる。そうすれば局所的な高熱で防衛要塞群をきれいさっぱり除去できるだろう。

それを今、ワーレンとルッツは機雷原除去に使おうとしている。

「ゼツフル粒子発生器にエネルギー注入、発生臨界点へ」

「放出確認。誤差範囲内で濃度上昇」

オペレーターの声聞きながら、ワーレンが指示し、プロセスを進行させる。

「よし、そのまま発生させ続けろ。濃度のチェックを怠るな。所定の濃度に來たら前方へ移動開始だ」

ワーレンはサラマンドルの艦橋から、ルッツもスキルニルから、腕組みをしながらスクリーンを見る。これから予見されることを期待しながら見据えている。

しかし、間もなくオペレーターが驚きの混じった声を叫ぶ。

「ゼツフル粒子、移動しません！ 指向性放射器に異常！」

「何だと!？」

帝国軍の工作艦の中にゼツフル粒子発生装置を積んでいる艦がある。それを同盟艦隊でも察知していたのだ。

カールセン少将が呟いた。

「あの時の苦勞がここで報われるとはな。あの高慢ちきなチビツ子の世話をした甲斐があった。あのあと俺はしばらくメイド司令官と呼ばれたんだ。今思い出しても腹が立つ」

それは以前同盟領内でヘルクスハイマー伯爵の子女を保護をした時の話だ。カールセンは苦手な子守りを強いられ、絵に描いたような帝国貴族の子女にさんざん振り回さ

れたものだ。

同じような意味で、クブルスリーとグリーンヒルの二人も会話している。

「やはり帝国軍は指向性ゼツフル粒子を持つてきていたか。グリーンヒル君、亡命してきたヘルクスハイマー嬢からの情報が役に立ってよかった」

「それもありますが、我が同盟技術部の頑張りのおかげです。指向性放射器を無力化する装置の開発に間に合いました。」

結局、ゼツフル粒子はちつとも移動せず、ただ無意味に放出されるばかりだ。宇宙で拡散を続けていけば薄くなり、発火すらしらない。もちろん機雷原の除去には全く使えない。

ルツツもワーレンも少なからず落胆する。

しかしそれが敵の妨害手段のためと気付くともうこの策に拘ることはない。さつさと諦め、素早く次の行動に出る。

「仕方ないルツツ、一気に機雷原を迂回して奴らを追い詰める」

「よし、それなら二人で時間差を付けながら退路を断つてやるか」

そうと決まればダイナミックな艦隊運動を駆使する。二人はどちらかというところ攻勢に強いタイプだ。ゆっくりと後退しつつあった同盟艦隊に追い付くと、即座に食らいつ

き、確実に打撃を与えていく。  
ここからは帝国軍の強さがストレートに現れる。



## 第二百二十六話 490年 5月 作戦継続

ワーレンとルッツ、二人は迷わず機雷原を迂回し、それぞれ別方向から同盟艦隊へ迫る。

それに対し同盟艦隊は基本的に撤退にかかっている。だが単なる敗走ではなく隙があれば仕掛けるのを忘れない。

「全艦隊、これより撤退戦を行うが、帝国軍に少しでも傷を負わせるのがこの艦隊の任務である。同盟を守るため、この宇宙から消さないため、是が非でも任務を達成する。帝国艦を撃沈までしなくともいい。だが少しでも損傷を増やし、ハイネセン攻略を断念させるのだ。正直に言う。最後尾の負担はこの際甘受する。皆、とても済まない」

クブルスリーはそう告げた。

戦いは勝てない。せめてもの抵抗だけを命じているが、むろんそれは帝国軍に劣らない損害を受けることを前提としている。これから撃沈も戦死も増える一方だろう。

だが、この正直な言葉によって同盟艦の士気は高まる。

愛国心は健在なのだ。

遁走どころか我先にと最後尾に名乗りを上げる。

「こちらミサイル巡航艦サマルカンド、ミサイル半数残存！」

「こちら戦艦クライペダ、我が艦に損傷なく、任務に支障なし！」

そこに悲愴感はなく、あるのは民主主義の誇りと同盟を守る強い意志である。

「本部長、私が最後尾の指揮を務めましょう」

「グリーンヒル君、君の覚悟は分かるが……」

「ビューフォート准将、カールセン少将の分艦隊は帝国軍の輸送艦を狙うのに使うべきです。であれば最後尾の任務、私が適切でしょう」

「そうか、そうだな。だが死ぬなよ。君は娘さんの花嫁姿を見るまで生きる義務がある」  
「娘は、強くなりました。ヤン・ウエンリーのおかげかもしれません」

「そうこうするうちにワールン艦隊が先に同盟艦隊へ襲い掛かってきた。さすがの指揮であり、しかも数の違いはどうにもならない。見る間に同盟側が不利になっていく。」

そんな中において、グリーンヒル大將は味方を逃がしながら帝国に手傷を追わせようと奮戦する。逆撃を仕掛けたり、あるいは仕掛けるフェイントを織り交ぜて奮闘する。急造の第一艦隊の弱点をカバーしつつ任務を達成しようとする辺りはさすがだ。

いったんは凌ぎ切った。もう同盟艦は全体で残り八千隻を割り込んでいる。

だが、そんな満身創痍の状態で今度はルッツ艦隊が迫ってきた。

「艦隊も寄せ集めだろうが、艦ごことに見てさえ防御も攻撃も弱い。脆いな。老朽艦か何かなんだろう。だがこうなつてもうろたえず、逃げるどころか立ち向かつてくる精神力は敵ながら褒めてやりたいくらいだ。更に運用においては見るべきものがある。特に最後尾の艦隊は指揮が上手いな。見事といつていい」

ルッツがそう感想を漏らした。その通り、同盟艦隊は更に数を減らしながらも決定的に崩れることはなく、執拗に応戦してくるのだ。

これに手こずりルッツは瓦解までさせられず、その前に撤退されてしまった。

それは実のところビューフォート准将が命と引き換えに帝国艦隊の輸送艦に多大な被害を与えたからである。

「よし、見えた！ あれが帝国の物資輸送艦だろう。突入する！」

帝国艦隊は物資の重要性を理解している。ワーレンもルッツもそんなことを軽視して目先の勝利を追い求めるような将ではない。護衛は充分に付けたつもりだ。

ただし艦隊戦に入って機動力を行使するようになれば多少護衛が薄くなるのは仕方がない。この場合は機雷原を早く迂回することに気を取られ、艦列が伸びてしまっている。

「皆、ここに最後の奉公だ。民主主義万歳！ 同盟万歳！」

ビューフォート准将はそこを狙った。帝国側の護衛を気迫において上回った。突撃し、輸送艦の列にありつただけの弾薬をぶちまけることができた。

ビューフォートはその後反撃に遭って生還することはなかった。

ここに、地味ではあるが己の使命を全うしようとする勇士が消えた。

引き換えに帝国輸送艦の半数近くが失われた。

それを知るとワーレンもルッツも戦いを手仕舞いにする。どのみち相手を全滅させる必要はないのだ。追い散らし、この宙域を突破できればそれでいい。それよりも物資の方が重要である。

帝国艦隊が攻勢を止め、コンパクトにまとまり出すのを見て取ると、同盟艦隊も一気に戦場を後にする。

シヴァ星域会戦はそれで終わりを告げた。

「敵は必死だった。少ない戦力でこちらを傷つける戦術に徹したのだ」

「してやられたわ。確かにこちらは撃沈こそ少ないが損傷は結構な数になる。しかも物資の半分が失われたとは」

ワーレンもルッツもとうてい艦隊戦で勝利した雰囲気ではない。

事実、どちらかというと帝国軍の方に徒労感が大きい。

逆に同盟ではクブルスリーとグリーンヒルが安堵の溜息をついている。ドワイト・グリーンヒルは奮戦のため乗艦が大破したが、辛くも離脱に成功していたのだ。

「グリーンヒル君、ご苦労。これで向こうに手傷は負わせた。概算だが艦の損傷と補給物資の損失、これを考え併せると希望的観測だが帝国軍の半数は足止めできたらう」

「欲を言えばもつと損傷を増やしたかったことです。しかし、これでハイネセンは救われるでしょうか」

「そう、ハイネセンにはアルテミス之首飾りがある。帝国軍もその情報は掴んでいたのだ。指向性ゼツフル粒子を用意してきたのだろうが、対抗できることは証明された通りだ。アルテミス之首飾りが有効なら、その防御力は艦艇一万隻、いや一万五千隻でも阻止できる。その数まで帝国軍が減っていればハイネセンは攻略されない。ようやく防衛戦の光明が見えてきた」

「本部長、それでこそシヴァで仕掛けた甲斐があつたというものです。この艦隊も尋常でない損害を被り、ビューフオート准将も失われました。訓練も充分でないまま戦った兵たちは、力量はともかくその意気においては誇るべきものでした。多くの人間が命尽きるまで同盟のため精一杯戦つたのです」

「グリーンヒル君、少なくとも生き残った者がそれに意味を持たせ、語り継がねばな」  
同盟第一艦隊は過半数に当たる七千隻もの艦を失っている。

元からの第一艦隊所属の艦は練度が低くなかったのでそこまで撃沈されていない。  
ところが他の急造である艦の多数が失われた。

つまり、この戦いのためにかき集められた巡視艇、警備艇に甚大な被害を被ったのだ。  
もちろん乗員も死んでいる。

そんな星系単位のローカル警備艇には同盟軍を退役してから入った者が多い。

むろん定年を迎えた老兵が、やはり宇宙の仕事を求めて入った場合もある。だが一番  
多いのはこれまでの艦隊戦で負傷した者が入っているパターンである。

同盟軍は前線での負傷兵に対し、当たり前だが放り出すことはせず、後方勤務に移る  
という道を用意している。名誉の負傷なのだ。それに応えるのは当然である。

だがずっと戦闘艦乗りでやってきた者にはそれなりの矜持がある。後方勤務で良し  
とはならない。それより退役してまた宇宙に戻り、星系警備に移ることを選ぶ。正規の  
同盟軍よりも星系警備は傷病に対する基準が緩いからだ。力仕事はできなくとも、経験  
と勘を生かして貢献するために。

それらの者たちは今回の戦いに加わるに当たって意気軒高だ。

誰もが恐れるどころか戦いに高揚している。帝国と戦い、もう一花咲かせる機会を与

えられた。

警備艇自体が本格的な艦隊戦に耐えられないものであっても、嘘の申告をしてまでこの戦いに参加してきた。中にはシールドのジェネレーターが最初から壊れているものまであったという話だ。

「死に損ないが役に立てるとは。帝国艦隊とまた戦えるなんて最高だな！」

「俺は第十二艦隊の生き残りだ。女性兵の護衛で残ってしまった。ここでやらなきゃポロデイン提督に合わせる顔がない」

それは相手となる帝国軍が精強で数が多いと知っていても変わらない。

同盟側が寄せ集めで最初から敗色濃厚と分かっているにも動ずることはない。小艦隊で大艦隊に挑み、損害を与えようとするのは始める前から大変な重圧がかかる。

だがそれをものともせず、それら無名の元傷病兵たちは文字通り残された命の限りを尽くすのだ。

最後は自分の信ずるもののため、見事に散っていった。今度こそ命を使い果たした。

愛した人、愛した国家、愛した信条、それを守る心が何にも勝つたのだ。

グリーンヒル大将が言ったのはそれらの者たちへの哀悼である。

それこそが同盟の底力である。

彼らの尊い犠牲は無駄に終わっていない。

首都星ハイネセンにあるアルテミスの首飾り、それで食い止められる程度にまで帝国艦隊へ傷を負わせたつもりだ。

会戦終了後、ワーレンとルッツはオーベルシュタインの自室に赴く。

もちろん艦隊戦の報告をするためだ。

二人とも気が重い。

むろん戦いには勝った。しかしこれは戦力を考えたら当たり前だ。しかし損傷艦を予想以上に出し、補給物資も多く失われた。一言でいえば不味い戦いをしてしまったのだ。もちろん二人はごまかすつもりは微塵もなく、そのため正直に報告する。

「オーベルシュタイン司令官代理、敵の妨害を跳ね除け、甚大な被害を与えつつ星域を突破しました。しかしながらこちらにも少なくない損害を被ってしまい、言い訳もできません。撃沈こそ二千隻にとどまったものの、損傷艦は一万五千隻にも及びます。応急修理で作戦継続可能なものはせいぜいその半数程度でしょう。加えて輸送艦もほぼ半数が失われ、回収可能分を考えても補給物資の四割は失われたことになりました」

「ワーレンの言う通り。敵は犠牲を厭わず足止めにかかりました。うまく乗せられ損害



を増やしたことはこの身に責があります」

だがオーベルシュタインはそれに対しても無表情のままだ。

報告された損害に対し激昂することもなく、逆にねぎらうこともない。

「報告は分かった。卿ら二人は特筆すべきことはないが順当に戦いを行なったということになる。敵には後がなく、奮戦も当たり前である。しかし卿らの実力もまた本物であった。結果は期待以上でも以下でもなく完全に予想の範囲内である。その意味では満足している」

「司令官代理、我らの実力についてそう仰っていただけるのはありがたいと思いますが、痛い損害を被ったのは事実、こうなった上は新たに方針を定めませんと……」

ルッツやワーレンは知っている。敵首都星ハイネセンまでもう少し道のりがある。

この残存艦数では正直不安だ。

新たに方針というのは、援軍を要請するか、あるいは後退するかの話である。

「卿らの考えは理解するが、方針についてはいささかも変更はない。もう一度言うが戦いの結果は予想の範囲内である。艦艇数についてもここから先の作戦行動に使える物は計算すると約二万隻という報告ではあるが、無理をせず損傷した艦は全て置いていく。一万四千隻まで絞り込むとしよう。これによって補給物資の損害に見合った数になり、実に都合がよい」

この返答には驚かざるを得ない！

むろん、作戦中止と確信していたわけではない。だが、オーベルシュタイン司令官代理は何の躊躇もなく平然と継続を明言したのだ。

ワーレンは慌てて疑問を投げかける。

「司令官代理、一万四千隻で遂行すると仰られるのか！ 敵首都星攻略をその数で成すと」

ルッツはもつと具体的に深刻さを指摘する。

「今回の戦いで指向性ゼツフル粒子が使えないことが判明してしまった。悔しいが向こうには対抗兵器がある。必然的に敵首都星の防衛要塞を排除できないということだ。一万四千の艦隊では、もう攻略は困難と言わざるをえん」

「私は卿らの功績の中で最たるものを指摘するのを忘れていたようだ。敵が指向性ゼツフル粒子への対抗手段を持っていると判明したことは大きな収穫である。この時点で分かったことは非常に助けになる」

「ならばどうして！ 司令官代理！ 我らの功績などどうでもいいことです。それよりも防衛要塞の排除が不可能になっても作戦継続とはどういうことか、その根拠をお示し

頂きたい！」

オーベルシュタインは二人が詰め寄っても表情を変えず、淡々と言い切る。

「卿らはそんなことを心配していたのか。本来敵首都星の攻略に一万四千隻でさえ過剰戦力と言うべきものだ。指向性ゼツフル粒子が使えなくとも何ら差支えは無い」

## 第二百二十七話 490年 5月 戒厳令

オーベルシュタインは作戦継続を明言し、一万四千隻とワーレンのみを伴いハイネセンへ向かう。

損傷した艦艇はその場に留めて修理を続行をさせ、それが終わった段階でゆっくりキルヒアイス提督へ合流するように命じてある。その任にはルッツが当てられている。

ワーレンは大いなる不安の中にいた。

今の艦隊では敵首都星ハイネセンの防衛要塞を突破できる戦力ではない。

ほとんど無理やり強行突破するつもりなのだろうか。しかし、兵たちの命をすり潰したところで確実に成功するとも限らない。

オーベルシュタイン司令官代理は平然と自分の命まで賭けるのか。キルヒアイス提督から作戦遂行を命じられたため、情勢が変わってもあくまで忠実に。

だがその態度は悲愴感など微塵もなく、そうとばかりも思えない。とにかく不透明だ。

ようやく旅路を終え、ハイネセンを含むバーラト星系に到着しようとする時、オーベルシュタインは不思議な作戦を取った。

いくつもの小艦隊を編成し、指示を与え、まるでばらまくように近隣の星系に派遣したのだ。こちらの狙いは政府中枢のあるハイネセンだけのはずであり、他はどうでもいい。これ以上分散させて何の益があるのか。その行動もまたワーレンには意味不明な行動にしか思えない。

やがてバーラト星系内を航行する。もう同盟艦隊の戦力は枯渇しているので、時折のゲリラ戦を撥ね退けるだけの話だ。

ついに敵首都星ハイネセンが見えてくる。

そしてスクリーンにはハイネセンの周囲に小さな点を取り巻いているのが映っている。やはり衛星軌道上に十二個の防衛要塞群が均等に配置されているとは、事前に得ていた情報は正確のようだ。

そこまで来て、オーベルシュタインがようやくワーレンに指示を出した。

「敵の政府に降伏勧告をする。だがおそらくすんなりとはいくまい。仮にも数百年続いた国家なのだ。すぐに滅亡を決断できないだろう。しかも現実を認められず逃避する者、口ばかり徹底抗戦を叫ぶ者もいるに違いない。口先だけの勇者はどこにでもいるものだ」

「確かに、仰る通りだとは思いますが」

「そのため現実をよりはつきりと認識させる必要があるだろう。敵首都星制圧のため、降下部隊の編成をお願いする、ワーレン提督。もちろん地上戦を拡大するつもりはないが、ピンポイントで制圧するために」

やはり、とワーレンは思った。制圧作戦は継続される。

ここで叫ばなくてはならない。

「オーベルシュタイン司令官代理、敵の政府以上に現実的でないことを仰る。まさか司令官代理はとんでもなく大勢の兵士を犠牲にし、あくまで敵首都星を陥落させ、功績を取るおつもりか。そこまで無茶をするのは何か通常ではない野心があるとしたか思えない、まさかあなたは……」

「そこで言いとどまったのは賢明だ。ワーレン提督。その先を口に出していれば罰さざるを得ないところだった。尋常ならざる野心など卿の妄想の産物に過ぎない。そんな意図はなく、帝国のために作戦を遂行するだけのことだ。ついでに言えば、作戦に無茶なところは何も存在しない」

まさかあなたはここを占拠してローエングラム公に叛旗を……と言いかけたワーレンは胸に留めてよかつたのだ。

しかしながら降下作戦の再考は受け入れられていない。

「で、ですがオーベルシュタイン司令官代理！ あれが目に入りませんか。あの防衛要塞は飾りではありません。得ている情報の通りの性能であれば、戦艦の艦砲よりも強力な砲撃を数十単位で同時に撃てるのです！」

「そのことは当然承知している。」

「この全艦隊をもつて突撃しても降下が可能か…… アウトレンジで一方的に殲滅され、突破前に全て残骸と化すだけになるでしょう。あなたは気が狂われたか！」

「重ねて暴言が過ぎるのではないか、ワーレン提督。艦隊司令官の中でも柔軟な姿勢を見込んで卿を連れてきたつもりなのだが。失望させないように願います。それはともかく今すぐ降下しろというのではなく、準備を命じたはずである。実際の降下はタイミングをみて行う」

「何のタイミングと仰られるか。我らには兵を無駄死にさせない義務がある！」

そこへオーベルシュタインが近くの星系へ派遣した小艦隊が戻ってきたではないか。当初、ワーレンはただでさえ少ない戦力を分散させることが愚策と気付いて戻したのかと思つた。

しかし詳細の見える距離まで来ると、様相がおかしいのが分かる。

何か普通でないことが起きているのだ。

スクリーンを拡大すると、ワーレンは声を失った！

雑多な宇宙船を前面に立て、その後ろから帝国艦が追い立てている。

おそらく逃げれば容赦なく撃つとでも脅かしているのだろう。そして脅かされて連れて来られている宇宙船は警備艇もあれば明らかに民間の通商船もある。それどころか、何と一般の旅客船まで混ざっているではないか！

「司令官代理！ あ、あれはいったい何をしているのですか！」

「ワーレン提督、どういう種類の説明を求めているのだろうか。事実を言えば近隣の星系に小艦隊を急派し、航行中の宇宙船を全て捉え、こうして連れてきている」

「ただの旅客船でもですか！」

「そうだ。別に区別はしていない。戦術の実行上何ら不思議なことはない」

「まさか、これから行う作戦というのは……」

「察しが良くて助かる。そう、あの宇宙船どもを押し立てながらこちらも首都星に降下する。混ざり合った状態で、敵も防衛要塞を使うわけにはいくまい。すなわち防衛要塞はもはや無力化されたと言って過言ではない。損失を出すことなく衛星軌道を突破し、大気圏まで到達できる」

それは、ワーレンにとって最悪の予想が当たったということだ。



まさか敵の国民の命を盾にして防衛要塞を突破するものだとは！

それは警備艇の乗員だけではない。女子供も含めた一般国民を利用しようというのだ。あまりの驚きにワーレンは咄嗟に出る言葉がない。この作戦はやってはならないことだという思いだけが渦巻く。相手を降伏させてもこれからの統治に限りなく汚点が付くのではないか。

いや、それ以前に誇りある武人のやることではない！

「降下を成功させたら政府にもう一度降伏勧告を行う。地上戦に持ち込ませないため、脅しをかける必要があるが、その方法は一任する。ワーレン提督」

だがもうワーレンは喉がからからだ。

「そんな、司令官代理には武人の矜持が無いのか。こんな卑怯な手が許されるはずがないー！」

「卑怯？ 卑怯とはどういうことだろう。自分のヒロイズムに酔い、勝手な騎士道精神のため兵の犠牲を増やすことこそ卑怯ではないのか。兵にとつて死はただの死なのだ。正しい戦い方で死んだから満足だろうというのは傲慢に過ぎる。死にゆく兵にとつては慰めにもならず、正しい戦い方などどうでもいいことだ。単に将帥の精神的満足感と引き換えでしかない」

「いや、それでもやっていい方法と悪い方法がある！」

「合理的な手段があるなら使わぬ法はない。最初から叛徒との戦いにはこのような方法を使えばよかつたのだ。捕虜を取り、戦場に引き立てれば有効な戦術として機能しただろうに。それを下らぬロマンにこだわり実行しないのではそれこそ卑怯というべきだろう。ワーレン提督、ここで犠牲を出すことなく降下作戦を行なう方法が他にあるというなら聞かせてもらいたい」

合理主義の極致だ。

オーベルシュタインのマキャベリズムが最も強く現れ、誰もとらないであろう作戦を行っている。

ワーレンは反対したが、一面では兵を損なわない方法であることも確かである。そのオーベルシュタインの理屈に抗し得ず、結局ワーレンは従う。防衛要塞の方向へ同盟側の宇宙船を無理やり押し立て、その陰から降下していく。

その半日ほど前から同盟軍ドーソン大將はアルテミスの首飾りの制御室にいた。

統合作戦本部から少し離れた山脈に設置されている。山を横に掘り抜いて作られた堅固なシエルターの中だ。

「帝国艦隊一万四千隻、バーラト星系到達！」

「よし、アルテミスの首飾り起動、第一から第十二までの全ての要塞群、反応炉を最大出

力へ。自動プログラム最終チェック開始！」

制御室に設けられた大きなスクリーンにはアルテミスの首飾りの現在状況が表示されている。

幾つものメーターやカウンタがある。その中で最重要のものは反応炉の状況を示すもので、今、それに火が入ったことが分かる。

自由惑星同盟最後の砦、それがようやく目覚めるのだ。

できればそんな日が永遠に訪れないのが理想だった。しかし現実に役に立つ時がある。

「エネルギー充填回路、放射器、シールド、今のうちに徹底的に調べとけ。トラブルがあれば一つも見逃すな。無人の要塞は後からなんともできないのだから。特に指向性ゼツフル粒子無力化装置を念入りにチェックせよ」

直々にドーソンがここにいたのは、臨時ながら同盟軍統合作戦本部の最高位にいらだ。クブルスリーやグリーンヒルはまだシヴァ近傍の補給基地から戻っていない。

今、ドーソンはハイネセンに自分が残されたのは正にこれのためと理解している。

迫りくる敵帝国艦隊一万四千隻だ。よくぞシヴァ星域会戦で第一艦隊はここまで帝国軍を減らしてくれたものだと思う。さぞかし難しい戦いだったろう。第一艦隊の損害は実に六割にもなると聞いている。

しかし、見事にやってくれた。後はアルテミスの首飾りの仕事だ。

一万四千隻を撃退するためには、わずかなミスも許されない。逆にミスをしなければ防衛はギリギリ可能と見込まれる。

アルテミスの首飾りの起動が順調だと分かると、スクリーン片隅に映されていた帝国艦隊の姿を拡大し、それをメインに切り替えさせた。

ドーソンはそのスクリーンを緊張して見上げ、近づく帝国軍を見る。

「あれは何か？」

帝国艦隊との距離が予定の数字になったので要塞のプログラムを攻撃モードに切り換えようとする直前、気付いた。

何かがおかしい。

ドーソンとしては帝国軍は高速戦艦を先頭にして突撃隊形をとるか、あるいは性懲りもなくゼツフル粒子のための工作艦を出してくると予想していた。それが順当だろう。

しかし、そのどちらでもない。

感じた違和感の元をオペレーターに精査させ、驚愕の報告を聞くことになる。

「敵艦隊前方に、小型の艦影多数！ こ、これは……」

オペレーターが伝えた事実をドーソンは直ちに同盟政府に伝える。

自分もシヨックが大きいのが、時間を浪費できない。

事態は急変した。

もはや単純な戦闘の話ではなくなり、高度な政治判断を伴うものになる。それができるのは統合作戦本部ではなく同盟政府だけだ。

じりじりした時間が過ぎ、やがて同盟政府最高評議会議長ヨブ・トリユーニヒトの名で返答が来た。

「市民の犠牲は甘受できない。それを回避することが不可能なら、アルテミス首飾りの使用は許可しない」

ドーソン大将は宙を見つめて脱力した。

アルテミスの首飾りを使えなければ、防衛はもう不可能だ。ハイネセンは陥落したも同然になる。制宙権と制空権を取られれば都市攻撃を受ける恐れがあり、いくら地上戦ではまだ分からないとはいっても犠牲はとどまるところを知らず、その選択肢は全く考えられない。

自由惑星同盟は終わった。

長きに渡って帝国と戦い、強大な武力に抗ってきた。いつか帝国を打倒し、民主主義で宇宙を覆い尽くすことまで夢見ていた。英雄と呼ばれた名将たちや、名もない一般兵

もそれは同じだ。

長く貢献してきた老兵も、あどけない顔の新兵も一緒だ。厳つい顔の鬼下士官も、地道に整備に働く女性兵も同じことだ。

いったいどれほどの人間が同盟のために努力を重ね、最後は命を消したのか。

今、歴史に幕が引かれる。帝国の武力の前に滅び去るのだ。

ただ、ドーソンは一方で安堵もしていた。帝国は人命を盾にするというあまりに卑怯な手を使ったが、逆に同盟政府は旅客船の市民まで犠牲にすることは考えなかったのだ。それがせめてもの同盟の矜持を守る。

その高貴な精神は汚されることなく、滅んでいける。

## 第百二十八話 490年 5月 次の一手

同盟政府は帝国軍がイゼルローン要塞付近に姿を現した頃はまだ余裕があった。

例え四万隻の帝国軍であつても要塞の防衛力と不敗の名将ヤン・ウエンリーがきつと撥ね返してくれると思つていた。

だが帝国軍は強大であり、また用意周到だつた。

裏をかくてあつという間に帝国軍はフェザーンを占領、何とフェザーン回廊から攻め込んできたのだ。約十一万隻でもつて。

それに対し迎撃に出た同盟艦隊はポレヴィト会戦で敗退、阻止に失敗した。

続いてイゼルローン回廊からも帝国軍は侵入し、加速度的に情勢は悪くなる。自由惑星同盟未曾有の危機だ。

頼みの綱のヤン・ウエンリーですらローエングラム公を斃すことはできなかつた。さすがの名将、見事な戦いを見せ、幾度も迫つたが惜しくも叶えられなかつた。このガンダルヴァ会戦の結果膨大な損害を与えることには成功したが、帝国軍全体からすれば一部に過ぎない。

ただし、ヤンが帝国軍本隊に決戦を挑んでくれたおかげで、イゼルローン方面の帝国軍から相当数が引き付けられたことは確かだ。

それは非常に大きな戦略的価値を生む。そこを突いて第一艦隊はシヴァ星域会戦を挑んだ。

結果、なんとかアルテミスの首飾りで防衛できる目算が立っていたというのに。

しかし最後の最後、アルテミスの首飾りは使用できなくなってしまう。

ハイネセンが風前の灯になっている。

統合作戦本部と同盟政府は恐慌状態だ。

同盟最高評議会もまた荒れに荒れていた。誰もが絶望に呻いている。もちろん議員たちは緊急招集され、会議場でこのハイネセン侵攻が逐一報告されている。

だがその中で、議長ヨブ・トリューニヒトが口を開いた。

「軍部の詳細報告によると、帝国艦隊は巡航艦を中心に衛星軌道から更に低空へ降下しつつある。揚陸艇は含まず、おそらく地上要員はまだ投入しないつもりだろうということだ。しかし空爆で都市を簡単に破壊できる戦力であるのは確か。我々は市民から信任された政治家であり、ここで速やかに方針を定める責任がある」

トリューニヒトは議員たちの不安げな顔を眺めて話を続けていく。



「具体的には、徹底抗戦か、即時降伏か、これを選ぶ。帝国艦隊から既に降伏勧告は出されている。これに応じないで交渉を引き延ばすのは難しいだろう。下手に時間をかけると市民の犠牲も降伏もどちらも甘受しなくてはならなくなる」

それを聞いた議員たちもしばらくは声が出ない。しかし、状況はもはや切迫しているのだ。

やっとそれぞれの意見が出始め、話し合いとなる。

「ここで、長く続いた自由惑星同盟が終わるのか。我らの代で終わるなど先人に対して顔向けもできない。」

「だからといって嘆くばかりではいけない。一般市民ならまだしも政治家が現実を見ないわけにいかん。そして民主主義のために市民に死ねとは言えん。玉碎覚悟の地上戦なんか論外だ」

「その通り。市民の犠牲を考えたら、下手に抵抗せず早期降伏しかない。帝国側が焦って空爆など始めてからでは遅い。まことに残念だが」

「いや逆だ。何も抵抗がなければそれこそ帝国に侮られてしまう。そうなれば和約条件が悪くなる。少しでも良い条件を引き出すため、最終的には降伏だとしても地上戦に持ち込む構えを見せることが必要だ。多少の犠牲を覚悟しても」

さすがに皆は政治家だ。

普段、足の引つ張り合いに勤しんでいるのは確かで、政治家としてあまり役に立っていない者も多い。しかしそれは同盟が続くからこそだ。危急存亡の時にはまともな議論もする。

「和約条件？ 形ばかり取り繕つてもどうせ同盟は滅ぶ。多少引き延ばせるかどうかだけさ。それなら市民の犠牲は無意味としか言いようがない」

「そうともいえん。同盟市民が全て農奴にされたらどうする。人口を考えたら有り得んとは思うが、帝国の目論見は分らん。抵抗には意味がある」

「それならばいつそのこと綺麗に掃き清めて出迎えよう。そして這いつくばつて慈悲を請うた方がいい。同盟の精神は内側に秘め、長い年月をかけて時期を待つんだ」

「だから皇帝万歳！と言つていいのか。民主主義がきれいさっぱり消えてなくなる方が早いだろうな。一度消えた精神は何年かかって取り戻せることか」

議論は紛糾するが、やがて即時降伏論が優勢になる。やはり膨大な市民に犠牲を出してまで帝国軍へ抵抗を仕掛けることに怯みがある。

ただし、議員たちに同盟市民への裏切りや、帝国へ自分だけ媚びを売つて立場を保つような者はいなかった。

錯乱したり、火事場泥棒を働く者もない。内心はともかく見た目には政治家として

の責任を取ろうとしている。

それには、帝国軍がアルテムスの首飾りを同盟市民を盾にすることで突破したというのも大きく影響している。

その下劣なやり方に義憤を感じる者が多かったのだ。

その様子を見て、ヨブ・トリューニヒトは満足しながら言葉を繋ぐ。

「我々は最善を尽くす義務がある。そこで私から皆へ一つ重大な提案がある。戦略的に唯一の提案と確信するものだ。私から詳細を話すより、提案を携えてきた人間の口から聞いた方がいいだろうと思いい、先ほどからこの会議場の側に待機させている。そうそう、その人物とは先にハイネセンへ亡命してきた銀河帝国正統政府の重要人物、ミス・ヒルデガルト・フォン・マリンドルフだ」

議員たちが訝しがる中、ヒルダが同盟評議会の会議室に呼ばれる。

同盟の政治家どころか、まだ同盟市民ですらない者が会議に出席し、話すとは異例過ぎる。

だがヒルダはブロンドの短髪をしつかり結び、意志の強い薄灰の瞳をきらめかせて入室してきた。

そして堂々と皆の前に立ち、ヨブ・トリューニヒトの許可を目で確認し、直ぐに話を

始める。

「挨拶や自己紹介は省略させて頂きます。火急のことゆえ。この国の首都星が帝国軍によつて陥落寸前である事実はこの場の全員が共有していると考えます。そして帝国に降伏するか、この惑星に住む全ての人々を巻き込んで戦うか、皆様がその決定をしようとしていることも存じております。ただし、この場でわたくしが申し上げたいのは、それに代わる一つの選択肢です」

「それ以外にあるのか！」

「まさか、降伏と見せかけてテロ行為などと。しかしそれではなおさら報復を生むだけだ！」

「この者はどうせ同盟などどうなつてもいいと思つているんだろう。自分の立場のために同盟を利用するだけだからな」

議員たちが動揺して叫ぶ。

そんな、事態を好転させる手が本当にあるのだろうか。

喧騒を手で制し、トリューニヒトが続きを促す。

「それは話を聞いてから判断すればいい。諸君もその判断力すら失つているわけではないだろう。ミス・マリィンドルフ、その先をどうぞ」

「ありがとうございます。それでは端的に申し上げましょう。その手段とは政府機能はこの首都星から移し、未だ帝国軍の手の届かない範囲に向かわせるということです」

これがヒルダの策である。

同盟の首都星ハイネセンを捨て去る。

それは既存の価値観に縛られていては生まれえない構想だ。

実のところヒルダが最初に考えついたことではない。エカテリーナから生まれた考えだ。フェザンを逃走してもなお諦めないルビンスキー家エカテリーナだからそういう考え方をした。

「もちろん政府を全て、ということとはできません。帝国軍の半包囲にある状況で大規模な脱出は無理でしょう。それに加え、残つてこの惑星の住民に対し責任を取る者も必要です。つまり少数の人間を絞り、それに政府権限を正式に文書化して委託し、いったん帝国の手が及んでいない場所へ逃がすのです。この国の持つ星系は多く、逗留できる場を確保することは充分可能です。いかに帝国軍が大軍といえど、その全てを占拠することは現実的ではありませんので」

これは議員たちにとって衝撃だ。

「単なる逃亡ではないか！」

「そ、それではハイネセンの市民を見捨てることになってしまう」

「このハイネセンこそ同盟の始祖であり同盟そのものだ！ ハイネセンを失えば自由惑星同盟は形骸だ！」

「時間稼ぎにしかならん。どうせ卑劣な帝国軍のことだ。片っ端から殺戮していぶり出すに違いない」

「では皆様にお尋ねいたします。ここで降伏すればどうなることでしょうか。もうこの国は失われるのです。現有の戦力も即刻解体、放棄されます。むろん首都星から退去することが悪あがきに過ぎず、意味がないものになる可能性はあります。しかし今ここで降伏するよりマシではないでしょうか。そして時間稼ぎにも意味が充分あります。まだ情勢は決まっています」

議員たちにもその筋道だった理屈は分かった。確かに同盟は広く、また情勢は確定していない。同盟軍もまだ各地に残存しており、政府機能としてそれを使う権限も残る。

仮に降伏すればあっさり政府命令という形で同盟軍は進んで戦力放棄せざるを得なくなるのだ。

一度は紛糾した意見がそこに集約されようとしている。

ただし、もう一つの問題がある。

誰がハイネセンを脱出するかだ。

それは物理的にも大変危険なことである。そして精神的にも大変な重荷になる。なぜならハイネセンを見捨てたという汚名を着なければならぬからだ。市民は理屈は分かっても、自分の命ばかりを惜しみ、利己主義的に逃げたと思うだろう。それは感情的なもので止めようがないのは火を見るより明らかだ。

それこそが以前ヒルダがトリユーニヒトに突き付けた覚悟、である。いつときでも汚名を受けなくてはならない。それが政治家の使命と引き換えだ。

受け止めたのもやはりヨブ・トリユーニヒトである。

「私が最高評議会議長としてその役を担おうと思う」

「議長、やっぱりあんたはそう言うと思つたよ。大した御仁じゃないか。では私はここに残り、帝国軍に対してとぼける役を演じよう。そして市民に害を及ぼさないように努力するよ。それもまた必要なことだろうからね」

ホアン・ルイがそう言ってトリユーニヒトの意見を肯定する。分かりにくいのがホアンなりにトリユーニヒトへ最大限の謝意を表し、自分は補完する役割に回ろうとしている。

話は決まり、ヨブ・トリユーニヒトはハイネセン脱出の準備をする。

実際に乗る政府シャトルと、目を眩ますための無人の囚が多数用意された。

亡命政府を作れる根拠となる権限委託文書も作られた。

しかし、それらのため二時間だけ時間を使ってしまったのが、取り返しのつかない事態を生んでしまったのだ。



## 第百二十九話 490年 5月 この身は愛に

ヨブ・トリユーニヒトが居住区にいったん戻り、最低限の用意を整えて出てくる。帝  
国軍が迫りくる中、早くシャトルでハイネセンを脱出しなくてはならない。同盟を存続  
させるために。

そんなトリユーニヒトをエリザベートが待ち受けていた。既にハイネセン脱出を聞  
いたからだ。

「済まないオーレリー、私はハイネセンを離れる。いつ戻れるか分からない。そして  
……」

「そして、何でしょう。戻れなくなったら、というお話でしたらもう心は決まっております。  
私はいつまでもお待ち申し上げます」

「違う！ そうじゃない！ 待たなくていいんだ。君は、君の幸せを見つけてほしい。」  
「そんな……」

トリユーニヒトはもう戻れない可能性が大きいと思っている。いや、それは単に戻れな  
いではなく行った先で死ぬということだ。同盟の亡命政権など帝国に見つかればど

うなるかは決まっている。

ここでエリザベートの頬に、トリユーニヒトの右の手の平が添えられた。

真剣ではあるが、とても柔らかい表情だった。

トリユーニヒトの真摯な心が伝わる。自分のことではなく、あくまでエリザベートを気遣うものである。

それが分かってエリザベートに幸せが溢れた。

だが今はこれ以上ゴネることはできない。困らせてはならない。

本当なら付いていきたいのだ。どこまでも。

しかしそれはトリユーニヒトの足手まといになることであり、どうしても言い出すことができない。

「せめて宇宙港までお供します」

話を打ち切つてエリザベートは歩き出す。何かしていないと心に波が立ってどうにもならない。

二人は地上車に乗り、間もなくハイネセン宇宙港に到着した。

だがそこで二人は異様な光景を見ることになる！

何と空港入り口の階段下に装甲車が止まっており、兵士たちが小銃を持って探索しているではないか。むろんトリューニヒトはそんな防備を頼んだ覚えはない。

しかも宇宙港を守っているなら分かるが、そうではないような勤が働いた。

用心のため地上車をやや離れた場所にこっそり置き、二人は徒歩で空港入り口を目指した。

だがそんなことでは見つからないはずがなく、空港に入る直前呼び止められた。

「ヨブ・トリューニヒト議長閣下であらせられますな」

「……そうだが。君は誰かね」

「小官は統合作戦本部ロックウエル少将。さて、確認できたことですし、こちらへご同行頂きたい」

「何？ 私はいから宇宙港に用事がある。用件ならまとめて政府に伝えたまえ」

「要件はあなたにあるのですよ。正確にはあなたの命に、ですが」

そしてあることかロックウエルは腰のホルダーに収まっていたプラスターに手をかけた。脅しであることは明らかだ。

「君はロックウエル少将といったかな。その行動が何のつもりなのか説明を聞いていない」

「説明？ 簡単なことですよ議長。もう帝国軍は目と鼻の先、同盟は終わりだ。ハイネ

センも占領され、血に飢えた帝国軍は何をするか分からない。なにせ百五十年分積もり重なつた恨みがある。当然、同盟軍人など真つ先に血祭りでしょう。少なくとも将官クラスは処刑されるに決まっている」

「そうとも限らんとと思うが。帝国のローエングラム公は敵味方関係なく有能なものを取り立てると聞いている。いや、それは執着といえるほどだとか。かつて敵であつた帝国貴族に与していた将でさえ麾下に加えているそうだ。ならば同盟の将もむやみに殺すはずはない。過剰な心配はよしたまえ」

「それも可能性ですが議長、しかしここで確実に生き残る方法がある。帝国にとつて大きな功績を上げればいい。それはもちろん同盟の中枢部の人間を始末することです。もちろんそれには議長、あなたが一番いい」

「要するに裏切りか。それにはあらゆる意味で同意しかねる。同盟にとつても、私にとつても、むろん君にとつても」

何とロツクウエル少将は自分の命を助けるため、同盟を裏切ろうとしている。評議会議長トリユーニヒトを帝国軍への手土産に使おうというのだ。それがどれだけ有効なのかここで話しても意味がなく、ロツクウエルはそれに取り付かれている。

限りなく卑怯であり、唾棄すべき行動なのは明らかである。

しかし今やらねばならないのは捕まらないことだ。同盟の未来のために。

トリユーニヒトが敢えてロツクウエルの意図を知りながら話をしたのは間を取るためである。

後ろに控えていたエリザベートが旅行カートを水平に振り、充分に遠心力をつけてロツクウエルに叩きつけた。

思わぬ方向からの攻撃にロツクウエルは避けられない。左の脇腹に重いカードを当てられ、横にひっくり返った。右手を腰のブラスターに掛けていたため、受け身を取れず昏倒する。

「ありがとうオーレリー。さあ早く、空港に！裏切り者はおそらく一人じゃない」

二人は空港に駆け込み、発着ゲートを目指す。それを追って幾人もの同盟の軍服を着たものが追ってくる。若手の将校か佐官なのだろう。総勢7、8人にもなる。同盟軍の中にはロツクウエルのように思慮の浅い、卑劣な者がこんなにもいたのだ。

二人はエレベーターを待たず、階段を駆け上る。三階まで上がったところでロビーを走る。

受け付けカウンターを通り過ぎ、チェックゲートが見えてきた。

旅行者は誰もいない。ハイネセンポリスは数時間前から戒厳令が敷かれ、空中に飛び立つのは禁止され、市民は陸路での疎開が肅々と行われている。

しかしそれでも空港職員すらいはないのはおかしい。

その答えは数秒後に得られる。視界の片隅に入ってきたものがある。空港職員をまとめて隅に押し込め、小銃を持って見張っている兵士が一人いたのだ。

「お前ら止まれ！」

走る二人の後ろからそんな声がした。追って来た若手将校たちだろう。

そして撃ってきた！

走っている方向のやや前方だ。これは警告だった。

だが二人は怯まず進み続ける。止まればどのみち殺されるのだ。

「馬鹿者！ 誰が警告しろと言った！ あいつらを撃ち殺せばいいんだ！」

そんな声もする。若手将校の一人がもう一人の者、おそらく部下を怒鳴っている。

たぶん最初に撃ってきたの者は武装もしていない者を無警告で撃つことができなかったのだろうが、それが二人に幸いした。

あともう少しで搭乗ゲートだ。それを過ぎればシャトルの中になる。

後ろから火線が飛んで来たのが分かった。追ってきた者たちはゆとりを失い、とにかくブラスターを撃つことにしたようだ。ひっきりなしに飛んでくる。

トリューニヒトは少しだけ走るのを緩めてエリザベートの後ろに回ろうとした。ブ

ラストからエリザベートを守るため、自分の身を盾に使おうとしていることは考えるまでもない。

「いいえ、そんなことはならさずに」

エリザベートはじんわり胸が熱くなった。

私はこの人を愛してよかった！ 心からそう思う。

結局速度を優先し、並走して走る。

この時トリューニヒトには非常な後悔がある。オーレリーを空港入り口に残しておけば殺されるか、人質に使われるだけだ、そう判断して連れてきたのだが、かえって重大な命の危険に晒されている。とてつもなく悔やまれる判断ミスだった。もしもオーレリーに何かあれば、自分はどうしたらいいだろう。どうやって詫びればいいだろう。

二人はやっと搭乗ゲートまで着いた。ここを越えればわずか数メートルでシャトルにつながる通路に入れる。もう終点だ。

強化樹脂製の扉は閉まっていたが、その横に制御コンソールがある。床から細い柱が立ち昇り、手元の高さで水平にディスプレイが取り付けられているタイプだ。

エリザベートがすぐさまそれに取りついて、ディスプレイをタッチして操作を始める。

早く、ここの扉を開けなくてはならない。

だが追っ手はだいぶ至近まで来ていた。

その分ブラスターも狙いが正確になってきつつある。

扉が開いた。

二人は手を取り合って駆け込む、ようにはならなかった。

エリザベートがトリユーニヒトを扉の向こうにある搭乗通路へ向かって突き飛ばしたのだ。

「オーレリー！ 君は何を…… さあ早く一緒に！」

その時、ブラスターの一撃が後ろからエリザベートに当たる！

背中を中心だった。一瞬、小さく跳ねる。

しかし、エリザベートは何事もなかったかのようにすぐさまコンソールの方へ取り付き、今度は扉を閉める操作を始める。

最初からこうするつもりだった。

扉を閉め、ついでに開ける操作を絶対にできないようにしておかなくてはならない。

そうでなければ追っ手はシャトルにまで入り込み、今度こそトリユーニヒトの逃げ場は



なくなる。逆に開けられなければ扉はブラスターなど貫通しない強度で作られていて、もはや心配ない。

震える指で操作を続け、扉は閉まった。

エリザベートの意図に気付いたトリユーニヒトが、それでも連れて行こうと再び出て来る前、間一髪のところまで間に合った。

エリザベートは小さく咳こむ。

味と苦しさから、血が口から垂れたのが分かる。

ここでトリユーニヒトと扉越しに目が合った。トリユーニヒトの顔は本当に必死な表情だ。

「オーレリー！ こっちに来てくれ！ 一緒に行こう、オーレリー！」

いいえ一人で行って下さい、と言葉には出さず、エリザベートは最後の仕事にとりかかる。

本物の宝石のついた髪留めを引き抜き、それをコンソールのディスプレイに叩きつけるのだ。そうして開閉操作を不能にするつもりだ。

しかし、振りかざした正にその時、いくつものブラスターに狙い撃たれた。

光条がエリザベートの胴体に吸い込まれ、柔らかな内部を破壊する。

手が止まる。

だがそれは一瞬だ。

目には強い意志の光が消えていない。

思いつき振り下ろした拳と髪留めがディスプレイに叩きつけられ、ガシつという音を立てる。

ディスプレイにヒビが入った。

出ていた表示が滅茶苦茶に乱れる。これでもう操作はできない。

その間にもまたブラスターに撃たれる。倒れないエリザベートに業を煮やし、若手将校たちはメツタ撃ちにしてきたのだ。

光条に次々と貫かれ、エリザベートはそのまま膝を折る。

そのまま床に崩れることはなく、ほんのわずか残った力を使い、コンソールに胸を当ててもたれかかる。

この血と体で最後まで妨害し、絶対に扉を開けさせはしない。何がどうあっても。顔を迫ってきた若手将校たちに向け、ありったけの力で睨みつける。

「オーレリー！ オーレリー！！」

ああ、愛する人の声が聞こえる。

最後に一言言おうかと考えた。

私はオーレリーじゃないのよ。エリザベート・フォン・カストロプなのよ。

エリザベートこそ本当の名前、本当の自分である。

エリザベートの名前で一度だけでも呼んでほしい。

意識が混濁していく中、いいえそれもまた違う、と思い返した。

愛する人にとってはオーレリーこそが私なのだ。それでいい、それで構わないと思つた。私はオーレリー。

一方の若手将校たちは驚愕していた。若い女がどんな兵士も真似できないような勇者の振る舞いをしたのだ。痛みを耐え、命を投げ出して目的を遂げようとする。

だがその驚愕は多少の怯えにはなつたが、決して尊敬に変わることはなかつた。

卑劣な若手将校たちはそこまで高尚な精神は持つていない。

エリザベートは別に武器を持つてゐるわけではなく、絶命まで待たなくともコンソールから引きずり下ろせばいい。そう考えた彼らは近寄つてコンソールからエリザベートを蹴り飛ばす。

一度二度は抵抗したが、エリザベートにもう力は残つていない。やがて床に転がる。

そして若手将校たちはエリザベートの胸の下にあつたコンソールを見て呻き声を上げた。

そのディスプレイが完全に壊れていたからだ。ヒビが入っているだけではなかった。更にエリザベートの胸から流れ出た血が染み透っていたのだ。もうタッチ操作はできず、扉は開けられない。シャトルへの搭乗通路にいるトリューニヒトを追う手段はなくなった。

床に崩れたエリザベートはもう虫の息だ。

まもなく死の静寂が意識を消し去る。感じていた激痛も今はなく、体はそれを伝える機能さえ失いつつある。

今考えるのはヨブ・トリューニヒトが無事に逃げられたかどうか、それだけだ。

もう一つ、エリザベートが感じていることがあった。

それは幸せともいえる満足感だ。

以前にも同じように死にかけたことがあった。それは兄マクシミリアンを止めようとした時である。

その時は悲愴なまでの使命感に動かされていたが、決して幸せというものではなかった。

しかし今は幸せだ！

同じく命を投げ打つことでも以前の場合とは全く違う。

この身は愛に使う。

愛する人を生かすため、この命も体も血の一滴までも使った。

これ以上満足なことがあるか。これ以上幸せなことがあるか。

ああ、愛する人よ、一緒に歩けなくて残念です。

しかし私はあなたの未来を信じています。

私はここで終わり、魂になりますが、あなたの幸せを祈っております。

いつまでも、いつまでも……

オーレリーとして、エリザベートとして……

エリザベートはここに絶命した。

過酷な宿命を背負わされ、数奇な運命に翻弄され、だがそれでもまばゆいばかりに純粋な女の生涯だった。

誰にも恥じることはない。

最後まで、真つすぐに歩き切ったのだ。

第三百十話 490年 6月 末路

ヨブ・トリユーニヒトはシャトルへの通路を力なく歩いていった。

オーレリーの最期を見てはいない。

それは彼女の覚悟を無駄にしないためだ。

自分を生かすため、彼女は敢えて死地を選んだ。その美しい心が分かる以上、早くシャトルで飛び立ち、ハイネセンを脱出しなければならぬ。

それが唯一彼女に報いる道なのだ。

「いや、オーレリーが死んだと認めたくないから、最後までいなかっただけかもしれない。きっとそうなのだろうな……」

自嘲の呟きを漏らしながら所定の行動に入る。

シャトルで宇宙に出れば、帝国軍が囷に食いついているうちに素早く高速宇宙艇に乗り換え、バーラト星系を脱出していく。もちろん帝国軍の哨戒網は密であったが、ドーン大將の適切な支援もあるのでギリギリ可能だった。

その後ひとまず目指すのはエリユーセラ星系だ。

エリユーセラ星系はそこその人口があり、同盟の中でも主要星系になっている。ただし目立ち過ぎるほどの大きさではない。いったんそこに潜伏し、ハイネセンでの帝国軍の出方を伺うのだ。

あまり早く亡命政権を喧伝すれば帝国軍をここへ呼び込むだけになり意味がない。

同じ頃、ヒルダと銀河帝国正統政府は別ルートで逃亡していた。こちらは慎重に経路を探りながら最終的にフェザン回廊を目指す構えだ。ヒルダはエカテリーナらと再合流するのが最も良いと判断している。

もちろん再合流したからといってその後の青写真はまだ作れていない。

ただし少なくともフェザンと情勢分析の共有を図る。

もう一つ、ヒルダには仕事がある。

エカテリーナへエリザベートの死を伝えなくてはいけないのだ。

通信でトリユーニヒトからそのことを聞いていた。

「ミス・マリンドルフ、フェザンへ向けての航行と聞いています。お気をつけて。帝国軍は今のところむやみな星系の占拠や分散をしません。途中ばったり出くわさないとも限らない。そこで同盟軍の秘密哨戒コードを教えましょう。哨戒情報を得ら

れば、事前に帝国軍の動きが分かり、より安全に進めます」

「ご親切にありがとうございます。しかし議長、それは軍事的機密情報ではありませんか」

「いや、構いません。個人的なことですが、もうしばらくは人が死ぬのはこりごりです。特に知っている人については」

「誰か、議長の知人が亡くなられたのでしょうか？ とても沈み込んでいるように見受けられますが」

「本当にただの個人的なことです。恋人がハイネセン脱出の際に亡くなりました。卑劣にも同盟を裏切った将校に襲われたのです」

「恋人を？ え、で、ではまさか！ それはフェザーンから来た方のことですか！」  
今度はヒルダが取り乱す。

何気ない会話から驚くべきことを聞いた。もちろん、ヒルダはエリザベートがオーレリーという偽名を使っていて、どういう運命のいたずらかトリューニヒトの恋人になっていると知っている。

こんなところで個人的なことを口にするとは、トリューニヒトもまだまだ冷静な状態からは程遠い。

そのためヒルダの反応が明らかに過剰なことにも気付かない。



「それだけのことです。個人的なことで動揺するとは政治家としてお恥ずかしい」  
「嘘ではないのですか。そんな……」

一つ言えることは、エリザベートの死はトリユーニヒトにとってあまりに大きな衝撃らしい。

そんな様子を見てヒルダはエリザベートの魂に慰めがあることを知った。

このような人のために彼女は散ったのだ。女としてそれは素晴らしい最期ともいえる。

だがトリユーニヒトが見せる悲嘆の列に、確実にもう一人が加わることをヒルダは知っていた。

エカテリーナもどんなにか自責の思いに捉われるだろうか。

一方、ハイネセンで制宙権と制空権を掌握したオーベルシュタインは地上には降り立たず、サラマンドルに留まっている。

付近の軍事基地は空爆で全て破壊した。もちろん下手に防空ミサイルなどを撃たれないためである。それは軍事的デモンストラーションを兼ねて徹底的に行われている。

だが肝心の同盟政府に対する降伏勧告には返答がまだない。

オーベルシュタインはハイネセンに点在している諸都市へ空爆態勢をとらせる。

実際に空爆を敢行するつもりだ。

少しばかりの脅しで済ませる気はない。オーベルシュタインにとって戦争の早期終結こそ目的であり、多少の人命は問題ではない。それが必要経費なら気に病むことはなく、せいぜい復興の障害が増えるだけのことである。

しかしその空爆の実施直前、通信が入った。

「自由惑星同盟人的資源委員長、ホアン・ルイという者だ。帝国艦隊指揮官へ会談を求めたい」

「それは政府代表のものか。そうでなければ話し合いなど意味はない。銀河帝国が興味を持つのは交渉ではなく、降伏か、絶滅か、その返答だけである」

「降伏するかどうかの決定すらままならないのが現状であれば、期待に応えられない。こちらは降伏したくないのではなく、できないのだ」

「不思議なことを言う。よろしい、それではホアンとやら、一時間以内に当艦隊旗艦に来て釈明するがよろしかろう。むろん空爆用意を解くことはない」

オーベルシュタインは大事を取り、地上で会談することなく旗艦サラマンドルにホアン・ルイを呼びつけた。

ところがホアンがサラマンドルに到着する前に帝国軍へ接触を試みてきた者たちがいる。

武装の無いシャトルで上がってきた。その上で、害意がないことを繰り返し通信しながらサラマンドルに近付く。

その応対はワーレンが行った。

シャトルから完全に武装を解除している集団が出て来る。プラスター一つ持っていない。心配した陸戦隊によるテロなどではなく、ワーレンとしても一安心である。ただしその意図を訝しく思うことは変わらない。最初にこの不思議な一団の真意を問いたです。

「その制服を見た所、政治家ではなく軍人、しかも将官級とお見受けする。卿らの意図がどこにあるのか、この帝国軍中将アウグスト・ザムエル・ワーレンが聞こう」

一応丁寧に応対はする。ただし妙に気分が良くない。それはこの者たちが揃いも揃ってまるで媚びたような笑みを浮かべているせいだろうか。

「感謝いたしますワーレン中将。当方は自由惑星同盟軍ロックウエル少将他8名、銀河帝国へいち早く恭順を示す者です。帝国のため我らが行った働きのことをどうかお伝えいたしたく」

「不思議だな…… そちらはまだ正式に降伏していないはずではないか。まあ、帝国へ恭順とは慶事というべきかな。しかし聞き間違いでなければ卿らが帝国のため働いた

と聞こえたが？ 既に働いたとはどういうことだ」

益々ワーレンは訝しく思う。

そして次に想像の範囲外のことを聞き、驚くしかない。

「本当に我らは帝国のお役に立ちました！ 同盟軍通信施設などの破壊を行った上、守備兵を一掃して参りました。そして政府閣僚の少なくとも5人は亡き者にしております。そしてこれぞまさに有用な情報です。今の同盟軍トップのドーソン大将がいる場所はアルテミス首飾りの指揮所なのですが、その位置情報までございます。どうかよしなに扱い下さい」

「な、何!? そんなことを、いったいなぜ！」

「もちろん、帝国のお役に立ちたいと思ひまして」

ワーレンはようやく理解した。

目の前にいる奴らは裏切り者の集団だ。

ワーレンがこれまで戦ってきた者たちは、敵ではあってもあつぱれな精神性を持つていた。その意気に驚かされたことも一度や二度ではない。

しかし、敵の中にも卑劣な者どもが巢食っていたのだ。この亡国の時に醜い本性を現したのだらう。祖国を売り、媚びへつらってくる。

おおかた自分の命の保証でも求めているに違いない。

そしてあわよくば少しの地位を得たいとも思っているのだろうか。自分のため祖国も他者も売り渡し、利を得るつもりだ。

薄汚い。

ワーレンはそうと分かった以上、もう顔も見たくなかった。

一旦下がらせ、オーベルシュタインに報告に行く。

「オーベルシュタイン司令官代理、先ほどの者らは卑劣な裏切り者どもでした。処罰はいかように」

「処罰？ それが必要なことだろうかワーレン提督。何か根拠があれば別だが」

「何ですと!? 祖国を裏切った連中をこのまま置いておくと言われるのか!」

「ワーレン提督、判断する基準としてはあくまでも役に立つか立たないかで決まることではないだろうか。帝国にとり、そういった輩でも手先に使えるなら生かしておいた方がよい。こちらの持つ情報は充分とは言えず、内部事情に詳しい裏切り者を使うことは理にかなっている」

ワーレンの考えでは裏切り者を処罰しないことは考えられない。しかしオーベルシュタインから思いがけなく反対される。しかも合理的理由まで添えられている。

「ですが!! それでも不快感を持つ者は多いでしょう。それは私のみならず帝国軍將兵たち全員がそうです」

「単純に感情の問題に思える。それにその者どもを処刑するにせよ、今すぐ行う必要もない。そこへ民衆の恨みを集め、スケープゴートに利用してから切り捨てるのが最も有用な手段ではないか」

ただしこの頃にはワーレンも少しは学習している。

正義や矜持を言い立ててもオーベルシュタインには通じない。利点が欠点を上回ることを、あくまで筋道を通しながら言わなくては通らない。

逆にそう話すならオーベルシュタインは合理的に判断してくれる。

自分のプライドのために依怙地に意見を押し通すことはなく、前言を撤回するなど意外に柔軟性があるのだ。

「では、こうお考え下さい、司令官代理。そういった裏切り者を処刑し、帝国の清廉さをアピールするのです。それを行なうタイミングは今が最良でしょう。帝国の支配を恐れている今だからこそ最高の宣伝になるのです。感情の問題と仰られましたが、今は感情こそ最も重要な局面ではありませんまいか」

このワーレンの言葉にオーベルシュタインも直ぐには返答しない。

三十秒ほど思慮を重ねてから返した。

「よかろう。それも一つの方法と認めよう。ではワーレン提督、その処罰については任せる」

これで裏切り者たちの運命は決まった。

ワーレンがその者どもへ簡潔に通達する。

「卿らの処分が決まった。上司に対する反逆、殺害、利敵行為、逃亡、このことについて裁かれることになる。もちろん、これはどれをとつても極刑に値する罪状だ」

「え、お、お待ち下さいワーレン中将！ 我らは帝国のために働いたのですぞ！ 正道に立ち返り、帝国に対する罪滅ぼしとして行つたのではありませんか！ それなのに罪などとは—」

「これは個人的な感情に基づくものではない。帝国の法に乗つ取つて決めることだ。甘受してもらおう」

「そ、そんな馬鹿な！ ならば同盟の法に乗つ取り、正式な裁判を！ そうだ、我らは同盟軍人、帝国の法ではなく同盟の法が適用されるべきだ！」

「いい加減に黙れ！ この場で刑を執行してほしいのか。俺だつて感情を抑えるにも限度があるぞ。言つておくが卿らはその祖国を消し去るために動いたのだらう。法だけ自分のために残すとは、少々虫が良すぎる話だと思わないのか！」

なおも見苦しく涙ながらに命乞いをするロックウエル少将らをワーレンは警備兵に命じて下がらせた。

こうしてエリザベートの命を消した者たちは、その罪をきっちり自分の命で償う羽目になる。

ワーレンの言う通り、その処分は帝国の清廉さを表わすのに使われた。ロックウエル少将はいみじくも露ほどには帝国の役に立った。

一連のことについてオーベルシュタインがワーレンに委ねたのは理由がある。

最も重要なことはこれから始まる降伏交渉だ。

その直後に旗艦サラマンドルへ上がってきたホアン評議員がオーベルシュタインに相対した。

「お初にお目にかかる。会えて嬉しい、とは言わんよ。実際嬉しくないからね。そちらが帝国艦隊の指揮官とお見受けするが、まずはハイネセンに対する領空侵犯を問いただきたい」

「戯れ言を。戦争状態にある関係上そんなことを言われる筋合いはない。時間稼ぎが目的ならいくつかの都市の消滅で贖って頂こう」

「時間稼ぎではないさ。どんな時でも正しきことを言うのがこの国の流儀なんだ。ま



あ、帝国では知らんがね」

ホアンには胆力があり、敵艦のただなかにあつても飄々とした姿は変わらない。

「では時間を短縮して聞いてもよいか。単刀直入に聞くが、降伏を受諾するのか、しないのか。明確な返答を期待する」

「それはできないんだ。ここに政府権限が無いから仕方がない。今、同盟という国家として対外的な条約を締結できる人間は、最高評議会の中の一人に定められている。そしてその人物はハイネセンにいない」

「なるほど……そういうことか。その人物の名と行き先を聞いておこう」

「名はヨブ・トリューニヒト、最高評議会議長だ。行き先は本当に知らない。たぶん本人しか知らんよ」

オーベルシュタインは表情を変えない。

ただし内心は大きく落胆していた。

戦略的に後手に回ってしまったからだ。

艦隊をしらみつぶしに各星系に派遣するのは軍事的に悪手だ。

脅しに虐殺するのもまた悪手、一度それを行えば、おそらく各星系がバラバラに崩れるだけで、それこそ一括した降伏を引き出すことができない。

そういう亡国の折には、素早く裏切る者、ただただ狼狽する者、ヒロイズムに酔い現実的ではない抵抗を叫ぶ者、様々出てくるのは自明である。

そこを一括して降伏させなければ、各星系単位で態度が違ふという悪夢になってしまう。そして各星系全てを軍事的に征服するにはとんでもなく時間がかかる。

「帝国艦隊の指揮官、土産もなく会談したとあつては同盟の沽券に関わる。こちらもしは讓歩した印を見せよう」

「あまり意味がないとは思ふが、一応聞いておく。それは何か」

「防衛要塞システム、アルテミスの首飾りの自爆だ。これでハイネセンは艦隊からの防衛が全うできなくなる。まあこれで手を打てなんて無駄なこととは言わんよ。ただしこつちから讓歩したという事実は残るだろうさ。ああそうだ、帝国艦隊への駐留と物資売却も許可しよう。ただしあくまで駐留であるし、物資も後払いでいいが対価を払ってもらいたい。会計も商人もうるさいんでね」

ホアン・ルイもまた狡猾だった。

アルテミスの首飾りが過去のものとして話題にもならなくなる前に、素早く有効活用に転じた。どうせ意味なく破壊されるものなら、先んじて讓歩の形として残すのだ。政治の戦いもまた大事な戦い、互いに手を打ち合つて火花を散らす。

オーベルシュタインはここに至つて、ラインハルトと合流し、戦略の練り直しを図る

ことを考え始めた。

第三百一十一話 490年 6月 フェザーン奪還

一方、チャンスを狙おうとしている人間がいる。

「今だわ。待っていた甲斐があった」

エカテリーナはフェザーン回廊近くの微小な航路に潜んでいる。そこで刻々と変わる情勢を検討し続けている。

帝国軍と同盟軍が事実上の決戦となるガンダルヴァ会戦を行ったことも知っている。

しかもそれは帝国のラインハルトと同盟のヤン・ウエンリーの個人戦とも言えるほど激しい戦術戦になったという。

結果としてヤンの方が内容的に勝っていたのだが、ラインハルトを斃すことはついにかなわず、先に撤退している。

非常に残念なことだ。むろんエカテリーナはこの戦いで同盟を支援する方の側に回っている。フェザーンで修理させていた同盟艦を応援として供出し、側面からできる

だけのことは行っているのだ。

ただしフェザン艦隊を直接ぶつけることは避けている。

ラインハルトの心証を決定的に害すれば以後どのようなことをしようとする帝国の目の敵にされ、必ず潰される可能性がある。

もう一つ、それとは別にやるべきことがあるからだ。

それはフェザン回廊を経由する帝国軍の補給物資輸送船団の撃滅である。

本来なら同盟軍が率先してやるべき補給寸断作戦だが、それをやる力を失っている以上、フェザン艦隊が肩代わりして行う。

むろんこれほど大規模な征旅を行っている帝国軍は輸送船団もひっきりなしに使っている。ただし護衛の関係からある程度大規模にまとめた方が効率がいいのは自明だ。

エカテリーナはここぞという大規模輸送船団を待っていた。

それが今やってきている。

エカテリーナに命じられ、フェザン機動艦隊の両翼の片方であるミューラー艦隊が輸送船団を襲う。

一方の帝国軍としても補給の重要性を充分に理解し、用心を怠ってはいない。今もこの大規模船団の護衛にゾンバルト少将麾下三千隻もの艦隊を付けていた。

だが人選としては良くなかったのだ。

この役目にゾンバルト少将はわざわざ志願して就いている。もちろん小さなことでも功績を上げ、出世に結び付けたいためである。それは明け透けであったが、中級指揮官に経験を積ませるといふ意味もあつて護衛任務が任された。今現在艦隊司令官級をそれに使えないという事情もある。

だがうまいこと護衛任務を勝ち取つたにも関わらずゾンバルト少将は気が緩み、索敵を怠つてしまつている。

そのためただでさえミュラー艦隊の接近を許してしまつた。更に襲撃が分かつてからも反応が遅い。

その上戦術目的を見失つたのが致命的なミスだ。

輸送船の護衛として付いている以上、襲撃を受けたなら物資の中でも優先順位が高い物を選び、いち早く先に送らせるなどの方策をとるべきだったのだ。

どのみち名将だろうと護衛任務の中で奇襲を受けてしまえば、百パーセントを守り切ることは困難である。

結果的にせつかくの護衛三千隻も意味がない。

ゾンバルトは戦術能力に欠け、おまけにその自覚も薄いとはなんとも救われない話である。とうてい敵わない敵勢へがむしやりに砲戦を展開しただけで、無為無策のうちに

輸送船団は全滅させられた。対するフェザーン艦隊のミユラーとしては実に簡単な仕事になった。護衛艦隊に隙を作り出し、そこから無力な輸送船を撃つだけである。

ゾンバルト少将が敗死せずに生き残ったのはミユラーが補給輸送船撃滅という目的を達成すればさっさと立ち去っていったおかげに過ぎない。

ほぼ同時刻、エカテリーナは帝国軍遠征作戦の重要な橋頭保であるウルヴァシーも襲撃させた。

こちらはフェザーンのもう一翼であるアツプルトン中将率いる艦隊が担っている。隠蔽の上にも隠蔽してガンダルヴァ星系ウルヴァシーへ接近し、最後に姿を現す。それにより、ここを守備するよう命じられていた帝国軍ヴァーゲンザイル少将の艦隊を釣り出しにかかる。

それは見事に成功している。戦意ばかり旺盛で自身の実力をわきまえない者の相手など、歴戦のアツプルトン中将には造作もない。

釣り出した後は、迂回して急進させた一隊がウルヴァシー表面を爆撃するだけで事が足りている。こうして帝国軍後方基地に打撃を与えた後、一目散に退散した。

この近傍でガンダルヴァ会戦を行った帝国軍ラインハルトと鉢合わせしたらたまたまないからだ。逆にいえば出会い頭さえなければ、ここいらは同盟領のかつて自分の管区

に近く、アツプルトンにとって古巣のようなものである。退避は充分に可能だ。

ここまででは予定通りともいえることで、さほど苦勞することもなく終えられる。

だが次の行動は強い意志と慎重さを持って取り組む必要がある。

エカテリーナの目指すところはフェザーン奪還だ。

それに成功すれば回廊を扼し、帝国領と同盟領を遮断できる。

ただしそれを成すには絶対的条件がある。

ガンダルヴァ星域よりずっとフェザーンに近い位置にあるマル・アデッタ星域、ここに停泊する帝国軍ケンブ艦隊を排除しておくことが必須になる。それができなければフェザーン奪還は絵に描いた餅になってしまうのだ。

フェザーン艦隊が奪還のための戦いに入っても、フェザーン駐留の帝国軍に時間稼ぎをされ、ケンブ艦隊と挟撃の憂き目に遭ったら目も当てられない。

そのためにはフェザーン駐留帝国軍とケンブ艦隊を各個撃破していく必要がある。

だからといって逆にマル・アデッタ星域までフェザーン艦隊が赴くのも危険だ。

いくらフェザーンに近い星域とはいえ、他の帝国軍各艦隊から応援に來れないほどの位置ではない。フェザーンには二個艦隊しかない以上、そうそう冒険はできない。

結論からいえばケンブ艦隊をフェザーン側に引き付けて戦うべきである。



そのためになんぞ輸送船団とウルヴァシーを叩いた。帝国軍にとって補給が生命線である以上、フェザーン艦隊の蠢動を許しておけず、必ず討伐を考える。それも最も近いケンプが命じられるはずだ。

「ゾンバルト。卿は大言壮語しながら任務を果たせなかった。貴重な物資を損ない、しかも全くもって無様な戦いをした。本来なら士官学校からやり直せと言いたいがそうもできない。よって自らの身をもって全軍の軍紀を正すことに貢献し、せめてそれで役に立て」

こう言つてラインハルトはゾンバルト少将を手順に則つて消す。言い逃れしようのない行為で重大な結果を生んだのだから当然である。

「次にヴァーゲンザイル、卿の不手際も目に余る。降格されなくてはならぬ。以後いつそう励め」

ヴァーゲンザイル少将に対してはこの程度で済ませる。中級指揮官をこれ以上減らすべきでないという考えもあったからだ。千隻単位の艦隊を動かすだけならこれでも使い道はある。

横にいたキルヒアイスもラインハルトが過度に罰を与えない様子を見て安心してゐる。

だがさっさとラインハルトは頭を切り替え、次の行動に思いを馳せている。

「フェザーンの残党どもの悪あがきに対し鉄槌を下す必要がある。マル・アデッタのケンプに連絡を取れ。下水に巣食うネズミどもを排除し、補給線を確認たるものにせよ、と」

ラインハルト自身はその討伐に赴けない。

未だオーベルシュタインからハイネセン攻略の報が入っていない以上、うかつに後退するわけにもいかない。それは弱気ととられ、政治的な悪手になる。最悪同盟各星系によるゲリラ戦と反攻を呼び込んでしまうからだ。

## 第百三十二話 490年 7月 下準備

今、ケンプ艦隊はポレヴィト会戦以来の本格的な艦隊戦に臨もうとしている。

ケンプはラインハルトの命により、マル・アデツタ星域からフェザン方向に向かいつつある。ここまでゲリラ戦を受けることもなく、航路上に邪魔なものはない。そのため早いペースでフェザン回廊近辺まで戻ってこれている。

しかし今、索敵からの急報を受けたのだ。

「索敵ブイから信号あり！ 艦隊発見！ 識別信号ありません、敵です！ 当艦隊に向けゆっくり接近しつつある模様」

「そうか、敵もかくれんぼに飽きてようやく出てくる気になったか」

ケンプは今旗艦ヨーツンヘイムの艦橋に立っている。

そして闘志をたぎらせ、望むところという不敵な表情を保っているのだ。

正直ケンプにとってはこちらとゲリラ戦や妨害行動をされる方がよほどイライラすること、正面からの艦隊決戦なら喜んで受けて立とうと考えている。

「詳細判明、やはりあれはフェザン艦隊です！ 艦艇総数約一万四千から五千隻」

「なるほど、我が方は一万三千隻、数の上ではやや不利か。しかしながら兵の錬度を考えれば明らかに我が方の優勢である。特に艦載機の質や量は上回る。それを活かせる状況に持ち込むのが勝利への早道だ。よし、まずは向こうの出方を見極めながら、近接戦闘にするタイミングを計る」

ケンブも将としての器がある。素早く計算しながら、各種の戦術パターンを考える。もちろん得意な艦載機戦にしたいのは山々だが、そうもいかない場合のことも考えなくてはいけない。

「戦闘配備完了シグナル、全艦隊確認！」

「そのまま待機、敵艦隊から目を離すな。接触予想時間など目安に過ぎんと思え。それと索敵ブイは惜しまず全方向へ飛ばしておけ」

ケンブ艦隊旗艦ヨーツンハイムの艦橋が緊張する。

「敵艦隊進路そのまま！ あと15分でイエローゾーン突入！」

一方、こちらは対するフェザン艦隊のミユラーである。

ここで若干の誤算がある。

本当ならもう一つのフェザン艦隊の帰還を待ち、二個艦隊でこのケンブ艦隊を叩くつもりであった。その方が圧倒的に勝算が高い。

しかしながら待っていても帰還してこない。そのためミュラーは自分の持つ一個艦隊でケンブ艦隊と対峙せざるを得なくなってしまった。これ以上引き延ばせば、ケンブ艦隊はフェザン回廊に入ってしまった、現在フェザンに駐留しているロイエンタールの艦隊と一体化してしまう。それではフェザンの意図する各個撃破が成らなくなってしまうのだ。

それにフェザン回廊付近の微小航路に隠れているエカテリーナの身も危険に晒される。

これ以上は待てない。

このポイントでケンブ艦隊を叩くと決めたミュラーはさつきとオルラウに伝える。

「オルラウ准将、相手のケンブ艦隊は艦載機を使った近接戦闘を考えているはず。前面に駆逐艦を並べ、全体として凹形陣を形成して対処を」

「直ちに、ミュラー提督」

そう答えながら、オルラウは内心ミュラーのことを不思議な人だな、と思っている。

やはりフェザン艦隊を任されていることで遠慮が抜けないのだろう、言葉使いは司令官としては丁寧過ぎるくらいだ。しかし、やろうとしていることは途轍もなく豪胆ではないか。ほとんど同数の帝国艦隊相手に仕掛け、むろん勝つ気ではない。

そして艦隊戦の序盤は静かなものになる。

二つの艦隊は距離を保ちながら通常通りの砲戦を展開する。時間が経つにつれ、はつきりと帝国軍が押す展開になってきた。

「よし、敵は思った通り弱兵だ。ここから艦載機で叩き、勝利を決定付けてやる」  
ケンプはやはり得意の艦載機戦で勝ち切るつもりであり、一斉発艦を命じた。

だがそれがフェザーン艦隊に取り付く前に、熾烈な対空砲火を浴びせかけられようとするのが分かった。そのまま艦載機を行かせるには危険なほどの密度である。

「む、全機いったん後退しろッ!! この対空砲火ではまずい!」

ケンプは諦め、間一髪で引き返させた。その判断もさすがである。そしてこんな密度の高い対空砲火を作れるのには原因があるはず、と思つて見ると、それは簡単な理屈だった。

フェザーン艦隊は前面に駆逐艦を多く置いている。通常なら防御の弱い駆逐艦を砲戦の矢面には使わないはずなのに。

その配備と弾幕を作るのに適する凹形陣とが相まってこれほどの対空砲火になっていたのだ。

それが逆に砲戦で弱く、引き気味に戦っていた理由でもある。

「あやうく敵の策に陥るところだった。こちらの艦載機をそれほど恐れているとは光栄

とでもいうべきか。だったら作戦を切り替え、戦艦を中心に押しまくって勝つ。突撃の用意だ！」

ケンブは艦載機戦にこだわることなく、敵の裏をかくことにした。

大型艦で突入攻勢をかけ、敵の小型の駆逐艦など蹂躪し、決着をつけるのだ。

帝国艦隊は大型艦を中心に密集隊形を取り、一気に突進していく。

それは見事に脆弱なフェザーン艦隊を破り、成功しつつあるように見えた。

だがおかしなことにフェザーン艦隊に慌てた様子はない。しかも戦果と損害をあらわすメーターがおかしい。

こんなはずがあるうか。

どちらかという攻勢に出ている帝国艦隊の方に損害が多いではないか。

「帝国艦隊はかかった！ このまま間断なく撃ちかけて消耗させる。そして駆逐艦は急進し、向こうの空母を探索しつつ砲撃！」

ミュラーもいつまでも丁寧語ではいられない。

今が艦隊戦の分水嶺だ。

ケンブ艦隊をうまく引つ掛け、突入させた。しかもわざと隙をみせることでその場所

さえも誘導している。その突進の破壊力をいなしつつ、徐々に削ぎ取りにかかる。これは言う程簡単なものではないが、ミュラーはそれを粘り強くやっていく。

防衛陣を巧みに斜め方向に配置し、撃ち崩されないまま圧迫だけを加える。そうして行動を制約したところで狙い撃つのだ。

こういった守りと適切な逆撃こそミュラーの持ち味であるし、本人もそう自覚している。

同時にミュラーは会戦を決定付ける手を打つ。

それはケンブ艦隊の空母を叩く動きを見せることだった。

空母は比較的鈍足であり、通常は突入攻勢に用いられない。だから帝国軍は後方に空母をまとめて置き、守備しているはずなのである。そこへ向かって駆逐艦の列を向かわせる。

「空母群が襲撃を受けつつあり、至急来援を乞う、との通信あり!」

「何だと! そこを狙ってきたのか!」

これにはケンブも慌てざるを得ない。せっかく突入を成功させ、敵フェザーン艦隊の中核を叩いて瓦解させようと考えていたのに、その前に虎の子の空母を叩かれようとしている。



もちろん空母から急いで艦載機を出させる連絡を取るが一步遅かった。最も砲撃に脆い空母が先に射程距離へ捉えられてしまう。

「くそつ、艦載機をさつさと離艦させて敵の駆逐艦を叩け！そして止むを得ん、この本隊は戻るぞ」

ケンプはこの突入した艦隊を戻らせるなど悪手だと知っていた。せめて敵中を突き抜けてから大きく曲がって戻るべきなのだ。

しかし今は止むを得ない。その前に空母を壊滅させられたら、離艦させた艦載機でさえ戻る場所を失い、丸ごと失われる。

そんな事態は大事に艦載機乗りたちを育ててきたケンプに耐えられない。

「今だ！回頭する帝国艦隊を後背から叩け！」

こちらはミユラーであり、ケンプ艦隊の突入を見事に後退へ追い込んだばかりか絶対優位の態勢を作り出した。

ケンプの強みである艦載機を逆に守るべき弱みへと変える作戦が効を奏したのだ。

艦隊戦ははつきりとフェザーン側に傾いた。

尚も食らいつき、ケンプ艦隊を混乱に追い込む。簡単には立て直しを許さない。

ついに逆転を諦めてケンプは大きく後退する。

会戦はフェザン艦隊が勝利した。

こうしてケンブ艦隊は補給路の保全を成し得ず、四千隻もの損害を被つて撤退に転じる。

しかもここで戦略的に重大な誤りを犯している。

敗けてどんなに数を減らそうと、遮二無二フェザン回廊に入り、フェザンを押さええているロイエンタールの方へ向かうべきだった。しかしケンブは単純に戻つてしまっている。その方が安全なのと、ラインハルトの帝国軍本営がガンダルヴァ星系ウルヴァシーにある以上、そこへ合流するのが自然と考えたからである。

まさか補給路の寸断をしてきたフェザン艦隊が、それが最終目的ではなくフェザーンを狙っているものだとは想像することもできなかったのだ。

対するミュラーの方は胸をなでおろす。

もしも帝国艦隊がフェザンへ向かうのなら死闘を継続し、損害は莫大なものになつただろう。フェザン艦隊も突入をいなすために無傷とはいかず、ここままで千五百隻は失っている。これ以上の損失は避けたいところだった。なぜなら艦数が減つてもフェザン艦隊に当面補充は見込めない。それは修理を終えてプールしていた艦を全てガンダルヴァ会戦時に同盟へ供出してしまっているからだ。

「ケンプ提督は無能な将ではないが、大局的なことを考えられないらしくて助かった。これで本艦隊は一つの目的を達成し、続いてフェザンへ向かう」

ともあれ、これでフェザン駐留帝国艦隊とケンプ艦隊による挟撃の可能性を排除したのだ。

後はフェザン奪還に向けてひた走る。

## 第百三十三話 490年 7月 遺したいもの

「…… そうか。なるほどな。情勢はいささか面倒なことになってきたようだ」

「本当に面倒な時には声も出ないものよ。今のあなたは楽しんでいるようにも見えるわ」

「それもそのはずだ。俺はフェザーンの暫定統治というものを押し付けられて、いささか飽きがきていたところだ。戦いが近いというなら少なくとも飽きていられないだろう」

ここはフェザーンの暫定統治府が置かれているホテルの一室である。

オスカー・フォン・ロイエンタールとエルフリーデがくつろぎながら話している。といてもエルフリーデは生後7カ月になる男の子をあやししながらだ。帝国軍がフェザーンを占領した際に妊娠中だったエルフリーデは間もなく出産し、以来このホテルで保護されている。

そしてロイエンタールとエルフリーデは奇妙な関係を保っている。

表向きはそれぞれフェザーン占領帝国軍司令官と、フェザーン勢力の中枢であり、い

わば敵同士だ。本来なら雑談など有り得ない。

しかしどちらもその子供の親である。

むろん夫婦のような甘い関係になるわけではないが、こうしてぎつくばらん雑談をする間柄になっている。

それは主にロイエンタールが息抜きをするためでもあつた。そしてロイエンタールが期待した通り、エルフリーデは聡く、良い返答を返す能力を持っている。さすが亡きリヒテンラーデ侯の姪としか言いようがない。

ロイエンタールはラインハルトの征旅に同行せず、ここフェザーンの暫定統治を任されている。バランス感覚に優れるロイエンタールが最適と判断されたためだが、見事にそれをこなした。今、治安面でフェザーンは一定の落ち着きを見せ、それに伴って生産や通商といった経済活動が再開されるまでになったのだ。

フェザーン人たちはロイエンタールをその手腕によって評価している。この帝国による統治を決して歓迎しているわけではないが、最悪ではなかったとして。

だが、再びこのフェザーンに波が押し寄せようとしている。

ロイエンタールの元に届いた報告では、先ずラインハルトが幾度の戦いに勝ち進み、ついにあの最強の敵手ヤン・ウエンリーを退けたことが記されている。

そして一方では、イゼルローン回廊を通ったオーベルシュタインらが敵首都星ハイネセンを陥落させたのである。

ここまではいい。

歴史は見事に塗り替えられた。

今まで誰も成し得なかつた大いなる征服、それがほぼ達成されたと見るべきだろう。だが誤算もある。

そのハイネセンに到着して交渉のテーブルに就くべきだったキルヒアイス上級大將はラインハルトの方へ支援に行っている。

代わって取り仕切っているオーベルシュタインはハイネセンから政府代表者を取り逃がしてしまい、結果的に降伏の二文字を引き出すことができていない。いったんこういう状況になれば、議決や選挙ということを経ないと動きの取れない同盟の在り方が障害になってしまう。

そしてラインハルトも同盟の各星系に睨みを利かせ、そのまま支配を既成事実化するために動けない。

こういつた間隙を突き、隠れて建造されていたフェザーン艦隊が暗躍し、帝国軍の補給路を脅かしたのだ。ロイエンタールがせっかくフェザーンから送っている補給物資の半分は届かない。

「フェザーン艦隊が補給路の寸断を図るのはいいやり方だが、それだけで帝国軍を斃せると思つてはいまい。帝国軍は既に有人惑星の多くに食い込んでいる。武器弾薬は無理だが、推進剤と食糧だけは調達できるだろう。ならばフェザーン艦隊は補給路だけにこだわらず、必ず次の手を打つ。いや、九分九厘このフェザーンを奪還に来る」

そこまで読み、ロイエンタールは準備を怠らない。手持ちの艦隊は今七千隻しかないが、別に艦隊決戦をする必要はないのだ。

何といつても人口十億人のフェザーンを押さええている。

徹底抗戦をちらつかせ、戦いをできるだけ引き延ばし、応援を待つだけでいい。

「まるでかつてのブラウンシュバイクのような状況だな。奴はオーディンを持つていたのに、その利点をさっぱり活かせなかった。しかし俺がその轍を踏むことはない」

ただしその足元で蠢動がある。

「どうやらルパートとエカテリンはうまくやつているようだ。ここらで儂も準備に取り掛かるとしよう」

そう言いながらアドリアン・ルビンスキーがベッドから上体を起こす。

しかし動きは決して早くはなく、緩慢だ。アドリアン・ルビンスキーの病状は進み、体

力が確実に削られつつあることを示している。それはもう隠しようもなく表れ、命の灯が消えるまで長くはない。

「……大丈夫？　じつとしていての方が命は長くなるわ。どうせなら子供たちと生きてるうちに再会したいでしょ」

ベッドの横の椅子に腰掛けたドミニク・サン・ピエールがそう言う。

口調は相変わらずそっけないながら、ルピンスキーの体調を心から心配している。

「ドミニク、心配してくれるのはありがたいがここで寝ているわけにはいかないのだ。子供たちと生きて会いたいのは山々だが、それよりも最大限役に立つておかねばな。あらゆる意味でその方がいい」

そしてルピンスキーはこの時のために準備もしている。

傭兵を雇い、武器も調達し、テロを起こすことができる。その目的はロイエンタールの暫定支配を打ち砕き、フェザーンを根城とすることを断念させるためだ。

ただのテロでそれを成すことはできない。

単純にロイエンタール本人を狙っても成功の可能性は低い。

しかしルピンスキーは既に方法を策定している。伊達に自治領主を長くやってきたわけではなく、フェザーンのことを知り尽くしているのだ。



「ドミニク、最後までこき使うように済まないが補佐を頼む」

「…… そんな言い方をするなんて弱気になったものね。いいわ。最後まで付き合っ  
てあげる。でも何をどうするの？ 相手は隙がないわよ」

「いかにあのロイエンタールという将が有能でも、フェザーンについてなら儂より詳  
しいわけがない。フェザーンには最大の狙いどころがあるのだ。それは政府中枢コン  
ピューターではなく、宇宙港でもない。軌道エレベーターなのだ」

「フェザーンの軌道エレベーター……」

ドミニクがオウム返しに返した。ちよつと意外なことだったのだ。

「そうだ。フェザーンの富の源泉は回廊に位置することだが、もう一つ大きな要因があ  
る。軌道エレベーターを設置できたことにより通商は格段に容易になった。これが  
フェザーンの生命線である限り、テロで狙われたら慌てざるを得ない。そこを突く」

フェザーンは元々、主星に据えるには条件が悪い。

それは大半が乾燥地帯であり、オアシスや河川の流域にだけ緑が成長することがで  
きる。このように水資源に限りがあると、人間の居住だけならなんとかなつても工業の  
発展は難しい。なぜなら工業に水を使うと有毒物質などが混ざってしまうため、浄化が  
難しく、再び使うことができない。工業にはふんだんな水を使い捨てる必要があるの

だ。

それでもフェザーンが主星たりえるのは重大な理由がある。

地殻が安定し切っていることだ。

それは居住に適するという意味ではなく、軌道エレベーターを設置するための絶対条件になっている。いくら技術が発展しても、とんでもなく高い建造物が揺れに弱いのは当たり前だ。

それに当てはまる惑星は決して多くはない。

同盟のハイネセンでも無理だ。

帝国首都星オーデインはその条件を満たす少ない惑星ではあるが、馬鹿げた理由によりエレベーターの設置はできない。ルドルフ大帝は自分の像を見下げる形になることを許さず、建造物の高さに制限を設けてしまった。それが今日に至るまでかたくなに守られている。

皮肉なことに地球も設置可能だが、惑星自体打ち捨てられているので設置されるはずがない。

そのためフェザーンは人類社会でほぼ唯一の軌道エレベーター設置惑星になっている。

そして軌道エレベーターは計り知れないほど通商に有利に働く。

簡単に宇宙と地表の間で人や物資のやり取りができ、特に同盟艦のように惑星表面へ降りられない艦には都合がいい。

今、ルビンスキーは最初に軌道エレベーターを標的にして動く。

もちろんフェザーンの力の源泉を破壊してしまうのは本意ではない。だが絶対に破壊しないと決めているわけではないのは、そういったハードウェアは再建が利くが、政治的支配は取り返しがつかないと分かっているからだ。

そしてフェザーンに軌道エレベーターが狙われているとの噂が流れる。もちろんルビンスキーが流させたものだ。

これにより警備を強化させた上で敢えて襲撃を敢行する。

目的はロイエンタールを釣り出し、これを斃すこと。でなければ心胆を寒からしめ、その撤退を促すことである。その場合は軌道エレベーターを破壊してフェザーンを一且機能不全にすることが必要だろう。

フェザーンの中心部に爆発音が響く。

病いをおしてルビンスキーが襲撃に参加している。ドミニクも一緒だ。

そして配下の者にフェザーンの暫定統治府代わりのホテルを見張らせていたところ、何とロイエンタール自身が出てきたという情報が入った。

これは重畳だ。

警備を軌道エレベーターに引き付けるだけ引き付け、ホテルの方を襲うという道筋もあった。しかしロイエンタールは想像以上に行動力があり、陣頭に立つ方を選んだのだ。ならばルビンスキーらはその途上を襲えばいい。

ルビンスキーとドミニクはそのために移動しようとしたが、ここで若干の誤算がある。ロイエンタールの出勤は早く、ほとんど軌道エレベーターの近くで待ち受ける形になつてしまう。

そしてもう一人も動く。

「軌道エレベーターを狙った動き……これはたぶんアドリアン・ルビンスキーの策略ね。だったら狙いはロイエンタール提督だわ。気持ちには分かるけどそうはさせられないわね」

エルフリーデはそう看破している。直ちに子供を乳母に預け、ホテルを抜け出す。元々軟禁されていたとはいえ抜け出すのは簡単なことであり、既に警備員を買収していたのだ。

こちらはロイエンタールを守るためにひた走る。

今、ルビンスキー、ドミニク、ロイエンタール、エルフリーデの四人は奇しくも同じところに集まろうとしている。

それが悲劇になるのか喜劇になるのかはまだ分からない。

## 第三百三十四話 490年 7月 託した未来

ロイエンタールの乗る装甲車両がフェザーンの大通りを走る。

むろん、その周りを軽車両が十台ほども取り囲み、警備を成している。

だが、そこへロケット弾が撃ち込まれた！

といつても直接その一団へ向けられたものではない。

いかに都市とはいえ遮蔽物はそう多くはなく、襲撃者は近くへ隠れ潜むことができないからだ。この場合狙ったのは道路であり、進路予定に撃つことで路面を凸凹にするのが狙いだ。結果、軽車両がそのまま踏破できるようなものではなくなつた。これでロイエンタールらの一団はかなりの混乱をきたす。

ご丁寧にそこへ煙幕が投じられる。

今は夜半ではあるが暗くはない。

ここはもうフェザーンの軌道エレベーターがすぐ近くに見えるところであり、そのきらめく装飾の光が路上まで及んでいる。それがいったん遮られてしまう。

「やはり俺を狙ってきたか。まあそうだろうな。だがその思惑に最後まで付き合つてやることはない」

ロイエンタールは素早く装甲車から降りる。そのまま乗つていたらいい的になるだけだと分かっているからだ。

そして準備がいいことにロイエンタールは装甲服を着てきている。これなら、おそろくブラスター程度で貫通されることはない。

そして警備兵の混乱を鎮め、更なる襲撃に備えさせる。

もちろん次には襲撃してきた側との銃撃戦だ。

どちらも重火器まで使っているが、その合い間に盛んに小銃で応酬が繰り広げられている。

ロイエンタールもまた積極的にその銃撃戦に参加している。確かに射撃の腕は確かであり、その面でも一流であった。

しかしそういうことではなく、立場を鑑みれば危険に晒すべきではない。それは重々知っているのだが、やはり心のどこかには自身の破滅を望んでいる部分があるのだろうか。

それがロイエンタールの宿痾の病ともいべきものだ。

「閣下！ お下がりに下さい！ その身に何かあればフェザーンの統治はどうなりますか。害虫どもの思う壺にさせることはありません！」

同じく装甲服を着ている部下のバルトハウザーがフェイスカバーを跳ね上げ、強く言ってくる。

それでやつとロイエンタールもこの場を後退する気になった。

「分かった、バルトハウザー。俺も少しばかり血気に逸っていたようだ。後は任せる」

だが少し遅かった。

襲撃者は何とこの場にゼツフル粒子発生装置を投擲している！

それを目にするに誰しもが慌てて射撃が止める。ゼツフル粒子にもしも引火したら、その威力は凄まじく、一帯を吹き飛ばしてしまうだろう。誰しもそんな自殺志願の真似をしたくない。

そして襲撃者の側は銃撃戦の次を予期して用意周到にも弓矢を準備している。

雨あられと討ちかけ、それによっていつとき優位を作り出した。人数としては応援が続々と駆け付けつつある警備側よりも少ないのだが、この原始的な弓が奏功しているのだ。

そして警備側が怯んだ隙に躍り込む。これらの者は皆帝国軍の装甲服の横流し品を



着ていて、バルトハウザーら警備側にも少数いた装甲服姿と区別がつかない。

こうした準備の差により、斃されるのは襲撃者の方ではなく警備側が圧倒的に多い。今、さすがにロイエンタールは最も後方に下がっている。この白兵戦には参加せず、一応戦斧は持つものの血を付けてはいない。

「ドミニク。では行ってくる。お前は離れた位置で行く末を見ているがいい」  
「分かったわ。語り継ぐべき人に言っておあげる。あんたは怖い人だった。でも立派だったってね」

アドリアン・ルビンスキーは軽くドミニクに言い残し、激戦の場へ歩もうとしている。もちろん体力のないルビンスキーは装甲服を着ないし、その必要もない。白兵戦などに自分が参加する気などない。

そしてドミニクはそんなルビンスキーの覚悟を感じ、止めることはない。

しかもルビンスキーはドミニクに対して安全なところに逃げろと言っているのだ。それに従うのがドミニクのやるべきことだろう。

それよりもルビンスキーを見送り、その最後の姿を見届けることが重要だ。

だがそんな様子を見ている者がいる。

エルフリーデがジープのようなものを手に入れ、猛スピードで迫る。

「そううまくはさせられないわね。全くの私情だけだ」

そしてエルフリーデがロイエンタールの姿を捉えられる所まで来ると、逆にロイエンタールもそれに気付く。

おまけにロイエンタールが視線を移動させている途中、視界の片隅に見えたものがある。

アドリアン・ルビンスキーの姿だ！

これまで搜索の限りを尽くしても見つからなかったルビンスキーが戦場の喧騒の中にいるではないか。さすがに予想外のことだ。

「これは驚いた。奴は裏で糸を引くのが習い性だろうに、なぜテロに自ら参加しているのか。そこは分からんが、これは奴を捕まえるチャンスだろう」

幸運とばかりにロイエンタールはルビンスキーの捕縛を命じようとした。フェザーンの事件のどれも、背後にルビンスキーがいることは明白だ。ここで捕らえれば大きな前進になる。

だが同時に、ルビンスキーの手にプラスタがあるのも分かった。なぜプラスタ？ このゼツフル粒子の濃い中で。

その意味は分からない。

ロイエンタールはルビンスキーの病気のことは知らない。だからその覚悟も分かるわけがない。

しかし、そのプラスターを持つ手が上がってくる事実を認めないわけにはいかなかった。

ここで自分をめがけてやってくるエルフリーデから声がかかる。

「ロイエンタール提督、早くこの車に！」

この危機的状況、ロイエンタールは瞬時に判断し、車に乗り込むことに決める。

急ぎその場を去っていくロイエンタールへ向け、ルビンスキーはプラスターを撃つ！連射しようとしたが、それはただ一発に留まった。どのみち当たるはずもないし、ロイエンタールの装甲服には通らない。

だが充分に意味がある。

たちまちゼツフル粒子に引火し、暴風と紅蓮に変えていく。辺り一面人が木の葉のように舞う。

こうして巨星は墜ちた。

宇宙の富を集めたフェザーン、その強大な自治領主として名高いアドリアン・ルビンスキーはこうして逝った。

最後まで己の人生を貫き通した。ルパートやエカテリーナにフェザーンを渡すために命を使い尽くしたのだ。

エルフリーデとロイエンタールを乗せたジープは爆風に激しく煽られたが横転することはなく、辛くもその火炎地獄を逃れ切った。

「助かった。車に乗せてもらったのは二度目だな。あの嵐の晩の稲妻も大変だったが、ゼツフル粒子の爆発ほどではないだろう」

かつてロイエンタールがオーディンの郊外を馬で駆けていたことがあった。強い嵐の晩のことである。そこでエルフリーデに車に乗るよう勧められ、二人は同乗することになったのだ。それが二人の出会いでもある。

ロイエンタールはそんな懐かしいことを言いながら、エルフリーデが返事をしてこないことに気付いた。

「エルフリーデ、どうした……」

そう、エルフリーデはもはや返事を返せることがない。

ルビンスキーの放ったプラスターがロイエンタールに当たらず、何とエルフリーデの

横腹を貫いていた。

一方、それら一連を遠くから注視していたのはドミニクである。

しかしゼツフル粒子の爆発の光は強く、それに目が眩んだためルビンスキーの最期の瞬間は見えていない。

「たぶんいつもと変わらない表情だったのでしょうね。心残りもないはずだし。いいえ、最後に水割りを呑めなかったことは残念だったかしら。せめて墓前に置いといてあげるわ」

そして自分もひた走る。

「仕事の残りをやってあげるわね。恩返しというわけじゃないけど、それぐらいは付き合いのうちに」

私も甘くなつたわ。ルビンスキー家と関わるようになり、まるで一家の一員のようになつてから、少し変わった。そう自嘲せざるを得ない。

そしてこの惨事に右往左往する警備員を横目に、見事軌道エレベーターの制御盤に爆弾を放り込むことに成功する。

ロイエンタールを斃せたらよし、そうでなければ軌道エレベーターを破壊、そうルビンスキーが語っていたことを実行した。

軌道エレベーターそのものは無事でも制御装置が破壊されればかなりの間使用不能になる。

その成功を見届けた後、ドミニクはまた隠れ家に潜伏する。

## 第百三十五話 490年 7月 誤解

「…… あら？」

アドリアン・ルビンスキーの引き起こした騒動から一夜明けた。

エルフリーデがフェザンで最も大きい病院の一室で目を覚ます。出血が多いため一時は命も危ぶまれたのだが、やっと意識を取り戻すまで回復したのだ。

「リヒテンラーデの大叔父様でなくてロイエンタール提督が見える。ということはまだあの世じゃないってことかしら」

「それは保証する、エルフリーデ」

ロイエンタールがエルフリーデを見つめ、そしてエルフリーデもまたロイエンタールを見つめ返す。

そこでふとエルフリーデは気付いた。いつものロイエンタールの自虐的な眼光が薄らいでいるように感じた。それがどうしてなのかはエルフリーデも知らず、むろんロイエンタール自身にも分からないだろう。

誰かの命が助かるように願い続けたからだろうか。

しかしながら二人が歓談を始める時間はない。

慌てて病室に入ってくる者がいた。意識不明の重体になっているバルトハウザーの代わりに副官に取り立てられたディッターズドルフが駆け込んできたのだ。

「ロイエンタール閣下に御報告！ 逃亡していたフェザーンの艦隊、約一万三千隻が星系に入りつつあります！ そしてこの艦隊を率いているのは……」

「そこで言葉を止めるのは何かの演出か、ディッターズドルフ。いつから芸達者になった」

「て、敵の艦隊司令官、ナイトハルト・ミュラーと判明しています！」

「…… そうか、なるほど運命というものは面白い」

むろんミュラーとロイエンタールは旧知だ。ロイエンタールはミュラーの上司であつたし、ミュラーの退役も支援している。

ロイエンタールはその後のミュラーの足跡を知らなかったが、ここで敵味方となってしまうとは。これもまた不思議な縁である。

ただしそれでロイエンタールは感慨にふけつたりしない。

今考えるべきことはミュラーの戦術能力である。

「ミュラーが率いているのならば手ごわいものになるだろう。俺に同数の艦艇があるな



らばケンブとは違い、負けたりしない自信があるが、現実には七千隻しかないのでは少々危険が伴う。正面対決は避けたいところだ。となれば予定通りフェザンを盾にしなからの持久戦としよう」

仮に相手が凡百の将ならこの戦力差でも艦隊決戦に持ち込むつもりだったが、ミユラーを相手にそれをするのは危険と考えた。

ロイエンタールは手持ち艦艇を地下のあちこちに分散させ、先ずは長距離ミサイルに狙われないよう隠した。その上で地上に急造の基地を並べる。もちろんダムミール基地も含めてかなりの数に及ぶ。これは地上戦で来るなら簡単ではないというアピールでもある。

持久戦の態勢としては盤石だろう。

ミユラーの艦隊が一個艦隊規模といえど陸戦要員はせいぜい数万人に過ぎない。とても惑星表面を制圧するのに足りるはずがない。

だが、フェザンの情勢はロイエンタールの想像以上に反帝国に染まっていったのだ。

それは軌道エレベーターの破損が理由である。

通商国家の根幹が使えなくなってしまうと、フェザン人にとってこれほど大きな打

撃はない。

帝国軍の艦ならば地上への離発着が可能でも、フェザーンの輸送船は同盟艦と同じく地上に降りることは考慮されていない。エンジン出力の問題もあるが、既に形状からして宇宙に係留するしかできない形なのである。

これまでロイエンタールの行政はフェザーン人に好意的に捉えられていたが、その功績を打ち消して余りある不手際である。

その反帝国の意識が馬鹿にならないことをロイエンタールも知っている。下手な押しさえ付けは逆効果とみて、考えられる限りの懐柔策を打つが、それでもはかばかしくない。

二週間かけて熟慮したのち、ロイエンタールはフェザーンを捨て去ることを決意した。

それはせっかく隠した艦艇にさえ被害が出るがあつたからである。宇宙からの攻撃に対して艦を隠しておくことができても、補給や修理と言つた面でフェザーン企業や人員の世話にならないでいられない。そこで意図的な手違いやサボタージュをされるとたちまち支障が出てしまう。このままでは戦うこともないうちに、時間と共に戦力が減っていく。

そうと決めたらロイエンタールは躊躇せずにフェザンを出る。

フェザンの施設は破壊せず、しかし軍需物資は残らずラインハルトの元へ送るようにして。

むろんロイエンタールはエルフリーデとその子供を伴っている。

フェザン近傍宙域でロイエンタールの艦隊とミュラーのフェザン艦隊がすれ違う。

しかし戦闘にはならない。

ロイエンタールは確実に勝てるのでなければ戦うことはないと思っていたのだし、ミュラーもまたフェザン奪還という目的を前にして余計なこととはしない方がいいと考える。

ある意味お互いのことを信頼していたのだ。

共に目的も忘れ、目の前の敵を叩きに行くような短慮な将でないことを分かっている。

ロイエンタールはこの後、ラインハルトと合流することは考えなかった。それは無意味だ。

ラインハルトの元に艦隊は充分あり、自分が加わったところで意味はない。

それよりも自分がするべきことはフェザン回廊に栓をすることだろう。フェザン勢力が帝国領土にちよっかいを出さないためだ。

回廊帝国側出口付近に停泊し、近辺の警備艇などを糾合して戦力を増強しつつっかりと見張る。

こうして見事にフェザンは帝国から奪還された。

ミュラーはフェザンに降り立ち、直ちに掌握する。

この吉報を届ければ、同盟航路に潜んでいるエカテリーナとルパートが帰還してくるだろう。それを待つばかりだ。

フェザン回廊ではこのように戦いらしい戦いはなかった。

だが宇宙の一方では激戦が繰り広げられていたのだ。

アップルトンはエカテリーナに命じられた通りガンダルヴァ星系ウルヴァシーの帝国軍基地に一定の打撃を与えた。その後、どちらかというと同盟の中枢に近いバーミリオンに向かっていた。

それには理由がある。

手持ちの艦艇は旧同盟のものが多く、補給にしろ修理にしろ、同盟の基地で行った方がはるかにうまくいくからだ。この点ミユラーの艦隊とは違う。

むろんバーミリオンにいる時間は長くない。ゆつくりビュコック提督らと歓談することもできず、再び出立する。

それはミユラーの艦隊と協調し、ケンプの艦隊を叩く作戦に加わるためだ。むろんガンダルヴァ星系を通らないコースでそこへ向かっていた。

しかし思いもよらず不幸な偶然が待っていた。

他方、ラインハルトはミッターマイヤーをジャムシード星系へ派遣していた。揺れ動く同盟各星系を落ち着かせるためである。

そのミッターマイヤーは先日、ガンダルヴァ星系近傍でラインハルトとヤン・ウエンリーが決戦に及ぼうとしていることを知った。

「何だと！ あのヤン・ウエンリーが…… それでは万一ということもある。奴の意気込みは本物だろうし、ローエングラム公が危ない」

当然ながらミッターマイヤーもその決戦に加わり、帝国の勝利を決定付けるべく急いでガンダルヴァ星系へ向かう。

ただしそれは結果的に間に合わなかった。

ガンダルヴァの決戦は史上稀に見る激戦ではあるが決して長いものではなかった。

ミッターマイヤーは会戦の終結を知ると共に、ラインハルトが勝利したことで安堵する。

その後、ミッターマイヤーは新たにラインハルトから命令を受けるまで航路の中途半端なところで停泊を続けることにした。

再びジャムシードへ行つた方がいいのか、それともいったんガンダルヴァに集結した方がいいのか、その指示を聞いてから動くべきだと判断したのである。

このポイントへちようどアツプルトンのフェザーン艦隊が通りかかった！

そしてこの時、アツプルトンは誤解してしまったのだ。

見えてきた帝国艦隊はケンプ艦隊の後詰として派遣されたものであり、今まさに向かっている途中だと。

こんな戦略的価値のない航路途中に停泊するなど作戦途中としか考えられない。

一方のミッターマイヤーもまた誤解してしまった。

「こんなところに敵艦隊とは、まさかウルヴァシーに反復攻撃をする気か！ 決戦を終えたばかりのローエンングラム公に打撃を与え、ヤン・ウエンリーの成し得なかつたことを仕上げるつもりか」

ならば、ミッターマイヤーも戦わないで見過ごす方はない。  
どちらの艦隊にとつても出合い頭の遭遇戦、急いで戦闘準備をさせる。

## 第百三十六話 490年 8月 声明

ミッターマイヤーの帝国艦隊とアツプルトンのフェザーン艦隊は、ほぼ同時に互いを探知した。

ただし対応が早かったのはアツプルトンの方だ。

停泊していたミッターマイヤー艦隊に比べ、航行していたアツプルトン艦隊の方が準備が早いのは当たり前である。

艦艇数で比較するとミッターマイヤー側が一万七千隻、アツプルトン側が一万三千隻と判明した。戦力でアツプルトンは不利だと分かったが、先手を取れることでお釣りがくると計算した。

「第一級戦闘配備！ 急げ！ 各艦増速し、あの帝国艦隊を叩け！」

アツプルトンは基本的に闘将であり、あのウランフ提督に近い。素早い判断力で攻勢のタイミングを逃さないのが持ち味だ。

その様子にミッターマイヤーも苦い顔をする。



「敵はなかなか速いな。こちらにも一定の損害が出るのは避けられそうにない。ただし、速さでいうなら引けをとるつもりはないぞ！」

アップルトン艦隊はレッドゾーンに突入するや否や砲撃を開始し、そのままミッターマイヤー艦隊に取り付き、更に打撃を与えようとする。

しかしそれは途中で終わらざるを得ない。

何とミッターマイヤー艦隊は流れるような動きで横方向へすり抜けていったのだ。艦隊の全てが連動し、時間差なく動き始める。フェザーン側の砲撃が空しく残像を通り過ぎ、虚空に消えていくばかりになる。

それだけではなくミッターマイヤー艦隊は密集隊形のまま大胆に反転行動を取る。

これにはアップルトン艦隊も驚かざるを得ない。

帝国艦隊の統一行動は見事であり、まるで一体のトカゲのように動いているからだ。

そして驚いてばかりもいられない。帝国艦隊はあまりに速いターンを終え、あつという間に向かってきている。これから明らかに熾烈な攻勢が予期されるものだ。

そしてアップルトンの回避は無駄になってしまう。

ミッターマイヤー艦隊はフェザーン側が後退して立て直すことを許さず、取り付いて削ぎ取ってはまた離れ、また取り付いてくる。

艦隊行動でアップルトンはミッターマイヤーに遠く及ばない。

それは多分に練度の低いフェザン艦隊を率いているためでもあったが、帝国軍が常識に照らし合わせても速過ぎるせいだ。

おまけにアップルトンが反撃しようにもうまくいかない。フェザン艦隊は砲撃の精度が悪く、動き続けるミッターマイヤー艦隊を捉えられなくなれば戦いは一方的である。

フェザン艦隊はこの時まで四千隻を失い、更に戦力差は拡大していく。通常の艦隊戦では考えられないほど急速に壊滅への坂道を転げ落ちつつある。

「まさかこれほどとは。この帝国艦隊は強い。その艦隊行動は傍目から見れば見惚れてしまうほどだろうな。叩かれている当事者としてはそうも言っていられないが。とにかくその艦隊行動が向こうの武器だが……」

アップルトンはここで一つ妙な命令を出している。

「これしかないだろう。全艦隊、できるだけ密集隊形を取れ！　まるでドックに入るようにぶつからないギリギリで並べ！　いや、多少ぶつかってもいい」

この命令を伝達するコナリー少将は疑問に思う。

アップルトンの意図が分からない。

「アップルトン提督、ここから密集隊形とは……しかしその形で防御陣を張っても今さら無意味かと。戦力差が開けばどのみち撃ち減らされるだけでは」

そう言うのも当然である。

密集隊形の防御陣というのは、艦列に隙を作らず、崩されないとところに意味がある。下手な突入を許さないためだ。

ただし別に艦自体が強くなるわけではなく、シールドを重ねることはそもそもできない。そのため、砲撃を間断なく続けられればむしろ弱い陣形かもしれない。なぜなら撃たれる砲の照準が甘くても、僚艦に当てられてしまう可能性があり、いわゆる流れ弾にやられる。多少の戦力差であれば意味があっても、ここまで艦艇数に差が開けば余計に不利ではないだろうか。

「いや、これでいい。文字通り実行してくれ。それではヤン・ウエンリーの奴のお株を奪うとするか」

このフェザーン艦隊の超密集隊形はミッターマイヤーも見ている。

多少訝しく思うが、戦理にあてはめて考える。

「敵としては密集隊形をとって逃げに転じるつもりか……いや、それにしても加速を始めていない。ならばこちらがそれに合わせて包囲陣形を取っているのだろう。」

それが常道だからな。なるほど確かに包囲をするために分散すれば、こっちの強みである統一行動は取れなくなる。考えたものだ」

ミッターマイヤーは考え、それでも常識的に包囲隊形に変えるべきか迷う。

しかし別に包囲しなくとも押せば勝ちは見えている以上、そこに乗ってやる必要はない。

「相手の長所を消すのも戦術ということか。フェザーンの指揮官もなかなかやる。だが、こちらが分散しなければどうなる」

そしてミッターマイヤーは自分の最も得意とする隊形を崩さず、再びフェザーン艦隊に向かう。再び取り付きながら、その強い圧力で今度こそ瓦解させるためだ。

「よし、かかった！ 全艦一斉射撃用意、だがまだ引き付けろ」

アップルトンはミッターマイヤー艦隊の中核部を見定める。

「3、2、1、撃てー！ー！」

その斉射はフェザーン艦隊とは思えぬほど揃ったものだった。

白い帯が輝き、そのまま一直線に伸びる。

これによりミッターマイヤー艦隊のもつとも分厚い層を撃ち抜いたのだ。

こうなった理屈は簡単である。

かのヤン・ウエンリーは運用において一点斉射を得意にしている、戦術上の大きな優位点にしている。

これは補佐するフィッシャーの精緻な艦隊運用があればこそ可能になっている。なぜなら、相手艦隊の一点に攻撃を加えるためには艦ごとに精密な射軸の計算と調整が不可欠だからだ。

フエザーン艦隊にそんなことができるはずがないが、しかし今アップルトンは超密集隊形にさせた。

こうなれば精緻な調整は必要ない。

全艦が同じ方向を向いているので、その射軸でただ前に撃てばいい。いくら練度の低いフエザーン艦隊でも、自動的にヤン艦隊の一点斉射と同じことが可能になる。

もちろん、その前に攻撃を食らってしまえば話にならず、ここまで密集すれば僚艦からの誘爆さえ考えられる。つまり諸刃の剣でもあるのだ。

アップルトンは大胆にもここで乾坤一擲の賭けを打ち、それは吉と出た。

ミッターマイヤーもそれを見て、直ぐに理屈は分かった。

しかし思わぬほどの損害を受けてしまい、方向を転じて反撃しようにも直ぐにはできない。

そんなところへフエザーン艦隊は猛砲撃を加えつつ進行し、そのまま飛びすさつて戦

場を離脱していく。

こうして一つの遭遇戦は終わる。

両者が激しく火花を散らした戦いだった。

ミッターマイヤーの帝国艦隊はここで三千隻を失っている。そしてアツプルトンのフェザーン艦隊は五千隻もの数を失っている。その損害の比率と戦場を先に離脱したことから、艦隊戦はフェザーン艦隊の負けとすべきところだが、実際のところ両者ともそういう勝ち負けは考えていない。

どちらも相手の作戦目的を挫いたとして安堵したのである。

その頃、同盟領内で政治的な動きがある。

ハイネセンにいるオーベルシュタインとワーレンは実効支配を続けているが進展はない。同盟の降伏を引き出せず、協定の類いを結べないでいる。

そうしたところへ、何とエリユーセラ星域から声明が出されたのだ！

「私ヨブ・トリューニヒトは自由惑星同盟を代表し、全同盟市民諸君にお詫び申し上げます。同盟政府は幾多の不手際を繰り返し、政略を誤り、ついに帝国軍による侵入を許してしまいました。同盟艦隊は奮闘しつとも撤退せざるを得ない状況にある。結果、帝国軍は

各地の同盟領星系を押しさえ、ハイネセンも足元に置いてある。だが諸君、同盟はまだ滅びていない。未だ帝国に屈してはいない。それを宣言しよう。諸君、希望を持つてほしい。我らはアーレ・ハイネセンの子供たちであり、民主主義の使徒である。諦めることなく、民主主義の灯を掲げ続けようではないか！」

そこに具合的なことは何も言われていない。どう反撃するか、どういう方針を取るかも分からない。

ただし一つのことだけは明らかだ。同盟は降伏していない事実を伝えている。

# 第三百三十七話 490年 9月 これから

ヨブ・トリユーニヒトの声明が出された。

ここに至つてオーベルシユタインも考え込む。

講和がないなら帝国と同盟は戦争状態が続いていることになり、帝国軍がインフラを破壊し、都市を廃墟としても法的には何ら構わない。

ただし帝国への悪感情は決定的になる。

しかも占領後の復興費用が馬鹿にならなくなってしまう。それでは征服しても帝国に益にならず、かえつてお荷物になる可能性すらある。

帝国にとつて核心となるのはオーデインを中心とした安定的な政権運用である。

同盟領征服は確かに歴史的快挙であり、帝国民衆にはこれ以上ない朗報だろう。しかし征服の果実が得られるだろうか。もし得られるとしてもかなり先になるのに、それがインフラ破壊によつて更に未来になるのはどうしても避けたい。



オーベルシュタインはもうハイネセンにいる必要はなく、再びラインハルトと政略について調整すべきだと感じた。

そのためにガンダルヴァ星系ウルヴァシーに行く。

「ワーレン提督、私はこれからローエングラム閣下の所に行く。ここにある艦隊の半数、七千隻を護衛に伴うがよろしいか」

「それは構いません……ではこちらは残り七千隻でハイネセンを守備していればよいのですね。多少不安ではありませんが」

「その通り、任せたい。そしてワーレン提督が不安に思うことはない。敵が七千隻以上で襲来してくる可能性はない。そういう意味も含めて自動防衛要塞を自爆させていたのであればあのホアンという者は相当の狸だが」

オーベルシュタインはホアン・ルイの考えを読んでいた。

ホアンはアルテミスの首飾りを逆に帝国軍が運用し、同盟軍によるハイネセン奪還を妨害することを危惧していたのだ。

帝国軍は人質作戦でアルテミスの首飾りを無力化したが、もちろん同盟軍がそんなことをできるわけがない。ならばストレートにアルテミスの首飾りが威力を発揮して同盟軍を叩いてしまうだろう。それは悪夢であり、だからこそホアンは真つ先に首飾りを自爆により消した。

「ですが閣下、敵がここハイネセンに襲来しないという根拠をお聞かせくださればより安心できます」

「それは自明のことだ。敵がハイネセン奪還にこだわり、犠牲を払っても成し遂げようとするれば他の星系はどう思うか。やはりハイネセンばかりを優遇し、自分たちのことはどうでもいいのかと憤慨するだろう。ここは帝国とは違い、星系を束ねるのは難しいことらしい。それは焦土作戦をやらなかった、いや絶対にやれなかった理由でもある」

「なるほど……」

「それと私がここハイネセンに長くいてはならない大きな理由がある。それは火のない所に煙を立てようとする連中を未然に抑え込むためでもある」

「オーベルシュタイン閣下、それはいったいどういう意味でしょう」

「敵の首都星を占領している状態を続けられれば、帝国に対して独立を企てているという妄想を生じさせかねない。わざと敵と講和せず、裏では手を組み、独立を狙っているという話が作られる」

「まさか、そんな！」

「残念なことに私はキルヒアイス提督とは違い、そう言われる余地がある。不本意ではあるが未然に防ぐべきであろう」

オーベルシュタインは自分のことを含め実地的に分析している。

一つはハイネセン奪還作戦がないことだ。そうなれば、ここに大軍を置いておく必要はない。

もう一つはオーベルシュタインの忠誠が疑われることである。

ラインハルト自身がオーベルシュタインを疑うのでなくとも、誰かがそれを疑えば噂は広まってしまう。むしろオーベルシュタインが叛旗を翻すとは荒唐無稽なことだと、オーベルシュタインを嫌っている者でさえそう思う。だが実際のオーベルシュタインを知らない人間が噂を信じてしまうことはあり得るのだ。

こうしてオーベルシュタインはラインハルトの方に合流する。

一方、やっとフェザーンにルパートとエカテリーナが降り立つ。

帝国軍のフェザーン占領から逃亡し、長いようで短い潜伏生活だった。

しかし今、フェザーンの陽光の中に戻る事ができたのだ。

「ありがとう、ミュラー。やってくれると思ってたわ」

「いやエカテリン、これは僕ではなくてロイエンタール提督のおかげだよ。もしも徹底抗戦などされたら目も当てられなかった」

真つ先にエカテリーナはミュラーを労る。

そして直ちにフェザーンの再建に努力する。しかしながらフェザーンの民衆も官僚もエカテリーナやルパートに対し、やや複雑な感情を持っている。

もちろん帝国の支配から逃れ、フェザーン人による支配に戻ったのはとても嬉しいことだ。エカテリーナが優れた軍略でそれを成したことも疑いない。

だが軌道エレベーターは使用不能になり、それによる経済的打撃は大きい。

しかもそれが亡き自治領主アドリアン・ルビンスキーによる襲撃の結果だという疑惑がある。

それともう一つ、フェザーンの自治領主は決して世襲ではない。エカテリーナが治める根拠がない。

フェザーンでは自治領主の代替わりの度に官僚や財界の上層部が候補者の実力を審し。その信認があつてこそ領主と認められるのだ。明文化はされていないがそれがフェザーン伝統のルールである。血統主義の考えはそこにない。

いわばフェザーンは民主主義の一步手前にいる。

フェザーンは商人の国として始まった。まるで一隻の船のように、その船長は実力で選ばれ、遭難を免れてきたようなものである。

アドリアン・ルビンスキーのいない今、実子だからといってエカテリーナが当然のように差別するのはおかしい。

しかしエカテリーナは先手を打っていく。

最初に軌道エレベーターの損傷がアドリアン・ルビンスキーによるものだということを明らかにした。それは疑惑を疑惑のままにしない決意である。

その上で、鋭意再建に努力することを約束したのだ。

次にフェザーンの自治がいかに価値あるものであるか、今も膨大な血を流しつつ帝国に抗っている同盟を引き合いに出して説明する。

そして最後、エカテリーナは一つ約束をした。

フェザーンが自治を守るということだけではなく、逆に帝国に食い込んでみせるというものだ。それは父アドリアン・ルビンスキーが描いた夢でもあった。

これは後年「魔女帝の空手形」と呼ばれるものになる。

この時点で詳しいことは説明されなかったがエカテリーナは自信たっぷりに見えたと伝えられている。実際そうなるかはエカテリーナ自身にも分からない。しかし道筋がゼロとも思っていないことは確かだ。

これら一連の行動と弁舌により、エカテリーナは事実上の自治領主後継と見なされる。

今の激動期、いつものようにしつかり自治領主選挙を行える状況ではなく、とにかく

リーダーが必要だったこともそれを後押しした。

言い方は悪いがどきどき紛れのようなものだ。

オーデインにいるニコラス・ボルテックなどが知りもせず、蠢動もできないうちに決着がついてしまっている。ちなみにルパートはそういった表舞台には出ず、エカテリーナの補佐役に徹するのがいいと考えている。

そんなフェザーンにヒルダと銀河帝国正統政府の一行が到着した。

もちろん喜んでエカテリーナはヒルダを迎える。

ヒルダこそエカテリーナの待ち望んだ頭脳であり、共に戦略を練り上げたい。帝国の側にも優れた頭脳はあり、それを上回るためにはヒルダがどうしても必要なのだ。

ところがヒルダの方はなぜかエカテリーナに複雑な表情見せているではないか。

いつも快活で前に出てくるヒルダが、足取りも重そうだ。

「エカテリン、何と言ったらしいか……」

「あなたらしくないわね、ヒルダ。何を言いたいの？」

「エリザベートが、脱出できなかつた。ハイネセンで亡くなつたと聞いたわ」

## 第三百三十八話 490年 9月 玉突き戦略

実は今、エカテリーナは普通の精神状態というわけではない。

父アドリアン・ルビンスキーが亡くなった悲しみを抑え込んでいるところだ。

この少し前、隠れ家から出てきたドミニクが、エカテリーナとルパートの二人にアドリアン・ルビンスキーの最期のことを語っている。

「あの人は…… そうね、だいたい想像通りだと思つたらいいわ。最後まで恐れることなく前に進んだ」

ルビンスキーがいかに剛毅に自分を保つたか、フェザーンのために命を投げ打つたか。

エカテリーナやルパートにどれほど期待し、望みを託したか。

それを聞いてしまった以上エカテリーナは悲しみに我を忘れることは許されない。父アドリアン・ルビンスキーが期待した通りに立ち直り、判断をしていかねばならない責務を背負う。

そんなところへ、エリザベートの訃報まで聞かされてしまった！

エカテリーナにとってエリザベートは心の許せる友である。

しかしそのエリザベートをハイネセンに行くよう勧めたのはエカテリーナなのだ。そこで命を落とすとは……まるでエカテリーナが死に追いやったのも同然ではないか。

当然のごとくエカテリーナは嘆き、涙に崩れる。

「でもエカテリン、エリザベートは決してただ死んだんじゃない。命を奪われたのではなく、命を使つたんだと思う。恋をして、その相手のために最善を成した結果よ。本当に……エリザベートらしいことだわ」

ヒルダはそのこともしつかり伝える必要がある。エリザベートは火のごとく一途な性格であり、遅かれ早かれ恋のためにその身を使い尽くす女だったのかもしれない。

その後、ヒルダは辛抱強く待つ。

エカテリーナはそれを乗り越える。ヒルダはそう確信している。いや、そうであつてほしいという願望であつたのかもしれない。

その通り、やがてエカテリーナは前を向くのだ。

終わったことはいったん振り捨て未来を見据える。そしてヒルダときつちり情報を共有し、考え方を出し合い、これからの軍略を話し合う。



「…… 状況を整理しましょうヒルダ。先ずはそこからよ」

「ええ、知り得る範囲で言えばこうなるでしょう」

ヒルダはエカテリンに求められ、説明を始める。

むろんヒルダは軍事の専門家ではなく、明確な戦力というものは分からないが、艦艇数などの数字上の情報であればしつかり把握している。

帝国側は今、ラインハルトの本営をガンダルヴァ星系ウルヴァシーに置き、そこから同盟領星系の一部を実効支配している。

ラインハルトの他に多くの将がそこに付き従っている。

キルヒアイス、メックリンガー、ビットンフェルト、ミッターマイヤー、シユタインメッツ、ケンプ、最近そこへオーベルシユタインも加わった。

艦艇数で言えば侵攻当初の十万五千隻からポレヴィト会戦、ガンダルヴァ会戦などで痛手を被り、数を減らしている。しかしながらそこにキルヒアイスやオーベルシユタインがイゼルローン方面からの艦隊を加えたことで、今なお七万五千隻ほどの力を保っている。

他に帝国軍ではハイネセンに駐留するワーレンの七千隻がある。

そして脱落艦や損傷艦の一万四千隻を率いてルッツがイゼルローンに帰投しつつあ

る。

まとめて言えばこれらが帝国の戦力だ。

対する同盟側ではバーミリオンでビュコックらの元に二万八千隻がある。損傷艦が多いが、同盟各所から補給資材をなりふり構わず集め、パーツを入れ替えて再建を進めつつある。

そしてヤンはガンダルヴァ会戦の後、残りの一万六千隻を率いて姿をくらましてしまった。おそらく帝国の知らない同盟補給基地に潜伏していると推測される。そこにはウランフやメルカツツも一緒である。

ついでながらシヴァ星域近傍の同盟補給基地では、クブルスリーやグリーンヒルがシヴァ会戦後に生き残った五千隻の修理を進めている。しかしこちらは元が老朽艦ばかりのため、はかばかしく進んでいない。

「ヒルダ、見事なまでに混沌としているわね。けれど帝国の軍事的優位は依然として圧倒的、その事実は大きいわ」

「その通りよエカテリン。言い忘れたけど帝国でも同盟でもない戦力として、ここフェザーンに二万隻がある」

この頃までにはアップルトンもまたフェザンに残存艦を引き連れて到着していたのだ。数はだいぶ減らしたが、ミユラーの艦隊と併せればまだまだフェザンにそれだけの戦力が残っている。むろん帝国や同盟の実力には劣るが、それでも馬鹿にしたものではない。

さあ、ここからどういう手を打つか。

「一つには、フェザン艦隊を帝国方面に素早く侵攻させることが考えられるわ。同盟領にいる帝国艦隊を撤退させるためには最も確実な方法かもしれない。二万隻を全て運用すればロイエンタール提督を躲してオーデインを突ける可能性が高い。だけどヒルダ、これは最悪の手だわ」

「……その根拠は何、エカテリン」

「そんなことをすれば、おそらくラインハルト様は激昂する。だってオーデインに残したアンネローゼ様を脅かすことになるんだもの。それはラインハルト様にとって絶対に許せない。どんなに犠牲を払ってもフェザンを蹴破ってくるでしょう。ヒルダ、あなたよりもわたしはラインハルト様と付き合いが長い。簡単に分かるわ」

「確かに想像できる。しかもそうなれば外交も何もあつたものじゃない。外交とは交渉が成り立つ瀬戸際で行うものであつて、喧嘩が前提なら何もできはしない」

エカテリーナはかつて、ラインハルトが喧嘩するところを実際に見たことがあるの

だ。オーデインの街の片隅で。

その烈しさを思えば、下手なことはできない。

フェザン艦隊が帝国領に向かうのはあまりに悪手である。

ヒルダもまたそれに同意する。

なぜならヒルダの思惑はサビーネ様を帝国の政権に加えることであり、それはあくまでラインハルトとの交渉で成すべきものだからだ。

つまり交渉のテーブルに着かせればいい。軍事的にラインハルトを倒すことは最初から目的に入らない。

「それでも、やれることがあるわ。少しくらいは」

「エカテリン、それはひよつとして玉突きのこと？」

「分かる？ ヒルダ」

ここからフェザンは面白い布石を打つ。

それはフェザン回廊の同盟領出口から同盟領外縁を沿い、イゼルローン方面にちよつかいをかけることだった。といっても本当にイゼルローン回廊まで近付くわけではなく、小艦隊を順繰りに出してはほどほどのところで戻し、それを繰り返す。

これは一つのメツセージである。

今の情勢は帝国軍の巨大な戦力が動き出すことを警戒し、同盟のビュコックも、ヤンも、グリーンヒルも動けないでいる。

どこに帝国軍が向かうのかしつかり監視しなくてはならず、その動きに即応するため同盟軍は釘付けになっているのだ。

そんな情勢においてフェザーンが玉突きのような真似をする。

適度に帝国軍の目を引き、その圧力を肩代わりするという方法で。

その意味を理解するのはきつとヤン・ウエンリーだろう。

その通り、ヤン艦隊は素早く反応する！

秘匿された補給基地から突如として姿を現し、イゼルローン方面へ急行を始めた。

そして同じくイゼルローン回廊へ向かっていたルッツの帝国軍艦隊を捕捉したのである。

ルッツの艦隊はシヴァ星域会戦後間もなく出発しているので、その意味では早かったのだが、航行はかなりゆっくりしたものになってしまった。損傷艦艇の修理を続け、物資をやりくりしながらの旅路だ。そのため未だイゼルローン回廊に戻れていない。ちようどエル・ファシルからティアマトに差し掛かっていたところである。

「敵艦隊発見！ 数、およそ一万六千隻！ 急速接近中！」

「くそつ、時間距離で割り出せ。そして相手は？」

「接触予定時間、あと一時間半！ 艦型照合出ました、旗艦ヒューベリオン！ ヤン艦隊と思われませう」

「まずいな…… あの魔術師ヤンか。ただでさえこっちの艦隊は応急修理したものばかりだ。戦いにならん」

ルッツは渋い顔をする。

戦いに及んで怯むような将ではなく、むしろ闘將に分類されるコルネリアス・ルッツであるが、決して無謀ということはない。

この場合は艦数の問題ではなくもつと深刻だ。

手持ちの艦はあのシヴァア星域会戦で損傷を受けたものばかりだ。あるいは、キルヒアイスがラインハルトの元へ急行するとき振り落とされた艦たちである。いずれにせよ戦力としてはかなり心もとなく、あの恐るべきヤン艦隊を相手にして勝算は立てられない。

「仕方がない。イゼルローン回廊への撤退を優先させる。防御陣を保ったまま急ぐぞ」

そこへヤン艦隊が襲い掛かる。アッテンボローの分艦隊などを駆使しつつ、効果的に崩していく。もちろんそれに対してルッツは適切な防御を考え、できるかぎり損失を少なくしようとする。

簡単には分断を許さない。

しかし、やはりルッツが懸念した通り各艦はすぐに限界点が来て動きが鈍くなつてしまふ。修理してやつと動いているような艦をいつまでも騙し騙し使えるものではない。最終的にルッツの側は崩壊し、イゼルローン回廊まで辿り着けたのはわずか三千隻に満たない。多くはその前に足が止まってしまい降伏している。

しかし不思議なことにヤンはルッツを深追いすることがなかった。

イゼルローン回廊の同盟側出口付近に分厚い機雷陣を敷設し、そんなフタができれば引き返す。その後ヤンはエル・ファシルを根拠地にして、これを守る構えを見せている。むろん反帝国の気風が強いエル・ファシルはヤン艦隊を歓迎し、物資も提供する。

この戦いが事実上戦役の最後を飾るものとなった。

## 第三百三十九話 490年11月 終結に向けて

ヤン艦隊の働きにより、帝国軍は一時フェザーン回廊からもイゼルローン回廊からも遮断されてしまう。

そこへ向けて交渉が呼びかけられる。フェザーンのエカテリーナとヒルダの連名であった。

「戦いの収拾を図るべく、帝国軍ローエングラム元帥との対話を提案します。これ以上の流血は誰にとつても益にならないと考えます」

そんな提案など考慮するに及ばず、とラインハルトが一蹴するかに思われた。

しかし誰もが驚いたことに、ラインハルトはこの対話を受け入れたのだ！

「話をしようというならこちらから拒むことはない。ただし無理難題を言い立てるなら無駄足になると思つて頂こう。それでよければウルヴァシーまで来ればよろしい」

その顛末を聞くとさっすくそくビットテンフェルトが吠える。

「何だど!? 今さらそんな輩と話をしてどうなる。目こぼしをされたことで増長した犬



どもには躰が必要であつて、餌をくれてやることはない！」

「そう吠えるなビットェンフェルト。別に餌をくれてやると決まつたわけじゃないぞ」

そう答えるミッターマイヤーだが、もちろん自分だつて疑問に思っている。

「確かに妙だ。帝国艦隊が現在どちらの回廊からも切り離された状況は良くないが、しかしそれを過度に心配するのもどうか。戦力的には回廊を再び取り返すこともそう難しくはない。いやこのタイミングだからこそ対話をする必要はないはずだ」

「だからとつとフェザンでもイゼルローンでも掃除してしまえばよいのだ。だいたいのこの国の降伏が引き出せないなら、全部の星系を力でねじ伏せればいい。それが無理というなら適当に政府でも何でもでっち上げて、形ばかり降伏にサインさせればそれで済むではないか」

ビットェンフェルトの論は少しばかり極端ではあるが、一つの考え方ではある。

ミッターマイヤーや他の将も考えこまざるを得ない。今さら交渉などということでは丸め込まれたら、これまで征服を進めてきた意味はどうなる。

ただしそれは論点が少しズレているのだ。

問題なのは征服を達成するかではない。

なぜ対話をラインハルトが受け入れたのかであり、それが黄金の覇王らしくない振舞いだからこそ戸惑う。

それらの将の考えることを同じくキルヒアイスも考えている。

「ラインハルト様は、丸くなられました……」

キルヒアイスはその大きな原因に思い当たる。

ラインハルトは戦いに満足したのだ。

あのガンダルヴァアの戦いで最強と認める好敵手に勝った。

もはやこれ以上はないという華麗な戦術戦を応酬した末、ついに破ったのだ！

これは戦いの一つの極致であり、今後どんなことがあるうとその会戦ほどの戦いはないだろう。

ヤン・ウエンリーは戦闘で負けることにより戦争で勝利を収めた

後世の歴史家は異口同音にそう書き記す。

本当に皮肉としか言いようがなく、逆説的なことではあるが、それは歴史的眞実である。

もしもヤンが勝っていたらどうだっただろうか。

それでラインハルトが見事斃されていればよいが、しかし生き延びていれば……

ラインハルトの方はいつまでも戦いにこだわり、満たされないままになるのではない

のか。それは考えても仕方がない仮定の話である。だがその方がヤンにとってもラインハルトにとっても、そして周囲にとっても不幸であることは間違いない。

そして大事件が発生する。

ヤンに勝ち、ラインハルトの烈気が和らいだ結果、重大な因子が目に見える形で現れた。

ラインハルトが高熱で倒れたのである。

それはエカテリーナやヒルダと会見する一週間前のことだった。

「ラインハルト様!!」

「どうしたキルヒアイス。慌てるのはお前に似合わないぞ。なに、ちよつと疲れが出ただけだ。心配するには及ばない」

「ですが……」

ウルヴァシーの病室に駆け込んできたキルヒアイスに対し、ラインハルトはそう答えた。

ただしそれはキルヒアイスを安心させるためであつて、本心ではない。

確かにこの征旅は想定外の10カ月にも及び、誰しも疲れが出ておかしくはない。しかしながら今までラインハルトは健康そのものであり、病で倒れたことなどないのだ。

あのカプチエランカの氷原から生還した時でさえ風邪を引くこともなかったくらいである。もちろんラインハルトはこの時二十一歳、まだまだ衰えるはずがない。

だからこそラインハルトは自分でも体が妙なのを自覚している。やはり連戦の疲れと達成感は深いところで異変を生じさせてしまったのだ。

直ちに精密検査が施され、詳しく分析される。

すると、病気の原因は不明という最悪の結果だった。これでは治すことができないということと同義である。

このラインハルトの病気はキルヒアイスとオーベルシュタイン以外には嚴重に秘匿された。

そして銀河の歴史に残る会談が始まる。

帝国軍は惑星ウルヴァシーに大規模な基地を築き、順次拡大させている。そこへ着いたエカテリーナとヒルダは早速会談のテーブルに着く。

ラインハルトの側はむろんキルヒアイスとオーベルシュタインが同席している。

この時ラインハルトははっきりと帝国の元帥服をまもっているが、立ち上がることはなく、物憂げに席についている。発熱が繰り返し襲い、今も微熱が治まっていない。

「フロイライン・マリィンドルフとエカテリーナ、久しぶりだが今さら挨拶はいるまい。

では早速提案とやらがあるなら聞かせてもらおう」

「では率直に申し上げます。現在帝国軍の優勢は動かないといえど、帝国領本土から切り離された状態にあります。つまり、本国と補給や連絡をつけるには最低でももう一回は会戦を行う必要があるでしょう。おまけに帝国は同盟という国家を未だ降伏に至らしむるに及ばず、各星系単位で切り崩そうとするならば大変な労力が必要になります」  
「なるほど、大まかだが正しい分析だ。裏で糸を引き、その状況を作り出してくれた本人がそう言うのだからな」

ヒルダはラインハルトの皮肉に応じず、用意していた考えを述べる。

「……ですから征服に区切りをつけることを提案します。むろん誰もが納得できるものにはいたします。一つ、フェザンが仲立ちしてこの同盟という国家と帝国が協定を結びます。むろん帝国有利なものになるでしょう。もう一つ、その見返りにフェザンの自治を最低でも五十年認めるという覚書を頂きます。それと最後に、銀河帝国正統政府のサビーネ皇帝をオーデインに迎え入れて頂き、加えて実務的な尚書ポストをこちらに頂くことを含めます」

「全部を求めるか。随分と欲張るのだな。誰もが納得といったが、こちらが一番損な役割であり、とうてい納得し難いものではないか。帝国軍によりほぼ征服は終わっているのだ」

「まだ征服は終わっておらず、途上だと申し上げました。ですから帝国軍にとり、損ではない提案と心得ます」

確かにヒルダは最大限の要求をしている。

しかしながら速やかに戦役を終わらせ、收拾を図るにはこれしかないともいえるものだ。

ラインハルトはぼやけた頭で思考を続ける。ここで提案を蹴るのは簡単だが……いや先にオーベルシュタインの考えを聞くべきだろう。

おそらくキルヒアイスに聞いても、早期講和とオーデインへの帰還、そして自分の病氣療養を勧められるに違いない。

ここはオーベルシュタインの惻愴な合理性こそ求められる。

「オーベルシュタイン、卿の思うところを述べよ。もちろん忌憚のない意見で構わない」  
「では僭越ながら閣下、申し上げます。結論から言えばこの提案を受け入れるべきでしょう。どのみち同盟という国家を帝国に組み入れるのは容易ではなく、一度の征旅で成しうることでございません。協定を結べるのであればいったん退くのも正しいと存じます。協定の内容としては安全保障税という形での徴収、帝国査察官の派遣、軍備の制限、こういったところが妥協点かと」

これでオーベルシュタイン自身もまた協定を考えていたことが明らかになった！

それは決してヒルダらに言われてから考えたことではない。オーベルシュタインは長くハイネセンに逗留し、同盟の政体やシステムについて自分でも少なからず考察していたのだ。

同盟という国家は帝国とは違い、皇帝を変えればそれで済むということではなく、帝国からすればあまりに異質な社会なのだ。市民の自主性というものが骨の髄まで沁みている限り、拙速を避けるべきなのである。

？み込んだ結果帝国の方が混乱に陥ったら話にならない。

かつて銀河帝国は叛徒を害虫と呼んで駆除しようとしたが、仮に征服して併呑すれば、自分の半分を超える大きさの害虫を家に迎え入れることになる。

「意外だな、オーベルシュタイン」

「帝国にとつてそれが最善と考えました」

ラインハルトもキルヒアイスも驚いた。オーベルシュタインはもつと強硬に出ると思っていたのだ。

そして実はオーベルシュタインには口に出さない考えがある。

この征旅はもう十ヶ月に及び、オーデインを留守にするのはもはや限界である。いか

にラインハルトの軍事的強さが圧倒的であり、貴族や官僚の骨身に沁みていようと、長くその姿を見なければ緩んでしまうものである。今は有能なケスラーのおかげで事件は起きていないが、逆にいえば事が起きてからでは遅いのだ。

そしてもっと大きな懸念がある。

ラインハルトが病のため早くに逝去したらどうなるか。歴史を見れば偉大な王が征服途上にして倒れる例はいくらでもある。

そうなれば、帝国の混乱は必至だ。

何としてもラインハルトの存命中にペクニッツ子爵家のケートヘンという乳児を即位させなければならぬ。そして直ちにラインハルトへ皇帝位の禅譲という形式をとらせるのだ。

その上で今度はラインハルトの次を定める。もちろんラインハルトが婚姻し、子をなせば一番よい。それでこそ帝国は盤石になるのだが……

しかしその前に病が重くなれば、ラインハルトはまず確実に後継者としてキルヒアイスを立てるであろう。

だがキルヒアイスはそれを受けるだろうか。受けても剛毅な帝王になれるだろうか。

血筋によらない帝位交代が短期間で二回も続くのだ。その不安定を跳ね返し、実力で抑え込む気概が絶対的に必要になる。皇帝の座を奪われないために血を流しても構わ



ない覚悟が。

ともあれオーベルシュタインとしては早めにオーディンへ帰らなければ何もしようがない。

「小官はフェザーンの事実上の恒久的自治とサビーネ嬢の皇帝位のごことはここで確約せず、オーディンで協議継続というのが望ましいと考えます」

「いいえ、ここで決めるべき問題でしょう。一連の問題は全てつながっており、分割できるものではありません」

先延ばしにしようとするオーベルシュタインにヒルダが食い下がる。

この協議は三日に及んだ。

そして結局、ラインハルト側はヒルダの提案を呑んだのである。

その締結の最終日にラインハルトは欠席している。高熱のためベッドにいるのだが、むろんヒルダの方にそれは知らされていない。

## 第四百十話

490年11月

帝国の後継者

ヒルダの提案が通った。

これで帝国軍の長かった戦役は終わり、ついに帰国の途につく。

フェザーン回廊を経由し、帰りには戦うことなく帝国領に戻っていく。

ビッテンフェルトを始めとして各将は悔しがるが、それはもちろん敵国に城下の盟を誓わせ、足下に従えることを目指して進んでいたからだ。百五十年にも渡る因縁の戦いの決着はそういうものだと思いついていたのだし、それが叶わないのは……消化不良とも言える。

ただし一般兵士の意見は別だ。敵領での長期滞在は神経を削り、いい加減不安が募ってきた頃合いだった。喜んで帰国の命令を受け入れる。

その寸前、約束通りフェザーンを仲立ちとして帝国と同盟の間に協定が結ばれる。

先にエリユーセラ星域を出て、リオヴェルデ星系に移っていたヨブ・トリユーニヒトはこの呼びかけに応じている。

協定の内容をしつかり精査した上で調印した。

それを同盟議会も批准し、正式に帝国と同盟は戦争状態ではなくなった。あまりに長くお互いを認めてこなかったが、新時代を迎えたのだ。

「同盟側の落どころは、帝国の属国あるいは保護国ではないこと、つまり国家主権が維持されるのが第一だ。なおかつ市民が政治を決める民主主義が守られればいい。具体的には帝国から派遣される査察官が政治的最終決定をするのではなく、文字通り見張るだけに徹するなら受け入れよう」

もちろんそれ以外の内容は大幅に帝国有利となっている。

特に軍備は厳しく制限され、結果帝国がいつでも再征服が可能という含みがある。

統合作戦本部は修理途中の損傷艦の廃棄を命じ、それで軍備縮小を図るが、もちろんビュコックやグリーンヒル同様、ヤンもそれに倣う。

「やれやれこれでちよつとは楽になるかな。戦いが終わっても運営で苦労したら何にもならない。スリムな組織の方が楽ができそうだ」

「しかし帝国がまた攻めてきたらどうします？ この第十三艦隊も三分の一、五千隻まで減りましたよ」

「いや、たぶん帝国は攻めてこないんじゃないかな。なぜだかローエングラム公の鋭気をもう感じない。講和なんかしないで、補給路確保のため直ぐにどちらかの回廊へ攻め

かかると思ったんだが。それも余計な民間人のいないイゼルローン回廊へ」

「先輩、平和なんて永遠に続かない、これは先輩のいつもの言葉ですよ」

「まあ、再戦になればなつたでイゼルローン界隈を根城に頑張るさ」

「そうそう、年金までは頑張つて下さい」

この激動の年はこうして終わる。

だが、その翌年は最大級の激震に見舞われることになる。

ウルヴァシーからオーデインに帰還する途上、ゆつくりとラインハルトは衰弱していた。

そしてオーデインに着いてしばらくするとベッドの上で過ごすことが多くなった。それから、わずか半年で逝去したのだ！

黄金の覇王は戦場ではなく、ベッドの上で、病によって世を去つた。

その最期を親友キルヒアイスと最愛の姉アンネローゼが看取つた。

もちろんラインハルトは最後にこの二人へ感謝を述べ、また祝福している。

「キルヒアイス……あの日以来、お前の人生を借りていた。俺のせいで軍人にしてしまったが、お前はたぶん俺と違って軍人になる以外にも多くの道があっただろうに」

「いいえ違います、ラインハルト様。ラインハルト様のお側にいられた人生がわたくし

にとって最良のものです。他の人生は有り得ません」

「嬉しいことを言ってくれる。だがキルヒアイス、これからは自分の人生を歩め。その上で姉上を幸せにしてくれ」

この話を聞くと諸将は慟哭する。

オーベルシュタインだけはいつもの表情を崩さない。しかし内心では大きな落胆があった。ヒルダとの約束を反故にしてラインハルトを皇帝にするプランが崩れてしまったのだ。

しかし最悪ではないのだろうかと思ひ直す。

なぜならラインハルトが皇帝になって間もなく崩御したのであれば、もつと悪いことになりかねない。おそらく後継者に指名されるであろうキルヒアイスは性格が良すぎ、帝国を安定的に運用することができらるだろうか。

ましてカザリン・ケートヘンを皇帝にするのは論外だ。その赤子の後見が皇帝と同義になるからである。

それならばまだヒルダとの約束を守り、サビーネをいったん皇帝に据えた方が安定する。

むろんゴールデンバウム王朝を倒すのがオーベルシュタインの隠された悲願である

ことは確かだ。それでも、年若く、王朝の腐つた悪癖とは完全に無縁のサビーネまで斃すことはないと判断している。

ここからは政争の季節がやってくる。

この戦いには完全な勝者がいない。なぜなら完全な敗者がいないからだ。

結局のところ、皆はそれぞれの居場所に収まることになったのだし、そこでふさわしい働きをすることになる。

ラインハルトの逝去から二年が経ち、やっと人々は激動の時期が過ぎ去ったことを感じ、その春のようなのどかさに憩うことができるようになった。

思えばあのフリードリッヒ四世皇帝崩御から息つく暇もなかったのだ。

貴族間の対立、帝国を二分する内乱、ブラウンシュバイク公による乱脈、ラインハルトによる刷新、そして帝国軍による同盟領遠征があった。

その最後の最後、サビーネ・フォン・ゴールデンバウムによる治世が成った。これはその母クリスティーネと叔母アマリーエのどちらも望んだことである。

帝国はこの英邁な皇帝を迎え、再び興盛に向かおうとしている。

長く澁んでいた社会は一気に風通しが良くなり、この明るい兆しによって、何と帝国

の人口が増加に転じている。これは帝国発祥以来初めてのことだ。

帝国の政治体制は國務尚書にオーベルシュタインが就いている。帝国宰相はいない。そのオーベルシュタインは持ち前の合理主義と清濁併せ呑む手法で社会を速やかに効率化していく。

ただし政治に関わるのはオーベルシュタインだけではない。

注目されたヒルダは何と宮内尚書の地位を要求し、それに就いている。

それは別にサビーネの世話をしたり、宮中行事を取り仕切るという意味ではない。サビーネと各種の相談を行い、その決定を補助するという意味だ。

そうしてヒルダは帝国政治に大きく関わっている。

しかしヒルダがどうして宮内尚書という尚書の中では最も軽んじられやすい尚書に就いたのか。つまり一歩引いた地位にいるのか。

それは大きな権勢を持つことに対する反発を和らげる目的がある。亡きリヒテンラーデ侯は皇帝から信認され、國務尚書の立場で政治を動かした。いかに私心のないリヒテンラーデ侯といえども、その巨大な権力によって反発を受け、本当の味方はなかなか作れなかったのだ。その轍を踏まないようヒルダはなるべく自分を大きく見せない。

それともう一つ、ヒルダはサビーネがいつまでも自分に頼るようではいけないと考えている。いずれは自分の足で立ち、自分の頭で考えてほしい。それには偉大な宰相の存

在など有害でしかない。

とりあえず帝国はヒルダとオーベルシュタインの二人で回されているようなものだ。お互い性格的に好きになれることはないと思っているが、その能力は認め合っている。

もちろん意見を戦わせるばかりではなく、最初から一致することもある。

例えば帝国貴族の扱いなどはその一つかもしれない。

今、帝国から貴族の領地は全廃された。内乱で生き残った貴族家は一割もいなかったのだが、その三百の貴族家の所領というものはなくなつた。いかに先祖伝来の領地だと言ひ張り、抵抗しようとそれは断行されている。

ヒルダは、非人間的な搾取を生む土壌を残すつもりがなかった。

オーベルシュタインはゴールデンバウム王朝の悪癖を一掃したかった。

それで一致した。そして二人の考えのベースには、そういつた封建的なやり方は、ある一面新規開拓の迅速化というメリットがあるが、しかし今の帝国には必要ない。

事実上そうなのだ。帝国初期から見れば今の人口は非常に少なく、敢えて新規開拓なんかしないので、効率を考えながら再開拓すればいい。

ただしその後の貴族の扱いについては若干意見が分かれた。

ヒルダは適度な年金を与えることを主張し、オーベルシュタインはその必要もないとした。ここはヒルダの意見が通っている。そのため、オーデインにおける貴族的な文化



は一定レベルで残ることになったのだ。小さなことではあるがヴェストパーレ男爵夫人による芸術サロンも無事に存続できている。

一方、軍務尚書にはキルヒアイスが就いた。

その下にミッターマイヤー元帥、ロイエンタール元帥の双壁が並び立つ。

更にメックリンガー、ビッテンフェルト、ワーレン、ルッツ、ケスラーといった上級大将がいる。同盟領での戦いの不手際からケンプとシユタインメッツは昇進せず大将に留められているが、どのみち彼ら全員にとって同僚のようなものであり、ざつくばらんな関係が築けている。

その仲の良さを見抜けなかった人物がいなわけではない。

野心家のグリルパルツァー中将は自身の栄達のために派閥争いを焚きつけるという愚かな行為を行い、そのツケを払うことになる。日頃争っているように見えるメックリンガーとビッテンフェルトも、互いを追い落とそうと思うわけがない。

「あの猪も、卿のように陰で何かを企むことはない。なぜならそれが猪たるゆえんだからだ」

「いくら奴が下手な絵を描くところで、おそらく美意識を爪の先ほどは持っているだろう。妙な小細工をしないくらいにはな！」

結果、一致してグリルパルツアーを辺境の閑職へ追いやったのだ。

そして帝国軍はキルヒアイスの性格のように穏やかな軍縮へ進んでいる。もはや同盟と過度の緊張を引き起こすことはない。それどころか海賊退治に関して協調出撃することすらあったのだ。

結局のところ、帝国と同盟はイデオロギーの戦いだった。

それがエスカレートし、不倶戴天の仇同士になってしまい、相手を征服するまで戦いは終わらないと思いつんでいた。

それはただの感情なのだ。

もともと生存という意味で戦いは必要ない。

どちらも人口が減り続け、放棄された開拓惑星すら多くある以上、領土獲得に何の意味もない。

互いに手を出さなければそれで済む。むろんキルヒアイスも平和に尽力する。

ついでに言えば、やっと一子を設けたミッターマイヤーも、何とエルフリーデとの間に第二子を授かったロイエンタールもその平和路線に協力する。

「この俺が子沢山とは皮肉が過ぎる。誰もが想像できなかったろう。むろん、俺もだ」「いいじゃないかロイエンタール。ただし仕事ばかりでなく子育てにも協力してやれ。

見たところそつちの奥方はエヴァンゼリンより頭はいいが家事は苦手そうだ」

「その通り、正直言えば彼女の方が仕事に回るべきなのかもしれない。艦隊指揮以外なら俺より立派にできそうだ」

ミッターマイヤーは驚きに目を見張る。

あのロイエンタールが惚気を語っているとは！

## 最終前話

花束

一方の同盟でも動きがある。

いったん同盟から離脱しかけたマル・アデツタ、ジャムシードなどの星系が復帰している。ハイネセンへの偏重を改め、均衡のとれた発展を約束することで同盟の再統合が果たされたのだ。

むろん、これはトリユーニヒトの政治的交渉の手腕が最大限発揮された結果である。

その後も同盟は苦闘しながら前進する。帝国から課された安全保障税は重くのしかかるが、社会を効率化し、帝国から技術を取り入れて凌いでいる。

そして少なくとも政治の腐敗とは無縁でいられた。

そんな同盟で最も注目されている人物、ヤン・ウエンリーはついに辞表を提出した。おまけに軍を辞めて政界に転出するつもりもない。本人は純粹に自分の思う正道に返る気になっている。

「アッテンポロー、どうやら本当に平和が続きそうだ。少なくとも現役でいられる間には。だったら歴史書の執筆意欲が無くならないうちにそっちに専念するべきじゃない

か」

「先輩、年金は足りるんですか？ フレデリカ夫人のと併せても足りないんじゃないか」

「それなら三月兎亭のウエイターでもしようかな」

「はあ……それはちよつと……」

しかしながらヤンの引退は許可されず、辞表はシトレ元帥の机に死蔵されることになる。

「どうだろうヤン君。この職なら君も納得すると思うのだが。人を殺すのではなく生かす職場となる。メルカッツ提督と共にとりあえずやってみてはどうか」

「……」

同盟軍はヤンを手放す気などさらさない。

捕虜交換手続きや帝国軍との人事交流の窓口というものを予め設置し、ヤンが辞表を出そうものなら話を持ち出そうと待っていたのだ。

シトレ元帥にそう言われて考え込むヤンに、今度はグリーンヒル大将がとどめを刺す。

「私はね、ヤン君。まさか年金暮らしの男と娘を結婚させたつもりはないんだよ。君は本を書くと言っているが、売れる見込みはあるのかね。いや、君も知る通り物書きはみんな大丈夫と思って書くものだが、結果は言うまでもないだろう。だからこそ娘が苦労

するのを見過ごせない」

実際にはそんな心配はない。

ヤンが書いた本であれば内容がどんなものであっても同盟で売れないわけがないのだ。

それほど魔術師ヤンは市民から人気がある。

しかしながら自分の人気に思い至らないヤンは、結局軍に留まり、グリーンヒル大將らをほつとさせることになる。

———  
そこから更に三十年の月日が流れた。

小規模なテロは頻発するが、帝国と同盟の国家同士の戦いが巻き起こることはついになかった。

その中、同盟では悲しむべきことにヨブ・トリューニヒトがテロによつて斃れている。

やはり帝国をあくまで打倒し、民主主義で宇宙の全てを塗り替える、そう主張する勢力は同盟に根強かつたのだ。理想主義と言えば耳当たりがいいが、要するに現実を見ることがない。彼らは帝国と戦うことが絶対正義と信じている。そこに妥協の余地はない。

同情すべきところがないわけではなく、そういう者の多くは肉親や恋人を帝国との戦いで失っていることが多い。イデオロギーによる大義と、個人的な復讐心が絡み合っているところがどうにも救われない。

彼らにとってトリューニヒトは帝国へ尻尾を振り、同盟の精神を捨てた裏切り者である。

トリューニヒトは演説の壇上でプラスターに貫かれた。

生涯独身のまま、同盟のために尽くし続けた生涯を終える。そして息を引き取る前にジョアン・レベロに後事を託した。しかしそのレベロも長くはなく、やはりテロに斃れている。

その後には評議会議長に就任したホアン・ルイは長く勤め、それにより同盟は発展基調のレールに乗り続けていられた。皮肉なことにトリューニヒトが泥を被ったおかげでホアンは清廉なイメージのままであり、強硬派を何とか抑えることができた。もし同盟が混乱し、暴発すれば帝国に付け入れられたかもしれない。

一方、帝国の方ではこの間にオーベルシュタインが死去している。

それはテロではなく病死だった。オーベルシュタインは眼だけではなく、体のあちこちに弱いところを抱えていたのだ。しかし最後まで表情を崩すことなく、苦しみを表

に出すことはなかつた伝えられている。

盛大な国葬が営まれ、この時ヒルダは本気でオーベルシュタインの死を悼んでいる。気の許せない競争相手ではあつたが、帝国の発展に私心なく努力している姿を誰よりも知っていたからだ。

オーベルシュタインは本人の希望通り、愛犬の墓の横に葬られ、小さく墓碑を置くだけに留められている。

墓碑銘には愛犬ロルフと永遠に遊ぶ、と書かれていた。

今からは唯一の理解者といつまでも過ごすのだろう。

その後間もなく、皇帝サビーネにより一つの行事が行われた。その治世を通してただ一度の私事と言われている。

サビーネとヒルダが今や銀河帝国全軍の総旗艦となつたバルバロッサに乗る。

そして帝国軍をほぼ総動員し、荘厳な列をなし、果てしない輝点を伴って進む。

目的地はキフオイザー星域、ついで打ち捨てられて久しいレンテンベルク要塞にも訪れる。

それはサビーネの父リッテンハイム侯と母クリステイーネへの献花のためだ。

クリステイーネ夫人の好んだ柔らかな色のアネモネとカラーの花束が孤独で暗い宇



宙に添えられる。

今も鮮烈に記憶されているあの日……父母は戻らぬ人となった。

今、せめてその魂へ花束を届ける。

このサビーネの姿に泣かぬ者はいない。

もちろんヒルダは号泣する。

あの日の誓いは果たされた！

ヒルダは余人の及ばぬ知略を十二分に發揮し、戦いに勝ち抜き、見事サビーネを皇帝にした。

だがそれでも……やはりその二人に立派になったサビーネを見てもらいたかった

……

そしてこの三十年の動きで誰もが認めざるを得ないのは、フェザーンの興盛だった。

どんなに政治的なさざ波があろうと、結局はどうしようもなく大きな流れというものがある。

水が低きに流れるがごとく、どうにも止められない流れが存在する。

帝国と同盟を結ぶ結節点にあるフェザーンはどのみち支配的立場に立つのだ。

絶対的利点から嫌でもそうならざるを得ない。

フェザーンはもはや帝国にも同盟にも根を張り、通商から情報、そして経済、技術まで多くの分野で頂点に立つ。

かつてアドリアン・ルビンスキーは帝国と同盟のバランスが崩れたら、一方に宇宙を統一させ、フェザーンが裏から支配することを考えていたものだ。

それは手前勝手な夢物語のようであったが、実はそうではなかった。

平和になれば通商がいつそう活発化し、自動的にフェザーンの地位が上がり、オーデインを凌ぐことを計算に入れた予測だ。

逆にいうと戦乱があつたためにその流れが押しとどめられ、フェザーンの優越を一時的に隠していたようなものである。

そのフェザーンの自治領主としてエカテリーナが君臨する。

自治領主の座を諦めきれなかったニコラス・ボルテックが異を唱えたこともあつたが、哀れにも一蹴されている。

これにはボルテックの側にあつて優れた策を打っていた第一秘書グラスノフが、帝国と同盟の和平に伴つて辞職し、出奔していったことも大きい。むろんグラスノフは同盟の情報局に帰つたのだ。

グラスノフを失つたボルテックなど実力もない道化に過ぎない。

エカテリーナは夫であり軍務を司るミュラー、兄であり外交全般を司るルパートに支えられている。この頃にはエカテリーナの両翼と称されたアップルトン中將は役割を終えたとして同盟に帰還している。

もちろん、エカテリーナの資質を以てしても正道だけで登り詰められるはずはなく、裏の政略はドミニクが司っている。

ちなみにドミニクは一度だけ私事で謀略に動いたことがある。それはオーベルシュタインの死後、長くその庇護にあつた帝国安全保障局長ハイドリツヒ・ラングを失脚させたことだ。遠い日、恋人を獄死させられた意趣返しである。しかし、そのこと以外では誠実にエカテリーナを補佐し続けた。

こうして魔女帝と呼ばれたエカテリーナの時代が来る。

それに対し、オーデインの帝国はむやみと反発することはない。オーデインが人類社会全体からすればむしろ偏った端に位置し、そのために単なる地域代表へ地位を低下させていくのを受け入れる。

ヒルダはそういう文明中心の移り変わりに理解があり、むしろ円滑な移行を考えていたからだ。

非公式という隠れ蓑を使い、ヒルダとエカテリーナはぎつくばらんな交流を絶やすこ

とはなかった。まるであの女学校の頃のように。時折はヴェストパーレ男爵夫人を招くことすらあったのだ。

それは人類にとってこの上ない幸福になった。

歴史上そういう文明中心の移り変わりにおいては旧勢力と新勢力が激しく戦い、血が流れるのが普通なのである。それがなくて済んだのは一つの奇跡としか言いようがない。

帝国が内部的変容に忙しかつたことも背景にある。

もう皇帝の絶対的権威の国ではない。

そうではなく、帝室は敬愛の対象になる。皆が恐れではなく愛でもって仕える。そこそヒルダの理想としたところだ。

帝国は一般選挙こそないものの、内容的にはもはや同盟にかなり近付いている。

貴族の専横は過去のものになり、誰もがチャンスを持つている。

いや、そうならなければ、同盟やフェザーンと益々交流を深める中でイデオロギー的に破綻せずにいられる方策はない。

近い将来、長くても数十年以内にはフェザーンを中心として帝国も同盟も統合され、人類社会の分断はなくなるだろう。

ラインハルトが火のような激しさで先鞭をつけた人類社会の統一は、エカテリーナとヒルダによつて前進し、やがて達成される。

誰もがそう予想するまでになつた。

もちろん、人類にとつて明るい未来である。

## 最終話&エピローグ トウキョウ

「……ん、ここはどこだろう」

エカテリーナは目を開ける。

おかしい。

自分はフェザーンで死んだはずなのだ。

それは静かに、夫ミユラーに看取られ、病室で逝った。

宇宙を支配するフェザーンの魔女帝としてはあっけなかつたかもしれないが、それでも幸せな最期であった。

そして妙なことに気付く。ここは病室には間違いないのだが、エカテリーナの知っているものではない。豪華ではなく、質素で、それでいて花の香りがする。

おまけに病室には誰かがいた。品の良さそうな婦人だ。

その顔は最大限の驚きに包まれている。

「カタリン！ カタリン!! やつと目を覚ましてくれたのね！ ああ……」

その夫人は駆け寄ってくるやいなや、ベッドの上に飛びつくような形でエカテリーナを抱きとめる。

その瞬間、エカテリーナの頭に記憶が流れ込む。というより記憶の覆いが跳ね除けられた。

鮮やかに思い出される。

確か一家でエル・ファシルまで宇宙旅行に行つて、その帰りにイゼルローン回廊で事故に遭つて……

「ママー！ ママなの!?!」

「そうよもちろん、愛しい我が子」

「ママ、わたしはエカテリーナ…… だけどカタリーネ……」

「あなたはあなたよ。どちらでもあなたには変わりない。分かるわ、きつと長い夢を見たのでしょう」

「エカテリーナが、夢……」

それは信じられない！

自分はエカテリーナとして一生を生きただのだ。

フェザーンでアドリアン・ルピンスキーの娘として生まれ、オーデインの女学校に通

い、ミユラーと出会い……

余りにも多くの物語があった。

出会った人はいったい何人いたのだろう。それぞれ記憶に残っている。

それに何より、激動の銀河をフェザン自治領主として主導し、生涯を存分に駆け抜けたのだ。疲れも知らずに。

「ああごめんなさい。ママの言い方が悪かったわ。それは夢というより、現実にある世界よ。別の世界と言ったらいいかしら」

「別の世界？」

「たぶんあなたはそのエカテリーナという人生を歩んだのね。それもまた本当なの。本当にあったことなのだから、大事にするといいわ。でもこれからはわたしの娘よ。よく帰ってきてくれた……」

記憶の混乱はない。エカテリーナとして歩んだ人生をしっかりと覚えていますが、同時にこの婦人カローリーナの娘カタリーネだった記憶もあるのだ。

しかし、どっちにしろわたしはわたしであることには違いない。

せっかく生きているのなら答えの出ない問題を考えても仕方がない。切り替えて、また人生を楽しめばいいだけではないか！

「それより何か食べるものある？ ママ」



「まあ！ あなただって、やっぱり！」

カロリーナママが思いつきり笑った。

いかにもわたしらしいことを言ったせいだと後で聞いた。

「香央梨——！ 起きなさいよ—— 今日は一時限目からあるって言ってたでしょ」

一階から母親の音がする。二階の私の部屋までそれが聞こえ、慌ててベッドから出る。

この生活にもだいぶ慣れてきたのだが、時折気が緩みすぎる時がある。

私は一年前から突然ここで暮らしている。

いや、その言い方は正しくないだろう。

私が暮らし始めたのではなく、別人の暮らしに私が成り代わってしまったのだ！

私はハイネセンの宇宙港で死んだはずではないか。

何条ものブラスターに体を貫かれ、それでも通路開閉コンソールを守って死んだ。

次に意識が戻り、目を開けた時、コンパクトで女の子らしい部屋が見えた。

正直意味が分からない。

命が助かった？ いやあの状況でそれはあり得ない。

しかもここは病室などではない！

普通の部屋とベッドである。普通といっても見たことのないものが多過ぎるのだが

……

その後、数日で状況が分かってきた。

ここはハイネセンでもどこでもない。私のいた世界のいずれの場所でもなく、別の世界なのだ！

そして私の今の体は…… 小柄で黒目黒髪、元の体とは似ても似つかない。

周りから香央梨という名で呼ばれている。

やはりそうかと思つたが、私はもうエリザベート・フォン・カストロプではない。この心以外は。

ここでの新しい生活に戸惑うことはいくらでもあつたが、それでも何とかなつてい

る。

私は一度帝国有数の貴族令嬢から、新しい名で一介の秘書見習いになったこともあるのだ。その激変を体験したからには、もう一度の激変くらいこなしてみせる。

それと勉強面で非常に楽だったことも幸運なのだろう。

この体の少女は大学一年生であり、オーティンの女学校とはまるで違う女子大学に通っている。

そこで主に学んでいることは、何と同盟語による文学だったのだ！

私は難なく同盟語を操ることができ、苦労することは何もない。

おまけにもっと驚いたのは、第二外国語の授業とやらで、最も馴染んだ言葉である帝  
国語と再会することができた。

一方で不思議なことに私はこの国の言葉にも不自由はない。元の香央梨という少女の記憶の一部が残っているのだろうか。

しかし私がここにいるということは、香央梨という少女の魂はどこに行ってしまったの  
だろう。

そこに答えはない。

ただし香央梨のことを深く知る上であれこれ探っていたら、部屋の本棚から驚くべき  
ものが見つかった。

多くの菓子作りの本があったが、それは香央梨の趣味だと想像できる。

そしてそれらの本に挟まれて、何と銀河の歴史書があったのだ！

銀河帝国についても、自由惑星同盟についても、その本には事細かに書かれている。

貴族、軍人、数多く出てくる名前すら見知ったものだ。

だが不思議なことに本当の歴史とは相違点が多過ぎる。

少なくとも私の知る歴史のものではない。

そしてついでに分かったことは、香央梨はこの歴史書が大好きだったことだ。何度も

繰り返し読まれている形跡があった。

もう一つ、香央梨は変わった趣味があり、何かのシミュレーター遊びを好んでいたら

しい。私にはあまり興味のない戦いについてのシミュレーションである。

これらのことを知ると私に一つの考えが浮かぶ。

私の魂がここに引かれたのではないのではないか？

それは話が逆ではないのか？

香央梨に何かの資質があり、そのため向こうの世界に必要とされ、だからこそ先に香

央梨が引つ張っていかれたのではないか……

私はその身代わりのような形でここへ来た。

むしろそれにも答えはなく、考えても仕方のないことではあるが。

「香央梨姫ー、発音総論のノートとヤマカンよろしく！」「音素論もね！ 代わりにピーチパフェ奢るから！」

大学では私にも友達がいる。皆明るく屈託なく、銀河帝国のほの暗さとは無縁だ。彼女らは普通に接してくれるし、私もむろん普通にしている。

「それでさ、土曜日なんだけど、合コンあるのよ！ 何たってあの大学と！ 18時から、しかも小平まで来てくれるって」「行く行く！ 香央梨姫も行くでしょ。姫の得意なダンスもセツティングするわ」「ダメよ姫の本領はソーシャルダンスなんだから。何たって姫にはびつたりの気品があるのよね…… 前世は貴族なんかじゃない？」

友達の言葉に一瞬息が止まる。

貴族！ あの大貴族カストロプ家令嬢だった私……

いいえ、今の私は香央梨だ。

ついでに言えばオーレリーでもない。

ああ、しかしその名は……

私は絶対に忘れ得ぬことをまたしても思い出してしまおう。

オーレリーの偽名のまま愛した人、ヨブ・トリユーニヒトのことを。

愛しい人、無事にハイネセンを脱出できただろうか。そして志を果たしただろうか。

幸せな一生を送っただろうか。そんなことばかりが気になってしまう。

今夜もそれを思い、涙の一滴を流すに違いない。

ただし、ただしだ。もしも私がこの世界に引かれたのなら、誰か他の人も引かれた可能性があるのでないか。

もしかするとあの人も……

ほんのかすかな可能性を考え、それで私は生きているようなものだ。

むろん巡り合えても私のこの体と名では分かり合える術がない。

いや、それでも大丈夫だ！

仮に愛しい人に一目でも巡り合えたら、私は魂で分かってみせる。

魂と魂のつながりが分からないはずがない。

「おい明日は合コンだぞ。お前も来いよ。てかもう人数入れてつから。勉強ばつかじゃ能率上がんねえって。じゃ、明日18時、小平駅行って、そこには何にもねえから合流したら吉祥寺に移動な」

悪友がそんなことを行ってきた。

この大学には珍しく、軽いノリの奴だが、根は決して悪くない。言葉通り勉強ばかりの自分を氣遣つてるといふ面も確かにあるのだ。

まあ私が勉強ばかりしているのもそれは仕方がない。できるだけ良いスタートを切り、政治家を目指すからには。

私にはそれくらいしか成しようもない。

自分にはヤン・ウエンリーのような軍事的な才はないし、現実この国は今戦争状態でもない。

しかしながらこの国は政治的に大きな混乱がある。だからこそ私が政治家となって貢献できるだろう。

何といつても私はかつて自由惑星同盟百三十億人を束ねてきたのだ！

最高評議会議長として。

人口で百分の一にも満たないこの国、何とかできるに違いない。

私はハイネセン市民へ向けた演説の最中、強硬派の凶弾に斃れた。

そして目が覚めたらこの国、この世界にいた。

とまどう自分に対して周りの人間は優しかった。なぜなら、受験の勉強のプレッ

シャーで自殺を図り、もはや死に瀕してしたところで奇跡的に目覚めたというこらしい。

わたしは周りの状況を見つつ、何とか適合し、この国の最高学府に入ったところなのだ。

それにしても考えることはこの国のことではなく自由惑星同盟である。

ジオアン・レベロ君はうまくやったろうか。

帝国の圧力を躲し、同盟を存続させ、民主主義の灯を守り切ったのだろうか。

そして私は…… 歴史家の評価で同盟に貢献した人物と書かれたのだろうか。

そうでなければ私を支えてくれた人、特にあのオーレリーに申し訳が立たない。

ああ、オーレリー、ためらいなく命を投げ出し、成しうる最大限のことをやってくれた人。

今もなお愛しい人。

その記憶が心を掴んで離さない。

いつか、またそのような人に巡り合う時がくるのだろうか。



|  
完  
|